流星のロックマン　＜ 明日へ ＞

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン　＜　明日へ　＞

【Ｎコード】
Ｎ４５６２Ｈ

【作者名】
黒

【あらすじ】
　ヒト一人の見る世界は、世界のほんの一面に過ぎない。自分の居た世界に無かった人を、心を、スバル達は戦いの中で知っていく。……その時、子供達は何を選び、歩んで行くのか……。

――注意――
・１話１話が長いので自分のペースでゆっくり読む事をお勧めします。

『流星のロックマン』キャラクター紹介（地球人編）

……一応地球人中心ですが、一部ウィザードも一緒に紹介されています。

第1話の登場人物

星河スバル

ウィザードのウォーロックと電波変換。『ロックマン』となり、世界を三度も救う。

1度目はＦＭ星人の襲来から。最終的に、スバルとＦＭ王ケフェウスは友達になったようだ。

2度目は古代文明の力で世界を支配しようとしていた科学者の野望から。

3度目は犯罪組織『ディーラー』と『メテオＧ』から。

かつてはふさぎこんでいたが、今ではかなり明るくなったようだ。メテオＧの1件で自分がロックマンであることがバレかけたが、マスコミが勝手で的外れな推察や人物を出しまくって結局あいまいに終わった。つまり、正体はバレてない。

性格は、まじめで心優しく、ここぞという時の意志が強い。キズナを何よりも尊重し、エースＰＧＭに適応した人物。

電波変換時は左腕から放つロックバスター（軌道は直線、基本的に単発で放つ）や、バトルカードを使って戦う。（ゲームと違ってシールドは使えません）

暁シドウ

かつてはディーラーの幹部クラスを務めていたが、数年前組織を抜け出し、今ではこの世界の治安維持組織『サテラポリス』の若きエース。詳しい生い立ちは不明。数ヶ月前ジョーカーの自爆を阻止し、死んだと思われていたが、ある日ひょっこりとサテラポリス日本支部に現れる。それでも入院クラスの怪我だったので、そのまま入院。

ツバサにもらったＰＧＭ（プログラム）で電波変換時の負担は抑えられている。性格は気さくで、やや子供っぽい。しかし、「大事なものは自分を犠牲にしても守る。」という強い心と意志をもっている。

相棒のアシッドと電波変換し、『アシッド・エース』となる。電波変換時は、手に持つ銃からソードや、計７つの遠距離攻撃を繰り出す（３連射のレーザーや火炎放射、マシンガン。他４つの技）。大技は、両肩から放つ極太レーザーの『オメガレーザー』。そして高出力ブースターによる超加速で敵に突っ込みながら切り裂く『ウイングブレード』。

白金ルナ

通称『委員長』。強気で高圧的な物言いだが、友だち思い。ロックマンに恋心を抱いており、スバルとは分けて考えているが……。

ウィザードは『モード』。おすすめスポットを検索したりと、仲はいい模様。

最小院キザマロ

知的好奇心旺盛で、知識もそれなり。身長がコンプレックス。

ウィザードは『ペディア』。優れた計算能力、および検索能力を持っていて、地球上のあらゆるパーセンテージを瞬時に出せる。

牛島ゴンタ

力自慢の食いしん坊。しかし、根は優しく、繊細な一面もある。友情をとても大事にする。ある事件でウィザードの『オックス』を手に入れ、スバルたちと共に戦う。好きな食べ物は、互いに『牛丼』の模様。

オックスの性格を一言でいえば、猪突猛進。いろんな意味でいいコンビである。

電波変換でき、炎と力技を得意とする『オックス・ファイア』となる。電波変換時は、力技を活かした戦いが得意。自身のコブシを上から相手に叩きつける『アンガーパンチ』、炎を吐き出す『ファイアーブレス』、突進力とパワーを活かした『オックスタックル』が主な技。

育田（いくた）　道徳（みちのり）

コダマ小学校の教師。子煩悩で、子供（生徒たち）の興味関心を優先する授業を行う。

『勉強だけできる大人になっても意味はなく、人生には学校で教わる公式よりも大事なものはたくさんある。その子が勉強よりも大事な何かを抱えているなら、その子が本当に学校に来たくなるまでまつ。』とまで言うほど子供の事を思う教師。

星河大吾

スバルの父。約４年前に星間ブラザーバンド計画に参加。その後ＦＭ星人が宇宙ステーション『キズナ』を襲撃。その際に行方不明になる。ウォーロックの力で電波体になり、メテオＧを止めるためにたった１人で宇宙で闘ってきた。
数ヶ月前に戻ってきた。

星河あかね

スバルの母。大吾が行方不明になった３年間、女手一つでスバルを育てる。スバルがロックマンである事は両親共に知っており、スバルを心配しつつ、スバルの成長を楽しみにしている。

第２話の登場人物

響ミソラ

ニホンのトップミュージシャンで、スバルの親友（互いに初のブラザー）。見た目良し。
性格は活発で素直。おまけに優しいというすごい人（　いまどきまずありえんでしょうそんな人　）。
ハープと電波変換してハープ・ノートとなり、ロックマンをサポートする。スバルに思いを寄せている。
電波変換時は、アンプ（コンサート会場などにある音を増幅させる機器）を出現させ、ギターの音色と共に音符の形の弾丸を放つ『

ショックノート』や、マイクを通して音波をぶつける『パルスソング』。そしてギターの弦を放って相手の動きを封じる『マシンガンストリング』を使う（動きを封じるほかに、自分の前に壁のように展開して防御したりなど、応用性は高い）。

ジャック

歳はスバルたちと同じ。かつて、ディーラーの幹部を務めており、『メテオG』を地球にぶつける。

という野望を持っていたが、現在は改心し、服役中。ちなみに、『罪を償ったらスバルたちと遊ぶ』という約束を果たすために、服役期間を少しでも短くしようとサテラポリスの仕事も手伝っている。主に犯罪者を捕まえたりなどの実務系。

コーヴァスと電波変換でき、電波変換すると羽が4枚ある『ジャック・コーヴァス』となり、爪の形をした紫の炎を連発する『グレイブクロー』、空中から突っ込む『エアロダイブ』、4枚ある羽のうち2枚を鎌のように変化させ相手を切り裂く『フェザーシックル』。そして、紫の炎の巨弾を上空から降らせる『ペインヘルフレイム』が主な技。

クインティア

ジャックの姉。二人はとある国の王族で、戦争で親や国を失い、Ｍｒ．キングに拾われ、ディーラーの幹部を務めていた。

現在はジャックと同じように服役中。ジャック同様、服役期間を少しでも短くしようとサテラポリスに協力している。主にヨイリーの助手として様々な研究・開発に携わる。つまりデスクワーク系。

ちなみにシドウとは恋仲。
ヴァルゴと電波変換でき、電波変換時の主な技は水の竜を召喚して自在に操作して相手をなぎ払う『ハイドロドラゴン』。

ヨイリー博士

電波・ノイズ研究の第一人者。高齢ながら好奇心旺盛で、アシッドやジョーカー。そしてノイズを無効化する『エースＰＧＭ』も彼女が作り出した優秀な科学者。
ジョーカーを処分するという会議に、最後まで抵抗した。

ＷＡＸＡ長官

文字どうりなので詳しい説明はなし。
口ぶりからして、星河大吾がＮＡＸＡ（ＷＡＸＡの旧名）に居た頃からの人物らしい。大吾たち、『宇宙ステーション：キズナ』のクルーの捜索を打ち切った事にたいし、反省している。

第３話の登場人物

飛王（ひおう）　ツバサ

オリジナルキャラ。常に飄々として明るい性格だが、この飛王ツバサという名前も偽名であり、自分の核心部分において、はぐらかす癖がある。

基本的に誰に対してもため口。暁の治療やジョーカーをかくまうなど面倒見が良く、スバルを励ます事もある。だが、暇つぶしで新しいウイルスを作るなどイタズラ好きな一面も。

情報網が広く、頭脳はかなり優秀。戦いの中でバトルカードのデータを入力して戦う。

おもに使うカードは、エランドやノイズドウィザードなどのスタンダードクラスの召喚系。

8話の登場人物

双葉　ツカサ

スバルの親友。両親に捨てられ、その怒りや憎しみからもう1つの人格であるヒカルが生まれる。ヒカルの性格は荒々しく、他人に暴力を振るうこともある。一方ツカサは心優しく、穏やかな性格。

かつて、両親への復讐を誓い、ヒカルはジェミニを受け入れた。1度ロックマンこと星河スバルを裏切り、その罪を償うために現在はヒカルを封じるために放浪中だったが……。

補足として、この小説では彼の神出鬼没ぶりがアップしています。

ジェミニと電波変換時すると白と黒の2体から成る『ジェミニ・スパーク』となり、【　ツカサ（白）　】と【　ヒカル（黒）　】の2人で攻撃する。

技は、自身の腕（前腕）を打ち出す『ロケットナックル』、指先（ツカサが左腕、ヒカルが右腕）から電気の剣を作り相手を切り裂

く『エレキソード』。そして、２人の電気を集めて直線軌道のレーザーを放つ『ジェミニサンダー』を使う。

Ｄｒ（ドクター）・ワイリー（名前のみで本編での直接の登場は無い）

２００年前にいた科学者（ロボット工学者）。科学省を追放されて社会への復讐を決意。だが、バレル（２００年前カーネルのオペレーターだった）の父親から科学者としての腕を見込まれて自分を必要としてくれた男のために復讐を延期。

その後バレルの父親は戦場に旅立ち、その男の一人息子であるバレルを預けられた。カーネルはその際バレルの手に渡った。その後男は戦場で亡くなり、ワイリーの社会への復讐心に再び火が点いた。

バレルの元に戻ったワイリーはカーネルを取り上げ、優しさなどの感情を司るデータと、あらゆる電子機器を操るオペレーティング能力を無くさせて冷徹な戦闘マシーンにした。後に優しさとオペレーティング能力はアイリスに受け継がれる。

３度にわたり熱斗とロックマン、その仲間たちと戦った。最後には熱斗やアイリス、カーネルやバレルの思いが伝わり改心する。その後ネットワークシステムの『カーネル・アイリス』を開発。

ちなみに光熱斗の祖父、光正（ただし）博士の親友で、ダークチップの産みの親であるＤｒ．リーガルの父親でもある。

９話の登場人物

Ｍ．ｒキング

かつてディーラーのボスだった男。表向きは科学者であり慈善事業家として通っているが、実際は優秀な子供を集めて危険なディーラーの仕事をやらせていた。
アイリスにより再構築され、ツバサと出会った頃の人格になっているらしい。会議での態度を見る限りその人格はかなり真面目で、暁いわく「熱血くん」。
大抵はデータ管理のためにツバサの家にいるが、会議のときは出てくる。無論、その間の処理しないといけないデータは多くなるが、彼の頭脳を持ってすればどうと言う事はないらしい。

亀山　黒蓮（コクレン）

オリジナルキャラ。
大学の教授で、一言で言えば老紳士。ニホンとチョイナのハーフ。昔は傭兵（ようへい）をしており、その悲惨さから戦争を止めるように国に訴えたが、国外追放の処分を受ける。その際、家族とも引き離された。ニホンの暮らしが長いせいか、ニホン語ぺらぺら。
ゲンブと電波変換時は、地面から巨石を何発も打ち出す『ガイアラース（大地の怒り）』、自身がコマの様に回転して、それに伴い地面からの巨石と背中からの岩を飛ばす『デストロイダンス』。背中の岩は自動で補充される。

１５話にて登場

陸　犬地（ケンジ）

オリジナルキャラ。

１５歳。頭がよく、学校をサボることもある。

そのせいかクラスで浮いて、毎日に退屈していた所を猟犬座のＦＭ星人の『炎牙』と『氷牙』に出会う。計画に協力しているのは単なる暇つぶし程度の感覚。

電波変換する時は２体と電波変換するが、その時炎牙と氷牙の、どっちの名前を電波変換時の名前にするかで揉め、ケンジが適当に『ドッグ・ツイン』と名づけた。

割と冷静な性格で、炎牙の言動にツッコム事もしばしば。反面、口も軽いのでよく２体に怒られている。子供のような無邪気な残酷さも持っている。

電波変換時は両肩の砲口（犬の口）から炎と冷気を放つ。単体ずつの攻撃（炎が『ハウリングファイア』、冷気は『ハウリングアイス』）のほかに、少し溜め時間が必要になるが広範囲に攻撃できる『サウザンド・ブレス』（散弾銃の範囲と、マシンガンのような弾数）や、彼らの最強の技、『エンドブレス』（両肩から直線軌道の２本のレーザーを放つ）を使う。

１８話の登場キャラクター

帯広博士

本名は帯広シュン。かつて（帯広シュンが１０歳ぐらいの時）、ネットマフィア：ゴスペルを操っていた。もっとも、それ自体ワイ

リーに仕組まれた事だったが、光ネットに助けられて友達となる。
大人になってからは科学者としても優秀。ツバサの養父。

光博士

本名は光熱斗（ネット）。この小説ではサブ的な立ち回りだが、２００年前ネットナビのロックマンと共に数々の事件を解決してきた。その上科学者としても優秀で、この時代の『ブラザーバンド』の原型の理論を立案したのは彼だ。
補足として、恋愛関係には恐ろしく鈍感。

光来斗（ライト）

光ネットの息子。母親の影響か多少落ち着いてはいるが、それでも寝坊癖は父親から受け継いだらしい。
ツバサとはかなり仲が悪く、会うたびケンカしていた。
ネットナビの名前はロックマン・ジュニアという。

第２１話の登場人物

女将さん

よかよか村の旅館、『うらかわ』の女将。
礼儀正しく、幼い頃から叩き込まれたものと思われる。
ふだんは穏やかで優しいので従業員を始めお客さまにも慕われる

が、従業員いわく、怒ると恐いらしい。

赤羽空（ソラ）

オリジナルキャラ。

幼い頃両親に捨てられた所をうらかわの女将さんに引き取られてそのまま旅館に暮らしている。女将さんの事を心底慕っており、仕事も真面目にやっている。また、表情から人のウソを見抜けるほどの観察力の持ち主。お気に入りの着物は蝶の刺繍がされている赤い着物。

スザクと電波変換することで【スザク・フレア】となる。休みの無い攻撃と、多彩で対応力のある炎技が得意。補足として、電波変換時は髪型がストレートになる。

基本的な技は……。

【一の舞：星降（ほしふ）り】。これは手のブレスレットを回転させてそこから無数の炎弾（小型）を放つ技。

【二の舞：障炎（しょうか）】。防御系の技で、手首のブレスレットが回転する事で生じる炎を前面に渦上に出し、相手の攻撃を飲み込んで無効化する。

【三の舞：不知火（しらぬい）】。炎をムチのように操る。

【四の舞：召炎（しょうえん）】。羽から炎を散らして、それから炎の人形（体長1メートルぐらい）を召喚する。

【五の舞：炎翼（えんよく）】。三の舞；不知火（ムチ）と似ているが、こちらは硬質な刃に変化する。刃の長さは５０センチほどで、炎の熱と刃の鋭さで対象を断ち切る技。一言で言えば『ソード』。

【六の舞：炎獄（えんごく）】。巨大な炎弾を作り出し、相手に放つ。彼女の単体の技としては最強の破壊力。

全体的に手首のブレスレットを技の起点にしている。

２つ以上の技を組み合わせた【合曲】というものもある。

２４話の登場人物

ソロ

古代に発展していた文明である『ムー文明』の最期の生き残り。電波体に頼らず単体で電波変換が可能。古代において現代（スバルたちの時代）と同等か、それ以上の科学力を持っていた。だが、ムー人同士の争いで滅び、争いを嫌う者は世界に身を隠して今まで生き残ってきた。……しかし、ソロは他人との繋がり、『キズナ』を否定しているので、その末には滅びしかないのかも……。

ムーという民族と文明に誇りを持っており、使い道問わずその文明の力が利用されるのが我慢ならない。

キズナを嫌う理由は、かつて異能の力を持つ者として迫害を受けたから。電波が見え、電波変換も可能となると、その異常さから迫害を受ける。

迫害をする時は大勢でしかせず、一人になると途端に弱腰になる。ソロが見出した結論は、「人間の言うキズナとは他人にすがるだけの卑しいもの。一人では何もできないからそんなものにすがりつく。キズナを否定する事が自分の存在理由」といったところで、ロックマンとは幾度となく戦ってきた。

３７話の登場人物

ガンズ・バレッド

一流のスナイパー。独特なポリシーを持っており、自身の力に溺れて我を見失う事はなかったが……。

相棒のポラリスと電波変換すると、『ポラリス・スナイパー』になる。右腕にはライフル。左腕には盾が装備されており、盾には仕込み剣も搭載。周りには氷の板が浮いており、それを使ってオート防御や、銃弾の反射による攻撃の補助ができる。

戦闘スタイルは、右腕の銃撃。先程述べたように自身の銃弾を氷の板で反射して様々な角度から攻撃する。氷の板は防御や補助だけでなく、相手の両手両足に杭のように打ち付けて、相手を封じる攻撃にも使える。

４２話の登場人物

アーノルド・ローグ

現アメロッパ（この世界のアメリカ）大領領。過去に最愛の人を喪(うしな)っており、そこを「人を生き返らせる」とかかげる飛王(フェイワン)・リードに着け込まれた。

今ではスバル達がいる世界において飛王・リードの手下。ツバサにガンズ（殺し屋）を差し向けたのも彼。

４３話の登場人物

ハイド

一見して紳士のような見た目だが、性格は卑劣。ロックマンに対して人質を取り、手を出せないようにした上で痛めつけるという事を何度もしてきた。『古代のスターキャリアー（ムーの遺産の一つ）』という端末を持ち、ファントムブラックに電波変換する。

電波変換後の技は、【　ステッキソード　】。これは文字通り、手に持っているステッキをソードのように使って相手を攻撃する技。次に【　ファントムクロー　】胸から黒い腕を出して攻撃。それで相手を掴んだり、投げ飛ばすなど応用性の高い技。一方、【　イービルクロー　】という技は、ファントムクローと似ているが、こちらは地面から出てくる。

イービルクローを相手に意識させて、そのスキにファントムブラック本人が攻撃という戦闘スタイル。

また、一番の大技は【　ファントムスラッシュ　】といい、相手の目前で高速回転。その時生じる衝撃波で相手を攻撃する。

第４５話の登場人物

ゲイル・ホワイト

オリジナルキャラ。

ツバサの知り合いで、バルズランドの現国王。ちなみに、バルズランドは特殊な治世を行っているので、『今は国王』と、言った方が正しい。

器が大きく、優秀なら誰でもそばに置く。新参者のコクレンを側近に置いているのもそのため。ライラは勝手にゲイルに付いて来る事が多いが、ゲイルはあまり気にしない。
ツバサの事を「ツー君」などと呼んだりしている。ジャック、クインティア、暁とも面識がある模様。

ライラ・インター

オリジナルキャラ。
元天才ハッカー（どちらかと言えばクラッカーという方が近い）で、かつて『ベルゼブブ』という異名を冠するほどの腕を持つ。仕事に私情を持ち込んだために、当時の依頼者は口封じとしてウラの人間を雇い、ライラを消そうとする。そして、そいつらから追われているうちにバルズランドへ辿り着く。
割合ゲイルとは息が合うらしく、コクレンのため息の元は、ゲイルと彼女である。アイリスとは時々電話越しで話していたので仲が良い。というより、アイリスに対しては『ハッカー仲間』という認識。

第１２３話の登場人物

藍川　龍
オリジナルキャラ。
研究所に勤めるロボットエンジニア。過去に囚われ、自分が生きている事自体に負い目を持っている。

『流星のロックマン』キャラクター紹介（電波体）

第1話登場人物

ウォーロック

ＡＭ星生まれのＦＭ星育ち。ＡＭ星を滅ぼされ、当初はＦＭ王に復讐するつもりだったが、スバルと関わるうちに他者を思いやる心が育まれる。
性格はガサツだが、地球に来る前にも多くの戦いを経験しているらしく、いざという時は頼もしい。

アシッド

世界初の人口電波生命体で、人間との電波変換を目的に作られた。だが、その電波変換は人間に対しての負担が大きく、暁の体を蝕むほど。
性格は真面目。戦闘時は圧倒的なスピードと分析力で敵をデリートする。
ウォーロックをからかうなど、おちゃめ（？）な一面もある。

ケフェウス

ＦＭ星の王。立場上幼い頃に身内からも暗殺されかけ、猜疑心（他者を信じない心）が強くなり、協定を結ぼうとしたＡＭ星という兄弟星を攻撃し、滅ぼす。さらに地球の『星間ブラザーバンド計画』

を敵対行為と思い、地球も滅ぼそうとするが、ロックマンに諭されてＡＭ星の復興を決意。スバルともブラザーになる。
ぶっちゃけ今も子供である。

イーグル

オリジナルキャラ。ワシ座のＦＭ星人で、雷を操る。ＦＭ王の現在の人柄や考え方を尊敬し、実力を高めてエリート部隊であるＦＭ星親衛隊に入る。
その後、頭角を現し隊長に登り詰める。真面目で忠実な性格。ただし、真面目すぎるせいか誤解癖がある。
ちなみに、かつての親衛隊はＦＭ星を飲み込もうとしていたブラックホールの主、『シリウス』に壊滅されている。（厳密に言えば、シリウスの『部下に』だが）
ＦＭ星でもトップクラスのスピードを持っている。

三賢者

ＡＭ星でトップクラスの実力を持つ者たち。彼らが言うには、ＡＭ星の生き残りはまだ大勢いるらしく、改心したＦＭ王とＡＭ星の復興を約束。
三賢者は、天馬の姿のペガサス・マジック。　獅子の姿のレオ・キングダム。　竜の姿のドラゴン・スカイ。この3体からなる。

第2話の登場人物

ハープ

ミソラのウィザード。元ＦＭ星人で、かつてはロックマンの敵だったが、今では地球の暮らしとミソラが気に入り、すっかり地球の暮らしを満喫してるもよう。ウォーロックと比べ、冷静でしっかりした性格。

ジョーカー

ニホンとアメロッパが合同で開発したウィザード。

自分より知能も力も劣る人間に対して服従を拒み、上層部の『ジョーカーを処分する』という会議の情報に激怒し、施設を脱走。その後、Ｍｒ．キング率いる『ディーラー』に入る。

単体でも十分な強さを持っており、ファイナライズ（簡単に言えば本気モード。形状の方も肩に装甲がついたりして変化する）することで真価を発揮する。

主な技は、コブシを地面に打ち付ける事で地面から黒い柱を迫り出させる『ギガントビルディング』や、右腕を砲口のように変化させてそこからミサイルを連射する『ミサイルストリーム』。自身の腕を振り回す『フルダブルスイング』、一番の大技は、両腕にノイズを集中させ、直線軌道の極太レーザーを放つ『グレイブメテオレーザー』。

第３話の登場人物

コーヴァス

ジャックのウィザード。かつてはいくつもの惑星を滅ぼしてきた犯罪者。地球に来て、ジャックたち姉弟の野望に協力。
性格は残虐。メテオGの中でブライにデリートされたが……。

ヴァルゴ

クインティアのウィザード。コーヴァス同様、いくつもの惑星を滅ぼしてきた犯罪者。性格を一言で言えば、『ドS』。笑い方が特徴的。
コーヴァス同様ブライにデリートされたが……。

4話の登場人物

エーテル・フォトン

オリジナルキャラ。
ファイブ・エレメントの長。下の4体を作った。FM星の反逆者と地球のウィザード（おそらくはぐれウィザード）を束ねている。ほとんどが謎に包まれており、現在分かってるのは高圧的な態度と、大まかな見た目だけである。無論、能力も不明。
見た目は、4本の腕を持っており、頭、前腕、そして膝（ひざ）から下に

かけて白いアーマーを見につけ、それ以外の部分は黒い。容姿はスマートで子供（小学生くらい）。

６話の登場人物

ゲンブ

オリジナルキャラ。
老人のような口調で、４体の中ではしっかりしている方。
４体には、それぞれ元となったモノに基づく特性があるらしく、ゲンブの特性は『 万物を受け止める防壁の大地 』
現在はサテラポリスに捕らえられている。

スザク

オリジナルキャラ。
４体の電波体の紅一点。一応自分たちを生み出してくれたエーテルを感謝しているが、同時に高慢さを嫌っている。
性格は気分屋。スザクの特性は『全てを飲み込む破壊の烈火』。

ビャッコ

オリジナルキャラ。
口調からして、強いやつと闘うのが好きなもよう。本人いわく、『狩る』。
性格は荒々しいが、むやみやたらと闘うわけではないらしい。
司る特性は『 自由に、無慈悲に吹き荒れる風 』。その特性に従い、自由奔放な性格。

セイリュウ

オリジナルキャラ。
４体のまとめ役。冷静で寡黙。
特性は『 柔軟な対応力でどんな状況にも対応できる水 』。４体の中で一番エーテルに従順。

８話の登場人物

アイリス

約２ＸＸ年前（下２桁は不明）、ワイリーという科学者に作られたネットナビ。
元々はアイリスの兄であるカーネルと、『一体のナビ』として存在していたが、ワイリーがカーネルから愛や優しさなどの感情的な

データを抜き取り、その感情データをベースに作り上げたのがアイリスとなる。電脳獣と呼ばれる怪物を倒すために兄と共に消え去ったはずだったが……。
性格は心優しく、おとなしい。
あらゆるナビや機器をオペレートする能力を有している。

デューオ

２００年前地球が誤った進歩を遂げたとして滅ぼそうとした。
ちなみに、自分を生み出した星も破壊している。

ジェミニ

以前地球に攻めてきたＦＭ星人。狡猾な性格で、ＦＭ王の猜疑心を利用して王の決定を誘導することもあった。外からはそれが宰相や参謀に見えるらしく、『ＦＭ王の右腕』と呼ばれていた。
実力もそれ相応。電波変換すると白と黒の２体に分離して、コンビネーションで相手を追い詰める。
今はツカサ、ヒカルと共にＷＡＸＡに協力を約束した。

９話の登場人物

ノイズム

ノイズ生命体。知能レベルはピンからキリまでいる。見た目的な特徴は皆無と言っても良い。

１１話の登場人物

ナイトマン

２００年前のナビ。クリーム王国女王、プリンセス・プライドに仕えていたが、彼女の娘の命令でエンシェントサーバーにいる。義理堅く、騎士道を重んじる性格。
防御力に長け、左腕の鉄球の破壊力はかなり高い。

１４話の登場人物

カーネル

アイリスの兄にあたる。２２０年ほど前、ワイリー博士により生み出されたナビ。当時においてトップクラスの性能を有し、頭脳も優秀。その他に優しさや、あらゆる電子機器を操る力も持っていたがワイリーにより抜き取られ、それらからもう1体のナビ、アイリスが生まれる。
かつてのロックマンと肩を並べて闘った事も、敵として戦った事もある

１５話に登場

ドッグ・ツイン

猟犬座のＦＭ星人と１５歳の少年（陸犬地（ケンジ））が電波変換した姿。
通常の電波変換は１体の電波体につき１人の人間で成り立つが、ドッグは例外として２体の電波体が１人の人間と電波変換して成り立つ。肩に２体の顔とエンブレムがあり、左右で色が違う。
２体の電波体のそれぞれの名前は、『炎牙』と『氷牙』。氷牙の方が兄で、その名の通り炎牙は『炎』、氷牙は『冷気』を操る。
性格は、炎牙がお調子者で乱暴。氷牙が冷静。

２７話の登場人物

セレナード

２００年前、ウラインターネットを守ってきた存在。通称：ウラの王。
背中の羽衣のような物で相手の攻撃をそっくりそのままはね返す。
２００年前のナビを保存しているシャイン（エンシェント）サーバーと、そこに入りきらなかったナビが入っているノアズサーバーの管理をしている。
３つのサーバーは無人で動き続ける。

フォルテ

２００年前のロックマンと幾度となく戦ってきた完全自立型ナビ。信じていた人間に裏切られた事がきっかけで人間を憎んでいる。それゆえに、ツバサのサーバーに入るのを拒んでいたが、なぜか今は３つある内の１つ、ネビュラサーバーを管理している。

ネビュラサーバーの中にはフォルテとツバサ、ツバサが２つに分けたＰＧＭ（１つはエンシェントＰＧＭ）と、もう１つのＰＧＭが互いに打ち消しあって、それでようやく押さえ込めている存在がいる。

つまり、【（エンシェント＋もう１片）＋ツバサの持つＰＧＭ＋フォルテ＝ネビュラサーバーの中の化け物】という関係。

第２９話の登場キャラクター

キラーマン

一言で言うと死神を思わせるナビ。不気味な笑い声が特徴。２００年前、【ダーク・キリサキ】というオペレーターと共にウラの稼業（依頼されたターゲットの抹殺など）をしていた。

３０話の登場キャラクター

レイ

オリジナルキャラ。ツバサのナビで、エンシェントサーバーにもノアズサーバーにもいない。すでに死んでいる存在。帯広博士がツバサに授けた者と思われる。

第３３の登場人物

アクエリアス

オリジナルキャラ。現在のＦＭ星親衛隊で３番目に強く、偉い。真面目な性格で、隊長であるイーグルをサポートする役。というか、アクエリアスの性格上ついついといった感じで手伝ってしまう。ウォーロックとは旧知の仲で、ウォーロックが言うには、アクエリアスの公私を極端なまで分ける性分は昔からのようだ。戦闘ではその名の通り水をメインに戦う。現在確認されているので『水弾』がある。案外寂しがり屋な一面も……？

第３５話の登場人物

オリオン

オリジナルキャラ。

先代のＦＭ王の時代から活躍していた猛者。経験、思慮深さ、実力。どれをとっても一流の戦士。なお、それなりに歳もいっていると考えられる。
戦闘のスタイルなど、詳しいデータは不明。

第３７の登場人物

ポラリス

思慮深い性格で、状況判断から行動までの時間が短く、その上冷静。自己を持っていたガンズを気に入りパートナーとするが、最近は……。
ガンズに手を組むように言った発言から察するに、ファイブ・エレメントの中ではオリオンに近い実力、または地位を持っていると思われる。

３９話の登場人物

サーチマン

２００年前のナビ。情報分析力と射撃の腕は当時においてトップクラス。むしろ、現代でも十分に通用する実力を持つ。
冷静な性格と正確な射撃で相手を狙い撃つ。
サーチノイズ時の能力は、サーチマン同様にライフルを用いて戦

う。通常の射撃の他に、様々な効果を持つ弾がある。確認されているのは……。

【バーストブレッド】。これは対象に命中すると爆発して大ダメージを与える銃弾。

【パラライズブレッド】。文字通り相手をマヒさせる。

【シューティングスター】。サーチノイズのＮＦＢ（ノイズフォースビックバン。それぞれのノイズの必殺技みたいなモノ）。貫通力があり、並みの防御では役に立たない。青い軌跡を描きながら飛んで行き、上記の【バーストブレッド】並みの破壊力がある。

第４８話の登場人物

ラ・ムー（名前のみ）

かつて栄えた『ムー人』はこの存在を見つけたからこそ発展したという謎の多い存在。電波体を無限に生み出す事ができ、電波の神とも呼べる存在。約１年前（スバルが小５の時）ロックマンに倒される。

マヌ・ムー（太古サグルは乗り移られただけなので、彼のデータはありません）

かつて、ラ・ムーに封じられた電波体。自分に何かがあった時に代わりを果たすようにと創りだしたが、生みの親であるラ・ムーに反乱を起こした事で古代ムー人とラ・ムーがイースター島に封印した。太古探（サグル）の意識を完全に封じて操るほどに力の強い電波体だが、

頭は多少悪い。
しかし、戦闘では文句の付けようが無い強さを発揮する。自らの電波を黒い影のように変化させて攻撃に使う。主な技は、手の5本ある爪に黒い影を凝縮させて、それを大きく振る事で三日月型の斬撃を飛ばす【 シャドースラッシュ 】。両手の平に黒球を生み出して前に突き出し、そこから無数の黒い鳥型の電波を『滝』の様に飛ばす【 バードフォール 】。また、黒い影を自在に操り、ムチの様に払ったり貫いたりなど、直接攻撃にも使える。
その他に、相手の辛い思い出を思い出させて相手の精神を壊す【 ナイトメアビジョン 】もある。

第67話の登場人物

ブルース

200年前のナビ。管理者を除いてエンシェントサーバーのナンバー2。
200年前において、彼のポテンシャルと炎山のオペレーションに対抗できるのは光熱斗とロックマンだけだったとされる。
剣のキレは一流。

第81話の登場人物

クラウド（オリジナルキャラ）

FM星親衛隊の4番隊長。常に雲に乗っており、雲に自分の電波を加えることで自在に操る。空気中のチリや水分を吸収して大きく

なり、同時に破壊力も格段に上がる。
その結果として、遊園地にあるような規模の飲食店なら簡単に破壊できるほどの雲を作る事も可能。その技名は、【アンリミテッド・プレス】。アンリミテッドの意味は『無限』、『制限の無い』。
小説内で明記していないが、相手を雲の球体に閉じ込めて相手を封じる【ホワイトプリズン】もある。その球体の中では圧力が強くなる。
淡々としているが、部下のティグレスに対して彼なりの愛情を示している。

ティグレス（オリジナルキャラ）

クラウドの部下。真面目で礼儀正しい性格。クラウドが目をかけていたウォーロックやハープを知っている事から、周りを良く見える視野を持っている。（自分と直接関係無いという理由でないがしろにしない）
戦闘時は水の羽衣を用いて防御や攻撃を繰り出す。相手が遠くから攻撃してきたら水の羽衣でガード。羽衣は透明なので相手から見れば見えない壁があるという印象。近づいてきたら水の羽衣でガードした後にカウンターを食らわせる。

『ｘｘｘＨＯＬｉＣ』のキャラクター紹介

６話にて登場

壱原侑子（いちはらゆうこ）

見た目は２０代の女性。髪は長く黒髪。

願いがある人にしか入ることも見る事もできないミセの店主。反対に、願いがあればそれ相応の対価と引き換えにほとんどの願いを叶えてくれる。ちなみに、願いがあればフラフラと敷地の中に入ってしまうらしい。願いがない人、またはその願いが自分では達成できないと識（し）り、それでも自分に出来る事を模索する人には朽ちた塀と荒れた土地にしか見えない。

４３度あるウイスキーを飲んだ後にさらに酒を要求するなど、かなりの酒豪。

性格はわがままで気まぐれ。しかし、頼りがいのあるあねご肌な一面も持っている。

強い魔力を持っており、クロウ・リードと共に、異世界を旅するための存在（モコナ）を創った。

時に的確で、断言的な厳しい事を言うが、それはこの世の理を熟知し、自身もそれを遵守しているため。

ちなみに『壱原侑子』という名は偽名。別名『次元の魔女』。

１７話にて登場

飛王（フェイワン）・リード

自身の願いを叶えるために様々な世界に干渉し、必要とあらばいかなる犠牲も、他者の生き筋を狂わせることも辞さないという人物。
その願いとは、『死んだものをよみがえらせること』
しかし、侑子とクロウ・リード（本家の方）も、「その願いを叶えることはできない。」と言っている。
壱原侑子とは敵対関係。前述でも述べたとおり狡猾な人物で、一族の中で2番目ぐらいの魔力を持っている。

18話の登場人物

四月一日君尋（わたぬききみひろ）　（名前だけ登場）

あやかし（厳密に言えば違うらしいが妖怪のようなモノ）を見る事も触れる事もできる高校生。おまけを言えば、惹き寄せもする。
あることで侑子と出会い、あやかしを見ないようにするという願いを叶えてもらうために
侑子の店でバイトする。願いを叶えるための対価が、「その願いに見合うだけの労働力を提供する。」だったからだ。
大きな秘密があり、同作品（ｘｘｘＨＯＬＩＣ）のキャラクターからは、『存在自体ありえない。』と言われている。
（この小説ではその秘密を書くつもりはありません。ご了承ください。）

マル／モロ

２人とも見た目が小学生ぐらいの少女。侑子が言うには、ミセを支える存在で、魂がない。
そのせいでミセから出られないらしい。互いに無邪気な性格。
マルが黒服で、自分の身長より長い髪を持つ。髪の色は水色。
モロが白服で、髪が短くおダンゴ頭。髪の色は桃色。
互いに侑子の事を「主さま」と呼ぶ。

モコナ（正式名称：モコナ・ラーグ・モドキ）

侑子ともう１人の魔術師（クロウ・リード）の手で創られた存在。
飛王（フェイワン）・リードの目的を阻止するため、そして次元を旅する４人のために創られた。
白と黒がいて、２体で口調が微妙に違う。この小説では黒しか出ない。ちなみに白モコナの正式名称は『モコナ・ソエル・モドキ』である。侑子と同じく酒豪で、あやかしの類が見える。ちなみに数え方は１モコナ、２モコナ。
マル、モロと共にツバサや四月一日（わたぬき）をおちょくっている。

３１話の人物

クロウ・リード

最高の魔力を持つ魔術師で、侑子と共にモコナを創る。魔術師ら

しく杖も持っており、杖の先は太陽を模している。なお、飛王（フェイワン）・リードとは血縁関係。落ち着いた性格と口調で、お酒と甘い物が好き。大分前に寿命で亡くなった。

まったく新しい魔法（　力の塊が自分自身の意思を持っているような者　）を生み出したり、夢で未来に起きることを全て予知できるほどの魔力を持つが、本人は自身の魔力の強大さに戸惑っていた。なお、生み出された魔法達は今では新しい主の元にいる。

４０話の登場人物

封真（ふうま）

『ｘｘｘＨＯＬＩＣ』というより『ツバサクロニクル』の人物。

この小説は、封真が小狼（しゃおらん）、ファイ、黒鋼（くろがね）、さくら、モコナ（白）の４人と１モコナと出会う前にスバル達の居る世界に来たという設定。

穏やかな笑みを浮かべており、他人に対して安心感を与えるような笑み。

色んな世界の珍しい物を集めるハンターで、自分の欲しい物の他に、侑子に頼まれた物も集めている。

彼が次元を渡るために侑子に支払った対価は、行く先々の世界で侑子に頼まれた物を届ける事。本人いわく、「分割払いみたいなもの」

４１話の登場人物

星火（シンフォ）

飛王・リードの側近。だが、彼に従順とはいかないらしい。

『流星のロックマン』用語集

・サテラポリス
　この世界における治安維持組織。エリート中のエリート、プロしか入れない狭き門。暁シドウはここのエースでもある。
　なお、ＷＡＸＡとの違いは、簡単に言えばサテラポリスは実際に犯人を逮捕する役。ＷＡＸＡは科学方面からサテラポリスをサポートする存在。ヨイリー博士を筆頭に、優秀な科学者がそろう。

・ＷＡＸＡ
　サテラポリスとの違いは上に書いたがその詳細は……。
　かつてはＮＡＸＡと呼ばれており、近年、ノイズの影響でウイルスが凶暴化。その対策として、新たに再編成された組織が『ＷＡＸＡ』である。世界各地に支部があり、ニホンもその一つ。
　なお、本部の場所は不明。

・電波体
　体が電波で構成されている生命体。ＦＭ、ＡＭ星人など、元から電波で構成されている者もいれば、地球で生み出された『ウィザード』のような者もいる。ウィザードは人間をサポートするための存在。サテラポリスでは、戦闘力に特化した『バトルウィザード』と呼ばれるウィザードが多く使われている。
　２００年前は『ネットナビ』と呼ばれる存在がいた。ウィザードと違い、コピーロイドと呼ばれるロボットに入らなければ現実世界で活動できない。

・電波変換
　人間と電波体の融合。電波体単体時と比べて、格段に戦闘力が上がる。今現在、人工の電波体で電波変換可能なのは暁シドウの『ア

シッド』のみ。それ以外のウィザードは不可。

・ウェーブロード

電波の通り道。空中にて、電波体の足場となる。地球上の機器は無線で制御されているので、その存在は非常に大きなモノといえる。

・ハンター

正式名称、ハンターＶＧ（ブイジー）この時代の携帯端末（この時代でいうケータイ）。近年のウイルスの凶暴化やノイズ率（一空間辺りのノイズの濃度）の上昇により、サテラポリスが開発した。ちなみに、サテラポリスとはこの世界の治安維持組織。

ウィザードは、この端末を介して実体化（物質化）できる。また、実体化させることを『ウィザードＯＮ』という。なお、電波変換時もウィザードは自分の意思で実体化することは可能。

・ＰＧＭ

電波を狂わせ、電波体の暴走の元となるノイズを抑えるプログラム。『エースＰＧＭ』や、『エンシェントＰＧＭ』は周囲のノイズを吸収する事で姿形を変化させ、他の電波体のチカラを使えるようになる。それが『ノイズチェンジ』。

そして、最強のノイズチェンジを『ファイナライズ』という。エースＰＧＭからなるのは、スピードと圧倒的なデータ解析能力で敵を解析し、瞬殺する『ブラックエース』。エンシェントＰＧＭからなるのは、今のところ不明。ちなみに、ジョーカーは存在そのものがＰＧＭのような者なので、ノイズさえあればファイナライズが可能。ファイナライズ時は『グレイブジョーカー』と名乗る。

ちなみに、ノイズチェンジやファイナライズしている時はその姿での必殺技として『ＮＦＢ（ノイズフォースビックバン）』が使える。

定義上、ノイズを抑えるプログラムを『〇〇ＰＧＭ』。その他のプログラムを『〇〇プログラム』と表記している。

・ノイズウェーブ
　ノイズで構成された世界。ノイズが嵐のように吹き荒れる場所で、ＰＧＭを有していない電波体は十中八九暴走する。ただし、そこに暮らす住人はおり、『ノイズム』と呼ばれている。片言な言語を使う者が多いが、知能が高いものもいる。一時期、キング率いるディーラーも移動や潜伏に利用していた。

・ウイルス
　電子機器を狂わせる存在。ノイズから発生する存在。姿形もちゃんとあり、ウィザードやハンターからバトルカードを転送する事でデリートできる。なお、全ての電子機器はノイズを発生させており、ウィザードは特に発生量が多い。
　ちなみに、本編にて名前が出てきた『ステルス』はその名の通りステルス戦闘機のような姿をしており、姿を隠して相手に近づいてレーザーで攻撃する。

・バトルカード
　ウイルスをたおすための武器のような物。戦闘用の他に、プロジェクターと呼ばれる映写機のような物を使えば建物や植物さえも実体化が可能。ただし、植物のように自然には変化せず、プログラムを切り替えなければ、桜→青葉→落ち葉のような感じで見た目を変えることはできない。
　本編に出てきたバトルカードの解説‥
『スーパーバリア』は5発の攻撃に耐えられるバリア。ちなみに『バリア』は1発のみ。
『ノイズドウィザード』は、ノイズドウィザード（ノイズで暴走したウィザード）を召喚して相手を攻撃させる。
『エランド』は、大昔に滅んだムー文明の衛兵。それを召喚して相手を攻撃させる。

『グラビティステージ』は、強力な重力を発生させて相手を地面に押し付けるカードで、主に相手が逃げられないようにするために使う。

『ヘビードーン』は巨石を相手に落として押しつぶす。

『ヘンゲノジュツ』は、使うと自分そっくりな人形が現れて代わりに攻撃を受ける。攻撃を受けた後は狸の姿になる。一種の防御策であると共に、相手の不意をつく布石にも使える。

・エアディスプレイ

電波を物質化させた板のような物。空中に浮かんでおり、テレビ電話のように相手と会話する事や、キーボードのように操作する事も可能。

・リアルウェーブ

実体化した電波の総称。移動手段である『ウェーブライナー』（電車のような物）や、バトルカードもリアルウェーブである。

・メテオG

数ヶ月前、地球を襲った脅威。全てノイズでできており、地球に衝突したらテクノロジーは全て崩壊し、ノイズの衝撃波により全人類の8割が死ぬという代物（しろもの）。

Mr．キング率いるディーラーがメテオGを操り地球人を支配しようとしていたがロックマンが阻止した。

・レゾン

目標のようなモノ。チームを作って一つの目標のために尽力する。スバルたちの時代ではレゾンとチームを組むのが一般的。

スバルがメテオGを破壊した時、スバルの父である大吾が地球人に「息子のスバルをあなたたちの星に返してくれ」と訴えかけ、結果全人類のレゾンは『スバルを地球に！』となった。その際発生し

たエネルギーは地球から溢れるほどで、大吾は『レゾンウェーブ』と名付けた。

・ダークチップ

２００年前、Ｄｒ（ドクター）・リーガルという科学者が生み出した物で、人間の怒りや憎しみを具現化した存在。使った者は心を闇に飲み込まれると言われている。

・カーネル・アイリス（ネットワークシステム）

２００年前、改心したワイリーが作り上げたネットワークシステム。『カーネル』がインターネット上の犯罪者やウイルスを自動でデリートする。『アイリス』はインターネット上の損傷箇所を修復する。

ツバサはコレをサーバーに適用して負担による損傷はアイリスが修復し、万が一ウイルスが進入したらカーネルがデリートするようになっている。

なお、ワイリー博士は最期まで2人が生きている事は知らされていなかった。

・エンシェントサーバー（シャインサーバー）

２００年前のナビたちを保存しているサーバー。今現在確認されているメンバーはナイトマン、カーネル。他にもいる模様。管理者はセレナード。

接続用のＰＧＭを2つに分けられており、一つはスバルに。もう一つは……。

・ノアズサーバー

エンシェントサーバーに入りきらなかったナビがいる。２００年前のロックマンに使われていたメモリ拡張プログラム、『エクサメモリ』により容量が格段に上がり、結果大量のナビや暁シドウの電

波変換時の負担も請け負える。
　これもセレナードが管理しているが、さして大変ではないもよう。おそらく、住人がおとなしいからだと思われる。
　名前の由来は『ノアの箱舟』からとっています。

・ネビュラサーバー
　フォルテが管理しているサーバー。完全自立型＋最強クラスのナビであるフォルテが一つしか管理していないのは、極度の人間嫌いと中にいるモノがあまりに力が強すぎるためらしい。接続用のＰＧＭはツバサが持っている。

・オダカサン
　ツバサはここに隠れ住んでいた。元となったのは東京の郊外の『高尾山』。

『ｘｘｘＨＯＬｉＣ』用語集

・蟲（コ）

それ相応の術者（飛王・リード（フェイワン））が創ったモノ。羽根の姿をしており、抑制心を失いたいと強く願う者にしか取り憑けない。取り付かれると、自分の中にある怒りや愛などの感情を抑える事ができなくなり、場合によっては人を傷つける。

それらは、蟲が宿主の魂を吸いだしやすくするために発生した作用。魂を吸いだされた人は感情が無くなったように呆けて、周りから見れば急におとなしくなったかのように見える。魂を吸い出されると、その器となる肉体がよほど強くないと魂は戻せない。

吸い出された魂は次元を飛び越えフェイワンの元に行き、彼の人形に入れられて操り人形となる。なお、その人形を他の次元に飛ばして、その世界の人を殺す事もある。

なお、人の体から抜け出る時の姿は、球体に大きな鳥のような羽をつけて、足に当たる部分にはタコとも植物の根ともとれる触手がある。ちなみに、鳴ける。（たしか、『ギィィィ』とか、『キィィィ』だったかな）

・魔法

意味的には文字通り。

発動や効果に使える者の『癖』があり、そのモノの成り立ちを理解して扱う『理論タイプ』など、そのタイプは様々ある。イメージ的に方言のようなもの。

・猿の手

５回まで持ち主の願いを叶えるが、その代償は大きい。なお、願いを叶えるさいに猿の手の指が折れる。

霊やあやかし（霊よりも不定形で、泥に目をつけて意思をつけた

感じ）が見える四月一日（わたぬき）でさえ気付けないほどに厳重な封印が成されている。

原作では、教育実習生（民俗学専攻）が侑子から猿の手を譲ってもらい、願いを叶えてもらう。

一つ目はその力を試す意味合いで『雨を降らせて』。その結果、四月一日が居る学校のプールの水が無くなりました。プールの水から雨を持ってきたのでしょう。

二つ目は『八（や）たの鏡を出して』。やたの鏡とは、侑子の知り合いの骨董品（こっとうひん）屋にあった物で、侑子が言うには、誰でも持ち主になれるわけではないという。

三つ目は『資料を出して』。やたの鏡と合わせて、自分のレポートを作成した。しかしその資料は、教育実習生が図書室にいた時間と同時期に紛失した他の人の資料だった。つまり、猿の手は何も無い空間からポンポン出すわけではなく、ちゃんと元があるという事。

四つ目が『事故が起きないかな……』これは、教育実習最後の日に遅刻してしまい怒られそうだからって理由で少しだけ願って叶えられた願い。なお、本人にとっては本気の願いでは無かった。実習生の隣の人が電車に飛び込んで亡くなった。

最後は『私の目の前から全部消して』。資料の事を教授から「お前が盗んだのではないか？」と問われて、挙動不審になっている時にドアのチャイムが鳴る。「電車の事件も、自分が押したとかで警察が来るんじゃないだろうか……」という心理状態でチャイムが鳴ったので、思わず猿の手に願った。その結果、最後の指が折れた猿の手は教育実習生の首を絞めて殺した。

その後、猿の手は侑子の宝物庫（別名：物置）に戻ってきた。侑子は猿の手に封印を施した。なお、やたの鏡も元の骨董品屋に戻ったらしい。

第1話　始まりとメール（前書き）

出だし１５０字のところの編集方法が分からないのでここに書きます。

・キャラクターの細かい解説は本編ではほとんどやってないので、別に書いてる『明日へ　データファイル』をご覧ください。

・オリジナルキャラと、ロックマンエグゼ（ＥＸＥ）キャラが出ます。

・全体的に1話分の話が長いです。時間に余裕のあるときに読まれるのをオススメします。

・基本的にゲームの方をベースとしています。

・ｘｘｘＨｏｌｉｃとのコラボ作品ですが、メインは流星です。

第1話　始まりとメール

――――某所、某時刻――――

『……本当に行くの？』

やや薄い暗がりの室内にて。そこに居るのは2人。
機械、しいて言えば電脳の中だが、静かな、澄んだ声で少女が尋ねる。

「……ああ。１６０年前の悲劇を、繰り返さない為にも……ね」

これからの準備をしながら、覚悟はとうに決めたような口調で少年は答えた。

『あの子達なら、事情を話せば協力してくれると思う……。それに……決行すれば、最後にはあなたが……』
「……協力してくれる確証は無い。それに、あんな思いをするのはオレや、オレの居た時代の連中だけでたくさんだ」

長年のつきあいで少年の強情さは知っているのか、少女はため息をついて、それ以降は反論しなかった。

「よし！準備完了。……んじゃ、行ってくる」

少年の言葉に少女は応えない。機嫌を損ねたようだ。少年は少し苦笑しながら部屋の外へ。

「……行くぞ」
『うけたまわった』

部屋の外に待たせていた男に声をかけ、今度は2人で、家の外へ出て行った……。

――――同時刻・コダマタウン――――

季節は春。桜が舞い、町が夕暮れに包まれる時間。
そんな絵になるような情景の中、コダマ小学校6年・星河スバルは、公園のベンチに座って陰鬱なため息をついた。
その理由は約3時間前にさかのぼる。

――――3時間前――――

「いい加減かんねんしなさい！！」

教室にて、強気な少女の声がとどろく。
5年生の時、生徒会長になった白金ルナ（通称：委員長）だ。

「だから、僕は科学部に入りたいんだ！！」

反するはスバル。スバルは科学・宇宙分野が大好き＋5年次の時から科学部に興味を持っていて、6年に進級したこの際に入ろうと考えていたので、いつもはおとなしく従うスバルもさすがに逆らう。

「おだまりなさい！！　あなたはチーム『ルナルナ団』の一員なん

だから、私のサポートに入るのは当然でしょう！」

そう。スバルや委員長たちは、『委員長を生徒会長にする』というレゾン（目標）で活動していたのだ。

6年次に上がり担任の育田先生から、【一人では何かと大変だから、クラスの何名かに手伝ってもらいなさい】と言われたルナは、ゴンタとキザマロを引き連れ、スバルを自分のサポートに引き入れようとしていたのだ。

「だからって委員長の手伝いと部活は両立できるんだから、問題ないんじゃ――」

「いいえ！　私のサポートに入ってもらいます！もし部活でこっちの活動に参加できなくなったらどうするの！？」

言いかけた言葉を遮られ、スバルはため息をつき、視線でゴンタとキザマロに助けを求めるが当の2人は首を横に振った。

「（オレじゃあ無理。あきらめろ。スバル）」

「（以下同文です。スミマセン。スバル君）」

ゴンタ、キザマロの順に『無理』と断言され、スバルの答えはこれしかなかった…。

「……了解デス……」

「分かればいいのよ♪」

ルナは、機嫌よさ気に先生にメンバー表を出しに行く。スバルはため息をつき、ゴンタとキザマロはスバルの肩にポンと手を置いた。クラスの男子たちもスバルに同情の視線をおくる。

その後さんざん手伝わされ、今に至る。

――――そして現在――――

「はぁ～～～。科学部入りたかったな～。今後のスケジュールも何でかメールで送られてくるし」

公園でため息をつき文句を言うスバルに自分の端末、ハンターの中から少し呆れたような声が響く。

『済んだことぐだぐだ言っても仕方ねーだろ。ほら、早く帰んねぇとおふくろが心配するぞ』

「分かったよ。ロック」

スバルは自分の相棒とも言えるウォーロックにそう返すと、ため息一つで気持ちを切り替えて帰路につこうとした。

PPPPP！

「ん？　メール？　誰からだろ。……あ、暁さんからだ」

『ほぅ、暁からねぇ。読んでみろよ』

「うん。えっと、

『スバルへ：明日話があるから、WAXA日本支部に来てくれ。理由と内容はその時話す。

それから、両親の方にはサテラポリスの方から学校を休ませるように言うから、安心してサボれ。

……それと、白金ルナは連れて来ないでくれ。理由は、来れば分かる』

だって。暁さん、安心してサボれって…。それに、委員長を連れてくるなって、何でかな？」

『オレが知るか。行ってみりゃ分かんだろ』

「はぁ。ロックったら。少しはまじめに……あれ、続きがある。なになに、

『なお、このメールは、機密保持に該当する内容のため、メールボックス内のメールも全て消去される』

……って、えぇ！？」

『Ｐｉ――――！　メールボックス内ノメール、全テ消去シマシタ』

スバルの端末にこのように表示され、スバルは余りのショックで思わず叫んだ。

「あー！スケジュールの書かれてるメール、まだバックアップとってないのにー！」

『わりぃ、スバル。これぱっかりはオレでも同情しかできねぇ』

「う～～。委員長になんて言われるか……」

ドンヨリモードの状態で、スバルは帰路についたのであった。

――――星河家――――

「ただいま～」

「「おかえり～　／　お帰りなさい」」

陰鬱なスバルを出迎えたのは、スバルの両親。星河あかねと、星河大吾である。

２人はリビングでテレビを見ていたが、スバルの声の暗さを気にしてあかねが尋ねてきた。

「どうしたの？　スバル。そんな暗い声で」

「じつは、――」

スバルは事情を説明した。

「あらあら。それじゃあ今度、ゴンタ君かキザマロ君にお願いして、スケジュールのデータを移してもらったら？

それに、事情を話せば委員長さんも分かってくれるわよ」

「だといいけど……」

「なんだスバル。あんまり恐がってると愛想つかされて、ルナちゃんが他所の男のところに行っても知らないぞ？」

「からかわないでよ父さん！！」

すでにこの時点でスバルの顔は赤い。

「そうよ。大吾さん。スバルにはミソラちゃんがいるんですから。ねぇ、スバル？

たしか、今まで２回ぐらいデートに行ったのよね。ヤシブタウンと、ＴＫシティだったかしら？」

「あ、あれはデートじゃ…っていうか、母さん何で知ってんの！？

……ハッ！まさか、ロック～！？」

スバルがウォーロックの方に目をやると、そっぽを向いて口笛を吹いていた。……確定である。

ウォーロックはスバルに睨まれてるのに気づくと、誤魔化すように笑いながら弁解した。

『いや～あの時のスバルとミソラの顔が真っ赤で面白くてな。つい話しちまった。

それと、鏡見てみろよ。今のお前も、タコみたいになってるぜ？地球ではこういうのを、〈 二股をかける 〉って言うんだろ？」

からかうようなウォーロックの言葉にさすがのスバルも怒りという名の感情を表に出している。

「ロック～！　いいかげんにしろ！　大体、なんでそんな言葉知ってるの！？」

そんなことを言い合いながら、2人は2階に上がっていく。あかねは、慣れた様子で声をかける。

「家のもの壊さないでね～。それから、もうすぐご飯だから程々にして戻ってらっしゃい。……けど本当に、スバルはどちらを選ぶのかしら。これからが楽しみね。大吾さん」

「ああ、そうだな。どちらが新しい家族になっても歓迎しよう。幸せになってほしいからな」

と、そんな事を言って互いに笑みをこぼした。そうして、星河家の夜はふけていく。

――その頃、ＦＭ星周辺――

『まて――！！』

ＦＭ星親衛隊はＦＭ王の命令で、かつての仲間を追っている。反逆者を捕まえるためだ。

地球時間で数時間前、反逆者の集団をＦＭ王の指示で一網打尽にしようと思ったら先手を打たれて逃げられ、少しでも敵の情報を得ようと逃げ遅れた者を捕まえようとしているわけだ。

そして、今に至る……。

『ちっ！　しつこい！　いい加減あきらめろ！！』

言うなり反逆者は銃で攻撃。もと親衛隊だけあって、武器の扱いはなかなかだ。

突然の不意打ちで追跡側が怯んだスキに、どんどん差をつけられていく。……このままでは、反逆者に逃げられるだろう。

だがその時、強力な電磁波が反逆者を襲う。

『っ！！　なんだ！？　体が……動きづらく……』

突然反逆者の動きが鈍る。その原因に気づいたのは、追っていた親衛隊〈隊長：イーグル〉である。

『この波長……ケフェウス様！』

その時、ＦＭ王ケフェウスが姿を現した。子供だが、一段と強力な電磁波を持つケフェウスにとって相手の体内電波を狂わす事など造作もないのだろう。

『すみません。ケフェウス様。あなたさまの手を煩わせてしまって……』

『かまわん。お前たちこそ、たいした怪我がないようで安心した。

それに、居ても経っても居られなくてな。
……さて、お前はどんな事を知っている？』
『答えられん。オレは下っ端だからな。
……ＦＭ王。オレは、昔のあんたを崇拝していた。冷酷なまでの強さと決断力にな。だが、〈地球の友だち〉とか言う奴のせいで…あんたは、腑抜けになっちまった。だからオレたちは、あんたとＦＭ星を変える！！』
『余は、昔の余には戻らない。〈孤独からは何も生まれない〉というのを、余は知ったからな。
それに、できると思うのか？スバルはかつての親衛隊を壊滅させたシリウスを倒したのだぞ？　生半可な強さでは、絶対に勝てな――』
ＦＭ王が言い終わる前に、反逆者が口を開く。
『クックック。それなら問題ない。もうすでに地球には……』
その後語られた言葉に、ＦＭ王や親衛隊は言葉を失う。
そして反逆者はＦＭ王の放つ電磁波に耐えられず、気絶した。
『……これ以上ここで情報を得るのはムリそうだな。
イーグル！　この者をＦＭ星に連行しろ。帰ったら詳しく訊きだせ！』
『了解です！　……ケフェウス様、どちらへ？』
ケフェウスは、ＦＭ星とは違う方向に向かおうとしていた。あの方向の先にはたしか……。
『地球に向かう。今は一刻を争うからな。ＡＭ星の復興。およびＦＭ星の行政は三賢者に頼んでくれ』

『ッ！！　危険です！　ＦＭ王！まずは万全な準備をしてから行くべきです。でなければ、私を連れて行ってください』
『察してくれ！！今は時間がないんだ！』
『……分かりました。どうか御武運を。私も必ず後から参ります』
『すまぬ』

ケフェウスは地球へ飛び去った。どこか、怯えているようにも見えたが…。

『さぁ、ケフェウス様の指示だ。この者を連行する。その後は、直ちに地球に向かうぞ！！』
『『『　はい！！　』』』

部下は反逆者を連れて、ＦＭ星に飛び去っていく。イーグルはその場で一人考えていた。

（……簡単すぎる。わが星の親衛隊は、そう簡単に捕まるわけがない。ケフェウス様が来る前に、あの者は十分逃げられたはずだ。…現に、ケフェウス様が来なければ逃げられていただろう。
それがまるで、あの者だけ〈　遅れた時間　〉を伝えられていて、わざと捕まったかのようだ…。
それに、親衛隊が下っ端？　……上にはどれほどの者が……）

イーグルは不安を覚え、ＦＭ星に飛び立った。

【いま、自分にできる事をやる】

それが、自分の主を守る近道だと思えたからだろう。

第1話　始まりとメール（後書き）

初めての投稿です。誤字脱字や、読みにくいところがあればどんどん言ってください。

第2話　再会（前書き）

今回の話で、前回出てきた『うけたまわった。』の声の主が分かります。以外って言えば以外ですが、ピンと来た人は多いですかね？

第2話　再会

――翌日、ＷＡＸＡ――

ＷＡＸＡ日本支部に着くと、見知った顔が数名いた。

「スバルく～ん！　久しぶり！」

呼ぶ前に駆けてきたのは、スバルと同じく電波変換できる響ミソラだった。

「ミソラちゃん！　うん、久しぶり！　ミソラちゃんも呼ばれたんだ」

「うん。まぁ、あのメールにはびっくりしたけどね。おかげでちょっと大変だったわ」

「たしかにね。僕もあのメールで――」

などと、互いに和気あいあいと話しているときに、スバルたちの声を聞いて2人の人物が近づいて来た。

「よう、お二人さん」

「やっと来たのね……」

「「　ジャック（くん）！　クインティア先生！　お久しぶりです」」

話しかけてきたのはジャックとクインティアだ。「先生は付けなくていいのに……」とぼやいてるクインティアをよそに、スバル、

ミソラ、ジャックは会話を弾ませる。

「…あれ、そういえば二人ともなんでここに？　たしか、まだ服役中だったような……」

そんなスバルの問いにはクインティアが答えた。

「シドウが、何か渡したいモノがあるからって……」

「正確に言えば、今日来る『お客さん』から渡されるらしいけどな」

クインティアの説明に、ジャックが補足を述べる。そんなジャックを、やや冷たい目で見ながらクインティアがスバルとミソラ、２人のウィザードとジャックに声をかける。

「……そろそろヨイリー博士のところに行くわよ。博士のところにいたほうが、何かと都合がいいし……」

スバルは『お客さん』の正体を気にしつつ、クインティアの指示に従うことにした。

人が多いといっても、必要最低限の人員しか来ていないらしく、ヨイリー博士は難なく見つけられた。

「ヨイリー博士！　おはようございます」

「おはよう。ごめんね、みんな。こんな朝早くて。なんでも、早急に対策を立てる必要があるらしくて…」

「対策？　何のですか？　メテオGは消滅したし、ブラックホールだって……」

「それに、『お客さん』って、誰なんですか？」

スバル、ミソラの質問に対しヨイリー博士は少し困った様子でため息をついた。

「そう。そうなんだけど、肝心の脅威すら明らかにされていないの。それにお客さんの方もシドウちゃんの方からの情報なのに、こちらにはたいして知らされてないし……。まぁ、もうすぐ分かるでしょ」

言いながらヨイリーは暁の方を見る。暁がこちらに気づいたらしく、ＷＡＸＡ長官との話を切り上げスバルたちの元に来た。

「よ！　スバル、ミソラ。久しぶりだな。っと、ルナは連れてこなかったようだな。……あー悪いな、いきなりあんなメール送っちまって。『お客さん』からの頼みでね」

「お客さん……もしかして暁さんが生きてたのと関係ありますか？　それに、委員長の事も……」

「ん。ぶっちゃけその通りなんだけど、オレとアシッドから詳細を言うのは禁じられてるんだ。

まぁ、ルナを連れてこない方が良いってのは、オレも賛成だしな……」

「俺も賛成って……暁さんの考えじゃないんですか？」

「そう疑うような顔するなよスバル。まぁ、気になるって気持ちは分かるけど、これも言えないんだ。……悪いな」

「けど、今日それらの事がまとめて明らかになるんでしょ？　シドウちゃん」

ヨイリー博士は眼鏡を光らせて暁に問う。暁はたじたじな様子で笑みを浮かべる。

「ん～。まぁ、そうなんだけどね。…いろいろと驚くぜ～～。なん

せ――」

『シドウ。これ以上は……。申し訳ありません。これ以上私たちから話すのは禁じられているのです。皆さん、了承してください。あっ…ついでにウォーロックも了承して下さい』

『だ～か～ら、ついで扱いするんじゃねぇ!!　しかも思い出したように!!　つ～か、皆さんって言ったあと、なんでわざわざオレに了承を求める!?』

『場を和ませるには冗談を言え…と本に書いてあったので」

『どんな本だ!!　というか、オレをカモにするな!!』

暁のウィザード、アシッドとウォーロックのコント（？）に一同が苦笑いしているその時、隊員の一人が声を張り上げた。

「上空に巨大な電磁波感知!!　こちらに向かってきます!!」

隊員の言葉により、その場にいた全員に緊張がはしり、長官の指示が飛ぶ。

「クッ、こんな時に…総員戦闘準備!!　バトルウィザード展開！非戦闘員は退避せよ!!」

「長官、その心配はないですよ…一人目の客ですから」

長官の指示で他の隊員が動く中、一人冷静にシドウが口を開く。

「？　シドウ君、それはどういう――」

『久しぶりだな。スバル。そしてウォーロック』

長官の声は、新たにやって来た声に打ち消された。その声の主は、遠いＦＭ星に居るスバルの友達。

「ケフェウス！　久しぶり。ＦＭ星とＡＭ星は？」
『うむ。順調に復興は進んでいる。今は三賢者にまかせてこっちに来たというわけだ。
　それと、地球にはしばらく滞在したい。行き違いになると、護衛の親衛隊に迷惑がかかる。実は、護衛を置いて１人で来てしまってな。……ん？この波長は……ハープもいるようだな』
『ポロロン。お久しぶりです。ＦＭ王。』
『そうかしこまらなくても良い。余は、もう昔の余ではないのだ。他のＦＭ星人とも話がしたいのだが、今は大事なことを伝える必要がある』
「ＦＭ王。大事な話とは？」

　少し苦笑混じりに答えたケフェウスに、やっと話せると言わんばかりに長官が尋ねる。

『うむ。その前に、余が今、どういう方針で星を動かしているかはご存知か？』
「ええ、一応。ＡＭ星の復興。そして、他星との友好関係の樹立……でしたかな？」
『うむ…言い難いのだが、その方針に従わぬ者。つまり反逆者が出た。そして、その者たちの大部分が地球に逃げ込んだ。逃げ遅れた者を捕縛し問い詰めたら、
【地球には電波体の仲間がたくさんいる上に、それらを束ねる者もいる。地球を乗っ取り、地球の同志たちと今のこの星の間違いを証明してやる！！】
　だそうだ。その者は下っ端の方で、たいした情報を持っていなかった。すまん。地球のみんな。私たちの方で済ませるべき問題を、君たちにも背負わせてしまう…』

　心底申し分けなさそうにしているケフェウスに対し、大人たちは

「外交上どうするべきか　」とかそんな事を考えているのか、口を開けないでいる。そんな中スバルを始めとした子供たちと一部の大人はケフェウスを励ます。

「大丈夫だよ。ケフェウス。前にも言ったでしょ。困った時はお互い様って！」

「そうだよＦＭ王さん。間違った事してないんだから、そんなに自分を責める必要はないよ！！」

「ちっ。しゃ～ね～な。オレもやれることがあったら手伝ってやるよ。こいつら2人だけだとムチャしそうだしな」

「私も、そこで外交の事とか考えてるであろう頭の固い大人たちと一緒にされたくないから手伝わせてもらうわ……。ジャック、あなたも十分ムチャをするタイプだと思うけど？」

「あなた、スバルちゃんのブラザーなんでしょ？　だったら私のブラザーも同然だから、こんな年寄りで良ければ手伝うわよ」

「そんじゃ、こっちの対策メンバーは決定したみたいだな。ＦＭ王さん？　ちなみにオレも、その一人になる気満々だし」

スバル、ミソラ、ジャック、クインティア、ヨイリー、暁の順に応えるとケフェウスは本当に嬉しそうだ。

『ありがとう。スバル。地球人の皆。……しかし、電波体たちは――』

ケフェウスが心配そうに尋ねる。ウォーロックたちは【当然】といった顔で答える。

『んなもん愚問だぜ。スバルがやるって言ってんだ。こうなったスバルを、オレは止める事はできねぇ。……止める気もねぇしな』

『ポロロン。何だかんだ言って、ロックもけっこう乗り気じゃない。

素直に手伝いたいって言えばいいのに』
『私も同じ意見です。外交はたしかに大事ですが、シドウの意志なら私は従います。それに、ウォーロックも心配ですし』
『なにが心配なんだ!?　アシッド？　もし変な理由だったら承知しねーぞ!!』
『あなたが〈　愚問　〉などという言葉を使ったからですよ。どこで覚えたんです？　そんな難しい言葉』
『笑いを堪えながら訊いてんじゃねぇ!!!!』
『はぁ、素直じゃないって所は似たもの同士ね……』

そんな会話を聞きながらケフェウスは、少し笑みをこぼしながら『ありがとう』と、誰に聞こえるでもなく声をたてる。
自分の中の不安が、溶けるように消えていくのを感じながら。

そんな様子を、上空（ウェーブロード）から眺める２つの影。

「な〜んか盛り上がってるみたいだね。降〜り〜ず〜れ〜」
『……ダダをこねても何も始まらんぞ。大体、貴様が道を間違わなければここまで時間はかからなかっただろう。約束の時間も、４０秒の遅刻だ』

男は無愛想な言葉使いで、少年を注意する。

「……はいはい」
（はぁ、な〜んでこいつこんなに細かいんだろ……ど真面目。無愛想。頑固一徹……ｅｔｃ）

少年は心の中で何個か悪態をついた後、意を決したように下を見た。

「……そうだな。踏み出さなきゃ、何も変わらないもんな。よ～し、それじゃ――お前が先行って？」
『……こういうのを〈 肩透かし 〉というのか』
「いや～だってよ～。お前が後に降りると、「攻撃しろー！！」って騒ぎになりかねないぜ？　いくらオレでも、あいつらを全員ケガさせずに押さえ込むなんて芸当はめんどいからやりたくねぇし。
……まぁ、おまえはどのタイミングで降りても騒動が起きそうだが、一番手早く片付きそうなのが、【おまえが先に降りる】っていう選択肢なんだよ」
『……話し合いという手は考えないのか？』
「……ハハ。笑えねぇ冗談だ。……何も知らないあいつらがいきなりお前を見たらどうなるか……。分からねぇお前じゃ無いだろ？　なぁ、ジョーカー」
『……うけたまわった。』

急に全てを見通すような目をした少年に対し、ジョーカーはそう一言呟くと、ウェーブロードから降りて行った。
……残された少年はウェーブロードの上で空を眺め何かを呟いたが、風がその声を打ち消していく。
……次に下を眺め、起こっている事態に対しため息に苦笑を織り交ぜながら、静かに足を踏み出した。

第2話　再会（後書き）

どうでした？ウォーロックとアシッドのコント。感想待ってます。

第3話　出会い（前書き）

更新が大幅に遅れてすみません！たんなる言い訳にすぎないのは分かっているのですが、実はインターネットが繋がらなくなってしまいまして・・・。これからはストックがある限り毎日更新していこうと思います。

第3話　出会い

最初に気づいたのは誰だろう。誰かの発した「上から何か来るぞ！！」という言葉に、全員が上を見る。初めは逆光もあって、影でしかなかった者は地面に近づくにつれて実像を成していく。
その姿を見た時スバルは、なぜシドウが委員長を連れて来ないように言ったのかが分かった。

ズゥゥゥゥン！！

重量感のある音と共に、巨漢の男が降って来た。スバルとヨイリーはそれぞれ違う感情で呟く。

「……ジョーカー！！」
「ジョーカーちゃん」

スバルは、驚きと敵意。そして警戒心から、ヨイリーはそういった感情は抱かず、純粋に「信じられない」という感情で言葉を発した。

『ヨイリー博士……』

ジョーカーはそう言い、ヨイリーに近づくが、長官の指示がそれを防いだ。

「全バトルウィザード！　2陣に分け、一陣はバリアを張りつつヨ

イリー博士の前へ。二陣は一陣の後ろから弾幕をはれ！
決して博士を傷つけさせるな！！　ミソラくんはＦＭ王の守護を、スバル君は弾幕が突破された時のために控えててくれ！」

スバルとミソラは電波変換し、バトルウィザードはジョーカーを包囲する。この間、約7秒。

「長官ちょっと待って」

暁の声は周囲の怒号にかき消され、誰にも響かない。
ジョーカーは、弾を打ち落とし、サテラポリスのウィザードをねじ伏せながら前へ。ロックマンはジョーカーの前に立ち塞がり、剣を構えた。

「バトルカード、ブレイクサーベルＸ！！　スゥ、はぁぁぁぁ！！」

バトルカードをプレデーションしたあと呼吸を整えジョーカーに剣を振るう。
……だが、その剣がジョーカーに届くことは無かった。ジョーカーの周りに、バトルカード：スーパーバリアが現れたからだ。
それと共に、ひょうひょうとした声がその場に溶け込む。

「あ～あ。やっぱりこうなったか。暁～お前いざという時は止める。って言ってなかったか～？というわけで、賭けはオレの勝ちだな。な～におごってもらおうかな～♪」

「しょうがないだろ！　誰もオレの話聞かねぇんだもん……というかやっぱりって、お前予想できてたんだな！？　無効だ！　こんな賭け」

「無効って、お前なぁ。どうなるか予想してから賭けるのが『賭け』ってもんだろ？　お前とオレとじゃ人生経験が違うぜ。あ・き・ら・め・ろ！！」

『……貴様こそここにくる途中で何度も道を間違えたのだから、私にはおあいこに見えるがな……』

「ぐぅ……ジョーカーお前なぁ。まだ気にしてたのか……」

「はっはっは！　だったら完全にこの賭けは無効だな。というわけで、オレがお前に何かをおごる必要なし！！」

「ッ！　ちょっとまて。何で遅刻が賭けに影響するんだ！？」

「ちっ誤魔化せなかったか！！」

『……そもそも、サテラポリスが賭け事をするということ自体、間違いだと思うのですが……』

少年と暁、ジョーカー、アシッドが仲良く会話するのを見て、その場の全員が唖然とする。

少年の歳はスバルと大して変わらないようだが、背はスバルより少し上だ。歳は大体１１、２だろう。髪も眼も黒い。前髪は後ろに撫で付けていろが、２房（ふさ）ほど前に垂れている。髪の長さは背中の中程まであり、首の上の方で一本に結っている。

ズボンには、本来肩まで持って来てズボンが落ちないように押さえるはずの帯が垂れ下がったままにしてある。上着に隠れて見えないが、ズボンはベルトで留めているのだろう。

その容姿で『人生経験』という言葉は余りに似合わないように思えるが、今はこの疑問の方が優先だろう。

「暁さん。その人はいったい……それにジョーカーも……」

「ん？　あーそれは……」

「暁、オレから説明する……」

スバルの問いに答えようとする暁を少年が制し、一息ついてから、口を開いた。

「まずは自己紹介だな。オレの偽名は飛王（ひおう）ツバサ。よろしく……スバル？」

――――ここからツバサ視点になります――――

「な、なんで僕の名前を!?　っていうか、初対面で偽名使う人はじめて見た」

スバルがストレートに驚き、大人たちが怪訝な目で見る様子をツバサは内心で笑いながら答えた。

「まぁ、いろいろと訳ありでね。簡単に言えば、世界の目付け役ってところかな。あ、それについて今は話す気ないから。今回は渡したい物があってね」

「渡したい物？　それじゃあ、お前が例のお客さんか？」

「人が話してる時に口はさむなよジャック。……ああ。お前ら姉弟にわたすものがあってな。……苦労したんだぜ？　再構築するの」

そう言いツバサが取り出したのは、２つのカプセル。ツバサは自分のハンターを操作すると、中に居た者が出てきた。

『よう！　ジャック！　久しぶりだな！オレのこと覚えてるか！？』

『キャハハハハハ！　ティアも久しぶりだね。暁とチョットは進展あった？』

「「コーヴァス！　ヴァルゴ！」」

「ブライにデリートされた二人のデータを再構築した。再構築自体は、ちょ～っとイケナイコトすれば簡単なんだが、データの中にノイズが混じっててね。それと分離するのに苦労した。

まぁ、この先闘う力はあった方がいいだろうからな。

それから、スバル、ミソラ、暁。君たちにも渡すものがある」

ジャック、クインティアの驚きに対し、かるく解説。およびスバルたちを呼んだ。「イケナイコトって何？」とヨイリー博士から質問されたが、聞こえないフリをしている。

「まずミソラ。きみには、『ホーリーＰＧＭ』を渡しとく。バリアを張れて、守りたいモノへの思いが強いほど力を増す。もちろん、エースＰＧＭ同様ノイズも無効化できる」

「え、あ、ありがとうございます。でも、なんで私に？」

「いつまでも足手まといじゃいられない。とか思ってんじゃないかと思ってね。スバルや、自分の大切な者を守るんだろ？
次にスバル。きみにはこの『エンシェントＰＧＭ』を渡しとく。基本的なところはエースＰＧＭと同じなんだが、接続するサーバーが違う。あえて名前をつければ、エンシェントサーバーってところかな？ようするに、ノイズチェンジが違うって事だ。まぁ、念のため持っててくれや」

「ありがとうございます。けど、いちおう僕にはエースＰＧＭありますし……」

「お前なぁ。そのエースＰＧＭが使えなくなった時の事を考えてるか？
最悪の状況を考えてた方が、いざという時に焦らないで済むだろ。
それから、ノイズチェンジした後は２００年前のナビの記憶により、頭の中に戦い方が思い浮かぶはずだ。
最後に暁。……一応ご注文の品はできたが……ホントにいいのか？この機会に前線から退いてクインティアと円満な…」

「ああ。サンキューな」

ツバサは、暁が自分のが言い終わる前に暁が答え、ツバサは少し睨んでいたが、暁は近くに居るケフェウスとスバルたちのところに行ってしまったのと、ヨイリーが質問しだしたのでそっちに対応することにした。
（ちなみにスバルたちはジャックやケフェウスたちともらった物について話したり、ハンターで機能を確認してるようだ）

「ツバサちゃん。いろいろ説明してくれないかしら。シドウちゃん

の事とか、ジョーカーちゃんの事とか……」
「その前に、ジョーカーが博士に言いたい事があるんだと。……聞いてやってくんないかな？」
「そういえば来た時何か言いたそうだったわね。なに？　ジョーカーちゃん？」
『……博士。……いろいろすまなかった。……まだ完全には人間を許せないが、私のオペレーターであるこのわがまま人間のおかげで、そんな人間ばかりではないと思えるようになってた……』

ジョーカーは口下手で、こんな事しか言えなかったが、さすが生みの親といったところか、ヨイリーには言いたい事が伝わったらしい。

「ジョーカーちゃん……。ありがとう、戻ってきてくれて。それと、ごめんなさいね。最後まで守ってあげられなくて……」

なんだか2人でしんみりムードに入りそうだったので、ツバサはその前に、咳払いをしてから説明を開始した。

「ウォッホン！　……まず2人が生きていた理由だが、自爆する寸前、オレのサーバーに2人を転送して、自爆のエネルギーとそのダメージを全てオレのサーバーに受け流せば、エネルギーを使い果たして虫の息な上に、データがボロボロで崩壊しかかっている電波体2体が残るってわけ。あとは、こわれたデータを修復してお終い。
あ、ジョーカーはオレのお手伝いにと思ってついでに直した。おまけに、『自分の身は自分で守る』ってのがオレの信条でね。周囲のノイズを常時集め、必要時に解放してファイナライズ、つまりグレイブ・ジョーカーにもなれるようにした。ノイズが溢れそうな時は、データカードにノイズを保留しとけばいい話だしね。
……それから、サテラポリスはジョーカーを受け取るのに抵抗あ

るだろうから、引き続きオレの方で引き取るよ。……ジョーカーにも、もう少し考える時間は必要だろうからな……。他に聞きたい事は？」

「そうね……６つくらいかしら。

・どうやってシドウちゃんたちを再構築したか？

・サーバーに全て負担を負わせたんじゃ、通常のサーバーは持たない。どんなサーバーを使ったのか？

・確認として、シドウちゃんがＷＡＸＡに戻ってくる前はあなたの所に居たの？

・それに、エンシェントＰＧＭって何？

・さっきシドウちゃんに渡したプログラムは何？

・最後に……賭けって何？」

「サーバーは２００年前のテクノロジーを応用して、それにこの時代の技術を加えた特別製。

お察しの通り、暁はオレの所にいた。まぁ、ある程度元気になったから途中でそっちに返した。

エンシェントＰＧＭは、簡単に言えば２００年前にいた強力ナビたちの力を封じたサーバーからノイズチェンジを起こして…まぁ、後はエースＰＧＭと同じだな。

さっきシドウに渡したプログラムは、電波変換時の体への負担を減らすやつ。電波変換時の負担を別の方に送ってる。実を言えば、危険な前線から退いて円満な家庭を築いて欲しかったんだけどね。

賭けってのは、ジョーカーにサテラポリスが攻撃しようとした時、暁が止められるかどうか。オレは『止められない』に賭けて、暁は『止められる』に賭けた。って所かな。

再構築の詳しい方法は、悪いけど言えない」

ヨイリーが渋々な様子だったが「……しょうがないわね」と呟き、

スバルたちがもらった物について調べるために、そっちに向かった。
ちなみに周囲はツバサたちを遠巻きにしている。生物として、えたいの知れないものに対しての当然の反応だろう。
そんな様子を予想通りという目で見ていたツバサの腹を、ジョーカーが小突いてきた。

『……ついでとは酷くないか？　別の理由があったのだろう？』
「あ～、ジョーカー悪りぃ。お手伝いが欲しいってのはたしかにあった。だけど、あれには協力してくれたじゃん。……というかお前も十分酷くね？　わがまま人間って何だよ！？　わがまま人間って！」
『……フッ。私を倒した者を、戦士として目覚めさせたかっただけだ』
「ごまかすな！　……お前を倒した者……スバルか、お前も変わったな。さて、そろそろＦＭ王とも話を……」

ツバサはＦＭ王と話をしようと思ったが、スバルたちと話し込んでいた。空気を読むつもりはないので、そのまま話しかける。

「ＦＭ王。長官と今後の事について話したいんだけど。あ～スバルたちも聞いててくれ。後で同じ事説明するのがめんどいから」

言いながら、隊員と話をしていた長官を手で呼ぶ。スバルたちとケフェウスは自己紹介を終えたらしく、すっかりケフェウスもとけこんでいた。…当然ながらヨイリーも来る。

『うむ……それは良いのだが、もうちょっと他人を敬ってもいいと思うが……』
「私なら構いません。それでツバサ君。君はどんな情報を持っているのかな？」

ＦＭ王の苦言と長官の質問を受け（苦言は無視したが）、深刻な顔で語りだした。

「……状況から言えば良いとは言えない。ＦＭ星の反逆者が地球に来た。というのはケフェウスから聞いたと思うが、オレの方の情報だと、どうやら地球にもヤバイ考えのウィザードが増えて来たようでな。

例えば、コダマタウンの改札で爆発物を持ってるはぐれウィザードがいたり……な。近く、大きな戦いが起きるかもしれねぇ」

「……失礼ですが、あなたの情報は信用に足るものなのですかな？　たしかに、コダマタウンの改札の件は事実ですが」

「……長官。アウシュ・イブル研究所の事件。知ってるか？　あんとき流れた噂は真実だぜ？」

その言葉の意味に気づいたのは長官とヨイリーだけだろう。長官はそれを聞くと過去の過ちをその目で見るように青ざめた。

「なるほど。それで納得がいきました。あなたの情報網が広いのも。そして……あなたが自分の事を隠そうとするのも」

『？　何の話をしているのだ？　余にも教えてくれ』

ケフェウスの言葉に、スバルたちも「　同感だ　」と言わんばかりの顔をする。

「う～ん……人類の『若き日の過ち』ってやつだから、聞かないほうがいいよ」

半分はぐらかす様な言い方にＦＭ王は少し不快感を抱いたようだが、それを口にしないのはさすがだ。だが、ケフェウスはそれでも何か言いたい事があるらしい。

『ツバサ……。君を見てると、昔の余を思い出す。……どこか似ているのだ。何も信じられなかった頃の余に。

……余も今日、ここに来るのが恐かった……。スバル以外の地球人と直接話すのは初めてで、それにもし、地球に反逆者を逃してしまった事で地球と争いになったら……余は友と戦わなければいけなくなる。だが、スバルやミソラ、暁。たくさんの者が余を責めず、こんな余でも受け入れてくれる。だからツバサ。君もスバルたちを信じてほしい』

「……頑張ってみるよ」

ケフェウスの『頼み』とも聞こえる言葉に対し、いかにも気乗りしなさそうに返すツバサにケフェウスは言葉を重ねようとするが、隊員の言葉に遮られる。

「長官！！　上空に敵性反応！！　すさまじい数です！！！」

……戦いが、本格的に始まろうとしていた……

第3話　出会い（後書き）

次回は戦闘です。お楽しみに！！

第４話　宣戦布告（前書き）

空に大量の敵性反応が現れた所から始まります。

第４話　宣戦布告

「何て数だ……」

長官が呆然とするのも無理はない。何せ空には、大量にウイルスとウィザードがいたのだから。……所々、ＦＭ星人と思しき者もいる。

『我々はもう人間の支配は受けない！　人間の時代は終わり、これからは電波体が世界を支配する！』

「暁さん……」

「ああ。どうやらあいつらが反逆者のようだな。かなり数は多いが…考えてもしかたないか。よし！　スバル！　みんな！　久しぶりに暴れるぞ！！　……あ、長官いるから指示は長官がするんだった」

暁は気まずそうに長官に尋ねると、長官は少し微笑んだが目は鋭い眼差しのまま暁を見る。

「構わんよ、暁君。存分に戦いたまえ！！　……しかし、せっかくだから作戦指揮はツバサ君、頼めますかな？」

その瞬間、大群が襲って来た。向こうで呼吸を合わせたのだろう。一応陣形は成り立っている。

……互いの動きを邪魔しない範囲で密集している所を見ると、数にものをいわせて地上戦を挑み、そのまま圧倒しようという腹だろう。

スバルたちは一度電波変換を解除していたのでもう一度電波変換し、ツバサはその様子を横目で、敵陣を正面の視線に捉えて指示を

出す。

「……おてなみ拝見。ってやつですか？　長官。……ぱっと見５００はいるかな？

まず、ジョーカーとアシッド・エースはグレイブメテオレーザーとオメガ・レーザーを頼む。奴らの陣形を乱してくれ。

次にジャック・コーヴァスは、そのスキに敵陣の後方に回り込んでペインヘルフレイム。

地上との双撃で一気に数を減らす。

ロックマン達は次の動きが取りやすい遠距離攻撃でジャックが突破するのを援護しつつ牽制。奴らが地上に着くのを遅らせろ。

なお、地上戦になったらそれぞれ好きなようにヨロシク。

そして、非戦闘員は一箇所に集まってろ。その方が守りやすい。

地上戦になった時、非戦闘員の防御はハープ・ノート、クイーン・ヴァルゴにお願いする。

ハイドロドラゴンを上手く操作して、さっき渡したバリアを使えば何とかなるだろ。

ちなみに、ウェーブロード以外の空中に浮いてるのは、ウイルスの『ステルス』と似たような奴に乗ってるからだと思う。

オレは全員のサポートを行う」

全てを言い終える前に、オフェンス組は行動に出る。暁とジョーカー以外は、【何でお前に従う必要がある!?　しかも緊張感の欠片もない指示だし!】と、言いたそうだったが状況が状況だったので、おとなしく従うようだ。

「ったく。あんなヤツに指図されるなんて……」

ジャックはツバサに悪態をつきながら、２本の極太レーザーと共

に空へ翔け上がる。

『まぁ良いじゃねぇかジャック。こうしてまた暴れられるんだしよ！　……ほら。敵の後ろについたぜ』

「ちっ。しかたねぇ。……せめて、間違ってツバサに当たりそうになる　ぐらいはいいよな」

『ぎゃはははっ！！　そりゃ最高だぜジャック！！　いかにバレナイ様にするかだな！』

ジャックのペインヘルフレイムと、ロックマンたちが地上から弾幕を張る。という策で、敵が地上に着く頃にはおおよそ１００体くらいにまで減っていた。

そして大量の電波体がデリートされた事であたりのノイズ率が高くなり、ウォーロックがスバルにその事を教える。

『スバル！！　ノイズが貯まった。いけるぜ！！』

「わかった！　うぉぉぉ！！　ノイズチェンジ！！　キグナス！！！」

ロックマンの体にノイズが集まる。それが晴れた時、白い羽を持つ白鳥座のＦＭ星人。キグナスに近い姿をしていた。

キグナスノイズは飛行能力を持っているので、ロックマンはジャックをサポートするために飛び立つ。１人では包囲されやすいからだ。

ジャックは地上の戦いの援護を担当している。

「ジャック、加勢に来たよ」

ジャックを包囲しようとしていた敵をソードで切りながら、ロックマンが声をかける。

「おお。サンキュー。そろそろ囲まれそうだったんで困ってたんだ（まぁ、あいつにこれ以上ウサ晴らしできねぇのは残念だけどよ）」

「？　とにかく、周りのヤツを片付けよう」

ジャックの最後の呟きは良く聞き取れなかったが、ロックマンは気持ちを切り替えて、攻撃に専念する事にした。

ロックマンとジャックは互いの隙を埋めるように戦う。その合間に地上を見ると、

ＦＭ星人が居ただけあって、逃げ遅れた隊員と強引に電波変換し、戦力増強を図っていた。

一瞬、ロックマンは地上に戻ろうかと思ったが、その必要はなかった。

ジョーカーは電波変換した者を持ち前のパワーでねじ伏せ、

アシッド・エースは他に電波変換者がでないようにスピードと多彩な攻撃で先手を打ち、圧倒する。

クイーンヴァルゴは、　ハイドロドラゴン　を非戦闘員たちにとぐろを巻くように操作し、

その人たちに近づこうとする敵を倒していき、

ハープノートは、クイーンヴァルゴが仕留め損ねた敵の攻撃をバリアで防御した後、

パルスソングなどでデリートしていく。

ツバサは平たいエアディスプレイを操作しているようだ。ツバサの周りの敵がデリートされていく所をみると、

おそらくそれはキーボードで、バトルカードのデータを入力しているのだろう。

その中で敵の攻撃を回避しているのだから、たいしたものだ。

「っ！！　スバルあぶねぇ！！　後ろだ！！」

ジャックが叫ぶ。慌てて後ろを見ると、敵の剣がすぐそこまで迫っていた。どうやら地上を見ていて気づかなかったらしい。
ロックマンは攻撃を受けるのを覚悟し、とっさに腕を顔の前に交差した。
……いつまでも相手の攻撃がこないので、そっと交差した腕をなおすと、敵がバトルカード：ノイズドウィザードにデリートされていた。

「スバル！大丈夫か！？」

ジャックのこの反応からして、ジャックではないだろう。では誰が……？
ロックマンの疑問はすぐに解決した。バトルカードを送った張本人が電話を掛けてきたからだ。

「よぅ！　２人とも、くたばってないか？」
「え、ツバサ君！？　もしかしてさっきの〈　ノイズドウィザード〉きみが？
それにこの電話…頭に直接聞こえてくる」
「さっき渡したプログラムはそういう機能もあるってこと。エアディスプレイを開くより、戦闘中は邪魔にならなくていいだろ？…まぁ、通信チャンネルを間違えていたせいで、今まで通信できなかったんだけどよ。
ちなみにさっきのバトルカードは察しの通りオレが転送した。…言ったろ。お前らをサポートするって」

地上をよく見ると、みんなの死角に入って来た敵が、エランドやノイズドウィザードによりデリートされていく。みんなは目の前に精一杯で気づいていないようだ。

「ありがとう。よし！　ジャック。はやくケリをつけよう！」
「おう！」

ロックマンはツバサにお礼を言うと、ジャックと声を掛け合い、敵を倒していく。

戦闘開始から約２０分。そこに残っていたのは、反逆者側のウィザードの大将だけだった。もっとも、バトルカード：グラビティステージの効果で地面に押し付けられており、戦闘不能には違いなかったが。

「さぁて、いろいろ話してもらおうかな？」

ツバサの問い（　拷問付きの尋問　）に対してウィザードは途切れ途切れで苦しそうに吐き捨てた。

『な・・にも言わん・・・誰・・・が貴様なん・・・ぞに！！見ていい・・ろ。今日の我・・々の・・・敗北は・・お前た・・ちの敗北・・・に繋が・・るのだ』
「……そうか、気をつけよう。バトルカード、ヘビードーンＸ。」

ズドォォォォン！！！！

音と共に、ウィザードが巨大な岩の塊に押し潰された。

「ツバサ君。もうちょっと粘れば何かしらの情報が得られたと思…」

長官の言葉は突然の拍手に遮られた。しかも上からだ。全員が空を見上げると、巨大なエアディスプレイに電波体が映っていた。

腕はどこかの神のように４本ある。アーマーは白を基調としており、それ以外は黒だ。バイザーはオレンジで、体をはしるラインは金色である。腕が極端に短い大人で無い限り、その電波体は自分達と対して変わらない身長だろう。

拍手が終わり、電波体が高圧的に話しかけてきた。

「初めまして。わが名は　エーテル・フォトン！　ＦＭ星の勇士たちや、地球のウィザードを統べる者。

ＷＡＸＡやサテラポリスの諸君。第１幕ごくろう。楽しませてもらったよ」

「第１幕だと？　それなら、まだこんな事をやるつもりなのか！？」

「あぁ、もちろんだとも……ＷＡＸＡ長官。もうすでに、私の作り出したウィザードが宿主を探しに行った。

さぁ、始めようではないか。貴様らと我ら、ファイブ・エレメントとの戦いを！！」

その直後通信が切れ、しばしの間ＷＡＸＡ日本支部には沈黙が流れた。

「……ツバサ君。急いで今後の対策を練るべきですな」

長官の真剣な声色に応えるように、ツバサは睨んでいた空から目を離した。

「……そうだな。あいつの作ったって言うウィザードの実力もわかんねぇし……。
スバルたちはもう帰りな。もう6時だ。オレらは、これからいろいろ話をしないといけないからな。
あ、ケフェウスはＷＡＸＡにいてくれ。お前にも話に加わって欲しいし、お前の電磁波をどうにかしないと、町に事故が多発する」
「僕も話を聞きます。」
「私も！　……それに、さっきの今だし、帰ってる途中で襲撃されるかもしれないですから」
『……余の電磁波。そんなに強いのか？　スバルの友人とも話をしようと思ったのに……』
「その『たち』にオレは入ってねーよなぁ？　もし入ってたら、今度はマジで【ペインヘルフレイム】おみまいするぞ」

スバルのまっすぐな目。ミソラはそれに加え理由を付け、ケフェウスのショックそうな言葉、それに加えジャックの脅迫ともとれる言葉にツバサはひたいを押さえながらため息をついた。

「スバル。その気持ちは嬉しいが、今は情報の整理が先だ。何かやって欲しい事があったら連絡する。
ミソラ。そんなに不安なら今日はＷＡＸＡに泊まれ。明日までに君の身の保障を考える。
ケフェウス。おおよそ1週間の辛抱だ。何も無くて1週間もあれば、お前の電磁波の影響が周囲に対して少なくする装置ができる。
ジャック。それ脅迫か？　逆に訴えるぞ。…っていうか『今度は』って、やっぱりさっきの戦いでオレの周りにペインヘルフレイムがたくさん来たのは気のせいじゃなかったか……」

自分たちの言い分が数秒のうちに解決され、スバルたちはおとなしく言う事を聞くほかなかった。…ジャックの場合は脅迫で返したが。

『スバル。聞きたいことがあるのだが……』

スバルが、コダマタウン行きのウェーブライナーに乗ろうとした時、ケフェウスが尋ねてきた。

ちなみに、近くにはミソラ、ジャック、クインティア、暁、ツバサがいる。どうやら見送りにきたようだ。

「なに？　ケフェウス？」

『スバルとミソラは、恋仲なのか？』

「はい！？　なな、何でそう思ったの？」

スバルは顔が真っ赤になりながら言う。ミソラも同じくらい真っ赤になっていた。その様子を、暁は微笑ましく見つめている。

ジャックとツバサは、スバルのリアクションに対して爆笑しているようだ。その直後、ジャックにはクインティアが、ツバサにはジョーカーが当て身を食らわせ、2人は気絶した。

その様子を少し笑いながら、ケフェウスは答える。

『うむ。今日の戦いで、ミソラがずっとスバルの事を気にしていたようでな。もしやと思ったのだが、やはりそうだったか』

「え、えっと、ミソラちゃんと僕は友だちで……」

「えー、私はそれ以上でもいいけどな♪　……それとも、スバル君は私のこと嫌い？」

「きき、嫌いなわけないじゃないか。でも、その……こんな人前

で好きって言うのは……恥ずかしいって言うか」

ゆでダコの様なスバルがふとミソラの顔を見ると……クスクスと笑っていた。からかわれたらしい。

「……ミソラちゃん。もしかして、からかってる？」

「えへへ。ばれたか♪」

「はぁ。一瞬本気であせったよ」

「な～んだ。少なくともオレには最初の言葉は冗談には聞こえ……」

暁は、自分の言葉が最後まで続く前に倒れた。そばにクインティアが立ってるのを見ると、彼女の仕業らしい。

ちなみに、こういう時真っ先にからかいそうなウォーロックは、自分は餌食になるまいと黙り込んでいる。

そうこう言ってるうちにウェーブライナーの発車時間がきた。

「それじゃあミソラちゃん、またね」

「スバル君もまたね！」

スバルを乗せたウェーブライナーは走り、とうとうＷＡＸＡから見えなくなってしまった。

その時、クインティアがミソラを横目で見ながら尋ねた。

「……よかったの？　最初のそれ以上でも良いは冗談じゃない。って言わなくて」

「うん。なんか、答えを聞くのが恐くて……。それに、もっとロマンチックな場所で言いたいですし」

「そう。がんばりなさい」

クインティアはミソラに微笑みかけ、ミソラも笑みを返した。ケ

フェウスは、（地球人とは複雑だな）と思いながら、３人はＷＡＸＡに戻っていった。

ちなみに、暁、ジャック、ツバサはそのまましばらくゴミの様に地面に転がされていたそうだ。

第４話　宣戦布告（後書き）

補足として、エーテル・フォトンの４本腕は、
ヒンドゥー教のヴィシュヌをイメージしてください。
１０年以上続くゲームに出てくる
４本腕のムキムキマッチョくんではなく、
割とスマートな感じです。

「・・・オレがゴミのように放置された事に対して何　かないのか？」

おやツバサ。その辺は面白さ優先ってことで勘弁して。この後書きも面白さ優先だし。
それでは、次回からしばらく日常編です。お楽しみに！

「今あるストックの大部分が日常編だけどな。」

・・・・・うっさい。

第5話　3人の転校生（前書き）

今日は午後から外出するので今のうちに投稿しときます。

それでは始まります。

第5話　3人の転校生

「ただいま～」

ＷＡＸＡから家に戻ると、イスに座っていた両親がとんできた。どうやら、かなり心配をかけたらしい。

「スバル。大丈夫だった!?　ＷＡＸＡが何者かに襲撃されたって聞いて心配で。電話しても通じないし」

「あかね。その辺にしてやれ。スバルは、ちゃんとこうして俺たちのもとに戻ってきただろう?」

「ゴメン。母さん、父さん。実は――」

スバルはＷＡＸＡで起こった事を説明した。ケフェウスとの再会。ツバサとの出会い。ウイルスやウィザードとの戦い。……ちなみに、電話が通じなかったのは、ケフェウスの出す電磁波と、戦闘中だったのが理由と思われる事も話した。

「……そうだったの。とにかく、あなたが無事でよかったわ。あ、そうそう。朝に、委員長さんたちがミーティングがあるとかで来たけど、お断りの電話ちゃんとした?　委員長さんすごく怒ってたけど」

「え、……ア――――!!　そういえば、おとい学校から帰る前に、今日ミーティングがあるって言ってたような……。どうしよう。委員長に殺される……」

「スバルも大変だな。たしか昨日も、メールのデータが全部消えたとかでへこんでたような気が……」

大吾のその一言で、スバルは完全にダウンした。スバルの放つ雰

囲気は、絶望一色である。

『ス、スバル。とりあえず寝ようぜ。このまま起きててもしかたねぇしよ』

「そ、そうね！ロック君の言う通りよスバル。さ、さぁ、ロック君。スバルをお願いね。私は大吾さんとちょっと話があるから」

『お、おう！まかしとけ。おふくろ！』

「……明日が恐い。委員長恐い……」

ウォーロックは、そんな事を言ってるスバルを2階に連れて行く。その後ウォーロックは、スバルを寝かしつけるのに3時間ほどかかり、大吾はあかねに、『空気の読めなさ』という点で説教されていた。

――――コダマ小学校――――

スバルは昨日より少しは落ち着いたようで、なんとか学校に来れた。

教室に入ると、ルナが教室の真ん中で腕を組み、仁王立ちしている。……地獄の業火を思わせる怒気、いや、殺気を出しながら、スバルに問う。

ちなみに、クラスの人はできる限りルナから離れ、ゴンタとキザマロでさえ、（おそらく無意識に）1メートルは間を空けている。

「スバル君。　昨日はどこで何をやっていたのかしら？　午後は『ＷＡＸＡのお願い』って事で納得するけど、午前を忘れた理由はなんなのかしら？　……白状しなさい」

口調は穏やかだが……はっきり言って恐い！！

スバルは、返答一つ間違えば命はないという覚悟で、恐る恐る答える。

「……実は、暁さんからのメールが、メールボックスのメールを全て消去してしまって――」

「昨日のミーティングは、私が口頭で伝えました」

言い終わる前にルナにピシャリと言われた。

（終わった……）

スバルは、これから来る悲劇を受け止める覚悟をした。

ガラガラ～

教卓側のドアが開く。先生のようだ。

「みんな。席に着け～。？　白金、星河。お前たち何をやっているんだ？　言っておくが、ケンカはいかんぞ」

ルナはしぶしぶ自分の席へ。スバルは、心底先生と自分の運に感謝した。たとえ一生分の運を使ってしまったとしても、今を生きているだけでいい。とまで思っていた。

「まず、今日はみんなに転校生を紹介する。……といっても、そのうち2人はみんなの知っている子だから、すぐに仲良くなれるだろう。まず1人目、入りなさい」

転校生……なるほど。教室をよく見ると、3つぐらい机とイスが追加されている。そんな事を思っているうちに、1人目が教室に入った。

「……ひさしぶり。また世話になるぜ。ゴホッ」

ジャックだった。……やや具合が悪そうなのが気になるが……。

みんなは驚きや喜びで声をたてる。

「ジャックひさしぶり！」

「いままで何してたんだよ！　心配したんだぜ！？」

などの声が響き、先生もその様子に対し微笑んでいる。

少しして先生はクラスの生徒に声をかける。

「みんな。そろそろその辺にしないと、後の二人が退屈してしまうぞ。……よし。2人目だが、迷惑をかけないように。それじゃあ、入りなさい」

先生は教室が静かになった所で2人目を呼んだ。一方、生徒たちの頭には『？』が浮かぶ。なぜに迷惑をかけるなと？

「はーい！」

元気な声。その時点でスバルは、先生がなんで迷惑をかけるなと言ったのかが分かった。

「はじめまして。響ミソラです！

今回は、新しいドラマで学園物をやるので、本物の学校の事を知りたくて来ました。ずっとと言うわけにはいきませんが、しばらく

お世話になります！
　これからみんなと仲良くなって、新しいお友達がたくさんできれば良いと思っています。よろしくお願いしまーす」

　入ってきたのは、ニホンのトップミュージシャンで、ドラマもこなせる。響ミソラだったのだから。
　男子はもちろん、女子も騒然となる。

「こちらこそよろしくー！！」
「こんど歌のコツ教えてー！」

　などの声が飛び交い、ジャックは両耳を閉じ、先生は収拾のつかない状況に困り果てている。だが、最後の一人を待たせるのも悪いので紹介する事にしたようだ。

「えー、聞こえるものだけ聞いて欲しい。
　最後の転校生は、…え～と、ひ・・おう・・？　ツバサ君だ。仲良くしてやってくれ。……すまんが、名字これで合ってたかな？」

　スバルの席からは、教卓の声はほとんど聞こえない。先生の気まずそうな問いに、ツバサは「合ってますよ」といったようだ。その後ツバサは軽く自己紹介をしたが、ほとんど誰にも聞こえていなかった。
　そして、先生は3人の席を決めて伝えたが、前の方もかなりうるさいのだろう。ジャックは聞き返していた。
　3人が席に着いてもミソラへの質問は鳴りやまず、スバルは今更ながらミソラの人気を実感したのであった。
　その時、ツバサからメールが届いた。周りがうるさいからメールを使ったのだろう。

『悪いけど、放課後に屋上に来てくれ。転校の理由もそん時に話す。ミソラとジャックにはＷＡＸＡを出る前に話したけど、一度集まって話をしたい』

１０分も経たないうちに、騒ぎを聞きつけた恐～い先生に注意され、そのお祭り騒ぎは終結した。その後、授業は何とか進み、放課後を迎える。

「スバル君。どこ行くの？　今日は昨日の分も働いてもらうんだから、勝手に帰ることは許しません」

屋上へ向かおうとするスバルを委員長が呼び止める。確実に委員会の仕事の手伝いに加え、さっきの尋問の続きをするつもりだ。

だが、ちょうどその時ツバサが口を挟んだ。

「あの～、どっちかこの学校案内してくれないかな？　オレ一応転校生だから……。あーできれば、赤服つんつん頭の方で。やっぱ、男同士の方が話しやすいし」

スバルをそのように呼んだのは、お互いに初対面と思わせるためだ。

だがスバルは、（……赤服つんつん頭……）といった感じで軽くショックを受けているようだ。ルナはそんなスバルを見て、ツバサに咎めるような視線を送った。

「案内なら私たちがするわ。大勢のほうが楽しいでしょ。……それとも、『赤服つんつん頭さん』とでないといけない理由でもあるのかしら？」

ルナがわざとその呼び名を使ったのは、ツバサがスバルに対し礼

儀がなっていない事を注意するためだろう。……だが、スバルはさらに沈んだ。

「まぁまぁ。ルナちゃんおちついて。
転校生同士、そしてスバル君も交えて色々話そうって、教室の前で話していたんだから。今日はスバル君はお休みって事で！」

見かねたミソラが助け舟をだす。ところが、これが逆効果だった。

「……転校生……ね。
ジャック、ミソラちゃん、そこにスバル君となれば……サテラポリス関係かしら。
それも、あぶない事件。そして、『教室の前で話』という事は、ツバサ君……でいいわよね？　あなたも関わっていることになる。
おまけをいえば、それだけなら私たちを拒む理由がない。つまり、見られたり聞かれるとまずい何かがある。ってところかしら？」

ルナの洞察力と推理力に、ツバサも含め一同は驚いていた。まさかたった一言でほとんど見破られるとは思ってなかったからだ。
ツバサは他人行儀なしぐさをする必要が無いと判断したのだろう。ラフに話しかけた。

「……一緒に来るかい？嫌なもん見ると思うけど」
「ええ。スバル君と私たちはブラザーなの。ブラザーは、互いを支えあう存在。ブラザーの抱えてるものは、私たちも共有しないとね」
「悪りぃスバル。説得された。こいつら連れて行っていい？」

ツバサがあまりにあっけなく説得されたのをスバルはややあぜんとしながらツバサに答えた。

「う、うん。それはいいけど、委員長が来たらまずい理由って……まさか」
「ああ。連れてきてる。あいつはオレの、立派なウィザードだからな」
「？　あなたのウィザードが、何故私に関係あるの？」
「それはそん時話す。仕事を残すと後々めんど、もとい大変だから、みんなで委員会の仕事を終わらそう」

さらっと本音が聞こえたが、その後ミソラ、ジャックも協力し、委員の仕事（主に書類や教材の整理）が終わった。

――屋上――

「「「「「　終わった～～　」」」」」

委員長を除いた面々が屋上に座ってそんなことを言っている。ちなみに、昨日の戦闘の説明とそれぞれの自己紹介は、書類整理をしながら行われた。
ジョーカーのことは避けたが。

「情けないわね。あのくらいでバテルなんて」
「委員長は指示してただけだからでしょ？」

スバルの不満に対しルナは怒ったように腰に手を当てた

「まぁ、失礼ね！男の子は肉体労働。女の子はデスクワークは基本でしょう」
「なんつー古臭い考え…。たしかに書類の整理をしていたようだが、

自分はほとんどイスに座って、書類運ぶのは同性のミソラに任せてなかったか？」

ツバサの非難がきっかけか、委員長に非難の目が集まりだしたのでミソラがフォローに入る。

「ツバサ君、みんな。私は別に大丈夫だし。……っていうかツバサ君、昨日ＷＡＸＡで私やスバル君のこと名前よびしてなかった？」

ＷＡＸＡという言葉を聞いたとき、ジャックとツバサはなぜか不快な顔をした。その顔のままツバサは質問に答えた。

「……まぁ、学校では一応、君・ちゃんで呼んだ方がいいだろ。下手に名前呼びすると君のファンに殺されかねない。

それと、せめて今日だけは関係ないときにＷＡＸＡの話題を出さないでくれ」

ツバサとジャックはイライラしているようだったが、理由は聞く前にジャックが話してくれた。

「実は戦闘の後、スバルを見送ってる時にオレらは姉ちゃんたちに当て身を食らって気絶したんだ。酷いのはこれからで、気がついたら夜の１２時。その間誰もオレたちの存在に気づかなかったんだぜ!?

おかげで今日はやや風邪気味だし……とんだ災難だったぜ」

「あはは……クインティアさんとの会話が盛り上がって気づかなくて。それに、ケフェウスもなんか考え事してるようだったし」

ミソラの気まずそうな弁解に対し、ツバサは早く話題を変えたいらしく、ため息一つで本題に戻った。

「そろそろ本題にはいるぞ。あらかたの事はさっき話したから、あとはオレらが転校してきた理由だな。
結論から言えば、戦力をなるべく一つにまとめておくことだ。敵の力が未知数な以上、下手に戦力を分散させるよりもリスクは少ない。
それに、昨日ミソラに頼まれた事もある」
「頼まれたって、何をですか？」

キザマロは知的好奇心旺盛な上にミソラファンなので、そこは聞いてくるだろう。ちなみにゴンタは、すでに頭に　？　が浮かんでいる。

「それは、安全な場所の確保だよ。一人暮らしで、さらにあんな奴らが現れたんじゃ、不安だろうからな。仲間が多いココに転校させるのが良いと思ったってわけ」
「ふ～ん。それで、どこに暮らすの？　引越しとかでやりのこしてる事があれば手伝うし、落ち着いたらみんなで顔見せに行くわ」
「オレももちろん行くぜ！」
「ぼくもです！」

委員長の言葉に、ゴンタとキザマロも賛成のようだ。スバルも笑顔で同感と言う顔をしている。
ミソラはよほど嬉しかったのか満面の笑顔を皆に送る。

「ありがとう！　ルナちゃん、みんな！　……だけど、スバル君の家に泊まらせてもらうから、みんなにとっては新鮮味はないかな」

しばしの沈黙。

ミソラは、自分が爆弾発言をした事に気づいてない。ジャックはとばっちりを避けるために数歩はなれて、ツバサはこれから起きるであろう事に内心で愉快気に笑っていた。
最初の矛先はスバルに向いた。

「ちょっとスバル君!!　これはどういう事!?　きっちり説明しなさい!!」

ルナの殺気もまざった問いにゴンタ・キザマロも、主に嫉妬をこめた感情でスバルを睨む。スバルはそんな状況にやや怯えながら弁解する。

「ぼ、僕は知らないよ!ツバサ君。なんでこんなことに!?」
「ん?　この中でお前が1番強いからだよ。強いってことは、それだけ誰かを守れる可能性が増すってことだからな」
(ぶっちゃけ、『スバルのリアクションが面白そうだったから』ってのもあるんだけどな♪)

ツバサの言葉は的を射ているように思えるが、本人が真面目顔ではないことから、考えてる事は想像がつく。スバルが問い詰めようとすると、それを察してツバサが話題を変えた。

「さてつぎは、オレのウィザードの事だな。……ウィザードＯＮ」

ツバサはルナの事をチラッと見てからハンターの中の自分のウィザードを呼び出した。

「ヒッ!」

……ルナは怯えている。無理もない。ジョーカーは去年、委員長をデータに変換してバラバラに分解したのだ。ヨイリーやスバルたちの活躍で再構築されたが、下手をすれば本当に消え去っていただろう。

「大丈夫だよ。オレのウィザードは……ジョーカーは、もうあの頃のジョーカーじゃない。な、ジョーカー」

「そ、そんなこと言ったって……」

染み付いた恐怖はそう簡単には消えない。やはりまずは謝罪から初めて、時間をかけねば、ルナがジョーカーに対し気を許す事はないだろう。

ツバサはひじでジョーカーを小突き、目配せした。ジョーカーはそれに頷きで応える。

『白金ルナ……。辛く、怖い思いをさせてしまってすまなかった』

「……スバル君。ほんとうにジョーカーは……」

言葉少なめだが、誠意は感じたらしく、ルナは不安そうにスバルを見つめる。スバルは委員長の気持ちを察して力強く答えた。

「大丈夫！　ジョーカーは僕たちの仲間だよ」

『そうだぜ！　昨日の戦いだって、こいつがいたから助かったってのもある。……しゃくだが、もしいなければもう少し手こずっていたかも知れねぇ』

『ポロロン。少しは素直になってきたようね。……ロックちゃん？　クスクス……』

『うるせぇ！！　それに、お前までちゃんをつけるんじゃねぇ！』

ウォーロックとハープの会話に、みんなは笑う。その笑顔の中には、疑念という言葉は消え去っていた。ジョーカーも、気のせいか少し表情が穏やかになっている。

放課後の屋上。笑顔と笑い声と共に、時は過ぎ去っていく。

第5話　3人の転校生（後書き）

実は、今回の転校生の紹介の順番にも意味はあります。といっても、かなり後にならないと意味は明かしませんけどね。

次回もスバル君が大変（？）な目に会います。

お楽しみに！！

それと、次回でようやっともう1つのコラボ（ｘｘｘＨｏｌｉｃ）の要素が出てきます。

第6話　メテオGの真実（前書き）

前回「もう1つのコラボ人物が出る。」と書きましたが、直接ではなく『あの人』扱いです。

第6話　メテオGの真実

その後、スバルは今後のスケジュールを写させてもらった。強制下校時間になったので、先生に見咎められ7人と7体は帰路につく。そんな中、キザマロがツバサに質問した。

「そういえばツバサ君。さっきの話だと、昨日の戦いではものすごいスピードでキーボードを打ったという事になるんですが、誰かに習ったんですか？」

「あ～、それはタネありでね。実は、よく使うであろうバトルカードをショートカットキーに登録して、アルファベットキーとＥＮＴＥＲキーの2ボタンで使えるようにしたってわけ」

「なぁんだ。話を聞いたときはスゴイと思ったけど、そんなもんなのね」

『まぁ、こいつは大抵道楽する準備はいいからな』

「ぐぅ。ルナ、ジョーカー。お前らなぁ……。こちとら攻撃を避けながら打ちこんだんだぞ？　それだけでも十分すごいと思ってもよくね？」

そんな様子にスバルは苦笑しながらツバサをフォローする。

「でも、ホントにツバサ君には助けられたんだよ。僕の時も、斬られそうになった時に助けてくれたし」

その後も、人間もウィザードも他愛のない話をしながらそれぞれの家へ帰っていく。

だが、ツバサとミソラはいつまでもスバルと一緒だ。ミソラはス

バルの家に泊まると分かっているが…。

「……ツバサ君。いちおう聞くけど、泊まる家は？」

「もちろんスバルの家。と言っても、今日だけだけどな。いまからサテラポリスに帰るのも大変だし、何より大吾と一度話したかったんでね。」

「えぇ！？　うちに！？　っていうかツバサ君、父さんをしってるの？」

「……ああ、ちょっと……な。直接会って話した事はないんだが、説明がめんどいからパス」

――星河家――

「ただいま～」

「おじゃましまーす！」

「お世話になります」

3人はあかねに挨拶をする。……どうやら大吾は仕事のようだ。

「おかえり～。ミソラちゃん久しぶりね。それに、あなたがツバサ君ね？　サテラポリスの人から聞いてるわ。2人とも、自分の家だと思ってくつろいでね。

それとそろそろ晩ご飯の時間だから、3人とも手を洗ってらっしゃい」

3人は手を洗い、食卓につく。その時ちょうど大吾が帰ってきた。

「ただいま～。……おっ良い匂いだな。今日はカレーか？」

「お帰りなさい大吾さん。ええ、ミソラちゃんが来た事と、ツバサ君がスバルの新しい友達になったお祝いよ」
「ん？　きみがツバサ君か。初めまして。スバルの父の、星河大吾だ。息子ともども、よろしくな」
「……会ったのは初めてだけど、それ以外ではあるでしょ」
ツバサの口調と声に、大吾は覚えがあるようだ。
「なるほど。きみが……とりあえず、お礼を言わせてくれ」
ツバサは、礼はいい。と言わんばかりに手首を横にふる。スバルは気になっていた事を聞いた。あかねとミソラは不安そうに成り行きを見ている。
「父さん。ツバサ君とはどこで……？」
「ん？　……メテオGの中だ」
「え！　それってどういう事！？」
「スバル落ち着け。俺も詳しい事は知らない。ただツバサ君が、『スバルが、自分に何ができるか思い悩んでるから励まして欲しい』
と言ってきて、気がついたらお前と会っていた」
「僕が……思い悩む……？」
その時、やっとツバサが口を開いた。
「……あるだろ？夢の中で。ジョーカーを倒した後、大吾と、アシッド・エースと、ジョーカーと会わなかったか？」
「あるけど……夢は見たいものをみれるものじゃ……」
「暗示。願望。そういったものでも、夢は十分に変化する。だが、今回の場合はそんな不確定なものじゃない。

スバルは、暁のあとをついで最後まであきらめないと誓ったが、自分に何ができるか思い悩んでいた。……そうだな？」

スバルは無言で頷く。

「……オレはその気持ちを察して、３人をお前の夢に出したってわけ。……ある人の協力でね」

「ある人って誰？　そもそも、夢は偶然みるものなんじゃないの？」

大吾も『ある人』の部分は聞いていないらしく、ツバサに視線を合わせる。ツバサは昔の事を思い出すように目を閉じて話し出した。

「……この世に偶然は無い。あるのは必然だけ。……その『ある人』が言った言葉だ。対価を払えば大抵の願いは叶えてくれる。今回のもそれだよ。

だいたい、さっきも言ったろ？　今回の場合は不確定なモノじゃないって。だけど、けっこう励まされたんじゃねぇか？　ジョーカーなんてお前の事……」

『ツバサ！　それは言わなくていい。』

ツバサはニヤッと笑って何かを言おうとしたようだが、ジョーカーが遮ったので何を言おうとしたのか分からなかった。

ジョーカーが微妙に照れて見えるのはスバルの気のせいだろうか。ツバサも、「ハイハイ」と言いつつ、スキあらば誰かに言う気まんまんだ。

その後あかねが両手を合わせるように【パンッ】と叩いた。

「……つまり、ツバサ君もジョーカーさんも、スバルを励まそうとしてくれたのね？　ありがとう。さぁ、そろそろ食べないと料理が冷めるわ。重い空気はこのへんにして、ここからは楽しく食べましょう」

そんな感じでうまくまとめたので、一同は食事を再開した。だが、その場をおさめたあかねの一言で、食卓は再び騒然とする。

「そういえば2人とも、今日はどこで寝るの？」
「え？　そりゃあやっぱりミソラちゃんは母さんの所に――」
「はーい！　私はスバル君の部屋がいいでーす！」

スバルは口の中の物を吹き出しそうになり、少々むせながらミソラに尋ねた。

「なんで!?　普通ここはミソラちゃんが母さんと寝るべきでは!?」
「……スバル君は、私の事が嫌いなの？」

上目使い＋悲しげな声で言われて、スバルはしどろもどろになる。……ミソラの演技と気づかなかったのは、スバルとウォーロック、そしてジョーカーくらいだろう。

「きき、嫌いじゃないよ！　だけど、やっぱり同じ部屋というのはまずいというか……」
『星河スバル。同室ぐらい良いだろ。たしか人間は、女を泣かせたら犯罪なのだろう？』
『そうだぜ。スバル。ここにはツバサもいるんだ。暁に知られたら逮捕だぞ？』

ジョーカーとウォーロックの言葉に次いでツバサはにっこりと笑顔で提案する。

「それじゃあ、スバルがミソラに変なことをしないようにオレが見張っとくよ。それなら文句はないよな？」

「……はぁ。もういいよそれで。それじゃあ、ミソラちゃんとツバサ君が僕の部屋に寝るって事で――」

「（ちぇ、からかいごたえがねぇな）」

そのツバサの小声を、スバルは聞き逃さなかった。

「……もしかしてツバサ君。僕の事からかってる？」

「それよかジョーカー。なんでお前、女を泣かせたら犯罪だと？」

そばで、「ごまかすなー！！」という怒りの声が聞こえる。ジョーカーはその様子にため息をつきながら答えた。

『……昼間にやってたドラマでそんなことを言っていた。……違うのか？』

「い、いや。犯罪にならないが、一応あってはいるかな。泣かれるとこっちがオロオロするし……」

（それより、）

（（（（（（（（（その時間帯のドラマって、一番ドロドロしてんだけど！！！）））））））））

ジョーカーの発言で全員が内心でツッコミ、スバルもツバサに対し追及する気がうせた様だ。むろん、それを見越してツバサはジョ

ーカーに質問したのだが、昼ドラで聞いたとは思ってなかったらしい。

その後、なんとなく気まずい空気が流れたまま、就寝の時間を向かえた。

「それじゃあ、2人のふとん敷くから手伝って」

「……わたしスバル君の布団に寝ていい？」

男子2名の動きが止まった。

「ミ、ミソラちゃん。さすがにそれはNGでしょ。ほら、マスコミ的にまずいんじゃないの？」

「今回はオレも同感。たしかにスバルは素直だからからかうには面白いが……さすがにねぇ……」

「……ふふ。冗談だよ。さすがにツバサ君がいるときにはしないよ！」

スバルはほっとしていたがツバサは……。

（逆に言えば、オレがいなかったら一緒に寝る気なのか……？）

と、心の中で不安に思っていた。その後布団を敷いていたのだが、スバルが敷いていた手を止めた。

「あれ？」

「どうした？　スバル」

「うん……。二人分の布団が敷けなくて……」

スバルの部屋は広い方ではない。したがって、布団2枚を敷くのはさすがに厳しい。そのときウォーロックがあくびをしながら提案

した。

『それならツバサかミソラが、大吾かおふくろの所に寝ればいいんじゃねぇの？』

「まぁ、おのずとそうなるだろうね。…それじゃあ、オレが大吾の所に寝るよ。

（ジョーカー、ミソラがスバルの布団に入ろうとしたら、なるべく双方にケガがないように引き離せ）」

『（うけたまわった）』

ツバサがジョーカーとコソコソと話しているのを見てスバルは2人に尋ねた。

「？　ツバサ君。ジョーカー。何を話してるの？」

「なんでもねぇよ。そんじゃあおやすみ。実は昨日、深夜会議でまともに寝てないんでね」

「うん。おやすみ」

階段を下りながらツバサは呟いた。

「……そろそろやつらが動き出す頃かな？」

そして星河家は、静かに眠りについた。

――――某所・同時刻――――

『……では、最初は誰が行く？』

誰もいない廃ビルに声が響く。……いや、正しくは『人は』いな

いと言うべきだろう。

『オレはパス。そのロックマンってのがどれほどの実力を持ってるか分かんねぇんじゃ、狩る気がしねぇ』

『あたしも～。気分が乗らないし。大体、あんな高慢ちきなエーテルに従うなんてやな感じ。……まぁ、私らを生み出してくれたのは感謝するけどね』

『そう言うな。ビャッコ、スザク。ロックマンたちはいずれ戦う相手ぞ。油断は禁物じゃ……』

『だけどよ～ゲンブのじーさん。モチベーションがなければ勝てるもんも勝てねぇんじゃねぇの？』

ゲンブと呼ばれた電波体は嘆息をつく。

『ならばワシが行こう。ワシがあやつらと戦い、勝てば良し。負ければおぬしらがやる気を出す。……そういうことで良いな？　セイリュウ』

『ああ。たのむ。……エーテル様の預かり物を忘れるなよ』

『分かっておる。あのプログラムは切り札になりうるからの。……それに、負ける気もさらさらない。

ワシは、ワシの基となった特性に従い最強の守りをもっておるのだからな。では、行ってくる』

セイリュウへの返答の後、ゲンブは夜空を翔けていく。それを見送りながらセイリュウは呟いた。

『ゲンブの特性……〈　万物を受け止める防壁の大地　〉か。

まぁ、私たちの元となった存在の特性をフルに高められた存在が我らだからな』

――翌日・星河家――

「うわぁぁ――――――――!!!」

少年の絶叫のもと、星河家は盛大に朝を迎える。ツバサと大吾、あかねが2階に上がると、そこにはスバルの布団にいつの間にか入ってるミソラの姿が。

ちなみに本人はすやすやと寝息を立てている。

「……さ～て、あかね。そろそろ朝ご飯の時間だな。下に降りようか」

「そうね。大吾さん。やっぱり若い者同士のほうがいいわよね」

（（　逃げたな……　））

ツバサは呆れ、スバルは子犬が捨てられたような顔になりながら、2人が1階に下りるのを見ていた。

ツバサはため息をついて、スバルの方に顔と声を向けた。

「あーなんつうか、災難だったな、スバル。……ジョーカーに見張りを頼んだんだが…」

言いながら周りを見渡すと、ジョーカーが部屋の隅にたおれていた。近くにハープがいるのでおそらく……。

「あー、ジョーカー。大丈夫か?」

『……ツバサか。ハープが、ミソラの邪魔はさせないと言って攻撃を……』

（やっぱりか……）

途中で気を失ったジョーカーの肩に、ツバサは同情の気持ちを込めて手を置いた。

再び部屋を見渡すと、スバルはなんとかミソラを起こさずに抜け出そうと神経をフルに使い、ミソラは幸せそうな顔で寝ている。

ハープは……おそらく寝ているとは思うが、うかつにスバルとミソラに近づいたらジョーカーの二の舞になるだろう。

ウォーロックはそういうことにはうといので、のんきに寝ている。

「……やっぱりオレ、まめにこの家に来た方がいいのかな？」

ツバサの呟きを聞く者はいない。

その後、〈アラームを最大音で鳴らす〉というツバサの作戦でミソラは起き、スバルを開放するように頼んだ。

そして、やっと3人は気まずい朝ご飯にありついたそうだ。…スバルは朝にも関わらず満身創痍だったが……。

第6話　メテオGの真実（後書き）

読みにくいところがあったらドンドン言ってください。できる限り早く直します。
感想、評価も気軽に送ってくださいね～。

第7話　教科書の歴史（前書き）

今回はスバル君が委員長に尋問にあいます。ちなみにツバサもまきぞえです。

「・・・お前オレにどんな恨みがあるんだ?」

面白いから!それではお楽しみください！

「・・・・。」

第7話　教科書の歴史

――――コダマ小学校――――

「おはよー！」
「ち～っす」
「おふぁよー」

３人は学校に着いた。スバルはとっても疲れているようだが……。
朝からふらふらしてると嫌でも目に付く。そんなわけで、委員長たちが話しかけてきた。

「どうしたの？　スバル君？　なんか疲れてるようだけど」
「それが――」

スバルが言う前にツバサはスバルの口を塞いだ。

「（何するの、いきなり！）」
「（そう怒るなってスバル。考えてもみろ。今ここで昨日の事を言ったらおまえ……委員長に殺されるぞ）」
「（ッ！！　なるほど！　危ないところだった。ありがとうツバサ君）」
「（なぁに、困った時はお互い様だろ。正直、オレも恐いからな）」
「……あなたたち、小声で話すの下手ね。そんなに私に言いたくない事があるのかしら？」
（（ッ！！　地獄耳！！　））

その後、２人は先生が来るまで恐怖（　ルナの眼光　）と戦い続

けたそうだ。
　ちなみにジャックは、ご機嫌だがやや複雑そうなミソラと、やつれたスバル。
スバルを同情するツバサを見て大体の事情を察したようだが、委員長に告げ口はしなかった。
　授業直前のスバルとツバサは虚ろな様子で呟いた。

「オレたち……耐え抜いたな」
「うん……」

　そんなわけで授業が始まった。ちなみに、今の時間は歴史だ。

「……というわけで、今から約１６０年前に起きた凶暴なネットナビたちの反乱は終わり、それに関与した科学者数名が逮捕され、永久に牢獄から出られず、誰とも話すことはできなかったという」
「…なんか酷いですね。永久に出られないばかりか、誰とも話せないなんて」
「そうだな、最小院。……だが、それだけの事をしたから、教科書にのってるわけだ」

　スバルはノートに書き写しながら話を聴く。

コロッ

　消しゴムが机から落ちたのでそれを拾おうとすると、チラッとツバサの横顔が見えた。その顔はひどく苦しげで、同時に悲しげな目をしていた。

キーンコーンカーンコーン！

その時ちょうどチャイムが鳴る。

「……っと。それでは今日の授業はここまで。みんな、気をつけて帰るんだぞ」

今日は午前だけなので、算数、理科、歴史で終わりだ。生徒と先生は礼をし、みんなはそれぞれこれから何をするか話している。

「オレん家でゲームしようぜ」とか、「これからサッカーやるやつ手あげろ」

などの会話が飛び交う。

一方スバルたちは……。

「さぁて、午後からは何にもないし、朝の続きといこうかしらね。二人とも？」

（（まだ根に持ってる！））

……追い込まれていた。

長い沈黙の中、ツバサはルナの気を逸らす作戦に出た。

「そういや委員長、今日はミソラちゃんに対してクラスの男子の反応が薄い気がするんだけど、なんかした？」

（うまいよツバサ君！　このまま委員長の気がそれれば……）

「……えぇ。ミソラちゃんが私に、「へんな事された」と相談してきたら、へんな事をしてきた人にはいかなる制裁もじさない。っと、クラスのみんなに言ったら素直に聞いてくれたわ」
（（（（（それは脅迫だよ！）））））

今度は周りにいた全員が内心でツッコミをいれる。

「……さて、時間稼ぎは終わりかしら？　あいにく私は、気がそれるというのはないわよ？」
（（ゲッ、狙い読まれてる！））

2人の内心での狼狽（ろうばい）は見事にハモった。スバルは目の前の鬼、もといルナに怯えながらルナが食いつきそうな話題を考えた。

「あわわ……そういえばツバサ君。さっきの歴史の時間で苦しそうな顔してたけど、何かあったの？」

スバルの苦し紛れの質問に当の本人は顔がこわばり、ルナは食いついた。

「あら、具合が悪いなら保健室行って来なさい。話はその後でもいいから」
「それじゃあスバルも付き添いで――」
「それはダメ。どっちもいなくなったら、何があったか分からないじゃない」
「委員長。いちおう聴くけど、何があったか聞かない選択肢は？」
「ないわね」

きっぱりしたルナの返事に観念し、二人はうなだれ、話し始めた。

「……なるほど。それであんなに話そうとしなかったのね。それならそうと先に言いなさい。いちおう確認だけど、本当にミソラちゃんの方から入ってきたのね？」
「それは……僕その時寝てたし」
「オレは大吾の所に寝てたし」
「ようするに分からないと……。ジョーカー、あなた見張りやってたんでしょ？　どうだったの？」
『それはミソラが……スバルがミソラに来いと言った』

その一言に、スバルは朝（両親の現実逃避）よりショックな顔。ジャック、キザマロ、ゴンタは唖然。ツバサも驚いたが、ふと後ろを見ると殺気を放つハープがいたので、ジョーカーはその殺気に当てられたのだろう。

（ジョーカー、とりあえず謝っとく。ゴメン）

ツバサの心の中の謝罪をよそに、委員長の怒りのボルテージは上がっていく。

「スバル君、ツバサ君。……人ってどんなに悪い事しても、正直に言って、ちゃんと謝れば大抵は許してもらえるの……。けど、あなたたちは正直にすら話してないじゃない。……覚悟はいいわよね」
（（疑問系にすらなって無い！！　……僕／オレたち、無事に帰れるのかな……？））

その後、二人は地獄を体験しましたとさ。

そして下校。委員長たちとは別れ、スバルの近くにはミソラとツ

バサがいた。

「はぁ。酷い目にあった。……ジョーカー、一つ聞いていい？」

『なんだ？　スバル』

「何で今日、僕がミソラちゃんに来いなんて言い直したの？」

『ウ、ウム。何やら後ろに殺気を感じてな』

「殺気って誰から？…まさか、ファイブ・エレメント！？」

「いや、たぶんそれはないと思うけど、逆らいがたいってのはあるかもな」

「なにそれ。って言うかツバサ君、なんでこっちに？　……まさかまた泊まる気なんじゃ……」

「あいにく、こう見えてオレも忙しいからそう何日も泊まってられん。ケフェウスから頼まれた装置もまだ完成してないしな。……でも、昼飯をスバルの家で食えば、それだけ飯代浮くだろ？」

ツバサはそう言いながら親指と人差し指で円をつくった。……ようするに飯代をケチりたいらしい。

（まぁ、朝の気まずい家族の空気見たら、ほっとけないしな。……今は春だし、アノ手を使うか）

（……ツバサ君って、けっこう図々しいのかな？）

（う～ん。ハープに、『これを機に2人の距離を近くするため』って言われたけど、なんか違う気がする。2人が嫌な思いしたし……）

上からツバサ、スバル、ミソラがそんな事を思ってる間に星河家に着いた。

――――星河家――――

「「「ただいま～」」」
「おかえりなさい」

……朝に比べるとある程度気まずさは解消したようだが、まだ多少空気が重い。ちなみに大吾は仕事に行っている。スバルたちもその理由がだいたい分かり、その理由が自分たちというのもあってなかなか互いに声をかけられないでいた。
その時ツバサが案の定といった様子でため息をついた後、先程考えた計画を話し出す。

「そういえばさ、今って桜がきれいな時期だよね。満開から少し過ぎて、花びらがヒラヒラ舞い落ちる所とか。
そんなわけで、今度大吾さんとあかねさん、そしてオレらが休みの日に花見に行くってのはどう？　たまにはパーっと騒いで気分転換しないと体も心もこわれちまう。……なっスバル？」

ツバサは意味深なウインクをし、スバルはその意図に気づいたようだ。

「え？　……そ、そうだね！　あ、委員長たちも呼ばない？　せっかくなんだから皆で行った方が楽しいだろうし。ね、ミソラちゃん？」
「うん！　私もさんせい！　スバル君のお母さん、ぜひ行きましょうよ」（うまくスバル君と二人きりになった時に、勝手な事してゴメン。って謝らなきゃ）

3人がふざけ気味ではなく、真顔で迫るのであかねは少し引きな

がらイスから立つ。

「そ、そうね。花見いいわね。最近行ってないし。えーっと、大吾さんと私の休みは……」

あかねはカレンダーの元に行った。仕事のスケジュールをチェックしに行ったのだろう。その間にスバルたちは一斉にため息をついた。

「ふぅ。助かったよツバサ君。もしかして、これを言うためにうちに寄ったの？」

ツバサは「まぁな」と言いながら、両腕を上に伸ばしていた。いままで空気が重苦しかったので、体をほぐしているのだろう。

『なぁんだ。それならはやくそう言えよ。オレまで柄にもなく黙っちまったじゃねーか』

『あらウォーロック、あなた空気を読めたのね。これもスバル君としばらく一緒にいた影響かしら』

『いや、むしろなにか悪質なウイルスに引っかかったのかもしれん。いちおう、ツバサかヨイリー博士に診てもらったほうが良いだろう』

ハープとジョーカーにからかわれ、ウォーロックはマジ切れ状態でウィザード3体の追いかけっこ開始。その様子を見てスバルとミソラは苦笑い。ツバサはコーヒーを飲みながら笑いを堪えている。

あかねもちょうど戻ってきて、ウィザード3人に注意した。騒がしいのが理由だと思われる。

「こら！　3人とも家の中で騒がない！　……よし。それでいいわ」

3人がおとなしくなったので、あかねはみんなの休日が重なる日をつげた。次の日曜日らしい。

「日曜日か……。スバル、ミソラ。土曜日に頼みたい事があるんだけど」

「なに？　ツバサ君」

「じつは、そろそろオレの家からいろいろ持ってこようかと思ってな。ＷＡＸＡには生活必需品（ひつじゅひん）ぐらいしか持ってきてないんだよ。だから、荷物を運ぶのを二人に手伝ってもらおうかと思ってね。

あ、家からＷＡＸＡへは隊員さんの車で運ぶから、オレらが運ぶのは敷地（しきち）の外までででいいからさ」

「僕はかまわないよ。いろいろ君にはお世話になってるし、そのぐらいなら」

「私もいいよ。一人だと、運ぶのが大変だろうし」

『オレも大歓迎だ。ツバサの家には何か面白そうなのがありそうだしな』

「面白って…ほとんど電子機器や部品ばっかだぞ。……けど、ありがとな。

さてと、そろそろサテラポリスに戻るよ。ぶっちゃけ仕事が山積みだから帰りたくないけど、終わらせないと花見いけねぇし」

「あら、お昼ご飯は？　せっかくだし、食べていきなさいよ」

「う～ん。気持ちはありがたいし、最初はそのつもりだったんだけど…また今度にするよ。適当にどっかでパンとか買う。それじゃあ、また明日学校でな」

「「うん。またね」」

スバルとミソラの声を背に、ツバサは星河家を出るなりエアディスプレイのキーを打ち始める。

（ここでもある程度は終わせるからね。え～と、ここのプログラム

は……）

その後、エアディスプレイに夢中で水路に落ちてずぶ濡れでＷＡＸＡに行き、暁に爆笑されたことがきっかけで２人のケンカがあったらしい。

第7話　教科書の歴史（後書き）

次回はＥＸＥキャラが出ます。

第8話　監視役（前書き）

前の話にも書きましたが、ＥＸＥキャラ登場です。敬語は直しました。

第8話　監視役

――――土曜日・星河家――――

午前7時、ツバサは星河家に来ていた。いろいろと不安な事があったからだ。

「……またスバルが騒がないか見に来たけど、今日は大丈夫だったようだな。さて、待ってんのも暇だし、入るか」

『……少し早すぎるのではないか？　まだこんな時間だ。これでは朝ご飯をごちそうに来たようなものだ』

「え～!?　だめなの!?」

『ツバサ……。少しは自重というものを…』

ジョーカーが言い終わる前にツバサはチャイムを押した。ジョーカーはため息をついている。

ピンポーン！

「はーい。スバル、悪いけど出て」

「わかった」

家の中でそんな会話が聞こえる。足音が近づき、ドアが開いた。

ガチャ

「よぅ、おはようスバル。今日は良く眠れたようだな」
「ツバサ君！　こんな朝早く来るなんて」
「はは……こないだみたいな事はゴメンだからな。なんかあったらフォローしようと思って。これ以上あの眼光は浴びたくないんでね」

ようするに委員長が恐いらしい。スバルもルナの恐さを思い出して苦笑いを浮かべる。

「そうだね。あーとりあえず中入る？　これから朝ご飯なんだ。よかったら一緒に食べない？」
「おっうれしいねぇ。実はけっこうお前の母さんの料理楽しみだったんだ」

ジョーカーは、『（最初からそのつもりだっただろう）』と小声で言っているので、ツバサは内心で毒づいていた。

朝食も食べ終わり、3人は少し休憩してから行く事にした。
ツバサは仮眠と称して横になったが、なかなか起きないのでジョーカーのゲンコツが炸裂。頭には見事なたんこぶができた。
その後スバルたちはウェーブライナーでツバサの家へ向かう。

――――オダカサン――――

「へぇ～ツバサ君の家って、オダカサンにあったんだ～」

ミソラがそんな事を言っている。
ちなみにオダカサンとは、ＴＫ（トウキョウ）の郊外中の郊外。つまり、コダマタウンより田舎ということだ。
スバルたちはツバサの家に向かいながら話をしている。
「いいとこだろ？　緑も多いし」
ツバサはまだ少し頭が痛いらしく片手で頭を押さえている。スバルはそれを少し心配しながら周りの景色を見る。
「ほんとだね。のどかというか、なんだか落ち着く」
『ケッ！　オレにとっては退屈そうな町に見えるがな。おいツバサ、おまえよくこんな町に暮らしてられたな。……まぁ、緑がたくさんあるってのは悪くねぇけどよ』
その言葉を聞いたとき、みんなの動きが止まった。
『？　おい。なんで立ち止まってんだ？早く行こうぜ』
「あ、ああ……そうだな」
（（（（（まさかあのウォーロックから、自然を愛する的な発言を聞くことになるとは……））））
そんな会話をしているうちにツバサの家に着いた。
「「『　こ、ここがツバサ君の家！？　」」』
スバルとミソラ、ハープは驚いていた。その家の、あまりの平凡さに。あのツバサの家ということで、多少周りと違うのではと思っていたのだろう。

ちなみにウォーロックは、余りの平凡さに爆笑していた。

「そう。……お前らおおかた、平凡だなぁ。とか思ってんだろ。ウォーロックなんて笑ってるし…」

そう言いながらツバサは家のカギを開け、ドアを開いて入っていった。スバルたちも慌ててツバサの後を追う。

家の中は薄暗い。暗くてよく見えないが、廊下にも機器があるようだ。歩く時注意しようと思っていたスバルの考えはムダに終わった。

「ただいま〜」

パッ！

その理由は、ツバサがひと声かけただけで電気がついたからだ。

「すごい！　どうなってるの？」

「おもしろ〜い！」

スバルは技術面で興味を持ち、ミソラは純真に楽しんでいるようだ。ツバサが説明しようとしたが、澄んだ声に遮られた。

『……電気をつけたのは私よ』

声のしたほうを向くと少女がいた。髪は長く、蝶のような髪飾り

をつけて瞳は緑色。背や歳はスバルたちと同じくらいだろうか。

「き、きみは……だれ？」

『……私はアイリス』

「えっと……ツバサ君のウィザード？」

『ううん。正式なツバサのウィザードというわけじゃないわ。……それと、私はウィザードではなくネットナビよ』

『え？　ウィザードではなくネットナビなの？』

「ちょっとまって。それ以前にアイリスってたしか、２００年前にワイリー博士が創ったネットワークシステムの名前じゃなかった？」

『それは……』

急にいろいろ質問されてアイリスが戸惑っているので、ツバサはその場をはぐらかすことにした。

「それより、とっとと荷物を家の外に運ぶぞ～。本来の目的忘れるな～」

「あ、うん。……いちおう確認するけど、もしかしてこの家にあるもの全部運ぶって言うのはないよね？」

玄関から見ただけでもかなりの数の機器がある。家中の物を運ぶとなると、夕方までかかりそうだ。

「そんなわけないだろスバル。必要最低限の物だけだよ。はい、こっちこっち～」

ツバサが先行し、スバルとミソラは足元に注意しながらついていき、アイリスはツバサに追いついた。

『……ありがとう。はぐらかしてくれて』

「別にいいよ。……オレたちは互いに、もうこの世にはいないはずの存在だからな。話したくない事や隠したい事は、隠すのが基本だ。そもそもアイリスの場合、急にいろいろ話しかけられたからだろ？」

『……そうかもしれない』

「この世にはいないはずの存在ってどういうこと？」

ミソラはミュージシャンだけあって耳が良い。

ツバサはため息をつき、アイリスを見た。話していいかを目で聞いたのだ。

アイリスはその意図を察し頷いたので、ツバサは、スバルたちと荷物を玄関の外まで運び出しながらみんなに話す事にした。

「まずはオレからね。

……昔、人工的に人間を非物質、例えば電波とかだな。そういうのに変えるって言うバカげた計画をたてる科学者集団がいてな。各地から歳も年齢も問わず様々な人がさらわれ、人体実験が行われた。……何Ｈｚ（ヘルツ）の電磁波にどのくらい耐えられるか。とかな。

たくさんの人が死んでいき、オレの実験中に事故が起こった。装置のリミッターが効かなくなり…暴走した。

その結果、実験で生じた莫大（ばくだい）なエネルギーが体になだれこみ、肉体は物質でも、電波でもない。感情……心にエネルギーを肉付けしたような存在となっちゃってね。

その直後は肉体が崩壊しかかっていたんだ。１箇所に、かつ長期的に大量のエネルギーが同じ形でとどまる事はありえないからな。

……オレはあのまま消えるはずだったが、デューオに救われた」

「あの、デューオって何？」

ミソラの質問にはスバルが答えた。

「教科書によるとデューオってたしか、２００年ぐらい前に地球に来たやつで、地球を滅ぼそうとしたやつだよ」

『……なんか、昔のオレらを思い出すんだけど』

『まぁ私たちも、もともとＦＭ王の命令で地球を滅ぼしに来たわけだしね』

「あ～そういやそうだったな。けど、地球を気に入ってもらえたようでこっちとしては嬉しい。

……話を戻すぞ。スバルの言う通り、デューオは約２００年前に地球に来て滅ぼそうとした。だが、１人の少年とそのナビによって、世界は救われた。

その後デューオは秘かに地球を見守り続ける事にしたようだが、地球の通信環境が発達したおかげでデューオは自分の姿を隠しづらくなった。

そこで、自分の代わりに地球を監視し、地球で起こった事を報告する役目をもつ者としてオレに目をつけた」

「えっと、その前に、なんできみが消えなかったのかが分かんないんだけど……」

今度はスバルが質問し、ツバサはジョーカーに機材を渡しながら答えた。

「あ～それは、デューオは内包するエネルギーが体から出ないように膜を作ったんだ。

まぁ、筋肉を覆う皮みたいなもんだな。その皮はウィザードに似てな、周波数を変えれば電波化も物質化もできる。

それからオレは、というかオレとアイリスは、デューオの指示でこの星の監視をやってるってわけ。
少なくとも内包するエネルギーが無くならない限り、オレは死ねない。
まぁ、元々が人間だったってのもあって、食べ物は食べられるけどね」

「それで、目付け役なんだ……」

「そう。おまけを言えば、前に言ったアウシュ・イヴル研究所ってのはこのことだ。
ちなみにその時周辺で流れた噂は、【実験で歳もとらず、死なない人間が現れた】……だとよ」

『それにしても、ひっでぇ実験だな。ちょーむかつくタイプの地球人だぜ。オレがその時代にいたらオレがぶっ潰してやりたいところだ！』

「サンキュー、ウォーロック。そう言ってもらえただけで嬉しいよ」

「えっと、それじゃあ……アイリスも？」

ミソラの質問にツバサは話そうとしたが、アイリスは手で制した。
自分で話すらしい。

『……私はツバサより前に世界の監視役になっているわ。
私を作った科学者は、才葉シティという町のインターネットをさんざん破壊した電脳獣という存在を使って社会に復讐しようとしていたの。……本当なら私は、お兄さんと共に死ぬはずだったけど、ツバサ同様デューオに助けられた。

……デューオにとって、私は誰からも死んだと思われていた存在だったから、監視役には都合がよかったんだと思う。
ウィザードではなくネットナビである理由は、再構築の副作用のようなモノで、ナビからウィザードへバージョンアップする事ができなくなったからよ』

「あの、お兄さんって……」

スバルの気まずそうな質問に、アイリスは安心させるように微笑みながら言った。

『大丈夫。わたしほどはっきりではないけど、たしかに兄は存在してる。
……スバルさん、あなたが受け取ったエンシェントＰＧＭは、過去の強力なナビのデータを保存しているモノというのは知ってる？』
「うん。ツバサ君に聞いて知ってるよ。……もしかしてその中に？」

アイリスは頷きながら、ツバサに書類の山を押し付けて説明を始めた。そばでうめき声が聞こえるが助ける者はいない。

『うん。兄さんは、カーネルは、あなたの持つエンシェントＰＧＭの中にいる。
最初は、デューオの力をもってしても、兄さんは従来のサーバーの中ではかろうじて生きている状態までしか回復できなかった。
……そして、テクノロジー面での環境の変化により、徐々に兄さんのデータが劣化、
つまり崩壊してきたの。それをツバサがエンシェントサーバーの中に移して崩壊を防ぎ、
そのおかげで感情と話す機能を失ったけど、ちゃんと生きてる』

「ツバサ君って、やっぱりすごい人だったんだ……。あれ、そうなるとツバサ君の歳って何歳？」
「スバル……いまさらその質問かよ。まぁいいや。え～と、たしか……１９０ぐらいだったかな？」
「「『『１９０！？」」』』

スバル、ミソラ、ウォーロック、ハープの驚きの声が見事にハモった。それに対しツバサは平然としながらスバルを手招きした。

「まぁ、だいたいな。あ、スバル、その鏡も外に運ぶから手伝ってくれ」
「あ、うん。せ～のっ……ところで、自分の年齢なのにずいぶんおおざっぱだね。っていうか、いままで僕ら普通に君付けだったんだけど……」
「まぁ、１００近くになると数えるのも面倒でな。それと、呼び方はいつもどうりでいいよ。下手にさん付けされるとお堅いからね」
「ふ～ん。そういうもんなの？　……この鏡、重いね」
「この鏡は特別製だからな。……そうだな～、オレにとって歳は、いちいち１日の呼吸の数を数えないのと似たようなもんかな。
……あ、鏡はこのへんで良い」
「なんか、すごくわかりやすい例えだね。だけど、荷物を家の門の外に置いていいの？　近所に迷惑なんじゃ……」
「大丈夫だよ。もう手は打ってある」

２人が家の中に戻ると、コーヒーの匂いが漂ってきた。その匂いをたどってみると、ミソラとアイリスがコーヒーをいれていた。

「お疲れさまー！　みんなでコーヒー飲もうよ」
『私とミソラさん、ハープさんとでいれたの。そろそろ外への運び出しが終わる頃だと思って』

「おーちょうど何か飲みたいって思ってたんだ。（スバルも良かったな。好きな人にコーヒーをいれてもらって♪）」

小声でツバサはスバルをからかい、スバルの顔は赤くなっていた。アイリスはツバサの長年の付き合いで察しがついたのか、ツバサにため息と呆れた目を送り、当のミソラはそれに気づかず顔の赤いスバルに駆け寄った。

「大丈夫？　スバル君。顔赤いよ？」
「だ、大丈夫だよミソラちゃん。さ、さぁコーヒーを飲もう」

そんな様子を見ながらツバサとジョーカーはそれぞれ違う事を思っていた。

（やっぱりスバルってからかいがいがあるな。おもしれ～）
（人がわるい）

とか思っていた。いっぽうスバルは、この状況を抜け出そうと話題を変えた。

「そ、そういえば、何でアイリスは実体化してるの？　ナビってたしか、実体化できなかったよね？」
『それは、コピーロイドを使ってるから』
「コピーロイドってたしか、ナビをコピーロイドの中にインストールするとナビが現実世界で、電脳世界と同じ姿で活動できる。っていうやつだっけ」

アイリスは感心したようすでスバルを見る。

『詳しいね。付け加えるならば、さすがに２００年前と今では環境

が違いすぎるので、ツバサから私のデータと今の電波環境をコピーロイドに適用してもらったの』

アイリスの質問にウォーロックも少なからず感心したようだ。

『ほ～ぅ、ツバサってけっこうやるんだな～。もうちょっとふまじめなヤツかと思ったぜ』

『十分にふまじめだ』

「ウォーロック、ジョーカー……いつか見てろよ」

ツバサのカップを持つ手が震えている。どうやら、本気では無いにしてもけっこう怒っているようだ。その後サテラポリスの車が来たので、車に荷物を乗せて、スバルたちも車の中に乗った。

「それじゃあアイリス、またね」

『ええ、皆さんもお元気で。……戦い、気をつけてね』

「大丈夫だよ。オレが付いてるんだからな。それじゃあ、留守は任せた」

『ツバサらしいね。…ただし、皆さんに迷惑をかけないようにしてね。あ、ミソラさんちょっと……』

アイリスはツバサの言葉に苦笑いで答え、ミソラを呼んだ。

ちなみにスバルは、「おまえはオレの姉ちゃんか!?」とツッコンでいたツバサを強引に車へ押し込んでいる。

「なに？　アイリス？」

『（　あなたの場合、恋愛もがんばって。スバルさんとは人間同士なんだから、諦めずに、チャンスは逃さないで　）』

アイリスが小声で話してくるので、ミソラも思わず小声で返した。

「（あ、うん！　ありがとう、アイリス！　……あれ、でもなんで人間同士だからチャンスは逃がすな。なの？）」

ミソラの問いに対しアイリスは少し顔を赤くして一層小声になり、ミソラの耳元で理由を話す。

『（……話してもいいけど、内緒にしてね？　ツバサにも話してないんだから。実は……）』

「（えぇ！？　……わかりました。アイリスの分まで頑張ります！）」

アイリスはニコッと微笑んだ。

『それではミソラさん。そろそろ行った方がいいよ』

「うん！　またね～！　アイリス！」

そうして車は走り出した。

しばらくして、スバルは思い出したようにツバサに聞いた。

「そういえば、なんでサテラポリスを初めから呼ばなかったの？呼んでたらもっと早く終わってたと思うよ？」

『そういやそうだよな。おいツバサ、まさかオレらをこき使わせるために呼んだんじゃねぇよな？』

「ん？　……スバル、お前外に荷物を運んでいる時に、近所の人に声かけられたか？」

「え、……そういえばないけど、それがどうしたの？」

「結論から言えば、オレの家は限られた人間にしか見えない。それ以外の人にはジェミニみたいな特殊な電磁波をかけて、そもそも家のほうを見ないよう暗示をかけている。だから、家の敷地外に機器とかを置いてたってわけ」

そう、かつてジェミニとツカサ、そしてツカサのもう一つの人格であるヒカルは、＋と＋、－と－が反発するように、人々の仲を悪くした。人と人のキズナがどれだけもろいかを証明するために。

『……んなめんどくさい事しなくとも、堂々と生きりゃあ良いじゃねぇか』

「そういうわけにもいかないんだよウォーロック。

……さっきの話で分かったと思うが、オレとアイリスはこの世にいないはずの存在。やすやすと人目につくわけにもいかないんだ。……トラブルは、事前に回避しないとね。

……ふぁぁ～。……それから、やっぱりまだ眠いからしばらく寝てる。というわけで、こ難しい質問はまた次の機会ってことで。明日は花見なんだから、ムードが下がるような理屈話はこれ以上喋りたくない。

ジョーカー、サテラポリス着いたら起こして。……今度はゲンコツなしでたのむ」

『保障はせん』

「お前……なぁ……グゥ」

「……寝たね」

『寝たな』

「ぐっすりだね」

『疲れてたんでしょ』

『たかだか3時まで起きてたくらいで……情けない』

「いや、3時まで起きてればこのぐらいなると思うよ……」

『スバル、ツバサの顔にイタズラ書きしようぜ？』
「い、いや、いくらなんでもそれは――」
『あら面白そうじゃない。どんなの書こうかしら』
「あ、それじゃ私も……」
「ミソラちゃんまで！？」
「大丈夫、大丈夫。水性で書けば平気だって」
「……う～ん。そういうことなら……」

言葉の途中で寝てしまったツバサに対し、そんな会話があったという。

第8話　監視役（後書き）

次回は完全ギャグ編です。ゲンブの宿主も出てきます。
お楽しみに！

ちなみにアイリスがミソラちゃんに言った内容は秘密です。・・・
ＥＸＥ６をやった人なら分かりますかね？

感想等待ってまーす。

第9話　花見と酒（前書き）

今日は都合により早めに更新します。

今回はあの人まで出てきます。たぶん驚きますよ。

第9話　花見と酒

――――――日曜日・ドリームアイランド――――――

花見は現地集合というわけで、スバル一家とミソラ、そして委員長トリオはドリームアイランドに来ていた。

ドリームアイランドは近くにゴミ集積所があるものの、きれいな花畑も近くにあるという場所で、スバルたちはその花畑に来ている。所々葉桜になってるが、十分きれいだ。

「みんな遅いね……」

ミソラのふとした一言に、もうすでにシートも敷き、いつでも料理が食べられる状態だったというのもあり、7人と5体はため息をついた。

ウォーロックは退屈なのが嫌いなので、話す事で退屈を紛らわせようとしたようだ。

『それにしても、なんでここなんだ？テレビで言ってたような有名なところに行けばいいじゃねぇか』

「なんでも、ケフェウスも来るからしいよ。ケフェウスの電磁波は強力だから、近くのハンターを狂わせちゃうんだって」

「それ以前に、私たちはそのＦＭ王と会ったことないんだけど」

委員長の言葉にゴンタ、キザマロは同感といわんばかりに頷いている。

「あら、ＦＭ王さんまで来るの？　なら、もう少しお化粧してくればよかったかしら」
『スバルの母君、そう気をつかわなくともよい』
噂をすれば影とはよく言ったものだ。スバルたちの真上、ウェーブロードにケフェウスがいる。暁、クインティア、ジャックも電波変換して一緒にきたようだ。４人は地面の花を踏まないように気をつけながら下りてきた。
『すまぬ、遅れた。ちと道に迷ってな。……先に始めてくれても良かったのだが……』
「いや、どうせならみんなで食べた方がおいしいし。……あれ、ツバサ君は？」
スバルは周りを見渡しながらケフェウスに聞いた。
『ん？まだ来ておらんのか？　我らより先に出たはずだが』
「呼んだか？」
声がしたのは上の方だ。一同は上を向くと、ツバサが下りてきた。……今日は額に緑のバンダナをつけている。続けてジョーカーも下りてきて、ツバサの手のひらに乗った。おそらく、地面などを傷つけないようにだろう。
電波化すれば重さはなく、どんな人でも今のジョーカーを片手で持てるだろうから。
ちなみに2人はお酒を持っている。大人たちへの差し入れだろう。ツバサはお酒を置きながら、顔に怒りマークを浮かべて聞いた。
「……ところで、昨日帰りにオレにラクガキしたヤツ誰だ？　ほとんどが水性だったんだが、額のが油性でな。今どき『肉』ってなん

だ。『肉』って。とっとと名乗り出ろ。いまならデコピン一発で許す」

どうやら、先に出てラクガキを隠すためのバンダナを買ってきたらしい。ジャックは興味津々といった様子でツバサに迫る。

「マジ!?　ちょっと見せろよ!」

『ケッサクだぜ!?　自信作だからな!　……あっ』

ジャックの悪乗りにウォーロックが調子に乗ってボロをだした。ツバサはそれを聞くとそばでバンダナを取ろうとしていたジャックの手をどけてウォーロックに怒気を込めながら近づく。

「ほぅ。犯人自ら答えてくれるとはな。それもウォーロックとは……。そんじゃ昨日のも含めて、約束どうり1発おみまいするか」

バチン!!

『いってえぇぇぇ!!』

逃げる間もなくデコピンをくらい、ウォーロックは額を押さえてうずくまった。ツバサはすっきりしたという感じで顔の影を無くした。

「フー。……さて、これで心置きなく、飲むぞ――――!!」

ツバサと暁、アシッドとジョーカー以外の動きが止まった。無理もない。ツバサの見た目は11、2歳なのに、8、9年先の言葉を

発したからだ。
代表して（？）、ルナとあかねが注意した。

「ツバサ君、あなたまだ小６でしょ。念のため言っときますけど、お酒はダメよ？」
「委員長さんの言う通りよ、ツバサ君。ここには暁さんもいるんだし、逮捕されちゃうわよ？」

ツバサはため息をついて、自分がすでに１９０近く生きている事を伝えた。研究所のことはインパクトが強すぎるので伏せたようだが、それが逆に２人を納得させない理由になってしまったので、暁がフォローした。

「大丈夫ですよ、２人とも。こいつはこう見えて酒には強いので。オレのケガが峠を越えたときも、祝い酒って言って、２人で飲みましたから。
なっ！　アシッド」
『……やや不服ですが、ツバサの歳と、シドウの言ってる事は本当です。……不服ですが」

その様子からして、アシッドも注意はしたらしい。ルナとあかねも不服そうだったが、聞き入れたようだ。
その後、みんなはそれぞれの花見を楽しんでいる。スバルはジュースを飲みながら呟く。

「ズゥゥー……はぁ。こんなゆったりした時間も良いもんだね」
『そうだノ～』
「ん？」
『ノ？』
「『わぁぁぁぁ！！？　／　ノォォォォ！！？」』

「お、ノイズムたちも来たか」

スバルとノイズムの驚愕の声に対し、ツバサはコップに酒を注ぎながら口を挟んだ。

「ノイズムってたしか、ノイズ生命体だったよね。何でこんなところに？　……どんどん増えてるし」

スバルが呟いた通り、突如発生したノイズウェーブからノイズムたちがどんどん出てくる。暁を始めとするサテラポリス組は警戒態勢をとった。

ツバサは暁達の警戒を解かせるためにいつもの飄々とした態度でノイズムをカバーした。

「なんでも何も、せっかくの花見って事でオレが呼んだ。ちなみに、ノイズムたちはオレの情報網の一つだよ。

んお？　アル、ベル、お前ら久しぶりだな。最近連絡無いから心配してたんだぞ？　あ、こらカル！　お前ノイズウェーブから出る時は機器に異常を及ぼすからノイズのかけらは持ってくるなっていつも言ってるだろ。……はい没収～」

『お、おいツバサ。こいつらの区別ついてるのか？全員同じに見えるんだが……』

ノイズムたちは人間でいう髪や目の色といった身体的特徴がないのだから、ウォーロックの疑問はもっともだ。ツバサは他（カル以外）のノイズムが持ってきたノイズのかけらを没収しながら自慢げに答えた。

「んなもん、周波数を探れば1発だろ。いくら同じに見えても、だ

いたい０．０１ぐらいの個体差があるからな」

「「「「「『『『『『『　そんなもん分かるか――――！！！！！！」」」」」」』』』』』』

大いばりで答えたツバサにジョーカー、そしてノイズム以外からツッコミが飛ぶ。

花見にノイズムたちも加わり人数が増えすぎたので、１つのシートにみんな仲良くではなく、それぞれ気の合うもの同士が集まるような感じになった。

『そういえばＦＭ王、今日はずいぶん電磁波が少なめですが、どうかされましたか？』

ハープの問いにＦＭ王は得意げに自分のアーマーを指差す。

『フフフ。実はツバサに頼んでおいた電磁波抑制装置が完成してな。今日はそのお披露目もかねているのだ』

「まあ、動作確認ってやつかな。けっこう手こずったが、おかげでいい出来にしあがった」

ツバサが補足を加えながら酒瓶に手を伸ばしたが、そこに居ないはずの人物に手を叩かれた。

『そろそろ無意識に酒瓶に手を伸ばす頃だと思って来てみたら、当たりだったね……』

「あ、アイリスこんにちは。でもいつの間に……」

なんだかんだで数々の修羅場を潜り抜けているスバルにとって、気配を察知できないのは不思議だった。
アイリスは酒瓶を完全に取り上げてからスバルたちにあいさつをする。

『こんにちは、スバルさんにミソラさん、ハープ。あとウォーロックも。
私のコピーロイドはジョーカーのグレイブメテオレーザーを応用して、コピーロイド自体を電波化できるの。時間制限はあるけど、ほとんどの所へ行けるわ』

ジョーカーのグレイブメテオレーザーは対象物を電波化してバラバラにする技。それをうまく応用すれば可能なのだという。
だがこの時、スバルの背中に痛いぐらいの視線が突き刺さる。

「スバル君、誰かしら？　その子」

アイリスが余りにスバルと親しげに話すので、ルナが嫉妬の炎を出しながらスバルに詰め寄った。アイリスは自己紹介をし、なんと気づいたらルナと手を握り合うまでに仲良くなっていた。スバルは、（恐るべし、アイリスの和解術）とか思い、その場に平穏が訪れるかと思ったが、ツバサとウォーロックの不満が爆発した。

『おいアイリス、お前までついで扱いか！』
「ってかアイリス！　お前なんでここに！？　データを管理するのにかならず1人は家にいないといけないってのに……」
『……家には代わりを置いてるよ。それとついで扱いの方は、ツバサがいつもやってるのでマネをしてみた』

その言葉にウォーロックの怒りの矛先はツバサに変更され、1発

殴ろうとツバサに襲い掛かるが、上半身と手だけでいなされ、全然当たらなかった。
スバルはそんな二人を見て苦笑しながら、1つ気になることがあったので、アイリスに聞いた。

「代わりって誰？　ウィザード？」
『M．rキングよ。私が再構築したの』

その発言に、聞こえていた全員が飲み物を吹き、食べ物を食べていた人はむせた。ツバサも思わず動きを止め、そのスキにウォーロックから1発食らってしまった。ウォーロックがアイリスの言葉に気づいて動きを止めたのは、腕を振りぬいた後だ。
ツバサはほほを押さえながらアイリスに呆れた目を送った。

「お前なぁ、いくらなんでもキングはないだろ。あいつの野心は人一倍だし」
『大丈夫。……ツバサが出会った頃に戻しただけだから』

ツバサはそれを聞くと肩の力を抜かして納得したように呟く。

「……そっか」
「ツバサ君が出会った頃って？」

ツバサは納得したようだが、スバルたちは数ヶ月前キング率いるディーラーと戦ったので、いまいち信用できなかったのかツバサに尋ねた。ツバサは少し考えてアイリスの方を向く。

「……実際に話した方が手早いかな。アイリス、頼む」
『うん』

アイリスはそう言うと通信用エアディスプレイを開いた。

ピッ！！

音と共に、昨日の整理であるていど機器が減ったツバサの部屋が映り、そこにいたのはキーを打っているキングだった。

キングはアイリスに気づくと親しげに話しかけてきた

「おお、アイリス。お花見はどうかね？　楽しんでいるかな？　それに、師匠の顔も見たいのだが…」

『おかげさまで。すみませんが、ツバサとはまた今度話してください。実は、どうもスバルさんたちがあなたの改心を疑っているようなので、少し話をしてくれませんか？』

「……悲しい事だが、しかたがないか。……星河スバル、いろいろ迷惑をかけてすまない。君と、君のお父さんには、なんとお詫びをすればいいか……」

（（（（（（（　この人誰――――！！！　）））））））

ツバサとアイリスを除いた面々の、心の中のツッコミは見事にハモった。ジョーカーですら目を見開き口を開けている。

『なにか反論は？』

アイリスの問いにスバルたちは無言で首を横に振り、アイリスは『引き続きお願いします』と言って通信を切った。

ちなみにこの間、酒に手を伸ばすツバサの手をアイリスが叩いたのは6回だ。

その後、飲み物を買う人を決めるジャンケンでスバルとミソラは買い物に行く事になった。

ツバサがキングの師匠と聞いて疑問の声が殺到していた時にジャンケンが行われたので、いいようにはぐらかされたのだろう。ツバサは酒も注文したが、アイリスとジョーカーに止められてしぶしぶ提案をとりさげた。

2人はみんなに注文された飲み物を持ちながら、ミソラがスバルに話しかけた。

ちなみにミソラは帽子とダテ眼鏡（　度数の入ってない眼鏡　）で変装をしている。

「はぁ～、またツバサ君にうまくはぐらかされちゃったね」

「うん。あそこまでいくと怒りを通り越して感心しちゃう。……わっ！」

話をしながら歩いていたので人とぶつかってしまい、2人は慌てて謝った。

「いや、かまわんよ。こちらこそすまなかった。ケガはないかい？」

見たところ60代後半。目は聡明そうな灰青色。あごひげをたくわえ、黒いスーツを着ている。いかにも老紳士という言葉が似合いそうな人物だ。

「あ、はい。大丈夫です。……あの、大学の先生ですか？」

たしか、近くに大学があったはずだ。老紳士はにっこりとしてスバルを見る。

「ふぉ、ふぉ、ふぉ。中々鋭いのう。いい観察力をもっておる。君の推察通り、ワシは大学で心理学の教授をしておる。
それに、……良い目をしておるな。何かを研究する者になれば、きっと成功するじゃろう」
「そういうのが分かるんですか！？」

ミソラがやや驚きながら聞き、老紳士もやや意外そうにミソラを見た。

「なんと君は……今日はお忍びですかな？
おっと、質問の答えじゃったな。さっきも言ったとおり、ワシは心理学を研究しておる。ゆえに、観察力がちっとだけ人より良いのじゃ。……あ～すまん。そろそろ私は行かねば」
「こちらこそすみません。お忙しい中お時間をとらせてしまいすみませんでした」

その後みんなの下に戻り老紳士の事を話すと、ツバサがやや不服そうにスバルたちに頼んでいたコーラを飲みながら答えた。

「…それたぶん、亀山　黒蓮（コクレン）教授だな」
「えっ、ツバサ君知ってるの？」
「ああ。彼のレポートは中々面白い。前に暇つぶしで大学のネットワークに進入した時に見つけてな、それからたまに拝見してる」

もちろん、他人のネットワークや端末に不正にアクセスするのは法律で禁止されている。
暁は向こうで大吾たちと飲んでいるので聞こえる事は無いが、スバルはもはや失笑するしかない。

「あはは、ツバサ君。君はそんな事まで……。ところで、どんなレポートだったの？」
「ん？　……戦争の事だよ。元傭兵らしいから、何か思うことがあったんだろうな」

ツバサはそう言うと、近くでゴンタやキザマロと鬼ごっこをしていたジャックを、周囲に悟られない程度にちらりと見た。
その後も楽しい花見は続き、夕暮れを迎えそれぞれの家に帰っていった。

――――――星河家――――――

スバルは家に帰ったあと、そっこうでベットに倒れこむ。

「あ～～疲れた～～～。リフレッシュに行って逆に疲れるって、いったいなにごと？」
「まぁまぁ。やさしいおじいさんにも会えたし、みんなでお花見して楽しかったじゃない」
「それもそうか。…ところで、なんでミソラちゃんそんなに元気なの？」

スバルの質問に対してミソラは得意げに笑って見せた。

「ふふ。芸能人ってね、けっこう体力あるんだよ～。……あのさ、スバル君。いまさらって感じなんだけど…」

「なに？　ミソラちゃん。あらたまったりしちゃって」

「うん。……前に、勝手に布団に潜り込んで……ごめんなさい」

スバルは一瞬キョトンとなったあと、くすっと笑ってミソラに答えた。

「そんなのもう気にしてないよ。たしかに、あの時は驚いたけどね」

その後ミソラも安心したように笑顔になり、2人は夕食の時まで楽しく今日の事を話していたという。

――――その頃、コクレン教授宅――――

「はぁ。これもいい出来ではないのぅ……」

学生のレポートをチェックしているのだが、思わず嘆息がもれた。

『たしかに、文章は成り立っておるし文法も正しい。……じゃが、どこかいい点数を取ろうという考えが見え隠れして、自分の考えを打ち消しておるな』

突如自室内から聞こえてきた声に、黒蓮は勢い良くイスから立ち上がり周りを見渡した。

「ッ！！　だれじゃ！！？」
『これは失礼。ワシは、貴公に力を与えに来たものじゃ』
現れたのは亀のような姿をした電波体。緑色の電波に、アーマーは黒だ。
「…チカラを得た者の末路はたかが決まっている。いらん世話じゃ」
『そうか？　ワシにはおぬしが、〈　力があれば　〉と悔やんだ事があるように見える。
そしてその流れを変えようと必死になり、結果チカラ及ばず断念せざるを得ないという経験があるように見えるが？』
「……例えそうだとしても、いまさら何ができると…」
『できるぞ。ワシと、お前ならな。さっきも言っただろう。チカラを与えに来た……と』
「……分かった。お前の名前は？」
『ゲンブじゃ。よろしくな』

第9話　花見と酒（後書き）

次回は戦闘です。おまけに明日は2話更新しようと思います。それというのも、文字数の関係で戦闘は2話に分けてるんですよ。あ、4話の戦闘は例外です。

まいどまいど長くてすみません。最後まで読んでいただき、ありがとうございます！

あ、キングとツバサの関係もちゃんと明かすつもりです。たぶん20話以降になると思いますが・・・。

それと、おかげさまでPV5000突破！さらにユニークは1000を突破しました！みなさん、いつもこんな作者に付き合っていただきありがとうございます！

それでは、感想・評価待ってます！作中の分からない事でもいいですよ。これからもよろしくです！

第１０話　甘味サークル（前書き）

実は、戦闘を１話にまとめるとどうしても１７ＫＢクラスになるので２話に分ける事にしました。

第１０話　甘味サークル

今日スバルたち６年生は社会科見学としてとある大学に来ている。

「さすがにおっきいね～」

スバルは大学の門を見て感嘆の声を漏らし、ツバサは少し眠そうに答えた。

「そ～だな。そういえば、昨日お前らが会ったっていうコクレン教授もこの大学にいたと思うよ？」

「へぇ～。……それもネットワークに進入して知ったの？」

いつものお返しというヤツだろう。スバルがニヤッとしてツバサに聞くと、ツバサは焦ったように唇に人差し指をたてた。

「シッー。……そんなのここで言ったら、誰が聞いてるか分からないじゃんか」

『……いちおう犯罪をしていたという自覚はあったんだな』

「あるわ！！」

ツバサとジョーカーの主従漫才（？）にスバルたちは忍び笑いしていた。直後、前の方からプリントが渡されてきた。

今日の日程が書いてある。……どうやら午前は自由に校舎を見て、大学が用意した出し物を見るようだ。

「それでは、プリントにも書いてあるように午前は自由に見てきていい。１２時頃にお弁当が出るのでその頃に戻って来るように。

それでは、解散」

先生の解散宣言とともに、スバルはどこかに走って行った。
パンフに書かれてる地図に図書館開放の欄があるところを見ると、そっちに行ったらしい。
ルナとミソラも、スバルと一緒に出し物を見たいらしく、われ先にと急いで追いかけて行った。
残されたのは男子４人とウィザード４体。ちなみにクラスのみんなもすでに移動している。

「……恋する女のパワーはすごいな」
「委員長もミソラちゃんもスバル君のことが好きですからね」
「ありゃいきすぎだろう。それよか、オレらはどこ行く？」
「昼の弁当何かな～？」

ツバサ、キザマロ、ジャック、ゴンタの順に話す。気の早い発言にゴンタ以外はため息をつき、結局それぞれ行きたい所に行く事になった。

――――コクレンの部屋（研究室）――――

「……それで、どう動く気じゃ？」
『ふむ。……どう動くにしても、何かを訴えたいならば大々的にアピールする必要がある。例えば、この校舎をかんぷなきまでに壊す…とかの』
「ッ！！　そんな事をすれば周囲に多大な被害が！！　それに犠牲者も出るやも知れんぞ！」

コクレンは思わず声のトーンを上げた。ゲンブはそれに対し冷静にコクレンを諭す。

『その辺はおぬしの好きにするがよい。犠牲を出したくなければ、力を抑えれば良いだけじゃ』

コクレンは不承不承といった様子で納得してゲンブに問う。

「……何時ごろ決行する」

『そうじゃな…。昼時ならば大多数が食堂に集中しておる。その時に食堂から離れた所で暴れれば、避難がスムーズにいくじゃろう』

――――図書室――――

そのころスバルは、図書室の本に熱中していた。もちろん宇宙関係の本なのだが、さすがに大学院の図書室だけあってレベルが高く、スバルの好奇心をフル回転させ、目は輝いている。

ミソラとルナは何とか気を引こうと声をかけるが、全然聞こえていないようだ。

声がダメなら他の手を使うまで。と、いった感じでミソラは次の手を使う。

「だ～れだ？」

後ろから両手で相手を目隠しし、自分が誰かを聞く。つまり、恋人同士がやるような事をしたのだ。

ちなみにルナは照れくさいのでそこまで出来ない。ゆえにルナは、

少しショックという顔でふらふらと図書室を出て行った。
スバルもさすがにこれには気づいてミソラの方を見た。

「ミソラちゃん？　ごめん。本を読んでて気づかなかった」
「あ～スバル君ひっど～い。ずっと声かけてたのに～！」

そう言うなり、ミソラはほほをふくらませ、スバルは心底困った風に弁解する。

「ごめん！　ほんっとゴメン！　許して～」
「……どうしよっかな～？　……あ、このパンフによると、甘味サークルもあるそうだよ。っと、い・う・わ・け・で！　そこにあるものをおごってくれたら許してあげる♪」
「うう～。僕の薄いサイフがさらに薄く～」
「さぁ、レッツ・ゴー！」

ミソラはスバルの腕を引っ張ってどんどん進む。2人のウィザードはその後姿を見ながらそれぞれの感想を述べた。

『はっはっは！やっぱりスバルは、しりにしかれるタイプだな！……グオ！？』
『雰囲気が下がるような事言わない』

ハープは気絶したウォーロックをつかみ、2人を追いかける。

――――グラウンド――――

ジャック、ゴンタ、キザマロは総合スポーツサークルに来ていた。

ようは、１つだけの競技ではなく、たくさんの競技をするサークルだ。
ちなみに３人はサッカーをしている。

「どりゃあぁぁぁぁ！！」

ゴンタの強力シュートがゴールにつきささる。ゴンタはもともと力が強い上に、電波変換のトレーニングで暁に鍛えてもらっていたので、強いシュートがうてる。
そして、テクニックとスピードはジャックがカバーしていた。ジャックの頭脳はかなり優秀なので、小学生だとなめてかかってきた大学生相手なら読み勝つのは当然だろう。
……キザマロは外野で応援しているが。
だが、結局そのプレイが相手を本気にさせてしまったようで、１０対２とゴンタたちの圧敗に終わる。
試合も終わり、お互いにすっかり親しくなったので、昼食を一緒に食べる約束をした。

――――広場――――

一方ツバサは広場の草むらに仰向けになり、あくびしていた。ジョーカーはツバサのハンターの中から呆れたように話しかけた。

『せっかく来たのだから、何か見てまわったらどうだ？』
「う～ん。とは言ってもね～、別に見たいもんもないし～。ふぁぁ～。いい感じで眠くなってきたからオレ寝る。飯の時間になったら起こして」
『……パンフによると、甘味処もあるようだが？』

ガバッ！！

ツバサはすさまじい速さで起きた。

「なに！？　それを速く言え！　オレ甘いものが大好きなんだよ。ケーキもいいけど、やっぱりようかんとお茶の組み合わせがサイコーなんだよな～。ん？　ジョーカー何やってんだ。先行くぞ？」

喋りながら歩くツバサにジョーカーはやや唖然としながら応える。

『……うけたまわった』（アイリスが前に言っていた、『ツバサは甘いものに対して、良かれ悪かれ人格が変わる』とは、この事だったのか……）

「おっ菓子～おっ菓子～甘いもの～♪」

ツバサはご機嫌な様子で、そんな歌（？）を口ずさんでいる。

その後、ツバサは甘味処でスバルやミソラと出会い、ツバサとミソラ、大学生が三つ巴の大食い勝負を始めた。

言うまでもないが、大学生はミソラのサイン＋いいところを見せるため。

ミソラは純粋に甘いものをたくさん食べるため。

ツバサはほとんどノリだ。
結果はミソラの1人勝ち。
ちなみにスバルはここに来るまでにもいろいろ連れまわされたらしく、ぐったりしている。
甘味処を出る時、ツバサはちゃっかりお土産を買っていた。スバルたちに話していないところを見ると、後で1人で食べる気だろう。

その後、先生から弁当が配布され、クラスのみんなと一部の大学生が昼食を食べ始めた。

『……そろそろじゃぞ』
「わかっておる。…電波変換、ゲンブ・アース！」

直後、地面が大きく揺れた。

第１０話　甘味サークル（後書き）

次の話は本格的な戦闘です。

第11話　玄武（前書き）

コクレンとゲンブが電波変換しました。（↑いちおう前話のあらすじです）

第11話　玄武

突如、地面が揺れた。周囲では「地震か？」などの声が出たが、それが間違いであるとみんなが気づいたのは、割合早かった気がする。

「ッ！！　あれはなんだ！？」

広場でスバルたちと一緒にご飯を食べていた学生の言葉に、その場の全員が学生の指差した先を見た。

視線の先にいたのは、巨大な亀のような存在。こうら含め全身は黒い岩のような装甲で覆(おお)われている。おそらく体の大きさは、一戸建ての家1件分はあるだろう。

そっちの方から人が慌てて逃げている所を見ると、誰が見てもアトラクションの類ではない事が分かる。

『我が名はゲンブ・アース！！　エーテル様のめいにより、この学校を破壊する！！』

その声は重く、聞くものに恐怖を覚えさせるものだ。

「みんな！　早く逃げろ！！」

生田先生の言葉で、生徒たちが逃げ出す。だがスバルたちは違う。

「それじゃあ行くよ！　みんな！」

「「「　おう！！　」」」

「うん！」

『承知した！！』

スバルの声に呼応して、スバル含めジャック、ゴンタ、ミソラが電波変換。ジョーカーはファイナライズしてグレイブ・ジョーカーとなり、ツバサもエアディスプレイを展開する。

四方を取り囲み、ロックマンのロックバスター、ジャックのグレイブクロー、オックスのファイヤーブレス、ハープノートのショックノート、ジョーカーのミサイルストリーム、仕舞いにツバサのヘビードーンXが炸裂するが、堅い装甲に阻まれてダメージは無いようだ。

「ん？　貴公ら何者だ？　ケガをしたくなかったらおとなしくしておれ！」

近くで聞いて分かったのだが、スバルはその声に聞き覚えがあった。先日お花見に行ったときに出会った老紳士……。

「もしかして…コクレンさん！？　あなたがどうしてこんな事を！」

「……ワシの事を知っておるのか。いかにも！ワシは亀山コクレン！　だが今はゲンブ・アースと呼んでもらおう！！　大地の怒り（ガイアラース）！！」

言うが速いかゲンブ・アースが右前足を上げた。先制攻撃だろう。スバルたちは回避行動をとり、ツバサは念のためにスーパーバリアを全員に5重に張る。

ズドドドドォォォ！！

足を地面に叩きつけた瞬間、地面から数え切れないほどの巨石が空に向かって打ちあがる。
５重のスーパーバリアは２５発の攻撃に耐えられる。しかし、それが全て剥がされたのだから、今無事なのをほっとするしかない。
だがジャックは相手の攻撃ではなく、別のところで驚いてるようだ。

「てめぇの声、聞いたことがあるぞ！オレたちの国を攻めた奴らの中に、この声がいた！！」

ジャックとその姉、クインティアの国はかつて他国の侵略をうけ、両親と技術は奪われて地図からその名が消えた。

「……たしかにワシは元傭兵でいろんな国と戦った。それで多くのものを殺めてきた……。だが、ワシも多くの仲間を失っている！貴様に分かるか！
昨日まで酒をくみ交わした仲間が今日は死んでいるという現実と日常が！　……貴様に分かるか。その流れを変えようと尽力した者に対し、最愛の家族を置いて国外追放された悲しみや苦しみ、そして、信じていた国に勝手な都合で切り捨てられた者の怒りが！！」

その言葉に対し飛びかかろうとしたジャックを、ツバサはジャックのひじ間接を逆に曲げて制した。多少荒っぽいが、冷静さを欠いている者は多少強引に止めないと止まらない。

「おちつけ、ジャック。今のあいつには何を言ってもムダのようだ。話したい事があるなら、あいつを倒した後だ。

……ロックマン、ノイズチェンジを。少しでも戦力を上げたいからね」

ジャックが少し落ち着いたのでロックマンに指示を出し、ロックマンもそれに頷く。

「わかった！　はぁぁぁ！」

ロックマンの周りにノイズが集まり、ノイズチェンジが起きるかと思ったが集まったノイズが霧散していく。

「なぜ!?」

戸惑うロックマンの声に、ゲンブは笑い声を上げた。

『ふぉふぉふぉ！　残念じゃったなロックマン!!　エーテル様からいただいたアンチエースＰＧＭで、サテラポリスの技術は役には立たんぞ!!』

「ッ!!」

「スバル。オレの渡したエンシェントＰＧＭはどうした？　アレは外との接続は特定のサーバーしかない。つまり、敵に妨害されないって事だ!」

「そうか。よし、ウォーロック！　ＰＧＭを組み替えて!」

『おう!!』

「……何を言ってるかは分からんが、打つ手は潰す!ガイアー―」

「みんな、跳んで!」

技を出す前にハープ・ノートの声で全員が跳び上がる。ハープノートは全員が跳んだのを見てから両腕を前に出した。

「オールレンジバリア！」

おおよそ半径１０メートルはあるだろうか。巨大な球状のバリアを張り、自分も含め全員をその中に入れ、攻撃を防いだ。

通常のバリアは上と周囲を防ぐ半球型。だが今回のような全球型なら、下からの攻撃に対応するのも容易だろう。

ちょうど周囲のノイズ率も高まり、ノイズチェンジが可能となった。

『スバル！　ノイズが貯まった！　いつでもいけるぜ！』

「わかった！　どんなノイズチェンジが起きるか分からないけど、今はこれに賭ける！　ノイズチェンジ！！」

直後、まぶしい光がロックマンを包んだ。ロックマンが次に目を開けたときは、様々な色の光が飛び交う幻想的な世界。

「……ここは……どこ？」

『ここはエンシェントサーバーと外との境界だ』

声のした方を向くと、重量感のある騎士のような姿で、左手には巨大な鉄球をつけた者がいた。

「君は……」

『某（それがし）はナイトマン。２００年前のナビだ。……貴殿の名前は？』

「僕はロックマン。ノイズチェンジをしようとしたらここに来てしまって……」

『ロックマン……懐かしい名だ。……それがしは姫の命（めい）とはいえ、このサーバーの中で姫より生き長らえてしまった。守るべきものを最後まで守れぬのは騎士として恥ずべき事。

ロックマン殿。貴殿に守りたい存在がいるなら、それがしは力を

貸しましょうぞ！』

「まって！　姫ってどういうこと！？　それに、懐かしいって……」

周りの光が色あせてくる。そろそろこの空間にいるのも限界のようだ。

『……１６０年前の事を詳しく調べれば分かりましょう。２度と、あのような――」

光がまた強まり、ナイトマンの言葉はそこで途切れた。

スバルが再び目を開けると、そこはハープノートの張ったバリアの中。どうやら大して時間は経っていないらしい。

変わったとすれば、ロックマンの方だ。ロックマンの姿は騎士のような姿、先ほど出会ったナイトマンと似た姿となった。

これには、敵味方区別なく驚いている。

『ばかな！　ノイズチェンジは起きないはず！！』

「スバル君……その姿は？」

「ほぅ、ナイトノイズか。……さぁ、反撃開始といこうか。……お前らなぁ、いいかげんよそ見してるとスキ突かれるぞ！」

ツバサは強引にゲンブ・アースのほうに意識を向けさせる。だが、全員の意識がゲンブアースに向かう前にゲンブの方が攻撃をくりだした。

「ガイアラース！！」

「くぅ！」

先程より威力・スピードが上がっている。バリアは悲鳴をあげ、バリアを保つために腕を前に出しているハープノートにも強い負担がかかっているようだ。

ロックマンはハープノートの肩に手を置く。

「ハープノート、バリアを解いて。僕が全部防ぐから」

「でも……」

「だいじょうぶだから」

ロックマンは安心させるように微笑みハープノートは一言呟く。

「……分かった」

そう呟くと、みんなにバリアを解く事を伝えた。

バリアを解いた瞬間、岩の塊がロックマンたちに迫る。ロックマンは左手の鉄球を岩の方に構え、思いっきり振り回した。

「キングダムガード！！」

ロックマンの正面で円形に振り回された鉄球は巨石をことごとく破壊していく。塊サイズではなく、こっぱ微塵だ。

岩は全て防がれ、視界が開けた。

「今度はこっちの番だ！ロイヤルレッキングボール！！」

ロックマンはコマのように高速回転しながらゲンブアースに迫る。頑丈さには自信を持っていたゲンブは、その直後自分の身に起きた事をすぐには理解できなかった。

グオォォォォン！

固いもの同士がぶつかり合う音と共に、ゲンブ・アースの体は浮き上がった。

自分は、あごから鉄球を突き上げられて両前足がその衝撃で浮き上がったとゲンブが理解できたのは、自分が地に顔を埋めた後だったという。

これには、ロックマン自身も驚いていた。装甲が壊れる事は無かったが、あのゲンブアースを地に沈めたのだ。

『スバル！　ぼさっとすんな！！　まだ戦闘中だぜ！？』

ウォーロックの声にロックマンは慌ててゲンブアースの方を向くと、もう立ち上がっていた。その上攻撃の準備もしている。……元傭兵（ようへい）だけあって、精神力は強いらしい。

「少々油断したが、次はこうはいかんぞ！　……くらえ！　デストロイダンス！！」

ゲンブアースはこうらにこもり、高速回転を始めた。同時に背中の黒岩は弾丸のように周囲をなぎ払い、そのうえ地面からも巨石が打ち上がる。

さすがにヤバイと感じたのか、ツバサも指示を出した。

「ロックマン！　何とかスキを見つけてＮＦＢを放て！！　流れを一気に変える！

ハープノートはさっきのバリアを頼む！

……あの攻撃力と攻撃回数からして、オレら2人だけのバリアで

はほぼ確実に破られる。みんなはバリアの中に攻撃が入ってきたら迎撃を頼む！！」

ロックマンはキングダムガード、ハープノートはオールレンジバリアで防御してしのいでいる。

ツバサは破れそうなところをスーパーバリアで補強。

補強が追いつかない時はジョーカー、ジャック、オックス・ファイアがバリア内を駆け巡り、もぐら叩きの要領で岩を破壊していく。

そしてとうとうロックマンはスキを見つけた。わずかだが、飛んでくる岩と岩の間隔にムラが出てきたのだ。

『スバル！』

「うん！　わかってる」

ロックマンは間隔の広いところをウェーブロードに乗って走り、迫り来る岩は鉄球で防ぐ。そして、やっとゲンブ・アースの真上にたどりついた。

『いまだ！！　スバル！』

「うん！　うぉぉぉ！！　ＮＦＢ（ノイズフォースビックバン）！　ギガントハンマー！！！」

鉄球をまっすぐ突き出し、ゲンブアースに迫る。

グオォォォォ！

空気を裂く音と共に鉄球はみるみる巨大化し、ゲンブ・アースを押しつぶした。

「ぬあぁぁぁぁぁ！！？」
『ばかな！？ワシの装甲が…最強の守りが負けるとは！』

じゃらららららら……

鉄球は小さくなりながら、鎖とともにロックマンの元に戻っていく。鉄球が落ちた所を見ると、クレーターを思わせるほどの大穴。その中心には電波変換を解除されたコクレンと、デリート寸前のゲンブがいた。
スバルたちはゲンブにグラビティステージを使いながらコクレンに近づく。コクレンは目を開け、スバルたちを見た。

「……好きにしてくれ。ワシはもう、こんな苦しみは背負いたくない……」

バズンッ！！

直後、ジャックの鉄拳がとんだ。相手が老人だろうと自分が電波変換していようと容赦がない。
ジャックは心底怒った様子で、コクレンの胸倉を掴んだ。

「ふざけんな！　勝手にたくさんの人を殺しておいて、自分だけ生きる事から逃げんじゃねぇ！！
死んだ仲間や殺したヤツを思うならな、それらの過去や罪を真正面から見据えて、罪も苦しみも全部背負っていきゃあいいじゃねぇか！！　そいつらの分まで生きやがれ！！！」

ジャックの怒鳴り声に対抗する様に、コクレンも声を荒げた。

「君のような子供に何が分かる！」

「わかるさ！　……オレは前にディーラーの幹部だったからな。てめぇみたいな事や、てめぇより酷い事もやってきた！　……だから、てめぇがてめぇに負けてどうすんだ」

「……いずれにせよ、これだけの事をやったんだ。ワシはもう、やり直す事は……」

確かに、校舎はほぼ壊滅。避難が早かったので犠牲者はいないと思うが、下手をすれば、牢の中で二度と日の目を見る事は出来なくなるかもしれない。

ジャックも口ごもり、空気が重くなる中、ツバサは思い出したようにコクレンに言った。

「そういや……オレの知ってる国に、罪人だろうがなんだろうが受け入れて、過去を問われる事はないっていう国があったな。……あんたに今までの事と今日の事を背負う気があれば、知り合いに頼んで亡命させてやってもいいぞ」

「ツバサ君、そんなムチャな……」

スバルの言葉に対し、ツバサはコクレンに目を向けたまま答えた。

「いいや、ムチャじゃないさ。……サテラポリスのお偉いさんは、オレには逆らえない」

「それってどういう……」

「できるのか！？　ホントにそんな事が」

スバルの疑問はコクレンにより遮られた。ツバサは頷き、コクレ

ンの耳元で日時を伝えた。伝えた後はゲンブと向き合い、軽い尋問を始めた。

「さて、せっかく生きてんだから、何かそっちの情報をくれ」

『捕虜になるなど……一思いに殺してくれ。』

「そうしたいのはやまやまなんだが、生きてたら下手にデリートするなって長官に釘を打たれててさ～。あとで怒られんのもなんだし、お前をＷＡＸＡに連れて行く」

約２時間後、ＷＡＸＡの事後処理班が駆けつけ、ゲンブを連行した。

第11話　玄武（後書き）

・・・コクレンさんで、それっぽい過去は書きましたが、やはり戦争を知らない僕がそれをネタにしていいのかという悩みはありました。重いですからね。

感想や、こうした方が良いという場所があれば遠慮なく言ってください。

それから、しつこいようですがこの小説中に出てきた国などは作中で夏休みに入ったら出しますよ。

第１２話　サテラポリスの汚点（前書き）

実は、アイリスの口調を敬語主（おも）からゲームに近くしました。
ころころ変えて本当にすみません。
それと、変えた所で「ここはこうした方がいいのでは？」という点があれば、なるべく具体的に指摘してください。即行で直します。

第12話　サテラポリスの汚点

――――――星河家――――――

スバルは帰るなりソファーに座り込んだ。

「つ、疲れた」

さんざん振り回されたうえにバトルだから、いやでもそうなる。その原因の一つとも言えるミソラは、あかねに頼んで夕飯の手伝いをしていた。

（いくら芸能人はタフだといってもすごすぎる）スバルはそう思いながら、ソファーでゆっくり夕飯を待つことにした。

だが、そううまくいかないのが世の中と言うもので、暁から電話がかかって来た。

「……はい」

「お。スバル、なんかやたらと不機嫌そうだな」

「……疲れて一休みしようとしていたところに電話がかかってきたら、誰だって億劫にもなると思いますよ……」

暁はそれを聞くと愉快気に笑った。

「あはは、そりゃあスマン。……実は、ツバサが今日の報告を終えるなりどこかに行ってしまってな。心当たりがないか聞いてみたんだ。なんか知らんが、上の連中がやたらとツバサの事を気にしてな。」

「ツバサ君が？　……さぁ、心当たりがないです」

疲れている時に笑われたものだから、スバルは少しムカッとしたが、【ツバサ行方不明】の知らせで怒りが吹き飛んでしまった。暁は電話の向こうで唸っている。おそらく、ツバサの行きそうな所を考えているのだろう。

「そうか……悪いな。せっかくの休息を邪魔しちまって。そんじゃあな」

暁との通信も終わり、すっかり意識が冴えてしまったので気晴らしを兼ねて展望台に向かうことにした。

ちなみにウォーロックは『展望台は退屈だ』と言って刑事ドラマを見るらしい。

――――展望台――――

いつもはあまり人はいないのだが、今日は先客がいるようだ。

見覚えのある黒髪の少年がベンチに仰向けになり夜空を眺め、そばには『甘味』と書かれた袋が置いてある。

「……ツバサ君？」

スバルが恐る恐る聞くと、ツバサは上半身を起こし、スバルの方を向いた。

「ん？　なんだスバルか。てっきり、うるさ～いサテラポリスの人かと思ったよ。……あ、これお前も食べる？　1人で食べるつもりだったんだが、たまには誰かと食うのも悪くない」

そう言って、甘味袋をスバルに向ける。そしてスバルの返事を聞く前に、ツバサは袋の中からドラ焼きを取り出してスバルに投げた。反射的に受け取ってしまい、そこから返すのもなんなので、自分も食べることにする。

ジョーカーはサテラポリスに置いてきたらしい。

「そういえば、暁さんが君の事を探してたけど、行かなくていいの？」

スバルの問いにツバサはドラ焼きを口に含みながら答えた。

「ん？　まぁ、最低限の報告はしたし、文句を言われる筋合いはないよ」

「そういう問題？」

「そういう問題」

あまりにツバサがさらりと言うので、スバルは思わずため息が出た。

（なんか、ジョーカーとアイリスのため息が多い理由が分かった気がする…）

「……ところでスバル、今日の事で聞きたいことがあるんだけど」

「な、なに？ツバサ君」

考えが顔に出ていただろうか。スバルがやや焦りながらツバサの方を向く。ツバサはどこか遠くを見るような虚ろな目でスバルに尋

ねた。

「……ノイズチェンジの時、ナイトマンどんな感じだった？」

「え？　……え～と、話をしたよ。１６０年前の事が２度と～。とか、姫がどうとか」

「話を！？　……そうか」

なぜかは分からなかったがツバサはどこか嬉しそうだ。答えたお返しと言っては変だが、スバルはさっきの戦闘のことを聞くことにする。

「……僕も聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「質問によるな」

「今日言ってた『サテラポリスのお偉いさんは逆らえない』って、どういうこと？」

スバルはツバサを正面から見据え、ツバサは話すかどうかを迷っているようだ。

しばらくしてスバルが質問の答えを諦めかけていた時、ツバサは不意に口を開いた。

「……オレがこんな体になった元凶であるアウシュ・イヴル研究所は、サテラポリスの元の一つだ」

「えっ、それってどういう……」

スバルの疑問は、ツバサに続きを言われて遮られた。

「サテラポリスは、スペシャリストが集まってるってのは知ってるな？」

「うん。世界各地から優秀な人を集めて形成されてるって聞いたことがある」

「人と同じように、組織も時代と共に変化してきた。今の大きさまで数々の組織が集まってきたとも言うがな。その中に、例の研究所も入ってた。

無論、事件が起きた後は除名されたが、事件が世間に知られるのを恐れた当時のトップたちは、民衆から見て非現実的な噂を流して、ただの爆発事故にしようとした。

……つまり、オレをどうにかすればその時の情報を世間にバラされるかもしれないってんで、オレに強い態度が出せないってわけ。逮捕なんてすれば、マスコミが勝手に事件のことを調べ上げて報道するだろうからね」

「……長官は？」

例え身近な人でも、そんな話を聞いた直後だと不安にもなる。ツバサは2個目のドラ焼きを袋から取りながらそんなスバルを横目で見て、安心させるように微笑んだ。

「長官は立場からして、事件のことまでしか知らないだろうから大丈夫だよ。……まぁそのせいで、なんかあったらちゃっかり怒られるんだけどな」

ツバサはやれやれといった様子でため息をつく。スバルは少し安堵して笑いと共に息を漏らした。

「あはは、そりゃあ悪いことをすれば怒られるよ。……でも珍しいね、ツバサ君がはぐらかさずに正直に言うなんて」

「相手から情報をもらったらこっちもそれ相応の情報を出さないと

ね。これも一種の対価だよ。
さ〜て、そろそろ帰るかな。あ、残りお前にやるよ。将来のフィアンセと仲良く食べな」

ツバサが口元の笑みを隠しながらスバルに甘味袋を渡すと、スバルは赤くなり、袋を乱暴に受け取る。
ツバサはその様子を笑いを堪えながら見ていたが、不意に笑みを消した。

「……けど、今日オレから聞いた話は誰にも他言しない方がいいよ。サテラポリスの情報網は広いから、上の奴らに目をつけられたく無かったらそうしろ。……少なくとも、オレが近くにいないときには話すなよ？」

その時の顔が真顔だったので、ウソではないだろう。スバルは静かに頷いた。
ツバサは出口へ歩きながら、「それじゃあ、またな」と言い、片手をヒラヒラしながら去っていった。
その後スバルは、ミソラが夕飯ができたことを知らせに来るまで夜空を見ていた。

――――――星河家――――――

「ん！　このシチューおいしい！　ホントにミソラちゃんが作ったの？」

スバルの率直な感想にミソラは嬉しそうに笑顔になった。

「うん！　気に入ってもらえて嬉しいよ！」

「うふふ。ミソラちゃんね、『スバルくんに自分の手料理を！』って、張り切ってたのよ？」

「ス、スバル君のお母さん！　それは言っちゃダメー！」

ミソラは赤くなりながら腕をパタパタしている。円満で平和な食卓とはこういうのを言うのだろう。大吾は笑いながら思い出したようにスバルに話しかける。

「そういえばスバル。展望台でツバサ君とあったんだろ？　せっかくだし、誘えばよかったな」

大吾の言葉にスバルは口に運ぶスプーンを止めた。

「そうだね……。どうしよう、これからでも誘ってみようかな……」

『やめとけよ。これから誘ったって、来た頃にはほとんど覚めてると思うぜ。また今度にしろよ』

「う～ん。そりゃそうなんだけど、なんかもったいないな。こんなにおいしいのに」

ウォーロックの注意に対してスバルが迷ってる時、ハープが助言を出した。

『それなら、タッパーとかに入れて明日渡せばいいじゃない』

「え、明日は土曜だから学校が……そっか。ないからＷＡＸＡに行

って直接渡せるんだ」
『そゆこと』
『ＷＡＸＡか、家の中でごろごろしてるより退屈はしなさそうだな。オレも行くぜ』

ウォーロックの微妙に不純な理由に、『相変わらずだなこいつ』という視線が集まる中、ミソラは元気よく手を上げた。

「私も行く！　クインティアさんにも会いたいし」
『ミソラが行くなら、モチロン私も行くわよ』

この様子だとかなり賑やかになると思ったあかねは、いちおう注意することにした。

「みんなで行くのは良いけど、働いてる人の迷惑にならないようにね」
「「『『ハーイ！　』』』』

あかねの注意に、２人と２体の声はそろった。

――その頃、ＷＡＸＡ・ツバサの部屋――

ＷＡＸＡに帰ってきたツバサを待っていたのは書類の山。開発班から資料の分析を頼まれたのだ。ツバサはややうんざりしながら受け取り、現在急ピッチで作業している。

ジョーカーに手伝うように頼んだが、『自分の仕事は自分でやれ』と返されてしまった。
サテラポリスに置いてけぼりを食らって少し怒っていたようだ。

「……これで全体の４５パーセントクリアっと。……こりゃ、今日は何時に寝るはめになるんだろう」

そう言いながら、ツバサはそばに置いてあったコーヒーの入ったカップに手を伸ばす。だが、カップがあるはずの場所にそれはなく、疑問に思いながらそちらに目をやると、そこには見覚えのある手がカップを持ってツバサの前にいた。

『お疲れ様。そろそろコーヒーが切れそうだったから入れてきたよ。……それと、忘れ物持ってきた』

そう言ってアイリスは、コーヒーと1枚の写真を渡した。写真はずいぶん古く、ツバサと青年がケンカをし、大人2人が止めようとしている様子だ。
ツバサは乾いた笑みを浮かべて写真を受けとる。

「……サンキュー。でも、来たならせめて声かけろよ」
『ごめん。邪魔するのもどうかと思って。……何か良いことでもあった？』

コーヒーを飲むツバサの顔がいつもより嬉しそうだった。聞かれたツバサも口元に笑みを浮かべて先程スバルに聞いた話を語り出した。

「ん？　あぁ、実は……」

ツバサは、エンシェントサーバーの中のナビたちが、まだ感情などの意識が残ってる事を告げる。
アイリスは目を見開くほど驚き、徐々に喜びが顔にも表れてきた。
、

『ほんとう！？　それなら、もしかしたら兄さんも……』
「ああ。その確率は高い。オレも驚いたよ。理論上、あのサーバーの中には感情などのデータは存在できないはずなのに、それが存在していたんだからな。……いちおう感情も残るようにはしたはずだけど、確証がなかったから、オレもうれしいよ」
『……そう。兄さん……』

アイリスは兄の事を思い出しているようだ。ツバサはその様子を見てある事を思いついた。

「……ところでさ～、アイリス～」

アイリスに頼み込むような視線と声をかけ、アイリスはため息をついて机の上の資料を手に取る。

『……分かった。少し手伝う』
「やり！」
『そのかわり、２０パーセントだけよ？　もともとあなたの仕事なんだから』
「了解！　それでも十分だよ」

それぞれの夜は更けていく。

第１２話　サテラポリスの汚点（後書き）

なんだかキリが悪いので、今日はこれプラス２話更新します。ストックが切れたら週１回ペースになると思いますのでご了承ください。

第１３話　イーグル来襲（前書き）

やっと1話で出てきた親衛隊隊長が出てくる・・・。
なんだか長かったな・・・。

「作者の手際の悪さだな。」

・・・否定できん。

第１３話　イーグル来襲

――――ＷＡＸＡ――――

翌日、スバルとミソラは昨日の夕飯のおすそ分けをするためにＷＡＸＡに来ていた。もちろん2体のウィザードもついて来ている。
受付でツバサの部屋を聞き、尋ねてみたが留守で、そこを偶然通りかかったサテラポリスの隊員が言うには。

「資料の分析結果を開発班に届けに行ったのでは」

と聞いて開発班に向かったが今度は……。

「どこかで昼寝してくる」

と言い残してどこかに行ったそうだ。何度も肩透かしを食らったウォーロックは今にも切れそうに叫ぶ。

『ダ――――！！　なんであのやろうオレたちの行く先行く先で場所を変えるんだ！　まさか、陰から見ててオレたちを笑ってんじゃねぇよな！？』

「ロック落ち着いて。でもどこ行ったんだろ。シチューももう冷めてるし」

「まぁまぁ、いざと言う時は私とスバル君とで食べる事も出来るし」

『そういえば、もうすぐお昼だしね。ちょうどいいんじゃない？』

「う～ん。しょうがないか」

その後４人はＷＡＸＡの外に出たが、上から風に乗って声がした。

「だか・、・・・もない・・！」
『それな・・・てつ・し・・？　なん・・な・のな・、理由・・・・・て』

「……アイリスとツバサ君？　よく聞き取れないけど」
「う～ん……そうみたいだね。なんか言い争ってるみたい」
『ほ～う。ミソラ、お前よく聞こえるな。オレにもさっぱりだ』
「ミュージシャンだからね。このぐらい簡単だよ！」
『まぁ、ガサツなウォーロックには無理でしょうね』
『あんだとハープ！？　ガサツなのが関係すんのか！？』
「……あのさ、２人のケンカを止めなくていいの？」

「『『あっ」』』

どうやらスバル以外はすっかり忘れていたらしい。２人は２体と電波変換して空に上がり２人を探すと、ツバサとアイリスはＷＡＸＡの頂上付近、アンテナのそばにいた。

「だ～か～ら、てつやの理由は大したもんじゃないっての！！」
『大した事ではないのなら、なおさら話しても良いじゃない』

……文脈からして、ツバサのてつやの理由をアイリスが問い詰めているらしい。ミソラ、ウォーロック、ハープの視線を受けて、スバルが話しかける。

「……あの～、２人とも、ケンカはその辺にしたら？」
『！　スバルさん。実は、ツバサが久しぶりにゆっくり眠れるよう

にと仕事を手伝ったのにそれでも結局てつやしたの。せめて正当な理由がなければ引き下がれない』

おそらくアイリスはツバサを心配して問い詰めているのだろうが、ツバサは煩わしそうにアイリスから目を背けてスバルを見た。

「正当な理由もなにも、なんでか眠れなかっただけだって！　あ、スバル、後でででいいからお前のエンシェントＰＧＭ（プログラム）貸してくれない？　ちょっと昨日の戦闘が動作に影響がないか確かめたいからな」

「あ、うん。それは良いけど」

『話をそらさないで』

ツバサのほほが引きつり、アイリスとの間に火花が散る。まさに一触即発である。

２人が再び口を開こうとしたとき、時代劇で流れそうな太鼓の音色と、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『その者たち、無駄な争いは控えおろ～。この肩に刻まれたアジサイが目に入らぬか～』

現れたケフェウスはどこで手に入れたのか殿様風の着物を着て、肩はというと、電波を意図的に歪めてアジサイに見えなくもない。

ケフェウス以外は唖然としている。スバルはポカンとした顔でケフェウスに声をかけた。

「……ケフェウス？　……それはたしか、時代劇の……」

『ケフェウスとは誰の事だ？　余、いや、わたしは将軍だ』

『……すっかり影響されてやがるな』

ケフェウスはウォーロックの呆れた声を気にせず、ドラマのワン

シーンのごとく語り始めた。

『それよりも、ツバサ、アイリス。ケンカの大体の理由は分かった。ツバサ、おそらくアイリスは君の事を心配しておるのだろう。今話せぬのなら、話せるときに話す事。

アイリス、ツバサは余から見てもしっかりしている。ならば、自分で話すときが来るまで待っていてくれぬか』

「（……アイリス、いちおう『ははー―！』って言っといたほうがいいかな？）」

『（……そうね。せっかくケフェウスがここまでやってくれているのだから。それでは、せーの……）』

「『ははー―！』」

『……うむ。これにて一件落着！』

ツバサとアイリスの相談が聞こえていたスバルたちは苦笑いを浮かべている。

その後、スバルたちはＷＡＸＡに来た理由を話した。

ちなみにジョーカーは、『下らん』と言ってヨイリー博士のところに行ったらしい。

「へぇ～ミソラお手製のシチューか。たしかに嬉しいが……いいのか？　別にスバルと２人で食べてもいいんだぞ？」

ツバサはエンシェントＰＧＭの検査のためにエアディスプレイのキーを打ちながら尋ねた。

『ミソラさん、ツバサの言う通り、気にせず２人で食べていいよ？』

「いや、やっぱりおいしいものはみんなで食べないと。ね、ミソラちゃん？」

「うん！　それに、スバル君には昨日食べてもらったし。後は味付

けの研究としていろんな人から感想をもらって、どんどんうまくなるつもりだよ！」

『そういうことなら……。あ、ツバサは実験台として使えるのでもし良ければ使って』

「おいこらアイリス！　オレは残飯処理のねずみか！」

ツバサはそう言いながらシチューを掠め取る。

『…何年か前に「食えりゃあ全部同じだー」と言ったのは誰？』

ツバサはその言葉に心当たりがあるらしく、話題を変えた。

目だけを動かしてケフェウスを見たところを見ると、話を逸らすための話題をわざわざ探したらしい。言うまでもないが、アイリスはツバサに半眼を送っている。

「そういやケフェウス、さっきの将軍ずいぶんなりきってたな。他の奴らにやってみても感心すると思うぞ」

『う、うむ。少し恥ずかしかったが、2人のケンカの仲裁ができてよかった』

「そっか……サンキューな。ずいぶん気のきくことしてくれんじゃねーの！」

ツバサはわざわざ周波数を合わせてケフェウスの肩を叩いた。無論それは敵意からではなく、友人同士がするそれなのだが、そうは思わないものがいた。

それも空に。

『ケフェウス様に無礼をなすのは……』

「ん？」

『何者か――――――！！！』

何かが急激に空から垂直に迫ってくる。まるで雷のようだ。スバルたちと同じ高さまで来た時のそれは、ワシのような姿に白を基調とした装甲と、弾ける様な黄色の電波を放っていた。
電波体は怒りながらも堂々とした声を立てた。

『わたしはＦＭ星親衛隊の隊長、イーグルである！　王に無礼をなすものよ。観念いたせ！！』

言うが早いかイーグルは羽を羽ばたき、羽から雷を放った。数は約１０。ツバサはスーパーバリアを自分とスバルたちに張りながら避けていく。
順調に避けていたが、最後の１発がシチューの入ったタッパーに当たってしまった。もちろん、シチューは消し炭である。
そのときどこからか何かが切れる音がし、アイリスの目はなぜか真剣味を帯びた。

『落ち着けイーグル！　この者は、ツバサは悪いやつではない！』
『しかし、さきほどケフェウス様を叩いたではないですか！　あれは明らかな敵対行為です。地球を攻撃するとまではいかなくとも、せめてこの者だけは！』
『さっきのは地球での友好のあいさつの一種だ。とりあえず落ち着けイーグル！』
『そ、そうなのですか。……すまない、ツバサとやら。頭に血が上ってしまいつい失礼を――』
「……オレの昼飯を消し去ったのは……」
『ん？』

イーグルの謝罪の途中でツバサが呟き、それをイーグルは聞き返そうとしたのだが…。

「だ―れ―だ――！！！！」

エアディスプレイのキーボードを普段の2倍、つまり4台出してツバサが叫ぶ。補足を加えれば、目からビームが出そうな気迫である。

それと同時にイーグルに対してエランドやノイズドウィザードで攻撃をしかける。

『ッ！！』

前後左右からの攻撃は完全にイーグルの不意をつき、いくらイーグルが親衛隊の隊長だとしても最低2発は当たるだろう。

……だが、結果として1発も当たらなかった。

スバルは、イーグルの顔の驚き具合からして、不意打ちだけのものではない事を察した。それはすなわち、イーグルが自分で避けたのではないということ。かといって、自分も含め今の事態に驚き、ほとんど動けなかったから違う。

周囲を見ると、1人だけ冷静な目で片手を前に出している者がいた。

「アイリス？」

スバルは名前だけを言ったのだが、アイリスは代わりに答えを言った。

『……私にはあらゆる電子機器を操作する能力があり、それを応用すれば、電波体を操る事も可能。……ここまで言えば分かるよね？』

「つまり、その力を使ってイーグルを操作して、攻撃を全てかわさ

せた……。ってこと？」
『正解よ』
スバルの質問にアイリスはオペレートが忙しいのか簡潔に答える。
「それじゃあ、ツバサ君の攻撃の理由は？　……もしかして、私のシチューが消し炭になったから？」
ミソラの質問にアイリスは呆れたようにツバサに目をやった。
『うん。ツバサは私と出会う前、１滴の水も惜しむような生活を送っていたと聞いた事があるから、イーグルがシチューの容器を破壊した時点で切れるだろうとは予想してた』
『つまり、食べ物は粗末にするなってことで怒ってんのか？』
アイリスはウォーロックの言葉に頷きながらイーグルのオペレートを続ける。
『コクッ、それと今後のために言っておくけど、甘いものを台無しにされると今回の比ではないから気をつけて』
『ア、アイリス殿！　は、早くツバサ殿を止めてください！！』
この間イーグルはアイリスのおかげで攻撃は１発も当たらなかったが、それでもイーグルはツバサの迫力と休みのない攻撃に疲れて始めていた。
操作されているとはいえ、実際動いているのはイーグルなのだから疲れるのは当然だろう。アイリスは心底同情するような目でイーグルを見た。
『ゴメン……こうなったら１回やり返すまで止まらないの。それに

ツバサは力が強すぎるので、私では完全にコントロールできない』
『そ、そんな……ぐふぅ！』

イーグルは言葉の途中で左ストレートを食らい、それによりなんとかこの騒ぎは収まる事となる。
その後暁たちが来て、長官室にて、イーグルとツバサは思いっきり長官に怒られた。なんでも、ツバサとイーグルの攻撃がアンテナに当たっていたらしい。結果として粉砕である。
ちなみに、スバルたちは主犯ではないのでお咎めなし。
なお、ミソラはクインティアと食堂に飲み物を飲みに行った。アイリスも誘われたが、コピーロイドは飲み食いしても意味はないということで断った。
結局いま部屋の外にいるのは、スバルと暁、ウォーロックとアシッド、そしてアイリスだ。
スバルはさっきの騒動で1つ気になることがあったのでアイリスに質問した。

「……そういえばさっき、『やり返すまで止まらない』って言ってたけど、まさかアイリスにもバトルカード連発ってのはないよね？」

アイリスはそれを聞くと『フフッ』と笑いながら答えた。

『さすがにそれはないよ。自分がそばに置いた者に対しては、どんなに酷くともせいぜい仕事を押し付けるだけだから』
「そういや、オレがあいつの所に居た時に『冷蔵庫の黒蜜プリンを食べたから』って、家の掃除をやらされたな」
「暁さん……そんなことされてたんですか？」

このときスバルの頭の中では、三角巾をして掃除してる暁の姿が映り、口元を笑いで歪めていた。

「……スバル、笑いたいならいっそ思いっきり笑ってくれ。そっちの方が楽だ」
『シドウ……大人になりましたね……。そういえば、ツバサの家に来て5日目の時も……』
「……うっさい」

それからもアシッドが持ち前の記憶力と、ウォーロックの悪ノリで暁をへこましている様を見てスバルとアイリスはクスクスと笑い、長官室で怒られている2人には悪いが退屈しなかったという。

1時間後、ツバサとイーグルはふらふらした様子で出てきて、ケフェウスは早々に頭を下げた。

『余の部下が迷惑をかけた。イーグルは真面目で責任感が厚いのだが、なにぶん誤解しやすくてな』
『ケフェウス様が謝ることではありません。もとはと言えば、わたしがツバサ殿の昼ご飯を破壊したからです』
「いや、オレが騒動を大きくしたようなもんだし……」
『……本当に反省してる?』

アイリスは疑り深く尋ねた。スバルは、（…そんなに信用がないのかこの人）と心の中で思い、ツバサはうなだれながら謝る。

「……ハイ。本っ当にご迷惑をおかけしました……」

どうやら長官に叱られた後でそれなりにへこんでいるらしい。

そして現在、スバルたちは食堂でミソラたちと合流。自己紹介もすませてゆったりしている。同じＦＭ星人といっても、ケフェウスは王なので気軽に話しかけてくる者はほとんどいない。しかし、今はイーグルがいるので、科学・分析担当のＷＡＸＡでなくともいろいろ話を聞こうとする。

「テロや犯罪はどれほどあるのか？」
「彼女いるの？」

など質問は様々で、イーグルはそれらに対し真面目に答えていく。その様子をスバルたちは少し離れた所で見ていた。
自分たちとイーグルの間にどんどん人が割り込んできて、今では完全に人の壁によって断絶されたのである。
スバルは感心した様子でイーグルがいるであろう人の壁を見る。

「すごい人気だね、イーグル」
『まったくだ。オレも最近のＦＭ星がどうなってるか聞きたかったんだけどな』
『……余もＦＭ星人なのだが……』

ケフェウスの出す雰囲気は重い。おそらく、一種の差別感を感じているのだろう。ミソラは励まそうと声をかける。

「大丈夫だよ、ケフェウス。私たちは普通どうり接しているし。それに、イーグルさんがケフェウスを置いてどこかに行くはずないよ」
「……それに、おそらくあの人たちは立場の関係上あなたに話しかけずらかっただけでしょうから、気にしない方がいいわ」

普段あまり話さないクインティアにも励まされて、ケフェウスは少し元気が出たようだ。ケフェウスの気持ちが落ち着くのを見て、スバルは大事な事を尋ねることにした。

「ケフェウス、前に『部下が来たらＦＭ星に帰る』って言ってたけど……」

ケフェウスは少し寂しげに頷く。

『うむ。……寂しいが、余はＦＭ王としての責任がある。いつまでも復興や行政を3賢者に任せていては王として失格だ。……明日にでも帰ろうと思う』

『ケフェウス様、その必要はありませんよ』

よく聞こえていたものだ。イーグルは人ごみを掻き分け、ケフェウスの所に来た。が、多少は疲れているようだ。

『3賢者からは、『こちらは我らに任せてそちらの役に立って来い』と伝言を預かっておりますし、恥ずかしながら、私も部下を置いてきてしまい、どちらにせよもう少しお待ちいただくことになります』

『……イーグルっていやぁ、ＦＭ星で随一のスピードを持ってるので有名だからな。おおかた、ケフェウスの事が心配すぎて部下を置いてきちまったんだろ』

ウォーロックが補足を加え、当のケフェウスはいかにも嬉しそうにイーグルを見た。

『それなら、もう少し地球にいてよいのだな!?　……3賢者には悪いが、もう少し地球を楽しむ事にした。スバル、みんな、またし

ばらくよろしくな』
「こちらこそよろしく！　ケフェウス」
（これがケフェウス様が信頼していると言う星河スバル……。なるほど、ケフェウス様が信頼するはずだ。……それにしても、ずいぶん暢気ではないか？　相手の宣戦布告はもうあったと聞くが）
「よし！　最終チェック完了！」

今までおとなしかったツバサが口を開いた。どうやら今までデータのチェックをしていたらしい。アイリスはツバサのエアディスプレイを覗き込むが、データを読む前に閉じられてしまった。

「スバル、悪いけど明日もＷＡＸＡに来てもらっていいか？　やってみたい実験があってな」
「え？　べ、別に予定はないけど……なんで？」

そばでアイリスが不機嫌なオーラを出しているので、素直に「ハイ」とはいいずらい。ツバサもそれに気づいているのか、スバルを連れてみんなから離れ、耳元で話した。

「（実は……）」
「（……なるほど、たしかに良い考えだね。そういう事なら喜んで協力するよ。……でも、なんで正直に言わないの？　きっとアイリス喜ぶよ？）」
「（やっぱりこういうのは予想していなかった方が喜びがでかいかと思ってな。それじゃあ頼んだよ）」
「（うん）」
『（しっかし、なんでそんなまわりくどい事するんだ？　地球人ってのは分からん）』
『（……基本的にツバサは他人にあまいからな）』
「（ジョーカー、せめて優しいって言えよ。展望台に連れて行かな

かったことまだ根に持ってんのか？）」
『（……問題、ない）』
「（やっぱり気にしてたのか……）」

その後みんなの下に戻り、アイリスに明日の実験に立ち会うように頼んだ。怪訝そうな上にいまいち納得していないようだったが、スバルの純粋さにめんじてなんとか了承してくれた。

第１４話　プレゼントと約束（前書き）

この話は元々考えていたモノではなく、思いつきで書いたものです。
誰が誰にプレゼントするかは読んでいけば分かると思います。

それと、改めて見てみると本編に関係無いかな？と思えるようなところがあったので一部削除した部分があります。削除した部分は、いずれ番外として「作者とキャラが対話する」っていう内容の話で書く予定です。

第１４話　プレゼントと約束

スバルとミソラ、２人のウィザードは今日もＷＡＸＡに来ていた。ちなみにスバルは、ミソラにも今日の実験の詳細は言っていない。

「「わぁ――ー――」」
『お――ー――』
『あら』

着いた時の第一声がこれだ。
基地の手前、やたらと広い場所にやたらとデカイ装置がある。四方には柱が立ち、柱の先には照明のような物がついていて、そこから伸びたコードが中央の台に繋がっている。
そしてツバサは台の前で最後の調整を行っているようだ。ＷＡＸＡの科学者たちも好奇心からか、かなりの人数が来ている。
スバルたちは少し近づいてから声をかけた。

「ツバサ君おはよう。どう？　装置の方は」
「んお、お前らも来たか。装置の方は……よし！　調整が終わった」
「……ところで、何をしようとしてるの？」

ミソラの質問にスバル、ツバサ、ウォーロック、ジョーカーは顔を見合わせたあと得意げに笑ってミソラを見る。（ジョーカーは口元に笑みを浮かべただけ）

「「『ひ・み・つ』」」
『ふ～ん。男の子同士で楽しそうね。ミソラ、ここはおとなしく見守りましょ』
「……ハープがそう言うなら……」

「さ～て、納得したもらったところでアイリスを呼ぶか」

ミソラは納得してなかったが、ツバサはあえて気づかないフリをする。そしてツバサはハンターを取り出してアイリスに連絡する。すぐに来たが、ひどく怪訝そうな目をしながらツバサに尋ねた。

『……今度はどんなイタズラ？』

「イタズラって……アイリス、今回は違うよ。まともな実験だ」

ツバサは苦笑したあと胸を張って答えるが、一同の心に疑問点がわく。

（今回は？　……いつもはどんな事を……）

一同の心に一抹の不安が生まれた。

ツバサはそんな視線を受けながらも起動スイッチを押す。

ＰＩ！！

装置は起動すると「ヴゥゥゥゥン」という重低音を出して、中央の台に四方の照明の光が集中した。その直後、台の上に何かが構成されていく。

足からひざ、胴体。それが構成されていくにつれて、アイリスの顔は驚きで満ちていった。頭まで構成された存在に対しアイリスはおずおずと話しかける。

『……兄さん……』

『……アイリス……私は……なぜ……それに、ここは……』

戸惑っているアイリスとカーネルに、ツバサはふと安堵の息をつきながら2人にあらかたの説明をした。

「アイリス、エンシェントＰＧＭの中のナビがまだ感情があるってのは言ったよな？
オレはエンシェントサーバーからナビが出ても崩壊しないように、このバカでっかい装置を作ったってわけ。その台の上なら崩壊は止まる。

それから、カーネルおひさ。ここはＷＡＸＡだ。オレらの時代でいう、科学省のようなところだな」

カーネルはツバサの説明でだいぶ状況を把握したらしい。

『ツバサ……ああ、久しぶりだな。……つまり、私は再びアイリスと話せるという事か……』

「そゆこと。消費電力の関係上、せいぜい1時間が限度だから、兄妹みずいらずで何か話してな」

『……もしかして先日のてつやの理由は、わたしと兄さんを会わせるために……？』

イーグルが来る前日、ツバサはてつやしていた。分析が終わった後、こっそりこの装置のプログラムを作っていたのではないだろうか。

「……まぁ、自分の目で感情が残っているのを確かめたかったってのもあるけどな」

『も』、ということは、アイリスを喜ばせたかったというのも理由の1つにあるわけだ。

ツバサはそう言いながら周りの人たちを装置から遠避ける。もちろんスバルたちも例外ではない。

「スバル君たちが考えてたのってこれだったんだ～」

2人と2体はミソラの感心したような感想に「まぁね」と言って、それぞれ手を叩きあいながら兄妹に優しい笑みを向けていた。

ミソラはのけ者にされた事に対するプチ恨みと好奇心からツバサに質問した。

ちなみに、スバルには後で恨みを晴らす事にしたらしい。

「……ねぇ、ツバサ君ってアイリスのこと好きだったりする？」

「……あ？　今何と？」

ツバサは予想外の質問に対し、解せないという様子でミソラを見た。彼女の『目だけ笑っていない笑み』でツバサは察した。

（……あぁ、のけ者にされた反撃か……）

スバルとハープも少し気になっていたらしく、チラッとツバサを見てくる。ウォーロックなんかはニヤニヤした顔で凝視してきた。

ツバサはため息をついて、少し考えてから質問に答える。

「……そんなんじゃないよ。強いて言えば、いつもそばにいる親友ってところかな」（事あるごとに言い争う犬猿の仲でもあるけどな）

念のために言っておくならば、ツバサとアイリスが犬猿の仲というのはツバサの認識で、実際はツバサのムチャをアイリスが心配して、その結果口論になるだけである。

ミソラは、ややつまんなさそうに半眼になる。

「ふ～ん……。そういえばカーネルさんとツバサ君って顔見知りなの？　さっき久しぶりって言い合ってたよね」

「まぁ、短い間とはいえ色々と戦術の事とか教えてくれたからな」

（……本当に短い間だったけどな……）

――――某所・同時刻――――

『……ゲンブが倒されたそうだ』

『へぇー。ゲンブジーさんが破れるなんてな。……少し面白くなってきたぜ』

セイリュウの言葉にビャッコは感心していた。

『……それよりもスザクは知らないか？　見かけないが』

『あ？　スザクなら、『パートナーを見つけてただいまエンジョイしてま～す♪』……だとよ』

『……そうか。裏切るつもりなら、制裁を加えねばな』

セイリュウは自分の武器である槍（両端に三又の刃が付いている）に手をかけた。ビャッコはからかうように肩を竦める。

『お～お～、セイリュウはこっわいね～。〈 柔軟な対応力でどんな状況にも対応できる水 〉ってのがお前の特性だろ？いいのかよそんなんで？』

『水は氷にもなる。氷は冷たく、冷酷に相手を殲滅する。……私のようにな……』

『へいへい。そんじゃご自由にど～ぞ』

『きさまから先に消そ……もう行ったか。…… 〈 自由に、無慈悲に吹き荒れる風 〉。あいつは自分の特性に忠実すぎるな……』

言い終わる前に消えたビャッコに対し、セイリュウは呟いた。

『……ん？　これは……』

その場を去ろうとしたセイリュウの歩を止めたのは、組織で使っている通信用の電波。

（特定の周波数の電磁波を通信に用いている。現在ではほとんど使われない暗号方式なので逆にバレナイらしい。イメージ的に、モールス信号に近い通信法）

を受け取ったセイリュウは笑みを浮かべる。

『ふふ、あいつらが動くか。ＦＭ星親衛隊の双翼とまで謳われた力、見せてもらおう！』

その笑みは、仲間に向けるものではなく、まるで相手の力を確かめるような見下したものだった。

――再びＷＡＸＡ――

カーネルがスバルたちとも話したいと言ったらしく、スバルたちはカーネルの近くに行きそれぞれ自己紹介をした。
ＷＡＸＡ職員たちは渋々自分たちの仕事に戻っていく。どうやら、仕事の合間にここに来たらしい。

『……そうか。そんなやつらがいるのか』

ファイブ・エレメントの事を話すと、カーネルは腕を組んだ。しばらく考えた後カーネルはスバルと目を合わせた。

『ファイブエレメントの方は何とかなるだろう。私やサーバーの者たちも協力してくれるだろうからな。
……それから、こいつ（ツバサを直接見ずに指だけを差した）がムチャや、他人に迷惑をかけるような事をしたら力づくでも止めてくれ』
「はい……分かりました」（ツバサ君の信用っていったい……）

スバルが苦笑いしている時に、多少ふてくされている様子のツバサが口を挟んだ。

「……カーネル、お前アイリスから昔オレがやった事聞いた？」
『あ～……暇つぶしや遊びと称して新しいウイルスを作った事？それとも、バルズ・ランド建国のこと？』

アイリスが指を2本立てて心当たりを述べてみる。ツバサはギクッとした様子でアイリスに反論した。

「……結局ウイルスは世に出さずにデリートしただろ？」

『厳密に言えば、私があなたから取り上げて、私が消去したんだけど』

アイリスとツバサの間で再び火花が散りそうだったので、スバルは慌てて話を逸らす。ちなみにカーネルは、『またそんな事をしてたのか』と嘆息をついている。

「そ、そういえばさ、バルズ・ランドってたしか『蛮族の国』って言われてるんだよね？　流刑の人たちや犯罪者が集まって出来た国だっけ。なんでそんなところとツバサ君が……」

そこまで言ってスバルは思い出した。コクレンとツバサの会話。あの時ツバサは、罪人だろうがなんだろうが受け入れる国があると言っていた。

……もしや……。

「……ツバサ君、1つ聞くけどコクレンさんの亡命させる人ってまさか……」

「おう！　その国の人だよ。国の方も、身を隠すには絶好の場所だろ？」

（（（（（（ッ！！　この人いままで一体何してきたの！！！　））））））

スバルたちは内心でツッコミ軽く4歩は引く。アイリス、カーネル、ジョーカーはツバサの人柄を知っているからかため息をついて呆れているだけだ。ちなみにツバサは笑顔で言っているがそれが逆

に恐い。
その後も色々話をして、装置の限界時間が近づいていた。
『……そろそろ時間のようだ。ではスバル、みんな、健闘を祈る』
『……兄さん……また、会えるよね？』
アイリスは寂しそうな目でカーネルを見る。カーネルはアイリスの頭に手を置いて微笑みかける。
『アイリス……もちろんだ。この装置と、シャ……、エンシェントサーバーがあればな。それからツバサ、アイリスを悲しませたら一太刀入れるから覚悟しろ』
「分かったからとっとと行けシスコン。……あの照明が消えたら本格的にデータは崩壊を始める。
その前にいかねぇと、お前がアイリスを悲しませることになるぞ。この装置は今はあくまで試作機だからな」
『フッ、その口の悪さと減らず口も変わってないな。……では、さらばだ！』
直後、まぶしい光と共にカーネルはサーバの中に転送され、その後スバルたちは機材の片付けを手伝う事にした。
――――星河家――――
片付けも終わり、スバルとミソラ、２人のウィザードは星河家に帰ってきている。ここでミソラは、スバルにのけ者にされた恨みを

晴らす事にした。

「そういえばスバル君、まだ私とハープをのけ者にしたこと謝ってないよね～？」

「え？　あ、ごめん。やっぱり知ってる人は少ない方が驚くと思ってさ」

「そんなんじゃ許さないよ。……スピカモールにおいしいクレープ屋さんができたんだって～」

つまり、「おごれ」ということらしい。いつものスバルならため息をついて了承するはずだが、今回はそうはいかなかった。

「だめだよミソラちゃん。2週間後は定期テストなんだから、せめてテストが終わるまで我慢して」

ミソラはほほをふくらましたが、さすがにテストの方が優先順位が上だと考えたらしい。

「む～。分かったよ～。……延長してあげるかわりに、分からないところがあったら勉強教えてね」

「はいはい」

「ハイは1回」

「ハイ」

そんな2人のやり取りを、ウォーロックとハープは笑いを堪えながら見ていたという。

第１４話　プレゼントと約束（後書き）

次回はＦＭ星親衛隊の双翼が登場します。といっても最後辺りですが。

それでは、もしよければ感想などをください。問題点の指摘も大歓迎です。

第15話　学生の天敵

――テスト1週間前――

スバルとミソラは家で必死に勉強している。1週間前なら普通に勉強するだけで事は済むと思っていた。……おそらく他の家でも似たようなものだろう。それだけ必死な理由は前日にさかのぼる。

――前日――

「今回のテストは特別にクインティア先生が監修してくれたから覚悟しろよ」

ＨＲにて、育田先生の発言に、帰りの準備をしていたほとんどの生徒の動きが止まる。

（（（（（（（（（（あのクインティア先生が？　……これは必死に勉強しないとヤバイな））））））））））

こうして、生徒の心は固まった。そして、再び時間は現在に戻る。

――現在――

「……難しい。分かる？　スバル君？」
「う～ん、というか、これは小学生のレベルではないような……」
「それは言わないでスバル君！　……それを言われると気力が……」

先生からテキストを配られ、テキストの問題の数字を少し変えた問題しか出ないという話だが、その内容が難しすぎる。
公式や例題すら書いて無いのだから、嘆息しかでない。

「ただいま～」

大吾が帰ってきたので、２人は公式だけでも教えてもらおうと大吾に問題を見せた。もはや、なりふりかまってはいられない……。

「……う～ん。確かにこれは難しいな。……よし！　２人ともノートと筆記用具を持って来い。ただし、公式だけしか教えないから、解き方は自分で考えろよ？」

２人は顔を見合わせた後、大吾にお礼を言った。だが、まだ晩ご飯を食べていなかったのでそちらを優先した。『腹が減ってはなんとやら』だ。その後、２人は大吾に公式を聞いて１１時まで勉強していたという。

――――そのころツバサは――――

「……終わらねぇ気がしてきた」

ツバサは目の前の書類の山に対して嘆息をついた。それというのも、先週のカーネル再構築実験の情報がどこからか漏れたらしく、いろんな所から技術提供が求められているのでそれを丁重にお断りする書面を書いていたのだ。

その他に、例によって開発班のデータの分析や学校の宿題もあるのだから、仮眠を除き今の段階で3日は寝てない。

ついでを言えば、ツバサは今まで丁重な文章をほとんど書いた事がないので、『慣れ』の関係から疲労や集中力の消費も激しい。

ちなみにジョーカーは開発班の実験を手伝いにいった。なんでも、WAXAでもアイリスの使っているような『電波化できるコピーロイド』を作りたいらしく、ヨイリー博士を筆頭に製作チームが結成され、そっちの方でデータの計測をさせられていたのだ。

アイリスはハンターの中から心配そうにツバサに話しかける。

『……やっぱり手伝おうか？』

「う～ん、気持ちはありがたいけど、まだなんとか――」

そう言いながら近くのコーヒーに手を伸ばすが、疲労と睡魔からか、カップをうまく掴めなかった。ツバサは自分の手を睨んで今の進行具合を保存して自分のベッドに足を運ぶ。

「……少し寝る。朝の6時にアラームよろしく」

そう言ってツバサはフラフラとベッドに倒れこんだ。アイリスはコピーロイドで実体化してツバサに毛布をかけながら思った事を素直に口にした。

『……あの人……次元の魔女が言っていた別の世界のツバサも、周

りに心配ばかりかけていたのかな……。あなたが違う世界の事まで気に病む必要は……』

聞こえてくるのは寝息だけ。アイリスはため息をつき、ハンターに戻ってアラームをセットしてからスリープモードに入る。

――テスト前日・学校――

スバルたちが学校に来ると、公式を呟く声や、文字を書く音しかしない。

テスト前日になると必ず1人はそういう子はいるものだが、今回はクインティアが問題を作っているのでほとんどがそうなる。まぁ、聞けばほとんどの子が公式を親などに教わったらしいので少しはマシだろう。

委員長たちの近くに行くと、ジャックが委員長トリオに勉強を教えていた。

ちなみに、ゴンタは頭から煙があがっている。

ツバサは最近遅刻ぎりぎりに来ているので、いないことに慣れたといえば慣れた。

「「おはよう」」

スバルとミソラが声をかけると、4人は顔を上げた。……ゴンタの目の中に数字の羅列が見えるように感じるのは気のせいだろうか……。

「あら、2人ともおはよう」
「おはようございます」
「よう」
「スバル……プレアデス星団の別名……（ボン！）」

ルナ、キザマロ、ジャック、ゴンタの順番であいさつを返したが、ゴンタは完全にショートしたようだ。スバルたちが苦笑いしている時、後ろから声をかけられた。

「よぅ～、おはよ～」
「あ、ツバサく……また目の下のクマ酷くなってない？」
「さすがに、仮眠を除いて寝てないってのが1週間ぐらい続くと、このぐらいなるだろ」

ジャックはゴンタの問題に目を向けたまま呆れたようにため息をつく。

「んな生活続けてたら死ぬぜ？　だいたい、なんで毎日そんな生活してんだよ？」
「ＷＡＸＡの仕事が忙しくてね。どうもこないだのカーネルの再構築の情報がどこかから漏れたらしくてな、それらを丁重に断っているってわけだ。それも、1回断っても粘り強く食いついてくるから性質が悪い」
「それなら何で初めから教えてあげないの？その人たちも良い事のために技術が欲しいんでしょ？」

ミソラの率直な問いにツバサはあくびを噛み締めながら答えた。

「……技術の使い道を決めるのはあくまで人間だからな。下手をす

ればその技術が人を傷付ける兵器になるかもしれない。
だからオレは、その技術をその人に渡して良いかを考えてから渡す。んで今ん所、渡しても良いかなって人がいないってだけだよ。」

その直後先生が来たのでそれぞれ席に着く。

「え～通常のテストは３０点未満が赤点だが、今回は１０点未満とする」

それはつまり、先生の目から見ても難しいという事。その後、重苦しい空気の中すごした授業のおかげか、下校時の生徒の足取りは重い。

――――テスト当日――――

テスト当日となれば、クラスに2，3人は学校に来るなり勉強をやりだす人もいるだろうが、今日の６－１（スバルのクラス）は異常だ。ほぼ全員が机に向かって練習問題を解いている。
しかし、時間は無慈悲に進み続けるもので、とうとう育田先生が来た。

「よーし、練習問題はそこまで～。教科書などをカバンに入れてイスの下とかに置いとけよ。それから、ハンターの電源も切っておくこと。……それじゃあ問題と答案用紙を配る」

先生は、全員がカバンをイスの下に置くのを確認してから用紙を配りだした。
なお、数人はこの時点で「終わった……」と言わんばかりの顔を

している。ちなみにゴンタもその1人だ。
問題が配られた時、ほとんどの生徒が絶句した。
その理由は、山を張っていた場所が大ハズレだったからだ。

（なにこれ。全然違うじゃん）
（こんな所が出るなんて……）

生徒たちの心の声は置いといてその真相はというと、生徒たちは「クインティア先生の事だから難しい所を出す」と思い込み、難しい問題をマーク。クインティア自身は、「なるべく解きやすい所を……」と、テキストの中から簡単な問題を出した。
つまり、【互いの先入観による思い込み】という一言につきる。
しかし、戸惑わない人が2人いた。

「終わりました」

最初に終わったのはツバサだ。テストが終わったら教室から出る事になっているので、空き時間を利用して自分の仕事を終わらせるつもりだろう。……昨日も大して寝ていないらしく、ふらついている。
ただクラスの所々で、「（　あんなヤツいたっけ？　）」という声が多いのが気になった。確かに転校時はミソラちゃんの後で紹介されたから印象が薄いのは分かるが、少し酷いのではないだろうか。
スバルがそんな事を思っているうちに2人目が終わったようだ。

「終わったぜ」

ジャックだ。……おそらく、余りある時間を使って屋上で昼寝する気だろう。……実にうらやましい。

「ほらお前らよそ見するな。そんなに2人が気になるか？」

先生の一言で皆の意識は目の前のテスト（難関）に向かった。だがやはり……。

（（（（（（　難しい……））））））

クラスの心の声はまったく同じことを言っていた。

――――屋上――――

ジャックが屋上に出ると、ウォーロックとアイリス、ジョーカーがいた。ウォーロックはおそらく退屈だから屋上にきたのだろうとして、アイリスとジョーカーはなぜここに？　この2人ならテスト時間の退屈さに文句を言う事はないだろうに。

「よう。なに話してんだ？」

疑問を解決するには聞くのが一番。そんなわけでジャックが尋ねるとウォーロックが答えた。

『暇だから3人で世間話していたんだ。お前もまざるか？』

「オレは別に……」

『ジャック、オレは暇だから話してくるぜ』

コーヴァスはそう言うなりウォーロックの方に行った。十中八九バトル関係の話題だろう。ジャックは、この中で会話がスムーズにいきそうなアイリスに話しかける。

「で、お前らは何でここに？」

『ツバサのテストが終わったらデータ解析だけでも手伝おうと思ったんだけど、絶対に誰も入ってこなくてテスト中に閉じこもっていて良い場所としてトイレの個室を選んだみたいで……手伝えない』

「あーなるほど。ようするに異性として入れねぇってワケか」

アイリスは頷いたあと目を閉じた。

『けど、そのおかげでいい場所も見つけることもできたから。……本当にここは風が気持ちいい』

どうやらこの場所が気に入ったらしい。アイリスは風で舞う髪を手で押さえながら、気持ち良さげに風の感触と、風の音に耳を傾けている。ジョーカーは話にまざる様子はなく、屋上のフェンスに寄り掛かって腕を組んでいた。ジャックは気分を変えるために息を吐いた後、あくびをしてその辺に横になる。元々の目的が『昼寝』だからだ。

――――コダマ小学校から少し離れた地点――――

電波人間はウェーブロード、正確にはウェーブロード上に発生したノイズウェーブの出口からコダマ小学校を眺めた。

「ふぅ～ん。あの学校にサテラポリスの主な戦力がねぇ……」

『用心はしておけ。お前は緊張感が無さすぎるから、油断しないように』

『氷牙の兄貴、悩みすぎると若白髪になるぞ♪』

2体の電波体のやり取りに電波人間はため息をついた。

「炎牙、君も十分に緊張感がないだろ。……今更なんだけど、この組織ちゃんと機能してんの？　【情報をつかんだら即行で攻めていい】なんて……組織として統一性がないと思うんだけど？」

『……エーテル様のことだ。何か考えがあるのだろう』

『考えねぇ……。オレは戦えればどうでも良いや』

炎牙と呼ばれた電波体の発言に1人と1体はため息をついた。

第１６話　猟犬（両肩？）（前書き）

今回の戦闘はとっとと終わりそうです。

第16話　猟犬（両肩？）

下では地獄のテストがあるが、屋上では穏やかに時間はすぎる。
しかし、それはあっけなく崩れ去った。
ジョーカーが突然目を開き空の一点を仰ぎ見る。アイリスをはじめ、他の電波体たちもソレに気づいたらしく、その方角を見始めた。
ジャックも異変に気づき、コーヴァスに尋ねる。

「コーヴァス、どうかしたのか？」

コーヴァスは舌打ちをしたあとジャックに注意を促した。

『……どうやらかなりの実力者が来たみたいだな。ジャック、気ぃ抜くなよ』

コーヴァスがここまで言うとは相手は本当に強いらしい。ジャックは息をのんだ後ハンターを構える。

「コーヴァス！　電波変換いくぜ！！」
『おう！！　ウォーロックちゃんとアイリスはスバルたちの所に行ってな！』

アイリスは頷き、ウォーロックはちゃん付けされた事でコーヴァスに掴みかかろうとするが、アイリスが強引に連れて行く。ジャックは電波変換し、ジョーカーと共に相手に向き合った。
相手は電波変換しているらしく、全体的に茶色の体。両肩に犬を象った装甲がある。その犬のおでこに当たる部分には爪で切り裂いたようなエンブレムがあり、それぞれ色が違うようで、右は赤、左は青だ。

そいつは後ろにウイルスの大群を率いて話しかけてきた。

「やぁ、ここがサテラポリスの戦力の集まっている学校だね？　僕はドッグ・ツイン。猟犬座のＦＭ星人と電波変換しているんだ」

「……猟犬？　両肩（りょうけん）とかけてんのか？　……っつうか、お前、歳いくつよ？　ガキっぽいけど……」

ジャックは笑いを堪えている。相手の背からしてどう見ても中学生以上なのに子供っぽいしゃべり方。そして、両肩についている犬は『猟犬』とかけているという推測に、我ながら笑いのツボにハマったらしい。

ドッグ・ツインはムッとした様子で言い返してきた。

「失礼だな君は。これでも１５なんだけど……」

『……本当にお前は緊張感を持った方が良いと思うが？　いちおう、元ＦＭ星親衛隊、それもＦＭ星親衛隊の双翼と呼ばれた僕らのパートナーなんだから』

『ケッ！！　兄貴はいっつもお堅いよな～。楽しめりゃあ良いじゃねぇか。なっ、ケンジ！』

「うかつに敵にこっちの情報を与える方もどうかしてる。おや？　君たちどうしたの？　驚いてるようだけど……あぁ、なるほど。

僕は２人のＦＭ星人が１人の人間と電波変換しているんだ。だから、その２人が僕についてるのは至極（しごく）当然。ちなみに名前は『氷牙』と『炎牙』」

ドッグ・ツインはジャックたちの疑問を察して答え、最初に話した方（　青エンブレム　）の名前を教え、次にラフな話し方のほう（　赤エンブレム　）の名前を教えた。

だが直後、２体からは『』お前も人の事いえないだろ！！』』と怒られていた。

ジョーカーはミサイル・ストリームの構えを取りながら尋ねる。

『……貴様は闘う気があるのか？』

ドッグ・ツインはそんなジョーカーを見て笑みを消す。

「……そうだね。それじゃあそろそろ、始めようか」

ドッグ・ツインが手を前に出した直後ウイルスが襲ってきた。

通常、ウイルスが相手なら基本能力の差で圧倒できる。そして人間には『慣れ』という武器があり、それはこの場合、相手の強さや種類が同じだと、それを倒すのに慣れてきて1体辺りを倒す体力が少なくなる事を言う。

しかし、時折レベルの違うウイルスやドッグ・ツインが攻撃を仕掛けてくるのでジャックとジョーカーの体力と気力は効果的に削られていく。

「スキあり！　ハウリングファイア！」

「しまっ……」

ドッグ・ツインの右肩から炎を吐き、ジャックに攻撃してきた。

ジャックはたった今目の前のウイルスを倒したばかりで後ろにスキができているので防御体勢すらできない。

ブォォォォ！

炎が勢いよく燃え上がる。

「……あれ？　熱くねぇ……」

背中にあるはずの暑さがない。ジャックは慎重に後ろを確認すると、ウイルスが代わりに炎を受けていた。

「……何で？」

『……アイリスか』

ジョーカーは、戸惑っているジャックのそばに来て呟き、同時にエレベーターの方を見た。ジャックもつられて見てみると、アイリスは息を切らせながら走ってくる。

『スバルさんたちに事情を説明して、私は一足先に……』

言葉の途中でウイルスが襲ってきたので、アイリスは自分に襲い来るウイルスを操作して相打ちさせる。それを見てドッグ・ツインは目を眇めてアイリスを見た。

「……どうやら厄介な能力を持っているみたいだね。君を先に倒すことにするよ。はぁ！　……サウザンドブレス！」

力を溜めて、両肩の犬の口から炎と、冷気の塊のようなモノを無数に吐き出してきた。途中で味方のウイルスも倒していくが、それは逆に言えば先程のようにアイリスの力でウイルスを利用されることが無くなることも意味する。

３人はそれを察したのか、急いで攻撃範囲外に出ようとする。……しかし、残ったウイルスがアイリスの前に壁を作った。

「言ったはずだよ。君は厄介だから先に倒すって」

『……この状況は好都合』

ドドドドドォ！！

アイリスが呟いた直後、幾千の攻撃が当たった。
攻撃による煙と冷気と炎による水蒸気が消えた時、ウイルスの壁がアイリスを守るようにそびえ立っていた。ドッグ・ツインは心底驚いた様子だ。

「驚いたな！　まさかそんな数まで操れるなんて！　……でも、無傷ではないようだね」
『……クッ』

ドッグ・ツインの言う通り、アイリスは無傷ではなかった。そびえ立った壁には所々穴が開いており、そこから攻撃を食らったのだろう。アイリスは崩れるようにひざをついた。
ドッグ・ツインは次の攻撃の準備を始めている。
アイリスは思わず目を閉じるが、完全に閉じる寸前に2つの影が目の前に立ちはだかる。反射的に目を開けたアイリスの前にいたのは、ジャックとジョーカーだった。

『2人とも、どうして……』

アイリスの問いに2人は【　当然　】という口調で答えながら、ドッグ・ツインに攻撃の構えをとる。

「スバルの甘さに感化された」
『……ツバサから、テスト中お前を守るように頼まれている』
「あはは！　よかったね、おじょうさん。一緒に逝ってくれる人がいて。……それじゃあ3人とも、さっさと逝っててね！」

ドッグ・ツインはそう言うと再び先程の技、サウザンド・ブレスを放つ。ジャックはグレイブクローで、ジョーカーはミサイルストリームで相手の弾を撃墜していくが、弾数が多すぎて徐々に追い込まれていく。

「そぉら、もうすぐ当たるよ？」
「チッ！」
『ここまでか……』
『……ツバサ……』

3人が諦めかけた時、日頃よく聞いている声と閃光が、その場を裂く。

「ロックバスター！！」
「ぐあッ！　……もう応援が来たか……」
「みんな！　大丈夫！？」

ロックマンはドッグ・ツインへの警戒を怠らずに3人のもとへ来た。

「……遅せぇよ」
『ロックマン、ありがとう。……ツバサは？』

ジャックは本気ではない悪態をつき、アイリスが尋ねた事にジョ

ーカーも目で聞いている。

「ツバサ君なら、……あ！　待て！！」

スバルが少し目を離したスキにドッグ・ツインは逃げ出そうとしたのだ。スバルは即追おうとするが、別の声がそれを止めた。

「スバル動くな！　……グラビティステージ！」

「うわ！？　か、体が重い……」

屋上のフェイスに手をかけた所でドッグ・ツインの体は地面に押し付けられた。声のした方を向くと、ツバサが校舎の壁に寄り掛かってエアディスプレイを展開していた。

……どことなく怒っているようにも見える。

「おい犬、こちとら1週間近くまともに寝てねぇんだぞ？　オレに何の恨みがあるんだ」

ツバサはひたいに怒りマークを浮かべながら聞いてくる。目の下のクマも合わさって恐さ倍増だ。ツイン・ドッグは恐さで口を引きつらせながらも反論した。

「い、いや、それは僕とは関係ないん……じゃ！？」

「うるせぇ。グラビティステージ追加するぞ？」

（（言う前に追加してるよ！　……もしかして八つ当たりを兼ねてる？））

スバルとジャックは内心で怯えながらツッコンだ。そして、言葉の途中でグラビティステージを追加されてツイン・ドッグは顔面を地面に押し付けられている。さらに、ツバサは追い討ちをかけるよ

うに言葉を重ねた。

「……おとなしく捕まれ。そうすれば命は保障する」

「ふん！　イヤだね！　……炎牙！、氷牙！　あれいくよ！」

『『おう！　／　しょうがないね……』』

「エンド・ブレス！！」

ドッグ・ツインの声と共に、２体の口からすさまじい勢いで赤と青の光線が発射される。それはロケットのようにドッグ・ツインの体を持ち上げた。

「……ふぅ～。まさか僕たちの最強の攻撃技が脱出に使う事になるなんてね。それじゃあ、逃げさせてもらうよ」

「そうはいかない。スバル！　ジョーカー！　あいつの肩についてる犬の口を狙え！」

ツバサの指示に応え、、ロックマンはロックバスターを、ジョーカーはミサイルストリームを構えるが、突如空に発生したノイズウェーブに驚き、思わず腕を止めた。ジョーカーは眉間にしわを寄せている。

アイリスとツバサは大体の推測ができたようだが、ツバサはやれやれといった感じで息を吐き、アイリスのほうは戸惑っている。

『あれは……まさか、ノイズムたちが……？』

アイリスの戸惑いにドッグ・ツインはノイズウェーブの入り口に手をかけながら得意げに答えた。

「うん。全てではないけど、ノイズムが仲間になった。こいつらの情報網のおかげでこの学校に主要メンバーが居る事が分かったんだ

しね。……じゃあ、またねヒーローたち」

そう言うなりノイズウェーブは閉じた。つまり、逃げられたのだ。

ツバサは頭を掻きながらため息をついてスバル達の方を向いた。

「ほらほら、いつまでも逃げられた事で落ち込んでないで、ケガしたやつ手を上げろ」

ジャックとジョーカーは敵の数の関係でウイルスから攻撃を食らったが大したものではない。問題なのはアイリスで、腕や足に数発浴びている状態だ。

ツバサはアイリスの傷を近くで見ながら顔をしかめる。

「……治るまでオレのハンターの中に入ってろ。ケガが治るまで出るなよ。分かってるとは思うが、コピーロイドは現実世界に置いてけ。ついでにコピーロイドの方も点検したいからな」

『うん。……ツバサ。実は今朝キングからの報告で、ノイズムたちの情報に統一性が無くなってきたって……。……先程のツイン・ドッグの言葉からしてたぶん……』

「……今はケガを治す事だけ考えろ。帰ったら即行で治してやるから。……サテラポリスに連絡を入れるようにミソラに頼んだから、もうすぐ来るはずだ」

その後すぐにサテラポリスが来た。報告はひとまず待ってもらって、スバルたちは帰路についた。

今日はみんなやけに疲れているようだ。テストの忙しさと、逃げられたショックからだろう。スバルは目だけをツバサに向けて尋ねた。

「アイリスは大丈夫なの？」

アイリスは、少しでも回復するためにスリープモードに入っている。ツバサはコピーロイドをおぶりながら自分のハンター（アイリスが入っている）を見た。

「……けっこうダメージを受けてるけど、絶対に治すよ」

「お前はどうなんだ？　睡眠不足な上にそれ重くねぇか？　どうせオレもＷＡＸＡに帰るから、コピーロイドをお前の部屋まで持ってやってもいいぞ」

「それは助かる。明日から土日でゆっくり休めるといっても、今のうちに少し休みたいんでね。悪いけど……頼むよ」

ジャックはツバサの背のコピーロイドを指差した後、ツバサはジャックにコピーロイドを渡し、倒れるように眠りについた。ジョーカーはそれを受け止めて背負う。

『……ジャック、ゆくぞ』

「おう。またな、お前ら」

ウォーロックとコーヴァスもそれぞれ別れを言い、それぞれの家に帰っていく。

第１６話　猟犬（両肩？）（後書き）

次回は久々にｘｘｘＨＯＬＩＣのキャラが登場します。・・・どっちかっていうと、ツバサクロニクルの方があの人の出番多いですけどね。

感想等あればお願いします。

第17話　パフェと夢の中（前書き）

今回と次の話はＨＯＬＩＣの要素が多少多いです。

あ、スバミソもありますよ。さすがに一緒に寝るのはいちおう小学生なので自粛してもらいますが、デートくらいなら・・・ね。

第17話　パフェと夢の中

――――――土曜日・星河家――――――

ドッグ・ツインとの戦闘から夜が明け、今の時間は午前10時。
スバルはミソラに叩き起こされた。

「スバル君おっきろ～！」
「うわ！？　ミ、ミソラちゃ……苦し……！」

ミソラは掛け布団をスバルの顔面に持っていき、口と鼻を塞いだ。
スバルは、ジタバタしながらもなんとか脱出し、1階におりる。
1階に下りるとサテラポリスの隊員がいた。聞けば、暁さんが護衛として寄こしたそうだ。スバルとミソラはお礼を言って、隊員はその後すぐに出て行った。何でも、別の任務が入ったらしい。
遅めの朝ご飯を食べたあと、ミソラはすぐにスピカモールに行こうと言ったが、急に動くと体に悪いということで少し休憩してから行くことにした。
そして、今はテレビを見ている。

『次のニュースは、またもウィザードが暴れる事件です。場所は――』
「……最近こういうニュースばかりだな……」

大吾は顔をしかめながら言う。最近テスト勉強で忙しかったので知らなかったが、最近ウィザードの暴動が増えているらしい。大吾の話では、それらは皆、人間よりウィザードの方が優秀。とか、人間が気に食わない。とか言っている連中らしい。時期的に、ゲンブ

の事件からこういった事件が増えてきたそうだ。
そういえば前に授業で１６０年前にも似たような事があったらしいが、その時はどれ程の被害が出たのだろうか……。
スバルの思考はここで止まることになる。なぜなら……。

「……スバル君、そろそろおなか落ち着いた？」
「え？　あ、うん」

ミソラが話しかけてきたのだ。スバルが答えるとミソラは満面の笑顔になってスバルの手を掴む。

「そっか！　それじゃあ、スピカモールへしゅっぱ～つ！！」
「うわぁ！？　ちよっとミソラちゃん！　そんなに引っ張らないでよ！　いたい！　いたい！」

２人は仲良くウェーブライナーまで走った。……スバルの方は『引っ張られた』の方が合ってるが……。

――――そのころＷＡＸＡ――――

「では、次はキングからの情報です」

昨日の戦闘で多少なりともノイズムが敵の手におちた事に対し幹部クラスと、作戦遂行部隊の代表として暁とツバサを交え、会議が行われていた。
キングは一同の前で礼をした後に本題に入った。

「まず、我らの情報網からだが、
世界各地で起こっているウィザードの暴動は先日のゲンブ・アースの事件から増えてきている。おそらく、人間に反感を抱いていたウィザードたちが例の組織、ファイブ・エレメントが現れた事で、ミキ状植物にすがるツル状植物のように、組織自体を1つの象徴、または希望として立ち上がったモノと思われる」

長官はあごに親指と人差し指を触れて悩むような仕草でキングに質問した。

「たしかにここ最近世界中でウィザードの暴動が増えている……。それで、ノイズムたちの方はどうなっている?それに、ドッグ・ツインはなぜノイズウェーブを行き来できたのだろう……?」

「昨日の戦闘でドッグ・ツインが言った通り、ノイズムのメンバーの中で連絡の取れないものが5体いる。我々の情報網となっていた者は全部で20体だから、今は15体だ。……あちら側に寝返る者がこれから先いないとも言えない。十分警戒するべきだろうな。
そしてドッグ・ツインの方だが、奴らはゲンブ戦においてエースPGMを無効化する事が出来ることが分かっている。それはつまり、エースPGMを解析しつくしたという事。ならば、ノイズを無効化できても不思議ではない。……と、私は推測する」

それはつまり、ノイズを無効化できればノイズウェーブも通れるということでもある。
キングの真剣な目に隊員（幹部クラス）は目を丸くした。つい数ヶ月前までさんざん自分たちを苦しめた人間がここまで献身的なのだから、今6月だけど雪が降るんじゃないか?といった雰囲気が辺りを包む。そういった感情にならなかった者はヨイリーだけだろう。

そんな訳で、ヨイリーは周りを気にせずキングに尋ねた。

「それで、私たちはこれからどうするべきなのかしら？　あなたの意見が聞きたいわ」

「情報の方は、わたしやアイリスに任せてもらおう。
暴動の方は各地に電波変換メンバーを配置するのがベストだが、現在電波変換メンバーは多くもないのだろう？　それなら、せめて今電波変換できる者に協力を求め、
ソレと並行し各国のＷＡＸＡ支部に連絡して主要都市を中心に警護。
さらに移動用の空港とスカイ・ウェーブを死守するように言う。
……といったところか」

「……そう、そうね。本当に助かるわ。Ｍ．ｒキング、あなたが味方で」

「……こんなことで私が犯したことの罪が無くなるわけではない。ＷＡＸＡ諸君がなんと言おうと、私は私の意志で手伝わせてもらう」

キングのこの言葉に、老官の多くはまだ疑っているようだったが、比較的若い幹部たちのキングに対する疑心は完全に晴れた。

（歳をとると頭が固くなって困る）

暁は内心でそう呟いてキングの事でツバサに尋ねる。自分を育てたあのキングとはずいぶん違う、いや、違いすぎるからだ。

「（なぁ、お前が会った頃のキングって本当にあんな熱血くんだったの？）」

暁が小声でツバサに尋ねると、資料を手に持ったまま寝ていた。
ツバサは、昨日の戦闘から帰って目覚めるなり、アイリスの静止も聞かず2人を治したそうだ。コピーロイドも治そうとしたが、偶然暁が部屋の前を通りかかり、ツバサをなんとか寝かしつけたのだ。
しかし、やはりそれでも眠いらしく、ご丁寧に目まで開いて寝ている。

（ったく、こんな状態で寝られるなんて、師弟そろって大物だな。こりゃあ頼もしい）

暁はため息に笑いを含んで、前の方からツバサが見えずらくなるように自分の体を少し机に寄せた。

――――スピカ・モール――――

正午近く、スバルとミソラは買い物を楽しんでいる。もちろんミソラは変装をしているので周りがパニックになる確率は下がるだろう。
そして今現在、2人とも遅めに朝ご飯を食べたのでまだお腹が空かないらしい。だが、スバルは早く座りたかった。さっきからミソラに振り回されてクタクタなのだ。
かといって……。

「ミソラちゃん、少し休まない？」
「だ～め。2週間分のガマン、今こそ発散してやる～！」

何を言ってもこんな感じで、スバルは逆らえないでいた。1時間後、さすがにお腹が空いてきたので2人は昼食をとる事にする。

「……ミソラちゃん……。それ、本当に全部食べるの……？」

スバルの目の前にあるのは料理の山。向かいに座るミソラが見えないほどだ。

「もちろん！ここの料理おいしいって評判なんだ～。その上クレープも雑誌に載るぐらいだから1度スバル君と一緒に食べたいなって思ってたの！」

（……僕と一緒に食べたかったってのは嬉しいけど、これは全部僕のおごりなの？念のためおこずかいは多めに持ってきたけど……今日で尽きるかもな……）

スバルがそんな事を思っているうちにどんどん目の前の料理の山は無くなっていく。その様子を、スバルは自分の頼んだハンバーグを食べながら思った。

（やっぱりミソラちゃんの胃袋って、ブラックホール？）

「おや？どうしたのかなスバル君。……もしかして、変装した私に見とれてるのかな～？」

ミソラは小悪魔のような視線を送ってくる。スバルは真っ赤になるほど焦って手の平を振る。

「そ、そんなんじゃないよ！　……っていうか、ミソラちゃん最近僕の事からかうの多くない？」

冷静な言葉とは裏腹に、スバルの心は沸騰していた。ハープにはスバルの心の中がほぼ分かったらしく、クスクスと笑いながらスバルに話しかけてくる。

『うふふ。それだけスバル君に打ち解けてるってことよ。もっと自信を持ちなさいな』

「ハープ……自信ってどんな自信……」

『ははは！　女を口説くための自信じゃねぇの……がぁ！!?』

『……あんたは何度言ったら気が済むのかしら?』

ウォーロックがハープの手で気絶させられ、店の外に運び出されていくのをミソラとスバルは苦笑いして顔を見合わせ、何となくそれも照れくさくて2人は食事を再開した。2人ともほんのり顔が赤い。

その後2人はデザートとしてパフェを食べた。

「ありがとうございました～」

定員の言葉を背に店から出た時、スバルの目の前はもうろうとしている。

ハンバーグは並みの量だから良い。問題はパフェの方で、以前ロッポンドーヒルズで食べたフジヤマパフェよりさらに上があるとは思わなかった。

「く、苦しい」

『……今かる～く腹に衝撃を与えたら一気に出そうだな』

「ウ、ウォーロック……冗談でもそんな事言わないで……。本当に苦しいんだから」

スバルとウォーロックの様子にミソラは心底申し分けそうにスバルに謝る。

「ゴメンね、スバル君。つい自分の目線で見てたから……」

「だ、大丈夫！　あと３０分くらい座ってれば落ち着くと思うし……」

「……うん」

その後、スバルの体調を案じたミソラは、当初の計画を変更して早めに家に帰ることにした。ちなみに、その日の星河家の夕飯はハンバーグで、スバルは口元がひきつったそうだ。

――――ＷＡＸＡ――――

皆が真剣に会議をしているそんな時、ツバサは寝ていて、さらに夢の中でため息をついた。

「はぁ～。大抵の人間は寝てるときに脳を休めるそうだけど、オレにとって夢も１つの世界なんだよな～。……まぁ、オレ自身が『カギ』だから仕方ないんだけど…。しかし、何でこう疲れてる時に限ってこっちに来ちまうのかねぇ。おまけに――」

「誰かが話しかけてくる……か？」

独り言を遮ったのは、突然現れた厳つい顔の男性。強い意志の他に、望みのためなら何者も犠牲にするという冷徹な目をしている。

ツバサは目に警戒の色をもって男を捕らえた。

「あぁ。あんたみたいな無粋なやつとかな」

「フフッ、お前が疲れている時はこっちの世界に干渉しやすくなると言うわけか……」

こっちの言葉を無視して男は勝手に納得する。ツバサは不機嫌さも加えて男に問う。

「……用件は何だ？」

「お前のいる世界に面白いものがあるそうだな。それを使えば、我が望みも前進しやすくなる。……我が願いが叶えば、お前も恩恵に与らせてやろう」

つまり協力しろという事らしい。男は狡猾で不敵な笑みを浮かべ、ツバサは目の色を警戒から敵意に変えて負けじと不敵に薄く笑う。

「ふっ、願いね～。『死者をよみがえらせる』……だっけ？　生憎（あいにく）だが、この世界の人間をお前の目的のための餌（エ）にさせるわけにはいかない。……おおかた、蟲（コ）とかの『創り出されたモノ』でこっちの人間から魂を抜き取る気だろ？

おまけを言えばこの世界の、２人の偉大な博士たちが考案したシステムで人々の心を闇に染め、抜き取りやすくする気かな？」

自分でも喋りすぎた自覚はあるが、それ以上にいま目の前にいる男の仏頂面（ぶっちょうづら）を崩したいという思いから言葉を重ねる。

予想どおり、言葉を重ねるに比例して男の目が鋭くなり、眉間にしわが寄ってきた。

（大抵の子供が泣き出しそうな顔だな～）とかツバサは心の片隅で思いながら男の様子を伺う。

男は怪訝そうな目でツバサを見てきた。

「……貴様は何者だ？　お前のいる世界には、魔法や呪術の知識は無いはず」

問われたツバサはニコッと笑って目の前の人物なら分かるであろう名乗り方をした。

「夢は終わらせないとね。……飛王（フェイワン）・リード？」

飛王・リードと呼ばれた男はツバサの言葉、そしてその笑っている時の顔で、ほとんどを悟ったらしい。目を驚きで見開いたあと、不敵な笑みを浮かべた。

「フッフッフ。……まさか次元を超えてもわたしを邪魔するとはな。クロ――」

「失せろ!!」

飛王（フェイワン）の言葉の途中でツバサは叫びながら手を水平に振り、それと共に飛王・リードは霞（かすみ）のように消え、残されたツバサは嫌悪感と共に呟く。

「……その名前は嫌いなんだよ……」

その時、水に波紋が広がるように声が響いてきた。

『・きろ。会議・ったぞ』

「……暁かな？　……そろそろ夢から出るか」

夢から出ようと目を閉じたツバサに、不吉な単語が聞こえてきた。

『フ・ダブ・・・ング！（弱）』
「えっ、ちょっと待っ――！」

――現実――

ドン！　バシ！

「うぎゃあぁぁぁ！！」

ジョーカーのフルダブルスイングで夢から覚めると自分は仰向けになっており、暁とヨイリーは口元に笑みを浮かべ、アイリスは容赦なく呆れた目を送り、長官は怒った顔。ジョーカーはいつもの無愛想で、それぞれツバサを見下ろしている。……キングは帰ったようだ。

長官はこめかみに青筋を浮かばせてツバサに詰め寄った。

「目覚めはどうかな？　ツバサ君……」
「最・悪・です」
「それでは、最悪ついでに今から私の部屋で説教といこうか」
「ぐぅ。ア、アイリス～」

ツバサはアイリスに助けを求めるが、アイリスははっきりと断言する。

『さすがに会議開始からずっと寝ていたのでフォローはムリよ。この機会に生活習慣を改善して』
「せ、生活習慣って？」
アイリスは【何をとぼけているのだろう】と言いたげな顔でツバサを見る。
『……昨日は何時に寝たの？』
……おまけに怒っているらしく、アイリスが顔の上半分に影を帯びている。正直恐いので、ツバサは正直に答えた。
「……今日の４時です」
「お前いつもそんな時間に寝てんの！？」
暁は思わずと言った感じで口を挟んだ。そして周囲の者はツバサの肩に手を置いてツバサを見る。
「「「「『『『『　マジで生活習慣を改善して早く寝ろ……！」」」」』』』』
その時の全員の声は見事に揃っていたそうだ。ちなみに、アイリスは１人ため息をついている。

第17話　パフェと夢の中（後書き）

今回の話でＣＬＡＭＰファンはツバサの本当の名前が分かっちゃいましたかね?でも、いずれツバサ自身の口で言ってもらうのでまだ内緒でお願いします。

長いですが補足として、
蟲（コ）は飛王・リードの創ったモノです。
人の抑制心を麻痺させて、日頃我慢したり耐えていたものを露出させる。そして、生き物としての根幹である『魂』を吸い出す。吸い出された者はぬけがらのようになります。・・・飛王・リードがより大きな術を使うための『いけにえ』ってやつですかね。

「まとめると、心が荒れるように仕向けさせ、そのスキに魂を抜き取るってやつだな。」

ツバサ、うまくまとめてくれてありがとう。次はいよいよ次元の魔女が本編で登場します。お楽しみに。

第１８話　魔女（前書き）

ジャック、ミソラ、ツバサが転校してきた時の話が出てきます。忘れた方は、１度第５話の『３人の転校生』を読む事をオススメします。

第18話　魔女

――日曜日――

スバルとミソラ、2人のウィザード2体はアイリスのケガの具合を聞きにWAXAに来ていた。昨日のうちに来たかったのだが緊急会議があるらしく、結果として今日くる事になったのだ。

「大丈夫かな……。アイリス……」

WAXA内の通路を歩きながら呟くミソラにハープは励ますように話しかける。

『ツバサくんもいるし、大丈夫よ』

「……うん。そうだね」

少し元気が出たらしく、ようやく彼女の笑顔が戻った。スバルとウォーロックもその笑顔を見て胸をなでおろし、ツバサの部屋の前に来たのだが……。

『ただいま安眠中。起こしたらコロス。by.ツバサ』

というプレートがドアに掛かっており、2人と2体は呆然とした後、仕方ないので食堂に向かった。そこにちょうどアイリスとジョーカーも居て、なんでもゆっくり寝たいからとの理由で追い出されたらしい。本来の目的がアイリスのお見舞いだったのでアイリスに

具合はどうかと聞いたら、すっかり治ったそうだ。
そのあと人間組は食堂のコーヒーを頼み、皆で他愛のない話をしていた。

――――いっぽうツバサの部屋――――

寝息が聞こえるはずの室内から聞こえたのは数人の話し声。
ＷＡＸＡの壁はセキュリティの関係で防音仕様になっているので、スバルたちは聞き取れなかったのだ。

「……ってわけ。たぶん、飛王（フェイワン）・リードはオレの正体に感ずいただけだろうね」

ツバサは昨日の夢の事を話した。そう、実はツバサは寝ていなかった。

「そぅ。……それで？　あなたはどうする気なの？」

答えたのは見た目２０代の女性。黒髪で長髪、華やかな着物を着ている。
しかし、その女性が映っているのはエアディスプレイではなく、以前スバルに運ぶのを手伝ってもらった鏡である。

「たぶん飛王（フェイワン）には破れないと思うけど、念のために各地の結界を張りなおしてこようと思う」

女性は飛王・リードの性格を思い出したからか、感慨深げに眉を寄せた。

「あの男の事だから、あなたの居る世界には意地でも介入してくるでしょうからね。たしか……結界用の『扉』は４つだったかしら。……けど、なぜ私にわざわざ言いに来たの？」

「きたの～？」

「きたの～？」

女性の言葉をそれぞれ時間差で繰り返したのは女性の隣に立っている２人の少女。

一方は黒服で水色髪のおさげ。髪の長さは自分の身長より長い。名前は『マル』。もう一方は白服で桃色髪。髪はおダンゴ頭で、髪の長さは短い。名前は『モロ』だ。

ツバサは自分の考えを再確認するようにゆっくり話した。

「……人が話す、行動する、心に思い浮かべる。そして気づく。それだけでも大きく未来は変わる事があるんだから、大きなチカラが動いたり、知らなかったモノを知ったりすると、余計に誰かの生き筋を狂わせるかもしれない。

それに、オレむやみやたらに魔力を使うわけにもいかない。……その世界にない知識や力は、何かと疎(うと)まれる原因になるからできるだけ使いたくないしね。そんなわけで次元の魔女……。いや、侑子さんにお願いしようと思ったってわけ」

「……なるほど。つまり、結界を張るためのチカラ、または知識をくれと。そういうわけね？」

ツバサは頷き、侑子と呼ばれた女性は目を閉じて少し考え始め、やがていい手が思いついたのか、目を開けた。

「……1番手早く済むのが、あなたが自分の魔術（チカラ）で封印する事。ただし封印の間、誰にもそれを見られず、聞かれもしないこと」

「……あんたに支払う対価は無し？」

ツバサは腑に落ちないという顔で侑子に尋ねた。侑子は笑顔でソファーの横端に頬づえをつく。

「対価はもちろんあるわよ。でもそれ以前に、魔力の事を誰にも知られず、聞かれもしなければ問題ないでしょ」

侑子のやや呆れような口調に反応するのは置いといて、ツバサは口に運んでいたコーヒーを止めて一言呟く。

「……そなの？」

その言葉に対し、鼻で笑うモノがいた。

「フッ。バカだなー。そんなことも知らなかったのかツバサ？」

知らなかったのはオレ自身ってことで、非がこちらにあるのは自覚している。それに、バカにしたのが経験豊富な年配者なら分かるし、苦にも思わない。しかし、いま言ったのはどう見ても1頭身マスコットの不思議生物……。

怒りという感情のままに、ツバサはその不思議生物にツッコンだ。

「だまれ黒まんじゅう！」

「プ――！　モコナはモコナ！」

モコナと呼ばれた存在は、当然の事ながら怒っている。だが現実には、一見して黒まんじゅうにしか見えないほど丸かった。正確には楕円（だえん）の方が正しいが、それが中に浮かび、喋っている時点で人形でない事が分かる。異世界で旅をしている４人との通信用の存在だ。

それはそうと、１人と１匹、否１モコナの間でケンカが勃発したので侑子が止めに入った。

「ハイハーイ、ケンカはそこまで～。それじゃあそろそろ、思い出させてあげた対価を貰おうかしらね～。……ベッドの下に隠してあるモノを貰おうかしら？」

「へいへい。……あぁ、『無月』か。……この酒、手に入れんの苦労したんだけど……」

ツバサはおずおずと尋ねる。しかし、彼女は実際の所、目の前の酒にしか目と心は行っていないのだろう。侑子は見た目だけ毅然としてツバサに言葉をかけた。

「大事なものだからこそ、対価にちょうどいいんでしょう？」

「はぁ～」（この大トラ！　＋（プラス）毒牙女！　考えてることがモロバレなんだよ！）

ツバサは内心で悪態をつき、それをため息で隠した。そして、無月（芋焼酎（いもじょうちゅう））を鏡の前に置き、呟き始める。同時に床には、ツバサを中心として魔法陣が浮かび上がった。

真ん中には太陽が、その隣には魔方陣全体の半径より少し小さいくらいの円が描かれており、その中に三日月が描かれている。

細かく言えば、中心の太陽を囲うように四角形が３つ、少しずつずれて描かれており、

ずれた時に生まれるスキマには、星占いで使われる黄道１２星座の

記号が書いてある。
三日月を内包する円は四角形をまたぎ、太陽の1番外側に接している。
そして、それら全てを囲むように、大きな円で囲ってあるという魔方陣だ。

「・・・の名の下に、我は汝(なんじ)を飛ばそう。はばたけ…向かうべき彼(か)の次元へ……」

そこまで言った瞬間、魔方陣は輝いた。光が収まった時にはツバサの足元の無月は消え、鏡に映る侑子の手に納まっている。
侑子は軽く微笑みながら送られてきた酒を見た。

「……腕は落ちていないようね。それも、私のような特定の使い手でない限り、魔力の類(たぐい)の行き来は出来ないようにもしている。さっすが別の次元の陰険メガネ！　腹立つくらいあいつにそっくりで感心するわ。
それに、あなたの名乗っている名前、特に名字の方はほとんど知れ渡っていないんでしょう？　本当、そういう面はあいつと同じで抜け目ないわよねぇ」

陰険メガネというのは、別の次元に居たもう1人のツバサのあだ名らしい。『居た』というのは、その人はもう故人(こじん)だからだ。
そして事あるごとに陰険メガネと言われているツバサは、苦笑しながら侑子に言葉を返す。

「い、陰け……。あいかわらず酷い言われようだな～。
まぁ、名字のほうは、『恥ずかしいので1番最後に紹介してくだ

さい』って先生に頼んだからね。ミソラちゃんには悪いけど、彼女の人気に便乗してオレの存在を隠させてもらったよ。……この名字は、飛王（フェイワン）・リードから力を奪うのに必要だからな。

そういや、あんたの所のバイト君は元気？」

ツバサは思い出したように尋ねた。侑子のところには1人バイトがいる。別の世界で旅をする4人の中の1人と、特に深い縁（えにし）を持つ者だ。

侑子は「ふふ」っと笑ってツバサの質問に答えた。

「四月一日（わたぬき）ね。ええ、おもいっきり元気よ。変な動きでツッコミまくって面白いわ」

侑子の言葉に答えるように、マルとモロもふざけるように歌っている。

「「四月一日（わたぬき）♪　四月一日（わたぬき）♪　変な動き～♪　変な動き～♪」」

「お・ま・けに微妙～なツッコミだ～！！」

コーラスの最後はモコナが締めくくり、侑子とツバサは大爆笑。ツバサは笑いが収まらないまま、安心したように3人と1モコナに話しかけた。

「あははは！　その様子だと元気でやってるようだな。おまけにモコナも、マルとモロも、四月一日（わたぬき）になついてるみたいだし」

「むっ、ちがうぞツバサ！　四月一日（わたぬき）がモコナにメロメロなんだ！」

モコナの反論にツバサが言葉を返そうとした時、侑子が思い出したように口を開く。

「……あ、そういえばツバサ。あなたまたアイリスちゃんに心配かけてないでしょうね？　あの子優しいから、例の計画にも反対だったからね」

ツバサは気まずそうに目を逸らし、自分の人差し指で頬を掻いた。

「……最近は忙しいし、心配はけっこうかけてるかな。昨日なんて早く寝ろってＷＡＸＡの皆にも言われたし。っていうか、たまに口を挟んだと思ったらソレかい！

……あ、悪い。そろそろアイリスとジョーカーが起こしに来そうだから切るな」

外から数人の気配を感じる。

「えぇ。それじゃあ……アイリスちゃんにあんまり心配かけちゃだーめよー♪」

侑子は最初は真顔で、途中からふざけるような顔で手首を振ってマル、モロ、モコナも順番に悪乗りする。

「だーめよー♪」
「だーめよー♪」
「だーめーよー♪」

４人の悪乗りに対してツバサはひたいにムカマークを浮かべて口元を引きつらせて外に聞こえない範囲で声を上げた。

「遊んでないでとっとと行け！！」

ツバサのツッコミと共に、３人と１モコナは鏡から姿を消す。直後、

ドアをノックする音がしたので、慌ててツバサは「今起きました」という顔を作ってベッドに座った。

「ふぁいっていいぞ～」

我ながらご丁寧に眠そうな声まで出して。

案の定入ってきたのはアイリスとジョーカー。……スバルたちも入ってきたのは少し驚いた。

「よぉ、スバルたちも来たか」

「うん。ぐっすり眠れた？　あんまりアイリスに心配かけちゃダメだよ」

ついさっきも知り合いに同じ事を言われたツバサは苦笑しながらベッドから立ち上がる。

「分かってるよ。……っていうか、いままで3回も〈地球の危機〉って事でさんっざん色んな人に心配をかけたスバルにだけは言われたくない！」

「ねぇ、この写真なに？　ツバサ君と誰かがケンカして、大人の人が止めてるけど」

スバルがたじろいでる時にミソラが指差したのは、いつだったかアイリスが持ってきてくれた写真だ。

ツバサは乾いた笑みを浮かべながら答えた。

「あぁ、それはオレの養父（ようふ）と、その親友と、その息子さんだよ。

オレとケンカしてんのが来斗（ライト）のアホ。

来斗の上に写ってんのが、その父親の光熱斗（ネット）。隣がその奥さんの光メイル。

……んで、オレの後ろにいるのはオレの養父の帯広（おびひろ）シュン。
ん？　お前らどうした？　ＤＶＤの一時停止みたいに固まってるぞ？」

その声で目が覚めたスバルたちは、今度は早送りの様にツバサに詰め寄った。

「そりゃ固まるでしょ！？　あの有名な帯広博士の養子で、光博士とも知り合いみたいだし！」

光博士の事は本当に有名だ。現在の『ブラザーバンド』の原型の理論である『キズナ理論』を立案した人物で、帯広博士のほうも光博士と肩を並べるほどの科学者だからだ。

「それに養父って事は、ツバサ君の名字は『帯広』のはずなのに、なんで飛王（ひおう）って名乗ってるの！？」
『っていうかアホって何だ！　アホって！？』

スバル、ミソラ、ウォーロックが続けざまにツッコミをいれ、ツバサはうるささで耳を塞いでいる。ちなみにハープは冷静に成り行きを見ている。

この状況をはぐらかすのは困難と判断したツバサはため息をつき、昔の事を思い出すように目を閉じて話し出した。

第１８話　魔女（後書き）

念のために、ツバサがモコナにバカにされたときの『オレ』はツバサを指します。

それから、感想、評価のページで「ぬいぐるみキャラが好き。」とは書きましたが、集めているわけではありません。

それと、次回はほとんど回想編です。お楽しみに。

第１９話　帯広博士（前書き）

・今回はほとんどが回想編です。
『――――回想終わり――――』まで、現代で話している人は（スバルたち）「　」で、ウィザードは《》で話して、過去で話している人は「」で書いてます。

・この話の中に、一部酷い言葉があります・・・。

第１９話　帯広博士

［実験のあったアウシュ・イヴル研究所の事は話したよな？　オレはあの後――］

――ロンシャ・２０２７年――

ビシャ！！

道のドブ水が跳ねる。少年は盗みを働き、大人から逃げているのだ。彼にとって自分を実験台にした『大人』という生き物は、みんな敵なのだろう。

……いや、もしかしたら全ての人間が憎しみの対象なのかもしれない。

「はぁ、はぁ、はぁ、」

「待てこのクソガキー！！　……うぉ！？」

追いかけていた大人は、少年の作った落とし穴にはまって動けなくなった。少年はその様子を見てほっと胸を撫で下ろし、手に持った果物を大事に持って逃げていった。

［……そのドロボーがツバサ君？］

［ああ。研究所から逃げ出したばかりってのもあって、オレは金が

無かったからな。こうする事でしか生きられなかった。……そんな毎日の中……」

――――市場――――

（目の前の大人…旅行客か。……ふん！　スッてくださいって言わんばかりのポケットだな。いただくぜ！）

ツバサは大人のポケットに手を伸ばす。……あと3センチ。だが、ツバサの手はターゲットの大人以外の手につかまれる。

「お客さん危なかったネ！　こいつこの辺で有名な『スリ』ヨ！　さぁ、今日こそお前を突き出すネ！」

店の大人（チョイナ辺りから移住してきたらしい）はそう言いながらオレを蹴る。

（チッ、この状況から逃げられる程度に暴れるか……）

ツバサが店の大人を睨みながらそう思ったとき、スリのターゲットの大人がツバサの前に立つ。

「いえ、まだ何も取られてはいないわけですし。……それにまだこんなに幼いのだから、多めに見てはくれませんか？」

（すられそうになった大人がオレを庇った……）

なぜかを考えているうちに、店員は怒鳴る相手をすられそうにな

った客に変えた。

「そんな訳にはいかないヨ！　こいつはスリだけでなく、商品まで盗みまくるからこっちは商売あがったりネ！　……それとも、お客さんが責任とってくれるカ？」

周囲にいい感じの野次馬ができ、今ならドサクサまぎれに逃げられそうだ。だが、ツバサは逃げなかった。なぜかは自分でも分からなかったが……。

自分を庇っている大人は堂々と提案した。

「私は帯広シュン、ニホンの科学者です。私はこの国から技術提供の依頼を受けてこちらに来ました。

この少年は私が引き取ります。その代わり、本来は5年で完成させるシステムを3年で造りましょう。それにより、この地域の通信速度は格段に上がるはずです」

周囲では「あの帯広博士かよ！」という驚きの声が沸いている。店員もその名は知っているようだったが、いまいち納得いかない感じだ。

「帯広博士の実力はこっちでも有名ネ。……いいヨ、引き取りたかったら勝手にするよろし。ただし、1回でもこいつが何かをやらかしたらすぐに警察に突き出すヨ」

「はい！　ありがとうございます！　……よかったね。さぁ、僕が泊まっているホテルに行こうか」

目の前の男は店員が去ったのを見てから話しかけてきた。

帯広と名乗った男は髪は灰色で、目は朱色、歳は３０代後半。

（……立場上一人称は『私』で、本来は『僕』なのか……）

ツバサは、改めて帯広と名乗った科学者をマジマジと見つめる。
帯広は凝視されて気まずかったのか、話を逸らして名前を聞いてきた。

「え～と、君の名前は？」

ツバサはまだ警戒心が解けなかったので半歩帯広から離れて吐き捨てるように言った。

「……自分の名前キライ。」

帯広は不思議そうにツバサを見る。

「……なんで？　君の名は、両親が君の幸福を願ってつけた名じゃないの？」
「ッ！！」

男の言葉に、ツバサは自分の体をこんな風に変えてしまった研究者たちの言葉を思い出した。…あれは研究所で、『逃げたい』という思いから母さんの名前を呼んだ時。

【はっはっは！　お前の両親はよぉ、金と引き換えにお前を俺たちに売ったんだ。お前は、誰からも愛されてなかったんだよ！】

「……酷いね。その研究者も、あなたの両親も。……自分の子供なのに……」

ミソラは自分の事でもないのにやるせない顔をしている。スバルを初め、ウォーロックも歯をかみ締めている。ツバサは励ますように薄く笑いかける。

［君らがそんな顔する事はないよ。……まぁ、その言葉を聞いた夜はショックで眠れなくなったけどね］

その時スバルが気まずそうな様子でツバサに尋ねる。

［……前に、ツバサ君の家の荷物を運んだ後で調べたんだけどさ……アウシュ・イヴル研究所の事件って２０２１年なんだよね？　それから帯広博士と出会うまでの６年間、誰か助けてくれる人はいなかったの？］

［スバルさん…スリをする人間を庇う地元の人間がいると思う？　地元でスリが横行するなんて知れたら、観光客が減るって理由でスリは目の仇（かたき）にされるのに］

アイリスの言葉にスバルは俯いて謝る。

［ごめん］

ツバサはため息をついて話を再開した。

［……帯広博士は、オレが自分の名前を言わない事に頭をひねりながらもこう言ったんだ］

「……君はよほど自分の名前がキライみたいだね。それじゃあ、僕が名づけてあげるよ。そうだな～。引き取るからには僕と同じ名字の『帯広』だとして、名前のほうは……」

ここまで言ったとき、帯広はいい名が思いついたのか「ふふっ」と笑ってツバサに目線を合わせてきた。

「どんなことがあろうと、未来へ自分の翼（ツバサ）で羽ばたく。『ツバサ』でどうだろう？」

帯広は笑顔で、しかし受け入れてもらえるかという不安を目に映してツバサに聞いてくる。ツバサはなんとなく帯広から目を逸らした。今まで嫌悪や怒り、そういった、自分を否定する目以外で自分を見られた事がなかったから、帯広の視線をどう返したらいいか分からなかったのだ。

「……べつに……いい」

これが精一杯の返事だった。帯広はほっとした顔でツバサを向いたまま背を伸ばした。

「そうか！よかった。それじゃあ、改めて僕の泊まっているホテルに行こうか。帯広ツバサ君？」

「……その後、帯広博士は約束どうり3年で新システムを開発した。

そしてオレは博士の養子としてニホンへ旅立った。
来斗（ライト）とは帯広博士が「友人と会う」ってんで、付いていった時に出会ったんだ。その頃には、帯広博士にはオレの体の事や、見た目と歳が違うことも話していた」

――――２０３３年・ニホン――――

「……ここが養父（とお）さんの友だちの家？」

車の後部座席の窓から見た家は、青い屋根に、犬小屋のような防犯装置がある。帯広は車を止めながら答える。

「そう。熱斗君……あ、光博士の家だ。……そういえば、息子の来斗君はツバサと同い年だったはずだよ？」
「同い年って言っても、オレは全然見た目変わってねぇけどな」
「ははは、それでも同い年なのに違いはないさ。さぁ、君の事は話してあるからノックしてからドアを開けて」

ツバサは頷いたあと、車を降り、ドアの前で深呼吸をした。緊張を和らげるためだ。
そして、ノックした後ドアを開けた。
待っていたのは２０代前半の青年。髪と目は茶色。力強い瞳に穏やかさも持ち合わせている。
青年はツバサを見るなりツバサの頭をワシワシと撫でてきた。身長にものを言わせて上から力任せに押さえながら撫でるので、かなり痛い。

「おい止めろ……縮む……」

いきなりこんな手荒い歓迎があってたまるか。ツバサはイライラしながら青年に手をどけるように要求したが……。

「へぇ～。ホントに年取ってねぇのな。……いちおう聞くけど、お前本当にオレと同い年？」

……普通に聞けば答えてやらなくは無い。しかし、こう力任せに押さえられた上に珍しいものを見るような視線は、はっきり言って腹が立つ。いや、それ以前にこっちの話を聞いていない。

「お～いってば。聞いてるのか？」

その言葉で完全にブチ切れた。

「いい加減……その手をどけろ――――！！」

「うわぁ！？」

青年の腕を払いのけて思いっきり掴み掛かる。ケンカの開始だ。

「2人とも落ち着いて！」

帯広が止めに入るが、2人は全然離れない。その騒ぎを聞きつけた光博士とその奥さんが玄関に駆けつけるのに、時間はあまりかからなかった。

「何をやっているんだライト！　君も！　なんで怒ってるかは分からないが落ち着いてくれ！」

「止めなさい！　２人とも！」

光博士とその奥さんも止めに入り、ようやくツバサとライトを引き離せた。…２人はそれでも互いにケリをいれようと足を伸ばしているが、互いに届いていない。

その後、光家のリビングで自己紹介が始まった。両親の自己紹介は終わり、あとはツバサとライトだ。

「……帯広ツバサ。本当の名前は言いたくない。よろしく」

「……光ライト。よろしく」

そして２人は握手をした。この２人の自己紹介は仲直りの意味も含んでいるのだが、自己紹介をしている間の２人は一瞬も相手から目を逸らさず睨み合い、握手した時は互いに全力で相手の手を握っている。

（（いっそこのままこいつの手を握り潰そうか……））

２人はそんな事を思っていた。その様子を見ていた大人３名はため息を漏らす。その後、帯広博士と光博士の提案で写真を撮ることになった。みんなで一緒に撮る事で少しでも仲直りをさせようというはからいだ。

「タイマーセットしたわー」

光博士の奥さん（光メイルというらしい）がそう言いながらこちらに駆けてくる。しかし、【このまま何も無ければ……】という３人の大人の願いは叶わなかった。

「……そういやツバサ。なんで本当の名前使いたくないの？」

「なんだっていいだろ。それより、ライトって本当に大学出たのか？」
「……念のため言っとくが、大学では成績は学年ベスト5に入ってたんだぞ」
「ふっ、それでねぇ」
ツバサの嘲るような含み笑いに、今度はライトが切れた。
「1回ホントに負かしたる！」
「できるものならね！」
ライトの売り言葉、そしてツバサの買い言葉と共に再びケンカが勃発。大人3人は慌てて止めようとするが、ちょうどその時にカメラのシャッターが切られる。

――回想終わり――

「……それで、この写真ができたんだ……」
スバルが苦笑いしながらツバサに問う。ツバサは無言で頷いた。
スバル同様ミソラも苦笑い。ハープは笑いを堪えて、ウォーロックは堪えることなく爆笑中。ジョーカーはその話を聞いたことがなかったらしく、心の中で反芻（はんすう）しているようだ。
ツバサは思い出したくもないといった様子で続けた。

「あ～まったくもって今思い出しても腹が立つ！　会うたびにケンカしてたんだよな～」

ツバサがふてくされている中、アイリスはクスクスと笑いながら補足を加える。

『だけど、ツバサの話を聞く限り同属嫌悪だと思うけど？』

ウォーロックは部屋を物色しながら一人納得したようにツバサに話しかけた。

『は～ん。つまり、似た者同士ってワケか。……おいツバサ、これは何だ？』

「誰が似た者同士かーーーー！！　っていうか、勝手に人の部屋を物色してんじゃねー！」

その後もツバサの部屋のおかしな発明や怪しげな物でウォーロックは遊んで、そのたびにツバサは注意していたという。スバルたちはそんな2人のやり取りに対し笑っていた。

第２０話　名乗る理由（前書き）

ツバサの部屋でウォーロックが色々なモノで遊んでいる時から始まります。

第２０話　名乗る理由

少しして、ミソラは自分のした質問を思い出した。

「じゃあさ、なんでツバサ君は飛王（ひおう）って名乗ってるの？」

ミソラの質問はもっともだ。普通、養子になれば養父（養母）の名字と同じになるから、わざわざ違う名字を名乗る理由はないはず。

ツバサはウォーロックからカギのような物（長さは４センチくらい。手が触れる持ち手には三日月のような装飾がされていて、三日月と、カギの根元が交わっている所にはヒモが通されている。ヒモは首にかけられるぐらいに長い）を取り上げてから答える。

「……飛王って名乗ってるのは、オレがサテラポリスを信用していないから♪　できるだけ偽名の方を使っていきたくてね」

笑顔で養父の名字を名乗らない理由を答える。ミソラとハープ、ウォーロックはぽかんと口を開けて、アイリスはまゆをひそめる。そしてジョーカーは、真意が分からないという顔をしている。

ツバサがサテラポリスを嫌っている理由に心当たりのあるスバルは呆れている。

「信用してないのはこないだの話で大体分かったけど、信用してないって明言していいの？」

「えっ、スバル君何か知ってるの？」

ミソラの質問に、スバルはミソラたちにサテラポリスの元となった組織の中に、人体実験をしていた研究所があることを教えた。ゲンブ戦のあと、自分が近くにいるときは話しても良いとツバサに言

われたからだ。現にツバサは、スバルの話を止める様子もなく黙って聞いている。
みんなショックを受けたような顔だったが、現実として受け入れたようだ。だてに今まで厳しい戦いを潜り抜けてきたわけではない。
ツバサは鏡の上に置いてあったコーヒーを一口飲んで話をまとめた。

「そんな訳で、オレはサテラポリスを信用していないってわけ」
『けど、それを話したという事は、少なくともオレたちは信用してんだよな？』

ウォーロックは信用してること前提でツバサに聞いた。おそらくツバサに「うん」と言わせて、この場を少しでも明るくしようとしたのだろう。
ツバサはそれを察してから笑みを作った。……

「まぁな。……あ、そういや昨日長官がポロッと零してたんだけど、次の土日によかよか村に行く予定なんだと」
「よかよか村？　なんでこの時期に？」

このあいだ敵に逃げられたばかりなのに……。ツバサは思い出したくない話をするように大きなため息をついて話し始めた。

「それが、昨日会議中に居眠りしたことで説教食らってる時にな……
『昨日の戦闘でドッグ・ツインに逃げられた事でスバル君たちが落ち込んでいるかもしれない。
それに君にも最近はムチャをかけているからな。
次の土日によかよか村の旅館を手配しておいたのでゆっくりしてくると良い。
……と思ったが、君には今日のペナルティ（会議中に居眠り）

として、もう少し働いてもらおう』
だとよ。おかげで昨日の夜も夜更かしする羽目になった。疲れていたら会議中でも寝るだろ普通！　……あ、お前らもよかよか村に来るよな？」

ここまで見事に開き直られるとむしろ感心してしまう。おまけを言えば、最後の言葉は来る事を前提としたような口ぶりだ。

スバルやミソラ、ウォーロックやハープは『白金ルナ』を思いだした。彼女もこのぐらい強引だったなと。

スバルは、言ってもムダだと思うが、いちおうツバサに注意することにした。

「会議ぐらい真面目にやったほうがいいよ？　それより、よかよか村ってどういうとこ――」
『あの……』

ここまで言ったところでアイリスが口を挟んだ。彼女は、他人が話してるときに口を挟むなど滅多にないので、ツバサを含め全員がアイリスを見る。

『今気づいたんだけど、鏡の前にコーヒーのカップがあったってことは……』

ツバサはアイリスから意図的に目を背けて自分の背を伸ばした。

「さぁ！　さっさと片付けてゆっくりするぞ～。ジョーカー、スバルたちを送って来てくれ」

誰にでも分かるはぐらかし方だ。ジョーカーは少し口元に笑みを浮かべてツバサに尋ねる。

『……避難させるの間違いではないのか？』
「その辺は黙っとく」

ツバサがジョーカーにツッコミ、ジョーカーはスバルたちを連れて行った。そして当然といえば当然だが、アイリスは怒っている。何だかんだでツバサを1番心配しているのはアイリスなので、『また』自分たちの注意を無視して自分の体を休ませなかったツバサに腹を立てているのだ。

スバルたちが退室したのを見てから、アイリスはツバサに尋ねた。

『……いろいろと説明して……。まずは、さっきの飛王（ひおう）と名乗っている理由、なぜウソをついたの？』

真実（ホントウ）を識（し）るものに虚言（ウソ）は効かない。アイリスは目を逸らさず答えを待っている。ツバサは観念した様子でため息をついて理由を話した。

「……それは、これ以上あいつらがオレの事。特に魔術方面を知ると、飛王（フェイワン）・リードがこの世界に干渉しやすくなるかもしれないからだよ。

……違う世界が存在（あ）ることを識（し）る人間が増えると、それだけあいつが、その数だけの人の夢に介入できると言う事だからな。そうなれば、オレがあいつにやろうとしている事が気づかれるかもしれない」

『……名を共有する事で、あなたと飛王（フェイワン）のチカラを混在させ、徐々に侵食。できる限り相手の魔力を奪った所で、あなたが『奪った力』ごと消える事で、飛王（フェイワン）をこの世界に介入する事ができなくして、その上魔力も半減させる。それによりあの人たちが飛王（フェイワン）を倒すのを手

助けする。

……それがツバサの計画の1つだったよね。……でも、やっぱり私は反対。なにもあなたが消える事は無い』

「あっちの目的（フェイワンをたおす）とこっちの目的。……単なる利害の一致だよ」

それを口にしたツバサの目は、ジョーカーと共にサテラポリスに向かう時に見た、覚悟を決めた目だった。

アイリスはその目と、あまりにも割り切った言葉に悲しみを覚え、せめてもの反撃として、ツバサが今もっとも突っ込まれたくない事を問い詰めることにした。

『……じゃあ、なんで鏡の前にコーヒーがあったの？　まさか起きてたんじゃ……』

「あ～それは……」

ツバサは気まずそうにたじろいで目を逸らした。その後、ツバサが寝ていなかった事がバレて口喧嘩が始まり、見送りから戻ったジョーカーと、通りすがりの暁がなんとか2人をなだめたらしい。

第２０話　名乗る理由（後書き）

次回はツカサ君が登場します。お楽しみに。

ちなみに、ツバサの計画の１つは、ＨＯＬＩＣの原作１巻にて、『そのモノと同じ名を冠する事でそのモノと同じ力を持つ事もできる』という所からアイデアをもらいました。力を共有できるという事は、力を奪う事もできるのではないか。と、思ったからです。

・・・ツバサにとってその計画は『ついで』なんでしょうけどね。彼にとって重要なのは・・・

「これ以上はネタバレだろ。まだオレの計画を明かすな。」

そうだね。あ～危なかった。
それでは感想待ってます。

「・・・お調子者。」

なんか言ったか？甘党。

「「・・・・・・。」」

ドガバキドンバスドゴズン！

『・・・・二人のケンカが始まったので今日はこれで終わります。』

「「アイリス！？」」

第２１話　７月だよ！旅館に集合！

――――土曜日――――

季節は7月上旬。

スバル、ミソラ、ジャック、クインティア、暁、ツバサとその相棒のウィザードたちはバスから降りて、今は徒歩で旅館で向かっている。ちなみにケフェウスとイーグルはお留守番だ。さすがに森の中は車は通れない。そしてなぜ森の中を進んでいるかというと……。

「……雨ね」

クインティアは無意識に呟き、全員で暁を非難の目で見た。暁は慌てて弁解する。

「な、なんだよ！　……その目は。雨はオレのせいじゃないぞ！」

「だけどよー、せっかくだから森の中を散策しながら行こうぜ！って言ったのは誰だ？」

ジャックは持ち前の目つきの悪さで暁を問い詰める。今が7月上旬というのもあって、暑さとジメジメでイライラしているのだろう。ハープとミソラはため息をついてやたらとイライラしている男衆を見た。

「そんな事言ってても何にもなんないよ？　ケンカしてないで、２人とも先に進もう？」

『ミソラの言う通りよ。はぁ、何でこう男って、ちょっとの事でケンカするのかしら」

女性2名（ミソラとハープ）に言われて、ジャックと暁は押し黙る。

スバルは気晴らしにツバサに話しかけた。この暑さだとイライラするのも解る。誰かと話して頭を動かしていないとおかしくなりそうだ。

「ほんとに暑いね。ジョーカーとアイリスは大丈夫？」

「ジョーカーはハンターの中だから影響なし。アイリスは用事があるから遅れるってさ」

「ふ～ん。……仲直りは？」

ここ1週間、ツバサとアイリスの仲が悪かったように思う。ジャックに聞いた話だと2人は先週僕（スバル）たちが帰ったあとに大喧嘩をしたそうだ。

ツバサはため息をついて背中の荷物を背負い直す。

「何とかな」（……仲直りの条件として侑子さんに願いがあるから結界を解除してくれって言ってたけど、あいつ何を頼むつもりだ？どんな願いか聞くことも禁止って言われてるし）

ツバサの内面の声が聞こえるはずはなく、ウォーロックはからかうように勝手にスバルのハンターから出てきた。

『ほ～。仲直りしたのか。で、どっちがしりに敷かれたんだ？』

ツバサは考えてる途中でからかわれて不機嫌そうにウォーロックに尋ねる。

「……お前言葉の意味分かって言ってんのか？」

スバルに聞いたのだが、ウォーロックは地球の変な言葉をやたら詳しくなったらしい。ウォーロックが何かを言おうと口を開いた直後、暁が明るい声を出した。

「お！　見えてきたぞ！」

暁の視線を追うと、立派な旅館が見えてきた。

――――旅館・うらかわ――――

受付は暁とアシッドに任せて、スバルを始めとした子供たちはその辺をキョロキョロ見ている。そしてクインティアは見かねたように注意した。

「……少しはおとなしくしなさい」

これで素直におとなしくなったのはスバル、ミソラ、ハープ、ヴァルゴで、ジャック、ツバサとコーヴァス、ウォーロックはまだ騒いでいる。この４人は言っても聞かないだろうと悟ったのか、ジョーカーが４人にゲンコツを食らわせた。

ゴン！×４（かける）

４人はすっかり大人しくなり、頭にはたんこぶが出来上がった。
４人が横に並んで立っているときにちょうど暁が呆れるような声で女将さんらしき人物と共に戻ってきた。後ろには見習いらしき女の子もいる。

「お前らなぁ、よそ様に迷惑かけるなよ～」

女将さんの方は茶髪に清楚で綺麗な顔立ち。ちょっとした動作一つにも礼儀正しさが表れている。茶色を少し明るくしたような色の着物を着ている。
女の子の方は真紅という言葉が良く似合うほどの見事な赤髪と赤目だ。腰ぐらいまであるサラサラと流れるような髪は後ろに流している。着物と化粧で大人っぽく見えるが、顔立ちと身長からしてスバルやミソラより1、2歳年上ぐらいだろう。
暁が合流してみんな揃った時、女将さんと女の子は頭を下げて女将さんがあいさつをした。

「サテラポリスのみなさん。この度は、うらかわへおいで頂きありがとうございます。部屋の方はソラがご案内いたしますので。さぁソラ、お願いね」
「はい。こちらです」

女の子はソラというらしい。一同がソラについて行こうとした時、意外な人物から声をかけられた。

「あれ？　スバル君？　何でここに？」
「ツカサくん！　久しぶり。君こそ、こんな所でどうしたの？」

廊下で出会ったのは双葉ツカサ。スバルの親友で、ジャックと入

れ違いで転校していったのだ。今は浴衣を着ている。

「うん。たまには……ね。それよりスバル君、その人たちは？」

ツカサが指差したのは暁たち。廊下で話すと他のお客さんの迷惑になるので、スバル一行が泊まる部屋でそれぞれ自己紹介をする事にする。

「それでは失礼します。のちほど料理を持って来ますので」

部屋に着くと、ソラはそう言って退室した。一通り自己紹介が終わった後、ジャックは自分と入れ違いで転校したヤツってことでツカサに興味を持ったようだ。

「へぇ～。で、そのヒカルってのは封じる事ができたのか？」

ヒカルというのはツカサのもう一つの人格で、孤独や苦しさ、自分を捨てた親への憎しみからもう一つの人格が生まれてしまったのだ。

ツカサは少し俯いて答える。

「う～ん。まぁある程度は封じる事ができたんだけど、もう一人見張らないといけないのが増えちゃって」

「見張らないといけないって？」

今度はスバルが疑問を抱いた。ヒカルのほうはナンスカで自分と戦った事である程度コントロールできるようになってきたのは知ってるが、もう一人とは誰だろう？

ツカサは少し困った風に肩を竦める。

「……ジェミニだよ。いつの間にかハンターで再構築されたらしいんだ。たまに暴れたいって二人で言うから、抑えるのに大変だよ」
『なに!?　ジェミニが!?』

ジェミニを良く知っているウォーロックとハープは驚いている。FM王の右腕と呼ばれたジェミニが居るとなると、自然に警戒してしまうのだろう。ツカサはウォーロックをなだめるように両手を前に出す。

「まぁまぁ、大丈夫だよ。さっきも言った通り、抑え込めてるわけだし。
それにどうしても聞かない時は、最近世間を騒がせている組織、ファイブ・エレメントっているでしょう？　彼ら相手に暴れてるから。……それなら、誰の迷惑にもならないからね」
「なるほど～！　君もけっこうやるな～。……どう？　オレたちと一緒にファイブ・エレメントをぶっ潰してみない？」
「あ、それ良いかも！　一緒に戦おうよツカサくん！」

暁のドサクサ紛れの提案にスバルは賛同したが、ツカサは気まずそうに自分自身の頭に手を置いた。

「う～ん。僕の方はいいけど、ヒカルが良いって言うか……ウッ！！」

ツカサが突然苦しみだした。暁たちは慌てて駆け寄るが、スバルはそれが何なのか知っていた。ツカサのうめき声が収まったと思ったら、ツカサは薄ら笑いを浮かべている。
周囲の暁やジャック、ミソラは軽く引いている。

「くっくっく。よぉ、久しぶりだな。星河スバル。まだアマちゃん

のままか？」

スバルは驚きながらも何とか冷静さを保ってヒカルに尋ねた。

「ヒカル……なんで？　君はツカサ君がほとんど封じたはずなのに……」

「はっ、オレが直に話したいってんで、強引にツカサには引っ込んでもらったんだ。……ジェミニの力を借りてな」

ウォーロックは納得できないという顔で首をかしげた。

『どういうこった』

『それはオレから説明しよう』

声と共にウィザードＯＮしたのは、ジェミニ本人である。ツバサを始めサテラポリス組は、念のためにいつでも戦闘に移れるようにしている。

ジェミニはそれを知りつつ悠々と話した。

『オレは元々ツカサよりヒカルのほうが波長が合う。二人の波長を強めてやれば、ツカサが全力でオレたちを止めようとしない限り、オレたちは好きに外に出れるって訳だ』

「え！？　ちょっと待って！それって、ツカサ君が君を出す事を許したって事だよね！？　それってつまり……」

ヒカルは「へっ」と笑ってスバルを見る。

「お前らに味方してやるよ。あいつら自分勝手な事を言ってムカついてたんだ！　そいつらをぶっ潰すってんなら協力するぜ！」

『奴らは烏合（うごう）の衆の分際で人間……つまり一つの種族を滅ぼすと言

っている。その考えが気に食わないからな……』

ヒカルが自分の意見を言い、ジェミニはそれを理由付けするように賛同した。ヒカルは目を閉じ、開いた時に発した言葉は…。

「そんなわけで、ヨロシクね。スバル君、みんな」

「うん！　……でも、いきなり入れ替わるとびっくりするからなるべく控えてね」

スバルは嬉しそうに頷いたあと気まずそうにお願いした。ツカサは微笑みながら謝るように手を合わせた。

「ふふ。ごめんごめん。皆を驚かしたくてさ。……あ、それじゃあそろそろ僕は部屋に戻るよ」

ツカサは時計を見た後、自分のハンターの『アクセスパス』をスバルたちに転送して部屋を出る。

ツカサが部屋から出たあとクインティアは軽く咳払いをして皆に向き合う。

「……それで、どうするの？　この部屋、大広間よ？」

『あ？　それが何だってんだ？』

ウォーロックは分からなかったようだが、女性はもちろん、スバルを始めジャックも分かったようだ。大広間ということは、部屋としての壁が無いという事。つまり、女性と男性が無理やり同室しなければならないのだ。

ツバサ以外は暁を見た。暁はみんなの視線の意図に気づいて本日2回目の弁解をする。

「い、いや、オレが予約したんじゃないぞ！　長官の厚意で……」

暁はしどろもどろになりながらも反論した。だが、皆の瞳は信じていない事を明々白々に映している。

ツバサはこのまましばらくその様子を楽しむつもりだったが、さすがにかわいそうなのでフォローすることにした。

「長官が予約したってのはオレも聞いてるから間違いないよ。……たぶん、団体で予約した方が安いからじゃないかな？」

サテラポリスにも予算というものがある。男女別れての部屋（二部屋）より一挙にまとめた部屋（一部屋）の方が安くあがるのだろう。

ツバサの説明で皆は納得したらしく、それぞれの荷物を開き始めた。ちなみにツバサは、なぜかくしゃみを連発しながらアイリスにメールを送っているようだ。

その後暁は、ツバサに【何でもっと早く助けてくれなかったんだ～】という呪いの眼差しを与え続けたという。

――――いっぽうツカサは――――

「……楽しそうだな、ツカサ。あいつらに会えたのがそんなに嬉しいのか？」

ヒカルが不思議そうに聞いてくる。ツカサは微笑みながら窓の外を眺めている。

「うん。それもあるけど……今日の夜、スバル君たち大変だろうね」

『なぜだ？』

ジェミニが簡潔に聞いてくる。ツカサは右の人差し指を立てて得意げに笑う。

「ふふふ。あの部屋は大広間だったからね。男女が同室して大騒ぎになりそうじゃない？」

［……つまり、面白そうと。そう言うわけか］

「うん。明日スバル君に、何か面白い事がなかったか聞こうかな？それとも、今日の夜に少し行様子を見に行こうか」

その時のツカサの笑顔を見たときヒカルとジェミニは思った。

［『……性格悪りぃ～。……こいつってこんなヤツだっけ？］』

「ふふふ」

ツカサは相変わらず怪しい笑みを浮かべていたという。

第２１話　７月だよ！旅館に集合！（後書き）

補足として、うらかわの女将さんは２００年前の女将、というかまもるくん（ＥＸＥ３より）の子孫です。
あ、ソラちゃんは違いますよ。ツバサのくしゃみ連発の理由は次回分かります。酷いというか、思わず納得な理由ですかね。

それとアクセスパスっていうのはほとんどそのままの意味で、それを持っていれば、それに対応した人のハンターにアクセスできる（メールや電話を送れる）ってやつです。

あ、サブタイトルがなんかのパクリじゃね？っていうツッコミは無しでお願いします。

第２２話　アイリスの願い（前書き）

スバルたちが旅館に向かってるちょうどそのとき、ＷＡＸＡで起こった事です。

第２２話　アイリスの願い

――――ＷＡＸＡ：ツバサの部屋――――

『……お久しぶりです。侑子さん』

「あらアイリスちゃん、久しぶりね。どうしたの？あなたが一人で通信してくるなんて珍しいわね」

「アイリスひさしぶり～」

「ひさしぶり～」

アイリスは微笑んでマルとモロに『うん。久しぶり』と言ったが、いつものアイリスと少し違うことに侑子は気づいた。表情が少し暗い気がする。

「……どうしたの？　アイリスちゃん。…まさか、とうとうツバサがあなたに手を……！」

『違います！！』

「「けだものっけだものっ」」

『だから違いますって！』

「そうか……。とうとうあいつ（ツバサ）も……」

『モコちゃんまで！　だから違うのに！！』

侑子、マル・モロ、モコナの順番で言われてアイリスは慌てて否

定するが、その話題を持ち出した張本人の侑子はにっこり笑っている。おそらくアイリスに元気を出させるためにからかったのだろう。補足として、マルとモロは悪乗りをしたかっただけだ。

アイリスはその意図をくみとってため息をつき、意を決したように侑子に話し始めた。

『あの……聞きたいことがあって……。今のままで、ツバサは自分の計画をあきらめる事は有り得ますか……？』

「ないわね」

アイリスの質問から侑子の返答までの時間は、約コンマ1秒（0.1秒）。あまりに早い返答に、アイリスの動きはしばし止まった。

しかし、アイリスはすぐに我に返った。我に返ったあとに聞くことと言えばやはり……。

『なぜですか？』

即答なのは驚いたが、そう言い切る根拠が重要なのだ。侑子は煙管（キセル）を吸ってそれに答えた。

「何かを成し遂げるのに必要なものは、行動と誠意だからよ」

『……誠意……ですか？』

行動は目的を叶えるための絶対条件。ツバサの行動力は昔から見てきたからそれは申し分ない。だが、誠意と言うのは一体……。

侑子は、あまり聞かない現実的な厳しい声で話し出した。

「……誠意は、自分への誠意。

対象がなんであれ、誰であれ……何かをする。またはしないと決めるのは、自分と約束するということなの。

そして、その約束を破るのも自分。……誰も自分の約束の肩代わりはしてくれないからね」

『……約束……』

「そう。……自分と話して、自分で納得しないと、自分と約束できない。

もちろんリスクもあるわ。その行動で悲しく思う人や、よく思わない人もいる。……アイリスちゃんも……ね？」

尋ねた時の侑子の目は、妹を見るような優しさで溢れていた。侑子の目から見ても、アイリスはツバサの進む道の先にあるモノに対して悲しみを覚えている。

アイリスは静かに頷きながら返事をした。

『……はい』

「それでも、それが自分の選んだ道なら……。

今自分がいる居心地の良い世界を失っても、求めるものを追い、失うモノの重さも辛さも分かっていて、それでも欲し、そのために生きる。そういうのが、本当の覚悟なの」

『本当の……覚悟……』

アイリスは、侑子の言葉を胸に刻むように反芻（はんすう）した。

「そう。……あの子は、覚悟も誠意も、行動力も持っている。だから他人が何を言っても、今のあの子には響かないでしょうね……」

アイリスは悲しそうに俯き、マルとモロも、そんなアイリスを心

配しているようだ。

「アイリス大丈夫～？」
「大丈夫～？」
『……うん。大丈夫』

アイリスは何とかその言葉をしぼりだすと、侑子と向かい合い、言った。

『……侑子さん……お願いがあります』

侑子はアイリスの目を見て、悲しみをその瞳に浮かべた。

「……対価がいるわ」
『分かっています』

アイリスの目には迷いがない。侑子は、その想いに応える事にした。相手が真剣に自分に向かい合っているのに自分が真剣に向き合わないのは、真剣な相手に対して失礼だからだ。

「対価は……よ」
『……分かりました』

対価を聞いても、アイリスの決意は変わらないようだ。侑子は一言言葉を発する。

「あなたの願い、叶えましょう」

その言葉と共に、アイリスの足元に魔方陣が浮かぶ。

ツバサの魔方陣とは違い、中心には満月のような円が描かれており、
そしてそれを瞳に置き換えると、目のような模様が描かれている。
そこから少し外側に行くと、月の満ち欠けを思わせる模様が描かれており、それは対角の月とぴったり合うようになっている。つまり、『満月』の対角は『新月』といった感じだ。
そこから外側は複雑すぎて作者の表現力を超えているので書けない。
ただ一番外側には、ツバサの魔法陣にもあったような黄道十二星座の記号が描かれている。
魔方陣が消えたあとアイリスは自分の体を見て不思議そうに呟く。

『……何も実感がないんですが』

そんな呟きに侑子は「ふふっ」と笑いかける。

「そんな急に変わったら変でしょ。それにあなたの場合、時が来るまで発動はしないから、実感がないのも無理ないわ」
『そういうものですか』
「えぇ。他には何かある？」
『えっと、それじゃあもう一つだけ。ツバサと別の世界のツバサってどのぐらい似てるんですか？』

その質問をした時、侑子のひたいに僅かながらムカマークが生まれた。侑子は不快そうな顔で、まるでうっぷんを晴らすかの如く話し始めた。

「そりゃあもう似てる所ばかりよ？
まぁ【違う世界の同じ人】っていうのは魂が同じだから当然なんだけど、まず第1に、嫌なヤツ。第2に、甘い物は好きだし、酒も好

きでしょ？　それに人を驚かせるのも好きで――」
『ムダに頭が切れてそれをイタズラにばかり使う』
ここまで来ると、２人がほぼ息ぴったりに話している。侑子はさらに続けた。
「そうそう。それに一度決めたら譲らない頑固者で、その上誰かに心配とか迷惑かけたりね。
……あ、私の知ってるあいつなんだけど、自分の魔力が強いので２つに分けようとしたら失敗して小さい女の子にそれを頼んだり。それに私も……なんでもないわ」
途中で何かを言いかけたが、言うのを止めた様だ。気にはなったが、それを追求はしない。だが、会話に困る。話す題材がない。
その時ちょうどアイリスのハンターにメールがきた。
ＰＰＰＰ！
『ちょっとすみません。……スバルさんたちが泊まる所に着いたそうです』
アイリスはメールを見た後、侑子に申し訳なさそうに言う。侑子は軽く微笑む。
「そう。それなら早く行ってあげた方が良いわね」
アイリスはしっかりと頷いたあと、侑子に応えた。

『はい。……行ってきます』
「いってらっしゃ～い。楽しんで来れればいいわね～。あ、ツバサにお土産買ってくるようにヨロシク！」
「ヨロシク～」
「ヨロシク～」
「一升瓶（いっしょうびん）４本は頼むぞ～！」

イスから立った時、３人と１モコナに笑顔で送られて少し肩が軽くなったようだ。アイリスが抱え込みすぎないように。という侑子たちの配慮である。
アイリスもその意図を察し、笑顔でもう１度……。

『行ってきます』

そう言って部屋から出て行った。それと共に通信も切れる。

――侑子のミセ――

「……侑子」

モコナは少し心配そうに侑子を見上げている。侑子はモコナを撫でながらキセルの煙をはく。

「……信じましょう。未来を。いい出逢（であ）いを……。人を変えられるのは、出逢いだけだからね……。

そして『出逢い』は、出逢うべくして、出逢うべき時に出会うモノ……。全ては、必然だから」

第２２話　アイリスの願い（後書き）

前回言ったツバサのくしゃみ連発の理由分かりました?正解は、アイリスと侑子さんがさんざんツバサのことを言いまくったからです（笑）。

それと侑子さんがアイリスに言った事はほとんどｘｘｘＨＯＬＩＣの１巻から引用して、少し変えた物です。・・・言うのが遅かったですかね・・・やっぱり。

次回は夏の定番、幽霊ネタです。お楽しみに。

第２３話　旅館の定番＝怪談（？）（前書き）

怪談ネタってことで、背景の色も今回限定で変えました。怪談は、ほとんどがその辺の怪談やマンガの話を合わせたヤツです。

第２３話　旅館の定番＝怪談（？）

――旅館・うらかわ――

アイリスも合流してちょうど食事時。ちなみにアイリスはコピーロイドのバッテリーがそろそろ切れそうだったので、自分のハンターをツバサに預けて自分のハンターに入った。
電波化できるのはコピーロイドだけなので、電源が切れそうなときやケガをした時は、コピーロイドごとハンターに戻り、ハンターの方はツバサに預けているらしい。
食事も終わり、暁がノリノリで提案した。

「よ～し、せっかくこんな旅館に来たんだし、怪談でもするかー！」
「面白そうじゃねぇか！　オレはやってもいいぜ？」
「う～ん。オレは遠慮しとくよ。あんまりそういうのやりたくないし」（そういうのをやると集まるんだよ実際！！）
「ぼ、僕も遠慮します」

ノリノリな暁とジャックに難色を示したのはツバサとスバル。スバルはお化けが苦手で、ツバサは別の理由だ。
しかし、この後反対した２人は折れる事になる。その理由は……。

「え～。スバル君やろうよ～。私面白い話知ってるのに～」
「そうだ！　参加しろ！　……お前らもしかして恐いのか？　地球のヒーローと不良科学者が……」

ミソラのおねだり（上目使い）とジャックの挑発に対し、２人は見事にワナ（？）にはまる。

「うっ、……分かったよ……」
「不、不良科学者だぁ？　上等だ。受けて立ってやる」

そして準備が整った。話すのは４人。暁、ジャック、ミソラ、ツバサである。
１つのろうそくから４つのろうそくに火を点けて、部屋の四隅に燭台（ろうそく立て）とろうそくを立てて、北東（鬼門）とは反対方向に水盃を置く。だが、大部屋の全てを使うとなると余りに広いので、部屋の約半分（１０ｍ×１０ｍ）だけを使う事にした。
ジャックは、望みどおり怪談ができて機嫌がいいと思ったらそうでもないようだ。

その理由は……。

「っていうかよ、な・ん・でお前の言う通りにセットしないといけないんだ？」

そう。４人というのも、部屋の四隅にろうそくを立てるというのも、何から何まで全てツバサが指示したのだ。もちろん、ろうそくや水盆は旅館から借りた。
ツバサ本人はいたって平然と答える。

「どうせやるなら本格的にやった方がいいだろ？　それに、こういう古い所は出るのが定番だからね。……それじゃあ、そろそろ始めるぞ。まずは言いだしっぺの暁。
あ、終わったら四隅のろうそくから線香に火をつけて、中央の線香立てに立ててね～」
（……オレの結界は外からの干渉は防ぐが、元から居るヤツには何

にもできないからね）

つまり、ツバサが今施（ほどこ）している結界は他の世界からの干渉は防ぐが、この世界の幽霊などには意味がなく、別の手を考えなければ防げないという事だ。

当然、スバルは４人に選ばれなかった事にほっとしていたが、ツバサの「出る」発言にショックを受け、自然と背筋が伸びている。

ちなみにウォーロック始め電波体たちは地球の怪談にはまだ疎（うと）い。だが、疎いという事は冷静な判断ができるという理由なので、審査員をする事となった。終わったあと誰が一番恐かったかを競うためである。ちなみにアイリスは、すでにコピーロイドの充電が終わっているので実体化している。

暁は「（なんでこいつそんな事まで知ってんの？）」と苦笑しながら呟いていたが、場の盛り上がり優先で話し始めた。

「……オレの知ってる話は、ここと似たような老舗（しにせ）とも言えるホテルであった事だ。

ある日、２人のお客が泊まりに来てな。『２日泊めてくれ』というので泊めたんだ。

２日後、２人はホテルのフロントに鍵を返しに来て、さらに２人はフロントにあいさつをしてホテルを出て行った。

数日後、ホテルに泊まっている客からフロントに電話があったんだ。

『となりの部屋からドアノブを回す音やドアを叩く音がする』っていうんだ。

もちろん、すぐにその部屋を調べたが、何にもない。そして、その音が出る部屋に泊まった客は決まって数日後に行方不明になるんだ。

結局理由が分からないまま半年が過ぎた。だが、その半年間ずっとその部屋からさっき話したような音が聞こえ続けたんだ。苦情と噂が広まってきて、このままだとホテルの経営がマズイって事で業

者を呼んで調べる事にした。
電磁波を用いた捜索道具を使って、壁の中に何かの反応があることが分かった。ドリルで穴を開けてみると、人の死体があったんだ。その死体は綺麗なままでな、まったく腐敗がしていなかった。
ホテルのフロントをしていた者は恐る恐る部屋の中を覗き見て驚いた。なんと、半年前に訪れた2人の客の1人だったからだ。だが、そんなはずはない。自分は確かにこちらにあいさつをしたこの人を見たのだ。声も聞いたし、向こうもこっちを認識している。
ここまで思って、フロントは気づいた。
『あの時、目の前で死んでいる人に、もう一方の客は話しかけていただろうか』
嫌な予感がして遺体を運び出そうとした業者に近づいた。業者は遺体の腕を自分の肩に回して運ぼうとしたところでな。
腰と足に力を入れて立ち上がろうとした時、業者は聞こえた気がした。
『ああ、やっと出られる……』
業者は思わず遺体を落とした。遺体は死んでいるから遺体といい、話すのは遺体とは言わない。
別の業者が腰を抜かしている業者に呆れながら、代わりに運ぶために遺体に手を伸ばした。その直後その部屋一面に、
『ありがとうありがとうありがとう

『……次は、自分を殺したヤツを同じ目に……』

と、入り口近くの壁に浮かび上がったそうだ。そして、その文字が書かれた後、遺体は砂のように崩れ去った。

数日後、もう一人の客は変死を遂げた。そして、その部屋には、

『……やっと逝ける……』

という文字が遺体のそばに書いてあったそうだ」

暁はツバサに言われた通りにろうそくを、ろうそく立てに立てて自分の席に戻った。

ちなみにこの時点での脱落者はヴァルゴ、アシッド、ジョーカーだ。

ヴァルゴは『Sは打たれ弱いの』と言って気絶して、アシッドは立ったまま動かなくなっている。ジョーカーの方はあぐらをかいて腕を組んでいるが、全身が小刻みに震えている。試しに突いてみたら倒れてしまった。

怪談を話す4人とクインティア。そして、ウォーロックとコーヴァスは互いに『こいつに負けてたまるか』と言った感じで堪え、ハープとアイリスは割と余裕のようだ。

以外なのはスバルだろう。スバルがお化け嫌いなのは読者の皆さんにはご存知だと思うが、そのスバルが耐え抜いたのだ。理由はおそらく、ミソラがいるからかっこ悪い事はできないからだろう。

現状の解説はこの辺にして、次はジャックだ。

「オレの知ってる話は知り合いの体験したやつでよ。

ある日そいつが寝る寸前で、自室内から『ねぇねぇ』という声がしたんだ。大体、小学生ぐらいの……高い、無邪気な声がな。

そいつはそっちの方を向いた。そしたら、イスが『ギィ……ギィ……』と鳴ったんだ。普通は体重などの重圧を加えないと鳴らないはずのイスが鳴った……。

ここまでなら夢で済んだんだが、翌日家族にそれを話すと、そいつがまだ物心着いていない時に子供が死んだらしい。生きていれば、ちょうど小学生だっていう話だ」

ジャックも何だかんだ言ってルールには従うらしく、隅のろうそくから火をもらって中央のろうそく立てに立てた。

この話の脱落者はハープだけで、無言でミソラのハンターに戻って行った。……案外庶民的なモノに弱いらしい。

そしてスバルにとっては、次の話はミソラなので余計に倒れるわけにもいかない。少しでも恐怖をやわらげようと誰かと話そうと思ったが、ウォーロックはコーヴァスといがみ合ってるし、クインティアは話しかけずらい。そんな消去法でアイリスに話しかけた。

「……なんでアイリスは平気なの？」

見た目で判断するのは好きではないが、アイリスの見た目は気弱にしか見えない。

『それは……ツ、ツバサが起こすトラブルに比べたら大したことないから』

アイリスは『それは』の後、なぜか焦って言葉を探しながら話してるようだった。スバルもそれに気づき、聞こうと思ったが、次の話が始まるようで聞けなかった。

アイリスはホッとした様子で、内心で独り言を言う。

《い、言えない……。―その手のモノ―（ツバサの魔法）をたまに見てるからその系統に対して抗体が付いてて驚かない。なんて言えない……》

アイリスの心の声は誰にも分かるはずは無し。それはそうと、ミソラの話が始まろうとしていた。

「あたしの話はスタッフから聞いた話なんだけど……。
夜道路を走っているときにラジオで音楽を聞いていたのね？
『さぁ～トークが盛り上がって来たところで次の音楽いってみよ～！』
……って感じで、普通に聞いてたときに少しノイズが走ったの。その後の曲で、
『次の曲はレトロなヤツいってみよ～！　昔懐かしの『かごめかごめ』だよ～。お父さんお母さん、
昔を思い出して童心に戻っちゃってください！　……あ、事故んない程度にね。
それでは、
♪か～ご～め、か～ご～め。か～ごのな～かのと～りぃは、い～つい～つで～やぁる。
よ～あ～け～のば～んに。つ～るとか～めがす～べった♪』
……ここまでは何も無かったんだけど……。
『♪後ろのしょ～めんだ～あ～れ～？』
その時運転してた人は、懐かしさから童心に戻って何も無いと知りつつバックミラーで後部座席を見てみると……血まみれの女の人が座っていたの」

「「「「『『『『『ッ！！　」」」」『『『『

この時のミソラは女優の演技力を生かして、目元に自分の意思で影を帯びさせている。雰囲気は抜群だ。輪の外で見ている僕（スバル）はもちろん、話し手の四人も少し息をのんだのが分かる。

「……その後運転手はハンドルを狂わせてガードレール先に飛び出して、車は大破。意識が掠れゆく中でその人はラジオから聞いたんだって。

『……無事……事故を起こしたようですね……』

って……。それで、その人はその後病院に連れて行かれて一命は取り留めたのね。

退院した後聞いた話によると、その近くで昔、人身事故があったんだって……。終わります♪」

ミソラの話が終わった直後、ウォーロックとコーヴァスは同時に気絶して、2人が倒れた音で部屋の中の皆（気絶していないモノ）は驚いて跳ね上がった。

いい感じに皆の緊張感が過敏になっている。ちなみに、クインティアだけは「なさけない……」とぼやいていた。

ユラ……

その時、四隅のろうそくが揺れたのを見たのはツバサだけだろう。

というより、ろうそくを気にしていたのがツバサしかいなかったというのが正しい。

（ほぉ～ら言わんこっちゃない。来ちまったじゃねぇか～。……こういう話をすると惹き寄せちまうんだぞ！）

知ってる読者も多いと思うが、この手の話や水場の近くは集まり易いという話だ。念のために言っておくが、窓は閉め切っているので、風で揺れたのではない。

ミソラが自分のざぶとんに戻った。それを見ながらジャックはツバサを小突く。

「おい、次お前だろ？　どこ見てんだよ。……それとも恐い話を知らないのか？　不りょ……」

「分かったよ。だからその名で呼ぶな！」

ジャックにからかわれて、ツバサはろうそくを気にしながら話す事にした。

（ろうそくは結界だからな。破られる前に終わらせるか……）

（へっへっへ。どんな話かお手並み拝見！）

ツバサ、ジャックの順にそんな事を思い、ツバサは話し始めた。

「オレの知ってる話は、ある家族の話でね。

ある日夫婦喧嘩をして、夫がつい『かっ』となって妻を殺したんだと。だけど、両親の子供は母親に特に懐いていたから、夫の方は気が気じゃなかった。

『いつ母親のことを聞かれるだろうか。いつ聞かれるだろうか……』

って感じで怯えてしまってね。

そして、何日も何日も待ったけど、その子はいっこうに母親の居場所を聞いてこない。父親はそのビクビクした暮らしに疲れて、とうとう子供に聞いた。

『母さんがいなくて寂しくないのか？』

ってね。そしたらその子は首を横に振って、

『寂しくないよ。お母さんなら、お父さんの後ろにずっと居るもん』

その言葉で、夫は恐る恐る後ろを覗いて見ると、そこには自分が殺したはずの妻がいた。

妻はその口の端を三日月のように吊り上げて笑うと、その家はとたんに燃え上がった。近所の人がすぐに消防車を呼んだおかげで近所には燃え移らなかったんだけど、後の調べによると火元は不明。

夫は死に、子供は不思議な事に生きていた。……それも、子供の周辺は煤一つ無かったって話だ」

ツバサはろうそくをろうそく立てに立ててざぶとんに戻った。ジャックは少し震えながら腕を組んで評価する。

「な、中々やるじゃねぇか……」

「ホントだね。聞いてて恐かったよ」

「「「『『『『『ッ！！！　」」」』』』』』

気づくと双葉ツカサがいた。それも話し手の四人の中に。全員は一斉に後ずさり、ツカサから離れた。ツカサは「ふふっ」と笑いかけた。

「みんな驚きすぎだよ？　……う～ん。個人的に暁さんのが一番恐かったかな。暁さん話し上手だから」
「そ、そりゃあいいけどよ。お前いつの間に……？」
ツバサの問いにツカサは「あれっ」とした顔でツバサの後ろを指差す。
「……それよりツバサ君、君の後ろの障子に映ってるモノって何？」
ツバサの後ろには窓があり、障子もある。意識のあるものは互いに目配せしてそちらを向いた。
そこに映っていたのは複数の黒い人型の影。そこまでなら、物好きな客が夜の散歩をしているとかで済むのだが、人型の影は腕からドロドロと溶け、根元から湧き上がるように再生するのを、この世のモノとは言わない。
「うわぁぁぁぁ！！」
「何あれ――――！！」
「恐(こ)えぇぇぇ！！」
スバルたちはそんな事を言いながら気絶しているウィザードをハンターに戻していく。そして当然ながら障子からはできる限り離れた。
ツバサはアイリスとジョーカーをハンターに戻しながら結界(ろうそく)を見ると、いつの間にか一本消えている。

（おいおい、いつからろうそく消えてたんだ？）

ツバサがそんな事を思っている時に、障子から幾千もの腕が出てきた。その腕は空(くう)をひたすら掻き回し、何かを掴もうとしているようだ。

そしてろうそくが一つ、また一つと消えるにつれて、手は段々スバルたちに近づいてくる。この時点で女性陣は気絶。気絶しそうなスバルと、何とか平常を保っている暁は、とっさにそれぞれの大事な人を、迫る手から庇うように自分の後ろにやった。

その時、とうとう最後のろうそくが消えた。手は一番近くに居た（腰が抜けて動けなかった）ジャックに迫る。

ピシャッ！！

手がジャックを掴んだその時、ふすまは勢い良く開き、女将と一緒にいた少女、ソラが現れた。その瞬間、ジャックを掴んで連れて行こうとしていた手は、元から何も無かったように消え去る。

部屋に居た者が目をぱちくりしている中、ソラは心配そうに、いつもの礼儀正しい声で尋ねてきた。

「みなさんのご友人からどうも変な笑い声がすると言われたのですが、大丈夫でしたか？」

スバルたちはとりあえず、「ほっ」と安堵で胸を撫で下ろしたが疑問がわく。彼女は今『みなさんの友人が』と言っていた。この旅館で顔を合わせているのはツカサだけのはず。

スバルは浮かび上がる仮説に青ざめ、勇気を出して聞いてみた。

「……あの……ソラさん、その友人って？」

「僕だよ、スバル君。」

ソラの後ろから現れたのは、双葉ツカサその人である。では、自分たちの部屋に居たツカサは一体…。

スバルだけでなく、意識のある者全員が青ざめており、ツカサはキョトンとした顔で詳細を説明した。

「え～とね。僕がこの部屋に来た時なぜかふすまが開かなくて、中から狂ったような笑い声がたくさん聞こえてきたんだ。

さすがにちょっと不安になって、急いで受付に行ってソラさんを呼んできたってワケ」

「つまり、君は今さっきこの部屋に入った……と」

暁の質問に対しツカサは素直に頷く。

「はい。……ねっ、ジェミニ？」

さらにツカサは念のためって事でジェミニを呼び出した。

『……ツカサの言う通り、オレたちは今さっきここに入った』

ジェミニの冷静な肯定に対し、怪談をしていた面々はさらに青ざめ、同時にほっとしていた。何故かは分からないけど、自分たちを襲おうとしていた手が消えたのだ。そして、目の前の二人も本物のようだ。

その後、簡単な検査を受けてみんなは眠りについたが、さっきの今だから全員まともに眠れなかったそうだ。

第２３話　旅館の定番＝怪談（？）（後書き）

ちなみに、コレを書いてる時、近くの店で人身事故があったそうです。案外あるんすね～そういうの。それと、この時間（午前２時）にコレを載せたのは、丑三つ時＝ホラーっていう考えからです。

最後にもう一つ恐い話を。・・・４人が話した中に、僕の経験した実話が混じってます。内容からしてどれがそうかは割と分かりやすかったですかね？

第２４話　繋がる夢（スバル編）（前書き）

夢を見ているスバルと、２つ目の夢の中のキャラのセリフがまぎらわしいので夢を見ているスバルを「」。２つ目の夢のキャラを『』に画一しました。

第２４話　繋がる夢（スバル編）

――深夜２時――

深夜２時。先程の怪談で恐い目に会い、数人は眠れずにいた。まともに眠れていたのは、気絶していた者くらいだろう。

（うらやましい……）

スバルはそんな事を思っている。それはそうだろう。気絶した者はこのまま眠り続けられるが、今から寝る者は先程の恐怖体験で中々眠れない。

ＺＺＺｚｚｚｚｚｚ。

……居た。先程の体験をしても寝ている者が僕の右隣に。

僕（スバル）はその者に背を向けて寝ることにした。直視すると文句しか出てこなさそうだからだ。…ようやっと眠気が来た。このまま眠れれば……Ｚｚｚｚｚ。

――夢――

気がつくと墓地にいた。思わず僕は叫ぶ。

「何で――――！！　……もしかして、あんな体験をしたから、それ

が影響したの――！？」
「まぁまぁスバル君、落ち着いて♪　私もいるから大丈夫だよ」
さっきは驚いて気付かなかったが、ミソラちゃんが自分の手を握っていた。僕は少しほっとしてミソラちゃんの方を向いた。だがミソラちゃんは僕から顔を逸らす。「何故か」と聞いてみると、ミソラちゃんは顔を背けたまま寂しそうに、ぽつぽつと呟いた。
「……だって、私の顔を見たらスバル君が私から逃げちゃうもん」
僕はミソラちゃんを安心させるように微笑みかける。
「ミソラちゃんから逃げるなんて僕はしないよ！　大丈夫。こっちを向いて？　ミソラちゃん」
その言葉でミソラちゃんは安心したのか、僕の方をゆっくり向いた。
「ヒ、ヒィ――――！！　ミ、ミソラちゃん、そ、その顔は！？」
ミソラちゃんの顔は無かった。俗に言う、『のっぺらぼう』というやつだ。
同時に、周りの墓からは見知った顔がゾンビのように出てくる。委員長やキザマロ、ゴンタ、ジャック、暁さん…なぜかソロまでいる。急いでこの場から逃げようとしたが、ミソラちゃんがすごく強い力で僕の腕を掴む。そして悲しそうな声でスバルに訴えかける。
「何で逃げるの！？　スバル君！　逃げないって約束したのに！！」
たしかに逃げないと約束した。だけど、今の状況は恐すぎる！！

この状況を抜け出すための手段を探して周りを見ているとき、墓とやぶの間で、人のヒジから先が「おいでおいで」と手招きしている。普段の僕ならそんなモノに手を出すなんて事はない。しかし、この状況を抜け出せるなら……。

僕はその手を掴む。その瞬間、その腕に引っ張られた。

「うわぁぁぁぁ!?」

まるで光のトンネルを通っているようだ。様々な色の光が僕に抜かされていく。そして唐突に強い光に襲われた。

目を開けると、そこに広がっているのは荒廃した町。

「……ここは……一体……ッ！　これは！」

目の前にあるのはウェーブライナーの改札。近くには川がある。

……正直信じたくないが、ここはコダマタウンのようだ。

「そんな……何で……」

僕はその光景のショックでひざをついた。正気を保つには、「これは夢だ」と、自分に言い聞かせるしかなかった。しかし考える時間も、そう長くは与えられなかった。

ズドォォォォン！！

爆発音が響く。そっちを見ると同時に、煙から出てくる者がいた。

「え!?　あれって……」

『バトルカード、バリア!』

僕が煙から出てきたウィザードを庇って戦っている。ハープ・ノートとオックス・ファイアもロックマンを援護しているようだ。そして、ロックマンを攻撃しているのは……サテラポリスだ。

「何で!?　僕はここに居るし、サテラポリスの皆も何で僕たちに攻撃を……!?」

僕が戸惑ってる間にも、サテラポリスは列を揃えてロックマン、ハープ・ノート、オックス・ファイア。そしてウィザードに迫る。

僕の視線の先にいるロックマンは、サテラポリスと距離を取りながら尋ねた。

『なぜ何もしていないウィザードを攻撃するんですか!　彼らは反人間勢力じゃありませんよ!?　現に、今僕たちの後ろにいるウィザードの中には委員長のモードや、キザマロのペディアもいるのに!』

注意してウィザードたちを見ると、確かにモードやペディアがいる。おまけを言えば、ほとんどのウィザードが負傷している。

そして、整然としていたサテラポリス側が、僅かに揺れて、その中の一人が苦しげに呟いた。

『……我々だって、好きでこんな事をしている訳じゃない!　しかし、上の決定には逆らえないのだ……』

それならば、なぜこんな事になったのだろう。そして、上の命令ということは、どのぐらい上の人が命令をしたのだろう。

僕がそんな事を思っている時に、僕ではないロックマンは少し表情を緩めてサテラポリスに提案した。

『なら、今からでも話し合いましょう！　現存するウィザードを全てデリートするなんて間違ってる！彼らは立派な人間のパートナーなんだから！』

「現存のウィザードを全てデリートだって！？　それがサテラポリスの命令だなんて……」

僕が驚いている時、後ろのかろうじて残っている屋根から僕を飛び越える者がいた。

『……それでも、なっちまったもんは仕方ないだろ？　スバル！』

暁さんだ。暁さんは現れるなり電波変換して、僕ではないロックマンに切りかかる。

「そんな…暁さんまで……。ッ！　それならツバサ君は！？　ジャックは！？　クインティア先生は！？」

周りを見渡して見ると、視界の隅に向こうの方から走ってくる人が見えた。反射的にそちらを見てみると、ツバサ君とアイリスが暁さんの方に走っていく。

ツバサ君は暁さんのソードを庇おうとしたゴンタにバリアを張り、アイリスは負傷したウィザードにリカバリーを使う。……ジョーカーはなぜ居ないんだろう？

暁さんは少し距離を置いて、ツバサ君に話しかけた。

『……やっぱりツバサとアイリスはそっち側に付くか……。しょうがない。あいつを使う！』

暁さんは右手を上げた。それが合図なのだろう。暁さんの後ろのサテラポリスはハンターを操作する。いや、暁自身も何かを用意しているようだ。

ヴゥゥゥゥゥン……

鈍い音と共にハンターから現れたのは、サテラポリスのバトルウィザードだった。その先頭には……ジョーカーがいた。

ウォーロックは僕の意思を代弁するように、納得いかないと言わんばかりに暁さんに掴み掛かる。

『オイ！　あいつらもウィザードじゃねぇか！　ウィザードは全て攻撃されるんじゃなかったのか！？』

しかし、ウォーロックの腕は暁に届く前にジョーカーに遮られて、さらにジョーカーは言葉を投げかけた。

『サテラポリスのウィザードと、治安維持に協力したウィザードは例外……。これも上の決定したことだ。……フン！　フルダブルスイング！！』

『グオォォォ！？』

ウォーロックはジョーカーの攻撃を受けて吹き飛んだ。

「ウォーロック！！」

僕は慌てて駆け寄ってウォーロックを触ろうとするが、ウォーロックの体をすり抜けてしまった。電波体がハンターの外に出るという事は、実体化するという事なので、それが触れないなんてありえない。

戸惑っている間に、そばで僕ではない僕がウォーロックに駆け寄り、肩を貸して指示を出した。

『ここはひとまず退散しよう！！　ゴンタとミソラちゃんは安全な場所を探して、そこまでウィザードたちを先導して！！　僕はできるだけ暁さんたちを止める！』

『……分かった。必ず戻って来るって信じてるよ』

ミソラちゃんはそう言いながら悔しそうに頷いた。おそらく、自分の力不足を恨んでいるのだろう。ツバサ君の方は気軽に自分の手を肩まで上げる。

『オレも残るよスバル。……アイリスはハープ・ノートやオックス・ファイアについてろ』

『……ツバサ。それは私がミソラさんとゴンタさんに付いてた方が安全だと判だ――』

『いいから行け……絶対に2人で戻る』

アイリスの言葉を遮って、ツバサ君はアイリスを安心させるように「ニッ」っと笑って自らの上げた方のコブシを握り固める。

アイリスは力なく頷き、ミソラちゃんとゴンタに合流してウィザードを先導し始めた。僕の近くにいるロックマンは、ツバサ君と共

にサテラポリスに向き合う。
その時、ジョーカーがグレイブメテオレーザーの構えをとり、屈強な拳にノイズが集まっていく。

ジョーカー、やめろ――――！！

向こうから誰かが、そう叫びながら近づいてくる。必死な形相で近づいてくるのは、今目の前で僕ではないロックマンと並んでいるはずのツバサ君だった。ツバサ君が……2人いる？

「何で？　……ツバサ君は僕の目の前に……。ッ！」

気がつくと、赤いレーザーが目の前に迫っていた。

「ウワァァァァ！！」

ズゴゴゴォォォォ！！！！！

赤いレーザーが僕を飲み込む。……まったく痛くもかゆくもない。
……あぁ、夢だからか。

……あれ？　手が温かい。これは一体……。

僕がそんな事を思っている間に、目の前には旅館の天井が見えた。どうやら目が覚めたらしい。今更ながら、嫌な夢だ。手の方を見ると、ミソラちゃんが祈るように僕の手を握っている。周りには暁さんたちがいて、何かを話している。

「……ミソラちゃん？」

僕の声を聞いたミソラちゃんは少し涙ぐみながら、安心したように僕を見た。

「スバルくん！　……良かった！　目が覚めたんだね！　うなされてて……声をかけても覚めないから……わたし……わたし……」

ミソラちゃんの声に暁さんたちが僕の方を向く。

暁さんとジャックは、［なぜそんな物がある］と突っ込みたくなるような物を持っている。暁さんが羽ペンで、ジャックはプラスチックハンマー（デリケートな素材を扱うためのハンマー）だ。

暁さんとジャックはそれらを隠しながら僕に尋ねてきた。

「おっ、目が覚めたかスバル。気分はどうだ？　……嫌な夢でも見たのか？」

心配そうに尋ねてくるのは良いが、先程の悪夢を見た直後というのと、後ろに隠した物を見た直後なので安心できたとは言えない。しかし、いちおう質問されたので答える事にする。

「あ、ハイ。嫌な夢を見たんですが……それよりも手に持っていた

のはなんですか？」

これにはジャックが割り込んできた。

「ん？　ああ、これはどうやったら起きるかを話していたんだ」

「……ジャック、いくらなんでもハンマーはないと思うわよ？」

クインティアさんの冷静なツッコミに、そばで聞いてた暁さんは首を横に振る。

「いやいや、かる～く腹だったら大丈夫だろう。……おっと、ツバサはまだ寝てるみたいだし、何で起こそうかな？　ジャック～やっぱり羽ペンで鼻をくすぐるのが良いんじゃないか？」

暁の提案にジャックは手の上でハンマーを回しながらツバサを見る。

「何言ってんだよ暁。こいつ（ツバサ）は一度、手痛い目にあった方がいいタイプなんだよ。だからこいつでガズンと一発腹に叩き込めば起きるって！」

……どうやらこの2人がイタズラではすまないイタズラをしようとしていたのを、その他の人が止めていたらしい。……アイリスは止める人の中にいないようだ。いや、今はそれどころではない。このままだと部屋に悲鳴が響く。

僕は先手を打ってツバサを起こそうと右隣を見ると、アイリスが心配そうにツバサ君の右手を握っていた。起こそうと焦る気持ちは、気遣う気持ちで塗り返されてしまった。

「……まだ目が覚めないの？」

ミソラちゃんは僕が起きて安心したのか、ジャックたちを止める側に回った。それを見てから僕はアイリスに声をかけると、彼女は悲しげに頷く。

『……うん。……これまでも悪い夢はけっこう見ていたみたいなんだけど……今回は特に酷い……』

その時、ジャックの我慢が限界を迎えた。

「チッ、これ以上長引かせるとツバサが起きかねない。オレは行くぜ―！」

文脈からして、起こすよりも一発ぶん殴るのが目的らしい。ジャックは大きく振りかぶって、ツバサ君の小腸辺りに狙いを定めた。アイリスと僕、ミソラちゃんがジャックを抑えようとする。

その直後、下から殺気を感じた。おそるおそる下を見ると、ツバサ君が自分たちを睨んでいる。

「オイ。お前ら……人の腹に何しようってんだ？　事と場合によってはタダじゃすまねぇぞ？」

ジャックを始め、僕たちもそろそろとツバサ君から離れて事情を説明した。

［ジャックの方も、君を確実に起こそうとしたからだ］といった感じで僕たちもフォローしたのだが…。

「スバルたちはともかく、ジャック！　お前だけはゆるせん！！お前最近オレの事を目の敵にしてないか！？」

そして、ジャックとツバサ君のケンカが始まった。アイリスはなぜか安心したような顔で2人を見ている。暁さんとウィザードたちは2人をはやしたて、クインティアさんに怒られていた。

……それにしても、2人のケンカはかなり本格的だ。ツバサ君はジャックのケリを1歩下がって回避して、お返しにとび蹴りを浴びせる。ジャックはそれを伏せてかわし、振り向きざまに裏拳を繰り出す構えをとる。

スッコーン！

ジャックの裏拳が当たる前に、2人の頭に旅館で使われるような皿が命中した。

2人が現状を把握するより少し早く、僕たちは皿が飛んできた方向を見た。

そこにいたのはソラさんとそのウィザードらしき者。ウィザードは鳥のような姿で赤い電波をまとい、装甲は赤と黄色がメインだ。羽は6枚ある。…皿を投げたのはウィザードの方らしい。

そしてソラさんは、「あっちゃ～……」と言いながらひたいを押さえ、ウィザードは勝気に怒っている。

『ちょっとお客さん！　それ以上暴れると他のお客さんに迷惑だからケンカなら他所でやって！』

「スザク……あんたも十分迷惑になってるよ？　いくらなんでも皿を投げるなんて……ほら、他のお客さんも自分の部屋から様子を見に来たし……」

ソラさんは周りのふすまを気にしながら言った。おそらく周りの部屋の客が騒動を聞きつけ様子を見に来たのだろう。ついでを言えば、こっちが彼女の本来の話し方らしい。さすがに常に敬語を使うはずはないから。

だが、何か引っかかる。……スザク？　たしか……こないだ僕たちが戦ったのはゲンブで、スザクもゲンブも東西南北を司る存在だったような……。この疑問は皆も抱いたらしく、代表として暁さんが、ソラさんとスザクに尋ねた。

「ソラさん、そのウィザードはどこで？」

第２５話　繋がる夢（ツバサ編）　（前書き）

状況説明（ナレーション）が夢を見ている現代のツバサで、「」や、『』で囲われてるのが夢の中の人物の言葉です。

第２５話　繋がる夢（ツバサ編）

――――夢――――

「……次は実験体コードＦ－３４７。電磁波の周波数はさっきとの実験と変わらず２００ＧＨｚ（ギガヘルツ）だ」

となりの男は実験室に運ばれていく。抵抗したが、首筋を殴られて気を失ってしまった。だが、すぐ目を覚ます事になるだろう。

「うぎゃあぁぁぁぁぁ！！　誰か！　誰か――――！！！　……」

断末魔が急に収まった。おそらく、体に大量の電磁波を流し込まれて死んだのだろう。

「チッ、こいつも堪えられなかったか。我々が人間を電脳世界へ行ける様になる発明をすれば、一気に名声が上がるのに……。おい、次の実験体を用意しろ」

実験をした奴らは舌打ちをして実験体に吐き捨てた。

『技術者は、他人がしない実験をして、それを成功させればそれだけで名声を得られる』そこの科学者たちは、そんな事を心底信じている連中だった。

そして、助手らしき男は主任らしき人物の命令を聞く。

「分かりました。……おい、コードＦ－３４８、入れ」

そして、オレの名を呼んだ。正確には、オレの実験体コードだが

……。

オレは素直に立った。今までさんざん体をいじくられてきたが、それも今日で終わる。そのことに安堵すら覚えていた。……たぶん、こないだ親がオレを売ったことを知ったから、生きる事に対しどうでも良くなったのだろう。

部屋に入ると、３人の研究者が居た。

１人目は主任らしき人物で、実験体のデータが書いてあるであろうファイルを持っている。２人目は、助手のような男で、後ろでオレを見張っている。３人目は少し離れた所で装置を管理している。……たぶん技術管理者だろう。

オレは生気の無い目で実験用のイスに座った。その瞬間、手と足を固定する拘束具が冷たい音を立てて自分に纏わり付く。

（……んなことしなくともオレは逃げねぇよ……）

オレは拘束具を横目で見ながらそんな事を思っていた。

……もうすぐ落雷が来る頃か。

オレはこの後化け物になる。オレは、夢でオレの過去を見ている。起きていても、寝ていてもこの記憶にさいなまれるんだよな……。

本来、夢と言うのは一夜のうちに１０こは見るらしい。ただ、覚えていないだけだ。しかし、別の世界のもう一人のオレの影響か、全てを見て、さらには覚えてしまうので、まったくもって夢とはオレにとって厄介以外の何でもない。最近は飛王（フェイワン）・リードも夢に出てくるし……。

……落雷まで、３、２、１。

ズゴォォォォン！！！

落雷と共に、装置は暴走（オーバーロード）する。そのさいのエネルギーは全て過去のオレの体になだれ込んだ。

「ぐ、あぁぁぁぁぁ！！」

さすがに悲鳴も上げるだろう。雷は１～１０億Ｖ（ボルト）なので、浴びれば体の内も外もマルこげだ。しかし、今回は装置の発電部分に直結していたのでそんなものでは済まない。膨大な電気が装置を過剰に動かし、リミッターも何もかも無効にした。その結果、大量の電磁波が体になだれ込み、体……言い換えれば物質が弾け飛ぶ。

「うわぁぁぁ！！　実験を止めろ――！！　このままでは我々も――……」

主任は叫ぶが、直後実験室を中心とした大爆発が起こり、その場所には僅かな残骸のみが残された。…オレはというと……。

「……ん、ここは……？　オレ、死んだのか？」

周りには宇宙の中のような光景が広がる。「…きれいだ」無意識にそう思ってしまった。その時、考えを読んだかのような言葉が響く。

『気に入ったか……』

慌てて後ろを振り向くと、そこに居たのは白を基調とした巨大なロボットのような存在が現れた。
頭には、横から見たら平たいであろう角が2つ、頭の両端が付いている。胸の辺りにはビームでも出しそうな穴が付いている。失礼を承知で個人的な第一印象を述べるならば、連邦の白いヤツだろうか。理由は、デカイから。
過去のオレは慌てて振り向いている。

「だ、誰だお前は!!　オレをどうしようってんだ!?」
『お前を助けてやる』
「……ハァ？」

そうそう。あのときのオレは、きっと呆けたバカ面をしていたのだろうな。……ただ、デューオの顔が無表情のままで、言葉にも含み笑いすら表さなかったのは今思えばつまらない。
デューオは頭の悪い人間に説明するように順を追って説明してきた。

『まず、わたしはデューオ。地球を見守っていたのだが、最近は地球の科学力が上がってきて姿を隠すのが難しくなってきた。そこで地球を監視するに適する者を見つけてはそうさせている。
そして、すでに2人、わたしの代わりに見守る役に就いてもらっている。
……しかし、貴様にはまだ早いようだ。今のお前は人間を信じられず、誤った、偏った記録をすると思われたため、時が来るまで放って置く事にする』

いきなりそんなぶっ飛んだ事を言われても、しばらくは思考停止に陥るだろう。「何を言ってるんだこいつは!」とかな。

デューオは少し待ってから話しかけた。

『理解できたか？』

「あらかたな」

はっきり言って強がりだ。

『では、時が来たら迎えが来る。その時は頼んだぞ。いつもお前たちを見ている……』

その言葉と共に周りの宇宙は消え、眩しい光で目をつぶる。

目を開けると、荒れ果てた大地が広がっていた。周りを見てみると、山がそびえ、いや。所々に研究所の名残がある所を見ると……むしろ自分が周りより低い所に居るのかもしれない。ちょうどクレーターの中心にいるような状態だ。

このあと、オレにとって盗みが当たり前になったんだよな……。

そんで6年後、帯広博士と出逢ったんだっけ。

ザァァァァ……

周りの景色が、砂上に書かれた文字が海の水に持っていかれるように消えていく。

次の夢に移るのだろう。水で溶けた砂の城が逆再生されて元の城に戻るように、景色が構築されていく。

構築された世界は、ほとんどが崩壊して、それでも所々面影が残るコダマタウンだ。近くの日付を表す掲示板によると、ちょうど来年辺りだ。

……あの陰険メガネに一言言いたい。てめぇのせいでまた予知夢見ちまったじゃねぇかコノヤロ―！

ズドォォォォン！！

爆発音が響く。そっちを見ると同時に、煙から出てくる者がいた。

「バトルカード、バリア！」

ロックマンは煙から出てきたウィザードを庇って戦っている。ハープ・ノートとオックス・ファイアもロックマンを援護しているようだ。そして、ロックマンを攻撃しているのは……サテラポリスだ。

ロックマン、ハープ・ノート、オックス・ファイアはその目に戸惑いを浮かべて、かつて共に地球を守った仲間を見て、サテラポリス側は整然と列を組みながら歩みを進める。

ロックマンはサテラポリスと距離を取りながら尋ねた。

「なぜ何もしていないウィザードを攻撃するんですか！　彼らは反人間勢力じゃありませんよ！？　現に、今僕たちの後ろにいるウィ

ザードの中には委員長のモードや、キザマロのペディアもいるのに！」

整然としていたサテラポリス側が、僅かに揺れる。そして、その中の一人が苦しげに呟いた。

「……我々だって、好きでこんな事をしている訳じゃない！　しかし、上の決定には逆らえないのだ……」

その様子からして、好きでやっている訳ではないというのは、ウソではないらしい。少しは話し合いができる可能性があると思ったであろうスバルは、少し表情を緩めてサテラポリスに提案した。

「なら、今からでも話し合いましょう！　現存するウィザードを全てデリートするなんて間違ってる！　彼らは立派な人間のパートナーなんだから！」

……予想通り、危険思想を持つウィザードの反乱により、『そんな事は国の威信に関わるので早期決着を～』とかそんな考えでお偉いさんがウィザードの集団粛清を決定した未来だったか。

だけど、こないだこの未来を見たときはこの後……。

「……それでも、なっちまったもんは仕方ないだろ？　スバル！」

暁は向こうの屋根から現れるなり電波変換して、ロックマンに切りかかる。

このあとゴンタは、ロックマンを庇ってソードを食らい、そのスキにサテラポリスがゴンタを捕まえ、助けようとしたロックマンとハープ・ノートも捕らえられる……だったかな。

もう１５０年近くこの夢を見ていたから、展開を完璧に覚えてしまった。……早く終わらねぇかな。こんな夢……。

そう思った自分の隣を２つの影が突き抜ける。未来のオレとアイリスだ。

未来のオレはアシッド・エースのソードを庇おうとしたゴンタにバリアを張り、アイリスは負傷したウィザードにリカバリーを使う。これは…オレたちが関わった事で変わった未来。……ジョーカーはなぜ居ない？

アシッド・エースは少し距離を置いて話しかけてくる。

「……やっぱりツバサとアイリスはそっち側に付くか……。しょうがない。あいつを使う！」

暁は右手を上げた。それが合図なのだろう。暁の後ろのサテラポリスはハンターを操作する。いや、暁自身も何かを用意しているようだ。

ヴゥゥゥゥゥン……

鈍い音と共にハンターから現れたのは、サテラポリスのバトルウィザードだった。その先頭には……なるほど、見ないと思ったらそっちにいたか。……ジョーカー。

ウォーロックは納得いかないと言わんばかりに暁に掴み掛かる。

『オイ！　あいつらもウィザードじゃねぇか！　ウィザードは全て攻撃されるんじゃなかったのか！？』

しかし、ウォーロックの腕は暁に届く前にジョーカーに遮られて、さらにジョーカーは言葉を投げかけた。

『サテラポリスのウィザードと、治安維持に協力したウィザードは例外……。これも上の決定したことだ。……フン！　フルダブルスイング！！』

『グオォォォ！？』

ウォーロックはジョーカーの攻撃を受けて吹き飛んだ。

……しっかし、サテラポリスだけ例外とは、狡(こす)いねぇ。おおかた治安維持ってのも、単にウィザードを殺すのを手伝った奴ってだけだろ。

……上の命令という事は、オレは上の連中を抑え切れなかったってことか。……どこからそんな奴らが出たのかな？　今のトップたちはそんな度胸は無いように見えたが…。

……おっと、アイリスとミソラ、ゴンタはウィザードを連れて撤退をするか。スバルとオレは暁たちを食い止めるつもりだな。それでいい、そのまま逃げ切れれば……。一人でも多くの者が生きていてくれれば…。

その望みを裏切るように、ジョーカーがグレイブメテオレーザーの構えをとり、その屈強な拳に、ノイズが集まっていく。

ッ！！　ジョーカー、やめろ――――！！

ズゴゴゴォォォォ！！！！

現代のツバサは右手を伸ばして未来のスバルたちに叫ぶ。このタイプの夢は、夢の中の住人と接する事はできない事を知りながらも、叫んでしまう。そして目の前で、人が散っていく。あっけなく、無残に……。

その赤い光線の中に、もう一人別のスバルがいたような気がしたが、赤い光線の後に残ったのは電波変換を解除されたスバルたちと、それぞれのウィザードたちだった。……たぶん、全員気を失っているだけだろう。

……今見えた別のスバルは気のせいだったのか？

オレがそんな事を思っているうちに、暁は部下に命令してスバルたちを運ばせる。

……たとえ何でもない他人でも、信用していなくとも……その者

が存在し、生きている。それを自分自身で認識した時点で、自分というパズルの中に、その人というピースが生まれてしまう。それを失う時、明確な悲しみや、心のどこかに穴が開いたような喪失感に襲われるのだ。

……力なく下げた右手が温かい。これは……。

一度瞬きをして目を開けると、ジャックがハンマーをオレの腹に狙いを定め、スバル、ミソラ、アイリスはそれを止めようとしている。右手は……3人の距離からしてアイリスが握ってくれていたようだ。……夢から覚めたのだろう。

それはさておき、まずはこの状況を問い詰めなければならないだろうな。……特にジャック。

「オイ。お前ら……人の腹に何しようってんだ？　事と場合によってはタダじゃすまねぇぞ？」

持てる限りの殺気を込めてオレはジャックを睨んだ。

第２５話　繋がる夢（ツバサ編）　（後書き）

これからは3日に一回更新に画一します。

第２６話　スザクとソラ（前書き）

あらすじ：暁さんがソラのウィザード（スザク）をどこで手にしたか聞いたところから始まります。

第２６話　スザクとソラ

［そのウィザードはどこで手に入れたのか？］という暁の質問に、ソラはスザクをチラッと見る。

「仕事が終わって自分の部屋に戻ったときに出会ったのですが……それがどうかしましたか？」

暁は出会った時の詳しい経緯を聞く。これも仕事なのだろう。

ソラは「なぜそんな事を聞くのか？」と言いたげだったが、それをお客に聞くのはいけないと判断したのか正直に話し始めた。

「あれは……大体２ヶ月くらい前……」

――――回想――――

ソラは自室に戻るなり言語を私語に戻した。

「ふぅ～、本日のお勤めコレにて終了！　あとはご飯を食べて、お風呂に入るだけだね♪　……その前に着物のチェックをっと……」

腕を伸ばしたり回したりしていたが、タンスの中の着物のチェックを思い出した。しかし、着物をチェックしてる時に後ろから気配が……

たまにマナーの悪いお客がカーテン越しでも覗いてくる時があるので、ソラは使っていないハンガーを手に、後ろを振り向きながら

声を張り上げた。

「だれ!?　そこにいるのは!　出て来ないとハンガーで一発お見舞いするよ!」

ぶっちゃけ出て来なくともハンガーを投げるつもりだったが、相手の反応は予想外だった。

『あはははは!　同性が同性を覗いても何にもなんないでしょ!　それと、あたしけっこう強いからそんなハンガーなんて簡単に燃やしちゃうよ!?』

その存在(スザク)はカーテンを全開してソラの前に現れた。

(……鳥のようなウィザードがわたしを笑っている。羽が6枚あるなんて面白い子だな)

ソラは、秘かにハンガーを目の前のウィザードの顔面に狙いを定めながらそんな事を思っていた。

〈……それが、いま君の隣にいるウィザード、スザクなのかい?〉

暁の確認にソラは頷いて続けた。

〈はい。その後……〉

スッコーン！

ハンガーは気持ちのいい音を立てて窓の下に落ちていき、スザクはのけぞり、ソラは習慣の関係でガッツポーズ（相手に命中したらガッツポーズをとる癖がついてしまった）。

言うまでもないが、スザクは立ち直るなり文句を言った。

『ちょっと！　ホントに投げるなんて何考えてんの!?』

「いや～燃やせるっていうからホントかな～って」

あはは。と笑って見せたソラに、スザクの怒りはすっかり消火されてしまった。

『ハァ～……まぁ、油断してたあたしも悪いんだけどさ……。ねぇ、それって何?』

スザクが6枚ある羽の1枚を使ってソラの持っていた着物を指差す。その着物は、あざやかな赤い布地に蝶の刺繍がされている着物

で、ソラの一番のお気に入りだ。
ソラは自分の持っていた着物を見て、スザクにニコッと笑いかけた。

「これはね、着物っていうんだよ？　綺麗でしょ～？」

そう言いながら持っていた着物の右袖を右手で、首の付け根を自分の首に合わせて左手で押さえて［くるっ］と回って見せた。スザクは子供がはしゃぐように羽ばたき、ソラに近づいた。

『うん！　とっても綺麗！　……ねぇ、あんたの名前って何て言うの？』
「へ？　赤羽空（ソラ）だけど？」

スザクは自分の羽の1枚を［握手しよう］という意図でソラに向けた。

『あたしはスザク。あんたが気に入っちゃったから、あんたのウィザードになるよ』
「マジで！？　そろそろあたしも自分のウィザードが欲しいなって思ってたんだ～。それじゃあスザク、これからヨロシク！」

――回想終わり――

「な、なるほど……」（コクレンの事情聴取の時とはえらく違うな。何ていうか……フレンドリー？）

コクレンは国外に亡命したとはいえ、事情聴取は行われた。その際にゲンブがコクレンに取り入った経緯を聞いたのだが、それとはかなり様子が違う。

コクレンの時は、ゲンブが自身の洞察力を活かしてコクレンの心の傷を開かせ、そこにつけこむような説得だったが……どうやら同じ人物から作られたといっても、性格はずいぶん違うらしい。

暁がそんな事を思ってるときに、クインティアがスザクに質問した。

「それじゃああなたに聞くけど、あなたはエーテルの部下？」

（（（（（オウ！　直球！））））））

それを聞いてたスバルを始めサテラポリス組はクインティアの直球さに驚いた。

その質問に対してスザクは一瞬硬直し、そのスザクを庇うようにソラがスザクの前に立ってクインティアに尋ねる。

「あの……エーテルって、最近世間を騒がしてる組織のリーダーの名前ですよね？　それとスザクのどこに接点があるんですか？　スザクは気まぐれで、作法をめんどくさいと言って守りませんが、正直で明るい子ですよ？」

その様子からして、ソラはホントに何も知らないだろう。暁もクインティアもそれが分かったのか追求はできなかった。現時点では、名前だけが同じだけって事もあり得る。そうなれば色々と厄介なことに発展しかねない。

だがスザクは、一瞬考えたあと暁に申し出た。

『あのさ……ソラに教えないって条件付きなら話しても良いよ……

いろいろと……』

「「「『『『　ッ！！　」」」』』』

このスザクの発言は、何かを知っていなければ言えない発言だ。それに気付かなかった人物はいないだろう。スバルを始め、スザクを庇っていたソラまで驚いていた。

そのあと正気を取り戻した暁がスザクを部屋に入れ、ソラを部屋の外に待っていてもらうように頼んだ。

「……さて、スザクは何を知っているのかな？」

暁は気軽な笑顔を浮かべているが、内心では真剣というのが雰囲気に出ている。

スザクは緊張しながら話し始めた。

『……あんたたちが思ってる通り、あたしはエーテルから創られたウィザードの１人。……だけど、もうやる気はないけどね』

「やる気がないってどういうこと？」

スバルが率直に考えた事を聞くと、全員の視線がスバルに集中した。どうやら口を挟んではいけないタイミングだったらしい。スバルは小さくなり、ウォーロックは小声でからかってくる。

『（クックックッ。スバル、おもいっきり恥かいちまったな）』

「（ウォーロックうるさい……）」

「（どのみち誰かが同じ事を聞いただろうから気に病むことはねぇだろ）」

ジャックはスバルを励ますが、このままだと話が先に進まない。

暁は大きくセキをして話を戻した。

「ウオッフォン！　……んじゃあさっきスバルが聞いたことだけど、やる気がないってのはどういうことだ？」

「（ほらな、聞いたろ？）」

ジャックはそんな事を言っているが、あえて無視する。これ以上話を脱線させたくないからだ。スザクは忍び笑いしていたようだが、暁が自分を見る頃には平常に戻っていた。

『エーテルの宣戦布告聞いたと思うけど、あいつって傲慢（ごうまん）そうな話しかたでしょ？　あれに付き合うのに比べたら、旅館でソラと暮らしてた方が面白いんだよね。だから、もうやめた』

「……それは……エーテルが率いるファイブ・エレメントを裏切るということかしら。……もしそうなら裏切り者としてあなたが粛清（しゅくせい）されるんじゃないの……？」

クインティアは、スザクの言葉がはたして信じられるかどうかを考えながらゆっくり尋ねた。敵から与えられた情報ほど曖昧（あいまい）で、危険な物はない事を経験で知っているからだろう。

『そのへんはたぶん大丈夫。あたしら４人の中でド真面目に戦いの事を考えてんのは１人ぐらいだから。……そいつにさえバレなければ……』

スザクは自分に言い聞かせて自分を安心させるように言った。暁はそれに気付き、少し自分から出る雰囲気を軽くして、もう一つの質問をした。

「……なるほど。それじゃあ、君の事はソラちゃんには話さないで

おくよ。……できれば組織の情報をくれたらな～って思ってんだけど……良い？」

暁は情報提供をお願いしたが、スザク本人は気まずそうに俯いてしまった。

『……悪いけど、さいきんは旅館のほうに付きっ切りだったし……。それに下手な事を言わないようにって、エーテルにちょっと細工されてるんだよね……』

「細工ってのは？」

スザクは「話したくない」というオーラを全面的に出しているので多少は予想ができるが、サテラポリスとしてキチンと確認を取らないといけないというのを暁は知っているため、腹を据えてスザクに尋ねたのだ。

『……自爆プログラムだよ。組織の深い事を話そうとすると、自動で作動する仕組みになってるんだよね……』

……予想というものは当たって嬉しい事だけではない。スバルとミソラ、ウォーロックとハープ、そしてジョーカーはエーテルに対して怒りを、ツバサは目を閉じて腕を組み、考えを巡らせている様子。アイリスはツバサの後ろでスザクの苦しみを自分も背負うかのように目を伏せる。

暁とクインティア、ジャックはディーラーにいた頃にさんざん裏の仕事をやってきたからか、割と平気なようだが、気に食わないという思いを外に出している。コーヴァスとヴァルゴは退屈そうだったが、アシッドに見咎められて姿勢を正した。

情報が止められている以上、これ以上情報は得られそうにない。そんな訳でスザクを部屋の外に出そうとしたのだが、スザクと暁（

スザクを部屋の外に送る役）の前にツバサが立った。
暁は怪訝そうにツバサに尋ねた。

「どうした？　まだ何かあるのか？」

ツバサはため息をついてスザクを見る。

「スザク……悪いけど、ソラに話さないって約束は守れそうにない」

スザクが約束を守れない理由を尋ねる前に、ツバサはふすまを開けた。

ス――――……

静かな音を立てて、ふすまは開く。

「うわぁ！？」

子供っぽい驚きの声と共にソラが倒れてきた。おそらく聞き耳を立てていたのだろう。ツバサはふすまを開けた方とは反対側の手で受け止め、ソラを立たせた。

ソラは軽くお礼を言い、スザクに向き合う。

「……スザク……全部聞いてたよ」

『……ゴメン。黙ってた。……気に入った人に嫌われるのが恐かったんだ……』

スザクは本当に申し訳無さそうだ。スバルたちは見守るしかなく、2人のこれからは本人たちに託された。他人ではなく、当事者同士でないと結論がつかないこともあるからだ。

ソラは右手の人差し指をゆっくり上げた。

「それじゃあ、私が今から言う事を聞いて」

『……何をすればいいの？』

空の言葉に、スザクは始めに出会った頃（ツバサとジャックに皿を投げた時）とは大きく違って本当に不安そうだ。

ソラは不意に口元に笑みをつくった。

「買い物の時の荷物持ち1ヶ月で手を打ってあげる♪」

スザク含め、その場にいた全員の目が点になる。ソラは少し舌を出して、ウインクしながらスザクに笑いかけた。当のスザクは、しばらくしてから笑い始める。

『プッ、あはは！　そりゃあ重労働だね！』

「え～？　こないだ買い物に行った時、『羽が6枚もあるから、ある程度重くても大丈夫！』って言ったのは誰だっけ～？」

女の子2人の笑い声で、その場の空気が穏やかになる。しかし……。

「いや～本当に話が丸く収まって良かったね」

「「「『『『　ッ！？　』』』」」」

またも双葉ツカサが突然現れた。

本当に、いつから話を聞いていて、いつから人の輪の中に入っていたのかが分からない。というか、気付けなかった。

（そういえば学校で、［ツカサくんは神秘的］って聞いたことがあるけど、コレの事なのかな？）

ジャックがツカサに「本当にお前はいつの間に現れてるんだ！」とツッコンでる間に、スバルはそんな事を思っていたという。

……さっきの騒動で忘れていたが、そういえばそろそろ朝ご飯だ。

第２６話　スザクとソラ（後書き）

分かりづらいところや誤字脱字があったら教えてください。実は、ソラが蝶の刺繍がされている着物をスザクに見せている部分がうまく通じたかが不安で…。

次の更新は３日置きってことで２０日の予定です。お楽しみに。

第２７話　口は災いの元（前書き）

今回は過去最高に短いです。…次の話と一緒にするのもなんかイヤだったんで。

第27話　口は災いの元

突然双葉ツカサが現れた事で、室内はにわかに騒がしくなる。ジャックやスバルがツカサに話しかけている間にソラとスザクは部屋の外に出た。先程の一連の騒動で、自分たちが朝ご飯を持ってきたことをすっかり忘れていたらしい。

そして朝食……。

「「「『『……えっ！ここではできないの！？」」」』』

スザクの自爆装置を解除できるかをクインティアとツバサに聞いたのだが2人の返答は……。

「ここではムリ」

「解析用の設備がないからムリね……」

そんな感じでツバサ、クインティアの順で言われて、スバルとミソラ、ハープ。そしてソラとスザクがショックな声を上げたしだいだ。

ちなみに、ソラとスザクは気の毒な事に近くに女将さんがいたので、一睨みを食らってしまって背筋が伸びた。……後で反省会決定だろう。

「そう……。ウィザードの体内に爆発物がある場合、解析されると自動で爆発するトラップも考えられるから、それなりの設備がないと解析できないのよ……」

「そういうこと。急ぐようなら、オレたちが帰るときに一緒にＷＡＸＡに来て解析っていう手もある。……むろん、女将さんとＷＡＸＡの長官の許可が必要だけどね」

クインティアとツバサが補足説明をした。設備を使う以上ＷＡＸＡ長官の許可は必要で、１、２日とはいえ仕事を休むのだから女将さんからの許可も必要になる。

長官は割と協力的だから問題はないと思うが、問題は女将だ。サテラポリス御一行とツカサ、そしてソラとスザクの視線が女将に集中する。

女将は少し考えるように目を閉じた。

「……先程の反省会と、明日の分の仕事も終わらせば行ってもいいわよ」

「やったぁ！　ほんと!?　女将!」

「ソラ、私語は？」

「あ……スミマセン……」

ソラが自身の喜びを内に抑え切れずに外に出してしまい、女将に注意を受けた。だが、女将もまんざらではないようだ。ソラもそれを分かっているので口元に笑顔を残したままおとなしくなる。

そうこうしている内に全員朝食を食べ終わり、女将さんとソラ、スザクは食器を片付け始めた。本来は食べ終わってから取りに来るのが従業員の仕事なのだろうが、いろいろと話をしていて、結果食べ終わるまで室内にいたといったところだ。

食後、スバル、ミソラ、ジャック、暁は他愛のない話をし、クインティアは時々的確なツッコミを入れる。ウィザードは元ＦＭ（ウォーロックはＡＭ）星人同士いろいろ話をしているようだ。アシッドもちゃっかり混じってる。

ツバサもスバルたちに混ざろうとしたのだが、アイリスに袖を引っ張られた。

「どうかしたか？」

アイリスに尋ねると彼女は少し言いづらそうに侑子たちに頼まれていた注文を言った。

『実は、モコちゃんから一升瓶４本買ってきて。と注文を受けていたんだけど……』

ツバサはそれを聞くと掴まれていた方とは反対の手でひたいを押さえて、口元を呆れで引きつらせた。

「……あんの飲んだくれ連合め……オレ（見た目が未成年）が酒を手に入れんのにどんだけ苦労すると思ってんだ……。こうなりゃ変装とかして買うかな…」

『……わたしが買って来てもいいぞ』

「『あっ……』」（（ジョーカー、居たんだ））

ジョーカーはツバサのハンターの中から声をかけたのだが、ツバサもアイリスもジョーカーが居た事に気付かなかったらしい。

ジョーカーは２人の反応で、自分がハンター内に居た事に２人が気付かなかったことを察した。

『……ツバサ、アイリス……まさかわたしの事を忘れて……』

ハンターの中で、ジョーカーが珍しく落ち込んでいる。それも、うな垂れるほどに……。ツバサとアイリスは急いで謝る。

「悪りぃ、てっきりウォーロックたちと話しているかとばかり……」

『ごめんなさい』

ジョーカーはしょうがないと言わんばかりにため息をつく。

『はぁ。……まあいい。酒は帰る前に売店で買ってきてやろう。…本来はモコちゃんという者の事も聞きたいのだが、話してはくれんのだろう？　貴様らはわたしに隠し事が多いからな』

ジョーカーの半ば呆れたような目に、ツバサとアイリスはお互いに顔を見合わせたあと、申し訳なさ気に苦笑した。

「悪いな……ホントに……」

『ごめんね、ジョーカー。……ありがとう』

『……そう思いながら黙っているのだから性質（たち）が悪い……』

３人の話がまとまりそうなそうな時、暁が口を挟んだ。

…どうやら今、暁たちはポーカーをしているらしい。ちなみにソラもポーカーに興味があるらしく、食器を片付けながら様子を見て、女将がセキで注意する。というのを繰り返していた。

「おーい！　そこの３角関係！　こっちに来てポーカーでもしない……」

スッコーン！　ズドーン！　ズバ！

「ぐぁ！？」

暁が最後まで言う前に、ツバサはリアルウェーブで作った棒を投げて、ジョーカーがミサイルを1発放つ。アイリスは無言でウォーロックを（一番近くにいたので）オペレートして爪の一撃。3人の攻撃で暁にはたんこぶ、ヤケド、切り傷ができた。

「『『……そんな関係じゃないっていつになったら分かるんだ？／　分かるの？」』』

ツバサ、ジョーカー、アイリスが声を揃えて暁に迫力（怒気）込みで問う。3人とも頭では冗談だと分かっているのだが、暁の態度がそうさせるのか、なぜか腹が立つのだそうだ。

（（（（（恐（こわ）！！））））））

その気迫にスバルたちは恐怖を覚え、ウォーロックは自分がやったことに対してがくぜんとし、クインティアは「シドウも懲りないわねぇ……」とぼやいていた。その発言からして、ＷＡＸＡではけっこう同じような事がしょっちゅう起こっているらしい。おまけに女将さんとソラも動作を止め、さらに目も点にしてそれを見ていた。

第２７話　口は災いの元（後書き）

……今思えば、スザク編長！書いてる僕も少しビックリ。次の更新は２３日の予定です。いくら今回が短くとも、ペースを崩すと大変な事になりそうなんで。

ちなみに暁は旅館２日目は災難続きだったりします。次の話でも……。

第２８話　午前は別行動（前書き）

どうも。実は前回この話と一緒にしたくないって言った理由は、今回出てくるキャラがあまりに偉大というか存在感があるので、この話はこの話で出したかったんです。

第２８話　午前は別行動

せっかく有名旅館に来たので、スバルたちはそれぞれ旅館や周辺を見て回ることにした。

スバルとミソラ、ウォーロックとハープは商店街へ。暁とクインティア、ジャックとその３人のウィザードは旅館内を見てから周囲を散策するらしい。ジョーカーとアイリスはツバサから買い物メモをもらって、酒とＷＡＸＡへのお土産を買うために売店へ。当のツバサはいつの間にか消えてしまった。

――スバルたち――

商店街は活気が満ち、道行く人が活き活きしている。朝と言うのもあって、市場の人や旅館の人が多いからだろうか。

スバルとミソラ、ウォーロックとハープがその様子を見ている時、ひときわ大きい声が響いてきた。

「だめだめ！　これ以上はまけられないよ！」

「そうはいかないよ～！　女将さんから、『値切れる物は値切って来い』って言われてるんでね。それに、スザクと私の仲がさらに良くなった祝いにってことで！」

近づいて見てみると、ソラが魚屋に対して値切っていた。周辺の人が笑いを堪えながら見ている所を見ると、ほとんど恒例行事らし

い。

ちなみにソラは髪型をストレートからツインテール（頭の後ろの上の方で2つに結うタイプ）にして、半袖短パン（半袖が赤を基調、短パンは暗めの青）に着替えていた。先程までのおしとやかさが完全に無くなって、すっかり快活なイメージになっている。おそらく彼女の声と、『スザク』という単語が発せられなければ、本人だと気付かなかっただろう。

そして当然ながら、魚屋は値切るのをしぶっている。

「う〜ん、ソラちゃんとスザクちゃんが仲良くなったのは確かにめでたいけど、こっちも商売だからな〜」

「諦めなよ。ソラちゃんに値切りで勝てる人なんていないと思うぜ？」

そう魚屋に助言するのは、着ているエプロンの柄からしてまんじゅう屋だろう。……そういえばこの辺はまんじゅうが名物だと聞いたことがある。

スバルがそんな事を思い出している時に、ソラがこちらに気付いた。しかも、いかにも「ラッキー！」という顔をしている。早く離れておけばと思っても、もう遅い。

「ほら、あっちに私のところのお客さんもいるんだしさ！　あの子達は育ち盛りだからいい物食べないとね。いい物と言えばおじさんの魚でしょ！　それに、その中の一人はあの響ミソラだよ！？」

そう言いながらスバルたちの方を指差した。モノの見事に利用されたのだ。商店街の人の驚きの視線はスバルたち、いや、ミソラに集中している。その後は当然……。

「すっげぇー！本物だ！」

「オレサインもらおうかな～？」
「カメラ！　カメラ！」

騒然となる。「「　ソラさんなんてことをー！　」」とスバルとミソラは叫んでいるが、その声は完全に打ち消されている。ちなみに、ウォーロックとハープは店の屋根の上に避難していた。
　そしてソラは得意げに魚屋に話しかける。

「……どう？」
「……はぁ～。ソラちゃんには敵わないな。それじゃあ、ミソラちゃんのサインを頼めるかな？　うちの娘が大ファンなんだよ」

　つまり、ミソラのサインとの交換条件というわけだ。ソラもその意図に気付いたらしく、ミソラの元に来た。

「ミソラちゃん、悪いけど魚屋さんにサインをお願いできるかな？」
「いいよ。……というか、この状況で断れる訳ないし……」

　ミソラは少し困ったように言うと、ソラは明るく笑いながら腕をしならせてミソラの背を叩いた。

「あはは！　だけどここは活気があっていいでしょ？　……だから私、ここが好きなんだ」

　そう言うソラの横顔は、本当にこの町が好きというのが伝わってくる顔だ。スバルとミソラはその笑顔を見てると、自分まで嬉しくなってくるのを感じていた。
　その後、商店街の人が続々とサインを注文してソラは予想外の食材を得てゴキゲン。ミソラも楽しそうだ。スバルはというと……。

「きみミソラちゃんの彼氏？」
「い、いや、そういう訳では――」
「バカ！　そういうのはうかつに言えるもんじゃないんだぜ？　なぁ、キミ？」
「え、えっと、その……」

商店街の人のテンションに圧倒されていた。ソラは買い物が終わって「次は明日の分の仕事で風呂掃除もしないといけない」との事で旅館に戻り、その場はいっきに静かになった。

そしてスバルは、へとへとな状態ながらもお土産を買うことにした。両親には名物のまんじゅうを買い、委員長トリオにはストラップなどの小物がいいと思い、商品を見ている。

「ふぅ。本当に明るい子ですね、ソラさん。……それじゃあ、ソレとソレとソレをお願いします」

スバルは、ルナ、キザマロ、ゴンタへのお土産を選びながら店の人に話しかける。店の人は会計をしながら、なぜか苦笑して話し始めた。

「今だから明るいがね、昔はとてもじゃないが見れたもんじゃなかった」
「えっ、何かあったんですか？」

後ろで聞いてたミソラは［ひょこ］っと顔と声を覗かせる。店の人はスバルにお土産が入った袋を渡しながら続けた。

「……あの子はね、両親に捨てられたんだよ。孤児園の前の木に片手を固定されててね、毛布をかけられて居た所を孤児園の人が見つけたそうだよ。

……たぶん、寝ている時にソラちゃんを連れてきて、もし目が覚めても追いかけてこないために固定したんだろうね」
「……酷い……」
「……その後、どうなったんですか？」

ミソラは自分の口元を両手で押さえ、スバルは「ソレを聞いた後自分に何かできることはないだろうか」という思いからその先を聞いた。店員はスバルとミソラをじっと見たあと続けた。

「その話を聞いた女将さんが孤児園に行ってね、ソラちゃんを引き取って、この町に暮らし始めたんだ。暮らし始めた頃は、捨てられたショックで心を開けなかったのか、ほとんど笑顔を見せてくれなかった。……まぁ、捨てられた時は物心着いた後だったから、ショックも人一倍だろうからね……。幼いなりに、自分は捨てられたというのが分かるだろうから。
そこから女将や旅館のみんな、そして俺たちと接するうちに、少しずつ元気になっていったんだ」
「それじゃあ、ソラさんはみなさんのもう一人の子供のようなものですね」

ミソラが安心したように明るく言うと、店の人も呵々（かか）と笑う。

「はっはっは！　俺たちの子供か。そうだな……あの子はこの町に、この町の全ての人に育てられ、支えられてここまで生きてきたから、俺たちにとってあの子は自分たちの子供みたいなものかもな。
……今のあの子の笑顔は俺たちにとって、俺たちの笑顔の原動力になっているんだよ。……あの子はそれに気付いても、意識してもいないとも思うがね。
ほらボウズ、こいつはおまけだ。相手はアイドルだから敵は多いと思うが、しっかりやれや。……それと、帰ってもソラちゃんと仲

良くしてやってくれ。君たちなら、あの子のいい友達になってくれそうだ」

店員はそういうなり、スバルに音符型の飾りがついたネックレスを渡す。スバルとミソラは互いに顔を見合わせたあと、照れて赤くなりながらもお礼を言った。

――――露天風呂の地下室――――

よかよか村の旅館、うらかわの露天風呂の地下には3つの大きなサーバーがある。正面に1つ、右に1つ、左に1つだ。

ツバサはそんな場所に来ていた。

「久しぶりだな、セレナード。元気だったか？」

ツバサは正面のひときわ大きいサーバーの前に立ち声をかけると、呼ばれた者は正面のサーバーの画面に現れた。

体を守るアーマーは金色で多くは無く、両腕の前腕と肩、そして頭にしかない。一番の特徴は背中の羽衣のような物だろう。その薄い羽衣で、敵の攻撃を受け流すように反射するのだ。

セレナードは心底懐かしそうにツバサに話しかけた。

『……ええ、お久しぶりです。何年ぶりでしょうね……そう……ちょうど１５０年ぐらい前でしょうか。今日は何しに？』
「たまには外に出ないとね。あいつらは元気？　……感情が残ってたって聞いたんだけど……」
ツバサは質問を軽く流し、逆にセレナードに聞いた。よかよか村に行くと聞いてから、この場所に来るのを決めていたのだ。
セレナードは［変わらないな］という思いからクスッとツバサに笑いかけた。
『ええ、あなたが助けたナビ全て生きてますよ。感情も残ってます。……そもそも、ご自分でそう創られたのでしょう？』
その言葉にツバサもほっとしたように微笑む。
「実を言うと自信がなくてね、あの時は多くの者を保護する事が優先だったからな。管理者を除いて、自我が残っているかどうかは賭けだった」
『あの時のあなたは必死でしたからね。……フォルテは寝ていますが、起こしましょうか？』
「別にいいよ。あいつが起きると色々うるさそうだから。
……お前らは３つのサーバーの管理者で、エンシェントサーバーとノアズサーバーはお前が。ネビュラサーバーはフォルテが管理してんだよな。そしてノアズサーバーはエンシェントサーバーに入りきらなかった奴らが入る重要なモノだから、コレだけは計画が終わっても維持していかないとな。光親子のナビも中にいることだし……」

ツバサはそう言いながら正面のサーバーに触れる。
一方セレナードは［エンシェントサーバー］という名前が引っ掛かり、悩むそぶりを見せた。

『エンシェントサーバー……ああ、名前をシャインサーバーからエンシェントサーバーに変えたのでしたね。その上、サーバーへの接続用ＰＧＭも２つに分けて……』

「なぁに、ヨイリー博士ならそのことに気付くはずだ。……２つが合致する事を気付けても、もう一つの秘密は気付けないだろうけどね」

ツバサが愉快気に笑うのに対し、セレナードはため息をついた。

『……本当に手の込んだ事を……その上、シャインサーバーに入りきらなかったナビを保存するノアズサーバーも作ったのでしたね』

ツバサも過去を思い出すようにゆっくり頷いた。

「……全てのナビがエンシェントサーバーに入るには限界がある。だから、多くのナビをかくまうには他の何かが必要だった。そこで、メモリ拡大プログラムのエクサメモリをこのサーバーに繋ぎ、容量を上げたんだよな。
そしてその容量があったからこそ、ひん死の暁とジョーカーのダメージを吸収して２人を再構築する事が可能となった」
『だからといってウラサーバーに接続するなんて……今思い出しても驚かされます。
元々、ウラサーバー。いえ、ウラインターネットと言った方が正しいですね。それは、とあるプログラムを保存するために作られたモノなので役割的に理は通ってはいますが、同時にならず者の巣窟（そうくつ）

でもありましたからね。……しかし、暁という男の電波変換時にかかる負担もこのサーバーが受け持つのは大変だと思うのですが……？』

セレナードの咎めるようなジト目にツバサは苦笑いして弁解した。

「仕方ないだろ？　あいつ他人のためにムチャばかりするんだから、オレが何言っても電波変換するだろうよ。……それに、ワイリー博士の開発したネットワークシステムが負担によって生じる損傷箇所を直してくれるんだから結果オーライだろ？」

『……本当にしょうがない人ですね。あなたは……。そういえば、昨日はやけに不穏な気配がしたのですが、何かありましたか？』

セレナードの思い出したような問いにツバサは少し俯いて失笑した。

「……色々面白いのが出てな、そのせいでは無いと思うけど……また予知夢を見た。……オレが関わっただけだと、未来は変わらなかったよ」

『……やはり、未来を変えるとは難しいようですね。……ですが、諦めるつもりはないのでしょう？』

セレナードはツバサの出す答えを知りつつ聞いた。ツバサはそれを察してため息をついて顔を上げた。

「もちろん。こんなもんじゃ諦めない。……だけどせめて、スバルたちには下手な推測に惑わされず、自分の目の前の事実だけを見て、自分のやるべき事をやって欲しいな……」

途中でツバサは思い出したようにスバルのことを話題に出した。
セレナードは軽く微笑んでそれに頷く。

『噂を聞く限り優しい子ですからね。本当の事を知らないほうが幸せな事もあるでしょう。……それはそうと、先程のあなたの「面白い」は一般の人にとって、「恐い」に該当すると思いますよ？』

「あはは。その辺は愛嬌ってことで！」

ツバサは愉快気に笑って答えた。その時セレナードが何かを感じたらしく、片手を前に出し、上を向く。

『……風呂場に誰か近づいて来ます。早めに去った方が良いでしょう』

「おう、サンキュー。……その前に、頼んでた物は？」

ツバサは「くれ」と言わんばかりに手のひらを上向きに出した。
それを聞いたとき、穏やかだったセレナードの顔が初めて曇る。

『……ダークチップですか。それは、一度でも使えば元には戻れませんよ。……それでも、決意は変わらないんですね？』

「……まだ使う時ではないけど、打てる手は打っとかないとね」

『……アイリスさんはそのことをご存知なのですか？』

「知らないからこそ意味がある」

即答して見せたツバサに、セレナードは一言『……分かりました』と呟くと、ツバサのハンターにそのデータを転送した。
ツバサはそれを受け取ったのを確認すると「ふっ」と笑って2人

のネットナビに話しかけた。

「しかと受け取ったよ。んじゃあセレナード、フォルテ……最後の時に……な」

ツバサはそう言うと地上に戻った。セレナードはツバサを見送った後『クスッ』と笑って向かいのサーバー（ネビュラサーバー）の方を向く。

『あなたが起きている事、バレていたようですね』

セレナードが話しかけたのは、今まで寝ていた。いや、寝ているフリをしていたフォルテだ。

『フン……やはりオレはあいつが嫌いだ。そもそも人間なんぞに救われるとは……不覚以外の何でもない』

フォルテがイライラしている中、セレナードは当時を思い出しながら微笑む。

『あなたが一番このサーバーに入ろうとしませんでしたからね。しかし、あなたの役割は大きいですよ？

最強クラスの力を持つあなたが管理するサーバーに、なぜ1体しか入っていないか……気付かないあなたでは無いでしょう？』

『……オレだけでなく、あいつが自分の持つＰＧＭを介して2人がかりで抑え、さらに、分離した2つのＰＧＭがもう1つのＰＧＭと互いに力を打ち消しあって、互いを抑える。……そうでもしないと抑えられない怪物がいるからだろ……』

『ふふ。あなたが怪物と言うと、説得力がありますね。……しかし、その怪物は酷く身近な存在でもある……』

セレナードは途中から笑みを消してフォルテを見た。フォルテも目だけをセレナードに合わせる。

『……闇……か』

『……えぇ……。そして、先程わたしが渡したのはそれを強める物。……自分の守りたい者を守るために……』

――その頃暁たちは――

「……おい、ここどこだ……？」

「……」

ジャックは怒り気味に暁に聞く。クインティアも何も言わないが怒気が伝わってくる。暁は目を泳がせながら歩き続ける。

「……とりあえず川を探そう。下流に行けばそのうち民家に着くって！　……だから、そう殺気に満ちた目で見るなー！」

手早く言えば迷ったのだ。旅館を一通り見て外に出たは良いが、道に迷ったらしい。暁はその後、2人の人間と3人のウィザードに睨まれながら民家を見つけて道を聞いたと言う。

第２８話　午前は別行動（後書き）

次回の更新は２６日の予定です。感想待ってます。
なぜツバサがダークチップを求めたかはセイリュウ編の時に分かります。この時点で一つだけ言っておきますが、他人には使いません。
むろんアイリスにもね…。

第２９話　不審（前書き）

今回は色々とお知らせがあるので後書きにて発表しています。

第２９話　不審

暁たちがちょうど自分たちの状況（迷子）に気付いたとき、ツバサは周囲を警戒しながら岩の隙間（地下へのエレベーターがある）から出た。周りへの警戒を怠らずに脱衣所の引き戸に手をかけようとしたのだが……。

ガラガラ～

引き戸は昔ながらの音を立てながら開いた。無論ツバサが開けたのでは無い。

目の前にいたのは、デッキブラシとバケツを持ったソラだった。

もっとも、目の前にいる彼女はツインテールに半袖短パンと言った活発そうな印象に変わっていたからツバサが本人だと気付くまで１０秒は動きが止まった。

それも、自分自身で気付いたのではない。

「どったのお客さん？　服を着て風呂に入るタイプ？」

その声でやっとツバサは彼女だと気付き、呆れるように肩を竦めた。

「そんなことしねぇよ。そんなバカがいたら、ぜひともお目にかかってみたいね」

ツバサの返答にソラはクスクスと笑いながら尋ねる。

「ふ～ん、それじゃあ何してたの？」

「それは……」

ひらっ

「あ、クロアゲハだ」

尋ねられた事に答える事はできないので、ツバサはちょうど視界に映った蝶で話を逸らす事にした。

ツバサは蝶の方を向き、ソラも思わずと言った感じでそちらを見る。

「あ、ホントだ。……な～んかはぐらかされたような気がするんだけど……まぁ、今回は不問にしてあげる。ありがたく思え！」

えへんと胸を張って威張ってみせたソラに、ツバサは思わず笑ってしまった。ついでなのでもう少し乗ることにする。

「それはありがたき幸せ。……お詫びって言ったらなんなんだけど、蝶ってのは『旅立ちの印（しるし）』とか、『変わる前兆』って意味を持つらしい。……知り合いから聞いた豆知識だけどな」

「へぇ～……面白いことを知ってるんだね。……そういえば、まだ直接キミの名前を聞いていなかったような……」

ソラは感心していたが、思い出したようにツバサに尋ねてくる。

ツバサはいつもの飄々とした調子で名乗る。

「そうだっけ？　……まぁいいや。オレの偽名は飛王ツバサ。よろしく」
「そっか！　こちらこそよろしく。え～と……黒髪雑学くん！」
ソラはニッコリとわざとらしい笑顔で言ってきた。ツバサは怒った様子でソラを睨む。
「……オイ、オレの名前聞いたよな？　……っつ～かわざわざあだ名を考えながら言ったろ……！」
「私が聞いたのは偽名でしょ？　人と話すときは、自分の本当の名前を名乗りなさい！」
そう言いながらバケツを持っていた方の手を腰に当て、デッキブラシをツバサに突きつけた。ツバサはため息をついて目の前のデッキブラシを手で逸らして風呂場（露天風呂）から出ようとする。
「あ～……んじゃあ、黒髪雑学くんで良いよ」
「……よっぽど自分の名前嫌いなんだね」
ソラは自分を横切って去ろうとするツバサに声をかけ、ツバサはソラと背中合わせのまま呟く。
「……まぁね」
「わたし、産みの親から捨てられてさ……」
ツバサが自分が開けた戸を閉じるために戸に手をかけた時、ソラは不意に口を開いた。ツバサは手を止め、ソラと向き合う。
「……捨てられた？」

ソラは少し悲しげに頷いて続けた。

「うん。だから、こんな名前大嫌いだー！　って、何回思ったか分からない。……だけど女将や町の皆が笑顔でわたしを『ソラ』って呼んでくれる度に、この名前も悪くないかな…。って思えるようになったんだ…。だからさ、キミの本当の名前を教えてよ。……わたしが呼んであげるからさ」

「……何でオレにそんな事を？」

ツバサは本当に分からないという顔をしている。ソラは少し考えた後「クスッ」と笑った。

「なんとなく！」

「……聞いたオレがバカだった」

ツバサはそう言うなり、呆れた様子で出て行った。スザクはツバサが去った後ハンターの中から不満そうに毒づく。

『何さアイツ！　ソラが自分の過去を話すなんて滅多にないのに！　ソラも、何であんなヤツに教えたの!?　……それに、ホントはなんとなくなんて理由じゃないんでしょ？』

ソラは「あはは……」と苦笑してスザクを見た。

「スザクには敵わないな～。なんとなくなんだけど、黒髪雑学くんがわたしと似てる気がしてね～」

『はぁ!!?　どこが!?　あんな生意気くんのどこが!!?』

「スザクどぅどぅ……。それよりも、そろそろ掃除を始めないと女将に怒られるよ？」

『……は～い』《　ちぇ、ドサクサ紛れにサボろうと思ったのに……》

そしてスザクは不承不承掃除を開始した。床にせっけんを転がしながらぶつぶつ文句を言っているスザクをソラは秘かに笑いながら……。

（……雰囲気が似てるんだよ……もしかしてあの子も……？）

そんな事を思いながらバケツに水を汲み、デッキブラシをそれにつけた。

スザクがせっけんを転がしてくれたおかげで、滑りそうだがそれはそれで汚れが良く落ち、掃除も面白くなる。

「さてと、スケート風フロ掃除始めようか！」

ソラはそう言うとデッキブラシを自分の前に出して勢い良く滑り出した。

――――旅館裏の物置――――

「女将～？　どこ～？」

ソラは風呂場の掃除が終わった報告をしようと女将を探している。厨房にも旅館内にもいないとなると、十中八九物置近くにいるのだ。

「やっぱり、そろそろかしらね……」

「……そうですね。そろそろ……」

向こうのやぶの奥から女将の声が聞こえる。女将は誰かと話しているようだ。声からして女将の右腕と言われる人で、ソラも色々な事を教わった。厳しいが頼りになる人である。

ソラはそっちに近づいたのだが……。

「そろそろソラ・・・・・捨てた方が・・わね」

「えっ……？」

［捨てる］という単語に、思わずソラの歩みは止まった。風が葉を揺らす音でよく聞こえなかったから聞き間違いかもしれないが、境遇上好きな単語ではない。

しかし、ソラが考える時間はそうはなかった。

「ええ。さすがにもうアレは……捨てた方がいいでしょう」

「……うそ……」

ソラは自分の耳を疑った。今度ははっきりと『捨てる』と聞こえたのだ。本当ならすぐにでもこのやぶを超えて2人に本当の事を聞きたい。しかし、ソラはそこから逃げ出した。真実（ホントウ）を知るのが恐かったのだ。

（もし、自分の事だったらどうしよう。ここは……私が居て良い場所……。私の存在が認められる場所……。ここに居られなくなったら……）

ソラはそういった恐怖で駆け出し、自室に逃げ込んだ。

――ソラの部屋――

「うっ……ぐすっ……私……女将……」

『……ソラ……』

ソラはまくらに顔を埋めて泣いていた。

スザクが心配して声をかけるが、ソラには何も聞こえていない。

先程の言葉をウソだと思いたい気持ちと、確かに聞こえたという現実がソラを追い込んでいたので、自分を想う者の気持ちや言葉にも気付けないのだ。

……自分の心を必死に支えている状態で、周りの声が聞こえるはずは無いから……。

その時スザクは自分にできる事を考えた。そして出した結論は…。

『……ソラ……壊す？　……全部……』

その言葉に、ソラは顔を上げた。

スザクの出した結論……それは自分が生み出された存在理由……破壊だ。ソラの嫌いなモノを、苦しめるモノを自分のチカラで壊す。それしか思いつかなかったのだ。そして一度発せられた言葉は無かった事にはならない。なので、これからその他の方法を思いついても……もう遅い。

言葉は波のように空気を伝い、ソラの耳に溶け込んだ。

「……スザクは……何があっても私の味方だよね？」

『もちろんだよ？　ソラ……』

スザクは優しくソラに言葉をかけた。それしかできなかったから

だ。ソラは意を決したように自分のハンターを握り締めた。

「うん。……壊そう。……全部……」

『分かったよ……ソラ』

今ソラの中にあるのは、信じていた人に見捨てられた悲しみと、それにより崩れそうな心を支えているスザクの『自分はソラの味方』という言葉だけだった。

（スザクが味方でいてくれるから、私は一人ぼっちじゃない。……もう、誰かに見捨てられた悲しみや苦しみを味わいたくない！　……味わうくらいなら……いっそ！）

その直後、部屋からは眩しい光が飛び散る。その光は皮肉なくらいに美しく、鮮やかな赤だった……。

第２９話　不審（後書き）

データファイルの方にワイリーとソロのデータを追加しました。他にも色々手を加えています。

それと、今更かい！って感じですが、ツバサが受け取ったダークチップはアイリスはもちろん他人には使いません。…今言えるのはこれだけです。（これは２７話の後書きにも書いたのですが、いちおうもう一度書きました）

それと、本当に勝手ながら１４話を改めて見てみると「これ要らなくね？」という所があったのでその部分を削除しました。なので本編の３０話を更新する時に、作者とキャラクターのトークという形でそれを載せます。なのでその日は本編＋番外の２話更新です。

最後に、２９日は外せない用事があるので次の更新は３０日になります。もうすぐこっちの夏休みも終わるので実家から学生寮に帰るんスよ～。

第３０話　朱雀

スバルとミソラ、ウォーロックとハープが旅館に戻り、暁たちがようやく民家を発見し、アイリスとジョーカーが部屋でお土産をそばに置いて皆の帰りを待ち、ツバサが部屋の戸に手をかけたちょうどその時、突如火災報知機が鳴り響く。

ビービービー！　火災発生！　火災発生！　従業員は直ちにお客さんを避難させてください！　繰り返します。従業員は……。

スバルとミソラはお土産を受付に預け、やぶの中から電波変換する。スバルが「目立ちたくない」との事で人目を引かないための手段だ。

ジョーカーは窓から出たが、アイリスは旅館の玄関に靴を預けているのでいったんそちらに向かった。見た目が見た目なので靴を預けるのは仕方がない。

ちょうど前の方にツバサが走っていたので合流し、玄関ではロックマンとハープ・ノート、そしてジョーカーと合流した。暁たちがいないが、時間も無いのでこの人数で対応することにする。

騒動の原因を探そうと思ったが原因は向こうからやって来た。

女の電波体で６枚の羽を持ち、手首にはブレスレットのように炎をまとっている。長い髪は炎のように揺らめき、後ろに流している。一見すると炎を司る天使のように見えるほどだ。

しかし、６枚の羽という時点でスバルたちはそれが誰なのか分かった。

「ソラさん！　スザク！　なんでこんな事を！」

スバルの問いに、ソラはスバルたちの方を向いた。

「……お客さんたち？　……今のわたしはスザク・フレア！　邪魔をするなら……相手がお客さんでも容赦はしないよ！　スザク！」

ソラは返答を拒絶し、スザクに呼びかける。スザクもそれに応えてウィザードＯＮした。

『ＯＫソラ！！　わたしの元となった特性は　全てを飲み込む破壊の烈火！その炎を食らえ！！』

「一の舞……星降（ほしふ）り！」

スザクが自分の翼を羽ばたくと炎の大波がロックマンたちを襲う。さらにソラの方も手首のブレスレットを回転させて腕を前に出した。その途端、ブレスレットから無数の炎弾が降り注ぐ。

ズドドドドォォ！！

大波と炎弾が襲った後には、ハープノートのバリアが揺るぎなく存在していた。とっさに全員が入れるだけのバリアを張ったのである。

しかし、ほっとしたのもつかの間。ロックマンたちの無事が分かるなりソラは次の攻撃の準備を始めた。右手首の炎が指先まで覆う。

「三の舞……不知火（しらぬい）！」

そして腕を斜めに振る。腕の炎はどんどん伸びていき、最終的にはムチのようになった。
ムチは相手をなぎ払ったり、敵の行動を封じたりといった感じで応用力の高い武器。相手が使いこなせればこれほど厄介な物はない。
一方ハープ・ノートは先程バリアを解除したばかりなので対応が追いつかない。

……当たる！

「「ジェミニサンダー！！」」

ビシャ――ン！！

２人の声と雷鳴の音と共に、寸前まで迫っていたムチが地に落ちる。ムチが途中で電撃により焼き切れたのだ。
敵味方問わず電撃が来た方（旅館の屋根）を見ると、そこには白と黒の電波人間、ジェミニ・スパークが居た。双葉ツカサと双葉ヒカルがジェミニと電波変換した姿だ。
２人は屋根から下りてきてツカサは左腕、ヒカルは右腕に電気をまとう剣を作り出してスザク・フレアに構える。ツカサは目だけをスバルに向けた。

「スバル君、大丈夫かい？」
「うん。ありがとう、ツカサくん」
「……オイ、お喋りしてる暇はなさそうだぜ？」

ヒカルはスバルとツカサに注意した。スザク・フレアの方を見ると６枚ある中の１枚の羽が炎を帯び、そこから火の粉が降ってくる。

火の粉は地面に落ちるなり人の形になり、気付けば２０体ほどになっていた。
スバルが驚きながら呟く。
「コレは……？」
「四の舞……召炎。……見ての通り炎の人形たちだよ。さぁ、行け！　人形たち！！」
スザク・フレアはそう言いながら手を前に出した。その途端人形たちは襲ってくる。スバルはロックバスター、ハープ・ノートはショックノートといったようにそれぞれの攻撃で順調に倒しているように見えたが……。
『ッ！　こいつら再生してやがる！』
最初に気付いたのはウォーロックだった。確かに自分たちが倒したヤツが再生してる。斬られれても繋がり、撃たれても穴がふさがれる。
けっして倒れない軍勢を前に、スバルたちは押し戻されていく。現在はロックマンとジョーカーが前衛。ハープノート、ツバサ、アイリスが後衛でサポートに当たっている。
「まずいな……。すぐ後ろに旅館がある。このままじゃ旅館にも被害が出るな……。スバル！　ノイズは貯まったか？」
『オウ！　貯まったぜ！』
ツバサの質問にはウォーロックが答え、さっそくノイズチェンジを開始する。ちなみにスバルはノイズチェンジ中は無防備になるので後ろに下がり、代わりにツバサが前に出た。

気付けば光が飛び交う幻想的な世界。ゲンブ戦で見た世界だ。
この前は気付かなかったがウォーロックがいない。……おそらく、電波変換は維持されるが現代のウィザードは介入できないようになっているのだろう。
しかし今回は誰も居ない。ゲンブ戦の時はナイトマンがいたのだが、今回は気配すらないとはどういうことだろう……。

「……どういうこと？」

スバルが戸惑ってる時に突如後ろから殺気が突き刺さる。慌てて後ろを見ると死神が持つような赤い鎌が迫ってきた。とっさにかわしたが、その攻撃をした張本人は不気味に笑い出す。

『クックック……ヒャ――――ハッハッハッハ！！！　カーネルの言った通りずいぶんなやり手だな！姿は違えど、ロックマンってのはなんでこう狩りがいのあるヤツなのかね～？』
「……狩りがいのあるって……２００年前のロックマンを倒したの！？　それにキミは一体……」

前にカーネルが『サーバーの中の奴らにも協力を求める』と言っていたが、まさかこんなナビまで居たとは…。
スバルの質問にそのナビはなぜかつまらなさそうに持っていた鎌を肩に背負う。

『……いいや。あの時はそれ所でもなかった。……依頼があれば殺ってたんだがな。おっと、オレは電脳の殺し屋キラーマン。よろしくな、この時代のロックマン』

そのナビの髪は灰色で鬼のような角を生やしている。鎌は持ち手が黒で、刃は赤い。

おそらく『殺し屋』どころか『死神』と言われても言葉と見た目にギャップはそう無いだろう。

一方スバルはキラーマンの言った『あの時』に引っかかった。もしやナイトマンが言いかけた１６０年前の出来事ではないだろうか。教科書では［ ナビの反乱 ］によりナビが駆逐されたそうだが……。

「あの……あの時って？」

キラーマンはむなくそ悪そうに、鎌をスバルに当たらないように注意しながら振り回した。

『ナビの虐殺だよ。そりゃあ酷いものだった。サーバーに入れられたやつ以外はほとんど殺られちまった……』

「……虐殺……」

『あぁ……反乱を起こしたのは一部のナビだけだったんだがな』

「えっ……？　一部だけ？」

スバルは、「一部だけで国、いや、世界がそこまで動くなんて妙だ」という思いからキラーマンに聞いたのだが、キラーマンは怪訝がる様な目でスバルを見てくる。

『ああ。一部だけだ。……お前たちの時代だと一体どう伝わっ……チッ！　もうお喋りタイム仕舞いか！』

何かを聞こうとしたようだが、キラーマンは自分の言葉で話を遮った。周りを見てみると、たしかに光が色あせてきている。ここにいる時間の限界が近い証拠だ。

スバルが色あせていく様子を見ているとき、キラーマンに肩を乱

暴に叩かれた。

『オイ！　この時代のロックマン！　オレの力を使わせてやる。せいぜいたくさんのヤツを血祭りにあげてくれよ！　ヒャーハッハッハッハッハ！！！』

第３１話　誤解（前書き）

今回はスザクとの戦闘です。

第３１話　誤解

スバルは死神の笑い声と共に現実に戻った。……おそらく今日の夜、あの笑い声でうなされるだろう。

それはさておき、やはり時間はそう経っていない様だ。３，４分はキラーマンと話したと思ったが、周りの状況からしてほんの２，３秒しか経っていない。

当然ながらほとんどの者（特にミソラ）は驚いている。それはそうだろう。周りからして見ればほんの２，３秒で姿が変わったのだから。

肝心のキラーノイズの姿は紫の装甲にキラーマンのような赤い鬼の角に灰色の髪。さらに肩には不気味な目がついている。そして手には全長が１．５メートルほどの鎌があった。

キラーマンが持っていた鎌とは違い両端に刃が付いている。刃はキラーマンが持っていた鎌より若干短くなっており、長さは大体３０センチくらいだろうか。……たぶんスバルが鎌を使いやすいようにキラーマンが配慮してくれたのだろう。

その時ツバサが呆れたようにスバルに声をかけた。

「ス～バ～ル～自分の姿に見とれてないでさっさと加勢してくれ。こいつらの相手はムダに疲れるだけだ……」

「見とれてるわけじゃないけど……まぁいいや。みんな、援護をお願い！　ヘルズシックル！！」

ロックマンは持っている鎌を構えて敵陣に切りかかる。鎌は両端に刃を持っているのでうかつに振り回せば味方も傷つけてしまうが、逆を言えば一度敵陣の真っ只中に入ってしまえば振るたびに前後の

敵をなぎ払える。
　ロックマンの斬撃とハープ・ノート達の援護により、人形の数は一方的に減っていく。だが、それをおとなしく見ているほどスザク・フレアも暢気（のんき）でもない。

「クッ！　アイツを遠巻きにして侵攻！」

【アイツ】というのはロックマンの事で、ロックマンを囲うことなく遠巻きにすれば両端の鎌で前後の人形を一度にやられる事は無い。
　迫り来る炎の人形を前にジョーカーは腕を振り上げて攻撃の用意をするが、その前にロックマンが行動を起こした。

「僕の鎌から離れてもムダだよ！　ジョーカー！　キミは目の前の奴だけお願い！　それ以外は僕がなぎ払う！
　キラーズデスビーム！！」

　ロックマンの両肩の目は「ぎょろっ」と動き、自分の両脇の炎の人形を捉えた。次の瞬間、ロックマンの両肩の目から黄色いレーザーを放たれる。レーザーはさして太くはないが貫通力は有り、人形たちを貫いていく。そして相手が直線上にいないと当たらないというレーザーの弱点は、レーザーを撃ちながら肩の目が動いて解消。

　ジョーカーもまた、スバルの指示に無言で頷くと、前方の敵を自身のコブシでなぎ払っていく。
　しかし、ロックマンのレーザーは貫通力がありすぎて旅館も傷つけてしまう恐れがあった。ハープノートはとっさに自分の両手を左右に伸ばしてホーリーＰＧＭのバリアを発動。そのバリアは今までの球型や半球型と違い、城門の様にそびえ立った。そのバリアは前方を開けているがジョーカーがいるので問題ない。そして左右の壁

は人形を貫通した【キラーズデスビーム】を防いでいる。

前方の人形にはジョーカーの豪腕が、それ以外はロックマンがレーザーでなぎ払う。その際生じる旅館への被害はハープ・ノートのバリアで皆無。

6秒も経てば目の前はすっかり見晴らしが良くなり、スザク・フレアはほんの数秒で全滅された事に驚いている。おそらく人形はすぐに復活するとは思うが、それでもスザク・フレアにスキができた事には変わりない。そうなれば誰が指示しなくともやる事は決まっている。

『わたしが彼女たちの動きを封じます。そのうちに……』

アイリスはそう言うと手をスザク・フレアの方に向けた。力が格段に上がった電波変換体と言えど、短時間なら動きを封じる事は可能だ。

スバルを筆頭にそれに応える。一斉攻撃だ。

「分かった。キラーズデスビーム！」
「ショックノート！！」
「「ジェミニサンダー！！」」

「ジョーカー、マヒプラスを使うからバトルカードでの攻撃を頼む」
『承知した！　インパクトキャノン！！』

ロックマンの両肩の目は前方のスザク・フレアを捉えて2本のレーザーを放つ。ハープ・ノートは音符の衝撃波を乱射。1発1発の攻撃力は低くとも、連射可能なのが【ショックノート】の長所だ。

そして【ジェミニサンダー】はツカサとヒカルの電撃を1本に集中させて放つ大技。その威力は相手の属性とは関係無しに絶大だ。さ

らに、ツバサは3人の攻撃に合わせてジョーカーの攻撃に『マヒプラス』を使う。これは前に選んだバトルカードに【マヒ】を追加させるカードで、その後に追撃が可能となる。相手を攻撃した後でさらに追撃したい時に有効な手だ。

インパクトキャノンと言うのは高威力のキャノン砲で直線的な軌道をしており、当たると周囲に誘爆する。

ドドドドドドドォォォォ！！！

『クッ！ソラ――――――！！！』

「キャ――――――！！」

雪崩のような攻撃が収まった後にその空間にいたのは、なんとか中に浮かんでいる状態のスザク・フレアとスザクだった。それも、先程の『マヒプラス』が効いたのか満足に動けない。つまり、実質的な戦闘終了である。

スザク・フレアもそれが分かったのか、自分の心の中の気持ちを吐き出し始めた。

「……クッ！　……何で……女将……わたしを捨てるなんて……わたし……今まで捨てられないように頑張ってきたのに……」

『……ソラ……』

スザクがソラを気遣う。一方スバルは「あの女将がソラさんを見捨てるなんて思えない」という疑問から詳細を質問しようと思ったが……。

「2人とも……もしかしてさっきの会話の事？」

当の女将が後ろから現れた。息切れをして服のあちこちが破けている所を見ると、止める人を強引に振り切ってやぶの中を走ってきたらしい。スザクはすかさず女将に突っかかる。ただし動けないので言葉だけだ。

『いまさら何しに来たのさ！！　ソラを……あんたをあんなに慕っていたソラを捨てたくせに！！』

普段ならソラが止めるのだが、当のソラは俯いているだけだ。女将もまた、俯きながら言いづらそうに言葉を発した。

「……アレは……ソラじゃなくて着物の事なんだけど……」

しばしの沈黙。

おおよそ20秒後、スバル（まだ電波変換は解除していない）がおずおずと手を上げた。

「あの～着物ってどういう……」

「ソラの蝶の刺繍（ししゅう）がされている着物ね……そろそろサイズが合わなくなってきたから捨てようかって話していたのよ…。だけど、それをそんな風に誤解させてしまったのなら謝るわ。ごめんね……ソラ、スザク」

「それじゃあ……全部わたしの勘違い？　……だけど……皆の町をこんなにしちゃったらもう、わたしに居場所は無いよね……」

ソラは少し顔を明るくしたが、直後自分がやった事に目が行ってうな垂れた。【キラーズデスビーム】はハープ・ノートが防いだが、それ以前のスザクとスザク・フレアの攻撃により旅館だけでなく、見事な景観までもが焼けてしまったのだ。

女将はそのソラの様子を見て毅然（きぜん）と言い放つ。

「たしかにそうね。……だけど、まだサテラポリスの正式な隊員である暁さんに知られたわけじゃないから、ここに居る全員が［ただの火事だ ］って言えばそれで済むことよ？

あなたがまず真っ先にする事は、私たちと向かい合って謝る事！

……その後は私たちが全力であなたを守るわ。町の皆もきっと分かってくれるわよ……だから、そんな所からさっさと降りて来なさい」

女将が毅然と言ったのは、揺るがぬ姿を見せてソラを安心させるのが目的だ。ソラとスザクもそれが解（わか）り、弱く頷いて地面に降りようとした。

だが、その様子を快く思わないものがいた。

『……やはり裏切るつもりか…』

『ッ！！　ソラ！　逃げて！！！』

「スザク！？」

ドス……

スザクがソラの上にウィザードＯＮして、その直後スザクに三叉の槍が鈍い音を立てて突き刺さる。

『……ソ……ラ……わたし……あんたとの暮らし……楽し……』

スザクは突かれた所から穴が広がるように消え去った。デリートというものだ。電波変換の核たる電波体がデリートされるということは、当然人間は強制的に電波変換が解除される。そうなればソラは真っ逆さまに落ちることになる。

「ス、スザ……！　キャ――――！！」

スバルたちは目の前の悲劇に目を見開いてとっさに反応ができなかったが、殺伐で血生臭い暮らしが長かったからか、ツバサとジョーカーはいち早く反応した。ツバサは落ちてくるソラを受け止め、ジョーカーは槍を放った者にミサイルを放つ。

しかしジョーカーのミサイルは対象に届く前に新たに生成した槍で両断されてしまった。槍の持ち主はいたって冷淡に名乗る。

『初めまして、だな……。わたしはエーテル様に創られた４人のうちの１人、セイリュウ……。

……そう身構えずとも、今回は裏切り者を始末するだけだから貴様らに危害は加えない……では、さらばだ』

「ッ！　待て！！」

『……なにかな？　ロックマン』

この頃には意識がハッキリしてきたので、スバルは怒りという感情の元にセイリュウに声を立てる。セイリュウはゆっくりスバルのほうを向いた。

「セイリュウ……！　スザクとソラさんは互いに信じあっていたんだぞ！　……それなのに……！」

『……この場合、本来はキミたちと戦うべきなのだろうが、もうすぐキミたちのお仲間が来るようだ。そうなればこちらの分が悪いので逃げさせてもらう。その事は次に会った時に話そう』

セイリュウはそう言うなり去っていった。無論ロックマンを始めハープ・ノートやジョーカーも攻撃したのだが、去りながら槍を自在に操りそれを防いでいる。そしてとうとう姿が見えなくなってしまった。

「くっ逃げられたか！」

今まで忘れていた人も居るかも知れないが、暁を始めとした3人がようやく来た。それも、暁とジャックとクインティアは電波変換した状態で息を切らしている。

スバルたちの「今までどこ行ってたんだ……？」という視線にジャックとクインティアは責めるように暁の方を見て、暁は先生に怒られた生徒みたいに小さくなった。

「あ～スマン……。実は今まで道に迷ってな……詳しい状況を説明してくれないか？　アシッドが強力な電波体の反応をキャッチしたのはいいんだけど、途中からその反応が消えてな……。それだけだとまったく分からない。……それと、なぜにソラちゃんがツバサにお姫様抱っこをされてるんだ？」

「それは――」

どさっ

スバルが説明しようとした時、ツバサは崩れるようにひざを着い

た。急いで駆け寄ってどうしたかを聞いてみると……。

「……酸欠」

酸欠の理由を結論から言えば、ジェミニ・スパークの電撃と、スザク・フレアの炎が原因だ。

高いエネルギーを持つ電子、すなわち『電撃』と空気中の『酸素分子』の衝突によって『オゾン』は発生する。３Ｏ２が２Ｏ３に、つまり３つの酸素が２つのオゾンになるので必然的にその周辺の酸素が少なくなる。さらに、炎は酸素を使って燃えるので酸素の減る割合は大きくなり、酸欠になったというわけだ。

おまけを言えば、オゾンは人体に毒だったりもする。

そういった事をアシッドが説明してすぐに一同は２人を部屋に運ぶ。ちなみにソラはスザクが消えたショックと、突然落下したショックが重なって気絶していた。

なお、先程の火災で泊まっていた部屋が多少焼けてしまったので部屋と薬は女将が用意してくれた。スバルたちは「別に元の部屋で良い」と言ったのだが女将のプライドがそれを許さず、「お客様に焼けた部屋で休ませるわけにはいかない」と言い張って別の部屋を用意してくれたしだいだ。

だが、全員が入るにはキツイ部屋なのでアイリスとジョーカーにはツバサのハンターに戻ってもらった。特にジョーカーは巨漢なので場所をとりすぎる。

その後女将は町の様子を見に行った。たぶん町民の安否の確かめと、事件の経緯を説明してくるのだろう。一行は女将の用意してくれた部屋に集まり、スバルとミソラは遅れてきた暁たちに事件の経緯を説明している。そして余り者のような感じになったウォーロッ

クとハープ、ツカサとジェミニはツバサとソラの様子を見ていた。

しばらくしてソラが目覚め、ツバサはそれから少ししして起きた。
ソラはどこか機嫌が良さ気で、ツバサはどこか機嫌が悪い。理由を聞いたら2人とも「夢のおかげ／せい」だそうだ。

第３１話　誤解（後書き）

補足として、セイリュウの槍は水から出来ているのでいくらでも生成可能です。

次回は９月１日に更新します。【１日遅れは１日早めで返す】ってね♪

感想等待ってます。

第３２話　居るだけで…

――――ツバサ視点（夢の中）――――

「……はぁ。酸欠でもこっちに来るのな……」

周りにあるのはひたすら白い景色。会議中に居眠りした時の景色だ。この間は飛王（フェイワン）・リードと出会ったが今回は、というよりあいつとはもう会いたくない。

「……ここは……どこ？　……おっ、黒髪雑学くん」

……フェイワンでは無かったが客は来た。オレ（ツバサ）をこんな風にふざけて呼ぶヤツは知りうる限りひと……いや、あいつの事は忘れよう。あんな変態ヤローの事なんて……。

それはそうと、今目の前にいるのはあの変態ではなくソラだ。彼女が不安そうなのはスザクが消えた直後だからか、またはこんな所に来たせいか……。とりあえず、何故こんな所に彼女がいるかという疑問は置いといてあいさつぐらいはしておく。

「よう。夢の中へようこそ」

「えっ、コレ夢なの？　……確かに現実味がないけどさ……ここ」

ソラはそう言いながら周りを見渡す。

夢の中というのは本当だ。それに、夢というのは偽りの世界で現実とは関係ないと思っている人間がほとんどなので、ある程度なら話しても問題はないだろう。……さっさと現実に戻ってもらうとし

よう。

「帰らなくていいのか？　帰り方は案外簡単だぞ？」
「……うん。そうだね。……戻ったら今までよりもっと頑張んないとね！」

前言撤回。そんなふうに辛いものを我慢してるような笑顔を見せられたまま目覚められたらこっちの目覚めが悪くなる。……少し励ますか。

「もしお前が居場所を守るために頑張るんなら、その必要はないよ」
「……どういうこと？」

……彼女の様子を見ると、『今までずっと自分が頑張ってきたから捨てられなかった』と思ってきたのだろうな。言葉通り全然分からないという顔をしている。
……つくづく帯広博士に拾われて間もない頃のオレを思い出す。
……博士（あなた）の言葉、お借りします。

「どうもこうもそのまんまの意味だよ。そこに存在（い）るだけで良い」
「でも、役に立たないと……認めてもらえないと……」
「……欲深いな」
「えっ……？」

ソラはオレの言葉の意味がつかめなかったらしい。順を追って説明する事にした。
……冷やかしが来ている様だがあえて無視する。それに、ソラからは死角になっている角度だから彼女にはバレナイだろう。

「人間ってのは生まれたばかりの時は何も持ってない。真っ白なゼ

ロだ」

「……うん」

「そのゼロから、その子が生きている証、言葉を変えれば【価値】が加わっていく。……話ができる。歌が歌える。文字が読める。スポーツができる。……戦うことができる。……だけど、一番価値があるのは【生きている事】だ」

「生きているだけって……そんだけ？」

「そう、それだけ。……生まれてから今まで生き続けてきたという事実。そればっかりは誰にも奪えないし、失いようの無いキミの価値。……そして、もしお前が女将さんや町の皆に支えられていると思うなら、それはお前も女将さんや町の人を支えているということでもある」

「そう……なのかな……」

「一方的な関係なんてありはしないよ。それに、自分でも気付いているんじゃないのか？【本当の幸せ】ってのは誰かより上に立って相手を見下したり優越感に浸るとかではなく、自分の愛する人や好きな人が幸せで、自分のそばに一緒に居てくれる。……それだけで良いんじゃねぇの？」

ソラは目を閉じて何かを想像しているようだ。おそらく、さっきオレが言った『本当の幸せ』のことだろう。そして静かにソラは目を開けた。

「……そうだね。自分の好きな人が一緒に居てくれると、それだけ

で嬉しくなる。……だけど、逆に大事な人が自分だけ苦しみを背負っていたり、苦しんでいるっていうなら……なんか悲しいし、私も辛いな……」

ツバサはそれを聞いてソラに微笑みかけた。

「お前がその人たちの事をそう思うなら、相手もそう思ってるだろうよ。さっきも言った通り、一方的な関係なんて物は存在しない。全ては互いに影響しあって、関わりあって生きているものだからな。あ～それと、夢の住人としての最後のアドバイスとして、『起きて見る夢』も『寝て見る夢』も強く願えば本当になる。大事な奴を失ったら、そいつをしっかり想ってやれ」

ツバサが思い出したように付け足して、ソラもクスッと笑みを返した。

「……ありがと。……ふふっ。夢の中って、現実の人の性格が逆転するのかな？」

冗談を言えて笑えるということはもう大丈夫か。元気になってくれたのは嬉しい。

……だが、最後の『性格の逆転』ってどういう意味だ……？　あれか？　お前の中で普段のオレは薄情者っていう認識か？　……夢から覚めたら手が滑ったと称してデコピンでもしてやろうか？

当の本人はオレの様子を笑いながら声をかけてくる。

「あはは！　そう殺気出さずに！　おかげで元気が出たよ。……んで、どうやって戻るの？」

「……女将やお前の知っている人間の顔を思い浮かべろ。その思い

がお前をその世界へとみちび……早いな」

説明してる最中それを実行してとっとと行ってしまった。

……彼女に言った『願えば夢が本当になる』という事は、はっきり言ってあの子しだいだが……うまくいけば……。

――――通常視点に戻ります――――

（……そろそろ冷やかしの相手をするか）

気配のした方を向く。

「……ょぅセレナード。……もしかしてとは思うけど、まさか夢にソラを呼んだのってお前？」

セレナードはツバサに頷きながら微笑んだ。

『ええ。あの子があまりにかわいそうだったのであなたに励ましてもらおうと思いまして。……それにしても、まさかあなたがあの子にそこまでしてあげるとは……ツバサ、あなたもしかして……』

「冷やかしならとっとと帰るぞ」

ツバサはセレナードの言葉を遮った。セレナードが依然クスクス笑いをしているということは、ツバサをからかったのだろう。

『用件はありますよ？　……言い忘れていた事があったのを思い出しましてね』

［……］の後に緊張感のある顔になった。どうやら重要な用があったらしい。ツバサもさっきまでの気分を入れ替えて話を聞く。

「……なんだ？」

『昨日、いくつかの国に何かが現れました』

「……何かってなに？」

情報自体を得る事はウラのネットワークを使えば問題は無い。ちなみに、今の時代でウラのネットワークに通じてるのは個人が趣味で『ウラ』へ繋げているか、露天風呂地下の【ウラサーバー】を除いて一国のみ。そしてその国にはセレナードとツバサの共通の知人が居る。その知人はツバサ曰く【変態】だが、優秀さは折り紙付きなので十二分に信頼できる情報だろう。

しかし、セレナードが物事をはっきり言わないなんてまずありえない。その彼が分からないとは一体なんだろうか。

セレナードは少し困ったような顔で話し始める。

『……妙な事に、その何かは突然そこに現れた。その現象に心当たりはありますか？』

ツバサはそれを聞くとあごに手をやり思考に耽る。

（……突然という事は別の世界からの介入と見ていいだろう。この世界への介入を許してるのは、ＷＡＸＡでオレの部屋にある鏡と、人間の見る夢だけ。

鏡はキーワードを言わないと他の世界と繋ぐ事はできない。夢の方も、他の世界が在る事を知り、全ての夢が繋がっているという事を知らなければ、夢を渡って干渉する事はできない。

そうなれば結論は一つ。世界を覆う結界が弱まっているというこ

と……）

ツバサはそんな事を考えてからセレナードに答えた。

「……あるって言えばある。……それはオレの分野みたいだからこっちで何とかするよ」

『……そうですか。では、そちらはお任せします。……最後に一つ聞きますが、ソラさんにお姫様抱っこをしたのは助ける以外の感情は含んでいましたか？　あの通りソラさんは優しいので、きっとお似合いの――』

「んじゃな」

ツバサは【正直付き合ってられない】という顔と声で夢から去って行った。残されたセレナードはクスクス笑いながら呟く。

『いくらたくさんの知識や経験があっても、ツバサも十分子供ですね。

……昨日の怪談で悪しきモノを祓ったように、ソラさんは悪しきモノを寄せ付けない潜在的なチカラがある。彼に良い影響が出る事を祈りましょうか……レイ……？』

そしてセレナードは、すでに亡きツバサのナビに語りかけた。

第３２話　居るだけで…（後書き）

念のために書きますが、ツバサの言う【変態ヤロー】はビャッコ編で出て来ます。【キーワード】の方はセイリュウ編の少し前ですかね…。

今更なんですがスバルよりツバサの出番が多いような…。彼はこの小説のキーマンなので仕方がないといえばそうなのですが…作品（ＦＦ）として成り立っているのだろうか…？

まぁ、番外でも書きましたが一度書き始めた以上最後まで書きますけどね♪

次回の更新は、もうすぐテストがあるので7日になります。ずいぶん待たせてもらう事になりますがご了承ください。

番外編　？（前書き）

一部勝手な設定があります。ＣＡＰＣＯＭスタッフさん、もし見てたら勝手な設定をしてごめんなさい。（メテオＧの話題です）

番外編　？

どうも、作者です。実は１４話でこれは必要ないだろうという部分があり削除した部分があったので、キャラとのトークを含めて色々と語りたいと思います。

１４話を乗せてから間もないうちに見た人にとっては少し退屈かも知れませんが、作者権限を生かして盛り上げていきたいと思います。

「作者権限って何をする気だ……？」

う～ん。例えば内心で言ってる言葉って、普通は思ってる奴以外のキャラクターたちには聞こえないよね？　だけど、小説という形なら（　）の中を言うだけで何を思ってるか分かっちゃうってわけ。

「つまり、オレらが（　）で括ってきた言葉が他のキャラにもバラされて、それはそれでトラブルが起こったりして話が面白くなるって訳か……今度からお前の事アクマって呼んでいい？」

あっはっは、ツバサは本当にうまくまとめてくれるね。アクマってのも中々……。

「いいのかよ！　……そういやお前高校の時、他人の図星をついてそいつから引かれてたような……」

１回だけだよ？（……口にしたのは……）

『……今ボソッと口にしたのはって言いましたよね？　ということ

は、普段から人の心を読んでるわけですか』
「ようアイリス、遅かったな」
『……さりげに仕事を押し付けていったのは誰？』

ツバサ、お前またそんな事を……。それと念のため言っとくけど、何も心を読んでるわけじゃないからな。洞察力による勘だ。……まぁ平常心以外の状態の心って、分かりやすくはあるけどね。雰囲気だけで大分伝わるし。
それでは、役者も揃ったのでそろそろ始めたいと思います。

では、さっさと１４話で削除したヤツを終わらせましょう。削除する前の１４話を見た人は飛ばしてＯＫです。やる事はさっさと終わらせた方が後々良いしね。
それではアイリス。作者の不手際で悪いけど、ツバサの事をどう思ってるかをお願いします。

『……こういった事は今回だけにしてくださいよ？　……ツバサは手のかかる弟のようなものです』

まぁ実際に２人は最低でも１０歳以上離れてるわけだしね～。いちおう聞きますが、どの辺が手のかかる弟だと？

『そうですね……。例えば……あれは買い物から帰ったとき……』

――――回想――――

『…ただいま』

ズッド――――――ン！！

部屋から爆発音がしたので行って見たら、ウイルスが実体化していてツバサがデリートしてるんだけど一向に数が減らなくて、私も手伝って何とかその状況は収まったの。そしてその詳細を聞いたら……。

「いや～、プログラムを増殖するプログラムを開発してたんだが、暇つぶしで創った新種のウイルスにその効果が出ちまってな。本当にアイリスがいて助かったよ」

――――回想終わり――――

た、大変だったね。天性のトラブルメーカー？

『はい。……さすがにあの時は部屋のパソコンをハックして配線を操って電撃をお見舞いしました』

うっわ～。容赦ね――。

「まぁあの程度じゃ死なないけど……言っとくけど笑い事じゃないぞ。……というかアイリスってオレと会った頃はおしとやかだったよな？　何でこんな感じに……」

え？　十分今も真面目に見えるけど？

『……確かに変わったかもしれないけど、元はといえばツバサが先程言ったようなトラブルをしょっちゅう起こしていたから我慢できずに怒るっていうのを繰り返してる内にこうなってしまったんです』

「あはは……。まぁ、それは逆に言えば自分の感情を自然に表に出せるようになったって事で良くね？」

【……焦ってるって事は自覚はあるんだな。ツバサ……】でも、アイリスもそのことは分かってるっしょ？

『はい。……だけど、最初に変われたのは光君のおかげ』

あ～、そっか！　そういやアイリスって光熱斗の事が……。

『ッ！　作者さん、それ以上は……』

「へ？　何で光博士？　……もしかして恋する乙女ってやつ？」

『な、なんでもない』

【初々しいね～。たしかアイリスに強い自我や勇気を与えてくれたのが熱斗なんだよな～。彼がどんな困難だろうと他人のために自分の命を懸けて立ち向かっていく所を見て、それで勇気付けられたんだっけ。……本人にそんな気は無かったろうけど♪　熱斗は鈍感の極みだからな～。

……そういやアイリス、自分がネットナビだからって理由で、熱斗に思いを満足に伝えられなかったんだよな……】

「……オイ作者。なにニヤニヤ顔でオレらを見てんだよ？　……あっ！　お前何か知ってんだろ!?　っつうか作者だから知ってなきゃおかしい！　教えろ！」

『……作者さん、言わないで』

う～ん、ツバサに言うと十中八九笑い話として誰かに言いそうだな～。というわけで、アイリスの要求が優先。

『ありがとう』

「さ・く・しゃ――――！！　お前男同士の友情はどうした――――！！！」

いやいや、元々お前とそういうタイプの友情を育んだ覚えねぇし。大体ツバサって友情バリバリ型じゃないだろ？　【……ふっ。ツバサの奴、図星さされて黙ってやんの】

……あ、そういえばアイリス、キミがカーネルと話してるときにツバサがキミの事を「いつもそばにいる親友」って言ってたよ？

『……そうなんだ。……ツバサ、ありがとう』

「……まぁ、いつもなんだかんだで世話になってるしな」

同時に、「事あるごとに言い争う犬猿の仲でもある」とも思ってたみたいだけどな（笑）

「作者――――！！！　笑いながら暴露するな――――！！　……うっ！背中に殺気が……」

『……ツバサ……わたしをそんな風に……わたしはいつも心配してあなたを怒ってるのに……！　それを……！』

「お、おちつけアイリス……。ここで怒ったりしたら作者の思う壺だぞ？　それにお前って人を傷つけるのは嫌いなんじゃなかったっけ？　……だから、お前の後ろでバリバリいってる配線ケーブルをオレに当てるのは……」

『……人は傷つけたくないけど、ツバサなら大丈夫かなって……。それにあなたは、こんな電撃では死なないんでしょ……？』

バリバリバリ！！！（↑効果音です。セリフではありません）

「うわぁぁ――――！！！！」

今日も皆は仲良しさ～。（Ｄグ●のラ●風に）

「作者とは仲良くねぇ――――――！！！」

――――騒動も収まり――――

いや～ほんとこういうテロップって便利だよね～。状況を変えるときとか分かりやすいし。

あ、話は変わりますが、データファイルのキャラクター紹介でツバサとアイリスは地球を監視するとは書きましたが、どっちかって言うと見守るの方が正しいです。別に世界に無関心なわけではないので、陰からの協力もたまにしてます。

たしかＭｒ．キングがメテオＧを支配下に置いて各国の首脳を「降伏しないとメテオＧで攻撃する」って言った時に時間を稼ごうと根回ししてたんだよね？

「……降伏であれ全面対決であれ、あんまり早くに決断を出されると被害が大きくなるからな。国ならほとんどの確率で在るであろう負の遺産や記録を全世界に暴露するって言ったら割と素直に協力してくれたよ。時間を稼げばスバルやＷＡＸＡが立ち上がるだろうと

思ってな。

……いちおう質問だから答えたが、オレはあんたが嫌いだからなバカ作者！！」

ハイハイ。肝に銘じておくよ。……ていうか、国に対してやったそれは脅迫じゃ……まぁいいか。

「『……いいの！？」』

基本的に僕も結果オーライならそれで良いや！　っていうタイプだからね。

「……結果って言えば、お前最後までこの小説書けるのか？」

あ～……大丈夫じゃない？　全体のおおまかな話は頭の中に出来てるし。

それに何事も、一度始めたものは誰にどのように否定されても自分にできる限りの力でやりぬくって5年前に決めてるからね～。

（……始めたものは終わらせないとね。やめた場合、辞めた事に対する対価は【自分の悔い】だけでは済まないから）

『……自分との約束……。それってツバサと……』

「……まぁ、確かに近いけどオレに比べたら――」

格段に軽いね。キミのやろうとしている事は、よほどの力と精神力が無いと無理だから。

「そう言いつつ高校の時、【実験】と称してスケールを小さくしたヤツをやってなかったか？」

……いずれにせよ、真実（ホントウ）を知る者以外にとってはただの出来事とか、それを信じたくない者にとってはウソって見なされる。……だから、彼らはそれを知っても意味は無いし、知る必要も無い。ツバサの方もそれは同じだろう？

「……まぁ、知りさえしなければ……な」

『……そんなに色々話して大丈夫なの？　ネタバレとか……』

かなり危ないけど、たぶん大丈夫じゃないかな？　それでは今回はこの辺で！　また会いましょう♪

「（これ以上話すと本当にこの小説の核心を話しそうだから会話をやめたな……バカ作者）」

第３３話　夏休みの計画（前書き）

みなさまお待たせしました！３１話目更新です。…その前に注意をっと…。

・一部ｘｘｘＨＯＬＩＣ本編の話題が絡んでいます。

・それと、ツバサのネットナビの『レイ』の見た目はエグゼＳｔｒｅａｍの『スラー』に近いです。色は赤と灰色を基調として、髪に当たる部分は短く、直立した状態から見て後ろ側の袖は長いです。…自分の表現力の無さが恨めしい。

第３３話　夏休みの計画

「顔が悪い」

いきなり辛辣（しんらつ）な言葉を放ったのは侑子だ。旅館からＷＡＸＡに帰った翌日の朝、ツバサがお土産のお酒を侑子に届けようとしたのだが、第一声が【顔が悪い】だったのだ。

ちなみにジョーカーとアイリスは旅館から帰って報告が終わるなりスリープモードに入ってしまい、そのままぐっすりと今現在（朝の６時）まで眠ってしまっている。よっぽど疲れたのだろう。

そして、【顔が悪い】言われたツバサは動きが止まり、侑子はさらに追い討ちをかけた。

「聞こえなかったの？　顔が悪いって言ったのよ？」

「……誰の？」

念のために確認したのだが、侑子はあっさりした性格なのでこの後はもちろん…。

「あなた」

「あなた♪」

「あなた♪」

侑子は刑事ドラマの刑事役の如くツバサを指差し、マルとモロもノリノリで指をさした。ツバサはひたいにムカマークを浮かべながら笑みを送る。

「……旅館で買ってきたのは『黒真珠』、『純米大吟醸（じゅんまいだいぎんじょう）』、『南光』、『残波（白）』の４本なんだけどさ～。あんたらの目の前で飲ん

でやろうか？」

これに対して侑子とモコナは目を見開いてツバサを指差した。

「「鬼――――！！」」

「会って即行顔が悪い言われたら誰だって怒るわ！！」

「私が言ったのは人相（にんそう）のことよ？　……あっ別に悪人顔ってわけじゃないから」

相と聞いてさらに怒りそうだったので侑子は念のためといった様子で付け足した。ツバサも付け足された事で、侑子の言いたい事は理解したらしい。

「……そっちか」

侑子が言っていたのは占いの方の『相』だ。手相や人相は刻一刻と変化し、顔が悪いという事は良くない事が起こることを意味する。

ツバサもその事はかなり昔にもう一人の自分から夢の中で教わっていたので知っていたが、今まで大抵の状況（別名：悪行）を乗り越えてきたツバサにとって、占いなどにはてんで興味が無かった。なので強気に返す。

「大丈夫だよ。そうそう大変な目には会わないと思うし」

「……たしかに死ぬほどの災厄は起きないと思うけど、嫌な事は起きるわね♪」

「面白そうに言うなよ……。そういやそっちで変わった事は？」

「そうね……猿の手がある人の手に渡ったわ」

猿の手……。５回まで持ち主の願いを叶えるがその代償が大きく、最後には持ち主が不幸になるという代物だ。それも、四月一日です

ら存在自体を気付けないほどに厳重な封印が成されている。
ツバサは眉根を寄せて侑子に聞いた。
「猿の手を？　……物（サルのテ）とその人の相性は？」
人と人の関係と同様に、物と人にも相性は有る。相性が良ければうまくいくが、悪ければその物の力が大きいほどリスクは大きくなる。猿の手ほどになると、下手をすれば死ぬ。
ツバサの質問に侑子は難しい顔で頬杖をついた。
「はっきり言って悪いわね。あなたには薦めないとも言ったんだけど、彼女は誰の言う事も聞かないでしょうね。……自分を過信してるから」
「……なるほどな。自分の強運を過信して、自分にはどんな災厄も降りかからないと思い込んでるわけか」
「えぇ。相手を見て、相手がどのぐらい困っていたら助けるかを決める事ができるのは『心』あるモノだけ。だけど、あれは感情も恩情もない。……だから、持ち主の『願いの強さ』とは関係無しに願いを叶え、最後には……」
そこまで言った後、ツバサと侑子は同時にため息をついた。そして侑子はツバサをチラッと見る。
「……そっちでも何かあったの？」
ツバサは侑子の質問に対してアイリスとジョーカーが寝ている自分のハンターに目をやった。ということは、2人には秘密な事というわけだ。寝ているのを確認してからツバサは話し始める。
スバルと夢で会った事と、セレナードから聞いた事で、何者かがこっちの世界へ介入したことだ。

一通り話したあと、ツバサは侑子に何か送ったかを聞いてみた。
侑子の返答は……。

「私からは送ってないわ。……けど、結界は日々弱まるものだから飛王（フェイワン）が少しだけ穴を開けて何かをしたという事は考えられるわね。……あなたが飛王（ひおう）という名を名乗った時点で、彼とあなたの間に繋がりが出来てしまった。その繋がりが、あなたの夢に彼を出させる。その名を名乗る限り、あの男はあなたの夢に出続けるでしょうね。
それとスバル君のことだけど……その子が怪談が苦手なら、その時の恐怖であなたの夢に引きずりこまれたのかもね。……夢は繋がっているモノだから」

ツバサはひたいに手を置いて陰鬱なため息をついた。

「はぁ～……。それってどっちもほぼオレのせいじゃん」

陰鬱なツバサを見て、侑子はどこか愉快気に言葉を続けた。

「あなたは魔力が強すぎるから、相手が平常の心ならともかく、不安な時とかはあなたの夢に引き込まれやすくなる。……それに、夢だけでなくとも、色々な出来事を呼び寄せたりっていうのもありえるわね」

「……ホント、魔力が強いと何でこう……」

ツバサの独り言に近いグチを聞いた侑子は可笑しそうに笑って、背もたれに自身の背中を預けた。

「……まぁ、もう一人のあなた……クロウ・リードでさえも自身の魔力の強さに戸惑っていたくらいだから、そうなるのも道筋と言えばそうなんだけどね。……つまり原因を総合的に、一言で、端的に

言ってしまえば、あなたが元凶ってこと♪」

ツバサは【クロウ・リード】と言う名を聞いたとき顰め面をしたので、侑子は途中で話を変えた。もっとも、変えた話もツバサをバカにするものだったが……。

「元凶、元凶！」
「ツバサが元凶！」
「ヨッ！　疫病神ー！」

その上マルとモロ、モコナも全力で楽しんでいる。
ちなみに、2人と1モコナは口の周りに砂糖と思しき粉を付けている。おそらく四月一日にお菓子を作ってもらったのだろう。
ツバサは、その名を呼ばれるよりはマシだと考えたのだろう。ため息をついた後、その黒い双眸に強い意志を宿しながら言葉を紡いだ。

「……それでも、やらなければならない事がある」
「ムグムグ……分かってるなら、とっとと結界張り直してこいツバサ」

モコナは話の途中でさえもお菓子を食べながら命令形で言ってきた。ツバサは苦笑しながら言葉を返す。

「お前に言われなくとも、夏休みに旅行と称して行って来るよ。こっちの次元に入ってきた物体の方も、近くに行けば大体の場所は分かるからそっちも片して来る。お前こそ、今から送る酒を酒瓶ごと飲むなよ？」
「ふっ、四月一日が居ない時に挑戦するさ！」
「いばるな！！　あとするな！！　……で、その四月一日はま～た

学校なのな……」

ツバサはツッコンだ後、少しつまらなさそうにため息をついた。実は、彼と実際に逢ったのは一回も無いのだ。無論、本人と話した事もない。侑子はクスッと笑う。

「まぁ、それもそうあるべき道筋でしょ」

ジリリリリ！！

もう少し話をしようと思ったのだがアラームが鳴り響く。そろそろサテラポリスの食堂が開く頃だ。

「……そろそろ時間みたいだし、今から酒送るぞ」

「わ――――い！！！」

いつもの事ながら食べ物とお酒が絡むと異常なまでに子供っぽくなる侑子に対して、ツバサは呆れながら酒を送り、食堂に向かおうとした。だが、立ち去る背を侑子の声が止める。

「ちょいまち！　まだこっちからのお返し送ってないわよ！？」

「～～！　ならできるだけ急いでくれ！　食堂が込んじまう」

今日はおいしい物が食べられそうな予感がしていたツバサは焦ったように鏡の方を向く。侑子はその様子を楽しむようにニヤニヤ笑いながら小さな石を出した。

「はいはい。これなんかどうかしら？　持ち主の夢に他人を巻き込

まないようにする石」

その石の解説を侑子から聞いた時、ツバサは呆れと驚きから侑子に尋ねた。

「……あんた、はなっからこれを渡すつもりでさっき送った酒を頼んだんじゃ……」

「さぁね～。だけど、あの子達と関わる以上いつかはこうなるんじゃないかとは思ってたわね」

侑子はフッと笑って自慢げに答えたのに対し、ツバサは苦笑いしてイスに座りなおした。

「それじゃあ、ありがたく頂いとくよ」

「交渉成立ね。……はい、送ったわよ」

ツバサは送られてきた石を大事そうにポケットに入れて、侑子にお礼を言った。そして部屋から去ろうとドアに手をかけたが……。

「新しく出逢った子と仲良くしときなさいよ～」

その言葉で鏡を振り向くが、鏡は元のように部屋を写している。ツバサはため息をつきながら呟いた。

「あんの魔女までそんな事を……」

『んっ……ツバサ、おはよう』

ちょうどアイリスも起きたようだ。ジョーカーはまだ寝ているが、ヨイリー博士と出会えば即行で起きるだろう。どうやら、子供が親に良い顔を見せたいというのと同じような感情が働いているらしい。

少しずつジョーカーもここになじんできたという事は微笑ましくもある。

「あぁ、おはようアイリス。お目覚めは？」

『ぐっすり眠れたから悪くないわ。……それより、そろそろ食堂にいかないとデザートが無くなるよ？　今日は確か、ホッカイドウ産アイスクリームだったような……』

「なぬ！？　こうしちゃいられねぇ！　オレのアイス――！！」

『……あなたのじゃなくて皆の物なんだけど……』

アイリスがハンターから冷静に訂正するが、ツバサはダッシュ中なので聞こえていない。

数分後、ツバサは無事アイスを手に入れて口の中に幸せをかみ締めていたが……侑子の言葉、【顔が悪い】は今日学校で当たる事になる。

――そしてコダマ小学校――

夏休みまであと僅か。クラスでは夏休みをどうするかで盛り上がっている。無論それはスバルたちも同じだ。

「それじゃあ、夏休みはヤエバリゾートに行くでいいわね？」

ルナの言葉にゴンタ、キザマロ、スバル、ミソラ、ジャックが頷く。というより頷かざるをえない。彼女に逆らうと、それだけで眼光に晒されるのだ。

ちなみにヤエバリゾートという場所は夏でもスキーができる場所で去年もスバル達は行っており、ゴンタはそこで天才スキー少女の

アイという子と親しくなったので、ゴンタはしきりに頷いている。
ここまできて気付いたと思うが、ツバサが頷いていない。よって、先程述べた眼光はツバサに送られた。

「……さて、な～ん～でツバサ君は頷いていないのかしら？　まさかとは思うけど、私の旅行のプランに納得できないって訳じゃないわよね？」

普段のツバサは恐怖により即行で折れるのだが、今回はそうはいかない。かといって本当の理由も話せない。そうなればこの状況を打破する方法は……。

「いや～オレはオレの方で旅行の計画を立ててな。本当に残念だけど、もうキャンセルできないんだな～これが」

もっともらしい理由をつけて断るに限る。おまけを言えばウソでは無いので、あとあと不利になる事はない。しかし、その程度で引き下がる委員長ことルナでもなかった。

「ふぅ～ん。あなたに予定がねぇ？　それはぜひお聞かせ頂きたいですわ。私の計画を蹴ったくらいだからよっぽど良い場所に行くのでしょうね～？」

（（（お嬢様口調が逆に恐い！！））））

スバルを始めとした人間たちやウィザード達さえも怯えている。
ツバサも腕を後ろに組んでその腕をつねる事で、痛みにより恐怖を払拭しているようだ。

（痛ッ！　……しっかし相変わらず恐いな～。まさか侑子さんが言

ってた良くないことってこれか？）

ツバサはそんな事を思い浮かべながら質問に答えた。

「行くとこ？　まずは【シャーロ】。２つ目は【ロンシャ】。３つ目は【イースター島】。４つ目は……【ボスニュー】だけど？」

その時キザマロは思わずといった感じで口を挟む。

「見事に東西南北ですね～。何か意味は……」

だが、ルナの眼光に当てられて途中で自身の質問をかみ殺した。

（（（（恐怖政治！！？））））

こんどはツバサもスバルたちと共に内心でツッコンだ。ルナはキザマロからツバサに視線を移す。

「４つ目はウソね？　答えるまでに少し間があったわ」

ルナのその言葉でツバサにはスバル達ばかりかウィザード達の視線が刺さる中、ツバサは最後の手を講じた。

「……実は、その隣国のバルズ・ランドに用があるんだよね……」

最後の手とは、正直に言う事だ。バルズ・ランドは犯罪者が集まる国としてその名が通っているので、それを言えば十中八九引かれるが、そもそも元からツバサは一人で周（まわ）るつもりだったので引かれるのは逆に好都合だ。

さすがにルナもこれには驚き、声のトーンを上げる。

「ち、ちょっと！　バ、バルズランドって……あなた意味分かってるの!?　入ったら国の外には出られず、一生そこの住人の奴隷になるとか、他所の国に人身売買されるとか……ほんっとに良い噂なんて聞かないわよ!?」

ゴンタは最初（　バルズランドってどこ？　）という顔をしていたが、ルナの言葉を聞いてツバサの胸倉を掴んだ。しかし、その目に宿るのは心配だ。ゴンタは不器用ではあるが友情に厚いのである。

「オイ！　委員長がせっかく誘ってくれてんだからそんな危ない所には行くな！　オレたちとスキーでもしようぜ？　なっ！」

ツバサはへらっと笑いながら、ゴンタをなだめる様に両手を自分の前に出す。

「大丈夫だよ。オレには頼もしいボディガードもいるし。なっ！　ジョーカー？」

ハンターの中のジョーカーに問いかけるとジョーカーは一言返した。

『別に構わん』

「そんなわけで！　オレはオレで勝手にやらせてもらうよ」

ツバサはむりやり話を終わらせた。ルナもそれに気付いたがもう遅い。

（　クッ！　ツバサ君も中々やるわね……だけど、そう思いどうりにはさせないわよ……生徒会長の名にかけて！！　）

スバルとミソラは、後ろで殺気にも似たオーラを放っているルナに対して正直恐怖を抱いていたが、なんとかツバサに話しかけた。

「さっきロンシャって言ってたけど……大丈夫なの？　その……実験があったところでしょ？」

そう。そこでツバサは人体実験にあい、今のような体になったのだ。本人は【便利な体】と認識しているようだが、トラウマはそうそう拭えるものでもない。スバルはそういう事を懸念して言葉をかけたのだ。

ツバサはそれに対していつもの飄々（ひょうひょう）とした笑みを作る。

「大丈夫だって。長く生きると、開き直るのが早くなるからな」

『お前の場合、いっつも開き直ってんじゃねぇかよ』

『確かにロックの言う通りよね～。それに話を聞く限り、その……バルズランド？　それって危険な場所みたいだけど？』

「うんうん。私も海外で活躍してる先輩に教わったんだけど、スリがあいさつ代わりになってるって聞いたよ？」

ロック、ハープ、ミソラの順でつっこまれ、ツバサはルナに聞こえないように気をつけながら話した。

「（忘れたのか？　オレの知り合いはバルズランドの奴なんだぜ？　少しムカつくが、その知り合いはかなり頼りになる。……あれ？　ミソラちゃんってそんなペンダントしてたっけ？）」

ミソラがスバルに買ってもらった（　厳密に言えばおまけしてもらった　）ペンダントは目立たないように服の中にしまっているので、はた目にはペンダントのチェーンしか見えない。それに気付く

のだから、相変わらず観察力が良い。そして、気になったら話の途中でも聞くというのも彼(ツバサ)の性質らしい。

だが厄介な事に、声を潜めていたつもりだが女の勘がそうさせるのか、ルナが敏感にその会話を聞いていた。

「あら、本当に綺麗なペンダントね。ミソラちゃん、それ誰にもらったの？」

「え、え～と、お土産屋のおじさんに……」

「お土産？　……誰と旅行に行ったのかしら？」

徐々にルナの怒りのオーラが強まってきた。スバルは逃げたかったのだろうが、ミソラに手を掴まれているので逃げられなかった。同性であるはずのミソラですら恐れるほど、目の前の鬼……もといルナが恐いのだ。それに何より、スバルは誰かを見捨てるような人間でもない。

一方ミソラはしどろもどろになりながら正直に答えた。下手に言い逃れしても彼女の洞察力で見破られるので、いっそ正直に話してしまおうと考えたのだろう。

その後、怒りの矛先は無論スバルに向かった。

「へぇ～。お土産屋さんにも公認の仲になったってわけね～。私の居ない所でそんな事がねぇ～」

前言撤回。怒りが明確にスバルに向いてるわけではなく、これは単なる嫉妬だ。いや、【単なる】だからこそ恐いのかもしれない。スバルとミソラ、ルナを除いて周りは3人から後ずさる。

スバルとミソラ、2人に無理やり頼まれたとの理由でウォーロックとハープの計4名は、放課後ルナに屋上に呼び出された。そこで何が起きたかを知る者はいない。なぜなら、クラスの者はスバルたちにその時の事を聞くことすら恐いからだ。

――――その頃、冥王星周辺――――

『やっと太陽系に着いた……。イーグル隊長、ケフェウス様……どうかご無事で……』

その電波体は数名の部下を引き連れて地球に飛び立った。

第３３話　夏休みの計画（後書き）

補足として、それぞれの国の大まかな場所は、
『シャーロ』が『ロシア』。
『ロンシャ』が『ロンドン』。
『イースター島』はそのまんま（オーストラリア大陸から南アメリカの間）。
『バルズランド』は僕らの居る世界で言う【アメリカ】の中にあるという設定ですが、完全にオリジナルの国です。
一部に書いたミソラ↓スバルの告白と、ファントムブラックの登場は『ロンシャ』の予定です。というか、ロマンチックな場所と言うと、この４つの国の中でロンドンをモチーフにしたロンシャしかないし…。

ちなみに、今回出て来た４本のお酒は実在します。それと、猿の手をもらった人は結局死にました。（ｘｘｘＨＯＬＩＣの３巻より）

なお、委員長がスバルとミソラにどんな事をしたかは皆さんのご想像にお任せします（笑）。キャラクター紹介に『クロウ・リード』も追加しました。

次の更新は９月１０日です。

第３４話　同盟（前書き）

まず、前回の最後に出てきたのはイーグルの部下です。地球まで指揮をとっていた電波体の詳しいデータは次の話を更新した時に書きます。

それと、前回の話でクロウ・リードと言う名が出てきましたが、あえてあの話で出したのは理由があります。一つは、いつまでも『もう一人のツバサ』というのを使ってると読者がイライラしそうだったからで、二つ目が、このまま行くとスバルや読者さんよりハイド（流星シリーズより）が先にその名を知る事になるんすよ。読者の皆さんがハイドと同じタイミングで知るよりもさり気に出した方が良いと思いまして……。

それで何か不愉快な気分になったならすみません。僕にできる事は、この小説を最終回まで書く事だけしかできません。こんな作者ですが、今後ともよろしくお願いします。

それでは本編始まります。

第３４話　同盟

――――星河家（日曜日）――――

（　夏休みが始まるまで残り3日か。旅行の予定もあるし、今年も充実した夏休みになりそう。……委員長が何か企んでいるのが少し不安だけど……　）

スバルはそんな事を思いながらテレビを見ている。後ろではウォーロックが自分の技である【ビーストスイング】の素振りをしている。……後ろが少し恐いが、その素振りで生じる風が中々気持ち良い。

ミソラはあかね（スバルの母）と一緒に先程食べた朝ご飯の食器を洗って、ハープは洗った食器を棚に片付けている。大吾は仕事だ。

ウォーロックのは少し違う気もするが、これも我が家の立派な【平和な朝】というやつだ。

ピンポーン♪

「あらお客さん。スバルー、悪いけど出てくれる？　母さんたち手が離せないからー」

「スバル君お願いね～」

「うん。分かった」

あかねとミソラが食器を洗いながらスバルに頼む。スバルは頷く

とドアに向かった。

「はーい。どちらさまですか？」

そう言いながらドアを開けると、旅館で知り合った少女、ソラが立っていた。もちろん着物ではなく、快活な方の服である。

「やっ！　スバル君おはよう！」

「ソラさん！　えっと、なんでここに？」

ソラは元気良くあいさつをして、スバルは驚いた後首をかしげる。ミソラもソラの声を聞いて、お手伝いを少し早めに切り上げてきたようだ。

「ソラさんおはようございます！」

「うん！　おはよう！　……いや～ミソラちゃんは偉いね～。スバル君は驚くのが先であいさつをしなかったんだよ～？」

「あはは……。そ、そうなんですか……」

「エッ！　あ、ごめんなさい！　……すっかり忘れてました」

そう。スバルは何故ここにソラがいるかという疑問が先にあってあいさつを忘れていたのだ。

ソラは【　してやったり　】という笑みを浮かべながらミソラに話しかける。そしてミソラはスバルをフォローするか年上で同性のソラ側につくかで板挟みの状態にあった。

この状態を崩したのは、今まで技の練習をしていたウォーロックである。

『よう、ソラ。仕事は良いのか？　地球の観光地ってのは夏とか冬になると込むんだろ？』

ウォーロックはスバルの上にのしかかる様にして現れた。スバルが呻いているのを気にかけながらも、ソラはウォーロックの方に顔を向ける。

ちなみに旅館から帰る前に一通りの自己紹介はしているので、ソラはウォーロックの事もハープの事も知っている。

「え～と、ロック……だったよね？　おはよう！　旅館の方はまだピークじゃないから大丈夫。黒髪ざ……ツバサ君はここに居る？」

おそらく彼女は【　黒髪雑学くん　】と言おうとしたのだろう。何でも、本当の名前を教えてくれるまで本人の前ではそう呼び続けるのだそうだ。ツバサ自身も名前は絶対に教えないと言い張ってるし、結局2人は意地を張り合って互いにふくれたまま別れることになったのだが……その彼女が彼に一体何の用だろう？

なお、こういう時まっさきにからかうのが……。

『クックック……ソラ、お前実はツバサにホの字か？』

ウォーロックである。ソラはそれに対して手首を【　ナイナイ　】と振っている。その時ハープとあかねも玄関にやってきて、ハープはウォーロックに対してあからさまに呆れている。

『……ウォーロック……あんたミソラとスバル君だけでなく他の人にも……』

「別に良いじゃないハープちゃん。その方がロックくんらしいし。……あなたがソラちゃんね？　初めまして、スバルの母です。旅館ではスバルがお世話になりました」

あかねはウォーロックをフォローした後ソラにあいさつをする。

ソラもアカネの方を向いてあいさつをした。

「こちらこそ初めまして。スバル君のお母様。こちらこそ、その節はスバル君にお世話になった身なので気にしないでください」

（（（（（　あれ？　この人誰？　）））））

スバル、ミソラ、ウォーロックとハープが内心でそんな事を思っている。それもそうだろう。先程までの快活な声とは打って変わって、おしとやかな礼儀正しい声と佇まいになっている。着物を着てないのに、あたかも着ているように錯覚してしまうほどだ。

あかねも先程まで玄関先で聞こえてきた声と大きく違う事に驚いていたが、割とすぐにその状態は回復したようだ。

「さすが旅館の子ね。いきなり声と言葉使いが変わったから驚いたわ。こんな所で立ち話もなんだし、中でお茶でも飲んでいかない？」

「いえ、先程申し上げました通り、ツバサ君に会わなければいけないので……申し訳ありませんがまたの機会にお邪魔します。誘っていただきありがとうございました」

「あらあら、本当に礼儀正しい子ね。スバルも少しは見習いなさい？」

そう言うあかねの顔は面白半分といった顔で、本気でない事は明々白々だ。スバルもそれが分かっているので返事にため息を混ぜた。

「は～い」

あかねはそんなスバルを見て【　フフッ　】と笑うと、子供たちと電波体の背を押す。

「分かったら行きなさい。女の子をエスコートするのは男の子の役目よ？」

そんな感じで見送られたスバル、ミソラ、ソラ、ウォーロックとハープはウェーブライナー（この世界における交通手段の一つ）に向かうこととなる。

その道すがら、なぜ彼女がツバサの元へ行くのかを聞いてみた。ソラは周りの景色を見ながらあくまで明るく答える。

「ん～、聞きたいことがあってね～。ほら、あたしら別れる時思いっきりケンカしたじゃん？　それでついつい聞きそびれてね」

『あいつの好きなタイプでも聞くのか？』

「「『　ウォーロック！！　』」」

ウォーロックの相変わらずの質問にスバルとミソラ、ハープが声を合わせて注意をして、当のソラは可笑しそうに笑っている。

「アハハ！　んなわけないって。……それに、再構築だっけ？　それをスザクに出来ないかなって……」

聞きたい事の一つは夢の事。どうもあれはただの夢では無い気がするのだ。しかし、夢の中の事を話しても十中八九信じてもらえないだろう。なので、もう一つの用事を言ったのだ。そして、それを言ったソラの顔はまだ少し悲しみが差していた。

デリートと、データとしてバラバラに分解されるのでは少し違う。バラバラに分解された場合、一応それら全てのデータを集めれば再構築は可能だ。しかし、デリートは違う。

バラバラが三途の川の寸前で立ち止まっている状態だとすると、デリートは渡りきっている状態。消えたら最後、二度と戻ってこな

い。

コーヴァスとヴァルゴは例外だが、それはデリートされた電波体の再構築のやり方をヨイリーがツバサに対して【 会うたび教えて！攻撃 】で聞き出して、それをヨイリーがスバル達に聞かせてくれたのだが、その内容は……。

今まさにデリートされる寸前（ 約１０－１２乗という途方のない短い時間 ）なら、真っ先に消えるはずの感情や記憶のデータもかろうじて残っているらしい。それをベストのタイミングで回収。そこからさらにデータが消えないように防壁を張り、少しずつ慎重に再構成すれば可能らしい。

本人（ツバサ）いわく、『 宇宙空間でナノサイズ（１０－９乗）のパズルを組むようなモノで、自ら進んでなど二度とやりたくない 』と言うほどだ。つまり、可能ではあるが成功の確率は数果てなく低い。という結論にいたる。

もちろんスザクがデリートされた時はそんな都合の良い回収装置など用意していなかった。よって、結論から言えば不可能。

スバルもデリートされたらずっとそのままというのはウォーロックが来た時に聞いていたので気まずく押し黙る。ミソラも黙り込んでいる様子を見ると、ハープから聞いたのだろう。しかし、ここではっきりそれを言うのはスバルたちには出来なかった。いつかは知る事になっても……言い出せなかったのだ。

ソラはそんな２人の様子を見て寂しく笑みを浮かべた。

「ふふっ。……その様子だとやっぱり無理なのかな……。でもね、こんなこと言うと笑われるかもしれないけど…夢の中でツバサ君が『 起きてみる夢も寝て見る夢も強く願えば本当になる 』って言っててね。な～んかそれが気になっちゃって♪ ……ほんと、笑っちゃうよね」

「えっ！　夢の中ですか……！？」

スバルは驚いて声を上げる。突然声を上げたのでミソラを始めウォーロックまで驚いている。慌ててスバルは「なんでもない」と言ったが、それでも内心は混乱していた。

（同じ旅館で2人も同じ人が出て来る夢を見るなんて……。ツバサ君は『知らない』って言ってたけど、やっぱり何かあるんじゃあ……）

「どうしたのスバル君？　……いきなり大声出して……」

「……やっぱり、くだらないよね？　夢なんて……」

ミソラは心配そうにスバルの顔を覗いてきて、ソラは項垂れている。どうやらスバルの驚きを信じられないという方に解釈してしまったらしい。

スバルは首を横に振って自身が見た夢の事を話した。ミソラとソラ、ウォーロックとハープは驚いた様子でそれを聞いている。話しているスバルもそうだが、内容からして悪夢以外の何でもないわけだから聞いている者の顔は暗い。

『……そういやツバサの奴、うち一《スバルの家》に初めてきた時に誰かに頼んで夢の中に大吾と暁とジョーカーを出してもらったって言ってたな。……今回のもそれか？』

「……そういえばそんな事言ってたね。でも何のために？」

ウォーロックの推測に、ミソラもそのことを思い出した後で疑問を出した。たしかにそんな夢をスバルに見せる意味が無い。あったとしてもなぜ……？　スバルとミソラ、ウォーロックとハープは唸りながら考え込む。ソラはひらめいたと言わんばかりに手の平に自分の手を打ち付けた。

「そうだ！　あたしらで同盟組まない？　あいつから聞きたいことを意地でも聞き出すっていう同盟」
『あら、それは面白そうね。私は乗るわよ』
『ソラばかりかハープまでノリノリじゃねぇか……。おいスバル、こういうのをジャーナリスト魂って言うんだろ？』

そう言うウォーロックも中々に乗っている。というか楽しんでいる。しかしスバル自身、知りたいと言う願望があったので同盟を組む事にした。

「絶対に本当の事を聞くぞ――――！！」
「「『『　オ――――――！！　』』」」

ソラの声にスバルとミソラ、ウォーロックとハープは拳を勢い良く空に上げた。一種の同盟である。

第３４話　同盟（後書き）

補足として、１０の－１（マイナス）１２乗というのは、答えだけ言えば１の前に０を１２個つけた数です。つまり、０．０００，０００，０００，０００，００１ですね。時間に直すと、１，０００，０００，０００，０００分の１秒です。紙に書くとどれ程短い時間か分かりますよ。

そういえば、メダロットもＤＳで出るんでしたね。実はそっちも楽しみだったりします。（蒼騎士さん、情報ありがとうございました！）

「……勉強は？」

もちろん勉強優先だよツバサ……いや、クロウ？

「だ～か～ら～その名前は嫌いだってんだろ――！！」

次回の更新はテストがあるため１６日の夜になると思います。

「逃げながら次回の更新が遅れる理由を言い訳してんじゃねー！！オレの攻撃避けるな！」

ムチャ言うなよ。……それと、おかげさまでＰＶが２７，０００、ユニークが４，０００を超えました。いつも読んでいただき、ありがとうございます！

第３５話　お奉行

――ＷＡＸＡ――

スバル達が同盟を組んだことなどつゆ知らず、ツバサは始末書の処理に追われていた。先日のスザク戦ではハープ・ノートの生成した城門のようなバリアのおかげで被害は少なくて済んだが、それでも彼の睡眠時間を削るほどの業務が課せられた事に変わりは無い。

「ツバサ君居る～？」

スバルの声にツバサはドアの方を振り向いた。ちょうど疲れてきたので気分転換になればと思いドアに向かう。

（ここに来た時、防犯上のためにドアの近くに行かないとロックを解除できなくしたんだが、それがこんなに煩わしいとは……後で直しとこ）

ツバサはそんな事を思いながらドアのロックを解除すると、そこには黒のサングラスにマイクを持ったスバル、ミソラ、ウォーロック、ハープに……なんとソラまでいる。

ソラはドアが開くなりすかさず聞いて来た。

「あたし旅館で君が出てくる夢を見たんだけどさ、それってどういうこと？」

（……そういえば落ち込んだままだと目覚めが悪くなりそうだからってんでこいつに色々言ったな）

ソラにツバサの内心の声など聞こえる訳は無く、答える間を与えずスバルが質問してきた。

「それに僕の見た夢の事を知らないって言ってたけど、何か関係があるんじゃないの？」

『そういやお前スバルの家に来た時に言ってたな。ある人に頼んで大吾たちを夢に出させたって。今回のもそれか？』

『もしそうだとしたら何でそんな事をしたのかしら？』

スバルの後にウォーロックとハープの順で質問し、さらにはソラを筆頭に全員から攻め寄られてツバサは自身の部屋の壁まで追い込まれた。

『……どうしたの？』

ちょうど良いのか悪いのか、アイリスが戻ってきた。仕事を手伝ってもらっていたのだが、少し休憩してくるとのことで外に出ていたのだ。しかし、ツバサにとってはタイミングが悪かった……。ミソラは部屋の前に立っているアイリスを見るなり彼女にずいっと近づく。

「アイリスってツバサ君と仲いいよね？」

『……悪くは無いと思うけど……。それよりもその格好は――』

「じゃあさ、彼の秘密とか知ってない？」

ミソラはアイリスの質問を無視して質問を重ねる。未だ戸惑った様子のアイリスは、部屋の壁に追い込まれてるツバサを見た。

《いったいこれはどういうこと？》

（オレが知るか！　こいつらがいきなり聞いてきたんだよ！）

そしてミソラはアイリスとツバサのアイコンタクトに気付き、ツバサを追い詰めているハープを手招き。そのまま2人でアイリスを部屋に連れ込み、ツバサ同様壁に追い詰めた。

すでにソラは勝ち誇った顔でツバサとアイリスに詰め寄る。

「さぁ、色々と答えてもらおうかしら？　今私達はあなたから聞きたいことを聞き出すっていう同盟を組んでるの。いつもみたいにはぐらかす事なんて出来ないよ～？」

ツバサは「フッ」と笑って肩を竦めた。

「おいおい、オレがいつはぐらかした？」

「「「『『　いつも　』』』」」」

スバル、ミソラ、ソラ、ウォーロックとハープが声を揃えて言う。アイリスも小さく頷いていた。この状況をなんとかするには話すしかないと本能は言っているのだが、全て話すとなるとそれはそれで厄介な事になる。

まさに八方ふさがり。珍しくツバサが本気で頭を使っている時、部屋の入り口から2人の声が……。

『その者を離せ！　余が相手になろう！』

『よってたかって一人を追い詰めるとはなんたる卑怯！　この紋所が目に入らぬか！』

声のした方を見ると見たところ、ケフェウスはお祭りに売ってるような仮面をかぶり、イーグルは某時代劇のお奉行が持っているような印籠を持っている。

ＦＭ星人とＡＭ星人は体から独特な電磁波を放っており、長時間それに触れると物質が電波化するというのはウォーロックから聞いた事があるので、仮面と印籠を電波化したのだろう。
だが、なぜに2人がそのような格好を？　イーグルも心なしか楽しげだ。

スバル達が驚いている中、ケフェウスが怒った様に腕を振り上げた。

『無視とは酷くはないか！？　無視とは！』
『そうだ！　私達は決して一度やってみたかった～とかそんな事は思っていないからな！　ツバサ殿とアイリス殿がピンチだからこういう格好をしているだけだからな！』

……おそらくやってみたかったのだろう。イーグルは本当に分かりやすい。
ツバサは好都合と言わんばかりにアイリスを連れてケフェウスの所に避難しようしたが、スバルが先手を打ってケフェウスとイーグルに耳打ち。おそらく、ツバサが自分達に何か隠し事をしている事を言ったのだろう。

『ツバサ、隠し事は良くない。今こそ胸の中に有るモノを話すときだ！』
『ケフェウス様の言う通り、隠し事は不審の始まり。言わぬと言うのなら私の羽根が轟くぞ』

イーグルはそう言いながら羽に電気を迸らせ、攻撃の構えを取る。
ツバサがそれを見てとっさにアイリスの前に立ったとき、妙案が浮かんだ。彼らが質問しているのは夢の事だけ。それならば、それ

だけを答えればなんとか誤魔化せるのではないだろうか。

「……分かったよ。そろそろお昼だし、このままじゃ昼飯を食えなくなるからな……。え～っと、まずスバルの夢だが、例の知り合いが言うにはオレの夢にお前を巻き込んだんだと」

「例の知り合いってほとんどの願いを叶えてくれるっていうアレ？　……それじゃあツバサ君が頼んだんじゃ無いんだ……」

『おい、巻き込んだって何だ？』

スバルが引き下がったのと入れ違いで、ウォーロックはスバルの事を心配してかツバサに詰め寄る。ツバサはヤレヤレといった様子でため息をついた。

「なんでも、怪談の時の恐怖でスバルがオレの夢に巻き込まれたらしい。……夢は繋がっているからな」

「それじゃあ私の見た夢も、本当はあなたが私を励まそうと？」

『待て待て、それ以前に夢が繋がっているなどといきなり言われても…』

ソラはなかば疑うように尋ねてくる。イーグルの方は戸惑っている様子だ。

（……そんなにオレは薄情者だと思われていたのか……）

ツバサは苦笑しながらそれぞれの説明をした。

「ソラの方はあのままだと目覚めが悪くなりそうだから励ました。……おっと、念のため言っとくがお前とオレの夢を繋げたのは、そこに古くからいるヤツの力だぞ？」

「古い友人？　うちの旅館にそれっぽい人いたかな？」

ソラが自分のあごに人差し指を当てて考え込んだ。ツバサはスバル達に伝わりそうな言葉を探しながら答えた。

「え～っとだな、まぁ、あの辺に住む主（ぬし）と言うか……精霊っていうか……。まぁ、そんな所かな。

それと、イーグルの言う夢が繋がっている件だが、それは単純に気付かないだけだ。

人は一晩のうちにいくつもの夢を見る。例えるとすれば、テレビのチャンネルを高速で何度も切り替えるようなものだ。その中で誰と話そうと、誰と出会おうと、自分に関わりのある夢やインパクトの強い夢しか朝まで覚えていることはできない。だから、覚えていないのが普通だ」

「じゃあ、スバル君が見た夢って何なの？　聞いてて凄く恐かったんだけど……」

ミソラが不安そうな顔で聞いてくる。本来は正直に話すべきなのだろうが、未来に起こる事とは言えない。そんな事を言えばこの子達が悲しんだり苦しむのは目に見えている。……もっともツバサが、【スバル達が悲しむ】などと言う権利は無いのだが…。

「……夢は夢だよ」

ツバサは微笑んでいるがその笑みは……。

（オレもまだまだ甘いな）

という自嘲の笑みだった。まぁ、ソラ以外はこの時点で半信半疑。そう簡単に信じられる内容でもないだろう。

ソラたちは顔を見合わせた後サングラスを取る。

「……まぁ、今回はこんなとこにしてあげる。その代わり、ま～た何か隠してるって分かったら今回みたいに詰め寄るから覚悟してね？」

ソラの言葉にスバルやウォーロックも同感と言わんばかりに頷く。それにツバサは「ハイハイ」と言いながら苦笑した。

場が収まった所で、ソラとケフェウス、イーグルはそれぞれ自己紹介をする。その際、さっそくツバサは興味深そうな顔で、ケフェウスが今している格好の事を本人に聞き始めた。ヨイリーが言うには、彼も好奇心が旺盛らしい。

『うむ。本来なら仮面●イダーシリーズが良かったのだが、これしか手に入らなくてな』

『私の方はこれが気に入った。悪人をひれ伏せさせるのが爽快でな』

ケフェウス、イーグルの順で身に着けている物をスバル達に見せ付けてくる。

「だからってケフェウスの着けてるのって映画に出てくる【　トモダチ　】の着けてるヤツじゃん。あ、水●黄門なら私も見てたよ？」

「ソラ、言っとくがケフェウスの着けてる仮面の元ネタは『　忍者ハット●くん　』ってやつだぞ？」

『おいツバサ、何でお前そんな事知ってんだ？　ソラの方もずいぶん渋いもんを……』

「その時代のアニメにやたら詳しい知り合いが居るんでね」

「旅館の休み時間にしょっちゅう見てるからね～。風●の弥七とかもカッコいいし♪」

ツバサ、ソラの順番で答え、ミソラは元気良く手を上げた。

「私も知ってるよ！　……というか、前に町娘役で出たことあるもん」
「あ～。そう言えばスタッフロールにミソラの名前あったな。スバルももちろんその回は見たんだろ？」
ツバサは当然だろうという顔でスバルの腹を肘で小突く。
「えっ、え～っと、僕時代劇はあまり見ないから……」
「ちゃんと見てやれよ。それでもお前はミソラの彼氏か！」
「ツバサ君、だからそういう訳では――」
「何！？　２人ってやっぱりそういう関係なの！？　店のおじさんに値引きしてもらった時はその場のノリで言ったんだけど……」
「ソラさんそんな理由であんなこと言ったの！？」
『クスクス……スバル君、観念して関係を認めなさい？』
「ハープ……君もか……」
スバルがため息交じりでハープにそう言った時、ケフェウスとイーグルはなぜか真剣みを帯びた声で話し始めた。
『……ケフェウス様、スバル殿とミソラ殿は一体どれほどまで進んでいるのですか？』
『ウム、話によれば3回ほどデートと言うものをしたらしい。なんでも、地球においてデートとは恋人同士でないと出来ないものなのだそうだ』
「ケフェウス！　イーグル！　真剣な声で話し合わないで！なんか恥ずかしいから！」
「スバル君……そんなに私といるのって恥ずかしい？」
「……もう帰りたい」

スバルは周りから思いっきりからかわれて項垂れた。ケフェウスとイーグルにそんな気は無いのだろうが、ミソラとソラはほぼ１００％でからかっている。なお、ツバサとウォーロックは内心で爆笑中だ。ちなみにハープとアイリスはその様子を半分呆れ、半分楽しく見ていた。……ハープの方も、スバルにスキができる度にからかっている。

そんな他愛の無い会話をしている時に、ＷＡＸＡ日本支部に警報が鳴り響く。

緊急警報！　緊急警報！　数体の電波体が接近中！　各員警戒態勢を取れ！　繰り返す！　数体の……。

その警報を聞くなりスバル、ミソラ、ツバサ、そしてウォーロックとハープ、アイリスは外に駆け出す。だが、スバルだけが思い出したようにソラの下に引き返した。

「ソラさん！　危ないからここで待ってて！」

「あっ、うん」

「スバル！早く来い！」

スバルはソラにここで待つように言うと、先に向かったツバサの声に頷きで応えて駆け出す。

ソラは『　夢の事　』の他にスザクのことで聞きたかったのだが、今目の前には飾り気の無い床と壁しかない。ソラはため息一つで気持ちを切り替える。

（はぁ。……まぁ、スザクの事は今日中に聞ければ良いか。……それよりも今は……♪）

残されたソラは「ニヤッ」と笑ってこっそり付いて行った。どうやら戦闘を見学しにいくらしい。

外に出たスバルとミソラ、ウォーロックとハープやツバサとアイリス、イーグルやケフェウスの前にいたのは、裏切ってない方のFM星親衛隊のメンバーだった。イーグルとケフェウスは安堵した顔でスバル達にその事を知らせようとしたが……。

『ッ!!　イーグル隊長とケフェウス様に何という事を!!　攻撃開始!!!』

……どうも、お面と印籠(いんろう)を着けたまま外に来たのがまずかったらしい。電波体の中でリーダー格と思しき者が部下に命令して攻撃を繰り出してきた。

第３６話　奇跡（前書き）

皆さん、大変長らくお待たせしました。ようやくテストが終わったので投稿します。

１０月２日、後書きのみ修正しました。読み直す必要はありません。

作者名を『水瓶』から『黙する者』に変えました。実は水瓶座のＦＭ星人が出てくるので、まぎらわしいと思ったんです。

第３６話　奇跡

戦闘開始から3分。相手がたった数体なのに倒せない理由は2つある。

一つ目は相手の実力が高い事。ＦＭ星親衛隊とは、文字通りエリートしか入れないので、必然的に手だれが集まっていることになる。

二つ目は、相手が【　味方　】であることだ。些細な誤解でこの戦闘が始まったのだが、止める役目のケフェウスとイーグルの言葉はまるで響かない。そして何より、先程言った通り相手は本来は味方である存在なので、下手に傷つける訳にもいかない。

イーグルの時のようにアイリスが親衛隊全員の動きを止めて、その間にケフェウスとイーグルが説得するという方法も提案されたが、相手は複数で実力も高い。全員を制御下に置く前に攻撃されるのがオチということでその方法は却下。

そんな訳で、今はひたすら回避する事に重点が置かれている。

『ダ――――！！　イライラする――――！！！』

ウォーロックは、ロックマンことスバルの後ろに近づいてきた親衛隊の一人に対して爪を振るって牽制を行いながら叫んだ。

ウォーロックは本来、敵を問答無用で叩きのめすのが好きな性分なので、今回のようなひたすら回避する戦いは好きでは無いのだろう。

「んなこと言ったってしかたないだろウォーロック」

騒ぎを聞きつけてやってきたが結局巻き込まれた暁は、自分に来る攻撃を回避しながらウォーロックに声をかける。一方スバルは、

自分抜きで話を進められてため息をついた。

もちろんジャックやクインティアも加勢に来ている。２人は基地の防壁の左右に陣取り、基地内に入ってこないように後陣で防衛を受け持っていた。

ふと周りを見ると、ツバサは少し離れた所でバリア中心で攻撃を防いでいる。彼なら持ち前の運動神経で攻撃を避けるのは朝飯前だろうが、アイリスが近くにいる（ツバサはアイリスをハンターに戻そうとしたが、その前に攻撃を開始されたので、やむを得ず彼女を外に出したままにしている）のであんまり出過ぎた回避行動は出来ないのだろう。

ハープ・ノートの方は身軽なので回避にはさして困らないだろうが、ずっと言うわけにもいかない。生物なら当たり前に持っているであろう『疲れ』という制限時間があるからだ。

他の失敗を言えば、もう一人この場に【人】が居た事に、誰も気付かなかったことだろう。

基地の近くで戦っていたジャックに親衛隊の攻撃が放たれる。ジャックはそれを難なく回避したが、チラッと下の方に赤い物が見えた。かわした状態から体勢を整えて下を見ると、ソラがＷＡＸＡの城壁の陰に隠れていた。

チラッと見えた赤い物は、彼女の髪らしい。

この時点なら、後でソラが長官と女将さんに怒られるだけで済んだだろうが、そうはいかなかった。

「ジャック何してるの！　上を見なさい！」

姉の言葉で上を見てみると、瓦礫（ガレキ）が落ちてくるのが見えた。おそ

らく、先程避けた攻撃が破壊したものだろう。
ジャックはとっさに避けたが、直後自分の行動を後悔した。何故なら、下には一般人で、しかも身を護る術がない少女が居たのだから。

「バッカ!!　何してんだ!　前じゃなくて上を見ろ!!」

ジャックの叫びはソラに届き、その瞳には自分に迫る瓦礫が映る。しかし、ソラはすっかり恐怖で足は竦んでしまい動けずにいた。助けたくとも、今からでは間に合わない。
ソラは思わず目を瞑り、身を伏せた。
瓦礫がソラに近づく中、彼女のハンターが赤く、眩しく輝いた。

ズブォォォォォ……

その音で、敵味方問わず一時攻撃を止めて音のした方を向く。もちろんスバルも例外ではない。相手の放った水弾を避けてそちらを向いた。
視線の先にあったのは、瓦礫が炎の上に浮かんでいる光景。いや、正確には瓦礫が炎の渦に阻まれてソラに落下出来ないというのが正しい。つまり、先程の音は炎の渦に瓦礫が衝突して止まった音だったのだ。炎の圧力で落下の衝撃を完全に吸収したのだろう。
ジャックは目の前の状況を頭で処理できずにいる中、渦の下から勝気な声が轟く。

『ちょっと!　いい加減この瓦礫退けてよ!!　私の技じゃあ落ちないようにするのが精一杯で壊せないんだから!!』

ジャックは、いや、旅館に行って『彼女』の声を聞いた者はさらに困惑した事だろう。何故ならその声の主は……。

「……スザク……」

『ソラ、あんたは絶対に死なせないよ。……それと、なんか心配かけちゃってゴメンね。……それはそうと、さっさと助けろって言ってんでしょ！　このアホガラス！！！』

「お、おう！　フェザーシックル！！」

ズバッ！

ジャックは、自身の4枚ある内の2枚の羽を鎌に姿を変えて、瓦礫を鋭い音と共にたたっ斬る。

本来なら【アホガラス】と呼ばれて怒るべきなのだろうが、その時は非常時なために助ける事を優先したのだ。

瓦礫は斬られた事でバランスを崩し、炎の渦から転げ落ちた。

『あ～しんどかった。レディーに重い物持たせるか普通？』

【　持つ　】と言うより、【　炎の圧力で浮かばせていた　】の方があってるのだが、この際そんな事はどうでも良い。

スザクは数日前、自らに起こった出来事など最初から無かったかのように文句を言っている。

新たにやって来たＦＭ星親衛隊はいまいち状況が掴めていなかったが、スバル達はそれより驚いていた。そこを見逃すほど親衛隊は甘くはない。

『スキあり！！』

最初に言った親衛隊は誰であれ、交戦していた親衛隊はロックマン達にそれぞれの攻撃を放とうとする。しかし……。

『いい加減静まれ――――!!』

ＦＭ王ケフェウスの声がその場に響き渡る。今までは騒がしくて響かなかった声も、先程の出来事で多少静かになったので聞こえたのだ。

『なぜケフェウス様がこいつらを庇うのですか?』

スバルに水弾を放ってきたこの中のリーダーと思しき者（　水瓶のような装甲に瓶の水を注ぐ所から水のような電波が流れ出る。例えるとすれば、水色の蛇が瓶を被っているような感じ　）が、未だ納得できないという声で、こちらに近づいてくるケフェウスに尋ねる。

『アクエリアスよ……この者たちがケフェウス様のご友人だ』

代わりに答えたイーグルの言葉に親衛隊の動きは固まった。アクエリアスと呼ばれた電波体は、気まずくスバルの方を向きながら、ケフェウスに尋ねる。

『……では、この人があの……』

『うむ。余に自分の間違いを気付かせ、さらにはＦＭ星を飲み込もうとしたブラックホールサーバーの主（ぬし）、シリウスを倒した者だ』

ケフェウスはそう言いながらスバルとアクエリアスの元に来る。
イーグルは決してケフェウスの前には出ず、そばに従い、自らの主（あるじ）の威厳をかもし出させる。
アクエリアスは、地面にぶつかるんじゃないかというスピードでスバルに頭を下げた。

『申し訳ありません！！　隊長とケフェウス様があのような物を着けていたのでてっきり洗脳装置か、あるいは2人が不快に思う物を強制的に着けさせられたのかと……』

語尾が延びる所を見ると、この人もイーグル同様に正直な分やや誤解癖があり、自分でも自覚はあるらしい。……横目で見ると、周りでも同様に親衛隊のメンバーがミソラや暁たちに謝っているようだ。
スバルはとんでもないとばかりに両手を前に出して振る。

「いえ！　別に良いですよ。それだけケフェウスがあなた方に愛されていると言う事ですから。そう思うと僕も嬉しく思います」
『そう言って貰えるとは……ケフェウス様が仰るとおりお優しい方だ。……ウォーロックはお元気ですか？』
「え、ウォーロックを知ってるの？」
『こいつとは古い馴染みだ。……アクエリアス、お前は相変わらず仕事とプライベートを極端なまでに分けてんのな』

そのウォーロックの言葉は、懐かしさと呆れが混じったような声だ。
ウォーロックの言葉から考えて、今までは任務だったためウォーロックに話しかけず、誤解が解けた今はプライベートとして親しく接してきているわけだろう。

当のアクエリアスは苦笑しながら答える。

『まぁ、それが私ですからね。あなたの方は……少し変わりましたかね　？』

『ケッ！　お前の方もすっかりＦＭ星親衛隊に入ってんじゃねぇか。お互い様だろ？』

『それも、親衛隊の三番隊長……まぁ簡単に言えば、親衛隊の中で三番目に偉いといった所だ。……それにしてもアクエリアス、ウォーロックと知り合いなら何故もっと早く言わない。ＦＭ星でお前一言もそんな事を言わなかっただろう？』

イーグルが補足と質問をして、アクエリアスは平然としながらイーグルに向き合う。

『隊長と話す時はいつもお互い任務中でしたから』

はっきり言われて二の句が継げなくなったイーグルに、ケフェウスは可笑しそうに微笑む。

『ふふふ。一本取られたな、イーグル？』

「スバル君、ソラさんの所に行かない？」

電波体同士で話が弾んできたので、スバルにとって正直居心地が悪くなった。そんな所にちょうどミソラが来たので、スバルはケフェウス達に断ってからそちらに向かうことにした。

入れ違いに、ＦＭ星親衛隊の皆さんは自らの主、ケフェウスの元へ向かう。

ソラたちの元へ行ってみると、ジャックがスザクに怒られていた。
電波変換時同様、休みの無い攻撃によりジャックは頭が上がらない。もっと正確に言えば、ジャックに頭を上げるスキを与えない。

『ったく！　なんで下にソラが居たのにそっちを先に助けなかったの!?　普通自分が避けるより先に相手を助けるのが先でしょ！!』
「……んな事言っても、姉ちゃんが避けろって……」
『人のせいにしない！!!』
「……ハイ」

その様子をジャックの相棒のコーヴァスはスザクの剣幕に押されてジャックを助けられず、ソラの方もうかつに口出しをしたら自分までとばっちりを食いそうで「あはは……」と苦笑しながら見守るしかないようだ。
ツバサはジャックに見つからないように口元の笑みを手で隠し、アイリスも同情半分、苦笑い半分といった様子でジャックを見ている。
暁とヴァルゴは爆笑している所をアシッドに注意を受けていた。
そして、ジャックの姉のクインティアは無言で手をジャックとスザクに向けたまま停止状態。おそらく、できれば助けたいが付け入るスキが無いために手で止める形は作れても、言葉が出てこないのだろう。
スバルが現状を分析している間に、ジャックが軽く泣きそうになってきた。

『何泣いてんの！　男の子でしょ！』

（（（（鬼ですかあなたは……））））

さすがにジャックが可哀想になってきたからか、ツバサとソラが

仲介に入った。なお、スバルにはあの鬼のようなスザクに口応える勇気は無い。

（委員長といいスザクといい、なんか最近こういうのばっかり……）

スバルがそんな事を思っている間に、ツバサは持ち前の口の巧（うま）さで、ソラはスザクとの信頼で彼女の怒りを緩めていく。

「……ってわけで、お前も復活して、さらには結果的に怪我人もいないんだし、結果オーライでいいだろ」

「そうそう。私本当に嬉しいんだよ？　スザクが戻ってきてくれてさ」

どんなわけで？　というツッコミはさておき、２人の言葉でスザクは大分落ち着いてきた。……だが、今度はまた別の問題が湧き上がる。

『……まぁ、このアホガラスの事はもう良いけど……黒髪雑学君、あんたソラを口説いてなかった!?』

それまでジャックへの同情で包まれていたその場の空気は、その言葉で一気にツバサへの注目に変わる。暁は思いっきりやじうま根性炸裂！　といった様子でツバサを見て、ウィザード含めた女性陣は口に手を押さえて「　いつの間に!?」といった様子で驚いている。アシッドも感情は見えないが驚いているのだろう。指先の動きすら完全に止まっている。

なお、当のツバサとソラは首をかしげて、スザクにはソラが尋ねた。

「……？　なんのこっちゃ？」

『忘れたの!?　ほら、居るだけで良い……だっけ?』
「「ッ!!　あ、あれは……」」

スザクが信じられないと言わんばかりにツバサとソラに確認を取る。2人がそれに心当たりがある様子を、周りはニヤニヤした訳知り顔で2人を見てくる。

「「「「ふぅ～ん　」」」」

2人は急いで否定した。

「ス、スザク～何のことかな～?　あたし全っ然聞き覚え無いんだけど～」（夢の話をここでするかあんたは!!）
「そ、そうそう。オレはそんな事言ってねぇよ?」（このKYっぷりはウォーロック以上だな……）

『……そうやって息ぴったりで慌てられるとさらに疑うんだけど……』

スザクがまだ言うので、ツバサとソラは一瞬目を合わせてスザクを物陰に連行した。あえてその様子を例えれば、【　捕獲される宇宙人　】である……。

「良い!?　スザク!　あれは夢なの!　現実とは丸っきり関係ない!　ねっ!ツバサ君!?」
「ああ!　アレはあくまで夢だ!!」
『……それって、2人が同じ夢を見てたって事?』
（（　ッ!!　しまった!!））

2人の内心の動揺はひしひしとスザクにも伝わったらしく、訝し

む様な視線を送る。

『……それに、何で2人の夢を私が知ってるの？　私その時……あれ？　どこでツバサがソラに言った言葉を聞いたんだっけ……思い出せない』

今度はスザクが戸惑い始めた。ソラはスザクを気づかい、ツバサは少し考えを巡らせた後に納得した顔を浮かべる。幸いな事に、ソラにその時の顔は見られなかったようだが、見られたら間違いなく先程のように攻め込まれていたことだろう。

ツバサは「フッ」と笑うと、スザクに声をかけた。

「……まぁ、解んない事で悩んでも仕方ないじゃん。今は生きてる事を喜んだらどうだ？」

『……あんたに言われるとはっきり言って腹が立つけど……まぁ、その通りか。それじゃあ改めて、またヨロシクね！　ソラ！』

「うん！　こっちこそヨロシク！」

ツバサの機転（　誤魔化し　）により3人の話は収まり、皆の下に戻るとケフェウスを始めとしたＦＭ星人達がスバル達と合流していた。

……しかし、雰囲気は楽しそうではない。理由はアクエリアスが説明してくれた。

『そろそろ隊長とケフェウス様にはＦＭ星に帰ってもらわねばなりません。あんまりこっちに居ると、民の王に対する尊敬の念が失われます』

つまり、こっちに長く居ると『　我々の王はＦＭ星より地球の方が良いのか……　』といった感じで王の威厳が失われるのを懸念し

ているらしい。
　ケフェウスは寂しげに頷いてアクエリアスに賛同する。
『うむ……。アクエリアスの言う通り、こっちにいつまでもいられんな……。イーグル、帰るための身支度が済むまでどれ程かかる？』
『そうですね……。私もこの星が好きになってしまい……その……部屋に私物が増えすぎて……時間がかかるものと思われます。最低でも3日はかかるでしょう』
『イーグル……あなたもですか……』
　アクエリアスの呆れた視線にケフェウスとイーグルは俯いた。
「それじゃあさ、帰る前にお別れパーティしない？」
「あ！それ良いかも！　急いで準備だね！」
　スバルの提案にミソラが賛同し、暁とウォーロックは『　力仕事は任せろ！　』と言わんばかりに右腕を曲げて、左腕の手の平を右腕の上腕に置いた。
　クインティアはハンターを取り出して日程と予算の確認。ツバサとアイリスは「　長官に掛け合ってくる　」と言って基地内に戻っていった。
　それぞれ別々の事をしながら、全員が【　ケフェウスやイーグルの他に、新しく来たアクエリアス達に良い思い出を！】という想いで行動しているのだ。
　アクエリアスはポカンとした顔で呟く。
『ケフェウス様や隊長だけでなく我らまで……』
『そう。だからこそ、居心地が良すぎてな……』
　ケフェウスがスバル達に対して微笑を送り、アクエリアスの肩に

手を置いた。
イーグルは暁たちが奔走しているのを見てケフェウスとアクエリアスに話しかける。

『ケフェウス様、我らは自室に戻りましょう。……地球人とは、こういうのは秘密にして、当日に相手を驚かせるのが定番らしいので』
『うむ。……イーグル、親衛隊を全員ＷＡＸＡの中へ誘導しろ。これから長官に新しく来た人数分部屋を借りねば』
『承知しました。皆！　聞こえた通りだ。行動開始！』
『『『『　ハイ！　』』』』

部下達の顔に先程までの敵意は無く、初めて会う地球人に信頼の念を抱き始めていた。
長官の所に行ってみたら、ツバサとアイリスがすでに部屋の方も話をつけていた。なお、ＷＡＸＡ日本支部は５０階をゆうに超える高さなので、部屋数の方はまったく問題ないという。
お別れパーティーの方も快く了承してくれた。

さて、忘れている方も多いと思うがジョーカーはというと……。

『……何事だ？』

ジョーカーはウェーブロードを通って来たらしい。そして、その表情は驚きそのものだ。手にはビニール袋を３つ程ぶら下げている。内２つは電子部品や予備の器具。最後の１つはお酒だ。おそらくヨイリーに部品の調達を頼まれたついでに、ツバサから酒も頼まれたのだろう。
スバル達が思ったことは一つ。

（（（（（（　……ジョーカーの事忘れてた　）））））

重々酷いとは自覚しているが、これも事実だ。

スバルは、ジョーカーに謝ると共に、彼は力持ちなので今手に持っている袋を運び終わったら手伝ってもらおうと彼に近づいたが……。

『……先程の顔からして、わたしの事を忘れていたのだな』

そう呟くなり誰の言葉にも耳を貸さずＷＡＸＡの中に戻って行った。足取りは、ひたすら重く……。

その後、ヨイリーがジョーカーを励まして何とか機嫌を直してくれたらしく、スバル達を手伝ってくれた。

最初はツバサが励まそうとしたのだが、彼には前科（　先日行った旅館でジョーカーを忘れていた事　）があり、門前払いを食らったのでヨイリーが励ましたのだ。

やや違うと思いながらスバルは思う。

（……母の愛情？）

まぁ、実際ジョーカーを創ったのはヨイリーなのだから、母と言えば母だろうが……。何はともあれ、パーティまで時間がない。スバル達は急ピッチで準備に本腰を入れた。

第３６話　奇跡（後書き）

ちなみにこの話の間、ツカサは自分のアパートに居ました（彼なら一人暮らしも可能だろうと思いまして）。パーティではちゃんと来ますよ。

作者の話なんですが、疲れました。まさかレポートを書くのに６時間以上ボールペンを走らせ続ける羽目になるとは……。終わったのが深夜の１時越えてたし……。今も少し疲れが残ってます。……たぶん英語は壊滅的な点数ですね。どうにも英語だけは苦手でして……。

次の更新は１９日（土曜日）です。

第37話　パーティと料理（前書き）

今回はパーティって事で、ケフェウスを始め一部の電波体達も食べられるようにしました。やっぱりパーティみたいな賑やかなのは、皆で楽しまなきゃね♪

第37話　パーティと料理

――ケフェウス達が帰る前日――

今日はケフェウス達とのお別れパーティの日。
学校が終わった後に、スバル、ミソラ、ツバサ。そしてウォーロック、ハープは委員長達、もちろんジャックも誘ってWAXAに向かう（アイリスは登校時からいなかった）。
皆は最初、いきなりのお別れに驚いていたけど、別にもう会えないわけでもないので、それほど落ち込まなかった。

――WAXA――

WAXAの食堂に着くと、食堂の壁には装飾がなされ、大吾やあかね、ツカサも来ていた。大吾はいつものオレンジとベージュのシャツでツカサは黒の正装を着ているが、アカネの方は紫のドレスに赤い口紅をしている。
そしてあかねは我が子に手を振ってきた。

「スバルーみんなー！」
「か、母さんその格好は……」

スバルが戸惑っている中、大吾は頭をポリポリと掻いて困ったように唸る。

「いや～俺もいつもの格好で良いって言ったんだが、あかねが聞かなくてな……」
「だって、今日はＦＭ王さんとその側近さん達のお別れパーティなんでしょ？　だったら、この位の晴着（はれぎ）は当然じゃない。クインティアさんと午前のうちにコレを買って来たのよ？　ねぇミソラちゃん、委員長さん、これ綺麗よね～？」

あかねは大吾に言葉を返した後ミソラに子供っぽく尋ねる。ミソラとルナも目を輝かせて笑顔で頷いた。

「はい！　とっても綺麗です！」
「本当に綺麗ですわ！　おばさま！」
「な、なぁ……さっき姉ちゃんの名前言ったか？　ってことは、まさかとは思うけど姉ちゃんも……」

ジャックの恐る恐るといった質問に対してクインティア本人が後ろ（扉側）から答えた。

「……わたしもドレス買ったんだけど、なんでそんな嫌そうな声を出すの？　ジャック……」

しかもなぜか不機嫌。おそらく、ジャックが嫌そうに言ったのが理由だろう。
なお、クインティアのドレスは白一色で装飾はほとんど無いが、それがむしろ彼女の清楚さを表しているようだ。
これにもミソラとルナは目を輝かせる。おそらく、いつか自分もああいった素敵なドレスを着たいという憧れだろう。しかも目の前でドレスを着ているのは、『美女』と評価できる程の女性が２人もいるのだから、憧れる理由は十分だ。

女性陣が盛り上がっている様子を見ている男子は……。

「……何も分からない。何で服であそこまで……」

「「　同感だ　」」

『女ってのはやっぱり分からん』

スバルの呟きにジャックとツバサは一言一句違わない言葉を発して、ウォーロックの言葉に男性ウィザード全員で2回頷いた。ツカサはいつも通りニコニコ笑っている。

そんな感じで、服の話題について行けない男子衆は、ポツンとドアの辺りに立ち尽くしていた。

「……あのさ～。食堂に入りたいんだけど？」

『邪魔よ、そこの男子数名』

『スザク……それはさすがに……』

後ろから3人の女性の声がする。その場から退きながら振り向くと、食材を持ったソラ、スザク、アイリスがいた。買い物からの帰りらしい。

アイリスが今日、ツバサと一緒に学校に来なかったのは、パーティの準備のためだったようだ。しかし、スザクとソラは何故ここにいるのだろう？　学校が終わってから来たにしてはずいぶん早すぎる……。

「ずいぶん早いな。どうやって来たんだ？」

ジャックも同じ事を思っていたらしくソラに質問した。ソラは「ふっふっふ　」と、自慢げに笑って自分のハンターを前に出した。

「じつは、スザクと電波変換してきたので～す！！　……あっ、も

ちろん女将にはちゃんと許可取って来てるよ？」

つまり、旅館から電波変換してきて、ＷＡＸＡに着いた後アイリスと一緒に買い物に出たというわけだ。

「スバル君、その人誰ですか？」

キザマロが不思議そうに聞いてきた。そういえば、委員長トリオとソラは自己紹介を終えていなかった。パーティまで時間はまだあるので、今のうちに自己紹介を終わらせることにする。

……早く終わらせないと、スバルがルナの出す殺気で気絶するだろうから……。

（委員長も相変わらずだな～。スバル君良かったね。自分を慕ってくれる人がこんなに居て♪）

ツカサはそんな事を思いながら、片や自己紹介。片や殺気に当てられているスバルの様子を、相変わらず楽しそうな笑みを浮かべて見ていた。

なお、買い物の袋は厨房に運ぶ前にコック達が持って行ってくれた。しばらくお友達同士で話していて良いという配慮だろう。

一通りの自己紹介も終わった時、厨房から拡声器で大きくしたコック長の声が聞こえてくる。

「え～すみませんが、今この会場内に居る人で料理に自信がある方はおりませんか？　実は、今日来るはずだったコック数名が風邪で休んでしまいまして……。誰かにお手伝いだけでもお願いしたいのですがー。

すでに一人手伝ってもらっているのですが……その……基礎的な事しかさせる事が出来なくて……とにかくお願いします！」

「大変！　大吾さん、私お手伝いにいってくるわね」

あかねはそう言うなり厨房に駆けていった。

「私も行ってきます」

「キザマロ、私も行ってくるからゴンタの事お願いね」

ミソラとルナもあかねの後を追う。お互いに面倒見が良いので困っている人をほっとけないのだろう。

ソラは自分より年下のミソラとルナが手伝いに行ったのを見てため息をついた。

「はぁ～。……ここで私が行かなかったら、旅館の子とは言えないよね。……私も行ってくるよ」

『うん。それじゃあ私はソラの料理が出来るまでみんなと話してるね～』

「スザクも来る！」

ソラはそう言いながらスザクの首を掴みながら厨房に向かう。苦しそうに見えるのは、スザクの演技ではないだろう。

そして、残された者の視線はアイリスとクインティアに集中した。アイリスとクインティアの事だから十中八九予想はついているだろうが、念のためといったようにその視線の確認を取る。

「……なんで私たちを見るの？」

クインティアの言葉にアイリスも【　コクッ　】と頷く。

「いや、あかねやスバルの友だちが行ったからキミ達も行くのかと……」

大吾が代表して答えると、2人は少し恥ずかしそうに理由を話した。

「こんな大勢に振舞うなんて、まだ……少し気後れが……」

『私は人間の料理を食べられない……。自分で味見ができない物を、他の人に出すわけにはいかないから』

こんなわけで、料理を作るのはあかね、ミソラ、ルナ、ソラとなった。しかし、厄介な事にその会話を近くで聞いていた隊員が近くの同僚に教え、その隊員が別の隊員に……。といった様子で瞬く間にその話は広がっていき、その結果……。

「ミソラちゃんの手料理楽しみだな！」

「ああ！　他にも、かなり料理の上手いヤツが作るらしいぜ？　何でも、どっかの大統領の舌を唸らせたヤツだとか」

「なぁ、オレさっき厨房を覗いて来たんだけどよ、ミソラちゃんの他に見たこと無い女の子と女の人が居たぜ？　かなり手馴れてたし、その人じゃねぇかな？　それに、ルナ……だっけ？　前にヨイリー博士が再構築に成功した子。その子も居たな……」

以上がスバル達のいる席の近くで沸き起こっている噂話である。ご丁寧にと言うべきか、見事に尾ひれが付いている。

なお、この時点でケフェウスやＦＭ星親衛隊も来ている。

人間の食べ物は、無論だが電波体は食べられない。だが、今ここには強大な電磁波を持つケフェウスが居る。以前も述べたが、ＦＭ／ＡＭ星人の出す特殊な電磁波は長く浴びせると、物質が電波化する性質を持つ。ケフェウスの強大な電磁波により短時間で物質を電波化すれば、食べることも可能だろう。

ただしケフェウスが言うには、地球で生まれた者や、構成する電波が変わった者（ウォーロックとハープは元は宇宙人だったが、今では体の構成電波が変わってウィザードになっている）は食べることはできないらしい。

これを聞いたウォーロックと元ＦＭ星人組はポカンと口を開けて、ガックリと首が項垂れた。

ツカサは周りの噂に聞き耳を立てながら、スバルに面白半分で尋ねる。

「隊員さんが話してる一流の料理人ってスバル君のお母さんのことだね。一体どんな料理ができるのかな？」

スバルは恥ずかしそうに俯きながら答えた。

「でも、あくまでお手伝いだけだし……。あれ？　そういえば誰か忘れてるような……」

『わたしはいるぞ』

よっぽど根に持っているのだろう。ジョーカーは念のためと言った感じでスバルに注意してくる。スバルは苦笑いしながらそれに答える。

「うん。ジョーカーはずっと近くに居たからね。でも……あれ？」

周りに居るのはツバサとジョーカーとアイリス。大吾にウォーロック。ツカサにジェミニ。ゴンタとキザマロ、オックスとペディア。ジャックとクインティア、そのウィザードのコーヴァスとヴァルゴ……。

スバルが順々に数えていき、居ない人に気付いた。

「あ、暁さんとアシッドだ」
「……そういえば居ないわね」
『ティア……さすがにそれは彼女として酷～い』

さすがのヴァルゴも自らのパートナーに呆れていた。
一方ツカサは、どこから持ってきたのかお茶を飲みながら再びこの話題へ……。

「でも、本当にスバル君のお母さんの料理楽しみだな～」
「だから母さんが作るとは限らないって。……っていうかツカサ君、わざと言ってない？」
「そんなことないよ」

口ではそう言ってるが、彼の場合内心が読めない。スバルのジト目に対し、ツカサは平然としている。

『……ジェミニ、お前も苦労が多そうだな……』
『……まぁな』

スバルとツカサのウィザードの会話の後、なぜかコック長がやや興奮した様子で声をマイクで張り上げた。

「みなさん！　なんと今回はあの人気アイドルの響ミソラさんと星河スバルくんのお母さん。スバルくんの友人の白金ルナさん。そしてあの有名旅館うらかわで働いているソラさん。計４人が副食を作ってくれました！」

その発言に、その場は騒然となる。主にその喝采はミソラやあかねが中心だ。

なお、スバルがロックマンである事はこのＷＡＸＡニホン支部において当たり前の事実なので、その母親のあかねの事が知られていてもおかしくは無い。おまけを言えば、あかねの料理が美味しい事も分かっているらしい。

……考えられる理由は、１．前にあかねの料理を食べたツバサが話した。２．サテラポリスの情報網によるもの。

もしも後者なら、完全にプライバシーの侵害だと思うのは、僕（スバル）だけだろうか……。

そしてその時の賑やかさといったら、【ここは本当にエリート部隊が集まっている組織なのか！？】と言いたくなるほどである。

料理が配られる中、先程紹介された５人に加えて暁とアシッドがスバル達の元に来た。

戻ってきた５人に対して最初に声をかけたのはツカサだった。

「おかえり。実はお手伝いだけでなく実際に作ってくるんじゃないかな？って噂してたんだ」

「それよか、なんで暁がお前らと一緒に来たんだ？」

ジャックの問いにスバルを始め、大吾も気になるらしく、戻ってきた者達に目線を送る。暁とアシッド以外の４人は可笑しそうに笑いながら説明した。

――――時間を少し遡り、場所は厨房――――

お手伝いに立候補した４人の前には、イスに座って慣れない手つ

きでイモの皮を包丁で剥いている暁がいた。暁のテンションはやけに暗い。なお、アシッドは空になった箱を邪魔にならない場所に運ぶ役だ。

コック長はあかね達を見て、助かったと言わんばかりに声をかけてきた。

「これはこれはスバル君のお母さん。ツバサが以前あなたの料理が美味しいと言っていたので、いつかあなたの料理を食べてみたいと思っていたんです。君たちも手伝ってくれるのかい？」

ミソラ、ルナ、ソラの3人は『もちろん』と頷く。

そして料理は開始された。4人が主食を作ると大変なボリュームになるので、4人が作るのは副食という事になる。主食はもちろん、WAXAニホン支部の誇るコック達が担当する。

トントントントン……

ジュージュージュー

厨房に響くのは包丁の音や炒める音。

あかねはもちろん、ミソラやルナ、そしてソラも、中々に料理慣れしている。

ミソラとルナは憧れの人（　スバル　）のために自らの腕を磨き、ソラは旅館のお手伝いで養われたが故の腕前だろう。コック長はこの4人に対して口元に笑みを作って、感心したように自身の自慢としている白髭（しろひげ）を撫でた。

「ふむ。あかねさんもさる事ながら、彼女達（　ミソラ、ルナ、ソラ　）の腕も中々だな。きっと、熱心に料理を勉強しているんだな。……それに比べうちのエースは……」

呆れた声でコック長が目をやったのはサテラポリスのエース、暁シドウである。元々はシドウに手伝ってもらっていたのだが、彼が包丁での皮むきがうまく出来ない事が発覚。それでコック長は食堂の皆さんにお手伝いを頼んだというわけだ。

シドウはコック長や他のコック達の視線を浴びながら愚痴る。

「くっそー。ウイルス並の大きさなら切るのは楽勝なのに……」

『シドウ。早く仕事を終わらせれば、それだけ早くこの状況を抜けられますよ』

「ああ。……あっ結構でっかく切っちまった……」

以外にも不器用なシドウを見かねて、あかねは自分の料理が終わった後で手伝うことにした。

そして5人の料理とコック達の主食が完成して今に至る。

話を聞いてる間も、話が終わった後も、スバルを含め、同じ机に居る人たちは笑いが込み上げているせいで料理が満足に食べられない状態だ。それに対して暁は当然落ち込む。

「お前らなぁ……。本人が目の前にいるのにそんなに笑うこと無いだろ……？」

「……これから上手くなれば良い事よ」

「そうはいってもな。ティ……」

シドウの言葉が途中で止まったのは、クインティアの今の衣装（ドレス）に

見とれていたからだ。

「……シドウ？」

言葉を途中で止めたシドウに対し、クインティアがどうしたのかとシドウを見つめる。

シドウは我に返った後、クインティアに微笑みかける。

「……いや、何でもない。……そのドレス、似合ってるよ。ティア」

「……ありがとう」

シドウとクインティアは見つめあい、対照的にスバル達は目を逸らした。他人の事なのに、見ててこっちが恥ずかしくなってくる。

スバルを始めとした男の子達は赤くなりながら目を逸らす。ゴンタは不躾にも目を逸らさなかったので、付き合いの長いキザマロが食べ物で注意を引いて目を逸らさせる。

ルナは赤くなった後目を逸らし、ミソラも同様に顔を赤くしてシドウとクインティアを見ていたが、ソラに両頬を押さえられて目を逸らされた。

大吾は、若い頃の自分達（　大吾とあかね　）を重ねているのか、シドウとクインティアを見て微笑む。あかねは赤くして目を逸らした子供達を見て、【　皆もまだまだ若いわね～　】と内心で思いながら微笑んでいる。

なお、ジェミニとジョーカーを除く男性ウィザードたちはシドウとクインティアをはやしたて、ハープを始めとした女性ウィザード（　アイリス除く　）が当て身を食らわせて気絶させた。

その後はそれぞれ談笑しながら食事を進める。

「あ、スバル君、それ私が作ったんだよ？」

「スバル君、私が作ったのも食べてね？」

「……はい。いただきます」（　……なぜだろう？　２人が恐い……。気のせいだと良いな　）

そう。スバルはミソラとルナに挟まれていたのだ。そして２人は自分の愛する人（スバル）に自分の料理を食べてもらいたいというのと、お互い恋のライバルとして負けたくないという感情がぶつかって、２人の間にいるスバルがそれにプレッシャーを感じているということだ。

ソラは隣の修羅場を内心で楽しみながら、向かいの席のツバサに話しかけた。

「そういえばさ、何でスザクって再構築されたの？　今日ここに来た時ヨイリー博士に聞いてみたんだけどさ、特殊な装置が無いとデリートされた電波体って元に戻んないんだよね？」

ツバサは箸を持つ手を止めて、飄々と答える。

「んなもん勘！　あん時はお前を励ますのが優先でな～。……あ、本気になったなら悪かったな」

無論それはツバサの誤魔化しなのだが、この質問をされる事は前から予想していたので、演技用の顔と声は計画済みだ。

しかし、その完璧なまでの誤魔化しが災いしたらしい。

ソラはツバサの言葉と、彼の悪びれない態度を見て、額にムカマークを浮かべながら笑顔を作る。

「そっか～。勘か～。うんうん。……ツバサ～？　そこから動かないでね～？」

ソラはゆっくりと席の反対側、つまりツバサの側に来る。ソラが自分に近づいた時、ツバサはようやく彼女が怒っている理由に気付

いたらしく、冷や汗を流した。

「ソ、ソラ。本当に悪かった。この通り謝るかりゃ？」

語尾が変になったのは、ソラがツバサの頬を両手で摘んだからだ。

ソラはにっこりした顔から怒った顔になって……。

「励まそうとしてくれたのは嬉しいけど、乙女心をちょっとは考えなさーい！！」

「ひでででででで！！！　わるふぁった！　わるふぁった！！」

思いっきり頬を引っ張られたツバサの言葉を訳すと、「いでででで！！！　悪かった！　悪かった！！」である。

おおよそ２０秒ほど引っ張られて、ようやく開放された頃にはツバサの頬は赤くなっていた。

その原因のソラはすっきりしたという顔で自分の席に戻った時、右の席のクインティアが不思議そうに尋ねてきた。なお、ソラの左にはミソラ、スバル、ルナの順番で座っている。

「ソラちゃん……彼の事を黒髪雑学君って呼び続けるんじゃなかった？」

ソラは「クスッ」と笑って、冷たい飲み物が入ったコップで頬を冷やしているツバサを見た。

「理由はどうあれ、彼の言葉でスザクが戻ってくるって信じきることが出来たんです。だから、特別に『ツバサ』と呼んであげる事にします。……もちろん、彼の本当の名前はいずれ聞きだしますけどね～♪」

そう言うソラは、イタズラを楽しむ子供のような笑顔を作る。クインティアも、その笑みにつられて「クスッ」と笑う。

「そう。……ふふ。私も頑張らないとね」

クインティアはそう言いながら隣で食を進めているシドウを見た。見られていることに気付いたシドウはクインティアの方を向いたが、クインティアが微笑みながら「何でも無い」と言ったので、首をかしげながらも食事を再開した。

その後、すっかり酒で出来上がった隊員たちがミソラにいい所を見せようと歌を歌ったりしてその場は盛り上がり、気付けば夜の9時。大人は大丈夫でも、スバル達はこれ以上夜更かしするのはまずいと言うことで帰ることになった。なお、ツカサとソラはWAXAに泊まるらしい。

「それじゃあケフェウス、みんな、また明日」

『うむ。……明日でしばしの別れか……。やはり少し寂しいが、余は余で、自分に出来ることをしてくる』

「うん。頑張ってね」

『しっかりやれよ。王様！』

「……大吾、ちょっと良いか？　それと、ケフェウスにも頼みがあるんだけど」

スバルとウォーロックはそれぞれケフェウスと笑みを交わす。その時、ツバサはケフェウスの後ろからケフェウスの肩に手を置き、大吾を呼びとめる。

ちなみにツバサの後ろには、長官、ヨイリー、暁もいる。この3

人もツバサに呼ばれたらしい。

「ん？　……分かった。あかね、スバル達を先に帰していてくれ」

『……お前達も自分の席に戻っていてくれ。それでツバサ、頼みとは？』

ツバサの意味深な視線に気付いた大吾とケフェウスはそれに応え、大吾はあかねとスバル、ミソラとルナ、ゴンタとキザマロを先に帰す。ケフェウスは自分の臣下達を席に戻させた。

その後、話し合っている6人の顔は真剣そのものだ。何を話しているのかを聞こうと思ったが、母（あかね）が自分達の近くにいるので近づけなかった。

第３７話　パーティと料理（後書き）

今回は補足する所が多いです。

・ツカサの着ている正装は舞踏会で着るような服です。タキシードってやつですかね。どこで手に入れたかはスルーでお願いします（笑）。

・なお、暁が料理が出来ないのはオレ（作者）の勝手な設定です。暁にそういった面があった方が彼の子供っぽさというか親しみ深さが増すと思いまして。

・なお、当て身っていうのは、首筋にチョップを繰り出して強制的に寝てもらう技です。たま～にマンガで見かけるアレです。

――お知らせ――

・現在ｘｘＨＯＬＩＣの用語集も製作中。蟲（コ）、猿の手を書いてます。リクエストがあれば言ってください。それも書いておきます。

・次回の更新は２２日です。

それでは、長々と後書きで語ってしまって申し訳ありません。最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

第３８話　一時の別れ

――――ＷＡＸＡ――――

スバルとミソラ、ツバサ、ジャック、委員長トリオ、そしてそのウィザード達は学校の終業式が終わった後、ＷＡＸＡに来ている。ケフェウスがＦＭ星に帰るので見送りに来たのだ。

科学者や隊員。様々な人が集まる中、長官は代表としてケフェウスに手を差し出した。

「これからも、お互い良い関係を築いて行きましょう」

『ウム。……私もまだまだ未熟だから至らぬところもあるかもしれん。その時は色々助言してくれ。ＷＡＸＡ長官』

ケフェウスは自分の手を長官に重ねる。ケフェウスはウィザードのように物質化はできない。だが、手を重ねる事で信頼を表現する事ができる。長官も、笑顔でそれに答えた。

「もちろんです。……スバル君、何かケフェウスに言いたい事はあるかね？」

ここにいる中でケフェウスと特に強い繋がりができているのはスバルだ。長官の後ろには、最後に色々聞こうと研究者の列ができていたので、長官はスバルに話すチャンスを与えたのだろう。

スバルは頷いて、ケフェウスの元にやってきた。

「はい。……ケフェウス、向こうでも元気でね。３賢者にもよろしく」

『ああ。彼らにもよろしく言っておく。スバルも気をつけろよ。……例のフェイブ・エレメントという組織には、ＦＭ星親衛隊ナンバー２の【　オリオン　】がいるからな』

『ッ！！　何！？　あのオリオンがか！？』

「ウォーロック、そのオリオンってそんなに凄いの？」

当然と言えばそうだが、スバルはＦＭ星の話はほとんど知らない。その主な理由は、ウォーロックがあんまり自分の事を話さないからだ。

一方、スバルの問いにはケフェウスが答えた。

『……うむ。オリオンは先代のＦＭ王の時から武勲を挙げた来た者でな、戦闘センスも戦術も一流の戦士だ』

「それってイーグルより強いって事だよね。何でそんな人がナンバー２なの？』

スバルは腑に落ちないと言う顔でケフェウスに問う。確かに先代の頃から武勲を挙げてきたのであれば、イーグルより格段に実力も経験も上だ。それ程の人物が、なぜナンバー２なのだろう。

オリオンがナンバー２に収まっている理由はイーグルが説明した。

『……順を追って説明すると、シリウスに以前の親衛隊を壊滅されてから急きょ新たな親衛隊が結成されたのだが人手不足でな。わたしやアクエリアス、そして今わたし達の後ろにいる者はすぐに決まったが、それでも規定の数に達しない。そこで、退役したオリオンに引き受けてもらったと言うわけだ。

……実力もわたしより上なのだが、オリオンは、『わたしは一度退役した身なので、上に立つわけにもいかんだろう。若者達の育成に精を出すためにナンバー２でありたい』と、言ってな。結果として私が隊長になっているに過ぎん』

その時アクエリアスは、時間を気にかけている様子でケフェウスに話しかける。

『……ケフェウス様、そろそろ……』
『待てアクエリアス。まだ星河大吾が来ていない』

アクエリアスがケフェウスに囁き、ケフェウスは星河大吾。スバルの父親の名前を出した。

「え？　何で父さん？」
『そういや昨日何か話してたよな？』

スバルとウォーロックの疑問に、ケフェウスは意外そうな目で2人を見る。

『……大吾から聞いてないのか？　大吾も我々と一緒に行く事になっているのだ』
「『　全然聞いてない　』」
『……ケフェウス様、私達も聞いていません』
『……』

スバルとウォーロックは声をそろえて答え、アクエリアスからもジト目で見られ、イーグルもそのことを無言で訴えていた。
ケフェウスは4人の視線を受けて少し慌てながら答える。

『……む！？　まだ話してなかったか！？　実は昨日……』

――昨日・ＷＡＸＡ――

「……オレがケフェウスと一緒に宇宙へ！？」

さすがの大吾も驚いているようだ。ケフェウスや長官、ヨイリーもツバサの提案に驚き、暁は少し察しがついたような顔をしている。

ツバサは頷くと、その理由を説明した。

「大吾、あんたはたくさんの人を動かすだけの影響力を持っている。数ヶ月前スバルがメテオＧから帰還したのだって、あんたの呼び掛けがなかったら世界中の人が動くなんてありえなかっただろう」

「……たしかにオレはスバルを助けてくれるように世界中の人々に呼びかけたが、それに応えたのは地球に住まう人の意志によるものだ。オレじゃなくて、スバルやスバルの友だち。そして、地球に住まう者全ての人が起こした奇跡だろう」

大吾の謙遜（けんそん）を、ツバサは肩で笑う。

「冗談。そんな事が言えるあんただからこそ、世界は動いたんだ。……スバルは昔のまま優しく、そして何より強くなったが、その理由はあんたが残していった言葉や想いだ。もちろん、ミソラやルナ、ウォーロックといった友人のおかげってのもあるけどな」

ツバサが意志を宿した目で大吾を見る。長官もメテオＧの事を思い出しながら頷いた。

「たしかに、わたしも大吾くんの言葉が無ければスバル君の捜索を諦めていただろうな」

「そゆこと。……大吾には宇宙で仲間を集めて欲しい。ファイブ・エレメントに対して、数で言えばオレ達がはるかに劣る。……最後の決戦までに、戦力を集めておきたいからね」

つまり、数の差を補うために大吾に宇宙に行ってもらって、協力してくれそうな仲間を集めようと言うわけだ。

大吾はそれを理解するとすぐに頷いた。

「分かった。こっちの方はまかせてくれ。……君の方も、スバルを助ける仲間の一人としてあいつを助けてやってくれ」

『……っと、いうわけだ』

ケフェウスが昨日の事を話し終わったとき、ちょうど大吾の声が人垣の向こうから聞こえてくる。隊員や研究者が人の壁を作って、大吾はケフェウス達に近づけないようだ。

「お～い。道を空けてくれ～」

その声に大吾の近くに居た者は道を空けながら、自分の前の者に道を空けるように言い、少しすると大吾の前にまっすぐな道が開けた。

「いや～すまんすまん。あかねに説明していたんだが中々納得してくれなくてな」

大吾は、道を空けてくれた者達にお礼を言ってから遅れた理由を

話す。
　大吾の妻である星河あかねはとても家族想いな上、数年前大吾が行方不明になったショックが忘れられず、その時の事を思い出して大吾を引きとめようとした事は、十分に予想できる。
　アクエリアスは『やっとか……』という思いを声に込めながらケフェウスを見る。

『ケフェウス様、それではそろそろ本当に行きましょう。大吾さんも、宜しいですね？』

「俺はかまわない。……しかし……」
『真面目すぎるのではないか？　アクエリアス。お前ももう少し別れを惜しむなり……』

　大吾が言いかけたことをケフェウスが続ける。アクエリアスはあくまで平然ときっぱり言い放つ。

『今は任務中です。公私は分けるべきでしょう』
『ほんと相変わらずだな……。お前……』
『あなたのガサツさは直ったのですか？　ウォーロック』
『お前もそれか！！』

　その後もアクエリアスはスケジュールが迫っていると言いながらウォーロックと話しこみ、そのスキに委員長達はケフェウスの下に来た。

「あんまり話す機会がなかったけど、また来てね。ＦＭ王さん」
「今度来た時は僕達が地球を案内します。僕のマロ辞典に載っていないデータはありませんから」
「オレも、今度来た時は牛丼おごるぜ！」

「ゴンタ……お前ホントそればっかだな。……まぁ、元気でな。……おいツバサ、お前からも何か……って、いねぇし！！」

ルナ、キザマロ、ゴンタ、ジャックの順番でケフェウスに話しかけたのだが、ツバサがいない事にジャックは思わず突っ込んだ。ゴンタはレトルト牛丼を携帯しているが、量産された冷凍物より、店の人がお客さんの事を想って作った牛丼をご馳走したいらしい。

なお、アイリスとジョーカーもツバサがいなくなった事に気付かなかったらしく、２人は周りを見渡している。

暁は気軽な口調で……。

「トイレじゃないか？」

「……シドウ、あなたじゃないんだから」

クインティアのツッコミの後、ケフェウス達も探すのを手伝ってくれた。ちなみに、捜索を一番に申し出たのは以外にもアクエリアスだ。……案外寂しがり屋なのかもしれない。

――――ＷＡＸＡ・牢――――

人間には物理的な牢があるが、電波体の場合は電脳の中に閉じ込められる。ちなみに、その電波体の様子はホログラムを用いて、わざわざ電脳を覗かなくとも牢の中の電波体を見れるようにしてある。

一体の電波体は、牢の暗がりの中から外側にいる気配に話しかけた。

『……また愚痴でも言いに来たか？』

暗闇に包まれた気配は歩き、光の下に実像をなす。

「しみっぽい別れが嫌いだから来ただけだよ。……ゲンブ」

『……見送りか。そう言われてみれば、確かに大量の電波体がいるようじゃな。……ツバサよ。貴様は別れなどを気にしないように思えたがな』

ゲンブの言葉に、ツバサは愉快気に笑いを堪える。

ちなみに、普段ツバサはゲンブに愚痴を零しに来ている。愚痴の内容は主に、殺人的な仕事の量に対してだ。

「やっぱオレってそんなに薄情者に見えるのか？　呆れを通り越して笑えてくる」

『……別れと言えば、スザクがデリートされたようじゃな。……だが、今は存在している』

ある話題の時に自分から話をそらして独り言のように話す。これはどうやら、ゲンブ独特の質問の仕方らしい。つまりゲンブが問いたいのは、【　なぜスザクは戻ってこれたのか？　】ということだ。

ツバサは壁に背中を預けて腕を組んだ。表情は影に隠れて見えない。

「……お前らは他のウィザードと違う。【　デリートされて消える　】と言うより、【　戻る　】の方が正しいからな。消えるわけじゃない」

『戻るじゃと？　……何に？　……いやそれよりも、なぜ貴様がそのような事を……』

戸惑った様子のゲンブはツバサに問う。ツバサが闇の中で薄く笑

ったのが、気配で感じ取れる。

「お前がここに来た時やった検査の結果を見て、それからくる科学者としての勘……って言って、納得してくれねぇ？」

『……隠したい事があるならそう言わんか。貴様が物事をはぐらかす癖があるのは大体分かる。……そうじゃな。ワシをここから出してくれれば、これ以上その事を追求しない事にするが。……どうかな？』

ゲンブの試すような声にツバサは考え込む。なお、ゲンブとしては冗談のつもりで言った。つまり、ダメ元だ。

「取引か。……いいよ♪」

【　取引か。　】の後の緊張感に包まれた空気はどこへやら。軽い口調で答えたツバサに対し、ゲンブは唖然としている。どうやら考え込んでいたのではなく、考え込んでいたフリをしていたようだ。

『……貴様は何を考えている？』

ゲンブの問いに、ツバサはいつもの飄々とした態度で答える。

「いや～実はコクレンが今住んでいる国の近くが騒がしくなってきたって知り合いから連絡があってな。お前を戦力に数えようと思ったってわけ」

『……戦をやれ……というわけか。……ッ！！　まさか貴様、最初からそのつもりで……！！』

「何かと世話になってる国だから、無視もできないんでね♪」

それは、ゲンブの質問を肯定したのと同義だ。ツバサは抑えきれ

ずに「クックック」と笑い出し、ゲンブは『食えんヤツだ……』と呟いた。

ツバサは出口に手をかけて、止まる。

「あ～、言い忘れるとこだった。次に何か事を起こしたら、今度は容赦なく倒す事になるからな」

その後、牢に光が差し込み、扉が閉まる。

残されたのは、ゲンブの変わり身。外側だけを取り繕った偽物だけだった。

――――ＷＡＸＡ・廊下――――

スバルが廊下の角を曲がった時、その方向から探している人物が鼻歌交じりで歩いてきた。

「よぅスバル！　ケフェウスはもう行ったのか？」

「……ケフェウスならまだ居るよ。まったくもう、今までどこ行ってたの？」

「トイレにこもってた！」

スバルはヤレヤレと言った様子でツバサに聞いたのだが、平然としたツバサの返答に肩透かしを食らう。

ウォーロックは呆れたようなため息をついて実体化した。

『はぁ～。とりあえず見つけたから外に行くぞ。他の奴らへの連絡なら移動しながらでもできんだろ』

「あ～オレはしみっぽい別れは苦手で……」
『黙って来い』

再び逃げようとしたツバサをウォーロックが担ぎ、運送する。
よほどしみっぽい別れが嫌いらしく、ツバサはウォーロックの肩で足をバタつかせるが、ウォーロックはその足を簡単に避けていく。スバルはその様子をうっかり笑ってしまい、ツバサに思いっきり睨まれてしまった。

ちなみにツバサのハンターの中に居るゲンブは、外側からはもちろん、内側からも中身をチェック出来ない特殊なフォルダの中に入れられていたので、ウォーロックを始め、他の者に見破られる事はない。

――WAXA・外――

『おお、来たか。……なぜツバサは不機嫌そうなのだ？』
『オレの背中であんまりうるさくするから一発お見舞いされたからじゃねぇの？』

ケフェウスの問いにウォーロックはあっさりと答え、背中の荷物……もといツバサを下ろした。
ちなみに【　一発　】というのは、ウォーロックのゲンコツだろう。
ツバサはため息をついてケフェウスをチラリと見る。

「……しみっぽい別れは嫌いだから本来はどっかで隠れてるつもりだったんだが、こうなったら仕方ない。……ケフェウス、昨日頼ん

だ事任せたぞ。それと……元気でな」
『うむ。ツバサも元気で。……それでは、我々はそろそろ帰ることにする』

ケフェウスはツバサとの別れが済むと、親衛隊の集まる場所に向かう。一方、そばではスバル、ウォーロックと大吾の別れも交わされていた。
大吾は正面から、自分の息子を見据える。

「スバル、俺は宇宙で、俺のやるべき事をする。だからお前も……」
「うん。こんな僕でも信じてくれる人を……皆を護るよ。……だから安心して行って来て。父さん」

大吾は息子の言葉を聞くと、笑顔でスバルの頭に手を置いた。

「良く言った！　それでこそ俺の息子だ。……母さんや、お前の護りたいと思う人をちゃんと護ってやれ」
「分かった！」

スバルは力強く頷き、大吾はそれのお返しに力いっぱいスバルの頭をなでる。

「父さん痛い痛い！」
「ははははは！　……ウォーロック、スバルを頼んだぞ」
『オウ！　任せときな。大吾！』
「フッ、……それじゃあ、行って来る。必ず帰ってくるから安心するように母さんに伝えておいてくれ。家を出る時、まだ不安そうだったからな」

そう言いながら、大吾はケフェウスの元に向かう。

スバルが大吾の言葉にしっかりと頷くと、大吾は満足気な笑顔のまま、ケフェウスと共に宇宙へ飛んだ。
空に飛び行く幾筋（いくすじ）の光を見ながら、ツバサはボソッと呟く。
「（……誰かを見送るのは博士達を逃（に）がして以来か……。……帯広博士……レイ……）」
その呟きは弱々しく、どんなに近くに居ても聞き取れないだろう。
ツバサにとって、それに関連する記憶は良い思い出ではない。だから彼は言ったのだ。「しみっぽい別れは嫌だ」と……。

――――コダマタウン――――

ケフェウス達を見送ってスバル達がコダマタウンに戻ってきた時、ルナが思い出したようにスバルやミソラ、ゴンタとキザマロに向き合う。
「あ、1つい忘れてたわ。旅行の場所、変わったから」
「え!?　委員長どこだ!?」
ゴンタは明らかにショックそうな顔をしている。久々にアイに会えるという事で、よほど楽しみにしていたのだろう。
スバルやミソラ、キザマロはもちろんの事、ウィザード達も気になるらしく、スバル達の後ろで静かにしている。
ルナはみんなの注目が集まった所で、変更した旅行の計画を一同に見せる。
ウォーロックを始め、ウィザード達もスバル達の後ろからその紙を覗き込んだ。

「「「「『『『

第３８話　一時の別れ（後書き）

これで一区切りつきました～。次回からは海外を旅します。まずは北国シャーロ。展開的に委員長が何を見せたか分かりますよね？

――お知らせ――

・オリオンのデータをデータファイルに追加しました。それと、データファイルで電波体の【　フォルテ　】の欄の、ＰＧＭの相関図を訂正しました。

・ｘｘｘＨＯＬＩＣの用語集は載せ終わりました。別に連載している『明日へ：データファイル』の『ｘｘｘＨＯＬＩＣ　用語集』をご覧ください。今のところのラインナップは、【　蟲（コ）　】、【　猿の手　】の二つです。

・次回の更新は２５日です。

第３９話　キングの過去（前書き）

本来は3日に一回の更新なのですが、先程あらすじやらタイトルやら色々といじったので、お詫びに次の話を更新します。なお、次回の更新は変わらず２５日です。

第３９話　キングの過去

――――空港――――

夏休みに入り、ツバサは各地の結界を張り直すために旅行カバンを持って空港にいる。
アイリスとジョーカーには留守番してもらうつもりだ。

「さ～てと、ぶらり一人旅と行きましょうか」

ツバサはそう言うと、搭乗ゲートに向かって歩き出す。
だが、後ろからアイリスとジョーカーが最後の確認をしてきた。

『……本当に一人でいいの？　私とジョーカーも一緒に行くつもりだったんだけど』
『……スバル達の前で言っていた護衛の話はどうした？』

アイリスとジョーカーの確認にツバサは首から上だけを2人に向けた。荷物が重いので体ごと向くのは億劫なのだろう。

「大丈夫だよジョーカー。オレこれでもケンカ強いからね。……スバル達には、【　お前が護衛に付く　】って言うしか納得してもらえなかっただろうからな」
『でも……』
「お前らがニホンを離れたら大きく戦力が落ちる。ジョーカーは戦闘のプロと呼べるほどの実力を持ってるし。アイリスだって、サポートとしてここまで適任な者はいない」

アイリスの言葉を遮り、ツバサは2人をニホンに置いておくもっとも大きい理由を話す。アイリスとジョーカーは顔を見合わせて、仕方がないと言わんばかりにため息をついたが、なんとか納得してくれた様子だ。

ツバサは2人が納得したのを見て再び歩き出す。だが、また声に止められる。

「お待ちなさい！」

こうも一方的な命令と高い声で命令する人はそうはない。

ツバサ、アイリス、ジョーカーが「まさか……」と思いながら後ろを向く。特にツバサは、「悪い予感が当たらないでくれ！！」という気持ちが顔にも出ていた。

そこに居たのは、言わずとしれた委員長トリオにスバル、ミソラ、ジャック、さらには暁にクインティアまでいる。もちろん、彼らのウィザードもいることだろう。

ルナ以外の子供達は不本意というのが顔に表れている。犯罪者が集まる国にも行くというのだから、そのリアクションは当然だろう。

ツバサは、自分達に付いて来ようとするスバル達を確認するなりため息をつく。そして、ドスドスと荒々しくスバルを始めとした電波変換メンバーに詰め寄った。

「お前らさぁ……自分達がニホンを、いや、世界を護れるだけの力を持ってるのを分かってんのか？　もしお前らがこの国を離れてそのスキにＷＡＸＡ日本支部が攻撃されたら、瞬く間に壊滅するぞ。大体、ルナたちはヤエバリゾートに行くんじゃなかったか？」

怒っているにしては口調が穏やかだ。もしかしたら、単純に荷物

が重いからさっきの様な歩き方になったのかもしれない。まぁ、実際の所、少しは怒っていたのだろうが……。

目の前で呆れと疲れ、怒りが混ざった顔をしているツバサの質問に対し、ルナは自分達に問われた事に答えた。

「私は皆で旅行に行きたいの。今回は特別に意見を譲ってあげたのよ？

まぁ、今日の飛行機を全て欠航にする事も出来るといえば出来るんだけど、それだと沢山の人達に迷惑がかかるからそれは無しにしたわ。……その代わり、旅行中何かあったら全てあなたのせいになるようにサテラポリスの権限をお借りして法的な手続きをしてきたからそのつもりで」

ルナの両親はやり手の実業家で金を大量に所有しているので、飛行機を欠航にするぐらい訳はないだろう。……問題はそこではない様な気もするが、あえて突っ込まないようにしよう。

ルナの言葉を聞いてゲンナリとしたツバサが暁たちが居る理由を聞くと、暁とクインティアは少し照れた様子で答える。

「いや～普段オレたちの仕事って忙しいじゃん？　このままだと、その……クインティアと旅行に行く機会もあんまりなさそうだから、お前の旅行にジャック達がついて行くって聞いていい機会だな～っと……」

「……ようするに、ルナたちとグルになって【　ツバサの旅行にスバル達が付いていくので、その子守です　】と長官達に言って、実際はクインティアと少し早いがハネムーン気分を味わいましょう。……ってことか？」

ツバサのまとめ方が正しかったかどうかは、暁とクインティアの照れたような顔で分かる。
本来なら、「お前らが一斉にこの国を離れたら誰がどうやって日本支部を護るんだ」と、言いたい所だが、腕に圧し掛かる荷物の重さと呆れで、彼から反論する気力を奪っていた。
ツバサには最悪な事に、さらに旅の同行者が現れる。

『ほら！　ソラ急いで！　置いていかれちゃうよ！』
「そんなこと言っても……っていうかスザクも何か持ちなさいよ！　重いんだからね！　これ！！」

ソラとスザクだ。
元々一人で行くつもりだったツバサにとって、これほど旅の同行者が増える事は計算外以外のなんでもない。
ツバサは、彼らを帰す事を諦めて項垂れた。アイリスとジョーカーはツバサの肩に同情の気持ちを込めて手を置いく。
そしてツバサは、内心で呟いた。

（……今日は厄日か……）

――――シャーロ――――

シャーロは北国。よって、例に漏れず……。

「……寒い」

いちおう防寒具を用意していたとはいえ、スバル達にはこたえるようだ。さらに都合の悪い事に、シャーロに着いたのは夜だ。太陽

の暖かさはまったく無い。
　ツバサも寒い事には変わらないようだが、それよりも懐かしさの方が勝っていた。

「……キングと出逢った国か……」

　ツバサの呟きを目ざとく、いや、耳ざとく聞こえたミソラは、手の平で上腕を擦りながら聞き返す。

「ふぇ？　キ、キングと　で、出逢った国って？」

　寒さのためだろう。言葉が所々震えている。

「……そういえばまだ話してなかったな。キングとオレの関係。……ホテルまで距離もあるし、道すがら話すかな」

　そう言うとツバサは歩き出した。スバル達が追いついたのを見てからツバサは語りだす。

――――回想・シャーロ――――

［　あれは大体、２５年ぐらい前だったかな　］

「オイ坊主、その服からして旅行客だろ？　俺たちギャンブルでお金使い果たしちゃってさ～。両親にお願いしてお金もらって来てよ～」

働き盛りの良い男性3名が、昼間にも関わらずお酒の匂いを漂わせながらツバサに近づく。
ツバサはその要求をハッキリ拒絶した。

「やだ。そもそも両親なんていねぇし」
「チッ！　だったらお前から奪えるだけ奪ってやるぜ!!」

相手は3人。その場所の地形、自分の運動能力、その他の要素も考慮に入れて、ツバサは足と手に溜めをつくる。
しかし、互いの拳がぶつかり合う前に人の声が邪魔をした。

「こっちです！　こっちで子供が襲われてます!」

その声に不良は逃げ出し、代わりにやって来たのは２０代前半の男性。
身なりで分かる。この男は純粋すぎるほどに優しい。だが、彼が呼んだであろう警察がまだ来ない。
ツバサの疑問に気付いたのか、青年はクスクスと笑いながら自己紹介を含めて説明した。

「ああ、警察も来ると思ったかい？　残念ながら、あれは私のウソだよ。彼らを追い払うのに本物の警察を呼ぶのも大げさかと思ってね。
わたしはキングだ。この国には技術研修生として来ている。……ケガは無いかい？　この辺は子供が一人で歩くと危ない。すぐにお家に帰りなさい」
「帰るの何も、家がないし」（……この国には）

その言葉で何を勘違いしたのか、目の前の男性は自分の家に来いと言い出した。それも、半ば強引に腕を引っ張って。

――――アパート――――

「……はぁ～」（どうすっかな～。この状況）

ツバサの嘆息をまたも勘違いしたらしく、キングが調理場から声をかけてきた。

「大丈夫だよ。ここを自分の家だと思っていいから。……おっと！」

ジュー！！

「あつつつつ！」

……どうやら油が跳ねて調理人を傷つけているらしい。ツバサはここに来て2回目のため息と共に手伝いに行った。

料理も何とかできあがり、2人は夕食をとる。キングは肉（　焼き加減はミディアム　）を口に運びながら、ツバサを見てきた。

「……なんかよう？」

ツバサのぶっきらぼうな問いに対し、キングはナイフを置く。

「いや、孤児院から抜け出した子の割りに料理が美味しいなっと思ってね」

「んっ！！　ゲホ！　ゴホ！　こ、孤児院！？　オレが！？」

むせたツバサの背を擦りながら、キングは意外そうに話しかけてくる。

「違うのか？　キミ位の歳の子が家が無いといったら孤児院が嫌になって抜け出したのかと……」

「一人旅行みたいなもんだよ」（まったく、何を誤解したと思ったら！　……ん？　あの本は……）

ツバサの視線を追ったキングがそれを見たとき、自嘲的な笑みを浮かべた。

「ああ、あの本か。……わたしもこう見えてノイズを研究する科学者でね。ノイズが持つ力を研究しているんだが、あんまり上手くいってないんだよ」

「……ノイズは研究材料としてデタラメだからな。……今試している装置の出力ってどのぐらい？」

「ん？　なぜそんな事を？」

「誤解があったとはいえ一飯の恩がある。それに、オレはあんたが気に入った。研究を協力するよ」

「最初は驚き、疑っていたキングも、自分が試しに出した物理問題をオレが全問正解で答えると、手を握ってきてお礼を言ってきた」

「僕達の知ってるキングと違いすぎるね。暁さんの頃はどうだったんですか？」

スバルの質問に暁は首をかしげて唸りながらスバルの方を向く。

［ う〜ん。オレが来た時はもうキングはお前達が知ってるキングになってたな……。］
［ わたし達の時もそうよ ］

暁の記憶をクインティアが肯定し、ツバサは心なしか悲しげな笑みを浮かべて続きを話し始めた。

キングがツバサと出逢ってから2年の月日が流れ、キングは自らの打ち出した理論が認められて世界的な科学者の仲間入りをした。ヨイリー博士に顔と名前を覚えられたのもそのときだろう。

そんなある日の事。キングが研究所から自分のアパートに戻ってきた時、自室のドアの前に少女がいた。淡い茶髪に緑の瞳。蝶を模した髪留めをしている。

少女はキングに気付くと声をかけてきた。

『この家に、黒髪の子がいますね？』
「あ、ああ。居るが、君はいったい……」
『私は彼を迎えに来ました。……鍵を開けてもらいたいのですが……』

キングは戸惑いながらも鍵を開ける。

防犯上、ツバサが居ても鍵はかけているのだ。無論軟禁というわけでもなく、もう一つの鍵をツバサに預けているので、彼はいつでも外に出られる。

ドアが開くなり、アイリスは『おじゃまします』と言って、スタスタと家の中に入っていった。その直後、ツバサの慌てたような声が響く。

「うわぁ！？　ア、アイリス！　お前なんでここに！？」
『……キングさんの発表した論文が、ツバサの部屋にあった資料と良く似てたから。……さぁ、帰ろう？』
「え～まだ夕飯が……」
『ツバサ！！』

ツバサは夕飯のために家に残ろうとし、アイリスはキングにこれ以上迷惑をかけさせないように、それぞれ別々の方向へ引っ張り合う。

「……まだ状況が読み込めていないんだが、キミはつまり、師匠（せんせい）を連れ戻しに来た……と？」

キングは依然戸惑っている様子だが、先程の会話から来る事実を確認する。アイリスは引っ張っていたツバサの手を離し、キングに向き合って頭を下げる。
なお、ツバサは手を離された反動で後ろにずっこけた。

『長い間ご迷惑をおかけしました。ツバサは今から連れ帰ります。……それにしても、ツバサが誰かに自分の研究を教えるなんて……』

アイリスの意外そうな目に、ツバサは後頭部を擦りながらため息をつく。

「……オレは立場上発表できないからな。部屋の中でくすぶってるより、世の中に出た方が幸せだろうよ。……理論側としては……な」
「？　理論側？　師匠、それはどういう……」

その時、キングとアイリスが来るまでツバサが見ていた番組がニ

ュースに切り替わる。

「臨時ニュースです。中東の反政府ゲリラの拠点にミサイルが落下。その場に居たゲリラ７６名。民間人１０名が巻き込まれて、合わせて死者７９名。重軽傷者7名という被害が出ました。これがその時の映像です」

出された映像を見てキングは絶句した。なぜならその燃焼反応は、自分の研究の副産物として生まれたモノと酷似していたからだ。

キングは戻ってきた直後にも関わらず、自分のコートを掴んで玄関に向かう。だが、思い出したように立ち止まり、ツバサとアイリスを見た。

「研究所に行ってくる。アイリスといったね。キミも良かったら食べていくと良い。師匠に教わってよりいっそう上手くなったんだよ？　……それじゃあ、戸締りとガスに気をつけてね！」

語尾が【　！　】だったのは、途中で走り始めていたからだ。

アイリスは静かにツバサを見る。ツバサはその視線の意味を察し、あくまで平常に見せようと肩を竦めた。

「だから言ったろ？　理論側は喜ぶって」

『……こうなる事を知ってたの？』

「いくら【人のために、世のために】と技術や発明をしても、それをどう使うかはその人間次第。

作った奴の意向とは関係無しに、それは世界に送り出される。……時に望んだ形として。時に望まぬ形として……な」

科学者や開発者とは、己の研究や発明で人が傷つき、死ぬのを覚悟しなければならない。そして、死んだ者を大事に想っていた者から復讐される事も、覚悟する必要がある。

それが、生み出した者の責任。……それが、科学者が味わうであろう苦悩である。

『知ってたなら、何でキングさんに教えたの！』

アイリスは、まだ逢って間もないキングの純粋で優しい人柄を見抜き、彼がこの先歩むであろう【 科学者としての苦悩 】のきっかけを与えたツバサを怒っている。

ツバサは俯いて玄関に歩き出した。

「……あいつに今日、科学者の背負う苦悩を教えるつもりだった。……こうなったら、キングがこの世界への憎しみに目覚めない事を願うしかない。……自分の中の憎しみは、自分の力で勝たないといけないからな」

ツバサは冷淡ともとれる言葉を吐きながら、アイリスのそばをすれ違う。しかし、その時の声は震えていた。

彼も苦しんでいるのだ。キングの人格は誰よりもツバサが分かってる。優しいキングだからこそ、自分の技術を渡しても良いと思えたのだろう。だからこその苦しみ。

……それと同時に、キングを信じているのだ。彼なら、己の中の闇に飲み込まれないと……。

アイリスはそれが解(わか)ったから、これ以上ツバサに言及しなかった。

2人はキングの家から逃げ出した。鍵とガスをチェックして夕飯を作り、謝罪の手紙を残して……。

――回想終わり――

「……その後、キングは研究所を解雇された。……都合の悪い部分に触れられたからハイサヨナラーって所だろうな」

ツバサは気軽な口調で言っているが、どこか無理をしている感がある。

『……毎回思うんだが、お前の話を聞いてると人間に対してコノヤローって感情が生まれるんだが……』

「僕もだよウォーロック。……解雇された後はどうしたの？」

スバルとウォーロックのうんざりした様な声に、ツバサは首だけ振り向く。

「どうもこうも、『いつまでも過ちを繰り返すこの世と人間の愚かさを悟った～』とかで人類支配計画を考案。それがお前らが知ってる【　メテオGを用いた計画　】って事だ。……オレがあそこで逃げなければ、ここまで酷くはならなかったかな……」

ツバサが自嘲的な笑みを浮かべている時に、クインティアは追い討ちをかける。

「……それじゃあ、キングのせいで死んだ子供達は、本当はあなたのせいで死んだって事ね。元を作ったのはあなたなのだから」

キングは科学者であり事業家だった。

表向きは身寄りの無い子供達を引き取って育てる偉大な人物。しかし裏では、その子供達の中から優秀な子を選んで【ディーラー】の構成員にしたてあげ、危ない仕事をやらせていた。その結果たくさんの子供達が死んでいった。暁やクインティア、ジャックも、かつてはその中にいたのである。

暁は、うな垂れたツバサを見かねてクインティアに注意する。

「ティア、少しは容赦ってもんを……」

ツバサは暁のフォローを自身の言葉で制す。

「別にフォローしなくて良いよ、暁。……オレがキングを変えるきっかけを与えた事に違いはない。……この話はこの位で終わりだな。そろそろホテルに着く頃だ」

見えてきたホテルはネオンに照らされ、昼とは違う顔を映し出す。スバル達はチェックインを済ましてそれぞれバラバラな部屋へ行く。ツバサは前々から予約していたが、その他は急だったのでバラバラな部屋割りとなったのだ。

スバルが部屋のベッドに腰を下ろしたとき、自分のハンターにメールが届く。ツバサからで、ここの滞在は今日を入れて2日だそうだ。

「2日かー……」

ぼんやり呟くスバルの耳に、ドアをノックする音が入ってくる。

「ハーイ」（それぞれ別々になって暇だから。とかそんな理由で、委員長たちが来たのかな？）

スバルの返事に応えるようにドアは開き、現れたのは……。

「スバル君お待たせー！」

「ミソラちゃん!?　な、何で!?　ここ……ベッドが2つある」

疲れからだろうか。ベッドが2つある事に今さっき気付いた。…

…そういえば先程の部屋割り、疲れで自分の部屋番号しか聞いていな

なかった気がする。

そもそも自分達は急な予約なので、ホテル側がスバル達のために

一人部屋を多く用意してくれる事はまず無いだろう。

そうなれば、ミソラがスバルの泊まる部屋に来た理由は一つ。

「ま、まさかミソラちゃん……。僕の部屋に……？」

「うん！　……あ、前みたいに潜り込むってのは無いから安心して

♪」（ソラさん、部屋を譲ってくれてありがとー♪）

第３９話　キングの過去（後書き）

キングの過去はもちろん僕の想像です。流星３でヨイリー博士が、「キングも昔は優秀な科学者だった」っていうのを見て、彼が変わった理由を自分なりに考えてみました。

感想・評価・誹謗問わず、話の感想お待ちしています。

第４０話　見えない羽（前書き）

諸事情で一日早く更新します。なお、戦闘を急きょ2話に分けたので、本来３９話に出てくるはずだった人物は４０話に出てきます。ご迷惑をおかけします。なお、４０話も明日（２５日）に更新します。３０話台後半で出てくると言った以上、それは出来なくとも、せめて同じ日に更新しようと思いましてね。

前書きが長くなりましたが、お楽しみ頂ければ幸いです。あらすじとして、ソラがミソラに部屋を譲りました。

第４０話　見えない羽

――――ツバサの部屋――――

「ふぅ～ん。それでスバルの部屋にミソラがねぇ」
「うん。私がスバル君といるより、彼女の方が良いと思って」

ツバサは部屋にあった机のイスに座りながら、部屋の反対側のベッドに座っているソラの話を聞いていた。
ちなみにアイリスとスザクは女の子同士で夜景を見に、ジョーカーはまたもツバサに酒を頼まれて一階の売店に行っているので、今部屋にいるのはツバサとソラだけである。
ツバサは机に頬杖をつきながら、スバルの特性を考えた。

「確かにスバルにとって、お前は年上で、さらには見た目も良いから真っ赤になって上がっちまうだろうからな。ミソラ辺りが丁度いいか。……あん時みたいなことは起きないだろうし……」
「あん時って？」

ツバサが最後に呟いた事に、ソラは興味津々といったようなキラキラした目で聞いてくる。ツバサはヤレヤレといった様子で、スバルのベッドにミソラが潜り込んだ事を話した。
ソラは聞き終わると腕を組んで頷く。だが、その顔は明らかに楽しんでいる。

「ほうほう。あの２人にそんな事がねぇ……。それは面白……もとい大変な事をしちゃったかな～？」
「……今さらっと本音が聞こえたし、やたらと楽しそうだなオイ…

…」

「まぁね～。他人の色恋にはなんとやらだよツバサ君♪　……話は変わるんだけどさ」

楽しそうなソラの顔が、少し真剣な顔になる。ツバサは呆れていた顔を直し、ソラと向き合う。

「どうした？」

「うん……。キミって何者？」

「……それはどういった意味で？」

ツバサは隠し事が多すぎる。その上その隠し事は多岐に渡っているので、「何者？」という漠然とした問いでは、どれの事かが分からないのだ。

ソラは気持ちを落ち着かせるように目をつぶり、息を吸ってから話した。

「さっきのキングの昔話を聞く限り、キミってずいぶん長生きだな～。って話。……なんでそんな昔の事を知ってるの？」

どうやらツバサの長生きの理由らしい。

ホテルに向かう途中でツバサにそれを聞かなかったのは、彼女自身他人が話している時に割り込まないように周りから躾（しつけ）られたからだろう。

ツバサはため息をついた後、自身が研究所の人体実験にあったこと。そこからデューオに助けられて今の体となり、数年後に帯広博士と出逢った事……。

スバル達に話した事をソラにも話した。ソラは静かに聞き、ツバサの話を遮る事も無かった。

「……って所かな」
「そっか……。やっぱり私達、似てたんだね……」
「みたいだな」

ツバサの素っ気ない返事。
ソラはその様子を見て何を思ったのか、静かにツバサの近くに歩いてきて彼の頭をなでる。

「……何だよ？」

正直ツバサにとっては照れくさい。
ソラはいつもの快活な笑みではなく、優しい笑みを浮かべながらツバサの顔を見てくる。

「キミって大変な目に遭ってたみたいだから、頑張った子にはやっぱりこれでしょ？」
「……オレは【　子　】に該当するのか？　これでもかなり長生きなんだが……」

ツバサがふてくされている様子を、ソラがクスクスと笑う。何となく居心地が悪くなったのか、ツバサは話を逸らした。

「そういやよ、何でお前がオレの部屋に？　いやそもそも、何でオレの旅について来る？」

彼女がニホンの空港に乱入してきた時、ツバサは持っている荷物に聞く力も何もかも奪われたせいで彼女が旅についてきた理由を聞けなかったのだ。
ソラはツバサを撫でている腕とは反対の腕で、自分のあごに人差し指を立てる。おまけに眉もひそめて考えている様子だ。

「う〜ん。……君の部屋に来たのは君の長生きの理由を聞くためで、私がこの旅行に付いて来たのは勉強のためかな？」
「勉強？」（……オレとしては、頭を撫でるのを止めて欲しいんだが……）
「それがね〜……」
ソラは、ツバサの内心の声を無視して話し始めた。

――――回想・旅館うらかわ――――

「えっ！？　行っていいの！？」
ダメもとで女将に頼んでみたのだが、まさか許可が下りるとは思っていなかった。それも、女将は案外乗り気らしく、好機嫌ですらある。
「ええ。実は、世界のホテルでどういうサービスをしているのか知りたかったのよ。　そしてこの旅館の、【　自然との調和　】っていう特色を崩さない範囲で良い所を取り入れようと思ってるの。
……それに、スザクが来てからあなたは変わったわ。前より自分の大事な人を気遣う心が強まった。良い所はとことん伸ばすべきよ。そのためにも、行って来なさい」
「じゃあ、本当に……」
ソラの期待の眼差しに女将はにっこりと笑う。

「行ってきていいわよ。……ただし、帰ったら向こうにどういうのがあったか報告して、仕事もちゃんとする事！　……いい？」
「うん！　ありがとう！　女将！」

――回想終わり――

「……ってわけ」
「へぇ～。そりゃ仕事熱心な事で。　……ソラ。念のために聞くが、旅費とかを全てオレにたかろうってわけじゃねぇよな？」
ツバサにとって今日は厄日。もしやと思い聞いてみたのだが、ソラはにっこり笑って首をかしげてみせた。
「もちろんそのつもりだよ？」
「笑顔で言うんじゃねぇ――――！！」

いきり立つツバサからソラは少し離れて、いつでも逃げられる体勢をとる。顔は依然として笑顔のままだ。

「あはははは！　鬼さんこちら、手のなる方へ～」
「ふざけんな――――！！」
「おっ！　変な物発見！　何これ？」

ソラは逃げながらツバサのカバンの中にあるラグビーボールのような物を取り出した。

その物体の色は、上下の2割が黄色で、真ん中6割は透明である。

「人の荷物勝手にあさるんじゃねぇ――――！！！」

ツバサはラグビーボールのような物をソラから奪い返し、対するソラは再び逃げる。

そうして、部屋の中で追いかけっこが開始された。

その頃部屋の外では……。

『いつ入ろっか……？』

『……以前に、止めなくて良いのか？』

『イザと言う時は誰かの部屋に行きましょう』

スザク、ジョーカー、アイリスの順でそんな事を言っている。実は3人ともとっくに戻っていたが、入りにくい雰囲気だったために部屋に入れなかったのだ。

――――某ビル・屋外の非常階段――――

追いかけっこをしているツバサとソラを見ているのは、ライフルのレンズ。

ライフルを構えている男性は怪訝そうに隣にいる電波体に話しかけた。

電波体は人型で、装甲は灰色に青を混ぜた色をしている。体から

出る電波は水色だ。右腕にはライフルが装備されており、遠距離戦向けなのが伺わせる。左腕には分厚い装甲と仕込み剣があり、接近されてもそれ相応に対応できるだろう。

「ポラリス、本当にあんなヤツが各国の秘密を握ってんのか？　どう見てもただのガキじゃねぇか」

『……依頼主の言う事にはそうらしい』

「……へん！　ややこしい事はどうでも良い。オレは撃つぜ！？　最近、人を撃ちたくて撃ちたくてたまらねぇんだ」

男の口元は月の光に当てられて不気味に歪む。ポラリスと呼ばれた電波体は、そのおぞましい者を意識的に自分の視界から遠ざけた。

男は再びライフルを構える。男の背中には、月の光に照らされても影に映らず、ポラリスにも見えない羽が存在していた。

――ツバサの部屋――

「待てやこら――――！！」

「よっと……はい！　ハズレー」

依然としてソラとツバサが追いかけっこをしているのだが、ツバサは未だソラを捕まえられずにいた。それというのも、ソラの逃げ足の速さと、運動神経が異常に高い事に他ならない。

机に足をかけてジャンプ。そのままツバサの頭を踏み越えて部屋の反対側へ跳んだりと、一言で言えば人間技を超えている。

互いにまだ体力には余裕があるようだが、不意にツバサの口から疑問が吐き出される。

「なんでそんな動けんだよ！？　お前は新体操選手か！」
「ふっふっふ～。山育ちは足が強いのだ！」
「なるほど……」（そんな無茶苦茶な理由があるか。……こいつはもしかしたら正真正銘のアホであり天然なのかもしれない……）

ツバサが納得している一瞬のスキに、ソラはツバサにケリをお見舞いした。

「ハイ！　スキあり！」
「ガッ！？　てめっ！　女としてケリは無いだろ！　ケリは！！
……ぐえっ！」

ソラのケリを受けてベッドにうつ伏せに倒れたツバサに対し、ソラは彼に乗っかる。文字通り『尻に敷かれている』わけだ。

「あ～疲れた。一休み、一休み♪」

ソラはツバサの上で手の平をうちわの様に使って自身に風を送る。一方ツバサは、少女にケリ倒されて、さらには敷かれている自分自身とその状況に、怒りと屈辱を感じていた。

「だからって人の上で休むな……」

ソラはいたって元気な笑顔のまま、予想だにしていなかった返事を返す。

「元気出たみたいだね」
「はっ？」

ソラは「ふふっ」と笑って自分の膝(ひざ)に頬杖をつき、ツバサと目を合わせる。

「キングの事を話してる時、キミ辛そうだったからさ。挑発して怒らせて、鬼ごっことかすれば、君の元気が戻ってくるんじゃないかと思ってね♪」

「……」（たしかに今思い返してみると、面白かったかもな。……鬼ごっこ。……ッ！！！）

突如突き刺さる殺気。例えどれ程離れていても、狙う者とは獲物を仕留める時に殺気を出すものだ。そして獲物とは、自身を狙う殺気には一番に対応できる。

「どけソラ！！」

「へ！？」

「おそ……いっと！！」

遠くのビルから来る殺気を感じたツバサは体の角度を変えることでソラを自分の上から落とし、自分も起き上がる。

パリンッ！

その刹那、窓は割れ、自分の頭があった場所に銃弾が突き刺さる。羽毛は散り、ツバサの集中力を削ごうとするが、それでもその黒い双眸は狙ってきたと思われる場所を見据え続ける。

「いたた……なんなの一体……？」

ソラはベッドからも落ちたらしい。腰を擦りながらツバサに文句を言おうとベッドの上に顔を出そうとする。しかし、ツバサの声がそれを止めた。

「顔を出すな。ハンターで誰か……暁を呼べ」

スバルを呼ぼうと思ったが、彼は暁ほどこの手の経験はないだろう。

おまけに暁には、現代において最高峰の分析力を誇るアシッドもいる。犯人の居場所を割り出し、電波変換すればあっという間に捕らえる事ができるだろう。

ソラは、いつもは聞かないツバサの低い声と、彼の眼光にやや怯えた様子で頷き、自身のハンターを操作する。

しかし……。

『さっきのは何の音!?』

そう言いながらアイリスとスザク、ジョーカーが部屋に入ってきた。窓が割れる音を聞いて、部屋の異変に気付いたのだろう。

ツバサは思わず舌打ちをする。状況を把握できていない者は、戦闘において足手まといにしかならない。

パリンッ！

『ッ！！』

「アイリスちゃんっ！！」

2発目の銃弾はアイリスの額に当たり、彼女は後ろに倒れ、途中で【 アイリス 】から【 コピーロイド 】の姿に変わった。
ジョーカーは異変の詳細を察し、スザクをドアの陰に隠れさせる。

「アイリスなら大丈夫だ！　だから行くな！」

ツバサは後ろ跳びでベッドの陰に隠れ、ソラを止める。今アイリスのコピーロイドの元に行けば、格好の的となるだろう。
ソラはそれでも涙目でコピーロイドに手を伸ばす。

「でもっ……！」
『私なら大丈夫よ。ソラさん』

アイリスの声だ。それは、ツバサのハンターの中から響いてくる。
ツバサは外の警戒を怠らずに自分のハンターをソラに渡す。アイリスと話をさせて、ソラを安心させるためだ。

『……心配かけたみたいね。ごめんなさい』
「うん。でもっ、無事で良かった……」

ソラは嬉し涙を浮かべる。それと共に気持ちが落ち着いたようなので、ツバサはジョーカーに犯人を見つけたら自分や暁に連絡するように指示した後、ソラにアイリスが無事だった理由を話した。

「以前、アイリスが【 ドッグ・ツイン 】の攻撃で負傷した時な。コピーロイドの機能停止、または活動に支障をきたすダメージを受けた時に、アイリスを自動でオレのハンターに転送するようにコピーロイドを改造しておいたんだ」

――スナイパー側――

「チッ！　気付かれたか！　警戒が厳しくなりやがった！」

『……その上、建物などの電脳に隠れながら俺たちの元に近づいて来るヤツがいる。相当な手練(てだれ)だ。引いた方が良いだろう』

「嫌だね！　オレは撃ちたいんだ！　この手で、一人でも多くの人間を撃ちたい！！」

ポラリスの忠告を無視した人間に対し、ポラリスは黙り込む。

『……』《俺がこいつと出逢った頃は、こんなヤツじゃなかった……》

ポラリスの脳裏に、その男と出逢った頃がよぎる。

――約２ヶ月前――

『お前の波長と俺の波長は合っている。我らに協力しろ』

ポラリスは、自分の右腕に装備されているライフルの銃口を男に向ける。

男は３０代で体格が良く、趣味かどうかは分からないが迷彩服を着ている。一方男は、ポラリスに銃を向けられているにも関わらず、

平然としながら自分の銃の手入れをしている。
ポラリスはため息を抑えて男に問う。
『……聞いているのか？』
「じゃあ聞くけどよ。何をしようってんだ？」
男はポラリスの顔を見ずに聞いてくる。
『悪しき人間を根絶やしにする。……俺やオリオンに交渉しに来たヤツはそう言っていた』《……もっとも、あの少年は下の者達に対しては【 人類を滅ぼして電波体が地球を支配する 】などと別の事を言っていたようだがな……。あいつの目的は何が『本当』なのだ？》
ポラリスが思考に耽っている時、男はようやくポラリスの方を向いた。
「くっくっく……。人間を滅ぼすのに、人間である俺に頼むか普通？」
『お前の事はここに来る前に調べている。お前は依頼者を問わないスナイパーらしいな。依頼者が子供だろうと金が無くとも殺しを請け負う。そして、必要以上の者を殺さない。……違うか？』
「ほ～う。良くそこまで調べたもんだ。
……俺は人の依頼で人を殺す。殺されたヤツの恨みや遺族の憎しみを、依頼してきたヤツの代わりに背負う。だから俺は、自分の殺す相手は忘れねぇ。殺したヤツのこれから起きるであろう幸せや不幸せを、俺が摘み取っちまうんだからな。
……忘れねぇ事が、せめてもの手向(たむ)けだ」

男のやっている事は、他人の恨みを自分が背負う事。その中で、死者に礼儀を尽くしている。そして、必要以上の者を殺さないと言う事は、自分が殺したという事実を背負い、向き合いながらも人格が壊れていない事を意味する。

『……だからこそ、さっき言っただろう？　波長が合うと。俺も必要以上の者を殺すのはポリシーに反する。殺すのはターゲットだけと、決めているからな』

男は再び自分のライフルに目をやり、興味が無いという風を装って答えた。

「……組織としてではなく、お前個人となら組んでもいいぜ」

『フッ。俺もその方が性に合っている。よろしくな、ガンズ』

2人はこうして手を組んだ。

この頃の男は、自分の腕に自信を持ちつつ、それに自惚れて『誰かを撃ちたい』という衝動に飲まれることはなく、『自分』を持っていた。

――――今――――

しかし……今はもうその面影すらない。一体男に何が起きたのだろう……？

『近づいて来る電波体の量が増えた。おそらくここが嗅ぎつかれたのだろう。もう、逃げられる距離じゃない……』

ポラリスの忠告に、ガンズは鼻で笑う。

「上等だ。まとめて血祭りに上げてやるぜ！」

背中の羽は、天使の羽を思わせるほどに大きくなっていく。まるで、男が狂っていくのを喜ぶように……。

第４０話　見えない羽（後書き）

ガンズとポラリスのデータを追加しました。『ｘｘｘＨＯＬＩＣ』の用語集にも訂正点があったので直しました。『猿の手』の欄で、教授に「お前が盗んだのではないか？」と疑われたのは、『やたの鏡』ではなく、『レポート用の資料』です。重ね重ねご迷惑をおかけします。

第４１話　ポラリス・スナイパー（前書き）

今回の戦闘は格段に長いので急きょ２話に分けました。よってこの話は前編です。

第41話　ポラリス・スナイパー

――ビル――

ガンズとポラリスの前（反対側のビルの屋上）には、暁とアシッドが電波変換したアシッド・エース。クインティアとヴァルゴが電波変換したクイーン・ヴァルゴ。ジャックとコーヴァスが電波変換したジャック・コーヴァス。そして、ファイナライズしたグレイブ・ジョーカーが集まる。

ジョーカーがガンズとポラリスの位置を掴んだ後暁やツバサに連絡して、暁ことアシッド・エースが率いてきたと言う事だ。

なお、ツバサとソラ、スザクはアイリスのコピーロイドを治しながら伏兵を警戒してホテルに残る。ルナ、キザマロ、ゴンタもツバサの部屋に集まった。バラバラな部屋に居ると、護れるものも護れなくなるからだ。

一方、スバルとミソラはというと……。

「……」（う、動けない……。ミソラちゃん、いい加減離して……）

ミソラは黄色いハートに羽をつけた抱きまくらを抱いて寝ているとは聞いたことがあるが、どうやら抱きまくらと間違えてスバルを抱いているらしい。おかげでスバルは異変に気付けても部屋から出られないという状態だ。

無論、ミソラにその気があった訳でもない。スバルが仮眠と称し

て寝ている顔を見て、自分も眠くなってきたのだろう。後は抱きまくらを抱いている習慣の関係で、スバルを抱いているというわけである。

なお、ウォーロックとハープも寝ているので助けてはくれない。

――――一方暁達は――――

「さて、詳しい話を聞こうかな？」

アシッド・エースがいつもの余裕な笑顔で男に声をかける。それは牽制であり、最後の話し合いのチャンスを目の前の男性（スナイパー）に与えたのだが、当の男は不気味に笑い出す。

「くっくっくっく……。獲物がこんなに来やがった！　今日はたくさん殺れるぜ!!　行くぜポラリス！　電波変換だ！　……どうしたポラリス。なぜ従わない？」

『……今のお前とは、共に戦いたくはない……』

ポラリスがパートナーに選んだのは、自分を持っていたガンズだ。目の前の、吼えてムダに誰かを傷つけるのを良しとする獣ではない。

また、暁達は本来なら即行でライフルを持った男を押さえるべきなのだろうが、男の尋常ならざる言動と態度に圧倒されて動けなかった。

ガンズは相棒だろうとなんだろうと怒鳴り散らす。

「何でだよ!?　俺は撃ちたいんだ!!　お前は俺の言う通りにしていれば良いんだ!!　それに、ここで抵抗しないと俺たちが捕まるぜ!?　それはお前らの計画があいつらにバレるって事なんじゃねぇの!!?」

『……分かった。この状況を潜(くぐ)り抜けたら一度話をしたい。いいな……?』

ポラリスにとっても、確かにここで捕まる訳にはいかないだろう。そして、この戦闘が終わって無事逃げられたら、ガンズと話し合いをして、場合によってはコンビ解消も視野に入れていた。

直後、冷たく、蒼い光が輝く。光が収まった時には、右腕にライフル、左腕に盾を装備した電波人間が現れた。そして、そばには４枚の氷の板が浮いている。

男は電波変換するとさらに言動が過激になった。

「クックックック……すげぇ力だ……。今なら何でも出来そうな気がするぜっ!　いいかお前ら!　俺はポラリス・スナイパー!!　死にてぇ奴はかかって来いや――――!!!」

自身の言葉を裏切り、自ら右手のライフルを放ってくる。

そしてその頃、男の異変はツバサも感じていた。

（　この感じは……蟲(コ)が人に憑いたか。さっきまで感じなかったのが感じるって事は、そいつがこの場所に近づいて来ているか。……または手遅れな程に大きくなっているか……か　）

ツバサがそんな事を思いながらアイリスのコピーロイドを直している。
近くで精密作業をやっている様を見ながら、ルナは不安そうにキザマロに話しかけた。

「ねぇ、本当にロックマン様抜きで大丈夫なのかしら？
……恐いのよ、私……。今までは、ゴンタや私、生田先生……。ほとんど素人の人が電波変換してきたでしょう？　それなのに、今回は遠くからでも狙い撃てるプロの殺し屋。……暁さん達、大丈夫かしら……」

問われたキザマロは戸惑っている。それもそうだろう。彼はルナのようにＦＭ星人に取り憑かれたわけでも、ましてやゴンタのように自在に電波変換できるわけでも無いのだ。
自分の中に無いモノなら、経験や感情さえも共感する事ができないのが人間だ。
困り果てたキザマロはツバサに問う。

「あの……本当に彼らだけで大丈夫なんでしょうか……？」
「大体、スバルとミソラちゃんは何で居ないんだよ！？」

さらに、ゴンタはキザマロの言葉に便乗してツバサに質問する。
当のツバサはコピーロイドの修復作業を休む事無く質問に答えた。
もちろん目は合わせない。

「どうこう言っても、あいつらを信じるしかないだろ。……お前らの方が付き合い長いんだから、お前らがそんなんでどうすんだ？
待つことしか出来ないのなら、出来る事を……そいつらを信じて待つだけだ。
……それと、スバルとミソラの方はスザクに呼んで来る様に頼

んだはずだが？」

ツバサがそう言った直後、スザクが気まずそうに、ドアの陰から姿を現した。どうやら今までドアの陰に隠れていたが、これ以上隠れるのは無理だと判断して出てきたらしい。

『あ～～、スバル君とミソラちゃんの事なんだけど……来れないみたい』

「なんでですか！？」

「そうだ！　スバルならどんな状況でもどうにかできるはずだ！」

ルナは、キザマロとゴンタを威厳で抑え、スザクのそばに行く。

「ねぇスザク？　それじゃあ、今から私が質問する事にイエスかノーで答えて？」

『う、うん。そのぐらいなら……』

「まず一つ。これない理由は２人とも共通している」

『イ、イエス』

次の瞬間、ルナからは疑惑のオーラが放出される。意図的に抑えてはいるのだろうが、それでも伝わるものは伝わる。抱く感情は【恐い　】の一言につきる。

「（……恐いな。キザマロ……）」

「（ハイ。ゴンタ君……）」

『ブロロロロ。……オレは強い。オレは強い』

『……暗示を使っても恐いものには変わりない確率、１００％オーバー』

これはゴンタ、キザマロ、オックス、ペディアの順。

「（こっわー。……ねぇ、彼女って怒るといつもこうなるの？）」
「（……これ以上気を逸らさすな……。ぶっちゃけ今手が滑らないようにするのが精一杯なんだから……）」
『（そんなに恐いならコピーロイドはこれが収まってから直しても良いよ。ツバサ）』

これはソラ、ツバサ、アイリスの順だ。
ルナの尋問はまだ続く。

「じゃあ二つ目。……2人はラブラブ中か」
（（（（（（　核心じゃねぇか！！！　））））））

ルナの問いにその部屋に居た全員（　ルナ以外　）が内心でツッコミ、スザクはガタガタ震えている。

『イ、イイイイエス！』
「そう。私、2人を呼んで来るわ。すぐに戻ってくるから」

顔はニコニコしているが、その体からは小6とは思えないほどの純度を持つ殺気を放出していた。ゴンタやキザマロはもちろん、殺気慣れしているはずのツバサでさえ無言で頷いた。
一分もしないうちに、スバルとミソラ、ウォーロックとハープの悲鳴が響き渡り、その直後、緑とピンクの閃光が夜闇を裂く。

――――ビル街――――

当然ながら、ビルの上は戦うスペースが少ない。なので全員ウェーブロードで戦っているのだが……。

「ガハッ！！」

アシッド・エースは自慢の【　ロックオンソード　】を当てるためにポラリス・スナイパーに接近したが、左手の盾で弾かれ、仕込み剣で斬撃を食らってしまった。

「シドウッ！！」

クイーン・ヴァルゴの声にフラフラと親指を立ててみせるアシッド・エース。何とか大丈夫なようだ。

そう。状況は明らかに劣勢。相手は現役バリバリのスナイパーなので狙いは正確。その上電波変換時の固有能力もあるので、苦戦の一つや二つは当然だろう。

「退屈だ。おい、もっと腕のあるヤツはいないのか？」

ポラリス・スナイパーはいかにも退屈そうにしてみせる。彼はこの戦闘中一度も動いていないのだ。その理由とは……。

「くっそ！　なめやがって！　ジョーカー！　挟み撃ちだ！」

『うけたまわった。ミサイルストリーム！！』

「グレイブクロー！！」

ジョーカーの右腕からはミサイルが、ジャックは紫の炎を乱射する。しかし、そのどちらも氷の板に阻まれてポラリス・スナイパーには届かない。

そして、ポラリス・スナイパーは右腕の銃を構えて撃った。しかし、その軌道上にあるのは自身の氷の板だけ。ポラリス・スナイパーにとっては、それで十分なのだ。
弾は氷の板で反射され、アシッド・エースに向かう。

「……手傷を負ったヤツを先に倒す。これが利口な戦い方だろ？」

あくまで冷淡にポラリス・スナイパーが呟く。
相手の攻撃は氷でオート防御。自身の攻撃は氷の板を使っての反射する銃弾で相手がどこに居ても関係ない。ポラリス・スナイパーが動く必要はまったく無いのである。
アシッド・エースに迫る弾丸。クイーン・ヴァルゴがとっさにアシッドエースの前に出るが、アシッド・エースは自分の愛する者を護るためにその前に出る。

ギンッ！！

この音は、銃弾が肉体に当たる音ではない。

「暁さん、大丈夫ですか？」

アシッド・エースの目の前にはロックマンが居た。左腕をソードに変換している所を見ると、ライフルの弾をぶった切ったらしい。
ハープ・ノートも近くにおり、自らの武器であるギターを構え、いつでも攻撃に出られるようにしている。

「あ、ああ。俺は大丈夫だ。……しっかし、ずいぶん遅くないか？」
『ヒーローは遅れてやってくる。……でしょう。シドウ』

アシッド・エースが立ち上がりながらロックマンに文句を言うが、相棒のアシッドに突っ込まれる。アシッド・エースは苦笑いしながら、自身のハンター内のアシッドに声をかけた。

「アシッド……それは余裕がある時に言うセリフだ」

（この様子なら暁さんは大丈夫か。他のみんなは……）

ロックマンはアシッド・エースの具合を確認すると周りを見渡す。皆、大なり小なりのダメージがあるらしい。最後にポラリス・スナイパーを見ると、ビルの上で暢気に座っていた。

ロックマンは思わずといったように暁に問う。

「暁さん、アレにやられたんですか？」

ロックマンにとっては信じられなかっただろう。アシッド・エースを始め、グレイブ・ジョーカーやジャック・コーヴァス、クイーン・ヴァルゴというメンバーが押されていたのだから。

暁はその事実よりロックマンの言い方に傷付いたようだ。

「……ああ。戦闘開始から一回も動いていないヤツに押された……」

ウォーロックは実体化してポラリス・スナイパーを警戒しながらスバルに話しかけた。

『ってことは、アイツ相当やりやがるな』

「うん。……ウォーロック、ノイズは？」

『……まだだ。今まで暁達が戦っていたから空気中のノイズは多いんだが、ＰＧＭがそれを吸収しきれてねぇ』

「お、おいスバル、ウォーロック」

スバルとウォーロックの会話にアシッド・エースが割り込む。

「何ですか？」

『何だ？』

スバルとウォーロックは2人同時に暁の方を向く。そのスキを逃さずポラリス・スナイパーはライフルを放ったが、ハープ・ノートのバリアに阻まれた。

アシッド・エースは、バリアが銃弾を弾いたのを見てからスバルとウォーロックに尋ねる。

「お前ら、あんなやつに押されていたオレ達を呆れていたんじゃ……」

暁の問いに、スバルはとんでもないと言わんばかりに手を振る。

「そんなわけ無いじゃないですか。暁さんやクインティア先生、ジャックやジョーカーまでいるのに押されていたんですから、相手が強いって判断しますよ」

『それにさっきチラッと見たが、あいつは自分の銃の軌道をあの板で操れるみてぇだ。たぶんあれで防御もできんだろ。……あれは相当厄介だ。だから気にする事はねぇよ』

『……珍しいですね。ウォーロックが私達のフォローをするなんて』

『てめっ！！　アシッド！　もう一回言ってみろ！　その口引き裂いてやる！！』

『……私に口はありませんが？』

『カッチーン！！　上等だ、暁のハンターの中で待ってろ。いますぐ殴りこみに行ってやる！！』

「はぁ～。……やめなよウォーロック……」

ウォーロックが無理やり暁のハンターの中に入ろうとしているのをスバルが半ば呆れたように止める。
そばで『何でオレだけ！？　アシッドも同罪だろ！』と、ウォーロックが文句を言っている声を聞きながら暁は乾いた笑いを浮かべる。

「……ハハッ。どうやらオレは、まだこいつらを過小評価していたみたいだな。……スバル、ウォーロック」

暁に呼ばれた2人は暁の方を向く。暁は右手の親指を立てて笑ってみせる。

「ヒーロー交代だ。頼んだぜ。……地球を救ったヒーロー！」
「……ハイ！　ウォーロック」

暁に力強く頷いたロックマンはウォーロックを見る。ウォーロックにはスバルの聞きたい事が分かっていた。

『ノイズならとっくに貯まってるぜ。……どっかの誰かさんがオレをからかってる間にな！！』

ウォーロックは思いっきりアシッドを睨むが、アシッドは平然と……。

『早くお色直しをしたらどうです？』
『ノイズチェンジは結婚式じゃねぇ――――――！！！』
「ウォーロック！！」

アシッドの言う事にいちいち突っ込むのは、もはやウォーロック

の癖となりつつあるようだ。
スバルはそんなウォーロックを注意して、ウォーロックの方も、アシッドを睨みながらもその怒りをポラリス・スナイパーに向けた。
『ッ～～～～！！　とっとと片付けるぞスバル！！！』
スバルの返事を聞く事無く、ウォーロックはノイズチェンジを発動させた。

第４１話　ポラリス・スナイパー（後書き）

ミソラが抱いているという抱きまくらは、『流星のロックマン　オフィシャルコンプリートワークス』に載ってたやつを元にしました。

第４２話　目覚め（前書き）

戦闘とは関係なさそうなサブタイトルですが、最後あたりにその理由があります。スバル君が……。

戦闘後編、お楽しみ頂ければ幸いです。

第４２話　目覚め

かれこれ3回も来れば、この光が飛び交う空間にも慣れる。
スバルは先程のウォーロックの態度にため息をついた。

「はぁ～。……ウォーロック、少しは僕の事も気にしてよ……。それより、こないだみたいにいきなり襲われるって事は無いよね？」

この間はキラーマンにいきなり襲われたので、スバルは警戒して周りを見渡す。

『……そう警戒しなくても良い。アレが異常なだけだ』

声のした方を向くと、全体的な色は濃い緑（　手早く言えば迷彩柄　）。右腕にはライフルを装備し、髪はオレンジで顎（あご）に達しないぐらいに短い。左目の水色のレンズは敵の補足用。右目にレンズが無いのは、右腕のライフルにスコープが付いているからだろう。
おまけを言えば、『アレ』とはキラーマンの事を指すらしい。

「い、異常って……」

切りかかられたスバル自身、ハッキリ異常扱いされるとキラーマンへの同情で失笑してしまう。
だが、目の前のナビは泰然（たいぜん）と言い放つ。

『事実だ。現にアイツは、サーバー内の仲間に切りかかって驚かしては『冗談、冗談。ヒャーハッハッハッハ！！！』っと、笑うヤツだからな。……まったく、オレやブルースが何度言っても聞かん』

ため息をついた後ブツブツ文句を言っているナビには悪いが、スバルは思う。

（さっきのキラーマンの笑い声、似てたなぁ……）

同時にそんな事を思っていた自分に我ながら失笑してしまったスバルに、目の前のナビが思い出したように話しかけた。

『申し送れた。私はサーチマン。初めましてだな。この時代のロックマン』

「うん。よろしくサーチマン。……１６０年前の事なんだけど……」

スバルから見て、何となくツバサはこの事に触れられたくない気がしたので、こうやってその時代を生きた者からその事を聞く事にしたのだ。少しずつでも、事実に辿りつくために。

サーチマンは口を開きかけたが、またもため息を付いてロックマンに謝罪した。

『すまない。話してやりたいのは山々だが、時間がもう無いようだ』

「えっ、もう？　ナイトマンやキラーマンの時はもっと話ができたのに……」

ロックマンはそう言いながら周りを見ると、確かに景色がかすれ始めていた。

サーチマンは、キラーマンの時と違い優しくロックマンの肩に手を置く。

『……わたしの力、しっかり使いこなしてくれよ？』

サーチマンは言動こそハッキリしているが、優しさが無いわけで

はないのだ。ロックマンが頷くと共に、周りは元の雪が降る景色に変わる。

『あら、お色直しは終わったの？　ロックちゃん？　クスクス……』
『グッ！！　……スバル、さっさとケリつけるぞ』
「う、うん」

ハープのからかいにウォーロックは堪えているが、そのぶん怒りが内側に充満しているので、スバルとしては恐い。

一方スバルの姿は、サーチマン同様ライフルがあるが、サーチマンと違いロックマンのライフルは左腕だ。他にサーチマンとの相違点を言えば、髪はスバルの濃い茶髪。ライフルには弾を装填（そうてん）する部分がある。腰の辺りにコブシ大の箱が複数ある所を見ると、そこに装填用の弾が入っているらしい。それも、箱ごとに違った効果がある弾が。

ハープ・ノートは少し辛そうにロックマンの方を向く。

「スバル君。あいつ、私がバリアを解除しようとするとすぐさま攻撃をしかけてくるの。おかげでバリアを使いっぱなしで疲れちゃった。後……よろしく……」
「ッ！！　ミソラちゃん！！」

電波変換が解け、ミソラは地上数十メートルの高さから落下しそうになる。急いでスバルが受け止めてウェーブロードに着地する。しかし、ポラリス・スナイパーはその状況を待ってましたと言わんばかりに銃弾を放った。

スバルは両腕が塞(ふさ)がっているので対応できない

「クッ！　って、えっ！？」

スバルに迫るのは銃弾だけでは無い。なんとジョーカーも迫ってきた。それも、フルダブルスイングの構えを取って……。

「ちょ、ちょっとジョーカー！？」

『伏せろ、スバル。フルダブルスイング！！！』

「うわっ！」

すんでの所でロックマンは避け、ジョーカーのコブシは銃弾を真横から捉えた。

銃弾は軌道を逸らし、何も無い空間に飛んでいく。

力を真っ向から止めるのは難しいが、その向き（ベクトル）を変える事は案外簡単だ。軌道を逸らせるだけのスピードと威力をもって、正面以外から衝撃を与えれば良い。……ジョーカーだからこそ出来る芸当かもしれないが……。

スバルがジョーカーを唖然と見ているとき、クイーン・ヴァルゴが近づいてきた。

「スバル君、ミソラちゃんをこっちに」

「あ、ハイ。……ミソラちゃんをお願いします」

「えぇ。それと、私達は足手まといになりそうだから先にホテルに戻ってるわ。……良いわね？　シドウ」

ポラリス・スナイパーは、相手にスキがあれば遠慮なく狙ってくる性格。負傷した者がその場にいたら足手まといにしかならない。

アシッド・エースはクイーンヴァルゴの意見に頷いた。

「ああ。さすがクインティア、良い判断だ。……スバル！　ウォーロック！　必ず戻って来い！」

「……ハイッ！」

『オウッ！』

ミソラをクイーン・ヴァルゴに任せた後、アシッド・エースを始め皆を見送ったスバルは、ポラリス・スナイパーに向き合う。

ポラリス・スナイパーはロックマンを見ると口の端を笑みで引き上げた。

「クックック、噂のロックマンの登場か……こりゃあ楽しめそうだ！」

お手並み拝見と言わんばかりに、ポラリス・スナイパーはいきなり3発の銃弾を撃ってくる。

彼の銃弾は、目の前の氷の板で一発ごとに角度を変えてポラリス・スナイパーの後ろに反射。それがさらに、ポラリス・スナイパーの後ろにセットした3枚の氷の板で反射。ロックマンに3方向から銃弾が迫る。

ロックマンは短く息を吐きながらライフルを構える。

「相手の銃弾予測軌道の計算……完了。ノイズ、ビル風による誤差修正……完了。……スコープガン！」

ドン！　ドン！　ドン！

ロックマンの放った銃弾はポラリス・スナイパーの放った銃弾に命中。全て撃ち落とした。
自分の銃弾が全て撃ち落とされてポラリス・スナイパーは落ち込むかと思われたが、彼はむしろ狂気の笑みを広げる。
「いいねいいね！　そうこなくっちゃ！！」
そう言うとポラリス・スナイパーは立ち上がり、今までは手を抜いていたと思わせるほどに本格的に戦いだす。
移動しながら氷の板も動かして、銃弾があらゆる方向からロックマンを襲う。まさに【　変幻自在　】だ。
「光学迷彩（コウガクメイサイ）！！」
だが、ロックマンも周りの景色に溶け込んで姿を消し、相手の射撃の正確性を半減させる。
「チッ！！　どこ行ったガキ！！　出て来い！！」
「ここだよ。バーストブレッド！！」
ロックマンはポラリス・スナイパーの左隣のビルに居た。そして、バーストブレッドというのは、腰に付けている箱に入っている弾の一つだろう。
軌道は直線。不意を付いた攻撃は氷の板の防御が間に合わず、ポラリス・スナイパーに当たる。……いや、彼は『プロの反射』というやつでロックマンの攻撃に対応している。
ポラリス・スナイパーはロックマンの放った銃弾の軌道上に左腕の盾を構えて受けとめた。その瞬間……。

ズドォォ――――ン！！！

「グアァァァ！！」

ロックマンの銃弾は爆発を起こし、ポラリス・スナイパーの盾を打ち砕いた。これでもう、ポラリス・スナイパーの左腕は『盾』では無く、ただの『腕』としか機能しない。

ロックマンは命中を確認すると、再び【 光学迷彩 】で姿を消す。

「ふぅ」

一呼吸置いたロックマンに、ウォーロックが気になる事があったらしく、話しかけた。

『スバル。アイツの波長、なんか変だ』

アイツとはポラリス・スナイパーの事だろう。スバルは物陰に隠れてポラリス・スナイパーの様子を伺ってからウォーロックに尋ね返す。

「変って？」

『オレもうまく言えねぇが、アイツの波長を狂わせている存在がいる。アイツの中を何かが探ってるみてぇだ』

「別に普通の電波変換に見えるけど……」

物陰から様子を見ると、当たり構わずライフルを乱射している。

ウォーロックはスバルの言った【 普通の電波変換 】への返答に、自分の疑問を含ませた。

『……確かにあれは電波体と人間の合体する普通の電波変換だ。……だが、人間の方に何かを感じる。……一体なんだ？』

「電波体のウォーロックに分からない事が、人間の僕に分かると思う？」

『……それもそうか。おっし！　スバル、さっさとケリつけるぜ！？』

「うん！　パラライズブレッド！！」

ロックマンは振り向き様に麻痺効果付きの銃弾を放つ。文字通り、当たれば麻痺してしばらく動けなくなる。

だが、氷の板のオート防御がそれを防ぎ、それが逆にロックマンの位置を教える事となった。

「そこかぁ！！　アイスホールド！！」

ポラリス・スナイパーの叫びと共に、先程までオート防御などサポートをしていた４枚の氷の板が、ロックマンに襲い来る。

ドッ！　ドッ！　ドッ！　ドッ！

ポラリス・スナイパーにとって、それはあっけなく捕まった。

ロックマンは両腕両足を氷の板で地面に固定されて動けない。彼はロックマンを見下ろすように彼の左胸に銃を構える。そして、心底落胆したようにボヤいた。

「あのロックマンもこの程度かよ。……じゃあな、ガキ」

ドン……

終わりを告げる銃声。ポラリス・スナイパーは静かにその場を去ろうとするが……。

ポンッ！

間の抜けた音が後ろから聞こえた。その音は殺伐としたこの状況で、あまりに似つかわしくない音だ。

ポラリス・スナイパーは後ろを見ると、ロックマンが小さい狸（たぬき）になっていた。狸の事をシャーロ人が知っているわけは無く、ポラリス・スナイパーは驚きの声を上げる。

「な、何だ!?　この茶色いのは!!?　ロックマンはどこ行った!!」

ポラリス・スナイパーは周りを見渡していたが、途中でそれを止めた。それはロックマンを見つけたという事だが、その彼はポラリス・スナイパーの後ろから、ライフルを突きつけている。

ポラリス・スナイパーは首だけを動かして後ろを向いた。

「どんな手品を使ったんだ?　ロックマン……」

その声は、今までよりはるかに落ち着いていた。

ロックマンは油断無くライフルを突きつけたまま説明する。

「ヘンゲノジュツだよ。僕が撃った直後に使っていたんだ。……変わり身って言った方が分かりやすいかな？」

つまり、ロックマンが【　パラライズブレッド　】を放った直後に【　ヘンゲノジュツ　】を発動。相手がこれに食いついたスキを狙う陽動作戦だ。

ポラリス・スナイパーは諦めたように「フッ」と笑う。

「……なるほどな。……さすがは忍者の国ニホン。……オレの……負けな訳ねぇだろ――――！！！」

「ッ！！」

ポラリス・スナイパーは距離を取ってロックマンを撃とうとする。対するロックマンもライフルを構えた。お互いに、これが最後の攻撃となる。

だがすでにロックマンは腰の箱の中で、一番小さい箱から銃弾を装填していた。

箱が小さいという事は、銃弾の数が少ないという事。それは逆に言えば、量産の難しい【　強い銃弾　】が入っている事を意味する。

その銃弾とは……。

「……ＮＦＢ（ノイズ・フォース・ビックバン）。シューティングスター！！！」

ロックマンのライフルから放たれた銃弾はその名の通り、夜の闇に青い軌跡を残しながら直進する。

途中でポラリス・スナイパーの銃弾に当たったが、それを難なく打ち砕く。さらにオート防御でドミノ状に４枚並んだ氷の板を貫通して、ポラリス・スナイパーのライフルに命中した。

ズドォォォン！！

さらに、その銃弾には先程使った【　バーストブレッド　】の破壊力も備わっているので、その一撃でポラリス・スナイパーのライフルは大破。相手が電波変換していてもして無くても、どちらにせよ勝負はあった。

彼にはもう、戦う力も武器も無い。

その後、スバルは暁に連絡した。約１０分後、暁と共に来たサテラポリスシャーロ支部が、男の身柄を拘束する。

運ばれていく男と電波体を見ながら、スバルはウォーロックに話しかけた。

「ねぇウォーロック、これから行く国でも、こういった戦いがあるかな？」

『……あるって見たほうがいいだろ。それよりも早く帰ろうぜ？暁にはもう戦闘の報告は済んだんだしよ。……オレは眠い』

先程あれだけの戦闘をしておいて『眠い』と胸を張って見せたウォーロックのマイペースさに、スバルは苦笑しながら了承した。

「はいはい。……そう言われてみれば僕も眠いや。……あれっ？」

『どうした？』

突然素っ頓狂（すっとんきょう）な声を上げたスバルを、ウォーロックは不思議そう

に見る。スバルの目線は、何も無い空間（　ビルの屋上　）に向けられていた。

『……オイ、電波にでも目覚めたか？』

【　電波　】という単語は２００年前にあった【　変わり者　】という意味の言葉だ。それを知っているウォーロックに対して、スバルは苦笑しながら我に返る。

「そんなんじゃないよ。何でも無い。……たぶん気のせいだと思うし」

『？　何の事か分からねぇが、何でも無いなら良い。帰るぞ』

「うん」（……白い羽根みたいな物が見えたような気がしたけど……気のせいだよね）

再び電波変換したスバルは、暁やサテラポリスシャーロ支部の皆さんに断った後、夜のウェーブロードを駆けていく。

第４２話　目覚め（後書き）

どうでした？　実は今回のバトルシーン、戦術とか凝ってみました。

スバル君が見えたのは、ガンズの背についてた羽根の一部です。

この旅編で、少しずつこの小説の核心や謎に迫ります。

第４３話　尋ねる者（前書き）

本来なら３９話に載せる予定だったのですが、戦闘の話を２話に分けたので４０話に繰り下がりました。
ＣＬＡＭＰキャラ、久々に登場です。

それと、基本的にスバル視点ですがナレーション時のスバルの一人称は『僕』ではなく『スバル』にしています。

第４３話　尋ねる者

ホテルに戻ると、暁を除いた皆がロビーで迎えてくれた。
スバルはすかさずミソラの容態を聞く。なお、ウォーロックはハープを始めとしたウィザードの方に向かった。

「ミソラちゃんは！？」

ルナは、スバルを称える言葉を飲み込んで、ミソラの容態を答えた。

「大丈夫よ。そこのソファーで寝てるわ。疲れて眠ってるだけみたい」

その言葉でソファーを見ると、赤紫の髪をした少女がすやすやと寝息を立てていた。
スバルはそれを見て、ほっと胸を撫で下ろす。そしてルナは、先程言えなかった言葉を言った。

「……お帰りなさい。スバル君。良く頑張ったわね」
「さすがです！」
「後で牛丼おごるぜ！」
「やっぱりお前はそればっかかよ！？」
「……それ以前に、シャーロに牛丼があったかしら？」
「いやいや、シャーロといえばキャビアでしょう！」
『……論点がずれてないか？』

上から委員長、キザマロ、ゴンタ、ジャック、クインティア、ソラ、ジョーカーの順番だ。

ちなみにジャックは漫才芸人のごとく平手を水平に振ってゴンタをツッコミ、クインティアは冷静に疑問を述べる。最後はジョーカーが、スバルの出迎えが食べ物の話になっている事を半分呆れた様子の言葉で締めくくる。

ズッド――――ン!!

ウォーロックの方も何かあったようだ。

一方、ウィザードの方もウォーロックを迎えていた。（皆がスバルを迎えていたのと同時進行です）

『ブロロロロロッ!!　さすがウォーロックだぜ』
『ヘッ!　まぁな!!』
『ポロロン。でも、戦ったのはスバル君よね?　今までのノイズチェンジであなたが活躍した事あったかしら?』
『グッ……。ハープてめぇ……』
『ケッケッケ……。結局はウォーロックじゃなくてウォーロックちゃんのままかよ』
『キャハハハハッ!!　ウォーロックダッサーイ!!　ほら、スザクも何か言ってやりなよ。ダサダサウォーロックにさ!』
『スザク。先手打っとくが何か言ったら承知しねぇぞ……』
『この状況で言ったら間違いなく襲われそうだからまだ言わな～い』
『まだって事はいつかは言うつもりなのかっ――――!!!』
『キャ!　だから女の子を追いかけないでってば――――!!　……ペディア君ごめん、身代わり』

『えっ――――――!!?』
『うおっ!?』

ズッド――――ン!!

オックスに称えられてハープとコーヴァス、ヴァルゴにからかわれて一喜一憂したウォーロックはスザクを追いかけようとしたがペディアの陰に隠れてペディアを身代わりにした。結果として、ウォーロックはペディアと激突して強制的にその場は収まった。
ここにきて、スバルはある事に気付く。

「あれ？　ツバサ君とアイリスは？」

その一言でゴンタとキザマロ。手早く言えばルナの周りの人は彼女から遠ざかり、ルナからはものすごいオーラが溢れ出る。

「い、委員長？　ど、どうしたの……？」

スバルのおどおどとした質問にルナは顔だけ笑顔を作る。

「あなたとミソラちゃんがラブラブ中の時に、アイリスちゃんが例のスナイパーに撃たれてね。ツバサ君が今コピーロイドを部屋で直してる所よ？」
「へ、へへぇ～。そ、そそそそうなんだ～」（こここここ恐い――――!!）

ルナが部屋に入ってきた時の事はよく覚えている。

部屋のドアが勢い良く開いたと思ったら、『鬼』と錯覚してしまうほどの怒気を纏ったルナが立っていたのだ。その時点で、生物としての勘だろう。ミソラはパチリと目を覚まし、スバルから離れた。その後は……。

「さっさと行きなさい……」

ルナの閻魔大王を思わせるような恐ろしい声で、スバルとミソラ、ウォーロックとハープは悲鳴を上げ、電波変換して暁達の元へ向かったというわけだ。

そして今、ルナは再びスバルに詰め寄る。無論、鬼神を思わせるオーラを纏いながら……。

「前にもあったわよね～？　こういう事……。一体何を考えているのかしら？」

「ぼぼぼぼ、僕はただ仮眠をとってたらミソラちゃんが……」

スバルの言葉は目の前の恐怖により消えゆく。

そんな時、あまりに場違いなセリフがその場に響く。

「腹減った～」

ツバサがそう言いながら階段を下りてスバル達のいるロビーに来たのだ。

「……ん？　どうした？　違う世界の住人を見たような顔をしてるぞ？」

考えてみれば今は夜の１０時。ここについてから夕食をとる予定だったのに先程の戦闘で食べられなかったのだから、腹は減るだろう。しかし、修羅場と化した今のロビーにおいて、彼の放った言葉は場違いな事この上ない。

しかし男子はこの状況を好機とし、スバルを救うために立ち上がった。

「よ、よお～ツバサ～。アイリスはどんな感じだ？」

ジャックは右手を上げてツバサを迎える。ようするに、どさくさまぎれに話をそらそうという事だ。

ツバサはその場の違和感に感づいたようだが詳細を理解してはいないらしく、自分の頬をポリポリと掻きながらジャックの質問に答えた。

「あぁ、いちおう応急処置は終わったんだが……」

「どうかしたんですか？」

キザマロがツバサの歯切れの悪さを不思議に思い、彼に聞いてみた。

ツバサは階段の上の方を見て、柄にも無くスバル達に両手を合わせて頼み込んできた。

「スバル、みんな。頼むから笑わないでやってくれ。……お～い、アイリス～。でてこ～い」

『……』

階段を下りてきたアイリスは、額に両手を押さえながら現れた。ちょうど、額に何かをぶつけて押さえている様な格好である。

「ど、どうしたの？」

スバルが目を丸くしてツバサを見ると、彼はバツが悪そうに苦笑いを浮かべる。

「え～っとだな……。応急処置として電子回路をいじってこの通り現実世界で活動できるようにはしたんだが、今持ってる部品だと銃弾で空けられた穴が塞げなくて……。（大仏みたいになってる）」

「だ、大仏！？」

最後は耳元で話したのだが、スバルがそれを思わず叫んでしまった。ツバサは額に手を置き、アイリスは真っ赤になってツバサのハンターに戻る。コピーロイドは置いていったままだ。

ツバサの言動とアイリスの態度から察するに、スナイパーの銃弾で開いた穴は今のところ塞がらず、その結果アイリスの額に大仏を思わせる穴が残っているということだ。

スバルには災難なことに、ルナはもちろん先程まで味方だったジャックやゴンタといった男性陣からも、白眼を送られた。

ツバサはため息をついてスバルに言葉をかける。

「はぁ～。おまけを言えばこの通りコピーロイドの電波化もできなくなってな。コピーロイドって案外重いから出来るだけアイリスには自分で歩いて欲しいんだが、今のような感じで人前に出るのはまず無理。……ってかメシ。腹減った」

「……食堂ならとっくに閉まってるわよ？」

「マジッすか……」

クインティアの言葉に、ツバサは落胆して首から上ではなく、腰から上にかけてうな垂れた。例えれば、学校の集会の【　礼　】だろう。いや、むしろ【　ゾンビ　】と言った方が適切かもしれない。

その後、ツバサは生気の無い死んだ魚のような目で階段をフラフラ上がって行った。スバル達も特にロビーでする事が無いので後を追おうとするが……。

「僕ですか……」

ついさっき聞いたようなフレーズで、スバルが戸惑いの色をその顔に宿す。

「そう。誰がミソラちゃんを運ぶと思ってるの？　こういうのはあなたの役目でしょ」

ルナの言葉でスバルはため息をついた。

「はぁ～。分かったよ。……ウッ！」（疲れている時にこの重量は堪える……）

『……スバル君。言っときますけど、ミソラを重いとか思ったらミソラに言うわよ？』

ハープが冗談にならない事を冗談にならない声のトーンで言うので、スバルは自然と背筋が伸びた。

暁が戻ってきたのは、それからおおよそ1時間後だという。

――翌日――

スバルとミソラ、ウォーロックとハープが一階の食堂に下りてみると、ルナはキザマロとゴンタ。ジャックはクインティアと暁とい

った馴染み深いメンバーでそれぞれ違うテーブルで朝食をとっていた。
全員が座れるだけの大きさのテーブルはそうそう無いだろうから、関わりの深い面々で食べているのだろう。

なお、ソラはツバサと同じテーブルで食べており、アイリスがソラに何かを頼んでいるようだ。無論アイリスは自分の額を押さえながら頼んでいる。
ルナはスバル達を見かけるなり声をかけてきた。

「スバル君、ミソラちゃん。こっちにいらっしゃい。ちょうど席も開いてるし。あ、ウォーロックとハープは引っ込めてね。場所取っちゃうから」
「ずばる、ごごのめじうばいぞ」
「ゴンタ君、食べながら話すのは行儀が悪いですよ」

ゴンタの行儀の悪さをキザマロがたしなめ、スバルとミソラは苦笑いを浮かべる。なお、ゴンタの言葉を訳すると、「スバル、ここのメシうまいぞ」である。
その後、一同は食事を進めていたが、ホテルのボーイさん（従業員）がスバル達の元へやってきた。

「すみません。ツバサ様はいらっしゃいますか？」
「はぁ。ツバサ君ならそっちの黒髪の子ですけど」

スバルがツバサを指差すと、ボーイさんはスバルにお礼を言ってツバサの元へ向かった。
ボーイさんとツバサの会話は案外聞こえるもので、スバルやミソラといった子供達は興味本位で会話を盗み聞く。ちなみに暁も興味津々なようで、イスに座ったまま出来る限り体をツバサに近づける。

ツバサは頬杖をついて、もう片方の手にコーヒーカップを持ちながらボーイさんに確認をとった。

「……オレに客？」

それに対し、ボーイさんはあくまで義務的に頷く。

「はい。ロビーにお待ちです」

「……皆、悪いけど行って来る。遠慮なくメシ食っててくれ」

『私も行く……』

アイリスもツバサについて行き、ツバサの言う通りにするのはスバルとクインティア、そしてルナくらいだろう。他のみんなは自身の好奇心に従って後をつける。

「はぁ。……彼のプライバシーも尊重してあげなよ……」

残されたスバルはため息をついてトーストを口に含むが、ウォーロックが実体化してスバルの首根っこを掴む。

「うわっ！？　何するのウォーロック！！」

『面白そうだ。オレ達も行こうぜ？』

疑問系にも関わらず、ウォーロックはスバルの意見を無視してロビーに向かう。スバルとしては首を掴まれたままなのでかなり苦しい。

後ろからクインティアの声も聞こえてきた。どうやら彼女もパートナーのヴァルゴに引っ張られているようだ。なお、ルナも少ししてから来た。彼女はああ見えて寂しがり屋な一面がある……と思う

からだ。

ロビーに向かってみると、勝手について来た暁達をツバサが怒っている。そして、見覚えの無い男性が人の良い笑みを浮かべて、怒っているツバサを宥めていた。どうやらその男性がツバサのお客らしい。

男性の容姿は、長身でオレンジ色の横長サングラスをかけており、目と髪は濃い茶色。穏やかな笑顔で相手に安心感を与える顔立ちだ。服は上下とも抹茶色の服を着て、その上から白い服を羽織っている。

その服装はまるで、違う世界から突然この世界に迷い込んできたようだ。遠い所からワープして来たと言った方が、まだ説得力がある。

手には透明の袋が握られており、中には何も入っていない。……いや、かすかに何か見える。曇りガラスに映った物体のように霞んで見づらいが、羽根……だろうか。

男性はスバルを見つけると、持ち前の穏やかな笑みを向けてくる。ツバサはスバルの姿を確認すると諦めたようにため息をつき、スバルを手招きした。

スバルがそばに行くと、男性はニッコリと自己紹介をしてくる。

「初めまして。俺は封真っていうんだ。よろしくな」

「初めまして。封真さん。僕は星河スバルです。……あの、ツバサ君に用事って何ですか？　……すみません。忘れてください」

さすがに行き過ぎた質問だっただろうか。封真が一瞬笑みを小さくしたから急いで訂正したのだが、封真は変わらず笑顔のままだ。

「別に良いよ。俺がこの国に来たのは、ある物を取りに来たからなんだ」
『ある物って何だ？』
今度はウォーロックの質問だ。封真がそれに答えようとウォーロックを見た時、初めて笑顔ではなく驚きの顔となる。
「……これは……使い魔や魔術の類じゃないね。なんだい？　これは」
「これはウィザードと呼ばれる者です。……ご存じ無いはずはないでしょう？」
「そもそも魔法なんて、非科学的なモノがあるわけないじゃないですか」
クインティアとルナの順で言う。そして彼女達は、「この人は何をふざけているのだろう？」という目で封真を見ている。たしかに現代においてウィザードの存在は常識であり、それを知らないなんてありえない。
ツバサとアイリス以外の訝るような視線に対して、封真は肩を竦ませて見せる。
「悪いけど知らないな。俺は、この世界に来たばっかりだから」
「……この世界？」
いつもは気さくで、目の前の男性『封真』と気が合いそうな暁が眉を顰める。さすがサテラポリスの若きエース。洞察力も中々だ。それに対し封真は特別焦る様子も無く、依然として笑顔を絶やさない。

「それよりも、俺はこの世界の事をもう少し知りたいな。誰か案内してくれないかい？」
「……中々やりますね。さすがはツバサの知り合い。はぐらかすのがお上手だ」
それは、質問をかわされた悔しさと刑事としての牽制。そしてツバサの名を出したのは、彼の名前を出されて封真がどういった反応を示すか見るためだ。
さすがの封真も少し考えている様子だ。そして、何か言葉を思いついたらしく、再び笑顔を作る。
「ワケありでして……ね」
「そうですか」
暁と封真。互いに笑顔だが、それは対称な笑顔だ。探ろうとする暁の笑顔と、隠そうとする封真の笑顔。
険悪ではないが見えない火花が散る様子を、ツバサは一言で解消した。
「……さ～てと、腹も落ち着いたし、町でも散策しますか。封真も来んだろ？」
「あぁ、そうだね。それじゃあお願いするよ」
「まだ話はっ……」
「「　ん？　」」
暁の言及は、ツバサと封真の強かな笑顔で飲み込まれてしまった。
彼らの笑顔は時に、話を強引に終わらせるのにも一役買うらしい。

第４３話　尋ねる者（後書き）

次回はスバル編とツバサ編に分かれます。２人とも違う場所に行きますからね。

次の更新は２８日の予定ですが、次の２話が出来上がってから２話同時に更新するので少し遅れるかもしれません。……この４０話でストックが切れましたからね。

第４４話　平和と企み（前書き）

この話は基本的に『スバル視点』ですが、一部作者視点になります。

この話にも、名前は出ませんが『ｘｘｘＨＯＬＩＣ』のキャラがでます。

第４４話　平和と企み

――――ホテル・入り口――――

封真さんを案内する事になったんだけど、僕達は教科書に載っている知識以外、ほとんどシャーロの事を知らない。
暁さんやクインティア先生なら知ってると思うけど……。

僕の心配を悟ったのか、ツバサ君がいつもの笑顔で肩を叩いてくる。

「大丈夫だって。オレもアイリスもシャーロの事はけっこう知ってるし。……あ、オレはオレでやる事があるから途中からアイリスが案内人な」
「お前のやる事ってなんだよ？」

ジャックが横から割り込んで質問してくる。問われたツバサ君の顔は、呆れが３０。怒りが７０の割合だ。

「……オレはオレでやる事があって旅行しているのに、お前らが勝手に付いて来るから仕方なく案内ぐらいはしてやるかと思っていたんだが、それも不要だったか。そうかそうか。……そんじゃあ、１２時ぐらいにこの先の商店街中央の広場で集合な。ハイ決定～。……アイリス～？」
『……』

アイリスは渋々といった様子でコピーロイドの中に入り、それと共に額を手で押さえる。なお、【　お前らが勝手に　】と、【　仕

方なく　】はの部分が強調されていた。かなり怒っているらしい。

「そんじゃあ、こいつらの案内頼んだぞ」

アイリスが無言で頷いたのを確認してからツバサ君が歩いていく。

……確かに僕達は勝手についてきた身だから偉そうな事は言えない。後で彼に謝ろう。

そんな事を思っていた僕に、封真さんが笑いかけてきた。

「気にしないで良いと思うよ。彼は開き直り早そうだから。……それに、彼はまだ君たちの元へ戻ってくるからね」

「あ、ありがとうございます」（ツバサ君といい封真さんといい、心読んでんじゃないよね？）

「オレに心を読む力は無いよ。君の顔が正直なだけ」

思わず自分の顔を両手で触って今の顔を確認してみる。そしたら、封真さんはもちろんミソラちゃんや暁さん、委員長が堪えるような笑いを浮かべていた。ちなみにゴンタとジャックは爆笑である。ハッキリ言ってはずかしい。

だが、アイリスの反応は違っていた。

『スバルさん、ビジライザーを借りても良い？』

ビジライザーとは父さんが開発した電波が見えるようになるメガネで、普段は僕の額にかけている。さすがに、額に手を押さえながら街中を歩くのは抵抗があるらしい。

「うん。良いよ。……ハイ」

『ありがとう』

そう言いながらアイリスはビジライザーを受け取り、身につける。

『……それでは案内します』

「うん。よろしくね。アイリスちゃん？」

「シャーロに牛丼ってあんのか！？」

『シャーロってどういう電波体がいんだ？』

『……質問は一個ずつでお願いします』

アイリスの言葉に封真さんが笑いかけ、ゴンタとウォーロックの質問にアイリスが困ったようにお願いする。わきあいあいと、皆で歩いていく。いつの間にか封真さんもすっかり溶け込んでいた。

封真さんは、人と人の間に溶け込むのが上手いらしい。

先頭を歩くのは、案内役のアイリス。ジャック、ゴンタ、キザマロ、委員長といった、割合活発な方だ。

活発といえばソラさんもだが、彼女はずいぶんおとなしい。理由を聞いてみると……。

「それが朝食の時ね、アイリスちゃんから帽子を買ってくれって頼まれたんだけど、どんな帽子がアイリスちゃんに似合うかな～って考えてたのよ」

『ポロロン……。それなら何も、ツバサ君がアイリスちゃんに直接買ってあげればいいのに』

「オレは女の好みは分からん。そんなわけでソラ、まかせた。……だって」

ハープの提案にソラさんはツバサ君のマネをしてみる。中々似ていたので、僕とミソラちゃん、ウォーロックにハープは思わず笑ってしまった。ソラさんの方もそれを狙っていたらしく、舌を出して

みせる。

「まぁ、帽子代も貰ってるし、良いって言えば良いんだけどね～。……その他の娯楽費はくれなかったくせに」

「何で娯楽費？」

少し脹れた様子のソラさんに僕が尋ねると、彼女はため息交じりで語りだした。

「それがさ～、女将からは飛行機代はもらったんだけど……買い物とかの、いわゆる娯楽系？　それがちょっとピンチでね。ツバサにたかろうと思ってたんだけどアイツけちでさ～。帽子代とこれからのホテル代以外出してくれないでやんの。

はぁ～。……こっちに珍しくて可愛いぬいぐるみがあったら買おうと思ってたのにな～」

ようするに、彼女はツバサ君から金をもらってホテル代やぬいぐるみ代をまかなおうとしていたらしい。さすがにホテル代は無視できなかったらしく、ツバサ君は出す事を了承したようだが……。さすがにぬいぐるみ代は……。

男性として共感できない僕と違って、ミソラちゃんは「うんうん」と頷いている。

「やっぱり可愛いぬいぐるみとか服があったら、買いたくなりますよね」

「そうそう。見てるだけでも十分幸せだけど、やっぱり自分の手元に来ると、幸せも人一倍だもんねー？」

「ねー？」

少女2名が互いに首を傾げてニコニコ笑いあう。その後もぬいぐるみ話に花が咲き、僕はすっかりのけ者だ。
前の方を見ると、封真さんと暁さんが話している。すっかり彼らも打ち解けたらしく、互いに笑顔で話をしている。
ここで異変に気付いたのだが、封真さんの持っている袋の中の、霞んだ羽根のような物がない。
ソラさんとミソラちゃん、ハープとスザクはすっかり話しこんでいるので、僕とウォーロックは封真さんの元へ行く。

「あの、封真さん……」
「ん？　なに？　スバル君」

彼は相変わらずな人の良い笑みを浮かべる。

「袋の中の羽根、どうしたんですか？」

その言葉で封真さんは一瞬笑みを引かせたが、再び笑顔に戻る。

「うん。ツバサ君に引き取ってもらったよ。あれは、処分に困るモノだからね」
『オイ、それ以前にスバルの言ってる羽根ってなんだ？　オレには何にも見えなかったんだが』
「私にも見えなかったわよ？」
「スバル君にしか見えない物とは興味深いですね。僕の知的好奇心がスゴイ勢いでくすぐられていますよ」

ウォーロック、委員長、キザマロの順番で封真さんに問う。
暁さんは朝と続きと言わんばかりに封真さんを問い詰めようとするが、暁さんのハンターに電話がかかる。

「みんな悪い。……ハイ、暁です。……なんですって!?　……ハイ。……ハイ。……分かりました。サテラポリス日本支部長官にはわたしから報告します。わたしもそちらに行った方がよろしいでしょうか？　……分かりました。では……」

「暁さん、一体なにが……？」

暁さんがあまりに驚いていた様子だったので僕は尋ねてみた。他のみんなも、今の暁さんの声でそれぞれの話を止めて彼を見る。

暁さんは真剣ながらも少し当惑したような顔で説明した。

「実は、昨日確保したスナイパーが取調べ中に突然呆けたそうだ。それも、何を言っても何をしても気付かない。……まるで、魂が抜けた人形のようになったらしい」

『どういうこった？』

ウォーロックの問いに暁さんは首を横に振る。

「まったく分からない。……まぁ、シャーロ支部からは【わたし達で調べるから、そっちは子供達を頼む】って言われてるからゆっくりできるのはいいんだけどな」

その後、広場に着くまで様々な推測が飛び交った。……だが、ゴンタの「牛丼の食べすぎ」はいくら何でもないだろう……。

――――飛王（フェイワン）・リードのいる次元　（目線が作者になります）――――

暁達が呆けた男の事で推測を交わしているとき、飛王・リードは鏡を見ている。隣には黒髪の女性が立っていた。しかし、その鏡に映るのは彼らではなく、異世界を旅する４人と１モコナである。

「キギィィィ……」

「飛王・リード、例の世界から一羽目の魂がつきました」

「……やっとか」

隣に居た女性の言葉に、飛王・リードはそちらを見る。彼の目線の先には、卵のような形に大きな羽をつけた『蟲（コ）』がいた。

飛王・リードは指を払う。指から空間は揺れ、蟲を別の部屋に送る。

蟲が部屋から出たのを見届けてから、女性は飛王・リードに尋ねる。

「なぜそこまであの世界にこだわるのですか？」

飛王・リードは狡猾な笑みを浮かべながらそれに答える。

「あの世界には【ココロサーバー】という存在があってな。それは自在に人の心、感情を操れるのだ。それにより人の中から抑制心を失うように働きかければ、世界そのものが魂を得るための材料となる。そのために、その障害となるであろうあの世界のクロウを殺すため、あの世界の人間を味方に引き入れ、その者に彼の暗殺を依頼させた」

「……だけど、彼を殺せばあの世界に介入できなくなるから殺さないんじゃなかったかしら？」

「……確かにあの世界のクロウは自分自身を結界を開けるカギとし、殺せば二度とあの世界に介入はできなくなるようにしていたようだが、今ヤツを殺しても穴だらけな結界なら……」

「例え結界が閉じても、こちらからの魔術で無理やり開ける事は可能。そしてココロサーバーを乗っ取り、魂を集めるためだけの世界にする」

飛王・リードの言葉の続きを女性が続けて、飛王・リードは不敵な笑みを浮かべる。

「その通りだ。……星火（シンフォ）よ」

星火と呼ばれた女性はそれに答えず、目を、再び旅をする者たちに向けた。

――――一方スバル達は（目線がスバルに戻ります）――――

商店街、そこには様々なお土産がある。アイリスの話では、観光事業にはさして力を使っていないそうだが、忘れていけない物がある。

「へぇ～。これがマトリョーシカか～」

「スバル君、マトリョーシカってなに？」

ミソラちゃんが質問してきたので、僕はそれに答えた。

「マトリョーシカっていうのはね……ほら、こんな風に人形の中に一回り小さい人形が入っている人形をいうんだよ」

実際に手にとって実演して見せると、ミソラちゃんは感心した様子でそれを見ている。

「へぇ～。スバル君物知りだね～」

「お熱いね～お二人さん」

「ソラさん、だからそんなんじゃ！！　……って、やっぱり買ったんですね。ぬいぐるみ」

僕の呆れた視線の先には、ソラさんが人形を抱いて立っていた。からかうようなニンマリ笑顔を浮かべている。

人形の大きさは赤ん坊くらい。ちょうど小猿の体に、耳を大きくしたような感じだろうか。目がクリクリなので中々に可愛い。

「チェブラーシカって言うんだって。けっこうニホン人も買ってるらしいよ」

「お～い、あっちにうまい棒みたいのがあったぞ」

ソラさんがぬいぐるみを僕とミソラちゃんに見せている時に、暁さんがそんな事を言いながら近づいてきた。手には夕食分が十分入りそうな大きさの袋を持っており、その中には棒状のお菓子が包みに包まれていた。……いわゆる【　大人買い　】である。無論うまい棒では無い。

うまい棒に描かれているキャラは２２世紀の猫型ロボットに似た口をしているキャラだが、暁さんが持っている物は赤ん坊の絵が描かれている。

アイリスはそれのパッケージを見て、正式名称を説明した。
ちなみに、この時点でアイリスは帽子を被っている。色は淡い茶色。帽子のツバのラインは硬い生地で出来ており、上はふっくら膨らんでいる。

『これは、【　クラスナヤアクチャーブリ　】のチョコですね。それもウエハースタイプ』
「ク、クラスナ……何だって？」
『クラスナヤアクチャーブリ。ニホン語に訳すと【　赤の１０月　】っていう意味です』

長い名前に思わず聞き返した暁さんに、アイリスは丁寧に繰り返す。説明している時の顔は少し得意げで、楽しそうだ。
暁さんは自分の持っていたうまい棒……もといクラスナヤアクチャーブリが入った袋を、名前が長かったから親近感が薄れたらしく、少し敬遠しながら呟いた。

「……ニホン語の方が楽だな」
「……シャーロ語は、世界で一番発音が難しいとされているからね」

クインティアはフォローしているようだが、その顔は笑いを堪えている。

「……ティア、面白いか？」
「だってあなたがうまい棒って……ここはシャーロよ？　そんな物があるわけないじゃない」
「グッ！　……ジョークだよジョーク。シャーロにうまい棒が無い事くらい分かってるって。……だけど、うまい棒の味は確かだ。あれは全国でも十分に通用するな！」
「開き直りかよ」

「ジャックうるさい」
「ふふっ」

クインティア先生が笑っている所なんてめったに無い。その珍しい光景と、暁さん、ジャック、クインティア先生のコント（？）を見ているときに、委員長が後ろから声をかけてきた。

「スバル君、あなたも何かお土産でも買いなさい。あなたのお父様が宇宙に行って、きっとお母様寂しがってるだろうから、せめてそのぐらいは…ね」

そういえば、父さんがケフェウスと一緒に宇宙に行ってから、母さんは少し寂しそうだ。プレゼントは案外元気が出るかもしれない。

「うん。そうだね」
「あ、私も行く。浦方さんやスズカにも何か買っていきたいし」
「う～ん、このまま人形だけ買っていくと女将達に何言われるか分からないからな……。よし！　まともなお土産も買っていこう」

そんな感じで、僕とミソラちゃん、ソラさんは委員長達に付いて行く。

そして着いた店は……。

「陶器（とうき）屋？」
「そう。シャーロって陶器に色々種類があるのよ？」
「付け加えるなら、塗り方って言った方が良いですけどね」

僕の言葉に、委員長とキザマロが説明をする。なお、キザマロの言う塗り方というのは、単純に塗り方で柄の色が違うと考えれば良い。

見渡してみると、確かに様々な陶器がある。全体的に黒を基調としたものが多いが、単純な黒ではない。黒を基調として金の光沢を放ち、妖しげな輝きで買う者を魅了する柄を始め、様々な模様が彩られている。

僕が店内を見渡している時に、店員さんが声をかけてきた。

「いらっしゃいませ。何かお探しですか？」

「えっと、母さんのお土産を……って、もしかしてニホン人ですか？」

声をかけてきた店員さんは明らかに日系の顔立ち。淡い茶髪のショートヘアーに優しい顔立ち。歳は１８～２１くらいだろうか。彼が僕の言葉で驚いたところを見ると、ニホン人で良かったらしい。

「えっ？　あ、君もニホン人か。それじゃあ分かっちゃうよね。っと、その前に、君のお母さんの好きな色ってなに？」

「えっと～青……だったと思います」

というよりも、星河家は全員青が好きだ。

店員さんはそれを聞くと、オススメの陶器の場所へ案内する。

「これはどうかな？　【グジェリ】っていうヤツなんだけど」

店員さんが出したのは、白を基調として深い青で模様があしらわれた陶器。カップなどの実用的な物以外に、人形などもあってバリエーションに富んでいる。

「え～っと、それじゃあ……この馬みたいなヤツで」

「分かった。会計はそっちだよ」
「ありがとうございました」

レジに行って見ると、ミソラちゃんとソラさんはもう自分の物を買っていた。そして委員長はおかんむり。

「スバル君、一人で勝手に行くもんじゃありません。迷子になったらどうするの」
「店の中じゃ迷子にならないよ」

僕が委員長の言葉に苦笑している時、レジの方から声がかかる。

「オイ、それ買うのか買わないのかどっちだ？　……それとも万引きか？」
「あっ！　買います買います」
「……まいどあり」

このやたら無愛想なレジの人は黒髪のショートヘアー。歳は先程の店員さんと近く見えるが、目つきは鋭く、接客業に向くタイプでは無い。

しかし、仕事は丁寧で陶器のラッピングは実に見事だ。

「……ほら」
「ありがとうございます」

外に出ると、いつの間にかツバサ君が戻ってきていた。封真さんと何かを話しているようだが、なぜだか声をかける気にはなれなかった。

封真さんの近くにラグビーボールのような形状の物がある。どうやらアレが、封真さんが取りに来た物らしい。

第４４話　平和と企み（後書き）

補足として、アイリスの着けている帽子は、『ＥＸＥ５』や、『ロックマンＥＸＥ　Ｓｔｒｅａｍ』で、プリンセス・プライドが見に着けていた様な帽子です。

それと『浦方さん』って言うのは、ミソラの知り合いで、スタジオに勤めるプログラマーです。

『スズカ』はミソラの同期のアイドルで、互いに実力を認め合える存在です。

第４５話　やるべき事（前書き）

この話は基本的に『ツバサ視点』ですが、４１話同様、一部『作者視点』になります。

第４５話　やるべき事

――――ホテル・ツバサの部屋――――

（　封真やスバル達にシャーロを案内する事になったのは仕方がないとして、適当に理由をつけて抜け出さないとな……　）

　オレがそんな事を思いながら支度を整える。チェックアウトは夕方で、飛行機は夜に出る。そのホテルを出る日は、何時でも出られるようにしておくのが個人的な鉄則だ。

コンコンッ

　ノックの音。誰か来た様だ。支度をしながらノックに応える。

「誰だ～？」
「オレだよ」
「封真か。……この際言うが、なんつう危ないもんをホテルに持ち込んでるんだお前は」

　封真が持っている袋の中には人に取り憑き、魂を吸い出す羽根が入っていた。封真はいつものにこやか笑顔でオレに近づいてくる。無論、部屋の外に封真以外いないのは察知済みなので、話す内容は選ばなくて良い。

「あのまま屋上に置いてると、誰に憑くか分からないからね。君の

所に持ってきてとっとと処分してもらおうと思ったってワケ」
「あっそ。こっちに着いたの何時？」
オレはそう言いながら袋を寄こせと手招きする。
封真はオレに袋を渡しながら答えた。
「昨日の昼頃かな？　夜の騒ぎで君がここにいる事が分かったんだ」
「ふぅん……」
ボッ！
袋の中にオレの手を入れて、羽根は燃える。
魔法から生まれた存在である以上、それに相対する魔法をぶつければ簡単に燃えてくれるのだ。人に憑いた後の【　羽　】はともかく、【　羽根　】の状態なら、結界から力を割かなくて良いからリスクもない。
一通り燃やし終わった後、オレは封真に尋ねた。
「……ところで、これはいつ渡す？」
オレがバッグから出したのは、昨日ソラのバカに奪われて取り返した物。ずいぶん前に予知夢で見た物で、封真が次に行く世界で必要となる物だ。
ちなみに、封真と出逢ったのは今日が初めてだったりする。
封真は侑子さんに聞いて、オレは予知夢で互いの事を知っているので、そういう意味ではこの【　出逢い　】は【　再会　】と言えるのかもしれない。

封真はオレの持っている物を見て肩を竦めた。

「今日中に渡してくれればいつでも良いよ。っと、君にお客さんみたいだよ？」

「客？」

「ツバサ～。ギブミーマネー！」

ノックもせずに入ってきたのはソラだ。念のための補足として、【　ギブミーマネー　】は【　私にお金をください　】という意味だ。

「何だよ、さっきの朝食の時に帽子代払ったろ？」

「実はホテル代も～～」

「……無いってか？」

コクッ

「……飛行機代は？」

「それは女将が出してくれたけど、ホテル代やその他は君からもらえって女将が……。あれっ？　もしかして女将と君って知り合い？」

「……昔ちょっとな」

あの旅館にはずいぶん前に2回ほどお世話になっている。だが、最後その時代の女将に、「オレの事は次の女将に伝えないように」って言っといたはずだが……やはり護らなかったか。こないだ暁達と行った時は互いに関係ないフリしてたのによ～。……あ、あん時は【　女将と客　】って関係だったからか……。

それにしても、さっきからすごく物欲しそうな目でソラが見てくる。

「……はぁ～。分かったよ。このホテルとこれから行く国のホテルの費用はオレが持つ」

「やったぁ！」

『良かったわねソラ！』

「うんっ！　それじゃあ私、先にロビーに行ってるね♪」

「へいへい。とっとと行け。現金娘」

ゲシッ！！

「いでっ！！　だからケリは無いだろケリは！！」

「現金なんてレディに失礼よ！　慰謝料(いしゃりょう)として娯楽費も……」

「おおかたそれが目的だろ？　とっとと行け」

「ム～～～～……」

「脹(ふく)れてもダメ」

「分かったわよケチ！」

バンッ！！

「……ドアぐらい静かに閉めろ」

「あっはっは。まぁ、それだけ可愛げがあるってことで」

「はぁ～……」

なんだか異常に大人な封真に、オレはため息が出た。
結局、封真にアレを渡すのは案内が一通り終わった後ということにした。

街を歩いている時、ジャックがオレのやる事を突っ込んできた。
これは利用できると考えたオレは、怒ったフリをして皆から離れることに成功した。

目的地に歩いている時、途中で空に舞い上がる蟲が見えた。おそらく、昨晩スバル達が戦ったというスナイパーの魂だろう。足は自然と速まる。

――――某所――――

人気の無い道。周りは全て同じようなレンガの壁。そこに入り口がある。結界が張ってあり、それ相応の力が無いと、その先の道が行き止まりの壁に見えるのだ。

そこを通ると目的の場所だ。

「……ここに来るのも久しぶりだな」

着いたのは民家の一部屋。昔、適当に買った家に術式を組み込んだものだ。部屋の中央には、オレの魔方陣が描かれている。

太陽の隣には月。そして四角形が3つずれて描かれており、それで生じる隙間には黄道十二星座の記号がある。

オレは目を閉じ、そこを護る者に語りかける。

「……この地を護るモノよ。我の呼び声に応えよ」

その瞬間、地面の魔方陣は輝き、おじいさんの様なしゃがれた声が部屋の中に響く。

『……我、万物を受け止める防壁の大地。生けとし生けるモノの温床であり、北を守護するモノ。……我を呼ぶ者、其(そ)は何ぞ?』

「我、創造主クロウ・リード。その名の下に、汝に命ず。我消えし時、この世界に悪意を持って入らんとせし者を永久に拒め」

つまり、オレが死んだら永久に飛王・リードをこの世界に介入させないという契約だ。今まで結界の維持はリアルタイムで魔力を送る事で維持してきた。しかし、自分の命を対価にして結界を張ると、その持続時間は他の対価の比にならない程に長くなる。そして、新たに張った結界が破れるまでに、飛王・リードは敗れるだろう。

しかも、【 消えし時 】だから、それまでは今の結界も効果がある。

……それに、オレが消えたら次元から出られないもクソも無いから、新しい方式に組み替える事で前提自体を組み替える事が必要だった。

要は結界を維持する条件を変えたという事だ。前までの【 常時供給 】という条件から、【 存在を対価にする 】へ条件を変換。これなら、【 次元全体に結界を張った術者はその次元から出られない 】という前提さえもくつがえせる。

オレが命じた後、再びおじいさんの様な声が響く。

『……しかとその命、受け取った……』

それ以後、その声は響かなくなった。新たな契約が受諾されたのだ。

「……さてと、スバル達のところに戻るか」

そう言ってきびすを返したとき、ふと飛王・リードがこの世界でやろうとする事がよぎる。おそらく、飛王・リードの元に先程の蟲が着き、その事でオレのいる世界での計画を意識したのだろう。

名を通して相手の考えを読めるのは良いが、アイツの計画を見るとこっちまで嫌な気分になる。

「……あんたの思い通りにはさせないよ。飛王・リード。……それに、ココロサーバーはオレが使わせてもらう」

そう。オレの計画のためには、ココロサーバーの存在は必須なのだ。飛王・リードには譲れない……。

来た道を戻り、待ち合わせの商店街中央の広場へ向かうと、そこには暁が何か言い訳をしていて、クインティア、ジャックがそれを笑っている。……面白そうだから聞いてみよう。

「どしたんだ？」
「おぉ、ツバサ。実は暁がな……」
「ジャック、言・う・な・よっ！！」
「……単語を区切って強く言われると余計に聞きたくなる。ジャック、逃げながら教えてくれ」
「おうっ！」

そしてオレは、暁がうまい棒とクラスナヤアクチャーブリを間違えた事を聞き、ジャックと逃げながら爆笑していた。
逃げている途中でカフェのテーブルに封真を見つけたので、彼の下へ向かう。暁はクインティアに抑えてもらおう。
封真はニコニコしながら、近づくオレに話しかけた。

「やぁ、ずいぶん楽しそうだったね。……って、いきなり周りに結界を張るのかい？」

封真の言う通り、オレはテーブルから半径2メートルぐらいの四方に小石ほどの水晶を置く。言うなれば簡易式の結界だ。

「ああ。あいつらにはお前に渡す物とかの魔法系を言ってないからな。……ってわけで、ハイ。この中に魔法に関わる物を入れれば、それが探知されないようになっている」
「ありがとう。……それと、面白い事になるかもしれないよ？」

「？　どういうことだ？」

封真はオレが渡したラグビーボールのような形状の物を受け取ったあと、意味深な言葉を言うのでオレは聞き返す。だが、その視線をかわす様に封真は広場の方に目をやった。

「スバル君たちが戻ってきたみたいだね」

言葉と視線につられて広場の方を見ると、確かにスバル達が戻ってきていた。……話を逸らされた感があるが、まぁ良いか。

スバル達が手に持っている袋からして、彼らは陶器を見てきたらしい。……こちらに話しかけてこないところを見ると、簡易式だろうと結界の効果は上々のようだ。

時間も夕方に近くなり、ホテルに向かう。チェックアウトと、買ったお土産をそれぞれの家へ送る手続きのためだ。

「……でっ、結局買ったのか。ぬいぐるみ」

「えへっ？」

「えへっ？　じゃない！　しかも何でそれがオレ名義になってんだ！！」

『ソラ……いつの間に……』

スザクの反応からして、こいつも気付かなかったようだ。ソラ……ある意味恐るべし……。

「男なら細かい事は気にしない！　それに、そろそろ行かないと飛行機の登場時間に間に合わないわよ～？」

ソラは自分の荷物を持ってそんな事を言っている。……この先も、

ソラにさんざん金を支払う事になりそうな予感が……。

なお、封真とはホテルを出る時に別れた。彼はこれから次の次元へ行くのだろう。……荒廃した東京に……。

――飛行機内――

なんとか飛行機に間に合い、今は全員ゆったりしている。

ハンターのニュースに新着として、昨夜のスナイパーが取調べ中に呆けた事が書いてあった。

「……『依頼者の名前を言う前に呆けて暗殺の依頼者は分からず』……か。一体、どこの誰かな？　心当たりが多すぎる」

「……心当たりが多すぎるって……。ツバサ君、君こそ一体何って感じだよ」

隣のスバルが呆れたように突っ込んでくる。ちなみに後ろの席では、ミソラとソラ、アイリスは女の子同士で話している。そしてジャックと暁、クインティアは3人並んで座っている。委員長トリオもまたしかり。

次はロンシャ。二つ目の国だ。

――――？？？　（　目線が作者になります　）――――

「……それで、クロウ・リードは始末できなかったか」

確認を取るのは飛王・リード。それに答えるのは初老の男性。白髪に深い青眼。その手に刻まれたしわと、オーダーメイドと思しき服が、彼のこれまでの苦労と立場の高さをかもし出させる。なお、飛王（フェイワン）・リードは次元に縦長の割れ目を作って男性に話しかけている。まぁ単純に、空間に割れ目を作って話しているモノと考えれば良い。

「申し訳ありません。……しかし、依頼者である私の名を言う前に魂が抜けたそうなので、次の手は打てます」

「フンッ。……まぁ良い。次の一手も貴様に任せる」

「ハッ！」

割れていた次元は閉じ、飛王・リードが消える。男性の前には、閉じられたカーテンが陰の気配を放っていた。

ツバサがアイリスに頼まれて結界を開けた時に、飛王・リードは羽根に混じってスバル達がいる世界に介入。そして、この人物をこの世界の協力者にしたという訳だ。

男性は静かに棚の上の写真立てを見る。その写真には、互いに笑いあう男女の姿があった。

「……わたしは、必ず君を蘇（よみがえ）らせてみせるよ。……シンシァ……」

コンコンッ

「入りたまえ」

男性がドアをノックする音に答えると、秘書と思しき者が現れた。

「もうすぐアジーナ大使との面会のお時間です。大統領」

「分かった。今行く」

秘書の声に頷くのは、現アメロッパ大統領。アーノルド・ローグその人である。

第４５話　やるべき事（後書き）

念のために言っておきますが、国のお偉いさんが飛王・リードの手下ってのは思い付きではありませんよ。国がどこであれ、お偉いさんが飛王の手下ってのは構想にありましたから。

番外編　？（前書き）

今回は穴山銀次郎さんの書いている『流星のロックマン～新しい流星の戦士～』のソウガ君の名前が出てきます。
穴山さん、許可して頂きありがとうございます。

番外編　？

どうも。作者です。前回はオレの不手際の穴埋めに番外を使いましたが、今回は違うテーマで進めたいと思います。では、最初のゲストの方どうぞー！

「……で、なんで僕なの？　普通ここはスバル君かミソラちゃん。またはツバサ君とかアイリスがやるべきでは？」

そんなわけで、ドッグ・ツインこと陸ケンジ君です。

「……無視ですか。その上、【　そんなわけで　】の前の説明がないし……」

それは今回のテーマに関係しているのですよ。では、二人目の方どうぞー！

『……まさかこれほど早くわたしが出るとはな』

「あれ？　エーテルっ様？」

『……貴様、今慌てて【　様　】を付けただろ』

はいはい、そこで険悪な雰囲気にならないでくださいよ、２人とも。それでは、今回のテーマの発表です。今回のテーマは……。

『出番の少ない人がかわいそうだからこれを機会に出してあげよう』っというテーマです。エーテルは４話目でエアディスプレイに登場しただけですし、ドッグ・ツインも１６話以降まったく出てないので。

「ケンカ売ってます？　ちょうど今電波変換している状態なので一

思いにやってあげましょうか？」
『ムダだと思うが？』
「いいえ。止めないでくださいエーテルさん。作者だろうと容赦はしません」
どうぞご勝手に♪　いちおう、状況が分かるようにナレーションも務めますか。
「その余裕がむかつく。それじゃあ早速、エンドブレスッ！！」
ドッグ・ツインの赤と青の極太の光線が作者に迫る。しかし……。
キュンッ！！
「はっ？」
光線は作者に当たった瞬間反射し、ドッグ・ツインに向かう。
ズドォォォンッ！！
攻撃による爆発と煙が収まった時、そこには黒焦げのドッグ・ツインが倒れていた。……以上、ナレーションモード終わり。

『……ムダだったろ？』
「ケホッ……何今の？」

ふっふっふ。強いて言えば、『とある魔術の●書目録』の一方●行的な？　運動量、熱量、電気量。体に触れた瞬間、ありとあらゆるベクトルは自由自在。攻撃を相手に反射する事も可能です。

「……エーテルさん、著作権とか大丈夫なんですか？」
『あの作者はそんなこと気にしないだろ。大体、わたしの見た目の補足でポケ●ンのカ●リキーみたいっていったヤツだからな。……わたしはあのような筋肉ムキムキのたらこ唇（くちびる）ではない』

「……詳しいなオイ……」↑作者とドッグ・ツインのハモリです。

あ、データファイルにも付け足しましたが、エーテルは子供です。

「……究極のネタバレじゃね？」

う～ん。少なくとも、現実のオレと面識のある人はこの先の展開を知ってますかね？
あ、念のために一言。ラストは【　ラスボス倒してハイお終い　】という最後ではありません。

『……個人的な話は控えた方が良いぞ』

は～い。

「『　……　』　（　ホントに分かってんのかこいつ？　）

「それじゃあ今度は僕達が作者さんに質問します。この小説のタイトルである【　明日へ　】意味は何なのですか？」

『確かに、始まってから一度も【　明日へ　】っていうのに関わるストーリーはないな』

ふっふっふ。その意味は最終回で分かりますよ。先日、クラスメイトが「どこが【　明日　】へなんだ」って、オレの小説を鼻で笑った夢を見ましてね。

たしかにそう思っている読者さんがいてもおかしくないな。と思い、本編で使うその場面はすでに書いております。その他にも様々なシーンを思いついた時に書いてるので、その話を書く時焦らなくて済みそうです。

「夢ですかっ！　あなたはクロウ・リードですかコノヤロー」

いやいや、おかげでその場面は出来たから後はそこまで書いて載せるだけ。良い機会だったよ。

「ポッジティブ～。さすがだてに中高と……」

それ以上はオレの記憶に関わるので伏せてください。あ、ちなみにドッグ・ツイン君はスバル達が旅から帰るまで出番はありません。

「酷ッ！！　僕って敵キャラとして最初に登場した電波変換体だよね！？　その扱いは酷くない！？」

そしてその時は、ゴニョゴニョ……。

「再登場時がそれって酷ッ！！」

ごめん。謝るしかない。

『……ところで、なぜわたしが呼ばれたのだ？　この様子だと作者とドッグ・ツインで十分そうだが』

あぁ、それ。それは他の小説、例えば穴山銀次郎さんの書いてる『流星のロックマン～新しい流星の戦士～』のソウガ君と違って、君の能力が未知数だから、ここで今後に影響が出ない程度にサラッと出そうかと。君の能力を少しだけ出した方が、読者の皆さんに興味を持っていただけるかな？　って、思ってね。

『……』

エーテルの言いたい事は分かるけど大丈夫ですよ。この空間は君の危惧するような事はないから。そんなわけでドッグ・ツイン君、オレに攻撃して？

「やだよ。また反射されるもん」

今度はエーテルに反射しますから…ね？　さてと、ナレーションモードっと。

『作者、貴様勝手にっ……』
「先に謝っときます。ごめんなさいエーテルさん。エンドブレスッ！！」
『……後で見てろよ。ドッグ・ツイン』

ドッグ・ツインの放った光線は作者に迫り、それは向きを変えてエーテルに向かう。
エーテルは４本あるうちの１本の腕を前に出した。光線がエーテルの手に触れた瞬間……。

パシュゥゥゥ……

光線は霧散し、エーテルは悠然とそこに立っていた。……はい、ナレーションモード終わり。それと、これ以上はネタバレになるので能力の詳細は明かせません。

『……まぁ、これぐらいの情報なら問題ないか』
「しっかし今度はアメロッパ大統領登場か～。ずいぶん色んな人や要素が出てきてるけど、作者さんって混乱しないの？」

（……攻撃しといて忘れてるからエーテルが怒ってる。後でドッグ・ツイン、半殺しに会うな……）

「作者さ～ん？」

ああ、ごめん。……そうですね……オレは大丈夫ですが、この辺で今の状況を整理しときますか。まず……。

・今現在エーテルの創った東西南北の者達は、スザクが寝返り、ゲンブがツバサに拉致られて共に旅行に付き合う。セイリュウとビャッコはまだ戦っていない。

『なお、地球のはぐれウィザード達はオリオンに任せている』
「エーテルさんは働かないの？」
『わたしはわたしでやる事があってな』

・現在スバル達はツバサの旅に付いて行っている状態。今は2つ目の国であるロンシャへ向けて飛行機で移動。

・侑子はツバサと知り合いで、彼の本当の名が『クロウ・リード』であると知り、彼の目的も知っている。

「その上ツバサが飛王（フェイワン）・リードから力を奪う計画も同時進行中ですか。よくやるわ……」（呆れ）

・『エンシェントサーバー（作られた当初はシャインサーバーという名前だった）』と『ネビュラサーバー』の管理者はそれぞれセレナードとフォルテ。エンシェントサーバーのＰＧＭはスバルが、ネビュラサーバーのＰＧＭはツバサが持っている。

「なんで名前変えたんだろ？」

それにも理由はあるんだけどね。……『ｘｘｘＨＯＬＩＣ』を見た人は勘付くかな？　名前って大事ですからね。

・ネビュラサーバーの中には、フォルテとツバサ、そしてそれの対（つい）となるエンシェントＰＧＭの３つで押さえている怪物がいる。

「そんなにしないと押さえられない相手って……」

『漠然とした正体はすでに本編に載ってるがな。……闇だったか』

・ツバサには『レイ』というナビがいて、かなり昔に亡くしている。

なお、レイを創ったのは帯広博士。

「おまけに本編を見る限り、失った理由は帯広博士とも関係がありそうだね」

・大吾は宇宙へ仲間を集めるために旅立つ。

・スバルが蟲（コ）の羽根をかすかにだが見れた。

・飛王（フェイワン）・リードがスバル達の世界でしようとしている事は、世界丸ごと魂を得るための世界にする事。そのために『ココロサーバー』を狙っている。ツバサもまた、ココロサーバーで何かをしようとしている。

「ココロサーバーって確か、感情を相手の心に直に送って相手の心を望みのままに染めるってやつだっけ？」

ええ。飛王・リードはそのために、アメロッパ大統領を引き入れたわけです。

・ナビの反乱が１６０年前。ツバサはこれから起きるであろう『１６０年前の悲劇の再来』を、１５０年前に夢で見た。

今後の展開に関係ありそうなのはこんなとこですね。他に気になる事があれば言って下さい。今回みたいな感じでまとめます。

エーテルもドッグ・ツインも、サポートありがとうございました。

「いや、僕この後どうなるか聞いたからね。絶望一色だよ」

『……最終回まで本当に続くのか？　これ』

続けますって。オレがそれまでに何かで死ななかったらね。それでは、『番外編　弐』はこれにて終了します。

番外編　？（後書き）

今回はストーリーの整理と、最近役が少ない人を出すのがテーマでした。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

第４６話　告白（前書き）

スバミソファンの皆さんお待たせしました。今回はいよいよ……。
あ、多少控えめにしている事はご了承ください。

第４６話　告白

――――ロンシャ――――

二つ目の国、『ロンシャ』に着いた時、スバル達は真っ先にベッドへ倒れこんだ。地球を3度救ったスバルをも倒れさせたその要因は『時差ボケ』である。

『ニホン』と『シャーロ』なら大して経度は違わない。しかし、そこからロンシャ（欧州）となると、半日ほど体内時計に時差が生じる。ロンシャに着いたのは昼頃。それはつまり、今ニホンは夜という事だ。

スバル達は目の前の明るさと自分の体内時計のズレに翻弄（ほんろう）され、倒れるように眠りについたという事だ。

無論、ツバサも時々監視者の仕事をサボって世界を周る事はしていたが、ここ数年はニホンに居たので彼も例外では無い。

（この眠さがとれたら結界を張り直そう……Ｚｚｚｚｚｚｚｚ……）

ツバサはそんな事を思いながら眠りにつき、ミソラも……。

（このホテルに来るまでのロンシャの景色って綺麗だったな～。ここならスバル君に……Ｚｚｚｚｚ……）

乙女の想いを固めつつ、彼女も眠りについた。

同時期、ロンシャに着いた男が居た。世界的に顔が知られている人間なので空港は使わない。その男が使うのは電波変換だ。

「ここにロックマン…いや、星河スバルが……。ンフフフ」

――夜――

辺りは暗いが、スバル達の体内時計では朝だ。
スバルは欠伸(あくび)しながら洗面台に向かう。

「顔でも洗ってスッキリしよう……」

洗面所のドアノブに手を触れた瞬間、それを待ちわびたかのように部屋のドアが元気な声と共に叩かれた。

「こんばんわー！　スバル君起きてる～？」
「……ミソラちゃん？　ちょっと待って、今あけるから」

ガチャ

ドアの鍵を開けると、そこにはいつも通りの元気なミソラが立っ

ていた。

「ミソラちゃんずいぶん早いね」

「ふふっ。スバル君、それを言うなら『遅すぎ』だよ？　周り夜だし♪」

「あ、そっか。……まだ時差ボケが……」

スバルは去年、世界各地を周る事になったのだが、電波変換して短時間で移動したので時差ボケの恐さは今回が初めてだ。ミソラも少し眠そうだが、アイドルとして『休める時に十分に休む』というのが徹底されているのだろう。スバルよりはいくらかマシだ。

そして彼女には、もう一つ眠っていられない理由がある。それは……。

「……ねぇ、スバル君？」

スバルを見るミソラはいつもより顔が赤く、モジモジしていた。だが、スバルは今半分眠っている状態。ミソラの変化に気付くのは難しかったので、スバルはいつも通りの調子でミソラにどうしたかを尋ねる。

「なに？　ミソラちゃん？」

「その…えっとさ、もし良ければ、これから…散歩に行かない？」

スバルは、彼女の言葉と態度の意味にやっと気付いて、その顔をミソラに負けないぐらいに赤くした。

スバルは世の中の男を二分化すれば『鈍感』に入るが、その言葉の意味に気付かないほど極度の鈍感でもない。その上、面白いくら

いに純粋なので、気付いた時の赤面も人一倍だ。
余談として、２００年前の人物である光熱斗（ネット）はこれにも気付かないだろう。

余談はこのぐらいにして、スバルはミソラの誘いに思いっきり顔を真っ赤にして慌てている。

「えっと……それって…２人…で？」
「……２人じゃ…イヤ？」

ミソラの上目使いにやられるのは、スバルも例外では無い。

「イ、イヤじゃないよっ！　……ただ、その…念のために置手紙とか用意しないと皆が心配するかなって…」

スバルのその言葉を聞き、ミソラの顔は満開の花のように輝いた。

「それじゃあ、誰かに私達が外出する事を伝えれば良いんだね！？」
「う、うん。それなら、その…２人で行けるよ」

スバルが少し顔を赤らめながらミソラとの散歩を了承する。ミソラはそれを聞くといっそう顔を輝かせて、自分のハンターからハープを呼んだ。

「ハープ、話聞いてたよね？」
『もちろんよ、ミソラ。私から誰かに言っとくから、安心してデートに行っていらっしゃい？』

デートという単語にスバルとミソラは顔を見合わせてぎこちない笑みを浮かべて顔を逸らす。ハープはそんな２人をクスクス笑って

いた。
顔は依然赤いまま、ミソラはハープにお礼を言う。
「ありがとう！　ハープ！　さぁ、行こう！　スバル君！」
「うんっ！　それじゃあハープ、行ってくるよ」
『えぇ。スバル君もミソラを頼んだわよ？　……っと、その前にスバル君。ちょっとあなたのハンターにお邪魔するわよ』
「へっ？」

スバルの間の抜けた声と共にハープがスバルのハンターに入る。
直後、荒々しい声で悲鳴が響く。

『おわぁぁぁぁ！？　ハープっ！　何でてめぇスバルのハンターに！？』
『あんたがいると邪魔なのよっ！　さっさと出なさい！！』

ハープが無理やりウォーロックを引っ張り出す形で、スバルのハンターから出てきた。

『それじゃあスバル君、私はこのＫＹ星人を拉致してどこかに縛って置くからゆっくりしていらっしゃい？』
『オイハープ！　ＫＹ星人って何だよＫＹ星人って！！』
『黙って来なさい！』

そして2人の電波体は夜空を駆けていった。残されたスバルとミソラは少しの間呆然としていたが、照れたように互いの手を握り、ホテルを出た。

一方ツバサはというと……。

「……霧の街、様々な歴史の眠る街……。いつ来てもロンシャの夜は綺麗だな」

タワーブリッジから夜の街と河を見ていた。タワーブリッジ（橋）の下を見ると、テムズ川が黒いうねりと共に静かな水音を奏でている。

先程ツバサは二つ目の封印を終えて、ホテルへの道すがら寄り道しているのだ。その時……。

「ッ！！　この感じは蟲（コ）の気配！　……ロンシャ塔の方か」

ロンシャ塔はかつて、宮殿兼要塞（けん）であり、血生臭い歴史の宝庫だ。故に幽霊話が多いので、深夜にこの敷地内に入るのは幽霊を見に来た物好きや、やましい事を考えている人間ぐらいだ。

木々の影の中で動く影。ツバサからは漠然とした形しか見えないが、その人間は地面に置いてある羽根を拾おうとしている。羽根は暗闇で僅（わず）かに光るので、それに興味を持って拾おうとしているのだろう。

せめてもの時間稼ぎにと、その人間に声を張り上げる。

「それに触るな！！」

しかし、その人間が動きを止めたのは羽根に触った直後だった。

『ギキィィィ！』

その鳴き声は、地球上のどの生物にも似ていない。

羽根は卵に巨大な羽をつけた怪物になり、目の前の人間に自身の触手を伸ばす。その触手は、植物の根が土から養分を吸い上げるように、取り憑いた対象から魂を吸い出すのだ。

その人間は目の前の怪物に気付いたらしく、異形の者に対しての恐怖で腰を崩した。

ツバサは舌打ちをして唱え始める。

「チッ！　火よ。クロウリードの名の下に、彼（か）に憑こうとせし者を汝の炎で焼き尽くせ！」

同時に、自身の人差し指と中指を立てて、胸の辺りで横に振る。

ボォォォォ

指先に火の玉が発生し、腕を振り抜く頃には３０ｃｍほどの火の鳥になっていた。火の鳥は蟲に突進し、吹き飛ばす。そして、体勢を立て直す前に炎の体を押し付けて蟲は燃えていく。

燃え尽きたのを確認してから、ツバサは人間に話しかける。

「おい、ケガとか無いか？」（……緊急時でつい名乗っちまった……）

本来なら封真の時みたいに素手で触った方が魔力を大して使わなくて良いのだが、先程の場合タッチの差でアウト。しかし、ツバサにとっては自身の名を明かした方が重大だった。

魔法の使用は何も名前を名乗らなくても出来るには出来る。しかし、名乗った時と比べて作動までの時間が少しだけかかる。先程の様なコンマ何秒を争うような緊急時では、名を名乗った方が確実だ。

しかし、相手に名が知られるという事はその者に自分の魂の端を掴まれる様なもの。ゆえに、『魔術』に関わるあっち側の人間は偽名を使う。良い例が【　壱原　侑子　】だ。

ツバサのそんな危惧にはつゆ知れず、人間はお礼を言ってきた。

「なんだか良く分からないがありがとう。……ンフフフ」

（……ん？　この笑いは……）

ツバサが自分の記憶を辿っている内に、その人間はツバサの前に姿を現した。

その姿を見た途端、ツバサは驚きの声を上げる。

「ハイド！？」（　前にサテラポリスの事件ファイルで見たことがある。ナルシストな笑い声が特徴的な第一級犯罪者……）

自身の名を言われた男はたじろぐ。

「ッ！？　貴様なぜその名を！　……そうか。貴様サテラポリスだな？　ちょうど良い。これから星河スバルの仲間を何人か攫って、散々痛めつけた後でロックマンから力を奪うつもりだった。貴様には最初の人質になってもらおう。電波変換！！」

ハイドが電波変換する一瞬のスキを狙って、ツバサはハイドに背を向けて走り出した。電波変換すれば身体能力が格段に上がるので時間稼ぎにしかならないが、しないよりはマシだ。

「あ～、助けなけりゃ良かった！」

「ンフフフ。そう言うな。おかげで君は私の脚本に参加できるのだぞ？　光栄に思いたまえ。ステッキソード！」

「ッ！」

ツバサが自分自身にグチを零した時、ハイドが電波変換した『ファントムブラック』はいつの間にかツバサに追いついていた。そのままステッキを振って攻撃してくる。

――――　一方スバルとミソラは　――――

ツバサが橋の上から河を見ていたのに対し、スバルとミソラはベンチに座り、河を横から見ていた。そこにあるのは、照れから来る沈黙。

「……」（まずい。何か話さないと）

「……」（う～～。自分から誘っといて何してるのわたし）

スバルとミソラは秘かに深呼吸して相手に話しかけた。

「「　あ、あの。……えっ？　」」

どうやら2人とも同じ事を思っていた事に気付いたスバルとミソラは、互いに緊張の糸が解けたらしく、顔が明るくなった。
ミソラもリラックスできたらしく、スバルに自分の想いを伝える。

「あのね、スバル君。私……キミの事がっ……」

ズドォォォォン!!

「な、なに!?」

突如起こった爆音に、スバルはミソラから目を逸らす。音はロンシャ城からしたようだ。
一方ミソラは告白を爆発で遮られ、さらにはスバルの意識がそっちに行ってしまったことに柄にも無く『プッチン』と頭の中で何かが切れてしまった。

「スバル君!!!」
「ハ、ハイ!!」

ミソラが突然大声を出し、それによりスバルは怯えている。
ミソラはキッとスバルを見た。

「私はスバル君が好き!!　この地球で、ううん。宇宙の誰よりも、君の事が好き!!」

切れた時の勢いに乗って、ミソラはスバルに告白する。我ながら大胆だと思ったのか、言い終わった後で自らの顔を赤くしながらも、

目は強気なままでスバルを見据える。

「……スバル君は？」

それでも、告白するのと答えを聞くのは別々の勇気がいることだろう。ミソラは少し自信無さ気に、しかし、それでも勇気を出してスバルに聞いたのだ。

当のスバルは、突然の告白とミソラの剣幕に目を見開いて驚きながらも、彼女のエメラルドグリーンの瞳から目を逸らさず、正面から彼女を見る。

「僕も、ミソラちゃんの事が好きだよ」

「ッ！！　ありがとう！　スバル君！！」

そう言いながらミソラはスバルに抱きつく。そしてスバルは……。

ボンッ！！！

自分でも勇気を出して返事を返した直後に抱きつかれたものだから、二重の衝撃で頭がショートしたのだ。その音はミソラにも聞こえるほどで、ミソラは心配そうにスバルを見る。

「大丈夫？　スバル君？　今変な音がしたけど……」

スバルの顔は真っ赤だ。それは緊張と恥ずかしさ。そして……自分を『好き』と言ってもらえたことの嬉しさからだろう。

その後2人はホテルに戻ったのだが、般若のごときルナが待っていた。その後ろでハープが手を合わせている所を見ると、彼女にスバルとミソラが一緒に外出している所を知られてしまったらしい。そして、2人を問い詰めるために玄関ホールに待っていたという事だ。

ルナの後ろには、ゴンタ、キザマロが怯えている様子で立っている。ツバサはまだ帰っていない。

後ろに業火を背負いながら、ルナはスバルとミソラに問う。

「……2人で何をしてきたのかしら？」

質問がシンプルな分、恐さは倍増だ。スバルとミソラは小一時間眼光に晒される事を覚悟してミソラの告白と、スバルがそれに応えた事を話した。

ゴンタとキザマロはショックを受けた顔をして、対するルナは恐いぐらいに落ち着いて聞いていた。

一通り話し終えた後、ルナは口を開く。

「……そう。良かったわね。けど、周りが暗い時に出るのは感心しないわ。これからは私達の誰かに断っていきなさい。……それと、私は自分の部屋に行って来るわ。まだ少し時差ボケがあってね、正直眠いのよ」

「あ……うん。おやすみ」

「えぇ。おやすみ」

そう言うなり、彼女はドアの向こうに消えた。スバルを始めとした男子はなぜすんなり済んだかを議論し、ミソラやハープはルナに感謝と尊敬の念を抱いた。悔しくてもそれに耐え、スバルとミソラ

を祝福したのだ。
部屋を出たルナは、自身のウィザードであるモードに話しかけた。
「……ねぇ、どうだった？　モード」
『ルナちゃんは良く頑張りました』
「……ありがとう。……それと、悪いけどしばらく私の部屋に誰も入ってこないようにしてくれる？　……少し……」
この後は彼女のプライドが言うのを許さない。モードもそれを理解し、頷いた。
その晩、ルナの下の部屋に居た客は上からすすり泣く様な声を聞いたという。

第４６話　告白（後書き）

う～ん。やっぱり異性を書くのって難しい……。それに、最初の方の『体内時計』の件が自信が無かったり……。海外旅行はしたこと無いので……。

それと、容量の関係で１話を２話に分けたので、もう１話更新します。

第４７話　密約（前書き）

ミソラの告白を邪魔した爆発の正体が明らかになります。

第47話　密約

――――さて、先程の爆発の正体は――――

「ンフフフ。どうした、さっきから逃げてばかりではないか」
「はぁ、はぁ……。人間が電波変換体に勝てるわけねぇだろ」

そう。電波変換した人間とは、電波変換前と比べてパワーもスピードも人間の比では無い。いくらツバサがケンカが強いと言っても、基本能力の差で圧倒されるだろう。

いちおうツバサはリアルウェーブで生成した棒（　旅館で暁にぶん投げた物で、長さは1．5メートルほど　）で応戦してはいるが、ファントムブラックの攻撃を避けたり防いだりが精一杯で決定打は与えられず、かといって逃げられない。

ちなみに彼の体内にエネルギーが多量にあるといっても、腕力などの身体能力には大して貢献（こうけん）しないのだ。むしろそのエネルギーを攻撃などに回すという事は自分の寿命を減らすようなものなので、ツバサはまず使わない。

さらに都合の悪い事に、今ツバサの元にはジョーカーもアイリスもいない。シャーロで取調べ中に呆けた男の件で理由を突き止める会議があるらしく、暁とクインティアはもちろん、そしてアイリスとジョーカーも付いて行ったのだ。

（チッ！　あのスナイパーが取調べの時どういう態度や様子だったかを聞きたくてアイリスとジョーカーも行かせたが、これは失敗だ

ったかな？）

ツバサは地面から襲い来るイービルクローを横っ飛びで避けながらそんな事を考え、対するファントムブラックは優越感に浸ったような声でツバサに攻撃と提案を同時にする。

「ンフフ。それなら大人しく捕まりたまえ。ファントムクロー！！」

「やばっ！」

今度はファントムブラック本人の胸から悪魔の様な黒い腕が出てきてツバサに向かう。対してツバサは着地したばかりで反応できない。

「……ンフフフ。捕まえたぞ？　どうかね？　気分は」

黒い腕はツバサをしっかり握り、ギリギリと締め付ける。

「ッ！　……良いわけ…ねぇだろ。ナルシスト脚本…家」

「……どうやらまだ痛い目に合わなければいけないようだな。……ふんっ！」

ファントムブラックはツバサを投げ飛ばし、壁に強く打ち付けた。

ズンッ！

「グッ！　ゴホッ！　ゲホッ！」（……クソッ、これで動けると思ったら…今度は…呼吸が苦しい……）

ファントムブラックを挑発して自身を解放する作戦だったが、予想以上に強く打ち付けられた事でむせているのだ。一方ファントムブラックは、自身のマントを掴んで最大の大技を構える。

「無傷とはいかないが、多少のケガを負った状態でスバル達に見せつけるとしよう。お前がわたしをけなすから悪いんだ。ファントムスラッシュ！！」

ズドォォォォン！！

ファントムブラックはツバサの目の前で高速回転。巻き起こる衝撃波でツバサの後ろの壁は大きな音を立てて崩れた。

攻撃が終わり、ファントムブラックの目の前には穴の開いた壁があるだけで、ツバサの姿は無い。

「……テムズ河に落ちたか。仕方がない。あいつは大事な人質だ」

ツバサを探そうとファントムブラックは河を覗き込むが、そこにもツバサの姿は無かった。

「？　どこへ……？　……ッ！！」

ファントムブラックに、後ろから殺気が突き刺さる。

長くサテラポリスから追われていれば、嫌でも自分を狙う者を察知する感覚が鋭くなる。しかし、今ファントムブラックには後ろを向く事が出来なかった。木々の作る闇の中に得体の知れない存在がいるような気がして、恐怖により体が言う事を聞かない。

「……まさか、あんたなんかに一部とはいえ力を使う羽目になるとはな……」

それはツバサの声。表情どころか、姿さえも闇に溶けて見えない。静かにツバサが構えたのは気配で分かるが、それ以外は分からない。

その直後、ファントムブラックは先程自分が開けた穴へ吹っ飛ぶ。『見えない何かに背中を殴られ吹き飛ばされた』ファントムブラックには、そのぐらいの事しか分からなかった。

ファントムブラックが目を覚ました時には電波変換が解け、ハイドに戻っていた。ツバサはそばでハイドを見下ろしている。

「目が覚めたか犯罪者」

「ンフフフフ……。貴様は何者だ？　今の力は……」

ツバサはハイドの質問に対し、有無を言わせない一方的な口調で遮(さえぎ)る。

「ハイド、お前に聞きたい事とやってもらいたい事がある。協力しなければ即行でサテラポリスロンシャ支部に連れて行く」

「……ンフフフ。それは交渉ではなく一方的な命令だな。……わたしが答えても良いと思える物なら答えよう」

「フッ。……それじゃあまず聞きたい事。今回は誰かの差し金か？　それとも自分でスバルの居場所を掴んだか？」

スバル達がこの国に滞在するのは2日間。その短い時間にハイドがここにいたのは、偶然で済ますには不自然すぎる。ハイドは「そんな事か」と言わんばかりにナルシストな笑みを浮かべた。

「ンフフフ。そんな事、ウラ社会のネットワークにかかれば簡単なことだ」

確かにウラのネットワークは情報の宝庫だ。しかし、その情報を流したのは誰だろう。

ツバサはその事をハイドに問うが、巧妙に情報源を隠蔽（いんぺい）してあって探れないという。

「……それじゃあお前にやってもらいたい事だが、……だ。時が来るまで大人しくしているんだな」

ツバサがハイドにやってもらう事を伝えた時、彼の目は大きく見開かれ、しだいに笑みが広がってきた。

「……ンフフフフ……。面白い。貴様の脚本に乗ってやろうではないか」

そう言うなり、ハイドは森の闇に消えていく。ツバサはハイドが消えた闇を見ながら呟く。

「……やっぱり、あれを飼うにはリスクがデカイな。……けどまぁ、放って置くよりはマシだからね。……っ！？」

呟いた後ホテルへ戻ろうとしたが、自分の足が力無く崩れる。

ガクッ

ツバサは膝(ひざ)をつき、自嘲的に自分の手の平を見る。

「……ははっ。さっきので2年分ぐらいの寿命(エネルギー)を使ったかな？　……少し、休んでいくか……。久々に使って疲れた」

先程のツバサの攻撃は、自らの寿命である『内包するエネルギー』を対価にしたのだ。

ツバサは、風で奏でられる木々の歌声に耳を傾けながら、静かに眠りにつく。短時間で大量のエネルギーを使ったので、体がそれに慣れるまでは動けないだろう。

第４７話　密約（後書き）

次回の更新は１０月５日です。……前回はすさまじい間違いをしてしまいましたからね。９月１日って……一年待てと……？　我ながら大失態です。

第４８話　歴史の眠る街（前書き）

案外早く仕上がったので投稿します。新たに登場するキャラクターはすでにデータファイルに載せています。

それと、今回は『息抜き』みたいな感じで豆知識の要素が多くなっています。「へぇ～。それは知らなかった」とか、何となく得した気分になってくれると嬉しいです。なお、全体的にインターネットで調べたモノですが、名前だけで内部構造が分からなかったので、中はオレの想像です。ご容赦をお願いします。

第４８話　歴史の眠る街

ロンシャに来て２日目。スバル達は周辺を観光する事になった。
帰ってきたばっかりのツバサは「少しは休ませろ」などとグチを言っていたが、全員から『案内しろ～』という視線とオーラを受け続けて観念したらしく、ツバサは頬杖をついてどこに行きたいかをスバル達に聞いた。

「……ちゃんと行きたいところがあるんだよな？」
「「「「　ビックベンッ！　」」」」

満場一致とはこういうのを言うのだろう。ツバサは思わず頬から腕が外れてしまった。
ロンシャといえば『ビックベン』というぐらいに有名なので、この結果は当然といえば当然だ。

その後、スバル達は荷物をホテルに預けてその周辺を周る事にした。
先頭を歩くツバサが、ビックベンを指差して解説する。

「ビックベンという名で親しまれているあの時計塔だが、実際にはそれがメインの建物じゃない。正式には、ウェストミンスター宮殿……まぁ、言ってしまえば国会議事堂だな。そこのサブ的な建物だ」
「へぇ～。それじゃあ、ビックベンに繋がっている大体２，３階の建物が国会議事堂なの？」
「ああ。もっとも、一時は法廷としても利用されたらしいがな」

スバルの質問にツバサが答えた後、クインティアが思い出したように口を挟んだ。

「……そういえば、今の議会制政治はこの国から始まったのよね。オリバー・クロムウェルだったかしら」
『さすがクインティアさんですね。その通り、オリバー・クロムウェルという人物は国内秩序と対外的安全の確立のために、国務会議によって指導する協調的な議会主義的共和制をとることで、その後の議会政治の礎（いしずえ）を築いたとされています』
　アイリスの説明にゴンタは頭にハテナが浮かんでいたので、ツバサは補足を加える。
「簡単に言えば、【　国の内と外を整えて、物事を決める時は皆で相談して決めましょう　】っていう流れがその時できたってことだな」
『……ツバサ。お前の解説、人間の歴史がやたらと子供っぽく聞こえるんだが……』
「ウォーロック、お前なぁ。オレがせっかく分かりやすく説明してんのに何だその言い様は。やっぱあれか。お前はＫＹ星人なのか」
『なっ！　何でツバサが！　……ハープ、てめぇか！』
『ポロロン。イエスアイドゥー！』
「ははっ。その通りだってさ」
『ハープてめぇ！！』
　ハープの英語をツバサが訳して、ウォーロックとハープは追いかけっこ開始。彼はウォーロックが怒る事を予想できていたが、それでも訳した理由はただ一つ。『面白そうだったから』である。
　ウォーロックがハープを追い掛け回している時、ツバサはビックベンの名前の事を持ち出した。ウォーロックはハープを追いかけながらツバサを睨んでいる。彼は後で痛い目に合いそうだ。

「そういや、ビックベンの由来ってかなり面白いんだぞ？」
「へぇ～。どんな？」

スバルはウォーロックとハープの追いかけっこから目を逸らして尋ね、対するツバサは笑いを堪えている様子で説明した。

「それがな、ビックベンの名前を決める議論で、国会議員のサー・ベンジャミン・ホールって人ががめちゃくちゃ長い演説をしたんだ。それに対して仲間の議員が【　アイツの事をビックベンと呼んでやれっ！　】と野次って、その場は笑いに包まれた。そしてそのまま時計塔の名前もそれに決まっちゃったってわけ」

「あはは。確かに面白いね。ツバサ君の話はいつも暗いから今回の話は新鮮だったよ」
「……スバル。楽しんでもらえたのは嬉しいが……それ、さり気に傷つく」
「その上、それは単なる一説に過ぎないでしょう？」
「グッ……。クインティアまで……」

先程までの上機嫌はどこへやら。スバルとクインティアのダブルパンチでツバサは沈んだ。あまりに激しい表情の変化で皆は笑い出す。その変わりようを例えるなら【　百面相　】だ。
ロンシャの町並みに、スバル達の笑い声が響く。

笑いの中、ミソラはアレは何かと指を差す。その先には、緑に覆われた宮殿があった。昨夜ツバサがファントムブラックと戦ったロンシャ塔である。

ツバサは戦闘があった事とは違う意味で苦笑した。

「う～ん。さすがアーティスト。感性抜群だな」

「へっ？　どういうこと？」

『今でこそ観光名所になっているけど、あの宮殿は昔処刑場としても使われていたの。今でも幽霊や亡霊の話が後を絶たないわ』

ミソラの疑問にはアイリスが答え、生徒会長こと白金ルナは即答する。

「あら、それは面白そうね。早速行きましょう」

それに対し、幽霊が苦手なスバルは当然反論する。

「い、委員長……。それはまずいんじゃないかな？　ほら、呪われたりとか……」

「何を言っているのスバル君。そんなモノがいたんじゃ観光客の迷惑になるわ。私達で解決しましょう」

「なんだよスバル。幽霊が恐いのか？」

「そ、そんなんじゃないよ！」

ジャックのからかいにスバルは慌てて反論し、ジャックは「けけけっ」と笑っている。

「だけど、でも……」

「行こう。スバル君」

「男の子なら覚悟決めなさい。それでもロックマン様なの？」

「委員長……どんな理屈だよ……」

スバルは最後まで逆らっていたが、ルナとミソラに腕を引っ張ら

れて『いざ入場～』。という感じだ。

――ロンシャ塔内部――

そもそもロンシャ塔とは、見た目こそ立派な宮殿だが、実際の所は王位継承争いで敗れた王妃や貴族、反逆者を閉じ込める場であり、拷問や処刑の場にも使われていた。

本丸とされる中央には、ホワイト塔と呼ばれる最も古い建物があり、その周囲をベル塔、血染めの塔、ブラック塔となどと呼ばれる２０個ほどの塔や、２つの礼拝堂、処刑場などが取り巻いている。

そんな場所であるからして、その手に詳しいツバサでなくとも気付いてしまう。……いろいろと……。

「う～。イザ入ってみるとさすがに感じるものがあるわね……」

「……ルナちゃん。言いだしっぺなんだからしっかりしないと」

ルナの弱音をクインティアがたしなめ、ミソラもスバルの腕にしがみ付いていた。当のスバルの顔は赤い。なお、アイリス以外のウィザードは宮殿に入るなり即行で各自のハンターに戻った。旅館の時の経験が尾を引いているらしい。

アイリスがハンターに戻らないのは、コピーロイドを電波化する機能が直っていないからだ。それはつまり、ハンターの中に戻ってもコピーロイドは一緒に戻れず、今戻られるとコピーロイドが重くてくたびれる。という理由だ。

スバルを始めとしたみなさんは中々に恐がっているので、ツバサは冗談半分で昔話を始めた。

「……そういや昔、この塔でキャサリン・ハワードって人が処刑されたんだよな～」

「ツ、ツツッ、ツバサ君ッ！　こんな時にそんな話しないでよっ！」

「あっはっはっは！　本当にスバルは怖がりだな～」

「「「「　……」」」」

「……おっと！　大丈夫だって。そいつは命日でないと出ないらしいから」

スバルを始め、他の皆からも白い目で見られたツバサは慌ててその幽霊が出る条件を付け足す。それで少し安心したようで、ソラが好奇心からツバサに尋ねた。

「その幽霊ってどんな？」

ソラがそれを尋ねた瞬間、スバルは両手で自分の耳を閉じた。ツバサはニヤニヤして、そんなスバルの耳から手を離しながら答える。

「あ～。そうだな～……。血走った目で髪を振り乱して、金切り声を張り上げながら爆走するって所かな？」

『きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

「そうそう。あんな感じで……ん？」

ツバサの反応からして、彼の仕組んだ声ではない。かといって、空耳にしてはハッキリした声だ。

全員が息をのんで、声のした曲がり角を向くと……。

『きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』

その声と共に、先程ツバサが言ったのと瓜二つ（うりふた）な女性が走ってきた。補足を加えれば陸上走りである。

「「「「「 うわぁぁぁぁぁぁ！！！ 」」」」」
「「「「「 きゃぁぁぁぁぁぁ！！！ 」」」」」

その後は『逃げるが勝ち』という言葉を体現するかのようにスバル達は走る。ひたすら走る。

「なんだよあれ！　なんで陸上走りなんだよ！！　しかも綺麗なフォームだし！！！」
「オレが知るか――――――！！！」

ジャックの3連突っ込みにツバサが半ばブチ切れながら答え、女性陣は後ろを振り向くのが怖くて前だけを見て走っている。

「おい、いいけどいつまで逃げれば良いんだ！？」
「僕のマロ辞典によりますと、たしかその女性は自縛霊なのでこの塔の外に出れば大丈夫なはずです」

暁の問いに、その背中でおんぶしてもらっているキザマロが答えた。

キザマロは身長が低いため歩幅が狭い。それは必然的に足が遅いという事であり、追いつかれないために暁がおんぶしているという訳である。

その後一行は最後まで全力疾走で出口まで走った。

その様子を塔の中から眺める人影が2人。

一方は長身でスマートな男性。目は澄んだ水色で髪は白く、長い髪を首の後ろで結い、その髪は脹脛（ふくらはぎ）の辺りまである。念のために言っておくならば、歳のせいで白髪なのではない。

もう一方は、それと比べて少し背の低い初老の男性だ。

長身の男性は逃げ去るスバル達を見て堪えきれなくなった笑いを浮かべる。

「くっくっくっく。見たかいコクレン？　彼らの驚きよう。あのツー君まで驚くなんてね♪」

背の低い男性、コクレンはため息をついて白髪の男性に注意する。

「はぁ……。ゲイル。彼らはワシの恩人なのじゃからあんまり手荒な事は……」

「あら良いじゃない。私は面白かったわよ？」

そう言って現れたのは、先程までスバル達を追いかけていた女性だ。

女性はゲイルとコクレンに近づきながら、自身の顔の皮を「バリバリ」と剥く。映画などで使われる特殊メイクだ。

その素顔は見事なもので、綺麗なブロンドの髪に整った顔立ち。目は緑に少し赤を足したような色だ。

ゲイルと呼ばれた男性は、その女性に声をかける。

「ライラおっかえり～。やっぱり一回こういうのはやって見たいもんだよな！？」

ライラと呼ばれた女性が笑顔で「えぇ」と同意し、コクレンは今日で何度目か分からないため息をつきながら呟く。

「……　一国の主がそうそう国を出るなど……」

「コクレンしつこいぞ。大体、オレより適材適所な奴を残してあんだろ」

ゲイルがややうんざりしながらコクレンを咎めた時、女性は肩で笑う。

「ふふっ！　そんなテンションで言われてもぜんっぜん説得力がないけどね～」

「今回ばかりはライラの意見に賛同できる」

「っ～～～～～！！！　帰るぞ！　２人とも！！」

「最初からそう言えばいいものを……」

「ホントよね♪　……だけど、何で今彼らに接触を？　もうすぐ会

えるんでしょ？」

ライラの問いにゲイルは「ニッ」と笑う。

「ツバサが見込んだ子を見てみたくてね。もうすぐ会えるって知っていても、待ちきれなくてさ」

コクレンはゲイルの言葉を聞くと、その灰青の瞳を光らせてゲイルに尋ねた。

「……お眼鏡にはかないましたかな？」

対するゲイルも、その目に面白そうな光が宿る。

「あぁコクレン。存分にかなったよ。……スバル君って可愛いよね～。あの童顔がサッ！！　ミソラちゃんも噂に違わず可愛いし♪　それに、ジャッ君とかクーちゃんとかシー君。彼らと会うのも久しぶりだ」

「……」の後から急に口調が変わった事に、コクレンはズッコケる。そしてライラは笑いながらゲイルに尋ねた。

「ディーラー時代を思いだす？」

「そりゃあもう！　……何もかも、みな懐かしい……」

ゲイルがどこかで聞いたことがあるような締めくくり方をする。

それに対しコクレンは呆れ、ライラはクスクス笑いながら3人は塔を出た。

門を潜った時、ゲイルは不意に口を開く。

「……帰る前に、ツー君の暗殺を依頼した人物を探らないとね。……ライラ。頼んだ」

先程までのおちゃらけ口調とは打って変わって、その目は獲物を狙う獣のように煌き、ライラも不敵な笑みを浮かべる。

「ふふっ。分かってるわ。……『ベルゼブブ』の名にかけて」

その名は、彼女が昔『天才クラッカー』と呼ばれていた頃の二つ名（異名）である。

――――一方スバル達は――――

スバル達はあの後急いでホテルに戻り、少し早めにチェックアウトして飛行機に乗った。一同の心にあった感情は一つ。

【さっさとこの国から出たいっ！！！！】

である。

飛行機が離陸した後、スバルは安堵したようにため息をつく。下手をすれば、今までの経験で最も怖い体験だったかもしれない。

さらに、ホテルに戻った時に謎の悪寒に襲われたので、飛行機に乗った時にはすっかり疲れ切っていた。

なお、ミソラ、ツバサ、ジャック、クインティア、暁も同種の悪寒に襲われたらしい。

（……何かの呪いかな……）

スバルはそんな事を思い、同時に今日眠れるか不安だったりする。

だが、今回はルナにも効果抜群だったらしく、しばらくは怪談系に手を出す事はないだろう。付き合わされるスバルからしてみれば嬉しい限りである。

第４８話　歴史の眠る街（後書き）

ちなみに、『サー・ベンジャミン・ホール』の『サー』は、卿（きょう）といって、意味をすっごく簡単に言えば『偉い人』です。『〇〇卿』とかって映画で聞きません？

それと念のために。キザマロの言っていた『マロ辞典』というのは、彼の持っている百科事典の事です。

それにしても、リニューアルされてからずいぶんいろんな機能が加わりましたね。自分で色々と見てみましたが、『活動報告』は雑談の場にも使えそうです。感想とかで書きにくい別ジャンルの事（例えばゲームの話題）とか話したり、案外使い勝手は良さそうです。

これからも3日に1回の更新を続けて行きたいと思います。ってことで、次回は１０月６日の予定です。最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

第４９話　ラパヌイの伝説

イースター島。チレ（作者の居る世界のチリ）に属する島で、そこから約３千７百Ｋｍ。最も近い島タヒチからは約４千Ｋｍ離れている絶海の孤島。別名『ラパヌイ』。

スバル達は、この島で唯一の村である『ハンガロア』という村にいる。

ジュージュージューッ！

活気の溢れるレストランに響くのは野菜を炒める音。

ツバサはそのレストランのコックに紛れてフライパンを片手に野菜を炒めている。一方ツバサ以外の者達は、考古学者からイースター島の歴史を聞いていた。

こんな事になった原因は約２時間前に遡（さかのぼ）る。

――――２時間前――――

「ここがイースター島かー」

スバルは思わず感嘆の声を上げる。

絶海の孤島で１７２２年まで文明圏に発見されなかった島。そし

てその島にある村は一つだけというのは飛行機の中でツバサから聞いていたので、知らず知らずのうちに少しふびんかと思ったが、空港はもちろんの事、市場を中心にして郵便局やレストラン、図書館や市役所、スーパーなど、主要な施設が全て揃っている。

だが、さすがに暑いのかツバサは手で自身を扇ぎながらレストランを指差した。

「そぅ。良いけどまず飯にしよう。腹減った」

ボンッ！

ツバサが指差した店から煙が沸き起こる。ジャックはツバサから半歩引いて尋ねた。

「……おい、アレお前か？」
「んなわけないだろ……」
「様子だけでも見に行こう」

シドウはそう言うなり先頭に立って店に近づく。そこでは何やら複雑な様子になってた。

白い白衣を着た濃い茶髪の男性が客の一人に謝り、その客が近くの旅行客に謝り、その旅行客がカウンターの従業員に謝り、その従業員がコックに謝っている。

「あ～～。サテラポリスです。とりあえず落ち着いてください。そして、どういう状況かを教えてください」

暁が騒ぎの当事者達に声をかけ、当事者達は話し始めた。
内容をまとめるとこんな感じだ。

まず、茶髪の男性が資料を見ながら料理を食べていたら手を狂わせて隣に相席していた客の手の甲にフォークを突き立て、その痛みで自分の熱々料理を絶叫と共に後ろの旅行客にぶっ掛けて、後ろの旅行客がそれに驚いて手に持っていた脂汗の染みたハンカチをカウンターの方に投げてしまい、そのハンカチでカウンターの店員が足を滑らせてコックに衝突したらしい。

なお、先程の煙は、倒れたコックが持っていた料理が衝突された拍子にレンジにＩＮ（イン）。中の水蒸気が暴発して破裂した時の煙らしい。

不謹慎ながら、暁は感心した様子だ。「よくそこまで偶然が重なるな」っといった心情だが、それを表に出すわけにもいかない。よって、あくまで冷静に場をまとめる。

「それでは、皆さんの謝罪大会はここまでにしましょう。このまま互いに謝っていたのではラチが明かない。それでは、皆さん一斉に謝ってこの騒動はお終いです。良いですね？　……それでは、せーの――」

暁は当事者達に確認をとって頷いた後、当事者達に呼びかける。

「「「「「スミマセンでした」」」」」

おじさん達の謝罪は見事にハモリ、暁は満足気な笑顔を浮かべる。

「……これにて一件落着。あ、レンジの方はせっかくなのであの子が直します」
「オレかよっ！！」

暁がツバサに丸投げして、ツバサは不意打ちにも関わらず即座に突っ込む。
スバル達がそれに笑っているとき、コックが気まずそうに声をかけてきた。

「あの～……実は衝突された時に手首を捻ってしまって……どなたか料理を……」
「う～ん。そうは言ってもオレ達はこの辺の料理の勝手が分からないし……」

暁が首を捻っている時に、クインティアが助言してきた。

「……たしか、ツバサって料理できるって言ってたわよね？　アイリスちゃん」

レンジの壊れ具合を見ていたツバサがそれを聞き、アイリスをジト目で見る。それを察したアイリスはそっ～とツバサから目を背けてクインティアに答えた。

『は、はい。……よく一人で仕事を抜け出して旅行していたので、一通りの料理はできるって前に――』
「アーイーリースー？」

ツバサが作業を止めてアイリスに半眼を送る。アイリスは気まずそうだったが、素直に謝った。

『……ごめん。ケフェウスを見送るパーティの時に話しちゃった……』
「……」

「それじゃあ決まりね」

気まずい2人を置いといて、クインティアは即座に結論を出した。その後、ツバサは近くのスーパーからネジ等の部品を買ってきてもらってレンジを直し、料理を作っている状態だ。時間の空いたスバル達は考古学者から色々話を聞くことにした。

そうして、今に至る。

「――――　そんなわけで、この島のモアイはほとんど島の内側を向いているが、例外的に島の西側の【　アフ・アキヴィ　】と呼ばれる7体のモアイだけが海の方を向いているんだ」

太古探(さぐる)――――考古学者――――は、そうしてスバル達にイースター島の事を説明してくれてる。本当に考古学という分野が好きなのだなぁ。と思わせるほどに、彼の目はキラキラと子供のように輝いている。

歳は３０代前半。濃い茶髪に白衣を着て、鼻の下には口に届かない位の髭(ひげ)を生やしている。

『ほ～ぅ。そのモアイが海を向いている理由は分かってんのか？』

「それは諸説あってね。今の所一番有力なのが、その島を最初に治めた王がそちら――西――の方から来たからそれを祀(まつ)ろう。という気持ちから造ったとされている」

ウォーロックの質問に答えた時、クインティアが質問してきた。

「……でも、それはただの伝説なんじゃなかったかしら？」

太古も思い当たる節があるらしく、唸って見せた。

「う～ん……。あなたの言う通り、この島は伝説がやたらと多い島でね。【 当時の人自身がその伝説を信じてそのように造った 】と言った方が正しいかもしれない。元々モアイの作られた目的だって、宗教的な物とか、その島を治めてきた族長の墓とか……とにかく諸説ある。まぁ、モアイの下から骨が出てきたっていう事から、墓である可能性は大きいがね。……本当に謎が多い島だよここは」

ため息をついて見せたが、その顔は中々楽しそうだ。学者として、『謎』とか『未知』という単語に惹かれているのだろう。

現に、この島には謎が多すぎるくらいに多い。今となっては解読できない『ロンゴロンゴ』と呼ばれる木板を始め、『ラパヌイ』や『テ・ピト・オ・テ・ヘヌア』など複数存在する島の名称……。特別な何かに繋がっていなくとも、【 分からない 】という事は酷く好奇心をくすぐられる。

ため息をついてようやく落ち着くと思われた太古は、さらに目を輝かせて語りだした。俗に言う、『スイッチが入った』というヤツである。

「そうそう。イースター島が属するポリネシア諸島で、唯一この島だけ異なる神を信仰していたという事実もあるんだ」

「へぇ～。どんな神なんですか？」

「それは、――――」

スバルの質問に太古が答えようとした時、目の前に料理が置かれて遮られた。

「へイお待ち。ったく、人が働いてる時に暢気にお喋りとはね」

ツバサだ。レンジどころか料理まで押し付けられた事に腹を立てているらしい。スバルは弁解するようにツバサを見る。

「いや～太古さんの話が面白くて……」

スバルの言葉は止まった。ジャックもツバサを見るなり自分の料理を受け取った体勢で一時停止。直後爆笑。その理由は……。

『ギャハハッ!!　ツバサ、それ似合わねぇな!』

「……ウォーロック……うるさい黙れ」

「さ～て、ハンターに写真を残しとくか」

「……ジャック……てめぇ」

そう。今の彼は白いエプロンを着てバンダナを着けた姿。いつもの彼とはあまりに違う姿、かつ似合わない姿にウォーロックとジャックを中心にバカ受けしているのだ。ツバサはブチ切れカウントダウンを始めている。もうすぐケンカが起きそうだ。

太古は少し笑ったが、すぐに話題を戻した。

「……さて話の続きだが、その異なる神の名前は、『マケマケ』だ」

ドガバキ!　……

そばでジャック、ツバサ、ウォーロックのケンカの音がしていたが、神の名を言った瞬間、それは止まった。
ウォーロックは信じられないと言った様子で太古に尋ねた。

『オ、オイ……ホントにそんなふざけた名前の神を信仰していたのか？』

それに対し、太古は胸を張って答える。

「ああ。海鳥の姿をした神でね、伝説も中々面白い。とはいっても、かつてこの島では鳥のことを【　マヌ　】と呼んでいたから、正しくは【　マヌマヌ　】と言った方が良いかもしれないがね」
「たしか、やたらと【　鳥　】と【　食べ物　】の話が多いんですよね。この島の伝説」

念のために書いておくと、これを聞いたのはツバサだ。さすがに見ず知らずの人にタメ口は使わないらしい。
太古は考え込むように頷いた。

「ああ、その通り。この島の伝説は鳥と食べ物。この2つの要素が多く出ている。食べ物の方は、かつてこの島で食糧不足から来る飢饉があったから食べ物を意識するのか無理ないのだが、鳥の方がいまいち分からない。当時鳥が多く住んでいたからなのか、それとも別の意味が含まれているのか……」

スバル達に解説しているはずが自分の世界に入ってしまった。自分で説を出しては自分で打ち消している学者を見て、スバル達はすっかり困り果てた様子でそれを見ていた。

「ツバサく～ん、そろそろ店の方を手伝ってくれ。あと少しだから」
「へ～い」

店の奥から御指名がかかり、ツバサはスバル達にゆる～く手を振って店の奥に歩いていった。それとは反対に、店の人がスバル達の元に歩いてきた。

そして、太古に話しかける。

「お客さん、食べ終わったのでしたらいい加減にしないと料理だけでなくて席代も取りますよ？」
「いや、それともあの説が、いや、あれは信憑性（しんぴょうせい）が低い……」

しかし、一人議論している今の彼にその言葉は通じていなかった。店の人は慣れた様子で息を大きく吸った。スバル達はこの時点でこの先が予想できたので耳を塞ぐ。

「お客さ――――ん！！！　いい加減に席を空けてもらえないと困るのですが――――――！！！！」
「うわぁ！！？　すみません！！　今すぐどきます！！」

そう言うと慌てて手元の資料を自分のカバンに入れて去っていった。

店の人は申し訳なさそうにスバル達に頭を下げる。

「ふぅ。……すみませんね。あの人最近この島にやってきたのですが、あの通り集中しだすと周りが見えなくなるもんで……」
「分かりますわその苦労。どっかの誰かさんも宇宙の事となるとすっかり周りが見えなくなりますもの。ねぇ？　ミソラちゃん？」
「ほーんと。女の子としては自分の気を引くのに苦労するんだから。ねぇ？　スバル君？」

「……ハイ。すみません。ほんっと御2人には失礼な事を……」

ルナとミソラがスバルをジト目で見て、スバルは、『実際縮んでんじゃねぇか？』と思えるほどに小さくなっていた。

「「　分かってるならよろしい　」」

ルナとミソラはそんなスバルに同じ事を言って頷く。直後、ルナとミソラは互いに笑いあった。

この2人は恋のライバル以前に、大の親友なのだ。

その後一同はホテルに向かうのだが、ウォーロックは真剣な顔でツバサに話しかけた。

『ツバサ、この島にはいつまで居るんだ？』

「ん？　いつも通り明日の夕方には出るけど？」

『……そうか』

「どうしたのウォーロック？」

スバルの問いにウォーロックはやや自信が無さそうに話した。

『いや……この島に何か眠っているような感じがしてな……さっきの神の名を聞いてもしやと思ったんだが……。ツバサ、お前この島何回か来てんだろ？　何か知らねぇか？』

「う～ん。とは言ってもね～。オレがこの島に来る頻度は少ない方

だし、それにこの島は伝説の宝庫。いちいち調べてたらキリが無いって事で、この島の伝説はあんまり調べてねぇんだよ」

なお、この言葉は偽りではなく本心である。ツバサがこの島に来たのは結界を張り直すためだが、最初に張った時も違和感は無かった。

ウォーロックはあごに手をやり、呟くような声で返事を返す。

『そうか……』《……まぁ、目覚めなければ問題は無いか……》

この島に眠る強い力。ウォーロックはそれを感じていたのだ。それを知らないと言っても、その存在が消える事は無い。どこにそれがあるかも分からない以上、ウォーロックにできる事は自分の身近の人物――スバルやミソラ、ついでにハープ――　のそばに居て、彼らを護る事だけだった。

――――ラノララク――――

太古はモアイの製造工場とされるラノララクに居た。比較的柔らかい凝灰岩を削りだし、モアイが仰向けの状態になるように削りだしていく。そこからいかに島中にモアイを運んだかは諸説あり、太

古はそれを考えにラノラクに来たのだ。おまけを言えば、そこからの景色は彼のお気に入りだったりする。

「ふぅ～。さすがに何回も登ると慣れるもんだね」

そう言いながら、いつもとは違う岩に腰掛けた時、「コロッ」と何かが転がる音がした。

転がったとされる場所には、大体高さが２０センチ位のモアイがあった。背中には、左右対称にデコボコした模様が彫ってあり、その模様の真ん中上方も四角く彫ってある。

「ッ！！！　これはっ！！　こんな小さなモアイがあるなんてっ！

……しかし、何故今まで誰も気がつかなかったんだ？」

『……忌まわしき者が施した封印でな、波長の合う人間が極至近距離に近づかないと封印が解けないようになっていたようだ。その上、波長の合う人間しか気付かれないように……。という小細工付きでな』

声のした方を向くと、鳥の姿で2枚の翼を持ち、黒のアーマーに、少し暗めの赤の電波を逆らせている電波体が現れた。胸には、モアイの背中にあったのと同様の模様が赤くあしらってある。

補足として、封印をしていたのはツバサではない。そのため、波長の合う人間にしか気付けないように細工されていたのでは、ツバサが気付くわけは無いのである。

太古が驚いている中、電波体は男（太古）を凝視する。

『フム。……貴様、その体もらうぞ』

「な、何を！？」

次の瞬間、黒い光が天を貫いた。
光が収まった頃にその場にいたのは、鳥人を思わせる存在。全体的に色は黒く、両手両足に赤く、鋭い爪を備えている。肘と膝には突起がある。その突起は自身の身を護ると共に、ケリの威力を上げるのにも一役買いそうだ。

『……やはりこの人間とは波長が合っていたようだな。……クックック。見ていろラ・ムー。我こそが、この【マヌ・ムー】こそが、この世界の王に相応しい存在だ』

それには、取り憑かれた男性の人格はもはや無い。電波体が男の体を完全に乗っ取ったのである。

バサッ！

黒い羽を羽ばたかせて、それはハンガロア村へ向かう。

『……手始めには丁度良い』

黒い影は、三日月のような笑みを浮かべて小さく呟いた。

――某所・同時刻ー――

「……フンッ。いまさら目覚めたか」

『……グ……』

「いや、ラプラス。今はムーメタルよりこっちが優先だ。……古代ムーの残した負の遺産をこの機会に葬り去ってやる」

白髪の少年は自身の端末で模様を描き、その模様は少年の四方に現れて回転を始める。

「……電波変換。ブライ……オン・エアッ！」

紫色の光が輝き、その光が収まった頃には、すでに少年は飛び立っていた。

第４９話　ラパヌイの伝説（後書き）

小さいモアイの背中の模様は、流星２以降をやっていたら嫌でも分かる代物です。

『マヌ・ムー』をデータファイルに載せるのはイースター島での戦いが終わった後になります。あんまりそこで能力とか明かすと面白くないので。太古サグルさんは……どうしましょうかね……。ほとんど一方的に乗り移られた人ですし……。載せた方が良いという声があれば載せる事にします。

それと、次回の更新は１０月９日の予定です。その後は資格のテストがあるため最低でも１８日まで更新できません。今のうちに謝罪しておきます。

第５０話　真昼の悪夢（前書き）

段々と戦闘がえげつなく……。そろそろ『残酷描写有り』のカテゴリを加えるかな……。

第５０話　真昼の悪夢

マヌ・ムーが電波変換した時、ハンガロア村にいたスバル達のウィザードも異変を察知していた。

『ッ！！　この感じは！！』

『……えぇ。かなり強い奴ね』

ウォーロックとハープは警戒しているような声で山の方（ラノララク）を向く。

スバルはそれを不審に思い、２人に尋ねると……。

『やたらと強い波長を感じる。オレの識別が正しければ、ムーの電波体だ』

「……それってブライなんじゃないか？」

暁が眉を顰めながら尋ねるが、ハープはあっさりそれを否定した。

『いいえ。彼とは別物よ。それに……下手をすれば彼より強いわ』

「そんな……」

『ケケケッ！　なんだよスバルちゃん。ウォーロックちゃんと同じでびびってんのか？　オレは楽しみだぜ？　久々に強い奴と戦えそうでよ！』

『キャハハハハッ！！　コーヴァスの言う通りだね！　最近は戦うと言ってもウイルスがいい所だったから退屈してたんだ』

スバルの不安はコーヴァスとヴァルゴに打ち消され、当の彼らは強敵との戦闘の予感に胸を高鳴らせている。暁はため息をついて、その双眸をキリッと光らせる。

「ふぅ。……それだけ危険な奴なら、なおさらこのまま放って置くわけにもいかない！　迎え撃つぞ！！」

「「「「　おおっ！！　」」」」
「「「「　はいっ！！　」」」」

スバルを始め電波変換できる者は電波変換し、ジョーカーはファイナライズ。グレイブ・ジョーカーとなった。
全員が臨戦態勢になった時、暁の電波変換した『アシッド・エース』はそれぞれに指示を出す。

「戦える者は全員オレについて来い！　相手があのブライより強いとなると、数が多くて卑怯とかそんな事は言っていられない。一気に片をつける！！　ルナとキザマロは村の住人を出来るだけ安全な場所へ避難させてくれ。それと、ゴンタはルナ達の護衛だ」
「ブロロロロ。なんでだ暁さん！？　オレやオックスも戦えるぜ！」
「……お前は白金ルナを護ると決めたんだろ？　だったらこっちはオレ達に任せて、お前はお前の守りたい者を護れ！！」

そう。ゴンタはルナが生徒会長になった時に、暁率いる『サテラポリス遊撃隊』を抜けている。……たった一人の人物、ルナを護るために。そしてそれは、『世界』よりも、『自分の大事な人』を護る事を選んだという事である。

「で、でも……」

オックス・ファイアの狼狽をアシッド・エースは渇を飛ばす。

「迷うなっ！！　世界よりも、自分の大事な人……白金ルナを護ると決めたのはお前だ！　だったら、お前は全力でそれを全うしろ！

！　……悔いが残らないように……【　全力　】でだ」

最後は弟に語りかけるように、アシッド・エースはオックス・ファイアの肩に優しく手を置く。

オックス・ファイアは少し葛藤しているようだったが、それを振り切ったらしく顔を上げた。

「分かったぜ！！　スバル、暁さん、そっちは任せた！！　……委員長、キザマロ。行くぞ」

「はいです」

「……え、えぇ」（……私の居ない間にずいぶん頼もしい事言ってくれるじゃない。……ゴンタのくせに）

戸惑いながらもゴンタに付いて行くルナの顔は、少し嬉しそうだ。

一方ツバサは少し考えた後オックス・ファイアを呼び止める。

「ゴンタ、チョイ待ち」

「ブロロロロロ。何だ？　ツバサ」

「悪いけどアイリスも連れて行ってくれ。いちおうアイリスも何回かこの島に来ているから、この辺の地理は分かるはずだから」

アイリスは、ツバサが『監視者』の仕事をサボって勝手に旅行した時に連れ帰る役だ。その時にせっかくなので2人で色々見て周った事があり過ぎるぐらいにあるので、地理に詳しくなるのは当然だろう。

オックス・ファイアは遠慮したようにアイリスを見た。

「ブロロロロ。オレは別に良いが、アイリスちゃんは良いのか？」

『……相手の力が未知数で、その上ブライより強いのなら、私は足手まといになるだけだから……。でしょ？　ツバサ』

ツバサは申し訳無さそうに苦笑する。

「ははっ……。悪いけどその通り。そんじゃゴンタ、頼んだ」

「……お前らが良いならオレは別に良いが……」

「早く行きましょう？　早くここから離れないと本当に暁さん達の迷惑になるわ」

「お、おうっ！」

ルナたちがホテルの人を避難させて去っていく姿を見ながらロックマンはツバサに咎める視線を送った。

「本人に足手まといって言わせなくとも良かったんじゃないの？」

「……後で謝っとく」（……おそらくアイリスの事だから、オレが言うよりも自分自身で言った方が、オレを責める人が少ないと思ったんだろうな……）

ツバサはそんな事を考えていたのだが、不意に上空から敵意が突き刺さる。

「ッ！！　来るぞ！！」

バサッ！

その音の主は不吉を告げるようにスバル達の元へ下りて来た。

『この島の長は誰だ？　ラ・ムーの前にそいつを血祭りにあげてやる』

マヌ・ムーの言葉で、スバル達はある意味で硬直した。その意味とは、相手が強そうとか、相手が怖いなどの感情ではない。では何かというと……。

「……えっと……ラ・ムーなら僕が大体1年前に倒しました」

ロックマンは一応警戒しながら、自分がかつて『ラ・ムー』を倒した事を告げる。

『……そんな事は知っている。……断っておくが、我は別に【 今度こそラ・ムーを倒して私がこの世界を支配してやる 】とか、【 ウソッ！ そんな事知らんかった!! 】とは思っていないからな』

（（（（（……思ってんじゃん……）））））

スバル達が呆れた目で内心の声をハモらせているのに気付いたのか、マヌ・ムーはさらに慌てて言葉を重ねる。

『そのような目で見るな！ さっきも言ったが、我は別に【 長年封印されていて外の事が分からなかった 】とか、【 そう言われてみれば確かにラ・ムーの気配が無い。これって大恥じゃね？ 】とか思っていないからなっ!!』

（（（（（……語るに落ちてるよ。……あぁ、こいつバカなんだ……）））））

『だからそのような目で見るな!! ……もう良い。貴様らは全員殺す。我の機嫌を損ねたのだからな……!! シャドースラッシュ

！！』

どうやら切れたらしい。マヌ・ムーは自身の爪を振り、そこから黒い衝撃波を放ってくる。

「ッ！！　皆避けろ！！」

ズバッ！！

アシッド・エースの指示で全員回避には成功したが、代わりにホテルに命中し、斜めに両断。「ズゥゥゥゥ」と、低い音を立てながら崩れる。だが、唖然としている暇は無い。隙を見せれば即、先程の技で命ごと切断されるだろう。

『ふはははは！！　これが我の力だ！！　食らえ！　バードフォール！！』

【　鳥の滝　】その名の通り、鳥を模した黒い塊が大量に降り注ぐ。

ハープ・ノートはバリアを張ろうとしたが、ソラの電波変換したスザク・フレアは考えがあるらしく、ハープ・ノートを制して前に出る。

スザク・フレアは両手を前に出す。両手にある炎のブレスレットは「グォォォォ」という唸り声を上げながら回転し、その炎は大きくなっていく。２つの炎は融合してさらに大きくなり、出来上がったのは巨大な炎の渦。それは、以前瓦礫（ガレキ）からソラを助けるためにスザクが使った技だ。その名を……。

「……二の舞、障火(しょうか)！！」

ドドドドドッ！！

黒い鳥は炎の渦に飲み込まれ、消えていく。ここでスザク・フレアは、炎の渦の陰に隠れてさらに細工をする。

『ふんっ。そんな物で私の攻撃が止められると思ったか！』

スザク・フレアの細工に気付かないマヌ・ムーは、左腕に自身の黒い電波を凝縮させて爪の威力を上る。そして、一気に距離を詰めて渦の横へ回り込み、スザク・フレアに爪を突き刺そうとしたが、そこで動きが止まる。

『これは！？』

自分が先程突き刺そうとしたのが単なる炎の人形だという事に気付いて慌てたような声を上げる。

「残念でした♪　それ偽者だよ」

そう言ってロックマンたちの後ろから現れたのは、他ならぬスザク・フレアである。

マヌ・ムーが驚いている間に、人型の炎はマヌ・ムーの剣と腕に纏(まと)わりつき、腕を封じる。

スザク・フレアは手首のブレスレットを回転させて攻撃の構えを

取りながら、「クスッ」と笑って説明した。

「あなたの鳥が私の盾に飲まれている間に【　四の舞召炎（しょうえん）　】を応用してね、身代わりを作ったの♪」

スザク・フレアの『四の舞：召炎』とは、炎の人形を作り出す技。それを相手に攻撃させてそのスキを狙う作戦である。以前シャーロでロックマンが使った戦法をソラが聞いて、それを自分なりに応用してみたのだ。

「そんなわけで、もう終わりだ。バトルカード、ダブルストーン。&（アンド）、カウントボム」

ツバサは『ダブルストーン』でマヌ・ムーの両面を、『カウントボム』で後ろを囲み、逃げ場を無くした。

「今だっ！！　一斉攻撃！！」

暁の指示の下、ロックマンたちの攻撃はマヌ・ムーに向かう。

『チッ！！』

ドドドドドド！！

マヌ・ムーの舌打ちは攻撃の轟音に揉み消され、爆発による煙が辺りを包んだ。しかし……。

『クックックック……』

煙の中から聞こえる笑い声。直後、煙の中にいる者のはばたきにより煙は一掃された。そこに浮かんでいたのは、傷一つ無いマヌ・ムーである。

「……【　電波障壁　】……」

ロックマンが苦々しげに自分の推測を述べてみると、マヌ・ムーは自身の笑みを広げた。

なお、電波障壁とは、家族や友人。それら全ての『繋がり』と引き換えに人間、電波……ありとあらゆるモノを拒絶する防壁である。

『その通り。我のそれはもっとも堅き電波障壁でな、お前達の攻撃なんぞいくら当たろうと大差は無い。……さて、こちらの反撃といこうか』

マヌ・ムーの黒き翼は目いっぱい開かれ、そこから黒い影が発生し、膨張していく。

『……ナイトメアビジョン』

大きな羽のようになったそれは、羽ばたくようにロックマンたちを包み込んだ。

「うわぁぁぁ！！　……ってあれ？　なんとも無い。……ッ！！」

ロックマンは自分の体を見て異常が無い事を確認したが、次の瞬間、スバルの頭の中に記憶がよぎる。

大吾が行方不明になり、大事な人を失う悲しみを味合わないよう

に一人の殻に閉じこもっていた辛さと、その感情が洪水のように流れ込んでくる。
例えるなら、実際の現実は目の前に見えているが、頭の中でのみ記憶が再生されている状態だ。
そしてどうやら、他の皆も自身のトラウマと直面しているらしい。

「お母さん……逝かないで……」

ミソラは大好きだった母の事を。

「グッ！　……行くな。……キングの言う事を聞くな……」
「レン……リリ……死なないで……」
「何で……逝っちまうんだ……」

暁、クインティア、ジャックはディーラーにいた頃に失ったと思われる友達のことを。

『なぜ……私を否定する……私の存在理由を奪う……！！』

ジョーカーは生み出されておきながら存在価値を否定された時の事を。

「……クッソ！　いまさらこの記憶がっ……！！」

ツバサは何とか飲み込まれずにいるが、それがやっとの状態だ。
しかし、乗り越えられた者が一人居た。

「うっ……くっ……よしっ！　五の舞、炎翼（えんよく）！！」

スザク・フレアである。彼女は手首のブレスレットを回転させて炎を巻き上げ、おおよそ６０センチほどまで長くした。そのままマヌ・ムーに急接近して、手首の炎を思いっきり振り下ろす。

ギンッ！！

硬質な物同士がぶつかる音。スザク・フレアの振り下ろした炎は剣だ。『三の舞：不知火』のムチを『柔（じゅう）の技』だとすれば、『五の舞：炎翼』は『剛（ごう）の技』。その剣の熱と鋭さで対象を断ち切る技だ。

だが、その攻撃も電波障壁に阻まれてしまった。ソレにも関わらず、マヌ・ムーの顔は驚きで満ちている。

『貴様には思い出したくない記憶がないのか！？』

「あるにはあるけど、それを乗り越えられるだけの言葉を貰ったから」

【　誰から　】とはあえて言わない。……その夢は、大事な記憶だから。

『ならば、直に倒すまで』

「ッ！！」

瞬きをする間とはよく言ったものだ。マヌ・ムーは一瞬の間にスザク・フレアの剣より内側に来て、片手で彼女の首を絞める。

「くっ……あっ……」

スザク・フレアはその手を引き離そうとするが、マヌ・ムーの手はビクともしない。

「「その手を離せ！！」」

ロックマンは跳躍し、バトルカードの『ソード』を転送してマヌ・ムーに切りかかる。ツバサはロックマンが攻撃を仕掛ける方とは別の方向から召喚系のバトルカードで攻撃を仕掛ける。

彼らが自身のトラウマを乗り越えられたのは、ロックマンは仲間を失いたくないという気持ちから。ツバサは先程見た記憶が大事な人を目の前で失う記憶であり、現状と似ていたから。

詳細な理由は違えど、ロックマンとツバサはどちらも『目の前の命を失いたくない』という思いから自身のトラウマを乗り越えて加勢する。

しかし、マヌ・ムーの翼から黒い影が伸びて、召喚系のバトルカードは貫かれて撃破。ロックマンの剣はもう片方の手を黒い影で加工して強化。そのまま刃の部分を素手で受け止めた。ロックマンが驚いているスキに自身の翼から伸びた影をムチのように使いロックマンを弾き飛ばして地上のツバサにぶつけ、２人が起きる前に吹き飛ばし、壊れたホテルの壁に打ち付けさせる。

２人は何とか立ち上がったが、さっきの衝撃でトラウマに打ち勝つ精神力を根こそぎ奪われたらしく、立っているのがやっとの状態だ。

「ス……バル……君……。ツバ……サ……」

『他人を心配する余裕があるのか？』

その言葉と共に、ただでさえ絞まっている首がよりいっそう強い力で絞められる。

「ッ！　ぁ……」

スザク・フレアの腕が力なく垂れ、彼女の意識は途絶えた。

『……終わりだ』

マヌ・ムーがスザク・フレアに止めを刺そうと、彼女の首の骨が折れるほどに全力で絞めようとした時、上空から声と共に斬撃がマヌ・ムーを襲う。

「お前がな。グラウンドブレイクソード！！！」

ズドォォォォ！！

『ヌッ！！　グ……アァァァ！！！』

マヌ・ムーの背中に縦一閃に斬撃が走り、その衝撃でスザク・フレアの首を絞めていた手を離す。さらに、マヌ・ムーが大きなダメージを受けることで【　ナイトメアビジョン　】の効果も切れたらしく、ロックマンは即座にスザク・フレアの下に向かう。

ツバサは、ロックマンがスザク・フレアの下に着いたのを確認してから、2人に『バトルカード：スーパーバリア』を張る。

ほんの一撃で状況が変わったことに苛立ちを隠せず、マヌ・ムーは忌々しげに先程自身を攻撃してきた者を見る。

ロックマンはマヌ・ムーが目線を逸らしたスキに、スザク・フレアを抱えて地上に居る暁達の下に降りる。ツバサもすでに暁の下に合流しており、簡単な状況説明をしている所だった。

スザク・フレアの電波変換は地上に降りたときに解けてソラに戻り、暁やクインティアが様子を見る。

どうやら気絶しているだけらしく、ロックマンは一息ついてからマヌ・ムーの視線を辿る。

マヌ・ムーに攻撃を仕掛けた『彼』は、ソラを助ける気は毛頭無かっただろう。だが、今は彼に感謝したい。ムー人唯一の生き残りであり、絆を否定する事が彼の存在理由。その者の名は……。

「……ブライ……」

「フンッ……。相変わらずひ弱だな」

全体的な色は黒く、髪は白い。右手首から先は紫色の電波が手の形を作っている。一見して、炎の手袋をしているように見える。胸にはマヌ・ムーと同じ紋章があり、『黒』の中で『赤く』己の存在を主張している。

ブライと呼ばれた少年はロックマンに一瞥くれた後、マヌ・ムーを見た。

「ラ・ムーが生み出した【　負の遺産　】……。今こそ清算してやる。覚悟しろ」

『……ムー人の生き残り……。クックック……良いだろう。返り討ちにしてやるっ！！』

マヌ・ムーは手に黒い弾を生成し、ブライは右手に自身の紫の電波を凝縮、巨大化させる。

『バードフォール！！』
「ブライナックル！！」

黒い鳥と拳の形をした紫の衝撃波はぶつかり合い、互いの攻撃を全て相殺した。

第５０話　真昼の悪夢（後書き）

もうすぐ資格のテストがあるため、最低でも１０月１８日まで更新できません。更新前日に、あらすじの欄（――　～～～～　――）に次話の更新のお知らせを書きます。迷惑をかけますが、どうかご容赦ください。

第５１話　清算（前書き）

大変長らくお待たせしました。第４８話目、更新します。ブライのオリジナル技も出ますよ～。（勝手に作っちゃいました）

第５１話　清算

ブライが参戦したが、実質マヌ・ムーとブライの一騎打ちの状態で、ロックマン達は参戦できずにいた。その理由はブライのポリシーに一因する。

ザシュッ！

「チッ」

マヌ・ムーの影の斬撃をブライは電波障壁で防御。しかし、ブライの電波障壁は単発ならどんな攻撃でも耐えられるタイプだが、その分次の電波障壁が使用可能になるのに多少の時間（インターバルタイム）が生じる。そのスキを突かれて、マヌ・ムーの攻撃がブライを掠ったというのが今の様子だ。

なお、その間マヌ・ムーにいくら攻撃を当てても、彼の電波障壁がブライのように消滅する時間が無いので、厄介な事この上ない。

もっとも、マヌ・ムーの基本能力（ポテンシャル）はバトルセンスに定評があるスバルの目から見ても上位ランクなので、攻撃を当てる事も難しいのだが……。

「ブライ～。ポリシーは良いけど、ここは手を結んだ方が良いんじゃねぇの？」

地上で半ば呆れたように言うツバサに対し、ブライは睨みを効か

せてツバサを見る。

「断る。あれはムーの者だ。ならば、同じムーの者が清算するのは当然だろう。……大体、オレは他人と馴れ合うつもりは無い。特に貴様とはな」

最後は、宿敵に向けるような殺気をツバサに向けた。対するツバサは、マヌ・ムーがブライのスキを突いて攻撃しないように、視線でマヌ・ムーを牽制しながら気まずそうに頭を掻く。

「あ～……アレは悪かったってあん時謝ったじゃん。だから水に流して――」

「断る」

『我を無視して話を進めるとはいい度胸だな。……我が貴様らを殺す前に聞かせろ』

「えっ、そっち？」（興味あるんかいコイツ）

スバル達は、マヌ・ムーの発言に不覚にも唖然としてしまったが、彼がそのスキを突いて攻撃してくる事は無かった。

スバルの中では、先程ブライとツバサが互いに知り合いな様子だったのが少し気になったが、今は戦闘に集中すべきだと思い、唖然とした顔と脳を切り替えた。

（……アイツの電波障壁はブライのような単発を防ぐタイプでは無いのかもしれない。ってことはもっと別の何かが……。けど、どっちにしても攻撃を当てられない限りは……。せめてブライが文句を言わずに僕達が攻撃するのを認めてくれたらなぁ。今回は今まで以上にこだわっているみたいだし……。あっ！）

スバルの頭の中に名案が浮かぶ。マヌ・ムーとブライが格闘戦を

している間にアシッド・エースとツバサに耳打ちをした。

「（……ってワケなんだけど、どうかな？）」

スバルの提案した作戦にアシッド・エースは感心した様子で、ツバサは笑いを堪えながら同意した。

「（なるほど。それならブライに加勢しているわけではないからな。……スバル、お前も面白い事を考えるな）」

「（まったくだ。ブライがその時どんな顔するか楽しみだ）」

『《おっ、今日は気が合うな。ツバサ》』

『《俗に言う、【　とんち　】というものですね》』

後半はウォーロックとアシッドだ。

「（それじゃあ早速……）　ねぇブライ。キミが僕達の助けが要らないっていうのは良く分かったよ」

ブライはやや怪訝そうな様子だったが、「そうか。ならとっととどこかへ行け」　と、素っ気なくマヌ・ムーに向き合う。だが、スバルの妙案はこれからだ。

「うん。……でも、ここって広いから技の練習にはぴったりだよね？」

「……それがどうした？」

ブライは、拳から紫の衝撃波を放つ【ブライナックル】をマヌ・ムーに放ちながらロックマンに尋ね返す。

ロックマンは、普段ツバサが使っているような【ゴリ押しの笑顔】をマネしてブライにその笑顔を向けた。

「空に向かって技の練習をしようと思うよ」
「好きにし……なるほど。空へ向かって攻撃すると言っておいてマヌ・ムーに攻撃しようという事か。……ふざけろ。アレは俺の獲物だ。邪魔したら貴様から倒す」

見抜かれた事と、今更ながら敵の名前を聞いた事でスバルはたじろいだが、今度はアシッド・エースが口を開く。

「おっと、勘違いするなよ。オレ達は空に向かって攻撃するだけで、マヌ・ムーっていうんだな？　そいつ。そいつに攻撃するわけでは無いからな」
「……屁理屈だな。そんな言葉に俺が騙されると――」
「ブ～ライ～？」

一度彼（ツバサ）と接したら嫌でも分かるだろう。彼がこういう風に他人を呼ぶ時は、怒っている時。または、何かを企んで楽しんでいる時だ。ちなみに、今回は後者に値する。

ブライもその不吉な声のテンションに覚えがあるらしく、できれば見たくもないし知りたくも無いという顔を浮かべてツバサを視界の片隅に捉えた。

ブライの視界に自分が入った事を雰囲気で察したツバサは、口の端を思いっきり引き上げた。

「オレたちが空に攻撃するのを認めないと、お前の寝顔を撮った写真をこいつらに見せちゃうぞ♪」
「「「「「「なぁに――――――――――！！！」」」」」」
「……」

飄々（ひょうひょう）と言って見せたツバサに、スバルを始めとしたサテラポリス

御一行から叫び声が上がり、ブライは沈黙。マヌ・ムーも、異変に思わず動きを止めた。

スバル達が叫ぶのは無理もない。『ブライ』こと『ソロ』と言えば、相手が敵なら子供だろうと女だろうと手加減せずにボッコボコにする性分で、他人との関わりを嫌う。誰かと手を組むなんてまったく想像できないような人物だ。その上、人がもっとも無防備になる状態の顔である『寝顔』……。ある意味、宝くじの1等、2等、3等をトリプルフィニッシュで得るほどに非現実的で想像できない。

ブライが拳を震わせている所を見ると、彼の中では怒りや屈辱といった感情が渦巻いているらしい。

「……オレ達が勝手に攻撃してもいいよな～？」

ツバサはその様子を楽しみながら分かりきった質問をする。ブライはこれ以上ないほどの殺気をツバサに向けながらも頷いた。

（……ツバサ君の命が明日まで持っていればいいな～）

飄々としたツバサと殺気を込めたブライという正反対の空気を纏(まと)う2人にやや怯えながら、スバルはそんな事を思っていた。

スバルを始め、暁達の疑問と心配の空気を、ツバサは笑顔で手の平を合わせる様に叩いて解消する。

「そうと決まったら、オレの合図で指差した方に攻撃な？」

「「「「「……」」」」」

彼のゴリ押し笑顔は、今回のように雰囲気が乱れている時におい

ては絶対的な力を持つ。
スバルは、今回の事でそれを痛感した。及び、自分には彼のようなゴリ押し笑顔は向かないようだ。僕（スバル）にはソロの殺気を、戦闘時の集中力ならともかく、普段の集中力のまま受けるのは辛い。

その後の戦闘は、『卑怯』を通り越して笑えてくるものだった。ツバサが合図して指差した場所にはいつも偶然マヌ・ムーがいて、ブライに気を取られていたスキを偶然突くものだから面白いように攻撃に当たる。ブライはその度にツバサと攻撃した者を睨んで、そしてまた攻撃が当たり……。を繰り返していた。

そしてツバサとアシッドは、攻撃が当たる度に展開する電波障壁を分析していた。

マヌ・ムーとブライが、ケリやパンチの応酬をしているスキを狙い、クイーン・ヴァルゴの水の竜、ハイドロドラゴンがマヌ・ムーの背後に命中。電波障壁が正常に作動しているにも関わらず、途中で水の竜から抜け出したマヌ・ムーに対し、ツバサは何かを察したようだ。

「……マヌ・ムーの電波障壁の弱点は【　時間　】かな……」
『……どうやらそのようです』

アシッドも暁の戦闘サポートを行いながら分析を行っていたらしい。そして、そのアシッドもツバサと同意見のようだ。

「……分析用のデータが集まっているのは良いんだが、その度にオ

レ達が睨まれるのは正直堪えるんだが……」
「そう言うなよ暁。おかげでだいぶ分かったよ。あのバカの電波障壁の秘密も、その弱点も」
「本当？」（っていうかバカって……。いくら敵でも名前で呼んであげようよ……）
ロックマンは、ツバサが指差した方角に攻撃をしながらツバサに尋ねた。
対するツバサは先程のゴリ押し笑顔ではなく、勝利を確信した不敵な笑顔になっていた。
「ああ。どうやらアイツの電波障壁の発動は、ブライと同じく攻撃が当たる寸前に展開するタイプ。違うのはこれからで、ブライが単発型に対し、あいつの電波障壁は【時間制限型】とでも言っておこうか」
「時間制限型？」
『なんだそりゃ？』
スバルとウォーロックの疑問にはアシッドが答えた。
『ウォーロックにも分かるように答えますと、電波障壁が展開したと同時に制限時間のようなものが発生。その制限時間の許す間は、どんな攻撃も無効化できるようです』
「ただし逆を言えば、それを展開できる時間は限られるってこと。イコール？」
ツバサは、自分の言葉の続きをスバルに任せる。当のスバルは、挑発されたウォーロックを抑えながらハッとした顔をする。
「そうかっ！　……グラビティプラスとかで動きを止めて、その間

ずっと攻撃を当て続ければ良いんだ」

「そゆこと。……それも、さっきのクイーン・ヴァルゴの背後からの攻撃に電波障壁の発生が遅れた所を見ると、電波障壁の展開は自動ではなく、本人の意思によって展開するって事を意味する」

「……しかし、そう都合良く、あの素早いマヌ・ムーがオレ達の攻撃に当たり続けてくれるかな？」

「なぁ暁？　一定時間相手の動きを封じる【グラビティプラス】を全員のバトルカードに付加するのと、相手を無防備状態にして引き寄せる【ホイッスル】の連発。どっちが良い？」

暁の懸念（けねん）をツバサは容易（たやす）く一蹴する。彼が再び企んでいるような楽しげな笑顔を受かべたのに対し、暁は額を抑えて苦笑した。

「ははは……。それじゃあグラビティプラスの方で。これなら攻撃を加えた直後だから、上手くいけば電波障壁が展開している間に、後に続く目当ての攻撃を加えられるかもしれない」

「さすが暁。お目が高い。……そんじゃあ、次の攻撃で実行だ」

ツバサの顔は、【……】の後に再び不敵な笑みに変わる。それを見たスバルは……。

（……ツバサ君の表情の変化に慣れるまで、まだ時間がかかりそうだな……）

そんな事を思いながら苦笑いをしていた。

「……今だ！　全員一斉攻撃！！　目標はオレが指差す先だ！！」

ここまで来て、ツバサはまだ、【マヌ・ムーに攻撃】ではなく、【空へ攻撃】と言っている。ここまでくると完全にマヌ・ムーに対する嫌がらせに思えて来た。

暁やスバル達は、「さっさとこの睨まれる戦闘を終わらせたい」という感情で、うんざり半分。安堵半分でバトルカードによる攻撃を放つ。

『ぬおっ！？』

地上から攻撃がいつ来てもおかしくないとは思っていたようだが、一斉攻撃までは考慮に入れてなかったらしい。マヌ・ムーの四方からは、かわいそうに思えるほどの弾幕が迫る。

不意を突いた事で対応が遅れ、マヌ・ムーが電波障壁を展開した頃には、バトルカード：【マッドバルカン】の銃弾一発がマヌ・ムーの足に命中していた。その他は影と電波障壁で全て撃ち落されたが、一発当たれば十分だ。

『……これだけやって、たった一発しか当たらぬとはな。ッ！？何だ……体が……動かない……』

ロックマン達は、マヌ・ムーの動きが止まったのを見て即座に第二波攻撃を開始する。小細工の必要は無い。真っ向からの全力攻撃で、マヌ・ムーごと電波障壁をブチ破る。

攻撃する技は、ミサイルなどの物理的に破壊できる物ではなく、

ロックマンのロックバスター、ハープ・ノートのパルスソング。アシッド・エースの銃から打ち出されるステルスレーザーなど、エネルギー弾系の攻撃である。

物理的な攻撃は対象に命中する前に互いに破壊しあって十分に威力を発揮できない。しかしエネルギー弾系なら、電波体が固有に持つ波長を特定の一つの波長に合わせれば、一つの巨大な弾となる。例えれば、炎に水を加えれば消える。しかし、同じ炎を加えれば、炎がさらに大きくなるようなものである。

それだけの大容量エネルギーが一点に集中しているのだから、電波障壁は時間制限とは関係無しに悲鳴を上げる。

『グ……オォォォ！！　電波障壁の出力を前方一点に集中！！』

マヌ・ムーも負けておらず、電波障壁の力を攻撃を受けている前方に集中。持久戦に持ち込んだ。

もしもこの場にマヌ・ムーに対抗できる者がスバル達しか居なければ、この後はこのまま電波障壁に耐えられて基本能力（ポテンシャル）の差で圧倒されていただろう。しかし、この場には『信頼』ではなく、『利害の一致』という理由でスバル達に加勢する者がいた。

「……ふんっ。オレに背を向けるとは良い度胸だな」

ブライはマヌ・ムーの後ろに立つ。

彼の右腕には、紫色の『暗黒闘気』が炎のように揺らめいており、それは通常の電波エネルギーよりも高濃度のエネルギーが凝縮されている。

なお、ムー文明の科学力は、現在の科学力をもってしても解明できない点が多い。その『力』の限界は、全くの未知数だ。

ブライはその闘気を、自らの曲刀に纏わせる。

それはもう、『剣を持った者』という表現は合わない。肘から剣の先までが完全に紫色の炎で覆われている。紫の炎を纏う剣士だ。

ブライは右腕を上に持ち上げる。それに伴い、剣の切っ先からは紫の炎が曲線を描きながら、最後にブライの上で止まる。

「……終わりだ。ブレイズソード！！」

ブライは素早くマヌ・ムーの懐に飛び込み、紫色の剣を振り下ろす。

【ブレイズソード】とは、エネルギーを放出するタイプの攻撃ではなく、ただひたすらにエネルギーを圧縮・維持・さらに鋭くする事で斬撃の威力を上げ、単体の対象を断ち切るのに重きを置いた技である。

『クゥ！！』

マヌ・ムーは急きょ後ろにも電波障壁の力を回したが、それでは力の配分的に前方が破られる。いや、前方だけでは無い。後ろにいるブライの攻撃も、桁違いの威力だ。

『……このままでは……』

「そう時間が経たずとも破られるだろうけど、こっちはこの事をW

ＡＸＡ日本支部に報告したり、新しいホテルを見つけたりで忙しいんだ。……だから、これでチェック・メイト」

ツバサは一斉攻撃には参加しなかったのだが、その理由は２つある。

１つは、周りの破損したコンクリなどが吹き飛ばされた時、バリアを張ってソラを護るため。そして２つ目が、この時のためだ。

全員が攻撃して力勝負に競り勝つ。たしかにそれは現状でも可能だろう。しかし、強力な攻撃によりマヌ・ムーの電波障壁を限界状態にした上で別方向からさらにツバサがバトルカードを使えば、その威力はフルに発揮されて相手を襲う。バトルカードの威力が高ければ、それだけ早く決着がつくだろう。

そもそも市販のバトルカードは波長が決まっているので、今回ロックマン達がしているような『全員の力を収束するタイプの攻撃』には向かないのだ。

そして、彼が選んだバトルカードは……。

「……ヘビードーンＸ（エックス）が……３つ……縦に積み上がってる……」

ヘビードーンとは、立方体の巨石（　前面に顔が付いていて、モアイのような感じだと思えば良い　）を相手に落とすバトルカードなのだが、それは『スタンダード』と呼ばれるランクのバトルカードの中でもトップクラスの威力を持っている。

そして、『Ｘ（エックス）』と呼ばれるシリーズは、通常のバトルカードがノイズによって突然変異を起こしたバトルカードであり、その威力も折り紙つきだ。

一撃で決めるために威力の高いバトルカードを使うのは分かるのだが、さすがにそれが3つと来れば、その威力を知るロックマン達なら全員驚き、同時にこう思うだろう。

（（（（（（　えっげつねぇ～～～～　）））））

最初に呟いたのはスバルだったのだが、この時はツバサ以外の全員が彼に内心だけで半眼を送った。戦闘中なのでよそ見はいけない。

ズドォォォォン！！！

ズドォォォォン！！！

最初の【　スドォォォォン！！！　】はヘビードーンが落ちた音。2回目の【　ズドォォォォン！！！　】は、落ちたヘビードーンがロックマン達とブライの攻撃で爆破した音だ。

マヌ・ムーからしてみれば、上から巨石が落ちてきて自分の上に圧(の)しかかり、さらには爆風によりウェーブロードに押し付けられたといった経験だ。頼まれたってこんな体験は誰でもノーサンキューだろう。

ゲシッ！！

ブライもブライでえげつない事に、先程の攻撃でマヌ・ムーの電波変換が解けていないことが分かると、彼をウェーブロードから地面にケリ落とした。

地面に落ちたマヌ・ムーの電波変換は、そのケリでようやく解け、人間と電波体は分離した。
スバル達も、それを見届けた後で自身の電波変換を解除する。
ブライは分離したマヌ・ムーを即座にデリート。小さい悲鳴が聞こえた。

「……太古さんだったんだ……」

スバルの呟きを聞きながら、ツバサは太古の脈を測って、その結果を知らせる。

「……大丈夫。命に別状は無いみたいだ。あの黒鳥（　マヌ・ムー　）が丈夫なのが幸いしたな」
「ツバサくん……キミがそれを言う？」（ツバサ君の攻撃が一番太古さんの命を脅かしたような気がするのは僕の気のせいかな……？）

ツバサに対し、スバルが冷静に突っ込んでいる間に、ブライはツバサの首筋に剣を突きつける。炎のような電波は消えているのでプレッシャーは少なくなっているが、それでも彼の殺気は戦闘後とは思えないほどだ。

「……写真を寄こせ」
「さ～てと、今回の事をＷＡＸＡ日本支部の長官に報告して、新しいホテルを見つけて、ソラを運んでだから……かなり疲れそうだな」

ブライの言葉を軽く無視してツバサは立ち上がり、自身のハンターで長官に連絡する。

「……神経太いな。あいつ」

「うん……」
「でも、ルナちゃんの時はスバル君と一緒に怯えてたよね？」
「……たぶん、女性は苦手だけど男性が相手ならさんざん遊ぶタイプなんじゃないかしら。……特に、正直で乗せやすい人を……」
「「「　あ～なるほど　」」」

ジャック、スバル、ミソラ、クインティアの順でそんな事を言い、その前に話した3人は納得したように同じ事を言う。暁を始めとした他の面々も同様に、納得したように頷いた。

第５１話　清算（後書き）

世間話として、最近ロックマンＥＸＥ６にはまってしまいました。久々にやったのもあって、やっぱり戦術性の高いゲームって面白いですね。個人的にはＥＸＥ３とＥＸＥ６がお気に入りです。

「……とっとと次回の更新日を書け」

……え～……。今度はブライから殺気込みで言われたので、とっとと次回の更新日を書きます（今回の話、まだ怒ってんのかな？寝顔撮ったのツバサなのに……。書いたのオレだけど♪）。

次回は１０月２１日の更新です。イースター島編はあと２，３話ほど続きます。

お楽しみに！

第５２話　南十字の瞬く夜（前書き）

活動報告の中で「風邪を引いたかもしれない」と書きましたが、薬を呑んで一晩寝たら、あらかた治りました。
もしご心配をおかけしてしまったならスミマセン。

それでは４９話、始まります。

第５２話　南十字の瞬く夜

ホテルの方はサテラポリスの暁が居たので割と早く見つかった。
サテラポリスのエースという異名は、だてではない。
電波変換を解除したブライこと『ソロ』はホテルまでの道中でツバサにこれでもかという殺気を送り続けて、こともあろうに彼は逆にそれを楽しんでいる。そんな２人を見ていたスバル達は、何故だかすっかり疲れてしまった。
戦闘が終わった後ぐらい殺気を解いて欲しい。

その後スバル達はホテルに着き、それぞれの部屋に向かう。ソラの場合は気を失っているからツバサがおんぶして運んできた。

「はぁ～。……ツバサ君、ソロの写真なんかいつの間に……」

スバルがうんざりしたため息をついてツバサに尋ねると、彼は自分の背で気を失っているソラを彼女の部屋のベッドに下ろしながら答える。なお、今居るソラの部屋はロビーの近くだ。

「昔ちょっとな。……っと。ふぅ～～。疲れた」

補足を加えれば、【……っと。】でソラを下ろした。
だがやはりと言うべきか、そんなツバサの後ろには、常にソロの殺気が突き刺さっている。

「さて、用事が終わったら次は写真を寄こせ。でないと貴様ごと消し去るぞ」

単独行動を好むソロがホテルに居る理由は１つ。ここに来る前に

ツバサが……。

――回想――

「ソラはオレが運ぶよ」

気を失っているソラを誰が運ぶかという話をしている時に、長官への電話が終わったツバサが立候補した。

「そりゃ別に良いが、大丈夫なのか？」

暁が確認をとるが、彼が心配しているのは【　見た目的に年下のツバサがソラを運べるか　】等の、体格や体力的な問題ではない。ツバサの後ろで殺気を出しているソロが2人に危害を加えないかどうかという問題だ。

暁の視線で言いたいことを察したらしく、ツバサはソロに提案する。

「ソロ。今はケガ人をホテルに運ぶ事が先決だ。写真はその後で必ず渡す」

普段のソロは他人の都合なんて知ったこっちゃ無いからその条件を呑まないかと思ったが、ため息一つで受け入れてくれた。

だが、ホテルへの道中、スバルはソロの独り言を聞いてしまった。

「（このまま、アイツがはぐらかす事で生まれる逃げ道を無くさせて追い詰めてやる……）」

それは、ソロがツバサとの付き合いが長い事を思わせる発言。及び手段。
スバルの背筋が凍った。

――回想終わり――

と、このような理由なのだが、正直にソラをベットに横にした時点で渡せば良いものを、ツバサはソロに写真を渡すのをまた長引かせた。

「悪い。やっぱりコイツ（ソラ）が目覚めるまでは一緒に居るよ。渡すのはその後で良いか？」
「……フッ。勝手にしろ。オレは外に待っている」

先程のソロの独り言から判断して、最初の「……フッ。」は、「これでツバサの逃げ道が一つ減った」という笑いだろう。ミソラもそれを察したのか、ソロをあれ程怒らせて大丈夫かをツバサに尋ねた。

「……ねぇ。明日になったらキミの死体が島に流れ着いてました～。ってのは無いよね？」
「ははっ！　大丈夫だって！　ソロを抑えるための写真はまだ沢山あるからな」
『いや、それはそれでマズイだろ』
『ただの死体じゃなくて、バラバラに惨殺されるかもね……』

ツバサがあくまで明るく笑うのに対し、ウォーロックとハープが不吉な想像をする。不吉な想像をしたウォーロックとハープに対してツバサが言葉をかけようとした時、南国の気温に慣れている人でも『暑い』と感じられるほどの熱が部屋に行き渡る。

熱の出所を見ると、スザクが炎を巻き上げながらスバル達を見ていた。

『あんたらさぁ……ケガ人が居る前でよく気軽に話が出来るわね。なに？　燃やされたい？　特にツバサ』

「何でオレ？」

『あれじゃないか？　大事なソラがツバサにとられ――』

ボッ！！

『アッジィィィ！！！』

黙っていれば良いものを。ウォーロックは余計な一言がきっかけでスザクの炎を食らった。今回はスザクの怒りも合わさって威力は上がっている。

スバルとミソラが水属性のバトルカードでウォーロックの頭の火を消している時に、スザクは遮る事を許さない覇気を出しながらツバサに話しかけた。

『あんたがこの部屋に居るのは勝手だけど、ソラに変な事をしたら私が骨の髄まで焼き尽くすから覚悟してね』

「……イエッサー……」

スザクの発言は冗談には聞こえない。ツバサはため息をついて了承した。

その後、スバル達は部屋から出て、入れ違いにアイリスが入ってきた。暁から詳細を聞いてこの部屋に来たらしい。そうなると、必然的にルナ達も帰ってきているだろう。

スバルとミソラ、ウォーロックとハープが部屋から出ると今度はソロが待っていた。

「ついでにマヌ・ムーの事を話してやる。来い」

彼にとってはほとんど暇つぶしだろう。スバル達も特にする事が無いので、ソロに付いて行く。方向からしてロビーだ。

ロビー近くの売店に、ジョーカーとジャックが居る。

ジョーカーは例によってツバサに酒を頼まれたからだろうが、1人で飲むには持っている酒の量が多い。暁も誘って、2人で飲むつもりなのだろう。

その他に、ジョーカーはジャックのアドバイスを踏まえて小さいペンダントも買っている。おそらく生みの親であるヨイリー博士へのお土産だろう。

当のジャックは単に飲み物を買いに来ただけらしい。おまけに、

この島にどういったお土産があるかを興味本位で見に来たようだ。

ジョーカーの方を見ている時、ソロはロビーに置いてあるソファーに座って『前置き』無しで唐突に『中身』に入る。

「アイツ……マヌ・ムーは元々、【　ラ・ムー　】が産み出した電波体でな。アポロンやオリガと並ぶ最高傑作の一つだ。

電波体の力が人間の自我より強いと、電波体は宿主の人間の意識を呑み込むからな。マヌ・ムーに取り憑かれた人間はそれで自我までも奪われたんだろう」

ラ・ムーとは、ソロの先祖であるムー人を繁栄へと導いた存在。『電波の神』という異名に相応しく、電波体を無限に産み出す事ができる。スバルが1年前に、死闘の末に倒した存在だ。

アポロンとオリガというのはラ・ムーの産み出した最高傑作の一つ。『もしもロックマンがラ・ムーを止められなかったら』という『もう一つの未来（パラレルワールド）』で復活していて、同じく1年前にスバルが倒している。いずれも最高傑作の名に恥じない実力だ。

ソロは続きを語る。

「ムーに伝わる文献によると、元々マヌ・ムーは、ラ・ムーが自分の後継にと創り出したそうだが、アイツは反乱を起こしてこの島に封印された。……あの通り野心がある上に頭がアレだから当然といえば当然だがな」

「それじゃあこの島の伝説って……」

「おおかたその時の戦いを島の人間が数名見ていて、話が大げさに

広まったんだろ」

スバルの質問に答えるソロは、心の底から歴史相手に呆れている。その様子をスバルとミソラが苦笑いしていると、今度はウォーロックが質問した。

『そんじゃあ、何でそいつが復活したんだ？　一応オレもマヌ・ムーの気配は感じられたんだが……』

「波長が同じ物が極至近距離に近づいた時のみ、封印が解けるようになっていたらしい。波長の近い者でも感じることはできるらしいから、たぶんそれだろ」

『クスクス……。たしかにウォーロックってバカでガサツよねぇ～』

『あんだとハープ！！』

「2人ともこんな所でケンカしないの！！」

ウォーロックとハープはミソラに怒られて反省する。

ソロは下らないとばかりにそちらを見る事無く、スバルにマヌ・ムーが復活した詳細の推測を述べた。

「おそらくマヌ・ムーは、この島に訪れたあの男の波長が自分と同じだという事に気付いて、あの男にこの場所に来るように【　封印の綻び（ほころ）　】をかいくぐって暗示をかけた。そうして、いずれ自分を見つけてくれることを願っていたのだろうな。……そろそろあの娘が目を覚ます頃だな。アイツが逃げない様にオレはさっきの部屋に戻る」

ソロの言う『あの娘』とはソラの事だろう。

「えっ、でも気絶してたんだからそう簡単には目を覚まさないんじゃ……」

スバルの問いに、ソファーから立ち上がったソロは呆れたようにスバルを見る。

「まさか気付かなかったのか？　あの娘はとっくの昔に目覚めていて、今は気絶ではなく単なる睡眠になっていたぞ？」

「てめぇ！　いつから気絶から睡眠にランクダウンしてた――――――!!?」

「いたたたたたた!!!　何するのいきなり――――!!!」

「……聞いての通りだ」

部屋からロビーまでツバサの声が響いてきた。ソロは冷静に部屋に向かう。

部屋に行って見ると、ツバサとソラが互いに頬を引っ張り合ってケンカしていた。アイリスとスザクは何とか止めようとしているが、2人の声はほとんどツバサとソラには届いていない。

ソロはズカズカと部屋の中に入っていき、ツバサのこめかみに無言でパンチを食らわせた。

バスッ！

「いでっ！　何しやがるソロ！！」
「下らん事をしてないで写真を寄こせ」
ツバサは仕方がないといった様子で自身のハンターから写真のデータを探していたが……。
「スキありっ！！」
ゲシッ！
ソラがツバサにケリをお見舞いしたのだ。ツバサは小さい呻き声を上げた後、彼女に抗議した。
「今度はソラか！　何の恨みがあるんだ！」
「先に頬を引っ張ったのはあんたでしょ！？　これはおかえし！！」
「ふざけんな！　だったら目が覚めたらその時何か言いやがれ！！心配して損したじゃねぇか！！」
「……写真を――」
「「　だまらっしゃい！！！　」」
ソロの写真要求には息ぴったりで反対。再び2人は頬の引っ張り合いを始めた。
「……」

ソロは無言で自らのウィザード、【　ラプラス　】を出す。

ラプラスは電波変換をするための存在ではなく、ブライが戦闘時に使う黒い曲刀に変化する特殊な存在である。

以前暁がサテラポリス遊撃隊の一員にソロをスカウトしようとしたのだが、その際はサテラポリスの誇るバトルウィザード（　約１０体　）がほんの一振りで全滅された。

なお、その際はラプラスが剣に変化しただけで、ソロは電波変換していない。

このままではホテルが壊される恐れがある。現にブライは、コダマ小学校の壁や天井（職員室）をぶっ壊した前例がある。一言で言えば『手段を選ばないタイプ』だ。

しかし、最悪の事態は回避できた。その理由は……。

「いい加減にしなさい！！！！　ここで暴れたら他のお客様のご迷惑になるでしょ！！！！」

気迫込みで部屋に響き渡るのは、リーダーシップならコダマ小学校で右に出るものは居ないだろうという人物。白金ルナの声である。

さすがにこれには引っ張り合う手を止めてツバサとソラ、そしてスバル達もドアの方を向く。そこには、今までで最高ランクの怒気を出している白金ルナがいた。

学校なら見知った顔が多いから、周りは「またやってるよ」程度の認識で済ませてくれるだろう。しかし、今回のような場合では、そのままホテルの評判へ傷を付ける恐れがある。つまり、今回は他人にかける迷惑が人一倍なのだ。

ルナがこの事を怒気込みで説明している時、ツバサとソラは互い

に正座して小さくなっていた。

「……それじゃあ、ケンカ両成敗って事で互いに謝りなさい」

有無を言わせぬ声色と言葉。ツバサとソラは互いに謝る。ツバサとソラはルナの見えない所で互いの足をつねっていたようだが、それに気付かないルナは2人に満足気な笑みを送る。

これでやっと表面的に場が収まると思われたが、そうはいかなかった。

「姉ちゃんと暁知らねぇか!?　受付前の売店から戻ったら居なくなってたんだ!」

ジャックだ。どうやらクインティアと暁がどこかに行ったらしい。ウォーロックは少し考えていたが、女性陣を始めとしたほとんどの者はピンと来たらしい。

「なるほどね。……ジャック。腹くくりなさい」

「はっ？　何言ってんだ？」

ルナがジャックの前に立って言う。

「女の、いえ、暁さんとクインティアさんの幸せのためだよ」

「だから何だそりゃ？」

ミソラがジャックの右肩に『ポンッ』と手を置く。

「弟だったら姉の幸せを祝ってあげなきゃ」

「だから何のこ……まさかっ！！」

ソラの言葉でようやく気付いたらしく、ジャックが駆け出そうとしているのをルナ、ミソラ、ソラが3方向から押さえる。

『大丈夫。ジャックさんにもいつか良い人が見つかるから』

「アイリス、そういう問題じゃね――――！！！」

アイリスのフォローは大して効果は無かったらしい。ジャックは依然としてドアに向かおうとしているが、少女3人に力負けして前には進めない。

スバルはその様子に苦笑しながらツバサがいる方を向く。

「やれやれ、ぜんぜん騒ぎが収まらないね。ツバサく……。あれ？ツバサ君は？」

視線の先に彼はいない。代わりに、窓からは夜のヒンヤリした風が入ってくる。

皆の目がジャックに向いて、さらに言えばアイリスがジャックを止めている隙に出て行ったらしい。

ブチッ……

ソロの方から何かが切れた音がする。ソロはゆっくりと開いている窓から出て行った。明日は本当にツバサの死体が浜に置かれているかもしれない。

「ねぇちゃーん！！」

ジャックが叫んでいる。前々からそういう関係だから予想はできていても、いざその時となると肉親として慌てるのだろう。

「今日は何か疲れたな……」

騒がしい部屋の中、スバルは一人秘かにため息をついた。

――――ホテルから少し離れた海岸――――

「で、どうしたんだティア？　こんな所に連れ出して」

ティアというのはクインティアの愛称のようなもの。

暁とクインティアは、海岸から少し離れた手すりに寄りかかっている。

「……用はあるんだけど……」

ルナからイースター島に行くと聞いたとき、クインティアの中にある計画がひらめく。その計画を一言で言えば、【　ロマンチック

な星空を見ながらシドウに告白しよう　】というものである。

だが、普段クインティアは必要最低限の事しか話さない。そうなれば必然的に口下手になる。そんな自分をこの時ほど恨めしく思ったことは無いだろう。

「……大した用じゃ無いなら、ホテルに帰ろうか」

「ッ！　わ、私っ！　シドウの事……！」

この機会を逃すわけにはいかない。その思いでシドウを呼び止める。しかし、そこから先が言えない。夜なので顔は良く見えないが、クインティアの顔は真っ赤になっている事だろう。

そんなクインティアに対し、シドウはいつものニッコリとした笑顔で……。

「君の事が好きだ」

「……えっ？」

クインティアは柄にも無くキョトンとした顔をしている。自分が言おうとした言葉を先に言われたのだからそうなるのも無理はない。

シドウは笑いを堪えながらクインティアに向き合う。

「いや～、相手が言おうとしている告白を先にするってのをやってみたかったんだよね♪　……けど、想いは本当だよ。……ティア」

シドウの口ぶりからして、ここに呼ばれた時点で彼女が自分に何を言おうとしていたのかを察していたようだ。そうなると、クインティアが一歩を踏み出すきっかけになった「帰ろうか」発言は、彼女に一歩を踏み出させて自分から告白するための作戦だったと推測できる。

本来ならこの場合、クインティアはシドウを怒るべきなのだろうが、彼が子供っぽくてイタズラ好きという事をクインティアは十分に理解していたので、憤慨（ふんがい）して帰るという事はしない。……だがその代わり……。

ズンッ！

「イッテェェェ！！　足踏む事無いだろ！？　しかもヒールのピンで！！」

「シドウのバカ。……でも、ありがとう。……シドウ……」

赤くなりながらもお礼を言うクインティアに、シドウは優しく微笑みかける。

「……あぁ。……ハハッ。帰ったらジャックの説得の方が骨が折れそうだな」

「ふふっ。そうね。……もう少しここに居ましょうか」

「そうだな。ホテルには口の巧（うま）いツバサも居る事だし、巧く言ってくれるだろう」

その後、クインティアは暁の肩に自分の横顔を預けて、2人で日本とは違う星空を見ていた。

……南十字（サザンクロス）の祝福の下（もと）で……。

第５２話　南十字の瞬く夜（後書き）

次回の更新は１０月２４日の予定です。おまけを言えば２話更新します。ネタバラシすると、元々長かった１話を２話に分けただけなんですけどね。

それでは次回もお楽しみに！

第５３話　迷い（前書き）

今回は2話更新です。

第５３話　迷い

暁とクインティアが海岸で寄り添っている時、ホテルでスザクが「ああ女々しい」と言わんばかりにジャックに火炎を浴びせて部屋から追い出した時、ツバサはイースター島からほんの少し離れた島にいた。その島の名を、【モツ・ヌイ】と呼ぶ。

その島はイースター島の真近で、さらには小さいが、この島には飛王（フェイワン）・リードの介入を防ぐための結界の一つがある。

通常は海を渡らないといけない島なのだが、実はイースター島と他の島を結ぶウェーブロードの真下に島があるので、電波体なら移動できるのだ。

ツバサはデューオによって体の表面に施された膜の波長を変える事によって電波化し、そこまで歩いていったのである。

島からは陰になって見えない所に洞穴（ほらあな）がある。海水や風の風化を魔術で抑え、暗い暗いその奥に、その場所はある。

「……この地を護るモノよ。我の呼び声に応えよ」

ツバサの声が闇の中で微かに響いた瞬間、地面から光が発し、暗かった部屋は一気に明るくなる。部屋にある物はシャーロ（シャーロ）の時と変わらず、部屋の中央に魔方陣があるだけで他には何も無い。

北ではおじいさんの様なしゃがれた声だったが、今回は違う声だ。

『……私は全てを飲み込む破壊の烈火。同時に、生物の『熱』を司るモノであり、南を守護するモノ。……私を呼ぶあなたは誰？』

その声は女性のものだ。おまけを言えば、シャーロの時と少しセリフが違う事から、それぞれに性格もあるらしい。

「我、創造主クロウ・リード。その名の下に、汝に命ず。我消えし時、この世界に悪意を持って入らんとせし者を永久に拒め」

ツバサはシャーロで言った時と同じことを言っているが、それは４つの結界が互いに力を与え合い、強めやすくするためだ。

同じ意味の言葉をそれぞれに違う言葉で言うよりも、同じ事を全員に言った方が誤解が少なくて済むのと似ている。

ツバサが命じた後、再び女性の声が響く。

『……その命（めい）、確かに受け取りました……』

この後は例によって部屋が暗くなるのだが、ツバサはその言葉を聞くなり猛ダッシュで出口に駆け出した。

魔方陣によって生じた光が完全に消えるまでに出ないと、目がその変化に追いつかなくて視覚が使えなくなる。明るい所に慣れる【明順応】よりも、暗いところに慣れる【暗順応】の方が時間がかかるのは人体の特性と言っても良い。

ゴンッ！

それでも間に合わずに、結局出口付近で出っ張った岩に膝（ひざ）の皿を

打ち付けてしまった。

「〜〜〜〜〜ッ！！」

ツバサは声にならない叫びを上げるが、早々ゆっくりもしてられない。今ツバサが居るのはモツ・ヌイの外。最初に述べたとおりその島は小さいので海水が容赦なく打ちつける。よって……。

ザッパーン！！

「うわぁ！？　……このままここに居ると、良くて風邪を引いて、悪くて沖に流されそうだな……。とっとと離れるか」

良くても悪くてもまともな事は無いと判断したツバサは、ウェーブロードを使ってイースター島に戻った。

島に足を下ろしたツバサを待っていたのは、野鳥が慌てて逃げ出すほどの殺気を出しているソロだった。どうやら逃げられた事に相当怒っているらしい。

「ハ、ハロ〜……」

「……」

ツバサの冗談は通じず、ソロは無言でラプラスを剣に変換。そのままツバサに近づく。

「分かった分かった！　写真は渡すから実力行使は止めてくれ！」

「……ふせろ」

「へっ？」

「遅い」

真近に迫ったブライの言葉を理解するのが遅れて、ツバサはソロに頭を掴まれて思いっきり下に下ろされた。

それと同時に風を切る音。暗闇に覆われたやぶの中に何かが入る音。その直後響く悲鳴。

これらの事から推察するに、やぶに誰かが居て、ソロはツバサを襲うと見せかけてやぶの中の人物を狙ったという事である。

ソロに詳細を聞く前に理解した。この場は、敵意に満ちている。

ツバサが「今日は厄日か」という思いをため息に込めた時、ソロが逆に質問してきた。

「貴様の存在はほとんどの者が知らんのでは無かったのか？」

その瞬間、敵意の持ち主達は一斉に襲い掛かってきた。手に持つのは銃や小型のナイフなど多種多様。

ソロはラプラスを戻して剣を構え、ツバサは以前ファントム・ブラック相手に使ったリアルウェーブの棒を構える。

ツバサが普段行っているエアディスプレイのキーボードからバトルカードを転送するという戦闘スタイルは、【相手を視認　↓　その場において適切なバトルカードを選択　↓　実行】というサイクルを遂げなければ攻撃できない。それでは接近戦や相手の動きが素早い時は対応できないので、少しでも早く対応できる【　実質的な武器　】を生成する必要があるのだ。ツバサが殺傷能力の小さい【　棒　】を選んだ理由はあるが、それはまたの機会に語ろう。

ソロの言葉に、ツバサは少し悩みながら答える。

「う〜ん……。そうなんだけどね〜。……オレの知らない所でめんどくさい事になってんのかな？　ねぇ、おじさん達、あんた達を雇ったのが誰か教えて？」

「……」

その言葉に返ってきたのは沈黙とナイフ。要求は予想通り却下されたらしい。

ツバサは横に振られたナイフを垂直に軽く受け止めた後、風車のように受け流す。そうする事で目の前の男性のナイフを持った腕は、思いっきり体の外側に開かれる。

そしてがら空きになった男性の腹に、ツバサは自身の棒を自分の脇に構えて真っ直ぐ突いた。

打撃の衝撃で一瞬男の動きが止まった隙に、体重を乗せた棒を横に振って、男の顎（あご）をなぎ払う。男はそれで気絶した。

息をついたらまた別の男が襲ってくる。動きが直線的過ぎるので、足を棒で払って転ばした。その後すかさず首筋を打ちつけて男の意識を体から離す。

「3歩下がれ」

ソロの声の通りにすると、目の前に居た男達は紫の衝撃波になぎ払われていく。

ソロの方を見ると、すでに彼の足の近くには負傷者の山が出来ていた。先程の衝撃波で吹き飛ばされた男達から呻き声が聞こえる所を見ると、彼らも生きているらしい。

他に気配が無い以上、命がけの運動の時間は終わったようだ。

「……よく殺さなかったな～。……あぁ、写真ね」

ソロが無言で手を上向きに出して来たので、ツバサはハンターから写真のデータを出す。

ソロはそれを自身の端末にインプットした後、なおも手をツバサに出す。

「……他に持っている写真も出せ。こいつらを倒すのを手伝った対価だ」

「あらバレてた？　……冗談だって。そんな殺気を込めた目で見るなよ。え～っと、他の写真は……ほらよ」

それを受け取ったソロはツバサに向き合う。

「それで、そこのゴミ共が貴様を襲うように仕向けた奴に心当たりはあるのか？」

「……考えたくないケースだけどね。ライラに頼んで調べてもらうよ。もうすぐバルズランドに行くし」

ツバサの頭の中には、飛王（フェイワン）・リードがもうすでにこの世界に何らかの介入をしている事が予想できたが、本当にこれは良くないケースだ。飛王（フェイワン）・リードは、頭は切れる上に手段を選ばない。この組み合わせは、はっきり言って性質が悪い。

一方ソロは、これからツバサが行く国の事を聞いて動きが止まった。

「……バルズランドだと？」

「あぁ。……あれ？　もしかしてお前も？」

「……不運な事にな」

「不運はお前？」
「……」

ソロのこの無言は肯定だろう。ツバサは「クックック」と抑えるように笑い出し、ソロはツバサに一睨みを浴びせる。

「……貴様こそ良いのか？」
「くっく……。何が？」

依然として笑いの収まらないツバサに対し、ソロは憮然と言葉を放つ。

「今日気絶していたあの娘、あれを今後も戦場に出すのかと聞いている」

ソロのその質問は、ツバサから完全に笑みを消した。

「……元々、連れてくるはずじゃ無かった」
「しかし結果は【付いて来た】。……オレは他人の事なんて知ったこっちゃないがな、失いたくないなら帰すなりしろ」
「……そうだな。ホテルに帰ったら、ソラに帰るように言ってみる。……サンキュー、ソロ」
「フンッ。……他人の事など知った事じゃないと言っているだろう」

ツバサとソロはそこで別れた。また数日後出会うだろうが、彼はツバサ達と共に行動する事は無いだろう。

だが、闇に紛れて息を潜めていた者がいた事に、2人は気付かなかった。

正しくはソロの衝撃波で藪（やぶ）の中に吹っ飛ばされた者だが、その者

は2人が去った後に自分達の雇い主に連絡する。彼らが次に行く国の名を報告するために。

――ホテル――

ツバサとソロが別れた同時刻、ソラはベッドに仰向けになり、自身の首を触れる。

（……あの時、あの白い髪の子が来なかったら今頃……）「恐いな……」

ボソッと呟いたつもりだが、さすがと言うべきか、パートナーのスザクには聞こえたらしい。ハンターの中から心配そうに声をかけてくる。

『……ソラ、帰っても良いんだよ？　私もソラが死ぬとこなんて見たくないから……』

「……うん……」

このときのソラは本気で悩んでいた。実際に命の危険に晒されれば恐怖の一つも沸く。ツバサが言ったように、自分がそこに居るだ

けで幸せになってくれる人（　ソラの場合なら女将や旅館の皆　）が居るなら、【　自分がここに居て良い　】と思えれば、それだけで心にかかる加重が減る。その人は『生きやすく』なる。

だが、自分が消えたら悲しむ人が居る。悲しんでくれる人を想うと、自分も悲しくなってくる。しかし、その中でスバル達は戦っている。でも……。

ソラがそういった葛藤をしている時に、窓ガラスを叩く音が……。

バンバンッ！

ソラと、実体化したスザクは顔を見合わせてから慎重に窓に向かう。もし招かれざる者ならスザクの炎が唸るだろう。

部屋から見て暗いベランダに目を凝らすと、ツバサが手すりに座っていた。スザクは『なぁんだ、アンタか。脅かさないでよね』とぼやきながらソラのハンターの中に入った。

ツバサはそんなスザクに苦笑しながらソラに向き合った。

「よぅ。……ソラ、ちょっといいか？」

「う、うん。……どうしたの？　顔色悪いけど……」

「……今日の戦闘の事でな……」

「……うん」

「……もし、もう戦いたくないなら……帰っても良いぞ……」

「えっ……？」

ソラの中の時間が止まった。今さっきツバサが言った事を脳で理解するのに時間がかかる。

先程スザクにも同じ事を言われたのに、なぜ今回はこれほど時間がかかるのだろう？　ソラはその理由が自分でも分からなかった。

第５４話　決断

ツバサはソラに帰って欲しい理由を少し遠回しで語りだした。

「昔さ、オレにも自分のネットナビが居たんだ。……でも、そいつはオレの目の前で死んだ。……オレはもう、あんな思いはゴメンだ。お前の事も失いたくない。……だから……頼む」

ツバサが目の前の命に必死なのは、その過去が理由なのだろう。昼の戦闘で彼が見た悪夢も、おそらくはその映像だろう。

そしてソラにとって、彼もまた自分を大切だと言ってくれる存在で、その事はソラに嬉しさを与える。……しかし……。

「……仕方ないね。……あ～あ、この旅行で皆ともっと仲良くなれたらな～。って思ってたのに～」

彼女は帰ることを選んだ。自分を失いたくないと願う人たちのために。それでも、寂しくないと言ったらウソになる。

本心を隠して、なおも明るく振舞う彼女に対し、ツバサは苦しそうな笑みを浮かべてソラの首に触れる。

「な、なに？」

「……護れなくてごめん……」

その優しい言葉に、ソラは自分の中の感情を抑えられなくなった。

ガバッ

「!?　……ソラ?」

ソラはツバサの肩に顔を埋める。聞こえるのは、元気な彼女からは想像も出来ないほどに弱く、儚(はかな)い泣き声……。

「……ぐすっ……恐かった……本当に……死んじゃうかと思った……」

「……ごめん」

ツバサはもう一度謝ると、ソラの頭にそっと手を置く。

ソラは、つらい過去の涙もまとめて流すように泣き続けた。実際のところ、その表現は正しいのかもしれない。ついこの間まで捨てられる恐怖に怯えて、それでも頑張ってきたのだから。

そして、泣き止んだソラの心は決まっていた。

ツバサの肩から顔を離した彼女の目は、いつもの元気な目になっていた。

「前言撤回!　最後まで付き合うよ!」

「……はっ?」

今度はツバサの脳が処理不能になる。

「え?　ちょっと待て。お前さっき帰るって……」

「女心と秋の空って言うじゃん♪」

「……言うけどよ……」

ツバサはいまいち納得できないという顔をしている。ソラはツバ

サの隣（　手すり　）に座った。

「……それにね。さっきはケンカになったけど、私が目覚めたのは【なぁに――――――！！！】って、皆が叫んでる時だったんだ」

それは、ツバサがブライを動かすための切り札として写真をチラつかせた時、スバル達が上げた叫び声だ。あの大音量なら目覚めてもおかしくはないだろう。

ソラは続ける。

「それでね、あたしが眠れたのは、キミがそばに居たからだよ？」

「……オレの？」

「そっ。目覚めた時キミが近くに居たから、【　あぁ、もう大丈夫かな……】って思えたんだ」

考えてみれば、これほどまでに自分自身は皆と旅行を続けたいと思っていたのだ。でなければ、いくら時差ボケで眠いと言っても、あの状況で安心して眠れるなんてありえない。それが出来たのは、ツバサや皆がいたおかげだ。

そんなソラの真っ直ぐな目に対し、ツバサは顔を俯かせた。

「……お前を助けたのはオレじゃ――」

「次はっ！」

ソラは強い口調でツバサの言葉を遮る。ツバサが少し驚いて言葉が出てこないうちに、ソラは続きを静かに言った。

「……次は、ちゃんと護ってくれるんでしょ？」

ソラの言葉にツバサは目を見開いた後、ため息をつく。

「はぁ～～～。……後悔しても知らねぇぞ？」

「女は度胸！！」

「愛嬌じゃなくて？」

ツバサのツッコミにソラは楽しげに笑い出し、その笑みにつられるようにツバサも愉快気に笑う。

「ふふふっ♪」

「ははっ」

『……楽しそうなとこ悪いんだけどさ～』

スザクはいつの間にか2人の横に実体化していた。

「あ……スザク……」（やっぱー。この子の事忘れてた。……今思えば、私が言った言葉って他人に聞かれるとかなり恥ずかしい）

これはソラ。

「よ、よぉ。大人しかったな」（今のをジャックとかに話されたら学校でどんな事言いふらされるか分からねぇ。……迂闊（うかつ）だった）

これはツバサ。どちらもスザクの次の発言にドキドキものだ。

スザクはそんな2人の心を察したようにため息をつく。

『はぁ～～～。大丈夫よ。他の人には言わないから』

2人は安堵したように肩を一回持ち上げ、ため息と共に下ろした。

その様子を見ながら、スザクはあくまで思い出したように偽ってソラに話しかける。

『ところでソラ、今日あんたが気絶した後の事なんだけど。実はツバサの奴、マヌ・ムーをほとんど名前で呼ばずにバカ扱いしたのよ？　他にもやり過ぎなぐらいの作戦を立てたり。あんたを傷付けられて、かなり怒ってたみたいよ～？』

「スザクッ！！　お前！！」

「……そうなの？」

きょとんとするソラに、スザクは目の前の障害物（ツバサ）を避けてソラに近づく。

『そりゃあもう♪　……あ、他にもあんたをこのホテルまで運んだのってツバサだよ』

さっきは帰れと言い、今はソラが旅を続けたいと思えるようにしているスザク。これは調子の良い性格というわけではない。

ソラがその時悩んでいる事や選びたい事。スザクはそれらを察して、彼女の意志を肯定してソラの背を押す。これは、スザクなりの優しさである。

「……そうなの？」

今度のソラの問いはツバサ宛（あて）だ。彼はバツが悪そうにため息をつく。

「……まぁさっきも言った通り、お前が死にそうになった責任はオレにもあるし……」

「ありがとっ！　嬉しいよ！」

「へいへい」

満面の笑顔にも反応しないとなると、本当に腹が立ってくる。そんなソラの怒りを知ってか知らずか、ツバサは元来た様に窓から退室しようと体の向きを変えた。

「ちょ、もう行くの？」
「あぁ。ジョーカーに酒を大量に頼んどいたから、それを暁と一緒に飲もうと思ってな」

「『それはダメ！！」』

スザクとソラに息ぴったりで否定され、ツバサは思わず動きを止めた。

「何で？」
「実はね、――――」

ソラは、暁がクインティアに告白した事を話した。今日一日ぐらいは2人の時間を作ってあげようという事らしい。
ツバサも納得したように頷いた。

「なるほど。それなら仕方ないか。……しゃ～ない。二日酔い覚悟で飲み切るか」
「……念のために聞くけど、本当にお酒飲めるの？」

ツバサは大抵みんなが寝静まった後に自分の部屋だけで飲むので、ソラはこの旅行中一回もツバサが酒を飲んでいる所を見た事が無い。
ソラの怪訝そうな質問に、ツバサはあっさりと答える。

「まぁな。ちなみに一升瓶４本は余裕だ。……いっつもアイリスは２本で止めさせようとするがな」

最後は文句を言うように言ったツバサに、ソラは呆れたため息をついた。

「それはアイリスちゃんがキミの事を心配してるんじゃない。忠告ぐらいは聞きなさいよ？」

「いやいや、今回はそうはいかない。その地で買った酒はその土地に居るうちに飲まないと、本当の美味しさが分からないもんだ」

もっともらしい事を言っているように聞こえなくは無いが彼の内心では……。

（久々に思う存分酒が飲める♪）

という期待があった。

ソラはそれを察したのか半眼で腕を組む。

「単に羽目を外して飲みたいだけでしょ？　……しょうがない。今日は特別にあたしもそこに居てあげる。飲み過ぎそうな時はあたしとアイリスちゃんの２人で止めるから」

「えっ？　いや、良いって。ゆっくり休めよ明日は出発だ」　（まさかこいつ、オレの【　今日一日は羽目を外して飲みまくる！　】計画を察したのか？）

「あたしは大丈夫。こう見えても旅館で夜間の電話番もやってたから夜更かしは平気だよ。あ、スザクも来るよね？」　（ふっふっふ。ツバサの計画総崩れ作戦開始だ～♪）

『モチロン！　ソラの忠告を聞かずに飲むようなら炎をお見舞いするわ。別件として、酔ったあんたがソラを襲おうとしたら問答無用で焼くから』《ソラ、本当に楽しそう。いっぱい泣いてスッキリしたみたいね。良かった良かった》

「……念のために聞くが、焼き加減はいかほどで？」

ツバサは見るからに、【　嫌な言葉を聞いた――――　】という顔をしている。

そんなツバサに対し、スザクは目をキラーンと光らせて答えた。

『ウェルダンで』

「黒コゲじゃねぇか！！！」

「あはははははっ！」

ツバサの関西風ツッコミ、というよりスザクとツバサのコントにソラは楽しそうに笑い出す。

その後、結局ソラとスザクはツバサの部屋になぐりこむ事になる。

もちろん、計画を崩されたツバサはため息をついた。

第５４話　決断（後書き）

最終チェックを眠気眼（まなこ）で見たので内容で訂正する所があるかもしれません。訂正した場合はあらすじの所に『〇話修正』と書きます。

次の更新は今日（２４日）中にしたいと思います。

第５５話　集う……（前書き）

実はこの話は前日のうちに出来てはいたのですが、自分で満足できなかったので、一晩寝てから編集を加えていて遅れました。この話でイースター島編終了です。

第５５話　集う……

「……見張るって言ってなかったか？」

ツバサの呆れたような問いに答えるのは静かな寝息。ツバサはため息をつきながら軽く微笑み、彼女の頬を弾く。しかし、少し眉を顰めただけで目覚める事はない。

流れ上、ツバサはソラからお酌してもらっていたのだが、途中で彼女は眠ってしまったのだ。都合の悪い事にツバサの肩に頭を置いているのでツバサはうかつに動けない。ベッドに運んで寝かそうと思っても、頼みのジョーカーはとっとと寝てしまい、スザクもソラのハンターの中で寝ているようだ。

起きているのは、ツバサを除いてアイリスだけである。

『……残酷ね』

彼女にしては珍しいトゲのある言い方にツバサはため息をつく。

「言っとくけど、こいつを襲う気は無いぞ」

アイリスは首を横に振った。

『そうじゃない。……これからのこと』

彼女の言いたいのはツバサの目的に関わる事らしい。ツバサはそれを理解して苦笑する。

「……なぁアイリス、どっちが残酷だと思う？」

『？』

微かに首を傾げたアイリスと、ツバサは正面から目を合わせる。

「オレはそう遠くない未来に、ネビュラサーバーの怪物……【ネビュラグレイ】に飲み込まれる。そうなれば、被害はオレの計画の比じゃなくなる。たぶんスバルや暁、そして――」

ツバサは自分の肩で静かに眠る横顔を見る。

「コイツの事も……」

『でも、フォルテやあなたが抑えているんじゃ……』

「残念ながら、奴の強さは少しずつ上がっている。……スバルがノイズチェンジする時のアクセスレベルが上位に行けば行くほど、シャインサーバーの力が上がるからだろう」

簡単に説明すれば、光が大きくなればなるほど、それと相反する闇も大きくなるという事だ。

ツバサはネビュラＰＧＭを介して、フォルテは直接サーバーの中からネビュラグレイを抑えている。しかし、ＰＧＭを介して抑えるということを逆を言えば、ネビュラもＰＧＭを介してツバサに侵食する事を意味する。飲み込まれたら、ツバサは自分自身の闇に飲み込まれて自我を失い、区別無く人を傷付けてしまうだろう。

アイリスがその意味を理解したらしく、心配している声でツバサに問う。

『……じゃあ、あなたはいつまで【ツバサ】のままでいられるの？』

対するツバサはお猪口（ちょこ）を軽く揺らしてその中の酒を回しながら虚ろに答える。

「……分からない。でも、ネビュラに飲み込まれて長く災厄が続くより、一週間程度で済むほうが良いだろう？」
『理屈ではそうかもしれないけど、あなたを知る人は――』
「幕引きぐらい……自分で選ばせてくれ」

アイリスの言葉を遮ったツバサの言葉は自分の事であるにも関わらず、冷淡で、割り切っていた。
それから少し沈黙が続き、アイリスは静かに端末に戻る。コピーロイドはまだ直っていないので置いていく。

『……お酒、ひかえめにね』

アイリスはそれぐらいしか言えなかった。次元の魔女にお願いして自分がこれからする事を、まだ言うわけにはいかない。
それを知らないツバサは、いつものように飄々（ひょうひょう）と返事をする。

「へいへい」

無論、彼はその後手の届く範囲の酒を残らず飲んでいたわけだが……。

――同時刻・ロンシャ――

カタカタカタ……

地下に響くのはキーボードを弾く音。

ライラはゲイルの命でツバサの暗殺を依頼した人物を探っているのだ。

なお、彼女のノートパソコンはウラのネットワークに接続できる。彼女のハック技術と合わせれば、いつでも各国の極秘事項や弱み……。ほとんどのものを頂戴（ちょうだい）する事ができるだろう。

それなら何も地下でなくとも良いだろうとは思うが、彼女が地下を選んだ理由はいちおうある。それはひどく個人的なもので、『落ち着くから』だそうだ。

「……これは……」

ライラの呟きと共に、キーボードの音が止む。

「ゲイル！　ちょっと！」

「はいは～い。もう分かっちゃたりする～？」

ライラの呼ぶ声に、白髪の男性は気の抜けた返事を返す。及び、パソコンの画面を自分の方に向ける。

ツバサを狙った人物の写真を見た時、彼の笑みは一瞬引く。しかし、またすぐに暢気な笑みへと変わった。

「あ～らら。ツ～君もずいぶんとまた偉そうな人に狙われたもんだね。確証は？」

彼の気の抜けた話し方に彼女は慣れているので、別に調子が狂う事はない。

「彼のスケジュール表をハックして覗いてみたんだけど、2日とか3日に1回空いた時間があるのよ。ちょうど、誰かに何かを報告して、指示を受けるには十分な時間がね」

「ふ～ん。……アメロッパ大統領アーノルド・ローグ……か。……近々うちの国の近くで大きな戦いがあるかもね。帰ったらすぐに準備を始めよう。ね、コクレン？」

呼ばれた男性は少し明るい所に居る。彼の場合傭兵（ようへい）だったからか、暗闇は神経が過敏になるので苦手らしい。

「もう飛行機のチケットも買っておりますぞ」

コクレンはポケットからヒラヒラと3人分の飛行機のチケットを見せる。ライラは感心したようにコクレンに近づいた。

「さすがコクレン。え～っと、飛行機が出るのは……あと3時間しかないじゃない！」

「あっはっはっは！　まぁ、そのぐらいなら間に合うでしょ！　空港まで競走な！」

コクレンに文句を言おうとしたライラを笑い声で止めて、我先に走り出す。コクレンとライラはため息をついて彼について行く。

――アメロッパ――

「……また失敗したようだな」

「申し訳ありません……」

一国の主、アーノルド・ローグに頭を下げさせるのは、死んだものを生き返らせる事を願う飛王（フェイワン）・リードである。

スバル達がロンシャを出る時、飛王（フェイワン）・リードはツバサの張る結界のクセが変わった事に気付いた。

ツバサが自分の知っているクロウ・リードと同等の考察力を持っているとなると、飛王（フェイワン）・リードにとっては厄介だ。故に、ツバサが王手をかける前に彼を殺してしまうようにアーノルド・ローグに言ったのだが、イースター島での襲撃は失敗してしまったらしい。

アーノルドは弁解する。

「しかしながら、彼に放った刺客の報告によると、次に来るのは私の居る国の隣国であるバルズランド。そこなら民衆の後押しも得られて軍隊を動かしやすくなります」

アメロッパの隣国『バルズランド』。そこは犯罪者の巣窟（そうくつ）だと言われていて、国としての形が出来てきた頃から幾度と無くイザコザがあったが、現在はアメロッパの戦績が芳しくなく、実質的に停戦している。『臭いものには蓋（ふた）』の原理、または『見て見ぬフリ』と

も言う。

しかし、アーノルドにとって勝機は存在する。飛王（フェイワン）・リードと関わるにあたり、ウラの情報網にも手を出した。その中で、ディーラーが使っていたノイズ兵器の設計図を見つけたのである。

民衆に【　自分達の国が攻撃されかけている　】と言って危機感を煽（あお）れば、世論は加速度的に対象への攻撃的意識へと移り変わる。『相手を倒さないと自分達が攻撃されるのだ』という恐怖を民衆に植え付けるのだ。

……人間はそこまで流されるようなバカじゃない？　残念ながら、それは歴史が証明している。テレビやラジオなどのメディアを使って特定の政治思想や考え方を宣伝する『プロパガンダ』は、幾度と無くあったのだから。もっとも、スバルを地球に帰すべく全人類の目的（レゾン）が一つになったのもテレビの呼びかけ、つまり『メディア』のおかげなのだから、ようは使いようなのだろう。

話を戻そう。

さらに、国が強力な武器を保持している事を公表すれば、『それなら自分の国は大丈夫だ』という安心感を民衆に与えて、より後押しされるだろう。

アーノルドはそういった事を飛王（フェイワン）・リードに進言する。

「……いいだろう。しかし、これに失敗したら、手段は自分で選べぬものと思え」

それは、最後通告であり、脅迫ともとれる発言。これに失敗したら、今後自分の意志では行動できないだろう。

「……次は無い……か。……シンシァ。私を見守っていてくれ……」

アーノルドは神妙な顔で愛する者の写真を手に取った。

――翌日・イースター島――

「あなたたちまで何やってるの――――――！！！」

朝からルナの怒りの声が響き渡る。怒られているのは、ツバサ、ソラ、アイリス、ジョーカー、スザクである。

朝ご飯に誘おうと思い、スバルやミソラ、委員長トリオがツバサの部屋のドアを開けると、ソラがツバサの肩に寄りかかって眠り、ツバサはソラを起こさないようにずっと同じ姿勢を維持。近くには片付けられていない酒瓶が置いてある。

なお、この時点でアイリスやジョーカー、スザクはそれぞれのハンターの中で眠っていた。しかし数秒後、ルナの怒鳴り声で起きる

事になる。

スバル達が部屋に入った時のツバサとソラは誤解されてもおかしくない状態だったので、2人は思いっきりルナに怒られ、【何でちゃんと見ていなかったのか】という点でアイリスやジョーカー、スザクも巻き添えで怒られているのが今の状態だ。

お説教は暁達が来るまで続き、怒られた面々はチェックアウトした後も疲れきった顔でホテルを出た。

一行は空港へと歩いていく。ツバサとソラは目が合うと、互いに苦笑した。

「恐かったね～。小学生でアレなら、将来が恐ろしい」

「ソラ、それをルナの目の前で言ってみ。地獄を見られるぞ」

「それはパス」

ソラはそう言いながらツバサの肩に自分の手を押し付ける。厄介事をツバサに『パス』するという意味だろう。当のツバサは押された部分に触れた後、その手を誰もいない方向へ払う。

「勝手におしつけんな。……はい、これでチャラ」

「ふふっ。ノリが良いね～」

からかうような彼女の言葉にツバサが反応しようとした時、彼のハンターにメールが届く。差出人はゲイル・ホワイトだ。

「……ふ～ん。なるほど」

「誰から？」

読み終わったツバサのメールを盗み見ようとするのはソラだ。

「知り合い」

ツバサは簡潔に答えてメールの内容を隠す。彼は気軽な口調で言ったが、その内容は重要なものだ。

（……『キミを狙う者の正体が分かった。バルズランドに着いたら教えるね♪　それと、キミが僕の国にいる間に争いになるかもしれないからそこんとこヨロシク』……か。さすがゲイル。動きが早い）

本来なら『〇〇より』というのもあったのだが、ツバサはその部分を脳から抹消した。思い出すだけで鳥肌が止まらなくなりそうだからだ。

そして【争い】という言葉から考えて、自分（ツバサ）を狙ったのは少なくとも軍隊を操れるほどの力を持つ者と見て良いだろう。

（……もし今回のように誰かを失いそうな時……オレは……）

ツバサは何かを決意したように自らの手の平を見る。その様子を横からソラが見て来たので、口の両端を引き上げて誤魔化（ごまか）し笑顔を作った。

「どした？」

「へ？　あ、いや、なに真剣な顔してんのかな～？　って思って」

答えるソラの顔は少し赤い。

ツバサはそれに気付いたが、あえて気付かないフリをする。

「なんでもないよ。昨日あんだけ飲んだのに、手の輪郭がハッキリ見えるな～。って思っただけ」
「え？　あれからまた飲んだの？」

ソラは「うわぁ……」とした顔でツバサに呆れたように尋ねていたが、スバルはつい口を挟んでしまった。

「あれから？」
「あぁ、昨日な。ソラにお酌してもらったんだ」
「ふっふっふ。こんな美少女にお酌してもらえるなんて、ツバサは幸せ者だね～？」
「自分で美少女って言うなよ」

冷静でありながら、決して口調がきつくないツバサのツッコミを見て、スバルは思う。

（……なんか、昨日より仲良くなってるような……）

隣を歩いているミソラを見ると、彼女は楽しそうな顔をしている。クインティアもソラを一瞬見て微笑んだ。ジャックはツバサに「まぁ、しゃあねぇから認めてやるか」みたいな視線を送っている。

（……なんだろう。この感覚……）

周りが分かっているのに自分だけ分からない孤立感。以前カーネルの再構築実験の時にのけ者にされたミソラの気持ちが分かったスバルでした。

しかし、少年の知らない所で、刻一刻とその時は近づいていた。

アーノルド・ローグ、飛王（フェイワン）・リード、ゲイル・ホワイト、スバル達……。各人の思いは交錯し、バルズランドに集う。

第５５話　集う……（後書き）

次回は１０月２７日の更新予定です。

第５６話　痛い再会（前書き）

詩も書き始めましたが、本当に同一人物か？　と、ツッコミたくなるほどに暗いので、苦手なら見ない方が良いです。

第５６話　痛い再会

バルズランドへは直接飛行機が通っていない。なので、スバル達はバスを乗り継いでその国へ来たのだが……。

「……壁だね」

ミソラがやや呆然とした様子でそれを見る。スバル達の目の前には、高さ２０メートルもあろうかと思えるほどの壁が立っていた。正面には門が見える。そこで入国者のチェックをするのだろう。

皆の視線は、元々この国に用があるというツバサに集中する。彼は平然と門に歩いていった。

その間、暁とクインティアはこの国の事をスバル達に説明してくれた。たぶん、自分達の知っている事をスバル達にも教えておこうという、思いやりからだろう。

「まずこの国の面積だが、国というよりは大きな町程度の広さだ。ちょうどロンシャくらいかな」

「アメロッパが隣国って事もあって、つい最近までイザコザが多かったわ」

「じゃあ、今はイザコザが減ったんですか？」

暁、クインティアの順に説明し、スバルは好奇心から質問する。暁はあっさりと頷いて見せた。

「ああ。少し前にこの国の王になった奴が頭の切れる奴でな、最近アメロッパは負け続きだそうだ」

「死人は双方でゼロだって話だがな。……ほれ、さっさと行くぞ。

来る気が無いならとっとと帰れ」

ツバサはこちらに戻りながらそんな事を言い、親指を国の方に向ける。スバル達はツバサについて行くように歩き出し、ジャックは腑に落ちないようにツバサに質問する。

「死人がゼロってどういう事だ？　戦争である限り、いくらかは死人が出るだろう？」

「それは――」

「戦争で人を殺さないってのが、この国のルールなのさ」

ツバサのセリフを取るのは、門の事務室の人だ。彼はコーヒーを飲みながらスバル達に人の良い笑みを送る。

「ごゆっくり～」

スバル達が警戒心から苦笑いを浮かべているのに対し、ツバサは皆の様子に笑いを堪えていた。アイリスはそんなツバサに白眼を送っている。

国に入ったスバルは『人を殺さない国』の事でツバサに尋ねようとしたが、その質問の言葉は霧のようにスバルの頭の中から消えてしまった。

スバル達の前に待っていたのは、今まで見た事が無く、想像すらしていなかった光景だ。別に町の市場のように活気があるとか、そんなモノではない。まぁ実際、当たり前で賑やかな活気があってび

っくりしたが、それとは次元が違う。

「……ねぇスバル君……。あれって行き倒れ？」

どうやらミソラにも、僕（スバル）と同じ者が見えているらしい。自分の見間違いではない事が証明されたのは良いが、どうするべきなのだろう。

ツバサは額に手を置きながらスバルの肩を叩く。

「スバル、アレ起こして来い。アイツがこの国の知り合いだから」

「でも、知り合いなら僕じゃなくてキミが――」

「良いから行け。……理由はすぐ分かると思うから」

彼は心底行きたくなさそうだ。かといってスバルも行き倒れている人の対応なんて知らない。

２人は互いに無言で「行ってくれ――！」オーラを出している時に、ウォーロックがため息をついてスバルに話しかけた。

『しかたねぇ。……スバル、いい加減腹くくれ。ここでお前が行かなかったら話が前に進まねぇ。オレも行ってやるから』

「あ、あたしも行く」

『ミソラが行くなら私も行くわ』

そんなわけで、スバルとウォーロック、ミソラとハープが行き倒れている男性の下に行く。

男性は、透き通るような白髪で長身。その髪は長く、首の辺りで結っている。髪は脹脛（ふくらはぎ）の辺りまで有り、その先端の少し手前まで、布のような物で巻き付けるように結っている。イメージとして、動物の尻尾に近い。

４人は目配せした後、互いに頷いた。スバルはおそるおそる男性に話しかける。

「……あの～……大丈夫ですか――」

ガバッ！！

スバルがみなを言う前に男は起き上がり、少し離れている所で待っている皆の方……いや、彼の視線は明確にツバサに向かっている。スバルが驚いているうちに男性は走り出す。両腕を広げて、アメロッパの人ならあいさつと化している『ハグ』の構えを取って……。

「ツ～く～ん！！　逢いたかったよ――――――！！！」

暁達は驚き、とっさにツバサから離れる。当のツバサは足を曲げて飛び上がった。

「悪いジョーカー、肩借りるぞ」

『何を――』

ジョーカーが話し始めた段階でツバサはジョーカーの肩に飛び乗り、コマのように回転しながら男性の方へ飛ぶ。

ドグシャ！

「……久しぶりだな。ゲイル」

ツバサが地に足を下ろした時、ゲイルと呼ばれた男性は仰向けに倒れていた。

何が起きたかというと、ツバサはジョーカーの肩からジャンプした後、回転力を活かして足で男性にラリアット。それは男性の喉仏（のどぼとけ）をクリーンヒット。首を視点に男性の体は逆上がりの要領で浮き上がる。そのまま仰向けで落下して地面に体を打ちつけたのだ。

行き倒れから突然ツバサに抱きつこうとし、終いにはツバサに蹴られて……。そんな光景を見ていたスバル達は驚きで動けなかった。だが、暁、クインティア、ジャックは別の方で驚いているようだ。いや、驚いているというより、思い出したくない者を見ているような顔だ。

「ゲイル……お、お前……」
「この国に居やがったのか……」
「……」

暁とジャックの質問、クインティアの沈黙に対し、ゲイルは暁達を見ると目を輝かせた。

「シー君、クーちゃん、ジャッ君。おひさ～～～。元気だっ――」

ゲシッ！　バシッ！　ズドッ！

「悪いなスバル。こいつディーラーの頃の仲間なんだが……こんな

奴で……」

「キングですら扱いきれなくて、自分の管理している養護施設から違う管轄の養護施設に移したの」

「ってか、何でツバサの事を知ってんだ？」

これも暁、クインティア、ジャックの順なのだが、３人はそれぞれ綺麗なコンビネーションでゲイルを再び地に伏せた。

ツバサはうんざりしたようにジャックの問いに答える。

「……優秀さは折り紙付きなんだが、この個性的過ぎる性格が問題でな、クインティアの言う通りキングから離され、その先の養護施設でも手を焼いていた所をオレが引き取ってこの国に入れたって事」

「この国に入国する時のパスポートは？」

ルナの質問に、ツバサは依然としてゲイルに警戒の眼差しを送ったまま答える。

「もしパスポートが要るんだったら、さっきの門で【　お前らの分出せ　】って言ってただろうな。あのおっちゃん」

少し回りくどい彼の言葉を直訳すると、入国する時は必須となるパスポートがこの国ではいらないという事だ。

スバル達がその事に驚いているのにツバサが察し、ゲイルから目を離して少し自慢げに微笑む。

「もし他の国と同様パスポートがいるなら――――」

「ツー君スキあｒ――――」

ドゲシッ！！

「……この国のスタイルが瓦解（がかい）する」
『……この国のスタイルというのは？』

ゲイルがツバサが目を離したスキに飛びつこうとするが、容赦なく蹴られて撃沈。もはやアシッドは、驚いたり突っ込んだりするのも止めたようだ。冷静にツバサに問う。しかし、それに答えるのはツバサでは無かった。

「それは、『誰であろうと、いついかなる時も、どんな理由があろうと受け入れる』というのが国風……つまり、この国のスタイルだからじゃ」

声のした方を向くと懐かしい人が立っていた。灰青の瞳に顎鬚（あごひげ）を蓄え、黒いスーツという容姿は相変わらずだ。

スバルは懐かしさと親しさからその人の名を呼ぶ。

「コクレンさん！」
「久しぶりじゃのう。スバル君、ミソラちゃん。元気にしておったか？」
「「ハイッ！」」

コクレンも親しそうな笑みであいさつを返し、スバルとミソラも元気に答える。

「そんな国風だから、旅人からもこの国は重宝されてんのよ？」

今度は知らない声。そっちを向くと、ロンシャで追い掛け回してきたブロンドの髪の女性が血走った目で立っていた。

「「「「「「ぎゃあああああ！！！」」」」」」

スバルを中心に悲鳴が沸きあがり、女性は笑い声を上げる。

「あっはっはっはっは！　ごめんごめん。びっくりさせちゃった？　……ほら、私はちゃんと人間よ」

女性はそう言いながら特殊メイクを取り、アイリスは少し驚いているようだ。

『……ライラさん？』

ライラはアイリスを見ると、妹を見るように親しく彼女の手を握る。

「その声、あなたがアイリスちゃんね。いっつも電話越しだったから、こうして逢うのは初めてね」

『こちらこそ初めまして。ライラさん』

「……あの～事態が全然飲み込めないんですが……」

女性が楽しそうに話をしている時に話しかけるのはスバルにとっては嫌だが、全く分からないことだらけだ。この国の事もまだ良く聞いていない。

「それなら……立ち話もなんだし……僕の家に来て……ゆっくり話そう……」

ゲイルはツバサに顔面足蹴にされながらもツバサに腕を伸ばす。

「……家って？」（ツバサ君、いい加減足退けてあげようよ……）

スバルの問いにツバサは無言で指を差す。その先にあるのは……。

「……城？」

「兼、図書館な」

ツバサの補足は少しずれている。あれではまるで王様の……。

「うん……。僕の城だよ」

「ゲイルは王様だからね～。こんなんでも」

ライラが明確な答えを言うが、彼女にはゲイルを助ける気は無いらしい。それどころか笑いを堪えてすらいる。

「はぁ～～～～。……こっちじゃ」

コクレンは慣れきったため息をついて先導する。城までの道中、ゲイルは事あるごとにツバサに襲い掛かり、その度にツバサに沈められていた。

一方スバル達は、簡単な自己紹介を終わらせてコクレンからこの国の事で説明を受ける。

「この国の出来た理由は歴代の王しか知ってはいけない決まりだから話せん。しかし、現在の事なら話せる。まずさっきの国風の事じゃが、誰であろうと受け入れるのはこの国の特色と言っても良い。相手が何をしてこようと、どんな過去を持っていようと受け入れる。それがこの国じゃ」

「治安はどうなんですか？」

やはり市民の平和を護るサテラポリスとしては気になるのだろう。
暁は興味深げに質問する。コクレンは面白そうな笑みを浮かべた。

「イザコザを起こしたら本人同士で解決する事。他人は巻き込まない事。殺さない事。この3つが護れなければ、国中を肌着で走る事になるな」

つまりそういうルール（　罰　）があるという事だ。

「ちなみに、その人が自分の過去隠すなら詮索せず、仲間を売る事を禁じているけど、それは暗黙のルールだ。つまり、住民が進んでやっている事だよ」
「そういや、生き方を選ばなければ飢え死にする事もないって前にメールに書いてたな？」

ツバサの問いにゲイルは歳を疑うほどに元気に頷く。

「うん！　苦労したよ～？　ここまで来るのに」
「……やっぱ、お前が王様なんだな……」
「そうだよジャッ君。キミもすっかり凛々（りり）しくなっちゃって～」

スリスリスリ

「気色悪いわ――――――！！！」

ズゴッ！！

今度はジャックにの頬をスリスリして反撃を食らった。暁とクインティアが平然としているという事は、彼のこれはディーラーの頃からの性格であることが伺える。これはキングが扱えなくなるわけだ。

スバルが納得している時、ゲイルが思い出したようにツバサに尋ねた。

「あ、そう言えばツー君、頼んでた奴は？」

「え～、いま渡すのかよ？　別にお前ん家に着いてからでいいじゃんか」

「思い立ったが吉日。極東の言葉でも言うじゃん。それとも、照れてるのかな～――」

ズンッ！

コリもせず抱き付こうとしたゲイルに、ツバサは冷徹なケリをお見舞いする。

「……分かった。いま渡す」

（（（（（ケリは余計だよ！！）））））

スバルを始め面識の浅い者達はそんな事を思い、ライラや暁達は慣れた様子でツバサが何を出すか見ている。

「解凍開始……」

ツバサは自分でかけたプロテクトを解除し、解凍作業を行う。

『あれっ？　この波長って……』

「どうしたの？　スザク？」

ソラの問いに顔を合わせず、スザクはツバサのハンターから出てきた者を見ている。そして、呆然としたように呟いた。

『……なんで……ゲンブじーちゃんが？』

『……ふ～～～。さすがに長い間圧縮されておると肩が凝る。少しは年寄りを労わらんか』

「悪いね～。あんたの波長はすでにお尋ね者になってるから、普通の圧縮フォルダに入れて堂々と歩くと即行でバレルからさ」

「ツバサ……これはどういう事だ？　なぜ、ゲンブが……」

暁の呆然とした質問に、ツバサはしてやったりという笑顔を見せる。

「ゲイルにはコクレンを亡命してもらった恩があるんでな。亡命の件はお前も納得したろ？」

「たしかにしたが……」

コクレンが亡命する時、スバルとツバサ、コクレンは暁に懇願したのだ。その結果、暁はスバルとツバサへの信頼として何とか納得。だが、ゲンブもとなるとさすがに納得出来ないらしい。暁が詰め寄ろうとするのを、ゲイルは立ち塞がる。

「ハイハイ、ストーップ！　ゲンブを持ってくるように頼んだのは僕だよ。サテラポリスのエース、暁シドウ君？」

「ッ！　……お前が人の名前をフルネームで言うって事は、厄介事

の類だな？」

暁の質問は、ゲイルの沈黙によって肯定された。

「最近どうにも隣の国が企んでるようだから、ゲンブを持ってきて～♪　だとよ。オレのところに来たメールだ」（……【　キミだけのゲイルより（ハート）　】が余計だったがな！　……あ～～思い出しちまった……）

ツバサによって説明がなされる。

ツバサは一瞬遠い目をしたがすぐに回復した。どうやら彼の中でその記憶は再び抹消されたらしい。

話を戻す。

つまり、ツバサはゲイルの頼みを聞き入れたという事だ。暁は葛藤するように頭を掻き、やや荒く手を下ろす。

「～～～～～ッ！　分かったよ！　その厄介事が終わるまでは何も言わない！　……ツバサ、長官にはそのまんま報告するぞ？」

「ご自由に。……で？　ゲイル、厄介事は？」

ツバサは暁に対し飄々と肩を竦ませた後、ゲイルに尋ねる。それも、半分予想が出来ている顔だ。

ゲイルはニコッと笑って答える。

「戦争の助っ人♪　あ、スバル君たちはやんなくて良いよ。それじゃあニホンが不利になるだろうし」

「せ、戦争……」

『それに、オレ達が加勢しなくて良いってどういう事だ？』

スバルが耳慣れない言葉にたじろぎ、ウォーロックは自分の疑問を投げかける。なお、ゲイルはまずスバルに笑いかける。

「大丈夫だよ。スバル君。まだ相手は動かないようだし。それからウォーロック、それは言葉通りだよ。キミ達は世界的に有名な存在だ。そんなキミ達が加勢したら、この国だけじゃなくニホンも要らん憶測がわんさか出る事になるだろうからね」

ロックマンはもちろん、暁もサテラポリスでは顔を知らない者はいないほどの人物。そんな人間が周りから蛮族の国と言われている国に加勢したとなると、下手をすれば憶測や推測が膨れ上がって嫌悪感や憎しみが生まれる。その後は戦争。っというオチは歴史上良くある事だ。

ゲイルはそうならないように配慮してくれているらしい。

スバルはそういった事を理解し、ゲイルに確認を取る。

「……つまり、僕達のために……」

「その通り！　いや～やっぱりキミは察しが良いね！　頭ナデナデしてあげ――！」

ザンッ！

『スバルに触るんじゃねぇ……！』

ゲイルはウォーロックの中で、いろんな意味で危険人物に分類されたらしい。その爪を食らって倒れてしまった。

コクレンはため息をついてゲンブを見る。

「久しぶりじゃのうゲンブ。過去の事は水に流して、まぁ、仲良くやろうの」
『そう言ってもらえると助かるわい。今まで話し相手と言えば、そこの食えんガキんちょだけだったのでな』
「お～い、それってオレの事か～？　もう一回冷凍圧縮してみるか～？」

ツバサとゲンブの2人がにらみ合いを始めたので、コクレンはヤレヤレといったように止めに入る。

「これこれ2人とも、まずはゲイルを城に運ばんと。ゲンブ、手伝ってくれんかの？」
『分かった』
『……あのさ。ゲンブじーちゃん……』
『ん？　……コクレン、スマンがこの人物を運び終わったらスザクと話がしたい。……安心なされよサテラポリスのエースとやら。ワシはそこの小僧に【　次に何かしたらためらわない　】と言われておるのでな。下手な事はせんよ』

スザクはゲンブに話しかけ、ゲンブはスザク、暁、ツバサの順に視線を巡らせる。
ソラは心配そうにスザクを見る。

「……スザク……」
『大丈夫よ。ゲンブのじーちゃんは割と話の分かる人だし』
「……みたいだね。何となく分かる。それじゃあゲンブさん、スザクの事お願いします」
『う、うむ』

丁寧に頭を下げられて、ゲンブは拍子抜けしたようだった。

「その間キミはどうするんだい？」

暁の質問に、ソラはイタズラっぽい笑顔で答える。

「もちろん、ツバサにたかるついでに色々町を案内してもらいます。アイリスちゃんも来るよね？」

『……私は良いけど、ツバサはもういないよ』

言われて見れば、確かに彼の姿が無い。

ソラは周りを見渡しながらアイリスに尋ねる。

「あ、ホントだ。どこ行ったんだろ？」

『たぶん、コピーロイドの部品を買いに行ったんだと思う。私のコピーロイドの部品はこの国の裏市（うらいち）にしか無いから。……それに……』

「それに……何？」

アイリスは最後に言いよどみ、ソラは彼女の顔を見て尋ねる。アイリスは顔を上げたが、すぐに首を横に振った。

『ごめんなさい。言えないわ……』

しかし、アイリスの黙秘は無駄に終わる。なぜなら……。

「……この国には、ツー君の大事な人の墓が在るからだよ」

ゲンブに担がれたはずのゲイルはいつの間にか皆の輪の中に入っていた。そして、視線は彼に集まる。

「……大事な……人……？」
『ゲイルさん……どうして……』
スバルは呆然と言葉を繰り返し、アイリスはゲイルを睨む。当の彼は以前として微笑んだままだが、その目は全てを見透かすような青空の青だ。
「うん。……僕のおせっかい。彼には怒られると思うけど、僕の知っている彼の事を話しても良い。せっかくだから図書館で話すよ。雰囲気って大事だろ？」
図書館の方が大事な話の雰囲気が出ると言う。確かにそうだが、彼の軽い口調が事の重大さを小さいものに錯覚させる。
スバル達はゲイルに付いて行こうとするが、ソラだけは違った。
「ゲイルさん」
「なんだい？　ソラちゃん」
「……その墓ってどこにあるんですか？」
「聞いてどうするの？」
ゲイルの笑顔は真意の読めないタイプの笑顔だ。ソラは意を決したように、その赤い双眸に力を込める。
「……ツバサの口から聞き出します」
「ふ～ん」
ゲイルは以前笑顔のままだが、それは少し嬉しそうな笑顔に変わった。ソラは場所を教わり、歩いて行く。スザクも付いて行こうとしたがソラに断られた。

よって、ソラはツバサの下へ。スザクとゲンブは2人で城の適当なラウンジで話を。スバル達はゲイルに付いて行って図書館（　城　）の中に入っていった。

第５６話　痛い再会（後書き）

この国の特殊な治世の事を書こうと思ったら書けなかった……。
次回から2，3話は説明とか回想がメインになると思います。あらかじめご了承ください。

次回の更新は１０月３０日です。

第５７話　封じられた記憶（前書き）

もしも暗い詩で心配された方がいたならすみません。それと、ありがとうございます。結論から言うと大丈夫です。時々ああやって過去のトラウマが噴き出たりしますが、何年も相手をしているので一晩経てばケロッとできます。

それでは第５４話、始まります。

第57話　封じられた記憶

ソラはツバサの下へ。スザクとゲンブは城のラウンジに行っている時、スバル達は図書館の大広間に向かっていた。移動している時に話題が無いのは嫌だというゲイルの勝手な考えで、ゲイルはバルズランドの治世の事についてスバル達に話していた。

「そんなわけで、この国は基本的に王制だけど、王、つまり僕が不在の時とか国の内外が安定している時は議会制に移るってわけ」

なんだそりゃ！？　とツッコミたくなるようなやり方だが、ゲイルはスバル達の疑問を察したのかその理由を話す。

「う～んとね。王制ってのは王が国の事を決める。つまり、会社で例えればワンマン会社だ。これの長所はフットワークが軽いことにある。王の一存で国が動くんだから、緊急時やとっさの時の国としての動きは早くなるんだ。

ただし、王が優秀でカリスマ性が無ければアウト。下手をすればクーデターが起きるね。

一方議会制は、一つの問題にたくさんの人が議論するからよく考えられた慎重な意見が出せる。

ただし、年月を追うにつれて人が多くなる事があるから、そうなった場合たくさんいる人に隠れて不正を行う人が出てくる。

つまりこの国は、両者の一長一短を組み合わせた国ってわけ」

ゲイルのやや自画自賛が入っている長い解説を聞いた暁は、感心したようにゲイルに声をかける。

「聞けば聞くほどすごいな……。良くそれで国が崩れないもんだ」

「シー君が感心してくれるのは嬉しいけど、この治め方も一つのやり方に過ぎない。つまり、欠点があるんだよね～」
「どんな欠点ですか？」

キザマロは興味深げに自身のメガネを押し上げる。ゲイルは子供っぽく、メガネも無いのにメガネを押し上げるマネをしてみた。

「それは2つあってね。一つは王の力量が無ければ治め切れないって事。基本的に王制だから、王がその器じゃなかったら国は傾く。二つ目は、王が留守の間に悪さをされる可能性。まぁこれはそれを防ぐ制度を作れば良いだけなんだけどね」

つまり、ゲイルが国を治めている限りは安泰らしい。
そうこう話しているうちに部屋の前に着いた。しかし……。

「ハイ、君たちは退場。コクレン、ライラ。この子達にこの国を案内してあげて」
「りょ～かい」
「分かった」

ゲイルは委員長トリオをつまみ出し、ライラは軽い口調で、コクレンはしっかりと頷いてゲイルの命を受け取った。当然ルナは文句を言う。

「ちょ、ちょっと！　何で私たちはだめなの！？」
「そうですよ！　ツバサ君が何を隠しているのか知りたいのに！」
「君たちは戦う者じゃないでしょ？　ちょ～とショッキングな話だから、抗体のある人でないとダメ」

ゲイルは頬を掻いて困った風を装いながら、声は平然としている。

「それならオレは電波変換ができるぜ！？」
「君は力不足♪」
「ゲイル言い過ぎじゃ。……ゴンタ君。すまぬが、ここはお引取り願う。その代わり、美味しい料理の店に連れて行ってあげるから、それで勘弁してくれんかの？」
「……ちくしょう……」

ゲイルがはっきり言い過ぎた事で、ゴンタはたじろぐ。コクレンは気を使って声をかけるが、ゴンタから紡がれる声は悔しさ一色である。

「……さぁ、行きましょうか」

ライラは優しくルナの肩に手を置く。ゴンタはコクレンが、ルナとキザマロはライラが連れて行く。
ゲイルはルナたちの姿が見えなくなった後、大きなドアを開いてスバル達を招きいれた。

――――ラウンジ――――

その頃、スザクとゲンブは城の適当なラウンジにいた。電波ならウェーブロードを使って高い所に移動する事はたやすい。
スザクは緊張しているのか中々話しかけられなかったようなので、ゲンブが最初に話しかけた。

『久しぶりじゃのうスザク。元気じゃったか？』
『あ、うん。ソラ……あたしと一緒にいた赤髪の女の子と上手くやってるよ』
『それは何よりじゃ』

ゲンブの好々爺のような笑顔でスザクの緊張は解けたらしい。今度はスザクから話しかける。

『ゲンブじいちゃんは？』
『ワシか？　ワシは最近までサテラポリスに捕まっておってな、ツバサのグチ聞きばっかりしておったわ』
『そ、そっちも苦労してたんだね～。あいつに』
『ほっほっほ。そうじゃの。……じゃが、あやつが居なければこうして表に出られる事も無かったかもしれん。その点だけは、感謝せねばの』

【　だけは　】を強調して見せたゲンブに、思わずスザクは笑ってしまう。

『あはは！　そうだね！　……私の方も、ね。ソラが色々とお世話になって。……もしソラがあいつを選ぶんなら、私は応援するよ』
『……ずいぶん丸くなったようじゃなスザク。実はワシも、最初に逢った時からコクレンの事は気に入っておってな。もしこのままこの国に居られるなら、コクレンと共にゆったり過ごすつもりじゃ』
『じいちゃん……。……なんか変な話だよね。元々私達って人間を滅ぼすために生み出されたのに、人間の事を気に入って、さらには人の役に立つ事を考えているんだから』

スザクがしみじみと、しかしポロッと零した言葉にゲンブの動き

が止まる。
スザクは少し心配したようにゲンブに話しかける。
『……じいちゃん？』
『……たしかに妙じゃ』
『えっ？』
何が妙か尋ねるスザクに、ゲンブは考えながらといったようにゆっくり答えた。
『ワシらはスザクの言う通り人間を滅ぼすために生まれた存在。ならば手っ取り早く感情を司るプログラムを無くせば良かったはずじゃ。そうすれば人間に情が移る事も無い』
『……そっか。……人間に情が移っちゃうと、私達みたいに寝返る者が出てきて組織的には困るんだ……』
ゲンブの言いたい事はスザクに伝わったらしい。ゲンブは目を合わせたまま頷いて見せた。
『そう。創りだすなら始めから感情などは無い方が良い。……それなのになぜエーテルはワシらから感情を抜き取らなかった……？』
ゲンブはそのまま一人で考え込んでしまった。スザクはヤレヤレといったように1回羽ばたく。
《はぁ～。……そういやじいちゃんって、1回考え込むと人の話が全然聞こえなくなるんだよね……ッ！？》
その時、スザクにとって覚えの無い記憶がよみがえる。知らないはずなのに、ずいぶん懐かしく感じる。

それは、スザクを始めゲンブやビャッコ、セイリュウも出てくるものだ……。

『……これは……いやしかし……』
『……ゲンブ、また考え込んでいるのか……』
『みたいだぜ。よく好き好んでそんなに考えていられんな』

セイリュウの呟きに近い声に反応したのはビャッコだ。セイリュウはそんなビャッコに呆れたように話しかける。

『……お前は物事を考えなさ過ぎだ。なぁ、スザ……』

スザクの方を向いたセイリュウは固まった。スザクはのほほんと座ってテレビを見ている。
セイリュウに見られていることに気付いたスザクは首だけを向いてセイリュウを見る。

『ん？　何？　セイリュウ？』
『……いや、聞いた私がバカだった』
『？　分かったならヨロシイ』
『プッ。ギャハハハハ！！！』
『……』

分かってもいないのに自分のせいにされて、セイリュウは無言のうちに怒っているらしい。盗み聞いていたビャッコにも笑われて怒りは倍増だ。槍に手をかけるのをかろうじて堪え、せめて鉄拳を一

発頭に入れてやろうと近づく。
しかし、スザクとセイリュウの間に割って入る者がいた。

「はいそこまでっ！　セイリュウ、お前はまとめ役なんだから、お前からケンカ売ってどうする」

自分より背の高いその者に腕まで組まれて怒られたセイリュウは、途端に小さくなる。

『ハッ。……すみません……』
『……相変わらずセイリュウは……――――――』

『……ザク。スザク。……ぼうっとしていたようじゃが、どうかしたか？』

いつの間にか自分がぼうっとしていたらしい。ゲンブに我に返されたスザクは、先程見た記憶をゲンブに話した。ゲンブは驚いたように聞いていて、話が終わった後ゲンブは少し考えて、スザクに聞き返してくる。

『……スザク、自分に与えられた特性を言えるか？』

ゲンブを始めとした４体にはそれぞれ自分の特性が与えられている。それは、ゲンブは防御力を活かして攻撃を受け止めた上でのカウンター。スザクは雪崩のような怒涛（どとう）の攻めといったように、自分の戦闘スタイルと合致するものである。

『う、うん。【　全てを飲み込む破壊の烈火　】……だよ？』
『……それをなるべく無意識で思い浮かべて言ってみてくれんか』
『……分かった。……全てを飲み込む破壊の烈火。同時に……ッ！？』

スザクは途中で自分でも分からない言葉が出てきた事に驚いて、その『知らない続き』を言えなくなってしまった。ゲンブは『やはり』といったようにため息をつく。

『……自分の特性は一つだけじゃ。二つは無い』
『でも、いま私……』

無いはずの二つ目を言いかけた。

『そう。ワシもさっき心の中で言ってみて気付いた』
『……それって……』
『エーテルは、ワシらの記憶にも色々手を加えていたようじゃ。……しかし、今ワシらに出来る事は何も無い。今は大人しく様子を見るしかなかろう』

スザクの言葉をゲンブが引き継ぐ。スザクは自らのパートナー、ソラの向かった墓地の方角を見る。

『……ソラ……』

――墓地――

ツバサは一つの墓石の前に座る。体育座りの状態から片足を伸ばして、片腕を一本後ろに支えとして立てているようなラフな座り方だ。

息を1回吐いた後、その墓の主に静かに話しかける。

「……久しぶり。帯広博士。この国に用事があってさ、せっかくだから墓参りに来た。お盆にはまだ早いけど、その辺はかんべんな。……こんなこと言うとまた怒られそうだけど、オレももうすぐそっちに行けそうだよ」

「そう簡単には行かせませんから安心してください」

「ッ！？」

後ろからそんな声が聞こえる。それも聞き覚えのある声。

後ろを向くと、ソラがイタズラをした子供のように舌を出していた。

「ソラ、お前いつの間に！　スバル達と一緒じゃなかったのか！？」

「君の大事な人に、【　私が居るからツバサは大丈夫です！　】って報告しようと思って♪」

「余計なお世話だ。とっとと戻――」

「戻らないよ。……ゲイルさんが言ってたキミの事を知るまでは」

ツバサの言葉はソラによって遮られる。さらに、ゲイルが何かを零したらしい。
ツバサは舌打ちを堪えてソラから墓に目を戻す。
「……あのやろう何を言っていた？」
ソラはそれに答えずツバサの前の墓石を覗き込む。
「……帯広シュン……。確か、君の養父だっけ」
「……あぁ」
「ゲイルさんがね、君の大事な人の墓がここにあるって言ってたから」
ツバサは、今度は明確に内心で舌打ちをした。あとでゲイルに苦情の一つでも言ってやる。
ツバサがそんな事を思っている間に、ソラはツバサの隣に座ってお墓に手を合わせた。
「……何しに来たんだ？　本当は、帯広博士へオレの事を報告するんじゃないんだろ？」
「……バレたか」
ソラが目を瞑ったままクスクスと笑い、ツバサは力が抜けたようにため息をつきながらサラッと貶す。
「バレるわ阿呆。……で、何の用だ？」
ソラは苦笑しながら目を開けた。ツバサの貶しが本気ではない事が分かっていたらしく、へこんでいる様子は全く無い。

「手厳しいな～。……えっとさ、ゲイルさんが自分の知っているキミの事を話してくれるって……」

たしかにツバサはゲイルにほとんどの事を話している。だが、ゲイルも話して良い事と悪い事は分かるだろうから、スバル達に何を話すかは大体予想がつく。

おそらく、以前スバルやソラに話した帯広博士や来斗（ライト）との出逢いの後……１６０年前の事だろう。そしておそらく、その後の事も……。

だが、それならわざわざツバサの元へ来なくともゲイルから聞けば良い話だ。なぜ彼女はわざわざツバサから聞こうと思ったのだろう。

ソラにそれを尋ねると、彼女はその瞳に強い意志と少しの不安を宿してツバサと目を合わせる。寸分も逸らす事なく、臆することも無い。

「君の口から聞きたいから。……その理由じゃ、ダメ？」

「……重たい話だぞ？」

「それでも、誰かから聞いたんじゃ意味が無いと思うから」

誰かから聞いたのでは、全く言葉の重みが違う。その体験はその体験者だけのものであり、それが口であれ何であれ他人の手で広まったとしても、それは劣化したコピーに成り下がる。なので、本当の意味での本当を知るには本人の口から聞くしかない。

彼女がそれを理解しているかは分からないが、ソラの目にはそういった理屈抜きで強い意志が宿っていた。

ツバサはその目を見てため息をつく。

（……これは、どうしても退かない目だな。……しょうがない）

そして、墓石に目を落としながら話し始めた。

「……まずは、オレのナビだったレイの事を話さないとな……」

ソラはツバサと同じように墓石に目を向けながら、ツバサの隣で静かに彼の話に耳を傾けた。

第５７話　封じられた記憶（後書き）

次回はいよいよツバサのナビのレイや１６０年前の事が明らかに！　……長さによっては２話以上に分けるかもしれません。あらかじめご了承ください。

ちなみに最近、ＹｏｕＴｕｂｕで『交響詩篇エウレカセブン』と『メダロット』にはまってます。メダロットは近接戦闘。エウレカは空中戦の良い参考になりますしね。活動報告であれ感想であれ、そちらの話題も大歓迎です。まだ全部見れてませんけどね～。

次回の更新は１０月２日の予定です。乞うご期待！

第５８話　監視者の性（前書き）

ツバサとゲイルは同時進行でスバルやソラ達に説明しているものと考えてください。
それと念のための補足として、サブタイトルの『性』は、『さが』という読み方です。意味は『宿命』とかそんな感じです。

第５８話　監視者の性

【……レイと出逢ったのは１６３年前だ。その時の事はよく覚えてる】

「ナビ？　別に良いよ博士。一人でも不自由ないし」

帯広博士の書庫の本を読みあさっていた時、博士はツバサに「そろそろナビが必要じゃないか？」と話しかける。それに対するツバサの返答は上の通りだ。

博士はそれでも何とか食い下がる。

「だけどね、やっぱり持っていた方が良いと思うんだよ。ほら、ナビと友情とか育めたりね」

「……来斗とロックマン・ジュニアみたいじゃん」

どうやらツバサがネットナビを持とうとしない理由は、ネットナビを持つ事で来斗とおそろいになるのが嫌なだけらしい。

博士はそれに気付いてため息をつく。

「やれやれ、理由はそれかい。……ここまで言葉を重ねてなんだけど、実はもう用意してあるんだ」

その言葉に、本のページを捲（めく）るツバサの手は止まった。

「……博士、それならそうと早く言ってくれ。それならさっきまで

の話の意味ねぇし」
『……私はいらない存在でしたか？』

件のネットナビはいつの間にかツバサのＰＥＴ（この時代の端末で、―ＰＥｒｓｏｎａｌ　Ｔｅｒｍｉｎａｌの略）に入っていた。

「……いつの間に……」
『あなたが、それならそうと早く言ってくれ。　っと、言ったあたりからでしょうか』

そこまで具体的に言う所を見ると、そのネットナビは相当真面目なネットナビらしい。
ツバサはため息をついて博士を見る。

「分かったよ。コイツの名前は？」
「レイだ。綺麗な響きだろう？」
「レイ……か。よろしくな、レイ。……だからいい加減首吊り道具一式を片付けろ。一体どこから出したそんなもん」
『……いえ、居てはいけないかと思い自害をと……』
「止めい」

レイが少し暗く首吊り台から降りた所へツバサからツッコミが飛ぶ。博士は微笑みながらレイの能力について語る。

「ふふっ。レイがそれらをどこから出したかというと、それが彼の能力だからだよ。レイには、周辺のデータを収集して電脳物質を作り出す能力があるんだ」
『ですが、ネットナビやウイルスなどの生命体は作れません。創れるのは単純な物だけです』

博士の説明にレイが補足を加え、ツバサはあらかた理解できた。

「大したもんだ。そんじゃ改めて、よろしくな。レイ」

『こちらこそよろしくお願いします。ツバサ様』

「様はいらん」

ツバサの堅苦しいのが嫌いなのはこの頃からしい。レイが『様』付けした事に即座に反応した。

【とにかくレイは堅苦しい奴だった。暁のアシッドと良い勝負って言えるぐらいだったな。

その後、オレやレイ、博士と光夫妻。おまけに来斗は旅行とかに行くことが多かった。たぶん博士や光夫妻は、オレと来斗を仲良くさせるっていう目論(もくろ)みもあったんだろうが、オレ達はそれをとことん無にしてきた。

その旅行の中には、ソラが世話になっている旅館にも行った。事あるごとに来斗と一緒に行動することは嫌だったが、その頃が一番楽しかったかもな……。でも、そんな時間もそう長くは続かなかった……】

――――１６０年前――――

ピンポーン！

当たり前に鳴るチャイム。ツバサはいつも通り、それに出ようとドアを開ける。

しかし、訪問者は予想だにしていなかった人物だった。

オフィシャル。この時代のサテラポリスと似たような組織だ。

「帯広シュンを、違法ネットナビ擁護違反で逮捕する」

「ッ！？　何言ってんだ！？　博士はそんな事はしねぇ！！」

普段ツバサは帯広から「知らない人には敬語で対応しなさい」と教えられてきたが、この時ばかりは昔の口調が出た。

家の奥で異変に気付いた博士が玄関に近づいて来る気配がある。

それに気付かないらしいオフィシャルは詳細を述べた。

「先日会議の席で博士が、【　何もナビをデリートする事は無い。他に方法は無いのですか　】という発言をした。これが違法ネットナビを擁護したと見なされたのだ」

その時代では、ある問題が世間を騒がせていた。

技術の向上でネットナビのポテンシャルが上がり、その事で人間を軽視して危害を加えるネットナビが増えて来たのだ。それらのネットナビは『違法ネットナビ』と呼ばれている。

ネットワークという仮想現実を介すれば物質である人間では手が出せないという点を突かれ、違法ネットナビと対立する人間とネッ

トナビ（　オフィシャル　）は、いつも後手にまわっていた。

ツバサは警戒の眼差しでオフィシャルを牽制しつつ、その会議の日を思い出していた。直接会議には出ていないが、会議から帰った博士からあらかたの事は聞かされたのである。

（……そういや、こないだ帰ってきた時その事言ってたな。……あん時の博士、珍しく怒ってたっけ……）

「……何にせよ、帯広博士は連行する」

「ッ！　博士は留守だ。どっか行ったよ」（博士なら物音で察しがつくだろう。ここはおとなしく隠れていてくれよ）

玄関で靴も脱がずに入ろうとしたオフィシャルに対し、ツバサは両手を広げて立ち塞がる。ここは何とかオフィシャルを帰して博士と一緒に逃げよう。ツバサはそんな事を思っていたのだが……。

「ツバサ、知らない人には敬語を使いなさいと言っているだろう」

本人登場だ。

ツバサが驚いているスキに、オフィシャルはツバサをどけて博士を取り押さえる。

「博士ッ！」

「……ツバサ、レイや来斗（ライト）君もいるし、一人でも大丈夫だな？」

「ッ！　博士……あんたまさか……」

博士は、ツバサの予想通り玄関から聞こえてくる内容や声で何事かを認識していた。そうなれば、博士の真意は一つ。ツバサを逃がすことにある。

博士はツバサに向き合う。オフィシャルも『最後の対談』という事で時間をくれた。

「……君ならこのオフィシャルの方を気絶させて、そのまま3人で逃げる事は可能だろう。だけど、それでは僕だけでなくキミまで指名手配される。……そうなると、キミはまた暗闇の中に戻る事になる」

「オレは博士やレイとなら追われる身になっても別に良い！」

ツバサにとって博士やレイは大事な居場所。『自分がここに居て良い』と思える貴重な居場所だった。

現にツバサは、博士に嫌われないために、認められるために、様々な技術や知識を磨いた。そんなある日、博士はツバサにこう言ったのだ……。

【何が出来る。何を持っているではなく、ただそこに居るだけで良いのに……。

知識や技術はもちろん、キミが今まで生きてきた記憶、思い出……それら全てはキミの一部であり、決して誰にも奪えないキミの価値だ。君の生きてきた年月分だけ、キミの価値は大きくなるんだよ。

それに、その人が居るだけで幸せな気持ちになってくれる人がいるなら尚更(なおさら)だ。その人はそこに在(い)るだけで価値がある。誰かを幸せに出来る。……ツバサには、僕やレイも居るからね】

と、優しい笑みを浮かべてツバサを安心させてくれた。

ツバサが自分も追われる身になっても構わないと言った時、博士は苦しそうに首を横に振る。そして、優しい笑みをツバサに向けた。

「それはダメだ。キミをまた、あんな誰も信じていない目に戻すなんて、僕には出来ない。お願いだから言う事を聞いてくれ。キミは僕の――」

「……さぁ、来てもらおうか」

「博士ッ！」

オフィシャルにもスケジュールはある。対談の時間は終わり、博士は連れて行かれた。最後に何を言おうとしたのかも分からないまま……。

ツバサはしばらくの間、目では見えているのにそれを認識できない心理状態に陥った。帯広博士が目の前から、自分のそばからいなくなる事が、ツバサにはショックが大きかったからである。

どのくらい時間が経っただろうか。ツバサの意識がハッキリしてきた頃には、空は茜色に染まっていた。ツバサはＰＥＴのレイに話しかける。彼は呼ばれない限り、ＰＥＴから出ようとしないのだ。

「……レイ……帯広博士がどこに連れて行かれたか分かるか？」

『いえ、分かりません。……もし助けに行かれるのなら、博士の厚意が無駄になりますよ？』

そのレイの言葉はツバサを諦めさせる気持ちではなく、博士を助けたいという思いと、パートナーであるツバサを護らねばならないという相反する思いが詰め切れないほどに満ちていた。

「……分からないなら調べるまで」

部屋のパソコンからオフィシャルのネットワークに侵入しようと家の中へ体を向けたとき、後ろに気配がする。さっきの今なので、ツバサは警戒心に苛立ちを込めて後ろ、ドアの方を再び向いた。

そこに居たのは、淡い茶髪の髪に蝶の髪留めを着けている少女だった。

まったく敵意の感じられないその姿に、ツバサは警戒心を少し解いて誰かと尋ねる。

「……誰？」

少女は、静かで優しい声を紡ぎながらその質問に答えた。

『……私はアイリス。……ツバサさん、一緒に来てもらえますか？』

アイリスという名前には心当たりがある。熱斗の友人だったと聞く。詳しくは聞いていないが、４０年前に起きたセントラルタウンの事件で兄と共に消えたらしい。

なお、アイリスがネットナビである事は、ツバサはこの頃知らなかった。熱斗からは友人としか聞いていないのだ。

「……その名前……たしか熱斗おじさんが……」

『そう……。あなたは光君とも逢っていたのよね……』

その時の彼女の顔は、懐かしさの中に少しの寂しさが混じっていた。

だが、今のツバサには彼女の感傷に付き合うヒマも余裕も無かった。

「もしかして、博士の居場所を知っているとか！？」

我ながら非現実的な幻想だ。ツバサは期待する反面、自分を内心で自嘲的に笑っていた。突然現れた人間が都合良くそんな事を知っているわけが無い。

アイリスは案の定首を横に振った。

『……私はあなたを迎えに来ただけ。あなたが一人になったら、私達と一緒にこの星の監視者になるように説得せよと、デューオに命じられた者です』

「……デューオ……アイツか……。って、ちょっと待ってくれ！それって博士を見捨てるってことか！？」

アイリスは辛そうに目を瞑った。他人の痛みを自分の痛みのように感じるほど、優しい性格なのだろう。

『……そう。監視者になれば歴史の表舞台には一切関われないし、誰かを助けることも出来ない。……ただ、世界を見守るだけ』

冗談じゃない！　ツバサは素直にそう思った。同時に、彼女の発した言葉に希望が見えた。

「……監視者って事は、博士の連れて行かれたところも知っているってワケか？」

『……』

アイリスは目を背けてから俯いた。それは、肯定したも同義だ。
ツバサはアイリスの両肩を強く掴んだ。

「知ってんだな!?　頼む!　教えてくれ!」

『……』

アイリスは依然として俯いて目を合わせようとしない。
ツバサは恥も外聞も捨てて自分の気持ちを吐き出した。

「……頼む……。博士とオレは血は繋がってねぇけど、オレの……オレの父さんなんだ!」

アイリスは辛そうに、かつ申し訳無さそうに目を開いてツバサと目を合わせる。

『……スミマセン……。教える事は――』
『一ヶ山刑務所だ。そこに帯広博士達が捕らえられている』
『兄さんっ!』
「はっ?　兄さん?　どこ?」

ツバサの問いに答えるように、アイリスは自分のＰＥＴを取り出す。そこから小さいホログラムという形で一体のナビが出てきた。
先程の声の正体が判明したのは良いが、ここでツバサには新たな疑問が浮上する。

「……なぁ、さっきお前兄さんって言ってたよな?　それってもしかして……」
『私はアイリスの兄のカーネルだ。……無論アイリスもネットナビ

だぞ？』

「だけどナビが現実世界で……ッ！　そうか、コピーロイド……」

『理解が早いな。おまけを言えば、私もアイリスもお前と同じようにデューオに救われた身だ』

つまりは同類と……。ツバサがそんな認識をしている時、レイはカーネルと同じようにＰＥＴからホログラムという形で現れた。そして、カーネルに質問する。

『しかし、コピーロイドを使えるのはオフィシャルだけでは？』

最近ではコピーロイドを使ってナビを実体化。電脳からではなく直接人間を傷付ける事件が多発したために、オフィシャルは自分達や、特別に許可した者以外がコピーロイドを使う事を禁止したのだ。

レイの質問に、カーネルは冷静に答える。

『オフィシャルから禁止される前に一つ手に入れていただけだ』

会話がひと段落しそうだったので、アイリスはカーネルにさきほどなぜツバサに帯広博士が捕らえられている居場所を教えたのかを問い詰めようとする。カーネルはそんなアイリスを片手で制し、ツバサと向き合った。

『……早く行ってやれ。デューオには私から何とか言っておく』

「ああ！　悪い。恩に着る！　行くぞレイ！」

『ハイッ！　ツバサ！』

２人が走り出すのをアイリスは止められず、２人を見送る形となった。

アイリスは2人の去った方角を見ながらカーネルに尋ねる。

『……なぜ教えたの……？』

『……光熱斗（ネット）も、その会議でその様な発言をしていたようでな。彼とその息子にもオフィシャルの手が回っているだろう。……光熱斗には色々と借りが有る。私がアイリスの分も返したい所だが――』

『私たちは世界と関われない』

カーネルの続きを察したアイリスが続きを語る。カーネルは頷いてなおも続ける。

『だから、アイツに助けてもらおうというわけだ』

それは、他力本願というわけでは無い。監視者に出来る事は世界を見守る事だけだ。それはつまり、助けたい人がいても助けられず、これから起こる危機を知っていても教える事が出来ないという事を意味する。

だから、カーネルは自分に出来る精一杯をしたのだ。

ツバサはまだ『監視者』では無いので世界と関われる。博士達は、ツバサとレイに託された。

アイリスはそれが理解できたから、カーネルにこれ以上何かを言う事は無かった。

2人はそれからしばらく、ツバサとレイが去った方角を見ていた。

夕暮れが沈むまで、ただひたすらに……。

第５８話　監視者の性（後書き）

次回は長さの関係で2話に分けたので、そのまま2話投稿します。
更新日は１１月5日です。

第５９話　強襲（前書き）

お待たせしました。今回更新する2話で色んな事が分かります。
それではどうぞ！

第59話　強襲

ツバサとレイが博士の救出に動き出した所まで話したゲイルは、話を休めてスバル達を見る。

【さて、ここまでで質問はあるかな？】

スバルはそろそろとゆっくり手を上げて、ゲイルは先生のように平手と視線をスバルに向けた。

【はい、スバル君】

【あの……それじゃあ何で、アイリスとツバサ君は僕達に関わっているの？】

スバルの質問はもっともだ。先程の話によると監視者……つまりはツバサとアイリスは、スバル達のような『歴史の当事者』には関われないはず。しかし、彼らはスバル達に関わっている。

ゲイルに当てられている質問にはアイリスが答えた。……ゲイルがアイリスに目配せをして、彼女がため息をついてから話し出したのだから『押し付け』とも言う気もするが……。

【ツバサの方は分からないけど、私は彼の目付け……言葉を変えればツバサのお守りのためにデューオから関わる許可を受けているわ】

【な、なるほど……】

スバルは納得する反面、（　ツバサ君が『お守り』って聞いたら怒りそうだな～　）と、内心で苦笑していた。

その頃ツバサとソラはというと……。

【その他に質問は？】

先程ミソラがしたような質問をソラも尋ね、ツバサがそれに答えた所だ。アイリスの説明との相違点を言えば……。

自分の事は、「理由は分からないけど自由にさせてもらっているから別に良いや」というお気楽な答え。アイリスの方は『お守り』ではなく『見張り』と答えた。

一方、【　他に質問はあるか？　】と尋ねられたソラは難しい問題を解く時のように眉を寄せて、先程の話を思い出しているようだ。

【え～～っとね……オフィシャルって良い人たちなんでしょ？　何でそんな事するの？】

その質問を受けたツバサはその頃を思い出したのか失笑している。

【あぁ～～。それ。……権力を持つと人が変わるってヤツかな？】

【？】

ソラが「　分からない　」という顔をして首を傾げる。ツバサはそれに対して少し寂しげに微笑み、再び語りだす。

【これから話すよ。ちょうど次の話はそれが関わるし……】

ズドォォォォン！！！

轟音が一ヶ山刑務所に響く。外からの襲撃だ。
隊員達には出動命令が出る。騒ぎの中心に駆けつけた隊員の目の前には同僚（どうりょう）たちが転がされていた。呻いているところを見るとまだ息があるようだ。
その中心には、黒髪の少年が悠然と立っていた。

「……博士達はどこだ……」

その殺気は子供の出すものとはかけ離れている。隊員が戸惑っている間に、少年は時間切れと言わんばかりに隊員に飛び込んできた。
隊員は無論大人で、目の前に居るのは子供。「捕らえるにしても怪我がないように」という隊員の気遣いは無用だった。

ズガッ！

「うわっ！」

ドスッ！

「ぐっ！」

隊員が少年と接触して1分。隊員は残らず地に伏した。

隊員を殴ったばかりの手をプラプラさせながら、ツバサは半ば呆れたように隊員達を見る。

「ずいぶん弱いな。これでも大人か？　……おっと、そろそろだな。レイ、この刑務所のネットワークにアクセスしてくれ。これだけ騒ぎを起こせば、重要なデータにはプロテクトがかけられるはずだ」

ツバサは自らのＰＥＴの中の相棒に語りかける。レイと呼ばれたナビは頷いた。

『分かっています。そのプロテクトをかけられたデータを優先して調べれば良いんですね？』

外から襲撃を受けた時、襲撃犯の仲間の居場所（　牢　）が知られないように、牢のナンバーを管理しているデータベースにセキュリティをかける事が多い。

だが、それは逆に言えば【　このデータベースにあなたの仲間の居場所が書いていますよ～　】と、教えるようなものだ。

ツバサが適当に騒ぎを起こしてプロテクトをかけさせ、それをレイに優先的に調べさせれば効率的に博士（ターゲット）の居場所が見つかるだろう。見つけたら後はこっちのものだ。奪って逃げれば良い。

ツバサはレイの確認に頷く。

「ああ。お前の解析能力と戦闘能力があれば、オレのオペレートは必要ないだろう。そんじゃ、頑張って来い」

『イエスッ！　マスター！』

「……その言葉どこで覚えた？　……メダ●ットか？」

珍しいレイの『ボケ』にツバサが『ツッコミ』を入れた時には、レイは刑務所のデータベースに侵入していた。それと同時に新たな隊員がやってくる。今度は時間を稼ぐ必要は無い。よって、自分から攻めていく。

帯広と出逢うまで自分だけの力で生きてきたツバサと比べれば、並みの相手では経験も鍛え方も違いすぎる。そして、今ツバサと戦ったのはオフィシャルの『プロ』ではなく、刑務所の『アマチュア警備員』。ツバサが負ける道理は無い。

なお、帯広と出逢う前から人は一人も殺していない。その理由は、自分（ツバサ）の攻撃が相手の急所を捕らえようとする度に、頭の中に男性の声が響くのだ。ただ一言……。

「殺してはいけないよ」

ツバサはその声を聞くのが『気味が悪い』というのと『うざったい』という理由で、結果的に人は1人も殺さないでいられた。

余談を話している間に、ツバサは新たに立ち塞がった隊員を全員地に顔を埋めさせた。

そして、博士を探すために走り出す。レイに任せたといっても、自分で動かなければ意味が無い。博士を助けたいと願うのはレイだけでなくツバサも同じだ。

何かを願うなら自分の力で掴み取る。それが『独り』を生き抜いてきたツバサの信条である。

ツバサは自分の足で牢の集まるエリアに着いた。直後、見張りの隊員に襲われる。

ズンッ！

「うっ……」

「博士――――！　どこだ――――!!」

目の前の隊員の腹に一撃を加えながらツバサは叫ぶ。それに答えるように、奥の牢から声が聞こえてきた。

「ツバサか!?　何で来た!」

ツバサはその声で帯広博士だと判断。その牢に向かいながら声を

上げる。

「博士を助けるためにだよ！　……ッ！　何で来斗や熱斗おじさんまで？」

帯広と一緒の牢に光親子も捕まっていた。だが、驚いている暇は無い。すぐに隊員が来るだろうから早く牢を破らないと……。

ツバサは博士達に牢から下がるように良い、牢の制御端末に体内のエネルギーを送り込む。過電圧に対して異常を知らせる警報音を発しながら、牢は開いた。

今頃、本元の制御コンピューターはいかれているだろう。

ツバサは3人を牢から出しながら来斗に質問する。

「来斗、一体何があった？」

「実はパパやオレも、帯広博士と同じ事を会議で言ったんだ。その後は見ての通りさ……」

来斗とツバサはオフィシャルの横暴さにため息をつき、熱斗は拳を握る。

「くそっ！　炎山は何をやっているんだ！」

伊集院炎山（いじゅういんえんざん）。前オフィシャル長官だ。席を譲った今でも、オフィシャルには絶大な影響力を持っていて、熱斗とはライバルであり親友だ。

ツバサがそんな事を思い出している間に、牢の出口から隊員が入ってきた。銃（　おそらく中は麻酔　）を持っており、直線上には

ツバサ達以外何も無い。避けるにしても牢の通路は狭すぎるので避けられないだろう。

撃たれる！

光親子やツバサ、帯広博士が身構えた時、どこからか打撃音が聞こえてきた。

ガンッ！

隊員の動きは止まり、次の瞬間には倒れた。どうやら後ろから一発食らったらしい。それをやった張本人は……。

『ツバサの方が早かったようですね』

レイだった。コピーロイドを使っている。

「レイ……そのコピーロイドは……」

帯広博士が口をポカンと開けながらレイに質問する。レイは申し訳無さそうに博士に向き合った。

『あ～……、これは、博士を助けるために丁度良いと思い、隊員が出したコピーロイドに先に入って拝借しました』

少し言い方を悪くすれば、【　奪った　】とも言う。レイは真面目そうに見えて、時々大胆な事をする性格なのだ。慣れていなければポカーンとして動けなくなるだろう。ツバサがその事を注意しよ

うとしたが……。

「何をしている。さっさと出るぞ」

ツバサの言おうとした事を言って、牢の入り口から顔を出したのは炎山だった。どうやらレイと一緒に来たらしい。

彼の白と黒の分かれた髪、言い換えれば『卵の殻を被ったような配色の髪』も変わっていない。ツバサが炎山と初めて逢った時は、その髪の配色でツバサが爆笑して、炎山から白眼をもらった。

熱斗は炎山に駆け寄る。

「炎山何やってんだ!?　酷い目に遭っちまったぜ!」

「スマン、光。……イスを譲る相手を間違えたようだ。……ヤツがオレの事を慕ってくれる幹部達を脅迫して、オレをここに閉じ込めていたんだ……」

つまりは人選ミスだ。おまけを言えば、テレビでは『炎山は海外の別荘で暮らしている』という話になっていたから、一種の情報操作が行われていたようだ。

現在のオフィシャル長官は正義感溢れる人だが、その分潔癖症（けっぺきしょう）なまでに『悪』というものを嫌う。自分にとっての悪が絶対的な悪だと思っているようだ。言ってしまえば、自分の物差しが万人の物差しであると考えているような人間である。

その特色は、その人物が実権を握ってから現れたらしく、炎山の頭痛のタネだった。

熱斗もそれを炎山から聞いていたらしく、ため息一つで笑顔を見せる。

「そういうことなら仕方が無いか。今は逃げよう。せっかくツバサが助けに来てくれたんだからな」
「せっかくだから他の研究員も連れて行こう。光達同様、捕らえられている科学者が多い。何か力になるかもしれない」
炎山の提案にツバサは答える。
「そうだな。レイ、他の研究員の居場所を全て探ってオレ達のＰＥＴに送ってくれ。オレ達は先に他の牢を探す。後で落ち合おう」
『分かりました。……ですが、実はすでにデータベースから他の牢の場所をダウンロードしているので、すぐに送れますよ？』
レイはすでに必要なデータを持ってきていた。ツバサは思わず苦笑する。
「ははっ、相変わらず気が利くな」
『おほめ頂き光栄です』
そうこう言っている内にデータが送られてくる。その後、立ち塞がる隊員を倒しながら科学者を解放。脱走仲間を増やしていった。
熱斗や来斗達のネットナビが捕らえられている所も見つけて、熱斗のナビであるロックマンを始め、来斗のナビであるロックマン・ジュニア達も解放する。

第６０話　永久の別れ（前書き）

２話目です。……この話は書いててこっちも悲しくなってきました……。

それから、第５６話のツバサの頭の中に響いた声の事は、ソラやスバル達には話していません。

第６０話　永久の別れ

脱走に支障が無い程度の人数を集めた。数を集めれば混乱も誘えるだろうから、そういう点でもたくさんの科学者を集める事はメリットが大きい。後は、全員護りきれるかどうかだ。

ツバサは集まった全員に聞こえるように声を張り上げた。

「こんだけ集まれば良いだろ。皆！　逃げるぞ！」

「「「「「　おぉ！！！　」」」」」

脱獄すれば今後まともな人生は歩めないだろう。しかし、それでも彼らは閉じ込められている事より外の世界を望んだ。

流れ的にいつの間にかツバサが先頭を行く事となる。殿（しんがり）はレイだ。

ここを曲がれば出口という所で、銃を装備した隊員が待っていた。待ち伏せされたらしい。隊員の中で隊長と思しき者がメガホンを使ってツバサ達に命じてくる。

「大人しく掴まれ。さもなくば実弾をお見舞いするぞ！」

麻酔ではなく実弾を用意したらしい。この刑務所は建設以来一度も脱走を許さなかったらしいから、これは一種のプライドだろう。なりふり構っていない。

しかし、それはツバサ達も同じ事。

ツバサは隊員たちに襲い掛かろうと膝（ひざ）を曲げる。それに応えるように銃がツバサに向けられ、銃弾が放たれた。

ボズンッ！　ボズンッ！

普段聞きなれない音。銃弾はツバサの皮膚（ひふ）に阻まれて肉体に突き刺さる事は無い。

ツバサはデューオの膜によって体内のエネルギーが外に漏れないようになっている。しかし、銃や刃物で膜が破れた場合、体内の莫大なエネルギーが一気に放出される。そうなればツバサは死に、周りの物も木っ端微塵に破壊するだろう。

デューオはそうならない様に細工をしていた。細工といっても大そうなものでは無い。単純に膜の強度を上げれば良い。水風船のゴムを薄いゴムから厚いゴムにするようなものだ。

隊員が驚いているスキに、ツバサは距離を詰めて3人沈める。

「残念だけど、オレを助けた奴の細工のおかげで銃や斬撃は効かねぇよ！」

ツバサはそう言いながら残りを一掃しようと動き出した。

「くっそがぁ――――！！」

隊員の一人ががむしゃらになって銃を放つ。

ドスッ……

今度は肉に銃弾が突き刺さる音だ。帯広は膝を着き、崩れるように倒れた。

「博士っ！」

ツバサは叫びながら最後の一人の意識を奪う。そして、帯広に駆け寄った。

「博士っ！　博士っ！」

ツバサの声に、帯広はゆっくり目を開けた。

「……ツバサ……キミにはまだやる事がある。ここまでついてきた人達を、外に出してあげて……」

「でもっ……オレは博士を――」

「甘えるんじゃない！　グッ！　……はぁ……はぁ……良いかい？確かに君がここに来たのは僕を助けるためだと思う。だけど、もう君の肩には私だけじゃない。熱斗くんや来斗君。炎山さんはもちろん他の科学者もいる。みんなの命運が君にかかっているんだ。……今、君のすべき事は……僕を助ける事ではなく、1人でも多くの人を外に出す事だよ……」

「……」　（博士……話すだけで苦しそうだ……）

ツバサが黙り込んだ間に、帯広はレイを呼ぶ。

「……レイ、ツバサを頼んだよ……」

『……分かりました……』

レイは強い眼差しを帯広に返る。帯広は微笑み、再びツバサの方を向いた。

「……ツバサ……キミにはまだたくさん生きて欲しい。……キミはまだ、あの実験の恐怖で人間の事が信用できないようだ。……僕が仕事に追われてキミに広い世界を見せてやれないばかりに、裏切りや争いだけが世界の本質では無いと証明できなかった……。スマナイ……」

「それならこれから見せてくれよ！　生きる事を諦めないでくれ！　博士っ！」

ツバサの声はちゃんと帯広の心に響いている。しかし、彼はツバサの願いを叶える事はできない。自分の体の事は自分が良く分かっていたのだ。……隊員の放った銃弾が、帯広の心臓のそばまで来ていたのだ……。

「……ツバサ……キミは生きてくれ。生きていれば……互いに理解し、互いに受け入れて、互いに相手のそばに居たいと思える人がきっと現れる。……その時まで……生きていてくれ。そしてその人と一緒に……未来を歩んでくれ……。キミは僕の――」

帯広はオフィシャルに連れ去られる時にツバサに言えなかった言葉を、優しい微笑みのまま伝える。

「大事な息子だから……。血は繋がっていないけど……僕はそう思っている」

その言葉を聞いた時、ツバサの心は固まった。……自分は生きる。

レイとなら【　世界が嫌い　】という自分を変える事が出来るのかもしれない。それまで、生きてみようと思った。

ツバサは、今までの感謝の気持ちを込めて『父親』に笑みを返す。

「オレも……帯広シュンという父親を持てて……幸せだった……」

帯広はその言葉を聞くと嬉しそうに微笑んでツバサの胸を押して自分から離した。

「……行きなさい」

「『ハイッ……』」

帯広の言葉にツバサとレイは頷き、科学者たちを連れて行く。

帯広は、成長した息子の後ろ姿を見ながら、静かに息を引き取った……。

――――刑務所の外――――

ドォ――――ン！！！

襲撃したツバサと脱走した科学者達は追っ手に追われていた。コピーロイドを用いたナビ軍団だ。単純に考えて、人間より遥(はる)かに強い。その上脱走した者を取り押さえるためだろう。本来コピーロイドにあるはずの【　人間を攻撃しないように　】というリミッターが外されている。これでは、手加減なんてしてくれないだろう。

だがそれでも、【　単純なナビ　】なら対応が楽だったかもしれない……。

『グォォォ！！』

『ッ！　このナビ達、痛みを感じていないのか！？』

レイは驚きで敬語を忘れている。

そう。そのナビ達は腕が砕けようが千切れようが向かってくる。恐らく、人間で言う痛みを司る神経がコピーロイドから抜き取られているのだろう。

……いや、それでも自分の腕が千切れたら怯むはず。それすら無いとすれば、ネットナビからも自分の傷を認識するプログラムを抜いているのかもしれない。

ツバサが爆発で転んだ科学者を助け起こしているスキに、ツバサの後ろにネットナビが立つ。腕には、銃でも剣でもなく、電磁警棒(でんじけいぼう)が握られていた。

ツバサの膜は斬撃などの膜を破る可能性がある攻撃には強いが、それ以外……例えば打撃や電気ショックなどは良く効くのだ。

パリッ！

空気中のチリが電気で爆ぜるのが見えた。当たったら気絶で済むかどうか確信がない。

『グルォォォ！』

「くっ！」

ツバサの前には助け起こした科学者がいて下手に避けられない。

バリバリバリバリッ！！！！！

『ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』

電気が迸り、悲鳴が響く。その悲鳴の主は……。

「……レイ……お前……」

レイはツバサを庇いながら後ろのツバサに振り向く。

『グッ……ツバサ……早く行って下さい……ここは私が引き受けます』

「お前を置いてなんていけるか！！　……これが終わったら2人で世界中を旅しよう！　帯広博士の言っていた、世界の色んな面を見に行こう！」

これ以上自分の大事な人を失いたくない。ツバサはその一心で、

レイに『生きろ』と言う。
レイは、悲しそうに首を横に振った。
『それは魅力的な計画ですが……私はここでデリートされるでしょう。……ですがそれは、あなたを護りたいという私の願いです。あなたが背負う事ではない』
補足無しでデリートされるなんて言ったら、ツバサは「自分を庇ってレイが死んだ……」と、独りだった頃以上に塞ぎこむだろう。
レイにはそんなツバサの性格が良く理解できていたから、『あなたが背負う事ではない』と付け足したのだ。
レイは続ける。
『それに……私が護ったあなたが……幸せに生きる未来を……私は……願います……』
「ッ！　レイッ！」
レイは消えていく。まるで、パズルのピースが一枚一枚剥がれ落ち、その剥がれ落ちたピースが細かく砕けるように……。少しずつ、別れを惜しむように消えていく……。
レイが消えてツバサの前に居たのは、レイを殺したナビ。ツバサは怒りの名の下に、コピーロイドの電源部分に手を当てる。
「……消えろ！！」
『ッ！　グゥオオオオオ！！！！』
過度のエネルギーを充電部から直接流し込まれ、コピーロイドは爆散した。無論、ナビも巻き添えだ。

来斗はツバサに話しかけてくる。ケンカばかりしていても2人は親友だ。来斗はツバサを励まそうと話しかけたのだ。

「……ツバサ……」

何を言ったら良いか分からない……。こんな時に何も出来ない自分に、来斗が無力感と悔しさで歯を噛み締めているとき、ツバサは歩き出した。

「行こう……。ここで止まったら、博士やレイの犠牲が無駄になる」

「でもお前――」

来斗が心配そうにツバサに声をかける。対するツバサは挑発的に来斗を見る。

「なんだよ、ひょっとして今更恐くなったのか？　情けねぇな。それでも世界を何度も救った光熱斗の息子か？」

それは誰にでも分かるやせ我慢だ。来斗はそれを理解し、わざと挑発的な態度で返す。

「上等だ。オレが殿(しんがり)をやる。お前はとっとと皆を連れて進め」

「言われなくてもやってやるわボケ来斗」

「お前こそ、ちゃんとワナとか警戒しろよ？　不良」

2人は怒気も殺気もまったく込めない、まるで友人が競い合うような睨み合いを少し続ける。しかし、すぐに新たな追っ手が向かって来たので、それぞれの持ち場に着いた。

その後、ツバサは広い視野を活かして誰一人欠ける事無く科学者たちを誘導。来斗は最後尾で父親譲りのオペレーションテクニックを活かしてバトルチップだけで追っ手のネットナビ（　コピーロイド使用　）部隊を倒していく。

その2人の様子を見ながら、炎山はツバサに話しかけた。

「それで、どこに行く気だ？」

「少し遠いけど、よかよか村の【　うらかわ　】に行こうと思う。そこの女将さんは誠実だから匿（かくま）ってくれると思うし……」

「……なるほどな……」

炎山が納得したのを見てから、ツバサは熱斗の方を向く。

「熱斗おじさん！　確か前に、【　うらかわ　】には裏インターネットへ行くためのサーバーがあって、その中に【　シークレットエリア　】と呼ばれる広大なエリアがあるって言ってたよね！？」

旅館うらかわのサーバー……。それは後に作られる3つのサーバーの原型となる物だ。ツバサは以前、来斗（ライト）と共にその話を熱斗（ネット）から聞いた事があったのである。

炎山は聞いていなかったらしく、親友に少し怒っているような目を送る。彼の心を察するに、「そう言う事はオフィシャルであるオ

レにも話せ」と、言いたいらしい。

熱斗はその視線に苦笑いを浮かべながら答える。

「あ～……まぁな。……でも、そんなの何に使うんだ？」

「……レイを……いや、救えなかったナビの分まで、今いるナビ達を助ける！」

最近オフィシャルは人間に反感を持っているナビだけでなく、民間のナビに有らぬ疑いをかけて処罰する事が多くなってきた。

おそらくオフィシャルの長官は、いつまでも『悪』が無くならない世界に苛立ち、その感情の下にオフィシャルという組織を動かしているのだろう。公私混同、組織の私物化もいいところだ。

「……そのために、その広大なエリアを丸ごとナビを保存するサーバーにするというわけか」

炎山はツバサのやる事を察した。そのときの顔からして、「オレも協力するぞ」と、言っているようだ。

ツバサは指を『パチンッ』と鳴らす。

「さすが炎山おじさん。察しが良い！」

「……ツバサ、オレは？」

熱斗がジト目でツバサを見る。『来斗が一人で追っ手と戦っているのに暢気なものだ……』その時代のロックマンとブルースは息ぴったりでため息をついた。

翌日、一ヶ山刑務所で初の集団脱獄が出た事は揉み消される。『威信』という大人の持つプライドのために、ツバサの襲撃も、光親子達の脱走も無かった事にされた。

光ネット、光ライト、帯広シュン、伊集院炎山。この４人は世界中の人が認めているほどに有名なのでその名は穢(けが)せない。だからその代わり、他の科学者に【 違法ネットナビに加担した科学者 】というレッテルを付けたのだ。

そして、脱走されたという不名誉が外に漏れないように、誰にも面会を許さなかったのである。

『人の口に戸は立てられない』という諺通(ことわざ)り、例え科学者の親族だろうと面会を許したら、その口から脱走の事実が世に広まるだろう。『いない人間』と面会できるわけは無い。

これがスバル達の時代に伝わる『教科書の歴史』の真実。……そして、帯広博士とレイを失う光景こそが、ツバサがイースター島で見た悪夢である。

第６０話　永久の別れ（後書き）

次回はエンシェント（シャイン）サーバーとノアズサーバーの製作の話です。ネビュラサーバーの事を書くのはまだ先です。

次回の更新日は１１月８日の予定です。

第６１話　３つのサーバー

旅館うらかわに着いたツバサ達の当面の不安は、自分達が受け入れてもらえるかどうかだ。実は、全員が旅館に泊まれるほどのお金が無いのである。

かといって、逃亡中の身で迂闊（うかつ）にお金を下ろしたら、そこで足が着いてしまう。それはつまり、極秘裏に熱斗達を追っているであろうオフィシャルに自分達の居場所を教える事を意味する。

うらかわには誠実な人物が多いので大丈夫だとは思うが、連絡無しで行くことになるので確証は無い。

うらかわに着いた一行の顔には、旅館へ着いた事への安堵、受け入れてもらえるかという不安。その他にも色々な感情が渦巻いていた。

従業員に呼ばれてやって来た女将の第一声が……。

「はやく上がってください。話はそれからで結構です」

理由を聞かずとも、今の熱斗達の服の汚れ具合からただ事ではない事を悟ったらしい。

その女将の寛大（かんだい）さに熱斗達の心は安堵一色になり、そのまま膝を崩した。

詳しい経緯を説明して、改めて熱斗達は旅館に住むことが許された。

身の上の保障がされたが、次の話も重要だ。

とっとっ

熱斗達が居る部屋に歩いてくる人物がいる。その人物は熱斗の友人であり、ウラインターネットの創設者を父に持つ人物だ。前女将の息子でもある。

ちなみに、今の女将はその人物の奥さんだ。なお、この時代の女将から2世代後の女将が、スバル達の時代の女将である。

ス――――

ふすまが静かに開き、現れたのは見るからに病弱そうな人物。その人物は、熱斗を見つけると顔を輝かせる。

「熱斗くん久しぶり。……ゴホッ　ゴホッ」

「まもるくん、あんまりムチャすんなよ？」

まもると呼ばれた男性の体は強くは無い。それは、熱斗が彼と知り合う前からの事だ。

熱斗はまもるの背中を擦ってあげた。落ち着いたまもるは熱斗にお礼を言い、全員に向き合う。

「初めまして。……っと、ツバサ君は久しぶりだね。レイや帯広博士は元気かい？」

「……2人は――」

「それよりも内容だが」

問われたツバサは辛そうな顔をして答えようとしたが、炎山がそれを遮る。まもるの方もツバサの様子を見て何かを悟ったらしい。追求はせずに、穏やかな顔で炎山と向き合う。

「はい。僕にできる事は何かな？」

「……ウラサーバーを使わせてもらいたい」

それを聞いた瞬間、まもるの顔は少し曇った。

「……ウラサーバーは父の遺した物です。……ちゃんとした理由を聞かせてください」

その後、熱斗や炎山、来斗達はサーバーにネットナビを保存する計画を打ち明けた。まもるは少し驚いたようだったが、少しずつ冷静な色を取り戻し、快く頷いた。

「そういうことなら喜んで協力するよ。それが出来るまで好きなだけここに居て良いよ。ねっ？　秋子？」

現女将、秋子は夫の言葉に微笑みと頷きで返す。

「えぇ。……それでは皆さん、今日の所はごゆっくり休んでください。明日からは忙しくなるでしょうから」

女将の言葉通り、その日はゆっくり休み、翌日からは地下のサーバールームにこもる暮らしが続いた。サーバーの製作には、ウラの王の異名を持つセレナードも手伝ってくれた。

そして月日は流れ、サーバールームにはまもるの父が作り上げた『ウラサーバー』の他に、2つのサーバーが作られた。一つはウラサーバーを参考に作られた試験作のサーバー。もう一つがナビを保存するサーバーだ。

容量も通常のサーバーの比にならない容量で、さらにはワイリー博士の作り出した2つのネットワークシステムの『カーネル』によってサーバーに進入したウイルスは排除。もう一つのシステムである『アイリス』によってサーバーの電脳やナビの損傷を修復。

そうする事で、『ナビのその瞬間』をそのまま保存する事が可能となった。しかし、それは『ナビの時間』を止める事を意味する。それ故(ゆえ)に、この頃はサーバー内のナビは話すことも考える事もできないとされていた。

なお、この当時は近い未来でサーバーを3つも使う羽目になるとは知るよしも無かった。

ロックマン、ブルース、ロックマン・ジュニアが最終チェックを行い、問題は無いと報告を受けた科学者達は安堵と喜びの声を上げる。

そこでツバサは、皆にある提案をする。

「サーバーが出来たところで、皆に提案がある」

「なんだよツバサ、せっかく皆が喜んでいるのに水さすなよな！」

来斗が怒ったように口を尖らせる。対するツバサはその軽口に乗らず、真剣な顔で来斗を見る。来斗は、そのツバサの顔で真面目な話だと気付き、姿勢を整えて尋ね返す。

「悪い。……で、何だ？」

この頃には科学者や炎山の視線はツバサに集まる。ツバサは静かに息を吸って、話し始めた。

「どうやってナビ達を保護するつもりだ？」

「どうって……ッ！　そうか。オレ達は牢の中に居る事になっているから下手に外に出れないんだ！」

「それじゃあ俺たちの苦労は一体……」

ツバサの質問に科学者はうな垂れたが、熱斗や炎山、来斗は依然としてツバサを見ている。

「……皆を落胆させるために言ったのではないのだろう？」

炎山が腕を組みながらツバサに確認を取る。ツバサはしっかりと頷いて見せた。

「ああ。皆にはもう話したと思うけど、オレは自分の体を非物質に変換できるんだ。それで世界中を巡れば、パスポート無しで世界中のナビを保護できる。皆にはその間、サーバーの維持。及びバグのチェックをしてもらいたい」

ツバサの体の事はこの場に居る科学者には話している。なので、科学者達は力強く頷いて見せた。

「分かった。お前が世界中を回っている頃にはしっかりサーバーを整えておくぜ！」
「よぅし！　今日はサーバー完成祝いとツバサの送別会の打ち上げだ――――！！」
「「「オッ――――――――！！！」」」

科学者の言葉に、全員がグーの手を上げた。そんな中、ツバサは熱斗に視線を飛ばす。熱斗はそれに気付き、皆が先にエレベーターで上にあがったのを見てからツバサに話しかける。

「で、なんなんだ？　ツバサ」
「……ロックマンにも、サーバーに入ってもらいたいんだ」
「ッ！　何でだよ！　オレがいればロックマンは大丈夫だし、それにオレとロックマンは友だちだ！　友だちと離れ離れになるなんて……」

熱斗は珍しく声を荒げている。親友のロックマンと離れ離れになるのだから、それも無理はないだろう。

「オレだって、熱斗さんとロックマンを離れ離れにさせるなんてそんな事はできない！　……でも、世界中のナビを保護するとなると、オレ達の作ったサーバーには限界がある。だから、ロックマンに内蔵されているメモリ拡張プログラム、エクサメモリが必要なんだ」

それを言うツバサの声は震えていて、堅く握る手の平には血の気が無い。熱斗はそれを見て、ツバサがどういう思いでそれを言ったのかを理解した。

「……それで、ロックマンを……。たしかにエクサメモリを使えば並外れたデータ容量でも受け入れる事が出来る。……でも、ロック

マンが何ていうか……」

長年熱斗と共に居たネットナビ、ロックマンはホログラムで姿を現す。

『そういう事なら構わないよ。……熱斗くんと離れるのは寂しいけど、サーバーの皆がいるから寂しくないだろうし』

「……でも、急いでたから保護されたナビ達に感情が残るかどうか……」

それは、サーバーを作った熱斗達が良く分かっている。暗く目を伏せるツバサと熱斗に対し、ロックマンは2人を元気付けようと笑顔を作った。

『そんなことより熱斗くん。僕が居ないからって、だらしない生活送っちゃダメだよ？　それから、ツバサ君も酒は程々にね？』

たしなめられた2人は苦笑いを浮かべ、2人揃って「余計なお世話だ」と、突っ込んでいた。

その後、熱斗とツバサ、ロックマンも上にあがる。

科学者達や、仲良くなった旅館の従業員と酒を酌み交わした翌日、ツバサは静かに旅館を後にした。

【……それからのオレは、世界中を巡った……】

――――クリームランド――――

「お引取りください！　何度きてもムダです！」

身分などを関係無しで怒っているのは現クリームランド女王、プリンセス・スノウである。金髪と透き通るような青い目は、母親のプリンセス・プライド譲りだ。

対するはオフィシャル。極秘にしているとはいえ、光熱斗が脱走した事の影響は大きい。光熱斗はWWW（ワールドスリー）やネットマフィアゴスペル、ダークチップシンジケート・ネビュラなど、様々な組織を潰し、その度に一線を画すような強力なナビ達を味方につけて来た。

その時の仲間やその親族が、熱斗が満足な罪状も無しに逮捕されたを知った場合、十中八九何か事を起こすだろう。その前に、力となるネットナビを理由も告げずに奪おうという腹だ。

オフィシャルは依然として強硬な態度のままだ。

「応じない場合、しかるべき対処をとらせてもらう」

それはあからさまな脅迫だ。スノウは強気な笑みを返す。

「そちらがそのつもりなら、こちらもそれ相応の対応を取らせても

らいます」
「ッ！　また出直します。……次は無いですよ」

クリームランドは、先代の頃に驚異的な発展を遂げている。その国力に怯んだオフィシャルは不吉な言葉を残して去って行った。
オフィシャルの姿が見えなくなった瞬間、スノウは長く息を吐く。

「は～～～～。……緊張しましたわ。それに……」

最後のセリフが気になる。
先代の頃から王家に仕えているナイトマンは主人の不安を感じ取ったようにホログラムで現れる。

『……姫、このナイトマン。命に代えましても姫をお護りいたします』
「ありがとう。ナイトマン」

母から受け継いだナビに微笑みを返している時、どこからか少年の声が聞こえてくる。

「……次はかなり上の人を持ってくる気だ。本当に次は無いかもな」
「ッ！　誰です！？　ここには王家の許可なしでは入れないはず！！」
「あいにく、オレは真人間（まにんげん）じゃ無いんでね」

ツバサはスノウの後ろの窓に立って、城下を見ていた。スノウは驚いたがそれを表には出さず、侵入者に話しかける。

「何者です？」

ツバサはスノウに向き合い、自身を名乗らず用件を告げる。

「このままだとナイトマンがオフィシャルの手でデリートされる。……オレがナイトマンを保護するよ」

「冗談ではありませんわ。なぜ見ず知らずの人物にそのような――」

『えぇ、次回の交渉に応じなければクリームランドに不意打ちを――』

スノウの言葉を遮ったその声は先程のオフィシャルの声だ。声はツバサが持っている機械から出ている。ツバサはこの機械の事を話した。

「これはさっきオフィシャルのヤツに着けた盗聴器からの音声だ。悪いけど窓の修理費はそっち持ちでよろしく」

彼の話を要約するに、彼が窓を向いている時に小さい穴を開けて、そこからオフィシャルに発信機を飛ばしたらしい。ツバサはもう片方の手でポケットに手を入れ、小さい銃をチラッと見せる。どうやらその銃で窓に穴を開けたらしい。

「奴らの目的はロックマンと手を組んだことのあるナイトマンだ。それさえ何とかすれば、あいつらはこの国に手を出せなくなる」

『なぜロックマン殿の名が？』

ナイトマンは依然としてツバサへの警戒心を抜かない。ツバサは光親子が大した罪状抜きで逮捕された事や、その脱走のことを話した。

「近頃のオフィシャルは様子がおかしいと思ったらそんな事があったのですね。……ナイトマン！　……彼と共に行きなさい！　これ

は命令です」
『しかし、某(それがし)は姫を護――』
「命令だと言ったはずです！　……そんな事のために、あなたを殺させるわけにはいきません」
『……姫のご命令とあらば』
「感謝します。……今までありがとう。ナイトマン。……ナイトマン、トランスミッション！」

しぶしぶ納得したナイトマンにお礼を言い、スノウはナイトマンをトランスミッション、つまり電脳に送る。

この時代はウェーブロードが無く、ツバサはＰＥＴまでは電波化できない。これらの事から、ナビをサーバーに保護するためには自分(ツバサ)と一緒にネットワークを介してニホンに行くしかないのだ。

スノウはツバサに微笑みかける。

「……ツバサ……と言いましたね。ナイトマンをお願いします」
「……協力を感謝するよ」

翌日、オフィシャルは見事に空回りを食らったそうだ。ナイトマンはどこへ行ったか？　という問いに、スノウは困ったような演技をして答える。

「泥棒に盗まれてしまいました」

その日から、オフィシャルが狙うナビを先に奪う『ナビ泥棒』が世界に姿を現した。
どんなに早くても半日はかかるニホンからアメロッパを一時間以内で往復するように現れる事から、時間と空間を超越した神出鬼没

の怪盗と呼ばれた。そして、大衆が付けたその名は……

魔術師（ウィザード）

【そんな訳で、オレは世界中のナビを保護して周ったってわけ。……ソラ、一つ聞きたい】

【な～に～？】

【な・ん・でバカうけしてんだ？】

ソラは必死に笑いを堪えている。真面目な話題を真面目に話しているときに笑いを堪えられたらさすがにムカッとするだろう。

怒りから来るツバサの白眼に対し、彼女は口元に笑みを残しながら答える。

【いや～魔術師（ウィザード）って聞いた時ね。キザなネーミングだし、ぜんっぜんキミのイメージと合わないな～って思って♪　……あっ！　で、でもスゴイね。それならたくさんのナビを助けられたんだ！】

さすがにツバサの鉄拳が飛んできそうだったので、ソラは慌ててフォローを入れる。しかし、ツバサはそのフォローで顔を暗くした。

ソラもそれに気付き、心配そうに尋ねる。

【……どうしたの？】

【……２２万】

【えっ？】

意味不明の数字を口にしたツバサに対し、ソラは聞き返す。ツバサは体育座りで膝に顔をうずめて話し出した。

【……オフィシャルに処分されたナビの数だ。細かい数字はオレにも分からない。潜んでいた町のニュースで言ってた数だ。……オレが助けられたのは６００程度……。規模の違いを思い知った時、己の無力を呪ったよ】

【ゴメンッ！　……私、知らなくて……】

謝るソラの顔は本当に申し訳無さそうだ。オロオロした狼狽が空気を伝ってツバサに届く。

ツバサはソラを安心させるために優しく微笑み、そっと彼女の頭に手を置いた。

【ソラのせいじゃ無い。……それに、その後は贖罪（しょくざい）もしたしな】

【えっと……。贖罪って罪滅ぼしとかそんな意味だっけ】

【そう。……オレの無力のせいで助けられなかったナビ達の事が頭にあってな。全てのナビをサーバーに入れてから、オレは世界中を旅した。オレにできる事はないか。って、思ってな】

【見つけたの？　自分に出来る事】

ソラの問いに、ツバサは頷いてみせる。

【ああ。……あれはとある国で――】

ツバサは再び語りだす。今、自分達がいるこの国が、成り立つきっかけとなった出来事を……。

第６１話　３つのサーバー（後書き）

ちなみに、ツバサの魔術師っていう異名はノリで書きました～（笑）。あ、その異名がスバル達の時代の『ウィザード』に通じているという設定はありませんよ。

なお、某ゲームの仮面怪盗をモチーフにしています。「私はカレーなる～～」ってね♪

次回の更新は１１月１１日の予定です。……これって何の日だっけ……。何か昔聞いたような……はて？

第６２話　虚無感（前書き）

長くなったので2話に分けました。それと、この話は多少問題提起の要素もあります。気に入らなかったらその部分はスルーでお願いします。

第６２話　虚無感

――某国・カフェ――

サ――……

外は雨。雨宿りのついでにカフェでコーヒーを飲みながら、ツバサは熱斗達との別れ際を思い出していた。

（うらわかの夫婦には自分達の事は後世に伝えないように言ったし、熱斗おじさん達科学者には違う名前……偽名を付けさせたから、目立たなければ大丈夫だろう。名前が彼らを護ってくれる）

『名前』は使いようによっては人を護ったり呪ったりもできる。ナビを保護して周っている時に夢の中で出逢った人物が教えてくれた事だ。頭の中に語りかけてきた人物で、自分と同じ名前を持っている人物である。

科学者達をうらかわから逃がした後、データの劣化によって死なせないためにアイリスの頼みでカーネルをサーバーに入れたのだが、想定外の出来事でサーバーを３つ全部使う羽目になった。

一つ目は『ノアズサーバー』。ウラサーバーとロックマンを一体化させる事で、エクサメモリの効率を限界まで強められたサーバーだ。民間ナビ達は主にここに保存されている。

二つ目は『シャインサーバー』。科学者達と作り上げたサーバーだ。元々はこのサーバーに全てのナビを保存するつもりが、想定外

の出来事で力が強く、かつロックマンと仲間として戦った事のある者しか入れなくなった。正確に言えば『入らざるを得ない』という表現の方が正しい。

三つ目は『ネビュラサーバー』。サーバーを3つも使う羽目になったのはこの中にいる存在のせいである。拮抗する存在として、2つ目のサーバーの名前を『シャインサーバー』にしたのだ。なお、シャインサーバーにロックマンの仲間を多く入れたのも、ネビュラグレイを封じる手助けになると思われたためだ。実際、フォルテが1人で抑えられているのも、ナイトマンやカーネルを中心としたナビ達のサポートのおかげだろう。

この当時はネビュラグレイの力は今ほどではない。人間の争いによって生じるマイナス感情を糧に、ネビュラグレイはサーバーの中で成長を続けてきたのだ。

スバル達のいる時代では、サーバーにいるナビ達にネビュラグレイの影響が出ないように、ツバサは体の一部を常に電波化し、そこにＰＧＭを埋め込んだ。そうする事で、自分とＰＧＭを融合させて、フォルテと2人で抑える事となったのである。

本来なら熱斗達をうらかわから逃がした時点でツバサは『当事者』ではなくなり、アイリスと共に監視者になるはずだったのだが、何万ものナビを救えなかった無力感。そして、そんな自分に何が出来るかという悩みから、彼はアイリスの前から姿を消した。

そうして今に至る。

（……この感覚、どうしたら無くなんだろ……）

ツバサがそんな事を思いながら少し冷めたコーヒーを口に含んだ時、カフェのドアは勢い良く開いた。

ガラッ！

「……邪魔するぜ」

第一印象、柄の悪い男。黒いコートに身を包み、漫画で見るようなマフィアそのものだ。その男性はズカズカとカウンターに向かい、注文を出す。

「……酒を数ビン頼む」

少し頭の薄くなったカウンターの男性が怯えたように男に頭を下げる。

「へ、へぇ。……けど、なんでまた？」

「黙って寄こせ」

「へ、へいっ！」

（……銃を懐から出されたら、そりゃ酒も無償で出すわな）

ツバサの内心でのツッコミ通り、カウンターの男性はタダで酒３ビンを進呈。

「……すまねぇな」

男は銃をしまって軽くお礼を言い、手に持っていた袋にしまう。

ガラッ

男が出て行ったのを見てから、ツバサはお金をカウンターに置いて男性をつけた。

理由によっては酒を店に返すつもりで男性をつけているのである。銃を突きつけられたら完全に脅迫だ。それはいくら何でも良くない。

だが、彼からはある種の哀愁が感じられる。もし、大事な人と一緒に飲むのなら見てみぬフリをする。自分1人で飲むつもりなら店に酒を返す。だから『理由によっては』なのである。

目の前を歩いていた男性は不意に後ろを向く。ちょうど隠れる所が無い所で振り向かれたから隠れられず、ツバサの姿は丸見えだった。

「……さっきから誰かついて来ていると思ったらガキじゃねぇか。オイ、何でオレの後をついて来た?」

「あ、あの、珍しい服だなって……その……」（ここは気弱な村の少年Aを演じてやり過ごすか）

ツバサがそんな事を思いながら渾身の演技を炸裂させる。

ナビを保護するために世界を周っている時、オフィシャルが科学者の集団脱走の事で何か聞いてきても、先程のような演技をする事で『他人のそら似』という感じでどうにかなってきた。しかし、今回は違ったようで……。

「ただの少年Aが気配を消すのが上手かったり、全くと言っていいほど足音を消せるわけねぇだろ。……何者だ?」

男性はため息をついて額を押さえた後、指の間から鋭い目を光らせる。これ以上誤魔化すのは不可能と見たツバサはため息をついて

物怖じしない目を男性に向ける。

「ただの化け物です」

からかうように肩を竦ませて見ると、以外に男は堪えるような笑いを浮かべる。

「クックック……。そうか化け物か。……よしっ！　ついて来い化け物。身内以外の人間は連れて来たくなかったが、化け物なら別に良いだろう」

そう言いながら男は自分の親指を自分に向けて指す。ツバサ自身、何もする事が無かったので男に付いて行こうと追いつくと……。

バンッ！

「……驚いたな、ホントに化け物だ」

「……確かめるために人の脳天撃つのはどうなんだ？」

男性はツバサが化け物かどうか確かめるためにツバサを撃ったようだ。ツバサの白眼に、男性は笑いながら謝罪する。

「わははっ！　悪い悪い。でも気に入ったぜ。オレはレオルだ。さぁ行こうぜ化け物。ファミリーの皆がお待ちだ」

口振りからしてマフィアの人間というのは間違い無いらしい。

上機嫌なレオルに付いて行くと、そこは墓地だった。彼の言うファミリーはまだ来ていないようで、その場にいるのはツバサとレオ

ルだけだ。
　チラッと横目でレオルを見ると、先程まで上機嫌だった彼の顔は曇っていた。その表情の変化に驚いてツバサが凝視していると、それに気付いたレオルが呟くように教えてくれた。目には涙を浮かべている。

「……ダチだ。小さい頃からの…な」
「……マフィアの人間って泣くんだな」

　ポロッと零したツバサの言葉に、レオルは乾いた笑みを浮かべる。

「お前、マフィア＝悪者（イコール）って考えか？」
「そりゃあ一般基準としてはそうだろう」
「……じゃあ、親のいない戦災孤児が生きるために盗み、殺し、しまいにはマフィアという組織に拾われて、【　殺されないために生きる　】のは悪者か？」
「それは……」

　明確な悪とは言えない。ツバサがそうだったからだけではない。彼がナビ泥棒として世界を巡っている時、似たような人間がいた。レオルのように生きるために悪事を働くものもいれば、生きるために道に落ちている米の一粒一粒をその日のご飯として食べている者もいた。彼らは皆、【　生きるために生きている　】のだ。

　本当の事を聞いて『悪』から印象が変わっても、おおかたこうなるだろう『仕方がない』と。

　言い詰まるツバサを横目に、レオルは語る。

「……マフィア、いや、人間が悪って呼んでいる人間にも、当たり

前に感情はある。ダチが死んだら泣くし、酒の席とかの嬉しい時は笑う。……それを勝手に自分とは違うモノ、自分とは異なるモノと分類するのは人間だ。

……そんなに、俺たちを自分達と同じ【　人間　】だと思いたくないのかね～」

レオルは最後は自嘲的に肩を竦ませて笑ってみせる。

（……自分の気に入らないモノとは絶対的に違うものがあると線引きして、かつ自分の方が絶対的に正しく、偉いと考えるのが人間か……）

ツバサはここまで思って気付いた。自分も昔こういった環境で生きていて、帯広博士のおかげで平和な生活を送れた事を。同時に、その間こういった世界を忘れていた事にも気付いた。

（忘れているといっても、世界のどこかではそういった環境で生きている人がいる。忘れていても、知らなくても、その環境や出来事は往々にしてあるんだ。……ただそこに生きているだけで、生きている事を、人間である事を否定されている人がいる……）

「……そうか」

「ん？　何がそうかなんだ？」

内心だけで思っていたつもりが口に出していたらしい。レオルが怪訝そうな目で見てくる。ツバサは慌てて「何でも無い」と言って、その内心である決意をする。

（　世界がもし彼らの事をはみ出し者として生きている事までも否定するなら、オレは彼らが生きられる居場所を作る　）

その後、ツバサはレオルの友達の冥福を祈り、ある場所へ向かった。

第６２話　虚無感（後書き）

ちなみに、ネビュラサーバーの事とツバサが自分にＰＧＭを融合させている事は、スバル達やソラには話していません。

第６３話　贖罪（前書き）

最後のゲイルの呟きを一部変えました。それ以外は変更ありません。……我ながら、段々グダグダに……。

第６３話　贖罪

――――アメロッパ・首相官邸――――

「お帰り～～～～」
「ッ！！？　だ、だれ――」

自分の部屋に戻った当時の大統領を待っていたのは、あどけなさが残る黒髪の少年。
助けを呼ぼうと叫びかけたが、少年に口を閉じられてしまった。
そして、ツバサは耳元で囁く。

「アウシュ・イヴルの事件って知ってる？」

身の危険を感じたらしく、大統領は大人しく答えた。

「し、知っている。……それが何か？」
「オレがその化け物です♪」

陽気に答えたのが不気味に思えたらしく、大統領の心拍数は上がっていく。

「そ、それでは……生きていたのか……」
「見ての通り。……頼み、聞いてくれるよね？　しなかったら外にあの実験の事を全部話すよ」

レオルのことを悪く言えない。これも立派な脅迫だ。しかし、効果は抜群だったらしく、大統領はうな垂れた。

「な、何が望みだ？」
「それは酷く簡単な事。国境の警備に穴を開けてくれれば良い」
「……」

その後、大統領は黙って了承した。ツバサはこんな感じで世界中の有力者達に自分の存在を知らしめていった。及び、脅迫していった

国境の警備に穴を開けさせたツバサは次に、その情報をウラ社会に流した。そうなれば、流れ出る水のようにその穴から国の外へ出て行く者もいる。そういった者達が集まって生まれた国が――

「この国ってわけ。ちなみに、国がある程度落ち着いた後、帯広博士の死んだ刑務所に行って見たら博士の骨は残っていなかった。だからせめてものって事で、残っていた遺品をかっぱらって墓に入れたんだ」
「……長いね」

ド級に長い話をしたツバサも、それを聞いていたソラも疲れきっていた。2人してため息をついた後、ツバサは補足を加える。

「始めのうちは、ならず者の集まりって言われても文句は無い状態だった。だけど、年月が経つにつれて次第にまとまってきたんだ」

「何でだ？」

ジャックの問いに、ゲイルは困ったように答えるが、いつものように気軽な笑みを浮かべているのでいまいち重要度を小さいものだと錯覚させてしまう。

「ここしか居場所が無いからだよ。外の国じゃあ彼らは人として見られない。人として見てくれるのはこの国だけなんだな～これが」

「だから、この国の奴らは自分の居場所を護るためにこの国を護っているってわけ。最近じゃあ、この国を好きになる国民も増えてきた。

……さっきの市場、活気あっただろ？」

ツバサの言葉に、ソラはそのときの様子を思い出してみる。ゲイルが最初にツバサに抱きつこうとしたあの場所だ。

「そういえば……私の居た旅館と似てたな……。みんなここが好きなんだって感じがした。……そういえば子供もいたね」

ソラの目から見て、この国は自分のいた旅館と似ていた。みんなその国のことが好きで、国自体が一つの生命体のような一体感がある。

市場には店の手伝いをしている子供もいて、店員の目を盗んでは休んだりして怒られていた。それがやけに平和で、見る者に微笑みをもたらす。

「あの子達は戦災孤児でな、ゲイルの奴が国を抜け出しては引き取ってくるらしい」

ゲイルも、スバル達にそのことを話していた。

「子供を保護するって言うのも、元はツー君が始めたことでね。……【この世に生きていけない命は一つも無い】。……ツー君はその思いの下にこの国を作ったんだ」

＊＊＊＊＊＊＊＊ここからツバサとゲイルは別々の事を話します。＊＊＊＊＊＊＊＊

「……やっぱりキミってすごいね」

ソラの感心した声に、ツバサは乾いた笑みを浮かべる。

「……いつだって、オレがしてこれたのは最低限の事だけだ。実際にやり遂げたのはスバルやミソラ、暁達といった【　今を生きる者　】だけだよ……」

「ツバサはちゃんとここに生きているよ！」

ツバサが『自分が今生きていない者』のような口調で言ったのに対し、ソラは口の両端を下げて怒った様に強めの口調で言う。

「そうだな。悪い」

ツバサは明るく笑顔で言ったつもりだが、ソラは呆れたような、それでいて悲しむような目をツバサに向けながらため息をつく。

「……そのウソ笑顔止めなよ。今まで都合の悪い時いっつもその笑顔してたでしょ」

意外だった。それ以上に驚いた。スバル達では全く気付かない作り笑顔を、スバル達より関わった日が浅いソラが見破ったのだ。

驚いているツバサをよそに、ソラは見破れた理由を話す。

「私って旅館で働かせてもらっているって知ってるよね？　お客さんと関わる時は、具合が悪くても、気分が晴れなくても、笑顔で接さないといけないんだ」

「……だから見破れたのか……」

旅館を始め、接客業とは自分がいかなる状態であれ笑顔を絶やしてはいけない。従業員が不安な顔をしていたら大事なお客さんも不安になるだろうから。ソラはそういった環境で育ってきたから、【　作り笑い　】というのを敏感（びんかん）に察知できるのだろう。

ポツリと呟いたツバサに、ソラは寂しげに微笑んで見せた。

「そう。……作り笑いを浮かべるって事は、私たちに心を開いていないんだね」

「……」

否定できない。ツバサ自身、スバル達と関わるのは【　目的のため　】という事で、自分を理屈で納得させたと思っているのだから。

『友達』といった親密な関係は彼は求めていなかった。

「……世界……ううん。私達の事、嫌い？」

ソラの静かな問いにツバサは押し黙る。いつもなら笑顔付きのウソでごまかしたのだが、彼女にそれは効かない。故に、押し黙るしかないのである。

ソラは立ち上がる。帰るのだろうか。ツバサは依然として墓を見たままだ。

（……1人になりたかったからちょうど良いか……）

そんな事を思っていたツバサの背中に、質量のあるモノがのしかかる。

ソラがツバサにおんぶする様にのしかかっていたのだ。

耳元でソラが優しく囁く。

「……前に夢の中で言ったよね。【　全ては互いに影響しあって、関わりあって生きている　】って」

「……あぁ」

「だったらさ、キミもいつかこの世界の事が好きになるよ。私この世界大好きだから。……キミがこの世界の事を好きになるまで、そばにいてあげるからさ」

互いに影響しあって存在するのなら、ソラの『世界が好き』という心がツバサにもいつか伝わるはず。ソラはそういった願いを言葉に乗せたのだ。

「……どこが、好きなんだ？　あ、世界の事な」

ツバサのその問いは、無意識に出たもの。何故それを聞いたかは本人にも分からなかった。

ソラは目を閉じて得意げに答える。さながら、自分の得意分野の問題を答える子供のようだ。

「皆がいるから」

「……みんな？」

「そう。話しかけてくれたり、一緒に居てくれたり、大切な存在だと見てくれたり。それが嬉しいんだ。……その人達の事を考えると、感謝っていうのかな？　心が暖かくなるし」

後半を照れくさく言う彼女に対し、ツバサは目を背けて俯いた。

「……そうか。でもオレは――」

いつまでも過ちを繰り返す人類に失望していた。

監視者の仕事に入った後、いつまでも争いを止めない人間達を長年見ている内にそういった感情を抱いてしまったのである。だからこそ、アイリスの『スバル達を信じても良いのでは？』という言葉

を受けながらも、彼は自分だけで計画を実行しようとしたのだ。
信じても良いと頭で分かっていても、今までの経験……帯広博士やレイを失った事が『心を縛る鎖』と化し、世界を、人間を、心から：は信じられなくさせていたのだ。つまり、表面的な信頼である。

ツバサのそんな心境を察したように、ソラはクスッと笑う。

「ゆっくりで良いんだよ。ツバサは辛い事をたくさん経験してるんだから、そう簡単に変われるなんて考えていないし。……さ、もう帰ろう？　もう夕方だし、スバル君達の方も話が終わっているだろうから」

立ち上がったソラはツバサに手を差し出す。逆光で彼女の顔は見えないが、彼女の持ち味である明るさの中に、優しさを含んだ笑みを浮かべていることだろう。
ツバサはその手を自然に取っていた。その理由は自分でも分からなかったが……。

少し時間は遡って、ツバサの過去を聞いたスバル達はというと……。

「……あの、ゲイルさん……」
「ん？　なんだいスバル君」
「なんで、ツバサ君の事を話してくれたんですか？」
ゲイルは背もたれから体を離して、肘を膝（ひざ）に置き、両手は祈るよ

うに握る。そして、その上に自らの顎（あご）を乗せてスバルの質問にいつもの笑顔で答えた。

「彼に対してのおせっかいって言わなかったっけ？」

「ツバサ君への？」

「そう。キミ達が彼の事を、もっと理解したいかなって思ったんでね～。……おっと、もうこんな時間か。それじゃあそろそろお帰り。ツー君とソラちゃんもそろそろ戻ってきているだろうから」

「あ、ハイ」

その後、城から出て行くスバル達を見ながらゲイルが呟いた。

「……確かに、スバル君はキミの言う通り強くて優しい子だ。……でも、今のところツー君を変えられそうなのはソラちゃんだけかな？　あの時キミを追いかけたのは……本当の意味で向き合って話そうとしたのは、彼女だけだったからね」

その時のゲイルの顔は、いつもの飄々とした笑みで浮かべていた。その本心は誰にも悟らせずに……。

第６３話　贖罪（後書き）

次の更新は１１月１４日の予定です。感想だけでなく、ストーリー上の質問も受け付けておりますので、気軽にどうぞ～。

番外編　？（前書き）

まだ６１話は出来上がっていません。出来上がり次第投稿したいと思います。

番外編　？

段々補足の場と化している番外編です。今回はサーチマンなど、本編で明かされなかったナビ達の保護の時の話を中心に語ります。
アシスタントはスバル君とツバサ君です。

「「……」」

あれ？　何で2人とも黙っているの？

「……何で今まで僕が呼ばれなかったんですか？」

それはだねスバル君、作者である俺の力不足で、出せるのは2人が限度なんだよ。……キミは主人公だから早く出してあげたかったけど、早めにドッグ・ツインを出してあげないとかわいそうでね。だからといって、彼とスバル君じゃあ険悪になりそうだし、そんなわけでエーテルを呼んだってわけ。

（（普通ラスボスをそんな事で呼びますか！？））

「そ、それじゃあよ。何でオレが？　スバルといったらミソラだろう。流星小説で知らない者はいないというぐらいの単語のスバミソだろう」

いや～俺もそう思ったんだけど、やっぱり当事者であるツバサに頼もうかと思ってね。（それに、ツバサの方がからかいやすいし♪）
それでは、この話の長さの関係もあるのでササッとやっちゃいましょう！　まずはキラーマンですね。

「「……」」

――某国某所――

時間は夜。闇の中を走る人影は1人。いや、後ろから4人ほど追うものがいる。

先頭を走る人影は、物陰に隠れて息を潜めた。

タッタッタッタッタ……

4人組は分かれて先頭を走っていた人物を追う。遠ざかる足音を耳に、先頭を走っていた男はホッと息をつく。

「……行ったみたいだね」

『……なぁキリサキ、いっその事殺っちまわねぇか？　追われているままじゃあつまらねぇ』

キリサキと呼ばれた男性は長年の相棒に少し呆れた笑みを送る。

ダーク・キリサキとキラーマン。若い頃はウラの仕事でナビをひたすらデリートしてきて、それが今更オフィシャルに目をつけられたらしい。なお、熱斗達が大した罪も無しで捕まって、それが脱走した事も、若い頃に組み上げた情報のネットワークで知っている。

「ふぅ……。キミは自分がネットナビで僕が人間である事を忘れて

ないかい？　キミはデータの劣化を除いてスペックが衰えはしないけど、僕のような人間には老いがあるんだよ？」

キリサキはまめにキラーマンのデータを改良している。そのためキラーマンの能力は最盛期のまま、いや、現在のカスタマイズツールの高性能さも相まって、その時をはるかに凌ぐだろう。

だが、人間であるキリサキはそうもいかない。生物なら必ず訪れるであろう『老い』というものが、今の彼から逃げる体力を奪っていた。

「そのナビ、オレが引き取ってやろうか？」

キリサキと同じ、闇の中から声がする。子供のように高い声だが、その者が話すまで気配がしなかった。本来なら警戒するべきなのだろうが、キリサキは慌てる様子を見せない。その人物もまた、彼の情報網で得た情報の中にあったのだから。

キリサキは年齢を感じさせない不敵な笑みを浮かべて闇の中のその者を見る。

「初めまして。……ナビ泥棒君？」

「……」

沈黙と共に足音が近づいて来る。月明かりの中に姿を現したそれは、予想通り子供の姿をしていた。その者は見た目での年相応（としそうおう）に、にこやかな笑みを浮かべる。

「誰がその名前をつけたか知らないけどな。けっこう迷惑しているよ」

「ふふふ……。キミの事はウラのネットワークで知っている。熱斗君を助けてくれたそうだね。ありがとう」

「おじさんを知ってるの？」

本当に熱斗は人脈が広い。ツバサがその事に感心した声を漏らすと、キリサキは思い出すような笑みを浮かべる。

「昔、ちょっとね。それはそうとキラーマンの事だけど――」

「いたぞ――――――！！！」

追っ手に見つかったらしい。キリサキの返事を待つツバサは舌打ちをした。

「……チッ！　こんな時に！　あんたはオレの後ろにいな。即行でケリをつけてやる」

ツバサが追っ手を４分の３ほどに壊滅させた時、近くの電気配線が蛇のようにうねりを上げる。どうやらウイルスを使ってケーブルをジャック。そのままキリサキを攻撃するつもりらしい。

それに気付いたツバサがキリサキの下に戻ろうとするが、キリサキはキラーマンを近くの機器に送り込む。次の瞬間、電気を逆らせて今にもキリサキを襲おうとしていたケーブルは「ボトリッ」と音を立てて落ちた。キラーマンが『瞬殺』という言葉通り、電脳の中のウイルスをデリートしたのだ。

その早業にツバサは思わず感心してしまった。さらに、キリサキの肘は吸い込まれるように暗闇を突く。呻き声と共に、伏兵で潜んでいた追っ手が倒れた。どうやら闇に身を隠し、隙を伺っていたらしい。

「やるね。さすがっ……」

ズンッ！

「……電脳の殺し屋と名高いキラーマンのオペレーター」
「キミの方も、よく後ろの敵に気付いたね」

そう。ツバサの足元には、キリサキを見ていてスキだらけなツバサに攻撃をしかけようとした追っ手は、気付かないフリをしていたツバサに意識を奪われたのである。

「まぁね。……それで、キラーマンだけど」
「あぁ、そうだね。それじゃあお願いするよ。僕ではもう、キラーマンを現実からサポートできそうにない。構わないね？　キラーマン」
『……あぁ、まぁ、しょうがねぇな。……なぁ泥棒、最近のオフィシャルはやり過ぎな感があるが、手は打たねぇのか？』

キラーマンの言う通り、最近のオフィシャルはやり過ぎだ。熱斗達に逃げられて数ヶ月。未だにどこに彼らがいるかが分からないという事で、ひたすらにナビ狩りをしているのだ。

関係ないナビを殺せばその様子を見過ごせなくなって何らかのアクションを起こす。

オフィシャルの現長官はその様な考えで組織を動かし、関係ないナビを殺しているのである。

余談として、ナイトマンをニホンに送った時、炎山は新聞でその事を読んでいたのだが、眉間にしわが寄りすぎて一日中彼には誰に

も近づけなくなったという話もある。

キラーマンの質問に、ツバサは苦笑交じりで答える。

「ふっ……。情けない事に、世界中のナビとオフィシャルを1人で相手にするのは骨が折れそうでな。このぐらいしかできない」

『それだけの力が有ったらやるのか？　もしやるならオレにも手伝わせろ。奴らのやり方が気にいらねぇ』

普段不気味な笑い声と共に依頼されたナビを殺しているキラーマンでさえ、今のオフィシャルは気に入らないらしい。

キリサキはため息交じりで相棒に注意する。

「はぁ～。キラーマン、最後ぐらい僕を安心させてくれ。いつもキミは乱戦に突っ込んで、その度にオペレートする僕の身にもなってくれ。さっきも言ったけど、もう歳なんだから……」

『あ～悪いキリサキ。……水くせぇのは嫌いだから手っ取り早く済ますぜ。……あばよ』

「あぁ。元気でね」

その後、ツバサは電脳に入り、キラーマンと共にネットワーク経由でニホンを目指した。

――キラーマン編終了――

……『ヒャーハッハッハッハ！！！』っていう笑いを入れるのを忘れた！！

「今更かい！」
「でも、僕はホッとしてるよ。彼の笑い声は怖かったから……」
そういえばスバル君キラーマンの笑い声を聞いて「今日の夢に出そうだ……」とか言ってたね。結局見なかったようだけど。
「代わりに凄くリアルで恐い夢はみたけどね。……ねぇツバサ君、あの夢って本当に何でもないんだよね？」
「まぁな」
（……にっこり笑顔。ソラちゃんがいたら見破られただろうな）
「……」（……作者、何を考えている？）
「……」（アイリスの言う通り、作者さんとツバサ君って仲が悪いみたいだ。２人が気まずい空気に……。ここは気を使って……）
「そういえば作者さん、ツバサ君が僕の家に来た時、【　何でも願いを叶えてくれる人がいる　】って言ってたけど、そんな人本当にいるの？」
「何スバル、オレの言う事信じてなかったの？」
「だって何でもなんて……漫画じゃないんだから。あの時は君の冗談かと……」
「……作者、このツンツン頭になんか言ってやれ」
……ツバサ、いくら何でもそれは酷い。スバル君が落ち込んでるし。……あ～スバル君～？　聞こえてたら聞いて～？
結論から言えばいます。ただし、死んだ人を生き返らせる事はできません。そのうちキミにも逢ってもらうからね。スバル君？
「ッ！　おい作者！　それってどういう事だ！？　オレは何も聞い

ていねぇぞ！」

さて、次はサーチマンですね。

（（話を強引にそらした！！））

――――シャーロ――――

世界有数の軍事大国でもあるシャーロ。そこの現シャーロ防衛隊長：ライカは、苦渋の決断を下そうとしていた。

「再三に渡る要求……『サーチマンを渡さねば貴国に攻撃を加える。』……か」

『ライカ様、私の事は気にしないでください。国を護るためなら、この命、いくらでも捨てられます』

「……分かっ――」

「ちゃだめだろ」

「『！？」』

ライカとサーチマンがいるのは自室。シャーロはお国柄か個室のセキュリティが高いので、容易に入り込めるものではない。ましてや窓の鍵も閉めているのだから、人間の子供が入ってこられるわけがない。

目の前の黒髪の少年の正体を聞く前に、セキュリティナビがそれを報告した。

『もうしわけありません長官。何者かに進入を許してしまいました』

「……分かっている。目の前にいるからな」

ライカはそう言いながら部屋に置いてあるコピーロイドにサーチマンを送る。

通常コピーロイドは人間に対して攻撃できないように、ナビの意志とは関係無しで発動するリミッターが付けられている。だが、シャーロの要人クラスとなると暗殺の危険もあるため『防衛』と言う範囲で攻撃が認められているのである。

（物理的に入って来れないはずなのに、それでも侵入できた少年の正体は全くの不明。しかし、目の前の少年には恨みは無い。撃つとしても急所は外そう……）

ライカはそういった事を考えてサーチマンに指示を出そうとするが、途中で自分の思考に引っかかるものがあった。

（……待て、俺は今【物理的に入って来れないはず】と言った。……神出鬼没。……オフィシャルより先にナビを奪う……）

この時、ライカの中にある推測が生まれる。その考えを読んだように、目の前の少年は暢気に自己紹介をしてきた。

「初めまして。オレは通りすがりの少年A。……あんたのナビ、頂くよ」

「……世間を騒がせているナビ泥棒か」

ライカの確認に、目の前の少年は腕を力なく下ろした。及び機嫌も悪くなった。

「……オイ、いい加減その名前を世に広めたの誰だ？　教えろ」

相当怪盗という身分が嫌いらしく、少年は拗ねている。やっと少年らしい仕草が見られて、ライカは少し笑みを零す。
少年はそれを目ざとく見咎める。

「今笑ったろ？　いつもは荒っぽい事は嫌いだけど、今回は良いかもな」

少年は足にタメを作り、いつでもライカと距離を詰められる体勢をとる。サーチマンはライカの前に立ち、ライフルを構える。ライカは一瞬少年と戦おうとも思ったが、少年は自分達というよりむしろ後ろの物を……。

少年の目線の先にある物。つまりライカの後ろの物を彼は見ようとしたが、後ろを向いた瞬間、案の定少年は距離を詰めてきた。

『ライカ様！』
「2秒待て！」
『かしこまりました』

2秒。それは酷く短い時間だが、あらゆる訓練を受けたライカにとって、後ろの異変に気付いて再びサーチマンの方に気を配るのは容易だった。

「サーチマン、相手は銃などの遠距離武器は持っていない。避けながら後ろを取れ」
『了解しました』

その後、少年の拳はライカの冷静なオペレートで一回もサーチマンに当たらず、とうとうサーチマンは少年の後ろを取った。

「今だサーチマン！」
「了解しました。スコープガン」

ドン！

放たれた銃弾は少年にかする事も無くライカの後ろ、花瓶に命中した。中から電子機器がショートした音がする。
少年は感心したような口笛を吹きながらライカに話しかける。もう後ろを気にする事はない。

「やるね。さすが４０年以上前にネビュラを壊滅させただけはある」
「熱斗達と一緒だったからな。……お前の事はプリンセス・スノウに聞いた。会って話せば分かると言っていたが……なるほど。話通り人を食った性格だ」

つまり、いつ逢うかは分からなかったがいつかは来るだろうと予想はしていたのだ。しかし、いつまでも来なくて諦めかけていた時に来たものだから疑ってしまった。
そもそもスノウはツバサの容姿すらライカに教えなかったのである。さすが前女王がしつけに困るほどイタズラ好きだっただけはある。

ライカがツバサの正体に感ずいたのはツバサの視線がきっかけだ。彼の視線は真っ直ぐライカの後ろの花瓶に向かっており、そこには小さい穴が開いていた。おそらく何者かが設置した監視カメラだろう。その穴であらかたの事を悟ったライカは一芝居売ったというわけだ。
ちなみに、ツバサは電脳のネットワークを介してきたので監視カ

メラの事は知っていた。おおかた、部屋の清掃員に扮したオフィシャルが設置したものだろう。

人を食った性格と言われたツバサは嫌な顔はせず、飄々と用件に入る。

「オレの事をプリンセス・スノウに聞いたのなら話が早い。サーチマンはオレの方で保護する」

『……ライカ様……』

「みなまで言うなサーチマン。……今まで、良く頑張ってくれた」

『……もったいなきお言葉です。ライカ様もお元気で……』

「あぁ」

ライカとサーチマン、長年の戦友は互いの手を握り合う。そこには、感謝や信頼という言葉しか無かった。

そんな状態に話しかければ2人にどれほど強力な白眼を食らうか分からない。そんな訳で、ツバサは急ぎたくても話しかけられないという状態に陥った。

そんなツバサの退屈（？）に気付いたらしいライカはツバサに向き合う。

「それじゃあ、サーチマンを頼む」

「任せとけ。……サーチマンを電脳へ」

「分かった。サーチマン、トランスミッション！」

ライカは、今後2度と言うことが無いであろう言葉を惜しみなく言った。少しでも惜しんだら、別れに悔いが残る気がしたから……。

――――サーチマン編終了――――

……ふぅ～～～。疲れた～～～～。

「久々にまともな小説だったね」

「……スバル、それさり気に酷いぞ。見ろ、作者が凹んでいる」

「あっ！　ごめんなさい！」

いや、良いよ。最近なんかグダグダだなぁって自分でも思ってたのは事実だから。今回は良いリハビリになったよ。

「後はそのリハビリの成果を本編で出せればな」

「そうだね。頑張ってね作者さん。応援してますから」

あ、ありがとうスバル君。……これからの番外スバル君にレギュラーしてもらおうかな？　ツバサはオレに毒舌ばかりだし。

「あれ？　お前マゾだからそういうの嬉しいんじゃなかったっけ？」

誰もんな事言ってねぇだろツバサ！

「くっくっくっ。ネットにお前の一面が出たな。お前の方が不良じゃねぇか」

てめぇ……はめやがったな？

「……」（実はツバサ君も作者さんも似たもの同士なんじゃあ……。あ、）

「今回の番外はこれで終了です。皆さん、ここまで読んで頂きありがとうございます。これからも僕たちをよろしくお願いします」（……2人がケンカしたら代わりに僕がお別れのあいさつをするようにアイリスに頼まれていたんだっけ）

番外編　？（後書き）

さて、ゆっくり寝て、朝から６１話を書き上げるぞ――――！　今までシリアスだったから気分を切り替えないと……。

なお、ツバサに対して使った口調は、現実のオレもツッコミを入れるときとか良く使っています。「まてやこら！」とか、「ふざけろ」とか。大抵は穏やかなんですけどね～～～。

第６４話　気まずい再会（前書き）

お待たせしました！　やっと出来た……。内容は深めの話とギャグが主です。

第６４話　気まずい再会

城から出たスバル達を迎えたのは、ルナとゴンタ、キザマロの通称【　委員長トリオ　】と、ツバサとソラだった。分かれるときは不満でいっぱいだった委員長トリオの顔は興奮した様子で、そのままスバルやミソラ、暁達に近づく。

「オイ、さっきそこで上手そうな牛肉が売ってたぜ！」

「他にも綺麗な織物があったわ！」

「これほどまでに僕の抱いていたイメージを覆された事はありません！　ひっじょうに興味深い国です！」

ゴンタ、ルナ、キザマロのテンションに押されてスバル達まで押される。

「お、落ち着いて３人とも。そ、そんなに凄かったの？」

スバルがなだめるように両手を前に出して委員長トリオをなだめさせる。少し落ち着いた３人がスバルにそれぞれの言い分を言おうとした時、ライラがそれを遮った。

「はいはい、感動話はその辺にして、ホテルに行きなさい。さっき見てきたから道順は大丈夫ね？」

「「「ハイッ！」」」

委員長トリオとライラはすっかり仲良くなっていた。……コクレンがため息を付いているところを見ると、相当振り回されたらしい。

その後、スバル達はホテルに向かう。念のためと言う事で、コク

レンもついて来た。律儀な性格らしい。
話す事を我慢できなくなったらしいルナ達がスバル達に話そうとしたが、3人の声はダブって中々聞こえない。イラッと来たらしいルナの一喝で、ルナから話し始めた。

「オホン、私が見てきたのは綺麗な織物よ。私の目から見てもあれは相当な物ね」
「オレが見てきたのは牛肉だ。匂いで分かる。アレは絶品だ」
「僕はこの国のあらゆる事が予想外で、知的好奇心がスゴイ勢いでくすぐられています」

ルナの家は裕福なのでルナの目は肥えている方だ。その彼女がそこまでの評価を下しているのだから、言葉通り相当な物だろう。
そしてキザマロの言葉を要約すると、ニホンなど他の国に知られている噂とは大いに違う国の形。国の内側に入らないと分からないモノを見てきたので、彼の好奇心が大いにくすぐられているらしい。
ゴンタは自身の好物を熱狂的に語っている。補足を加えれば、拳を握り締めて、彼の目には骨付き肉が見える。

ツバサは片手がソラに握られて塞がっているのを煩わしそうにしながら説明する。

「まずルナの言う織物だけど、あれは名前を変えてニホンにも輸出している物だ」
「あら、そうなの？　……そう言われてみれば、ママの服の生地と手触りが似ていたような……」
「この国の評判は知ってのとおり。だから名前を変えて売っているというわけ。国の外に運び出す運び屋もいるしな」

ツバサは頷きながら補足を加え、ソラは首をかしげた。

「運び屋？」
「一言で言えば、どんな物でも運んでくれるって人達かな？　……それはそうと、とっとと離せ」

彼としてはとっとと手を離して欲しいのだろう。質問に答えながらも若干ソラを睨むが、当の彼女はツバサの手首を捻りながら断る。

「い～や～」
「いでででででっ！！　間接決めながら断るな――――！！！」

ツバサの声は怒号と言うには軽い。せいぜい【　強めのツッコミ　】といった所だろう。漫才のような掛け合いにスバル達が笑いを堪え、それがツバサにとって居心地が悪くなったらしい。彼は咳払いをして話を戻した。

「おっほん！　……キザマロの言っていた事だがな、結論から言えば他所の国に伝わる噂のほとんどが勝手な噂。つまり嘘っぱちだ」
「それじゃあ、僕達の聞いていた話は……」
「う～ん……あ、ちょうど良い。スバル、四方を見てみな？」
「えっ？」
「良いから」

スバルが言われた通りに四方を見渡すと、一方には当たり前の市場の様子。二方目にはケンカをしている男性2名。コクレンは「仲介してくる」と言ってそっちに飛んでいった。三方目には孤児院の子供が仲良く手を繋いで帰っている情景。四方目は、夕方というのもあって【　消費期限　】に分類される食べ物を買うために並ぶ列。

ザッと見た後、ツバサは依然として飄々とスバルに聞いてくる。

「感想は？」
「本当にのどかだなぁ……。かな？」

一部物騒なものもあったが、それも予想していたよりも少なかったし、ケンカ自体コクレンがすでに止めている。コクレンの話では、「写真集をいつまでも返してもらえなくてブチ切れたそうじゃ……」という事らしい。その時のコクレンのため息は、ケンカの理由に呆れながらも慣れきっていた。

ツバサは【　しょうがないから及第点をやろう　】と言う顔で、スバルにゆる～く拍手をする。

「まぁそんなもんでいいだろ。さて、どれが本当のこの国の姿だ？」
「えっ？　……本当の？」
「そう。四方のそれぞれの情景。それらはどれを見るかで印象が違う。スバルやオレ達みたいにこの国の中に入って実際に見た者と違って、テレビは一方しか映さない可能性もある」
「……つまり、さっき私たちが見た四方の様子をテレビ前の人には一方しか伝わらないってこと？」

さすが成績も優秀なパーフェクト委員長。上手くまとめている。その詳細は、ツバサが頷きながら答えてくれた。

「そう。のどかな光景、当たり前な日常、子供の仲の良い姿、ケンカしている男。この中で、外の国の人に受け入れられやすい情景はどれかな？」
「どれって……ッ！　そうか！　ニホンを始め他の国には【　蛮族の国　】って言われている。そう伝わっている以上、【　ケンカをしている男　】の光景の方が受け入れられやすいんだ！」

「スバルも察しが良いな。その通り。物事を伝えるってのは【　真実　】よりも【　分かりやすさ　】が重視される。他の国の連中にとって都合の言い光景、受け入れられやすい光景を取捨選択して分かりやすくして伝えるのがメディアだ」

『だけど、メディアが無かったら情報を得られませんよ』

アシッドの冷静な言葉に、ツバサは例え話を出した。

「そうだな～～～……。例えば、これこれこういう悪い面があるけど、こういう良い所がある。さらには……。って考える要素がいっぱいあるより、良いか悪いかっていう二極化して伝えた方が分かりやすいだろ？　そして、少し刺激的にテロップや映像を出すタイミングを編集すれば、高視聴率の出来上がりってこと」

「……そういえば、デマキューもそんな事を言ってましたね……」

キザマロは思い出したくも無いという風に声を出す。アメロッパにあるドンブラー湖という湖で潜水艦に閉じ込められて溺れかけたという壮絶な経験をしたのだから無理もないだろう。

それはさておきデマキューという人物だが、テレビのディレクターで昔は視聴率が上がらず、うだつの上がらない日々が続いていた。しかし、少し映像を大げさに出すなど小細工をすれば視聴率が上がり、去年まではやり手のディレクターとして通っていた。そんな彼も、昔はカメラに映るありのままを映していたらしい。だが、結果は上の通りだ。

ツバサは続ける。

「デマキューってのが誰かは知ったこっちゃ無いが、メディアにいる人間ならほとんどの人が感じているジレンマじゃないかな？　テ

レビで流されるのは分かりやすく情報が取捨選択された情報。いわば【 主観 】。それに影響されて誤った、またはメディアで流された1つの情報だけが全てという考えを持つのはオレ達。流された結果、人を傷付ける事もあるだろうな」

容赦が無いツバサの言葉にさっきまで高機嫌だったルナ達がテンションを急落下させ、それを見かねたソラが後ろからツバサの首を大事に至らぬ程度に絞めた。

「な・ん・で君はそういう暗〜い事を言うかな〜？」
「い、いちおう言っておくが……流されない方法もあ、あるぞ……」

それなりに苦しいらしく、言葉が所々途切れている。弁解を許すが如く、ソラは絞めていた腕を放した。

「どんな？」
「考える事」
「……もう一回いってみようか〜」
「待て待て待て！　最後まで聞けって！」

あっさりと答えたツバサにソラが再びにじり寄る。このままではまた首を絞められかねないと思ったツバサは後ずさりながら続ける。

「この場合例えを出した方が分かりやすいから例えを出すぞ。例えば、お前達は今回メディアの仕組みとまではいかないが、それから流される情報も一種の主観だと知った。知る事が大事なんだ」
「知る事が？」

たったそれだけ？　そんなスバルの疑問にツバサは頷く。動きがややぎこちないのは、ソラが目の前でいつでも攻撃（首絞め）でき

る体勢を作っているからだろう。

「そう。知った以上、知らなかった頃には戻れない。【　流される情報は一種の主観だから、他にはどういうのがあり得るだろう？　】

そんな感じで想像力を働かせれば、そのニュースに対しての認識が、メディアの流す情報で染まる可能性は少なくなる。

さっきの四方の話だが、あれだって【　ケンカをしている男　】を映したとしても、見ている者が様々な推測や想像をする事で、スバルが見た中の【　のどかな日常　】を想像できる者もいるだろう。そんな感じで、情報をうのみにしないで色んな事を想像して考える。それだけで、流される可能性は少なくなるんだ。……まぁ、知った後で今までの道を選ぶ事もできるんだがな」

最後はボソッと呟いたツバサにスバルが目ざとく、いや耳ざとく尋ねた。スバルも好奇心は旺盛な方だ。

「知った以上知らなかった頃には戻れないって言ってなかったっけ？　何で元の道を選べるの？」

尋ねられたツバサはめんどくさそうに頭を掻きながら答える。

「あ～？　それはだな～。周りに合わせて知った・気付いた事を自分でなかった事にするって選択肢だ。大抵は、【　目の前の情報や常識、教科書に書かれている事が全てで、それ以外をわざわざ考えるのは無駄な事。非効率的な事　】って思う事で、それらの情報を自分で考えるって奴は少ないんじゃないのか？」

幼い内は、見たモノ、聞いた事をありのままに受け入れて育つ。だが、成長するにつれて個人の価値観が育まれ、自分の価値観に合わない情報、または忙しさに追われて目の前の情報以外の情報は拒

絶される。自分で考える必要性が少なくなる。そんな集団の中で少数だけ色々な事を考える人が現れると、十中八九その『少数』は疎外されるだろう。

ツバサがそんな事を語っているうちにホテルに着いた。

「「「「「……」」」」」

スバル達の沈黙に、ホテルのボーイさん（荷物を運んでくれる人）も沈黙を返す。ボーイさんの目は語っていた。「よりによってここか」と。

スバル達の目の前の現実を信じられない沈黙。ボーイさんの屈辱以外の何でもない沈黙。対峙する双方の様子と心境を読んでか、ツバサは笑いを堪えている。

ボーイさんの名前は、スバルとボーイさんの因縁を知らないソラが明るく言った。

「キミ、ソロ君だったよね。イースター島ではありがとう。あたしはソラ。よろしくね」

「あぁ」

そう言いながら、ソロの視線はスバルとツバサに向けられている。その目はそれぞれに語っていた。スバルには「貴様に見られるなど屈辱中の屈辱だ」で、ツバサの方には、「結局その女を連れてきたのか」という呆れとスバル達に見られた事への八つ当たりの視線だった。

敵意を通り越して殺気にまで昇華しているソロの殺気を、スバルは口元が引きつるほど恐れ、ツバサはそれすら娯楽のように楽しん

でいた。
ソラが話しかけた事で一気に周囲からは話しかけずらくなり、コクレンも2，3歩引いている。
そんな気まずい状況は、ホテルの従業員さんが解決した。
「あらソロ君お客さん？　それならそうと早く案内してちょうだい」
ニューハーフではあったが……。スバル達はその後、嫌々ながらも案内するソロの後ろで彼に尋ねた。
「ねぇソロ、何でキミがここに？」
「……」
彼はこれ以上話したくは無いらしい。彼の心情を考えればもっともなもので、スバルもそれ以上問うのは止めようとしたが……。
「オレが教えてやろうか？」
ツバサはイタズラをするようなニンマリ笑顔でスバルの肩に手を置く。スバルの返事も聞かず、ツバサは話し始める。
「ソロはなぁ――」
「路銀稼ぎにきている」
ツバサに言われるより自分で言った方がマシだと判断したらしく、ソロは簡潔に答えを言う。なお、路銀というのは旅人が道中で使う金の事だ。
「ろ、路銀……。ソロ……キミって……」

「何だ星河スバル。……まさか、オレが何も食べなくても生きていられる存在だとでも思ったか？」
「いや、まぁ、それは……」

考えてみれば彼も人間だ。ならばどこかで食費を稼がなければいけない。それは至極当然の事だが、ソロのイメージ上、働いている所など想像できない。
そんなスバルの心情を悟ったように、ソロは全力の白眼をスバルに送る。

「ふざけろ。オレはそこで笑っている化物じゃない。……この国が一番性に合っているだけだ」

つまり、ツバサはいちおう何も食べなくても生きていける。そして、ソロにとってもこの国は居心地が良い。と言う事だ。化物扱いされたツバサは笑いながらも反論する。

「お前なぁ、食べ物を食った方がこっちとしては長生きできるんだぞ？　食物に含まれる成分を自分の寿命、つまり自分のエネルギーに変えて――」
「つまり22世紀の猫型ロボットと同じというわけか。……そういえばお前ドラ焼きも好きだったな」
「そうそう。あのフワッとした食感と甘さが絶妙……って、何でソロがそのことを知ってんだ!?」
「ドラ焼きか？」
「いや、猫型ロボットの方。……興味本位で聞くが、おばキューの印象は？」
「……大飯食らいで犬嫌い。ズッコケ慌てんぼお化け」
「何で『藤●F不●雄』作品に詳しいんだよ！」

ツバサとソロのレトロな、かつそれぞれの作品を良く知っていないと分からないマニアックな話題（漫才）に、スバル達は苦笑いを浮かべる。うかつにここで笑ってしまえば、ソロから殺気をさらに通り越した『実力行使』をされかねない。つまり、ＴＨＥ（ザ）．暴力である。

（今日は時差ぼけとは関係無しでゆっくり眠れそうだ……）

そう思えるほどにスバルは疲れており、長～いため息をついた。自室のベッドに横になった後、いつもの如くツバサからいつこの国を出るかのメールが来る。

『しばらく滞在』

以上だ。しばらくソロと顔を合わせないといけないという事に、スバルは思わずため息が出た。

第６４話　気まずい再会（後書き）

活動報告にも書きましたが、次からの更新は書き終わったらとなります。なるべく早く書き上げますが、そろそろ学校も忙しくなってきたので……。読んでくださっている皆様にはご迷惑をおかけします。

それではまた次回、お楽しみに！

第６５話　ペット（前書き）

お待たせしました！　今回はほとんどギャグです。この話は書いてて楽しかったですね。

第65話　ペット

朝起きたら顔を洗う。次にご飯を食べる。これはいたって普通の朝の様子だ。スバル自身今までそうだったが、今のこの状況をどう言えば言いのだろう……。

「……」

（（（（（……ソロの視線がめっちゃ痛いんだけど！！！））））

そう。ソロの殺気にも似た視線で、昨日ゴンタがおいしそうだと言った肉の味が無くなっている。その状況下で食べられるのは、そういった視線をむしろ楽しむ嫌いのあるツバサぐらいだろう。

「むぐむぐ……。ん？　何だスバルそれ食べないならもらうぞ？」

別にそれを聞くのは良いが、返事を聞く前に皿を奪うのはどうなのだろう。そんなツバサをたしなめるように、アイリスはハンターの中から注意する。

『ツバサは無神経すぎよ。みんな、ソロの視線で食べられないみたい』

なお、アイリスのコピーロイドはようやく昨日修理されたらしい。それなりに手こずったらしく、ツバサの目元には少しクマが出来ている。

注意を受けて態度を改めるかと思われたツバサは、逆に目を光らせる。

「……ほぅ。……食べられない……ねぇ……。それじゃあ全部オレが――」
「「「「やらねぇーよ」」」」

さすがに図々しかったらしく、ツバサに憮然とツッコンだ面々は食事を進める。

（……案外食べられるものだなぁ……）

スバルが食べながらそんな感想を抱いていると、出会って2日目なのに異常に記憶に刻み込まれた人物、ゲイルが現れた。本名はゲイル・ホワイトというらしい。しかし、何故に窓から……。

「おっはよー諸君！　目覚めはいかがかな？　おっ！　いつ見てもミソラちゃんにソラちゃん、ルナちゃんはプリティーで将来有望だね！　だけど……」

朝っぱらからナンパをした青年は足にタメを作り、地面とは平行に飛ぶ。

「クーちゃんの大人の魅力には――」

グシャ！

ジェミニ・スパークのジェミニサンダーを思わせる息ぴったり具合で、暁とクインティアはゲイルの顔面にストレートを命中させる。音からして、鼻がいったろう。

「ひ、ひきなり強烈なあひさふだね」

とわいえ鼻の骨折は免れたらしいが鼻血は出たらしく、手で鼻を押さえている。なお、先程の彼の言葉を訳すと、「い、いきなり強烈なあいさつだね」である。

その後はもちろん……（っていうか懲りずに……）

「でもそういう所も好――」

キーン！

もはや説明は不要だろう。ジャックがゲイルの大事な所にケリを入れたのだ。さすがにこれは効いたらしく、ゲイルは蹴られた所を押さえてうずくまった。

ツバサもツバサで、そんな友人に手を差し伸べる所か、どこからか棒切れを取り出して突いた。そして、曰く。

「……返事が無い。タダの屍のようだ」

某ＲＰＧの言葉を言っている彼の顔は笑いを堪えている。さすがに酷いと感じたのか、スバルはツバサをたしなめる。

「ツバサ君、いくらなんでもそれはゲイルさんに失礼だよ」

「おぉ！　スバル君、僕の事を気遣って――」

ボクッ！

「……スバル、今後のために言っておく。こいつは女性だけでなく可愛ければ男性だろうとこうなる。自分の身を護るためにも、そして、コイツの魔の手がミソラに振りかからないためにも、お前が護ってやれ」

この言葉がピンチの時に言われたらどれだけ力になるだろう。だが今の状態は、ツバサの裏拳を食らったゲイルが血を流していて、それを呆れたように見ている暁達。そして平和な朝の食卓……。どう考えてもコメディの様子にしか見えない。というより、それぞれの情景が打ち消しあっていてもはや何を強調したいのかが分からない情景と化している。

ツバサの鉄拳を食らって沈んだゲイルは直ちに復活し、ツバサに文句を言った。さすがにあれだけやられたら、例え自業自得でも何か言うだろう。

「ツー君何するの！？　キミ達は僕の事を変態みたいに言うけど、世の中にはレズでＢＬ好きな腐処女で、ネコで受けでロリコンでマゾで露出狂。その上欲求不満っていう女の子もいるんだよ！？　その上性格はさっぱりしてさわやか！」

「２つぐらい（ロリコンとマゾ）お前と一致してんじゃねぇか！！！　大体どこの誰だそれ！！？」

ほとんど怒鳴り声に近いツバサの声に臆する事無く、ゲイルはあくまで明るく答える。

「●物語のキャラ。名前は――」

「「「「「言わんで良い！！！！！」」」」」

さすがに呆れてばっかりではいられなくなったらしく、暁を始めとした全員（ソロは目で訴える）がゲイルにツッコミを飛ばす。これ以上子供に聞かせたくない言葉をゲイルに言わせないために、スバルは話を逸らす事にした。

「ところで、こんな朝早くにどうしたんですか？」

ゲイルも幸いな事に（？）さっきまでのはおふざけだったらしく、スバルの質問には嫌なお顔せず対応する。暁達のような彼と付き合いの長かった人達は「やっぱり」という顔で怒り半分呆れ半分でゲイルを見ている。神経が図太いツバサや冷静なソロまで白眼を送っていた。

「うん。それはね、しばらく滞在するって聞いて、ここは国王である僕が皆を案内しようと思って♪」

「ちょうど良かった。実はこの国での用事が多かったから、こいつらの案内をどうしようか困ってたんだ。それじゃあ、こいつらのお守り頼んだぞ。ゲイル」

「おいツバサ！　俺たちをお守り扱いするとはどういう事だぁ！？」

さすがに大人のプライドに響いたのだろう。暁がツバサに抗議するが、途中でゲイルに跳ね飛ばされてしまった。

「ツー君、いよいよ僕の事を頼りにしてくれるんだね――――！？」

「抱きつきながらほっぺたスリスリするな――――――！！！」

ドグシャァ！！！

ゲイルが何をしたかはツバサの言葉どおりで、その後はツバサのアッパーカットがゲイルの顎に炸裂。彼は本日何度目か分からない鼻血を吹いた。

ツバサがケンカ直後の猫のように「フーッ！　フーッ！」言いながらゲイルを見ている所へ、ソラが明るく話しかけた。

「ツバサ～。ジョーカー借りても良い？」

「はっ？」

この質問は彼にとって予想外だったらしく、素っ頓狂な声を出した。ジョーカーは一応といった感じでウィザードＯＮ（実体化）したが、腑に落ちないという顔をしている。

ソラはややジョーカーに対して申し訳無さそうにその理由を述べた。

「いや、ね。たぶんジョーカー、またツバサに置いてけぼりを食らうんだろうし。私もジョーカーに少し頼みたい事があって……」

「……ジョーカーが良いならオレは別に構わないけど？」

ツバサの視線を受けたジョーカーは、依然として腑に落ちない顔をしながらそれに答える。

『私も別に構わん』

「ありがと２人とも。それじゃあ……っと。ゲイルさん、ちょっと聞きたい事が――」

ソラはゲイルから何かを聞いた後、ジョーカーと共にどこかへ行った。

ソラを見送った後、ツバサは自分の用事を済ましに。スバル達はゲイルと共に街を周る事となった。ホテルから出るとライラも居て、

本人曰く、「ヒマだから一緒に行く」だそうだ。仕事の方（書類整理など）はコクレンに押し付けてきたらしい。無論、気付かれないようにそぅっと。

外に出た後、ゲイルはスバル達の方に体を向ける。

「さてと、まずは広場に向かおうか。あそこはこの国の真ん中に当たるからどこに行くにしても都合が良いし」

広場とは、昨日スバル達が聞いた４方向の話のあの場所だ。写真集の取り合いのケンカはともかく、子供が仲良く歩いている所は心を和ませた。スバル個人としては図書館に行きたかったが、それは後で良いだろう。そんなわけで、全員がゲイルに付いて行った。

――広場――

どうも、星河スバルです。親愛なるお母さん、お父さん。……僕は今日死ぬかもしれません。……僕の目の前に……『虎』がいます。

「グルルルルルゥ……」

広場に着いたスバル達を待っていたのは一匹の虎だった。毛並み

は見事な純白。ホワイトタイガーというヤツだろう。美しい外見とは裏腹に、鋭い牙と爪が垣間見れる。

街の人は全く変わらず振る舞い、そこに本当に虎がいるのかすら分からなくなりそうだ。しかし、その虎が一歩足を踏み出すたびに僅かに土埃が出る事を見ると、本当に存在するらしい。

さらに言えば、ゲイルもライラも見えていないかのような自然な顔をしている。

ダッ！

虎が勢い良くスバル達の下へ駆け出す。

「きゃぁぁぁぁ！！」
「うわぁぁぁぁ！！」

ミソラがスバルの腕にしがみ付く。本来なら顔が紅潮する状況だろうが、今は冷や汗しか出ない。虎はジャンプしてスバル達に飛びかかる。

「グォォォォ！」

思わず目を閉じる。……しかし、いつまで経っても三途の河は見えない。恐る恐る目を開けると、虎がゲイルに圧し掛かり、舌でぺろぺろ彼の顔を舐めている。手早く言えば、懐いていた。

スバルは未だ現実感を得られなかったが、何とかゲイルに質問をする。

「あ、あの……ゲイルさん……。そ、その虎は……」

対するゲイルは、質問に答えるためにその虎の顔の前に平手を出して下がらせる。どうやらかなり躾けられているらしい。

「僕の愛猫（あいびょう）だよ」

事も無げに言った彼に、スバル達の時間はしばし止まった。

――――国から少し出たところ――――

バルズランドの周りは一面の荒野。おまけに広い。ソラとスザク、ジョーカーはここに来ていた。

『……で、私に何の用だ？』

ソラは先程までの明るい顔は消して、真面目な顔でジョーカーと向き合う。

「ジョーカーって強いよね？」

『無論だ』

「……戦闘の訓練、頼める？」

『……理由は？』

ソラは意を決するように息を吸って、言った。

「昨日、ツバサと約束したから。アイツが変わるまで私はそばに居るって。だから、そのためにも強くなるって決めたの。……もしこないだみたいな事があったらアイツ……」

護りきれなかった自分を責める。

帯広博士とレイの事を知ってから、これ以上ツバサに誰かがいなくなる経験をさせたくないと彼女は思った。だからそのためにも、まずは自分が強くならなくてはいけない。……一方的にソラが約束を言っただけでツバサは了承しなかったが、それでも彼女は望んだのだ。

『……訓練でも手加減せんぞ』

ジョーカーにも、大事な者であるヨイリー博士がいるからソラの気持ちが分かるのだろう。憮然とした言葉とは裏腹に、協力したいと思う感情のほうが大きかった。反面、昔の事を思い出す。人間より強い力と自我を持つが故に処分されそうになった頃を。そして、思う。

（私もずいぶんと変わったものだ。……もしかしたら、【変わる】というのは人間もウィザードも、月日も関係ないのかもしれない……）

一方、ソラの顔はパッと輝く。ちなみに、ソラがゲイルに聞いた内容は、「この辺で思いっきり暴れても問題ない場所はどこ?」だったりする。

「ありがとう！　ジョーカー！」

『……始めるなら早くしろ』

直後、赤い光が迸る。

――――再び街の広場――――

「……何やってんだお前ら？」

突如後ろから聞こえたツバサの声でスバル達は我に帰る。だが、現実に真っ先に目の前に見えるのは虎がゲイルに懐いている所だ。早く日常に戻りたいという願いで、スバルはツバサの方を向く。

「ツバサ君用事終わったんだ。っていうか何買ったの？」

彼は彼で旅行の計画があったからその点は突っ込まないとしても、彼の持っている荷物ぐらいなら聞いても良いだろう。

なお、ツバサは結界を張りなおした後買い物をして来たのである。無論、彼がスバル達に言うのは買い物の事だけだ。

「ちょ～とな」

おまけにはぐらかす。直後、ツバサの視線は虎に向かう。及び、

親しげに虎に近づいた。

「よぉ、久しぶりだな。元気だったかシュレディンガー」

どうやらシュレディンガーというのがその虎の名前らしい。シュレディンガーはツバサの問いに答えるように欠伸を1回する。

一方、暁を始めとした博識な皆さんは顔から血の気が失せた。この中で彼の事を詳しく知っていると思われる暁がゲイルに白眼を送る。

「……ゲイル。虎、いや、猫科にシュレディンガーはないだろ。シュレディンガーは猫科には禁句だ……」

暁の問いにゲイルはにこやかに笑ったままで、代わりにツバサが暁の腰を軽く小突く。身長の関係で肩に届かないため腰を小突いたようだ。

「暁、諦めろ。オレも昔そう言ったんだが、こいつのネーミングセンスの悪さは天下一品だ」

そう言うツバサの顔は呆れを通り越して笑顔すら浮かべている。その虎にシュレディンガーという名が付けられたのはかなり前の事らしい。

なお、シュレディンガーというのは物理学者で、簡単に言えば（話をはしょれば）猫に酷い実験をした人である。興味があれば『ウィキペディア』で調べてください。

暁とツバサの掛け合いを見ているゲイルはニヤニヤした顔でツバサの頭に手を置く。

「そんな事言っちゃって良いのかなツバサ君？」
「……言っておくが、オレにお前みたいな悪趣味はねぇぞ」
「いやいや、黒猫にクロって言うのはさすがにひねりが無いって言うか――」
「てめぇの中で名前の捻りは最高優先順位をキープしていやがるんですかコノヤロ――――！」

さすがにケンカに発展しそうだったので、スバルは2人の間に立って落ち着くように笑みを浮かべる。

「まぁまぁ落ち着いて。……ツバサ君、クロって？」

彼は動物好きだったのだろうか。ならば、彼の平穏な一面を垣間見れて穏やかな気持ちになる。だが、ツバサはあっさり否定して、スキあらばゲイルに襲い掛かろうと指を鷹（たか）の爪の様に鋭くしている。

「いや、オレが前にこの国に来た時、【 孤児院で黒猫が産まれたんだけど、せっかくだからこの子の名付け親になって♪ 】ってゲイルに頼まれてな。断りたかったんだが、孤児院の子供達の期待の目を見て……」
「押し切られたと」
「……」

途切れた続きをスバルが予想し、ツバサが沈黙で肯定した。

「……まぁ、嫌いではないけどよ」

ツバサはため息をつきながら本音を言う。ゲイルはその様子を見て何かを思いついたらしく、スバルに問う。

「スバル君って動物好き？」
「え？　あ、はい。好きですよ」
スバルはこれを言った後で後悔した。ゲイルがイタズラをする子供のような笑みを浮かべている。はっきり言って不吉だ。
「それじゃあ、今日の案内はキャンセル！　代わりにシュレディンガーと遊びまＳＨＯＷ（ショウ）！　あ、追いかけっこね♪」
「あ、遊ぶって……全員で？」
ジャックの恐る恐るという問いに、ゲイルは残酷なくらいあっさりと言う。
「ＹＥＳ！　シュレディンガーは人を食べないように躾けているから大丈夫だよ？」
『ウ、ウィザードはどうなんだ？』
ウォーロックを始め、オックスやコーヴァス、他のウィザード達もゲイルの次の発言に耳を傾ける。まぁ、返答は予想通りというべきで……。
「ゴメン、忘れてた！」
「「「「『『『『明るく言うな――――――！！！」」」」』』』』
「それじゃあシュレディンガー、ＧＯ（ギョ）――――――！！！」
【　ゴー　】ではなく【　ギョー　】なのは彼のユーモアだろう。この状況でそういったユーモアが嬉しくないのは誰の目にも明らかだが……。
「グルォォォォ！！！」

「「「「うわぁぁぁぁぁ！！」」」」
「「「「きゃぁぁぁぁぁ！！」」」」
「あはははは！　頑張ってね～～～♪」

殺さないと分かっていても迫力の時点で反則だ。恐すぎる。陽気に笑っているゲイルに対し、ツバサは再びブチ切れる。

「てめぇも参加しやがれ！！！」
「……Ｗｈａｔ（フォワッツ）？」
「何？　じゃね――――――！！！」
「……Ｐａｒｄｏｎ（パードゥン）？」
「意味ほとんど一緒じゃねぇか！　少し他人行儀になってるけど！」
「ワタシニホンゴワカランアルヨ～～～～♪」
「オレで遊んでるだろてめぇ！！」
「ＹＥＳ！」
「そこはハッキリかい！　……もういい、来い！」

来いと言っておきながらツバサはゲイルに近づき、胸倉を掴んで虎の前に放り投げた。

ゲイルは空中で姿勢を正して綺麗に着地してそのまま逃げる。ゲイルも晴れて追いかけっこの参加者になった。

お昼ごはんの時はさすがに休憩し、昼はまともな街巡りかと思ったら……。

「そろそろお腹も落ち着いた頃だろうし、午前の続き、良いかな――！？」
「「「「良いわけねぇだろ――――――！！！」」」」

某お昼のバラエティ番組のごとく尋ねたゲイルに、スバル達（ウ

ィザードを含める）は一斉にツッコミを飛ばした。
その後、追いかけっこは結局始まった……。

第６５話　ペット（後書き）

ちなみに、ゲイルの言っていたキャラの特徴はその作品のウィキで知りました。……意味の分からないものが多いですけどね。

それと、『シュレディンガー』のネタは他のヤツから持ってきました。アレも魔法と科学の融合ですからね。

それでは次回もお楽しみに！

第６６話　予兆（前書き）

どうも。思ったより早く仕上がったので投稿します。

第６６話　予兆

スバル達がバルズランドに来て５日。生徒会長兼スバル達のクラス、６－１の委員長である白金ルナは、ゴンタとキザマロ、そしてやや面倒そうなジャックを引き連れてスバルの部屋に向かう。

コンコンッ

「スバル君、入るわよ？」
「委員長？　うん。良いよ」

ガチャ

ノックをして相手が返事を返してから入るのはさすがだ。今スバルの部屋の中にはスバルとミソラ、ツバサにウォーロックとハープ、アイリスがいる。ちょうど『七並べ』をしていたようだ。
ルナがスバルの部屋に来た理由はというと……。

「皆でバーベキューをしましょう」
「へっ？」
「話が見えないんだけど……」
『『同じく』』

スバルとミソラ、ハープとアイリスの順に頭に疑問符を浮かべて、ツバサとウォーロックはジッとトランプを見つめている。どうやら

誰かに止められているらしい。ルナは自分の声が聞こえていない２人を見ると大きく息を吸って、スバル達が耳を塞ぐ前に大声をあげる。

「私の話を聞きなさい！！！」

「『はいぃ！！」』

２人は跳ね上がり、姿勢を正す。彼女はそれを見てようやく本題に入った。

「皆でパーティをする理由だけど、最近皆バラバラじゃない？　暁さんとクインティアさんはこの国の科学者さんの所へ行く事が多いし、ソラさんはジョーカーとどこかに行くし」

暁とクインティアはゲイルと一緒にこの国の技術を見に行っている。暁が言うには、ゲイルはあの性格が無ければキングの右腕を務めていたほどの人物なので、ヨイリー博士の助手を務めているクインティアとしてはこの国の技術水準に興味が沸くのだろう。暁は旧友（ゲイル）との談笑を兼ねて、クインティアの護衛だ。

ソラは最近ジョーカーと一緒にどこかへ行っている。そして、クタクタになって帰ってくるのだ。理由を聞いても話してくれない。

ルナは続ける。

「このままじゃいけないと思うのよ。せっかく皆で旅行に来たんだから、思いっきり楽しまなきゃ損じゃない」

ルナとしては旅行中にできれば良いと思っていたのだが、ツバサの予定が思ったより忙しかったので今まで出来なかったのだ。

「そりゃそうかもしれないけど、何でバーベキュー？」

スバルの質問に、ルナは堂々と答える。

「パーティはケフェウスを送る時にやったじゃない？　だから、今度はバーベキューをしようと思って、ね。それから道具の方は、このホテルの調理人さんが綺麗に磨いて返すなら貸すって言ってくれたわ」

「それなら良いんじゃないかな？　ねっ？　スバル君？」

ミソラがかわいらしく首を傾げながらスバルに問う。スバルも快く頷いた。

「そうだね。いい思い出になるかも。……ウォーロック、ツバサ君を捕まえて」

『オウ！』

大方、面倒そうだったからだろう。逃げようとしたツバサをウォーロックが襟首をつまんで引き戻す。言ってしまえば猫の様な扱いだ。「またかこいつ」という白眼を一身に受けるツバサは、なぜ自分の行動が読まれたのかをスバルに問う。スバルの答えはこれだ。

「君の事だから、こういう事にはすぐに逃げると思ってね」

『スバルさんもツバサの扱いに慣れてきたようね。……あのままスバルさんが何もしなかったら、私がウォーロックをオペレートして捕まえていた所よ』

『……アイリス、オレで操るのは止めてくれ……』

いつも勝気で強気なウォーロックがズンヨリムードで言った事に対し、なぜだか無性におかしくなって、その場は和やかな笑いに包

まれた。

バーベキューの準備も中々大変だった。暁とクインティアは忙しく、ソラとジョーカーは声をかける前に外に跳び出して行き、ツバサは目を離せばすぐにサボる。さらにはゲイルも遊びに来て、ツバサとド突き漫才を繰り広げた。……大変な理由と言ってもこれだけで――――

「ゲイル！　ちょっと良い！？」

前言撤回。ライラの登場だ。それ自体は何とも無いのだが、彼女の焦りようは異常だ。ゲイルは依然として飄々とした態度を崩さず、彼女に近づく。

「どったのライラ？」
「動き出したみたい」

ゲイルのふざけた態度はいつもの事なので彼女の態度も崩れない。ライラは簡潔に自身の持っていた資料を見せる。それを見たゲイルは、笑みを遠のかせた。そして、スバル達に向き合う。

「ごめん、バーベキューに殴りこみ参加しようと思ってたけど、そうもいかなくなった」
「どうしたんですか？」

ゲイルの声は陽気なままだったが、目は少し鋭くなった。それを

敏感に察したスバルはゲイルに尋ねた。ゲイルは明るく言い放つ。

「お隣さんのアメロッパが新しい兵器を用意してこの国に攻め込んでくるってさ」

「あ、新しい兵器……」

とんでもない爆弾発言を明るく言うゲイルと、その事実に驚いたスバルは後者（兵器）の事で呟く。ゲイルはその呟きを拾ってそれに答える。

「そう。……ウォーロックコピーの、ね」

「ッ！！」

その事実は一同を驚かせた。ウォーロックコピーと言えば、以前クインティアがディーラーに居た頃、サテラポリスを襲撃した時に用いた兵器で、文字通り無数のウォーロックの複製を対象に襲わせるというものだ。なお、ディーラーの作った設計図はサテラポリスが厳重管理しているはずの代物である。

ジャックはチラッとツバサを見る。ツバサはその意味を察し、手を振った。

「あいにくオレじゃない。……大きな組織になればなるほど漏れ口ってのはあるものだろ」

ツバサの言葉の要約と補足はライラが行う。

「つまり、ツバサはアメロッパに情報を売っていないという事。たぶん内通者ね。……最近妙にアメロッパが裏のネットワークに入っているようでね。念のために見張っていたら案の定、無数の情報の中からウォーロックコピーの情報を見つけ出したみたい」

本来はツバサの命を狙った者を監視するためだったのだが、スバル達にそこまで言う事はないだろう。ゲイルは明るく自身の平手を合わせる様に叩く。

「そんなわけで、これから危なくなるからバーベキューはまたの機会って事で♪　僕達はこれから忙しくなるからさ♪」

「でも、動き出すまで今日一日ぐらい時間あんだろ？　だったらオレ達だけでも――」

「い～や～だ～！　僕も食べたい～！　飲みたい～！」

ジャックの言葉はゲイルの子供っぽい理由と口調に遮られた。ジャックは呆れで何も言えなくなり、他の面々が何かを言い出す前にゲイルはライラと城に向かいだした。しかしその途中、ゲイルはスバル達に声を張り上げる。

「延期させちゃうお詫びはちゃんとするよ！　楽しみに待っててね！」

ゲイルとライラの背中を見ながら、スバルはツバサ宛てに呟く。

「……ツバサ君、僕達も……」

「手出し無用」

「うん。……って、えっ!?　何で!?　この国には子供達や旅の人もいるのに……」

この国の人を護るためにスバルは意志を込めた目でツバサを見る。ジャックやゴンタも同意見の様だ。ツバサは少しずつ変わる街の雰囲気を見るように、空を仰ぎながら答える。

「お前らは有名すぎるからだ。スバルは世界を3度も救った英雄。ジャックは元ディーラーで今はサテラポリスの一員。ゴンタも一時サテラポリス遊撃隊に加わっていた以上、顔は知られていると見て良い。ちなみにオレは色んな国のお偉いさんに恨まれているだろうから、この戦いに参加した事がバレたら、そいつらがその事実を使って良からぬ事をするかもしれない。……オレらに出来んのは、ゲイルやこの国の連中を信じる事だけだ」

「……だけど……」

いまだ心配そうなスバルに、ツバサは安心させるために何かをするどころか呆れた目をスバルに送る。

「お前なぁ、この国の連中がどんな奴らか忘れたのか？」

「え……。あ、犯罪者」

「そう。サイバーテロの犯人や、自身の兵器が認められずに国から追放された者まで多種多様。孤児院の子供達は別だが、攻めて来る側はそうは思わんだろう。その国に居るのは全員悪い者と一線を引いているだろうからな」

「だったらなおさらっ――！」

戦う力もない子供たちを危険にさらす訳にはいかない。

スバルはそう言おうとしたのだが、ツバサはスバルの額を小突く事で遮った。

「――最後まで聞け。……だけど、逆に言えばこの国の大人達はそんじょそこらの兵より強いって事だ。何たって、各分野のエキスパートが集まっているんだからな。その全員がゲイルのカリスマの下、それぞれの強みを活かして戦うのがこの国のスタイルだ」

「……すごい」

スバルは心からその言葉を発した。彼（ツバサ）の言葉の中に、国として…
…いや、国自体が一個の生命体のような『圧倒的な生命力』を垣間
見れた気がして、感嘆の声をあげたのだ。
そこからいち早く行動に移したのはルナだ。

「それじゃあ、早くソラさんとジョーカーを呼び戻しましょう。皆
一緒に居た方が何かとやりやすいし」
「なら私は暁さんとクインティアさんを呼ぶよ」

ルナに続きミソラも行動を開始する。すっかり行き遅れた男子衆
は呆然としたやり取りをする。

「……オレら、どうする？」
「……とりあえず、片付けよっか」
「それじゃあオレはサボ……」
『『逃がすかボケ』』

ちなみに上からジャック、スバル、ツバサ。ウォーロックとコー
ヴァスは同時だ。

――――バルズランド・近空――――

ビャッコはサボり……もとい旅行中だったのだが、不意にウェーブロード上で立ち止まる。そして、本物の動物のように空気中に漂う匂いを嗅いだ。もっともビャッコの言う『匂い』とは、人間や電波体が出している微弱な電磁波の事で、それを感知しているわけだが。

『……この感じ……スザクとゲンブじーさんか……。ちっ！　色々と面倒な事になりそうだ。……ヨシ！　見なかったことにしよ……ん？』

ここまで言いかけて、ビャッコは言葉を途切らせる。風に乗って、とある匂いが彼に届く。

『……争いの匂いだ。もうすぐ……か。おもしれぇ。見物させてもらうか』

ビャッコは高ぶる気持ちを抑えきれず、その辺のウイルスをめった切りにした。それでも抑えられなかったのか、高笑いを空に響かせる。

『クックックック……ギャハハハハハハハハ！！！』

唸り、風を巻き込み大きくなる『疾風（かぜ）』のように、様々なモノが集う。見えない何かに導かれるように……。

バルズランドに、大きな嵐が吹き荒れようとしていた……。

第６６話　予兆（後書き）

書き終わったらというスタイルになったら気が楽になりました。やはりいつ更新するかを制限するより、自分のペースで気ままに書いて言った方がオレに合っているようです。個人主義ってやつですかね～。

それではこれにて。今回は国対国というスケールなので上手く書けるか不安ですが、出来るだけの事はしますよ。

第６７話　女神と悪魔（前書き）

お待たせしました。流星らしくないタイトルですが、とある所で合ってます（笑）。

第67話　女神と悪魔

「……首尾はどうだ？」

飛王（フェイワン）・リードは、次元に開いた割れ目からアーノルド・ローグに問う。ローグはあくまで冷静に答えた。

「軍を完全に手中に収めるまで時間がかかりましたが、問題ありません。今頃、ウォーロックコピー……この世界の兵器が攻め込んでいるはずです」

「……期待している」

それだけ言うと、飛王（フェイワン）・リードの作り出した次元の割れ目は閉じ、ローグの目の前にはカーテンの閉められた窓があるだけだった。

ローグは呟きに近い声色を紡ぐ。

「……これに失敗したら……」

それ以上は考えない事にした。今折れるわけにはいかないのだ。国のために。……そして、愛する者を生き返らせるために。

――――バルズランド・城の中――――

城の中には図書館の他に、緊急用のシェルターや、戦闘の情報が

集まる司令室がある。スバル達のいるのは司令室だ。町のホテルに居るより、シェルターや司令室に居たほうが良いというゲイルの計らいだ。

スバルの中で、なぜ自分達がシェルターではなく司令室かという疑問は、戦闘開始と共に吹き飛んだ。

「……むちゃくちゃだ……」

スバルの呟きは驚き一色。その理由は、戦闘の様子が映されたモニターにある。そこに映されているのは、ゲイルがウォーロックコピーをすさまじいスピードで切り裂いている光景だ。それも、単に縦や横に両断しているのではない。首と両腕の3箇所を通り抜け様に切り裂いている。

なお、ゲイルは司令室ではなく戦場から指示を出している。司令室のオペレーターとの通信で現状を知り、各隊に指示を出しているのだ。

対するウォーロックコピーの群れは痛みが感じないらしく、片腕が切られようとも向かってくる。ならば、両腕と首を切ってしまえば嫌でも戦闘不能にさせる事ができるだろう。そこまでは理屈で分かる。だが、それを一瞬でやってのけてしまうのだから、感嘆の声しか出ない。

そして他の皆さんも、一方は脳波で複数のロボットを操作して連携により多対一でコピーを追い詰め、倒していく者が居たり、ゲイル同様に前線に出て戦っている者もいる。

ゲイルを始めとした前線の者が装備しているのはリアルウェーブだ。ゲイルの場合は『爪』で、指先から肘まで覆ってあり、肘にも尖った突起がある。爪も突起も伸縮自在で、切り裂き、突き刺し、

敵戦力を無力化していく。ツバサの話では、キングとツバサの技術に自分なりの改良を加えて作った物らしい。
　他の者が持っている武器はまちまちで、それぞれが戦い慣れた武器を使っている事を伺わせる。不思議な事に、痛みを感じないはずのコピー達は、その武器が当たるだけで消えていった。

「ツバサ君、あれ……何で消えてるの？」

　ツバサはモニターを見ながら答える。

「ん？　アメロッパの連中がウォーロックコピーの情報をそのまま使っているのだとしたら、波長もそのままなんじゃないかと思ってな。音を音で消す時と同じで、互いの電波を干渉させる事で倒している」

　音とは、全く正反対の波長の音を加えると互いに干渉されて聞こえなくなる性質がある。つまりこの場合、ウォーロックコピーの波長に対し、それとは正反対の波長で覆われた武器で攻撃すれば、自然と消えるというわけだ。
　スバルに説明していたツバサの眉間が不意に強張る。彼の視線を追ってみると、互いの侵攻具合の様子が映されたモニターがあった。
　スバルが問う前に、ツバサが口を開く。

「……妙だ」
「えっ？」
「ゲイル達の戦力は人形であるコピー共と比べて圧倒的だ。なのに、全然侵攻場所が変化していない。それどころか、徐々に押されている」

　武器の能力にそれぞれの実力、さらにはゲイルの策。そしてコピ

ー自体、生まれ立てとも言えるほどにそれぞれの動きが未熟なおかげで、今の所負傷者は居ても、犠牲者は無かった。むしろ、善戦しているくらいだ。

ちなみ犠牲者が少ない理由は、ゲイルが『死なない事』を重視する策を講じているからである。

一方、スバルにもツバサの言わんとする事は伝わった。つまり、善戦しているのになぜ侵攻していないのかという事だ。

「それって……」

「何かネタがあるな。……ライラ、コピー共の攻めて来るところには何がある？」

スバルとの問答を一時中断したツバサは、ライラにウォーロックコピーの出所を探らせる。

「ちょ～っとまって～……。っと、ダメね。意図的にノイズが大量に出ていて画面越しじゃあ探れない。直に見るしかないわ」

それを聞いたツバサは考えるように目を閉じ、目を開けるなり出口に歩きながらライラに指示を飛ばした。

「ライラ、衛星からアメロッパの回線など、考えられる全ての【記録しうる手段】を潰してくれ。オレも行く」

「つまり、私が宇宙を飛び回っている衛星全部をハックして、君達の映像が残らなきゃ良いわけね？」

証拠となる『映像』を記録する手段を潰せば、ツバサがいくら戦おうが証拠がないので咎められない。ライラの解釈は正しいのだが、彼女は君達と言った。それはつまり……。

後ろを向いたツバサの前には、すでに電波変換したスバル達が居た。

「仲良く行ってらっしゃ～い♪」

ライラの陽気な言葉と共に、スバル達が唖然としたツバサを掴んで連れて行く。コクレンはライラに目配せすると、スバル達に付いて行った。

ライラは頬杖をついて、コクレンの目配せの意味を予想する。

「ここは頼む……かしらね。……衛星全てをハックして、相手の施設も支配（ジャック）しないといけない。きついけど、やるしかないわね」

その目に決意の色を満たしてキーを打とうとした時、隣に少女が座る。

「アイリスちゃん？　……手伝ってくれるの？」

アイリスは無言で頷き、ライラはなおも問う。

「兵器はもう操らないないんじゃなかったかしら？」

『兵器は操らない。……衛星での記録は、私が全て無効化します』

つまり、衛星の画像を狂わせるだけだ。

「はいはい。それじゃあ私は敵のハックに備えて、さらに反撃をしますかね。……ねぇアイリスちゃん、賭けをしない？」

『えっ？』

「あなたが絶対に兵器を操らないってのはゲイルやツバサから聞いたけど、それが何でかは聞いてないのよ。だから、ね。アイリスち

ゃんが全ての衛星を乗っ取るのと、私が相手のネットワークを制圧するのでどっちが早いか勝負しましょうって話」
『……つまり、私が負けたらそのことを話せ、と』
「そういう事ね♪」

これは絶対に負けられない。アイリスがその思いを胸に、パソコンに手をかざす。彼女は手で触れずとも機械を操れる。それが彼女の能力（チカラ）だ。最近はもっぱらウィザードを制御する事が多いが、機械を操る方が本分だったりする。
そんな彼女に、ライラはクスリと笑う。
「ふふっ。頑張るわね、イリスちゃん？」

その言葉に、アイリスの手は思わずといったように止まる。

『……イリス？』
「そう。イリスは神話上では虹の女神。スペルにすると『Ｉｒｉｓ』つまり、アイリスとも読めるわけ」
『……言葉遊び？』
「えぇ、面白いでしょ？　ちなみに私はクラッカー時代はベルゼブブって呼ばれてたわ」
『確か、悪魔の名前……』
「そう。暴食を司る悪魔だけど、同時にスパイの力も持っていたとされているわ。他にも羨望とか向上心を司っていたり、悪魔の中ではルシファーに次ぐナンバー2とか。色々と有名よ」
『ライラさんは色々な事を知っているんですね』

アイリスは当たり前な子供のように、自分の知らなかった知識を知っているライラに尊敬を込めた眼差しを送る。そんなアイリスに対して、ライラは暖かく微笑む。その様子は仲の良い姉妹のようだ。

「あ、アイリスちゃん」
『はい？』
「私の方、あと3分もすれば終わるわよ」
『ッ！！』

実は、アイリスが話を聞いている間、ライラは腕を動かしていたのだ。驚いているアイリスに対し、ライラは愉快気に笑っている。

「あっはっはっはっは！　油断大敵よ、イリスちゃん？」
『ッ！！　絶対に負けません！』

その時のアイリスの顔は怒っているように見えて、実際は楽しんでいるようにも見えた。彼女の中ではきっと、親しい友人とする取引めいた遊びのように、そわそわする落ち着かない楽しさや嬉しさが満ちているのだろう。だからこそ、ライラも愉快気に笑っているのだ。

2人は互いに挑発しあい、スバル達が正門に着く頃には、全衛星、及び敵のネットワークは完全に支配下に置かれた。これでいくら暴れても物的証拠は残らない。

半ば流されるように来てしまったツバサはため息を付き、スバル達に向き合う。

「こうなりゃ仕方がない。……お前らのハンターに通信機能つきの

ＰＧＭを転送する。スバルやミソラは最初に会った時に渡しているから良いとして、そのほかの皆はハンターを出してくれ」

言われた通りにハンターを出すと、ツバサは慣れた手つきでＰＧＭを転送していく。

「……作戦の方だが、暁、遊撃隊のメンバーを率いて左から行ってくれ。オレとジョーカーは右から行く。

あ、ジャックとソラは上空から地上に援護を頼む。あわよくばコピー共が減らない理由を見てきてくれるとありがたい。

コクレンは正門の前で防衛を頼む。あんたの広範囲攻撃は頼りになるからな」

暁の電波変換したアシッド・エースは腕を組んで確認を取る。

「つまり、敵両翼に風穴を開けて、そこを基点に撤退なり包囲をしようと……待てっ！　お前ら２人で大丈夫か！？」

「余裕、楽勝、任せとけ」

そう言ってツバサはジョーカーを引き連れて歩き出す。追おうとしたアシッド・エースをコクレンが止める。

「大丈夫じゃ。ゲイルが言うには、ツバサは簡単には死なないらしいからの」

「……分かりました。……皆！　今回は一味違う戦いだ！　２人１組になって周りを警戒し合え！　以上！」

その声と共に、スバル達は戦場に去っていく。

――――上空――――

「……援護と下見ねぇ……。それも大事なんだろうけどよ～」

ジャックことジャック・コーヴァスとしてはつまらないらしい。陰鬱に飛ぶ彼に対し、ソラことスザク・フレアは早く行きたいようだ。先頭を飛ぶ彼女は後ろのジャックを振り返る。

「ジャック君遅い。置いてくよ？」

「……何でやる気満々なんだよ……。もしかして空中はオレに押し付けて自分はツバサの所に加勢に行こうってのか？」

「……さぁ～て行こうか～」

「図星かい！」

「だって2人だけって心配じゃん！」

ジャックとソラが言い合いを始めようとした時、スザクが呆れたように棒読みで注意する。

『あ～。今変な電波を横切った。……前方よりウイルス接近。注意して～』

スザクの声で前方を見ると、ウイルスの壁が迫ってくる。航空機の類はライラが制圧したから使い物にならない以上、あれがアメロッパの航空戦力だろう。おそらく、一定ラインまで近づくと自動で発動するようになっていた物らしい。

「だからって、数多すぎない？」

「アメロッパは物量作戦が主だからな」
『要するに数で押そうってこんたんか。ケケッ！　臆病者のしそうな事だ』
『だ～からムダ話しない！　……で、どうやって突破するの？』

スザク・フレアの率直な感想にジャック・コーヴァスが説明し、コーヴァスが容赦のない批評を下す。それをスザクがたしなめ、ソラとジャックに問う。

「そうだな……」
「もちっ！　正面突破！」

ジャック・コーヴァスが腕を組んで考えている所に、スザク・フレアは自身の拳を固めて突っ込んでいった。

「おい待て！　いきなり突っ込むと――」
「二の舞＋五の舞……合曲一の章……炎孔（えんこう）！」

ジャックの言葉は驚きにより遮られた。スザク・フレアの両腕から炎が巻き上がる。それが収まった時、片手には大きな円錐状の炎の槍があり、中世の騎士の持っていた『ランス』と呼ばれる槍を思わせる。良く見ると、その武器の円錐の部分は渦のように勢い良く回転している。槍とドリルを合わせたような物と見て良いだろう。
今までは単体の舞だった技は合わさり、ひとつの技となる。炎の渦で障壁を作る二の舞、炎の太刀で敵を断ち切る五の舞。その二つを合わせた技が、『合曲一の章、炎孔』である。

槍を前方に構えたソラは、前を向いたままジャックに忠告する。

「ジャック君、私の後ろに立たない方が良いよ」

「あっ？　ッ！？」

どういう事かを尋ねようとしたジャック・コーヴァスは、スザク・フレアの言おうとした事を瞬時に理解した。及び、その場から離れる。

彼女の背中の羽から陽炎がわき上がる。まぁ、炎の羽なのだから陽炎が出る事自体はおかしくないのだが、それは普段出ていない。それが出ているという事は、何かがあるという事。そして先程のソラの言葉から考えるに……。

「……ブースト！」

ズゴォォォォォ！！！

彼女の言葉で、背中の羽から炎が後ろに噴き出る。それはロケットの噴射のように爆発的な推進力を与え、ウイルスの壁を貫通した。炎孔の特性は、優れた突撃力にあるのだ。

「ジャック君！　今のうちに！」
「お、おう！　ペインヘルフレイム！」

分厚いウイルスの壁をあっさりぶち抜いたスザク・フレアに対し驚いていたが、ジャック・コーヴァスはすぐに行動に出る。彼の両腕に紫の炎が纏われ、前に突き出される。その途端、５０センチ以上もある紫の炎が陣形の崩れたウイルスに襲い掛かる。

ズドドドドドッ！！！

その後にはウイルスの姿は全く無く、ウェーブロードと皮肉なくらいの青空が広がっていた。
煙が収まり、視界が晴れる。

「よっし！　……えっ。……アレって……」

スザク・フレアは、もはやクセとなっているガッツポーズを取っていたのだが、途中で声が消える。ソラは山育ちだから目は比較的良い方だ。自身もそれを自慢の一つとしていたのだが、その時ばかりは良いとは思えなかった。

「どうした？」

訝しげに尋ねるジャックに、ソラは静かに前方を指差す。ジャックは少し目を眇めてようやく見えたようだ。そして、気付いたらしい。

「ッ！！　おいおいアレって……」
『コピー製造マシンってやつだな』

ジャックの驚きをコーヴァスが引き継ぐ。そう、彼らの見たものはウォーロックコピー製造装置。いつまでもゲイル達が侵攻できない理由である。

第６７話　女神と悪魔（後書き）

やっぱり規模が大きい戦いって書きづらいですね。最初の所が気に入らなくてまとめて消す事が多かったです。次回はウォーロックコピーが強くなります。どうやってかは今回の話にチラッと出てますよ。分かりますかね？

第６８話　どっちが悪役？（前書き）

何か最近めっさ進むな～。……嬉しくて楽しいからかな？　感想をくれると嬉しいって思えるし。それに、オレの書いている小説の単語がクイックロッドさんの小説に出たってのも、嬉しい＋今後の展開が楽しみですからね♪

第68話　どっちが悪役？

「……ウォーロックコピー製造マシン？」

ツバサはジョーカーと共に戦いながらソラの報告を聞く。まだ彼女とジャックは上空で電波変換しているらしい。

「そう。どんどん出てるよ」

ツバサは自分に遅い来るコピーを細身の槍で払いながら思考にふける。ちなみに、彼の槍はこの国の武器同様に相手と反対の波長をぶつける事で倒す武器。少し違うといえば、国の人が持っている武器がハンターの操作で波長を変えるのだが、ツバサの武器は彼の膜の波長の変化を読み取って反映するという物だ。

「ソラ、方角は分かるか？」

「あ、うん。……え～っと、（街があっちで、太陽の沈む方が西だから……）北の方」

「あ、あぁ。そうか」（さっき小声で不安な考え事が聞こえたのですが？　……もしかしてこいつ……方向音痴？）

とりあえず優先順位としてはコピーの方が先と判断し、気持ちを切り替えて暁に連絡する。ジョーカーにも目配せをして、彼にも聞いてもらう。

「暁、北の方にウォーロックコピーの製造マシンがあるらしい。オメガレーザーで破壊できるか？」

「コピー製造……なるほど。このコピーの大群はそのためか。アシッド、距離を計測してくれ」

『分かりました。……ダメです。確かにその様な装置はありますが、距離がありすぎて届きません』
「ジョーカーは？」
アシッドの答えを聞いたツバサは後ろで拳を振るうジョーカーを尋ねる。ウォーロックコピーを打ちのめしたジョーカーは首を横に振った。
『アシッドと同意見だ。ここからでは私のグレイブメテオレーザーは届かない』
「そうか。……まぁ、ライラからの通信だとオレ達が加わった事で少しずつ進んでいるからこのまま攻められれば――」
そう言いながらウォーロックコピーに槍を突き刺す。だが、紙一重で回避された。それ自体はすぐに対応して、突く動きから払う動きに変えてなぎ払う。コピーは霞のように消え、倒せたは良いが疑問が残る。先程までコピーは回避する事はしなかった。ただ進軍するだけで、まるでそれしか学ばなかった子供のように……。
ここまで来てツバサはハッとしてライラに連絡を入れる。
「おいライラ！　調べてもらいたい事がある！」
「何よいきなり！　びっくりするじゃない！」
ライラは先程までアイリスと話していたのだが、ツバサはアイリスが協力しているとは知らない。アイリスの要望で、黙っていてと頼まれたのだ。
ツバサは謝ることはせず、続けた。今は余裕が無い。
「コピー共が何かしらで繋がっていないか調べてくれ。か細い電波

でも良い」
「別にそのぐらいなら良いけど……確かにあるわね。それがどうしたの？」

その電波は全てのウォーロックコピーに繋がっており、小規模ネットワークを思わせる。
ライラの中では、その電波は指示を出すものだと言う認識があった。しかし、ツバサの場合は違う。彼は、スバル達を含めて全員に連絡回線を開いた。

「コピーたちの動きが良くなっていると思っている者、それは正解だ。あいつらは互いに細い電波で繋がっている。おそらく、倒された時の状況……言ってしまえばパターンを記録してそれぞれが共有しているんだろう。いわばあれは、成長する兵器だ！」

その事に全員の動きが一瞬止まったが、すぐに持ち直す。スバルは要約をしてツバサに問う。

「それじゃあ、僕達がコピーを倒せば倒すほどあいつらは強くなるの？」
「そういう事」

自身の分身が倒されることでその情報を全員が共有・成長する。そして、無限に生み出されるコピー……。この組み合わせは最悪だ。長引かせれば長引かせるほど危険となる。なお、短期決戦を挑もうにも彼らのポテンシャルからしてワンランクの成長は止められない。一度に倒す方法として何代か前の兵器である『核』があるが、この乱戦状態では使えない。仮に国まで退避してそこから撃ったとしても、国に被害が出る可能性がある上に、全滅できる保証は無い。一斉に退却したら何かあると思うのが定石だ。コピーを操っているの

が頭カラの人間でない限り、成功はしないだろう。
だが、勝機はある。幸いな事に、ライラがアメロッパの軍事兵器を全て掌握したと言うので戦闘機の類が使えないだろう。そうなると、おのずと対空手段は先程のソラの報告にあったウイルスに限定される。ならば答えは1つ。

「ソラ、ジャック。ジョーカーも加えるから3人で落とせるか？」
「……まぁ、そうなるだろうな」
「待って！　それじゃあキミは1人に――」

ジャックは納得したようだが、ソラは違う。ツバサのそばからジョーカーが離れたら、彼は独りで戦わなくてはいけなくなる。ツバサは前方に槍を振るいながらソラの言葉を遮る。

「ゲイルの所に合流する。だから安心しろ、ソラ」
「……分かった。終わったら絶対戻るから」
「おう。……ってことでジョーカー。悪いけど行ってくれ」

ツバサは顔を向けずにジョーカーに語りかける。彼が後ろで頷いたのが気配で分かった。

『うけたまわった。……ツバサ』
「ん？」
『貴様は私とヨイリー博士を和解させたきっかけを与えてくれた。……死ぬな』
「だ～からそう簡単には死ねないって」

真顔で死ぬなと言われると不吉でならない。映画で言うと、友人に死ぬなと言われて結局流れ弾か何かで死ぬと言う『死亡フラグ』確定だ。「早く行け」と言わんばかりにツバサはジョーカーを手で

払う。

『……私は犬ではない』

ジョーカーは自身の周波数を空気中の電波と同調してジャック達の元へ移動した。……しかし、ジョーカーのツッコミとは珍しいものを聞いた。

『ガァァァァ！』

「っと！　……これは早くゲイルに合流した方が良いかもな」

ツバサはそう言いながら自分に襲い来るコピーを倒し、ゲイルの下へ歩を進める。

――――アメロッパ司令室――――

「もうすぐコピーの第二成長の時期です」

「分かった」

部下の報告を受けた責任者は憮然としたため息をつく。

「最初に軍の兵器を掌握された時はどうなるかと思ったが、杞憂だったようだな。この兵器の力がこれほどとは」

「しかし、大統領はどこからこの兵器の事を……。それに、なぜ今になって……」

部下の思考は、責任者の笑い声で遮られた。

「わっはっはっはっは！　下の者が上の者の考えを疑っては軍ではやっていけんぞ」

「しかしっ……！」

「大体奴らは【　犯罪者　】だ。犯罪者は罰して良いのだろう？　どうせ奴らには血も涙も無い。我々とは違う生き物なのだ」

「……はい」

人間というのは中々に狡いもので、自分の認めたくない存在に対して自分と同じとは思いたくないらしい。方法や態度、様々な事をその者と違うように振る舞い。場合によっては相手を自分と同じ『人間』とすら見なくなる。

その理由は今作者が知っている中では2つある。

1つ目は単純に相手が気に入らない場合。相手のどこかしらが気に入らなくて、それが増幅して、相手を傷付けるようになる。その時にこう思えば楽だろう。「相手は自分と違う。相手の事を人間と認めない」そう思えば、傷つける事の罪悪感は無くなる。1人で否定する事が出来ないなら、集団になってその者を否定する事もあるだろう。

また、戦争において相手の事を人間ではなくその辺に転がるゴミと考えさせて、殺しの感覚に慣れるまでの罪悪感を無くさせるというのも聞いたことがある。

2つ目は、相手が社会的に『悪』と呼ばれている者に対してだ。俗に言う犯罪者などがそれに当たる。説明するよるりいきなり例を出したほうが手っ取り早そうだから例から入る。

彼らは自分達と同じではない。そう思わなければ、自分達の中にもあのような『悪事をなす危険な存在』がいる事を認める事になる。

それは恐いし嫌だ。認めたくない。

つまり、一種の線引きだ。本来なら以前述べたメディアの話も絡んで話したい所だが、本気で語ると冗談にならないくらい長くなるので本編に入る。

――――スバルの方――――

スバルは通信状態を続行している。何のことは無い。切り方が分からないのだ。今まで通信は、向こうから勝手にかけてきて向こうから切っていたので、スバルとしては切り方が分からず、たくさんの人の声が頭の中を巡っている状態だった。

「はぁ～～～。これ、どうやって切るんだろ？」

『けど、そのおかげでツバサの事も聞けただろ？』

「うん。まぁね」

ウォーロックの言う通り、たくさんの音の中からツバサやソラの声が聞こえた。その内容は、ソラ、ジャック、ジョーカーの少数精鋭によるコピー製造マシンの破壊。ツバサはゲイルと合流するというものだ。ツバサとゲイルの事だから一度合流してしまえばまず彼らは負けないだろう。ならツバサが合流するまで、彼を護ろうとし

ているのだ。おまけに通信の切り方も教えてもらう。

「う～耳が痛いよ～」

『ミソラ、もう少しよ。頑張って』

ミソラの電波変換したハープ・ノートは音を武器に戦う。逆に言えば、周りの音に敏感だったりする。スバルとハープはそんなミソラを気づかいながら進む。

『……来損だったかね～？』

「えっ？」

ウォーロックがため息をついている。ちなみに彼の『来損』とは、『来て損した』の略であろう。

彼の指差す先を見ると、ツバサはすでにゲイルと合流していた。

「まぁまぁ、ロック君。無事だったんだから良いじゃない。……それに、そろそろ頭も痛くなってきたし……」

ハープ・ノートはウォーロックを励ましていたが、痛そうに頭を抑える。スバルとウォーロックは顔を見合わせ、ツバサとゲイルに大声で声をかける。

「おぉーい！　２人と……も……」

スバルの声は途中で掠れていって、最後には消えた。

振り向いた２人は、自分達の知っているツバサとゲイルではない。見た目は同じだが、彼らの出している殺気は異常だ。２人の皮を被った別の存在と思えるほどに、自分達の知っている２人とはかけ離れていた。

ホワイトの方は髪の一本一本まで殺気が行き渡り、髪が風でなびく度に、その殺気が周辺の大気に溶け込んで、近づく者の足を竦ませる。

ツバサの方は、彼の黒目に普段のような飄々とした光は無く、永遠の闇を思わせて見る者を不安にさせる。目を合わせれば、彼の黒目と凝縮された殺気に飲み込まれて自我を失いそうだ。

近くに来たミソラやハープ、ウォーロックまで息を飲んだのが分かる。モニターと現実では、ここまで違うのか。ツバサは静かに槍をスバル達に向けて構える。味方なのに、思わず身構えてしまった。彼の投げた槍はスバル、ミソラ、ウォーロック、ハープを通り抜ける。

『ギャア！』

その後ろを見ると、自分達を襲おうとしたウォーロックコピーが槍で貫かれ、消えていく光景が瞳に映る。彼が狙ったのは自分達ではなく、後ろのウォーロックコピーだったのだ。

「お前らなぁ、４人で戦場を歩き回るとマジで死ぬぞ。暁はどうした？」

いつも聞いている気軽で飄々とした声。呆れたような声に、スバル達は振り返る。そこには、予想通り腕を組みながらスバル達を呆れているツバサがいた。彼の瞳に光が見える。自分達の知っているツバサだ。

とりあえず、彼に問われた事に答える。

「キミの事を通信で聞いて、せめてキミがゲイルさんと合流するま

で僕達が加勢しようと思ったんだけど……」
『必要は無かったようだな』
「当然。元々1人で闘って来たからな。単騎のほうが慣れている」
ツバサが言葉通り当然と肩を竦ませて見せた所に、ハープが若干怒りながら話しかける。
『男同士の友情に浸っている所悪いけど、PGMの通信はどうやってきるのかしら？　ミソラに何かあったら責任取れるんでしょうね？』
「……つまり、死なせたら全国のミソラファンを敵に回す事に……」
『そういう事ね』
軽い口調で言っているが、本人の出しているオーラからして冗談には聞こえない。ハープ・ノートは音を攻撃の基点にするというのはサテラポリスの資料で見た事があり、それが逆に彼女に負担をかけている事に気付いたツバサは、通信を切る方法を教えた。
「通信が切れる事を望めば切れる」
「「『『はい？」」』』
あっさり言ってのけたツバサに対し、スバル、ミソラ、ウォーロック、ハープが素っ頓狂な声を上げる。及び、ハープはミソラをスバルに預けてツバサに掴みかかる。
『そんな事で通信が切れたら医者は――！』
「あ、ホントだ。治った」
『……えっ？』
「僕も治ったよ」

ミソラ、スバルの順で治った発言をされて、ハープは居心地悪く手を離した。ツバサは聞こえない単位でため息をついて理由の説明をする。

「ＰＧＭは言ってしまえば電脳物質だ。そしてお前らは電波人間。電波化している以上、ＰＧＭとお前らが分かれて存在しているなんて事はないだろ？」

「……つまり、電波化している以上僕達とＰＧＭは１つの存在で――」

「私達の意思で通信とか、色んな事を出来るって事？」

「そういう事」

スバルとミソラの言葉にツバサは頷いた所に、今まで周りでウォーロックコピーを倒していたゲイルが飛び掛ってきた。

「みっそらちゃ～ん！　その姿も可愛い――」

ズッドーン！

ゲイルはハープのアッパーカットを食らって吹き飛んだ。ツバサは怒りからくる感情で彼を踏みつけたかったが、それを必死に堪えて、これ異常無いくらいに呆れた顔で彼に声をかける。

「お前なぁ……こういった場くらいそれを耐えられんのか？」

「え～だってミソラちゃんのあの姿は男として反応するでしょう普通？」

「お前の中で普通ってのはいきなり襲い掛かるって意味なのか？」

「いやいや、さっきまで真剣そうな話をしてたから耐えてたの。そ

れが終わったから話かけたの」
「ずっと耐えてろ――――！！」

とうとうツバサが切れて、2人で追いかけっこが始まった。その後、2人は追いかけっこをしながら自分達に向かってくるウォーロックコピーを倒している。……いや、正確に言えば、ツバサがゲイルを追いかける際に、目の前にいるコピーをなぎ払っているのだ。
逆に、コピーは彼らから逃げている。ある程度成長したらしく、『恐怖』というのも生まれたようだ。ブチ切れたツバサに怯えて逃げている所へゲイルが逃げてきて、そのままツバサの手によって壊滅されている。

その様子を見ているミソラとスバル、ハープとウォーロックは互いに言葉を交わす。

「……スバル君、なんか、コピー達がかわいそうに思えてきたよ」
「……僕もだよ」
『どっちが悪役かしらねぇ～』
『……それはそうと、さっきからオレが八つ当たりでデリートされているみたいで気分が悪いんだが……』
「「『どんまい」」」

最後は凹んでいるウォーロックの肩に3人で手を置いた。

「待たんかコラ――――！！！」
「あははははは！　あれ？　見てツー君、ウォーロックコピー達が自分を生み出した装置の方に向かっているよ？」
「そんな事に騙されるとでも……ホントだ」

ツバサは思わず足と手を止め、スバル達もコピーを生み出してい

る装置の方角を見る。

『……確かに集まってんな。……ん？　おいスバル、アレなんだ？』

「どれ？」

『アレだよ。ほら、ウェーブロードの上』

ウォーロックの目線にあわせて指差す方向を見ると、確かに何かある。一見火の玉のようだが、この距離であの大きさだと直径１．５ｍ近くあるだろう。その火球は装置に向かい、コピー達はその火球に突撃する。まるで、自らの命と引き換えに生みの親を護るように。

その光景を見て、ミソラはスバルの腕にしがみ付く。

「……スバル君。アレ、ソラさんかな？」

「たぶん」

「どんな気持ちなんだろ」

「……謝っているだろうな。……アイツ、優しいから……」

スバルとミソラの会話にツバサが加わる。直後、装置は大きな音を立てて崩壊した。

第６８話　どっちが悪役？（後書き）

それでは次回もお楽しみに！

第６９話　天上の戦い（前書き）

連休最後の更新です。

この話を読む前に、前話の『第６５話　どっちが悪役？』を読む事をオススメします。活動報告にも書きましたが、最後の所を追加しました。その部分はこの話と繋がっています。

第６９話　天上の戦い

ツバサがゲイルの下へ合流しようとしている時、ロックマンとハープ・ノートが彼の加勢に向かっている時、上空では空中戦が繰り広げられていた。

「チッ！　何てしつこさだ！」

ジャック・コーヴァスは自身の羽を鎌のように変える技、『フェザーシックル』で進行方向のウイルスを切り捨てる。しとめ切れなかった奴は、先程まで自分を追いかけていたレーザーがデリートしてくれるだろう。

ソラ、ジャック、ジョーカーは『ウォーロックコピー製造マシン』を破壊する事になったのだが、現在ウイルスの大群に妨害されているのだ。

主なウイルスは、戦闘機のような形をしたウイルスの『ステルス』。その名の通り、相手の視覚に映らずに移動でき、予期しない場所からレーザーを放つ特徴を持っている。

もう１つは『バルカナ』。固定砲台のような物で、単発の砲弾ではなくマシンガンを放つ。言ってしまえば『質より量』という攻撃スタイルである。

まぁ、ジャックは飛べるだけマシかもしれない。ジョーカーに飛行能力は無いので、彼はウェーブロードの上で攻撃にも防壁にも使える『ギガントビルディング』で身を護りながら戦っている。通常なら、多少のダメージを気にせずに力で捻じ伏せるのが彼の戦闘スタイルだ。だが、今回は数が多すぎてうかつに突っ込む事はできない。

ジャックとジョーカーは苦戦を強いていた。……ならソラはって？　彼女なら……。

「三の舞、不知火！　五の舞、炎翼！」

三の舞のムチで敵を絡め、引き寄せ、五の舞の剣で切りさく。状況を一言で言えば、圧倒的という言葉に尽きる。

ジャックは一度ジョーカーの居るウェーブロードに下りて、ジョーカーの後ろをカバーしつつソラの方を見た。

彼女は6枚ある羽を活かした鋭い小回りで敵の攻撃を回避。正面から撃ってきても、急上昇、または下降により敵の上下から火炎を食らわせる。後ろからの攻撃はスザクが教えて急上昇。攻撃を避けると共に、満月を背中で滑るように円を描きながら、ウイルスを後ろから断ち切った。

彼女の戦い方を見て、ジャックは独り言に近い心境で率直な感想を言う。

「おいおい、アイツいつの間にあんなに強くなったんだ？」

『……戦い方を教えてくれと言われてな』

「お前が引き受けたのか。……いや、だからってあの強さは異常だ」

先程見た彼女の新しい技、『炎孔』のように、『技』だったら割合覚えるのは早い。しかし、身のこなしや、自身と電波変換している電波体の力を活かすとなると、そう簡単にはいかない。そればかりは場数を踏むか、天性の才能しかない。

『……ジャックよ、ソラが星河スバルと同等かそれ以上のバトルセ

ンスを持っていたと言ったら、信じるか？』
「……んなことあんのか？」

星河スバルのバトルセンスの良さはディーラーに居た頃から知っている。最初に認めたのはウォーロックで、その後は暁やヨイリー、ジョーカーやジャック自身まで認めているくらいだ。そんな奴が早々いるわけがない。ジャックはそういった思いでジョーカーの言葉を信じられずにいた。しかし、ジョーカーは珍しく苦笑して見せる。

『フッ。……無論最初は私が勝っていた。……だがな、回を追うにつれて戦闘自体に慣れていったのだ。その結果、見事に追い抜かれてしまったよ』

スバルの場合、才能もあるし場数も踏んでいる。だが、ソラはつい最近戦う力を得た者。いわば戦闘においては初心者。戦闘に関して、今までジャックの抱いていたソラの印象はそんな所だ。しかし、もしもスバルに負けないほどの才能がジョーカーとの訓練で開花したとしたら、答えはおのずと変わってくる。

「……マジかよ」

ジャックが驚いたのは2つの事。1つは、ソラの戦闘の技術が爆発的に上達したという事実。もう1つは、ジョーカーが悔しそうに笑った事実だ。ディーラーに居た頃のジョーカーは、いつも不遜な顔をして自らの表情を変えなかった。笑う事が増えて来た最近でも、悔しがるような笑みというのは初めて見た気がする。

コーヴァスは不本意そうに補足を加える。

『おまけを言えば、アイツを作ったのがエーテルってのもあるかもな』

「どういうこった？」
『それは……だな……』
『つまり、電波体の基本能力の差だ』《……まぁ、ツバサのためにという思いが大きかったのだろうがな》

コーヴァスの言いにくかった所をズゲッと容赦なく言ったのはジョーカーだ。つまり、その辺のウィザードよりもエーテルの作ったウィザードの方が強いという事だ。ケンカの腕に自信を持っていたコーヴァスとしては嬉しいわけは無い。
……超現実主義（シュールレアリスム）。その言葉を、ジョーカーに進呈したいと思う。

冗談はさておき、攻撃や回避に忙しいソラの代わりに、その相棒のスザクがジャック達に向かって声を張り上げた。

『こらそこ！　ソラ1人に戦わせるなんて男として恥ずかしくないの！？』
「ス、スザク、耳元でそんなに声を張り上げなくても……。はっきり言ってうるさいよ」
『あ、ゴ、ゴメン』《う～……。ソラって本気で怒ると女将並に恐いのよね～》

ソラはスザクにしか見えないように自身の怒っている顔を見せた。それに対してのスザクの反応は上の通りである。
スザクが静かになったのを確認したソラは、ジャック達に顔を向けるまでに怒った表情を変える。そして、とある提案をした。

「このままウイルスと戦っていても埒（らち）が明かない。だったら、私達の一番の技を叩き込むってのはどう？」
「でも、それだと隙ができるぜ？」

確かにジャックの言う通り、大技というのは隙が大きいものだ。その隙を攻撃されたら元の子も無い。そんなジャックの懸念を、ソラは軽く打ち破ってみせる。

「だからさ、1人が自分の技を放っている間にもう1人がウイルスの攻撃を防いで、最後の1人が自分の攻撃の準備をするってヤツ」

『……波状攻撃か』

ジョーカーの言葉にソラは頷く。つまり、一人目が攻撃。二人目がその援護。三人目が次の攻撃の準備という作戦だ。その昔、どっかの武将が使った戦法と似ている。その時は火縄銃だった気がする。

（作者は歴史が苦手でね）

ジョーカーに異論は無いらしく、ソラとジョーカーはジャックを見る。凝視されたジャックは居心地悪そうにため息をついた。

「は～～。分かった分かった。……オレもそれで良いぜ。こんなんで失敗したらツバサのバカに笑われそうだしな」

『……ジャックよ。今まで疑問に思っていたのだが、何故そんなにツバサを嫌うのだ？』

そういえば旅の間も事あるごとに仲違いしていた気もする。そんな感じでソラも興味が沸いたのか、良く聞こえるように彼らの近くに来た。

またも2人から凝視されたジャックは先程と比較して1．5倍のため息をついた。

「は～～～。……笑うなよ？　……キャラ似てね？　口悪い所とか黒髪とか」

「『『『……つまり同属嫌悪』』』」

「笑うなぁ――――！！！」

ジャック以外のソラ、スザク、ジョーカー、コーヴァスが全く同時に同じツッコミを入れ、ジャックはそれに対し怒鳴り声を上げる。なお、別に3人は笑ったわけではなく、3人に同じ事を言われた事への八つ当たりだろう。おまけを言えば、最初に「笑うなよ？」と、言った時点で本人も自覚しているのは明々白々だ。

ドドドドドドドドドッ！！

ウイルス、バルカナの銃弾がジョーカーの作った壁を削る。あまり時間も無いらしい。何より、今地上でスバル達が相手をしているのは、長引かせればそれだけ強くなる兵器だ。

ジャックとソラ、ジョーカーは少し相談した後、3人は目を合わせて頷き合い、行動を開始した。

「まずはオレだ！！　ペインヘルフレイム！！！」

まずはジャックの『ペインヘルフレイム』だ。彼の攻撃の目的は機械への攻撃だけではない。機械の前に群がるウイルスを一掃する役割も持っている。『ペインヘルフレイム』の攻撃範囲があってこそ成せる技だ。

その狙いは的中し、ウイルスの大半が一掃。機械にも多少なりダメージを与えられた。……しかし、なおもコピーは生み出される。どうやらかなり丈夫に作られているらしい。しかし、その時のために彼がいる。

ソラのカバーにより、彼は十分な時間を得た。彼……ジョーカーは両腕の赤いノイズを前方に放出する。

『グレイブメテオ……レーザー！！！』

彼の最強の技、『グレイブメテオレーザー』を。ジョーカーの極太レーザーが機械に当たる寸前、何かに防がれる。ウイルスがやられた時のために用意していたと思われる電波のシールドだ。しかし、自身の攻撃を防がれたジョーカーは落胆する事なく、むしろ不敵な笑みを浮かべる。

『フッ！　その程度で防げると思っているのか！　フォォォォォ！！！』

彼の声と共にレーザーの出力は上がり……。

バシュンッ！

何かが弾ける音と共にレーザーとシールドは相殺した。シールドの事は想定の範囲だ。ジョーカーの役割は、機械の破壊、またはそれを防ぐシールドの破壊が役割だったのだ。そして、シールドというものは一度消滅したら一定時間はよみがえらない。つまり、次に出す攻撃がジョーカーの『グレイブメテオレーザー』並みに強力なら、装置の破壊は可能だ。そしてそんな攻撃を行える人物は……。

『今だ！　ソラ！』

ジョーカーの声にソラは頷く。

「分かった！　六の舞……」

ソラは両手を上に上げて、彼女の手の平に炎が集まる。いや、『集まる』よりも『収束される』の方が正しい。それほどまでに勢い良く、炎は収束されている。その大きさは見る見る膨れ上がり、去年スバルが戦ったというアポロン・フレイムの『サン・フレア』並みの大きさとなる。その名の通り、太陽を持ち上げているようにも見える。そして、彼女の技の名は……。

「……炎獄」

静かに紡いだ声とは裏腹に、火球は轟音を立てながら突き進む。その進行方向にウォーロックコピーが立ち塞がり、突進する。

ボゥ……

『炎獄』の火力は並ではない。コピーは一瞬で消滅した。だが、それで終わらず、装置との距離が短くなればなるほどコピーの数は増大し、複製の命は消えていく。戦場のほとんどのコピーが集結しているらしい。

「……お母さんを、護りたいのかな？」

『……ソラ、大丈夫？』

俯いたソラをスザクが気づかう。

ソラの顔は悲しみと罪悪感で満ちていた。。彼らは複製の命かもしれない。だけど、自分の生みの親である装置を護ろうとしている。それが例え、開発者が「いざという時は装置の盾となれ」とインプットしていたとしても、今、ソラは彼らの生みの親を壊そうとしている。……その事に変わりは無い。

ソラは顔を上げ、心の底からウォーロックコピー達に謝った。

「……ごめん。キミ達のお母さん……殺します」

ソラはあえて『壊す』ではなく『殺す』を選んだ。機械であろうと、生みの親には違いないから。

ズドドドドドゥゥゥゥゥ……

隕石が落下した時のように、火球は装置にめり込み、破壊し、焼き尽くし、周囲の大地ごと粉砕していく。幾万もの複製の命と共に……。

炎によって熱せられた空気が風に乗って飛んで行き、空気が澄む。ジョーカーはソラとジャックに話しかけた。

『……スバル達の下へ戻るぞ』

「ああ……」

「……うん」

2人は応え、3人は地上に降りる。地上に降りた後、ジョーカーとジャックは暁への報告に。ソラは終わったら戻るという約束を果たすためにツバサの元へ向かう。

「ツバサ～。お待た……せ？」

ソラはまだ電波変換している。ぶっちゃけ飛んだほうが早い。彼女の語尾が疑問系だったのは、ゲイルが今までででもっとも酷い仕打ちを受けていたからだ。ツバサはともかく、ハープやウォーロックからも袋叩きにされている。スバルとミソラは何とか止めようとしているようだが、全く3人には響いていない。いや、ウォーロックには聞こえているようだが、ハープに睨まれて無理やり加わっているらしい。

ソラはミソラに尋ねた。

「……何事？」

「あ、ソラさん。実はゲイルさんが……私のおしりを……」

ミソラの言い辛そうな顔と、スバルの顔が強張った所からして、ゲイルからドサクサ紛れにセクハラを受けたらしい。スバルも袋叩きに加わりたかったのだろうが、ギリギリ理性の方が上回ったらしい。

ソラは大きく息を吸い、ツバサ達に呼びかける。

「蹴り方甘いぞ――――！！」

「……あの、ソラさん？」

「スバル君、キミも好きな人がそんな目に遭ったのにそんなに落ち着いてて良いの！？」

力説し始めたソラに対し、スバルは自分なりの加われない理由を話す。

「でも、僕今電波変換してるんで本気で蹴ったら命に関わりますし……」

「大丈夫！　本当に怖いのは運動部に入っている人だから！」

「……そういう意味でなくて……」

スバルが言いたかったのは電波変換時の身体能力の上昇の事だったのだが、彼女はその部分をあえてスルーした。まぁ、これほど勢いの良い問答が繰り広げられれば嫌でもこの人も気付くというもので……。

「ソラちゃんその姿天使みた～――」

ボォォォォォ！！

脱兎の如く抜け出したゲイルはソラに向かうが、彼女には無敵のボディガードことスザクがいる。

『ソラに近づくな下衆(げす)！』

スザクの中でも、ゲイルは晴れて徹底的に警戒すべき存在という分類を得たようだ。ツバサ達の方はゲイルに抜け出されてからソラが戻っている事に気付いたらしい。ウォーロックとハープは居心地悪く苦笑し、ツバサは気持ちを切り替えるようにセキを1回した。

「おほんっ。……お疲れさん」

「……うん」

ツバサとソラは互いに向き合う。ツバサは先程までゲイルをぶちのめしたから居心地悪く、ソラは別の理由で笑みを浮かべていた。

「え～っと、僕お邪魔？」

『現在進行形で邪魔』

ゲイルはちょうど位置的にツバサとソラの間にいる。静かにそこから抜け出れば良いものを、わざわざ声をかけたが故にスザクから辛辣な一言をもらってしまった。

その場は和やかな苦笑で包まれ、全て終わったかと思われたが……。

『これで終わりか。つっまんねぇな～』

どこからかラフな声。本人に失礼を承知で言えば教養のなっていない言葉使いが聞こえてくる。始めは全員空耳と思っていた。しかしスザクの反応で、それは空耳ではない事が実証された。

スザクは周りを見渡している。

『ッ！？　ビャッコ！？』

『よぅスザク。風の噂で死んだって聞いたが……でも無かったようだな。元気そうで何よりだ』

以前姿の見えないビャッコに対し、スバルを始め全員は警戒し、ソラはスザクに話しかけた。

「ねぇ、ビャッコって？」

『私と同じようにエーテルに作られたウィザードの一角』

普段強気なスザクの説明が少ない所からして、彼女に余裕は無い。それは得てしてビャッコの戦闘能力が高い事を意味する。

「元気そうで何よりって言ったのは？　もしかしたら僕達と和解できるかも」

現にスザクはソラと信頼関係に結ばれている。ビャッコは先程、スザクの無事を良かったと言った。ならば、彼もスザク同様和解が可能なのではないだろうか？

そんなスバルの希望を、スザクは冷静に否定した。

『悪いけど、アイツは抜群に戦闘マニアって言うぐらい戦闘好きだから、スバル君の思っている事はアイツに届かないと思う。頭に血が上ると言葉も荒くなるしね。……キャラ的には、暁さんみたいな気さくな兄さんに戦闘マニアを加えたようなもんかな？』

スバル達の中でビャッコがどんなキャラか納得した時、ビャッコは愉快気に笑う。

『ギャハハハ！　暁ってのが誰か知らねぇが、オレの事を良く分かってんじゃねぇかスザク！　……あぁ、オレは根っからの戦闘好き！　このままじゃつまんねぇ！　全員オレと戦え！！！』

言い終わると共に、ゲイルに白い光が降り注ぐ。

第６９話　天上の戦い（後書き）

戦闘は最低でも２話に分けます。それではお楽しみに！

第７０話　２００年前の剣士（前書き）

本当にお待たせしました。戦闘は3話以上に分けられる形になります。今回の投稿は2話です。

第７０話　２００年前の剣士

白い、ビャッコの電波変換時の電波が霧散した時、そこには獣人を思わせる者がいた。

全体的な色は白。間接部分は黒だ。腕には流線型の鎧が付けられており、先の方は獣の爪を思わせる鋭い爪が４本煌く。

そいつは息を吐くと自身の姿を見る。

『へぇー。こいつの腕に装備されていた爪の電波（リアルウェーブ）がオレとの電波変換で突然変異を起こしてこの爪が出来たのか』

その声はゲイルのものではない。つまり彼の意識は完全にビャッコに飲み込まれたという事になる。その事に一番驚いたのはツバサだった。

「……ウソ……だろ？」

無論スバル達もゲイルに降り注いだ災厄に驚いていたのだが、ツバサの驚きようはそれ以上である。彼は理解が早いので、呆れるか、余裕をすぐに取り戻すかだ。驚き続ける事は早々無い。彼が数秒驚き続けているのは、今回が初めてかもしれない。

スバル達の驚きがまるで見えないかのように、ビャッコはスバル達の方を指差して数え始めた。

『あ～っと、ひいふうみぃ……４人か。悪いがオレは少人数対少人数が好きなんでな、お前らを分けさせてもらう。……はぁ……おらぁ！！！』

力を溜めて、ビャッコは思いっきり腕を振るう。直後、すさまじい風が巻き起こった。

「うわぁ――――――!!?」
「きゃ――――――!!?」
『スバル!!』
『ミソラ!』

ロックマンとハープ・ノートは吹き飛ばされ、ウォーロックとハープは飛ばされた2人を振り返る。

「ッ!! ウォーロックとハープはスバルとミソラを追え! 合流したら暁達に連絡! 近くにいる国の奴らも下がらせるように言ってくれ!」
『あなた達は!?』

ツバサの指示にハープが反論する。その反論にはソラが答えた。

「ここはあたしとツバサ、スザクで足止めだけでもしてみる。ハープちゃんとロック君は2人の所に行ってあげて!」
『……分かったわ。行くわよウォーロック!』
『オレに命令するんじゃねぇ!! ……お前ら、くたばったら承知しねぇぞ』

ウォーロックの言う『お前ら』とはツバサとソラ、スザクの事だろう。ウォーロックとハープは、半ばケンカしているようなテンションで飛ばされた2人を追いかけた。

「……さて、後は――」

「アイツを――」
『倒すだけね！』

ツバサ、ソラ、スザクの順で言葉を繋いで、１つの文章を作りながらビャッコを見る。ビャッコは待ってましたといわんばかりに飛びかかる。

『やってみろや――――！！！』

――――スバル側――――

「……ハッ！　ここは！？」

目覚めたスバルの前には荒野が広がり、ツバサもソラも、ビャッコもいない。

『……やっと目が覚めたか』

横からウォーロックの声が聞こえる。スバルがそっちを見ると、先程まで心配しきっていたと思われるウォーロックがいた。なお、心配していたかどうかは声のテンションで分かる。

「……ウォーロック、ここは……」

スバルの問いに、ウォーロックは項垂れて答えた。

『……ビャッコとかいう奴にお前とミソラは吹き飛ばされたんだ。

いま、ツバサとソラが戦っている』
「ッ！！　大変じゃないか！　すぐに2人の所へ向かおう！　ミソラちゃんは――」

スッ

上体を起こした時に伸ばした指先に何かが触れる。そちらを見ると、ミソラ（電波変換は維持）が目を閉じていた。状態を聞く前に、ハープが説明してくれた。

『……地上に落ちた時に思いっきり打ったらしくて、気絶しているわ。大丈夫だとは思うけど、目覚めるまでは動かさない方が良いわね』
「そんな……」
『……スバル、ツバサとソラの所へ行くぞ。ミソラはハープに任せれば良い』
「ッ！！　ウォーロックはミソラちゃんの事が――！」

ウォーロックの言葉は薄情に聞こえ、スバルはウォーロックを怒鳴るような声を出す。そして、スバルの言葉の続きはウォーロックが続けた。スバル同様、荒げた声で。

『心配じゃないわけねぇだろ！！　だがな、今一番危ないのはビャッコと戦っている2人だ！』

ミソラはハープが見てくれるが、彼らには味方がいない状態。ウォーロックは続ける。

『おめぇ……ミソラが無事ならあいつらが死んでも良いってのか！！！　お前らはもう何分も気絶していたんだよ！！！』
「ッ！！！」

ウォーロックの気迫にスバルはたじろぐ。文脈からして、スバルとミソラは吹き飛ばされて地面に打ち付けたショックで気絶。そのまま数分が経っていたらしい。
そんな2人を見ていられなくなったのか、ハープがスバルに語りかける。

『スバル君、ミソラが大事なのは嬉しいけど、今すぐにあの子達を助けられるのはあなただけなの。ミソラは私が見ているから、ウォーロックと一緒に行ってらっしゃい』
「ハープ……うん！　分かった！　ウォーロック！」

目に力が宿ったスバルを見て、ウォーロックは喜びから減らず口を叩く。

『ヘッ！　ようやくらしくなったな！　さっきまでの戦いで、空気中のノイズはかなり溜まってる。すぐにでもノイズチェンジできるぜ。……それも、かなり早い奴みたいだ』

何となくだがそう思う。と付け加えたウォーロックを見て、スバルは心強さで笑みを浮かべる。
自分にはウォーロックや暁、ツバサといった、直接自分のそばに居てくれる存在の他に、サーバーの中にも味方がいる事を頼もしく思えたのだ。『今更ながら』、いや、『今更だからこそ』と言った方が正しいかもしれない。

「行こう！　ウォーロック！！」

『オウッ！』

スバルの力強い声にウォーロックが答える。直後、ロックマンの周囲にノイズが集まり、光飛び交う空間へと向かう。

「……ウォーロックの言っていた早い奴って誰だろう？」

『……貴様がこの時代のロックマンか』

「ッ！！」

後ろから声が聞こえて振り返ると、全体的な色は赤。白い長髪を後ろに流し、黒いバイザーを含めて、全体的に忠実で真面目なイメージだ。

スバルが驚いたのは、全く気配が感じられなかったからである。その驚きは顔に出ていたらしく、目の前のナビは『フッ』と笑って見せた。

『そこまで驚く事はないだろう。少しお前の力を試したかっただけだ。それと、オレの名前はブルースだ』

つまり、スバルの力量試しでわざわざ自分の気配を消して近づいてきたらしい。まぁ、ＡＭの三賢者からも試されたから試される事自体はどうという事はない。なので、特に不快にもならず、スバルは自分の自己紹介をする。

「うん。よろしく、ブルース。僕は星河スバル。……って、カーネルに聞いちゃったかな？」

『フッ。お前の事はサーバーの中では話題になっているぞ。サーチ

マンもナイトマン、キラーマンもお前の事を気に入ったそうだ。…キラーマンが【外に出て暴れて――――!!!!】と駄々をこねるのが困り物だがな』

そう言う割りに、彼がキラーマンに対しての言葉の中にはトゲが無い。みんな仲良くやっているようだ。ツバサにその事を言ったら喜ぶだろう。スバルがそんなことを思っている時、周りの色が霞み始めた。

「はやっ！　もう時間なの!?」

過去最高の対話時間の短さにスバルが驚いている反面、ブルースは冷静に分析していた。

『……なるほど。星河スバル、ツバサと離れすぎたな?』

「えっ？　確かにかなり離れていると思うけど、それが何か関係しているの?」

『関係しているも何も、あいつの・・Mはお前のP・・と共鳴して、打・し合う存在。だから、オレ達はこうやって・・と会う事が・・る』

「待って！　何を言っているのブルース!!」

周りが掠れると共に、彼の声も掠れて聞こえなくなってくる。

『忘・・な。ひ・・と・みで、体(たい)は・す――』

その言葉を最後に、周りに荒野が現れる。どうやら戻ってきたらしい。

今のスバルの姿はブルースに近い。相違点を言えば、髪はブルー

スほど長くなく、右腕には小さいシールドが装備されている。その盾は自分の身長ほど大きくなるという情報は頭の中にあった。

左腕には何も無いが、バトルカードを使わずともソードを転送可能という事も知っている。これまで通り、ナビ達はスバルに戦い方を教えてくれているようだ。

『……スバル？』

ウォーロックがスバルの顔を覗きこむ。先程のブルースの言葉も気になるが、今は2人を助けに行く事が先決だ。

「何でもないよ。行こう！」

『……オウ！』

ウォーロックは少し気になっていたようだが、追求しないでくれた。スバルとしてはありがたい。

2人は駆ける。もっとも、ブルースノイズのスピードに着いて来れなくなったウォーロックはハンターの中に引っ込んだ。

『……もうすぐだぜ』

「うん……。ッ！！　ツバサ君！　ソラさん！」

彼らには聞こえないとは思うが、叫ばずには居られなかった。ソラに攻撃が及ばないように、ツバサは彼女を覆うようにして庇い、それを容赦なくビャッコは踏みつける。何度も、何度も。強く、強く。

ビャッコの両腕の装甲が無い事からして、ビャッコも相当追い込まれたらしい。だが、今は立場が逆転している。暁達はまだ来ていないようだ。

『何していやがるスバル！　さっさと助けに行くぞ！！』
「ッ！！　うん！！」
スバルは自身の動揺する心を踏み越えて、盾を構える。盾はロックマンの前方を覆うほどに大きくなり、そのままスバルはビャッコに向かって突進した。
……友を助けたいという感情の他に、ビャッコに対する怒りが無いと言ったらウソになる……。

第71話　白虎

――数分前――

『おせぇおせぇおせぇぞ――――――――！！！』

ビャッコの爪がソラの『五の舞：炎翼』を貫き、彼女にダメージを与える。

ビャッコは早すぎる。ツバサがソラへのサポートとしてバトルカードを転送する前に、ビャッコは彼女に攻撃を加えているのだ。

ウイルスと違って、電波体や電波人間の場合、真っ二つに切られるというのはまずない。しかし、ダメージは確実に蓄積して、最後には消滅する。それが、電波体や電波人間の『デリート』だ。

「くっ！　きゃあ――――！！」

ボフッ！

吹き飛ばされたソラを受け止めたのは、柔らかい感触のモノ。

ビャッコが追撃しようと迫るのをツバサはダブルストーン＋ボムライザーという、障害物設置＋周囲を巻き込んで障害物を爆発させるコンボでビャッコを離れさせる。

そのままの足でソラに近づいた。

「悪い、大丈夫か！？」

「あ、うん。これは？」

ソラが指差したのは自分を受け止めてくれたモノ。大きさは２ｍ以上ある。

「あ？　あぁ、これは前に遊びで作ったぬいぐるみ型リアルウェーブ。まさか役に立つとはな……」

その様子からして、本当に役に立つとは思っていなかったらしい。ソラは普段のクセでぬいぐるみを撫でながら苦笑する。

『てめぇらオレを忘れてねぇか――――！！？』

忘れていた。

そんな２人の心の声は置いといて、事態は芳しくない。持ち前の脚力で一気に距離を詰めたビャッコはツバサとソラに鋭い爪を構える。

ソラは目を見開き、ツバサは彼女の前に出る。

ズンッ！！

切り裂いたにしては鈍い音。

『……てめぇ……その体……』

「あいにく、オレは化物でね」

ビャッコの爪は確かにツバサを捕らえていた。しかし、彼はデューオによって斬撃や銃撃などの傷つける攻撃は効かない皮膚を得た。

それで防いだのである。
ビャッコは少し驚いていたが、すぐに余裕を取り戻す。
『だが、体重はどうかな!?』
「なっ！　う、わぁぁぁ！！」
攻撃を防げても、そのまま力任せに腕を振りぬかれてしまっては意味が無い。体重が軽ければ踏ん張りが利かず、容易に吹き飛ばされる。
「ツバサッ！！　グッ！」
数メートル先に吹き飛ばされたツバサを見るソラの胸をビャッコが踏みつける。彼女が動けないようにするための固定用だ。
『ソラ！』
スザクはソラのハンターから彼女を助けに出るが、即ビャッコの爪で押さえられてしまった。
『まず、一人目だな。あばよ。スザクと、見ず知らずのガキ』
ビャッコはそう言いながら、残った腕をソラに向ける。爪で、頭をぶち抜くつもりだろう。
「ッ！」（……ごめん。キミ（ツバサ）が変わるまで一緒にいるって約束、果たせないかも……）
ソラは心の中でツバサに謝罪し、自身の運命を受け入れようとしていた。その時、戦場に似つかわしくない静かな声が響く。それで

いて怒りで満ちているような激しさが、その声の中に混じっていた。

「風よ。戒めの鎖となり、彼の者を封じよ」

直後、暴風が巻き起こる。ソラとスザクは驚いていたが、ビャッコはそうでもない。ビャッコは首だけで声のした方を向く。その先には、ツバサが肩で息をしながらビャッコを睨み、平手を向けていた。

『……へぇ～、あれを食らって立ってんのか。こりゃロックマン同様、狩りがいがありそうだ♪』

早くツバサと戦いたくなったらしい。ビャッコはすぐにでもソラに止めを指そうと思ったが、出来なかった。体が寸分たりとも動かない。

『何だってんだこりゃ！！？』

「……オレの力の１つ。……吹き飛べ！」

いつの間にかツバサはビャッコの近くに立っていて、勢い良く腕を横に振る。途端、ビャッコは文字通り飛んで行く。しかし、地面には落ちない。ツバサが振った腕を流れるように、持ち上げるように動かした事で風も変化。ビャッコを空中に固定した。内側に向かって空気を圧縮するように風を吹かせているのだ。

「……ツバサ……」

「悪い。また危ない目に遭わせちまった……」

『良いけど、この風は……』

「忘れていなければ後で説明する。今はそれ所でもないだろ？」

「……そうだね。分かった！　お礼も後から言うね。何をすれば良

い？」

本来なら言及したかった。だが、彼、ツバサへの信頼として、後に回したのだ。おそらく、お礼と共に聞く気だろう。それを察したツバサが苦笑しているのが雰囲気で分かる。彼の顔は見えないが、きっとそうだろう。

「オレが奴の動きを封じる。その隙にソラはでかい奴を当ててやれ」

声が微かに上擦っている。やはり苦笑していたようだ。そんな彼との会話で、ソラの気持ちは軽くなった。

「分かった。スザク、【 炎獄 】行くよ！」

『ＯＫ！　ソラ！　ツバサもこんなんあるならさっさと出しなさいよね！』

「……そうそう出せるもんじゃないんだよ……」

実際、この状況はシャレにならない。次に誰かを失いそうな時は結界などを気にせず魔法を使い、その人を護る。その事はイースター島で決意した。それは良い。

問題は、自身の魔力によって、次元を覆う結界に揺らぎが生じる事だ。飛王（フェイワン）・リードほどの魔術師なら、その隙を見逃すはずが無い。

――――飛王（フェイワン）・リードのいる次元――――

「フンッ。自らの結界に自らで揺らぎを作るとは、あの世界のクロウも甘い……」

飛王・リードが指を微かに動かす。それだけで、次元に割れ目が出来て、幾千もの羽根や兵が、次元を渡る。

飛王・リードの側近的立場の星火（シンフォ）が呟くような声を立てる。

「……彼は、自分の大事な者を護るために選んだのでしょう？」

「しかし、その対価がこれだ。……ローグはほぼ失敗だな。……まぁ、1つの国が手に入ったのだから、良しとするか……」

そう言いながら、飛王・リードは旅をする4人に目を戻す。

「……」

その高慢な態度に星火は眉を寄せるが、言葉に出す事はない。彼女も静かに、4人に目を向ける。

水面（みなも）に小石を投じるように、ツバサの強すぎる魔法は彼の結界に揺れを作る。それが歪みとなり、付け込まれる。

羽根1枚1枚なら力が弱いので、破れた所に入ってこられたら気付かない。だが、それを感じられるほど、多くの羽根やその他のモノが入ってくるのが感じられた。

「……」（……案の定、羽根やら何やら送ってきたな。……それでも、オレの選んだことだから……）

羽根で誰かの心が奪われるかもしれない。ならばその罪を背負おう。

ツバサは、『選んだ先』に何が待っているかを予想しながらも、それを選んだ。選んだ事で生じる事象を背負うために。……二度と、目の前から人がいなくなる光景を見ないために……。

ゴウッ!!

巨大な炎弾が轟音を立てながらビャッコに向かう。ビャッコを捕らえるための風に炎弾が当たり、内側に吸い込まれるように鋭く形を変え、ビャッコを襲う。

『グッ!!　ガァァァァァ!!!!』

ソラは断末魔付きの業火を前に気分が悪くなったらしい。気晴らしにツバサに話しかける。

「思いっきりやっちゃったけど、ゲイルさん大丈夫だよね?」

「大丈夫だろ。電波変換ってのは、よっぽど大きなダメージじゃない限り大事には至らん。それどころか良い薬だ」

ゲイルに対して辛辣な一言を言うツバサに対し、ソラは苦笑する。

「あはは……。じゃあ、何とか乗り切ったってやつかな?」

『たぶんそうじゃない?　あ~しんどかった』

ソラの安心したような声に答えるように、スザクも言葉使いが楽

になる。もう風を吹かせる事もないだろうとツバサは力を解き、2人に対してため息を織り交ぜた苦笑を浮かべる。

「まったくだ。しっかし、オレの一張羅どうしてくれるんだ！？」
「いや、君の服がボロボロになったのは私達のせいじゃないし」
『っていうかあんたの一張羅って私服なの？』
「……制服なんて着る機会もないし」
「『……図星かい　』」
『……ずいぶん余裕じゃねぇか……』
「「『ッ！！？』」」

地獄の底から聞こえてくるようなドスの効いた声。ビャッコは、文字通り火炎地獄の中から這い出てきた。足取りは少しだけふら付いているが、まだ電波変換は成されており、その目は殺気に満ちている。

ドサッ……

両腕に装備された巨大な爪は音を立てて地面に落ち、その下からビャッコ本来の手が現れる。飾り気が無く、簡素な爪は鋭い光を放つ。先程の大爪と比べて大きさも威力も遥かに劣るだろうが、器用さとスピードは格段に上がるだろう。
先程の大振りな爪がリアルウェーブによって作られたものなら、今の姿がビャッコ本来の姿と言える。

『さぁ、第2ラウンド開始と行こうか！！！』

言うが早いか、ビャッコは真っ直ぐに襲ってくる。

ズンッ！

「ガッ！」
「クッ！」
『ソラッ！』

爪で切るだけでなく拳で殴る事もできるらしい。ツバサとソラはビャッコの拳を受けて吹き飛ばされて地面を強かに打ちつけた。
幸いと言うべきか、ソラはまだスザクと電波変換したからダメージは致命傷ではないだろう。スザクはすぐさま、ビャッコに炎で牽制しながらソラの元へ向かう。
ツバサは出血自体しないので論外。受身さえちゃんとすれば、強く打ち付けても大事には至らない。

上体を起こしたツバサが数メートル離れたソラを見ると、今だ地面の上で呻いている。どうやら受身を満足に取れなかったらしい。いくら素質があっても、その辺は慣れしかない。
そしてそれを見逃すほど、ビャッコは甘くは無かった。

『さっきの空中戦を見た時はすげぇと思ったが、まだ戦闘自体に慣れて無いみたいだな！！』
『ッ！　ソラには指一本触れさせない！』

ビャッコとソラの間にスザクが割り込み、巨大な炎の壁を展開する。
しかしそれに臆さず、ビャッコは炎の壁に手を突っ込む。そして、その先にいる者を掴んだ。

『クッ……』
『電波体が電波人間に勝てると思ってんのか！？　このまま爪で貫い――』
「私の親友から手を離しなさい！」
ビャッコの言葉をソラが遮る。起き上がれなくても、睨む事は出来る。彼女の目は強く、並みの相手ならば動きを封じる事も可能なほどの気迫を放っていた。……そう、並みの相手ならば……。
『ハッ！　戦意を失っていない良い目だ！　良いぜ！　てめぇから先に殺ってやるぜ！！』
『ッ！　ソラ！』
「ッ！！」
その強い目は逆にビャッコの戦闘意欲を駆り立てたらしい。相手が強ければ強いほどやる気を出す。それがビャッコなのだろう。
ソラは思わず目を瞑り、スザクはビャッコに掴まれているので助ける事は出来ない。
ズンッ！
『……あぁ～あ、またてめぇかよ』
ビャッコのこれ見よがしのため息。恐る恐る目を開いたソラの前にはツバサがいた。状態からして、彼はソラを覆うようにして護っているらしい。

「……ツバサ……」
「今は大人しく護られてろ。……スバルももうすぐ来るみたいだしな」
『そんな状態の奴がよく言うぜ！　オラオラオラオラ！！』

ズンッ！　ズンッ！　ズンッ！　ズンッ！　ズンッ！

「グッ……あ……」

ツバサは踏まれる度に苦悶の表情を浮かべる。それはそうだろう。『完全に効かない事』と、『痛くない』は別問題だ。デューオは、痛覚までは無くしてくれなかったのである。
ソラはツバサの袖をギュッと握って、苦しそうな声で懇願（こんがん）した。

「……お願い……もう止めて……！」

それは、自分を庇って傷つくツバサに対してか、それとも彼を傷つけるビャッコに対してか、または両者へか……。それは分からない。しかし、ツバサはその声を受け取り、彼女の期待を裏切る。

「絶対に失わない。……オレが、オレでいる以上は……」

それは、護るという事。自分がどうなろうと、自分が自分である限りは護るという事だ。
そして、その言葉を聞いたソラは気付いた。『悟った』と言っても良いかも知れない。

（……そっか。こいつ、帯広博士とレイを失った事、まだ過去だっ

て思えていないんだ……）

帯広博士やレイ、他にも救えなかった者達の事は、彼にとってまだ『過去』になっていない。過去とは、本人が過去の事と認識できて初めて『過去』となる。それが出来ない以上は、いくら年月を重ねようと当人にとっては『今』なのだ。

ツバサの心は、過去に囚われている。呪いや暗示と言ってもいいほど強く、縛り付けている。今の彼にとって、『誰が』という概念は無い。窮地（きゅうち）に陥った全員が、『過去に失った人』に見えるのだろう。

それはもはや、『想い』という名の『呪い』だ。己が心を縛り付ける鎖である。

ビャッコが足を振り上げる。ソラは、どうしようもなく悲しくなって目を閉じる。

ズシャ！

『ガァッ！？』

ビャッコの声。目を開くと、目の前のツバサは目を閉じながら少しだけ笑みを浮かべている。そのさらに向こうには、赤い盾を構えたロックマンがビャッコに警戒の送りながら立っていた。そして、ツバサとソラに声をかける。なお、スザクはビャッコが吹き飛ばされた時に解放されたので無事だ。

「大丈夫？　２人とも」

「……おせぇよ」

ツバサがため息交じりで軽口を叩く。及び、右腕を軸に横に転がる。いつまでも覆うように庇っていては動きようが無い。おまけを言えば誤解も招きそうだ。ジャックに見られたら、学校中に知れ渡る恐れがある。

そんなツバサの懸念を知ってか知らずか、ソラはツバサが起き上がるのを手伝いながらスバルの方を見る。

「ミソラちゃんは？」
「……強く打ち付けたみたいで気絶してる。けど、今ハープが見てるよ」
「……そっか」
「スバル」

仰向けは蹴られた所が痛いのでうつ伏せになりながら、ツバサは会話を遮ってスバルに声をかける。そして、続けた。

「……頼んだ」
「任せて。……ウォーロック、スザクを含めて3人をお願い」

スバルは力強く頷き、ウォーロックを呼び出す。

『本来ならオレも戦いたい所だが……。まぁ良い。……油断すんなよ。それと、頭に血が上りすぎて動きが単調にならないように気をつけろよ？』
「……ばれた？　僕が本気で怒ってる事」
『当然だろ？』
「……だね」

2人はそんな会話を交わした後、ウォーロックはツバサ達の前に立つ。ロックマンはビャッコの下へ向かう。

スバルがツバサとソラに話しかけた時、ビャッコは仰向けの状態から起き上がろうとしていた。

『あ～こんなに吹っ飛ばされたのいつ以来だろ？　……ゲンブのじーさんがド真面目に何かを考えている所から始まって、セイリュウがスザクに鉄拳を食らわせようとして、バカ受けしていたオレまで連帯責任と称してエーテ……ル？　……誰にぶっ飛ばされたんだっけ？』

ザッ……

土埃が舞う。ビャッコが何かを思い出そうとしている時に、誰かが近づいてきたらしい。一瞬だけ見た。自分を吹き飛ばした赤い騎士を思わせる少年。それはどこと無く、最初に吹き飛ばした青い奴に似ている。

ビャッコがスバルに抱いていた感情はそんなものだった。しかし、スバルの目を見て、その印象を改めると共に戦慄が走る。

スバルはゆっくりと剣を構えながら、一言だけ呟く。これまで抑えていた感情を込めて……。

「……許さない……」

その声と共に、ハイスピードな斬撃勝負は始まった。

第７１話　白虎（後書き）

次回はようやく戦闘です。……これも2話とかに分けそうな予感が……。とにかく、お楽しみに！

第７２話　神速（前書き）

えっ～と、ブルースノイズのＮＦＢの名前がどっかで聞いた事があるという方へ。その辺はスルーでお願いします。……あれ以外相応しい名前が思いつかなかったんです！

「……逆切れかい」

……それでは始まります。

第７２話　神速

ビュビビビビッ！！

大気を裂くような斬撃。その応酬。

音の速さはおおよそ、秒速３４０メートルほどとされているが、ロックマン：ブルースノイズとビャッコの斬撃勝負はそれと同等。

いや、正確には、そう思われると言った方が良いのかもしれない。

なぜなら、２人の姿はほとんど見えなかったからだ。かろうじて見えるのは、赤と白の残像。そして、時折聞こえる互いの剣が当たった音だけだ。……音速すらも、超えているかもしれない。

人間はおろか、身体能力が格段にあがった電波人間でさえ、それを捉えられるのはほぼいないだろう。そんな中でも、当事者は言葉を交わす。

『ヒュ――――！　シビレルねぇ！　ロックマンがこんなに強かったなんてな！　お前がつまらなかったら倒した後他の奴らを倒しに行こうと思ってたのによ！！　残念だっと！！』

ビャッコの横薙ぎの爪を伏せてかわし、そのままロックマンは足を切りつける。ビャッコはロックマンの頭を掴んでそれを軸にジャンプ。ロックマンの攻撃をかわすと共に彼の体勢を崩させた。そのままロックマンの背中に狙いをつけて突く。

『オラッ！　背中ががら空きだぜ！』

「ッ！！　リフレクト！！」

ロックマンがそれを言うよりも少し早く、彼の左腕の盾はロックマンの前方を丸々覆うほどに大きくなり、ビャッコの攻撃を防ぐ。さらに、リフレクトとはその名の通り、攻撃を撥ね返す技。ビャッコの斬撃は衝撃波に変換されて、ビャッコに返って行く。

『ヌッ！　グッ……オォォォォ！？』

撥ね返されるとは全く予想していなかったらしい。ビャッコは後ろ向きに吹き飛ばされ、背中から地面に激突した。ロックマンはすぐに追撃の構えを取り、足に力を加えて、踏み込――

『ちょっと待った！』

む直前にビャッコが大声を出したから思わず止まってしまった。ロックマンは思いっきり顔に不快感を出しながら一応といった様に尋ねる。

「……なに？」

『いや、今思えばまだオレの電波変換時の名前言ってなかったな～って思ってな』

それがどうした！　ロックマンは叫びそうになったが、立ち上がったビャッコが飛び込んできたので爪を剣で受け止める。互いの剣を境に、ビャッコはロックマンに自身の名を名乗る。

『ビャッコ・ソニックだ。……これで心置きなく戦える！』

「それは良かったね」

そして、再び彼らの姿は残像となる。スバルの怒りは、まだ収ま

ってはいない……。

「ワイドソード！」

ロックマンは横薙ぎに剣を振るい、ビャッコの両手を捉える。それ自体は前腕の装甲、手甲というものだろう。それに阻まれて大きなダメージには至らない。しかし、それも想定のうち。

ビャッコ・ソニックの腕が前方を防御する体勢を解除したのを見計らって、ロックマンは素早く懐（ふところ）に潜り込んで本命の一撃を加える。

「クロスソード！」

ロックマンの十字を描くような斬撃は見事にビャッコ・ソニックの腹を捉えた。

『グガァァァァァ！！』

ビャッコ・ソニックはとっさに後ろに飛ぶ事で斬撃を浅くしたらしく、電波変換解除までは至らない。それでここまで悲鳴を上げると言う事は、ある推測が成り立つ。

ビャッコ・ソニックの驚異的なスピードの代償は、防御力ではないだろうか。考えてみれば当然だ。『早い』という事は、同時に装甲が薄いということになる。そうなれば、防御が薄くなると同義。手甲は硬いようだが、それ以外は大した防御力を持っていないらしい。

そうなれば、スバルの取るべき戦法は１つ。

スピードと小技で翻弄し、先程のようなスキが出来しだい本命で斬る。

ロックマンは剣を構え、ビャッコ・ソニックに追い討ちの構えを取り、切りかかる。

一方、彼と強い信頼で結ばれているウォーロックは、スバルの事を案じたのか彼の戦っている方角を見る。そんなウォーロックにツバサが話しかけた。

なお、ソラは電波変換を解除している。ダメージもさることながら、大技を短時間で何度も出した負担が要因だ。

「……ウォーロック」

『なんだ？』

「オレから半径2メートル以上離れてくれ」

『いきなり拒絶か！？』

思わず突っ込んだウォーロックに対し、うつ伏せ故に頬杖をついたツバサが答える。

「さっきまでお前のコピーと戦ってきたからな。つい警戒心が湧(わ)いちまう」

『……チッ。しゃあねぇな』

ブツブツ文句を言いながらも離れるのはウォーロックなりの優しさだろう。それを見たツバサは警戒を解くようにフッと息を吐き、自分の前腕、ビャッコの爪からソラを護った時の辺りを見る。

（……服が破けただけで皮膚は切れず……か。ここまで頑丈だと、自分が元々人間だった事すらも疑っちまうな。顔の膜を動かして笑顔を作れても、物理的な液体……涙とかは流せない。……決して人にはなれない事を思い知らされる。……まるでピノキオだな……）

「腕がどうかしたの？」

その時のツバサは自分の化物加減に自分で苦笑していたのだが、ソラから見れば自分の前腕を見て寂しげに笑っているように見えたのだろう。

彼女の心配そうな声に、ツバサは話を逸らした。ただでさえスバルのノイズチェンジの影響が来ているというのに、これ以上長話はしたくない。予想通り、最初（ゲンブ戦の時）と比べて、影響は強くなっている。

「いや、服をどうするかと思ってな。バルズランドの中に服とか布が安く売っている所どこだったかな～って思ってね」

「……ふぅ～ん。スバル君が戦っているのに、暢気だね」

心配そうな目から一転。ソラは呆れたような半眼を送る。それにツバサは苦笑しながら自らの腕に顔を埋めさせた。まだ、抑えるのに時間がかかりそうだ。

ココカラ……ダセ！！

……ネビュラ・グレイという、本物の怪物を……。

その頃スバルの方は……。

『ハッハァ！　何だ何だ何ですか!?　その防戦一方ぶりは！』

「クッ！」

ビャッコ・ソニックの言う通り、ロックマンは現在防戦一方で攻められずにいた。最初はスピードとスキを生み出すための小技で順調に攻めていたが、ビャッコの力の使い方が上手くなってきているのだ。つまり、ビャッコは戦いの中でさらに成長したという事である。

力任せに風を起こして相手を吹き飛ばすしかできなかったのが、今では腕や爪などの必要箇所に纏わせて、攻撃や防御に応用する事を覚えたようだ。

防御時は風の圧力で相手の攻撃の軌道を逸らし、攻撃時は……。

『くらえやこら――!!』

「ッ!!」

ズゴゴゴゴゴゴォ!!

手首から先に纏わせた風は高速回転し、削岩機のようにロックマンの居た地面をえぐる。回避できたから良かったものの、もし当たっていたら粉々の地面と同じ運命を辿っていただろう。

驚く間もなく、ビャッコ・ソニックは襲い来る。今度はソードで

防御したが、ロックマンの剣は悲鳴を上げる。力勝負になれば、体格の差でロックマンが不利。さらに風の圧力も加わり、少年の体は容易に吹き飛ばされる。

「うわぁぁぁぁぁ！！」

『もらった！』

吹き飛ばされた先にビャッコ・ソニックが爪を構える。ロックマンは空中にいるので避けられない。体勢を変えて急所を外す事しかできないだろう。

しかし、そんなロックマンの懸念は無駄だった。

「ウイングブレード！！」

その声と共に、自分（スバル）の後ろで爪を構えていたビャッコ・ソニックがいなくなる。厳密に言えば、乱入したその者に吹き飛ばされたのだ。

先程までビャッコ・ソニックがいた場所には、サテラポリスの若きエース、暁シドウが立っていた。無論、電波変換して【アシッド・エース】になっている。

アシッド・エースは両手でロックマンを受け止め、立たせる。

「あ、暁さん」

驚いたようなロックマンに対し、アシッド・エースはいつもの明るく、気さくな笑みを浮かべる。

「悪い、遅れた。ゲイルを慕う奴らを国の中まで避難させるのに手間取ってな。……まぁそれは良いとして、ヒーローは遅れてやってくるってことで！　待たせたな、スバル！」

『……シドウ、あなたも十分暢気すぎです』

得意げに親指を立てて見せたアシッド・エースは、相棒のアシッドの発言で親指が「かくんっ」と倒れた。少しへこんだらしい。

「分かったよ。……スバル、行くぞ」

ため息をつきながら気持ちを切り替え、スバルに意志を乗せた言葉を送る。

「はい。……でも、アシッド・エースのスピードでもアイツを捉えられるか……ッ!?」

アシッド・エースのスピードと解析能力はピカイチ。しかし、ビャッコ・ソニックのスピードは異常だ。それを捉えられるかどうかを問おうとしたロックマンの語尾は驚きに変わる。

アシッド・エースの白を基調とした装甲は黒く変わったのだ。それは、以前ディーラー壊滅作戦の時に、ジョーカーの自爆を止める際に見せたフォルムである。

ロックマンの驚きを察してか、暁はその事について説明する。

「ん？　……あぁ、これはな、お前のノイズチェンジと似たようなもんだ。お前のが姿と能力が変わるものだとすれば、オレのは純粋に戦闘力の向上。簡単に言えば本気モードというわけだ」

『シドウの説明は幼稚ですが、意味的には合っています。……ツバサはあまり使うなと言ってましたが、そうも言っていられないでしょう』

『話は済んだか？』

スバルが納得した頃にビャッコが話しかけてくる。距離はあるが、彼の瞬発力ならあっという間に縮められる距離だろう。
否。ロックマン達の返事を聞かずに、言い終わると同時に、迫ってくる。

本当に血の気が多い。
ビャッコの双刃を、アシッド・エース、ロックマンのソードが受け止めた。

ちなみに、ツバサがあまり使うなと言った理由は……。

『……サーバーの負担が上がっている……。暁とかいう方が電波変換に加えて、力を解放したようですね。……ツバサ、ほとんど使う事は無いって言ってませんでしたか？　……帰ってきたらお説教ですね♪』

セレナードが友好的な笑顔の中に怒りを込める。

暁の電波変換時の負担をうらかわのサーバーに送る事で暁自身への負担を減らし、サーバーへの負担自体もワイリーの開発したネットワーク修復システム、『アイリス』で皆無。
それの発展型とも言えるのが、今の暁の状態だ。強くなった反動は、暁ではなくサーバーに流れ込む。その負担は『アイリス』の修

復力を少しだけ超えている。そうなれば必然的に、時間が立てば経つほどサーバーに負担がかかり、サーバーの中のナビにも影響が出る恐れがある。

だからツバサは、あまり使うなと言ったのだ。もっとも、時間制限という措置も設けていたが……。

ヴゥゥゥゥゥゥゥン……

フォルテの管理しているネビュラサーバーから異音が発せられる。それを聞いて、セレナードは表面からも笑みを消した。

『……どうやらフォルテも手こずっているようですね。……本人は余計な真似を。とか言いそうですが、ネビュラを外に出すわけにはいきませんからね。……久々に、私も戦いますか』

セレナードは『ウラの王』の名に相応しい戦意を出しながら、ネビュラサーバーに身を投じる。2人がネビュラグレイを収めたのは数分後の事だ。

一方暁達は……。

暁自身、詳細（サーバーの事）は聞いていないが時間制限がある事はツバサから聞いている。それを過ぎれば、この姿は維持できなくなるのは明々白々だ。

（あと４０秒！　それまでに倒す！）

暁の握るソードに自然と力が入る。

『チィ！』

ロックマンとアシッド・エースの連携の取れた攻撃で、ビャッコ・ソニックの風を用いた防御が不完全になる。暁の振るうソードは、そのスキを突いてビャッコ・ソニックに迫る。

しかし、ビャッコは自身の反射神経とゲイルの身体能力をフルに使い、それを紙一重でかわした。

少し距離を置いたビャッコは、叫ぶように暁に問う。

『あーもう！　何なんだてめぇは！　何でオレの風の動きが分かるんだ！！』

「言うわけ無いだろ？　行くぞスバル！　もう一息だ！」

「ハイっ！」

暁のパートナーであるアシッドは情報解析に長けたウィザード。周辺の風の動きを観測するなど造作も無い。アシッドはそのデータを暁のバイザー（　相手を視認するだけでなく、あらゆる情報がここに映し出される　）に送り、暁がそれをさらにスバルにＰＧＭ経由で送る事で情報を共有・適用しているというわけだ。

それを言えば、ビャッコは即座に風の向きにフェイントを入れるなどして対応するだろう。だから、言わない。言えない。

ロックマンとアシッド・エースは対ディーラー戦で互いに戦った仲。それ故に、互いの動きは見なくとも掴んでいる。その連携は『共有される情報』で完璧なまでになり、ビャッコを追い詰めていく。

さらに言えば、アシッド・エースの肩にあるバーニアは勢い良く後ろに噴射することで爆発的な推進力を得る。それにより相手との距離を詰めたり、【ウイングブレード】の推進力に使われるのだが、今回はそれを少し応用していた。

通常は後ろにしか出ないブーストを前左右にも放つ事で、攻撃回避に用いているのである。

ブーストによって地面を滑るように移動し、ヒットアンドアウェイという戦法を体現するかのように、その場その場の効果的な一撃を加えているのだ。

ロックマンの方も、最初はブルースに似た太刀筋だったのが、段々星河スバルの太刀筋が出来上がっていく。ブルースの基本を踏まえ、スバルがそれを発展させているものと考えれば良い。無論、スバルにその自覚は無い。彼は無意識にブルースの剣技を取り入れ、自身の剣の腕を上げている。

そして、戦局は佳境を迎える。

アシッド・エースの剣がVの字を描くように宙を斬る。それによりビャッコ・ソニックの腕は弾かれ、胴体をがら空きにする。

『チッ！』

「今だ！　スバル！」

暁の声にスバルが応える。ロックマンは居合い切りの構えを取り

……。

「ハイッ！　ＮＦＢ（ノイズ・フォース・ビックバン）――」

フッ　……ピッ！

ビャッコ・ソニックを斬る。そのスピードは残像すら残さず、影も、声すらも……置き去りにした。ロックマンは自身の声よりも早く、駆け抜けたのだ。

そしてその技の名は、ロックマンの後ろから彼自身の声で告げられる。

「……断空（だんくう）……」

『グ……オ……』

その一撃は『断空』の名に恥じないほどに鋭く、空間を断ち切るほどにキレのある斬撃だった。

そして、ビャッコ・ソニックが膝をつき、電波変換が解除され、ゲイルがうつ伏せに倒れる。

それと同時に、暁の解放状態も元に戻る。『黒』い装甲は、『白』に戻ったのだ。

『……チッ。ゲームオーバーか……』

ビャッコは悪態をつくと、まるで空気に溶ける様に消えていく。

足元から徐々に消えて行く自分の体を見て、ビャッコはスバルと暁に向き合う。

『……オイお前ら。セイリュウはオレらの中で一番頭が切れる。……せいぜい気をつけな』
「えっ？」
「何でそんな事をオレ達に？」
スバルと暁の問いに、首の根元まで消えかけているビャッコは『ヘッ』と笑ってみせる。
『楽しい勝負の礼だよ。オレは、楽しければどうでもいい……』
その言葉を最後に、ビャッコは消え去る。最後まで自由で、風のように、消えていく……。
「……やった、な。スバル」
「はい」
スバルと暁は電波変換を解除して、互いに言葉を交わす。

第７２話　神速（後書き）

現在クイックロッドさんの書いている小説、『ｃｏｒｄ　ｎｕｍｂｅｒ』でこの小説とコラボ中！　そっちもゼヒオススメです！
ふっふっふ。上手く話を繋げますよ～。

「宣伝かよ」

そうですが。何か？

（……コロコロのベッカムくん？）

第７３話　約束（前書き）

今回はやや短いです。１話を２話に分けましたからね。でも、次の話は今回の話と混ぜるわけにはいかなかったんで。

第７３話　約束

スバルと暁はゲイルを担いでバルズランドに戻る。他の皆もそれぞれで戻ったようだ。

門まで戻った時、出迎えたのはアイリスとライラ、ウォーロック。そして、ミソラとハープだ。なお、なぜかアイリスは浮かない顔で、ライラは上機嫌である。

そしてミソラはというと……。

「スバル君！　お帰り！」

「ミソラちゃん！　体はもう良いの？」

「うん！　この通りピンピンだよ！」

ミソラはそう言いながら両腕を上に伸ばしてみせる。スバルは、元気な彼女を見て安堵の息を零した。暁はそんな２人を見て「ふっ」と微笑んだあと、ライラに上機嫌な理由を聞いてみる。

「ひとつ気になったんだが、何で上機嫌なんだ？」

ライラはアイリスを見てから満面の笑顔を浮かべる。

「内緒よ♪　サテラポリスのエースさん♪」

皆は覚えているだろうか。ライラとアイリスは、どっちが先に目標を達成できるかという賭けをしていたのである。最初のライラのフライングが効いたらしく、結果はアイリスの負け。約束であり、自分の思い出を話す羽目になったアイリスは意気消沈。スバル達が帰ってきても少し微笑んだだけで、まただんまりになったのはその

ためだろう。
反してライラは、元々彼女は他人の秘密を知る事を楽しむという悪癖があるため、現在進行形で楽しんでいる最中というわけだ。彼女がスバルと暁に勝手に話さないように、アイリスはライラを見張っている。

そんな事を知らない暁は首を傾げるが、まぁ良いか。と思ったのだろう。別の質問をする。

「ところで、ツバサとソラはどうした？　ウォーロック、お前一緒じゃ無かったのか？」

ハープから、スバルとミソラに近づけないように妨害を受けていたウォーロックは、やや不機嫌に答える。

『あ？　あの2人なら病院に寄るってよ』

その言葉に、スバルはピクッと反応した。病院という単語は、友達思いの彼を反応させるのに十分な理由だろう。

「病院!?　ねぇ！　病院って、2人は大丈夫なの!?」
『落ち着けスバル』

ウォーロックはスバルを両手でなだめた後、続けた。

『……あぁ、病院に行ったってのは本当だ。念のためって事で、ツバサがソラを連れて行ったんだ。……あいつらの戦闘も、かなりハードだったらしいからな。……けどまぁ、ツバサは服がボロボロになっただけで、ソラの方も目立った外傷は無かったぜ』
「そっか。……良かった」

スバルがホッと息をついたとき、ハープが思い出したようにアイリスに尋ねる。

『そういえばアイリスちゃん、ツバサ君がボロボロだったのに着いて行かなかったわね。前だったら心配って理由で着いて行ったのに』

『それは……』

言えるわけは無い。ついさっきだってライラにイタズラな笑みを浮かべられたばかりなのだ。あまり多くの人には言いたくないのが本音だ。

しかし、ライラはアイリスが思っている以上におしゃべりだった。

「あ、たぶん私を見張ってるんだわ」

「へっ？」

『ラ、ライラさん！　それはっ！』

アイリスは珍しく、思わず手を握り締めるほどに怒り、ライラはそれを見て陽気に手首から先水平に振る。

「はいはい。分かってるわよ」

「あの……何のことを？」

「ん？　女同士の秘密よ、スバル君。ね～？　アイリスちゃん？」

『……』

アイリスはライラにジト目を送る。ライラはその状況をむしろ楽しんでいるように見える。

２人に何があったかというと……。

――回想――

「……さて、ゲイルとあの白い電波体が分離して一安心ってとこね。アイリスちゃん」

『はい』

アイリスがホッと胸を撫で下ろしている時、隙ありとばかりにライラがニンマリ笑顔で話しかける。

「それじゃあアイリスちゃん。約束通り、アイリスちゃんが兵器を操らない理由を聞きましょうか？」

その言葉でアイリスは強張る。そして、首から上をゆっくりライラの方へ向けた。

『わ、忘れてなかったんですね……』

「もちろん♪」

アイリスは約束は約束って事で話し始める。つまり、しぶしぶだ。

『……順を追って話せば、私はワイリー博士に生み出された後、兵器の中に組み込まれました。……そして……その頃は自我も無くて……たくさんの人を……』

「……そう」

生み出された直後や、ずっと同じ環境の中に居るナビは、自我が成長しない。その事はゲイルから聞いている。ライラは、周りに気

取られないように警戒しながら相槌を打つ。

『……ツバサがそれを聞いたとき、こう言ったんです。【　……そんなに辛いなら、オレがお前のそばに居る間は誰も殺させない。だからお前も、どんな場合があろうとも人を殺すなよ　】……って』

その約束は、ツバサがナビの保護のために世界を巡った後にかわされた約束だ。そのときツバサはこうも言っていた。【　……糸を切らない様に……　】それは呟くように言った言葉で、その意味はアイリスにも分からない。ただ、数百体目のナビをサーバーに入れるためにニホンに戻ってきた時、少し彼の雰囲気が違っていたのを覚えている。

どこか落ち着いているような。……何かを、悟ったような……。以前ウォーロックがツバサの部屋で見つけた三日月型の装飾がなされた鍵も、その頃には持っていた。

ライラは、そっと優しくアイリスの頭に手を置いた。

「アイリスちゃん……。ごめんね、辛い事を話させて。……ゲイルがあまりに軽い口調で言うから面白いものだと思っていたのよ……」

『……ライラさん』

ライラはアイリスを自分の方に引き寄せ、本物の姉のように、アイリスの顔を自分の肩に埋めさせる。

「辛い事を話してくれてありがとう。私で良ければ、いつでも相談に乗るからね。何かあったら、いつでも私の所へ来なさい。あなたが居たいだけ居ていいわ。ゲイルにも内緒で、ね」

『ッ……はい……』

嬉しいという感情とは反対に、アイリスはなぜか泣きたくなった。
これが『うれし涙』を流す心境なのだろう。コピーロイドなので涙は流せないが、十分に嬉しかった。

それなのに。
それでも。
それゆえに。

……人間というものを羨ましく思えた。自分には出来ないモノを持っている人間。それが、羨ましく思えたのだ。

《……この感情は、慣れるっていうのがないな……》

アイリスはライラの肩で寂しげな笑みを浮かべる。嬉しさ半分、寂しさ半分というやつだ。

――――回想終わり――――

ニッコリ笑ったライラと、彼女を睨んでいるアイリスをスバル達が不思議そうに見ている時、クインティアがやって来た。彼女の後ろには、屈強な男性達がついて来ている。
クインティアは暁を見つけると、彼の元へ小走りで近づく。

「シドウッ！」
「よぅ！　ケガ人はどうだ？」
「もう、私の出番は無いわ。ドクターが、後は大丈夫だから出迎えてあげなさいって」

「そうか。ご苦労だったな。ティア」

文脈からして、クインティアはビャッコ戦の間ケガ人の面倒を見ているように暁に頼まれたようだ。そうなると、彼女の後ろからついて来た男性たちはというと……。

「ゲイル！　大丈夫か！？」

彼を慕う民だった。彼らはすぐに脈と呼吸を確認し、すぐに行動に出る。

「おい！　誰か手を貸せ！　病院まで運ぶ！」

念のために言っておくが、この国に救急車は存在する。しかし、今スバル達の居る所から病院まではそう遠くない。戦闘後だというのに体力が有り余っているようだ。いや、これもゲイルの人徳の賜物なのかもしれない。

一人がゲイルを担ごうと肩に手を回した時……。

「あ～良く寝た」

ベタベタな台詞と共に、ゲイルは目覚めた。そのあまりのタイミングの良さに、一同の動きは止まる。

「あれ？　どったのみんな？」

この期に及んでこのバカはまだシラをきるらしい。暁は拳に血管が浮き出るほど強く握りながらゲイルに問う。

「あ～ゲイル。念のために聞いておくが、お前……いつから目が覚

めていた？」
「えっ？　……まぁそれはともかく、ツー君は？」
「話を逸らさないで答えなさい。……答えなければ、ヴァルゴ？」
『キャハハハハハ！！　マジッ！？　リンチＯＫ！？』

クインティアとヴァルゴは、ゲイルの使った言葉の逃げ道（話を逸らす）を無くす。……脅迫つきで。ノリノリのヴァルゴを見て、ゲイルは身の危険を感じたらしい。正直に開き直った。

「いや～実はシー君に運ばれている時には目覚めてたり♪」
「それなら何でそう言ってくれなかったんですか！　心配したんですよ！」

スバルが驚きを通り越して怒っている。それに対し、ゲイルは少しだけ罪悪感にさいなまれていた。

（うぅ、こんなに心配してたなんて……。言えないな。寝てたフリしてたのが――）

「おおかた、このまま気絶しているフリをしていればミソラちゃんやクインティアさんが介抱してくれると思ってたんでしょ？」
「ッ！」

ゲイルの内心をライラがため息交じりで言い当て、ゲイルは身が強張った。その反応を見ていたのは、ほぼ全員。
暁は自分の平手に拳を勢い良く打ちつけ、ウォーロックは拳をパキパキ言わせている。ハープもまた、腕を準備運動と言わんばかりにグルグル回している。
一同の出す殺気に対し、ゲイルは両手を前に出した。

「ま、まぁまぁ。みんな、もう戦闘は終わったんだから、ここは平和的に――」

「「「『『『　黙れやゴラ――――――！！！！　」」」』』』

「キィヤァ――――――――――！！！」

……ゲイルのシュールな叫び声が正門に響く。ゲイルへのリンチは、約３０分にも及んだ。なお、スバルとミソラ、アイリスはそれに加わっていないが、止める事も無かったという。悪気があった訳ではない。ただ、それだけの気力が無かっただけだ。

第７３話　約束（後書き）

次の話の最後には、クイックロッドさんとコラボした話題が出てきます。お楽しみに！　……しかし、物語の布石を自然に打つって難しいですね……。

第７４話　来訪（前書き）

前回ゲイルがリンチにあった後の話です。

ギャラクシーの事を説明している部分を一部変えました。

第７４話　来訪

そんなわけで、ゲイルは晴れて病院送りになりましたとさ♪　病院にて、ゲイルはスバル達に支えられて自分の病室に入った。部屋のベッドは２つ。片方はゲイルのだが、もう一つには先客が居る。

「……よう。おかえり、スバル。……ゲイルが迷惑をかけたな」

ツバサだった。彼はベッドに顎まで入っている。どこかうんざりした顔なのは、彼の性格から考えて動けなくて暇だからだろうか。

「ツバサ君！　大丈夫！？」

「き、キミが……こんなになるなんて……珍しいね」

スバルが驚いたように、ゲイルは先程門前で殴打された痛みを堪えながらツバサに声をかける。ただ一人、アイリスは不思議そうに首を傾げた。

『ツバサ、戻ってきた時は服はボロボロだったけど、自分でしっかり歩いていたわよね？　……何でベッドに？』

「……運が無かったってとこかな？」

さっぱり分からない。その後、ツバサはあらましを説明してくれた。大筋の内容を言えばこんな所だ。

ソラが検査に行っている間、ツバサはとりあえずシャワーを浴びる事にした。さんざん吹っ飛ばされたから服に土埃が大量に着いていたのだ。病院では非常に不衛生。

シャワーから出て服を着ようとしたツバサは愕然（がくぜん）とした。昔ながらの銭湯を思わせる竹ひごの衣服入れの中に、自身の服は無かったのである。先程清掃の人が脱衣室に入ってきたから、恐らくその時に持ち去られたのだろう。見た目がボロボロだったから、ゴミだと思われたのかもしれない。

体を拭くタオルを巻いてどこかの個室へ行こうと思ったが、その間誰にも見られない保障は無い。仕方が無いので体の周波数を電波に変換。人間に見られないようにして歩く事にした。

部屋の方は、幸いハンターはあったので、それを使ってこの病院の知っている医者に連絡して、ベッドを1つ用意してもらった。

だからこそツバサは、首までベッドに浸かっているのだ。彼がうんざりした顔なのは、この災厄のためらしい。そして、それを聞いたスバル達は同情の眼差し、ウォーロックは爆笑だ。そしてゲイルは、震えている。

「……ウォーロックの爆笑は後で一発ぶん殴れば良いとして、ゲイルは何で震えているんだ？」

ツバサの問い、というか、彼にはほぼ答えは分かっているので確認の方が言葉的に合っている。ゲイルは俯いていた顔を上げて、目をサンサンと輝かせた。

「ということは今ツー君は素っ裸！　ツーく～ん！　キミの童貞は僕がもら――」

ゲイルはツバサに飛び掛り、ツバサはベッドの中でハンターにバトルカードを転送する。

「突っ込みたい事は山々だが、とりあえず吹っ飛べ！！！」

ドグシャァ！！

召喚したエランドに殴られて、ゲイルは壁に激突した。ツバサは一撃加えても怒りを緩めない。

「大体だな、何でてめぇが出てくるとその手の単語が出てくるんだ!?　深夜アニメじゃないっての！！」

「何を言っているんだいツー君。僕＝そういう単語だよ」

「威張るな！！　お前自分の価値をそういう風に見ていたのか！！」

ツバサが新たなバトルカードを用意するのが布団越しとはいえ見えた。このままでは病院が壊されかねない。そんなわけで、スバルはツバサの意識を逸らす事にした。

「ね、ねぇ！　ところでさ！　ソラさんは？　もう検査終わったんでしょ？　暁さんも疑問に思いません？」

「た、確かにそうだな。彼女の性格上、大人しくホテルに戻っているという事は無いだろう」

全くの不意打ちで巻き込まれた暁。上手く合わせたが、背中は思わず伸びて、姿勢を正してしまった。ツバサはため息をつき、バトルカードを収めた。

「……ソラなら――」

「あれっ？　皆帰ってたんだ」

ツバサの声を遮るのは明るい声。ソラがスバル達の後ろ、ドアの方から声をかけてきたのだ。手には少し大きめの袋がある。

「ソラさん、ケガは良いの？」

ミソラの問いに、ソラは持ち前の快活な笑顔で答える。

「うん。お医者さんの言う話では、ほとんど大した事無いって。スバル君と暁さんは？」

「僕も暁さんも大丈夫だよ。……ところで手に持っている袋は何？」

「あぁこれ？　ツバサに頼まれた服。何でも、服を清掃員の人に持っていかれたらしくてね～」

つまり、素っ裸のまま街を歩くワケにはいかないということで、ソラに服を買ってきてもらったというわけだ。ソラは良く聞こえるように、少し高めの声でツバサに確認をとる。

「それじゃあ、袋はベッドのとなりに置いとくね」

「ああ、頼む」

「オイッ」

窓から声が聞こえる。ちなみに今現在地上４階。普通の人間の来れる場所ではない。まぁ、それもそのはず。やって来たのは、電波変換しているソロ、つまりはブライだった。

ブライは集団の中に身を置くのが嫌なので、早々に要件を告げるようだ。

「……貴様らがあの白いのと戦っている間、今回戦闘に使われたアメロッパ基地を破壊してきた。……突然現れた特殊事項（イレギュラー）によって本来の敵を忘れるとは、そろいも揃ってバカか貴様ら」

『い、いきなり暴言かコノヤロウ！』
「待ってウォーロック。……ソロ……ありがとう」
「フンッ。利害の一致だ。オレの年で働けるのはこの国しか無いからな。貴様らの為ではない」

ブライはスバルのお礼を軽くいなし、ツバサを見る。

「化物がベッドに入っているとは、どういう了見だ？」
「……オレお前に何か悪い事した？　理由無しでいきなり化物言われたの初めてなんだけど」

ブライはソラの持っている袋に目をやり、ツバサの状況を把握した。

「無様だな」
「ほっとけ。かなりほっとけ」

ブライの嘲るような笑みにツバサは口元を引きつらせる。及び、火花が散る。再びケンカモード勃発の予感に、スバルはため息をついて止めようとする。ここまで来るとうんざりしてきたらしい。

「2人とも、いい加減にして。ここで暴れたら大きな被害が出るかも――」
「黙れ軟弱」
「黙れ童顔」
「……」

ブライ、ツバサの順で言葉の一撃を食らったスバルは、精神的に強いダメージを受けた。スバルは沈んだ。

「やれやれ、ここは一国の主である僕が出るしかないか」

ゲイルはそう言って2人の間に立つ。

「2人とも、止めないと――ごにょごにょ……」

「「ッ！！」」

ゲイルが2人に耳打ちした瞬間、2人は直立して動かなくなった。自慢げなゲイルに、暁を始めとして一同が集まる。

「どうやってあの2人を抑えたの!?」

「すごい！　私見直しちゃった！」

「ゲイル、ソロを抑えるための手段としてオレにも教えてくれ」

スバルとミソラからは見直したというのと感心の眼差し。暁は大人の事情だ。ゲイルはスバルとミソラを見て首を振った。

「いや、君達に言っちゃうとツー君から本当に4分の3殺しまでされそうだから言えないよ。……シー君なら良いかな？　聞きたいなら廊下へ行こう」

「あ、ああ」

暁は、スバルとミソラがダメだと言ったゲイルの言葉を気にしながら廊下へ出た。

数分後、2人は戻ってきたのだが、暁の顔には陰影が入っている。余程の内容だったらしい。そして、スバルとミソラの肩に手を置いた。

「……何があってもゲイルから聞くな。……いいな？」

陰影＋真剣な顔で言われて断れるほど、子供達に勇気は無かった。

そして夜。ゲイルは戦闘の疲れとリンチの影響で、一日入院する事になった。ツバサもせっかくなので病院で寝る事にしたらしい。もちろん服も着ている。

ゲイルは不意に口を開いた。

「……ツー君」

「何だ？」

ツバサの言葉には警戒心や敵意は無い。ゲイルの趣向はあくまで趣味なので、本気ではない。言葉を変えれば、『冗談』や『いたずら』で人に飛びついているのである。

本気ではないから、公私を分けているから、ゲイルはこういった状況では飛び掛ってこない。ツバサはその事を知っているから、警戒はしないのだ。

ゲイルはあくまで冷静に続ける。

「君を狙ったスナイパー、彼の雇い主が分かったよ」

どうやら他の人間がいなくなるのを待っていたらしい。この話は、スバル達の前では出来ないから。ツバサはゆっくり瞬きを1回した後、静かに問う。

「誰だ？」

「……アーノルド・ローグ」

簡潔な会話。そして沈黙。やがてツバサは薄く笑う。

「……そうか」

「この情報は、キミにとって価値があったようだね」

「あぁ……」

旅館で見た夢では、自分達が関わって、スバル達のそばに居続けた場合の未来が見えた。それだけの行動に出れる者を、現在のサテラポリスの上層部にはいないだろう。だが、他の世界には居る。飛王（フェイワン）・リードだ。あの男がサテラポリスの上層部や国の実力者を手駒に取っていると言う可能性は考慮した。あって欲しくないと願っていたが、これまで自分を襲ってきた奴らの事を考えると辻褄（つじつま）が合っている。

大統領なら、殺し屋を雇うだけの財力も、荒くれ集団を国外に送る権力も持っている。可能性に過ぎないとはいえ、有力すぎる情報だ。

そうなれば、ゲイルに頼む事は1つ。

「ゲイル、できるだけ詳しく探りを入れてくれ。……オレの勘が正しければ、ローグは誰かを失っている」

飛王・リードは、自分の大事な者を生き返らせたいという、人なら誰もが願う事を利用して、異世界の部下を増やす。大事な人を生き返らせる事を口で約束し、人の心に付け込むのだ。

「……分かった」

ゲイルは聞き入れ、眠りにつく。ツバサはそれを横目で確認した後、自分も眠りに着いた。

朝、ツバサは勢い良く上半身を起こす。そして、ゲイルを叩き起こした。

「オイ起きろゲイル！　もう一つ頼みがある！」
「な、何さツー君。僕は低血圧で――」
「この国にいる人間を全員非難させろ！」
「朝っぱらから物騒だな～。眉間のしわは年を取ると残るぞ♪」

陽気に指差すゲイルの指を掴んで、握る方とは反対方向に曲げる。ゲイルはその動きに逆らわず、自身の指を自身に向ける。その状態で、ツバサは小声で伝える。

「……ギャラクシーが来る」

一種の予知夢だ。

ツバサの予知夢は、侑子の知っているクロウ・リード程多くは見ない。その理由は分からないが、未来の事が全て分かると面白くないというツバサの趣向と、大事な事はちゃんと夢に出るので問題は無いと認識していた。

その夢に出てきたのは、こちらの次元に現れたギャラクシー。白髪で肌は青白く、透明の瞳を持つ者。自分の知る中で、トップクラスの危険人物。その男が、ゲートから出てくる夢だった。全身を出した所でその夢が終わり、一人だったのかどうかまでは分からない。

ゲイルはギャラクシーの事はツバサから聞いている。以前ツバサがギャラクシーと遭ったのは5ヶ月ほど前、スバル達と始めて出逢う1，2ヶ月前だそうだ。

ゲイルは、低血圧とは思えないほど鋭い目をツバサに送る。

「……分かった。スバル君達はどうする？」

「……一緒に避難させてくれ。これはオレの問題だ」

「……キミはいつも一人で背負うつもりなんだね。……ッ……ツー君、キミのその頼みは聞けそうに無いよ」

何かに気付いたゲイルは、ニヤッとイタズラっぽい笑みを浮かべる。ツバサは怪訝そうに眉を顰めた。

「何を――」

「僕達が避難って、どういう事？」

スバルがドアの方で、呆然としたようにツバサとゲイルを見ている。聞かれていた。後ろからミソラやソラ、ルナやゴンタ、キザマロも来ている。

ツバサはスバル達に詰め寄る。

「どこから聞いていた？」

いつもとは違う、ドスの効いた迫力を放つツバサに少し臆しながら、スバルは答えた。

「えっ、ゲイルさんが僕達をどうするかを君に聞いた所からだけど？」

それでは、その前のギャラクシーの事は聞いていないだろう。ツバサがその事にホッとした時、ここぞとばかりにスバルが聞き返してきた。

「一体どうしたの？　この国の人を全員避難させるだなんて」

「何でもない。単なる避難訓練だ。なっ、ゲイル？」

ツバサとしては、スバル達を意地でも逃がすつもりだった。ギャラクシーは他人の精神に干渉できる。その事は、自身が身を持って知っている。記憶を探られたのだ。恐らく、偽名の方と結界の方は知られてしまっているだろう。

ゲイルにその事も話したから、どれほど危険かは分かるはずだ。だから、自分のウソにも乗ってくれると思っていたのだが……。

「……ヤバイ奴がこの国に近づいている。……僕のハンターに情報が入ったから間違いないよ」

彼は【　どこから来るか　】のウソをつき、【　何かが来る　】という本当を教えた。

「ゲイル！　お前！」

「ツバサ君！」

ツバサの怒りは、スバルの声に遮られた。スバルは強い意志のこもった目で続ける。

「残るよ。僕」

それと共に、彼の周りの者達もその声に頷き合う。

「私も残る！　せっかく護った国や人を護れないなんて、絶対嫌だもん！」
『ヘッ！　ツバサ、お前はまだスバルの事を満足に知らねぇみたいだな。スバルは大人しい割りに頑固だぜ？』
『ポロロン。そんなに危ないなら私がミソラのそばにいないとね』
「ちょっとウォーロック！　ロックマン様に何かあったらあなたのせいだからね！」
『いや、何でオレ！？』
「ぶっちゃけ八つ当たりでしょうね」
「キ～ザ～マ～ロ～？」
「ひぃ――――！　口が滑りました――――！」
「「「あははははは」」」

病院に無邪気な笑い声が響く。危機が迫っているというのにまるで緊張感が無い。ツバサはその事で不覚ながら呆然としてしまった。その肩に、ゲイルはそっと手を置く。

「ツー君、キミの負け♪」

ツバサはうんざりしたように、ため息をつきながら項垂れる。それは諦めではない。スバル達を巻き込まない事はもう無理だとしても、それ以外の事はできるだろう。

「ゲイル、当面はオレ達だけで対処する。お前やコクレン、ライラは住民の避難と平行して、町並みをリアルウェーブで再生できるようにバックアップを頼む」
「了解。それが終わったら、僕やコクレンも加勢に行くね」

ゲイルの状況把握の早さに、ツバサは今更ながら舌を巻いた。及

び、苦笑する。

「ははっ。理解が早い。その聡明さと勇敢さ、キングも買っていたんだろ？」

「うん。そうみたいだね。……キングは、科学者として僕の師匠（せんせい）だから」

ゲイルはキングを人間としてではなく、科学者として今でも慕っている。今度キングのアクセスパスを渡すかな。

ツバサがそんな事を思っている時、嫌な波長を感じた。

ツバサは黒い双眸に不敵な光を宿し、声を張り上げる。

「さて！　そろそろ行くぞ！　分かっているとは思うが、ルナ達は留守番な」

ルナ、キザマロ、ゴンタは頷き、歩いて行く。

ゲイルはすでに、電話でライラとコクレンに指示を出している。

自分達も、行動開始だ。

第７４話　来訪（後書き）

なお、ゲイルがツバサやソロ、暁に何を言ったかは秘密です。いや、考えてはいるのですが、文章にするのが忍びなくて……。オレにそこまでの勇気はありません。

次の話は、ギャラクシーがツバサ達の居る世界から去った後の話です。

それではこれにて！

第７５話　出遭いの記憶（前書き）

こちらのコラボもひとまず終了です。ギャラクシーとツバサが初めて出遭った話も入っているせいか、長いです。

ちなみに、『出逢い』はいい方の出会い。『出遭い』は悪い方の出会いです。読みが同じでも意味が微妙に違います。

ギャラクシーとカストルの口調などで変なところがあれば言ってください。

第７５話　出遭いの記憶

ギャラクシーとテロッドと呼ばれる存在との戦闘から３０分。僕（スバル）達は、バルズランドの病院で治療を受けていた。

「いってぇぇぇぇ！！」

ジャックが隣の治療台で悲鳴を上げている。たぶん、地面に打ちつけた時に打撲などをしたのだろう。他のみんなも似たようなものだ。部屋から出れば、呻き声のフルコーラスが聴けるだろう。

この治療が終わったら、ツバサから色々と聞かなければいけない。彼が知っている保障は無いが、ギャラクシー達は何者なのか、どこから来たのか、そして、あの青い穴は何なのか。考えるだけで、疑問は尽きない。……ッ！

「いったぁぁぁぁ！！」

スバルも結局叫ぶ羽目になりましたとさ。

城の屋根。ツバサはそこで仰向けになりながら先程の戦闘の事を考えていた。彼にとって１人の方が考え事には良いらしい。

（……ベガ、ルシファー、リキッド……。あいつらがギャラクシーと同じ次元の人間というのは察しがついた。……だが……中でもベガって奴は異質だ）

本来なら、攻撃が通じるはずではなかったルシファーも気になるが、分からない事を悩んでも仕方が無いという事で、この国に戻る前に頭の中心から片隅に移動した。もっとも、実際にそんなマネができる訳ではなく、単なるイメージだ。

（チラッと聞こえた”脳”という単語。……もし、脳を活性化して処理速度を上げているのだとしたら……ベガとテロッドの能力にも合点がいく）

普段人間は、視覚や聴覚から入ってくる情報を脳で処理して、欲しい情報や感心のある情報を取捨選択してそれを記憶として保存する。

脳の処理速度が上がるという事は、いつも通りの速さで送られている情報をいつもより早く処理できる事を意味する。簡単に言うと、いつもは見えないような野球選手の球が、目から入ってくる情報の処理を早くすることで、スロートまではいかないだろうがそれに近いところまでいくという事だ。

一見便利なようだが、当然代償がある。

（だが、脳を無理やり活性化するという事は、例えれば電子回路に限界値を超える電圧をかけるようなモノだ。爆発的な情報量を脳に叩き込まれるから、最悪それが発動した時点でお陀仏（だぶつ）。それで即行くたばらないとなると、脳を改造されたってのも可能性としてあるな……。数ある情報から欲しい情報だけ選択して脳への負担を減らす。または、脳自体を情報量に耐えられるように改造するって所か。……ギャラクシーなら、人体改造ぐらいやりかねないな……）

ツバサは一度上体を起こし、腕を上に伸ばす。そして、やっと一

言呟いた。

「ギャラクシーか……」

彼の脳裏に、ギャラクシーと出遭った記憶が過ぎる。

――――約5ヶ月前――――

場所はアジーナ。比較的平和で、戦乱とは程遠い場所だ。単純に田舎だからという事もある。田舎なりに、市場には活気がある。そんな場所にツバサが何しに来ているかというと……。

「おっちゃん、これ美味そうだね」

監視者の仕事をサボって観光に来ていただけだった。自販機で買ったボトル式のジュースを片手に市場をぶらついている。そんなツバサの都合は無論店のおじさんは知らない。よって、他の子供に対する時と同様に親しげに接した。

「おうぼうず。この辺じゃあ見かけねぇな。最近越してきたのかい？」

「いんや、観光」

そう言いながら、ツバサは財布から金を出し、おじさんは串に刺さった（おそらく）鳥肉をツバサに渡す。鳥肉を渡したおじさんは

驚いたような顔をする。

「観光！？　この辺は見るもんが無いからつまらんだろ？」

後半を快活な職人の笑みを浮かべるおじさんに対し、ツバサも友好的な笑みを浮かべる。

「いつも資料だらけの部屋に居るから、たまにはこういう緑あふれる景色が見たいんだよ」

「資料……あぁ！　お父さんの手伝いか何かかい？」

「お、お父さん……ね」

ツバサの頭の中には同僚の顔が浮かんでいた。男性でもないし、父親でもない。……どっちかというと口煩い姉だ。

ツバサの口元の引きつりをどう誤解したのか、店の男性は諭すような笑みを浮かべる。

「まぁ、親子だったらケンカは当然のようにあるもんだ。ほれ、何本かおまけしてやるから家族で仲良く食いな」

「あ、ありが……とう」

雰囲気で押されて受け取ったは良いが、これをどうするか。……景色を見ながら酒を片手に片付けるか。

彼の中での問題、解決時間3秒。酒は適当に親のお使いとか言えば買えるだろうと、ツバサは意気揚々と市場を歩いている時、不吉な波長を感じた。立ち止まり、そちらを見る。

視認できる範囲にそれらしい者はいない。それはつまり、視認する事無く感じられるほどの危険人物という事。

幸い市場でパニックは起きていない。騒ぎが起きる前に、事態を

収束させる。

ツバサは、波長のする方へ歩いていった。

『……まさかこのような世界があるとは、な……』

場所は市場から少し離れたなにも無い道。一般的に言う、農道だ。

声を発した男性の容姿は黒いコートに白髪。見た目は青年だ。ここまでは良く居そう（？）だが、透明の瞳が、彼がタダの人間ではない事を示していた。

側近が1人おり、襟首の長い青コートに白髪。肌は真っ白。こちらの方がいくらか人間らしいが、黒コートの男性と一緒に並ばれると同類に思える。

黒コートの青年は周りを見渡すように首を回し、黒髪の少年を見る。

『ところで、キミは誰かな？』

ツバサはいつでも次の行動に出れるように四肢に神経を行き渡らせ、警戒の眼差しを送る。

「あんたらこそ何もんだ？　あんたらの出す波長、不吉以外の何でもない」

その言葉を聞き、ギャラクシーは興味が沸いたような笑みを浮かべる。無邪気な子供のそれとは違う、口元を上に引きつらせた嗜虐（しぎゃく）的（てき）

的な笑みを。

『波長だと？　……面白い。タダの人間に我々の波長が分かるとは。……ちょうどいい。この世界がどういったものか知るのにお前を使わせてもらう。カストル」

最後の単語を言うと、ギャラクシーのそばに居た男性が反応した。青コートの名前はカストルと言うらしい。なお、今ツバサは完全に物質化しているので、刃物や銃弾が通じない事を除けばタダの子供だ。

ギャラクシーは依然として嫌な笑みを浮かべながらツバサを見る。

『奴を動けない程度に痛めつけろ。殺さない範囲でな』

『分かりました』

カストルがギャラクシーの前に立つ。両者は向かい合い、沈黙が流れる。

フッ

先に動いたのはカストルだ。自身の周波数を変換させ、空気中の電波に乗ってツバサの後ろを取る。とっさの事で驚いたが、彼らの波長は個性的過ぎる。

ツバサは腕を後ろに回してカストルのチョップをガード。ガードしなければ漫画でよく見られるような首への一撃で気絶していただろう。だが、どっちでも苦痛が伴った。

「ッ！！？」

ガードした腕が熱くなる。急いでカストルの腕から離れたツバサは、続けて来るカストルの攻撃を避けながら先程の攻撃のことを考える。

（さっきの攻撃、熱した物に触れるような体外的な熱さじゃなく、体の内側から熱くなる感じだった。……もしかして……）

ツバサはカストルの波長の変化に気をつけながら距離を詰める。カストルの手が予想通り迫る。ツバサは自身の腕を完全に電波に変える。その瞬間、ギャラクシーの顔がほんの少しだけ驚きに変わる。

『……これは……』

カストルの手はツバサを捕らえ、何も起きない。カストルからしてみれば意外な事だろう。

「意外かい？」

カストルの思考を読んだ様にツバサが不敵な笑顔を浮かべる。

「あんたがやったのはマイクロ波だろう？　物質中の水分を振動させる事で物質を内側から熱する。人間相手なら有効だわな。そして、周波数の変化で移動する術を使えるという事は、あんたの能力は電磁波制御」

マイクロ波も電波も波長が違うだけで同じ『電磁波』だ。周波数を変えることが出来るという事は、電波をマイクロ波に変えることも可能だろう。

カストルはギャラクシーを見る。それは見抜かれた事への戸惑い

ではない。それはむしろ……。

『……ふむ。キミはどうやら特殊な存在のようだ。キミが何者かはこれから調べれば良いとして。カストル、手加減は無用だ』

『分かりました。ギャラクシー様』

言うが早いか、カストルはツバサの腕を振り切って拳を固める。ツバサは横に避けて、カストルの脇腹に狙いを定める。カストルが素早く反応してケリの構えを取ったので仕方なく距離を取ろうと後ろに跳ねたのだが……。

「ッ！！　グッ……！」

自分は明らかにカストルの攻撃判定の外に退避した。しかし、腹部の痛みは本物だ。ツバサは痛みで顔を歪めながらカストルを見る。

「……高圧電波を足に乗せ、足を振りぬくと同時にそれを解放。オレにぶつけたって事か」

簡単に言えば、サッカーのボールを自由なタイミングで自分の足から放てるものだと思えば良い。横薙ぎに蹴ったなら上下に、振り子のように蹴ったなら横に逃げないと避けるのは不可能だろう。なにせ、自由なタイミングで放てるのだから。

『ほう。たった一回で技を見切るとは、大したものだ』

「ッ！？　クッ！」

カストルばかりに気を配り、ギャラクシーが近づくのに気づかなかった。ギャラクシーはツバサの黒髪を鷲掴みにし、地面に叩きつける。そして、そのおもちゃが壊れても良いから自分の好きなよう

にして遊ぶ子供のように、残酷で楽しげな笑みを浮かべる。

『それでは、お邪魔するよ』

「何を……ッ！？」（何だこの感覚。まるで何かに心の中を読まれているような……）

ギャラクシーは自分の上で念じているだけだ。カストルも静かに待機している。そうこうしている間に、変な感覚は様々な記憶を渡り歩く。

自分の偽名、結界、この世界の情勢や事件……。

ギャラクシーは、目を閉じたまま不意に鼻で笑った。嘲るような、見下すような……。

『……贖罪で1つの国を作るとはな。呆れたものだ』

「ッ！！　てめぇ、オレの記憶を……」

『ああ。読んでいるぞ。……ツバサ君。……ほう、研究所でそんな事が』

悪趣味この上ない。人の記憶を勝手に覗いては、それを読み上げて悦に入る。ギャラクシーを体の上からどかそうにも、自分の両手はギャラクシーの足の裏に踏まれているため動けない。

記憶を渡る変な感覚はギャラクシーのモノのようだ。そしてその感覚はとうとう、帯広博士やレイとの日々、そして、自分の計画といった大事な部分にまで踏み込もうとしていた。

「ッ！！　そこは……覗くな！」

ギャラクシーが記憶から記憶へ渡り歩くのだとすれば、進む先の記憶を切ってしまえば良い。消去（イレイズ）。もう一人の自分の生み出した魔

力で、その名の通り『消す力』を有する。物でも、記憶でも。直前の記憶を消す事で、記憶と記憶の間を渡れなくするのだ。

通常なら、魔法を解けば消したものは戻ってくる。しかし、この時は急いでいたというのもあって、消す記憶と強さを選ばなかった。

それはさておき、ギャラクシーは渡るための記憶が失われた事で、僅かな隙が出来た。その隙に、ツバサは上体を少し浮かせてすぐに地面に押し付ける。その時に生じる反動で腹を跳ね上げ、ギャラクシーを持ち上げる。後は巴投げの要領で自分の頭から少し離れた所へ落とす。

不意打ちとはいえ、ギャラクシーには倒れて起き上がるまでしか隙が無かったが、ツバサが起き上がるには十分な時間だった。

『……今のは一体……』

頭から地面にぶつけたのに大してダメージは無い。ツバサが内心で悪態をついている時、ギャラクシーは口元を引き上げ、堪えるような笑みを浮かべる。

『なるほど。先程覗いた記憶には魔法から来る結界の事があった。魔法を使って自分の記憶を断線。私の探りを止めたというわけだな？』

ツバサはこれ見よがしの舌打ちで答え、それを肯定と受け取ったギャラクシーは笑みを引き上げる。

『やはりか。魔法とは興味深い。君の体を色々と調べさせてもらうよ。……断るなら――』

ギャラクシーはカストルを見る。カストルは静かに頷き、手を畑に向ける。そして次の瞬間――

ズドォォォォォォン！！！

先程のカストルの行動は脅迫だったらしい。断ったら自分が『ボンッ！』という事だ。

ギャラクシーは勝ち誇ったような、優越感に浸ったような笑みを浮かべる。

『……カストルが何をしたか、分かるかな？』

「……高圧電波を畑の水に照射。爆発させたんだろ？」

気に食わないという感情を表に出しながら言ったのだが、ギャラクシーはお気に召さなかったようだ。眉を寄せて不機嫌さをかもし出す。

『……怯えると思ったんだが、まだ痛め付け足り無かったようだね。カストル』

文脈からして、人を痛めつけて苦しませるのが楽しみなようだ。ますます悪趣味この上ない。カストルが構え、ツバサも応じる。両者向かい合い、先程の続きが始まるかと思われたが……。

『そこまでです』

透き通るような女性の声。そちらを向くと、淡い茶髪の少女、ア

イリスが立っていた。ギャラクシーは先程見たツバサの記憶で彼女がデューオによって救われていた事を知っている。また、ツバサの方は信じられないと言う表情だ。

「アイリス……お前なんで……」

自分達との戦闘で記憶を覗かれたこと以外全く余裕の態度を崩さなかったツバサがその余裕を崩した。ギャラクシーはそれで確信する。彼女は、アイリスは、ツバサに対して人質に使えると。

だが、アイリスはギャラクシーの思惑を察したように彼に警告を発する。

『あなた達はすぐに退散した方が良いですよ。……聞こえませんか？』

『なにを――』

言いかけたギャラクシーの言葉は、規則正しい音によって遮られる。それは、サテラポリスのサイレンの音だ。アイリスは無表情を崩さず、ギャラクシーに再度警告を発する。

『大事（おおごと）になるのは困るのではないのですか？』

サイレンの音はドンドン大きくなる。ギャラクシーは不快な感情を露にした。

『クッ！　仕方が無い。カストル、帰るぞ』

『はい』

彼らは帰っていく。元来たゲートから。自分が先に入って後からカストルを入れる辺りがギャラクシーらしい。

アイリスは気持ちを切り替えるように息を1回する。

『いつも通りのサボりだと思ったら、そうでもなかったね』

「その辺はオレも文句を言いたい。とんだ休日だった。……サテラポリスは？」

ギャラクシーとカストルが退散したのは面倒事を減らすためだろう。その元となるサテラポリスのサイレンが、今は聞こえない。

『ああ、アレはウソよ』

サラリと言ってのけた。

「あれ？　お前ってウソツキちゃんだっけ？」

『あの場合、あなたを助けるにはあれしかなかったし』

「ふぅ～ん。……そんなわけで、もう一回休日を――」

『帰りましょう』

「……はい」

どさくさ紛れの誤魔化しは通じなかった。有無を言わさない言葉に逆らえず、ツバサとアイリスは帰路につく。

「……あれ？」

『どうしたのツバサ？』

周りを見て立ち止まるツバサをアイリスが振り返る。

「いや、何でも……無い……」

『？　大丈夫なら良いけど』

ツバサの歯切れの悪さにアイリスは首を傾げたが、また歩き出す。
ツバサも歩き出すが、抱いた疑問は消えなかった。

（……この世界が嫌なモノに思える。……オレ、自分の何を消したんだ？）

――そして今――

「……あの時消したのは何だ？　酷く大事なモノだった気がする。……オレの……大事な感情……？」

ここからは言外、つまり内心だ。

（そういえばさっきの戦いでギャラクシーを引きずり込んだ青い穴……あれはあいつらの世界へのゲートのようなものとして、そこから聞こえてきた声……どこかで聞いたような……。思い出せそうで思い出せん）

各人がそれぞれの事で悩んでいる時、この男もまたその１人だっ

た。

（……アレがツー君の言っていたギャラクシー。確かに、僕の本能が逃げの一手を示唆していた。それほどまでに危険な相手……か。……それより、あのリキッドという子、どこか、キングに似ていたような……）

ゲイルは思いっきり深呼吸した。

「ふ～～～。……いつまでも悩んでいても仕方が無いか。……そういえばこの国に帰ってくる時、ツー君だけでなく、スバル君達も考え込んでいるようだったな……。うん。彼らにもリフレッシュしてもらいますか♪　僕だけ吹っ切っても悪いしね♪」

思い立ったが吉日。その言葉を体現するかのように、ゲイルはある場所に電話をかける。

第７５話　出遭いの記憶（後書き）

普通にコラボさせただけじゃあ面白くないので、ツバサの記憶とも絡めました。ぶっちゃけちょうど良いとか思ったり。ふっふっふ……。

ちなみに、ツバサが消したのは自分の思いだけです。彼が最後に思い出せんと言ったのは、単に彼が忘れているだけです。

最後に、クイックロッドさん。色々キャラの正確を教えて頂き、ありがとうございます。もちろん、いつも読んでくださっている読者の方々にも感謝してますよ。

それでは次の機会まで！　といっても、感想ならいつでも受け付けますけどね♪

第７６話　チャリティー（前書き）

念のための補足として、チャリティーとは慈善事業のことです。つまり、ボランティアです。

そんなわけで、今回は『無償のやり取り』がテーマです。ＣＬＡＭＰキャラも出ますよ。格段に陽気なのがね。

第76話　チャリティー

「……ゲイル」
「何かなツー君？」
「これは何のマネだ？」

スバルを始め、ツバサやミソラ、先日の戦闘に参加したメンバーはゲイルの集められた。ルナ達も来ているのだが、問題はその場所だ。いや、施設と言っても良いだろう。
その施設は……。

「な～んか皆さん陰気な顔してるみたいだからね。小さい子と遊んでリフレッシュしてもらおうってわけ♪」

孤児院だった。今スバル達は敷地の門の前に立っている。
ゲイルは、ツバサから突っ込まれる前に子供達に声を張り上げた。

「みんな～？　ツバサお兄ちゃんが遊んでくれるって～♪　他にも僕の友達が来てくれたよ～？」
「お、おいゲイ――」
「ツバサお兄ちゃんだ――！！」
「久しぶり――！」
「こないだのロボットごっこの続き――――！！」

ツバサの反論は子供達の声でかき消された。声と共に子供達がツバサの周りに集まり、ツバサを施設の中に引っ張って行く。
ツバサは諦めたようなため息をつき、スバル達に気軽く手を振って施設の中に入っていった。
スバルは呆然とした様子でゲイルに尋ねる。

「ツバサ君って、人気あるんですね……」
「あはは～。今回みたいに僕が強引に誘って、子供達の遊び相手になってもらっているうちに仲良くなっちゃってね～♪　それにほら、彼って乗りやすいから♪」
「ねぇゲイルお兄ちゃん……」
　不意に下から声が聞こえる。そこには、まだ5歳ぐらいと思われる男の子がスバル達を見ながらゲイルに尋ねていた。他にも、まだ何人かはスバル達の事を不思議そうに見ている。
　ゲイルは普段の気さくさに優しさも織り交ぜて、目の高さをその子に合わせる。
「ん？　何だい？」
「このお兄ちゃん達は？」
　男の子が指差すのは当然スバル達だ。逢った事が無いのだからいきなりフレンドリーとはいかないだろう。ゲイルは微笑みながら答える。
「ツバサお兄ちゃんの友達だよ。先生から聞いてない？」
「あっ！　ありが――」
「それから先は行っちゃダメでしょマーク！」
　おっとりした印象を受ける男の子を叱り飛ばしたのは、おおよそ同じ年頃の女の子である。何を言いかけたのだろうとスバル達が首を傾げたのを見て、女の子は男の子を引っ張って施設に戻っていった。途中で振り返り、一言告げる。

「夕方まで帰らないでね！」

ゲイルの言葉がどういった効果なのかは分からないが、その言葉で安心したのか、残された子供達はそれぞれスバルやミソラなど、一同の手を引っ張って施設の中に案内する。

残されたのはゲイルと暁である。暁も誘われたのだが、ゲイルと話がしたいからという理由で後で遊ぶ約束をした。そして、暁はゲイルに話しかける。

「……驚いたよ。お前がこんな事をしていたなんてな」

「ん～。最初はツー君が始めたことなんだけどね～。まぁ、僕自身子供は嫌いじゃないし」

「……みたいだな」

【いろんな意味で】という言葉は口にしないでおく。そんな暁の内心を察したのか、ゲイルはニヤニヤした顔で暁を見てくる。

暁は居心地が悪くなって話を逸らした。

「それより、子供達の事もツバサが始めた事とはな。あいつはどれだけ他の奴の事を思ってるんだ……」

その言葉は、感心半分、疑問半分といった割合だ。ゲイルは、施設の敷地内で子供達と遊んでいるツバサを見ながら答えた。

「……昔はもっとすごかったよ。目の前の人だけでなく、社会とか世界とか……そういう漠然とした事も思っていたから」

「ん？　それは今も何じゃないのか？」

「彼って、たまに辛辣な事を言わない？」

問いに問いで返したゲイルのマナーはともかく、その言葉で暁は

ハッとした。そう言われてみれば、彼は個人ではなく世界に対して異常に冷淡で辛辣な物言いをしてはいなかっただろうか。現実的と言い換えることも出来るが、ゲイルの言う辛辣というのも、しっくりきてしまう。

暁に思い当たる節があるのを彼の顔で察したゲイルは続けた。

「アイリスの話では、大体5ヶ月前からツバサが世界というものに対して辛辣な価値観を持つようになったらしい。……目の前の個人に対しては優しいんだけど、世界に対しては……ね」

「……5ヶ月前に何が？」

「さぁね。それより、君も遊んできたら？　未来のお父さん？」

真剣な声からいきなりおちゃらけた声になったゲイルに物理的にズッコケかけながら暁は聞き返す。

「お、お父さん！？」

多少上擦った声の暁に、ゲイルは恋愛系で同級生をからかう小学生のように、ニンマリとした笑みを浮かべる。

「そろそろシーちゃんにプロポーズしたんでしょ？」

「な、何でそれを！？　……まさか、ツバサか！？」

もしそうだったら後でケンカものだ。暁が意気込んでいる中、それをゲイルはあっさり無にした。

「鎌かけただけ♪　そっか～。2人くっ付くのか～。結婚式では呼んでね？」

どうやら嵌められたらしい。暁はプルプルと拳を震わせて叫んだ。

「誰が呼ぶかーーーーーーーー！！！」

青年2名の大人気ないケンカは置いといて、スバルを始めとしたスバル達は子供達の面倒を見ている。

スバルは自分と同じ宇宙の好きな子に宇宙の事を教えてあげている。時々尊敬の眼差しで「スバルお兄ちゃん物知り！」などの事を言われるたびにスバルは照れたような顔になり、それをウォーロックがからかい、スバルが怒るを繰り返していた。

ミソラは子供達に発声のイロハを教えている。一応教えている立場なわけだが、なぜか馴染んでいる。ミソラも子供達も本当に楽しそうで、笑っている時の顔が似ているからだろうか。彼女の屈託無い笑顔は、自然と子供達を引き寄せる。

ルナは先程マークと呼ばれた子を連れて行った女の子（マリィという名前らしい）と話をしている。どうやらその女の子はまとめ役らしい。気が合うのだろう。そばでは、ゴンタとキザマロ、マークがため息をついた。

「……互いに影響を受けて良からぬ事を考えなければ良いのですが……」

「……マリィちゃんの場合、考えそうな気がするよ……」

「お前も苦労してんだな」

彼女達の側近達の会話であった。

ソラも似たようなもので、側転や逆立ちを教えるといった、彼女らしい活動的な遊びをしている。

「はい、手を離すよ～」

「いやっ！　離さないで！」

子供に逆立ちさせる手助けとしてソラが逆立ちしたその子の足首を掴んでいるのだ。その子はまだ恐いらしく、腕が震えている。

ソラは明るく元気付けた。

「大丈夫。お姉ちゃんがさっき教えたようにしてごらん？　倒れそうになったら支えてあげるから」

「う、うん……」

ソラはそっと手を離す。その子は覚束ないながらも、その手で地面に立っていた。

「や、やった！　お姉ちゃんありがとう！」

「うん！　どういたしまして」

何だかんだで体操のお姉さんと化していた。そして、そんな和やかな彼女達の近くに、重量感のある人間が近づいてきた。

「よぉ、楽しそうだな……」

「あ、ツバ……」

ツバサの方を向いたソラの言葉と顔は固まった。及び、笑いを堪える。怒る気力もないのか、ツバサはため息をつくだけだった。

「……笑うな。オレだってきついんだから」

「ご、ゴメンゴメン。で、でも……くくくくっ」

彼女の堪えるような笑いには無論原因がある。

ツバサの両腕（【　前腕　】と【　上腕　】）、そして両足（【　ふくらはぎ　】と【　ふともも　】）に子供が張り付き、さらには肩車という完全装備のツバサがそこに居た。

子供達の言っていた『ロボットごっこ』とは、これの事だったらしい。恐らく、複数のロボットが合体するスーパー戦隊シリーズから影響を受けたのだろう。

ツバサが言う様に、重そうだった。

ツバサに肩車している子がツバサに話しかける。

「ツバサお兄ちゃん次あっち！」

「はいはい……。じゃあソラ、お前も頑張れよ。小さい子って案外恐いから」

「は～い。……こんなに可愛いのに、何でアイツはそんな事を言うのかな～？」

「「「ね～～～～♪」」」

ソラが首を傾げると子供たちも傾げる。すっかり懐いていた。

一方ジャックは……。

「……なんでオレの所には誰もこねぇんだ……？　いや、別に良いけどよ……」

そう。ジャックの近くだけ誰も居ないのだ。恐らく、目つきが悪いためだろう。なお、姉のクインティアは本を読んで聞かせてあげている。暁も高い高いなどをしていた。

そんなジャックの元にも遂に、子供が近づいてきた。

「お兄ちゃん遊ぶです――――――！！」

「おぐはぁ！！？」

活発な敬語と共にジャックの背中にタックルが炸裂。呻きながら後ろを見ると、ピンク髪で白い服、ショートヘアーの女の子が立っていた。その横には、鈴の形をした髪留めでおさげに結った黒髪の女の子がため息をついていた。

ジャックが状況の把握をしている時、ピンク髪の女の子がどこから出したのかタンバリンを出してなぜか踊りだした。

「あっそぶですったらあっそぶです～♪」

なおさら混乱するジャックに、黒髪の子が申し訳無さそうに謝罪した。

「すみません。この子ちょっと元気が良すぎて……」

「……」

ジャックの中で、この2人はデコボココンビのランクを得た。素っ気ない黒髪の子に対し、躍っていたピンク髪の子は怒り出す。

「琴子さん！　あなたも踊るです！」

黒髪の子は『琴子』というらしい。琴子は再びため息をついて断る。

「何で私ま……でぇ！？　ス、スモモさん！　私は踊るとは一言も！」

琴子の抗議に対し、ピンク髪の子、スモモは問答無用で琴子の手を取って踊り始めた。

「今踊ると言ったではないですか琴子さん」

「屁理屈ですわ――――!!」

「……それ以前になんで社交ダンスなんだ?」

ジャックは、いま自分がポロッと言葉を零した事を後悔した。スモモの目がジャックを捉え、キラキラした目でジャックを見る。ジャックはその視線の意味を理解し、諦めた。

「お兄ちゃんも踊るです――――!!!」

予想通りの展開だ。

ジャックはその後も2人の漫才と踊りに付き合わされたが、スモモのボケに琴子と2人で突っ込む時は中々楽しそうだった。

――数時間後――

「はぁ、はぁ……ツ、ツバサの言っていた意味が、よぉく解ったわ」

ソラは子供達と追いかけっこをしていたのだが、彼女の体力は尽きかけていた。運動部に身を置いている彼女がである。

「ソラお姉ちゃん待て――――!!」

「ちょ、ちょっとは休ませてよ――――!!」

子供の方はいたって元気だ。経験者なら分かるだろう。彼ら、幼い子供というのがどれだけタフかを……。

作者自身、親戚などが集まる時に小さい子の面倒を見るついでに遊んだ事があるのだが、その際実感した。彼らの体力は底無しだと。無論生物である限り体力に底があることは重々理解している。しかし、そう思えるほどに、彼らはタフなのだ。

逃げながら周りを見ると、ツバサはグッタリした様子で遊具に座り、走って遊ぶ子供達を眺め、スバルは自身の知識が尽きかけ、ミソラの笑みにも疲れの色が見えてきた。

――― 夕方 ―――

「スバル君！　ツー君！　皆！　そろそろ帰るよ！」

孤児院の中から飄々とゲイルが出てきた。彼は孤児院の中でのんびりしていたらしい。僕（スバル）はジャックから聞いたのだが、彼の話だと、ゲイルは孤児院の先生にナンパをしていたらしい。そんな話はすっかり一行に広まり、スバル達からは恨めしそうな目を送られる。

「あれれ～？　何で皆そんな恐い目をしているのかな～？」

この期に及んでまだすっとぼける算段のゲイルにツバサが衝動的に拳を握って一歩踏み出す。ジャックはツバサの肩に手を置き、首

を横に振った。一見止めているように見えるが、ジャックの目は語っていた。

（ここは子供達の前だ。ここから十分に離れたら実行しよう）

ツバサはその意味を理解し、頷く。ゲイルはそれに気付いているのかどうかは分からないが、別れを惜しむ子供達に声を張り上げる。

「それじゃあ皆！　お別れのあいさつをしようね」

彼の言葉に、子供達は息を吸いながら互いにタイミングを計る。そして、一斉に言った。

「「「「お兄ちゃん、お姉ちゃん、護ってくれてありがとう」」」」

「えっ？」

その言葉に、一同はキョトンとする。「えっ？」と声を発したスバルに、ゲイルはポンッとスバルの頭に手を置く。

「この子達なりにね、護られたってのは分かっているんだよ。君達はこの国に来て、２回もこの子達と、民と……国を護ったんだから。……最初の１回は乗っ取られた僕だけどね」

最後はバツが悪そうに笑って見せるゲイル。彼は続ける。

「君達に見せたかったんだ。君達が護った命を。そして、その価値を」

「価値……」

スバルはゲイルの言葉を静かに反芻する。自分達が護った命……。子供達……。無邪気な笑顔……。未来を歩む者達……。未来の、希望。

スバルの他にも、ミソラや暁、ジャックやクインティア、ソラ。各々が各々の思いを胸に、子供達を見る。ゲイルは、自分の言葉が浸透したのを見てから歩き出す。慌ててゲイルの後を追うスバル達の背中に、子供達の声が届く。

「また来てね――――！」
「待ってるよ――――！」
「ジャックお兄さん！　今度来た時もスモモと踊ってくださいね――――！」
「踊るのはともかく……待ってますわよ――――――！」
「ぐすっ……これでサヨナラだったら許さないんだからね――――――！」

子供達は大きく手を振る。ちなみに最後のは子供達のまとめ役のマリィだ。スバルは手を振り返し、ウォーロックに語りかける。

「ねぇウォーロック」
『あ？』
「……たまにで良いからさ、また来ようか」
『……へっ！　電波変換は道具じゃねぇって言いてぇとこだが、お前がどうしてもって言う時は良いかもな』
「ふふっ。ロックくんも素直じゃないな～。その時は私も行くよ。絶対誘ってね、スバル君」
『ポロロン。それなら私も一緒ね。にぎやかになりそうだわ』
『ゲッ！　ハープ！　てめぇもか！？』
『当然よ。私がいないとミソラは電波変換できないんだもの』

上品に答えたハープにウォーロックは二の句が継げなくなり、下あごをワナワナ震わせている。また、暁やジャック、クインティアも……。

「ジャック、分かっているとは思うけど……」
「分かってるよ姉ちゃん。ゲイルがサボってナンパしてた分はチャラにしてやる」
「……それで良いわ」
「ははっ。今回ばかりはゲイルがヒーローってやつだな」
『シドウ、あなたの言葉はいつも幼稚だと思うのですが？』
「う、うるさいぞアシッド！」
『キャハハハハハ！！　まるでダメなお兄さん。略してまダおってやつ！？』
『いやいや、どっちかってぇと中二病だろう』
「……オレ泣いて良い？」

今回は本気で効いたらしい。真下を見るように項垂れて、トボトボした歩きになった。コーヴァスとヴァルゴは爆笑。ジャックとクインティアは2人を注意する。
そして委員長トリオも……。

「……あのマリィという子。きっと将来は立派なリーダーシップを見せてくれるでしょうね」
「委員長がそう言うんだったら当然だぜ！」
「……」（僕としては、2人の接触により、これから近いうちに何かが起きそうな気がするのですが……）

ルナの別れの哀愁はゴンタは察する事が出来ず、キザマロはこれからを懸念するあまりそれに気付かなかった。数秒後、ルナは空気

を読めない2人にメデューサを思わせる眼光を飛ばしたそうだ。
その眼光にゴンタとキザマロが跳び上がったそんな時、ソラは両手を上に伸ばしながらツバサを見る。

「あ～～～疲れた～～～～。……でも、楽しかったね」
「まぁな。来るたびにあいつら新しい遊びを思いつくから飽きない」
「またまたぁ、ニヒル気取っちゃって♪　素直に楽しいって言いなさいよ」

ソラは「ニッ」と笑いながら、肘でツバサをうりうりと突く。それに対しツバサは無意識に笑みを零した。

「照れくさいだろ？」
『照れくささ隠しにニヒルを気取るって……男としてどうよ』

ツバサとスザクがカスかに火花を発し始めたのを見て、ソラはため息混じりに話を逸らす。

「はいはいそこまで。……まぁでも、今日はゆっくり眠れそうだね」
「その点は異議なし」
『ツバサと同じ意見ってのは気に食わないけど、私も疲れた～～～～。今日はゆっくり寝るわよ～～～』

スザクはそう言いながら思いっきり羽を伸ばす。彼女の言葉が聞こえたらしく、ゲイルは後ろを振り向いた。

「ん？　まだ君達への歓迎は終わってないよ」
『ふぇい？』

スザクは羽を伸ばしたままだったから変な声になってしまった。

スザクがその事で恥ずかしがり、ソラの後ろに隠れる中、ツバサは訝しげにゲイルに問う。

「歓迎って、まだ何かあるのか？」

「当然！　君達が護ったのは子供達だけじゃないよ。……ほら」

ゲイルは町の中心部、広場を指差す。そこは、屋根から屋根へライトを縦横無尽に吊るして明るくした場所になっていた。さながら、イベント会場やお祭り会場のようだ。

「これって……」

驚いているスバルにゲイルは目線を合わせ、笑顔を作る。

「ほら、こないだバーベキューをドタキャンさせちゃったでしょ？　だから、その埋め合わせも兼ねているんだ♪」

「そういう事だ。色々とサンキューな。ガキ共？」

後ろから機材を運んできた男性はそう言ってスバル達に笑いかける。言葉はいささか乱暴だが、その響きの中にトゲは無い。

「……夜更かしするなって女将に言われてるけど、今日くらいなら良いよね」

「まぁ、良いんじゃね？」

ソラの呟きを、ツバサはちゃんと拾う。

今日の夜は長そうだ。

第７６話　チャリティー（後書き）

次回は国を挙げてのバーベキュー！　この小説を構想していた頃から書きたかった事も書けます。お楽しみに！

ヒントは『デュエット』です。

……長くなりそうなら２話に分けますけど、ね……。

第77話　2つの影（前書き）

お待たせしました！　長くなったので2話に分けます。歌の方は次の話です。

第77話　2つの影

静まり返る会場。国王として、ゲイルは開会のあいさつをしようとしていた。

「あ～あ～……ただ今マイクのテスト中」

「んなもんしなくてもちゃんと聞こえてるよバカ国王！」

ゲイルのマイクテストに民が陽気に、気軽く野次を飛ばす。ゲイルは「なんだと――――！」と怒っているが、本気で怒っていないのは明々白々だ。

民と王が同じように接する。身分や力ではなく、尊敬で治める。

……これも、国として1つの形なのだろう。

ゲイルは1回セキをして、場と声を整える。

「え～それでは皆さん。今日は盛大に――」

ゲイルは右腕の拳を固め、勢い良く天に打ち上げた。

「飲むぞ――――――――！！！」

「「「「「オッ――――――――！！！」」」」」

「「「「「……」」」」」

周りが酒を片手に盛り上がっている中、スバル達が突っ込みたかった事は……。

「……ツバサ君、このパーティって僕達がこの国の防衛に協力したお礼ってゲイルさんが言ってたような気がしたんだけど――」

ツバサの方を振り向きながら尋ねたスバルは固まった。ツバサはちょうど、並々と注がれたビール（ジョッキ）を気前良く飲み干したところだったのである。それでも、質問は聞こえていたらしい。空になったジョッキを置いて答えてくれた。

「まぁ、確かにオレらがこの国の防衛どころか護ったってのが理由だけど、ここの奴ら全体的にプライド高くてさ。何せ今までほとんど自分の力で生きてきた奴らばかりだ。素直に自分から相手をほめたり認めるってのは無いよ。だから、飲み会だの子供達を護ってくれた礼だの言って誤魔化しているってわけ。照れくさいんだろうな」

「それじゃあ……」

「ああ。お前らの事はちゃんと認めてる。素直にそれを出せないだけだ。お前らもちゃんと楽しめよ？　でないと、頑張って準備した奴らに失礼だからな」

「ツバサ君……うん！　分かった！」

スバルは元気に頷き、料理の皿を手に取る。他の皆も続々と手に取っていった。ゴンタの場合は猛牛の如く、スバルの頷きと共に料理に突進、及び暴食している。見かねたルナが睨みながら注意する。

「ゴンタ、あなた行儀が悪いわよ」

「ばっべうめぇんばぼん」

「ええぃ！　話すか食べるかどっちかにしなさい！」

ルナの委員長ぶりはここでも健在だ。なお、ほとんど恒例となりつつあるゴンタの訳は、「だってうめぇんだもん」である。

ゴンタが必死で口の中の物を喉に押し込んでいる時、周りから笑い声が聞こえてきた。

「わはははは！　ぼうず、お前将来この子の尻に敷かれるのがお望みか？」
「し、尻って……女性の前でそんな事を口にしないでください！」
ルナが真っ赤にして男性に抗議をしている時、ようやく口の中を空にしたゴンタは唸った。
「う～ん……重そうだな」
「ゴンタッ！！」
「ひぃ！？　ゴメンよ委員長！」
「わっはっはっはっは！！」
ゴンタの一言でルナの怒りはゴンタに飛び火し、彼女の眼光にさらされたゴンタは飛び上がる。２人をからかった男性は大笑い。
その様子に対し、ツバサは喉の奥で笑いながら感想を言う。
「ゴンタ、その辺ぐらいは知っとけよ」（浅学過ぎるにもほどがある）
そう言いながら２杯目を飲もうとしたが、誰かに襟首を掴まれてむせる。むせながら後ろを確認すると、ソラが立っていた。手ぶらだ。
「あれ？　お前は食わないの？」
「うん……その前に、ちょっと……良い？」
疑問系でありながら、すでにソラはツバサの腕を引っ張って強引に立たせている。アイリスはジョーカーをハンターから引っ張り出した。スザクも自主的にソラのハンターから出る。邪魔者はおいとま、だ。

どこかに行く2人を見て、ミソラはソラに応援の眼差しを送る。

「頑張ってね、ソラさん」

「？　何を頑張るの？」

『……スバル君。まさかとは思うけど、分からないんじゃ……』

スバルが頭にハテナを浮かべて、ハープは恐る恐る尋ねる。スバルは首を傾げた。

「？　何が？」

『オレにも分からんぞ。おい、何だハープ。言ってみろ』

「『……何でもない」』

「『？」』

どうやら、彼らの鈍感ぶりは今だ健在らしい。ミソラとハープは分かりきったため息をつき、スバルとウォーロックは揃って首を傾げた。

彼女達のため息の理由はウォーロックとコーヴァス以外には分かったらしく、2人には暁達だけでなく、国の人達からも同情の眼差しを送られたそうだ。

「……それで、何のようだ？」

ツバサが連れられた場所は、会場から少し離れた路地。会場から人の笑い声が響いてくる。人気は無し。

背を向けていたソラはツバサと向き合った。

「こないだの風って、何？」
「……それ、か」

彼女の言うのは、ビャッコ戦でツバサが巻き起こした風だ。あの時はソラを死なせないために、力……魔法を使ったのだ。ファントムブラックの時みたいに自分の命を消費してどうにかする事も出来たが、あの力は計画に必要だ。

魔法を使う事で結界が揺らぎ、飛王（フェイワン）・リードに隙を与える事になったが、ツバサ自身、その選択は後悔していない。

問題はこれからで、ツバサがスバル達に魔法の事を話さない理由は3つある。

1つ目は、話す必要が無い。それほど切羽詰っていない時に話しても仕方が無いだろう。

2つ目は、大方信じてもらえないだろうからだ。この科学万能の時代で【　魔法　】という単語を使えば笑い者になるだけだ。

3つ目は、世界を目覚めさせないためである。その次元が魔法を使える者を生み出した以上、それは魔力を持つ者を生み出せる次元という事になる。それが全人類でツバサだけと言うのは、確率から見てもありえない事だ。

そもそも、ツバサが魔力に目覚めたのはもう1人の自分、クロウ・リードに出逢ってからだ。それ以前は、その片鱗（へんりん）すら見せていなかった。それはつまり、刺激が無ければ力に目覚めないという事になる。

刺激が無ければ能力に目覚めない世界。それは、『世界が眠っている』とも言える。おそらく、魔力を持つ者が一定数にならなけれ

ば、この次元は魔力を持つ者を生み出すことは出来ない。

仮に、魔法が端末のように当たり前に人間が持っているものと考えて、それが万人に理解されるのにどれだけの時間と犠牲がいるのだろう？　人が自分と違うモノに対して何をしたかは歴史を見れば明らかだ。

魔法という存在が不確定のうちは迫害。
存在が証明されたら科学者達の人体実験。
魔法を使える者がそれなりの数になったら戦争。

相手は自分と違う。そう思うだけで、人はその存在に対し残酷になれる。

スバル達の世界では、数ヶ月前に全人類が1人の少年のためにレゾン（目標）を統一した。その事から、この次元はまだマシな方だと思われる。しかし、全く起きないという保証は無い。

だからツバサは、刺激となる魔法の使用を制限していたのだ。……まぁ、彼の計画が成功すればそんな血生臭い可能性は無くなるのだが……。

どうこう言おうと、彼の結論は決まっている。彼は戦闘中に、「忘れていなかったらな」と言っていた。それはつまり、ソラがその事を忘れていなかったらちゃんと答えるという約束でもある。

ツバサは深呼吸をして、疑うような目でソラを見た。

「……オレが魔法使いでした～。って言ったら信じる？」
「……」

沈黙が痛い。

「……悪い、今のウソ」
「信じるよ」
「はっ？」

沈黙が痛かったので訂正したのだが、ソラは信じると言った。ツバサの間の抜けた声に対し、ソラはいつもの可笑しそうな笑みを浮かべた。

「ふふっ。そこまで間抜け面にならなくても良いでしょ？」
「だけどお前……なんで……」

ソラは腕を組んで考え込むように「ふむ」と唸った。

「実は、私もその手の不思議な経験があってね。小さい頃旅館の近くで道に迷った時に、綺麗な声がしたんだ。優しくて、透き通ってて……。あ、若い男の人の声だった」
「……」

ツバサの脳内検索。該当数1。セレナードだ。フォルテは間違っても人助けはしない。旅館にて、他人の夢を別の人の夢に移せる事から、あいつなら人の意識というネットワークを渡るぐらいは容易にやってのけそうだ。

黙っているツバサをよそに、ソラは続けた。

「そしたらすぐそばが旅館でさ～。いや～あの時は恥ずかしかったわ」

すぐそばで迷う。この事はある可能性を示唆する。

「……前から気になってたんだけどよ、お前ってもしかして方向音痴？」

思わず尋ねたツバサに対し、ソラは苦手な物を見るようにたじろいだ。

「うぅ……。そこまでストレードに言うかな普通。……けっこう気にしてんのに……」

肯定した。今思えば、彼女は大抵1人で行動というのはあまり無かった。それはつまり、1人だと確実に迷うからだろう。

「……」（帯広博士の墓とか、ああいう1人で行動するときは誰かに道を聞きながら行ったんだろうな）

ツバサが自分の中で納得した時、ソラが恨めしそうに睨んでいるのに気付いた。

「……黙ってないでなんか言いなさいよ。からかわれたと思うでしょ？」

「あ、いや、悪りぃ。意外な事実に驚いただけだ。からかってはいない」

それを聞いて、ソラは少し長めのため息をついた。

「な～んだ。それならそうと言いなさいよね？　ほんっとに気にしてんだから」

「ははっ……悪りぃ。ところで、さっきの魔法の事だけど……」

「ん？　あぁ、あれでしょ？　エスパーみたいな」

「……」

厳密に言えば違うが、あえて突っ込まないようにしよう。余計にややこしくなりそうだ。教えたら教えたで目をキラキラさせて「やってみて」攻撃をされかねない。

そんなツバサの内心を知らないソラは踵（きびす）を返した。

「行くよ。ツバサ」

そう言いながら、彼女は明かりを背にツバサを呼ぶ。

「へいへい」

『飛び交うシグナル　それぞれの今日を乗せて♪』

広場の中心からミソラの歌声が聞こえてくる。どうやらリクエストされて歌っているらしい。その歌声を聴きながら、ソラは素直に感想を言う。

「さすがアイドル。綺麗な声だね。それに楽しそう」

歌というのは素直なもので、その人の精神を映し出す鏡のようなものだ。今のミソラの歌声は、リラックスしていて、楽しげで、夜の暗さを吹き飛ばす錯覚を見てしまいそうだ。

「……だな」

ツバサの同意で、ソラはツバサの手を掴む。

「よし！　行こう！」

そして、勢い良く走り出した。

「お、おいソラ！　腕が痛い！　そんな勢い良く引っ張るな！」

「あはははは！　良いじゃん良いじゃんそのぐらい。男なら我慢しなさい！」

聞いちゃいねぇ。

思わずため息をついたが、不思議と悪い気はしなかった。

ズルリ……

闇から闇が這い出るという表現が正しいだろうか。ツバサの視界の片隅で建物の影から黒いモノが動いた。それは、猫などにしては大きく、人という割には酷く無機質で、生きていないモノを髣髴させる。概して、人形に近い。

（……この国を出る前にする事が増えたな）

ツバサは、先程とは違う意味でため息をついた。

第７８話　響く歌声（前書き）

ソロに対して勝手な設定があります。笑えるとは思いますが、少しかわいそうですかね？

それと、デュエットはミソラとソラです。歌の時は、ミソラが『』。ソラが【　】で表示されます。

作者（オレ）の勝手な設定ですが、彼女達の声はミソラちゃんは無論、アニメの通り福圓美里さんで、ソラの方は豊口めぐみさんをイメージしてください。彼女（ソラ）の快活さにぴったりだと思いましてね♪　もちろん、それより合う声があればそちらでご想像ください。あくまで上に書いたのはオレ個人の考えですからね。

それでは、お楽しみください！

第７８話　響く歌声

ツバサとソラがどこかへ行った時、スバル達はというと……。

「はいスバル君。あ～ん♪」

「あ、うん。ありがとうミソラちゃん」

こうして文章だけで見るとスバルは冷静だが、内心は汗が滝のように流れている。静かで自分達以外誰もいないなら照れや少しの恥ずかしさで良いだろうが、今はその逆だ。静かじゃないし、そもそも野次馬が多すぎる。

スバルがスプーンを口に含んだ時、周りからはこんな野次が……。

「……そのスプーンってさっきその子が口つけたヤツだよな」

「ッ！　ゲホッ！　ゴホッ！」

あまりにウブな反応を見せたスバルに周りは「悪い悪い。今のウソ」と謝りながら笑いを堪え、ミソラは慌てて彼の背中を擦る。

「ス、スバル君大丈夫！？」

「う、うん……コホッ」

彼らに悪気があるわけではない。ライラ曰く、卑怯ではないが子供なのだそうだ。まぁ、悪党と卑怯者の違いを言えば、悪党は潔く悪党をやり遂げて、卑怯者は都合の良い道へ逃げるといったところだろうか。だから彼らは、悪党であっても卑怯者でなく、単純に子供らしい。

「だ～から言ったでしょ？　こいつら子供だって」

呆れと笑いを含んだような声。件のライラが華やかなドレスに身を包んで立っていた。彼女のブロンドヘアーと同系色の黄色いドレスに身を包んでいる。しかし、暗めでも薄めでも無いその純粋たる黄色は、彼女のブロンドの髪に埋もれる事はないだろう。

微かに見惚れているスバル（正確には男衆のほとんどが見惚れていた）に対し、ミソラは秘かにスバルの皮膚をつねる。突然の痛みに顔を歪めるスバルを他所に、ミソラはライラに尋ねた。

他の所でも、例えば暁にはクインティアといったように、それぞれのパートナーが相手の目を覚まさせている。無論、スバルに対してやったときと同様にショック療法だ。

「ライラさん綺麗ですね。でも、ゲイルさんのお守りがあるって言ってませんでしたか？」

「ゲイルの方は少しほっといた方が寂しがって面白いでしょ。あなた達の友達を連れてきてあげたのよ」

「と、友達ですか？」

痛みで涙目になっているスバルはライラに尋ねた。痛みで声が上擦っているが、内心は訝っている。今回旅行に行く事になったメンバーはほとんどいる。ツバサとソラならライラを介さずとも自分達で来るだろう。

ライラはそんなスバルとミソラに笑いを堪えながら答える。

「えぇ、この子よ」

ライラが横に道を空けると、そこには屈強な男達に羽交い絞めにされたソロの姿があった。

「ソ、ソロ！？」

あの彼があっさり捕まっているなんて考えられないが、目の前の現実はそれを物語っている。その方は無言だが、目は語っている。

【貴様にこのような姿を見られるなど一生の不覚だ。屈辱だ】

と。

その彼の姿を見たときのスバルの第一感情、『驚き』。第二感情は、『恐い』である。彼の存在が恐いのではない。彼がこうなった経緯を聞くのが恐いのだ。聞いたら最後、諸々の事情を無視して自分達に襲い掛かってきそうだからだ。現時点で気迫で押されているのに、電波変換した彼に勝てというのがムチャだ。

「あ、ちなみにソロがこうなった経緯はね」

スバル達の懸念を知ってか知らずか……否、彼女はスバル達が何に恐れているかを察している。その上で口にしたのだ。

その話自体、普通に聞けば他愛も無い話だ。単に、働いた報酬をもらいにスバル達とは別ルートで国に戻ったソロはライラを始めとした男達に囲まれて、とある手段を使われて捕まえられたそうだ。その後は監禁。

……前言撤回。監禁と拉致という他愛も無くない事態が起こっていた。

閑話休題。そういった純粋な経緯を話してくれれば良いものを、ライラは経緯の説明を最小限にして、そのときのソロの屈辱的な顔とか、ソロの怒りを買うような情緒的な話ばかりしている。そしてそれを聞かされている以上、スバル達も同罪だろう。

ソロの怒りのオーラは、ライラの話が進むに連れて増していく。

「ってわけ。あ～面白かった♪」

それはソロを捕まえた時だろうか。それとも今の状況だろうか。少なくともスバルには、ソロの殺気を浴びながら悠長に話したり笑う事は出来ない。誰かに何かを突っ込ませる暇も無く、ライラは話題を変えた。

「そういえばさ、私個人の願いなんだけど……」

いつも他人で遊んでいる彼女の願いとは興味深い。スバルだけでなく、ソロも怒りを削がれて彼女を見る。ライラは十分にタメを作って皆の意識を自分に向けた後、宣言した。

「生まれ変わったらクルル曹長になるわ」

（（（（（（……もう7割くらいなっている気がする））））））

クルル曹長というキャラを知っているメンバーは内心で一斉にツッコむ。さらに言えば、【なるわ】と、言っている時点で、これはもう宣言ではなく予告だ。確定だ。決意だ。とにかく、願いや宣言ではない。

もはやツッコミ所が多すぎてどれから突っ込んだらいいか分からない。

「そんなわけでミソラちゃん、歌声をきかせて欲しいんだけど、良いかしら？」

「え？　あ、歌ですか？」

呆然としていた状態でさらに不意に聞かれたものだからミソラは慌てふためく。ドラマなどの台詞を話していたらほぼ確実に噛んで

いただろう。おまけにライラは文脈も無く尋ねたのだ。誰だって混乱する。まぁ、それが彼女の狙いなのだろうが。

ライラはニッコリと答えた。

「そう。実はずっとあなたの歌声を生で聞きたいと思ってたのよ♪　ほら、この国から出たら私達まともな人間として扱ってくれないじゃん？　だからさ、お願い！」

ライラは両手を合わせて頭を下げる。その様子は、同級生が友達に何かを頼むような構図だ。ミソラ自身、年上に頭を下げられて恥ずかしそうに手の平を振る。

「や、止めてくださいライラさん！　そんな事しなくても、私歌いますよ。こんな所にも私のファンがいて嬉しいです」

ミソラは自分のファンを大事にする。それどころか、裏方のスタッフにすら気遣いを忘れない。そういう優しい点で、つくづく星河スバルとお似合いだ。

彼女はいつものように黄色いギターを片手にステージに歩いて行く。ライラはミソラの方を向きながら微笑み、手をスバルの肩に置いた。

「良い子じゃない、あの子。スバル君、ミソラちゃんをちゃんと護ってあげなさいよ？」

「……はい」

ツバサよりも性質は悪い（性格が悪い）かもしれないが、彼女も良い人だ。ライラはスバルの返事を聞くとポンッと1回肩を叩いて

歩いて行く。
だが、不意に立ち止まる。

「あ、忘れてたけど、ソロが暴れそうだったら酒を飲ませれば良いから。ソロって酒に極端に弱くてね～♪　本当に面白いわ♪」

そう言ってライラは去っていった。場を混乱させて問題をあやふやにし、自分の身の保身が出来てからトンズラという彼女の作戦は、見事に決まったというわけだ。

「……星河スバル」
「……はい」
「……オレに飲まそうとしたら……分かっているだろうな？」
「……はい」

スバルはソロに逆らえなかった。地球を3度救った彼を責めないで欲しい。暁ですら、顔が引きつるほど怖かったのだ。

『飛び交うシグナルそれぞれの今日を乗せて♪』

険悪な中、ミソラの歌が始まった。綺麗な歌声で、楽しげで、元気な、彼女らしい歌声だ。曲名は『ハートウェーブ』

『同じ周波数重ねあいキミと話す♪』

『迷いためらいを振り切り♪』

『そこにあるはずの道を行こう♪』
『見上げる空は心に積もる願いの色♪』
『描く夢を映し出す♪』
『必ずいつかこの手に触れる明日への地図♪』
『強く高く届くまで　輝いて♪』

賑やかだった。ライブ会場のように熱狂する人もいれば、静かに聴き入る人もいる。

「……下らん」

ソロにはお気に召さなかったようだ。ゴンタが「ミソラちゃんの歌に対して下らんだと!?」と、怒号を上げているが、暁に押さえられてソロに掴みかかるまでには至らない。

「フンッ」

あくまで無愛想に去ろうとしたソロの肩は、人だかりの中から伸びてきた手から強引に組まれた。その手の主を見たソロの顔は、まるで一生分の不幸を目の前にしたような、嫌悪に満ちた顔をした。
その主とは……。

「よぉ、お前がこんなとこに居るなんてどういう風の吹き回しだ?」
「ツバサ君、ソラさん」

ソロの肩を組んだのはツバサで、その後ろからソラがついてきた。
スバルの声に、ソラは明るく答える。

「やっほ。スバル君、皆。お待たせ」
「……チッ」

ソロの舌打ちの意味を解釈するなら、「またぞろぞろと……。群れるなど屈辱以外の何でもない」とかそんな感じで、逃れられない事に対してツバサと自分に嫌悪感を抱いているのだろう。

ソロが無言で腕を振り切ってその場から離れようとするのを、ツバサがソロの肩を掴んで止めた。ソロは振り向かずに尋ねる。

「……何だ？」
「まだ仕事料払ってねぇ。朝まで待ってろ」

そこで初めてソロはツバサを振り返る。

「断る。誰が……ッ！？」

【が】の口を開けた時にツバサから酒瓶を突っ込まれる。必然的に酒を飲む羽目になったソロの目は段々焦点が合わなくなってきた。そして終いには……。

バタッ

気絶する。ツバサは得意げに酒瓶を揺らして笑って見せた。

「ははっ！　こいつの酒の弱さは相変わらずだな」

彼の言葉から推察して、もしかしたらソロの寝顔というのはこういう時に撮られた物なのかも知れない。

なお、未成年に酒を勧めるのは犯罪である。暁はその事で何もする気は無いようだ。この旅行の間に悟ったらしい。ツバサには、どれだけ注意してもムダだと。

だが、それを見過ごさない人間がいた。

「ちょっとツバサ、ソロ君嫌がってたじゃん。ダメだよ？　嫌がっている相手に嫌な事しちゃ」

ソラだった。ツバサに対して面と向かって怒って、さらには彼をへこませる事が出来るのは、スバルの知る限りソラとアイリスと長官だけだ。暁やスバルでは、気付かない内に話を逸らされてうやむやになるだろう。

ツバサは凹みもせず、かといって反論もしない。ただ、呆れたようにソラを見た。

「……ソラ、ソロはソロのままで良いぞ。下手に呼んだら冗談抜きでこいつが切れそうだ」

「話を逸らそうとしてもムダだよ。……キミの行動パターンは、ズバッとお見通しだ！」

某推理ドラマの女優のマネをしたソラに対し、ツバサを含めて全員が沈黙する。

「……」

「黙らないでよ！　何か気まずいじゃん！　ドラマ見てちょっとカッコ良かったからやって見ただけなんだってば！」

「……75点」
「はっ？　何それ？」

ツバサから出された突然の点数に疑問を持つソラ。ツバサは何かを考えるようにあごに手をやった。

「お前のさっきのボケレベル。まぁ最初にしては良いんじゃねぇの？」
「わ・た・し・は・ボ・ケ・キャ・ラ・じゃ・な――――――い！！！　あんたに評価されるいわれもな――――――い！！！」

一言一言を強めながら言ったソラに対し、ツバサは驚いたような顔を作る。

「何！？　違ったのか！？」
「本気で驚くな！！」

前言撤回だ。ソラも見事にツバサの術中にはまっている。論旨のあった会話は、単なるケンカ話になっていた。「ガルルルル」という効果音が聞こえそうな気迫のソラに対し、ツバサは飄々と逃げの姿勢。周りもそんな楽しげな（？）空気に誘われて野次馬が出来た。

そんな険悪な2人の間に、1人の少女が割り込んだ。ミソラだ。彼女はソラの手を取り、提案する。

「ソラさん！　一緒に歌わない？」
「ふぇ？」

唐突なミソラの提案にソラは勢いを削がれた事で間の抜けた声になる。ミソラは理由を説明した。

「実はアンコールの要望があったんだけど、せっかくだから、ね！」
「気持ちは嬉しいけど先に――」
ツバサと決着を！　そんな事を思っていたソラは、言葉の途中でミソラに引っ張られた。
「ちょっ！　ミソラちゃん！？」
「実は私も、ソラさんって綺麗な声してるからきっと歌が上手いんだろうな～って思ってたからちょうど良かったの！」
（年齢的に）後輩の眩しい笑顔を見て、ソラは仕方なしで受け入れた。その代わりと言ってはなんだが……。
「ツバサ！　帰ったら続きね！　逃げないでよ！」
再戦の約束をして彼女は人の波の中に消えていった。彼女の姿が見えなくなった後、ツバサは当然のように踵を返す。あまりに当然のように動くので見過ごしてしまう所だった。
「ちょっと待ってツバサ君。さっきソラさんに逃げるなって言われたばかりじゃ……」
「何言ってんだスバル。正直付き合ってられん。そういう時はトンズラに限る」
『……そこまで分かりやすく開き直られると対応に困るけど、今回は力ずくでも居てもらうわ』
『お、おいアイリス。まさかまたオレを使って……』
ウォーロックがおずおずと尋ねると、アイリスは当然の如く答えた。

『もちろんウォーロックお願い。大丈夫。できる限りどっちも怪我をしないように操作するから』
『大丈夫の点がちっが――――う！！　オレを操るなって言いたいの！　オレは！』
アイリスはため息をついてオックスを見た。
『……ウォーロックがダメって言うからあなたを操作する事になるけど、良い？』
『ブロロロロロ……。ウォーロック頼む。今度牛丼おごってやるから……』
『てめっ！　裏切りやがったなオックス！』
『……決まりね……』
アイリスの手がウォーロックに向けられ、微かに光を帯びる。ウォーロックは身構え、さっきとは違う意味で緊張状態に陥った。
ツバサはその状況にうんざりしたのか、ヤケクソ気味に声を張り上げた。
「あ～も～分かった！　居れば良いんだろ！？　居れば！」
それと共に伴奏が響く。どうやらステージの方も始まったようだ。ツバサはため息をついて席に座り、頬杖をつきながらステージの方を見る。スバルはそんな彼を横目で見ながら、意識をステージに向けた。
後に聞いた話によると、『心の花』というタイトルらしい。
『　会えない昨日　』

『君の事夢見た』

『町は夜の模様』

『【ただ君だけが眩しく見えた】』

【君が夢で教えてくれた】

【心に咲く花の話】

【君に会って芽生え始めた】

『【双葉の意味がやっと分かった】』

『【分けて欲しい君の強さを】』

『【生まれたての愛しさに】』

『【広い空両手広げて】』

『差し出すように』

【掴むように】

『【またいつの日か君に出会えるように……】』

綺麗だった。歌っている彼女（ミソラ）は本当に輝いていて、活き活きしていた。僕（スバル）がそんな事を思いながらツバサの方を見る。彼はどう思ったのだろうか。

ツバサはその視線の意味に気付いたのか、一応といったように答える。口にしなくても良いだろうというぐらい確定した事象のように。

「上手い上手い。ミソラはもちろんだが、ソラの方も引けを取っていないんじゃないか？」

『何だツバサ、素っ気ないな。あれか？　好きな人にはワザと冷たくするって奴か？』

「そんなんじゃないよ。……さてとっ、行きますか」

ツバサがウォーロックに半眼を送った後、席を立ってスバル達に背を向ける。

「えっ？　どこかへ行くの？」

スバルの問いにツバサは首から上だけ振り向いて答えた。

「あぁ、ゲイルと少し話をする約束があったんだ」

ツバサの相変わらずさに思わずスバルは苦笑する。

「……ソラさん怒るよ？」

「そんじゃあ、悔しかったら見つけてみろ。って伝えといて」

そんな事を言いながら、彼は飄々と去っていく。

『……もっと素直に上手いって言えばいいのに……』

アイリスが席に座ったまま、ため息をついて呆れている。
彼女の言葉から察するに、ツバサは相当ひねくれ者のようだ。…
…いや、今更という感じだが……。

その後、意気揚々とミソラとソラが戻ってきたのだが、事情を聞いたソラがニッコリ笑顔のまま「そっか……」と言ってツバサの後を追って行った。

スバル達は、彼女の出す気迫に押されて止めるどころか話しかける事も出来なかった。寝ているはずのソロも、ピクッと眉が動いたのだからよっぽどだろう。
スザク曰く。

『あれこそ、本気で怒ったソラ……』

らしい。どうやらソラは本気で怒ると、怒号や暴力でなく、迫力で圧倒するタイプのようだ。その状態になった彼女を抑えられるのは同じタイプ（怒り方）の女将だけらしい。

スバル達はツバサの無事と彼らの仲直りを祈りつつ、食事を再開した。無論、スバルとミソラは互いの事でからかわれる事が多々あったのは言うまでもない。

第７８話　響く歌声（後書き）

ライラが言っていたクルル発言には元ネタがあります。ガハラさんを知っている人は知ってますかね？（正しくは戦場ヶ原ひたぎ。化物語のキャラ）。

なお、『心の花』は鋼の錬金術師のゲーム、『翔べない天使』の挿入歌より。元々あの歌はソロですが、うまい感じに分けられそうだったので、あえてデュエットにしました。

……実は歌には他に候補があって、それは星や恋愛の要素があったのですが、後半の事を考えてあの曲にしました。あの曲がどう話に関わるかは秘密ですけどね。……ふっふっふ……。

それでは、次回もお楽しみに！

第７９話　叶わぬ願い（前書き）

今回が今までで一番サブタイトルに手こずったかもしれません。良いのが思いつかなくて……。後々似たようなサブタイがあるかもしれませんが、その時はその時で何とかします。

活動報告にも書きましたが、久々にスバミソがあります。

第７９話　叶わぬ願い

綺麗な歌声の余韻に浸りながら、ゲイルは広場が一望できる一室から民やスバル達を眺めていた。本来ならば自分もあの場で騒ぎたいところだが、ツバサから話があるとかで待っているのだ。

そんなわけで、陰鬱なため息を１つ。

「は～～～。待つ身は辛いって、こういうのを言うのかな～～～？」

「乙女チックに気色の悪い事を言うなボケ」

後ろのドアからノックも無しに入ってきたのはツバサである。不快な事を聞いたからか、ドアを閉めた後はゲイルに容赦ない白眼を送っている。ゲイルはそれを気にせず、軽い感じでツバサに話しかけた。

「待ってたよツー君。話は……ビャッコ戦の事だよね？」

相変わらず勘の良い奴だ。ツバサはそんな事を思いながらゲイルに歩み寄り、答える。

「そう。回りくどい聞き方は嫌いだから手っ取り早く聞くぞ。……お前、ビャッコにワザと取り憑かれただろ？」

「ピンポーン！　やっぱり分かっちゃったか♪　さっすがツー君！」

悪びれもせず、堂々と言い放ったゲイルに対し、ツバサは額に手を当てて真意を聞く。

「はぁ～～～。……その理由は？」

「あの子達、スバル君が果たしてキミの計画をこなせるかどうかの見極めに、ね」
「……アイツらを試したって事か。力量や資質を」
「そういう事。やっぱり、自分で確かめないとね。あの場にビャッコが居たのは予想してなかったけど、ついでだから利用させてもらった。……ツー君は、何で僕がわざと取り憑かれているって分かったのかな？」

お返しとばかりに聞くゲイルの口調は口調は砕けている。
ツバサはゲイルに問われた事にきっぱりと答えた。

「お前ほどの精神力の持ち主が飲み込まれるなんてありえない。それに、抵抗もせずに素直に操られるままってのはお前らしくないんでな」
「……そうか」

ツバサからきっぱり言われたゲイルは、苦笑しながら広場を見る。

「さすがだね。一応結論を言えば、まぁ問題ないんじゃないかな？意志は強いし戦いのセンスもある。おまけに、仲間が傷ついたらその仲間のために戦える。……資質としては十分だよ」
「……そうか」

ゲイルは洞察力や見極める力が良い。それはツバサも認めていて、彼がそう言うのならそうなのだろう。

「それに――」

ゲイルは明るく続ける。

「ツー君は彼らが勝手について来たって言ってたけど、それは結果

的に良かったんじゃないかな？」
「？　シャインサーバーへのアクセスレベルがナンバー2のブルースまで上がった事か？」

シャインサーバー、今はエンシェントサーバーと呼ばれている物だ。ビャッコ戦で見せたブルースノイズはナンバー2。つまり、管理者を除きまだ上がいるという事だ。
ゲイルは微妙そうな顔をして頬を人差し指で掻く。

「う～ん。それもあるんだけどね～。もし彼らがキミの旅行について来なかったら、色んな文化や人を知る事が出来なかったんじゃないかなって思ってね」

その言葉で、ツバサは納得したような笑みを零す。

「……なるほど。そう言われてみれば、あいつはいろんな国……特にこの国で色んな人や歴史と出逢い、様々な人を受け入れられるだけの器量は見についたかもな」

対するゲイルはいつもの暢気な笑みを浮かべた。

「まだキッカケを持っただけだけどね♪　芽吹くかどうかは分からない。……でも、キミの計画にはその資質、包容力は必要でしょ？」
「そうだな。……フッ、いつもながらお前には驚かされるな」

ツバサの感心したような言葉に、ゲイルはとんでもないとばかりに形だけ手を振る。つまり、謙遜はしていない。

「いえいえ、キミほどじゃないよ。ツー君。代わりといってはなんだけど、キミの計画が最終段階に入ったら、スバル君達の事は任せ

てくれないかな？」
「任せる？」
眉を顰めて訝るツバサに対し、ゲイルは得意げに答えた。
「そう。彼らに迷いが生まれると都合が悪いんでしょ？　……特に、アイリスちゃんは凄く微妙な立ち位置になる。ツー君の事だから何か策を用意しているんだろうけど、その時キミは彼女の近くにはいない。護りきれる保証は無いよ」
「……」
確かにその通りだった。セレナードから預かったダークチップはそれを見越しての用意なのだが、やはり必要な時にその場に居ないのは大きい。最悪の場合、処分される可能性もある。
「だから、僕が君譲りの口の巧さと強情さで何とかするよ。絶対にアイリスちゃんを処分なんてさせないし、スバル君も導く」
「……任せても、良いのか？」
「もちろん！　親愛なるキミの頼みならね♪」
普段は気色悪いという言葉の一撃を加える所だが、この時のゲイルの言葉はありがたかった。しかし、「でも……」と言ってゲイルは続ける。少し真剣な顔で……。
「最後の最後でスバル君が罪悪感に襲われない様にするための策は用意しているの？」
「……」
まだだった。
ツバサの沈黙の意味を見抜いたゲイルは陽気に笑う。

「あっはっは～。まだだったんだ～」
「……黙らっしゃい」

本来、黙らっしゃいは激しめの言葉なのだが、今のツバサはどこか抜けている自分に対して少し自己嫌悪になっているので迫力は無い。

「ツ～バサ～～～！！　い～るけ～～？」

ツバサが閉めたドアは勢い良く開き、赤髪の少女、ソラが現れた。髪だけでなく、ほんのり顔が赤い。

ツバサは暁ほど真面目ではないが、念のために聞いておくことにする。ブルーな気分は彼女の襲来の驚きで吹き飛んでしまった。

「……ソラ、お前ひょっとして酒飲んでる？」
「ぜ～んぜん飲んでないよ～～～。スモモちゃんに急いでいるようだからって水をもらっただけだよ～～～～」

先程のセリフで分かった事は2つ。大仰な仕草と、わずかに平衡感覚が鈍って揺れている所からして飲んでいる事確実。そして2つめは、彼女に飲ませたのはスモモだということだ。

ソラより先にスモモに注意をしようとドアへ向かうツバサをゲイルは止めた。

「待ちなよ。スモモちゃんならドアの陰に隠れているよ。……琴子ちゃんもたぶんいるんじゃないかな？」

ゲイルのその声で、申し訳無さそうな琴子と、琴子に襟を掴まれて逃げられないスモモが現れた。ここまでスモモを引きずって来た

琴子に労いの言葉を言いたいが、まずは経緯を聞く。

「で、何でソラは酔ってんだ？」

「だ～から酔ってないって言ってんじゃんツバサ～～♪」

「ス、スモモは知らないです～～♪」

「こいつらに聞いても埒が明かない。琴子、頼む」

琴子は、しらばっくれる2人に半ば呆れながら語り始めた。

「……実は――」

――――回想――――

数分前、ソラは怒りのオーラを発しながらツバサを探す。時折歌の事をほめられる事があったが、その時は気迫と表情を変えてにこやかに対応した。長年の接客で身についた特技である。

「ソラお姉さん」

自分を呼ぶ声が聞こえたため周りを見る。無視は良くない。前後左右を見てそれらしい人は見当たらない。となれば、下か上だ。上から声はしなかったので下だろう。下を見ると、養護施設で一緒に遊んだ1人、琴子とスモモが立っていた。

「あれ？　どうしたの？　2人とも」

「どうしたはこっちのセリフですわ。ソラお姉さんこそ、そんなに急いでどこへ行くんです？」

琴子に尋ねられたソラは、戻ったらツバサがいなくて自分が追いかけている事を話した。琴子はため息をついてソラに同情の眼差しを送る。

「そうですか。……なら、早く怒って差し上げた方がよろしいですね。先程あちらの――」

琴子はツバサの向かった建物を指差した。

「建物に入っていくのを見ましたわ」

「そっか！　ありがとう琴子ちゃん！　スモモちゃん！　……あれ？　スモモちゃんは？」

「あらっ？　いつの間に……」

2人にお礼を言って駆け出そうとしたソラはスモモがいないことに気付いた。ソラと琴子は戸惑っていたのだが、探す手間も無く、当の本人は自分から自らの位置を教えた。

「スモモはここです」

「！　スモモちゃんどこいってたの。ちょっと見ないうちにいなくなっちゃうから心配したんだよ？」

「そうですわよ。全くこの子は……」

ソラは安心したようにスモモの肩に手を置き、琴子はスモモを睨みながらも内心ホッとする。

「ってあれ？　スモモちゃん、何持ってるの？」

スモモの手にはコップが握られており、中には透明の液体が入っ

ている。スモモは元気に答えた。

「これからガツンとツバサお兄ちゃんに突撃するソラお姉ちゃんに差し入れです！　喉が渇いているんじゃないかと思いまして♪」

その言葉に、琴子は意外そうな顔でスモモを見る。

「あなたにしては気が効きますわね」

対するソラは嬉しそうにスモモの手から大事に飲み物を受け取る。

「なんにしても嬉しいよ。ちょうど喉渇いてたんだ。それじゃ、頂きま……す」

歌を歌った後歩きっぱなしだったから喉が渇いていた彼女にとっては嬉しかっただろう。

飲む直前ソラの言葉がほんの少し止まったが、一瞬だったから琴子は気に留めなかった。しかし、それは間違いだったと言えよう。

そういえばといったように、琴子はスモモに質問をした。

「そういえばスモモさん、この飲み物はどこから？」

「あっちの机です♪」

スモモの指差す先には大人のテーブル。

「……スモモさん？　ひょっとしてお酒を……」

「違いますよ琴子さん。私も飲んで見ましたが、味わい深い単なるお水でした♪」

「水に味はありません！」

琴子の鋭いツッコミに、スモモはショックといった感じで自分の両手でほっぺを押した。具体例を言うなら、『ブラックジャック』の登場人物、ピノ子の『あっちょんぷりけ――――！！』みたいな感じである。……通じるかなこの例え……。

「そうなんですか！？　透明だからてっきりお水だと……」
「あなたにとって透明なら何でも水なんですか！！　はっ！　ソラさん大丈夫ですか！？」

怒鳴るようにして琴子はスモモに突っ込んだ後、慌ててソラを見る。

「いや～～～、私は大丈夫だよ～～～～～」

顔がほんのり赤い。どうやら彼女は酒に弱かったらしい。琴子が唖然としている間に、ソラは手を高々と上げた。

「それじゃあ、ツバサの所にシュッパーツ！」
「それじゃあスモモはもう行くで――」

逃げようとしたスモモの襟首を琴子が掴む。

「逃がしませんわ」
「な、何をするんですが琴子さん！」
「ソラさんがこうなった以上、加害者であるあなたと状況説明のために私がいかなければいけないでしょう！」

――――回想終わり――――

「……そんな所ですわね」
「なるほど、つまり……」

納得したツバサはスモモに目を向ける。及び、ツバサは一気に距離を詰めてスモモに手を伸ばす。

「お前のせいか――――！！」
「く、くすぐったいです――――――！！」

ツバサがしたのは腕の脇へのこちょこちょだ。くすぐりとは、自分でやるとそうでもないが、他人にやられると異常にくすぐったいものなのだ。

なぜこちょこちょかというと、いくらいけない事を注意するためとはいえ、暴力はいけないとの事で思いついた叱り方である。笑い疲れるまでくすぐるので案外強力なのだ。

大抵は数分くすぐると笑いながら泣いて謝るのだが、今回は違った。

「女の子をイジメルのは――」

後ろから良く見知った声が聞こえる。直後、ツバサの肩に激痛が走る。

「止めなさ――――――い！！！」
「うぉ！？」

ソラの踵落（かかとお）としが炸裂したのだ。ちなみに本人はツバサの脳天を狙ったのだが、酔いのためにズレたらしい。……脳天でも十分凶悪

だとは思うが……。
　ソラの踵落としで、ツバサはスモモへのくすぐりを中断した。スモモは息を切らしている。ゲイルと琴子はのほほんと恒例行事を見るが如く落ち着いていた。
　肩を痛そうに押さえながら、ツバサは恨めしそうにソラを見る。
「いってぇ～～～……。おい、ちょっとは手加減しろ」
「ふ～んだ。脳天に炸裂しなかっただけありがたいと思いなさい」
　その言葉で、ツバサの頭にピキッと怒りマークが浮かぶ。
「はっ！　たかだか酔いのせいで照準が狂っただけだろ？」
　図星ではあるが、ツバサの挑発的な態度にソラもカチンと来た。
「何ですって～～～～？　もう一回言ってごらんなさい？」
「はっ！　たかだか酔いのせいで照準が狂っただけだろ？」
「ホントにそのまま言われるとスッゴイ腹立つ～～～！！！」
　もう何度目か分からないほっぺの引っ張り合いになりそうな展開に、ゲイルは歯止めをかけるべく声をかける。
「ソラちゃ～ん。そんなに動くとお酒が早く回って倒れちゃうよ～？」
「ふぇ？　……」
ドサッ

言うのが一歩遅かったようだ。ソラは意図を失ったマリオネットのように前に倒れ、ツバサはそれを反射的に受け止める。

「ッ。っと」

「Ｚｚｚｚｚｚ……」

どうやら大人しく寝ているようだ。適当な部屋を用意してもらおうとゲイルを見るが、彼はスモモと琴子を連れて出て行ってしまった。その時、ゲイルの唇が僅かに動く。

「【　お幸せに♪　】」

「……」

ツバサの中で、『後でゲイルを理由無くぶん殴るの刑』の判決が下ろされた。

「う～……ツバサ～」

「寝言？　……ぐっすり眠れてうらやましいよ。この台風女」

「のケチ～～～」

「……」（カッチーン）

起きてんじゃねぇよな？　ツバサは握った拳をプルプルと押さえている。

「ツバサ～～～」

また何か言われたらデコピンでもしてやる。

ツバサがそう思いながら続きを聞く。

「……そばにいて？」

「……ッ」

一応ソラのほっぺを軽く叩いてみるが反応は無い。彼女は間違いなく寝ている。

ツバサはため息交じりで笑みを零し、ソラの頭を優しく撫でた。

「……寝てても世話焼きな奴。……でも、オレにはその願いを叶える事は出来ないよ」

いくら自分で望もうと、誰かが居て欲しいと言っても、その願いは叶えられない。

近いうち……『時』が来れば、ネビュラ・グレイに飲み込まれる。

それもまた、計画のうちなのだから。

ツバサはソラを支えたまま、窓から見える夜空を見た。

「……スバル……」

その呟きは、彼には似つかわしくない程に薄弱としたものだった。

――――その頃スバル達は……――――

「……ミソラちゃん、相変わらずスゴイ食べっぷりだね……」

スバルの隣に座っているミソラは食べて、食べて、食べまくる。

ミソラは口の中の物を飲み込んだ後、スバルに返事を返した。

「だってこんなに美味しいんだもん♪　それに、アレだけ思いっきり歌えたのは久しぶりだから嬉しくて嬉しくて。スバル君だって、新しい望遠鏡とか宇宙の本がもらえたら思いっきりはしゃがない？」
「うっ……そ、それは……そうだと思うけど……」
言い返せなくなって唇を尖らせたスバルにミソラは明るく笑う。
「あはは！　スバル君はホントに正直だね♪」
「あれ？　ミソラちゃん、もしかして今僕の事をからかった？」
「えへへ～♪」
照れたような仕草からして間違いない。ミソラはスバルをからかったのだ。スバルはため息をつく。
「はぁ～～。……酷いよミソラちゃん……」
「ふふっ。スバル君が素直すぎるんだよ～」
ミソラは得意げにそう言いながら手近な飲み物を飲む。
「あれ？　オレの酒は？」
近くで友人と話しこんでいた男性が自分の酒を探す。それと同時進行で、ミソラの目がとろんとしてきた。まさか……。
「あ、あの……ミソラちゃん？」
「……ねぇ、スバル君」
「は、はい」
ミソラは顔を赤らめてとろんとした目でスバルを見る。
スバルの心拍数、２０％まで上昇。

「私達、恋人だよね？」
「う、うん。そうだね」

ロンシャで夜景をみながら、スバルはミソラから告白された。
ミソラはスバルの手を両手で握る。
スバルの心拍数、５０％まで上昇。

「なら、そろそろさ……その……キスしてもいい頃だと……思うんだけど……」

彼女の照れくさそうな仕草と言葉で、スバルの心拍数、８０％まで上昇。

「えっ……キス……？　それって、あの……唇を重ねる？」
「うん。……私とじゃ、イヤ？」

困ったように、不安そうにミソラは首を傾げる。
スバルの心拍数、９０％まで上昇。

「いいいいいイヤじゃないけど、周りとか人が――」

見ているかも。と、続けようとしたが、周りは仲の良い者同士で楽しんでおり、スバルとミソラの方には全然気付いていない。

「そう。良かった」

ミソラはそう言いながら、スバルの両頬を両手で優しく押さえ、顔を近づける。

「ミ、ミソラちゃ――」

言葉の途中で、スバルの唇に柔らかいものが触れる。温かくて、艶があって、柔らかい、ミソラの唇。そして、目の前にはミソラの鮮やかなエメラルドグリーンの瞳。

ミソラはスバルにキスをしたのだ。

スバルの心拍数、１００％オーバー。ミソラが唇を離すと共に、スバルの首はカクンっと落ちた。気絶である。

その一部始終を見ていた彼らのウィザード曰く。

『……ミソラって、飲むと大胆になるタイプだったのね。……まぁ、この旅行中ずっと一緒に居ても恋人らしいことが出来なかったから、我慢の裏返しかしらね？』

『……それ以前に、何でスバルは気絶したんだ？』

『……あんたには一生解らない事よ……』

ハープはウォーロックの鈍感さに呆れ、今までででトップクラスの長いため息をついた。

第７９話　叶わぬ願い（後書き）

次話でバルズランド編、及び旅行編は終了の予定です。……何だかんだでスゴク長かったな～～～。

第８０話　一手（前書き）

お待たせしました！　本編に加えて番外も書いていたもので遅くなってしまいましたかね。楽しみにしていた方、待たせてしまいすみません。

第８０話　一手

朝、昨日の夜の騒がしさとは打って変わって、国は静かな寝息に包まれる。

星河スバルも、ミソラのキスで気絶してからグッスリ眠っている。気持ち良さ気に寝返りを打った時、ドアは勢い良く開かれた。

「おっはよ――――！　スバル君！」

元気なミソラの襲来だ。前日誤ってお酒を飲んだにしては晴れ晴れとした笑顔である。しかしスバルは……。

「ＺＺＺＺＺｚｚｚｚ」

旅行や戦闘の疲れもあってか、まったく目覚める気配が無い。ミソラはニヤリと悪戯な笑みを作り、スバルに近づく。

「……えい」
「うぐおぁ！？」

不意打ちなせいもあって、スバルの悲鳴は変な声になってしまった。ミソラがスバルに圧し掛かったのだ。

「おはよ、スバル君♪」
「ミ、ミソラちゃ……」

挨拶をしようとしたスバルは途中で言葉を止めた。何の事は無い。昨日のキスの事を思い出して赤面しているのだ。

「？　どうしたのスバル君？　顔真っ赤だよ？」

そんなスバルを心配してか、ミソラはスバルの顔を覗き込む。スバルは真っ赤なまま居心地が悪くて目を逸らした。

「だ、大丈夫。……あの、ミソラちゃん……」

「ん？　なに？」

「昨日の事、覚えてる？」

「昨日？　……あ～パーティのことか！　また皆であいった事したいよね～」

明るく笑いかけるミソラに対し、スバルの中では疑問が渦巻く。

「そ、そうだね」（……あれ？　ミソラちゃん僕とのキスの事忘れてる？　……良かったような、寂しいような……）

どうやら彼女は、酒を飲んでも翌日に影響は出ないが、記憶が飛ぶタイプらしい。

「それじゃ、朝ごはん食べに行こうよ。少し遅めだけどね」

ミソラは、寝坊した事に照れながらスバルを誘う。スバルは頷き、2人は食堂に向かった。

さて、酒を飲んだもう一人は……。

「……ツバサ」
「ん？」
「頭痛い」

ソラが眠ってから約一時間後、ゲイルが部屋を用意したとの事でソラをベッドに運んで、今さっき目覚めた所だ。目覚めの第一声が「頭が痛い」である。
ベッドの脇のイスに座ったツバサはため息と頬杖を同時につく。

「二日酔いだな。おとなしく寝てろ」
「む～～～～」

文句を言おうにも頭が痛くて動けない。
二日酔いの頭痛の酷さを簡単に言えば、インフルエンザの痛みが二日酔いの間ずっと続くぐらいらしい。作者の親族からの情報だ。

不満げなソラをよそに、ツバサは立ち上がる。

「そんだけ話せるなら大丈夫だろ。少し外に出てくるよ。２０分くらいで戻ると思う」
「あ、うん。気をつけてね」
「そうそう気をつけるような事が起こってたまるか。あ～それと、何かあったら誰かを呼べよ？　メシまだだろ」

その言葉で、ソラは自分のお腹に手を当てる。

「あ……。そういえばお腹空いた」
「色気より食い気」

ツバサがからかうような笑顔を浮かべながらそんなことを言う。
ソラはそれを聞いて、顔を真っ赤にして上体を起こす。

「ムッ！　う～る～さ～い！　行くならとっとと行け！」

怒りは二日酔いの頭痛を克服して、枕を掴んでツバサにぶん投げた。ツバサは容易にそれを受け止めて、陽気に笑う。

「ハハッ！　冗談冗談。そう怒るなよ」

そう言って枕を投げ返し、部屋から出て行った。
部屋のドアが閉められた後、ソラはベッドに倒れる。怒り時間終了だ。

「～～～～痛い」

彼女はこの後、数時間呻く事になる。だが、それからすぐにスザクやスバル達が来たので退屈はしなかった。スザクはウィザード同士で色々話してウィザード間の親交を深め、スバル達は遅めの朝ご飯を食べた後だという。
なお、アイリスとジョーカーもスバル達と一緒に来た。2人は昨晩、気を利かせてツバサとソラから離れていたのだが、いざ合流しようとソラの寝ている部屋に来たら当のツバサはいなかったというわけだ。

一同が和気あいあいとしている時、ツバサは墓地に立っていた。
静かに、しかし、糸をピンと張ったような緊張感を放っている。

「……出て来いよ。いるんだろ？　昨日からずっとオレを見張ってたろ。安心しろ、オレは今一人だ」

ザッ……

ツバサの声に反応するように、周りの茂みや木の陰から数名の人影が現れる。

身なりは全員同じ。上下が一体化した黒服。人の形をしているが、ヒトで言う所の個性が無い。無機質で、与えられた仕事だけをする人形のようだ。さらに、鼻の上まで覆うマスク。目には横長で縦が短いゴーグルが装備されている。右前腕にはカギ爪の様な武器。そして右肩には、誰の遣(つか)いかを表すコウモリが羽を広げた姿を上下ひっくり返したようなマークがあしらってある。

そのマークを見たツバサは隙を作らない程度にため息をついた。

「はぁ～～。やっぱり飛王・リードか……。羽根より大きい何かが入ってきたかと思ったが、あいつも暇人だね」

やれやれと言ったようにわざと額に手を置き、隙を作る。その隙を突いて、黒服達は襲い掛かってきた。カギ爪を構え、四方から襲い来る。しかし、それこそツバサの作戦。額に置いていた手とは反対の手をハンターに触れていた。それはつまり、銃の引き金を常に引ける状態という事。

「バトルカード、ダブルストーン」

まずは障害物となる『ダブルストーン』を地面から発生させ、陣形を狂わせる。その隙に次のバトルカードを転送した。

「終わりだ。ボムライザー」

ボムライザーは周辺の障害物を爆破することで攻撃するカード。攻撃だけでなく障害物の除去にも使えるという応用性の高いカードだ。

ズドォォォォン！！

爆炎と爆風が辺りを包む。

「……視界が悪いな」

結界が揺れない程度に風を起こす。なお、ツバサは前もってバトルカード、『スーパーバリア』を張っていたので無傷だ。

視界が晴れると、黒服達が一人残らず地面に倒れている。

ツバサは改めてその黒服達を見た。

「……この感じからして、まっとうな人間じゃねぇな。互換性のある作り物の肉体に他人の魂を入れてる感じだ。……ほかの次元で集めた魂の利用方法がこれか。ホント悪どいやり方が好きだね。アイツ」

他の次元から蟲（コ）を使って魂を集めていることは知っていたが、こんな事に使われていたとは……。

ツバサは内心でそう驚く反面、納得もしていた。彼なら、飛王（フェイワン）・リードならやるだろうな。と。

「こいつらはゲイルに任せれば良いか。……そろそろ戻るかな。早く帰らないとあのバカにまた蹴られる」

ツバサはソラに対しての悪態をつき、帰路に付く。しかし、その顔は口から出た悪態とは正反対に、機嫌が良さ気で楽しそうな笑みを浮かべていた。

――飛王・リードの次元――

ツバサが飛王（フェイワン）の私兵を倒したちょうどその頃、飛王（フェイワン）・リードもそれを感知していた。

「……ふん。出来損ないがやられたか。……まぁいい。倒されたという事は、無事にあの次元にいけたという事だからな。さて――」

飛王・リードの手が空を切る。空間は割れ、一人の初老の男性が映る。その男性とは、アメロッパ大統領のアーノルド・ローグである。

自国の作戦が失敗したからだろう。精神的疲労のためか、１０歳は老けて見える。

「……飛王（フェイワン）・リード……」

声も弱々しい。しかし、それを気にかけるほど飛王・リードは温厚でもない。

「弱音は聞きたくない。……失敗したようだな」

「……はい」

「では、約束どおり貴様の国をもらおう。お前は――」

飛王・リードはローグを指差して命令する。命令と言う言葉は誇張ではない。一種の暗示だ。故に、命令という言葉は正しいと言える。

「私の言う事は絶対的に聞いてもらう。逆らう事は許されない」

「……はい。分かりました……」

ローグの目からは、弱々しい目すら無くなっていた。彼の自我は暗示に飲み込まれた。それを確認した飛王・リードは満足げな笑みを浮かべる。

「では、まずはその次元のクロウがいる組織に接触し、その組織と信頼関係を築け。そして、奴が魔法を使うに至った理由を探って、我に報告しろ」

「分かりました……」

飛王・リードは返事を聞くと、次元の割れ目を閉じる。完全に割れ目が閉じたのを見計らって、隣に立つ星炎（シンフォ）が話しかけてくる。

「……なぜ魔法を使った理由を探るのですか？」

飛王・リードは不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「奴の新しい術式の結界は完成してしまった。ならば、別の方法で破れば良いだけだ。奴は……クロウはあまい。大方誰かを助けるために使ったのだろう。逆に言えば、その誰かが分かれば奴を支配したも同然」

星炎（シンフォ）は感情を見せずに解釈をまとめる。

「……その者を人質にとる事であの次元のクロウを懐柔（かいじゅう）。結界を自らの手で破らせる……」

「その通りだ。それに、我が私兵が無事次元を渡った事も確認できた。最悪、ローグを捨て駒にしてココロサーバーを頂くとしよう」

それはつまり、ローグを捨て駒にした陽動作戦という事を意味する。

今回飛王（フェイワン）・リードは、大統領経由で介入してツバサを懐柔させる策と、それが失敗しても対処が可能な策を準備した。彼は、二重の一手を打ったのだ。

星炎（シンフォ）は沈黙し、飛王・リードから目を逸らした。

第８１話　ただいま（前書き）

ツバサがソラの部屋に戻って来た所からです。

第81話　ただいま

「おっそ――――――い！！！　ッ～～～～～～」

ツバサが帰ってみたらスバル達も一緒で、ソラからは予想通り怒鳴られた。及び、自分の大声でダメージを受けたらしく頭を押さえる。

ツバサは軽く笑いながら彼女達に近づく。ソラはまだベッドの上なので、皆はその周りのイスに座り、談笑していたらしい。

「フッ、叫ぶなよ。そうなるから」

「……目と口が笑っている人に言われると腹立つな……」

「だって笑えるんだからしょうがないだろ？」

飄々と笑いながら肩を竦めるツバサに対し、ソラは唸りながら睨み付ける。それをむしろ楽しんでいるのだから、彼は本当に人を食った性格をしている。

クインティアはこれ以上待っていても埒が明かないと思ったのだろう。気を引くようにセキを一回してツバサあてに声を出す。

「……帰ったら覚悟しろって、長官が言ってたわ」

「？　覚悟？」

ツバサはソラをからかう態度を緩めてクインティアに尋ねる。彼女はあくまで事務的に答えた。

「順番に言うと、シャーロのホテルでスナイパーが壊したガラスの損害賠償。イースター島のホテルの以下略。最後に、この国での戦闘は記録がない以上は公的に詰問はできないけど、その代わりお説

教だって言ってたわ」

「……」

ものの見事に今まで壊れた施設だ。おまけを言えばお説教付き。ツバサの沈黙に、クインティアは一応といったように弁解をする。

「念のために言っておくけど、私とシドウはバレなきゃＯＫのあなたと違って純粋にサテラポリスに属する身だから、報告義務は破れないわ。潔く受け入れなさい」

つまり、ニホンに帰ったらお説教されて、損害賠償を払って、その始末書の整理に追われるというわけだ。一言で言えば『地獄』である。

「……」

その後、ツバサはずっと黙んまりだったそうな。

翌日、いよいよバルズランドを離れる事となったスバル達。見送りにはゲイルとライラ、コクレンが来た。それぞれ別れの挨拶を交わし、ゲイルは締めくくるようにスバル達と向き合う。

「それじゃあスバル君、皆、これから色々大変だろうけど、死なない程度に頑張ってね」

「はい。ゲイルさんもお元気で」

スバルが素直に頷いたことで、ゲイルの悪癖が発動するキッカケ

になってしまった。

「純粋なスバル君に言われると昇天するほど嬉しいよ～～～！！」

ゲイルが例によって抱きつこうとした時、ツバサはスバルとゲイルの間に割り込む。

「お望みどおり逝ったれや――――――――！！！」

渾身のアッパーが炸裂。拳を振りぬかれた所から５０ｃｍほど浮き上がるまで吹っ飛ばされ、ゲイルは地に伏した。

慣れというのもあるのだろう。スバル達の間でも、それは『驚き』よりも『苦笑』に属する事柄になっていた。また、ゲイルの方もすかさず起き上がって弁解する。

「ごめんごめん。僕はツー君一筋だから浮気なんてしないよ♪　ぶっちゃけ、今も感じてるよ」

「鳥肌が止まらないから止めてくれ」

ゲイルが親指を立てて見せて、ツバサはホントに寒いかのように上腕を擦る。

最後くらい仲良くすれば良いのに……。スバル達はケンカの絶えない２人を苦笑しながら見ていた。

そして、ニホンに戻ったスバル達はそれぞれの家に戻って行く。

星河家……。

「「『ただいま～～～」」』

『帰ったぜ～～～』

「あらお帰り。スバル、ミソラちゃん、ロックくん。旅行どうだった？」

スバルとミソラ、ウォーロックとハープを出迎えたのはあかねだった。大吾はまだ宇宙から戻っていないらしい。

「うん。楽しかったよ」

ちなみに、各地の戦いの事は、心配をかけたくないとの事で話していない。

あかねはスバルの返事を聞くと安心したように微笑んだ。

「そう。それは良かったわね。ツバサ君とソラちゃんとは仲良くなれた？」

彼らとは知り合って間もない。あかねとしては、ツバサとソラ、そしてスバル達が互いに仲良くなれたかを気にしていたのだ。

スバルは笑みを少し小さくして頷く。

「うん。……仲良くなったし、色々知った」

その時のスバルの顔を見たあかねは不思議そうに首を傾げた。

「？　スバル、あなた少し変わったかしら？」

「え？」

「何て言うか、少し大人になったって感じ。思慮深くなったってい

うか……雰囲気なんだけどね」

良く分からないわ。と言って苦笑したあかねをスバルやミソラ、ウォーロックとハープは不思議そうに見て、あかねはそれを居心地悪く思ったのか話を逸らした。それも、ニンマリ笑顔で。

「ところでスバル」
「何？　母さん」
「ミソラちゃんとはどこまでいったの？」
「はい！？　ど、どこまでと言いますと！？」

動揺でつい敬語になってしまったスバルをあかねは笑いを堪えながら詳細を言う。

「言葉通りよ。告白とかは？　キスはしたの？」

まくし立てる様にあかねはスバルとミソラに迫る。２人は顔を真っ赤にして互いを見て、中々言えずにいた。
目の前で母親が耳に手をやって少しも聞き漏らすまいとしていれば、一言『恋人になりました』と言うのも多大なプレッシャーがかかる。
２人が真っ赤な理由をあかねは理解していたが、あえて２人に答えてもらおうとしていた。あかねもまた、そういった事を全力で楽しむ性分なのだ。

「……」（どうしよう。告白はともかくキスの方は酔いの事もあるし……）
「……」（どうしよう。イザ言うとなると緊張してきちゃった……）
「……」（うふふふ。２人とも赤くなっちゃって、可愛いわ

ね～♪）

スバル、ミソラ、あかねの内心はこんな感じで、面白くも緊迫した沈黙が続いていた。しかし、この沈黙は無粋な声と共に破られた。

『？　何で黙ってんだ？　素直に言っちまえよ。ロンシャでミソラがスバルに告白して、地球人で言う所の恋人になったって』

「「ッ！！　ウォーロック！！／ロック君！！」」

ウォーロックの爆弾発言にスバルとミソラが顔を真っ赤にして睨み付け、ハープはウォーロックをどこかへ連行した。

悲鳴を上げながら連れられて行くウォーロックにスバルとミソラが睨んでいる時、あかねは両手をパンッと合わせて目を輝かせた。

「あらそうなの！？　良かったじゃない２人とも。ミソラちゃん。スバルは寝ぼすけだけど、よろしくね」

「母さんそういう言い方は恥ずかしいから止めて！」

結婚の挨拶の「ふつつかものですが――」のトークに似ている。スバルとしてはそれが恥ずかしい。

「はい！　お母さん！」

「ミソラちゃんまで！　２人とも、【まだ】そのやり取りは早いよ！」

真っ赤になったスバルの言葉に場は沈黙し、視線はスバルに集中する。

「え？　え？　どうしたの？　僕、何か変な事言った？」

わけが分からないと言ったようなスバルに対し、あかねはまたもイタズラな笑みを浮かべて息子を見た。

「……スバル、【まだ】って事は、そのうちそういうやり取りがあるという事かしら？」

「ッ！！　もう！　夕飯になったら呼んでね！」

からかわれたスバルはドスドスと階段を上がって2階に上がっていった。その後姿を、ミソラとあかねはクスクスと笑いながら見ていた。

「ほ～んと良いリアクションしてくれるわね～。我が息子ながら面白いわ」

「そうですね。将来が楽しみです♪」

「あらあら、もうラブラブなの？」

「ら、ラブラ……」

「うふふふふ♪」

今度はミソラが焦る番だ。その後、ミソラはあかねに散々なほどに遊ばれたそうな。

旅館、うらかわ……

「……」

「……」

こっちもこっちで気まずい沈黙。ソラと女将は正座で向き合って

いる。ふすまの間には従業員たちが心配そうに成り行きを見守っている。

「……つまり、旅行を満喫してどういうサービスがあったか記録に残すのを忘れていた。って、言いたいのね？」

「……はい。すっかり忘れてました」

「……」

女将の迫力が跳ね上がる。ソラは恐怖で涙目だが、泣いてしまうと女将の迫力がさらに増す事は経験で知っているので泣けない。

従業員たちはこの後起こる怒号をなるべく聞かないためか、ふすまを閉めてぞろぞろと遠のいていく。しかし、女将の怒号は軽く４部屋を貫通して響く。彼らの避難は間に合うだろうか。

「ソラ。彼らを気にする余裕があるの？」

「……すみません」

「……すぅ～～～～……」

女将が息を大きく吸う。ソラの体が強張る。スザクはハンターの中で震えている。

直後、女将の怒号と説教が響き渡る。

ＷＡＸＡ・ツバサ

「……長官、オレの目の前の物は何？」

「始末書だが？」

「……ですよね」

ツバサが長官に連れられて自分の部屋に来て見ると、部屋から溢れんばかりの書類の山。いや、すでに廊下にも書類の山が侵出している。

先手を打つように、長官は釘を刺す。

「済まないが私は手伝えないよ。アメロッパ大統領直々でＷＡＸＡニホン支部を視察したいと要望が来ていてね。そっちの方を優先しないといけない」

アメロッパ大統領という単語に、ツバサはピクッと反応した。アメロッパ大統領：アーノルド・ローグ。飛王（フェイワン）・リードの協力者であり、自分の命を狙った存在。

しかし、下手にここで動くのは危険。確たる証拠も無しで迂闊な発言をすれば、面倒事になるのは必死だろう。なのでここは必要最低限のリアクションで留めて置く。

「……そうですか」

ふと横を見ると、ジョーカーがヨイリー博士へのお土産にネックレスを渡している所だった。その時の、打ち解けたようなジョーカーの顔を見て、ツバサはフッと微笑む。

飛王・リードの事は今は置いておく事にした。

「……ジョーカー、ヨイリー博士」

「？　何かしらツバサちゃん」

呼ばれた博士とジョーカーは訝しげにツバサを見る。ツバサは安心感を与えるような笑みを浮かべながら本題に入った。

「そろそろジョーカーを、正式にヨイリー博士のウィザードにして良いか？」

その発言でヨイリー博士とジョーカーはもちろん、周りの野次馬隊員や科学者が目を『点』にする。長官は顎に手をやりながら尋ねた。

「それは、どういった意図で……」

『……私は、用無しという事か……？』

ジョーカーが柄にも無く不安そうな声を出す。ツバサはそれをはっきり否定した。

「違うよ。お前がヨイリー博士やここの連中と仲良くなったらこうするってのは、お前を自爆から助けた時から決めてた事だ」

『……そんなに前から……』

ジョーカーの驚いたような声にツバサは平然と頷く。

「ああ。……忘れていないか？　オレはもう死んでいるはずの人間。お前ら表の人間とは違って、オレは裏の人間だ。今は一緒にいる理由があるだけで、いつまでもお前らのそばにいられるわけじゃない。いる理由が無くなればサヨナラだ。そうなると、もう逢えない」

ツバサやアイリスは暫定的にこの場にいるに過ぎない。やる事を終えたら姿を消す。その後は表舞台には決して姿を現さない。……永遠（とわ）の別れだ。

「……つまり、君の言う【　裏の人間　】からの気遣い。っという

わけかな？」

長官の唸りながらの解釈に対し、ツバサは真剣な目でジョーカーを見た。

「そんわわけだ。……せっかく仲良くなったんだ。お前はまだ表に戻れる。……だから、チャンスを無駄にするな」

この機会を逃してツバサのそばにいるなら、それは二度とヨイリー博士たちに逢えない事を意味する。だからツバサは始めから決めていたのだ。ジョーカーが過去の遺恨を振り切って皆と打ち解けたら、ヨイリー博士のウィザードにする事を。……また、自分の計画のためにも。

その視線の意味を受け取って、ジョーカーは真剣な目で応えた。

『……ツバサ。……うけたまわった』

「ジョーカーちゃん、本当に良いの？」

ヨイリーが自分の3倍近い身長を持つジョーカーを我が子に向けるような心配そうな目を送る。ジョーカーは生みの親に対し、視線だけでなく身長も合わせて彼女を見る。

『ああ。……私は、博士やスバル……私を受け入れてくれる者と一緒に居たい』

「でも、ツバサちゃんだって受け入れてくれるんじゃ――」

『確かに私はツバサのウィザードだ。だからこそ、彼の意思に応えたい。それが、私の命を救ってくれた事への恩返しになるのだと思う』

ヨイリーの言葉を遮ったジョーカーの瞳は、澄んだ優しい光を湛えていた。断定的でありながらも、優しさで溢れる声色だった。

ヨイリーはそんな彼を見て嬉しそうに手をしっかりと握り、ジョーカーもまたそれをしっかり握り返した。

そんな2人を見ながら、長官がツバサに話しかける。

「……ジョーカーも旅行について行ったのは正解だったようだね」

「……まぁな。……そのおかげでこの書類の山だけどな」

最後にトゲを交えて皮肉ったツバサに対し、長官は苦笑しながら周りの科学者に呼びかける。

「あ～～～……余裕のある者はツバサを手伝ってもらいたい」

それに対し、科学者たちのリアクションは満場一致だった。

「「「「自業自得だろ」」」」

長官はそれに対し当然とばかりに頷き、ツバサは絶叫する。

「ひっでぇぇぇぇ！！！」

ツバサにとって、地獄の夏休みが始まった。……いや、これは彼に限った事では無かった……。

――――星河家――――

星河家では旅行の話で盛り上がっていた。そんな時、あかねが思い出したようにスバルとミソラに話しかける。

「ところで2人とも、夏休みの宿題どこまで終わったの？」

「「へっ……？」」

スバルとミソラは声をハモらせて素っ頓狂な声を上げる。あかねは「まさか……」というように箸を置いた。

「旅行だろうと、ハンターにデータを移せばある程度は終わらせられるんだからそうしていると思ったんだけど……まだだった？」

「「……」」

2人の沈黙は肯定の証。あかねはため息を付き、普段よりもちょっときつめの口調で言った。自分のやる事はちゃんとやれという、親としての厳しさというヤツだろう。伊達に女手一つでスバルを数年間育ててきた訳ではない。

「それじゃあ、今までの分を取り戻さないとね。頑張りなさい。2人とも」

「「……はーい……」」

あかねに言われてスバルとミソラは無言で頷き、2階に上がっていった。彼らにとっても、今年の夏休みは特に大変だったという。

なお、翌日スバルが電話で聞いた所によると、キザマロ、ゴンタ、ジャックも同じ状況だそうだ。つまり、『宿題忘れ5人組』というわけである。

そのまた翌日、ルナの指揮の元全員の宿題を終わらせるための勉強会が開かれた事は言うまでも無い。

第８１話　ただいま（後書き）

次回は、少し早いですがこの小説がなぜゲームを主にしているかも分かります。……あくまで予定ですけどね。

番外編　？（前書き）

今回は各キャラのモデルを発表します。伏字無しです（笑）。正真正銘のぶっちゃけトークです。せっかくなんで、紅白までに書き上げようと頑張りました。

なぜ紅白までかというと、内容を見れば分かります。

それと、難しい漢字の数字（壱など）からローマ数字に変えました。……情けない話、参（3）までしか分からないんですよ……。

番外編　？

始まりました番外編！　今回はこの作品のオリジナルキャラを紹介したいと思います。モデルが居ればそれも紹介しますよ。

「まだ四神の最後の1人が出てないけど良いのか？」

……ツバサ、紹介前に出てくんなよ。……まぁいいや。ええ。セイリュウに取り憑かれる人は良いんです。理由は内緒♪

「それってどういう事ですか？」

スバル君！　君もか！（↑『ブルータス！　お前もか！』のノリで）……ギャグはさておき、その辺の話題はスルーで♪

それでは、まずはコクレンさんからいってみましょう！

「コクレンさんって元は傭兵だったんですよね？」

「そうそう。オレがゲイルに頼んで亡命させたんだっけ」

あ、実はコクレンさんの初期設定は、大吾さんの大学の恩師という設定も考えていたんだよ。

「えっ！　そうなんですか！？」

まぁ、そこまでやっちゃうとその後の話がややこしくなりそうだからってんで、道端でバッタリという出会いの仕方をさせたけどね。

「てい良く言えば手抜きじゃねぇか」

「まぁまぁ。作者さんも人間なんだからそのぐらいの手抜きは良い

じゃない」

……何か、あえて手抜きという単語を入れてる辺りが微妙にフォローになってない気がするが……考えないようにしよう。

次はソラちゃんですね。

「今じゃあすっかりメインキャラクターの1人ですね」

「……確かにアイツはいい奴だけどよ……スバル、蹴られる身にもなれ」

彼女としては打ち解けている証だよ。あ、ちなみにソラにはモデルが居ます。性格の方は、『鋼の錬金術師　翔べない天使』のアルモニ・エイゼルシュタインがモデルです。

「作者のお気に入り小説の1つだったか。確か、PS2の『鋼の錬金術師・翔べない天使』のノベライズ版だっけ？」

そうそう。素直で活発で一生懸命。そんなキャラです。

「何かまさしくソラさんって感じですね～」

おまけにアルモニの声優は、今年の紅白で話題になっている水樹奈々さんだったりします。

「「おぉ～～～」」

いや～実はミソラちゃんとソラちゃんのデュエットの時も声のイメージを水樹奈々さんにするか豊口めぐみさんにするか迷ったんですよね～。

「そんで、豊口めぐみさんにした理由は？」

ソラちゃんの役割的に、『ＢＬＡＣＫＣＡＴ』のミナツキサヤと重なる部分があったんでね。それもあってかな？　あ、別にソラは死ぬわけじゃありませんよ。

「……それより、【　性格の方は　】って事は容姿もイメージがあるんですね？」

うん。具体的に例えられる人物がいなかったんだけど、先日「ああ、こんな感じかな？」ってのは見つけました。週間少年ジャンプに連載している『保健室の死神』の、鏑木真哉みたいな感じです。あれをツインテールにしたような感じかな？

「「ぶっちゃけた――――！！」」

なにも2人して驚くこともないでしょ。まぁ、真哉は年齢的にソラと同じ（中二）だし、違和感は無いんじゃないかな？

はい次行こ次。

（（……なんか、酒場を巡るおっさんのようだ））

次はゲイルです。

「ああ、あの変態か」

「ツ、ツバサ君……そんな嫌そうに言わなくても……」

……あの人にもモデルはいますよ。

「「ッ！！？　あれに！？」」

……ツバサもスバルも息ぴったりだね。え～～っとですね、ゲイルのモデルですが、月刊ライバルに連載している『絶対博士・コーリッシュ』に登場するアジョイ・ラカという人物がモデルです。優秀で明るくて暢気。おまけにイケメン。そんな人物です。ちなみに、左腕は義手です。

「こ、こっちもゲイルさんそのものだ……」

「あいつは義手じゃないけどな。……まぁ、優秀ってのは同じか」

「ツー君！　そんなに僕の事を思ってくれてたんだね！？」

「ぎゃあぁぁぁぁ！？　ゲイルが作者空間に介入してきた！！？」

あっはっはっは！　それじゃあ今回はこの辺で！

「ツーく～ん！」

「わぁぁぁぁぁ！！！」

「……今回やたらと伏字無しでマンガ名が出てきたけど、大丈夫な

のかな……？　色々と……」

第８２話　同系統の次元（前書き）

それと、この話は作者目線と登場人物視点が混じっていますので予めご注意ください。

第８２話　同系統の次元

カタカタカタカタ……

部屋に響く音はパソコンのキーを打つ音。ツバサは現在始末書の整理に追われている。朝にスバルから勉強会の誘いのメールが来たが、忙しすぎるくらいに忙しいので断ったしだいだ。

ツバサは固まった肩をほぐすために首と肩を回した。

「……あ～～疲れる～～～～」

『……１つ提案があるんだけど』

「ん～～？　何～～～～？」

ツバサは伸びをしながら、ハンターの中から控えめに申し出たアイリスに問い返す。

『……同系統の次元ならデータのやり取りは出来るのよね？』

「あ～～～まぁ～～な～～～～」

同系統の次元。言ってしまえば、特徴が似ている次元だ。スバルがいて、ウォーロックがいて……。先日出遭ったギャラクシーがいる次元もまた、同系統の次元と言える。

同系統の次元間であれば、結界とは関係無しでデータのやり取りぐらいは出来る。なお、物質は不可能だ。

やっとほぐれた様子のツバサは「それがどうした？」とアイリスを見る。それも、背もたれに体重を乗せて逆さまにアイリスを見ている状況だ。

アイリスはその行儀の悪さに少し顔をしかめて要件を告げる。

『……マユさんにお願いしたら？　領収書の整理、つまり計算だけならあなたでなくても問題は無いと思うし』

ドダンッ！

ツバサはアイリスの言葉でイスから引っくり返った。後ろに体重を乗せてたので簡単に、気持ちの良い位に倒れた。

『……そこまで驚かなくても……』

「い、いや、あいつ今学校行ってるかも知れねぇし……」

朝倉マユ。同系統の次元の知人だ。

異次元の知人というのはそもそも、『異次元』という眉唾（まゆつば）なモノを信じられる人間でなければいけない。故に、関わりを持つ人間は選ばないといけないのだ。そういう点でマユは優秀だった。というより、順応性の高い子だった。なお、自分の計画の事は話していない。

ツバサとしては、彼女に手助けを求めるのは抵抗があった。なぜなら最近マユは余計な知恵をつけたらしく、以前逢った時は侑子よろしく見事にからかわれたものだ。彼女と違って天然口調で来るから対応策も立てづらい。

アイリスは少し考えた後言葉を発した。

『大丈夫だと思うけど……』

「何でそう言える？」

『女の勘』
「……お前からその単語が出てくるとは思わなかった」
『……意地を張るのは良いけど、このままだと全部終わらせるのに残りの夏休み＋２０日はかかるわ』
嫌な計算だ。
ツバサは盛大なため息を付いた後、観念したように両手を挙げた。
「分かったよ。え～っと……」
カタカタカタ……　ポーン！
普段はプログラムなどが映っているパソコンのディスプレイに少女の姿が映る。ちょうど勉強をしているらしく、ディスプレイそっちのけでノートと格闘しているようだ。本人の顔からして楽勝な問題らしい。
こないだ逢った時は中学１年。淡い茶髪を肩まで伸ばし、瞳の色は無邪気な子供っぽさを残す、透き通った青だ。
「……アイリスの勘も当たるんだな？」
からかうつもりでアイリスに投げかけたのだが、その声でマユが気付いたらしい。少し驚いた後不満を投げてきた。
「うわ！？　ビックリした！　驚かさないでよ～。乙女の部屋を勝手に覗くなんて……小学生のする事だよ？」

……いや、小学生でもしないと思う。まぁそれはともかく、まずはあいさつ。

「久しぶり。今は何歳？」

自分としてはどれだけ時間のズレが出ているか確かめるためだったのだが、彼女は案の定誤解した。

「女の子の歳を聞くのは嫌われるよ～？　ちなみに高校に入学したんだ♪　コリッキーもスターキャリアーに入れて、一緒に行ったんだよ？」

やはりどこか（性格的に）ズレていると思うのはオレ（ツバサ）だけだろうか。そのうえ突飛も無い。

おまけを言えば、コリッキーとはマユの世界で１０年近く前（今が高校だというので大体その辺だろう）に流行った『Ｄペット』と呼ばれるものだ。コリッキー自体、元はＦＭ星人のウルフがマユにあげたものだ。ウルフのコピーのようなものだろう。

スターキャリアーとは、現在出回っているハンターＶＧの前作にあたる。電波の物質化の基礎、マテリアルウェーブの導入はこれから始まったのだ。ハンターＶＧはノイズの異常発生から対策の１つとして考えられた端末。マユの世界ではノイズの心配はないそうなので、『スターキャリアー』から『ハンターＶＧ』になる必要が無かったと考えられる。

時間のズレは例によってツバサの居る世界の方が遅い。

「それで、何か用？」

「ん、ああ。実は――」

領収書の事を説明中。

「なるほど、キミは相変わらずやんちゃしてるんだね」

「……この場合ムチャという単語でも良いのでは？」

やんちゃとは小学生の先生が選びそうな言葉だ。……そういえば育児関係の仕事を目指しているとか言ってたような……。

「その話は置いといて……まぁ、別に良いよ。単なる領収書の整理なら四則演算だけだよね？」

話を勝手に置いてかれたのは良いとして、手伝ってもらえるのは助かる。ちなみに、四則演算とは足し算、引き算、掛け算、割り算といった基本的な計算だ。単に金額を足していって合計を出せば良いのだから、そんなもんで十分だろう。

「ああ。悪いな。そんじゃあ今からデータ送る」

「はいはーい。……多っ。キミいったい何したの？」

「ホテルの損害賠償を筆頭にもろもろ」

マユは領収書（電子データタイプ）の数に驚いているが、ツバサは素っ気無く返して作業を始める。マユは「フライングじゃん……」等と言って不平をもらしたが、すぐに作業に移った。

カタカタカタカタ……

部屋には再びキーを打つ音が響く。そんな中、マユはツバサに話しかけてきた。単純に計算をしているのは暇らしい。

「そういえばさ」
「ん？」
「キミの演算能力なら、こんなの本気を出せば簡単に終わらせられるんじゃないの？」
「まぁ、そうなんだけどよ。そうしちまうと形が変わっちまうからな」

以前、世間からナビ泥棒と呼ばれていた頃は一国の軍の設備をまとめて掌握ぐらいのハッキングテクは持っていた。しかし、カーネルをサーバーに入れた時からその技術は使えなくなった。迂闊に技術を使うと体が変わりかねないため、自分で制限をかけているのだ。
なお、『形』とは単純に姿が変わる事だ。特別意識して何かに望むと、目的に対し最適な肉体に変化してしまう。

「私としては見てみたいんだけどね♪」

そう笑って見せたマユに対し、ツバサは苦笑する。

「あいにく、あれは命を大量に使うから使いたくないんだよ。なりっぱで……4日ってとこかな？」
「案外大丈夫じゃん」
「……」

そうでもない。計画の事を思えばギリギリだ。
内心でため息をついているかたわら、マユはかいてもいない額の汗を前腕で拭う。

「ふぅ～～。終わったよ」
「ははっ。相変わらず早いな」

「先生が良いからだね」
「昔の話を」

マユが小学生（小５）の時、初めて出逢った時に算数の問題で四苦八苦していたので教えた事がある。その時すっかり打ち解けて（向こうが懐いて来て）、それ以後はたまに勉強を教えていた。そのおかげか、現在学年トップとかどうとか。

マユが終わった以上、本来なら頼んだ側（ツバサ）も急がないといけないのだろうが、急ぐと本当に変わりかねない。よって、ここはマイペースを貫かせてもらう。

「そういやよ、そっちのスバル達はどうしてる？」
「ん？　あぁ、こないだスバルさんとミソラさんが電撃結婚したよ」

ピッ――――！（↑エラー音）

「あ、間違えた～♪」
「ご機嫌に言うな。っていうか電撃をつけるな電撃を。何で女ってのはいつもご機嫌なんだ」

失言だった。後でそう思う。
マユはツバサの言葉を聞くとニンマリ笑顔を浮かべた。

「ふぅ～ん。いつも……ねぇ……」
「……何だよ？」
「ソラちゃんだっけ？　キミの相手」

ピッ――――！

思わずエラってしまった。

「あ、あああいて？」

動揺するツバサをマユはクスクスと笑う。後ろのアイリスが少し自分（ツバサ）から離れた所からして、彼女が話したらしい。

「むっふっふ～。お・あ・い・て♪　キミが特定の誰かのために頑張るなんてね～」

ほら見ろ。からかってきた。

「い、いや。アイツとオレはそんなんじゃ――」

「あっ！　キミの場合格別気にかけるのはスバル君もだから、ソラちゃんと合わせて2人か！」

「話を聞け――――！！」

『ッ。ツバサ、ソラさんから電話』

ツバサが思わず立ち上がって抗議した矢先、アイリスはハンターの中から知らせる。ツバサは「喋るなよ！」とマユに忠告してから電話に出る。念のためにサウンドオンリーだ。

なお、アイリスは電話に出る前にハンターから出た。

「……はい」

「あ、ツバサ？　今良い？」

「ん……。まぁ、良い、ぞ」

歯切れが悪いのは、そばでアイリスとマユが笑いを堪えて口元を手で塞いでいる事が気になったからである。アイリスはともかく、マユはイタズラをしそうだ。

こっちの事情を知らないソラは安堵したように話し始めた。

「そっか。良かった。サウンドオンリーだからてっきり会議中の出たのかと思って」

「オレがそんな事をする奴に思えるか？」

「うん」

はっきり言いやがった。……いや、居眠りぐらいは普段からやっているから堂々と否定できないが……。

「……なんかさ、ツバサ楽しそうだよね？」

『うん。私としても嬉しい』

「弟の成長が？」

『……人間とナビは違うけど、そんな感じ』

そばでにこやかにそんなやり取りをするマユとアイリス。

黙れお前ら。

そう言いたいが、余計な事をしてソラにバレた後が面倒だ。決してソラが怖いわけじゃない。あえて断言しておく。

「そんで、何で電話を？　そっちは暇なんか？」

ツバサの問いに、ソラは苦笑交じりで答えて見せた。

「う～ん……。それが世界のホテルのサービスを調べるのを忘れててね。女将から仕事量増大のペナルティを食らって、今さっき終わ

ったとこ。……そういえばそっちもかなりのペナルティ課せられたんだよね？」
「ああ。帰ってみたら部屋から溢れる始末書や領収書の山って感じだった」
「あはは！　そりゃ大変だったね。……けど、大丈夫？　仕事の量すごいんでしょ？」

後半はホントに気づかっているようだった。

「あぁ。助っ人がいるから問題ない」
「助っ人？　ＷＡＸＡの科学者の人？」

そばで「あたしあたし」とマユが自分を指差す仕草をする。だれがお前なんか紹介するか。結論、見なかった事にして話を再開。

「まぁそんなとこだ。そっちは？」
「ん？　部屋でゆっくりしてるよ。まだ営業スマイルが顔から取れないや」

苦笑して見せた彼女にツバサは笑みをこぼす。

「フッ。そりゃお疲れ。オレなんかと話してないでゆっくり休んでろよ」
「……はぁ～～～。ツバサ、何で私がキミに電話したか考え及ばない？」

ソラとしてはツバサとの会話で疲労を紛らわせようとしていたらしい。
ツバサの後ろの方では、マユとアイリスが白けた様なテンションで会話をしている。

「……もしかして、ツバサって鈍感？」
『……そうでもないと思うけど……』
ツバサは少し考え込んで、気まずく答えた。
「……悪い。全然分からん」
その言葉で、ソラは大きくため息をついた。
「はぁ～～～～。……あ～いいや。何でも無い。うん。ゆっくり休ませてもらうね」
「へいへい。ゆっくり休め～～」
「うん。またね～～～」
プツッ　ツー　ツー　ツー……
電話が切れたのを確認して、マユは友人を諭すようにツバサに話しかける。
「……ツバサ。何をするにしても中途半端はダメだからね。それじゃあ、そろそろコリッキーに餌をやらないといけないから」
「おう、じゃあな」
マユが映っていたディスプレイは暗い画面に戻り、ツバサの顔が映る。その顔は、迷いだ。
「……中途半端はダメか。……そうだな」

――旅館・うらかわ――

「……」
『……』

電話を切ったソラとスザクは沈黙。重い空気だ。

「……スザク」
『な、何？　ソラ』《ソラが怖い。ソラが怖い。ソラが怖い。少し怒ってる！》

スザクが怯えるのをよそに、ソラは通話を切ったハンターを見つめたまま呟く。

「今回の事でよぉく分かったわ」
『な、何が？』
「あいつは鈍感だからもっとストレートに行かないとダメだって」
『……そ、そだね……』
「そうと決まれば……。あ、面白い事思いついた♪」

ソラは再びハンターを手に取ってツバサにメールを打とうとしたが、中断してミソラに電話をかける。

「……あ、ミソラちゃん？　少し話があるからスバル君に会話が聞こえないようにして。……うん。少し面白い事思いついてね。実は

――」

彼女達は今日ルナ宅で勉強会があったらしい。現在はそれも終わり、スバル宅でゆったりしているそうだ。

用件を告げ、電話を切った2人の乙女は得意げな笑みを浮かべていた。

「「明日か」」

違う場所にいるにも関わらず、ミソラとソラの声は揃っていた。

――――アメロッパ――――

その頃、アーノルド・ローグはニホンに行く手続きを整えていた。

「いよいよか」

空間の割れ目から、飛王（フェイワン）・リードが問う。ローグは覇気の無い顔で頷いた。暗示の効果だ。

「はい。明日にでもニホンに発（た）てます」

「いきなり深追いはしなくて良い。じっくりと情報を探り出せ」

「承知しました」

――WAXA――

「……ふぅ～～～。ようやく終わりが見えてきた」

ツバサは溜まった息を吐きながら腕を伸ばす。

現段階で、全体の7割は終わっている。

『ツバサ、ゲイルさんからメール。……アメロッパ大統領がWAXAニホン支部に視察に来るって』

アイリスはあくまで平坦と言う。彼女には、ツバサを狙ったのがそのアメロッパ大統領とは話していない。なぜなら、彼女はすぐ顔に出るからだ。警戒心を表に出されたままローグと話されたら向こうにも警戒心を出させてしまう。そうなると何かとやりずらい。

情報の方は、おそらくゲイルがウラのネットワークを用いて得た情報だろう。

ここで動揺を見せればすぐさまアイリスに見抜かれる。よって、ここは平常を偽った。まぁ、実際あまり慌てていないのだから、『偽った』という表現には若干の間違いがある。

「ふぅ～ん」（さて、どうするか。うまくローグと遭わない様にかわさないとな）

Ｐｉ！

そんな事を思っているうちに、またもメールが来た。

『……今度はソラさんね。……明日皆で遊園地に行くんだけど、ツバサも来ない？　……だって。……でも、明日は大統領が――』

「よし、行こう」

『えっ？』

ツバサの即答にアイリスが素っ頓狂な声を上げる。アイリスが理由を尋ねる隙を与えずに、ツバサはまくしたてた。

「大統領の方は長官に任せよう。１日中ひきこもってのはやっぱり性に合わねぇからな」

『でも――』

「はい決まり決まり。そんなわけでオレは寝る」

有無を言わさずツバサはベッドに入る。アイリスはため息をつき、アラームをセットしてからスリープモードに入った（無論ハンターの中）。

「……」（誘ってくれたスバル達には悪いけど、外出の口実にさせてもらおう。……それに、ソラの事もハッキリしないとな。都合良く2人きりになれれば……）

彼はそのまま眠りに着く。一日中書類と格闘していれば無理も無いだろう。

だが、この時ツバサは気付いていなかった。【　スバル達と行く　】という前提自体が間違っていた事に……。

第８２話　同系統の次元（後書き）

大まかに言えば、マユの世界はアニメの流星が基盤。ツバサの居る世界はゲームの流星を基盤にしています。

次回、色々とはちゃめちゃになる予定です。

それでは、次回もお楽しみに！

第８３話　出し抜いたのは誰でしょう？

――――ＷＡＸＡニホン支部――――

「お待ちしておりました。アメロッパ大統領」

長官と暁がアメロッパ大統領ことアーノルド・ローグを出迎える。差し出された手に、ローグは友好的に答える。

無論、翻訳装置はハンターにインストールされている。

「こちらこそ。本日は急な来訪に対応して頂いて感謝するよ」

その言葉はハキハキしており、歳を感じさせない。しかし、彼が暗示にかかっている事には違いないのだ。ローグは握手を終えるとあくまで消極的に求めた。

「最近、本来のエースである暁君をも指揮している人物がいると聞いたのですが、お逢いする事は出来るだろうか？」

それがツバサのことである事は、長官にはすぐに伝わった。対して、暁は「フッ」と笑う。それは、「上手い事言うな～この人」とか思ったのだろう。しかし、長官は眉をひそめた。

「？　失礼ながら、本人の要望で自分の事はこのＷＡＸＡニホン支部の者しか知らないようにしていたのですが……。それをなぜ知っているのですか？」

「おっと、変な風に誤解しないでもらいたい。単なる私の情報網のたまものだよ。暁君の事はアメロッパでも有名だ。その彼を含めて、

ロックマンやその他の電波変換メンバーをまとめているなんて面白いと思ってね。土産話に、ぜひ彼と話をしたいのだよ」

ローグが誤解を払拭するために苦笑しながら手の平を前に出して首を振る。暁は何とも思わなかったようで、適当な相槌を打った。

「確かに、アイツのする事なす事はめちゃくちゃだからな。目立つなって方がムチャでしょ」

「ム……確かに……」

長官の頭の中では、ツバサの書いた始末書の内容が頭を巡っていた。暇つぶしと称してウイルスを作った事が毎月で3度ほどあるし、会議では居眠りするし、いつの間にやら抜け出して夕方帰ってきたり（プチ行方不明）……。

思い当たる節々が多過ぎる。

暁の言葉に唸り声を上げた後、少し考えてから頷いた。

「……分かりました。では、まず彼の部屋に行って、それから共に施設をご案内します。彼との話は昼食の時にでも」

それに対し、ローグは造花の笑みを浮かべた。

「それで構わない。迷惑を言って済まないね。この歳になると、適度に興味を引くモノが無いと生きがいが無くなるもので」

その、歳を感じさせない元気な笑みにすっかり長官は打ち解け、自ら案内した。暁は2人の後ろから護衛する役だ。隣のゴッツイ護衛（ローグの護衛）が正直暑苦しい。

そして、ツバサの部屋の前。

「ここが彼の部屋です。ツバサ君、入るよ」

シ――――――ン……

部屋からは何の音も無く、長官と大統領にも沈黙が流れる。

「……」

「……音がしないのだが……」

大統領の言葉で我に返った長官と暁がドアを叩く。

「おいツバサ！　出て来い！　大統領だぞ!?　会わなかったら色々きまずくなるだろが！」

「ツバサ君！　大統領直々のご指名だ！　出てきなさい！」

シ――――――ン……

以前物音1つ無し。

「……まさかアイツッ！」

「どうした暁君？」

暁の叫びに長官が冷静だったのは予想が出来ていたからだ。その予想は暁が行動で実行した。

「バックれていると思います！　長官、アシッドで電子ロックの解析許可を」
「はぁ……。分かった。許可する」

長官は自分と同じ推測にうんざりしたため息をついた。さっきのドア叩きで反応無しとなると、ほぼ１００％で逃げられている。
その答え合わせのように、アシッドは慣れきった様子で言う。

『やはり、いないようですね。電子ロックは解除したのでご自分の目で確かめてください』

その声で確かめたのはローグだけで、暁と長官は額に手を置いてため息をつく。

「おや？　これは……」

部屋を見ていたローグは疑問符を浮かべる。気になって部屋に入った暁と長官にローグから差し出されたのは一枚の置手紙。

「……ツバサの字だな。……【　遊びに行って来ま～す。長官、大統領の接待は夜露死苦（よろしく）　】……か。帰って来たら始末書だな」
「そ、そうですね。くくっ……」

暁としては【　夜露死苦　】にはまったらしい。堪えるように笑っている。長官はそんな暁に一瞬白眼を送った後、大統領に向き合う。

「もうしわけありません。この通り……その……ツバサはいないのでまたの機会に」
「ああ、別に構わんよ。キミ達も大変だね」（　さすがは飛王（フェイワン）・リ

ードが一目置くだけはある。ここまで見事に出し抜かれるとは……。
まぁ、今回はニホン支部の概要が分かればそれで良いか。……しかし、一体どこへ……？）

その後、ローグはＷＡＸＡニホン支部を見学し、午後5時ごろ、
「しばらくこの国に滞在する」と言ってホテルに向かった。

暁と長官、ローグがツバサの部屋に入る2時間ほど前。ツバサはウェーブロードを滑る様に進んでいた。

「♪～～♪。いや～誰かを出し抜くって、いつやっても清々しいね～」

鼻歌交じりでご機嫌なツバサに、アイリスはハンターの中から白眼を送る。

『……少しは出し抜かれる身にもなりなさい。……それに、良いの？　大統領の事』
「ん～？　まぁ……問題無いでしょ。お堅いのは長官に任せとけば。……うん。新しく作った電波反発シューズも快調だ」

電波反発シューズ。彼が暇つぶしで作った物の1つで、文字通り電波を反発する力がある。反発する強さを調節する事で、電波変換せずともウェーブロードに乗る事ができ、シューズを傾ければ、反発するバランスが崩れて進む事が出来る。
出し抜いた事と自分の発明にご満悦なツバサに対し、アイリスは

ウィザードＯＮして後ろを滑るようについて来る。
『調子に乗ってるとバチが当たるわよ』
「はっ！　オレはそんな曖昧なものは信じねぇんだよ」
アイリスの忠告をツバサは鼻で笑い、先を急ぐ。。
待ち合わせの遊園地前に着くと、スバルとミソラ、ソラがいた。
彼らのウィザードも、無論居る事だろう。
「お待たせ」
上からの声と物体に反応できたのは悲しい事に１人もいなかった。
普段あまり使わないというのもあって、ツバサが電波化できること
を覚えているのはいなかったらしい。
「あ、ツバサ君なんで空から……そういえば電波化できるんだっけ」
「はは……まぁ、スバルが思い出してくれただけでも良しとするか
……あれ？　委員長トリオは？」
メールでは【　皆　】とあった。てっきりジャックやルナ達も一
緒に来るかと思ったのだが、まだ彼らは来ていない様だ。スバルも
同様に首を傾げた。
「さぁ？　まだみたいだね」
だが、ミソラはあっさりと首を振った。

「ルナちゃん達は来ないよ」
「「へっ？」」

スバルとツバサの声が素っ頓狂な声でハモリ、ミソラは首を傾げた。ミソラのそばのソラはクスクスと笑っている。

「言ってなかったっけ？　今日はダブルデートなんだよ？」
「ダ、ダブル――」
「デート？」

スバルの声をツバサが引き継ぎ、１つの疑問となる。ここにきて、ソラは初めて声を出した。

「あ～安心して。ここの遊園地大きく分けて２つに区切られているから、それぞれ別々のブロックに行けば途中で互いのカップルに出会うってのは無いから」
「カ……カップ……」
「な、なぁ……。まさかお前ら、オレらを出し抜いて……」

スバルは聞きなれない単語に顔を赤らめて、ツバサは少し頭を冷やして状況を確認。推測を言った。

ミソラとソラは笑い出す一線を何とか抑え、その推測を肯定した。

「ピンポーン！　それじゃあスバル君、一緒に行こっ！」
「うわっ！　ミソラちゃんそんなに強く引っ張らないでよ！」
「あはははは！」

ミソラは嬉しそうにスバルの手を引いて遊園地に入っていく。ミソラの顔は嬉しさで満面の笑み。スバルもまた、戸惑いながらも顔

を歳相応に赤らめていた。
そしてもう一方も……。

「そんなわけで、レッツ・ゴー！」
「はぁ～。……逆らうだけ無駄そうだから乗ってやるよ」
「ふふっ。キミはホントに素直じゃないな～」

かったるそうなツバサをソラは無理やり引っ張っていく。ツバサに言ったら「違う！」と否定されそうだが、その様は案外さまになっていた。

地球を3度救ったヒーローと、世界を陰から見守ってきた者は、案外あっけなく出し抜かれ、乗せられましたとさ。

第８３話　出し抜いたのは誰でしょう？（後書き）

次回、作中に出てきた通りダブルデートです。ソラが言ってた通り、双方のカップルがデート中に出会う事は無いですよ。

第８４話　ダブルデート

――――スバル、ミソラ組――――

「スバル君、アレ乗ろう？」
「い、いや、あの、その……あれはちょっと怖すぎ……」

ミソラが指差してスバルがたじろいでいるのはジェットコースターである。ほぼ垂直で滑り落ちるのはもちろん、それに加えてきりもみ回転までも加わるのだ。もはや、「何で安全第一のニホンにこんなものがある！？」と、突っ込みたいような産物だ。
ミソラは少し残念そうに、別の方を指差した。

「えっ～～。……それじゃあ……あれは？」
「……ミソラちゃん。あ、あれもちょっと……」

ミソラが指差したのはスバルの苦手なお化け屋敷である。スバルがお化けが苦手という事は案外知られていないもので、家族とウォーロックしか知らない。そして、スバルも立派な男の子。そういう弱点は知られたくないのが年頃というものだ。特に、自分の好きな人（ミソラ）には絶対に知られたくないものだろう。

「う～ん。（かといって観覧車はまだはやいしな～）」
「えっ？　何か言った？」
「何でも無い何でも無い」

ミソラの計画としては、色々な所を回る　↓　一緒に昼食　↓　観覧車であわよくば……。というものだ。

不思議がっているスバルの気を違う所へ回すために、ミソラは話を逸らす事にした。

「でもスバル君、何でお化け屋敷がダメなの？　……もしかして地球を3度も救ったヒーロー君はお化けが怖いのかな？」

「うっ……それは……」

想像していたより大きくたじろいだスバルを見て、彼がお化けが苦手なのはほぼ確信したが、ミソラはもう少しからかう事にした。

「そういえば……前にスバル君の学校の修学旅行で夜の海が怖いって言ってたよね～？」

「あ、あれは暗くて吸い込まれそうで――」

「幽霊も暗いとこに出るよね？」

「うぅ……。ミソラちゃん、イジワルモード？」

「スタジオの時のお返しだ――――！」（そんな事もあったな～）

以前、スバルや委員長トリオ、ジャックと共にミソラの出るドラマのエキストラに出た時がある。その時、ちょっとしたトラブルでスバルがイジワルモードになったのである。

この状況をどう乗り越えるかスバルが悩んでいる時に、ミソラは「ふふっ」と笑いながらトドメの一撃を食らわせる。

「さてスバル君。このまま私からからかわれ続けるのと、お化け屋敷に行くの。どっちが良い？」

「ミソラちゃんイジワル過ぎる――――――！」

「あはははははは！　それじゃあお化け屋敷にレッツ・ゴー！」

「行くなんて一言も――――！」

数分後、2人の悲鳴が響き渡る。一方は楽しみの範疇（はんちゅう）。もう一方

は脅かす側が躊躇うほどに本気の叫び声だった。

30分後、お化け屋敷から出たスバルは疲れたような笑みを浮かべながらブツブツ何かを言っていた。

「フフッ……。アレはないでしょ。下からズシャって……怖いって。それにあの時も……」

思ったより効果抜群だったため、嵌めた側のミソラも心配していた。

「だ、大丈夫？　スバル君？」

「大丈夫じゃないよ……。酷いよあんなに強く引き込むなんて……」

恨めしげにスバルはミソラを見る。ミソラは心底申し訳なさそうに両手を合わせた。

「ほんっとにゴメン！　まさかあんなに苦手だったなんて思わなくて……」

「……」

『重症ね』

『こうなったらしばらくは治らねぇぞ？』

「うぅ……」

ウォーロックとハープにまで追い討ちを食らい、ミソラは追い込まれる。その時、彼女はポロッと零してしまった。

「（そこまで落ち込まなくても良いじゃない）」

その言葉で、スバルは本気ではないが少し怒ったようにミソラを

睨む。

「聞こえたよ。そういうミソラちゃんには無いの？　苦手なもの」

「えっ、あ、あるけど……」

ミソラの苦手なもの、それは足の多い虫だ。ムカデやクモ……ｅｔｃ……。

スバルは以前ムスッとした顔でミソラに詰め寄る。

「じゃあ分かるよね。自分の嫌いな物を目の前に出されるってどういうのか」

その言葉を受け、ミソラもプチッと来てしまった。

「それはそうだけど……。スバル君だって少し小さいんじゃないかな？　男の子がグチグチ言ってたらみっともないよ」

「ミソラちゃんがお化け屋敷に誘うからでしょ！？」

「スバル君がイジイジ言い過ぎるんだよ！」

『お、おい、その辺にしとけ』

『そうよ。ミソラ、ファンに見られたらどうするの？』

さすがに見かねたウォーロックとハープが仲裁に入るが、ケンカをしている２人はキッとウォーロックとハープを睨む。

「「ウォーロックとハープは黙ってて！」」

「「ッ！　真似しないでよ！」」

スバルとミソラは互いに睨み合い、終いには……。

「「～～～～～～ッ。フン！」」

互いにそっぽを向いて別々の方向へ歩いて行ってしまった。

『……一応オレらもついて行くか』

『そうね』

ウォーロックとハープはそう言うと、それぞれのパートナーの下へ向かった。

スバルとミソラがお化け屋敷で騒いでいる時、ツバサとソラは……。

「はっ？　オレがお前の事が好きかって？」

「そっ。この際だからはっきりさせとこうと思って」

園内のファースト店で単刀直入に尋ねられていた。ツバサは頭を掻きながら納得する。

「なるほど。このダブルデートとやらはそれを聞くついでにスバルとミソラの仲をより近づけようというお前の策か」

「……正解。で、答えは？」

真剣な目（おまけに少しイライラしている）。ツバサはソラの目を見て居住まいを整えた。意志には意志で応えるのが礼儀だ。っていうか、侑子からえげつないまでにしつこく言われて身についた事とも言える。

「分かった。……結論から言えば、好きとかどうこう以前に、そういった関係にはなれないんだよ」

「……どういう事？」

ソラが訝しげに眉をひそめる。別に愛が全てなんて事は言わないけど、そういう感情すら抱いてはいけないとはどういう事だろう？

ソラの内心の疑問を察したように、ツバサは息を吐きながら答える。

「オレは実験に遭ってから、全く歳をとっていない。……って言って分かるか？」

「……えっと……」

考えが及ばなかったらしい。ツバサは少し具体的な例えを出した。

「例えばだな、自分は普通に歳をとっていくのに、そばに居る者が歳を全くとらないって、どういう気分なんだろうな」

「どういう気分って……気味が悪い……かな。……あっ」

「気付いたようだな。そう。オレのように歳をとらない存在は周りから見て異端以外の何でも無い。さっきお前も言ったろ？　気味が悪いと」

「ッ！　あれはキミの事じゃ――！」

思わずいきり立つソラに対し、ツバサは周りを視線だけで見渡す。

ソラが釣られて周りを見ると、客の一部が自分たちの方を向いている。

頭の冷えたソラに、ツバサが声をかけた。

「ちったぁ落ち着け」

「……」

大人しく座ったソラから少し視線を外して、ツバサは続ける。

「……お前がオレの事を気味悪くないと言うのは、オレという存在を知っているからだ。当たり前に話せるから、気味が悪いモノだとは思わない。……でも、もし全く会話していなくて、その上で特異性を見たらどうなる？」

「……気味が……悪い……」

彼の言う事は、否定したくても出来るものではなかった。現実的過ぎるのだ。

相手の事が良く分からない。だから気味が悪い。そしてその先に待つのは、排除・迫害だ。国と国の戦争、宗教の戦争、学校のイジメ……。いずれも異なるモノ同士の戦いだ。……いや、数が多い＝自分たちが正しいという方程式に従って少数派を虐げるケースもあるのだから、この場合は戦いではなく一方的な蹂躙（じゅうりん）だ。

ツバサは半ばうんざりしたような気持ちでストローに口をつける。それはどちらかというと、歴史自体にうんざりといったような感じだ。

「……特異なオレが、まっとうな人間達の中でその特異性がバレずに暮らせる保証は無い。利害関係が終われば手の平返してこっちを

傷つけてくる時もあるんだから、用事が終わったら即行でサヨナラ。2度と逢うことは叶わない。……はなっから別れるって知ってるなら、好きにならない方が良いだろ」

手の平を返されて裏切られた経験が過去に本当にあったらしく、それを話す時は彼の目から光が遠のいた。

ソラはそんな彼を見て悲しくなり、俯いた。彼女の両手に包まれるようにして握られている飲み物には、自分(ソラ)の顔が映る。

「……それが、好きになれない理由。……じゃあ、何で私に色々してくれるの？　励ましてくれたり、戦闘でも何度も助けてくれたし……」

「……ほっとけなかったからだよ。無理して頑張られると見ている側が嫌だから励ました。戦闘の方は今まで助けられなかった奴らと重なって体が勝手に動いた」

戦闘の事はビャッコ戦で気付いていた。彼にとって、目に映る窮地に陥った人は帯広博士やレイ……助けられなかった者達と重なってしまうのだ。

「……私じゃなくても、助けていた？」

「当然だろ」

ツバサは文字通り、当然のごとく即答した。

「……ごめん。少しふらついてくる」

そう言ってソラは席を立つ。彼にとって自分は特別ではなく、助けるべき対象の1人だった。その事が、彼女の心に圧し掛かる。

俯いた彼女の背中に、ツバサの小さい声が届いた。

「（　……オレの事、嫌いになっても良いんだぞ？　）」
「（　やな事言わないでよ　）」

小さい声で返した彼女の声色は、悲しさや怒りが大きかった。店から出た時の気持ちは、最悪。

ソラが店から出たのを見て、アイリスはツバサに咎める様な声を送る。

『……今回のは酷すぎるわ。何であそこまで言うの……？』

対するツバサは、飲み物の入ったカップをくるくると手で回しながら答える。

「……今まで表に関わった時は、単に誰にも知られずサヨナラ程度だった。……でも今回は違う。あいつ等をとことんまで裏切る事になる。……その時にオレを好きなままでいるより、嫌っていた方が傷が浅くて済むだろ？」

先程のツバサの言葉、「その時にオレを好きなままで～」という文脈からして、確率の高い推測が生まれる。

『彼女の好意に気付いてたの？』

「あいつが分かりやす過ぎる」

つまり、気付いていたという事だ。

『……なおさら酷い』

「そう思うならオレから離れたらどうだ？　……ジョーカーみたいに」

『ジョーカーは彼の意思で――』

言いかけて気付いた。その事も、ツバサが提案した事だ。

『……もしかして、ジョーカーをヨイリー博士に渡したのも……』

「ジョーカーにはヨイリーやＷＡＸＡの科学者達。ソラには女将や旅館の皆。それぞれその人を受け入れてくれる居場所がある。そういった居場所がその人にあるなら、そっちに付かせるさ」

彼の言う居場所とは、家や学校などの物理的な居場所ではない。その人が心安らげる居場所、『心の止まり木』とも言うべき存在だ。家族や友達……自分を受け入れてくれる存在がいて、自分自身もその中に居たいと思える居場所。それが、ツバサの言う『居場所』だ。

「……別れの日は近いからな」

『……あと、１人……』

「それが終わったらサヨナラだ」

彼ら２人の声は雑音に包まれて響かない。

そこにいる当事者の気持ちなど、部外者には知ったこっちゃない。上空より、遊園地を見つめる電波人間が居た。どちらも完全に宿主となった人間の意識を奪っている。

一方は藍色基準の装甲。特徴的なのは、その周りに水の羽衣がある事だ。透き通った羽衣は日の光で反射し、本物の水面のように輝く。

もう一方は白基準のボディ。容姿は至ってシンプルだが、この電波体も特徴的だ。なぜなら、その電波体はウェーブロードに乗っているわけではないのである。かといって羽があるわけでもない。雲に乗っているのだ。仙人のように、静かに乗っている。

『……やはり人間はいい気なものですね。愉快に騒いで、無防備で』

水の羽衣を纏う電波人間が少し呆れたように地上を見る。優雅な姿とは裏腹に、その言葉には明確な嫌悪感があった。

それに頷くのは雲に乗る電波体。

『全くだ。……ちょうどこの遊園地は2つに分かれているらしい。私は右側をやる。ティグレスは左側をやれ』

羽衣を纏う電波体はティグレスと言うらしい。ティグレスは彼の指令に同意した。

『分かりました。……クラウド隊長』

白い電波人間、クラウドは『隊長』を付けられて僅かに笑みを浮かべる。

『ふっ……。昔の名を出すな。もう私は、ＦＭ星親衛隊・４番隊長では無いのだ』

『ただの戯れです』

ティグレスはクスッと笑うと肩を竦める。おそらくそれは、クラウドの緊張を解くという彼女（ティグレス）なりの気づかいなのだろう。

クラウドはお礼の意味を込めて少し頭を下げ、その後地上を見る。

『では、そろそろ行こうか。四神のうち、３人が倒されるか裏切られるかの事態。……そろそろ手を打たねばならない』

『……はい』

２人の目は、鋭く、険しく光る。

『『……我らの願いの為に！』』

その声は決意に溢れ、同時に、悲しみにも似た空気を纏っていた。

第８４話　ダブルデート（後書き）

最後に登場した電波体は、現存しない星座です。少し長いですが、補足として書きます。

現在残っているのはオリオン座や乙女座など、北半球と南半球で見える星座を合わせて８８星座ですが、実際は１６世紀から１８世紀にかけて数々の星座が作られたそうです。ですが、時代の流れや人間の思惑により、忘れられた星座や、歴史から消えた星座が多々あります。

『ティグレス』と『クラウド』はその中の２つで、ティグレスはバビロニアの『ティグリス川』をモチーフにしており、クラウドは『大雲座』、これは星座というより大マゼラン星雲そのものをさして付けられた名前だそうです。

第８５話　時間が経てば冷静に……

スバルやミソラ、ソラは不機嫌になって、それぞれ１人で遊園地を回っている。

――――スバル――――

さて、皆さんもご存知だと思うが、スバルは幽霊が『大』が付くほど苦手だ。かといって、ミソラが指差したような『きりもみ回転ジェットコースター』なんて論外。怖すぎる。

故に、スバルは『とりあえず』という名目で受付で受け取ったパンフを見ながら、どこに行くか決める事にした。しかし、遊園地のアトラクションは大部分が絶叫系。おそらく、客の流行に合わせているのだろう。

聞いた話によると、恐怖を感じるアトラクションの方が客受けが良いらしい。スリルがある＝非日常というものを味わえるからだろうか。

その事実を目の当たりにしたスバルは、それはそれは暗いため息をついた。

「……はぁ。苦手なのばっかり……」

その暗い原因は先程のミソラとのケンカも一因している。「自分

も少し言い過ぎたかな……」という後悔の念と、「けど、どう謝ろう」という悩みから、精神的に消極的になっているのだ。

そんなスバルに飽き飽きしたらしく、ウォーロックはイライラした口調で怒鳴り声を上げた。

『だ――――！　いい加減にしやがれ！　そんなテンションで居られるとこっちまで暗くなっちまう！』

「……ウォーロックに何が分かるんだよ……」

『またそれか！　何も分からん！　いい加減その何かあるたびイジイジの性格直せ！』

「……」

依然としてズンヨリモードのスバルに対し、思わずウォーロックは陰鬱（いんうつ）なため息をつく。

《……あ～こりゃしばらくかかりそうだな……。……ミソラの方はどうなんだ？》

――――ミソラ――――

「まったくもう。スバル君って臆病すぎるんだよ。ハープもそう思わない？」

『え、えぇ……。それよりミソラ、いくらなんでも食べすぎだと思うけど……』

ミソラの目の前には大量の料理。俗に言う『ヤケ食い』だ。

ハープの忠告に対し、ミソラは頬を怒りと料理で膨らませて怒る。

「今日は良いの！」

《……完全にヤケ食いね……》

ハープもまた、ミソラを止められずにいた。

ミソラ自身、言い過ぎてしまった自覚がある。しかし、スバルとの関わりの長さが逆に災いして、つい意地になってしまったのだ。慣れすぎて、相手に自分を押し付けてしまったとも言える。

（……きっかけがあればスバル君と仲直りできるのに……）

ミソラはそんな事を思いながら、手を上げて近くの店員に声をかける。

「すいませーん！　これもお願いしまーす！」

ミソラの5品目のオーダーが入った瞬間だった。

……スバルとミソラは、互いに「きっかけがあれば……」という所まで来ていたのだ。2人が今仲直りできない理由はそれだけである。

――ソラ――

「……はぁ……」

ソラは噴水を見ながら陰鬱なため息をつく。彼女と同じ名の『空』は晴天。にも関わらずだ。

まぁ、それも無理からぬ事なのかもしれない。人というものは、誰かにとっての特別でありたいモノ。自分の好きな相手ならなおさらだ。しかし……。

「……ツバサにとって私は特別じゃないか……」

ツバサにとって彼女は助けるべき対象の1人だった。

『……ソラ、ちょっと良い？』

ハンターの中からスザクが問いかける。

ソラはハンターを取り出し、それに答える。

「なに？　スザク？」

『……いつまでイジケてる気？』

「いじけ……私が？　いつ？」

キョトンとするソラに対し、スザクはスパッと言い捨てる。

『いま。……大方、ツバサから言われた事で拗ねてんでしょ？』

「うっ……。だって――」

少し頬を膨らましたソラを、スザクは友人が励ますように諭す。

『あのね、ソラ。ソラってアイツのどこに惚れたの？』

「ほ、惚れ……まぁ、優しいとこかな？　何だかんだ言って頼りにもなるし」（……スザクってここまでストレートだっけ？）

ソラは、スザクのストレートさにやや唖然とし、かつ、ほんのり赤くなりながらも答える。スザクはそんなソラを目を細くして見る。ちょうど探るような感じだ。

『優しいとこねぇ。……それじゃあソラは、アイツがソラだけを見て、ソラだけを助けてくれれば満足なわけね？』

「ッ！　そんなわけないじゃない！」

自分を好きになってくれるのは嬉しい。けど、スザクが先程言ったのはスバルやミソラ、暁……。誰がどうなろうとソラを優先するという事。ソラ以外を見捨てるという事。それは、何か違う気がした。

『じゃあ、何でさっき店をから出たの？　自分が特別じゃなかった事が嫌だったんでしょ？』

「……」

自分の矛盾には気付いたが、それを態度に出すまでは出来なかっ

た。スザクはなおも続ける。

『ツバサにとってソラが複数の特別の内の1人だとしてもさ、それでアイツがソラを助けた時と、ソラがアイツを想った時の気持ちは嘘じゃないと思うよ』

「……スザク」

『それに、私からしてみればあんた達人間って結構うらやましかったり』

「？　何で？」

ウィザードはケガをしてもその部分のデータを修復すれば再生可。人間とウィザードの再構築の成功率にしても、その差は雲泥の差だ。ハッキリ言って、ウィザードの方が何かと便利だったりする……と、一般的な人間は思うだろう。

しかし、スザクはその考えをあっさり否定した。

『私たちも感情っていうのはあるけどさ、それ自体その部分のデータを失くしたら簡単にその感情を抱(いだ)けなくなるんだよ？　だけど人間はそれを捨てられない。簡単に切り捨てられるモノじゃないんだよ。……私達が簡単に失ってしまうものをあんまり粗末に扱われると、見ててこっちが嫌なんだよね』

「……粗末……」

ソラがスザクの言葉を自分の中で反芻している時、スザクはボソッと呟く。

『《……まぁ、エーテル自身それだったから気に食わないんだけどね。ったく、あの傲慢野郎(ごうまんやろう)！》』

「えっ？　何？」

『それにね、ソラ』

「……うん」（……スザク、強引に話を逸らす気だ……）

良く聞こえなかった上に、スザクの話も気になったのでソラはそちらを優先した。スザクはそれに便乗して続きを言う。

『そもそもソラって、他人の意見は気にしないで自分の欲しいモノを手に入れるタイプじゃなかったっけ？』

「えっ……そうかな？」

大抵彼女は意識しないでその行動を選ぶので、大して自分に意識を向けていなかった。他人は知っていても本人が知らないと言うのは、割と良くある事だ。

『そうよ。ツバサにとって今あなたが【　特別じゃない　】なら、それを【　特別　】に変えてやれば良いじゃない。……もちろん、ソラの好きなあいつの優しい所はそのままでね』

ソラはポカンとしている。今回判明したスザクのしっかりした考え方もそうだが、スザクがそこまで自分（ソラ）を見ている事に驚いたのだ。

ポカンとするソラを訝る様に、スザクはウィザードＯＮしてソラの顔を覗き込む。

『……？　ソラ、どうしたの？　いつもなら、「スザクありがとう！　まずは蹴りを一発やって、それからアイツと話してくるよ！」とか言って即行で飛び出すのに』

「えっ……いや……」

ソラは、いつもの自分との比較をする前に、自分が蹴りを挨拶代わりにする子だと思われていた事にややショックを受けていた。……確かに、ツバサと逢うたびに一撃食らわせている気がする……。

今思えば、これは女の子らしくない。自分(ソラ)も少しずつ変わっていかないといけないのかもしれない。

ソラがそんな事を思っている間に、スザクは少しイライラが溜まったようだ。

『で、行くの？　行かないの？』

「あ、行きます行きます」

スザクの気迫に押されて駆け出すソラ。

タッタッタッタ！

遊園地の敷石を蹴る音が響く。もうすぐ店という所で、スザクが不意に叫んだ。

『ッ！　ソラ！　止まって！』

「えっ？」

理由を聞く前に、理由は目の前に事象として現れる。

店が、白い雲のようなモノに押し潰された。轟音と、悲鳴を伴いながら……。

一方は雲。もう一方は水。宣戦布告の轟音は、2箇所の離れた場所で鳴り響く。

第８５話　時間が経てば冷静に……（後書き）

次回は戦闘です。『地が固まる』のはまだね。（↑諺の一部です。）

第８６話　水の唸り（前書き）

今回はスバル・ミソラとツバサ・ソラのタッグに分かれて話を書きます。この話はスバル・ミソラね。

それと、今回の戦闘（８３話と８４話）の中に残酷な描写があります。本当に一部ですが、念のためにね。

第８６話　水の唸り

実際の所、その遊園地を襲った轟音は２つ。しかし、それはあくまで大局的……言うなれば将棋の盤を上から見ているようなもので、その視点だからこそ２つと分かる。その場に居る者にとっては、自分の周りしか見えない。２つと知るのは、事件が収まってからだ。

故にスバルも、自分の目の前の爆発が唯一の現況だと思っていた……。

「な、なに今の！？」

目の前のアトラクション（ようやく見つけた自分の乗れそうなモノ）は巨大な滝に叩き潰され、その水は地に落ちる事無く空に戻っていく。残されたのは、支柱の大部分が崩壊したアトラクション。人も乗っていただろう。潰れる寸前、悲鳴が聞こえた。

スバルは目の前の惨劇に吐き気を感じていたが、ウォーロックはそれを許さなかった。許したら、上空の敵に殺される。

『スバル……吐くのは後にしろ。……上だ』

ウォーロックが上空に向けてクイッと首を動かす。釣られてそちらを見ると、藍色の軽装に透明の羽衣を纏った電波人間がウェーブロードに立っていた。立ち振る舞いからして、女性だろう。

「……いくよ。ウォーロック」

『おう！』

スバルは静かにハンターを構え、強い意志をその目に宿らせながら叫ぶ。

「トランスコード００３！　シューティングスターロックマン！」

サテラポリスに認められた者はトランスコードを得る。コードを転送する事で、電波変換が可能になるのだ。

青い光がスバルを包む。光が収まる頃に現れたのは、『青い流星』との異名を持つロックマンだ。しかし、その光で相手に自分の存在を知らせてしまったらしい。ロックマンのいる地面まで降りてきて、話しかけてきた。

『初めまして、ロックマン。噂はかねがね聞いています。私はティグレス。元ＦＭ星親衛隊の４番隊副官です。隊長は――』

『要件は良い。とっととやろうぜ？』

ティグレスの挨拶を平気で遮るのは無論ウォーロックだ。丁寧な話し方がウォーロックの苦手とするアシッドと似ていて気に食わないらしい。

ティグレスはあらかさまにため息をついた。

『ふぅ。……ウォーロック、あなたは相変わらずですね。そのガサツさが無ければ、クラウド隊長があなたの事をＦＭ星親衛隊に推薦していたのに……』

『お前までオレをガサツって呼ぶのか！！』

「それよりクラウド隊長って……」

ティグレスはウォーロックよりスバルの方が話が通じると考えたのだろう。ウォーロックではなく、彼の疑問に答えた。

『4番隊長です。クラウド隊長はウォーロックの事を高く評価していました。戦闘能力の高さ、野心を隠す上手さ、指令以外では決して弱者を傷つけない誇り高さ……。そう。クラウド隊長は、そのガサツさが無ければ私と同じ地位までの推薦を考えていたのです』

「ッ！！？」

ロックマンが驚いたのは話の内容ではない。ウォーロックがそこまで評価されていたのは少し驚いたが、彼の能力はスバル自身が良く分かっている。なお、野心の方は昔ウォーロックがしようとしていたＦＭ王への復讐の事だと思われる。

ロックマンが驚いたのはティグレスが言葉の途中で消えた事だ。物理的に消えたわけではない。高速で移動したため、消えたように見えただけだ。

後半の声は、ロックマンの後ろから聞こえた。

ロックマンが振り返るより早く、背中に圧力がかかる。吹き飛ばされる寸前、自分の後方に見えたのは、太い幹を思わせる水のムチが横薙ぎに自分の背中を打ち付けている状態。

『……クラウド隊長は今頃、隣のエリアに侵攻しているはずです……』

ティグレスの声が聞こえた直後、ロックマンの体が吹き飛ぶ。

「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

彼の叫び声は地面に叩きつけられた衝撃で止まり、短い苦痛の声と共に数回地面をバウンドする。そして、路上販売の車に激突して止まった。

「くっ……はぁ、はぁ……。と、隣のエリアって……」

息も絶え絶えに起き上がるロックマンの悪い予感は、少し離れたティグレスが見事に的中させてくれた。

『上空から見た時、この遊園地はちょうど2つのエリアに別れていました。なので、どちらが早くそのエリアを制圧できるか競おうと思いましてね』

「ッ！！　そ、そんな事で……人を……！」

ロックマンの視線の先、ティグレスの後ろには、崩壊したアトラクション。瓦礫を片付ければ、水の圧力により千切れた人間の体の一部がゴロゴロ転がっているだろう。

瓦礫から血が流れ出す。いったい、何人が巻き込まれたのだろう。

ロックマンは怒りで拳を固め、対するティグレスは素っ気無く返した。

『私達の敵は人間です。戦う力があろうと無かろうと、人間である限りは敵です。……自分達の敵という理由で敵を滅ぼすのはあなたたち人間もそうでしょう？』

相手が抵抗しようとしまいと、自分の身を守れるだけの力があろうと無かろうと、相手が赤子だろうと、敵である限りは滅ぼす。敵だと確定した時点から滅ぼし始める。それは確かに、人間が戦争や差別という名目で当たり前にやってきた事でもある。

しかし、ロックマンにとってはそこまで考える事は出来なかった。理解力や頭の良し悪しではない。ティグレスが、先程の言葉を言いながら近づいてきたのだ。先程ロックマンの後ろをとった時とは違い、徐々に、寿命のように、ゆっくり近づいてくる。

「う……あ……」

ロックマンは思わず声を漏らす。その姿が怖いのだ。ゆっくりだからこそ、相手の殺気がじわじわと突き刺さる。ロックマンは恐怖を払拭するため、攻撃を実行する。

「うわぁぁぁぁぁ！！」

叫び声と共に、恐怖と共に、バトルカードを連発する。

まずは大砲に変化させた『ヘビーキャノン』を放ち、相手の上に巨石を発生させて押し潰す『モアイフォール』を出現させ、それがティグレスに落ちる前に左腕をマシンガンに変換させた『マッドバルカン』を打ち放つ。

ドォン！　ドドドドドドッ！！　ズゥゥゥゥゥン！！

怒涛の連撃。悪い攻撃ではなかった。しかし、攻撃による煙が晴れた時、ティグレスは少しセキをしただけだった。

『ケホッ……。やれやれ、私はこれでも女性なのですが……。意外に手荒いですね。地球の英雄さん？』

「……う、うそ……」

『マジかよ……』

ウォーロックとしては、スバルにしては少しやり過ぎか？　などといった感覚を持っていたのだが、その気持ちは吹き飛んだ。彼女は何事も無かったかのようにロックマンに近づいてくる。

『ッ！！　おいスバル！　いつまでもボケッとしてんな！　迎撃しねぇとこっちがやられるぞ！！』
「ッ！　う、うん！！　バトルカード！　ブレイクサーベル！！」
バトルカード『ブレイクサーベル』。威力が高く、装甲の厚い敵に絶対的な力を持つ【　ブレイク性能　】を持つ。
ロックマンはサーベルを構え、ティグレスに迫る。

バシャッ！

「ッ！？」

ロックマンの振るったブレイクサーベルは空中で止まった。ティグレスまで約４０センチ。……よく見ると、彼女が纏っていた透明の羽衣で止められている。
ティグレスは軽く微笑んだ。楽しげに、無邪気な子供のような笑みだ。

『私の羽衣、忘れましたか？　この透明の羽衣は水でしてね。このように防御に使えるのです。もちろん――』
「ッ！　ごぼっ！」
『スバルッ！！』

ティグレスは水の羽衣を自分自身のように自在に操り、ロックマンの口の中に潜り込ませる。

『……いくら口を閉じていても水は容易に潜り込みます。……どう

ですか？　水が食道にあり続け、肺に入ってくる感覚は？』
「ガッ……ボゴッ……」
回りくどい言い方は止めておこう。苦しい以外の何でも無い。このままでは陸上で溺死してしまう。
『スバル！　おいスバル！　しっかりしろ！！』
ウォーロックの声は大して効果なく、スバルの瞼は徐々に閉じていく。
『……つまらなかったですね』
薄れ行く意識の中、ティグレスの声が微かに聞こえる。
「ショックノート！」
『クゥッ！　……加勢ですか』
活発な少女の声とティグレスが攻撃を食らって呻く声。それが聞こえた直後、ロックマンから苦しさが抜ける。
「ウッ！　ゴホッ！　ゴホッ！　……ミ、ミソラちゃ……」
水を吐き出し、むせながらもミソラを探す。ミソラはティグレスがロックマンから離れたのを見計らってロックマンに近づいた。
「大丈夫！？　スバル君！？　まだ喋っちゃダメ！　まずは呼吸を落ち着かせて！」
ミソラはそう言うとティグレスと向き合う。ロックマンが落ち着

くまでティグレスが攻撃を仕掛けてこないように警戒するためだ。
ミソラは背中を向けたまま低く、落ち込んだ様子の声で謝罪する。

「……ごめん。キミが大変なときに……」
「ケホッ……。ううん。おかげで助かったよ。ありがとう。ミソラちゃん」
『さてさて、スバル君が落ち着いた所で、２人で頑張りなさいな』
『あ？　オレとハープも合わせて４人だろ？』
『あんたはこういう状況でもそれなのかしら～～～？』

ハープとしてはスバルとミソラの『２人』を強調したのだが、ウォーロックにはその意味は分からなかったらしい。スバルは少し余裕を取り戻したらしく、ミソラと笑みを交わす。
意外な事に、ティグレスはその様子を大人しく見ている。

《……あの２人は互いの事を想っているのですね。……私も、【敵】と呼ぶものがこの宇宙にいなければクラウドと……。いいえ。だからこそ、誰かがやらなければ……》

自分の中の想いを吹っ切り、ティグレスは先程のような余裕を見せる。

『さて、たかだか２人増えただけでどうなると言うんです？　ＦＭ星親衛隊の実力、あなた達なら分からなくは無いでしょう？』

その言葉の意味はウォーロックとハープには正しく伝わったらしい。２人の顔が険しくなる。

『……スバル、忠告として言っておくが、ＦＭ星親衛隊の実力はただでさえ高い。まして、今ヤツは電波変換している。……強いぞ』

『気を抜いちゃダメよ。ミソラ』

2人の気づかいに対し、ロックマンとハープ・ノートは頷いた。

「分かった。……でも、あの防御どうにかならないかな?」

ロックマンの攻撃が全く効かないほどの防御力を持つ羽衣。それを破らない限り、ロックマン達は勝てない。

ロックマンが唸っている時、ミソラが語りかけてきた。

「……スバル君。ようはあのキラキラした羽衣? あれを掻い潜って攻撃できれば良いんだよね?」

「えっ? うん。そうだね」

「……できるかも」

「えっ!? 本当に!?」

それがホントなら助かる。

ロックマンが嬉しさから思わずティグレスから目を逸らした隙に透明の凶器が再びスバルに伸びる。しかし、今度はロックマンに届かない。

ティグレスの攻撃を防いだのはハープ・ノートのバリアだ。彼女は何の動きも見せていないのに、バリアが発動した。

ティグレスとロックマンがその事に驚いている様子を、ハープ・ノートは得意げに答えた。

「私のホーリーPGMを使えばね♪」

ホーリーPGM。春にツバサからもらったPGMで、ノイズへの耐性に加えてバリアを張れる能力がある。なお、そのバリアはWA

ＸＡニホン支部のコンピューターをもってしても未だ解析できず、そのバリアがどう成り立ちかさえ不明だ。

ツバサが言うには、護りたい者への想いが強ければ強いほど力を増すバリアだとか。なお、ツバサはそのバリアについて、ＷＡＸＡの研究者に対してそれ以上の情報を全くよこさないらしい。

しかし、バリアは防御用の手段。そんな事は常識だ。スバルの疑問は顔に出ていたらしい。その気持ちを察したミソラが笑いかけてくる。

「大丈夫大丈夫♪　スバル君、アイツに打ってみて」
「でも、簡単に防がれて――」
「大丈夫だから。……私を信じて」

ミソラの真剣な目に、スバルは懸けてみる事にした。ここで彼女を信じなければ、どの道敗北しかない気がしたからだ。

「分かった。信じるよ、ミソラちゃん。それじゃあ……ロックバスター！」

【　それじゃあ……　】でハープ・ノートに目で合図を送り、左腕からエネルギー弾を放つ。

『何かと思ったら、バカの１つ覚えですか』

しかし、ティグレスはそれに余裕で対処した。腕に纏わせた羽衣を振り、エネルギー弾の軌道上に羽衣を配置する。冷静に見てみると、確かに羽衣のある所が太陽の光の反射でキラめき、羽衣で先程の怒涛の攻撃を防いだ事が伺える。

ティグレスは余裕の笑み。驚くべき事に、ハープ・ノートも笑顔

だ。

「1つ覚えじゃないよ」

ハープ・ノートの声と共に、弾の軌道が変わる。

『なっ!?』

ティグレスでさえも驚きの声を上げる。

軌道の変化は一回ではない。軌道は直線にも関わらず、それが見えない壁にバウンドするように方向変換する。時に遠のき、時にスレスレを走る弾にティグレスは翻弄され、隙が生まれた。

「今よ! スバル君!」

「うん! インパクトキャノン!」

『ッ!? しまっ――』

ズドォォォォォン!

ティグレスが変化する軌道に戸惑っている隙を付き、キャノンでは最高威力を誇る『インパクトキャノン』を当てる事に成功した。

さすがにこれは効いたらしく、ティグレスはよろよろしながら爆発の煙から出てきてハープ・ノートに尋ねる。

『クッ! い、今のは……いったい……』

「私のバリアは、私の出したい場所に、出したい大きさで出せるの。それでスバル君の攻撃を反射して――」

『私を翻弄して本命の攻撃を当てたと言うわけですね?』

ミソラの説明をティグレスが引継ぎ、ミソラが頷く。スバルは感嘆の声を漏らした。

「ミソラちゃん……すごい」

「えへへ。スバル君に言われると照れちゃうな～。っと、いけない」

ハープ・ノートは少し困ったような笑みを浮かべて自分の後頭部に手をやる。ちょうど照れている時の様子だ。

しかし、何かを思い出したらしくティグレスに向き合う。

「……ねぇ、投降しない？」

『……何ですって？』

ティグレスが聞き返したのは、ハープ・ノートの声が聞こえなかったからではない。意味が分からないからだ。

ミソラは続ける。

「あなたにも好きな人がいるみたいだし、その……同じ女としてほっとけないって言うか……」

後半は自分の考えと合う言葉が見つからなかったらしく、徐々にその声は弱くなっていく。しかし、それでもティグレスにはハープ・ノートが何を言おうとしているか分かった。

『好きな人がいるのに死んじゃうのは悲しすぎる。だったら、少しでも生きられる可能性の高い選択をして、例え牢獄だろうと好きな人と一緒に生きた方が良い。……そういう事を言いたいのですか？』

「あ、はい。そうです」

自分の言いたい事をズバッと言われて、ハープ・ノートは思わず敬語になってしまった。そんな彼女を見て、ティグレスはここに来て初めて今までとは違った笑みを見せる。呆れの中に優しさが入ったような、そんな笑みだ。

『あまいですね』

この場合『優しい』でも合っているし、ティグレス自身そう思っている。しかし、その上で『あまい』を選んだのはＦＭ星親衛隊としての意地のようなものだ。

しかし……。

『……ですが、そのあまさが命取りです！』

ティグレスは最後の力を振り絞ってミソラに迫る。

「ッ！」

「ミソラちゃん！」

ドスッ！

とっさにスバルはソードを転送。ミソラとティグレスの間に割り込んでソードを突き立てる。

「あ……あ……」

『ティグレス、あなた……』

ハープ・ノートとハープの動揺した顔と声。ティグレスは、スバ

ルとミソラに微笑を送る。

『……これで良いのです。……ロックマン、この子をちゃんと護ってあげなさい。……ハープと電波変換しているあなたも、どうか……幸せに……』

ティグレスは消えていく。取り憑かれた人間を残して。

スバルとミソラはティグレスが消えた場所から目を動かせず、言葉を交わす。

「……スバル君」

「……何？　ミソラちゃん？」

「ティグレスって、本当に悪いヤツなのかな？」

彼女はやられると分かっていて自ら迫ったように見えた。その上で、スバルとミソラに言葉を託したのだ。

「……分からない」

本当に分からなかった。ただ、この時思った事がある。それは、この戦いは単なる戦いじゃないという事だ。

……この時のスバルには、それを感じるだけだった。

第８６話　水の唸り（後書き）

……今回初めてトランスコードを書いた気がする……。もし間違っていたら言ってください。

次はツバサとソラです。

第87話　重厚な雲（前書き）

今回の戦いはスバル達の開戦とほぼ同時刻に始まったものと考えてください。

第87話　重厚な雲

ソラにとって、目の前で起こった事を現実だと認めるまでしばらくかかった。ツバサの居た飲食店が、白い雲のようなものに押し潰されている。白い雲が霧散した時、飲食店のあった場所には瓦礫しか残らない。

遠目だが、瓦礫の中から人間の手のようなモノが出ている。どれだけの人がまきこまれたのだろう。

ソラを現実に戻したのは、周りの避難の声だった。飲食店が潰れた事に驚き、混乱し、逃げ惑う。現実に意識が戻ったソラは、再び辛い現実を目の当たりにする。

「……スザク……ツバサは？」
『……私の探知が正しければ、あの飲食店の中』
「うそ……」
『ソラ、私としては気が落ち着くまで絶望させてあげたいけど、あっちはそうもいかないみたい』

ウィザードＯＮしたスザクが斜め上を見る。ソラはスザクの視線を追ってみると、１人の電波人間がいた。白い雲に乗って少しずつ降りてきたようだ。

『……四神か』

先程の惨劇をやってのけたとは思えない落ち着いた声。誰かを殺す事に慣れた証だ。

ソラは、すぐさま電波変換して攻撃したかったが、かろうじて耐

える。

「……あんたは？」

『クラウド。元ＦＭ星親衛隊の４番隊長だ』

ＦＭ星の人達とは、旅行に行く前に逢った時がある。皆、主君であるケフェウスの事を思っており、真っ直ぐな人達だった。

「……ケフェウスやイーグル達の――」

『元仲間だ』

短い言葉を繰り返す問答。周りの騒然さとは打って変わって、そこだけ以上に静かだ。

「……じゃあ、何で仲間を平気で裏切れるの？　……ケフェウスや皆と、仲良くなかったの？」

『……そうする必要があったからだ』

仲間を裏切ったにも関わらず、あまりに割り切った考えにソラは嫌悪感を抱き、話を逸らした。

「どうしてこんな……」

ソラの視線が潰れた飲食店に向かったのを見て、クラウドもそちらを向く。

『むごいか？　だが、これが今の任務だ』

またもあっさり割り切った。今度は裏切るどころではなく、殺し

を割り切った。通常なら『軍』という事で殺しはあるだろうとはソラも思っていた。しかし、クラウドが潰した店の中に大切な人が居たと思うと、彼女は自分の感情を抑え切れなくなった。

「そんな事でツバサを！　スザク！」

『ＯＫ！　私も頭きてたから思いっきりやっちゃいましょ！』

モチベーションを上げる2人に対し、クラウドは余裕の態度で腕を組む。

『ほぉ、四神の実力を直に味わえるとはな』

「余裕こいてられんのも今のうち！　電波変換！　赤羽ソラ、ＯＮ（オン）・ＡＩＲ（エア）！」

彼女を始めとした四神の電波変換はスバル達のそれとは違う。スバル達が人間＋電波体＋サテラポリスの認証コードという要素で電波変換するのに対し、ソラ達は人間と電波体だけで電波変換できるのだ。

本来ならソラとスザクもサテラポリスから認証コードを受け取ってもおかしくは無いのだが、スザク達を作ったのがエーテルというだけあって、何か細工をされているかもしれない。そんなわけで、迂闊に認証コードも登録できないのだ。

赤い光の中から、６枚の羽と真っ赤な炎を有するスザク・フレアが現れる。

『……ほぉ……。話に聞いた通り、中々美しいものだな』

「美しいってのは女性として嬉しいけど、見とれている内に焼かれても知らないよ！」

そう言うなり、スザク・フレアは6枚の羽を用いた羽ばたきで高速移動。同時に、手首に付けている炎のブレスレットを回転させて攻撃の用意をする。

クラウドの上をとったスザク・フレアは腕を突き出す。

「一の舞、星降り！」

無数の炎弾はクラウドに迫る。しかし、クラウドは白い雲を作り出してそれを防いだ。及び、悠然と感想を言う。

『なるほど。予想以上のスピードだ』

「ああそうですか」

フワフワしたイメージの『雲』に防がれたのは驚いたが、考えてみればその『雲』で建物を壊したのだからかなりの強度という事になる。

しかし、星降りはあくまでクラウドへの牽制（けんせい）。言ってしまえば『試し』だ。

「じゃあ、これはどう？　合曲2章、焔月（ほむらづき）！」

合曲2章、焔月（ほむらづき）。『五の舞』の炎のソードを『一の舞』で飛ばす技だ。五の舞の切れ味そのままに、それを飛ばす遠隔攻撃。

炎の斬撃は空を裂きながらクラウドに迫る。

ズバッ！

炎の斬撃が雲を断ち切る。文字通り雲散霧消した。

「よし！　……えっ？」

ソラにとって、この攻撃には自信があった。手加減もしていない。だが、クラウドに対して全くダメージを与えられていなかった。ふざけた事に、雲を切ったらもう一枚雲の壁があって、それで防がれたのだ。

『誰も雲を1つしか作っていないとは言っていないぞ？』

「『……卑怯くさ……』」

『見破れなかったお前達が悪い』

「『……』」

正論だった。

スザクとソラが半眼を送っているが、当のクラウドはしれっとしている。

『……それからもう1つ言っておく』

「……なによ？」

『貴様らの後ろにあらかじめ雲をセットしておいた。上空であらかじめ作っておいたのがな』

「ッ！　うそ！」

慌てて後ろを見るがそんな物は見当たらない。しかし、代わりに自分の体に違和感があった。疑問に思って視線を上から下に変えると、白い雲がソラの体を包んでいた。ちょうど、雪ダルマの頭の部分がスザク・フレアになっている状態だ。

「ッ！！」

『敵を欺くのも兵法のうちだ』

平然と言ってのけたクラウドに一言文句を言おうと彼の方を向いた時、さらに嫌な事に気付いてしまった。雲の雪ダルマの一部が浮き輪に空気を送るしゅこしゅこポンプのような管を通してクラウドの腕と繋がっている。

『……雲の檻（オリ）だ。これで、得意の高速移動は出来ないな』

「こんなに強いのに、何でだまし討ちなんて……」

スザク・フレアの問いに対し、クラウドは先程のようにあっさりと即答した。

『本気を出せば先程の建物のように簡単に壊せてしまう。むやみやたらに壊すのは私の性に合わないのでな』

正々堂々とやった結果が自分の性に合わないので、むやみやたらと壊さない方法、つまり『だまし討ち』を使うというわけだ。

スザク・フレアは、今度は呆れから言葉を発する。

「……そんな事即答しないでよ……」

『事実だ。……さて、そろそろ終わらせるとするか。……ふんっ！』

スザク・フレアは思わず身構えるが、クラウドには何にも変化は無い。少し安堵すると共に疑問に思っていると、ハンターの中のスザクが慌てたように語りかけてきた。

『ちょっとソラ周り良く見て！　……この雲……変！』

「えっ！？　……ッ！　これって……」

スザクの言う異変。それは、雲の雪ダルマが膨れ上がっているということだ。

見た目が2倍の大きさになった時、その膨張は止まる。クラウドは静かに話しかけてきた。

『その球体の中の気圧は、膨れる前は1：1。膨れ上がった場合、膨れている時は1：1だが、それが縮むと――』

球体は勢い良く縮んで元の大きさに戻る。

「ッ！　な、なに……これ……」

その状況は形容しがたい。強いて言えば、全ての方向から体を締め付けられている感じだろうか。手の甲と平。腕の表裏。お腹と背中。体の内側以外の全ての方向から圧力が加わる。

クラウドは途切れた言葉の続きを言った。

『膨れ上がった分の圧力がかかる。今回は2倍の圧力だ』

通常物質は内と外の気圧が打ち消しあっているからこそ、凹んだり出っ張ったりする事が無い。しかし、もしも内側より外側の圧力が強い場合、今のスザク・フレアのように全体から等しく圧力がかかる。

深海で缶が潰れるのと似たようなものだ。

『もっとも、生身の人間ならともかく、電波人間だったらせいぜい苦しいぐらいだろう』

「くっ……あっ……」

苦しいなんてものではない。心臓や肺も無理やり外から圧迫されているのだ。呼吸もままならない。体も空気の圧力で動かない。その球体の中は流れる事ができる電波の波長が制限されているので、スザクも出て来れない。

彼女に、この状況を脱する手段は無かった。

ソラは、その状況が自分がよそ見したからだと気付き、苦笑する。

（……悔しいなぁ。……そういえばヨイリー博士言ってたっけ。スザクの力を解析してみたら、スザクを始めとしたエーテルの作ったウィザードは通常のウィザードよりも別格とも言えるくらい強いって……。私……スザクの力……本当に使いこなせていたのかな……）

その時、ふとツバサの顔が浮かんだ。

生意気で、呆れたようで……。でも、その中に優しさが垣間見れる、そんな顔。

（ふふっ。……ツバサ、今の私見たらこう言うんだろうな……油断――）

「油断してんじゃねぇ。……ったく世話かけさせやがって」

自分（ソラ）の言おうとした事は本人に言われた。

「ッ！！？」

『……貴様は……』

スザク・フレアの無言の驚きと、クラウドの驚く声と同時に、スザク・フレアを締め付けていた圧力が無くなる。スザク・フレアを包んでいた雲は霧消した。

スザク・フレアが慌てて先程の声の主を探すと、クラウドの作った細い雲の管に乗っている。バルズランドで見せた電波を相殺する槍を持っている事からして、クラウドの波長を探ってそれとは逆の波長を込める。そして、自分の乗っている雲から槍を球体に突いたのだろう。

『私の雲は私の電波を溶け込ませているから物質的に切るのは不可能なはず……ッ。そうか、真逆の波長をぶつける事で相殺したのか』

「ありゃ？　案外冷静だね。他人をからかったり驚かせるのが好きなオレとしては、かなり面白く無いかな」

見破られてもなお余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）のツバサ。得意げで不敵な顔が想像できる。いつもの彼だ。

「……ツバサ？」

恐る恐る彼の名を呼んでみる。さっきの今だから、彼の名を呼ぶ事すらも躊躇（ためら）われたのだ。

彼の目は油断無くクラウドを見据えて、声だけで答える。

「おぅ、生きてたか。オレの事は嫌いになった？」

さっきは重く響いた言葉も、今は不思議と平気で、苦笑しか出てこない。

「なるわけ無いでしょ。まったく、無事ならもっと早く来なさいよね？」

「しゃあねぇだろ？　あの崩壊で体の動きを封じられたばかりかハンターまでぶっ壊れたんだから」

「ハ、ハンターを!?　それじゃあアイリスちゃんは!?」

スザク・フレアが慌てたように質問するのを、ツバサは依然として体と顔をクラウドに向けたまま言葉だけで答える。

「あ～大丈夫大丈夫。単にウィザードＯＮする機能が壊れただけだから、アイリスにどうこうってのは無いよ」

「良かった。……あのさ、ツバサ。さっきは――」

「今はアイツが先決だ。話はその後で、な」

「……分かった」

ソラが謝ろうとするのを遮り、ツバサは完全にクラウドに意識を集中させた。ソラはしぶしぶ頷き、ツバサに倣って意識を集中させる。

『……仲間が1人増えた程度で私を倒せるとでも?』

「さぁて、どうだろうなぁ?」

依然として飄々とするツバサに対し、慣れているソラはクスッと笑い、クラウドは見るからに機嫌を損ねたらしい。

『……なめているのか?　……いや、いい。貴様のような者にそういった事を言っても無駄だろう』

「あ～ら、オレの事を良く分かってらっしゃる♪」

『……軽口が過ぎたな。本来ならすぐさま叩き潰したい所だが、お前と私は相性が悪いようだ。ここは引き下がらせて……ん?　……ティグレス……』

言葉の途中で反対のエリア、スバル達がいるエリアを向いたクラウド。スザク・フレアとツバサは訝るように言葉を交わす。

「？　なに？」
「……退却しようとしたけど何か気になったようだな。……逃がす気ねぇけど」

２人の声は聞こえていたらしい。クラウドはため息をついてツバサとスザク・フレアに向き合った。

『……部下と共に逃げるつもりだったが、予定変更だ。……本気を出そう』
「「『ッ！！！」」』

クラウドが出した戦意に、ソラとツバサ、スザクは思わず目を見張る。

「こいつっ……」
「やっとやる気モードって事だな」
『……ツバサ、軽口を言ってる場合じゃなさそうよ』

ツバサの軽口にスザクがツッコミを入れ、クラウドは自分の手の平に雲の物体を作る。

『先程の建物を壊した技だ。……アンリミテッド・プレス！』

バレーのサーブで上に打ち上げるように、クラウドは自らの作り出した雲を上空に投げた。それはどんどん巨大になり、上昇が落下になる頃には、建物を壊すクレーン車の鉄球並みに巨大化していた。

『……空気中のチリや水分を吸収する事で巨大化。好都合な事に、先程あの建物を破壊した時のチリが空気に舞っていたのでな、タメ

時間が短くともここまでの大きさになるのだよ』

落下予想地点から逃げる時にクラウドの余裕の説明が聞こえる。

タメ時間とその場に漂うチリの量によって見る見る巨大になる塊。

まさにｕｎｌｉｍｉｔｅｄ（アンリミテッド）……『制限』が無い。

「ッ！」

スザク・フレアが羽ばたこうとした時、羽の付け根に痛みが走る。

先程の圧力で羽を痛めたようだ。足で逃げようとしても、関節にも負担が来ていたらしく着地のバランスを崩して倒れてしまう。

スザクがツバサへ向けて声を張り上げた。

『ッ！　ツバサ！　ソラが！』

「！？　チッ！　ソラ！」

ツバサがソラに近づき、思いっきり突き飛ばす。ソラは一応、攻撃範囲から抜け出す事に成功した。

突き飛ばされた痛みに耐えながらも、ソラとしては一言文句を言わねば気が済まない。

「キャッ！　……ちょっとツバサ！　他に方法無かったの！？　ッ！！　ツバサ逃げて！！」

しかし、途中で気付いてしまった。彼は自分（ソラ）の身代わりになった事に。

ツバサがソラを突き飛ばした時点で、もうすでに重厚で破壊力満点の雲は目前まで迫っていた。逃げる以前に目を上に向ける暇も無い。

ズドドドドォォォォォ……

轟音と共に雲は地面にめり込んでいく。

「ッ！　ツバサ――――――！！」

彼女の声は轟音にかき消されて全く響かない。

ォォォォォォォ……

ようやく音も落ち着き、クラウドはツバサを潰した雲と自分の腕を、細い管のような雲で繋げる。

『……さて、先程の少年がどのような死に様になっているか見てみるとするか』

クラウドは腕、正しくは管を引き、あれほど重厚な雲を軽々と動かして見せた。

スザク・フレアは見たくも無いとばかりに目を背け、スザクはこれ異常無いほどの怒りの眼差しをクラウドに送る。

ツバサはクレーターのような大穴の中心にうつ伏せで倒れていた。

ピクリとも動かない。

『……潰れなかったか。まぁ良い。あとの邪魔者はあいつらだけだな』

クラウドはそう言うと、ショックと痛みで膝を突いているスザク・フレアとスザクを見る。

スザクはクラウドの言葉に反応してソラの前に立ちふさがった。しかし、スザク・フレアの頬からは涙が伝い、動ける精神状態ではない。

クラウドがソラとスザクに向かい始めた時、その場に全く似合わない、緊張感に欠落した声が響く。

「あ～重かった。生身の人間にやってたら１００％死んでたぞ」

その声でスザク・フレアは顔を上げる。スザクは信じられないという顔。クラウドは少し顔をしかめただけだ。だてにＦＭ星親衛隊の一角を担っているわけではない。『驚く』などの付け込まれる感情を制御する術は完璧らしい。

「……ツバサ……」

クレーターの中から上ってきたツバサに、スザク・フレアは呆然とした様子で声をかける。対するツバサは、いつものように気軽く片手を上げた。

「よぉ。ひでぇ顔だな」

「……誰のせいよ……」

涙を両手で拭いながら、ソラは怒ったような顔を作ってツバサを睨む。ツバサは意地悪く笑いながらクラウドに視線を移す。無論、顔は笑ったままだ。

「って事で、残念でした。オレはこの通り生きてるよ」
『……ならば、潰れるまでやり続けるだけだ』
クラウドが第2撃を食らわせるために先程の雲を宙(ちゅう)に持ち上げる。
「遅い！」
だが、持ち上げた時にはツバサはクラウドと距離を詰めていた。
そして……。
ドスッ！
突き刺す音と共に、クラウドは呻き声を上げてズルリと崩れる。
ツバサの人差し指は、野生動物の爪のような鋭利なそれへと変化していた。
『グゥ……』
膝を突いたクラウドにツバサは顔を近づける。
「……一応聞くけど、何で退かなかったんだ？」
『……愛する者を1人で逝かせるわけにはいかない。……それだけだ』
愛する者……彼の部下、ティグレスが敗れた事だろう。
それを言った後クラウドは、ツバサの後方で心配そうに様子を見ているソラに視線を向ける。

『……お前は……いや。これも無意味な事だな。……さらばだ』

「……あぁ」

クラウドはティグレスの後を追う。愛する者を独りで逝かせないために……。

第87話　重厚な雲（後書き）

『地』が本格的に『固まる』のは、次回です。

第８８話　夕暮れに伸びる影（前書き）

何とか年内に間に合いました。２００９年、最後の更新です。

第８８話　夕暮れに伸びる影

クラウドを看取（みと）ったツバサは静かにソラの元へ戻る。及び、鋭利で硬質化した爪を元の指に戻した。

「……彼、なんて？」

彼女が尋ねたのはクラウドが何を言っていたかだ。なお、この時には電波変換は解除している。

「クラウドか？　……あいつの好きな人を独りで逝かせない様に自分も逝くってさ」

「そっか……」

ポツリと呟くように答えると、彼女は視線を潰れた建物に移す。

「……関係無い人達、いっぱい死んだね……」

「そうだな。……人を殺すってのは、その後その人に降りかかる幸せも不幸せも奪うって事だから、その責（セキ）は重い」

その言葉は、もう１人の自分であるクロウ・リードから聞いた事だ。

ソラは視線を瓦礫に向けたまま静かに頷いた。

「……うん。……も１つ聞くけど、さっき何（なに）で刺したの？」

ソラは巻き込まれた人達にせめてもの祈りを捧げて、気持ちを切り替えるようにツバサに尋ねる。

「爪の事か？　それなら、自分の中のエネルギーを少し使って体を変化させただけ」
「ふぅ～ん……って、自分の命を使ったって事！？」
何でも無いかのように言ったツバサの言葉に納得しかけたが、その内容に気付いたソラは前傾姿勢になるように慌てて突っ込む。
対するツバサはいつもの如くしれっと答えた。
「さっき位なら、使う命は3日分くらい。あまり影響はな――ッ！
ソラ！」
答える時にソラを見たのだが、その時異変に気付いた。彼女は僅かに苦悶の表情を浮かべて右足首を押さえている。着地時に捻ったらしい。
彼女は少し辛そうな笑みを作る。
「だ、大丈夫。ある程度休めば良くなると思うし……」
「……野次馬が集まってきたな」
ツバサは顔を曇らせた後、周りを見る。確かに騒ぎが沈静化された事で周りには事象に無関係で無責任な野次馬が増えてきた。
ソラは不思議そうにツバサを見る。彼女の異変に気付いた時、ツバサが少し立ち上がっていたので、ちょうど見上げるような形だ。
「……そうみたいだね」
『ちょっとツバサ、ソラがこんなだってのに周りを――』
ソラではなく周りを気にしたツバサに若干怒りモードのスザク。
ツバサは彼女の言葉を遮ってスザクを見る。

「スザク、暁にメール頼む」
『だから話を――！』
「ソラを念のためにサテラポリスの医療班へ連れて行く。報告書は後で。……今言った内容を頼む」
『ッ！　分かった。あんたもたまには良い事すんじゃん♪』
「たまにはは余計だ。事件のあらまし書くの忘れんなよ？」

ツバサは苦笑しながらスザクにツッコミを入れて、ソラは安堵からか笑みを浮かべる。

「それじゃあ、しばらく待ってないとね」
「？　その必要は無いだろ」

ツバサが意味不明と言わんばかりの顔をし、ソラも同様の顔をする。

「へっ？　それってどういう――うわっ！？」
「おんぶくらいでそんなに驚く事ないだろ？」

ツバサは素っ気無く返すと、自身の靴のツマミをいじり始めた。ちょうど、某アニメの少年探偵がスニーカーのキック力を上げるためにツマミを調整するのと同じような感じだ。

「そうだけど！　そうだけどいきなりは驚くよ！」

ソラがツバサの背中で慌てふためくのに対し、ツバサはイジワルな笑みを浮かべる。

「へ～そうなんだ～」

そんな彼の横顔を覗き見たソラは顔を赤らめて腕を振り上げる。

「ッ！　ツバサ私で遊んでるでしょ！　ッ！」

振り上げられた拳は彼の脳天に下される事は無かった。ツバサが何も無い空中を足場に歩き出したため、驚いて振り上げた拳をツバサの肩に置いてしまったのだ。

ツバサは空気を階段のように足場にする。ソラはその事に驚きすぎて、先程のテンションを纏(まと)めて削がれてしまった。

「……ツバサって、空中も歩けたの？」

それに対し、ツバサは呵々(かか)と笑ってみせる。

「ははっ！　そんなわけねぇだろ？　どっかのマンガのノアじゃねぇんだから。……人間より電波体のスザクの方が分かるかな？」

『え？　あ～～～……よく見ると極微量の電波を足場にしてるみたいね』

スザクの答えは当たっているらしく、ツバサはご機嫌に答えた。

「ご名答♪　実は今日オレが履いてる靴は、電波を弾く機能を持ってるんだ。その感度を強めてやれば……？」

ツバサは首を捻って彼女の方を向き、答えを促す。

「……微量な電波を足場にして、空中を歩く事も可能……」

「正解♪」

そんな事を言ってる間に、ちゃんとしたウェーブロードまで上っ

てきた。

「後は空の散歩をしながらＷＡＸＡに向かおう」

ツバサはそんな事を言ってウェーブロードを滑るように移動し始めた。

風が肌を撫で、髪を靡(なび)かせる。

ソラは目線を下げ、ツバサの背中を見ながら話しかけた。

「ねぇ」

「ん？」

ツバサはいつものように素っ気無く返す。ソラは静かに続けた。

なお、スザクは戦闘の疲れで寝ている。

「……キミにとって、私は特別じゃないんだよね」

「……まぁ、そうだな」

「それでも良い」

「……」

黙るツバサを無視して、ソラは続ける。

「気付いたんだ。私はツバサのそういう所……誰のためでも自分の力を使えるっていう優しい所が好きになったって。……だから、私はそんなツバサの特別になりたい。そのために、もっと仲良くなりたい。

……言っとくけど、ダメとは言わせないよ。キミが勝手に周りと線を引いてるんだったら、私も勝手にやらせてもらうだけだから」

そこまで聞いて、ツバサは思わず苦笑する。だがその笑いには、不快感から来るトゲは無かった。

「あはは……。そう来るとはな。……お前の意志で決めたのか？」

「うん。気付かせてくれたのはスザクだけど、決めたのは私だよ」

「それなら、ご自由にどうぞ」

「？　良いの？」

あまりにあっさり言われた事で、ソラは思わず顔を上げてツバサの横顔を覗きこむ。ツバサはこれまたあっさり頷いた。

「自分の意志で決めたなら別に文句は無いよ。ソラが言った様に、互いに自分の意志でやってる事だからな。……相手がちゃんと自分の意志で決めている事なら、自分と違う事を望んでいても文句は言わない」

「……それも、ツバサの考え方？」

未だに驚いているソラはポカンとした顔で覗き込んでいた状態から元の姿勢に戻る。

「まぁな。……それに、どうしても合わない時は意志と意志、真っ向からぶつかり合えば良いだけだろ」

「時々思うけど、ツバサって男っぽい考え方するよね」

「……ケンカ売ってんのか？」

ツバサは少し首を回してソラに半眼を送る。ソラはクスッと笑ってツバサの背中に肘を置いて頬杖をついた。

「ケンカなんて売ってないよ。キミは立派な男の子です。……あっ……」

「？　背中で何を思い出した？」

「男の子で思い出したんだけどさ、スバル君とミソラちゃん、どうしてるかな？」

「……忘れてた」

自分達が離れた以上、現場にはスバル達が残らねばならないだろう。

「……野次馬、うざってぇだろうな……」

「……そうだね」

ツバサとソラは、内心で2人に謝罪した。

その頃スバルとミソラは……。

「暁さんまだかな……」
「ホントだね……」

スバルとミソラは、野次馬の中から脱出できずにいた。
先程スザクから来たメールによると、ツバサとソラは先に戻ったらしい。

ハープ・ノートの正体が大人気アーティストのミソラである事を隠すために、2人は電波変換を維持しているのだ。しかし、全くもって暇なのだ。
幸い、写メを撮ろうとする輩（やから）がいればウォーロックとハープが注意して回っているので人前が苦手なスバルも何とかその場に留まっていられた。……ウォーロックの場合は迫力満点で『注意』というより『脅し』とも感じられるものだったが……。

「ちょっとすみません、サテラポリスです」

人波の先から聞き慣れた声が聞こえてくる。その人物は人波を掻き分けながら姿を現した。

「……ふぅ～。すごい野次馬だな。大丈夫か？　2人とも」
「「暁さん！」」

あまりに待ちわびたため、スバルとミソラの声は見事に揃った。
暁と一緒に来たサテラポリスの隊員は野次馬を立ち退かせ、事後処理に当たる。
暁のそばにはアシッドがいて、ウォーロックに具合を尋ねた。

『ケガはありませんか？　ウォーロック』
『へッ！　てめぇにそれを言われたくねぇな！』

『……意地を張って。年頃ですかね？　……お母さんは寂しいです』
『誰がお母さんだ誰が！　それも、家族なのに何で敬語!?』

彼らのコントも健在だ。ウォーロックのツッコミにツッコミを入れるなら、アシッドは家族ではない上に家族だろうと敬語を使ってはいけない事は無いという所だ。
苦笑しているスバルとミソラに対し、暁は笑みを少し退かせて話しかけた。

「で、お前達はどうなんだ？　ケガとかは無いか？」
「あ、はい。大丈夫です。僕は少し危なかったけど、ミソラちゃんが助けてくれたので」
「そうか。……良くやったな。2人とも」

そう言うと、暁はまるで2人の兄のようにスバルとミソラの肩に手を置き、スバルとミソラは照れたような笑みを浮かべる。
暁は思い出したように2人を見た。

「あ、聞いているかもしれないがツバサとソラが先にサテラポリスに戻るそうだ」
「はい。スザクからメールが来たので知っています。……それから――」

スバルは先程の戦闘、ティグレスがやられると分かっていてわざと突っ込んできたと思われる事や、彼女が最後にスバルとミソラに言葉を遺していった事を話した。
腕を組んで聞いていた暁は、スバルが話し終わると1回だけ瞬きをした。それは一瞬というには長く、その瞬きの間にスバルが話した事を考えているようだ。

「……なるほど。あの組織はそんな簡単なものじゃないのかもな。……でも、世界各地で捕らえられた奴らはそんな気の利いた事するようには思えないんだけどなぁ……」

暁の言う『奴ら』とは、比較的組織での階級が下の者達を指す。主に地球産のウィザードだが、その誰もが『人間よりウィザードの方が優秀だ』という類(たぐい)の思想だった。概(がい)して、人間であるスバルとミソラにそんな事を言うとは思えない奴らだ。

暁が悩むように頭を掻き、アシッドは推測を述べる。

『おそらくですが、組織の上と下では知られている情報が違うのではないでしょうか』

「知られている情報？」

スバルの問いにアシッドは答える。

『えぇ。言うなれば、その組織の中で共有されている情報です。……あるいは、一部の者にしか本当の情報が話されていないか……』

推測を付け加えたアシッドに対し、暁は顎(あご)に手をやって考え込む。

「……いずれにしても、調べてみる価値はありそうだな。少しでもあの組織を探る事が出来るかもしれない。……」

顎(あご)に手をやったまま考え込んでしまった暁に対し、アシッドはスバル達を一瞬見た後、冷静に忠告する。

『……シドウ、考えるのは少し後回しにして、今は星河スバル達を帰してあげましょう。今日の戦闘で疲れているでしょうから』

「ん？　ああ、そうだな。……って事で、今日はお疲れ様だったな。気をつけて帰れよ」

暁は気さくな笑顔で2人の肩を叩き、スバルとミソラはそれに頷く。

帰り道。多少遠出したというのもあって、コダマタウンについた頃には、太陽は西の地平線に沈みかけている。

「……スバル君」

「何？　ミソラちゃん？」

ミソラがスバルに話しかけ、スバルはそれに応える。ミソラは、夕暮れで少しオレンジ色に染まった頬でスバルに笑いかけた。照れくさそうな笑顔で……。

「今回はソラさんから頼まれてこういう形になったけど、今度は、2人だけで行こうね」

「うん」

スバルは彼女同様、笑顔で答える。そんな彼の顔が赤かったのは、夕暮れのためではないのだろう。ミソラもまた、自分で言った後に、自らの感情から顔を赤らめていた。

影は伸びる。夕暮れに包まれた町で。２人の影は手を繋いで、帰るべき家へと導く。

第８８話　夕暮れに伸びる影（後書き）

ツバサが自身の体を変えた事ですが、指先程度なら1年くらい維持できます。マユとの通信で言ってた（3日）のは、あくまで全力バージョンの時の維持時間です。

それでは皆さん、良いお年を。

第８９話　対面（前書き）

長かったので1話を2話に分けました。

とうとうローグとツバサの対面です。

第８９話　対面

――――星河家――――

「それじゃあ行ってきま～す」

スバル、ミソラ、ウォーロックとハープはあかねに挨拶をする。
昨日暁に話した事、ティグレスの腑に落ちない行動の事は、まだツバサには言っていない。おそらく暁が話したと思うが、それでも、ソラの様子を見に行く事になったのだ。何でも、足首を痛めたらしい。
あかねは肘から上を上げる形で子供達に手を振り返した。

「行ってらっしゃ～い。ＷＡＸＡの人に迷惑かけちゃダメよ～」
「分かってるよ」

お決まりのセリフにスバルは苦笑しながらそれに応える。

バタンッ

ドアの閉まる音。あかねは一息つくと、家事の続きに取り掛かる。

「ふぅ。……さて、さっさと終わしちゃいましょうか！」

鼻歌交じりで食器を洗っている時、ニュースの音が聞こえてくる。

『今日未明、アッフリクでウィザードのよるテロが起こりました。犯行声明から、ファイブエレメントだと考えられます』
『怖いですね～。でも、最近は少し大人しくなっていませんでしたか？』

「ホント、怖いわね～」

あかねはため息交じりでニュースの声に意見を合わせる。無論、手は家事に勤しんでいる。

『えぇ。確かに最近は大人しかったのですが、昨日の遊園地の事件に触発されたのか、こういった事が世界各地で起こっているようです。……っと、ちょっと待ってください。……ニュースの途中で新たな犯行声明が届きました。場所は――』

「ホント、嫌な意味で賑やかね……」

さっきまでの他人っぽいため息から打って変わって、今度は疲れと呆れが混じったため息をつくあかねだった。

――WAXA――

WAXAのウェーブライナーから降りた時、ちょうど暁と鉢合わせになった。

「っと、スバルどうした？」

出口近くでぶつかりそうだったため、暁が反射的に避けた後に尋ねてきた。
スバルは若干驚きながらも答える。
「ソラさんのお見舞いに。……暁さんの方こそどうしたんですか？」
「ん？　あぁ実はな、さっきファイブエレメントからの犯行声明が来たとかで出動命令が出たんだ」
暁のその発言にウォーロックはまたも勝手に実体化する。
『オレらは行かなくて良いのか？』
『あなた達は昨日の今日です。ゆっくり休んでください。今回は私とシドウが行きます。……それから、ウォーロックの場合は自分が暴れたいだけでしょう？』
『なっ！　てめぇアシッド！　そんな事……あるけどよ……』
自分を見つめ直して、その自覚はあったらしい。ウォーロックは語調を弱めながらケンカ腰に上げた腕を下ろす。
その様子をアシッドは『プッ』と挑発するように笑い、スバル達は苦笑いを浮かべる。
「……暁、そろそろ……」
「ん、ああ。分かってる」
暁の後ろの隊員が暁を急かす。暁は場を整えるために一回セキをしてスバル達の意識を自分の方に向けた。
「スバル、ミソラ、ウォーロック、ハープ、それじゃあオレ達は行ってくる。ソラだったら３７階の医療フロアの３０５号室にいる。さっき見てきたらソラがツバサの邪魔をして楽しんでいたよ。特に

な――」
「『暁！』」
先程の隊員とアシッドは暁に詰め寄り、暁は２人に平手を前に出す形で２人をなだめる。
「……はいはい。そんじゃあ、行ってくる」
そうスバルとミソラに言い残して、暁は隊員を引き連れて去っていった。
――――３０５号室――――
「……ソラ、いい加減部品返せ」
「何の事かな？」
本来ツバサとしては自室で寝たかったのだが、医者からは「キミの彼女なんだからキミが見ていなさい」と、ニヤニヤしながら言われて、ソラからは「１人は寂しい……」と涙目（　演技　）で言われて、演技だと分かりつつ仕方なく請け負ったしだいだ。
その時のツバサ曰く、「……スバルがミソラの涙目演技に逆らえない理由が分かった……」だそうだ。
そして今、ツバサはハンターを直しながらソラのそばにいるのだが、部品が紛失してしまったのである。ここまでならソラが盗った

という証拠は無いが、彼女の得意げでしてやったりな顔から考えて、彼女のせいであることは明々白々だ。

「そろそろその部品の出番なんだよ。とっととよ・こ・せ！」
「だから私が盗ったっていう証拠は無いでしょ？」

そんな事を言いながら、ソラは自分の手の中の部品を指先でコロコロ転がしていた。ツバサから（　窓際から　）はソラの体に隠れて見えない位置なのだ。
睨んでいたツバサだったが、ふと視線をドアに向ける。

「おっ、スバル達が来た」
「ふふん、そんな嘘に――」
「こんにちはー。……あれ？　ソラさん手に何持ってるの？」

ドアが開き、スバルとミソラ、ウォーロックとハープが現れる。スバルがツバサとソラに声をかけたのだが、その時スバルはソラの手に何かが握られている事に気付いた。ツバサから見て反対方向ということは、それはつまりスバルから見て普通に見える位置ということだ。
ソラがうろたえる隙も与えずに、ツバサはソラから部品をかっぱらった。

「やっぱりお前だったか。……悪いなスバル。このバカがハンターを直すのに必要な部品を隠しやがってよ」
「バ、バカって何よバカって！」
「バカをバカと呼んで何が悪い」
「「～～～～～ッ！」」

その後、言い争い勃発。唖然として状況を掴めないスバル達に対し、スザクが実体化して説明した。おまけに、ソラのケガの経過は順調らしい。彼女の治りの早さには医者も驚いていたそうだ。

なお、アイリスはハンターが直るまでヨイリーの下へ行くそうだ。ヨイリーを筆頭にした電波化できるコピーロイドの製作の件で、アイリスも少なからず興味はあるらしい。

一通り聞き終わった後、ウォーロックが呆れたようにため息をついた。

『……なるほど。つまり、昨日の戦いで壊れたハンターを直している時にソラが部品を盗って――』

「僕がかけた声でそれが発覚。それでこの事態、と。……僕にも責任があるのかな？」

スバルがまとめた後、彼は不安そうな顔をする。優しい彼の事だ。自分の発言でケンカが起こった事に責任を感じているのだろう。

スザクは言い争っている2人をチラッと見てから、苦笑してスバルと向き合う。

『あはは……スバル君が責任を感じる事は無いよ。この2人が大人になり切れてないだけだから』

スバル達は否定できなかった。若干、それは合っている気がしたから。

2人が言い争い、その他が自然に終わるのを待ってる時、招かれざる客が来た。

「やぁ、賑やかだね」

ツバサとソラ以外の面々が声のしたドアの方を見る。そこには、歳から来る白髪と青い瞳を持つ外人が立っていた。後ろにはガードマンらしき人物が立っている。

その姿を見て、ウォーロックやミソラは『誰？』と言わんばかりに首を傾げ、スバルは驚いたような顔をしている。

「アメロッパ大統領！？　何でこんな所に！？」

『大統領って、あれだろ？　国のリーダーみたいな』

「ロック君の言う通りなんだけど……こういう人だったんだ……」

ウォーロックとミソラの順で驚いたような感想を聞いたスバルは、半ば疑うような目でミソラとウォーロックを見る。

「……2人とも、ニュースとか見ないの……？」

「あ～……ゴメン。私ほとんどドラマか歌の番組ばっかりだから……」

『オレは時代劇と刑事ドラマ、あとアニメだ』

「……そうですか……」

ミソラは申し訳無さそうに、ウォーロックは見事なまでに開き直っている。スバルはため息をつくのをグッと堪え、一言を紡ぎ出す。その時気付いたのだが、いつの間にかツバサとソラの口論が止んでいる。2人の方を見ると、ツバサが不満を言いたげなソラの口を手で押さえて、スバル達の方を見ていた。いや、彼の視線はむしろ……。

「……アーノルド・ローグ……」

彼の呟きはローグに聞こえたらしい。というより、ローグは自分に声がかかるのを待っていた様にも思える。

「キミがツバサ君だね？　こうして逢うのは初めてだね」
「はぁ、どうも」

ツバサが敬語なのは警戒の証だ。スバル達はお偉いさんを相手に上がってしまって口と体が固まってしまった。そんなツバサの内心を知ってか知らずか、ローグは何故か頭を下げる。

「まずは昨日、キミの部屋に勝手に入らせてもらった事をお詫びする。どうしてもキミと話したくてね」
「……オレとっすか。それは、何の御用で？」

ツバサの警戒心がローグの警護の人の怒りを買ったらしい。ローグの前に出てツバサに厳つい視線を送る。

「大統領に対して無礼な――」
「いや、構わない。……なぜ話したいか、だったね。単なる興味本位だよ。好奇心は科学者には必要だろう？　少し昔の言い方をすれば、魔術師かな？」

最後をおどける様に言って見せたローグに対し、スバル達はある程度ほぐれたらしい。気軽にとは言わないが、言葉の中に安堵を込めながらスバルはローグに尋ねた。

「魔術師が科学者と関係あるんですか？　あ、僕は星河スバルと言います」

名乗りより内容が入ってしまったのは好奇心の強いスバルらしい。また、忘れずに名乗る真面目さも彼らしい事だ。
ローグは友好的に頷き、それに答える。

「星河スバル君か。よろしく。質問の方だが、１８，９世紀において、現代の科学者というのはその時代では錬金術師と言われていたんだ」

『錬金術ってあれだろ？　両手を合わせてバチバチ言わせて何か造るっていう……』

ウォーロックの発言にツバサは半ば呆れながらツッコミを入れる。

「いや、それはアニメの方だろ。歴史上の錬金術ってのは銅等の金属を金にするっていう研究の方が知られているが、実際には数学者や天文学、今となっては科学者と区分される分野の人間をまとめて錬金術師と呼んでいたんだ。

スバルだったら分かるだろ？　専門分野ってのは難しくなり過ぎると素人は全然理解できない。わけの分からない知識や実験をする……だから、その時代の人曰く魔術師って事。

つまり、今の科学者と呼ばれている人達は当時は魔術師や錬金術師と呼ばれていたって事だな」

ツバサの長い説明に対し、スバルはポカンとした顔で彼を見て、ローグは感心した様子だ。

「ツバサ君、キミは相変わらず色んな事を知ってるね」

「うむ。話に聞いた通り博識だ。……どうだろう？　これから2人だけで話をしないか？　今まで各国の負の遺産を盾に、裏から政府を操ってきただけの知謀を持つキミと話がしたいんだが」

確かにツバサはそんな事もしていた。メテオGの時は、各国が早々に結論を出さないために手を回したのだ。

対するツバサは素っ気無く、払う動作で手を振る。

「遠慮しま～す。元々お偉いさんに対して警戒心が強いので～。それと、オレが口を挟んだのはウォーロックがあまりに浅学のバカだったからで～す」

『浅学ってのが何か分からねぇが、バカとは何だバカとは！』

浅学というのも立派な侮辱言葉で、漢字に変えれば一目瞭然だ。

しかし、ウォーロックの中では漢字変換が出来なかったらしい。はこの時ツバサがウォーロックを貶したのは無論理由がある。話を逸らす事だ。

ローグが巧みにツバサと2人で話を使用とするのは明々白々。ツバサ自身、ゲイルからの報告が無ければそれに乗ったのだが、彼が飛王（フェイワン）・リードと繋がっている事を知った以上、隙を見せるわけにはいかない。

ツバサの計画通り、すっかり和気藹々（わきあいあい）とした雰囲気が出来てしまい、ローグは口を出す事が出来なくなってしまった。そして、ローグの部下も時計を見た後自らの主を急かす。

「大統領、そろそろニホンの総理と面談の時間です」

「あぁ、分かった。それでは諸君、私はこれで失礼する。……ツバサ君」

「はい？」

ニホンの視察に加えてツバサを探るのを目的にした来日。ただでは帰らない。

ツバサの生返事にローグは表面だけで笑みを作った。

「昨日この施設を視察した時、地下に惹かれたのだが、何かあるのかな？」

第９０話　思考（前書き）

……考えてみればまだこの作中では夏休みなんですよね……。時期的に合ってねぇ……。

第９０話　思考

【　地下には何があるのか？　】……それははたから聞けば何でも無い質問だろう。しかし、ツバサとしては冷や汗モノだ。

「……さて、何の事ですかね？　どうしてそんな事を？」

「大統領としての勘だよ」

ローグは自然に笑ってみせる。ツバサも形だけで笑みを返した。

「オレはつい数ヶ月前ここに来たばかりなのであんまり知りません」

「そうかね」

「……大統領」

ローグの護衛は焦らす様に声をかける。ローグはしぶしぶといった形でそれに応えた。

「ああ、分かった。それでは、キミもお大事に」

ローグは最後にツバサ経由でソラを見て彼女を気遣って去っていった。ソラは慌てて頭を下げる。あまりに突然話を振られたから声が出てこなかったのだ。

ローグの足音が無くなった後、スバル達はまだ先程の体験が信じられずに言葉を交わす。

「僕達……あの大統領と話しちゃったよ……」

「……一生に一度あるかどうかの事だよね」

『……白髪のじーさんだったな』

『ウォーロック、突っ込む所はそこじゃないわよ』

スバル、ミソラ、ウォーロック、ハープの順で話し、ハープはウォーロックにツッコミを入れる。

おまけを言えば、ローグはまだ６０程なのでじーさんというより初老だ。

「……」

ツバサはそんな彼らを視界から外して窓の外をみた。雲がちらほら浮いていて、日差しは秋の涼しげなそれになりつつある。

ローグの言っていた言葉が、彼の頭の中を巡る。

（……魔術師……地下……あいつが最後にオレを経由してソラを見た……。

魔術師は文脈的に無理やり入れた感じだった。……私は知っているというローグからオレへの警告……か。

それに、地下はアレが埋没している。今は使い物にならないが、少しずつ修復してようやく後一歩ってとこまで来た。……こんな所で見つかるわけにはいかない……。

それに、ソラの事もある。アイツの前でそれっぽい雰囲気は作っていない。……だが、ローグはかなりの愛妻家で知られる。もしかしたら、その勘で何かを察したのか？）

ツバサは考えに耽り、１つの推測が頭に浮かんだ。

（……オレを動かすためにソラを手中に……？）

だとすれば厄介だ。ローグではなく、ソラがである。彼女の性格上、そんな事を知れば不用意なアクションを起こしかねない。かと

いって昨日の遊園地のように自分（ツバサ）から離れさせようとしても、彼女は自分の答えを出して、それがツバサと共にいる事だから、それを曲げない限り何を言っても無駄。
しかし、相手の考えを理不尽に変える事はしたくは無い。

結論、現段階で誰にも疑いを持たれずに実行できるのは警戒のみ。
特異事項（イレギュラー）の起こる可能性はできる限る減らしたい。

ここまで来ると自意識過剰と言われるかもしれないが、用心に越した事はないだろう。
一応の結論を出した時、スバル達の話し声が聞こえてきた。

「でも、本当にソラさんケガの治り早いですね」
「そうかな～？　……私、旅館ではけっこう草道歩く事多いからケガも良くしてたんだけど、それで体がケガに慣れちゃったのかな？」

そんな理由ではないだろう。無論ソラはおふざけで言ったのだが、ツバサは呆れからつい言葉を出してしまった。

「スザクがいるからだろ」
『えっ？　私？』
「どゆこと？」

失言だった。考え事をしていて、その他の口がやや軽くなったのだ。疑問を声に出したのはスザクとソラだが、他の面々も気になるという顔だ。
ツバサは『本当』を何割で話すかを考えてながら答える。

「あ～～……。ほら、火って生物の活力を司る感じだろ？　だから、その『活力』は同時に『再生』という意味にも取れるんじゃないか

なって思ってよ」

ツバサから見て6割本当の事を言っている。

間違い2割は、「思う」という表現だ。実際、そんな曖昧なものではなくちゃんとした確証があった。だから、「思う」というのは間違いである。

残り2割は話してはいけない分野の事だ。計、4割ウソ。

対するスバル達のリアクションは以下の通りだ。

「『へぇ〜」』
「『『ふぅ〜ん……」』』
「……」

上から順に、スバルとウォーロックは素直に信じたらしい。ミソラ、ハープ、スザクは半信半疑。ソラはジト目で沈黙。

ツバサは状況の帳消しを目論み、しれっと言い放つ。

「勘だけどな」

「『なんだ、そうなんだ／そうなのか」』

スバルとウォーロックは少しガッカリ。

「ふぅ〜ん」

ミソラは興味なし。

『『そうでしょうね』』

ハープとスザクは最初から冗談だと決め付けていたようだ。

「……」

ソラは依然としてジト目のまま。ツバサとしては、そのジト目はぶっちゃけ痛い。

だが、彼女はジト目沈黙を破ってツバサから目を逸らした。怒った様に、プイッとそっぽを向く感じだ。

「ツバサってさっきの大統領さんと似てるね」

「？　オレが？　何で？」

ツバサにとってその発言は予想外だ。若干の興味が湧き、彼女に尋ねる。

ソラは腕を伸ばしてツバサの後頭部を押さえ、そのまま引き寄せる。そして、ツバサの耳元で囁くように言った。おそらく、スバル達に聞かれたらツバサが色々問われるだろうという彼女なりの気遣いだろう。

「（……本当に嘘を混ぜてる所。……まぁ、あの大統領さんみたいに嘘に本当を混ぜてないからその分マシだけど）」

ツバサの誤魔化しとローグの牽制、その配分ぐあいも彼女は察していたらしい。つくづく良い勘をしている。

だが、ソラの判断には若干のミスがあった。現在、ツバサの耳元にソラの口がある状態なのだ。その状態は――。

「ラブラブシーンにしか見えないぞ、２人とも。……ったく、帰っ

てきて早々何を見せてくれるんだ」

いつの間にか任務を終えて、いつの間にかドアの前に立っていた暁はツバサとソラに呆れたような声をかける。スバル達は顔を赤くしながら目を背けていた。なお、ウォーロックは強引にハープから顔ごと逸らされている。両頬を押さえられてグイッという感じだ。

ソラはツバサに何かを囁いた後、彼の頭を押さえていた手を離す。ツバサは心なしか顔を赤らめて、すさまじい速さで彼女から離れた。それを見たソラの顔は得意げで、イタズラを成功した子供のようだ。

一方スバルはツバサの挙動を不思議に思ったのか、尋ねてくる。

「どうしたのツバサ君？」

「な、何でも無い何でも無い！」

ツバサが慌てる様を、ソラは内心爆笑しながら話しかける。

「その割には顔が赤いよ～？」（ツバサって面白。こういうのを言われるのは慣れてないんだ。……ウブなんだね～♪）

「気のせいだろ？」（誰のせいだ誰の！）

「……それじゃあ、そろそろ僕たちはこれで――」

スバル達は気を遣って去ろうとしたが、思い出したようにツバサが呼び止める。

「あ、言い忘れた。スバル、夏休みの宿題終わった？」

「えっ？　うん。取り戻すのが大変だったけど、今日中でも終わせるよ」

夏休みの終わりまであと3日。遅くとも明日には終わらせて、残

りはゆっくり休むという計画だ。
しかし、そんな彼の計画はツバサの発言でもろくも崩れ去った。

「自由研究は？」
「えっ……そんなのあったっけ？」
「……もしかして、終わってない？」
「……コクッ」

スバルの頷きを筆頭に、ミソラも「うっ」というバツの悪そうな顔をする。彼女も忘れていたらしい。ツバサはため息をついて助言した。

「……場合によっては今回の旅行の事を書くってのもありかもな。色んな土産買ったから、その国の文化とか案外楽に思い出せるだろ」
「な、なるほど……。ミソラちゃん、帰ったら早速とりかかろうか」

スバルとミソラは、同じ思いを胸に互いを見る。

「うん。最後の1日くらいはゆっくりしたいもんね。今日は教科の宿題を終わらせて、明日はその事を書き上げちゃおうよ」
「うん。そうだね。……それじゃあツバサ君、ソラさん、暁さん。僕たちはこれで」
「おう、またな」

暁が2人にあいさつをするなり、スバルとミソラ、ウォーロックとハープは急いで出て行った。

「……すごい急ぎようだな」

風のように去っていった4人を見送った暁は独り言のように呟く。

ツバサはため息交じりで壁に背中を預けた。

「よっぽどゆっくりしたいんだろ」

「……」

「……なんだよ暁？」

さっきから暁がツバサを凝視してくる。ツバサが煩わしそうに尋ねたのに対し、暁はからかうような顔になって答える。

「ん？　お前はどうなのかなって思ってな」

「？　オレの宿題ならもう全部終わってんぞ」

「いやいや、そうじゃなくてだな。……キスくらいはしたのかと聞いているんだ」

「ッ！？　キキキス！？　どっからその話題が……！」

ツバサは先程囁かれた事を思い出して赤くなる。これからの自分の行く末を覚悟していても、慣れていないものはしょうがない。

ソラは笑いを吹き出し、暁は依然としてニヤニヤした笑みを浮かべている。

「なんだ、まだなのか？　さっきの様子からしてもうやった事があるのかと――」

「やってねぇから！」

ツバサが暁の言葉を遮ってツッコミ、ソラは笑いを堪えながら悪ノリする。

「そのうちやるつもりですよ。私達の関係、期待しててくださいね。暁さん♪」

「暁、期待はしな――」

ツバサの否定を、暁はさっきのお返しとばかりに遮る。

「おう。そのつもりだ。バッチリ期待してるぜ！」

「話を聞け――――――！！！」

ツバサの叫び声がフロアに響く。彼はその後も、クインティアが暁を止めに来るまで2人に遊ばれ続けたらしい。

第９０話　思考（後書き）

ツバサがソラから何を言われたかは秘密です（笑）。でも……もしかしたら近いうちに……。……まだ未定と言っておきましょうか。

次回から学園祭編です。どんだけ続くかオレにも分かりません（苦笑）。書いてるうちに予定より長くなる恐れがありますからね。

第９１話　ホームルーム

――――コダマ小学校――――

長かった夏休みも終わり、スバルとミソラ、委員長トリオ、ジャック、ツバサはクラスメイト達と再会した。ツバサとジャックは「オレ達は別々でも良い」と言ったのだが、「新学期なんだから皆で登校しましょう」というルナの命令に逆らえずにしぶしぶ７人で登校する事になったのだ。

７人はクラスメイトと挨拶を交わし、雑談を始める。先生が来るまでの雑談は学校の日常光景と言えるだろう。

「へぇ～。アメロッパ大統領と逢ったの。それはすごいわね」

ちょうど先日アメロッパ大統領と話をした事を話題にしている。ルナの感心したような声にスバルは頷いた。なお、キザマロとゴンタは驚きで言葉が出てこないらしい。

「うん。穏やかで物知りで、良い人だったよ」

スバルがそこまで言えるのはスバル自身がお人好しというだけではない。相手が不審な事をしていないため、怪しむ理由が無いのだ。

そして、ジャックは「ケケッ」と笑いながらツバサを見る。

「それじゃあ、こいつに穏やかさを付けた様な奴か」

「ジャック、オレも作業をする時は大人しいぞ」

ツバサはムスッとしてジャックを睨むが、ジャックはなおも得意気だ。

「ツバサはちょくちょくサボるだろ？」

「それとこれとは関係無いだろ」

火花を散らすツバサとジャック。ミソラはケンカに勃発しないために話を逸らす。

「ねぇ、そう言えばツバサ君、昨日ソラさんに何言われてたの？」

その発言は効果覿面（こうかてきめん）だったらしく、ツバサの意識はジャックから完全に離れた。

「他愛も無い事だ」

一言言うのに意識が完全に逸れるという事は何かしらあるのは明白。だが、あえてスバル達はそれ以上突っ込まない。この話題にした目的は、あくまでツバサの意識を他に向けてジャックとのケンカにしない事にある。

まぁ、そう上手くいかないのが世の常で、ジャックがニンマリ笑顔でツバサに絡む。

「暁が言うにはソラがツバサの耳にキスを――」

「されてねぇから！！」

まぁ、ソラがツバサの耳元で囁いていたのだから場景的にはそう見えなくも無い。

ツバサは顔を赤くして机を叩きながらいきり立つ。それに対しジャックは、ニシシッと笑いながら「冗談冗談♪」と手招きのように手を動かす。

だが、ツバサの気はまだ収まらないらしい。

「ジャックのは百歩……否、万歩譲って（　ボコルのを　）後回しにするとして、暁……帰ったらシメル……！！」

「あ、ちなみにオレが暁から聞いた話では、何かを囁いただけだって言ってたぜ」

つまり、暁は誤解はしていなかったという事になる。ジャックがツバサをからかうための冗談として言ったのだ。正直に言ったのは他でもない。このまま内緒にしておくと、暁・ツバサＶＳジャックという不利な状態が出来かねない。それを懸念したまでの事だ。

ツバサは怒りで頬を引きつらせながらジャックを見る。

「……そこまで冗談かい……」

そんな危ない雰囲気を楽しんでか、ジャックのウィザード、コーヴァスが実体化して追い討ちをかける。

『あ～そういや昨日ソラを旅館に帰したんだったな。それもエスコート付きで。どうだった？　女将からそれらしい事言われたか？　ソラを頼むとか』

その時、ツバサの中で何かが切れた。

「……ジャック……コーヴァス……」

「あん？」

『何だ？』
「……電波変換しとけ。ヘビードーン3秒前……」
「『……ッ！　すいませんした！」』

さっきまで得意げだったジャックとコーヴァスが謝った理由は1つ。ツバサの目がマジだったからだ。

「……2……」

だが、それでもツバサはカウントを止めない。さっきも言った通り、ツバサはマジだ。本気と書いてマジと読む。故に今の彼は止められない。下手にツバサを止めようとすれば飛び火して被害が大きくなりかねない。
なので、ウォーロックを始めとした武闘派ウィザードはヘビードーンが放たれた瞬間それを一斉攻撃で破壊する事にしたのだ。ペディアやモード、スバル達は念のためにクラスメイトをその場から離れさせた。

「……1……。ヘビー　――」

ガラガラ～～

ツバサがバトルカードをハンターに転送する間際、教室のドアは音を立てて開いた。担任の育田道徳の登場だ。

「皆おはよ～～～。ん？　何で皆一箇所に集まっているんだ？　夏休みはどうだったかドアを開いた時に聞こうと思ったのだが、予定が狂ったな。困った困った」

口で言うほど困ったようには見えない。陽気に笑ってみせる育田は、生徒達に席に座るように促す。

「で、でも、あっちではツバサ君とジャックが……」

下手をすれば大惨事をやっていま～す。とは言えるわけも無く、スバルは語尾を弱めながらジャックとツバサの方を見る。だがそこには、大人しく席に座る2人が居るではないか。

ジャックの疲れたような顔を除けば、先程の危機が最初から無かったようにすら思える静けさだ。

スバル達が育田先生の方を向いている時に何が起こったかというと、ツバサにも教師の声は聞こえたらしく、彼は舌打ちをするとバトルカードをケースに収め、席に着く。極度の緊張から解き放たれたジャックもフラフラと自分の席に着いたのだ。

育田の登場で、クラスで流血沙汰にならずに済んだのである。

気を取り直して、ホームルーム。今日は新学期という事もあって今学期の予定の説明や、色々な決め事だけだ。その『色々』とは……。

「え～今学期は学園祭と社会科見学がある。まずはこの場で学園祭の出し物を決めてしまおう」

そう。育田が言うように、今学期は学園祭がある。今日はその出し物、あわよくば個々の役割まで決めてしまおうという日なのだ。なので、授業が無いからといって決して楽なものではない。

ちなみに、社会科見学は才葉シティに行くらしい。

他のクラスは何をするかを決める段階で短くとも2，3日かかるが、このクラスは約1日だ。その理由は、６－Ａが誇る生徒会長、白金ルナの指導力に一因する。

育田が教壇を下りると共に、ルナが教壇に上がって声を張り上げた。手の平を机に置いて、さらに両手を伸ばしている。さながら、どこかの議員の演説のようだ。

「それじゃあちゃっちゃと決めるわよ。何か案がある人、挙手しなさい」

だが、それで上げる者は予想通り（？）いない。だが、ルナにとってはそんな事は想定内だ。「おほんっ」と咳払いをした後、クラス委員長としての権限を行使する。

「……自分から言おうとそれじゃあこっちから聞いていくわ。まずスバル君」

こうする事で、答えなければならない状況を作るのだ。ルナ自身の迫力も相まって効果は抜群である。

白羽の矢が立ったスバルは慌てて案を考える。

「え！？　……えっと……それじゃあ……劇とか」

「ダメね。去年と同じじゃつまらないもの。次、ミソラちゃん」

「……つまら……」

案を出す所要時間が短かったが、それでも即答で却下されれば少し傷つく。ミソラはそんなスバルを気づかいながら答えた。

「あ、うん。う～ん……皆で歌を歌うとか」

「確かに魅力的な案だけど、それだとミソラちゃんの歌声が際立って【クラス皆の～】じゃなくて【ミソラちゃんの～】になっちゃうでしょ。ミソラちゃんは歌いたんでしょうけど、今回はゴメンね」

「う～ん……。それじゃあ仕方ないね。皆の学園祭だもん」

ミソラは苦笑しながら意見を譲る。ルナはもう一回ミソラに謝った後、ゴンタを一瞬見て、諦めたように別に視線を移した。ゴンタはそれに気付いたらしく、理由を尋ねる。

「委員長、何でオレを一瞬見た後諦めるような目をしたんだ？」

ルナはあんまり言いたくなさそうにその理由を話した。

「……ゴンタの事だから牛丼屋とか言うんじゃないかと思ってね」

確かに、ゴンタ＝牛丼と言う程にゴンタは牛丼が好きだ。だが、ルナの勘は外れたらしく、ゴンタは珍しくルナに怒っている。

「ムッ！　委員長！　オレがいつも牛丼の事ばかり考えていると思ったろ！？　今回は違うぜ！　なんたって今回は学園祭だからな！」

「へぇ……。それじゃあ聞いてみようかしら」

あのゴンタが牛丼以外の事を言うとは……。クラスはゴンタの次の発言に注目する。

ゴンタは息を大きく吸って、自身の考えを言葉にして解き放つ。

「豚丼だ！！！」
「どっちも食べ物じゃない！！！」

ルナはゴンタと同じ声の大きさで俊足のツッコミをプレゼントした。ツバサは思わず笑いを吹き出してしまい、それがルナの目に止まる原因になってしまった。

「せっかく出した人の意見を笑うなんて、よっぽどあなたには良い案があるんでしょうね？」

その声と視線が自分宛てだと気付いたツバサは、バツが悪そうに目を伏せて頬杖を突いた。

「あ～ゴンタ、笑って悪い。……案……ねぇ……。うむ！」

何か思いついたらしく、ツバサは顔を上げた。

「お菓子をどっかから仕入れてそれを売るというのはどうだろう」
「却下ね。せっかくの学園祭なんだから、何か作るにしても手作りの物をお客さんにご馳走したいじゃない。……大体、あなたの場合はお菓子のお零れをもらう気満々でしょ」
「ぐぅ～」

ツバサが呻いている所を見ると図星らしい。ツバサの甘い物好きは彼と親しい者にとって周知の事実だ。

「（……美味い店知ってんのに……）」

彼はそんな感じで拗ねた様にブツブツ言っている。戦闘時の明晰

な頭脳はどこへやらだ。
ルナはそんな彼をさておいて他にいないかを尋ねるが、これといって良い案が出ないまま全員ボツ（　または思いつかない　）という状態に陥った。

ルナはため息をつくと、黒板に文字を書き始めた。

『お化け屋敷』

チョークを置いて、クラスの子供達と向き合う。

「こんな事もあろうかと、イザという時の案を考えておいたわ。意見が無ければこれにします」
「あ、あの……委員長……」

スバルはおどおどと手を上げる。スバルは元々幽霊が苦手な上に、先日遊園地のお化け屋敷でトラウマ級の恐怖に襲われたので、彼としてはしばらくその手の話には関わりたくない。

「何かしらスバル君？」
「あの……僕……幽霊が――」
「受付やチラシ配りという手もあるわよ」

彼の声は小さかったがルナにはちゃんと聞こえたらしい。おまけに、文脈から考えてスバルが幽霊が苦手な事も察した。
このままではスバルが自分の不名誉を暴露することになる。ルナはそれをさせないためにも、スバルの言葉を遮ったのだ。
スバルはポカンとした後、ルナの意図に気付いたのか笑顔でお礼

を言う。

「ありがとう委員長。そうさせてもらうよ」

「そ、そう。なら、問題無しでいいわね？」（はぁ～。せっかく割り切ったのにその笑顔を向けられると、ね……）

ルナとしてはスバルとミソラの関係を認め、割り切ったのだが、彼の純粋な笑顔を見ると複雑な気分になるのだ。

ミソラはミソラで、スバルに対してやや嫉妬のオーラを送っている。学校が終わったら、スバルは彼女の機嫌を治すのに苦心するだろう。

スバルは、「問題が無いか？」というルナの問いに頷いて見せた。

「うん」

そして彼は痛い視線（ミソラ）を気にしつつも、恐い役にならないかもという期待に胸躍らせていた。

他の皆も異論は無いらしく、結局出し物はお化け屋敷となる。

当たり前に始まる新学期。それは当たり前に楽しく、卒業まで全員が一緒にいられるものだとスバル達は信じていた。

しかし、この学期で1人の友人が自分達の下から去る事になるとは、この時のスバル達には知る良しもない……。しかし、その時は刻一刻と近づいていた。時間自体がそれを嫌がるように、ゆっくり

と……。

第９１話　ホームルーム（後書き）

最後の数行は入れようかどうか迷いましたが入れることにしました。あながち間違ってはいませんしね。……今の予定だと……あと５編くらいですから。

今のうちに言っておくと、『去る』といってもメインキャラクターは１人も死にませんよ。

第９２話　チロル（前書き）

今回は久々にＣＬＡＭＰ作品のキャラが登場。今回は『ちょびっツ』からです。なお、単発の予定。

第92話　チロル

「断る」

６－Ａの出し物はお化け屋敷。自分達で集めた材料と少しのリアルウェーブで細工して、ハード（物質）面は順調に進んでいたのだが、ツバサがルナの提案を呑まない事でその役だけ遅れていた。しかし、男子はそれを迷惑がるでもなく、むしろ彼に同情の眼差しを送っている。

その役とは……。

「何でオレが貞子（さだこ）なんて……」

そう。ルナがツバサの配役に持ってきたのは、某ホラー映画で有名な貞子である。

「委員長が黒髪に染めれば良いだけだろ？　そっちの方が髪が長いんだから」

不満そうなツバサに対し、ルナは腕を組んで真っ向から言い放つ。

「イヤよ。せっかくの黒髪なんだから活かさなきゃ損でしょ？」

「だからって何でオレが女装なんて……」

「命令よ。従いなさい」

ここに来てあえて言おう。男子がツバサを同情する理由はルナの命令を聞かねばならない事だ。このままではツバサは、男子としての何かを失ってしまうかもしれない。かといって男子（　無論女子にも　）には、ルナを止めるだけの交渉術は持っていない。

なので、男子がツバサにとる行動は1つ。

ポンッ

「諦めなよ」
「諦めた方が良いぞ」
「諦めた方が無難です」

スバルを始めとし、ゴンタやキザマロから肩にそっと手を置かれたツバサはヤケクソ気味に叫んだ。

「あーもう！　分かった！　やれば良いんだろやれば！！」

こうして作業は再開された。

材料費は学校から支給され、その額は1万円。小学生が手にするには大きすぎるので他のクラスでは担任がサイフのヒモを握っているわけだが、このクラスではルナが管理している。彼女はしっかりしているので、担任の育田も安心して預けられるというものだ。

金額面と総指揮はルナが担当し、驚かすネタはツバサやキザマロ、スバルが担当している。及び、細工付きのリアルウェーブの製作だ。

ツバサは人を驚かすのが好きな性分なためにネタには困らない。キザマロも頭が切れるので面白い工夫を思いついてくれる。スバル

は自分だったらこういうのが恐いというのを言っているわけだが、これは中々重要だ。

ネタを思いつくのは良いがそれをお客が恐がってくれなければどうしようもない。なので、人の『どういうのが恐いか』という意見は参考になる。特にスバルはお化けに対して恐がりなため、幅広く参考を得られるのだ。

なお、何か買う場合は1万円の予算からやりくりしなければならないが、自分達で用意して勝手に作る分には問題ない。そのため、リアルウェーブはありだ。

ゴンタやジャックを始めとした男子は材料調達や力仕事。【ダンボールなどの普通の物質だけだと油断させて細工付きのリアルウェーブで驚かす】という表の策を完成させるためにも、まずはカモフラージュとなるダンボールなどを集めなければならない。ちなみに、ジャックもゴンタも当日に驚く客達の様子を想像したのだろう。案外ノリノリで作業している。他の男子も似たようなものだ。

もちろん、その策を思いついたのはツバサである。それを決めた時はクラスのほとんどが彼の性格の悪さで引いたとか。

女子はゴンタ達が集めた実際の物質と、ツバサ達が考えた細工有りのリアルウェーブを組み合わせてお化け屋敷の会場を作っている。

さらに、ルナは男子を全員買出しや材料調達に出させずに、数名が常に教室に居るというローテーションを作った。それにより、力仕事が必要な時はいつでも男子に手伝ってもらえるようにしたのだ。

上記の事を考えたのはほとんどルナで、スバルやミソラより付き合いの短いツバサも舌を巻いた。

「それにしても驚いたな。あの委員長のリーダーシップと指導力がここまでとは」

ツバサが休憩とばかりに背中を伸ばしながら離れた所で指揮しているルナを見る。それに対し、彼女の側近の1人であるキザマロは自慢げに答えた。

「当然です。なんたって委員長なんですから」

「どんな理屈だそれ？」

スバルはツバサの冷静なツッコミに苦笑しながら話に加わる。

「あはは……でも、ホントにそうかもね。なんと言うか、委員長だからって感じ」

「だから何のこっちゃ。……まぁ、彼女が色々決めてくれる分、オレとしては楽だけどな」

「あぁ、皆の指揮をしなくて良いから？」

スバルの問いに対し、ツバサは人差し指を立てて両目を瞑り、機嫌良さ気に答えた。

「そういう事。おかげで驚かすネタを考えるのに集中できる」

「……お手柔らかにね……」

ツバサの意地悪な笑顔を見て、スバルは鳥肌が立った。さっきから出されているアイデアの性質があまりに悪いのだ。

それからは授業の勉強と学園祭の準備の両立となった。放課後に残れる人は残って少しずつ準備をしていく。学園祭の前日は1日丸々準備に当てられ、各学年、各クラス毎に様々な出し物を準備していくのだ。

余談だが、一口に『お化け屋敷』と言っても言葉にするのと実行するのとではワケが違う。

ひたすらに大変なのだ。日の光を防ぐための案や驚かすネタ、そういった事を考える他に、実際にそれを形にしないといけない。

作者の経験なのだが、準備で18時以降に学校を出る事も多く、前日なんて19時まで学校で準備する事になった。

余談はここまでにして、スバル達の時代にはリアルウェーブという便利な物があるので、材料調達にはあまり困らない。よって、学園祭前日の段階で多少時間に余裕が出来た。

そのため、あらかたのネタとリアルウェーブを仕上げたスバル、キザマロ、ツバサは、打ち上げ用のお菓子を買いに行く。

ツバサは本来自分のだけ予約しようとしていたのだが、ルナにその動きが見破られたために全員分を買う羽目になったのだ。

そんなわけで、ツバサは不満気にスバル達をお気に入りの洋菓子店に案内している。前回彼が『良い店』と言った店である。スバルとキザマロは苦笑いを浮かべながらそんな彼の後ろを歩く。

「……着いた」

彼が指差すのは洋菓子店。名前は『欧風菓子チロル』だ。看板に

は、店名の他に少し赤らめたピンクの四葉のクローバーが描かれている。店の外装もピンクや赤など明るい色が基調で、ミソラが気に入りそうな店だ。

「へぇ～。綺麗なお店だね。……今度ミソラちゃんと来ようかな」
「それは良いかもしれませんね。委員長とゴンタ君には黙っておきますよ。特にゴンタ君に知られるとうるさそうですから」
「ありがとう。キザマロ」

スバルがキザマロにお礼を言っている時、ツバサが店の前で退屈そうに声をかけてきた。

「……来ないならオレの分だけ買うぞ――」
「あ、待って。今行く」
「スバル君まで置いてかないでくださいよ～！」

駆け出したスバルにキザマロが不満を言い、３人は煩いとまではいかなくとも賑やかに店内に入った。

店内も綺麗で、木の様な薄い茶色が基調とされている。お菓子店独特の甘い匂い。ショーウィンドウの中にはチョコレートケーキやショートケーキ、モンブラン、チーズケーキ、シュークリーム、カステラなど、様々なお菓子が陳列されている。
カウンターに立つのは長身の男性だ。短い黒髪で、見た目２０代だろうか。

男性はツバサ達を見ると穏やかな笑顔を浮かべながら声をかけてきた。どうやらツバサ宛てらしい。

「いらっしゃい。君が誰かと来るなんて珍しいですね」

「成り行きでな」

当然といえば当然だが、この2人は顔見知りだったらしい。おそらくツバサは監視者の仕事を抜け出してよく買いに来ていたのだろう。

不承不承といった様子のツバサを見て、男性はフフッと笑う。

「でも、安心しました。いつも1人だったから、友達が居ないんじゃないかと心配していたんです。……で、その友達の名前を聞いても良いですか？」

ツバサが何かを言おうとする前にスバル達に話を振ったところから考えて、彼もツバサの扱いは心得ているらしい。

スバルとキザマロは不満気なツバサに苦笑しながら自己紹介をする。

「僕は星河スバルです。えっと、先日予約をしたコダマ小学校の生徒です」

「はい。ちゃんと頼まれていたお菓子は出来ていますよ。君は？」

スバルの自己紹介に笑顔で返し、キザマロの方を見る。

「ぼ、僕は最小院キザマロです。初めまして」

「こちらこそ初めまして。僕は植田弘康（うえだひろやす）と言います。あ、店長で良いですよ」

キザマロにも穏やかな笑顔で自己紹介をした店長は「それじゃあ予約されていたお菓子を持ってくるので待っててください」と言うと、店の奥に去っていった。

若くて礼儀正しい店長に好感を抱きながら、スバルはツバサに話

しかける。

「礼儀正しい店長さんだね。歳は２４，５くらいかな？」

尋ねられたツバサは何故か笑いを堪える。

「プッ。ククククッ……。まぁ、そのぐらいに見えなくもないわな」

「えっ？　違うの？」

スバルの問いに、ツバサは何かを思い出すように顎（あご）に手をやって目を瞑る。

「ああ。確か……もうすぐ４０だったかな？」

「「あれで！？」」

スバルとキザマロが驚きの声を上げるのも無理はない。それほどまで、植田弘康という店長は若々しく見えるのだ。

そしてその会話は店長の方にも聞こえていたらしい。店長は穏やかに笑いながら箱を抱えてやってきた。

「あはははは。やはりそのぐらいに見えますかね」

見える。

スバルとキザマロの顔がそう語っていたのだろう。店長は優しい笑みを浮かべながら箱をスバルに渡した。

「ふふっ。正直ですね。はい。仲良く食べてくださいね」

「あ、はい。ありがとうございます」

大事そうに受け取るスバルを見て、ツバサはいつものイタズラを

する時の笑みを浮かべた。

「店長。実はスバルの奴、彼女とピリピリしたムードになってんだ。そんなわけで、仲直りのきっかけに何か手頃なお菓子をスバルにサービスしてくれねぇか？」

「おや、そうなんですか？　スバル君？」

「あ～……はい……」

先日のミソラの嫉妬は未だに尾を引いており、星河家でも少し気まずい日々を送っている。

店長は俯くスバルに目の高さを合わせる。

「分かりました。そういう事なら協力しましょう」

その言葉に、スバルは喜びという感情のまま顔を上げた。

「ホントですか！？」

「えぇ。もちろん」

「ありがとうございます！」

ツバサは満足気な笑み。彼は何だかんだでスバルの事を気にかけていたのだ。キザマロはそんな事を思いながら彼を見ていたのだが、その彼から台無しな一言が飛び出る。

「ついでにオレのもお願い」

前言撤回。どうやらツバサは自分のお菓子も視野に入れていたようだ。無論スバルのためにというのもあったのだろうから全て彼に非があるわけではないが、抜け目が無さすぎる。

彼に『本気で頭を使うときはどんな時？』と質問したら、『お菓

子を手に入れる時！』と、迷わず言いそうだ。

しかし、店長も負けてはいない。

「キミにも、スバル君同様立派な彼女が出来たらプレゼントしますよ。おまけに、その人を僕にも見せてくれたら嬉しいですね。キミがどんな人を好きになったのか気になりますし」

勝気ではなく穏やかに反論されたら二の句が告げない。押し黙ったツバサを見て、店長はスバルとキザマロに目配せした。その意味に気付いたスバルとキザマロはツバサの両腕を掴んで（捕獲して）店のドアを開けた。

つまり、ツバサが呆けているうちに連れ出した方が良い。との事だ。

「それじゃあ植田店長。これ、ありがたく頂きます」

「本当にありがとうございました！」

スバル、キザマロの順で挨拶をし、ツバサは我に返る。及び、子供のようにダダをこねる。

「ッ！　離せ――――！　お菓子食べたい！　お菓子食べたい～！」

「うわっ！　暴れないでよ！　お菓子が落ちる！」

「う～～が～～～！！！」

「スバル君、ここは1人がツバサ君を押さえてもう1人が箱を持ちましょう！」

「うん！」

「スバル離せ――――！！！　チロルのお菓子――――！！！」

スバル達は店から出たのだが、それでも響いてくる喧騒。店長は

不快に思うどころかニコヤカな笑みを浮かべる。

「ふふふっ。……ツバサ君にも、ああいった態度が出せる友人が出来ましたか。これは、彼の彼女さんを見るのも近いかもしれませんね。その時のために、何か新作のお菓子を考えておきますか」

店長はすぐには動き出さず、外の子供達の声を楽しげに聞いていた。

第９２話　チロル（後書き）

次回は学園祭です。

第９３話　学園祭（前書き）

お待たせしました。今回は某マンガの『霧』をイメージしました。
クフフフフ……。

第９３話　学園祭

――――学園祭当日――――

保護者や近所、様々な人が見に来る一般公開まであと2時間。現在朝の８時だ。委員長トリオは生徒会の仕事に行き、スバルやミソラ、ツバサを始めとした６－Ａの面々はクラスの出し物の最終調整をしている。

……のだが……。

「プッ！　ププププププ！」

「クックックックック」

「あっはっはっはっはっは！」

「……」

スバルのいる６－Ａは笑いにあふれている。そんな中唯一黙っている人物は、白い着物を着てお化粧しているツバサである。男女問わずクラスメイトに笑われた事で彼の顔は羞恥の赤に染まり、イライラした様子で目を閉じている。

なお、不細工になったというわけではない。むしろ、はまりにはまっているのだ。はまり過ぎて『惚れる』よりも『可笑しさ』が優先されたのだ。

彼自身整った顔立ちをしているので、薄めの化粧をして、彼の不満気に手を腰に当てているという現在の状態がなければ、立派な女の子に見えてしまう。

彼の髪は『貞子』をやるには短いので付け髪でカバー。

『……何だか座敷童(ざしきわらし)みたい……』

アイリスの率直な感想で再びクラスは笑いに包まれる。親しさの関係上、アイリスには文句を言えるらしく、ツバサは不満気に閉じていた目を開ける。

「そういうアイリスだって似合ってんぞ。猫娘B」

『……』

その一言でアイリスは恥ずかしげに俯く。彼女はクラスの女子に流され乗せられ猫娘に抜擢(ばってき)されたわけである。ちなみに『A』はミソラだ。当初はルナも候補にあったが、本人の意思で却下。着物はともかく猫耳が恥ずかしいらしい。

なお、猫耳と爪はリアルウェーブで、ヘアピン型のプロジェクターから作り出す。無論、ハンターを使う必要がある。猫を思わせる金色の瞳はカラーコンタクトだ。

小型のプロジェクターで作られたリアルウェーブは視認出来るが触れる事は出来ない。だが、むしろその方が都合が良いのだ。理由は後ほど。

何でもない会話のはずだが、ツバサとアイリス以外の目はツバサの目に集中している。かつ、恐れている。それもそのはず。ツバサは今雰囲気を出すためのカラーコンタクトを付けているのだが、それは赤い筋が中心に向かって走っている物だ。それを目に付ければ、血走った目の出来上がりである。

現在ツバサは周りの人間全てを睨んでいるので、睨み＋血走った

目という相乗効果で恐さは倍増だ。

「ツ、ツバサ君……恐いから目を閉じるか向こう向いててくれないかな？」

スバルの提案に他の皆も一斉に3度は頷いた。対するツバサの行動はとても残酷だ。

「あ～？　何だって～？」

睨んだまま近づいてきた。無論ワザとだろう。

彼が1歩足を進めるたびにクラスの輪は後ずさる。しかし、いつまでも逃げられるわけは無く、とうとう壁に背中をぶつける所まで来てしまった。

「ふっふっふ……さぁて、どうしてくれようか……」

依然として近づいて来るツバサは不気味な笑みを浮かべる。

それに対してのクラスメイトの反応は様々だ。

「うわ――――！！　マジでゴメン！　もう笑わないから近づかないでくれ――――！！！」

素直に（？）悲鳴を上げながら謝る者もいれば……。

「神よ……。どうか私に救いを……」

祈る者もいたり……。

「南無妙法蓮華経（なむみょほうれんげきょ）……南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）……南無妙法蓮華経……南無阿

弥陀仏……」

同じ祈るでも仏教方面の方も居たりで、すっかり６－Ａは悲鳴と祈りが交じり合うシュールな（　変わった　）空間となった。

そんな状況に終止符を打つように、教室のドアが開く。

「みんな、準備はどう？　……何やってんの？」

委員長が生徒会の仕事から帰ってきた。後ろにはゴンタとキザマロも居る。恐れるように壁際まで追い詰められているクラスメイト。それに目を開けたまま近づくツバサ。アイリスはそのツバサの後ろ側の壁に立っている。

ルナはすぐに事態を理解した。

「……とりあえず、皆はツバサ君に謝る意思はあるのよね？」

スバルを含めた全員が頷く。ルナは視線をクラスメイトからツバサに移した。

「だそうよ。許してあげたら？」

「……ちっ。……しょうがねぇな……」

ツバサは渋々従ってクラスメイト達から離れた。恐らく彼としては、ここで「許さない」と言ったら厄介な事になると察したのだろう。相手はあの委員長なのだから、眼光だけで済むはずが無い。

一方ルナは気分を切り替えるためにため息をつくと、全員に聞こえるように声を張り上げた。

「皆！　いよいよ私達６－Ａの成果を見せる時よ！　お客さんに満足してもらえるように頑張るわよ！」
「「「「オッ――――――！！」」」」

ルナが拳を上げ、スバル達を含めたクラスメイトがそれに呼応して拳を上げる。

「そして、お客さんの動員数を学年……いえ、学校Ｎｏ．１にするわよ！！」
「「「「オッ――――――！！」」」」

今年の学園祭は、『せっかくだから学校全体のお客さんの動員数を競おう』という学校の企画で、トップ３に入ったクラスは賞品がもらえるのだ。

３位はサテラポリス提供でうまい棒６０本。まぁサテラポリスは市民の安全を護り、同時に市民との信頼関係が近くなければいけないのでそういったサービスをするのは分かるが……「なぜにうまい棒！？」という生徒の疑問の答えを、スバル達は知っている。推測だが、確定だろう。

暁だ。サテラポリスの誇るエース、暁シドウだ。別名、うまい棒大好き『うまい棒刑事』。……別名の方は作者が思いついた勝手なあだ名だ。

閑話休題。

２位は図書券５００円分（クラス全員分）。もはや、学校の用意する恒例賞品と化している。

「チロルのショートケーキも食べるぞ――――――！！」
「「「「「オッ――――――――――！！？」」」」」

ツバサのノリに数名が乗せられて語尾に疑問符を浮かべる。

「そっちが目的じゃないでしょ！！！」

及び、委員長の一喝。

なお、ツバサの言う通り1位はチロルのショートケーキだ。これもクラス全員分で、1位が決まったらチロルに行き、作ってもらう事になっている。スバル達が打ち上げ用に依頼したのとは他に、学校側があらかじめ依頼していたらしい。

これに一番喜んだのはもちろんツバサで、それをホームルームで聞いた後の彼の働きは見違えるようだった。これでもかというほどに真剣に取り組み始めたのである。

そして、6－Aの心は1つになった。……1人だけお菓子目的の奴が居るが、まぁ、結果オーライという事にしておこう。

そして、その成果がこれだ……。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

６－Ａの出し物、『お化け屋敷』から悲鳴が上がる。及び、ギブアップ。大の大人が瞳孔を開いてまで驚いていた。
その叫び声に釣られて度胸試しをしようという客が続々並ぶ。
どんなものかというと……。

「な、中々雰囲気出んじゃん……。なっ」
「お、おう。小学生にしては中々だ」

２人組の青年はそんな事を言いながら暗いルートを歩く。入り口でギブアップしたい時に鳴らす『ギブアップコール』なる物をもらったが、２人は使うことが無いだろうと考えていた。

「ん？　おい、アレ……」

一方が指差す先には、赤紫の髪のショートヘアーの女の子と、淡い茶髪の女の子がうずくまって泣いていた。青年２名はすぐに気付いた。これは仕掛けの１つだと。しかし、話しかけずにはいられない。その理由は１つ。彼らも響ミソラのファンだからだ。どうしてこんな所にいるのかは分からないが、彼女と話せる機会はそう無い。

この機会を逃さないという意志を固めて、青年２名は顔を見合わせた後、オホンとセキをして話しかけた。

「おほん……。えっと、どうしたの？」

ミソラとアイリスは青年たちの方を向く。涙目の２人に、青年２名の体にイナズマが走る。手早く言えば、『ストライク』だ。

「（お、おい！　やっぱりあの響ミソラだぜ！？）」
「（あ、ああ！　それにあの茶髪の子も可愛い！　くっそ――！　オレが１０歳若かったらアタックしてたのに――！！　今そんな態度をしたらあの子達にロリコンだと思われる！）」
「（落ち着け。昔からこう言うじゃないか。【愛があれば歳の差なんて】って」
「（ッ！！　そ、そうだよな！　ここで話しかけなかったら、中々会えないもんな！　下手に普段の小学校に入ったら不審者扱いされて終わりだ」

アホらしい　＆　モテナイ　＆　彼女いない青年２名は意を決して話しかけた。

「困っているならお兄ちゃん達が相談に乗るよ」

その言葉に、ミソラが上目使いに青年を見る。

「あの……帰れないの。お願い。私達を家まで送って……」

そう言って指差すのは出口の方向。

（どうやら、ミソラちゃんとこの子をゴールまで連れて行くっていうのが基本的な設定みたいだな。……ホント、小学生にしてはよくやるよ）

青年はそう思いながらミソラに手を差し出す。

「分かったよ。一緒に行こう」（そして休憩時間に一緒に学校を回

ろう）

青年はこのお化け屋敷をクリアした時の事をすでに頭の中でシュミレートしていた。「高々子供のやる事」……青年達は、６－１を舐め切っていた。

青年が隣を見ると、友人が同じようにアイリスに手を差し出したが、アイリスは『大丈夫』と優しい微笑みを浮かべて自分で立ち上がった。その笑顔のままお礼を言っている。友人デレデレだ。

そしてミソラの方も自分で立ち上がり、青年に満面の笑顔をプレゼントした。

「ありがとう！　お兄ちゃん！」
（ぐはっ！）

彼女の眩しい笑顔は一撃必殺。日々の生活で疲れた青年の心を一撃で和ませた。

その瞬間、不意にミソラとアイリスの顔が驚きで満たされる。そして、彼女達は青年達の後ろを指差した。

「「……私達が居る！！」」

どんな仕掛けかと半ば楽しみに振り向くと、そこには確かにミソラとアイリスが居る。青年たちのそばに居る２人と違って着物を着ている。

クラスメイトをかつら等でコスプレさせたとしてもここまでそっくりにはならない。青年がどういう手を使ったのだろうと考えている間に、新たに現れたミソラとアイリスがジリジリと迫る。それに

応える様に、青年達のそばの2人も怯えたように後ずさる。
青年2名は良い所を見せようと彼女達に話しかけた。

「大丈夫だよ。オレがいるから」

青年達はそんな事を言いながら、青年の一方はミソラの肩に手を置き、もう一方の青年はアイリスの手を握った。
その時、異変は起きた。触れた部分からサラサラと砂の様に崩れていく。さすがにこれには驚き、両者は叫び声を上げる。

「「うわぁぁぁぁぁ！！！！」」

そして、人間が見えない位まで細かく砕けた光景を見た青年2名は呆然とし、自分達のそばに近づいてきた2人に気付かなかった。

「……」

ミソラとアイリスは無言で2人の袖を引っ張る。無意識に彼女達の方を向いた青年はさらに驚いた。ミソラとアイリスの爪が鋭くなり、耳も生え、目は金色に輝いている。それはまさに――。

「……ね、猫娘……」
「『……ご名答……』」

青年の答えを肯定してニヤリと笑い、それと共に壁（　机などを重ねて、それに黒い物を貼り付けた壁　）の中から通り抜けるように猫娘姿のミソラとアイリスが続々と現れた。

「「ッ！！」」

青年2人は腰を抜かして座り込む。それを囲むように、ミソラとアイリスは集う。逃げ場を完全に無くした所で、複数のミソラとアイリスが一斉に笑みを浮かべた。とても凄惨で、残忍な笑みを……。
そして、爪を煌かせて一斉に襲ってきた。

「「ッ！！　うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」

先にギブアップコールを使ったのはどちらだろう。甲高い音が響き、挑戦者の敗北を告げる。
それが鳴り響いた瞬間、周りのミソラとアイリスは始めから彼女達がいなかったかのように綺麗さっぱり消え去った。
そして、少し離れた所にはアイリスとミソラが平然と立っている。

ここでようやっと青年達は気付いた。今まで自分達を囲んでいたのはリアルウェーブだったと……。

実は彼らが最初に会ったのもリアルウェーブ。砂のように崩れたのも演出だ。元が電波だから『見えなくなるまで砕けた』なのである。しかもその真意は、相手の注意を引く事にある。
本物のミソラとアイリスは、崩れる様を見てお客さんが驚いている間にハンターを操作して爪と猫耳のリアルウェーブを展開。カラーコンタクトも付けて、動揺している客に近づいていくのだ。
そして、彼女達を見ている隙に、『見えるだけで触れる事の出来ないリアルウェーブ』を操作して囲む。本物は複数の自分達に紛れて離れる。触れる事ができないため、自分達を避ける必要は無い。最短ルートで離れられる。

これのクリア方法は、耐えれば良いだけだ。囲んで、爪を煌かせ

て襲い掛かってきたとしても触れる事が出来なければそこまで。後は、お客さんが襲われている視覚の情報と、実際には痛くもかゆくも無い触覚の情報。そのギャップと違和感に気付けば終了だ。

もしクリアしていれば2人の「『おめでとう！　これからの関門も頑張ってね！」』という激励をもらえたのだが、青年からしてみれば残念な事だろう。

――――数分後――――

「「リッベーンジ！！」」

青年2人は戻ってきた。

今度は騙されない！　そんな意気込みを胸に部屋に入る。そして、泣いている2人が居た。

相手がリアルウェーブで無いからか、乱暴で無礼に接した。

「……どうしたんだ？　……偽物さんよ」

その言葉で、ミソラとアイリスはキッと睨む。

「酷いわ！　私達は本物よ！」

『そうです！　信じてください！』

「いいや！　どうせ触れたら砂みたいに砕けるようにプログラムされているリアルウェーブなんだろ」

そう言いながら2人の肩に触れるが、先程とは打って変わって砕

ける様子は無い。それもそのはず。今度は本物だ。新しいお客さんが入ってきた時点で2人はどっちを本物にするかを適当に決めているのである。

乙女の気まぐれ。
完全ランダム。
規則性は無い。

しかし、この時点で青年達は気付かなかった。
先程のリアルウェーブは通常のリアルウェーブで、触れた瞬間砕けるようにプログラムされていると考えていたのである。
そう。先程砕けたのは触れた感覚が無い事を相手に気付かせないための『カモフラージュ』だという事に、2人は気付いていない。
触れる直前で崩れ始めたのだ。

「ははははっ。小学生の作るヤツだからバグでも出たか？　全然消えない」

青年2名は嘲るように笑った時、視界の隅で動くものが見えた。
それは……。

「おっ本物のお出ましだ」

ミソラとアイリスのリアルウェーブだ。しかし、先程の反省から青年達はそれが本物だと信じている。
青年2人は本物を置いて2人の下へ向かう。その時、心配そうな声で本物のミソラとアイリスは叫んだ。

「だめっ！　その2人は偽物よ！」

『近づいたら殺されるわ！！』

青年2人は本物のミソラとアイリスの方を向いて嘲る。

「ははっ。そんなウソに騙されるかよ」

「殺されるか。うん。恐い恐い」

青年2名はそんな事を本物に言ってから偽者の方を向く。その瞬間、戦慄が走った。

目の前の、本物だと思っていたミソラとアイリスの爪は見る見る伸び、その爪の先は鋭く尖っている。そしてジリジリと近づき、爪を振りかざす。そして勢い良く、振り下ろした。

「「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」

その青年達は、2度目の敗北を味わった。ギブアップしたら目の前にまで迫った爪は綺麗に消えた。

「……もう……どっちが現実で……どっちがリアルウェーブだか分からない……」

青年はそんな事を言い残し、自らの敗北を認めた。自分達では絶対に勝てないと悟ったのだ。

本物だと思ったら偽物。

偽物だと思ったら本物。
虚偽（きょぎ）の中に潜む真実。
真実の中に潜む虚偽。

実体の中に潜む幻（リアルウェーブ）。
幻（リアルウェーブ）の中に潜む実体。

ミソラとアイリスのを良い例に、６－１のお化け屋敷は変幻自在に相手を惑わす。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

……また１人、脱落者が現れた。

第９３話　学園祭（後書き）

次はツバサの貞子が出てきます。

「……オレ、男だよな？」

そうだけど？

「何で女装なんて……」

委員長命令＋ツバサの反応が面白いから。

「……」（……隠れドＳ……）

それでは次回もお楽しみに！

第９４話　来訪者（前書き）

今回も現実とリアルウェーブで惑わしますよ～（楽）。

「……こいつ、ぜってぇ楽しんでる……」

第９４話　来訪者

「はぁ……はぁ……はぁ……やっと、ここまでこれた……」

大の大人ですら逃げ出す中、初めて最後の関門までたどり着いたのは何と小学生だ。コダマ小学校の生徒、おんみょうカイキ君である。

同じ小学校なら、ある程度の情報の漏洩（ろうえい）はあり得る。恐い事には変わらないが、内容は噂で聞いていたので何とかなったのである。言ってしまえば『予防』だ。

そして最後の関門は……。

「……あれ？　何にもでない」

構えていたのだがいっこうに現れる気配が無い。不思議に思いながらもゴールである。教室のドアに向かう。

ガチャ

「あれ？」

ガチャガチャ

「ウソ……」

押しても引いても開かない扉。それに戸惑っている時、後ろに気配を感じた。暗闇と恐怖で、気配に敏感になったらしい。……カイキは野生動物か……。

それは、白い着物を着た女性だった。恐らく生徒の変装だろう。

カイキは一瞬驚いたが、なんとか平静を取り戻して尋ねた。

「……すみません。ドアが開かないんですが……」

その声で、女性は顔を上げる。

「ッ！！」

女性の目が血走っている。その目を見たとき、カイキは動けなくなった。ツバサは大人気無い事に、一般の小学生相手に殺気を出しているのである。無論加減はしているが、一般の小学生が殺気慣れしているほど、この国は荒んでいない。

未知のモノに対する恐怖で体が動かなくなったのだ。

しかし、もしもカイキが殺気に慣れていたら気付けたかもしれない。本当の殺気は、カイキの後ろ、ドア側の、見せ掛けだけで実体の無いリアルウェーブの壁の中から放たれていた事に。

カイキは蛇に睨まれたカエルのように目すらも目の前の血走った女性から離せなくなった。離す事すらも、許されない気がして……。

「はぁはぁはぁ……」

カイキは極度のプレッシャーで過呼吸ギリギリだ。

本物のツバサは音も無く忍び寄り、カイキの肩に手を置く。

「ッ！！？」

後ろには誰もいなかった。それを確認したカイキにとって、それは意識の外からの不意打ちだ。後ろに誰も居ないのを確認した後で後ろから叩かれたのだから。

「ッ！！　うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

後ろを見たら目の前の女性と瓜二つな女性が立っていた。それも、振り返った時に血走った目が最大の効果を発揮するような至近距離だ。

カイキの意識はそこで暗転した。

気絶。
ＫＯ。
ギブアップだ。

相手が偽者のツバサ（　リアルウェーブ　）に気を取られている隙に、一見して壁に見えるリアルウェーブからツバサが忍び寄る。見せ掛けだけなので、通る時に物理的な抵抗は無い。

そして相手の肩に手を置いて血走った目のドアップ。

という作戦だ。相手が今までの関門で精神的に疲れている時の、トドメの一撃である。

クリア方法は、ダブル貞子の挟み撃ちを抜け出し、ドアを開ければＯＫ。ドアは電子ロックがかかっているが、リアルウェーブの貞子が現れればロックが解除されて外に出られる仕組みだ。

まぁ、カイキは優秀な方で、これ以後もツバサの元へ来る者はい

なかった。大半がその前の関門で脱落してしまう。

――――その頃スバルは……――――

「どうぞー」

６－Ａのチラシ配りに精を出していた。「あのロックマンが！」と思う方もいるかもしれないが、彼にとってはこっちの方が良いだろう。

『おいスバル、また泣きながら６－１の教室から出てきた奴が居たぜ』

６－Ａの様子を見に行ったウォーロックが面白がりながら報告してくる。そう。６－Ａはただいま絶賛絶叫中だ。

公開前にキザマロがテストとして入ったが、悲鳴と何かが倒れる音がしたと思ったらツバサやジャックが気絶したキザマロを運んできたのだ。

キザマロよりスバルの方がお化けに弱いのだから、そのスバルが入ったら例え驚かす側だとしても気絶してしまう。

ウォーロックの報告に苦笑するスバルに対し、ウォーロックは頼み込むような視線をスバルに向ける。

『なぁスバル～。オレも驚かしてきて良い？　地球人の驚く所が面白くてな』
「ダメだよ。ウォーロックがいなくなったらビラを取りに行く人がいなくなっちゃう」
　スバルがビラを配り、無くなりそうな時はウォーロックが取りに行っているのだ。ここでウォーロックに去られたら、いちいち取りに行かなければいけない。それも、ビラがあるのは６－Ａ前の受付。悲鳴が聞こえる中を行かなければならないのだ。
　ウォーロックはスバルのお化け嫌いを知っているので、盛大なため息をついて了承した。
『分かった分かった。しゃあねぇから我慢してやるよ』
「分かってくれたなら良いよ」
　スバルがホッと息をついた時、声変わりに入りたての様な声が尋ねてきた。
「ねぇ、お化け屋敷ってどこにあるの？」
　振り向くと、見た目１５歳くらいの少年が立っていた。スバルから見て年上なのだが、それでもその少年の顔はあどけなさが残る。濃い茶色の髪。頭には赤と青を綺麗に割った柄の帽子を被っている。
　スバルはビラを渡しながら口頭でも伝える。
「あ、それならこのまま真っ直ぐ行った突き当りです」
「ああ、あの人達が来た方だね」

少年の視線の先には、脱落者が涙を流して歩いてきた。
スバルは苦笑しながら頷いた。

「あはは……えぇ。まぁ……」

少年は笑いながらスバルの肩をポンッと叩いてそちらに歩いて行く。

「あはは。それじゃあ頑張ってね（……ロックマン君……）」
「えっ？」
『どうした？　スバル？』

いきなり疑問符を浮かべたスバルにウォーロックが尋ねる。スバルは首を傾げながら答えた。

「うん……。今あの人、僕の事ロックマンって言ったような気がして……。でも、気のせいだよね？」
『……』
「ウォーロック？」

スバルの問いにウォーロックは沈黙する。スバルがウォーロックに再度尋ねると、ウォーロックはハッとした様な顔になった。

『あ、わりぃ。考え事してな』
「考え事？」
『あぁ。……アイツの波長、どっかで見たような気がすんだよな……。それも、戦ったような……』

ウォーロックの言葉は弱めだ。思い出せないのだろう。何にしても、このままでは大事に至る可能性がある。スバルはすぐさま少年

の向かった６－Ａに向かおうとするが……。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

お客さんの悲鳴で足が止まる。

「……クッ！　このままじゃ大変な事が起きるかもしれないのに！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「～～～～～～～～ッ！！！」

スバルが悔しがる最中、新たな悲鳴を聞いて声にならない叫びを上げる。

なお、６－Ａから響いてきた叫び声は恐らくアイリス、ミソラの所だろう。最初のは偽者が崩れた所。２回目の悲鳴は大量のリアルウェーブ（実体無し）に襲われる所だ。

スバルの足が震えている時、彼の肩に手がポンッと置かれた。

ビックリしたスバルは廊下であるにも関わらず叫び声を上げてしまう。

「うわぁ！？」

「うひゃあ！」

手を置いた側も驚いて間の抜けた声を出す。どうやらそこまで驚かれるとは思っていなかったらしい。

相手を驚かせてしまった事で冷静さを取り戻し、スバルはその人物の方を向いた。

「あっ……」

知ってる人物だった。

――――お化け屋敷の中――――

（……さっき入ってきた奴、中々やるな……）

ツバサが感心するのも無理は無い。先程入ってきた客は、ミソラ、アイリスの所を始め、どんどん関門を破っているのだ。

コンッ

「痛っ。……単なる人形か」

その人物はジャックの所にたどり着いたようだ。

ジャックの仕掛けは『経験』というものを利用するタイプだ。まずは細い糸で釣った人形をターゲットに当てる。その人形が触れられる事を認識させるのだ。

そして、少し進んだところでリアルウェーブを発動。上から大量

の人形を吊らせる。首を吊るように空中で止まるものの、突然の落下物と首吊り人形でビビらせるのだ。「さっきのが本物だからこれもそうかもしれない」という経験から来る思い込みで、自然としゃがんでしまう。

そして、しゃがんだら視線は下へ向く。その視界にギリギリ入る程度に、血ノリべっとりのクラスメイトが台車に仰向けに乗って出てくる。後は「恐いけど見てみたい」という心理を利用して血ノリべっとりクラスメイトをお客さんに見せて驚かすのだ。

これのクリア方法は、血ノリクラスメイトの上を越えていけば良い。ようは、先に進めば良いのだ。

ガラガラガラ～

台車が転がる。客が息を飲んだのが分かる。

「ッ！　……あ～驚いた」

で、済まされた。

その時、ジャックから無線が入る。耳に小型の通信機をつけて、各人で秘かに連絡をとっているのだ。

「（おいツバサ！　気をつけろ！　アイツ、頭が回るらしく大抵の事をすぐに見抜きやがる！）」

小声で焦るジャックに対し、ツバサは静かに「了解……」と返す。

ターゲットが角から現れ、周りを見ながらドアに近づく。暗いので色は分からないが、帽子を被っているようだ。ツバサは息を押し殺し、ハンターを操作してリアルウェーブの貞子を作り出した。後はオートで動く。

何かを感じたのだろう。少年は後ろ、出口と反対方向を振り向いた。そこには、血走った目で女装しているツバサ……もとい貞子のリアルウェーブが立っている。

少年は、何と驚く所か笑みを浮かべている。

「やっと見つけた」

少年は笑みを浮かべながらリアルウェーブに近づく。しかし、別の声がそれを遮った。

『待て。……それはリアルウェーブだ。……本物は――』

『あそこだぜ。ケンジ』

少年の近くに現れたのは以前学校を襲撃した炎牙と氷牙。そうなると、目の前の少年がドッグ・ツインの正体という事になる。

ツバサが冷静に分析できたのはここまでだ。氷牙の忠告、炎牙が指差した事で、ツバサの場所がバレタのだ。

ケンジと呼ばれた少年は笑みをツバサの方に向けてくる。子供がアリを殺す時の様な、残酷で、無邪気な笑みを……。

「あぁ、ありがとう炎牙、氷牙。……さて、あの時の借りを返そうか」

隠れていてもムダだと判断したツバサは少年の前に姿を現す。

身構えるツバサに対し、ケンジはゆっくり近づいて、通り過ぎた。

「？」

怪訝に振り返るツバサに対し、ケンジは背中を向けたまま話してきた。

「……ここでドンパチはやらないよ。色々面倒だからね。……でも――」

ズンッ！

勢い良く振り向いたケンジはその回転を利用してナイフをツバサの腹に突き立てる。おそらく、ポケットに隠していたのだろう。

「……これぐらいならいいでしょ。今回の目的はキミへの借りを返すのが目的だからね」

デューオの膜のおかげで【　突き刺さる　】ではなく【　突き立てる　】程度で済んだが、これぐらいという言葉では収まりきらない。生身の人間なら流血クラスの力で刺して来たのだ。

ジャックや他の生徒に聞こえないようにだろう。ケンジはツバサの耳元で囁いた。

「……あれ？　さすがにこんなんじゃ何にもならないか。（……それじゃあいずれ、キミに痛みをプレゼントするよ。簡単に死なないなら、いくらでもいたぶれるからね♪）」

それを言うなりケンジは立ち去っていく。彼がドアに手をかけたとき、ツバサが声をかけた。

「……炎牙と氷牙がＦＭ星の双翼ってのは自称だろ」

「ッ！！」

その言葉はケンジの気を引くのに十分だった。その事で彼らの間で何かあったらしい。先程までの余裕面はどこへやら、ケンジの顔は怒りで歪んでいく。

「……次に会ったら苦しみを2倍にする」

そういい残し、彼はゴールの扉を開けた。その背中には、小さな小さな白い羽根が付いている。

ドアが閉められて部屋は再び暗闇に戻る。羽根の事が脳裏に浮かべているツバサに、ジャックが話しかけてきた。

「……おい、アイツなんだって？」

「……近いうち遭うってさ」

――廊下――

ケンジはイライラした様子で廊下を歩く。人にぶつかっても謝らず、それどころか睨みつける有様だ。さすがに無視できなくなった

らしく、氷牙が注意する。

『おい、イライラするのも大概に――』

「ッ！　これは……」

氷牙の言葉を遮り、ケンジはあるモノに注目する。この学校の年間予定表だ。……『6年生の社会化見学は才葉シティ』。それを見た時、ケンジは笑みを浮かべる。

「ふ、ふふふふふふ」

『……オ、オイ、ケンジ……どうした？』

不気味に笑い始めたケンジに、さすがにそろそろ彼の挙動に不審を覚えた炎牙が尋ねてきた。氷牙はその答えが分かったようだ。

『……才葉シティ……私達がいま住んでいる所だ』

『ッ！　それって――！』

「そう。彼らはもうすぐ僕のそばに来る。……その時に、あの時の借りを返すとしよう」

少年は怪しい笑みを浮かべたまま帰路に着いた。その時のための準備をするために……。

――お化け屋敷――

午前中最後の客はやたらと騒いでいる。先程スバルを驚かしてしまった人物だ。

「きゃぁぁぁぁぁ！！　ア、アイリスちゃんが――――――！！　ミソラちゃんが――――――！！！！」

ちょうどミソラとアイリスのリアルウェーブが砕ける場面を遭遇したらしい。しかし、その声でツバサは額に手を置き、ジャックはポカンとした顔をしてツバサを見る。その後驚いているミソラと冷静なアイリスを見てジャックは納得した。

彼女は……ソラは、アイリスが呼んだのだと。

この驚き様だとすぐにギブアップするだろうという驚かす側の予想は大きく裏切られ、彼女は悲鳴を上げながら進んで行く。……その度に何かが壊れる音やクラスメイトの悲鳴が聞こえるのは気のせいだろうか……。

トンッ（↑実体の人形が当たった音）

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ブワッ（↑リアルウェーブの人形の大群が吊られた所）

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」

ガラガラ～（↑台車で血ノリべっとりクラスメイト）

「来ないで――――――――！！！！」

ズンッ！

「ぐほっ！！」

鈍い音と共に血ノリクラスメイトの悲鳴が聞こえる。やはり何かあったらしい。

「（おいツバサ、大変だ）」

ジャックから無線が入る。

「（……大体予想できてるけど一応どうぞ）」

「（ソラが来てる）」

それは知ってる。

「（ソラがあまりの恐怖で我を忘れて、驚かした奴が返り討ちにあってる）」

……うん。予想通りだ。

「（お前も気をつけろ！　ヒュ！　ボスッ！　おぐっ！　ブツッ！　……）」

空を切る音、何かが当たる音、ジャックの悲鳴、通信が切れた。
以上のことから判断して、人形を投げられて顔面直撃。耳から機器が落ちて通信不可。……そんな所だろう。

（あ～あ、これ終わったらメシに行こうと思ったのによ～）

ツバサはめんどくさそうにため息をつき、ドアをガチャガチャ言わせているソラにリアルウェーブ貞子を見せてやる。

「ッ！！！　イ――――――ヤ――――――！！！！」

貞子に気付いたソラは驚く事に、逃げる所かリアルウェーブの貞子に向かい、蹴りをお見舞いした。

（……なるほど。さっきから聞こえる悲鳴の元はこれか……）

嫌な予感がするが、それでもツバサが出ないとどうにもならない。
相手は外見だけの擬似リアルウェーブだ。ほとんど映像に近いのでクリア方法のヒントを話すことも出来ないし、物理的な攻撃は意味を成さない。

（とっととクリアしてもらうか気絶してもらって、おいとま願おう）

ツバサが擬似リアルウェーブの相手をしているソラの後ろに立つ。
ソラの肩に手を置く前に、彼女は振り向いた。

「ッ！！！　こっちにも――――――――――！！！！！」

ツバサの腹部に激痛が走る。さっきのナイフなんて目じゃないく

らい痛い。

ロー。ミドル。ハイ。

ソラは連続でツバサに蹴りを叩き込む。

（……あぁ、そういやこいつ、運動神経めっちゃ良かったんだっけ……）

蹴られる中、ツバサはそんな事を思っていた。

机を足がかりにして飛び上がり、ツバサの頭を踏みつけて数メートル飛ぶだけの脚力を彼女が持っている事を、ツバサは忘れていたのだ。夏休みの旅行中、シャーロでの事だ。

「これでトドメ――――――!!!」

いつの間にか彼女の目的が【　身を護る　】では無くなっている。

彼女は駒のように回転し、その勢いを利用してハイキックを繰り出す。

ゴスッ！

綺麗にこめかみ（側頭部）に当たり、驚かすはずのツバサが逆に気絶した。

学園祭午前の部、これにて終了だ。

第９４話　来訪者（後書き）

なお、後半の【　それは知ってる　】と、【　……うん。予想通りだ　】はツバサの言葉で、ナレーションではありません。

第９５話　正反対の意志（前書き）

今回はある意味すさまじいものが出来てしまいました。後半、飲食しながら読むのはご遠慮ください。下手すれば吹きます。電車の中では浮きます。

第９５話　正反対の意志

６－Ａのお化け屋敷は午前と午後の班に分かれてきて、正午になったら入れ替える事になっていたのだが、ソラの襲来（？）により壁の一部や驚かした人間数名が気絶するなどの事態に陥った。

ジャックは壊れた部分をリアルウェーブ（実体無し）で一応の修復をし、コーヴァスやウォーロックなどの力自慢は気絶した人達を保健室まで運ぶ。

ツバサが気絶した後、スバルが震えながら（おそらく、自分の中の恐怖と闘ったのだろう）駆けつけ、ウォーロックと共にツバサ達を運ぼうとしたが、午前担当のミソラから強引に引っ張られてしまった。ミソラは秘かにスバルと祭りを回るのを楽しみにしていたのだ。

また、ソラはツバサをフルボッコにしてしまった責任を感じてか、彼のそばに居る。

結果としてスバルとミソラ。ツバサとソラが一緒にいる状態になったのだが、さて、どこまでがアイリスの予想通りだったのだろう？

――保健室――

「……スザク……」

『何？　ソラ？』

先程言った通り、ソラはツバサが寝ているベッドの隣のイスに座っている。加害者としての負い目と、何よりも自分の好きな人なのだからそばにいたいのは当然だろう。

しかし次の瞬間、そんな彼女からとてつもない一言が飛び出る。

「……ツバサの腹に拳を一発入れていいかな？」

その一言で、スザクは慌ててハンターから出てきてその真意を問う。

『ど、どうしてそんな結論に！？』

ソラの視線は真っ直ぐにツバサの顔に向けられている。まだ化粧がされている女顔の状態だ。

「……なんか悔しい。女装しても違和感無いし。丸っきり女に見えるし。町を歩けばナンパされそうなくらい綺麗だし。……やっぱり一発――」

ツバサの女装がはまりすぎていて女性として腹が立ったらしい。

『待って待って！　とりあえず落ち着こう！　ほら、握った手をゆっくり離して～』

本当に一撃食らわせようと立ち上がって拳を振り上げるソラをスザクは必死に止める。自分のグーを解いたソラを見て安心したスザクはため息をついてツバサを見る。

『はぁ～。……とはいったものの、起きたとしても化粧を落とす道具は持って来てないし……』

「私としては起きれば良いんだけどね……」

起きたら彼の口の悪さで女らしさを軽減できる。そうすればソラ自身、女顔のツバサを見てもどうこうならないだろう。

ソラのボヤキを聞いたスザクは、からかうようなニンマリした声でソラに話しかける。

『それじゃあさ、こないだＷＡＸＡでコイツに言った事実行したら？』

「えっ……」

スザクが言っているのは、先日アメロッパ大統領のアーノルド・ローグが来た時にツバサの耳元でソラが囁いた事だ。

ソラの中で時間が止まる。スザクの言った事をゆっくり反芻し、その直後、ソラの顔は真っ赤になる。

「ッ！」

『あっはっはっはっは！　ソラも十分ウブだよ。何でそんなキミがあんな大胆な事を言えたんだか！』

「だ、だってあの時はツバサをからかうつもりで本気じゃなくて……」

『あらあら？　ホントに本気じゃなかったのかしら？　ウォーロックとハープが言うには、スバル君とミソラちゃんはもうしたそうよ？』

念のために表記しておくとキスの事だ。バルズランドにて、スバルとミソラは唇同士のキスを交わしたのである。

必然、ソラがツバサに言ったのはキス関係という事になる。

「う～～～～～」

スザクの試すようでからかうような尋ね方にソラは口を尖らせて唸り、スザクはそれを見て可笑しそうに笑いながらツバサに視線を向ける。

『ふふっ。けどまぁ、いい加減ソラを待たせるのもイラッと来たし、そろそろ起きてもらいますか』

「？　どうやって？」

『こうやって』

スザクはツバサの腹の真上に移動すると、羽を大きく広げた。

「……あ～なるほど。これはきついわ」

『ねっ？』

スザクの羽からはベッドのそばに居るソラにも感じられるほどの熱気が放たれている。ベッドの中にいるツバサから見れば蒸し風呂だ。

ツバサの顔も寝苦しさで歪み、数回寝返りを打った後目覚めた。

「ぶっはぁ！　何だこの暑さは！　嫌な夢見ちまった！」

「ツバサッ！」

ソラはツバサが目覚めた事に喜び、対するツバサは周りを見る。

「ソラ、スザク。オレは……ッ！」

ツバサは自分の気絶した理由を思い出したのか、ソラを睨み、彼女の頬を摘まんで伸ばす。

「お前の蹴り効いたぞ～。よくもやって下さりやがったなこのやろう～」
「ひだだだだだ。ほめんほめん。ひみだってひずかなふて～」
「……はっ？」
『え～っとね……イダダダダダ。ゴメンゴメン。キミだって気付かなくて～。だって。……私としては、そろそろソラのほっぺを離して欲しいんだけど』
とりあえずわざとでないだけマシか……。ツバサがそう思いながら彼女に尋ねる。
「恐いんだったらさっさとギブアップすれば良かっただろう。いやそれ以前に、お前魔法の事を話したとき案外あっさり受け入れたからその手のヤツに強いと思ってたんだが？」
「あ～あたしね、目に見えない不思議体験は好きだけど、現実に生々しいのは苦手なんだ。だから、バイ●ハザードとか、イン●ペンデンスデイなんて全然ダメ」
「……なるほど」
確かに６－Ａの出し物であるお化け屋敷は生々しいモノが多い。そういう事なら……。ツバサは怒りを収めて、ソラの頬を赤ん坊にするみたいに伸ばしたり弾いたりしている。バルズランドで歳の小さい子にしている仕草がクセとなってそのまま出てしまった。
ソラは少しくすぐったそうにギブアップしなかった理由を話した。
「それからギブアップしなかった理由だけど」
「ああ」
「……ゴメン。入り口でもらったギブアップコール無くしちゃった」
「……はっ？」

ツバサは頬を弄ぶ手を止めた。スザクはすかさずソラを弁護する。

『言っとくけどワザとじゃないのよ。ミソラちゃんとアイリスが砕ける所を見て、うっかり落としちゃったの』

「本当ならその後の【　目の前に突然首を吊った人が現れる　】って所でギブアップしようと思ったら――」

「その時にギブアップコールが無い事に気付いた……と」

「……うん」

申し訳無さそうに頷くソラ。

ちなみに、ソラが言っているのはミソラ・アイリスの猫娘と、ジャック、血ノリ生徒の間だ。

首を吊った人は実体の無いリアルウェーブ。ツバサはこれに手を加えようとしたのだが、スバルとキザマロから「これだけで十分恐いよ！」とのツッコミを受けてやむなく妥協したネタだ。

そして、ツバサの後頭部にはマンガでよく見るようなムカマークが浮かぶ。及び、ソラの肩を掴んで引き寄せながら彼女の体の向きを変えて、後ろから『クレヨン●んちゃん』の『み●えさん』よろしくのグリグリ炸裂。

「だったら周りに助けを求めろ――――！！！」

ソラはツバサの手を外側に引っ張ろうとする事で、グリグリに抵抗。しかし、あくまで『引っ張ろうと』なので、彼のグリグリは絶賛炸裂中だ。悲しいかな、ソラの腕力ではツバサに勝てなかった。

「だってギブアップコール無くしたのでギブアップお願いします。なんて恥ずかしくて言えないでしょ――――！！」

「そんなプライドのためにオレは気絶したのか――――――！！！」
「恐いけど恥ずかしいのは嫌なんだも――――ん！！！」

２人の様子を見るスザクはため息をついて棒読み発言をした。

『はいはーい。新婚漫才はそこまでにしてくださーい』
「誰が新婚か！」

ツバサがスザクへ怒りの矛先を変えた事で、グリグリの方が疎かになる。ソラはその隙にグリグリから抜け出して彼から離れた。
ツバサはソラに逃げられた事でイライラした様子。このままでは今度はスザクＶＳツバサという状況になりかねない。無論ソラはそれを止めるつもりだが、下手に止めても怒りの矛先が変わるだけの繰り返し。しかし、彼女には奥の手があった。

「ツバサ、私とお祭り回らない？」
「ああ？　自分を蹴った奴と一緒になんて回りたくない」

思った通り機嫌が悪い。しかし、次の一言で決まる。

「４－Ｂの出し物クレープ屋だって～」
「……」

その言葉を聞いた時、ツバサの動きが止まる。体だけではない。表情まで見事に止まっている。

「……クレープ屋？」
「うん」
「……しょ、しょうがねぇな。そんなに言うなら付き合ってやるよ」
「うわぉ。ありがとう！」

ソラは驚きながら2人にお礼を言う。1人は承諾してくれたツバサに。もう1人はアイリスだ。彼が甘い物好きで、それをちらつかせれば大抵の事は了承してくれる事を教えてくれたのである。

なお、怒りの矛先を変える事が容易だと教えてくれたのもアイリスだ。

ここまで来てようやくツバサはアイリスが居ない事に気付いた。

「あれ？　そういやアイリスは？」

「あ～彼女なら引き続きお化け屋敷の方やってるって」

ソラの返答に、ツバサは意外そうな声を漏らす。

「へぇ～。あいつってそんなに人を驚かすの好きだっけ？」

『いいえ。何でも、皆で楽しく1つの事をするってのが楽しいみたい』

「……そっか」

アイリスが生み出されてから２００年以上。その間、彼女が自分と同じくらいの子供達と遊べた事がどれだけあっただろう。熱斗やその友人と出逢ってから別れるまで楽しかったと聞くが、その時間も極めて短い。1年にも満たないのだ。それ以後はずっと監視者として表舞台の人間、つまり、何の変哲もない普通の子供とも関われずにいた。

抜け出したツバサを連れ戻す際に誰かと関わったり、バルズランドの子供達と遊ぶ事はあっても、同年代で何か1つの事をするというのは彼女にとって新鮮なのだろう。

スザクの答えに俯くツバサはボソッと自嘲的に呟く。

「（……やっぱり、アイツを連れて行く事はできないな……）」

アイリスは今の居場所、当たり前に皆と遊んで、当たり前に笑い合える居場所が気に入っている。ならば、そこに居させてあげたい。アイツが何と言おうと、アイツを自分の『結末』に引き連れてはいけない。……ダークチップを手に入れたのも、そのためなのだから。

ツバサは、元々決めていた事の意志をさらに固めた。

「えっ？」

よく聞こえなかったのだろう。ソラは不思議そうにツバサの顔を覗き込んでくる。

ツバサは「なんでもねぇよ」と誤魔化すように笑い、立ち上がった。

「それじゃあ、行きますか」

「……またそうやって誤魔化す～」

ソラはああ見えて洞察力が良い。ツバサの分かりやすさを引いてもそれは変わらない。

不満気に唇を尖らせて睨む彼女に、ツバサは苦笑しながら片手を差し出す。

「たまには誤魔化されろ。ほら、何か欲しいもんあったら買ってやるから」

前日に生徒に配られたパンフでは、フリーマーケットもあったはずだ。

ソラは差し出された手をジッと見て、握り返した。

「言っとくけど、私は物じゃなくてキミの手に釣られたんだからね」

【　キミの　】を強調している。つまり彼女としては【　キミだから一緒に行く　】という考えらしい。

「はいはい」

「……」

「イデデデデデッ！！」

ソラがツバサの手首を回して間接を決めた。素っ気ない事への罰だ。

――スバルとミソラ――

「ね、ねぇミソラちゃん……」

「ふ？　らに？」

ただ今スバルとミソラは遅めの昼食中。気まずそうなスバルに、ミソラは口に物を含んだまま答えた。

「……お化け屋敷、大丈夫かな？　それにツバサ君も……」

彼としては人手不足な上に損傷箇所のあるお化け屋敷と、気絶し

たツバサを心配したのである。
ミソラは飲み物で流し込んだ後笑顔を見せた。
「大丈夫だよ。お化け屋敷の方はハープとアイリスちゃんが任せろって言ってたし。それに、ツバサ君もソラさんが居るよ」
「？　何でソラさん？」
「……スバル君はもう少し敏感にならないとね～」
「は、はい……」
スバルの鈍感な一言でミソラは赤い怒りのオーラを放ち、スバルはそれに当てられて頷くしかなかった。
同時に、スバルは先程ミソラが言った事を思い出す。
（……何でだろう。お化け屋敷の方がすっごく不安……）

――6－A・お化け屋敷――

午後に入り、お化け屋敷に居るのは後半の人とウォーロック、そしてハープとアイリスだ。なお、かわいそうな事にジャックも成り行きで付き合わされている。ソラが無くしたと言うギブアップコールを見つけたのも彼だ。修復箇所を探している時に偶然見つけたらしい。

ウォーロックは元々人を驚かせたかったので喜んで参加。しかし、その裏にハープの【　ミソラとスバルを2人っきりに　】という思惑があった事は言わない方が良いだろう。

アイリスは引き続き猫娘。ハープは場を盛り上げる恐い音楽の担当。居るのはアイリスのそばだ。ジャックも午前と配置は変わらない。

ハープはアイリスと一緒に隠れながらヒソヒソと話しかける。

『《ねぇ、ずいぶん楽しそうじゃない？》』

『《うん。皆と何かをするのは今まで無かったから、楽しい》』

ハープが知っているのは彼女が監視者になってからはほとんど表舞台の人間と関われなかったという事。それ以前、つまりアイリスがまだ表のナビだった時の頃はほとんど知らないのだ。

春先にツバサが隠れ住んでいた家に行った時に熱斗の事を想っていた事は察したが、それらの事で尋ねる気にはなれない。

それらがアイリスにとって聞かれたくない事である事はハープは同性としての勘で察しているのである。だから、彼女がアイリスに言える事はこれぐらいだ。

『《そう。……なら、バッチリ楽しみましょ！　ツバサ君とソラちゃん、スバル君とミソラに負けない位にネ！》』

『《うん！》』

ハープのウインクにアイリスは目を細めるニッコリ笑顔で頷く。

「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

ゴール付近でお客の悲鳴が聞こえる。
ウォーロックが黒い長髪（　付け髪　）と赤い口紅を付けて客を驚かしたのだろう。
なお、先程の悲鳴はアトラクションで上げるような楽しみが混じった悲鳴や、午前のような純粋な恐怖の悲鳴ではなく、恐ろしい化物を見るような悲鳴だ。

ジャックが女装を嫌がったためにウォーロックが貞子をやる事になったのだが、彼はなにぶん女言葉が慣れていない（　いや、慣れられても困るが　）。そのため、無理やり着せた白い着物に赤い口紅。さらにはクネクネした動きに『うっふん』という言動も加えて、正真正銘『ロックちゃん』が誕生した。

それがどんなものかは、午後の本番前にテストしたジャックがあまりの気色悪さに朝飯を吐きかけた事で実証された。

ならアイリスがやれば良いのでは？　と言うかもしれないが、クラスの女子はアイリスの猫娘姿を全肯定。アイリス自身は貞子でも構わないと言ったのだが、ウォーロックの『驚かせられればどうでも良い』という言葉と女子の熱意に押されて、こういった事になったのだ。

ハープはお客の悲鳴を聞きながら呆れたように呟いた。

『《……あのバカは変な意味で楽しんでいるみたいだけどね》』
『《あ、あはは……》』

アイリスはウォーロックに申し訳なく思いながらも苦笑した。しかし、すぐに視線を下に下ろす。

《……ツバサの事だから、私が楽しんでいる事を知ったらもっと1人で抱え込み、やり遂げようとするでしょうね。……あなたは私と兄さんを、1人としてではなく2人として扱い、助けてくれた。……だから、絶対にあなたを消させない。……そして、ソラさんと幸せになって欲しい》

入り口から光が漏れる。次のお客さんが来たようだ。

アイリスは思考を止めて驚かす事に集中した。ハープはそんなアイリスに、姉のような優しい笑みを送る。

ハープがこの時のアイリスの考えを知るのは、まだまだ先の事……。

ツバサとアイリス。『正反対な意志』が相見(あいまみ)えるのも、まだ少し先の事……。

第９５話　正反対の意志（後書き）

今回の複線はツバサの見た悪い夢ですかね。スルッと自然に入れましたが、アレには面白い意味があります。

なお、アイリスが言っていた２人は無論カーネルとアイリスを指し、その２人を助ける時の事です。カーネルをエンシェントサーバーに入れる時ですね。

第９６話　通りすがり

スバル、ミソラ組。ツバサ、ソラ組はそれぞれの時間を過ごしていた。

――――ツバサとソラ――――

「……頼みすぎじゃない？」

ソラの目の前には、４－Ｂの考案したクレープが全品勢揃いしていた。それを頼んだのはもちろん……。

「何言ってんだ。疲れた時は甘いもんが一番だろ。……だいたい、これオレの自腹だし」

「……そうだけどね……」

疲れた時は甘い物。そして、ツバサは自分のだけではなくてソラの分も自腹で払った。

それらは確かにその通りで、ソラは反論したくても言えない立場になった。なお、４－Ｂの面々は「ホントにあんな量食えんのか？」的な顔でツバサを見ている。

自然とソラにも視線が集まる事となり、ソラは陰鬱なため息をついた。

「はぁ～。……トホホ。まさか小学校でここまで目立つ羽目になるとは……」

そう言えばスバルとミソラはどうしているのだろう。
ソラはそんな事を思いながら窓の外、青空を見る。向かいで暴飲暴食をしている人は見て見ぬ振りしておく。ポケットに手を突っ込んでいるのは、その中にあるモノを意識しているからだ。
（……これ、いつ渡そう……）

――スバルとミソラ――

スバルとミソラはツバサが気絶している時も回っていたので、ワタ飴や焼きソバなどの定番からアクセサリーや射的など、２人で色々な店を巡れた。
そして今２人は、休憩の意味を兼ねて屋上にいる。祭りという事で一応イスなども用意されているのだが、ほとんどのお客さんが屋内かグラウンドの売店に集中しているので、屋上にはスバルとミソラの２人しかいない。

コダマ小学校の屋上は人工芝があり、用務員のおじさんが定期的に清掃してくれるので清潔に保たれている。今日は学園祭なので代わりにウィザードが作業している。

スバルとミソラはそんな芝生に腰を下ろしている。硬いイスよりこちらの方が感覚的に良いのだ。

「ん～～～。……はぁ！」

歩いたり遊んだ疲れからだろう。ミソラは腕を上に上げて、息を声と共に吐き出した。そして、隣に座るスバルのほうを向いた。

「楽しかったね～。色んなとこ回れて」

「うん。……でもホント疲れた～。ミソラちゃん本当にパワフルなんだもん」

スバルもスバルで、彼女と思いっきり遊んだ他に射的などのゲームで大量の戦利品をぶら下げているのだ。少し考えれば当然なのだが、スバルはロックマンという事で戦い慣れしている。そんな彼に銃（もちろんおもちゃ）を持たせれば、一発目を外しても、それで銃のクセを見抜いて二発目は必中に決まっている。

まぁ、彼としては複雑だっただろう。当たればミソラが喜ぶが店からは「何でそんなに当てられんだよ」という視線に当てられる。スバルは人から注目されるのが苦手なのだ。

故に、板挟み。

疲れた様子のスバルに対し、ミソラは気まずそうに謝る。

「あ～……ゴメンね。振り回しちゃって。……でも、百発百中のスバル君、カッコ良かったよ！」

「えっ、そ、そうかな……？」

照れるスバルに、何の裏も無くミソラは笑顔を送る。そもそも彼女は、『ウラ』といったものを持っているのか怪しいくらいに素直で優しいのだ。裏方で働くスタッフ達にも慕われる理由はそこにあるのだろう。

「うん！」

その笑顔で顔を赤らめながらも、スバルはお礼を言った。

「あ、ありが……とう」

照れを隠して何とかお礼を言えたスバルに対し、ミソラは無邪気な笑みを浮かべてスバルの頬を人差し指で突いてきた。

「あ～スバル君照れてる～。か～わいい！」

「ちょ！　ミソラちゃん！　恥ずかしいよ！」

「うりうり～♪」

赤くなりながら抵抗するスバル。照れを隠してスバルをからかうミソラ。今はウォーロックもハープもいない。

２人は、久々に２人だけの時間を過ごしていた。定期清掃として屋上の端末から実体化したウィザードも、２人の邪魔にならないように今回の掃除は後回しにした。

――――フリーマーケット――――

スバルとミソラがラブラブ真っ只中な時、ソラとツバサはフリーマーケットに来ていた。及び、ソラの視線が１つの商品に釘付けになる。

「……ツバサ……」
「ん？　何か目ぼしい物でも見つけたか？　……テディベア？」
ツバサとソラの視線の先には、ストラップサイズのテディベアがあった。色は赤。
ソラは視線を商品に向けたまま頷いた。
「うん。……良いかな？」
「まぁ……別に良いけど。何でまた？」
何故わざわざ小さいテディベアを選んだのかと言うツバサの問いに、ソラは目をキラキラさせて答えた。
「だって可愛くない？　小さくて、赤くて、フワフワで♪」
「……つまり、全部お前の好みに合ってると」
「うん！」
ソラはぬいぐるみ好きで、好きな色は赤。旅行中、スザクがツバサに教えた事だ。
明るく頷いたソラに対し、ツバサは自分の懐を確認する。
「……大丈夫そうだな。それじゃあ買ってくるから、それよこ――」
ツバサは手を出してテディベアを差し出すように言いかけたが、不意に上を見上げる。そこには天井しかない様に見えるが、彼の目は確かに何かを見据えている。
ソラはそんなツバサに首を傾げ、不思議そうに尋ねた。
「……ツバサ？」

「ん、ああ悪い。それじゃあ買ってくる」

彼は何でも無いというのを装い、ソラからテディベアを受け取ってレジに並ぶ。

（……気のせい……かな？）

――少し時間を遡ってスバルとミソラは――

スバルとミソラが気付いたのは何時だろう。そんな自分達に話しかけたくても話しかけられない電波体が居た事に気付いたのは。

「ミソラちゃん、いい加減頬を突くのは……」

「どうしたのスバル君……」

スバルがミソラの突っつきから逃げるために顔の向きを変えた時、彼の動きが止まって視線を留める。ミソラが不思議に思い彼の向いている方向へ視線を向けると、そこには電波体が浮いていた。

金色の装甲。騎士が持つような三叉の槍。槍の刃は一端だけでなく、両端に付いている。あれなら前後の敵に対応できるだろう。そして、薄い茶色の電波を放っている。

おそらく地球で生まれた者ではないだろう。地球で生まれた電波体は装甲となる部分が多い。対してウォーロックなどの天然の電波生命体は装甲とは他にそれぞれ違った電波を放っているのだ。

スバル達としては恥ずかしい所を見られたため気まずく、電波体の方も気付かれた事でそれなりに気まずいらしく、両者ともだんまりになってしまった。

このまま黙っていてもどうにもならないと考えたのだろう。目の前の電波体は軽く頭を下げた。

『済まない。道を尋ねようと思ったのだが取り込み中だったようでな。かといって周りには誰も居ないから終わるのを待っていたんだが……とにかく、すまなかった』

話し方は騎士のような見た目そのままに礼儀正しく、しっかりしたものだった。

スバルとミソラはトンでもないとばかりに首を振る。

「いえ、僕達こそ……その……」

「イチャイチャしててすみません」

「ミ、ミソラちゃん！　イチャイチャって……」

言うのも照れくさくなりそうな言葉を平然と言ってのけたミソラに対し、スバルは慌てて突っ込む。しかし、その光景を例の電波体に笑われてしまい、妙に居たたまれなくなって話を戻した。

「あっ……えっと、道を尋ねているって聞きましたが」

『ん？　ああ、そうだったな。……ＴＫタワーとはどう行けば良いのだろう？　道順ではなく方角だけでもいいのだが』

「それなら……」

スバルは方角を教えた。さすがにコダマタウンからＴＫシティまでウェーブロードで行く道順は知らない。だが、一応方角なら分か

る。　聞き終わった電波体は1回頷くとお礼を言ってきた。

『わざわざ済まない。……では、私はこれで』

「はい。……まず無いとは思いますが、道中気をつけてくださいね。ウイルスとか、最近では――」

『ファイブエレメントだな？　少年。分かっている。最近の若い者に負けるほど、私は落ちぶれておらんわ』

言葉からしてそれなりの歳を行っているらしい。スバルの続きを代わりに言った電波体は力強く片腕を上げてガッツポーズをとり、去り際に言葉を残していった。

『ああそうそう。お前達とは近々また遭うかもしれん。その時は何かお礼をさせてもらおう』

「あ、いえ。そういうわけには」

「そうですよ。人助けは人間だったら当然です。ねっ？　スバル君？」

「うん」

スバルの言葉にミソラは同意して、スバルは頷いた。しかし、電波体は首を振った。

『いや、私は借りは返さなければ気が済まない性質でな。いずれ返させてもらう。反論は受け付けんぞ！』

反論を受け付けない以前に反論させる暇も無く、電波体は飛び去ってしまった。

当初はスバルもミソラも「忙しい人だな……」といった感じでポカンとしていたのだが、先に我に帰ったミソラは周りの様子を見る。ちょうど誰も居ない。無人の屋上だ。

1回深呼吸をして、スバルの肩を叩く。

「ねぇねぇスバル君」

「えっ？　なに？　ミソラちゃ――！？」

スバルの唇はミソラの唇で塞がれた。ミソラは真っ赤になりながら唇を離す。

一方スバルは彼女が覚えていないとはいえ、すでにミソラとキスをしている。なので、ミソラに比べて少しは冷静だ。無論、顔はミソラ同様真っ赤なままだ。

「ど、どうしたのミソラちゃん？　いきなり」

問われたミソラは少し悔しそうな色を自らの瞳に入れた。

「だって……最近ソラさんとツバサ君の距離がスゴイ速さで短くなってるのに、私達の方が知り合って長いのに……少し、悔しくなったんだもん」

嫉妬というものだろう。自分とスバルが出逢って今に至る時間より、ツバサとソラの方が数段早く進んでいる。まだツバサとソラはキスをしていないと言うが、それを引いても彼らの仲良くなるスピードはミソラとスバルのそれを上回っている。

実際には違っていたとしても、そう見えた者にとってはそうなのだ。

ミソラにはそう見えたらしい。つまり、ツバサとソラの仲良くなるスピードに対しての嫉妬であり、自分と同じ様に好きな人がいるソラに対しての、女性としての少しの対抗心があったということだ。

スバルは詳しく分かるほど経験豊かではないが、それでも彼女が何を言いたいかは分かった。

「えっと……その……別に、焦らなくても良いんじゃないかな？」

「……グスッ……どうして？」

自分の思いを一気に吐き出した反動だろう。ミソラはその目に涙を宿す。スバルはポケットからハンカチを渡しながら続ける。

補足を加えれば、女性の泣き顔をそうそう見ないスバルは、ミソラのそれを見て顔を真っ赤にしたまま続けた形だ。

「ツバサ君とソラさんには2人のペースが。僕達には僕達のペースがあるんじゃないかな？　だから、僕達はゆっくり……その……歩いていけば良いんじゃないかな……？」

最後の言葉は必死に探した答えのようだった。彼もまた、頑張ったのだ。

ミソラはハンカチで涙を拭き、残った少量の涙は自身の袖で拭った。そして、笑みを零す。

「ふふっ。スバル君って時々カッコいい事言うよね」

「えっ？　そ、そう……かな？」

照れに戸惑いを混ぜるスバルに対してミソラは正直に頷く。自分の心を偽る事無く、真っ直ぐに。

「うん。……それに、初めてスバル君とブラザーバンドを結んだ時の事思い出しちゃった。あの時私、1人で頑張らなきゃって強がって、泣いちゃって、その時スバル君が言ってくれたんだよね。……僕とブラザーになってくださいって」

「う、うん。……でも、今聞いても恥ずかしいよ。……よく僕言えたな……」

「ふふっ。今スバル君が恥ずかしいって事は、あの時のスバル君は本当に頑張ったって事だよ。……そんなキミが頑張って自分の一歩を踏み出したから、私も踏み出せたんだよ。……ありがとう。スバル君」

ミソラのお礼は2つに対してだ。1つは当時勇気を振り絞ってくれたスバルに対して。もう1つは今さっき、スバルが言ってくれた『僕達のペースで進めば良い』という言葉だった。

ミソラはスバルに心からのお礼を言った後、彼に抱きついた。ゆっくり腕を彼の背中に回して、委ねる様に。

スバルはいきなりの事で固まってしまったが、少しして笑みを零す。そして、彼女をしっかりと抱き締め返した。

「……これからもよろしくね。ミソラちゃん」

「うん。……スバル君」

そして、スバルとミソラは上体を離してから静かに唇を交わした。

スバルにとって今回は2度目だが、彼の中ではこれが1回目となった。前回は彼女の意思に酒の力が加わったものだったが、今回は正真正銘彼女の意思によるものだからだ。

彼にとって、今の方が、前回よりはるかに嬉しい。

その頃先程の電波体は、ウェーブロードを駆けながら呟いた。

『……アレがロックマン。……なるほど。あの方やケフェウス様が目をかけるはずだ。……さて、早く行かないとセイリュウからいらん怒りを買ってしまう。……急ぐとするか』

電波体はＴＫタワーへの途中にある廃ビルに向けて速度を速めた。廃ビルの場所を聞けば十中八九怪しまれるので、スバルにはその先のＴＫタワーへの道を尋ねたのだ。セイリュウに呼び出されたのである。

第９６話　通りすがり（後書き）

今回出て来た電波体、実は名前だけならもう登場しています。念のための補足として、ツバサが上を向いたのは電波体の気配を察してです。【（……気のせい……かな？）】もツバサです。

次回はいよいよ学園祭の結果発表です。まぁ、他にも色々書く予定ですけどね。

第97話　お守り（前書き）

お待たせしました。今回は（というか、『今回も』）長くなったので2話に分けました。

第97話　お守り

笑って泣いて恐がって、年に一度の学園祭は幕を閉じようとしていた。それぞれの思い出ができた事だろう。

スバルとミソラは互いの距離が縮まり、ジャックは成り行きで午前と午後両方を受け持つ事になったがそれはそれで楽しかったようだ。ツバサは今もこれからも話していないが、彼は中々大変だったらしい。

近所の人などの招かれた客は帰り、後は結果発表を聞いてから後片付けとなる。そして現在、結果発表の時間だ。体育館には全校生徒と教師が集まる。……が。

「あれっ？　ツバサ君は？」

「そういやいねぇな。どこ行ったんだアイツ」

スバルの言葉にジャックが周りを見る。確かにツバサの姿が見当たらない。

『ッ。スバルさん、ツバサからメール』

「あ、うん」

スバルのハンターの中のアイリスがスバルにメールの受信を知らせる。

残りのスケジュールは閉会式だけなのだが、彼女の『最後まで皆と一緒に楽しみたい』という要望で、アイリスは現在スバルのハンターにいるのだ。

「え～っと、【かったるいからサボる。オレの分のケーキ勝手に食

べるなよ】……誰も食べないよ。っていうか、まだ優勝と決まったわけじゃないし」

スバルがツバサのメールにツッコミを入れ、ウォーロックは腕を上に組んで仰け反るようにハンターの中でくつろぐ。

『けど、アレだけ好評だったんだから優勝してんじゃねぇの？　胸を張れよ、スバル。……しっかし、ツバサってホント甘い物になると性格変わるよな』

『アレは昔から。どうやったって直らないから私は諦めてる……』

「『……アイリスも大変だね　／　大変だな」』

スバルとウォーロックは息ぴったりでアイリスに同情の眼差しを送った。スバルはチロルの帰りに暴れるツバサを押さえていたので彼のお菓子に対する暴挙振りは体験している。

――屋上――

日が沈みかけ、町が赤く染まる頃、ツバサとソラは屋上のフェンスに寄り掛かっていた。ソラが半ば強引にツバサを引っ張っていったのだ。スザクは散歩を口実にツバサとソラを2人きりにさせた。

ハンターを操作していたツバサはそれを止めてソラに顔を向ける。

「……良し。スバルに適当な口実でメール送った。……用って何だ？」
「ん」
ソラの生返事に対し、ツバサは不快感を抱く事無く続ける。
「あんだろ？　オレを引っ張ってった理由」
「……うん。……えっとさ……その……ほ、保健室で見た夢って何!?」
失敗した。
ソラは素直に後悔した。言いたい事が言えずに違う事を尋ねてしまったのだ。
急に声の大きさを上げたソラにツバサは驚きながらも答える。
「あ、ああ。スザクの火炎を浴びる夢。ソラは止めようとしてくれたんだが、あのヤロウ聞く耳持たなくてな……」
保健室で彼が気絶していた時に見た夢は、現実で起きていた事とほとんど似たようなものだ。あの時スザクは熱気をツバサに当てていたのだから。
憮然とため息をつくツバサに対し、ソラはその夢に興味を示した。深い意味は無く、本当に興味本位だ。
「へぇ～。それは大変だったね。周りには誰か居た？」
「いや？　オレら3人だけ。……あ～でも、人形みたいなのがソラの肩に乗ってたような……」
「どんな!?」
いきなり目を輝かせたソラのテンションに押されて思わず仰け反

ってしまった。彼女は小動物や可愛いぬいぐるみに目が無い。

「良く覚えてねぇけど、確か……鳥みたいな奴だったかな？　あ、肩乗りサイズだったからスザクじゃねぇぞ。それから、周りには桜が咲いててな。それは文句無しで綺麗だった」

「桜か……スザクの炎を除けば良い夢だね。……案外正夢だったりして」

ソラの冗談半分の言葉を、ツバサは可笑しそうに笑う。

ソラにとって少し不快に思ったらしく、ツバサを睨む。ツバサは彼女の視線に気付き、謝罪と笑った理由を話した。

「悪い悪い。けど、正夢ってのはねぇよ。夢の中では、お前の身長を越えてたからな」

「あ～～～納得」

ツバサの身長はソラより少し低い。ツバサの身長は実験の時から変わらないので大きくなるなどあり得ない。それがなっていたという事は、夢決定だ。

ソラもそれが分かっていたらしく、納得したのだ。

「で？」

「へっ？」

「オレを呼んだ理由は？　……まさか人の悪夢を聞くためってのはねぇよな？」

そういった理由ではモチロン無い。しかし、いざ渡すとなると、どう切り出したら良いか分からないのだ。

そんな彼女を見かねてか、ツバサが助け舟を出した。

「……そのポケットの中か？」
「ッ！！　な、何で分かるの！？」
ソラが驚いた様子で渡したい物が入ったポケットを上から触る。
それを見たツバサは肩を揺らして笑った。
「ははっ。オレと居る時しょっちゅうそのポケットを気にしてたからな。何かあるとは踏んでたさ」
なぁんだ。
ソラの緊張は解かれた。切り出し方が分からなかったソラにとって、ツバサが切り出してくれたおかげで続きを言える。
「実はこれ、お守りなんだけど……」
ソラが出したのは藍色の生地に白い紙が貼り付けてあるお守りだ。
ツバサは珍しく目を丸くするほど驚いた。戦闘時でも、こんな顔はそうそう見られない。
「オレに？　……気持ちは嬉しいけど、オレには勿体無い気がするな……」
「それでもっ！」
ソラはお守りをグイッとツバサに突きつける。
「……持ってて。……私達これから新学期だから、いつも一緒に居られる訳じゃない。だからせめて、このお守りにキミを守ってくれるように願ったんだ。……だから――」

ソラの語尾が弱まってきた。ツバサは肩を上下するように息をし、手を上向きに差し出す。

「分かったよ。そのお守り、ありがたく頂く」

ソラは安心したように微笑み、ツバサにお守りを渡した。

「うん。……ツバサ、受け取ってくれてありがとう」

「お礼を言うのは本来オレの方では？」

「それでも、嬉しかったから」

本当に嬉しいらしく、ソラはツバサの意地悪なツッコミにも笑顔で返した。ツバサもフッと笑みを零し、お守りをしみじみと見る。

「……しっかし、よくこれだけ祈ったもんだ」

「えっ？　そういうのも分かるの？」

ツバサはお守りに視線を向けたまま答えた。

「あぁ。お前、オレが魔力を持ってるって忘れたのか？　このお守りから強い力を感じる。……よっぽど真剣に願わないとこうはならないな」

誰かの幸せを願うことも、誰かの不幸を願う事も、どっちも人間の【　思い　】。強い思いはそれだけ影響が強く、顕著に現れるからツバサは分かるのだという。

ソラは自分の想いが直接読まれた気がして照れ笑いを浮かべた。

「う～ん……こうもあっさり見抜かれると隠してたこっちがバカみ

たい」
「そう恥じるもんでもねぇよ。さっきも言ったが、これの悪いモノを寄せ付けない力はかなり強い。価値の分かる奴が見れば、数十万＋土下座で譲ってくれるように頼み込んでくるだろうな」
「そんなに！？」

ソラは髪を逆立てるほど驚いた（　彼女はツインテールなので、例えるならウサギだろう　）。
強く願ったといってもそれは市販の物だ。まさかそんな価値があるとは思っていなかったのである。
ツバサは依然感心した様子で頷いた。

「ああ。さっきも言ったけど、本当にオレなんかには勿体無い代物だ」
「……だからって、捨てたりしたら許さないよ」

ソラがジト目で睨むのに対し、ツバサは安心させるような笑顔を見せる。

「捨てないよ。お前がここまで願った物だ。粗末には扱わない。……前に言わなかったか？　オレは、相手の意志には自分の意志で答えるって。違っていたら向き合う。同じだったら力を貸す」

後半は今聞いたが前半の【　相手と意志が違っていたら真っ向から向かい合う　】というのは聞いた。
ツバサは、「ふむ」とお護りを持っている手とは逆の手を思慮深げに顎にあて、自分の意見を少し訂正した。

「……でも、この感じからしてオレ以外の奴が持ったら力が半減するから値打ちもガタッと落ちるみたいだな」

「？」

ソラは頭にハテナを浮かべて首を傾げた。ツバサが持つ事でお守りの真価が発揮するのは嬉しいが、その理由が分からないのだろう。

ツバサはソラに分かる言葉を一つ一つ探すように話した。

「あ～っとだな、お前はオレを守るようにって願った。そうだな？」

「……うん」

「だけどそれを逆に言えば、【オレに】ということは他に対しては効果が半減するって事を意味する。対象がオレだけだからな。呪いだって、呪いたい相手にしか効果は無いだろ？　それと同じ」

呪いという単語を聞いて、ソラは顔をしかめた。

「……呪いと一緒にされるのは嫌だけど……分かりやすくはあったよ」

ツバサは彼女の気持ちが落ち込んだ事に対して申し訳無さそうに苦笑いを浮かべた。

まぁ実際、呪いも祈りも『願う』という点では同じなのだから現実的に言えばそうなる。単に、聞き手の印象というものだ。

「はは……。まぁ、分かりやすかったかもしれないが確かに不謹慎だったな。ゴメン」

「別に良いよ。こんなんでどうこう言ってたら旅館でなんて暮らせないから」

彼女の発言で、逆にツバサがハテナを浮かべた。

「？　旅館ってそんなに大変なのか？」

「そりゃあ布団を一斉に干す時なんて重労働だし、それにお客さんが帰った後部屋の掃除を片付けている時は――」

口は災いの元とは言うが、ツバサの質問でソラの日頃の溜まりに溜まったグチが大爆発。ツバサはこれから彼女のグチを聞き続ける羽目になる。

第９８話　幼くも長寿なモノ（前書き）

何だかんだで祝１００話！　学園祭編、この話で完結です。サブタイの意味は内容を見れば分かります。

第９８話　幼くも長寿なモノ

――廃ビル――

『……遅かったな』

セイリュウは自分の後ろの電波体に話しかける。その電波体は先程スバルとミソラに道を尋ねた電波体で、悪びれもせずセイリュウに言葉を返した。

『スマン、スマン。この辺に来たのは初めてでな。……で、用とは？』

『……貴様は私の、いや、四神の何を知っている……？』

『……何……とは？　具体的に言ってもらわねば答えようが無い』

電波体は腕を組み、セイリュウは電波体を睨みつけながら詳細を話した。

『最近妙な記憶にさいなまれる。我々四神は生まれた頃より殺伐と生きたはずなのに、その記憶には笑いがあふれる記憶があった。……考えたくは無いが、エーテル様が我々の記憶に手を加えたように思えるのだ』

『……それで？』

『貴様はＦＭ星から来た同士の中で一番エーテル様に近い。……お前なら知っているのではないか？　オリオン……』

電波体、オリオンは腕を組んで唸ってみせる。

『うむ……その前に1つ聞いておくが、知ってどうする』
『それは……ッ！　ちょっと待て、その前にという事は、何か知っているのだな!?』

どうするかを話そうとした時、セイリュウはオリオンの言葉の繋ぎ方に注目した。あの状況で知ってどうするかを聞くのは、相手《セイリュウ》の返答で自分《オリオン》の答えを変える事を意味する。セイリュウから聞いた後は彼の話に合わせておけばいいのだ。

オリオンは肩を竦めてとぼける。

『さて、何のことやら?』

しかし、さっきの今ということでそんな事はセイリュウにあっさり見破られてしまった。

『ッ!!　貴様の知っている事、全て話してもらうぞ!!』

セイリュウは空気中の水分を集めて水の槍を形成。オリオンに構えて突っ込む。
オリオンは『やれやれ……』とため息をつくと背中の槍を手に取る。

ギィン!

2本の槍が交差する。セイリュウは交差している方とは反対側を軟化。水中を泳ぐ蛇のように空中をうねり、その先端は硬質化して鋭利なトゲになる。そのままオリオンの後ろから突きにかかった。

『ッ！　フンッ！』

オリオンは三叉の槍でセイリュウの槍を絡めとり、力任せに自分の後ろに迫る蛇の軌道上に持ってきた。

『チッ！』

セイリュウは舌打ちと共に蛇の頭を軟化。一旦オリオンと距離を取りながら槍を元の長さに戻した。

それに対しオリオンは余裕の態度で槍の穂で自身の肩を叩く。

『さすがにやるな。……だが――』

オリオンは中腰になり槍を真っ直ぐセイリュウに構える。

『経験が足りんな。……グングニル・クライシス……』

『ッ！！　クッ！　ッ！？　体が！？』

オリオンが槍を構えたまま突っ込んでくる。セイリュウは即座にかわそうとするが、体が動かない。

ゴウッ！

一陣の風がセイリュウを突き抜ける。少なくともセイリュウにはそう感じた。オリオンの突きが早すぎるのだ。

『……貴公はまだまだ実際の世界において幼い。だから【　本当　】

の気迫に押される。……まぁ、長き間集合体の1つとして生きてきたから仕方が無いかもしれんがな』

オリオンはセイリュウの後ろに立っている。気迫だけでセイリュウの動きを封じ、みね打ちを決めたのだ。その気になれば当然デリートするくらい簡単だろう。

オリオンが槍を1回振るって背中に収めた瞬間、セイリュウはうつ伏せに倒れた。そして、セイリュウの傍らにしゃがんで自身の周波数を彼と同化。セイリュウの頭の中に手を入れる。

セイリュウは激痛で目を覚まし、腕を振り回して抵抗するが、オリオンは馬乗りになってそれを押さえつける。

悲鳴が響く中、オリオンは憐れむ様な目をセイリュウに送る。

『……済まないな。私はあの方のように綺麗に記憶を消せはしない。苦痛を伴うが、貴様ら四神は知ってはいけないのだ。貴様らは、貴様らの役を演じていれば良い。……これは……幸せの記憶か……真相が分からなければ残していても問題は無いだろう』

先程の会話や戦闘の記憶を抜き出したオリオンは、激しい動悸に襲われているセイリュウに話しかけた。

戦闘の理由となった記憶は適当にでっち上げれば良い。

『……1つだけ教えておいてやろう。エーテル殿の言う貴公らに付けられた自爆装置はウソだ』

『ッ！！　……そ、それでは、エ、エーテル様は……』

セイリュウは掠れゆく意識の中で必死にオリオンの話を聞こうとする。

オリオンはセイリュウの心中を察して頷いた。

『貴公らの事を道具とは思っていない。……それだけは断言してやる』

『た、確か……だな？』

『もちろんだ』

『……そうか……』

力強く頷いて見せたオリオンに、セイリュウは安心したように眠りに着いた。

『……フッ。４０億年以上も生きているのに、こうして見るとずいぶん子供だな。……どれ、こんな所で寝ていては騒ぎを聞きつけたサテラポリスに捕まってしまう。逃げるとするか』

オリオンはそう言うとセイリュウを背負い、ビルから離れる。ただ一言。

『……我々の役目は、未来への礎になる事だからな……。こんな所で捕まるわけにはいかん』

そう呟いたオリオンは金色の閃光となりウェーブロードを駆ける。ファイブ・エレメントという組織の中で全てを知るのはエーテルとオリオンだけなのだ。

――――学校――――

ソラの愚痴を聞くこと３０分。ツバサはそろそろ限界だ。他人の愚痴を長時間聞くのは精神的に応える。

「……ソラ、そろそろオレ教室帰って良い？」

「ん？　……あれ？　いつの間に夕日があんなに傾いてるの？」

「……」

ツバサは「てめぇが喋りすぎなんだよ！」という思いを視線に乗せる。どうやら話すのに夢中で周りの変化に気付かなかったらしい。

ソラはツバサの視線の意味を察したらしく、両手を合わせて謝ってきた。

「ゴメンッ！　グチ言える人が今までスザクしか居なかったからつい……」

先程までのグチの中にあったのだが、何でも彼女は学校では弱音を吐く事はないらしい。周りを暗い気分にさせないためにという彼女なりの配慮なのだろうが、自分でも頑張りすぎかな？　と認識していた位だ。

昔彼女は周りから見捨てられないために頑張ってきた。いわば、その名残のようなものだろう。

《……ソラには悪いけど、いっつも聞かされる私の身にもなってよ……》

さすがスザクと言うべきか、彼女は秘かに物陰に隠れて２人の様子を見ていたのだ。

女将からは「スザクは過保護すぎるからもう少しあの子達を信じて見守る形でも良いんじゃない？」等とは言われたが、彼女としては『ええ過保護ですけど、それが何か！？』と、開き直るほどに自身の過保護さを自覚している。
心配なものはしょうがないだろう。

両手を合わせるソラにツバサはため息を付くと校舎へ続くエレベーターの方へ歩き出した。

「そんじゃ、いつまでもスバル達を待たせると委員長が恐いからオレ行くわ」
「あ、ツバサ！」
「？」

呼び止めるソラにツバサは立ち止まって彼女の方を向く。ソラは正拳突きのように自身の拳をツバサに突き出した。

男勝り。
ポジティブ思考。
炎や太陽を思わせる少女。

「私の居ない所でムチャやって、それで大変な事になったら許さないからね！」

これ以上ないほどにソラらしい。

「……フッ。オレは大変な事になってもなお、お前にしばかれるのか？」

言うまでも無いが、ツバサのからかい皮肉だ。

軽薄
不遜。
飄々。

それもまた、彼らしいのだろう。

ソラはそんな彼に快活な笑みを送る。彼のそういった面もまた、彼女からしてみれば嫌いではない。

「反省の色が無ければね♪」
「それじゃあ、精々気をつけるよ。んじゃ、またな」
「うん、またね。……あ、女装、早く直した方が良いよ？」

忘れている方も多いと思うが、ソラは化粧を落とす道具を持ってきていない。よって、今の今までツバサは付け髪に薄い化粧をしている女の子と化していたのだ。

ツバサは慌てたようにせめてものという事で付け髪を取った。及び、顔を羞恥の赤に染める。

「それを早く言え！」

ヤケクソ気味に怒るツバサをソラはケラケラと笑い、手を振った。

「今度こそ、またね！」
「～～～～～～ッ！　はぁ……。ん……」

ツバサは葛藤の末ため息を付いてソラに背中を向ける。そして片腕を上げ、ヒラヒラと振った。怒る気力が無くなったらしい。

ツバサがエレベーターに入って下に降りるのを見てから、ソラはスザクの隠れている物陰に顔と声を向けた。

「……居るんでしょ？　スザク」

ソラにとってスザクは大事な親友。彼女が物陰に隠れている事もお見通しだ。

スザクは物陰からそ～っと覗いて来て、気まずそうに出てきた。

『あはは……やっぱバレてた？』

「大事な親友だから」

気まずそうに苦笑して見せたスザクに、ソラは自信を持って親友だと言った。出逢ってから数ヶ月だけしか経っていなかろうと、スザクはソラにとって大事な存在なのだ。

その後2人は電波変換して帰路に着く。

『渡せて良かったね、ソラ』

「うん」

スザクの言葉にソラは素直に頷く。彼女にとってもまた、今日は良き日だったらしい。

――6－A――

一方ツバサは教室に意気揚々と帰ってきた。
ソラと学園祭を周っていたが、その中でも自分達の『お化け屋敷』ほど反響の大きかった出し物は無い。当然1位のチロルのショートケーキかと思って教室のドアを開けてみたら……。
大量のうまい棒があった。つまり、3位だ。

最初は教室を間違えたかと思ったが、スバルやミソラ、ルナやキザマロにゴンタも居る。6－Aで間違いは無いだろう。
ツバサの存在に気付いたらしく、スバルが近づいてきた。

「どこ行ってたの？　てっきりサボって教室に居ると思ったら居ないし――」
「なぁスバル……なんで3位なんだ？」

スバルはまだ何か聞きたそうだったが、呆然としたツバサを見るに見かねてかその理由を話してくれた。

「それが、お客さんの動員数は僕達のお化け屋敷がダントツだったんだけど、内容が小学生のやっているのから逸脱し過ぎているからだって。ホラ、恐いって理由でかなりの人が泣いてギブアップしちゃったでしょ？　だから、楽しいはずの学園祭で恐がってなく人が出るなんて～。ってことで減点」

「……つまり、オレ達の圧倒的な動員数を誇ったお化け屋敷が、その減点の結果3位となった……のか……」

最近のお化け屋敷の準備。当日はナイフで突かれて蹴りを食らって熱気を浴びて長いグチを聞かされて……。

ツバサにとって、今日はあまり良い日では無かったかもしれない。……しかし、未来を変える一石を得たのだから、対価としては正当なのだろう。……この時のツバサの願いとは違う未来ではあるが……。

なお、ツバサのこの評価は大量のうまい棒を処理しないといけない事に対する八つ当たりからくる評価である。

その後、６－Ａからは後片付けの音に加えて「サクサクサクッ」という軽快なスナック音が響き続けた。

第９８話　幼くも長寿なモノ（後書き）

さて、こっちもテストが近づいてきたので少なくとも来週いっぱいは更新できません。元々の目的を蔑ろにしたら本末転倒ですからね。

気付いた方もいるかもしれませんが、今回四神の正体をチョロッと出しました。分かった人いますかね？　自分でも、少し分かり易過ぎたかな？　と思ったのですが。

それでは、なるべく早く次の話を投稿したいと思います。

第９９話　退屈な方程式（前書き）

お待たせしました。テスト疲れた～。レポートもあと2枚で終わります。

今回はプロローグ的な話です。才葉シティの解説や、才葉シティ編で起こる事の予告みたいなもんです。

状況説明以外は『陸ケンジ』視点になっています。

第９９話　退屈な方程式

退屈だ。それ以外の感想が出ないくらいに退屈だった。

学校ではいつも１人。周りと違う点といえば、周りよりも少し成績が上な程度。……といっても平均点から２０点以上差を作っており、サボリ癖があるにも関わらずその成績をキープしている点を入れても、僕から見れば普通だ（自分ではそう思っている）。

結局自分を基準にして物事を見る以上、自分を普通と見るのは人間として当たり前な事だ。人間は自分と違うと認識した者を認める事は少ない。大抵は敵愾心を露にし、相手を攻撃する。手段は無視や暴力、実に様々だ。

自分と違うモノを認めると言う事は、相対的に自分が間違っているという事になるとでも思っているのだろうか。実際には人間である以上、相手が自分と何かが違うのは当然だと言うのに……。

……ここまでだと、退屈でなくて単なる寂しい人間という事になる。僕が退屈に思うのは……。

「よぉ、相変わらずお友達は勉強だけかい？」

こいつらだ。そいつの周りのクラスメイトは見て見ぬ振りするか一緒になって笑っている。

よくもまぁ飽きもせず毎日毎日同じ事をやっていられるものだ。厳密に言えば、行動が同じというわけでなく、パターンが同じなのだ。

彼らは自分に対して不快なイメージを抱いている　＋　集団側に

居るから自分達はコイツ（つまり僕）より正しいと思っている等の心理状況や今の状況（　物質的な状況　）から推測して、相手の次の言動や行動は容易に予想可能だ。

簡単に予想できる毎日。

そして人間。

……退屈な方程式。

これほどつまらないものはない。

その場に居るのが嫌だったから離れる事にした。後ろからは「また逃げ出した」、「さっさと学校やめろ」そんな言葉や嘲るような笑いが聞こえてくる。

まぁ、だからといって僕がどうこうしないといけないという問題ではない。相手が本気でないからだ。彼らの顔が物語っている。「自分は傷つける側の人間。オレ達はアイツより偉いし強いし正しい」そんな考えが表に出ている。

それはつまり、相手は遊び感覚で、単に嫌いだからという感情的で短絡的な理由でこちらを傷つけているという事。……昔貴族が奴隷同士を闘わせたゲームと同じだ。自分のやった事の意味を考えようともしない。復讐される可能性を背負うなんてもっての他。その上で相手を傷付けたい。……まさしく一方的なルール。

そんな奴らの言う事を聞くのはまっぴらだ。奴らが辞めろというなら辞めない。死ねと言うなら死なない。

自分で言うのは何だが、天邪鬼だ。

そんな退屈な日々がいつまでも続くものだと思っていた。実際の

所、変わるキッカケはいつも通りの平凡な、ワンパターンな、退屈な毎日から顔を出した。文字通り、顔を出したのだ。

――才葉シティ・セントラルタウン――

時間は夕暮れ。季節は春。スバル達がツバサと出逢って数日が経った頃。

赤く染まった町を1人歩くのはケンジだ。右手には雑誌と指に挟めるように飲み物（　缶　）。左手にはカバンを持っている。才葉学園高等部の帰りだ。

「……ふぅ～ん。赤羽博士が紛失したフォースプログラムを復元。スペックは従来の1．5倍。9年目の奇跡……ねぇ……」

才葉シティは、セントラル、シーサイド、グリーン、スカイ。計4つの町《タウン》から成り立っている。200年前は科学の最先端を行く町として万博を開いたそうだ。教科書によると電脳獣という存在のせいで万博は滅茶苦茶になり、正式な開催までかなりの時間を有したらしい。

フォースプログラムというのはスカイタウンにあるもので、自然界のエネルギーを最大限に増幅。そのエネルギーを利用してスカイタウン自体を上空1万メートルの高さに維持しているわけだが、200年前に一度盗まれたらしい。そして何故だか完全に近いプログラムを修復されていたそうだ。おまけを言えば、何十年も前にも同

じ事があったらしい。しかもその時は『いずれ返します。それまでこれで我慢してください』という置手紙が残されていたそうだ。

無論その時代の科学者はそんな言葉で納得するはずは無く、科学者達はフォースプログラムの強化版の製作を開始した。だが、置手紙と共に置いて行かれたプログラムの出来が良過ぎたために『今以上の』となると壁は高かった。

それが最近、赤羽博士の手で完成されたというわけである。夫婦で科学者。彼らがフォースプログラムの復元・強化に携り始めたのは記事通り9年前。……噂では一人娘が居たそうだが、忙しい両親を持つとはどういう感じなのだろう。

ケンジがそんな事を思いながら雑誌を左手に持ち替えて右手に残る空き缶を後ろに投げる。

カランッ！

缶独特の乾いた音。それに引き寄せられるように、自動掃除ロボットがやってくる。及び、ゴミを回収。この才葉シティの科学レベルが２００年前と同じと思ったら大間違い。現に、自動掃除ロボットという代物まで道を往来しているような街だ。

（まぁ、そんなのがあるから平気でゴミをポイ捨てする人が増えるんだけどね）

人間以外の存在が代わりに何かをしてくれる。それは非常に便利で未来的ではあるが、その代償として何かしらがあるものだ。

この掃除ロボットの場合は、勝手にロボットが掃除をしてくれる

から自分達人間は掃除をしなくて良い。それぱかりか勝手にポイ捨てしても勝手に掃除してくれるから困る人がいないといった考えに及び、手早く言えばモラルの低下に繋がる。
現に、ケンジ自身町の清掃員なる者を才葉シティで1回も見た事が無い。

ケンジはその掃除ロボットに背を向けて歩き出した。
と、その時……。

『兄貴、これなんだろな』
『……清掃ロボットというものだろう』
『へぇ〜。地球人もおもしれぇもん作るな』

掃除ロボットの方、ちょうどケンジの後ろから声が聞こえる。最初はウィザードの兄弟（そもそもウィザードに兄弟ってあるのだろうか）の会話かと思ったが、最後のセリフに引っかかった。ウィザードなら人間の事は人間と呼び、地球人とは言わない。
気になって振り向くと、そこには犬のような姿で2匹の電波体がいた。それぞれ色は赤と青。
直感で分かった。この2匹は自分の退屈な世界を吹っ飛ばしてくれると。

「ねぇ君たち――」

この日から僕達は手を組むようになった。何でも、彼らはＦＭ星の反逆者で、自分たちの宿主を探していたらしい。その上ＦＭ星の双翼とまで言われた実力者。
それからはムカついた時に建物を壊したり暴れに暴れた。ストレス発散、僕にとってのつまらない世界は完膚なきまでに壊れた。退屈な方程式ともおさらばだ。

6月頃、ロックマンや他の主要メンバーが集まっている学校を襲撃した。結果は敗北。

「いたたた……。あの子、あんなに地面に押し付ける事は無いだろうに……」

ケンジはツバサのグラビティステージで押し付けられた。その時に胸を強く打ったため、自宅に帰った今でも痛い。胸の位置にドンピシャで小石があったのだ。

炎牙と氷牙も疲れたらしく、ハンターの中で大人しくしている。

ケンジはそんな2人の体に響かないように声を潜めて話しかけた。

「でも、こんな事もあるよね。君達はＦＭ星の双翼と言われていたんだから、チャンスはいくらだってある」

その言葉で2匹はドキッとした。その僅かな変化に気付いたケンジは問い詰めると、ＦＭ星の双翼というのは自称で、ケンジに取り入るために言った言葉だと言う。その2匹の実力がその辺のウィザードでは相手にならないほどだと知っていても、その事実は彼の気分を下げるのに十分だった。

テンションダウン。

つまらない日々に逆戻り。

7月中旬、時期的にはスバル達が夏休みに入ったか入らないかの頃だろう。その頃ケンジは自分のイライラを抑えるのが苦手になっ

てきた。自分でも意識できるくらいに。しかし、意識しているからといって抑え切れなかった。

少年の背中の小さい、白い羽根はこの頃から付いたのだろう。そしてそれはゆっくりと育っている。本当にゆっくりと……。

コダマ小学校の学園祭の日、ツバサに宣戦布告した後は閉鎖された工場にて今まで味方にしてきたノイズムやはぐれウィザードを集めて呼びかける。

「いいか！　これから5日後、ロックマンを始めサテラポリスの主要戦闘メンバーがこの町に来る。迎え撃つぞ！」

『『『『オォォォォォォォォ！！！！！』』』』

ケンジの言葉に一斉に声を上げる軍団。その数、５０。多くは無いが、少なさとケンジの頭脳が相まって今までの犯行には一切ケンジ達に繋がる証拠は出ていない。

だからこそはぐれウィザードやノイズム達はケンジ、つまりはドッグ・ツインに付いたのだ。

ケンジは荒ぶる声を聞きながら不敵な笑みを浮かべた。

（……これで後は迎え撃つだけ。社会科見学が終わるまで、生きていられるかな？）

「クックックック……。はーはっはっはっはっは！！」

思わず笑い出すケンジに呼応するように、集まったウィザード達

のテンションも上がる。

その様子を冷静に見ているのは、意外にも炎牙と氷牙だった。

『……兄貴……』

『……どうした？　炎牙』

『ケンジってさ、あんなにブチ切れてたっけ？』

『……最近様子がおかしいとしか分からん』

炎牙と氷牙の2人はこれから起こる事に期待でも高揚でもなく、一種の胸騒ぎを覚えていた。不吉な胸騒ぎを……。

第９９話　退屈な方程式（後書き）

一部作者のいわれた事のある言葉が入っていましたが、まぁその辺はスルーでお願いします。さすがに2日連続でその手の話はしたくないですからね。でも、相手がちゃんと向き合ってきたら、こっちもちゃんと向き合いますけどね。でないと、話してくれた相手に失礼ですから。

念のために表記しておきますが、ケンジは作者がモデルではありません。サボるってのも無いし、成績もそれなり程度ですから。

次回はスバル達が才葉シティに来ます。ネタの数の関係上、行く町はセントラル＋αだけになります。……今回の話を見れば想像できますかね。

第１００話　才葉シティ（前書き）

おまたせしました！　今回は２つくらい伏線を含ませました。

第１００話　才葉シティ

社会科見学当日。

才葉シティにはセントラルタウン、シーサイドタウン、グリーンタウン、スカイタウンがあるわけだが、その中で１つの班が回れるのは一箇所のみだ。事前にどこの班がどのタウンに行くのかホームルームで決めておくのである。

一泊二日。最初の一日をそれぞれの班が選んだタウンへ行き、２日目は合同でセントラルシティを周る。

スバルやミソラ、ツバサなどお決まりのメンバーはスカイタウンに行く。ルナを始めとした委員長トリオもその中に含まれているのだが、ルナは他の班の状況を聞いて、それを先生に報告したりと忙しい。役職ゆえの責任というわけだ。

なお、スカイタウンに行く事になった経緯は以下の通りだ。

――――回想――――

「それで、私達の班はどこへ行く？」

クラスのあちこちで数名が集まって相談している中、ルナはスバルやミソラ、自分の班に尋ねる。

そこですかさず答えたのはスバルとキザマロだ。

「スカイタウン！」

「スカイタウンに一票です！」

補足を加えれば、無邪気な子供のようなキラキラアイだ。その目と勢いに一瞬たじろいだが、ルナは紙に『正』の『一』『1』を書いて、冷静にその理由を尋ねる。流石にここまで食いつく理由は聞きたいと思うだろう。

「それじゃあスバル君とキザマロはスカイタウンね。……一応聞くけど、その理由は？」

スバルとキザマロは目を合わせた後依然キラキラアイのまま理由を述べる。

「あそこにはフォースプログラムがあるんだ」

「２００年前の時点で町１つを丸々浮かべる事が出来るんですから、それより高スペックと聞くと僕の知的好奇心がくすぐられます！……スバル君も同じですよね？」

「もちろん！」

キザマロがスバルに問い、スバルはキザマロの方に顔を向けて答える。そして再びルナへ視線を戻す。

なお、この間ずっとキラキラアイで、ミソラはポカーンとし、ゴンタは「そもそもフォースプログラムって何？」という顔をし、ジャックは押されているルナに対して笑いを堪え、ツバサは退屈そうに欠伸をしながら窓の外を見ている。

スバルとキザマロのテンションに押されたルナは他の人の意見も聞く事にした。この２人の意見だけで決めるのは不公平だ。指導者なら、全員の意見を聞いてから決定するべきだろう。その際ジャックを選んだのは笑いを堪えている姿と笑っている理由が分かったか

らに他ならない。つまり、ムカッと来たわけだ。

「それじゃあジャック。言いなさい」

おまけに命令形。ルナの怒り、２０パーセントといった所だろう。そしてジャックはそれほど鈍感でもない。彼女の口調の変化からその怒りと理由を知り、半歩距離を取ってから答える。気休めとはいえ少しは距離を取っておきたい。

「別にどこでも良いぜ。……ツバサは？」

ツバサはここで初めて窓の外から目を離して話に加わる。

「ジャックと以下同文」

不真面目な態度＋まともな意見を出さなかった2人に、ルナは持っていた紙を円柱状に丸めて「ポコッ」と軽く叩く。

「少しは真面目に話に加わりなさい。……で、ミソラちゃんは？スバル君と同じスカイタウン？」

ミソラもミソラで先程までのやり取りを見ていて考えが周らなかったらしい。ルナに聞かれて我に帰ったようだ。

「えっ？　えっと……シーサイドタウンに行きたかったんだけど……別にスカイタウンでも良いよ」

「ホントに良いの？　シーサイドタウン、行きたいんでしょ？」

「うん……可愛い動物さんとかに逢いたかったけど、それは今度スバル君に連れてってもらえば良いから！」

明るく言って見せたミソラを見て、ルナはため息をついてスバルの方を向く。

「スバル君。分かってると思うけど、ちゃんと近い内に連れてってあげなさいよ。ミソラちゃんがスバル君のために自分の意見を譲ったんだから、スバル君はちゃんとそれに答えないと」

「うん。……でも、何で僕のために？」

「「「「……」」」」

悲しいかな。スバルはまだそういった心を理解する以前に想像する事も難しかったようだ。彼がそれを知るには、誰かが一から教えるか、経験で覚えるか、それか想像できる年齢になるまで待たないといけないだろう。

スバルの鈍感発言にミソラはため息をつき、ルナはミソラを気づかいながら鋭い眼光をスバルに送る。ジャックとツバサ、キザマロは呆れており、事もあろうにゴンタまで目を点にしていた。

スバルは場が凍りついた事とルナの眼光に怯えて謝りながら慌てる。

「ごごごごめんなさい！　とりあえずごめんなさい！！」

念のために表記しておくと、スバルとしては『大人数で行った方が楽しいのでは？』という思いで言ったので、ミソラの思いに気付いた気付かないどうこうの問題では無い。

つまり、『無自覚言動』というわけだ。……まぁ、いくらキスを2回していても、多くを察するほどには至っていなかったというのもある。

――回想終わり――

なお、スバルはこの後さらにルナから詰め寄られるのだが、流石に見かねたのか。ツバサやジャック、キザマロと言った冷静メンバーが委員長をなだめ、どうにかスバルの窮地は脱した。まぁ、その際ルナからは「スバル君に女心の何たるかを教えてあげなさい」と言われたのだが……。

「僕はまだ女心は良く分からないので」

とキザマロ。

「んなもんそのうち分かんだろ」

とジャック。

「めんどくさい。プラス、知らないままの方が面白い」

とツバサ。

この発言の後、キザマロはしょうがないとしてジャックとツバサにルナの怒りの眼光が襲い掛かった事は言うまでも無い。

そんなこんなでスカイタウンに決まったわけだ。

――スカイタウン――

生徒は一旦セントラルシティに来てから各班で分かれる形になっている。

スカイタウンは上空1万メートルの地点に存在する町で、フォースプログラムから生み出されたエネルギーによって浮かんでいる。町1つを丸々ロケット噴射で浮かばせているのだ。

その地点へはエレベーターで向かう。

気圧の変化による耳鳴りを堪えた先には……。

「高――――――い！！　本当に高い！」

「うん！　こんなに大きい町を浮かべられるなんて、フォースプログラムって本当に凄いんだね！」

無邪気なスバルとミソラは興奮して両手を欄干の取っ手に置いて下を見る。エレベーターから降りた2人は一目散に欄干に走って行ったのだ。

「こら！　興奮するのは分かるけど、先に挨拶を済ませてしまいましょ。見るのはそれからでも良いわ」

ルナはスバルとミソラをたしなめつつ、各班が目的地に着いたかメールで連絡を取っている。つくづく事務向け。器用な人だ。

スバルとミソラが楽しそうに戻って来るのを見ながら、ツバサはこれからの日程をキザマロに確認した。

「これから案内としてスカイタウンの人が来るんだっけ？」

「はい。他の班は自分達の方から案内する人の下へ行くのですが、

フォースプログラムの制御を全てコンピューターに任せているので、下手に障られないようにという事で向こうから来てくれるそうです」

まぁ、すぐにオートからマニュアルに切り替えられるそうですけどね。

キザマロがそう続けた直後、彼もスバルとミソラの高さの感想に加わる。ジャックとゴンタは元よりスバルとミソラの方に合流している。

よって、今ツバサのそばに居るのはハンターの中のアイリスだけだ。ツバサはスバル達から周りに視線を移す。

「っにしても、変わってないな～。中のコンピューターは最新式にアップデートされてるんだろうけど。……確か、最初のフォースプログラムはワイリー博士率いていたWWW（ワールドスリー）が盗んで、電脳獣事件の時に爆散したんだよな？」

ワイリー博士、WWW、盗んだ。この3つの言葉を聞いたアイリスは不機嫌そうに目を伏せた。

『えぇ。……そして2回目は、あなたが盗んだ』

ツバサは苦笑しながら、ハンターを腰のホルダーにぶら下げたままアイリスに話しかけた。

「そう睨むなよ。代わりのプログラム置いてっただろ？　……それと、自分の生みの親の過ちをぶり返されて不機嫌になってるなら素直にそう言え」

彼はアイリスが不機嫌な理由に気付いていたらしい。ツバサとしても先程のアイリスへの振りは悪気のあるモノではない。

『……だから気付いててワザとするのは止めてって何回言えば――！』

「お、案内の人が来た見たいだな」

とうとうアイリスのイライラも高みに達したらしく、実体化してツバサに直接注意しようとしたが、ツバサの声に遮られる。さらにはその声でスバル達まで案内人の方に視線が行ったため、怒るのを中断せざるを得なかった。

ちょうどスバル達とツバサとアイリス。案内人が一直線上に繋がっているのだ。この状況では迂闊に怒れない。

「あれ？　アイリスなんで実体化を？」

『え、えぇ。ちょっと……』

スバルから問われたアイリスはジト目をツバサに送る。

スバルは察した。ツバサとアイリスがまたケンカしたのだと。正確に言えばアイリスの注意をツバサが飄々とかわしてそれでアイリスが不機嫌になるわけだが、このトークは教室でも普通に行われている。何度も見ていて察すなという方が無理というものだ。

こういった見知った者同士のいがみ合いには、第三者の介入が有効かもしれない。事情を知らない第三者が加われば、大抵曖昧になる。初対面の人の前でいがみ合っている光景を見せるのは誰だって好ましく思わないだろう。

そんなわけで、第三者の案内人が登場。男女の2名だ。

男性は赤髪に薄い緑の瞳。女性は明るい茶髪に赤い瞳だ。どちら

も研究者らしく白衣を着ている。

男性の方が気まずそうに頭を掻きながら挨拶をしてきた。

「すみません。仮眠を取り過ぎて遅刻してしまいました。？　何かあったんですか？」

「い、いえ。何でもありませんわ。ねぇ？　ツバサ君、アイリスちゃん？」

顔と声が笑ってるが、彼女から放たれる空気は全然笑っていない。むしろ……。

（初対面の人の前で何してんの！！）

と、目で語っている。というより、怒鳴っている。

……恐い。恐すぎるくらいに怖い。ツバサとアイリス（特にツバサ）に放たれているはずの気迫がスバル達の背中に冷や汗を流させている。注意をしたのにそんな気迫に飲まれたアイリスとしては完全な『とばっちり』で、『泣きっ面に蜂』と言った感じだろうか。

案内人の人は腑に落ちない感じだが、一応は納得して自己紹介をした。

「……そうですか。……っと、それでは自己紹介を。私は赤羽志出野（あかばねしでの）こっちは妻の――」

「赤羽月夜（あかばねつくよ）と申します。……先程はうちの旦那が失礼しました。この人ったら何回起しても起きなくて……」

「月夜。何も子供達の前でそんな話を出さなくても良いだろう」

これから2人は年甲斐も無くのろけるので、今のうちに解説をしておこう。

赤羽志出乃と赤羽月夜。春にフォースプログラムの強化版の開発に成功した人物で、優秀という単語が似合うくらいに優秀な人物だ。9年前から開発に携り始めたが8年前に難航。その苦難を乗り越えた結果がようやく出たというわけだ。一人娘が居たという噂があるが、所詮は噂。

噂は不確実なもので、誰かの悪意によって形作られる場合もある。

都市伝説。
街談巷説（がいだんこうせつ）。
道聴塗説（どうちょうとせつ）。
話半分（はなしはんぶん）。

そういった部類の、ある程度大きな都市なら良くある都市伝説だ。

なお、その噂の真相は掴めていない。赤羽夫妻はその事を話そうとしないし、探そうと思っても、元々赤羽夫妻が他の町から来た人だけあって、娘の居場所を知る事が出来なかったのである。だからその娘の存在も、噂だけの幻と化している。

「……あの～案内は～……」

どうにかしてくれというスバル達の視線を一身に受けて、ルナは控えめながらものろける2人に話しかけた。2人はハッとした顔でルナ達の方を見る。

「ゴメン！　ついのろけてしまった！」
「ごめんなさいね。この人のろけると周りが見えなくなるから」

「いや、それはお前もだ」

月夜のボケ（？）に志出乃のツッコミが入り、スバル達は唖然とする他無かった。一般に言う、夫婦漫才というヤツだ。

その様子を、招かれざる客が見ていた。ハンターを介さねば人間には見えない、ノイズウェーブの中から……。

『ザザッ……ドッグ・ツイン様。星河スバル達はスカイタウンに居ます』

「ご苦労。他のタウンに散らばった仲間をスカイタウンに結集させろ」

ノイズムはセントラルタウンで指揮を取るケンジに連絡し、ケンジはノイズムに指令を出す。

『ザザッ……了解しました……』

――――セントラルタウン――――

「ふぅ～～～～」

ケンジはため息をつきながらイスの背もたれに自身の背中を預ける。

「……全員スカイタウンに集結する事も指示した。後は、機を見て一気に潰すだけだね。……潰す？」

ここまで言って、ケンジは何かを思いついたらしい。その整った顔に似つかわしくない、狂気を込めた笑みを浮かべる。

「……クックック……良い事を思いついた……」

少年は狂気の笑みを広げる。しかし、大声では笑えない。ここは家だ。周りに計画を悟られるわけには行かない。

少年は静かに、潜めたような笑い方で、陰惨に笑う。

『……』

『……』

彼のパートナーは黙っている。自分達にできる事は何も無い。彼の異変の原因すら分からない。……無力感が、彼らを襲う。

――よかよか村・旅館うらかわ――

『……ねぇソラ、やっぱり止めない？』

「何言ってんのスザク。春先に女将がこそこそと新聞の記事を切り抜いてたんだよ。気になるじゃん」

うらかわでは、その日の新聞は大広間や喫煙室など、要所要所に置いてある。3，4日分くらいその部屋に置いといて、古くなった新聞から順番に処分する決まりになっているのだ。

春先の事、女将は自身の休憩時間に新聞を見ていたのだが、何かの記事を見て慌ててその部分をはさみで切り抜いていた。

それも、ご丁寧にはさみで切り抜かれて四角い穴が開いた周りを手で細かく千切って、いかにも『偶然破けました～。はさみなんて使ってないよ～』という演出付きだ。

だが、隠したい人、つまりソラに見られていたら意味が無い。ソラはその時旅館の庭の手入れをしていて、偶然その光景を見かけたのだ。距離の関係上どんな記事かは分からなかったが、そのときの女将の慌て具合が尋常でないため、ずっと気になっていたのだ。

しかし、聞けなかった。その当時ソラは『自分が成果を出しているから捨てられないで居られる。捨てられないためには、嫌われないためには頑張り続けるしかない』と、自分の考えすら押し殺していた時期なので、そんな事を尋ねて、それがきっかけでもしも捨てられたらと思うと、恐くて聞けなかったのだ。

『でもさ～』

ガチャ

女将の部屋のドアが開く。隠しておくのに一番安心なのは自分の

部屋。よって、真昼の泥棒決行だ。
スザクの『でも』はソラを止めるためだが、ソラの『でも』は違う。
ソラは女将の机を探りながらその続きを言う。

「……私今まで色んな事に恐がってたけどさ。『でも』、今は違うよ。女将だけじゃない。旅館で働く皆が、私を自分の家族のように見てくれる。良い事をしたら褒めてくれるし、悪い事をしたら叱ってくれる」

良い事をしたら褒めて、悪い事をしたら叱る。これは当たり前な事だが、すごく重要な事だ。

「もちろん今回の事で怒られるかもしれないけど、それでも私はここに居て良いんだっていう核心がある」
『……なんで？』
「……スザクが消えて、ツバサ達が帰った後ね、女将や皆に怒られた。それでその後、あなたに辛い思いをさせてごめんなさい。あなたはここに居て良い。……私達のそばに居てちょうだいって、私なんかのために泣いてくれた。……皆、泣いてくれた……」

嬉しそうに、静かな声でソラは語る。自分と真剣に向き合ってくれる人への感謝の想いを胸に。
スザクはそんな彼女の心境を察してか、黙って彼女の続きを聞く。

『……』
「スザク、そういうのが親なんじゃないかな？」

不意に問われた事とその内容から、スザクは素直に疑問を口にした。

『そういうのって？』

「子供の嬉しい時に一緒に笑ってくれて、子供の苦しい時に一緒に悩んでくれて、悪い事をしたら怒ってくれる。……その子と正面から向き合うのが、親なんじゃないかな？」

向き合うという事は相手を直視する事。それだけの価値が、その子には在るという事を証明してくれる。

この人は自分に対して真剣になってくれる。自分と向き合ってくれる人が居る。それが、その子が自分から『その場所に居て良い』と思える理由になり、本当の意味での『居場所』になる。

ソラでなくとも、それに気付くかどうかは分からない。でも、気付けたなら、きっと今までよりマシになる。その子が生きるための、大きな力になる。

「だから、女将や皆がそう言ってくれたから、私もこの場所に居たいと思うんだ」

ソラは、自分はここに生きていて良いと言ってくれる人の気持ちに気付いた。だから彼女は、自分は生きていて良いと肯定できる。

『……私はウィザードだから人間の親子がどういうのかは分からない。……だけど、エーテルがよく――』

「スザク……」

スザクの声はソラの声に遮られた。ソラとしてもスザクの話を聞いてあげたかったのだが、それ所では無くなった。探していた物が見つかったのだ。……いや、見つけてしまったと言うべきだろう。

スザクはソラの声が弱々しい事に気付いたのだろう。実体化して

彼女の持っている記事を見る。

『ッ！　これって！』

「……私のワガママ、聞いてくれる？」

『……ソラさえ良ければ』

ソラの意志のこもった目にスザクはしっかりと頷いて見せ、ソラは強い目のまま頷き返す。……若干、恐怖も入っている。その恐怖とは、『知る事』への恐怖だ。

「ありがとう」

赤い光が窓を突き抜ける。電波変換して体を電波に変えているのでガラスに破損は無い。

彼女が見つけたのは春先の『赤羽博士』の記事。彼女の両親だ。もう記憶はおぼろげだが、忘れる事のできない顔だ。決して切る事のできない、本当の両親なのだから。

彼女の去った部屋に入ったのは、現うらかわの女将だ。ずっと、部屋からは見えないドアの陰から聞いていたらしい。

「……散らかしたまま行くなんて、本当にそそっかしい子ね。……親がどういうものか……か。あの子も言うようになったじゃない」

女将は青く広がる空を窓から見上げる。飛び去った娘の残像を見るように。

「……行って来なさい。そして、自分の口で聞いてきなさい。何で自分が捨てられたか、あなたは知りたがっていたものね」

無論、人の部屋に勝手に入った分は帰ってきた時にちゃんと叱るつもりだ。それが、親というものだから。

同時に、ソラが戻ってこない覚悟もしていた。ソラが元の家族を選んで新しい生活を送る事だってありえるのだ。

我が子の成長のため、そして我が子の幸せのために。女将はソラの選択を尊重する事にした。子供の一生を自分の考えや価値観で強制するのは、親としてルール違反だ。

「……さてと！　みんなの様子でも見に行きますか！」

女将は自分の中の寂しさを吹き飛ばすかのように言葉を発し、自分の部屋を後にした。

第１００話　才葉シティ（後書き）

今回ソラが言っていた『親』の話ですが、これはオレ自身の『親とは何か』の答えです。……全部は書いてないですがね（苦笑）。

今回の伏線ですが、どっちもソラの両親に関係しています。……そのうち『明日へ』の中で明かすのは１つだけですね。でも、残り１つも想像が容易なくらいに明かすつもりです。

今のうち明かされない方のヒントを言っておくと、『姫』です。……ふっふっふ～。分かるまい♪（↑嫌なヤツ！）

次回はバトルです！　お楽しみに！　それから、今回出てきた漢字の説明は活動報告の方でします。ここに書くとやたら長くなりそうなので。

第１０１話　不如帰（前書き）

お待たせしました！　サブタイの『不如帰』の読みは『ホトトギス』です。一見関係無さそうですが、案外重要だったりします。

第１０１話　不如帰

――昼食――

時刻がお昼になり、スバル達はスカイタウン気象庁の食堂で昼食を食べていた。

ゴンタは午前に見たウェザー君の事で興奮した様子で話している。食べながら話しているため向かいのツバサに掛かっているが気にしない。……いや、よく見るとツバサの顔に触れる前に机に落ちている。まるで見えない壁に防がれたようだ。

とはいえ流石に迷惑らしく、ツバサはため息をつく。

「はぁ～……」（……ゴンタ、中学に上がる前に話しながら食べるのを止めろ。向かいの人に迷惑だ。……なんでこんな事で魔法を使わないといけないんだ……）

ツバサの内心の呟き通り、ツバサは魔法でゴンタの食いカスを防いでいる。『そんなことで魔法を……』などと呆れる方も居るかも知れないが、誰だって嫌だろう。他人の食べカスを被るのは。

ツバサが使用しているのはクロウの創った『ＳＨＩＥＬＤ（シールド）』。文字通り、攻撃であれなんであれ防ぐ力を持っている。クロウが創った魔法は別次元の同じ存在であるツバサも共有できる。結界があるため加減をしないといけない点さえ注意すれば、ほとんどが使用できるのだ。

本来なら『魔法を込めた札』と『それを強める杖』のセットで使

うのだが、札を創ると大きな魔力が必要なため、結界が揺らぐ可能性がある。
　杖は持ってはいるが、クロウの持っている杖とは『反対の杖』なので、魔法を使う際に力の底上げはしてもらえ無い。

　解説が遅れたが、ゴンタの言う『ウェザー君』とは２００年前から存在する気象コントロールシステムだ。ネットナビのように自我を持っている他、先ほど言った様に天候を操る事が出来る。それも、才葉シティ全土がコントロール範囲だ。

　そんな強力なプログラムがなぜ今までファイブエレメントに悪用されなかったかというと、ここのセキュリティシステムのレベルの高さにある。ウェザー君の中枢への道には６つのファイアウォールがあり、それらを全て１つの解読コードで突破しなければいけない。その解読コードも、０．１秒毎に改変される。
　つまり、そのファイアウォールを突破するには、解読コードを見つけて６枚のファイアウォールを突破するという作業を０．１秒以内でこなさなければいけないという事だ。人間技では到底不可能である。

　一方、ゴンタはルナから見咎められて沈黙。やっとツバサは気を抜いてご飯にありつけるというわけだ。
　ツバサの隣はスバル。その隣はミソラ、ジャックの順だ。その向かいには委員長トリオと赤羽夫妻が座っている。
　スバルは静かになった所で気になっていた事を聞いてみた。
「あの、志出野さん……」

「ん？　なんだい？　スバル君？」

普段このような賑やかな食事はしていないのだろう。志出野はゴンタ達に向けていた優しい笑顔のままスバルの方を向く。その笑顔を見ると心が痛むが、どうしても聞きたいことがあった。

「……ソラさ――」

ポンッ

スバルの肩に手が置かれる。とっさにそっちを見ると、ツバサが首を横に振った。ここで赤羽夫妻がソラの両親かどうかを聞くのは好ましくないと考えたのだろう。

食堂にはスバル達の他に委員長達、そして研究者達もいる。誰が聞いているかわからない状況でそんな尋ねれば、良くない噂が立つ。もし赤羽根夫妻がソラの両親だとしても、その噂でクビになったとしたらスバルでは責任を背負いきる事はできない。人間の人生を捻じ曲げてしまうのだ。

それに対価があるならば、捻じ曲げた側の人生も捻じ曲がるほどに重い。下手をすれば、一生その事に縛られる事も有り得るのだ。

一線を越える前に、ツバサはスバルを止めた。

赤羽夫妻がスバルが言いかけた事が気になって尋ねようとしたが、突如流れた緊急アナウンスの声に遮られてそれは叶わなかった。

『緊急警報！　ウェザー君にハッキングを試みる存在を確認！　赤羽志出野博士。並びに夜月博士は至急メインコンピュータールームへ！』

それを聞き、赤羽根夫妻は真面目な顔に切り替えて立ち上がる。アナウンスで『手の空いている研究員も、至急メインコンピュータールームへ！』という指令が出される中、志出野がスバル達と向き合う。

「それじゃあ僕達は言ってくるけど、君達はここから離れちゃダメだよ。危ないからね」
「志出野！　早く！」

先に駆け出していた夜月が食堂の入り口辺りで叫ぶ。志出野はそれに答えるとスバル達に笑顔を見せてから駆け出した。
スバルは2人が見えなくなってからツバサの方を向く。

「ツバサ君！　僕達も！」
「必要無いな」
「うん！　必要な……えっ？」

ツバサがあまりに自然に答えるのでスバルばかりかミソラやジャック、委員長トリオまで目が点になってしまった。アイリスはツバサと同意見らしく、スバル達にその理由を説明した。

『さっきの志出野さんからの説明で知ったと思うけど、ウェザー君のセキュリティは一流。正攻法で行った場合、私もツバサもアウト

ね』

「……2人でもダメなんだ……」

スバルの驚いたような声にツバサは暢気に昼食を食べながら答える。

「そっ。だから精々返り討ちにあって終わり――」

『ノイズウェーブを用いて防衛ライン1番から3番まで破られました！　これよりオート防御から手動防御に切り替えます！』

「……でも無いみたいだな」

アイリスが言ったのはあくまで『正攻法』。つまり『真っ向からセキュリティを破る場合は』という事だ。『ノイズウェーブを介して』といった『裏技』には対応していない。まぁ、ノイズを実用レベルまで扱えるほど今の技術は進んでいないのだから、それも無理からぬ事だろう。

なお、オート防御は予め防衛策がプログラミングされているので対応がワンテンポ遅れる場合もある。しかし、手動なら人間が操作するので、機械には出来ない柔軟な思考と行動が可能だ。

よって、緊急時は手動の方が有効と言える。

緊急警報を聞いたスバル達は、ツバサの呟きを全部聞く前にほとんどのメンバーが走っていった。……ゴンタはともかくルナとキザマロは行っても意味はないと思うが、それでもそばで応援したいのだろう。

『……ツバサ、私達も』
「はいはい。分かってますよ」
ツバサはうんざりした様子で食堂の入り口に向かうが……。

『建物の外にも敵性反応！　防衛のため、これより館内の隔壁を閉鎖します！』

「『……はい？」』

ズガシャ――――――ン！！！

「『……」』

今まで道があった所に頑丈そうな壁がある。目の前まで近付いていたツバサとアイリスは呆然としていたが、2人同時にため息をついて入り口とは反対側、大きな窓の方を向く。

「アイリス、あれブチ破っても後で言い訳効くよな？」
『この場合仕方ないと思うわ。……だけど、あなたは電波化出来るんだからわざわざ壊さなくても……』

彼女が呆れた目でツバサを見るが、当の彼はいつもの調子で飄々としている。

「いや～スバルを止めたのは良いが、実はオレも少し機嫌が悪かったんでね。外に居る奴を含めて八つ当たりさせてもらう」

アイリスはその答えを聞くと慣れきったため息をついた。

『はぁ……。分かったわ。後で始末書が増えるのはツバサだから』

「はは……それは恐い。それじゃあアイリスはメインコンピュータールームの加勢に行ってくれ。そのついでに2人くらいオレの方に連れて来てくれると助かる」

苦笑交じりで答えたツバサにアイリスは頷く。

『分かった。全員じゃなくて良いのよね？』

「ああ。全員をオレの方に来させるとメインコンピュータールームの守備が緩くなる。そこを突かれたらお終いだからな」

ツバサはそれを言うなり窓の隔壁に向かって歩き出した。

その後姿にアイリスは声をかける。

『……ツバサ、気をつけて』

「へいへい。……そっちも、不如帰（ホトトギス）の夫妻によろしくな」

『えっ？』

スパッ！！　ドドドドドドド……

アイリスの疑問の声は隔壁をバトルカード：『ノイズドウィザード』で断ち切り、隔壁が崩れる音で遮られた。その向こうで、ツバサがアイリスに背中を向けたまま片手をヒラヒラと振っている。

『……こっちは任せろ。そっちはよろしく。……って所かしら。……言われなくても、才葉シティは私にとって大事な町。……誰かが死ぬのはみたくない』

アイリスは近くの端末の方を向いて電波化。メインコンピュータールームへ向かう。

――――スバルサイド――――

メインコンピュータールームに着いたスバル達。

その際『なんで付いて来たのか』と赤羽夫妻から怒られたが、ちょうどその時、隔壁が下りて戻る事が出来なくなったのでそこに居る事が許された。

状況は、まず相手はノイズウェーブを通じて進入。数は不明。電脳の様子もノイズの影響で分からない。結論として……。

「クソッ！　明らかに劣勢だ！　電脳の様子すら見れないのでは現実世界からでは手出しできない……」

志出野が悔しそうに机を叩き、月夜も同様に侵食具合が表示されるモニターを忌々しげに見つめている。

スバルとミソラ、ジャックといった戦闘メンバーは顔を見合わせて頷いて、志出野に提案する。

「志出野さん。僕達が電脳の様子を見てきます」
「……スバル君……。気持ちは嬉しいが、並みのウィザードでは奴らが侵入して来た時に発生したノイズに耐えられない」
「そもそも僕達って……貴方達は人間よ。人間は電脳には入れないわ」
志出野、月夜の反論にスバルは臆する所かむしろ前に出る。
「僕達は電波変換できます。言ってしまえば、電波化して電脳の中に入れるんです」
「「ッ！」」
その言葉で驚いたのか、赤羽夫妻はスバル達を見る。
「……危険が伴う。……それでも、かい？」
「ッ！　ちょっと志出野！　いくら何でも子供達を行かせるのは――」
志出野の問いを聞いた月夜は慌てたように反論する。しかし、スバルはその声を強い意志の宿った目と声で遮る。
「行きます。……力があるのにそれをしなかったら、もしもそれで大事な人に何かがあったら……。だから、僕はその大事な人を失わないために、戦います」
スバルの後ろのミソラやゴンタ、ジャックも同意見のようだ。志出野は考えるように目を閉じ、息を吐くと共に目を開いた。
「……分かった。……皆！　私達は今からこの子達を最大限サポートする！　……月夜、良いな？」

月夜は弱々しく頷き、スバルやミソラ、子供達全員の顔を見る。

「……えぇ。……スバル君、ミソラちゃん、ゴンタ君、ジャック君……お願いね……」

「はい！　行こう！　皆！」

スバルがハンターを構え、トランスコードを入力する。それに習い、ミソラやゴンタもトランスコードを入力。そして電波変換。

４つの光は電脳の中に入っていった。

「……頼んだぞ。４人とも……」

志出野が呟いた時、後ろからアイリスが現れた。

端末を伝って移動。その位置が志出野の後ろだったというだけだ。

『状況はどうなって――』

「志出野博士！　電脳がロックされました！」

アイリスの声を研究員が遮る。志出野は目を見開き、月夜は両手で口を覆う。

「何だって！　それじゃあスバル君達が出られないじゃないか！」

その言葉でアイリスは周りを見る。食堂からの距離からしてとっくに着いているはずなのに彼らが居ない。つまり彼らは電脳の中に入って、閉じ込められたという事だ。

『……通信は』

「えっ？」

『スバルさん達と通信は出来ますか？』

アイリスの言葉は冷静だが、その顔は必死だ。問われた志出野は研究員に尋ねる。答えはＮＯだ。ノイズの影響で通信ルートが潰されているらしい。

アイリスはそれを聞くなり無言でメインコンピューターのキーボードの前に立つ。

「き、君、一体何を……」

『……スバルさん、ミソラさん。大丈夫？』

アイリスはキーボードに少しの時間手をかざした後、ディスプレイに向かって呼びかけた。

「だから通信は――」

「あれ？　アイリスどうしたの？　ツバサ君は？」

「ッ！？」

この時、アイリス以外のこの部屋の面々は驚いた。繋がらないとされていた通信が開いたのだ。音声だけの通信ではあるが、それでも状況を知るには十分だ。

アイリスは即座に新しい通信ルートを作り、そこから通信をしている。

２００年前ＷＷＷによって奪われたフォースプログラムを短時間で完璧なまでに再生させたのは、誰あろうアイリスだ。システムの構造は良く知っている。また、彼女の処理能力があっての技だ。

驚く面々を余所に、アイリスはスバル達に現在の状況を尋ねる。その返答が……。

「えっ？　ウイルスばっかりだよ？　……数はすごく多いけど……」
『……罠？』
「えっ？」

スバルの言葉を聞いたアイリスが目を伏せて考え、導き出した答えにスバルが疑問符を浮かべる。
アイリスはスバル達が電脳に閉じ込められた事を伝えてから詳細を言った。

『だから、もしもスバルさん達をメインコンピューターの電脳に閉じ込める事が目的なら、相手の本命は外からの襲撃。……そしてそっちにウイルスばっかりいるという事は、外……ツバサの方に襲撃が集中しているかもしれないわ』
「大変じゃないか！！　僕達が出る方法は無いの！？」

スバルの声にアイリスは首を横に振る。

『たぶん……閉じ込めるのが目的なら長く閉じ込められるように犯人自身がコントロールしているはず。……犯人を倒さない限り、出られないと思うわ』
「でも、それならアイリスがツバサの加勢に行く事はできねぇのか？」

ジャックが通信に割り込んでくる。アイリスは志出野にこの場を任せて自分はツバサの元へ向かって良いかを聞こうとするが……。

ゴゴゴゴゴゴゴォォォォォォ……

「クッ！？」
「きゃっ！」
『うっ……』

突如強い揺れが走り、志出野、月夜、アイリスはその場に倒れるように伏せる。それと同時に、甲高いアラームが響き渡る。
志出野は打ち付けた腰を押さえながら研究員に尋ねた。

「何事だ！」
「さ、最終防衛ラインを突破されました！　現在、フォースプログラムは完全に制御不可！　このまま暴走を続ければ、ブースターの噴出バランスが崩れてスカイタウンは落下します！」

月夜もまた、机の脚を掴んだまま尋ねる。

「ロックマン達は！？」
「……現在、第3ライン……」

赤羽夫妻はそれを聞いて呆然とし、アイリスはディスプレイの前に戻る。ディスプレイからはスバル達が心配そうな声で呼びかけていた。

「アイリス！　志出野さん！　夜月さん！　皆さん大丈夫ですか！？」
『スバルさん……』
「ッ！　アイリス！　何があったの！？　そっちから大きな音がしてきたから心配して――」
『スカイタウンのシステムが暴走を始めたわ。……このままでは、落下してしまう……』

「ッ！！！」

スバル達の驚愕が音声だけでも伝わってくる。しかし、今はそれほど時間が無い。アイリスはすぐに言葉を続ける。

『私はこれから出来るだけ暴走を抑えるわ。スバルさんたちはその間に最深部に到達して、そこに居る者を捕らえるか倒して。……ウイルスだけでは限界がある。おそらく、最低でも1人はウィザードであれなんであれメインコンピューターに入った存在がいるはず』

「ちょっと待て！　それじゃあこのうじゃうじゃいるウイルスは……」

ジャックの問いに、アイリスは暴走を抑えるためシステムに介入しながら答える。

『……単なる時間稼ぎだと思うわ。ウイルスしか居ないと思わせてスバルさん達を油断させ、この事態にまで誘導したんだと思う』

「それじゃあ……全部犯人の計画通り……」

『……』

スバルの問いに対してアイリスは俯いて沈黙する。これは肯定の沈黙だ。電脳、現実。どちらにもやるせない空気が漂う。その状況を打ち破ったのは、スバルのパートナーのウォーロックである。

『あ――――！　うざってぇ！　アイリスはスカイタウンの姿勢制御！　オレ達は最深部まで行って犯人をぶっ潰す！　そんでツバサが外の奴をぶっ飛ばしてオレ達もここから出る！　これだけの事だろうが！！　オレでも分かるくらいに単純だ！！！』

一同はポカーンとしていたが、徐々に余裕を取り戻していく。

「……そうだね。ウォーロックの言う通りだ！　それじゃあアイリス！　僕達はなるべく早く最深部に行くから、それまでよろしく！」
『えぇ。そっちも気をつけて。……ウォーロックもありがとう』
『オ、オウ！』
『ケケケッ。ウォーロックちゃん照れてやんの～』
『ゴアッ！　うるせぇコーヴァス！　オイジャック！　コイツ黙らせろ！』

コーヴァスのからかいにウォーロックはダメージを受け、ジャックに抗議する。

「あ？　まぁ、別に良いんじゃねぇの？」
『笑いながら言うんじゃねぇ――――――！！！』

勘違いの無いように注意しておくが、この会話の間スバル達は何もしていないわけではない。倒しながら話をしているのだ。現に……。

『邪魔だゴラ――――！　ビーストスイング！！』

ウォーロックはコーヴァスとの直線距離に現れたウイルスを自身の爪でぶった切っている。

完全に余裕を取り戻した子供達を見て、志出野と月夜は顔を見合わせる。

「僕達も負けてられないな。月夜」
「えぇ。……それにあの子達の笑顔、あの子に重なるわ」
「……あぁ。だからこそ、僕達の不甲斐なさで、再び失わなければ

いけない事が無いように……」

赤羽夫妻は互いの過去の過ちを胸に、作業に掛かる。

８年前の、苦しい時期に起こした過ちだ。自分達の力不足のせいで、自らの子供を自分達のそばから離さなければいけなかった。いや、自分達が自分達の意思でそれを選んだのだ。

……ロックマン達が第４防衛ラインを突破した。全ての防衛ラインを突破するまでの予想時間、５分。

第１０１話　不如帰（後書き）

……不如帰……ソラを中心にして色んな事を繋げてくれる言葉です。

次回は戦闘が外に移ります。ロックマン達（中）の戦いも才葉シティ編が終わった後に番外編として書きますかね。少なくとも、予定の段階です。

それでは次回もお楽しみに！

第１０２話　町という名の墓標（前書き）

クイックロッドさんの言う通り、ツバサがすさまじい事に……。

長いので２話に分けました。一応、一番キリの良い所でキッタつもりです。

それではどうぞ！

第１０２話　町という名の墓標

――――屋外――――

強固な隔壁を、ツバサはバトルカードを用いて無理矢理ブチ破る。

外から来た敵は……と周りを見ていると、その元は向こうから来てくれた。どうやら隔壁を壊した音に引きつけられて来たらしい。はぐれウィザードやウイルスが主だが、その中心に居るのは……。

「やぁ。学園祭の時に言ったように、君にお返しに来たよ。……苦しみをね！」

ドッグ・ツイン。先日の学園祭でツバサにナイフを突き立てた人物だ。彼の背中の羽根はその時よりも大きくなっている。

「……１つ突っ込んで良いか？」

「別に良いよ」

呆然とするツバサ（呆れ半分）に対し、愉快気にケンジの電波変換したドッグ・ツインが応じる。ツバサは半眼のままドッグ・ツインの後ろの軍勢を指差した。

「あれ、お前の部下？」

ドッグ・ツインの後ろには５０体も居ようかというはぐれウィザードの姿があった。さらには、どこからかき集めてきたのかウイルスまでいる。ウイルスの数は３０ほど。計、８０くらいだろうか。

「ああそうだよ。才葉シティ周辺で起こった事件は全部僕達のやった事だ」

ドッグ・ツインが勝ち誇った笑顔で後ろの軍勢をアピールするように両手を広げる。

「……何回かニュースで見たが、それら全てが犯人の足取りを追うには不十分な証拠だったそうだな。……お前、案外頭良い？」

ツバサが自身の記憶を辿り、油断しない程度に余裕を醸し出す。

ドッグ・ツインはそんなツバサを可笑しそうに笑う。

「ふふふ。……そんなに余裕なのは、その内ロックマンや他の仲間が来ると思っているからかい？　残念ながらそれは無い。彼らはウェザー君の電脳に閉じ込める手筈だ」

「……つまり、外からの襲撃でスカイタウンを占拠するか、またはオレが標的ってワケか？」

ツバサの推測にドッグ・ツインは「ちっちっち」と、人差し指を振ってみせる。

「どっちも半分ずつ当たっているね。僕のターゲットは君だけど、スカイタウンの占拠も目的でもある。……スカイタウンには君の墓標として。スカイタウンに居る人には君の死の道連れになってもらうよ♪」

恐ろしい内容を笑顔で言った。無邪気な、残酷な、遊びでアリを潰すような、そんな笑顔だ。

まずは内側で騒ぎを起こして戦力をそっちへ向かわせて電脳に足止め。そしてメインコンピュータールームは才葉シティの子だったら1回は遠足なり何なりで行く所だ。外からでもその位置は分かる。

つまり、ツバサが外に出ようと出まいと、彼らはロックマン達の戦力を分散した上で襲撃していた事になる。ロックマン達が電脳に入った時点で、ドッグ・ツイン側にはアドバンテージが入っていたというわけだ。

ツバサはドッグ・ツインの企てを聞いて舌打ちをした。

「ッ！　バカな事を……」

「あれあれ～？　そんなこと言って良いのかな？　……やれ」

ドッグ・ツインは腕の液晶（ハンターの変化したモノ）から指令を出す。その瞬間、スカイタウンは大きく揺れる。

ゴゴゴゴゴゴゴォォォォォォ……

「ッ！！　これは！！　……まさかウェザー君からスカイタウンのコントロール権を――」

「そう！　この町は僕の思いのまま。つまり、君が僕達に反撃の1つでもすればこの町はすぐさま落下を始めるということだ！！」

ドッグ・ツインが狂気に満ちたような顔で手を縦に振る。攻撃の合図。一斉に周りのはぐれウィザードやウイルスがツバサに群がってきた。

反撃は許されないといっても、むざむざやられるわけにも行かな

い。
斜め右上と左からはぐれウィザードの電磁ムチが迫る。ツバサは片手で自身の目を遮りながら半歩引いてムチ同士をぶつけさせる。

バチチッ！！

『グッ！？』
『ま、眩しい！！』

激しい電気のぶつかり合いで眩しい閃光を発生させて距離を取ろうとするが……。

「甘い甘い！　ツインブレス！」
「ッ！！　っと！」

ドッグ・ツインは自身の周波数を変換させてツバサの背後に移動。そこならツバサに遮られて光の影響は無い。２色の光線をツバサは体を反らす事でかろうじて避ける。
しかし、ドッグツインと距離を取ろうにも周りにははぐれウィザードやウイルスといった者達しかいない。四面楚歌とはよく言ったものだ。はぐれウィザードとウイルスの壁である。

その手際の良さにツバサがほんの少し目を向けていただけで、ドッグ・ツインが距離を詰めていた。

「余所見すんな、よ！！」

腹、位置で言うと小腸の辺りだろうか。ドッグ・ツインの拳がツ

バサにめり込む。何度も言うが、電波変換した人間の力は何倍にも上がる。体重を乗せたドッグ・ツインの拳により、ツバサは後ろに吹き飛ぶ。しかし、後ろには先程述べたようにはぐれウィザードが……。

『ほぉらよ！！』

はぐれウィザードの使う武器の中には電磁ムチも存在する。それがツバサに振るわれた。

バチバチバチ！！！

「ぐあああああ！！」

ツバサが悲鳴を上げている間にドッグツインが近づいて来る。そして、はぐれウィザードが電磁ムチを離すと共にツバサは膝を崩すが、ドッグ・ツインは髪を鷲掴みにして無理矢理立たせる。

そして、勝者独特の優越感に浸ったような顔でツバサに話しかけてきた。

「どうだい？　僕が束ねているウィザード軍団は？」

「……暴れてんのが才葉シティだけなら井の中の蛙だろ」

ツバサの減らず口に、ドッグ・ツインの機嫌は急降下する。ツバサもやせ我慢ではなく、奥の手として魔法と自身の命を使う事もできる。反撃は出来ないが、ＳＨＩＥＬＤ（シールド）を使って攻撃を防ぐ事はできるだろう。隙を見つけて強力なヤツをぶつけて流れを変える。

「……どうやらまだ痛めつけられないといけないようだね。おい、こいつを押さえててくれ」
『へい』
ドッグ・ツインの声に2体のはぐれウィザードが答える。ドッグ・ツインがツバサを頬リ投げ、はぐれウィザード2体がそれを受け止める。ツバサの両腕を1人ずつ押さえる形だ。足にはウイルスが纏わり付き、寸分たりとも動かせそうに無い。
「さて、それじゃあ――」
ドッグ・ツインは準備運動とばかりに腕を回し、振りかぶった。
「キミが負けを認めるまで殴り続けるとするよ」
ズンッ
「グッ……」
ツバサの苦しむ声に快楽を覚えるように、ドッグ・ツインは殴り、蹴り続ける。
「まだまだ♪」
ドゴッ！　バシッ！　ドスッ！　ゲシッ！

ツバサは一方的に殴られ蹴られ、４分ほど経った。ドッグ・ツインは満足気で優越感に浸った顔。ツバサは項垂れているが気絶はしていないし戦意も失っていない。

先程言ったように、チャンスを待っているのだ。手足が自由になる時、つまり、止めの瞬間を狙っている。弱っている様子を見せれば相手は油断し、止めの時は手足が自由になる。動物は獲物を仕留める時が一番油断しやすいモノだ。

ドッグツインははぐれウィザードに指示してはぐれウィザードの壁に一部穴を開けた。その先には誰かが落ちないようにする欄干があり、そこに向かって炎牙の炎の光線が放たれる。

ズドォォォォォン！

欄干は砕け、さらには蒸気が上がっている。電波人間ならともかく、生身の人間が食らったら骨まで損傷が行きそうだ。

ドッグ・ツインは事もあろうにツバサをそこに放り投げた。

「クッ……うぅ……」

熱いには熱いが耐えられないほどでもない。

毎回戦闘のたびに服がボロボロになってたまるかというツバサの考えで彼の服はリアルウェーブにしているわけだが、それが幸いしてか、熱さが少しは改善された。そして、今手足は自由。後は相手が完全に油断した時に一気に叩く。

「それじゃあ、君が落ちた後このスカイタウンを落とすよ」
「な……に？　反撃しなければ――」

言っている最中、ツバサは気付いた。ドッグ・ツインが言ったのはあくまで反撃したら落とすというだけで、「落とさない」とは一言も言っていない。不覚以外の何でもない。

ツバサが悔しさから拳を固めているのを見て、ドッグ・ツインは勝ち誇った笑みを広げる。

「……その様子だと分かったようだね。そう。どっちにしてもこの町は落下する。君はナイフで刺されても全然何とも無かったけど、町１つ落としてキミを潰せば、流石に死ぬでしょ」

落下したツバサに町を落として、文字通り町そのものが墓標になるわけだ。ツバサを殺す。ただそれだけのために、１つの町と人々を道連れにしようとしている。

「それじゃあ、このまますぐに落としてもつまらないから余興をしよう。ここにいるウィザード５０体の攻撃を全て受けきってから落とす事にする。……ここに居るウィザード達は人間の事を見下していてね。僕も手懐けるのに苦労したよ。……でも、目的が同じな上に僕の方が強いからね。今は言いなりさ」

ドッグ・ツインは悠々と後ろに下がって、代わりに、はぐれウィザードが出てきた。表情は全員見た目が同じなため分からないが、恐らく嘲るような笑みを浮かべているだろう。

『オレ達みたいに電脳へ行く事も出来ず、戦闘能力が圧倒的に低い

貴様らが我がもの顔で我らの上に居る屈辱、思い知れ！』

はぐれウィザードが電磁ムチを振りかぶる。せめて視覚への攻撃は防ごうとツバサは視線を地面に向ける。

第１０３話　不死鳥（前書き）

……しかしまぁ、このサブタイ……次の話でも関係してんだよな……。

第１０３話　不死鳥

はぐれウィザードの電磁ムチを視覚等の感覚組織に当てないように顔を地面に向けるツバサ。痛覚はこの際仕方が無い。

『な、何だお前！　ギャァァァァァ！！』

しかし、最初に５感に訴えたのは痛覚ではなく聴覚だった。それも、はぐれウィザードの絶叫。何事かと上を向くと、ツバサの顔のそばにはぐれウィザードの手首から先が落ちてきた。切り口は鋭利な刃物で切り裂かれたようで、さらには僅かに炎が残っている。焼き切る刃。それを使うのは……。

「ツバサ、大丈夫？」

ソラの電波変換したスザク・フレアがはぐれウィザード達とツバサの間で、右手に炎の刃、『五の舞：炎翼』を構える形で立っている。

スザク・フレアは周りを警戒しながらツバサに声をかけ、ツバサはゆっくりと立ち上がる。

何かもう『弱っているフリして大逆転』作戦が通じないような気がしてきた。

「あぁ、こっぴどくやられたけどな」

『あんたにしては珍しいわね。反撃しないだなんて』

スザクが実体化して意外そうにツバサに声をかけてくる。ツバサは服に着いたゴミを払いながらスカイタウン自体が人質に取られて

いる事を話す。無論その間ウイルスは襲ってくるが、ツバサとスザク・フレアは互いに互いの背後を護る形で戦う。
はぐれウィザードとドッグ・ツインは動く気配が無い。話していて隙があったから攻撃したのと、スザク・フレアのおおかまな戦闘力を測るためだろう。
数的優位な立場の者の、傲慢な作戦だ。
スザク・フレアはウイルスを切りながら納得したように頷いた。
「なるほど。……つまり、こいつらを倒さないと静かにパパとママに会えないって事だね」
その言葉でツバサの動きが止まり、同時に納得もした。旅館からここまでそうとうな距離がある。偶然にしては出来すぎていた。
彼女は、本当の両親と話をするためにこの町に来たのだ。
「……ソラ、お前の両親がお前を捨てたのは――」
「ッ！　ツバサ後ろ！」
「ッ！！」
振り返ると、ドッグ・ツインが自身の最強技の用意をしていた。
肩の砲口にエネルギーを溜めている。
「僕達が町を人質に取ったのはあくまで勝率の補強のため。１人増えようとどうだろうと、君達が僕達に勝つ事は出来ない！　……エンドブレス！！」
赤と青の光線が混ざる事無く螺旋を描くようにツバサに迫る。
それと同時に、ツバサも片手を前に突き出す。

「ＳＨＩＥＬＤ（シールド）！　我に降りかかる災厄を打ち砕け！」

ギィィィィィィン！！！

見えない壁は光線を防ぐ。スザク・フレアはこの隙にドッグ・ツインを倒してツバサの負担を少しでも短くしようとするが、残ったウイルスとはぐれウィザードが立ち塞がって進めない。

「ッ！　そこをどいて！！」

スザク・フレアは叫びながら手首の炎を巻き上げて前方を焼き払う。灼熱地獄に耐えられず、はぐれウィザードとウイルス、計３０ほどがデリートされていく。残りは約５０。

不意に後ろで「ピシッ」と何かが割れる音がした。続いて響いてくるのは何かが硬いモノに激突したかのような轟音。

嫌な予感がして振り向いてみると、ツバサがいた所に彼は無く、そこから少し離れた壁のそばにうつ伏せで倒れていた。ツバサが打ち付けた壁は凹んでおり、その時の衝撃の強さを物語る。

「ツバサッ！　……スザク、悪いけど足止めお願い！」

スザク・フレアは、残ったはぐれウィザードとウイルスの足止めをスザクに頼み、ツバサの元へ向かおうとする。

しかし、彼女の前にドッグ・ツインが立ち塞がる。

「サウザンドブレス！」
「ッ！　二の舞、障渦！」

ドッグ・ツインの両肩から放たれる無数の炎と氷弾を、渦状に巻き上げた炎で防ぐ。

「バトルカード、ソード！」

幾千もの攻撃が止んだと思ったら、ドッグ・ツインがソードを転送して炎の壁を貫通して斬りかかって来た。
スザク・フレアは横へのステップでそれをかわし、右手に炎の刃、『炎翼』を作り出して右下から左上にかけて炎の軌跡を描く。

炎の刃はドッグツインのソードを焼き斬り、ドッグ・ツインは飛びのいて距離を取る。

「中々やるね。キミ、誰？」
「……ソラ。黙って退散するか、そこをどいて」

ソラの視線の先、ドッグツインの背後にはツバサがいる。
ドッグ・ツインはチラッとツバサを見て嫌らしい笑顔を浮かべる。

「あ～なるほど。キミはあの子の事が好きなのか。それじゃあ、なおさらあの子に止めを刺さないとね」
「……どうして……」

スザク・フレアの怒りを楽しむようにドッグ・ツインは続ける。

「愛する人が目の前で死ぬのって、感動ドラマみたいで感動するじ

ゃん」

気軽く言ったドッグ・ツインに対し、スザク・フレアの怒りは頂点を迎える。

「ふざけるな！！　あんたなんかにツバサは殺させない！」

彼女は手首の炎を大波のように巻き上げ、ドッグツインを飲み込もうとする。

「ははっ！　そうこなくっちゃね！」

ドッグ・ツインは上に飛び上がる形でそれをかわすが、炎の波は生き物のように自在に動き、上空のドッグ・ツインを飲み込んだ。

「グッアァァァァァ！！」

スザク・フレアは炎に苦しむ悲鳴を聞きながら自身の羽で飛び上がり、ドッグ・ツインの下方から突き上げるように切り裂いた。

「はぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ズバッ！

「グゥッ！！」

「これで止めよ！！」

スザク・フレアは突き上げた刃を振り下ろす構えを取る。しかし

……。

『そこまでだ。……お前の相棒がどうなっても良いのか？』

不意に投げられた言葉にそっちを見ると、スザクがはぐれウィザードに捕らえられていた。考えてみれば当然だ。相手は５０体近くのウィザードとウイルス。いくらスザクが強い部類に入るバトルウィザードだとしても、数が多過ぎる。

とはいえ、２０体くらいを倒して残り３０まで減らせたのは、スザクのポテンシャルあってのモノだ。

「スザクッ！」

いくら相手を追い詰めていても親友を助ける事が優先。スザクの方へ向かおうと体を反転しようとした時、前方から両肩を掴まれる。

「僕を前にして余所見なんて、侮りすぎだよ」

直後、超至近距離から赤と青の螺旋状の光線。『エンドブレス』がスザク・フレアを襲う。

「――――――ッ！！！」

声にならない叫び声を上げながら光線に飲み込まれて吹き飛ばされる。そして、背中を強く壁に打ち付ける事で止まった。

「ガフッ……」

急速度から急停止。彼女の臓器が背骨に押し付けられて肺の空気が不自然に外に出される。

ドッグ・ツインは視線を彼女からツバサに移す。ツバサは苦しむように胸と頭を押さえている。彼がスザク・フレアに加勢できなかったのは、それらの痛みが理由らしい。

ドッグ・ツインはその状況を訝ったが、チャンスを逃す事はしない。至近距離からエンドブレスを食らわせて止めを刺すために、残り３０の軍勢から離れる。

その瞬間……。

ゴォォォォォォォォォォ！！！！！

『ギャァァァァァァァ！！！』
『アジィィィィィィィィ！！！』
『腕が！　オレの腕が！！！』

後ろから聞こえる阿鼻叫喚。そして熱気。振り向くと、３０体ほど居たはずの部下が９割消失していた。残りの１割も腕や下半身を持っていかれていたり、まさに地獄絵図の様相だ。

そしてその所業をやった存在の位置はすぐに分かった。彼女の熱気が伝わってくるからだ。……何メートルも離れているにも関わらず……。

それは、巨大な火の鳥を思わせるモノだった。口にはスザクをくわえている。ゆうに３メートルを越えているだろうか。

スザク・フレアが吹き飛ばされた位置から彼女がいない事と、彼女の倒れた位置とはぐれウィザード、そして火の鳥が居る位置は一

直線上。つまり、あの火の鳥は彼女という事だ。

火の鳥の翼や体に触れたはぐれウィザードやウイルス達は、『焼け焦げる』を通り越して『消滅』した。

電波の欠片すら残さずに、完全に、燃やし尽くしたのだ。

火の鳥は1回羽ばたくと、自身の体、すなわち炎を霧散させる。

その中から現れたスザク・フレアは赤ん坊を抱えるようにスザクを抱え、自身の6枚の羽を伸ばしていた。

驚く事に、先程までの戦闘で受けた傷が1つ残らず消えている。

「な、なんで傷が……」

流石にこれには驚いたらしく、ドッグ・ツインは初めて余裕を崩した。スザク・フレアの方も、余裕というよりは成功した事に安堵しているように見える。視線は下向き、抱えているスザクに向けられている。

「火の鳥……言い換えれば不死鳥は、死ぬ時に自らの炎で身を焼き、その炎の中から蘇るという……」

「ッ！？」

スザク・フレアの呟きに驚いているドッグ・ツインに対し、彼女は顔を上げて真っ向からドッグツインを見据える。

「前にツバサが、スザクは火を司る者だから、生命の活力や再生も司っているって言ってた事があってね。そこからアイデアを得たってわけ」

ぶっつけ本番だったから成功するかどうか分からなかったけどね。
スザク・フレアはそう言って笑ってみせる。一方のドッグ・ツインはますます驚きを顔に満たした。

「……それをたった1回で成功させたのか……。だけど、そんな非科学的な事、どっちかというとマンガで出てきそうな眉唾な事を、キミは信じたのか？」

半ば疑うような聞き方のドッグ・ツインに対し、スザク・フレアはしっかりと頷いて見せた。

「もちろん。……ツバサの事、信じてるから」

「ッ！！！」

その言葉で、ドッグ・ツインは自身の学校の様子を思い浮かべた。

成績、容姿、理由はどうでも良い。多数派と違っているだけで疎外される毎日。いくら勉強して認めてもらおうとしても、一度貼られたレッテルは剥がれない。

相手は剥したくないのだ。相手が自分より上だと認めたくないから。

（……学校で、家で……僕を信じてくれた人がどれだけいたんだろう……）

それらを思い出す毎に、怒りが込み上げてくる。悲しみが込み上げてくる。

「……なんで僕が……」

「？」

ドッグ・ツインが何かを呟いた。その声をスザク・フレアは聞き取れず、首を傾けて疑問符を浮かべる。
ドッグ・ツインは今までの思いを噴火させるように放出した。
「何で僕が認められないんだ！！　あれだけ頑張ったのに！　あれだけ尽くしたのに！　……認められようと……頑張ったのに……」
最後の口調は弱々しく、拳は震えている。
スザク・フレアは目を伏せて、優しく語りかけた。
「……キミも周りに認めてもらおうと必死だったんだね」
「ッ！？」
「私も同じだった。認めてもらうために、捨てられないために頑張って……。でも、今はたくさん私の事を思ってくれる人がいるよ」
「……」
急に優しい言葉になった事も驚きの理由の1つだろう。ドッグ・ツインは静かにスザク・フレアの話を聞いている。
「だから、キミにもきっと――」
「止めてくれよそんな楽観的考え。……虫唾が走る」
しかし、彼が希望を持つには今までが暗すぎた。その闇を照らす事はできる。……それには良い環境と長い時間が必要だが、そんな時間は、『運命』や『神』と呼ばれるモノは与えてはくれなかった。
「僕はキミみたいな、皆がいるから私が居るみたいなヤツが大嫌いだ。それって単に周りに依存してるだけじゃないか」

そう言ってドッグ・ツインはスザク・フレアに背を向けた。逃げるつもりだ。

「待って！　話を――」

「次に遭ったら今度こそ倒す。……精々それまでそこの黒髪と馴れ合っていれば良い」

彼はそう言って飛び去っていった。スザク・フレアは、ソラは、追う気にはなれなかった。彼もまた、昔の自分と似ていたから。……いや、彼の抱えている現実はそれより酷いだろう。

「……あっ、そうだ。ツバサ……」

ツバサの事を思い出し、スザクを抱えたまま彼の元へ下りる。

「ツバサ、大丈夫？」

「……」

返事が無い。かといって気絶しているわけでもないようだ。右手を地面に付き、左手で顔の上を塞いでいる。ちょうど、平手を鼻から上に覆うような感じだ。指は髪を掻き上げるように上向きである。

「？　……ッ！？」

彼の顔を覗き込んだスザク・フレアは目を見開く。彼の双眸は黒。しかしそれは瞳の事で、眼球の事ではない。

今の彼の双眸は、黒い眼球に瞳は赤。

あなたは誰？

ソラの問いはドアの開く音に掻き消される。

「ツバサ君、ソラさん。大丈夫！？」

スバルを筆頭に中に居た面々がツバサとソラの周りに集まる。ツバサの異変を言おうとしたソラの言葉は、再び飲み込まれた。

「……パパ……ママ……」

駆け付けた中に、両親が居た。彼女の言いたい事は、口から出たときには変わってしまっていた。

赤羽夫妻もまた、どう接したら良いか分からないでいる。

「……あの――」

何とか話そうとソラが口を開いた時、彼女の肩に手が置かれる。ツバサの手だ。

「……その話は後でも良いだろ。……少しきつい。……手、貸してくれ……」

いつもの彼の目に戻っていた。弱々しいが、優しい光が宿る黒の双眸だ。

「……うん……」

口で返事をした。頷きもした。しかし、彼女の中から先程の目が消える事は無かった。厭世的で、冷酷で、まるで全ての人間のマイナスの感情を込めているような、黒と赤の目。

ソラは初めて、ツバサに恐怖を感じた。……彼ではなく、彼に潜む、存在に……。

第１０３話　不死鳥（後書き）

次回は色々と驚くかもしれませんね……。一致する点が多すぎるので……。

次回で（多分）スカイタウン編終了です。その次はセントラルシティ編ね。

それでは次回もお楽しみに！

第１０４話　歩み寄り（前書き）

……一日で書いちゃったよ。……疲れた。めっさ疲れた……。

……今回の話で、ソラが両親に捨てられて、スザクと出逢った事が偶然でない事が明かされます。

２つの事が『ホトトギス』という言葉で繋げられるのですよ……。

ガクッ……

「……作者が倒れたので、ここからはオレ、ツバサが。第１０１話歩み寄り、お楽しみください」

第１０４話　歩み寄り

ドッグ・ツインが退却し、彼の持っていた電脳のコントロール権もメインコンピュータールームに戻ったらしく、スバル達は電脳から出ることに成功した。

外に出てみるとウィザードの残骸や建物の破損などなど。様々な物が壊れていた。ツバサとソラは割と入り口に近い場所に居た。彼女がなぜここに居るのか分からなかったが、それ所ではない。ツバサが弱り切った顔で「手を貸してくれ」と言ったのを境に、彼の意識は途切れたのだ。

――――同日・２０時――――

スカイタウンの病室。ツバサはあれから目覚める様子が無い。

「……」

彼のそばに居るのはソラとスザク、そしてアイリスだ。

もっとも、スザクとアイリスは今日の事で疲れたらしくぐっすり眠っているので、実質的にツバサのそばに居るのはソラだけという事になる。

ソラはスバル達に自分がここに来た理由と戦いの経緯を話して、スバル達は現在、事件を聞いて駆け付けてきた暁に事件のあらましを説明している。

説明は自分達に任せて、ソラがツバサの事を看れるようにという

スバル達の配慮だ。暁の性格上、それは彼も了承しているだろう。
少なくとも、ツバサが目覚めて落ち着くまで、事件の事を聴くのは待ってくれるはずだ。

旅館への連絡も暁がしてくれるらしい。

「すぅー……」

ツバサは静かに寝息を立てている。その寝息は穏やかなもので、そばのイスに座るソラに安堵を与える。

しかし、同時に不安だった。目覚めた時の目が、あの時のような黒い眼球に赤い瞳だったらどうしようという不安。または恐怖が、彼女の心を曇らせる。

（……ツバサはデューオに生かされて、帯広博士と出逢って、一緒に過ごして、ナビと博士が目の前で殺されて、ナビを助けて回って……。魔法を使えて……。ねぇツバサ。……キミは他に、何を抱えてるの？）

ソラは今までツバサから聞いた話を思い出しながらイスから立ち上がってツバサのベッドに腰を下ろす。そして、彼の額に自身の手の平を乗せる。

（……このままこいつの抱えている事が伝われば良いのに……。好きな人が1人で抱え込んでいるのを見るのは……辛いよ……）

彼女はそんな事を思いながら、自身の目も伏せて静かに息を吐く。大きく吐いたらその声でツバサが目覚めてしまうかもしれない。できればそんな目覚め方はして欲しくない。

が、そんな心配が無用で、そんな心配をした方がバカだったと、彼女はすぐに思い知る事になる。その理由は……。

ス――――――

「ひいいいいい？」

ツバサの額に置いている手首の裏から肘を越えて上腕の途中まで、何かがソラの腕を登ってくる。間の抜けた声を上げながら目を開くと、ツバサがソラの手首を片手で押さえ、もう片方の手でソラの腕を指で伝っていた。

例えるなら、背中に指を一本付けて『ス――――』と上や下に伝わせるアレだ。それの腕バージョンという事になる。

言ってしまえば、クスグッタイのだ。

「ツバサ何を――」

言いかけて気づいた。彼の顔がしてやったりな笑顔を浮かべている。目はいつもの黒の双眸だ。月の光に照らされて淡い光を帯びている。

「……目覚めたのいつ？」

「今さっき。目覚めたらちょうどお前の手があってな。つい♪」

「……」

ツバサがニッと笑顔を作るのに対し、ソラはジト目。先程述べた

ように、『こいつに心配なんて無用だった』及び、『こんなヤツを心配した私がバカだった』という内心になる。

いつものツバサなら笑いながら反省の色の無い弁解をしてくるのだが、今回はそれが無い。ただ、「フッ」と薄く笑って窓の外を見るだけだ。ソラの向こう側の、澄んだ夜空を。

いつもと違うツバサのリアクションを不思議に思い、ソラは首を傾げながらツバサを見る。

「？　ツバサ？」

「……部屋の外に居る臆病者さん、出てきたらどうですか？」

「へっ？」

意味不明発言をしたツバサにきょとんとした顔をするソラ。その時、病室のドアが静かに開いた。ソラがドアの方を見ると、そこには彼女の両親が立っていた。

切り出し方が分からずにずっと外に居たのだろう。

「……ソラ、あの――」

「……聞きたくない」

父親、志出野の言葉を、ソラは目を逸らして両耳を閉じる事で拒絶する。すんでの所で恐くなったのだ。昼の時はとっさに言えた『パパ、ママ』という単語でさえ、まともに言えるか分からない。

それでも歩み寄ろうとする両親をツバサが声で制した。

「自分の子供を他の鳥に預ける不如帰だって、一時預けて後で引き取るなんて中途半端な事はしないよ」

不如帰（ホトトギス）。

有名な、天下取りの3大武将の句にも読まれた鳥だ。『鳴かぬなら　殺してしまえ　ホトトギス』である。俳句では季語として夏に詠まれる。ちょうど盆の時期だ。

その性質の1つに、『託卵』というモノがある。他種の鳥の巣から親鳥がいなくなったのを見計らって、巣の卵を地面に落とし、自らの卵を置いていく。

自らの種の繁殖を他種に依存する。それが不如帰だ。なお、有名な鳥でいえば『カッコウ』同様の性質を持っている。

「……キミは鳥と僕達が同じだと？」

志出野は怒りを秘めた目でツバサを見る。その怒りを感じてか、ツバサは逸らす事無く視線を返す。

「やってる事は同じだろ？　……それに、あんたら夫婦の名前もそれを物語ってる」

「？　名前？　……志出野と月夜……私達の名前はホトトギスと関係無さそうだけど」

2人と意見を合わせるのはまだ良い気持ちはしなかったが、ソラもそこは疑問に思い、ツバサの方を見る。

低音と共にツバサのベッドが持ち上がり、上半身に値する部分が背もたれのようになる。ツバサはそこに背中を預けると、その疑問に答えた。

「不如帰には色んな異名があってな。文目鳥（あやめどり）、魂迎鳥（たまむかえどり）、黄昏鳥（たそがれどり）。……そして、死出田長（しでのたおさ）」

「ッ！　それってパ……志出野さんの！」

志出野は娘にパパと言われかけて訂正された事に若干のショックを受けながらも月夜の方を見る。

「……それなら月夜は？」

「百人一首の句だよ。……不如帰　鳴きつる方を　眺むれば　ただ有明（ありあけ）の　月ぞ残れる。……月に会う鳥、不如帰だ」

3人が目を見開いているのをよそに、ツバサは続ける。

「おまけを言えば、月ってのも異なものでね。月は太陽の光を反射して光る存在。太陽が無ければ光れない。依存……これも不如帰との合致点だ」

もっとも、別の次元のもう1人のツバサが創りだした『炎』は『月』ではなく『太陽』に属するモノだが、それはまた別の分け方らしい。クロウの創り出したモノ達は、大まかに言えば『能動』か『受動』かで分けられる。

「ッ！！　それじゃあまるで僕達がこの子を捨てる事が当然だったみたいじゃないか！　……私たちはあの頃……生活が苦しくて……」

「……それが私を捨てた理由なんだね……」

「「ッ！！」」

志出野の呟きをソラは聞き漏らす事は無かった。志出野としてもポロッと零した言葉なのだろう。自分の言った事に驚いた後、俯いてその頃の事を話し始めた。

生活苦。

９年前、赤羽根夫妻はフォースプログラムの研究に取り掛かった。その頃は幼いソラを含め、３人仲良く、順風満帆に暮らしていた。ソラは当時４歳。幼いながらも自我が目覚め始めている頃だ。

生活が苦しくなり始めたのは８年前だという。育児費や研究費、交通費、様々な出費がかさみ、３人では生活できないまでになっていたのだ。

だから彼らはソラを捨てた。

「……でも、僕達の名前が理由だったのか――」

志出野の零した言葉をツバサは肩を揺らして鼻で笑った。

「勘違いするなよ。名前ってのはその人間の魂の一部と言っても良い存在だが、その影響力は精々弱い暗示クラス。本当の意思の前には何の意味も持たない。……甘えるな。あんたらは自分達の意思でその子を捨てたんだ」

「「……」」

ツバサの言葉に夫妻は俯く。彼が言っているのは小学生らしからぬ言葉。しかし、その言葉は悲観でもなく主観でもなく、『現実』だった。重たくても、背負わなければいけない『現実』であり、『罪』だ。

ツバサは夫婦が黙るのを見てからソラを見る。

「それで、お前はどうしたい？」

「えっ？　どうって……」

「8年前、女将に拾われてなければ死んでた事への、この夫婦に対するオレの八つ当たりは終わった。一通りの事も白状させてお前は自分の捨てられた理由を知った」

どうやら不如帰などの話は夫婦にソラを捨てた理由を話させるための誘導尋問だったらしい。……もっとも、『名前』が理由と言うのも10分の1未満とはいえあるのだという。

「名前はそいつの一部だからな。意味は当然持ってるさ。……後は、お前が選ぶ事だ」

「……私……が……」

「そう。お前がだ。両親か旅館か。ソラはどっちに居たい？」

先程夫婦に接した時とは打って変わって、ツバサは優しい笑顔でソラを見る。どうやら先程の八つ当たり発言は本当だったらしい。下手をすればソラが死んでいた。

「もしかしたら拾ってくれる人がいるかもしれない」

そんな不確かな賭けに出た夫婦に怒っていた。口では『違う』と言いそうだが、彼はソラのために怒ってくれたのである。

だから、夫婦に厳しい言葉を投げたのだろう。彼ならもっと言葉を選べたはずだから。

ソラの次の答えに僅かな希望を見て、夫妻は彼女の方を見る。

ソラもまた、ベッドの反対側、夫妻の方へ移動する。

「……赤羽博士」

ソラは自分の両親を赤羽博士と呼んだ。その時点で、ほぼ答えは

決まっている。ソラは2人の方を向きながら目を逸らす事無く言った。

「私はもうあなた達の子じゃありません。私は赤羽ソラ。旅館うらかわの、住み込み従業員です」

彼女は旅館を選んだ。その事は両親にショックを与えたらしく、再び夫妻は項垂れる。しかし、ソラは「でも、」と言ってから続けた。

「お客としてくれれば周辺の案内くらいはします。女将や皆にも、あなた達の事を紹介したいから」

多分女将はあなた達の事を怒るだろうけど。

そう言ってソラは苦笑した。自分を捨てた両親に笑顔をくれたのだ。苦笑とはいえ、笑顔には違いない。

完全ではないが、ソラは両親を許したのだ。その事に気付いた夫妻は彼女を抱きしめる。

「ソラ……」

「ありがとう……」

「……うん」

ソラもまた、安らかな笑みを浮かべてそれを受け入れる。

どれだけ時間がかかろうと、まずはキッカケが無ければ状況は変わらない。その一歩を踏み出したのはソラだ。夫妻はソラを捨てた事に負い目を感じて踏み出せず、ツバサはほんの少し手を貸しただけ。

踏み出したのはソラだとしても、手を貸してくれたツバサにお礼の意味を込めて、首を少し捻って彼の方を向き、ウインクを送る。
ツバサは笑みを返した後、窓の外を見て、昼間の事を思い出していた。

（……あの時、ドッグ・ツインの怒りがオレのＰＧＭを伝わってネビュラ・グレイに力を与えていた。……気付いたらソラの肩に手を置いて……。もし、あの時そばに居たのがソラじゃなかったら、オレは……）

戦闘中、彼が苦しんでいたのはネビュラグレイの侵蝕にあっていたからだ。そして、眼球が黒く染まり、瞳が赤くなったのはその間飲み込まれていたからに他ならない。体の主導権を奪われながらも暴れないように抑えてはいた。しかし、抑えきれずにソラの肩に触れて、そこで主導権がツバサに移ったのだ。

ソラは悪いモノを引き寄せず、無意識に祓う『気』を持っている。それ故に戻れたのだ。もし、それが彼女ではなくて他の誰かだったら、ツバサはその人間を殺していたかもしれない。

（……時間は、そう無さそうだな……）

夜空に厳しい顔を向けているツバサに、志出野が話しかける。

「ツバサ君」

ツバサは思考を止めてそちらを向いた。それとほぼ同時に、夫婦とソラが頭を下げてきた。

「ありがとう。キミのおかげでソラと関わるキッカケを得たよ」
「オレがやったのは八つ当たり。一歩を踏み出したのはソラですよ」
「それでも、私が変われたのはツバサのおかげだよ。本当にありがとう。……ツバサ」
「ッ！　……」
素直にお礼を言われると心が痛んだ。あの時、触れたから戻れたが、もしもバトルカードなど触れない攻撃手段を選んでいたらと思うと、彼女の笑顔がこれ以上無いほど苦しかったのだ。
それを隠すように、ツバサは軽薄な笑顔を浮かべる。
「それこそキッカケはオレじゃなくてスザクと出逢ったからだろ？　スザクと出逢わなければオレとここまで関わる事も無かったんだから」
「……そこまで遠慮する事なくない？　運命的～とか、偶然とかにロマンを感じないの？」
年頃なら運命的出逢いや偶然の出逢いを夢見てもおかしくは無いだろう。まぁ、ツバサとソラがまともに話したのは文字通り夢の中なのだから、それもある意味では間違ってはいない。
「う～ん……（つっても、スザクと出逢ったのは必然みたいだからな……）」
「えっ？　必然？」
ソラは耳が良かった。小声で話したつもりが聞こえていたらしい。無邪気な子供のように目がキラキラしている。

「それじゃああなた、若い子達だけにしましょうか」
「えっ？　でも、彼の言う必然ってのが気にな――」
「良いから来なさい。……それじゃあソラ、ツバサ君。私達は暁さんにソラの事を色々聞いてくるから」

……さすがソラの母親。自分（ツバサ）にする時みたいに強引に引っ張っていく。多分暁から色々話を聞くというのも本当で、ソラの昼の姿…電波変換の事を聞きに行くのだろう。

まぁ、これからする話の内容からしてそれはむしろ良いのかも知れない。

ツバサはため息を付いてソラを手招き、ベッドに座るように言う。遠いより近い方が話しやすい。

「死出田長（しでのたおさ）」

彼は不意に語り始める。

「文字は違うが、死出田長も志出野さんも同じ読みを持っていて、意味はホトトギスだ」
「……うん。さっき聞いたやつだね」

名前にはその存在がその存在たり得る理由でもある。言ってしまえば魂の一部だ。だから、小さいながらも影響力がある。先程の彼の話だ。

「あぁ。死出田長の死出は、死から出ると書いて死出。死から出る……死を超越……不死鳥。……不死鳥の別名はお前も少しは聞いた事があるだろう。鳳凰、火の鳥、そして朱雀」
「ッ！　それって……！」

ソラの驚きにツバサは頷いてみせる。彼が若干笑顔なのは、ソラの勘が良い事を感心してだろう。なお、不如帰は冥界を行き来する鳥とも言われていた。

「ああ。お前とスザクが出逢ったのはほとんど必然だったようだな。直接その名前を持つ父親でなくてお前が選ばれたのは、お前の方が適性が有ったからだろう。……あの父親よりもな」

「……それじゃあ、昼の技も関係あるのかな？」

「？　昼の技？」

「うん。実は――」

ソラは昼の戦いで傷を回復させた上に攻撃した技を説明した。それもまた、不死鳥を思わせる技だったのだ。

ツバサは興味深げに聞いて、やがてこう答えた。

「……スザクの力を使いこなしているのかもしれないな」

「ほんとっ！？」

彼女がここまで喜ぶのは彼女の願いが関係している。

彼女の願いは『ツバサと一緒に居る事』。そのためには、この戦いの間2人とも欠ける事無く生き続けなければいけない。そのための、自分と周りを護るための『力』……『手段』が欲しかったソラには、これ以上無いほどに嬉しいのだろう。

「あぁ。……さぁ、そろそろ自分の部屋に戻れ。暁の事だ。連絡だけでなくてお前の部屋も用意してるだろ」

ツバサはそんなソラに笑顔でしっかりと頷いてやり、部屋の時計を見てソラを自室に帰る様に言う。

「あぁ、それならケッタよ」
「何で！？」

彼女のケロッとした発言にツバサが思わずツッコミを入れ、ソラはニッコリ笑顔を浮かべる。

「いや～そろそろそのくらいの仲になっても――」
「ダメダメダメダメ！　お前少しは自覚持て！」

女性である事とスタイルが良い事に。なんて、早々言えない。

「あぁ、私が女性でスタイルが良いから？」
「自分で言った！」

「そんなの気にしないで良いのに」
「するから！　男性だったら大抵気にするから！」

ツバサのツッコミにソラは「ふぅむ」と考え……。

「……男性だったら大抵興奮するんじゃないの？　……あ、そっか。ツバサはウブだからそういうのに弱いんだ」

彼女の事だからツバサの事は分かっていただろう。故に、今までの発言はワザとだ。そして次はいよいよ『オチ』。『オチ』という事は、本気ではないと言う事。つまり、ツバサをからかいたいだけだ。

「だったらウブとツバサを合わせて、君のあだ名はウツ君ね♪」
「イジメだ――――――――――！！！！！」

――――セントラルシティ――――

ツバサが叫んでいる時、ケンジは自室のイスに座って苛立っていた。昼の戦いでスザク・フレアに言われた事が頭を過ぎっている。

「……綺麗事だ」

そう言いつつ振り切れない自分にさらに自己嫌悪を重ねる。物に当たっても殴った手が痛くなるだけ。物は壊れず、イライラが募るばかり。

その時、彼を中心にとある残留データが引き寄せられていた事に、少年とそのウィザード、炎牙と氷牙は気付かなかった。

２００年前に粉々になり、再生不可にまで追い込まれた存在を……。

才葉シティ中に霧散していたデータは、徐々に、本当にゆっくりと集まりつつあった。

『グルォォォォォォ……』

獣の、低い唸り声と共に……。

第１０４話　歩み寄り（後書き）

最後の残留電波の正体、ＥＸＥファンなら分かりますよね？　そう。最終作のアレです！（少し回復）

「段々バトルがすさまじい方面にいきそうだな……。っていうか、オレがえらい事になって無いか？」

あ～。結局２人は一緒のベッドで寝たんですよね。どんな一夜だったかは次話で夜が明けた後の会話の中に出します。……無論放禁描写は――。

「ありません！　寝不足だ――――！」

……今のがヒントかな？　それでは次話もお楽しみに！

第１０５話　平和な朝（前書き）

いやはや、あれから書き出したら見る見る進んで……1話できちゃいました。

今回はツバサとソラが屋外で戦っている時、屋内でどんな戦いがあったかを書きます。おまけを言えば、ギャグ編です。

第１０５話　平和な朝

昨日の戦闘から1夜明け、スバル達は朝を迎えた。あの後結局、事情が事情だったためにクラスの予約したホテルは断念。スカイタウンの研究所に寝る事になったのだ。

――――食堂――――

「おはよ～」

スバルは朝に弱いので食堂に着いた頃にはほとんどのメンバーが席についていた。病院で寝たはずのツバサやソラまでいるという事は、よっぽど遅いという事だろう。

「よぉ、スバル。相変わらず寝ぼ助だな」
「ほっといてよジャック。……あれ？」

いつもならジャックと共にツバサもからかってきそうなものなのだが、彼のツッコミが無い。ツバサの方を見てみると、ボンヤリと眠そうに朝ご飯を口に運んでいる。

「……どしたの？」

スバルがジャックに聞くと、ジャックは「ケケッ」と意地悪な笑みを浮かべてスバルに耳打ちした。

何でも、ソラが強引にツバサのベッドに入り、結局2人一緒に寝

ることになったという。それからが大変で、ソラがツバサの方に転がるとツバサはその分距離を取り、場合によっては手でソラの接近を阻止していたそうだ。これが一晩中続けば寝不足にもなる。

「……それは大変だったね……」

スバルとしては人事だとは思えなかった。スバルも以前、ミソラがベッドに潜り込んできて、大吾とあかねに現実逃避されたことがある（第6話、メテオGの真実より）。

なので、そんなスバルが彼に出来る事はただ1つ。

ポンッ

「……大変だったね。ツバサ君」

「……スバル……」

スバルがツバサの肩に同情の意思を込めて手を置く。

デューオの作った膜は涙や冷や汗など人間が体内から出す者も出さないようにしている。なのでツバサは涙は流せないが、もしも泣けたなら泣いていただろう。

よっぽど酷い一夜だったのだろう。

「……何でだろう。今一瞬イラッて来たわ」

一方女子の方。ソラが持ち前の勘の良さでナレーションが何を言っているのか分かったらしく、カリカリした様子で周りを見る。

最後に視線が止まったのは不満そうな顔のツバサだ。

「……あの顔を見てると余計にイライラしてくる。そんなに私の事嫌なわけ？」

無論からかった自分に非があるのだが、どこかやるせない。

「まぁまぁ、ツバサ君もソラさんの事嫌いなわけじゃないでしょうし……」

ミソラとしてはこれ以上何かを言えない。色んな人と関わっている仕事の経験上、こういう時は下手に刺激しないに限る。しかし、怖い者知らずのご令嬢がここにいた。

「ていうかそもそも、一緒のベッドに寝る方がどうかと思うけど？」

コダマ小学校６－Ａ。クラス委員長であり生徒会長。白金ルナだ。ソラは予想通りルナに不満そうな顔を向けた。

「だって、ツバサの事をからかいたくて……」

「だったら他にやり方があるでしょうが。……一緒に寝て、その……万が一ってのも考えたらどうなの？」

言葉を選んだのは誰かへの配慮ではない。単純に彼女がそういう話題に赤くなりやすいだけだ。それでも意味は通じたらしく、ソラは手の平にグーを打ちつけた。

「あーそれ。それなら大丈夫だよ。ツバサの事だから絶対に私に近付かないだろうって確信があったから。手でも足でも使って、意地でも私を近づけようとしないだろうね」

現にソラは彼に近づいた時（無論からかう為のワザと）、ツバサは手でソラの顔を押さえたり、足でソラの腹を押さえたりで決して自分のそばに寄せようとしなかった。

ソラが不機嫌だったのは、1回だけツバサの足が腹にクリーンヒットした事が理由だ。ツバサとしては力の加減が出来なかっただけらしく、その場で小さい声で「ゴメン」と謝ったのだが、それなりに痛かった。

ここまでで分かったと思うが、要するに2人はずっと起きていた事になる。ソラがいつもと比べてイライラしている理由の1つは寝不足のためだ。もう1つは上記に述べた腹への蹴りである。

「……何？　ミソラちゃん？」

ミソラがソラの話を聞いて笑っているのを見てソラが気になったように問う。ミソラは可笑しそうに笑いながら答えた。

「だって、ツバサが絶対に近付かないってソラさんが言ってるって事は、ツバサ君の事を信じてるって事でしょ？　私もスバル君の事を信じてるんだけど、やっぱり良いよね～そういうの♪」

「ミソラちゃん……うん。そうだね！」

ミソラの明るい笑みにソラも同様に笑みを返す。ルナもまた、口元に小さい笑みを浮かべていた。

「さて、後はルナちゃんか」

「え、私が何かした？」

ミソラの言葉にルナが訳が分からないという顔をして、ミソラとソラはニンマリと意地悪な笑顔を浮かべた。

「ルナちゃんの――」
「お・あ・い・て」
「ッ！！　お、おあい！？」

ルナが真っ赤になって立ち上がりかけるが、そこはさすがの委員長。かろうじて立ち上がるのを堪えて座り直した。

「お相手って……私達はまだ小学生で――」
「私まだ小学生だよ？」
「私は中学」

ミソラ、ソラの順でルナの退路を断ち、さらにソラは追い討ちをかける。

「……まさかルナちゃん、仕事に生きるタイプ？　ダメだよそんなんじゃ。エ●ァの赤木博士やみたいになっちゃうよ？」
「でもあの人は碇指令に――」
「略奪愛？　あの人、奥さん居たもんね」
「うぅ……」

もう、どう言ってもからかわれそうな気がしてルナは押し黙る。

その頃男子の方でもスバルとツバサが被害者同士でグチを言い合い、収拾がつかなくなりそうな状況になった時、それを打破する人物が現れた。

「よぉ！　皆！　おはよう！」

暁シドウ。昨日着いて事件の捜査。そしてそのまま泊まったらし

い。

「あ、暁さんおはよ――？」

スバルの語尾が疑問形だったのは、自分のそばを何かが通り抜けていったからだ。黒髪で、その双眸には怒りが灯っている。

「暁――――！！！」

「ん――――？」

「くたばれ――――――――！！！」

ズドォォォォォォン！

「ウォォォォォォ！？」

ツバサの飛び蹴りが暁に直撃。暁は再びドアの向こうに消えていった。もちろんツバサも同様に飛んでいった。

あえてここで言おう。先程の『打破』というのは状況が動く事を言い、良い状況になるとは言っていない。

考えてみれば当然だ。彼の寝不足の原因はソラだが、その元々の原因を作ったのは誰あろう暁なのである。ソラが自分の厚意を蹴った理由は暁も聞いたのだろうが、その上でソラがツバサの元へ行く事を許したのである。

スバル達がドアを開けてみると、ツバサが暁の胸倉を掴んでガクガク揺すっていた。

「暁――――！！　お前のせいでオレは昨日大変だったんだぞ――――――――！！！」
「い、いや～頑張ったお前達に対するご褒美と思ったんだが――」
「そんなご褒美いるか――――――――――――！！！！！」

暁が言いかけた所へツバサのアッパーカット炸裂。しかし、そこは流石の暁。ダテにサテラポリスのエースというわけでもなく、アッパーを食らって浮き上がるのを逆に利用して地面に足をつけて直立した。

「はっはっはー！　その程度でオレから一本取ろうなんて――」

無論ツバサも思っていない。なので、次の一撃が本命だ。笑っている暁の懐に素早く距離を詰め、拳を突き上げた。

「しょ～りゅ～け～ん！！！」
「おぐおはぁ！！？」

某格闘ゲームよろしくの必殺技が炸裂。その一撃は的確に暁の顎を捉え、彼の頭は天井に強打した。
なお、漢字表記すると『昇龍拳』である。

暁が仰向けで地面に沈み、ツバサは満足気にガンマン気取りで自身の拳に息を吹きかける。

その様子を一堂は呆然と眺めていたのだが、ソラは思い出したようにミソラに話しかける。

「ねぇ、そういえば昨日は中でも戦いがあったんだよね？　そっちはどうだったの？」
「あ～それは――」
ミソラは少し可笑しそうに話し始めた。

――回想――

ウェザー君の電脳を駆け抜けているのはロックマン、ハープ・ノート、ジャック・コーヴァス、オックス・ファイアだ。
あの時の揺れから約5分後、ちょうどソラが戦線に来た頃だろうか。その時、ロックマン達はとうとうウェザー君の電脳の最深部に辿り着いた。

「……って、例によってここもかい……」

ジャックがブチ切れ寸前なのも無理は無い。今までエリアを越える毎にとんでもないウイルスの数と戦ってきたのだ。イライラもする。

『はっはっはー！　良くぞここまで来たな！』

あ”ぁん？
その上から言葉に、ジャックばかりかスバルやミソラも不機嫌そうに声のした方を向く。といっても正面斜め上なのだが……。
はぐれウィザードが立っていた。下にあるのは制御装置だろう。

「ブロロロロ……あれが制御装置みたいだな」
「うん。分かり易いね」
「アレは単なる高い所から見下ろすのが好きなバカだろ。何だっけ？　バカと煙は高い所が好き？」
「ジャック、それは言い過ぎ」（でも本当に分かり易い）

上から順にゴンタ、ミソラ、ジャック、スバルの順だ。普段抑える役のスバルとミソラまで遠慮が無くなるほどに今までのウイルスは多かった。故に、イライラもする。
そんな彼らの会話が聞こえていないのか、はぐれウィザードはウイルスに指示を出す。

『やれ！　ウイルス共！』

あんな指揮官でも命令は聞くらしい。大量のウイルスが襲ってきた。と思ったらロックマン達を通り越してノイズウェーブに逃げていった。

「『……はい？」』

スバルを始めとして、ミソラやジャック、はぐれウィザードまで、その場に居た全員が呆然と立ち尽くした。

「……どういう事？」
『……たぶん――』

電脳の様子、ウイルスの撤退も含めて『声』で大体の事は分かるのだろう。アイリスが自らの推測を言う。

『こんな指揮官についていくのはイヤだー。……って所じゃないかしら』

ウイルスだって沈みかかった船に乗るのはイヤというわけだ。

ガンガンガン……

制御装置の方から何かをぶつける音がする。そちらを見ると、はぐれウィザードが自分の頭を制御装置に打ち付けていた。

ジャックが目をパチクリしながら呟く。

「……頭突きで制御装置を壊す気か？」

「……いや、たぶんあれは……」

『なんで、オレは、こう、上手く、いか、ないん、だ！』

変な所で『、』が付いているのは、その度に頭を打ち付けているからだ。つまりこれは……。

「自傷行為？」

どんな犯人だ。

スバル達はそんなツッコミを内心で抱き、このまま放って置いてもアレなので拘束する事にした。別名、自傷からの救出。

「……それで、電脳のラスボスがてめぇみたいな臆病者（チキン）ってのがオレは気にくわねぇんだけど？」

ジャックが不良ポーズで睨みを効かせる。
はぐれウィザードは一応の抵抗をしたらしく、所々傷がある。今はアイリスが現実世界からバトルカードとして転送したロープで縛られている。

『バトルカード』というより『アイテムカード』というべきだろう。ツバサがずいぶん前に遊びで作った物らしく、アイリス曰く、『ツバサにしてはまともな物』らしい。彼が戦闘時に使うリアルウエーブの武器もその1つだ。

ジャックの睨みに怯えたように、はぐれウィザードは頭を項垂れた。

『……スミマセン』
「あ”ぁ？　スミマセンで事足りたら警察はいらねぇんだよ」
「ジャック、それじゃあ本当に不良だよ。大体僕達が警察みたいなもんだし」

現在立場的にもそうだが、スバルとミソラは以前サテラポリス遊撃隊の一員だった。故に、そう呼べなくは無い。
スバルの注意を受けてジャックが代わりにスバルを睨む。どうやら相当イライラしているらしい。……まぁ、さんざん苦労させられて最後は楽勝だったら、そういう気分にもなるだろうが……。

睨まれているスバルに悪いと思いながらも、ミソラははぐれウィザードに話しかけた。

「でも、それじゃあ何で彼……ドッグ・ツインの部下になったの？」

それを問われた時、はぐれウィザードの目が変わった。どこか鋭

くなったというか、人の感心を引くというか。

『……それは』

「「「「それは？」」」」

いつの間にかスバルやジャック、ゴンタまで話を聞いている。無論、現実世界においてアイリスを始めとして赤羽夫妻も聞いているだろう。

『……悪ってのに憧れて』

バシッ！　《ズゴッ！》

ロックマン、ハープ・ノート、ジャック・コーヴァス、オックス・ファイア。計４人の平手がはぐれウィザードの脳天を炸裂。音が１つだったのは、４人が同じタイミングで叩いたからで、さながらコントの様な光景だ。

ちなみに、《ズゴッ！》というのは現実世界でアイリスや赤羽夫妻を含めてその部屋にいた全員がズッコケタ音である。

しかし、ロックマン達はこのはぐれウィザードに油断しすぎた。

「ッ！？　きゃ！？」

「ッ！！　ミソラちゃん！」

はぐれウィザードがハープ・ノートを抱えて制御装置の上に舞い戻った。ロープは自力で切ったのだろう。なにぶんはぐれウィザードの体はトゲトゲしている。そのトゲを使って『ブチッ！』といっ

た所だろうか。

『はっはっはー！　油断したな！　よくも今までやってくれたな！　こいつがどうなっても良いのか――――！！』

悪党お決まりの決め台詞。しかし、実際この手は有効だった。ハープ・ノートを盾にされて、ロックマン達は手出しが出来ない。

『逃亡用のヘリを用意しろ！』

が、言ってる事はやはりバカだった。ウィザードが『物質』であるヘリを必要とするか。ウィザードなどの電波体なら電脳経由で逃げられる。

結論、ドラマの見過ぎだ。

「スバル君！」

ミソラの叫びに、スバルはせめて言葉だけでもと言葉を返す。

「ミソラちゃん！　大丈夫！　制御装置とミソラちゃんは絶対に助けるよ！」

「あ……うん……」

心なしか、ミソラが沈んだ。スバルに伸ばしていた手を引っ込めて、ため息をつく。

「アレ？　ねぇジャック、何でミソラちゃんが大人しくなったの？」

問われたジャックはスバルに呆れたような半眼を送る。

「……スバル、自分が言った事を思い出してみ？　お前、制御装置とミソラ、どっちを先に言った？」
「えっ……あっ！　ご、ゴメンミソラちゃん！　ミソラちゃんと制御装置は絶対に助けるよ！」
「２回目言うのはＮＧ！　スバル君のバカ！」
ミソラは首をはぐれウィザードの腕で押さえられながらもスバルに対して叫ぶ。若干涙目だ。
スバルはそれに素直にショックを受けた。
「ぼ、僕……取り返しも付かない事しちゃった？」
スバルとしては下から上、制御装置からミソラといったように、視線が行った順で言っただけなのだが、こんな事になるとは思っていなかったらしい。
『お前さぁ、もうちょっと女の子の心考えたらどうなの？』
「うっ……だって、異性の心なんて早々分からないよ……」
『若いうちなんて大抵そうさ。少しずつ、色々と相手の事を考えられるようになるってもんだ。オレだって昔はな――』
「……っていうかよ」
２人の会話にジャックは口を挟む。その顔は全力で呆れている。顔どころか体までかったるそうに腕を下げている形だ。緊張感も欠片も無い。
ジャックはスバルと話している存在を指差した。
「何ではぐれウィザードと話し込んでんだ？」
「『……えっ？　……ッ！！』」

ここに来てやっとその事実に気付いたらしく、はぐれウィザードとロックマンは距離を取る。

はぐれウィザードの手にハープ・ノートはいない。ジャックが2人に声をかける前に確認したのだが、彼女は制御装置の上でポカーンとロックマンとはぐれウィザードが話し込んでいるのを見ていた。

距離を取ったロックマンとはぐれウィザードは一分の狂いも無い動きで互いを指差す。

「わ――――！　何で僕がはぐれウィザードと話し込んでいるんだ！？　それも僕が相談している側だったし！」

『おわぁ――！　何でオレがこいつと話し込んでるんだ！？　それも恋愛のアドバイスもしていたし！』

そして2人は全く同じ動きで跳ね上がった。会話していた事か、それとも一糸乱れぬ動きに関してのビックリかは不明。

「ビックリした――――――――！！！！」

『ビックリした――――――――！！！！』

その後、2人はこれまた一分の狂いも無い動きでジャックを指差す。上半身を９０度回転。下半身は動かしません。

「ありがとうジャック！　助かったよ！」

『ありがとう黒いボウズ！　助かったぜ！』

「あ、いや……分かれば良いんだ。分かれば……」

ジャックとしては、オリンピックにおいてシャーロも射程内なく

らい見事なシンクロを見せたスバルとはぐれウィザードに対し、内心引いていた。それはもう、精神的に５０メートルは離れるくらいのドン引きだ。

「……ショックノート」

キュイーン！

エレキギターのような高音が響き、はぐれウィザードに命中。『しぇー！』というどっかで聞いたような叫び声と共にデリートされた。……確か、某アニメのイ●ミというキャラだったと思う。

以上で、ウェザー君の電脳の戦いが幕を閉じた。

――――回想終わり――――

「それで、その後スバル君にパフェをおごってもらえるように言って、仲直りしたってワケ」

つまり、仲直りの印にパフェをおごる事を約束させたという事だ。

それは分かったが、ソラとしては１つだけ納得出来ないことがある。

「それは分かったけどさ……ひと～つだけ納得いかないことがあるんだけど……」

「ん？　何？」

ミソラが尋ねた時、ソラはミソラの両肩を掴んで揺すってきた。

「何であたしとツバサが大変な時にそんな面白そうな戦いしてんのよ――――！！！！！」

「うわわわわ……ソラさん止めて止めて！　目が回る～」

一方は命懸け。もう一方はギャグ満載となれば、嫌でも何かを思うだろう。

「……ハッ！　ツバサ！　さっきはよくもやってくれたな！」

目を覚ました暁とツバサの第2ラウンド開始。こっちもこっちで賑やかで平和な朝だ。

しかし、そんな朝は偶然つけていたニュースで変わってしまう。

「臨時ニュースです。つい先程、セントラルタウンで3つの頭を持つ獣のような怪物が現れました。これによりセントラル市民のほとんどが退去。他のタウンは受け入れの準備をしてください」

……セントラルシティに過去の存在が甦った報せだった。

第１０５話　平和な朝（後書き）

今回はいろんな所からネタが出ましたね。ツバサが暁にやった技とか、エ●ァとか。

次回は正真正銘ドッグ・ツインとの決戦です！　……でも、最後に少しだけ書きましたが、姿は違うくなりますね。

それでは次回もお楽しみに！

第１０６話　甦る怪物（前書き）

活動報告にも書きましたが、今回は繋ぎの話のために短いです。

第１０６話　甦る怪物

――――時間は少し遡り、セントラルタウン――――

スカイタウンの戦いの翌日。今日は休日なのだが、ケンジは学校に向かっている。

今日、コダマ小学校の生徒がセントラルシティを見学するので、高校や大学の何人かがその案内をするのだ。成績優秀で模範的な生徒が選ばれる。まぁ、言ってしまえば町の代表として子供達を案内するのだから、それは当然の事だろう。

ケンジは学校では大人しく、文字通り模範的な生徒。故に、その１人に選ばれたわけだ。

しかし、ケンジはこれを好機と見ている。コダマ小学校の生徒が来ると言う事は、スバルを始めツバサたちも来るという事。復讐するにはその今日しかない。

（……だけど……なんだ？　周りの人の反応が変だ……僕の方を１回見てから立ち止まってる。……僕の今日の服に不審な点は無いし……。服の裏側に仕組んでいるナイフを入れたポケットも見抜かれるようなものじゃない）

ナイフを持っている時点でどうかと思うが、彼に視線が１回止まるのは確かだ。

ケンジは自分に不審な点が無いか服のチェックのフリをして袖の裏など色々な部分を見てみるが、不審な点は見当たらない。

（……上？）

自分と周りに何も不審な点が無い以上、有り得るのは上だ。

（ッ！？）

ドンピシャだった。蒼くて、ノイズムのようにザラザラとした体。今にも崩壊しそうな何かが、自分の上にいる。形は狼の顔のようだ。しっぽを吊られたように、逆さまにケンジに顔を向けている。

「な、なんだ……これ……」

『これは……』

『おいおい、やべぇんじゃねぇのこれ？』

さすがにこれにはケンジ、炎牙、氷牙も驚き、徐々に後ずさり始める。

『グォォォォォォォォ！！！！』

逃がさない。

その言葉を体現するかのように、狼の顔はケンジを飲み込んだ。比喩ではなく、本当にその口の中に、飲み込んだのだ。

「ッ！！　うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

蒼い光と少年の悲鳴。悲鳴はやがて獣の声へと変化する。

『オォォォォォォォォォ……！！！』

光が収まった時、そこに射たのは3つの頭を持つ獣。さながら、地獄の番犬ケルベロスのようだ。

全身が刺々しく、尾の先端は鋭利的。真ん中の頭と体が紫で、右が赤、左に青の頭を有している。どれも犬や狼を思わせる頭である。真ん中の頭にはヒシ形を6つ合わせたようなマークがある。

『グルォォォォォォォォォ！！！！！』

少年とウィザードの意識は、甦りし獣に完全に飲み込まれた。

セントラルタウンに怪物が現れたニュースを見て、いち早く反応するのはツバサと暁だ。

「「ッ！！」」

そのニュースで先程までケンカをしていた2人がすぐにテレビの前に向かう。2人並んで真剣にニュースを見ていると良いコンビのように思えるが、足の方を見ると子供っぽい踏み合いが続いていた。互いにつま先を踏んづけてやろうと頑張ってる。

「……暁、これは……」

「……まだ分からないが、このままだと才葉シティ全土に被害が及びそうってのは確かだな。よし！　スバル！　ミソラ！　ジャック！　サテラポリス遊撃隊！　出動だ！」

「あ、暁さん、オレは……」

「私も……」

ゴンタとソラが暁に迫るのに対し、暁は順々で連れて行けない理

由を話した。

「ゴンタ、お前は白金ルナを護るって決めただろう？　だったらその自分との約束を第一に考えろ。ソラ、キミが来たい気持ちは分かるが、今日ぐらいは休め。昨日の今日だ。……それに、ご両親と少しでも話をしてこい。歩み寄るって決めたんだろ？」

ゴンタとソラは渋々了承した。

ゴンタは何を置いても白金ルナを護ると決めた。『ただ1人のために』とは綺麗な言葉だが、それはつまり、その1人のために万人を見捨てなければいけない事を意味する。つまり、今回のようにルナ以外の市民、ルナと関わりの無い人に対しては動いてはいけないのだ。

意志の元に決めた事に『善』も『悪』も無い。あるのは、その思いの強さだけ。

助けたくても助けられない。自分ではない誰かが助けるのを待つしかない。

それもまた、1つの『選択』。

（……オレの選択って、結構重かったんだな……）

自分の選択の重さを気付き、ゴンタは項垂れる。ルナはそんな彼にため息をついて背中を思いっきり引っ叩いた。

「……牛島ゴンタ！」
「は、はいっ！」

叩かれた上に怒鳴られたゴンタは背筋を伸ばして腕まで体に貼り付ける。ルナはゆっくりと息を吐いて、ゴンタとしっかり目を合わせた。

「……護ってくれるんでしょ？　私を」
「お、おう！　もちろんだぜ！」
「だったら、ちゃんとお願いね」

ルナはふっと優しく微笑みかけ、ゴンタの肩が張る。元気が出たようだ。

「おう！　任せてくれ委員長！」

今日は待機なもう一方。ソラは腕を伸ばしたりして準備運動しているツバサに話しかけた。

ツバサとしては準備運動というより目覚めの体操の方が合っている。

「……大丈夫なの？　さっきの３つの頭を持つ狼みたいな奴、強そうだったけど……」
「ん！　まぁ、お前が気にする事でも無いだろ。スバルや暁も加わるんだから、昨日よかマシだと思う」

しかし、彼は睡眠不足だ。突然その影響が来て取り返しの付かない事になったらと思うと、ソラは不安でたまらない。

「……でも、やっぱり私も――」

「ソラは両親と歓談でもしてろ。暁も言ってたが、ソラとあの夫婦はこれから仲良くなれる。……互いに仲良くなるってのは、死んだら出来ないからな。仲良くなれる時はなっとくもんだ」

ツバサの家族はすでに他界している。ツバサが生きていたのはかれこれ１９０年前。人間が寿命で生きていられる範囲を超えている。彼には悔いがあったのだろう。自分を捨てたとしても、彼にとっては家族は家族なのだ。……しかし、死んでいる。会いたくてももう会えない。歩み寄りたくても、歩み寄れないのだ。

「だからさ、ソラは留守番」

それでも彼は明るく言ってみせる。ソラはそれに気付いてはいた。しかし、今のソラに出来るのは見送る事だけだった。

「……分かった。ツバサも気をつけて。……あ、少しお願いがあるんだけど、良いかな？」

思い出したような顔をするソラに対し、ツバサは訝るように了承する。

「別に良いけど？」

「……実は――」

大きな声で言えない事なのか、ソラはツバサの耳元で囁く。

「……それはまたスゴイお願いだな」
「ダメ？」
「……努力はする。期待はするなよ」
そう言って、ツバサはスバル達の方へ行き、彼らは戦地に赴いた。

メンバーはスバル、ミソラ、暁、ジャック、ツバサ。ウィザードの方はウォーロック、ハープ、アシッド、コーヴァス、アイリスだ。
ニュースに映された怪物の姿を見るに相当ヤバそうな相手だったため、アイリスは残るようにツバサは言ったのだが……。
『自分の目で確かめたい……』
そう言って一歩も引かなかった。
スバルがＷＡＸＡに行った時にジョーカーが洩らしていたのだが、なんでもアイリスは最近ツバサに似て頑固になってきたらしい。元々芯が強かったらしいが、最近では正しいと思った事は絶対に譲らないようになって来たとか。
スバルがウォーロックから勇気を。ウォーロックがスバルから人を思いやる心を。といったように、関わるうちに互いに影響を与えていたのだろう。ツバサの方にどういう影響が出たかは不明。……最近睡眠時間などの健康管理を真面目にする様になったのがそうだろうか……。

ウェーブロード。ツバサはソラに頼まれた事を思い出しながらため息交じりで苦笑した。

（……ドッグ・ツインの人がこれに関わっていたら無事に保護して……ねぇ。あいつも無理を言うよな……）

彼の背中の羽根は大きく成長していた。いつまで魂があの身体に留まっていられるか分からない。飛王（フェイワン）・リードの蟲に魂を抜き取られるのが先か。救い出すのが先か。２つに１つだ。

ドォオオオオン！！

爆音と共に煙が上がる。セントラルタウンまで、あと３キロ。

第１０６話　甦る怪物（後書き）

次回は本格的にバトルパート。

ケンジや炎牙、氷牙を取り込んだ電脳獣の実力は！？
スバル達はそれに勝てるのか！？
そしてケンジはどうなるのか！？

次回もお楽しみに！！

「……作者、いつになく熱いな……」

第１０７話　ＢＥＡＳＴ　ＤＥＳＴＲＯＹ（前書き）

今回のサブタイは英語です。読みはビーストデストロイです。

第107話　BEAST　DESTROY

『グルォォォォォ！！！』

セントラルタウンに着いたスバル達を待ち受けていたのは3つの頭を持つ怪物。一見ケルベロスを思わせる体躯だが、じっくり観察してはいられない。咆哮と共に、グレイブメテオレーザー並みの太さを持つ光線を放ってきたからだ。

「ッ！！　全員回避！」

暁の指示に迅速に対応する面々。ツバサはアイリスをハンターに戻してから別々に地上に降りた。2，3人とはいえ纏まっていると良い的（マト）だ。

地上に降りた時、偶然スバルとツバサは近い場所に降り、スバルは驚愕に戸惑いを混ぜたような声でツバサに問う。

場所はグレイガの後ろだ。他の皆も前後左右に散らばり、グレイガを包囲する。

「ツ、ツバサ君！　あれは……」

「地上に降りてくる時アイリスにも聞いたんだが、多分アレが200年前にロックマンとカーネル、アイリスが倒したグレイガだ」

「ッ！　でもなんで……」

復活したのか。

その問いに推測で答えたのはアイリスだ。

『……おそらく、空気中に霧散していたグレイガの残留データが誰

かの波長と共鳴して呼び寄せられ、その人を乗っ取ったんだと思う』
「そんで、その誰かってのがドッグ・ツイン。あの2体のイヌのオペレーターだ。でっかい電波の中にアイツらの波長が飲み込まれてる。……完全にグレイガに自我を奪われてるな」
「……それじゃあ背中の――」
スバルが何かを言いかけた時、グレイガの咆哮が響く。
『グルォォォォォ！！！』
ロックマンとツバサが話せたのはここまでだ。目の前の獣が尻尾を立て、尻尾の先端をマシンガンの様に飛ばしてくる。『ガトリングテイル』というものだ。
グレイガは3つの頭をそれぞれ3方向へ、尻尾の先端を後ろに飛ばす事で全ての方向への攻撃を可能にした。
「チッ！　……なんつう攻撃だ！」
ジャックは攻撃を回避しながら悪態をつく。3，4m余裕を持ってかわしたにも関わらず光線が過ぎた際の風圧がジャックを襲っている。
何とか耐えたと思ったのもつかの間。グレイガがジャックに向かって突っ込んできた。先程の攻撃でロックマン達が怯んだ事で包囲網が崩れ、グレイガはジャックの方へ駆けて来たのだ。
「ゲゲッ！　何でオレんとこに！　……でも――」

ジャックは横にも上空に逃げず、前方のグレイガの方へ突っ込んでいった。

「オォォォォォ！」

ジャックは雄叫びを上げながら全速力でグレイガの四本の足を突き抜ける。

「へっ！　そんだけでかいんじゃ自分の足元に潜り込まれたらどうしようもないだろ！」

最後の足をかわしてジャックは反転。得意げな笑みを浮かべる。しかし、その直後彼の視界は横にズレる。右半身に強烈な痛みを伴いながら。

「がっ……」

グレイガの尻尾がジャックを横から弾いたのだ。

動物は走る時尻尾を振って自身のバランスを取るという。たかだかそれだけの行為で、ジャックは吹き飛ばされたのだ。ジャックはそのまま数十メートル吹き飛ばされて地面に激突。数回バウンドしてうつ伏せに気絶した。

コーヴァスも限界を迎えたのか、電波変換が解除される。

スバルやミソラがジャックに叫び声を上げるのに対し、ツバサは顔を顰めて舌打ちをした。

「チッ！　ドッグ・ツインの時と比べて恨みや憎しみが無いからネビュラ・グレイが騒がない分、これはこれで厄介だな」

今の彼は獣であるグレイガに飲み込まれている。獣に在るのは本能的な排除行動のみ。恨みや憎しみで力を増すネビュラ・グレイから見れば吸収し辛いのだ。だが、それを補って余りある戦闘能力が備わっているらしい。

暁の方は……。

「ジャック！　……アシッド！　解析は！？」

アシッド・エースはアシッドにグレイガのデータ解析率を聞くが、結果は以下の通りだ。

『……まだです。現在データ収集率……１５％』

「身も蓋も無い返事ありがとう」

アシッド・エースは苦笑交じりで現状を皮肉る。

「そんじゃま、ビャッコ戦で使ったアレ、行きますか」

しかし、何もしないよりずっと良い。

暁の言うアレとは、ビャッコ戦で使った黒色に変色させる状態だ。アシッド・エースの能力を格段に上げる代わりに、セレナードの管理しているサーバーに極度の負担をかける。

究極変身、ファイナライズというものだ。

『……ツバサに止められていませんでしたか？』《……その時のツバサ、やたらとゲッソリしてましたが……》

アメロッパ大統領との対面の翌日、ツバサがソラをうらかわまで送った時についでにセレナードの元へも尋ねたのだが、その際精神的に追い詰められてＷＡＸＡに帰った後暁とアシッドに忠告したのだ。

アシッドは忠告するが、そんな事を聞いていない暁は遠慮なく……。

ヴン

低音と共にアシッドエースの体が白から黒に変わる。

「……っと、これで良し。行くぞアシッド！」

『……はい』《……何故でしょう。またツバサがゲッソリしそうな予感が……》

――その頃うらかわ――

『……またですか……ふふっ』

愉快気な笑みを浮かべるセレナードに対し、フォルテは寝てるフリを決め込んでいた。

――――再び才葉シティ――――

「遅い遅い遅い！」

アシッド・エースは背中のブースターで加速。縦横無尽に駆けながらグレイガに迫る。

『ゴォォォォ！！』

グレイガは先程のガトリングテイルを乱射するが、アシッド・エースの的の小ささとスピード、そしてロックマン達の援護射撃に翻弄されていっこうに当たらない。

『シドウ、この尻尾の先端を飛ばす技の解析、終わりました』

「オーライ！　スバル！　オレがアイツに攻撃を仕掛ける！　その攻撃で怯んだ隙に強力なのを食らわせてやれ！」

「はい！」

スバルが暁の指示に頷き、ＰＧＭを起動。ポラリス・スナイパー戦で見せたサーチノイズに変化する。

ブルースノイズは近距離からの斬撃型。近付くまでに一撃必殺な攻撃を受けてしまってはその剣も意味が無い。よって、遠距離から的確な射撃のできるサーチノイズに変化したのだ。

暁はそれを横目で見てからグレイガに迫る。

（オレの攻撃じゃほとんど痛くもかゆくも無いだろ。……それでも、気ぐらいは逸らせるよな！）

暁自身を囮にした陽動。

通常時のアシッド・エースはもちろんだが、ファイナライズ時のアシッド・エースの攻撃よりスバルのＮＦＢ（ノイズフォースビックバン）の方が威力が高い。

それを知っての陽動。ツバサはスバルに足の関節を狙うように指示。素早い相手から機動力を奪えば、後はその地点からの攻撃のみに警戒すれば良い。

暁のソードとグレイガの距離が５メートルの地点に来た時、グレイガは咆哮した。今までの咆哮とは訳が違う。自身の電波を乗せた咆哮だ。

「ッ！？　ぐっ……あぁぁぁぁぁぁ！！！」

それは言ってしまえば激流を正面から浴びるようなもの。それが３つの口からとなると、その圧力は相当なものだ。いかに早く動けようと、その攻撃の効果範囲が頭の向いている全ての方向が攻撃範囲となるとかわせるはずが無い。

ズドォォォォン！！！

普通に地面に叩きつけられたよりも大きい激突音。

「グッ……うぅ……」

強く打ち付けて呻いているアシッド・エースに右の口――――恐らく炎牙のものだろう――――から炎が吐き出される。

「暁さん！」

「バトルカード、スーパーバリア！」

スバルが叫ぶと同時に、ツバサはバトルカードのスーパーバリアを使用。5階の攻撃から身を護れるバリアだ。

しかし……。

「……ウソ……」

「スーパーバリアが……」

「……でたらめだな」

ミソラ、スバル、ツバサの順で現状に驚く事になる。ツバサの方は舌打ち込みだ。

スーパーバリアは5回まで攻撃を防げる。しかし、グレイガの炎を受けきった直後にバリアは消滅した。つまり、グレイガの炎はそれを打ち破れるだけの攻撃力を有しているという事。

暁はかろうじて電波変換を維持しているが、もう戦える状態ではない。

『グルォォォォォォ！！！』

しかし、グレイガはそんな暁に追い討ちの構えを取る。３つの口にエネルギーが収束されていく。

「ッ！！　いけない！」
「ミソラちゃん！」

グレイガの行動を見たミソラはスバルの静止を背に暁の元へ駆ける。

１つの口でスーパーバリアを破れるのだから、それが３つだったら？　そうなると、生半可なバリアでは意味が無い。

暁の前に立ったミソラはホーリーＰＧＭのバリアを展開した。

前方集中。
流線型。

前方から攻撃を受けきるのに申し分ない形状と性質だ。

ギギギギギギギギギッ！！！

赤、青、紫の閃光がバリアと衝突。
耳障りな音と共にバリアは光線を受け止めていく。しかし……。

『ガァァァァァァ！！！』
「ッ！！？　出力が！！」

目の前の現象にミソラが驚きの声を上げる。

唐突にグレイガの力が上がり、バリアに徐々にヒビが入ってきたのだ。

「ッ！！　スーパーバリア！」

ミソラの後ろの暁がとっさにスーパーバリアを展開。その直後３色の光線が２人を飲み込んだ。

それを見たスバルとウォーロックは蒼白になって叫ぶ。

「ミソラちゃん！！！　暁さん！！！」

『ハープ！！　アシッド！！　……てめぇツバサ！　何か良い作戦は無いのかよ！！』

「無茶を言うな。オレだってあんなに強いなんて聞いてない」

ウォーロックは八つ当たり気味にツバサに当たり、ツバサは腰のホルダーに下げているハンター、その中のアイリスに視線を送る。

相手に羽根が付いている以上、ひたすら持久戦に持ち込めば勝手に無効が自滅してくれるだろうが、ツバサはそんな事を望んでいないし、ソラとの約束も果たしたいと思っていた。

アイリスは自信無さ気な返答を返した。

『……２００年前と何かが違うわ。……今のグレイガは、何かに苦しんでいるみたい』

手負いや瀕死の獣が最期に驚異的な力を発揮するのと同じだ。人間で言う、『火事場の馬鹿力』というものだ。

「……なるほど」

ツバサの目にはアイリスの言う『違い』が見える。飛王（フェイワン）・リードの創った羽根だ。魂を奪い取る羽根が、彼の精神をグレイガごと蝕んでいるのである。

『……何納得してんだお前？』

「おっ、ミソラ達は無事みたいだな」

納得した事にウォーロックが突っ込むが、ツバサはミソラと暁の方を見て安心したような息をつく。スバルはすぐに向き、ウォーロックはツバサの納得した事を訝りながらそちらを向く。

言うまでも無いが、ツバサの十八番のはぐらかしである。

光線が過ぎ去った後、ミソラと暁は電波変換を解除した状態で横たわっている。どうやら暁がとっさに出したスーパーバリアが致死クラスのダメージを防いだらしい。

『……生命電波確認。……生きてる』

アイリスが安堵と共に微笑み、スバルもホッと息を吐いた。

「良かった」

『グルォォォォォォ！！！！！』

前言撤回。ミソラと暁が戦闘不能になった事を確認したグレイガがスバル達の方へ顔と尻尾の先端を向ける。

ドドドドドドドッ！！！

無数の鋭利な弾丸がロックマン達に迫る。スバルとツバサはとっさに身を屈めるが……。

「六の舞、炎獄！！」

勝気な少女の声と共に放たれた業火で弾丸は熔けていく。巨大な炎弾は3人を護りながら突き進み、グレイガに迫る。

しかし、俊敏な横っ飛びで回避された。

「むぅ。中々早いねあいつ」

悔しがる彼女に対し、ツバサは驚いたような表情で声をかける。

「ソ、ソラ……お前……」

「……ごめん。やっぱり皆が戦ってるのに私だけってのは落ち着かなくて……」

友人と大事な人が戦っているのに自分だけ安全な場所というのは居づらいものだ。特に、護れるだけの力を持っているならなおさらそうだろう。

彼女は強引に周囲の制止を振り切ってきたらしい。ゴンタも誘ったが、彼は白金ルナを護るという決意を遵守するそうだ。

「それに、キミに何か――」

『ゴァァァァァァ！！！』

彼女がツバサに言った言葉は獣の轟音に掻き消される。

「……話してる余裕は無さそうね」

『それに、ジャック、暁さん、ミソラちゃんも気絶してるみたい』

スザクが周囲の周波数を計測。３人の位置を把握した。

「そう。それじゃあ私はあいつの相手するからスザクは3人をここまで運んで。ここにはスバル君もツバサも居るし」

「お、おいちょっと待て。それだとお前1人でアイツと……」

グレイガの力は予想以上。一撃でも食らえばアウト。1人では倒せない相手だ。

ツバサの心配をソラはからかうような笑みで返した。

「おやおや？　キミが私の事でそんなにうろたえるなんてね」

「ッ！　人が心配してんのを――」

「分かってますよ～。……ありがとね。心配してくれて」

「……無理は――」

ソラは前半をおどけて、後半を優しく微笑んでからグレイガの元へ飛ぶ。ツバサは何かを言いかけたが、彼女はそれに気付かなかった。

彼が言葉にした頃には、ソラはとっくに飛び立っていたのだ。

空中を飛び回って攻撃を回避するスザク・フレアを見ていて、スバルは先程アイリスが話した『２００年前と何かが違う』という発言を思い出した。

「……ツバサ君」
「ん？　どうした？」
「２００年前、グレイガに羽根ってあった？」
「……いいや。羽根があったのはファルザーだけだって聞いたぞ。それがどうかしたか？」

ツバサが眉を顰めたのに対しスバルは少し臆しながら答える。

「うん。……グレイガの背中に白い羽根があるから、それが違う点かなって」
「ッ！！」

羽根の事を問われてから予感はした。否、その可能性を脳内で潰して『単なる好奇心』で収めていた。しかし、この発言でツバサもまた確信した。

スバルには、羽根の事が見えている。

「……いつから、羽根が見えてた？」
「えっ？　あのグレイガを見てからずっとだけど？　ウォーロックはそんなの見えないって言ってるけど、やっぱりそれ以外考えられなくて……」

頭が３つなのはドッグ・ツインを飲み込んでいるからそうだというのは分かっている。そうなれば背中の羽根しか考えられなかった。

「……でも、シャーロに行った時から少しだけだけど見えてたな……」
「ッ……」（……封真め……）

ツバサは封真に言われた事を思い出して引きつった笑みを浮かべる。

封真にこれから行く世界に必要な物を託した時の言葉だ。（第42話　やるべき事より）

【……それと、面白い事になるかもしれないよ】

彼は薄々スバルがいずれ目覚める事に気付いていたのかもしれない。

だったらもっとはっきり言え！

ツバサは内心でそう突っ込んだ後、スバルとウォーロックの会話に口を挟む。ツバサが封真の事を思い出している間に、2人は『見えない羽根』の事で議論していたようだ。

『だからオレには見えないんだってのー！』

「僕には見えるんだからしょうがないだろ！」

「……スバルの勝ち」

『あぁ！？』

「へっ？」

ウォーロックはやや噛み付き気味に、スバルはきょとんとした顔でツバサの方を見る。

「スバルの見えている羽根は実在するし、そのせいでグレイガが必要以上に興奮して攻撃的になっているとも言える」

『お、おい。まさかお前には――』
「見えているよ。ウォーロック。……あの羽根は宿主の魂を奪い去る。取られたら抜け殻のようになってそのままだ。……シャーロでオレを撃って来たスナイパー同様な」
「ッ！！」

暁が言っていた。
ツバサを狙ったスナイパーは突然呆けて話せなくなったと。まるで、抜け殻の様だと。

「それじゃああの人も……」
『魂を吸われたってか……』
「……」

ツバサの沈黙による肯定。

「誰がそんな事を！」

罪も無い人間とは言わないが、関係ない人を巻き込むやり方にスバルは怒りを覚える。ウォーロックもその陰湿な手が気に食わないらしく、腕を組んでツバサを見る。

『……お前は知ってんじゃねぇのか？　その羽根の事も見えるみたいだし』

オレには見えんが。
そう続けたウォーロックに対し、ツバサは一応頷いてからグレイガの方を向く。

「知ってはいる。……2人とも、明日から数日予定空かせろ。自分

の身を自分で護れる程度にああいった存在の事を教えてやる」

そう言ってツバサはその場で足踏みした。たった1回。地面に亀裂も入らない当たり前で普通の足踏み。常人にはそう見えるだろう。

……そう。常人には。

「ッ！！　これって！」

スバルは地面を見て驚く。地面に金色の線が走っている。ツバサが足踏みした所から波紋の様に広がったのだ。今は大き過ぎて確認できないが、直径1メートル近くにまで広がった時に確認したそれは、中心に太陽があり、そのそばには月が描かれていた。

ツバサは「ふっ」と息を洩らすと一言だけ呟く。

「さて……やるか」

ソラとスバルを失わないためにも、彼は今出せる全力を出す事にした。見られた後を気にする懸念も、もはや必要無い。ソラはもう魔法の事は知っているし、スバルもまた、知る必要があるのだから。

……それに何より、スバルはツバサの計画の鍵となる人間だから、死なせるわけにはいかない。

第１０７話　ＢＥＡＳＴ　ＤＥＳＴＲＯＹ（後書き）

次回、決着の予定。……例によって２話に分かれなければね。

第１０８話　ミラー（前書き）

いやはや、実は考えていたシナリオとの変更点があって今まで書きにくかったんですよ～。スバル達にはセントラルシティである程度時間を過ごしてからグレイガとの戦闘と思ってたんですけどね。

それに、ケンジをどうするかっていうのでも変更があったので自分の書き方に直すのに手こずりました。

それではどうぞ！（案の定2話以上に分かれると思います。これ自体結構な長さですからね）

第１０８話　ミラー

ツバサを中心に浮かぶ、金色の線が織り成す陣。

「これって……」

『お、おいスバル。どうしたんだ？』

スバルが驚いたような顔で地面を見ているのを、ウォーロックは全く分からない風に声をかけた。

（ッ。ウォーロックは気付いていない。って事は、この地面のヤツもあの羽根と同じ様なものか）

そのスバルの考えを見透かした様に、前に立つツバサが体の向きを前に向けたまま話し出した。

「……これも限られた奴にしか見えない。……けど、お前には見えるだろ？　スバル」

『だからオレには見えないっての！！』

スバルが無言で頷く傍ら、ウォーロックはイライラした様子で拳をツバサに向ける。自分だけ見えていない疎外感のようなものを感じたのだろう。

ツバサは「ふっ」と笑って、最初に地面を踏んだ足とは反対の足を持ち上げながらそれに答える。

「ウィザードには見えないよ……っと！！」

ツバサが勢いをつけて足を地面に下ろす。その瞬間、足を下ろし

た地点から目を凝らさないと見えないくらい小さな亀裂が、蛇のようにジグザグにグレイガへと進んでいく。

「……スバル、オレが魔法を使えるって言ったら、信じるか？」

「えっ？　魔法なんて――」

非科学的なものあるわけが無い。

そう言おうとしたスバルの言葉は轟音と自身の驚愕に遮られる。

ドドドドドドドドッ！！！

「ッ！！！」

「……ＥＡＲＴＨＹ（アーシー）」

グレイガの足元が予め地面にダイナマイトを仕掛けていたように噴出した。いくつもの巨石が天高く打ちあがる。

グレイガは野生の勘で何かを感じたのかその直前で避けたが、スバルは先程のツバサの言葉を信じるしかなかった。目の前で見せ付けられれば認めるしかない。

スバルがその旨をツバサに言おうとした時、弾丸のようにスザク・フレアが飛んできた。

「いきなり危ないじゃない！！　さっきの誰！？　って言うかツバサね！　スバル君なら絶対に事前に通信で教えてくれるもん！！」

ビックリした上にすれすれで避けたらしく、彼女の声は上擦っていた。冷や汗絶賛放出中だ。

ソラに胸倉を掴まれてガクガク揺すられているツバサはケラケラと笑ってみせる。

「当たってねぇんだから別に良いだろ？」

「良くない！！」

目の前で大地が弾ける様に競り上がった異常事態に対し、彼女はツバサへの怒りだけで収めている。スバルはチラッとグレイガの方を見たが、先程の攻撃で驚いて警戒しているらしい。一定の距離を取って近付こうとしない。

これなら聞く時間くらいはあるだろう。

「……ソラさん、ツバサ君の今の、驚かないの？」

「へっ？　そりゃもちろん驚いたけど、そんなのツバサの魔法でしょ？」

彼女の話では、バルズランドで一通り聞いたらしい。

ツバサは釘を打つように憮然とため息を付く。

「まぁこれだけの事、早々出来るもんじゃないけどな」

強い力はそれだけ結界を揺らがせる。ビャッコ戦で使った『風』や今回の『大地』。魔法のランクが上位に行けば行くほど強力になり、同時に結界にかける負担も大きくなる。現に、現在進行形で羽根が入ってきているが、このまま力の出し惜しみをしていては全滅だ。この復活したグレイガは計画には無いイレギュラーなため、どうあっても何とかしなければいけない。

ツバサは話はこれで終わりとばかりに両手の平を叩き、話を終了させてグレイガの方を見る。

「……さて、急がないとあのナイフ突きつけ小僧の魂を取られちまう。ソラ、スバル。アイツをオレの手の届く所まで誘導してくれ。方法は問わない」

「ナイフって……あの子そんな事したの！？」

ソラが目を見開くほど驚き、スバルの方は先程のツバサの指示に疑問を覚えた。

「ねぇツバサ君。僕達がグレイガをキミの元へ誘導しなくても、キミも動けば良いんじゃないの？」

まるでそれではツバサが動けないようだ。

ツバサはあっさりと自然に言ってのける。

「だってオレ、動けねぇもん」

「はい！？」

「『何で！？」』

スバル、ソラとウォーロックの「不意打ちを食らった―！」的な驚きの声に対し、ツバサはそちら側の耳を煩そうに指で塞ぐ。

「煩いな……。最初に足踏みした時の金色の線、あれはオレの魔方陣でな。３つの魔法を織り込んだ結界だ」

「ま、魔方陣……」

『け、結界……』

通常漫画の中で無いと出て来ない単語にスバルとウォーロックは口をポカンと開いている。今までは信じなかっただろうが、先程の地面の競り上がりを見たら嫌でも信じざるを得ない。

２人がポカンとしてる中、ソラだけは興味津々でツバサに尋ねる。

「３つって、どんな魔法？」

「幻覚を見せてこの戦闘を部外者に見せないための【ＩＬＬＵＳＩＯＮ（イリュージョン）】。それでも気になって陣に関係無い人が入ったら、即行で離れた場所に飛ばさせる【ＳＩＬＥＮＴ（サイレント）】。最後に、この戦闘を見た人の記憶を消す魔法、【ＥＲＡＳＥ（イレイズ）】。もちろん消す記憶はこの戦闘の事だけだ」

ツバサはそう付け足して「ニシシッ」と得意げな笑みを浮かべてみせる。おまけを言えば、スザクが暁達を運ぶ作業をしている時、まだ暁達は陣の中に居た。彼らには戦闘が終わるまで寝てもらう【ＳＬＥＥＰ（スリープ）】をかけたそうだ。

「で、この３つと【ＳＬＥＥＰ（スリープ）】を維持するためにここから動けないってワケ。……それじゃあ頼む。グレイガがオレの手の届くくらいまで近付いたら、グレイガとあのガキを分離できるだろう」

作戦開始だ。スバルとソラ、ウォーロックは頷くと行動に移す。

ちまちました攻撃を繰り返して、グレイガの警戒心が吹き飛ぶまで機嫌を下げてやれば良い。ガラを悪くして言うなら、『さっきからチマチマした攻撃メチャウゼェ――――！！！』といった所まで挑

発してやるのだ。後は逃げながらツバサの所まで誘導してやれば良い。

――ソラ側――

「合曲2章、焔月！」

五の舞の切れ味に一の舞の射程範囲を持つ【合曲2章：焔月】。三日月型の斬撃は通常のウィザードなら両断できる威力を持つ。しかし、相手が相手なのでこのくらいがちょうど良い。逆を言えば、このくらいやらないと相手に攻撃を認識させる事ができないのだ。それほどまでに、グレイガは強固なのである。

ギィィィィン！！

案の定攻撃が当たった音がしてグレイガの注意がスザク・フレアの方を向いた程度。ダメージにはならない。

ソラはムスッとした顔でグレイガの攻撃を避けていく。なお、彼女としてはツバサにナイフを突き立てたという事で一発返そうと思っていたのだが、先程言った通り生半可な攻撃では効果が無いのでイライラ倍増だ。

「……ここまで効果が無いとこっちが萎えてきそうだわ。……でも、攻撃を仕掛けてきたという事はそろそろ頭に血が上ってきた頃かな」

あと一歩。
そう意気込む彼女の後ろに自分の相棒がやってきた。

『ソラ、暁さん達、全員運んだよ』
「ありがと、スザク。ゆっくりハンターの中で休んでて……って言いたい所だけど、援護お願いできる？　さすがにアイツの攻撃が激しくて」

グレイガの雨あられの様な【ガトリングテイル】を掻い潜ってソラの下へ来たスザクとしては断らないわけにはいかない。

『お安い御用よ。……それにしても、何あの金色の線。ツバサを中心に広がってるみたいだけど』
「えっ……？」

何でもない風に言ったスザクの発言でソラの動きが止まる。スザクはツバサの魔方陣が見えると言っている。
【ウィザードには陣が見えない】という話はソラがまだ空中にいた時にされた話なので、彼女はまだツバサの口から聞いていない。その分確証は無いが、恐らくウィザードにはツバサの言う『陣』が見えないのだとソラは思っている。
ソラ自身見えないからどうとも言えないが、少なくとも地上に降りた時ウォーロックは『オレには見えないがな……』などとブツブツ言っていたからだ。

ウィザードには見ることが出来ないと彼女が思う理由はそれだけだ。しかし、それは地上でスバル達が聞いた言葉と同じなので、結果的に合っていると言えよう。

『ッ！！　ソラ危ない！！』

「ッ！！？」

スザクの声で我に返って慌てて前を見ると、グレイガの放った【ガトリングテイル】の先端が、今から逃げようとしても腕の一本は持って行かれるほど近くにまで迫っていたのだ。

「わ……――あぁ！？」

驚きと恐怖で声が漏れたが、最後のは純粋な驚きだ。急に視界がブレてスザク共々その場から離れる。それも、お姫様抱っこをされて。

『……大丈夫ですか？』

さらに驚くべき事に、ソラにお姫様抱っこをしているのはツバサだった。しかし、そんなはずは無い。ツバサはその場から動けないのだから彼である筈が無いのだ。

とりあえずソラは『大丈夫か？』と問われた事に答える事にした。

「う、うん。……キミは……誰？」

ツバサのそっくりさんは地上に降りた後、ソラを下ろしながら答える。

『マスターの創った魔法の１つです。……まぁ、元々は別世界のマスターが作った上に、私ももう１人の私とは違いますけどね』

その存在は穏やかに笑って見せるが、言っている事は意味不明だ。別の世界のマスター。もう１人の私。

意味不明な様子のソラとスザクを置いといて、ツバサのそっくりさんは思い出したように自己紹介をしてきた。この状況でそんなことが出来るとは、異常なまでにふてぶてしい。

『申し遅れました。私はＭＩＲＲＯＲ（ミラー）と申します。以後、お見知りおきを』

「は、はぁ……コチラコソ」

ソラは差し出された手を握り返したが、そんな彼女の言葉はミラーの暢気さとふてぶてしさに唖然としてカタカナになってしまった。

一方スザクの方は『手』ならぬ『足』を出していた。

「……何やってんの？　スザク」

『ソラにして私に挨拶しないなんて不公平。ミラー。握手しなさい』

ここにも暢気ちゃんが居た。ソラが思わず自身の額に手を置いている時、ミラーはスザクの手……もとい足を握り返す。

『……まぁ、ご命令とあらば構いませんが……』

『ご、ご命令ってそんなお堅い言い方でなくとも……』

スザクの苦笑に対し、ミラーははっきりと首を横に振る。

『いいえ。ご命令です。理由は――っと、マスターから鋭い視線が飛んできたのでそろそろ御暇（おいとま）しますか』

ツバサは確かにこれでもかという位ミラーを睨んでいる。目が、

「とっとと戻れボケナス」と語っていた。

一方ミラーはツバサではありえないくらいの丁寧さで頭を下げる。

思わずソラもスザクも頭を下げたのだが、そんな3人の下に本物のツバサの張り上げた声が聞こえてきた。

「何やってんだソラ、スザク、ミラー！　グレイガから目を離すな！！」

ビィィィィィ！！

慌ててそちらを見ると、グレイガの右の頭から放たれた赤い光線が迫ってくる。グレイガの攻撃はまさに一撃必殺。当たれば体力と気力をゴッソリ持っていかれるだろう。

『やれやれ。仕事が増えましたか』

ミラーは本当に飽き飽きしたため息交じりでソラとスザク、光線の前に立った。

「ちょ、ちょっと！　そこに立つと危ないよ！？」

『そうは言っても、あなたにこの光線をどうにかする事はできないでしょう。ここは私にお任せください』

ミラーはそう言いながら平手を光線の前に出す。直後、光線がミラーの手を襲う。

ババババッ！

ミラーの手の平に損傷は無く、まるで光線と手の間に見えない鏡があるように一撃必殺の攻撃を防いでいた。

『……ふむ。流石に重いですね。長引かせてあの犬っころの力を搾り尽くしてから返すのも良かったのですが……それだとマスターからどんな制裁を食らうか分かりませんからね。とっとと反射しますか。……えい』

長い独り言の最後に付いた『えい』。これを言うと共にほんの少し手を光線側に押しただけで、光線は球状になった後来たままの軌道でそっくりそのままグレイガに帰って行った。おまけを言えば、ミラーが話している間の光線も力に加えていたので、【瞬間の力×時間】で威力が上がっている攻撃を返したのだ。

そしてそれは真っ直ぐグレイガに飛んで行き……。

『グォォォォォォォ！！？』

胴体に当たって２０ｍほど吹っ飛んだ。反射されたのに気付いて逃げようとした時に当たったのである。

唖然メンバー：スバル、ウォーロック、ソラ、スザク。

ため息メンバー：ミラー（『あ～。一仕事終えた～』的なため息）。アイリス（『十中八九こうなると思ってた』というんざりなため息）。

ゲッソリメンバー：ツバサ。

唖然としているソラとスザクに対し、ミラーはスッキリした爽やか笑顔で顔を向けてきた。

『いや～あそこまでクリーンヒットだと清々しいですね』

「……えっと……今の何？」

あの光線をいとも容易く反射して見せたミラーに対し、ソラは未だ呆然顔を直せないまま尋ねる。対するミラーは堂々と胸を張って『当然』という顔で言う。

『えっ？　鏡は反射して当然じゃないですか？　でも流石にアレは重かったね。恋人とのデートで曰く付きの神社を選んで、さらには重箱を弁当箱に選ぶくらいに重かった』

それはもう『重い』というより『痛い』。さらに言えば「そんなの本当にあるのか？」と言いたいが、そんなツッコミを言う暇をミラーは与えてはくれなかった。『グレイガが』ではない。『ミラーが』なのだ。

『でも、マスターから魔力を（　無断で　）借りて、ほぉらあの通り！』

ミラーが指差すのはグレイガだ。何とか立ち上がったようだが、かなりのダメージがあったらしく動きが鈍い。

つまり、ツバサから魔力を無断で拝借して自身を強化。グレイガの攻撃を撥ね返したというわけだ。

『マスター！　ホラチャンス！　今のうちに捕らえちゃえ――――！！』

「……ム、ムチャ言うなボケ――――！！　てめぇがオレの魔力勝手にドンドン持って行くからそんなデカイ魔法すぐに出せるか――――！！」

「ツバサ君がもう1人居るんだけどアレ何！？」

『オレにも見えるぞ！？』

ツバサが怒鳴っている最中スバルとウォーロックが駆け寄る。2秒後、ツバサの頭で何かが切れた。

「アレの事は後で説明してやるから今は黙ってろ童顔&単細胞！！！」

「『なっ！！？』」

直後、3人の言い争いが始まる。その様子を呆れたように見ているのはこの事態を引き起こしたといっても過言ではないミラーである。

『やれやれ。相変わらず困ったマスターですね』

いや。どっちが？

ソラのそんなツッコミは口に出る事はない。

『……でも、あんまり時間をかけるとあの方を救えませんね』

ミラーがそう言って目を向けたのはグレイガだ。いや、この場合はグレイガの中に囚われているケンジを見ているのだろう。

『……ソラさん、でしたか』

呟くようにソラの名を言った後、彼女の方を向く。

『マスターがあの人を救いたいと強く思ったのは、あなたと約束したからです。……持久戦に持ち込んで自滅を狙う事もできたんですがね。だけど、それだとあなたが悲しむ。そんなあなたを見てマスターも悲しみ、そして苦しむ。……だから、手を貸しますよ』

「えっ……あっ……えっ？」

お礼を言おうとしても言葉が出て来ない。唖然としている時に急に話を振られてさらには色々聞いて混乱しているのだ。

ミラーはそんな彼女に穏やかな微笑みをくれた後、ツバサの方に声を張り上げる。

『マスター！　さっき勝手に魔力を使った代わりに、この戦闘が終わるまで私出っ放しで手を貸します～！　大船に乗った気持ちで居てくださ～い！』

「その魔力が誰から供給されると思ってんだ！　そもそもお前が出っ放しって言葉使うな！　お前がその言葉を使うと凶悪すぎるんだよ！！」

『ツバサ――――！！　まだ話は終わってねぇぞ――――！！』

ウォーロックはまだツバサに当たり足りないらしく、拳を振り上げる。ツバサの方も似たようなもので応戦の構えだ。スバルの方は大分スッキリしたらしい。

ミラーはグレイガの方をチラッと見た後、さっきより声を張り上げる。

『でも――――！　あの犬っころは待ってくれないみたいですよ～～

～～？』

『グルォォォォォォォォォォォ！！！！！』

ミラーの声に続くようにグレイガの雄叫びが響き渡る。大分落ち着いたらしく、スバル達に対し明確な敵意を送っている。

「……仕方が無い。ウォーロック、白黒付けたかったら後でな」

『望む所だ』

ツバサとウォーロック間で火花が散っている最中、ミラーは笑顔で「ウンウン」と満足気に頷く。

『いや～話がうまく纏まって良かった良かった♪』

（（（（（（　そうでもないだろう　）））））））

スバル、ソラ、アイリスとスザクの内心でのツッコミは見事にハモっていた。

第１０８話　ミラー（後書き）

「……自分の書き方って、どうやって直したんだよ」

ギャグ入れて♪　（ミラーの存在）

「ッ！！　お前の手法はまずギャグから入るのか！？」

さぁ？（↑自分の事なのに！）　今の所ケンジの結末は『中途半端』を考えています。中途半端に終わる方じゃないですよ。……この位ならネタバレにはならないでしょ。

第１０９話　等分の罪（前書き）

今回でグレイガ戦は終了です。おまけを言えば2話更新ね。

第１０９話　等分の罪

ミラーを戦力に加えた事で、ツバサの戦術の幅が広がった。

「スバルとソラ、スザクはグレイガの退路をオレの方だけ空けて他を塞げ！　ミラーはその間スバル達に攻撃が向かおうとした時反射を頼む！」

意図的にグレイガの退路をツバサの方向だけにし、誘き寄せる作戦だ。

ミラーからの一撃を食らったグレイガはミラーの一撃を警戒している。そのミラーがスバル達の方に付いていると分かればツバサの方に来る確率は上がるだろう。

「でもそれだとツバサ君が危ないよ！」

そう。スバルの言葉通り、これでは彼は自分だけで身を護らなければいけない。尻尾の一振りで電波人間を薙ぎ払う攻撃力を持つケモノ相手にだ。

心配するスバルの肩を叩いたのはミラーだ。

『ご安心ください星河さん。マスターは今、多少本気を出しています。そう簡単には負けません』

「た、多少って……アレで？」

巨石をいくつもを打ち上げといて？

スバルが信じられないという顔で巨石を打ち上げた影響でクレーター状になっている大地を指差す。

『えぇ。アレで♪　（……2つほど厄介なモノが、マスターのチカラの制限を強いてますからね……）』

ミラーはそれをあっさりとご機嫌に笑顔で頷いた後、何かを呟いた。

「？」

しかしスバルには聞こえなかったらしく、彼が首を傾げるとミラーは『何でも無いですよ』と朗らかに言って話を戻す。

『それに、この陣の中ならマスターの魔法、つまり私は瞬間移動クラスの速さで移動できます。なので、スバルさんやソラさんが一斉に攻撃を受けない限り、マスターは護れますよ』

その瞬間移動は言ってしまえばウィザードの実体化のようなものだ。移動する際、自身の体（ミラー）を陣の中に溶け込ませ、目標地点で体を構築する。

溶け込んで再構築までの時間が短いので瞬間移動のように思えるのだ。

ボォォォォォ！！

『ガァァァァァ！！！』

「スバル君そっち行ったよ！」

ソラがスカイタウン戦で見せた不死鳥の技、【焔之舞（ほむらのまい）】を受けたグレイガはスバルの方へ向かう。

ツバサのＥＡＲＴＨＹ（アーシー）は威力が低いが詳細が分からない攻撃。ソラの焔之舞は火力が段違いな強さ。２つの攻撃を食らったグレイガから見れば、スバルが現時点で一番突破しやすい対象に思えたのだろう。

生命体が自身の生存のために確率の高い選択をするのは本能と言える。そして、自分の命を維持するという本能は何にも増して強いものだ。

人間でもそれは言える事で、自信などの天災で個々の食料の確保が難しくなった時、集団を作ってスーパーやコンビニから食料を強奪という話はよく聞く事だ。

グレイガは先程ミラーに光線を反射された教訓から巨大な爪でロックマンを引き裂くつもりらしい。

『グォォォォォォ！！！』

雄々しい雄叫びと共にグレイガは爪を振り上げる。

ツバサとソラは何もしない。する必要が無いのだ。スバルは3度も地球を脅威から救っている存在。ツバサはそんなスバルの戦いを見守ってきて、ソラの方も旅行中、彼の戦闘力は何度も垣間見ている。

「ウォーロック」

『おう』

何をしてと言わなくともこの２人は意志の疎通が取れている。スバルのこれからの動きが分かったウォーロックはハンターの中に戻

り、ミラーもそれを察して半歩スバルから離れた。

ズゥウウウウン！！

グレイガの爪がロックマンの居た大地に深々とめり込む。『居た』とは過去形。すなわち、スバルはその爪をかわしていた。鋭い爪と爪の間に、彼は立っていた。真上に近い角度でサーチノイズの銃口を構えて。

「ＮＦＢ（ノイズフォースビックバン）！　シューティングスター！！」

細長い銃口から放たれた青い軌跡は真っ直ぐとグレイガの鼻に命中する。回避する隙は与えない。

『ギゴォォォォォォ！！』

グレイガは悲鳴を上げながらスバルのいる地点から足を離す。スバルはその一歩手前で引いていたので爪を持ち上げる時にダメージを受ける事は無い。

動物の５感は人間のそれよりも重要だ。かつ、発達している。他種より下なら喰われる。その感覚組織を怪我していても喰われる。ほんの少しの体の不調が死を意味する野生界では５感の不調は絶対的なタブーなのだ。

敏感で感度が良いという事は、同時に強い刺激に弱い事を意味する。それは嗅覚、つまりは鼻も例外では無い。

グレイガはロックマンから少し距離を取ってロックマンを警戒す

る。ロックマンは油断の無い目でライフルを構えてグレイガと対峙した。

野生の動物と遭った時は相手の目から視線を逸らさない事だ。逸らせば隙を見せたとして襲ってくる。

電波人間ロックマン対電脳獣グレイガ。互いに目を逸らさず、均衡が少しの時間続いた。

『グルガァァァァァ！！！』

先に動いたのはグレイガだ。３つの口に光が集まる。右は赤。左が青。真ん中には紫だ。

『おっと、その攻撃はさせませんよ』

ミラーはそう言うとスバルの隣に立って手を前に向ける。

『……さぁ犬っころ。いつでも撃って御覧なさい。さっきみたいに無様に吹き飛ばされたく無かったらね』

スバルは目を逸らす事は無いがその言葉で苦笑する。及び、納得もした。主人（ツバサ）に似て口が悪い。

『グルルルルルル……』

グレイガは唸り声を上げて静かに後ずさり、体の向きを変えてツバサの方へ走り出す。

スバルとソラはツバサの元へ向かう事は禁じられている。ツバサの元へおびき寄せる以上、ツバサの攻撃力が一番弱い事をアピールしなければいけない。グレイガには油断してもらわないと困るのだ。

だから、ソラには自分の持つ一番の大技で。スバルには一番の大技を感覚組織という最も効果的な箇所へと攻撃してもらったのだ。

スザク・フレアの強大な火力。ロックマンサーチノイズの的確な狙撃力。対してツバサは巨石を打ち上げる程度。並みの攻撃が効かないグレイガにとって、怯みはしてもパワーで圧倒できる相手。３人の中で突破の容易な人物と映るだろう。

『グォォォォォォォ！！！！！』

雄叫びと共にグレイガは飛び上がり、それに応える様にツバサはＥＡＲＴＨＹ（アーシー）を繰り出した足を持ち上げる。そして、グレイガが爪を振り上げて勢い良く振り下ろすと同時にツバサはその足で地面を思いっきり踏みつけた。

みしぃ……

爪の当たった対象は少し軋んだ程度。ツバサが出したのは『木』だ。巨大な幹（みき）がツバサを護る様に地面から生え、グレイガの腕に巻き付いて動きを封じる。

爪がダメなら光線を。

グレイガは口に光を集めるが、ミラーがツバサの横に瞬時に移動。

グレイガの光線を封じる。

『グルルルルルル……』

爪と光線を封じられた今、現在確認されているグレイガの技でこの状況を打破しうるのは尻尾の先端を飛ばす【ガトリングテイル】のみ。

ツバサとの距離から考えてグレイガ自身にもダメージが及びそうだったため、使うのは最後にしたのだ。

みしぃ……

上げようとした尻尾が上がらない。聞こえてきたのは先程の木の軋む音。グレイガの尻尾は、ミラーがそばに現れた隙にツバサが封じていた。

グレイガは、２００年前の獣は、攻め手を完全に封じられたのだ。

「ツバサ君！」

「スゴイねこれ」

スバルは作戦が成功した喜びの笑顔、ソラはツバサが出した木に驚きながら近付いてきた。ほとんど実質的な戦闘終了だ。顔がほぐれるのは無理からぬ事。

ツバサもそれが重々分かっているのでどうこう言うことは無い。

グレイガの四肢を完全に封じながら答える。

「おぉ。これは――」

『ＷＯＯＤ（ウッド）です』

「……」

言おうとした事が従者に言われてツバサはミラーを見て、主人と従者の間で火花が散る。

スバルとソラが呆れて止めようかどうかを相談している時、グレイガが急に吼える。

『グルォォォォォォ！！！』

それは雄叫びとは違う。苦しんでいる時の悲鳴だ。

ミラーを含め、４人の視線はグレイガに集中する。羽根の見えないソラはグレイガを。ツバサとミラーはグレイガの背中を。そしてスバルは羽の方を１回見たが、すぐにグレイガの額に視線を移す。

そちらの方から微かに声が聞こえてきたのだ。

『た……け……て！』

「ッ！！」

スバルは驚いて息を飲む。グレイガの額から、人の上半身と思しき白いもやの様なモノが出ている。その口がしきりに同じ事を言っていた。

『助けて！』

「ッ！　あの人って学園祭のときの！」

学園祭の時、スバルにお化け屋敷への道を尋ねてきた人が助けを求めている。彼がドッグ・ツインの正体だった事にも驚いたが、それ以上に並々ならぬ危機を感じていた。まるで、その人が今にも消えてしまいそうな気がしたのだ。

「？　学園祭？」

訝る様子のツバサにスバルは自分の見えるモノの事を話した。
ツバサは一通り聞き終わると神妙な顔で視線をグレイガに戻す。

「……なるほど。……その事もこの戦闘が終わって、後片付けのゴタゴタが終わった後で教えてやる。今はアイツを助けよう」

ツバサは静かにグレイガの爪に触る。グレイガを触れる位に近くでＷＯＯＤ（ウッド）を発動させたので、十分に手で届く範囲だ。

「……スバル、ソラ。今からグレイガとドッグ・ツインを分離する。グレイガの方に全力で攻撃しろ。ドッグ・ツインの方はオレがどうにかする」

グレイガの爪に触れてそこからグレイガの電波構造に進入（ハッキング）。強制的に分離させるつもりだ。

スバルとソラは頷くと攻撃の準備を始める。
スバルはブルースノイズに変化。【ＮＦＢ：断空】の構えを取り、ソラの方は両手を上に掲げて炎を収束。【六の舞：炎獄】の構えだ。
それを見たツバサはカウントダウンを開始する。

「それじゃあ、３……２……１」

バシュッ！

弾ける様な音と閃光と共に、グレイガとドッグ・ツインは分離さ

れる。
　グレイガとの強制的な電波変換の影響だろう。人間としてではなく、電波変換した姿で分離した。
　分離した際ＷＯＯＤ（ウッド）から離れたが、すかさずロックマンとスザク・フレアの攻撃がグレイガを襲う。
「ＮＦＢ、断空！」
「六の舞、炎獄！！」
　ロックマンの音速の斬撃がグレイガを突き抜け、スザク・フレアの灼熱の業火がグレイガを飲み込んだ後には、胴体に風穴の開いたグレイガの姿があった。
　グレイガはドッグ・ツインの体を寄りしろに復活。しかし、ドッグ・ツインに憑いている羽根に蝕まれて、時間を追う毎に弱っていたのだ。……先程までの非情なまでな戦闘力は、生命の危機にさらされたグレイガが生存本能と戦闘本能をフルに引き出した結果なのだろう。
　かろうじて残留データという形で生き長らえて来たグレイガ。ケンジを飲み込むことでまともに動く事が出来たグレイガ。そんなグレイガにとって、ロックマンとスザク・フレアの攻撃は耐えられるものではなかった。
『オオオオオオオ……』
　グレイガの体は大きく仰け反り、背中が地面に着く前に霞とも靄（もや）とも取れないモノに姿を変えて消え去った。２００年前の獣は、今度こそ永遠の眠りにつくだろう。

そしてケンジの方もまた……。

「……これはっ」

分離したケンジを受け止めたツバサは一蟲《コ』の中心核を探るが、厄介な事に気付いた。

深くまで侵蝕され過ぎている。これでは抜き出した時に必要以上に魂を傷つけてしまう。

ツバサはドッグ・ツインの両肩に居る炎牙と氷牙の顔を見て、悲しそうに目を伏せた。

「……ごめんな」

「ッ！！　うわぁぁぁぁあああぁぁぁ！！！」
『ッ！！　グッガッァァァァァァ！！』
『ッ！　グゥウゥウゥウゥウ！！』

ツバサの手が羽根に触れた途端、ケンジだけでなく炎牙と氷牙からも悲鳴が響く。

ツバサが彼の羽根から手を離すと、ケンジと炎牙、そして氷牙は息も絶え絶えに気絶した。グレイガの強大な力で体に極度の負担が来ていたらしく、気を失うと共に電波変換が解除される。

先程の悲鳴が気になったらしく、電波変換を解除したスバルとソ

ラが話しかけてきた。

「さっきの悲鳴、どうしたの？　それにその人……」

スバルの言葉と視線の先には、グッタリとツバサの肩に頭を預ける少年がいた。ツバサはため息をついて、辛そうに話し出した。

「……手遅れな位奥深くまで侵蝕してたんでな。こいつとえ、2体の電波体。……計3人から3分の1ずつ魂をこの羽根みたいな奴にくれてやった」

その時スバルとソラが聞いたのは、羽根の正体が『蟲（コ）』という存在という事だ。魂を吸い出す存在という事は、スバルは羽根が見えた時にツバサから聞いた。ソラはその時グレイガと交戦中だったためツバサがその事を彼女に説明しようとした時、耳障りな声が響く。

『ギギィィィィィ……』

ソラには姿どころかその声すらも聞こえないが、ツバサとスバルにはハッキリと見えていた。

少年の背中から1本、また1本と触手のような物が這い出てくる。

全貌を現した『蟲（コ）』は、卵の様な楕円に大きな羽を2枚生やし、吸盤の付いていないタコの様な足が付いていた。

「なっななななな……」

『何これ――――――！！！』

スバルが言えなかった言葉をスザクが引き継ぐ。ツバサは片手でケンジを支えてもう片方の手で後ろのスバル達を手で制す。

「迂闊に動くなよ。こう見えても一応自分から攻撃はしてこない。お前らが下手に騒がない限り、こいつはオレ達を襲わないだろう」

実際ツバサの言う通りだった。背中から出た『蟲（コ）』はスバル達を警戒するも、スバル達が何もしないと分かると天高く飛んでいった。見過ごしても良かったのかとスバルは聞こうと思ったが、その前にツバサが口を開いた。

「3分の1だから完全に抜け殻になるわけじゃない。ただどこか欠落した人間……例えば泣く事が出来ないとかだな。そういう人間になる。……この2体の電波体も、な……」

彼、陸ケンジの罪を言うなれば、言うまでも無く今までの破壊活動だろう。

「……多分コイツは精神状態不安定として割と早い次期に外に出られるだろう。今までの罪の対価は、さっきので支払ったわけだしな」

そしてその罪は……対価は、今支払われた。3人の罪は、3等分されて彼らに降りかかったのだ。……3分の1ずつの魂を犠牲にするという形で。

第１０９話　等分の罪（後書き）

今回出たスバルの力の解説は次の話で行います。

さてさて、今回ツバサがした事ですが、本来１人で背負うべき『蟲』をケンジ、炎牙、氷牙の３人で分散させました。これってある意味で『中途半端』なんですよね。

少しひねて言えば、『全員（３人が）不幸になる選択』って事です。１人に押し付けて２人が助かるではなく、全員で罪を分担しているんですからね。

大抵の場合、悪いモノ（原因など）を誰か１人、または少数派に押し付けたがるものですから。

そういう点で言えば、罪の分散というのは『天邪鬼（あまのじゃく）』であり、中途半端とも言えるんです。

第１１０話　後片付け（前書き）

今回の話は後片付けをしながら色々話します。前話で目覚めたスバルの力とか、ギャグとか（↑またそれかい！）。

第１１０話　後片付け

『それでは、そろそろ私も本当に御暇（おいとま）します。中々楽しかったですよ』

蟲（コ）が見えなくなった時、ミラーが全員に向き合う。

それに対し、主である筈のツバサは面倒そうに「シッシッ」と指先を動かしていた。

「お前のおかげで助かったが、とっとと戻れ。そろそろ腹減ってきた」

お昼にはまだ早いが、あれだけ大量にハイペースで魔法を使えば疲れもする。それが空腹という形で現れているのだ。

『釣れないですね～マスター。それじゃあソラさんがかわいそうだ』

「えっ？　あたし？」

不意に自分の名前が出たので目を丸くするソラ。ミラーはクスリと微笑んで彼女の耳元で囁いた。

『《好きなんでしょ？　マスターの事》』

「ッ！！」

ストレートに言われるとは思っていなかったので思わずソラは赤くなる。そんな彼女をミラーは愉快気に笑いながら耳元から顔を離した。

スバルとウォーロックは頭にハテナを浮かべる。スザクはニヤニヤと、アイリスは面白そうに微笑んで左右から肘でツバサを小突い

ていた。小突かれているツバサはイライラしながら目を逸らそうとするが、左右に小突いているメンバーが居たので目のやり場に困り、結果、下を向く事にした。

『初対面ですが、私はソラさんの方が気に入りましたね』

「オイ待てミラー。【の方が】ってのは、オレよりソラの方がって意味か？」

八つ当たりの対象を見つけたらしく、ツバサはミラーに食って掛かる。

従者が主をからかったり、主が従者とケンカしたり。つくづくフリーな主従関係だ。……もっとも、それがツバサらしいのかもしれない。

ツバサが詰め寄るのを見て、ミラーは彼から離れてソラの後ろに隠れる。

『それ以外に何かあります？　……あ、星河さん』

「は、はい！」

ツバサの見た目でソラの後ろに隠れるものだから、違和感からスバルは不躾にも見続けてしまった。

何を言われるのかと若干緊張していたスバルに対し、ミラーは優しく微笑みかけた。

『そんなに緊張しないで良いですよ。これから大変だと思いますが、頑張ってくださいね』

「あ……は、はい！」

同じ「はい」でも、今度は相手の信頼から来る喜びの返事だ。

この時にはツバサはソラの近くに来ていて、ツバサとミラーは衛星のように彼女の周りを回っていた。常にツバサとは正反対の位置にいるようにミラーが動いているので、ツバサにはミラーを捕まえる事ができないのである。

『それからソラさん』

「な、なに？」

何とかミラーと顔を合わせようとしたが、ツバサとミラーの動きが早すぎて無理だった。

『さっきも言いましたが、私はソラさんの方が気に入りました。そっちの方も、頑張ってくださいね』

そっちの方というのはあえて表記はしない。野暮な上に、予想するのは容易だから。

「もちろん！　任せといてよ！　……でも、何でツバサより私の方が気に入ったの？」

ソラはミラーと顔を合わせる事が出来ないが、それでも元気に答える。

ツバサとソラで何でソラを気に入ったかという質問に、ミラーが後ろで「ふっ」と微笑んだのをソラは感じた。

『……同性ですからね。応援したくなりました』

「へっ！？」

ソラが驚いて後ろを向くと、ミラーの体は半透明になっていた。

『それでは皆さん。マスターの事、よろしくお願いいたします』

さらに、ミラーは長い髪に着物を纏い、丸い鏡を手にした巫女のような少女へと姿を変え、陽(ひ)の光の中に消えていく。優しく、明るい笑顔と共に。

ミラーは暢気君ではなく、暢気ちゃんだったのだ。思い返してみれば、彼女の一人称は一貫して『私』だった。言葉の礼儀正さと言い、女性だといわれても可笑しくないだろう。

しかし、ツバサの見た目ですっかり騙された面々は少し遅れた叫び声を上げる。

「「『『……えぇ――――――――!!!!!」」』』

才葉シティの広場に、４人の叫び声が響き渡った。発信源は、スバルとソラ、ウォーロックとスザクだ。

その後ツバサ達は、暁達が目覚めるまで広場の後片付けに努めた。光線で台地が抉られるのはグレイガの攻撃だから言い訳のしようがあるが、ボコボコ生えている木やクレーター上になっている大地。そして打ち上げられた巨石は言い訳に困る。

現存するバトルカードに、木を生やすバトルカードは無い。洞察力の良い暁に見破られないためには、完全に証拠隠滅するしかない。

「はぁ。……まさか電波変換をもう1回することになるなんて……。五の舞、炎翼～～」

ソラは電波変換してスザク・フレアとなり、ため息交じりで巨大な木の幹を切る。

「次、四の舞、召炎（しょうえん）。……や～っておしまい」

某3人組の首領のモノマネをしたのは、その位やらないと気が滅入るからだ。少しはおふざけが無ければやってけない。

そしてそんな彼女のやる気に感化されたように、炎の人形達はゆっくりと仕事をする。

ソラはその様子にため息をついて両手を合わせる様に手の平を叩く。

「はいはーい。早くしないと色々と大変だから急ぐ急ぐ。えっ～と……」

考えてみれば、【召炎】という技名は考えても炎の人形自体の名前を決めていなかった。ソラの思いついた答えは……。

「魔女狩りの王（イノケンティウス）や～い。キリキリ働け～～～」（↑棒読み）

某作品の１４歳でタバコを吸う赤髪牧師の技名になっていた。なお、この名は後に「偉い人に怒られる」との事でツバサからＮＧが入ったのでボツ。

「働け」と言っても、それを言っている彼女自身がローテンションなのだから聞くわけが無い。現に先程のセリフは棒読みだ。

巨大な幹を手頃なサイズに切って【四の舞：召炎】が燃やす作戦（？）なのだが、あまり上手くいっていないらしい。

不平たらたらなソラに対し、スバルの方は真面目にクレーターを直していく。まず打ち上げられた岩をクレーターの元に戻して、ツバサが作ったリアルウェーブのローラー（　陸上部などで地面を均す道具　）で平らにしていくのだ。

無論スバルは電波変換している。生身でそんな物を動かせる小学生はまず居ない。

「それにしても、こんな物まで作ってたなんてね――」

スバルが呆れと感心を混ぜた様子でツバサを見る。いくら遊びで作ったと言っても、陸上競技で使うようなローラーを作る必要性が分からなかった。

しかし、次にスバルは唖然とする事になる。ツバサがローラーを片手で持って地面を均しているではないか。彼は電波変換していないので今のスバル（ロックマン）のような怪力は出せないはずだ。

凝視されている事に気付いたのか、ツバサが作業を休めてスバルを見てきた。

「？　どうした？　スバル。早くしないと暁達が起きるぞ」

「えっ……いやその……なんでそんな重い物を持てるの？」

スバルがツバサの持つローラーを指差した事で納得したらしく、持ち手を片手で持って軽く振って見せた。

「魔法の1つのPOWER（パワー）だよ。使った人は怪力になれるって代物。このくらいならほとんど力の消費も無いしな」
「へぇ～。やっぱり何を使うかで力の消費って違うの？」
慣れてしまえば魔法という眉唾なモノも割と簡単に受け入れてしまえるものだ。ほんの数分前まで疑っていたスバルはすっかり信じきっている。恐るべきは少年の順応性。
スバルの好奇心がフルに発揮されている。
「そりゃあ違うさ。基本的に強い力を持つのは大きいな。さっきのMIRROR（ミラー）とか、EARTHY（アーシー）とか。他には――」
『そこ。無駄話してないで早く終わらせましょう』
ツバサとスバルが話している時に口を挟んできたのはアイリスだ。彼女は荒れた花壇を整えている。長さ20センチくらいのシャベルを片手に持って、土汚れを防ぐエプロンを着てスバルとツバサを見る。
もちろんどっちもツバサの作ったリアルウェーブで、ツバサから借りた物だ。
「「……」」
しかし、反対にスバルとツバサもアイリスを見ていた。
『……なに？』
ジッと見られた事を不思議に思ったのだろう。アイリスは怪訝そうに男子2名を見る。

「いや、シャベル持ってエプロンを着ていると――」
「保育園のお姉さんみたい――」
『だよな』

最後はスバルとツバサの沈黙が気になって出てきたウォーロックが締め括る。

対するアイリスは照れから目を背ける。頬には僅かに赤みが差していた。

だが実際、そう見えなくも無い。見た目の歳という要素を除けば、緑のエプロンに小さいシャベルを持って花壇の手入れをしている、大人しくて優しい保育園の先生に見えてしまう。……しつこいようだが、見た目の歳や身長という要素を除いてだ。

なお、ナビは理屈で言えばプログラムなので赤面というのは無い。だから、そのくらい照れていたという例えである。

スバルとウォーロックは照れている事は察したが何でかは分からない。ツバサは長年の付き合いの関係上察したが、分かったら分かったで気まずく、話を逸らす事にした。

身内が働いている店に行って、ばったり会って気まずくなるのと同じだ。

「あぁそうだ、スバル。思い出した」
「えっ？　何を？」

【少し良いか】などの用件を意味する言葉ではなく、【思い出した】という言葉が気になってスバルはツバサの方を見る。

「お前の見たアイツ――」

ツバサの目がリアルウェーブ製の簡易式ベッドで横になっているケンジに向いた。

「――の白い靄（もや）の事だがな。アレ、オレには見えなかった」

「えっ……。そうなの？」

ツバサが言うのは、スバルが見たと言う白い靄のような状態のケンジだ。グレイガの額から上半身だけ出るような形で見えたのだ。

それがツバサには見えなかったという。その事にスバルが驚いて彼に確認を取るが、ツバサは事も無げに頷いて見せた。

「あぁ。でも、何なのかは想像が付いた。多分アレはお前の固有の能力だと思う」

「……僕の……？」

「そう。……まだ1回だけだから確実に断ずる事は出来ないが、悪いモノに取り憑かれた時、そしてそのモノに心を飲み込まれた時、飲み込まれた奴の助けを求めている声が聞こえるんだと思う」

白い靄状の『姿』のオマケ付きでな。

そう付け加えて、ツバサは「フッ」と笑ってみせる。

「良い能力（チカラ）じゃないか。心の優しいお前らしいチカラだ」

悪しきモノに取り憑かれ、飲み込まれた時。飲み込まれた人の悲痛の叫びを聞く事が出来る。その姿を見る事が出来る。それが、スバルの持つ固有の力だと言う。

「……僕だけの……能力（チカラ）……」
『……でも、大丈夫なのか？』

スバルがそのチカラで何が出来るかを考えていた時、ウォーロックが意味深に唸りながら口を挟む。

『経験から言ってもだな。なんか力を持つってのはそれだけ厄介な事に巻き込まれやすくなるって事だろ？　スバルにもしもの事があったらどうするんだ』

それはもっともな意見だ。

経済力であれ科学力であれ、兵器であれなんであれ、強い力を持つと様々な災厄を引き寄せるようになる。街灯の明かりに集まる羽虫のように、強い力は様々なモノを引き寄せるのだ。

引き寄せるのは悪いモノだけではないが、逆を言えば良いモノばかりでもない。持っている力によっては、とんでもなく厄介なモノを引き寄せる場合も有るのだ。

ツバサは苦笑交じりでローラー作業を再開して、スバルとウォーロックに対し後ろ向きのまま答えた。

「だ～からこれから教えるんだって。見えるだけじゃあ確かに面倒事に巻き込まれて痛い目を見る事が多いが、ちゃんと対応策を知っておけばどうという事も無い。幸い、スバルの目覚めている力は今の所その【見て、聞く力】だけみたいだからな。その位なら下手に良くないモノを刺激する事も無いだろう」
『……つまり、どういうこった？』

話している間に、ツバサはあらかた地面を均し終わったのでローラーのリアルウェーブを解除した。そして、スバルとウォーロックの方に目を向ける。

「端的に酷い言い方をすれば、スバルの持っている力だと最低限の知識を持って行動すれば大きな奴を呼び寄せる事は無いって事。知識は持っているだけじゃ意味無いから、実践する事も忘れなければな」

つまり、見えるだけでは力が弱いから、大した災厄は呼び寄せないだろうという事だ。

「あはは。確かに酷い言われようだね」

だがその分、リスクは低い。

『全くだ。……でも、ツバサの言う通り良い能力じゃねぇか。お前らしい能力だよ』

「ウォーロック……。うん、ありがとう」

ウォーロックがスバルに笑いかけ、スバルも笑みとお礼を返す。

自分の持つ力。この力で自分が助けられる人が増える事を願って、スバルは自身の手の開いた状態を眺め、強く拳を固める。

新しい『力』の可能性に期待が弾むのは、少年の持つ素直さからだろう。

それから約２０分後。暁やジャック、ミソラにそれぞれのウィザードが目覚めた。その時にはほとんど証拠隠滅は終わっていたので後は言い訳をするだけだ。

どうやってグレイガを倒したかというのを説明すれば良いのだが、洞察力の良い暁とジャックが居たので相当な時間が掛かったのは言うまでも無い。

しかし、本当の事を話すわけにもいかないだろう。魔法なんて眉唾なモノ、実際に見ないと信じられないものだ。

結局、最終的に暁が根負けした。

「分かった分かった。それじゃあソラが助っ人に来て、３人……アイリスも入るから４人か。ともかく全員で協力してグレイガを倒したわけだな？」

スバル達が言ったのは……。

ピンチの時にソラが助っ人に来た　↓　アイリスがグレイガの動きを何とか制御して止めている間に、グレイガの足を傷付けて早く走れなくする　↓　一斉攻撃で止め。

というデッチ上げだ。全員で協力と言うのはあながち間違ってはいない。人員でミラーが加わっていて、『魔法』という存在が実在した事以外はほとんど合っている。

暁としてはアレだけ強いグレイガに対してそれだけで勝てた事が疑問だったが、ツバサの戦術とスバルとソラの実力、そしてアイリ

スの処理・制御力を信じて納得してくれたのだ。

スバルとソラには暁を騙した事への罪悪感があったが、下手に言えるような話題ではないため堪えるしかなかった。

その後の現場の事は暁に任せて、スバル達は一足先にスカイタウンまで戻る事となった。

ゴンタやルナ、キザマロ。そして赤羽夫妻に無事な姿を見せて安心させるために。

第１１０話　後片付け（後書き）

今回出てきた２つのネタは明言はしてませんが分かる人には分かりますよね。１つ目のヒントは「おしおきだべ～～～」で、２つ目が暴食シスターが出てくる作品です（笑）。

第１１１話　親として……（前書き）

１０Ｋバイトクラス（文字数で言うと、約５千）を２連発というのは読む側も気が滅入るかも知れないと思い、少し時間を空けて更新します。

第１１１話　親として……

――スカイタウン――

「ただいま戻りました」

セントラルタウンから戻ったスバル達を待っていたのは、委員長トリオに赤羽夫妻だった。

「お帰りなさい。……あら？　ツバサ君とソラさんは？」

帰ってきたのはスバルとミソラ、ジャックだけだ。暁は事件の後始末の方に行っているのでいないのは聞いていたが、ツバサとソラがいない事は聞いていない。

赤羽夫妻も不思議に思ったらしく、スバルの方を見てくる。

スバルはものすごく言い難そうに顔と目を逸らして、さらには片手を自分の頭の後ろに置いて答えた。

「いや～実は――」

口元はやや引きつっている。

――回想・セントラルタウン――

「あ――――――！！！」

スカイタウン行きのリニアバスを待っている時、ソラが突然思い出したような高い声を上げる。

「……何だ？　オレの安眠妨害の企みか？」

尋ねるツバサはやたらと不機嫌だ。それもそのはず。力を使った分食べて、後は睡眠で疲れを取ろうとしていた矢先の事だ。眠る直前の大声というのは、やたらと響くものがある。

ソラは油を差していない機械のようにガクガクとツバサの方を向く。今の彼女にはツバサの不機嫌な理由はおろか、不機嫌な事さえも分からないようだ。

「……無理矢理出てきたから、パパとママ、怒ってるだろうな……」

彼女の性格上、というか交渉術から考えて、話し合いではなく強引に出てきた可能性が高い。ソラも心当たりがあるらしく、周りには真っ暗なオーラを放っている。

「よし。ここは素直に怒られて来い」

ツバサはそう言うと待合室のベンチに横になって背中を向ける。

「いやいやツバサ君！　いくら寝たいからってそれは酷いよ！　……でも、すごい落ち込みようだね」

『……まさかとは思うが、壁とか壊してねぇよな？』

スバルはツッコミを入れた後心配した眼差しをソラに送り、ウォーロックは冗談半分で予想を言う。

ギクッ

「……5枚ほど壁を破りました」

『……厳密に言えば熔かしました』

「「「「……」」」」

予想的中だ。ソラとスザクの告白により、待合室には言いようの無い沈黙が流れる。これはもう両親所ではなく、そこで働いている色んな人にも怒られそうだ。

さらに項垂れるソラを見て、一同の目はツバサに集まる。スバル以外の全員は彼女を励ますのは彼氏の役目という考えから。スバルはツバサへの信頼からだ。

「「「「……」」」」

「……」

返事が無い。ジャックはツバサの肩を揺すりながら声をかける。

「……おい」

「……ぐぅ」

ツバサは寝ていた。

「「「「……」」」」

この時、スバル達の反応は以下の通りに分かれた。

スバルとミソラ、ハープは「しょうがないな」とか思いつつツバサを優しく起こそうとし、ジャックとコーヴァス、アイリスはスバルの方に行こうとしたウォーロックを囲んで命じた。

「『あのバカに一発叩き込んで来い』」

『嫌なら私が無理にでも操作するわ』

ジャック、コーヴァスの命令はまだしも、アイリスの言葉はシャレにならない。自分の体が自分の意志ではなく他人に動かされる恐怖というものだ。味わったものにしか分からない。

『……』

ウォーロックはツバサを1回見て、心の中で謝ってから実行した。

彼には、逆らう事は許されなかったのである。

ズゴッ！

「でっ！」

3秒後、打撃音と共にツバサは目覚める。

「……つまり、オレはどうしろと？」

手荒い目覚ましに不機嫌さを増したツバサが両目を閉じながら問う。それは眠いからではなく、怒りの対象をその目に映さないためだろう。

ソラが無理矢理笑顔を作って首を傾げる。

「……どうしよっか？」

プチッ

出来るだけ可愛く言ったのが逆効果だったらしい。ツバサから何かが切れる音がして、ツバサは目を見開いてソラに迫る。

「人を叩き起こしといてどうしようか……だぁ？」

「……ごめんなさい。冗談です。……このまま真っ直ぐスカイタウンに帰るのが恐いです」

ツバサの迫力に押されてソラは素直に白状した。

ソラは何も怒られるのが恐いわけではない。どちらかというと、会う事自体が恐いのだ。壁を壊したという理由もある。そして、自分の両親がどういう怒り方をするかというのが分からないというのもある。

しかし、何よりも前の日に彼らは暁から電波変換での戦いの事を聞いたはずだ。現に、振り切る時でさえ「危ないから行かないで！」や、「何もお前が行く事は無い！」という声がかかったのだ。下手をすれば死ぬ可能性があると聞けば、大抵の親はそういう態度に出るだろう。

それを強引に抜け出してきたのだから、どういった事を言われるか分からない。もしかしたら「危ない事に巻き込ませないためにも、もう2度とこの子達に会わせられない」などで、ツバサ達とずっと

逢えなくなる可能性だってあるのだ。

ソラはそう言った事を弱い口調で言った後ツバサを見る。

「……どうしよう……」

ツバサは静かなため息を付いて背もたれに体重を傾ける。

「……まぁ、ようやく家族の距離を縮められそうって時にこれだからな。縁切りも最悪あり得るか」

「……」

「……分かったよ、分かりました。旅館に用があるから、オレの護衛って事でお前を連れてく。……だからその捨てられる直前の小動物のような目を止めろ」

ツバサの『用』とは、セレナードの元へいく事だ。本音を言えば彼女同様今行くのは恐いが、後に伸ばせば伸ばすほどどうなるか分からない。嫌な事（　怖い事　）は早めに終わらせるに限る。

ソラとしては捨てられる直前の小動物のような目はしていないつもりだったのだが、そう映ってしまったらしい。だが、それならどうにかなりそうだ。無論女将にも何かしら言われるだろうが、絶縁までは行かないだろう。

そうして2人はスバル達と別れた。

――――回想終わり――――

「それで2人が旅館に……」
「ソラさんらしいといえばソラさんらしいですね」
「それにしてもツバサは何で旅館に行ったんだ？」

ルナとキザマロが苦笑いを浮かべ、ゴンタが首を傾げる。
そして最後はジャックがからかうような意地の悪い笑顔を浮かべて純度１００パーセントの推測を言う。

「アレじゃねぇか？　用とか何とか言って女将さんにご挨拶ってヤツ」
「……そうか」

ソラの父、志出野が納得したのは無論ジャックの冗談の事ではない。そもそもそれは納得ですらないのだ。
ソラの事である。彼女が壁を5枚壊したことではない。彼女のこれからについてだ。電波変換しての戦いの事は暁から聞いた。その危険性も。
彼女が戻ってきたら話し合おうと思っていたのだ。2度と危険な事に踏み込まないように。

この感情は、ソラの両親のようにようやく寄りを戻したような仲でなくともそうだろう。親はいつだって子供の事を思うものだ。……作者の視点から見て、『全ての親が子供と向き合っているわけでは無い』と言わざるを得ないが、少なくともソラの両親はソラと向き合おうとしていた。そうでなければ、心配なんてしない。怒るという事もしないだろう。

しかし、そこまでを瞬時に理解するにはスバル達は幼い。ジャックの冗談について納得したのだと思ったようだ。……細かく言えば、

ゴンタやキザマロといった男子だが。

「だ、大丈夫ですよ。これはジャック君の冗談でしょうし。ね、ジャック君？」

「おう。……けどこの場合オレの冗談じゃなくて――」

「ジャック見苦しいぜ。こういう時は素直に謝んだよ」

頭の切れるジャックとしては赤羽夫妻の考えている事は察しが付いた。その事を言おうとしたがゴンタが邪魔をしたという訳である。

ジャックはため息交じりで再度言おうとするが……。

「だからな――」

「ソラさんが今後危ない目に遭わないかどうか気にかけていらっしゃるんですよね」

「……」

不運なジャック。彼が言う前にルナがドンピシャの答えを言い、ジャックは拳をワナワナと震わせる。自分が言おうとしている時にドンドン邪魔をされ、最終的には言いたい事を先に言われる。これは結構屈辱的だ。

一方、ドンピシャを突かれた赤羽夫妻は苦笑しながら顔を見合わせ、志出野が両手の肘から先を上げた。お手上げのポーズである。

まさか子供にそこまで見抜かれるとは思っていなかったのだ。

「はは……。参ったな。スバル君といいツバサ君といい……ソラの周りにはすごい友達がいっぱい居るんだね。驚いたよ」

死出野の隣で月夜がせきを1回する。

この状況をそんなんで誤魔化せるわけないだろう。という意味を

込めたセキだ。

「あ～……うん。ルナちゃんの言う通りなんだけど、それはソラと話し合うよ。……あの子の事だから、【その事】を気にしているんだろう」

【その事】とは、先程ルナが言い当てた事だ。つまり、ソラをそういった事に関わらせないかどうかである。

志出野は苦笑交じりで肩を竦めて見せたが、ルナは引き下がらない。彼女にとってソラのこれからの事は他人事ではないのだ。

「……話し合うのは結構ですが、その際は注意してください」

「？　何にだい？」

「……ソラさんの心を縛らないように」

白金ルナは厳格な両親の元で育った。

娘のため。

そんな事を言っていても、彼女の両親はルナと向き合う事はしなかった。本人達はルナの事を分かったつもりでいたのだ。そして同時に、自分達の決定が娘……ルナの幸せに繋がると考えていた。

ルナは相当無理をしたらしい。親の前ではしっかりした娘を、友人の前では隙を見せず、虚勢を張る。そんな毎日だった。

だから、ルナは心を縛られる者の気持ちは痛いくらいに分かるのだ。

故に、ルナは赤羽夫妻と向き合った。

「あなた方がソラさんを戦いから遠ざけるのは悪いことではありませんし、むしろ良い事だと思います」

そうすれば、少なくとも危険な目に遭う確率は低くなる。

「ですが、それがソラさんの心を捻じ曲げてしまっていたとしたら、それは辛いと思います。……他ならぬ、ソラさんが」

心を縛られる苦しみを知っているルナだからこそ、ソラのこれからを案じているのだ。

赤羽夫妻は顔を見合わせて不安そうな顔を作る。

「……それじゃあ、僕達はどうしたら……」

「出来るだけソラさんの意見を尊重してください」

ルナの毅然とした物言いに夫妻は圧されながらも、月夜は控えめに申し出た。志出野は黙る。

「……それじゃあ、もしもの時は……？」

もしも取り返しの付かない事になったら？

その問いはスバルやミソラ、戦いを経験した者達が答えた。

「僕達が居ます！」

「そうですよ！　今までだって皆で協力して頑張ってきたんだから、これからもお互いにカバーしていきます！」

「つまり、全員で互いの隙を埋めあおうって訳だな」
「今まで最終的には、スバルとウォーロックに任せ切りになってきたわけだけどな」

『『『それは言うな！！』』』

スバルの力強い言葉。ミソラの言葉をジャックが補足をし、同感という顔。ゴンタの発言でウィザードからツッコミが飛ぶ。
ルナのような高度な交渉術は無いが、これなら胸を張って答えられる。

「ソラさんは大丈夫です。彼女は1人じゃありません」
『彼女はって言うか、暁やミソラ、ジャックにツバサ……一緒に戦っている全員が、だけどな』

スバルの言葉にウォーロックが肘でスバルを突きながら補足を加える。
その時の誇らしげなスバル達を見て、夫妻の心は決まった。

彼女の意志に任せる。

もし彼女が戦わない方を選んだら（　夫婦から見てもその可能性は低いが　）受け入れる。そして、もしスバル達と共に戦う方を選んだら背中を押す。
それが、赤羽夫妻が親としてソラにできる事なのだろう。

両親の中で、以前のような心配は無くなっていた。この子達なら互いに護りあえるという確信を得たからだ。

その後、スバル達は一通りの報告をして帰路に着いた。

第１１２話　夢の真相（前書き）

今回のサブタイはそのままですね。うらかわでスバルとツバサの見た夢、その真相が明らかになります。……真相というか、それが起こった理由ですね。

第１１２話　夢の真相

――――旅館うらかわ――――

「……」

「……入らないのか？」

ソラとツバサは旅館の前に立っているのだが、いつまで経ってもソラは入ろうとしない。……ここでも何か後ろめたい事があったらしい。

ソラは息を飲んで、入り口に手をかける。

「たのも～」

道場破りかい。

やはり彼女はどこかズレている。ツバサはその事を再認識した。

「お帰りなさい。ソラ」

待ち受けていたのは女将だった。ツバサが一緒に居るのを見て驚かない事から見て、ソラがツバサと来る事は予想の範疇だったらしい。

女将はソラに気取られないように深呼吸をする。

「……ソラ。ご両親と会えた？」

「……うん。私が捨てられた理由も聞いた」

生活苦。３人で生きていくには厳しくて、赤羽夫妻はソラを捨てた。夫妻に罪の自覚があろうと、それは変えようの無い『過去』であり、『現実』であり、そして『罪』だ。
ソラや両親、言ってしまえば『当事者』が背負わなければいけないモノである。

ソラがここに来たという事は、女将から見て自分達の元へ戻ってきたからか、それとも別れの挨拶かだ。従業員の方には話していない。まだソラが旅館を去ると決まったわけではないという、淡い期待から来るものだ。
しかし、女将はここで黙ってしまう。旅館か本当の家族かを聞くのが難しかったのだ。切り出し方が分からないのである。

ツバサもこの件は一線引いて、当事者に任せる構えで様子を見る。その沈黙を破ったのはソラだ。さらに言えば、女将が切り出せない理由も察してその答えを言う。

「……女将、ただいま。ご心配おかけしました」

そう言ってソラは、上半身を折るように頭を下げる。

ただいま。

それは家に帰ってきた時の当たり前の挨拶。ソラが旅館の事を、この場所を、家だと言った様なものだ。それはつまり、ソラは旅館を選んだという事。
女将はそれが分かり、口元に少しだけ笑みを浮かべる。

「……そぅ。お帰りなさい。……向こうでご両親の話、聞かせて頂

戴」
「うん！」

女将が両親の事を聞こうと思ったのは、その時のソラの顔が明るかったからだ。彼女はほとんどすぐ顔に出る。だから、嫌な事があるといくら態度で誤魔化してもすぐ分かるのだ。それが明るかったという事は、そちらの進展も悪くなかったという事。

聞いても、ソラが傷つく事は無いだろう。

ソラが明るく返事をした時、すかさず女将は目を光らせる。

「私の部屋に無断で入った説教もしないとね」
「う……ん……」

ソラがツバサの方に困ったような視線を送るが、ツバサはヒラヒラと笑顔で手を振るだけだ。女将はその光景を見て笑いを堪える。

ソラはツバサをムスッとした顔で睨む。

「……薄情者」
「行ってらっさ～い♪」
「あらツバサ君。キミにも説教したい人が居るけど」
「へい？」

ツバサは笑顔のまま振っている手を止める。顔どころか手まで一時停止の如く止まっていた。

女将はからかうような笑顔で自分のハンターを取り出した。その中に入っていたのは……。

「セ、セレナード……」
『……お帰りなさい。ツバサ。お疲れ様でした』

「……」

セレナードの黒人笑顔が怖かった。穏やかな顔つきなのに怖かった。

ツバサはエレベータで降りてセレナードに逢うつもりだったので、これは全くの予想外。不意打ちのダメージが大き過ぎる。

ツバサは真っ白になって膝を崩した。

その間、セレナードとソラは互いに自己紹介をする。セレナードは現在女将のハンターの中に1割だけ自分を転送しているらしい。サーバーの管理が重要って言うのと、ハンターの容量から見ても1割くらいが外に出れるギリギリラインだ。

「へぇ～。それじゃあ私が迷ってた時道を教えてくれたのあなたなんだ～」

『えぇ。私が居る場所の近くで女の子の泣き声が聞こえてきたので、行ってみたらあなたが居たというわけです』

ソラの尊敬と感心の声にセレナードは笑顔で頷いてみせる。

ソラは方向音痴な一面があり、昔旅館の近くで迷った時はセレナードが方向を教えたのだ。

「……で、何でウラの王を女将が所持してんだ……」

かろうじて話せるレベルまで回復したツバサが女将に声をかける。

女将は当然という口調でそれに答えた。

「うらかわの人間ならウラサーバーの事は知ってて当然です。……代々うらかわの女将が秘密を引き継ぐ決まりになってます」

この旅館に巨大なサーバーがあり、それがウラインターネットへの入り口という事は公表されていない。うらかわの人間は代々、その秘密を護ってきたのだ。

『そんなわけでツバサ。これから2人でゆっくり話しましょう。ソラさんと女将さんも2人でごゆるりとどうぞ』

「はーい」

「そうさせてもらうわ」

「ッ！　ちょ、ちょっと待て！」

ソラと女将がセレナードの言葉で去ろうとするのを、ツバサは止める。ツバサとしてはこのシチュエーションは予想外だ。人間、予想外に滅法弱いものなのである。

しかし、ソラと女将はツバサの願いを叶えられない。

「……ふーんだ。薄情ツバサのマネ」

「別に取って喰われるというのは無いでしょう？」

ソラはお返し感覚で頬を膨らませてツバサから顔を逸らし、女将はツバサがセレナードに対し恐れている事を知りながら笑って手を振った。

そして2人は去って行った。

『……さぁ、私達も2人で歓談と行きましょうか』

「……はい」

その後、ツバサはセレナードからニッコリ説教を食らい、ソラは説教と共に両親の話をしていた。どっちが精神的にマシかは言うまでも無い。

『それと、また何か得体の知れ無いモノが入ってくる気配を感じたのですが』

セレナードが察したのは『蟲』の事だろう。スバル達を護るための代償だ。

「……それについてはもうすぐ学校を何日かサボる当てがあるのでその時に片してきます……」

その時のツバサには、タメ口を使う気力は残っていなかったそうな。

――――飛王・リードのいる次元――――

「飛王・リード、例の次元から新たな魂が」

星炎（シンフォ）がそちらを向くと、次元移動してきた蟲が大人しく座っていた。創り主の飛王・リードの前ではやはり大人しくなるようだ。

飛王・リードは蟲を見ると不敵な笑みを浮かべる。

「……ふっ。これで少しは他の世界と同じになってきたな」

最近、ツバサの居る世界からは魂を抱えた蟲が良く来るようになった。バルズランドでの戦いで入った羽根の分だ。そして今回、新

たに羽根がツバサの居る次元に投入されたのだ。
しかし、今回の蟲には異変が起きた。

『キ……』

飛王リードが蟲を魂を取り出すための部屋に飛ばそうとした時、蟲は動きを止め、苦しむように体を縮めたり羽根を広げている。

「……これは……」
『ギィィィィ！！』

飛王・リードと星炎が訝るように蟲を見ていた時、蟲は叫び声を上げながら霧散した。
星炎は驚いたように飛王・リードを見る。

「……飛王・リード。これは一体……」

単なる問い。この位で飛王・リードが取り乱す事は無いのだが、今回は違った。

ドンッ

飛王・リードは怒りに満ちた顔で自身のイスを叩き、歯は「ギリッ」と音がするほどに食いしばっている。そして、苦々しげに星炎に語った。

「……3つの魂を3分割して蟲に入れていたのだ。おそらく3人から等分に取ったのだろうから、その人間は魂の3分の1が無くなっ

た状態だろう」

つまり、感情や知識や思い出など、何かしらを失って、それがが欠落した人間になるということだ。魂を取られた彼ら……ケンジ、炎牙、氷牙に残されたのは、3分の2の魂だけである。

「だが、そのうち2つの魂はあの世界、またはあの世界と近い世界で無ければ存在する事のできない魂。……この次元で存在する事ができない魂だったようだ」

「……だから、この次元に移動した事でその2つの魂が消滅し、蟲が自己を維持できなくなった……」

2つの魂……。炎牙と氷牙の物だ。彼らの魂が存在するには、それ相応の環境が必要。同系統の次元でなければ存在する事はできないのだ。

3つで成り立っていた物が1つになった事で、蟲は体を維持できずに消えてしまったのである。

飛・王リードは星炎のまとめた答えに静かに頷く。

「その通りだ。……クロウめ、やってくれる。……しかし、これで確信した」

苦々しげに言っていた飛王・リードの目に不敵で高慢な光が宿る。

「あの世界のクロウは、他人のためなら相手が誰であろうと魔力を使う。ならば、それを逆に利用してやるまでだ。……ローグよ」

飛王・リードはアメロッパ大統領アーノルド・ローグの名を呼びながら空を縦に切る。そこには次元の亀裂が現れ、ローグの姿が映

る。すでに日本の視察を終えたので、今はアメロッパの自分の部屋にいる。

暗示の影響か、ローグは生気の無い目でそれに応える。

「……はい。飛王・リード」

「世界中の兵器を持つ組織に働きかけろ」

ソラやスバルといった、『彼と親しい者達』の存在の事はすでに飛王・リードは報告を受けている。しかし、飛王・リードの知っているクロウ・リードというのは基本的に誰に対しても甘い。身近な人はおろか、自身の生み出した存在の事をも想う。

「……どのように？」

ローグの問いに、飛王・リードは口元を引き上げて勝ち誇ったような笑みを作った。

「その世界にはウィザードと呼ばれる存在が居るそうだな。そして、ファイブエレメントなどという組織の存在でウィザードの地位が人々から危うい者と見られている」

ファイブエレメントの破壊活動。これにより、ウィザードそのものの存在に疑問を持たれている。新しい物に人が畏怖の念を抱くのはいつの時代も同じ事。テレビやゲームもしかり。

飛王・リードは続ける。

「……その存在を消し去るように世界中が動けば、あの世界のクロウは魔法を使ってでも動かざるを得なくなる」

ツバサは他人のために魔力を使う。ならば、助けるべき他人を増やせば良い。例えば、その世界に居る存在を一方的に弾圧する状況を作れば、普通の方法では護りきれないと分かれば、ツバサは魔法を使ってその存在を護ろうとするだろう。

「まずはヤツの外堀を埋めろ。そして、奴が魔法を使うまで、ヤツと親しい者を攻めるのだ。もし相手がお前の申し出に応じないようなら、私が自らその者に暗示をかける。報告を怠るなよ」

「……分かりました。……ではまず、自国の議員を丸め込みます」

アメロッパはニホンと同じ議員制のため、ウィザード殲滅の命を出すには過半数の可決が必要だ。しかし、相手が応じなければ飛王・リードの暗示で傀儡（かいらい）となる。

アメロッパの議員を掌握したら次の国へ……。アメロッパを足がかりに、飛王・リードの計画は始動する。

ツバサが見た夢。『ウィザードの虐殺』は、飛王・リードの傀儡と化したアーノルド・ローグの手による物だったのだ。

――うらかわ――

ツバサもその事はゲイルからローグの名を聞いた時に想像が付いていた。そして、そのための対抗策も考えている。

セレナードの説教が終わったのは夕方。彼はうらかわに泊まる事になったのだ。今は部屋の縁側で淡く光る月を眺めながら酒を飲んでいる。

（……ウィザード殲滅のためには各国の同意が必要。そして今、ウィザードそのものへの不信が生まれつつあるからアイツらが各国を掌握するのも時間の問題）

恐らくニホンは最後だろう。飛王・リードは警戒心も強い。万全の準備が整うまで、ニホンには攻め込まない。

（だけど……）

ツバサは口元に笑みを作ると酒の入ったお猪口を揺らした。

「アイツがニホンに侵出してきた時が狙い所だな」

自分（ツバサ）の計画に利用できる。むしろちょうど良い演出になってくれそうだ。

――星河家――

自室に戻ったスバルは長いため息をつく。一方、ウォーロックは笑いを堪えた様子でスバルに話しかけた。

『クックック……どうだったスバル？　ミソラとのラブラブタイムは？』

「ラ、ラブラブって単純に……く、口にアーンってやってただけじゃないか！」

スバルは先程まで食卓に着いており、ミソラが「あ～ん」と言って料理を出す恋人同士のラブラブイベントをやっていたのだ。

『それを地球人ではラブラブって言うんじゃねぇの？　……いま思い出してもお前の赤ダコっぷりが面白かったぜ』

ウォーロックは笑いながらその時の事を思い出す。

――――回想――――

「スバル君、あ～ん♪」

「えっ……いや、ちょっとそれは恥ずかしいと言うか……」

ミソラが満面の笑顔でスバルの目の前にスプーンを差し出す。スプーンにはカレーのスープとジャガイモがある。ミソラが作ったカレーだ。

スバルとしてはギャラリー（あかねにハープにウォーロック）がいるので恥ずかしい。しかも3人ともニヤニヤ顔でさり気なく見てくる。

「あ～ん」
「だ、だから――」
「あ～ん！」

段々ミソラの声が強くなり、恐くなってきた。
スバルは顔を赤くしたままミソラの差し出したスプーンを口に付ける。

「……頂きます。……ん！　美味しい！　ミソラちゃん料理の腕どんどん上手くなってるよ！」

お世辞無しの評価。スバルの正直な感想だ。ミソラもそれが分かったのか、安心と喜びを混ぜたような笑顔を浮かべる。

「良かったー！　旅行から帰ってから秘密で特訓して良かったよ！」
「えっ！　そうなの！？」

スバルはその事を全く知らなかった。彼の驚いたような声にあかねはニッコリと微笑む。

「えぇ。ミソラちゃんね、スバル君にもっと美味しい料理を食べてもらうんだ～って張り切ってたのよ？」
「そうだったんだ……。ありがとう、ミソラちゃん」
「えへへ……。どういたしまして」

スバルは感謝を込めてミソラにお礼を言い、ミソラはそれを照れながら受け取る。

『ポロロン。スバル君がミソラの愛情弁当を食べるのも近いわね』

「ハープ！」

スバルが真っ赤になってハープを見る。

「あ、それ良いかも。学校の行事でお弁当がいる時は私がスバル君のお弁当作ってあげよう～♪」

「ミ、ミソラちゃん！」

「あら？　スバルはミソラちゃんからお弁当作ってもらうの嫌なのかしら？」

「母さんまで――――――！！」

――――回想終わり――――

『……全く持ってあん時のスバルの真っ赤な顔は爆笑物だったぜ』

「……ウォーロックがそのとき黙ってたのは笑いを堪えてたからか……」

『んお？　スバル、やけに大人しいな。……【大人】しいだけに【大人】になったって事か？』

スバルは顔を俯かせ、ウォーロックはからかいながら彼の顔を覗きこむ。

「ふっ」

『ふっ？』

「ふざけるな――――――――！！」

『うおっ！？　スバルが切れた！』

「待て――――――！！」

穏やかさには定評のあるスバルでも、あかねとミソラにからかわれた挙句にあの場で唯一の味方（同性）にも爆笑されていたとなると流石に怒る。

スバルは直接こう言った事は言わないだろうが、『人の純情で遊ぶな』という事だ。

ＰｉＰｉＰｉ！

２人の追いかけっこは一通のメールで止まる。

スバルはウォーロックに馬乗りになった状態からメールを見る。

「……」

『お、おい、誰からだ？』

「……ツバサ君。明日の土曜日を含めて数日学校をサボれって。待ち合わせは展望台」

『……色々教えてやるっていうアレか』

ウォーロックには見えなかったが、魔法や羽根など、様々な事を教えてくれるらしい。

「うん。……でも、明日からの土日を含めて学校をサボれと言う事は――」

土日＋学校の日にまで縺れ込むかもしれないという事だ。

ウォーロックはスバルの言葉の続きを言う。

『結構かかるみたいだな。それ』
「うん」
『どうするんだ？』

行くのか、行かないのか。

ウォーロックは直感で察した。知れば知らなかった頃には戻れない部類の話だと。スバルはウォーロックほど経験豊富ではないが、その事は察しているだろう。

しかし、スバルの答えは決まっている。

「……もちろん行くよ。僕がそれを知らないせいで誰かが傷付くなんて嫌だ」

知らない事で自分の中の常識は護られるだろう。しかし、そのせいで自分の身近な人を救えなかったらと思うと、スバルは苦しくてたまらなかった。だから彼は知る事を選んだのだ。

ウォーロックはそれを察し、彼らしい憎まれ口でスバルを肯定する。

『……へっ！　ホントにお前らしいな。良いぜ、もちろんオレも付き合ってやる』

そして、その時にスバルとツバサに危険が降りかかる時は自分がどうにかする。２人の見えているモノが自分に見えなくとも、できる事はあるはずだから。

そのウォーロックの言動の奥にある思いはちゃんとスバルに伝わ

った。彼らは共に何度も視線を潜り抜けてきた存在。意志の疎通はほんの少しの言葉で伝わる。

「うん。そうと決まれば、今日はもう寝よう。……それと、さっきからかった分は無しにしてあげる」

そう言いながらスバルはウォーロックから降りる。

『へへっ。そりゃありがたい。そんじゃ、また明日な、スバル』

「うん。また明日、ウォーロック」

こうして2人は翌日に備えて眠りに付く。

第１１２話　夢の真相（後書き）

次回の編は走ったり将棋さしたり愚痴を聞いたりスバルが沈んだり、色々書く予定です。お楽しみに！

番外編　？（前書き）

お待たせしました。『番外編　？』、始まります。

「ムームー！」

ツバサの両手両足、それと口は縛りました。

「ムー！！」

番外編　？

どうも皆さんおはこんばんちわ。今回は本編の第１０９話、『夢の真相』でツバサがスバルにメールを送った後に起こったことを書こうと思います。

「ムームームー！」（オレはそんなの認めてねぇぞ！　大体、おはよう、こんにちは、こんばんわの『略語』兼『俗語』の『おはこんばんちわ』が今の世代に伝わるか！！）

ちなみにツバサは上記の通り縛っておきました～（笑）。

（いつか死なない程度にシメル！）

それでは始まり始まり～。

――――うらかわ――――

ピピッ……ピッ！

ハンターが機械音を立てながら受け取り人にメールを送る。

『メールは無事送信されました』という表記を読んでツバサは「ふっ」と息を吐いた。

「ふっ……。さて、寝るか。明日はスバルを鍛えてやらないといけ

ないし」

翌日の予定の他に、ツバサとしてはとっとと寝たい理由があった。

ネビュラ・グレイの事である。満月のためか、ツバサの中の闇が疼く。太陽の光を反射して光る月。偽りの光。その光は、良くないモノを刺激する。

満月の夜のお使いなんて、でき得る限り行きたくない。

ツバサが寝る発言をした直後、彼の後ろ、それも相当近い距離から声が聞こえてきた。

「鍛えるって？」

「ッ！！？」

ツバサが慌てて振り向くと、そこに居たのは私服姿のソラだ。彼女が両手を後ろに隠しているのは、何かを隠しているからか、または何となくだろう。

ツバサはソラが勝手に部屋に入ってきた事で口元を引きつらせる。

「……お前なぁ、旅館の従業員ならお客のプライバシー考えろよ。せめてふすまをノックしろ」

ちなみに社会的マナーとして、企業などでドアを叩く時は3回だ。2回はトイレのドアを叩く時である。

雑学はここまでにしておいて、ツバサにジト目を食らったソラは

快活に笑いながら謝る。ツバサはこの状況で笑っても本気で怒る事は無いという信頼があったからだ。

「あはは！　ごめんごめん。今の私は従業員のソラじゃなくて、個人として来たから」

「……つまり、仕事が終わったから自由なお前に戻って、それでノックもせずに入ってきたと」

ツバサはソラの予想通り怒るという事は無い。が、ツバサとしては「どんだけ自由なんだよ」と呆れていた。夕食を運んできた時は出来てたから出来ないわけではない。ただ、やらなかっただけだ。

ソラはツバサの解釈に頷きながら、自分の後ろに隠していた物を取り出して彼の隣に座る。

「そういう事。……はいコレ。売店のオジサンが譲ってくれたんだ」

ソラが出したのはもちろんお酒だ。

「へぇ。そりゃ嬉しいが、何でまた」

「いや～キミが酒を飲めるって前に言った事があってね。それで私が何度もお世話になっているから～って事で頂きました」

「ふぅ～ん。……飲む？」

「遠慮しま～す。こないだみたいに二日酔いになるのは嫌なので～」

以前スモモに進められて飲んだ際、彼女は早々に酔いが回って寝てしまったのだ。翌日は二日酔いである。

なお、彼女としてはコップの中から漂う匂いを嗅いだ時点で酒だと分かったが、そこで拒否してしまえばスモモが傷付くという事で

飲んだのだ。……まぁ、スモモを傷つけないためとはいえ、このくらいなら大丈夫だろうという過信があったのは否めない。

「オレとしてはとっととお前に酔って寝てもらって、静かに満月を見ながら飲もうと思ったんだが」

「あっ！　それ酷い！　スザク、やっちゃいな」

思わず身構えるツバサに対し、ソラはしてやったりな笑顔を浮かべる。

「……ソラ、まさかオレを嵌めた？」

「大正解♪　スザクとアイリスちゃんには退室してもらいました～！」

「ッ！？　いつの間に！？」

「キミがメールを打ってる隙に。なお、2人とも自発的な行動です」

おまけを言えばソラが入ってきたのもその辺だろう。アイリスとスザクはツバサとソラを2人きりにさせようと自分から去ったらしい。

「……そういえば、あいつ等も女子だから居心地が悪いな……」

女性3名の中に男が1人。

見た目の歳相応の経験、つまり交友関係の少ないツバサにとって、それなりに居心地が悪くなる。アイリスは兄妹（姉弟）みたいな感じなので別だ。

「その辺は言っても仕方ないでしょう。……はい、コップも持ってきてあげたよ」

ソラが持ってきたコップを受け取りながらツバサはため息をつく。
「はぁ……。今日はとっとと寝るつもりだったのに」
「……」
突然ソラが黙り込む。理由を聞くと、「何でも無い」と言ってからそれを訂正した。
「……やっぱり話す。モヤモヤした気分のままだと眠れないし」
「……そうか。で、どうかしたか？」
しんどかったらいつでも中断して良い。
そう続けたツバサに感謝の笑みを零しながら、ソラは言った。
「……うん、ありがと。……さっきも言ったけど、私嫌な事があってモヤモヤすると眠れないんだ」
「……うん」
「キミもそうなんじゃないかな～と思った時、昨日の事思い出しちゃって」
「……昨日……スカイタウンの……」
「そう。……ツバサ、自分で気付いてたか分からないけど、ツバサの目が黒と赤になってた。……その時の事を思い出しちゃって」
そう言って彼女は笑みを作るが、それは無理矢理作った笑顔だ。
心が苦しみながら顔で笑う。
実質的な『苦笑』だ。

そしてそれは、ツバサが今1人になりたいと思っている理由と同じだった。一時的とはいえ、自我を飲み込まれかけたのだ。体を動かせる力も、ネビュラ・グレイの方が一枚上だった。ツバサに出来たのは、動きを緩める事だけだったのだ。

「……オレもだ……」

この言葉はツバサの口から紡がれたモノ。しかし、ツバサの意思による物ではない。ネビュラのものとも違う。彼が……ツバサが無意識に出した声だ。

しかし、聴覚は機能している。自分で言った覚えの無いのに聴覚は自分の声だと判断している。ツバサはその事に驚き、それを聞いたソラもまた、驚いていた。

「……ツバサも？」

ツバサはこの後言葉を止めることが出来なかった。いつもならはぐらかせたのだろうが、極度の不安がそうさせなかった。

苦しい日々で溜め込んでいた気持ちを少しだけ出して、気持ちの歯止めが効かなくなるのと同じだ。

彼は俯いて、こう切り出した。

俯いたのは、彼女と目を合わせられなかったからである。単純に、

今の彼にはソラと向き合うだけの気力すらも失われていたという事だ。

「……ネビュラ・グレイって……知ってるか？」

「うん。一応、教科書で習ったから」

２００年前、Ｄｒ．リーガルの手でネビュラ・グレイと言う怪物が完成された。ダークチップシンジケート：ネビュラ。それが組織の名前だ。教科書では２００年前にオフィシャルの極秘チームともう１つのチーム（　こちらのチーム名は教科書にも記されていない　）の援護により、倒したとされていた。

しかし、それが誤りな事をツバサは語る。……ネビュラ・グレイが不滅な事を、ツバサは語る。

「……教科書では完全に倒したって事になってんだろうが、実際アレは人の持つ闇……怒りや悲しみ、憎しみ等のマイナス感情の塊だ。……人類が生きている限り、無くならない」

「……」

ネビュラ・グレイが人の闇から生まれた存在なんて、教科書には載っていなかった。ツバサがバルズランドで言っていたメディアの話を持ち出すなら、『自分達からそんな恐ろしい存在が生まれるなんて考えたくない』という理由で意図的に隠したのだろう。

歴史のウラに埋没された真実である。

ソラの考えがそこまで行った時、彼女の中で嫌な推測が浮かび上がる。

「……ツバサ、もしかしてネビュラ・グレイと何か関わってる……？」

彼はさらに顔を俯かせ、今はもう、目元が陰影で見えない。

「……オレと繋がってる。……あの時、サーバーの中の皆に影響を出さないためには、ああするしかなかった……」

ツバサの言うサーバーとは、昔ツバサが回収して周ったナビのいるサーバーだろう。

3つある内、1つのサーバーにネビュラ・グレイを閉じ込めた。しかし、その代償としてツバサは、ネビュラ・グレイを現実に出さないための『栓』の役割を果たす事となる。フォルテとセレナードに出来るのは、ネビュラ・グレイの力を弱めるだけ……『力を貸す』という事だけだ。一から十まで面倒を見る『助ける』事は出来ないのである。

「……どうやって閉じ込め――」

「ソラ」

ソラには『栓』の役割の事も、セレナードとフォルテの事も話さなかった。

彼女の言葉を、ツバサは彼女の名前を呼ぶ事で遮り、ソラを正面から抱きしめた。ソラはその事に驚いた様子でツバサに話しかける。

「……ツバサ？」

「……ゴメン」

彼から返されたのは謝罪の言葉。

「これ以上は話したくない。それと……こんな時だけ頼りにして……ゴメン」

苦しい時に誰かに頼る。

これは人間としての弱さであり、『感情』と言う温かさから来るモノだ。

しかし、ツバサは１０年や２０年では済まない位に、長い間１人で生きてきた。故に、誰かに何かを求めるのに抵抗があったのだ。戦闘時に力を借りるならまだしも、精神的に支えてもらうのは彼の中でタブーとされていたのである。

ソロがツバサに対して遠慮が無かったのはそのためだろう。自分と近いから、遠慮する必要が無い。

ソラは彼の弱さを、微かに微笑んで受け止める。

「……それを言ったら私なんていっつも皆に頼ってばっかじゃん。ツバサはもう少し周りを当てにしても良いと思うけどな」

「……けど、早々当てになんて……」

「確かにいっつもべったりってのはどうかと思うけど、苦しい時、誰かに頼っていけない事は無いと思う。……少しずつでも良い。……待ってるから」

ソラは、ツバサが変わるのを待っていると言った。信じるように強制するのではなく、自分の意思で、自分のペースでそうなるまで待つと、言ってくれた。

「それに――」

そう言ってソラはツバサの胸を押す事で、彼から半歩離れる。

「ネビュラグレイの事も、大丈夫」

「……何でそう言えるんだ？」

これまでばかりは訝るしかない。不滅な存在のネビュラ・グレイに対し、何が大丈夫なのだろう？

「何とかなるって！　絶対に大丈夫！」

「……」

ツバサはガッツポーズと強気な笑顔を浮かべたソラに対して白眼を送る。

【　何とかって何だよ。何とかなれば苦労せんわ。どこから絶対が来るんだ　】

そんな事を目で語っている。

「あ～疑ってるな～？」

「……楽観的過ぎるだろ」

「ウツ君が暗すぎるのよ。大抵何とかなるって♪」

ウブ＋ツバサでウツ君だ。スカイタウンでソラがツバサに付けたあだ名である。

それを呼ばれたツバサはもちろん苛立ちを露にしている。

「……てめぇ、まだそのネタ引きずるのか……」

「だって上手いと思わない？　ウブとツバサでウツ。……うん。我ながら最高！」

「確かにネタとしては上手いけど……どこが最高だ――――！！」

その後、例によって追いかけっこの開始。

「鬼さん……もとい、甘えんぼさんこっちら～♪」

「あ、甘えんぼ！？」

「いや～さっきのツバサ子供みたいで、私母親になった気分だったよ～」

先程ツバサがソラを抱きしめたときの事だ。

ツバサは自分のした事を振り返り、赤面する。

「ふ・ざ・け・ん・な――――！！！」

ソラがツバサを挑発した事で、おいかけっこは激化した。

全く捕まる気配の無いソラと、それでも真っ赤になって捕らえようとするツバサをふすまから見ていたのは、誰あろうアイリスとス

ザクである。
　ほんの少ししかふすまを開けていないので2人が気付く事も無いだろう。

『良かったね、ツバサが元気になって。……アイリスちゃん、ソラならアイツを励ます事が出来るって分かってたんでしょ？』
『……うん』

　ツバサが赤面したのは自分を振り返ったから。そして、振り返ると言うのはそれだけの心の余裕が無ければ不可能である。
　ソラは無自覚かもしれないが、ツバサの心に余裕を取り戻させたのだ。

ｆｉｎ

　そんな感じです。

「ムー……」（……恥ずかし過ぎる。歯止めが効かなかった自分が情けない……。っていうか【ｆｉｎ】って付けるな！　何かイラつく！　大体、まだこの小説続くし！）

　それでは、次は本編をお楽しみください！　もちろん『ｆｉｎ』

ってのはこの『番外編　？』の終わりって意味で、この小説が終わるわけではありません。

番外編　？（後書き）

ふっふっふ。ＣＣさくらファンには聞き馴染みのある言葉が出てきましたが、実はコレにも意味があります。

ちなみに満月のお使いの件は『ｘｘｘＨＯＬｉＣ』の６巻にあったヤツです。確か、アニメでもありましたね。

……出来るだけ月曜になるまでに次話を書き上げたい所です。

それでは、次は本編です！　お楽しみに！

第１１３話　少女（前書き）

お待たせしました。今回出てくる少女、今回の編の重要人物です。この子の名前は凝りました～。まだ出ませんけどね。

なお、この編はモデルがあります。それをここで言ってしまうとつまらないので、この編が終わる時に書きます。アレンジを加えていますが、大まかな所は同じなんで。

第１１３話　少女

――――展望台――――

コダマタウンの展望台。ツバサはスバルにここで待っているように言ったのだが……。

「……遅いね」

『だな』

時間になっても彼は来ない。

――――３０分後――――

『遅っせ――――――!!　何してんだアイツは!!』

「ウ、ウォーロック落ち着いて!」（暴れる人を押さえるのはツバサ君の時以来だよ!）

ツバサの遅さにブチ切れそうになっている（いや、もうすでに切れている）ウォーロックを必死に押さえるスバル。　なお、スバルが言っているのは学園祭の時チロルにお菓子を買いに行った時の事だ。

ウォーロックの肩の辺りを後ろから押さえているスバルの視界に、ふと見慣れない者が映った。

いや、見慣れない者というのは多少間違っているだろう。小学生のスバルから見れば酷く見慣れている、普通の女の子だ。ただ、この辺では見かけない子というだけである。

歳は7，8歳くらい。緑髪のショートヘアー。後髪は精々顎のラインまでしかないだろう。前髪は眉が少し隠れる程度だ。

服は上が長袖で下が短パン。ミソラ同様、『ボーイッシュ』という物だろう。

手には紙を持っていて、展望台に置いてある町の見取り図と紙を、何度も見比べている。……恐らく『迷子』というものだろう。紙には住所か地図が書かれているはずだ。

『スバル、おいスバル』

「あ、何？　ウォーロック」

少女を見ている時にウォーロックが話しかけてきた。

『少しその辺見てくる。このまま待ってるのはオレの性に合わねぇ』

「うん。いってらっしゃい」

そう言いながらスバルはウォーロックの拘束を解除する。ウォーロックは『へへっ。待ってろよツバサ！』と、腕を準備運動のように回しながら飛んで行った。

（……ツバサ君、無事にここまで来れれば良いな～）

あの様子だと、ツバサはウォーロックから一撃食らいそうだ。

「さてとっ――」

ウォーロックを見送ったスバルは先程の少女の元へ向かう。ウォーロックが来るまでにこの辺の道を教えるくらいは出来るだろう。もしその間にツバサとウォーロックが来たとしても、彼等ならこの子を助けるのに納得して、手伝ってくれるだろう。

「あの、どうしたの？」

「……」

少女から帰ってきたのは沈黙。見取り図と紙を見比べるのに必死で聞こえていないようだ。声が聞こえないのであれば肩を軽く叩くなどして気付かせる他ない。

スバルは少女に警戒心を出させないように自然に肩に手を置こうとするが……。

クルッ

何かが近付く気配を感じたのか、少女はスバルの方を向く。その少女の顔は、どこか驚いているように思える。まるで、スバルが違う世界から来たと、スバル自身に思わせてしまうような、そんな顔だ。

少女は自分に近付いていたスバルの手を見て、腕を伝うように視線を動かし、最終的にスバルと目を合わせた。

「……」

少女から送られたのは警戒心と訝るような視線。端的に言えば、敵対者と見られたらしい。

ここで逃げてしまえば余計に不審に思われる。故に、当初の目的を果たす事にした。あくまで自然に、フレンドリーに。

「えっと……迷子か何か？　僕で良ければ道を教えてあげるけど」

少女は顔を案内板に戻して、スバルを横目で睨む。

「ウザイです。直ちにどっかに行っちゃって下さい。童顔ツンツンお兄さん」

「……」

スバルは精神的に大ダメージを受けた。この小説でスバルが言われた暴言を見事に１つにまとめたのだ。童顔とツンツン頭。ポケモンで例えるなら、効果はバツグン×２で、４倍のダメージだ。

スバルの体と心は停止した。ショックで周りが真っ白に見える。

「……バル、スバル！」

周りで自分を呼ぶ声がして我に返る。驚いたようにそちらを向くスバルを、相手の方も驚いたようだ。

「……そこまで驚かなくても良いだろ」

「ツバサ君……ウォーロック……」

苦笑しながら驚いているツバサと、『同感だ』と言いながらスバルを心配するウォーロックがそこには居た。
周りを見ると、もうあの少女はいないようだ。

「……どうしたんだスバル？」

突然驚かれて周りをキョロキョロ見られれば、流石のツバサも不審に思う。

「ごめん。何でも無いよ」

そう言ってスバルは静かに息を吐き、ツバサと向き合う。ウォーロックはスバルのハンターに戻った。

「ところで、ずいぶん遅かったけど何かあったの？」

その問いにツバサはバツが悪そうに目を背けて苦笑いを浮かべる。

「あ～……実はあの後旅館のうらかわに泊まったんだけど、そこを出る時スザクから色々質問されたり、旅館の従業員が挨拶してきたりで大変だった」

彼の文脈から察するに、「ソラがいつも世話になっている～」的な挨拶を従業員がしてきて、そのつど挨拶を返していて遅れたらしい。
ソラは昔から旅館の人達から自分の娘のように見られているので、そういった事も考えられる。

「へぇ～。旅館の人達は分かったけど、何でスザク？」

「ん～？　……何でも、スザクにはオレの魔方陣が見えたんだと。……言っとくが、知らんと返した」
「あ、そうなんだ」

スバルが「何で見えたんだろう」と言いそうだったために、ツバサは先手を打って答える。
終始かったるそうに話す所から見て、彼は早く本題に入りたいらしい。

スバルとツバサは近くのベンチに座る。

「さてと、まずは昨日の羽根の事から話すか。昨日は時間が無かったからな」

それからツバサは説明してくれた。アレが人の魂を吸う存在だという事。吸われた人間は、生きてはいるが生気のない人間になる事。それ相応の術師の創った存在である事。

「――って、所かな」
「……本当に酷い事をするね、その術師。……なんて名前？」
「言わないよ。……アレとは本来、関わらない方が良い。生半可に首を突っ込めばアイツの企みに利用されるだけだ」

それから彼は、その者について話そうとはしなかった。それほどまでに、危険な相手という事になる。
飛王・リードの事を話す代わりに、ツバサは立ち上がりながら、

こう続ける。

「さてと、それじゃあスバルには幽霊嫌いを克服してもらいますか」

「えっ？　……うわっ！？」

ツバサはスバルの襟を掴んで強引に立たせる。ちょうど、猫が子猫を運ぶ時のような感じだ。そしてそのまま歩き出す。

スバルは何とか体勢を変えて引っ張られた状態から自分で歩く状態に直す。

体勢を直しても、先程の発言にやや不穏な響きを覚えた。

「ちょ、ちょっと待って！　それってどういう――」

「言葉通り。実践実践♪」

「つまり……」

幽霊嫌いを克服……実践……この2つの単語から彼のこれからの行動を予測すると……。

「ッ！　やっぱり帰る――――！」

「やっぱり本物と接した方が慣れるの早いからな」

本物の幽霊と接するらしい。お化け嫌いのスバルから見れば帰りたいのも無理ないだろう。

「え～っと、川の上流への道のりは……」

川など、水のある所には幽霊が集まりやすいという。

「嫌だ――――！」

暴れるスバルをツバサは無理矢理押さえつける。

「そんなに暴れなくても良いだろ？　昨日見た羽根だって、創られた存在だという点を除けば幽霊みたいなモノなんだから」

「……だけど、もし食べられたら……」

その言葉にツバサは呆れたようなため息を付く。

「人の幽霊が人を食うなんてまず無い――……さぁ行くぞ――――」

【まず無い】そう言った直後、彼は何かを思い出したような顔になってからスバルに背を向けて、片手を上に上げる。いかにも、「今から登山行くぞ――――」的な軽さだ。

「待って待って待って！　今なんで黙ったの!?　人を食べる幽霊も居るの!?」

「それはいないけど、アヤカシなら食べるかな？」

「アヤカシって何――――――!!!」

冷静さと大人しさを欠いたスバル。果てしなく珍しい。それほど苦手なのだろう。

精神的に参ってきているスバルを、ツバサは面白そうに笑いながら答える。

「それも後で説明してやるよ。（……というか、追いかけっこでもするかな）」

「ッ！　今すごく不吉な言葉が聞こえた気がしたんだけど!!」

ハッキリ聞こえなくとも何となく察したらしい。スバルがショッ

クを受けたような顔でツバサを見る。それはもう、ゴール間近で相棒に裏切られるようなそんな顔だ。

ツバサはスバルが逃げないように彼の手首の辺りを握り、引っ張っていく。

「気のせいだ～。まずは安全な奴から逢ってみよ～～」
「からって事は危険な奴とも遭うって事――――！！？」
「そうなるな～～～」
「イ――――ヤ――――だ――――――！！！」

スバルは全力で地面に足を踏ん張って拒み、ツバサはそんなスバルを見て楽しそうに歩いて行く。

「うぅ……ウォーロック！　アイリス！　助けて！」

シーン……

ツバサに何を言っても無駄だと思ったらしい。スバルは2人に助けを求めるが、帰ってきたのは沈黙。スバルがその事で戸惑っている時、ツバサがしてやったり顔でスバルを見る。

「悪いな。アイリスにもウォーロックにも、今回の事はオレに任せてくれるように頼んでる。はぐれウィザードとかが襲ってこない限り、手は出さないでくれってな」

彼はスバルより先に、自分を迎えに来たウォーロックと会っている。その時に言ったのだろう。

「ウォーロック～～～？？」

怒りの眼差しで、スバルは腰のホルダーに入っているハンターを睨みつける。厳密に言えば、その中のウォーロックに対してだ。

ウォーロックは素直に謝ってきた。

『スマン、スバル。その手の奴はオレは見る事が出来ないから、ツバサしかお前を頼める奴がいなかったんだ』

ウォーロックやアイリスには羽根やアヤカシ、幽霊といった存在は見えない。だから、ウォーロックからみてスバルを任せられるのはツバサだけだったという事だ。

続くアイリスはツバサのハンターの中から励ます。

『大丈夫。ツバサはスバルさんを見捨てる事はしないから』

「……それは知ってるけど……」

確かにツバサは完全に助ける事が出来なくとも、出来る限りの事をする。先日のグレイガに飲み込まれたドッグ・ツインとの戦いでも、【 持久戦に持ち込んで少年の魂が蟲に吸い出される形で勝利 】という手もあったはずなのに、それを選ばなかった。

彼は、助けられるなら誰であろうと助けるのだろう。

しかし同時に、自分でどうにかなる範囲なら他人で遊ぶ性質なのも事実。現に今、ツバサはスバルの嫌がる様を見て楽しんでいる。

「大丈夫だって。全員オレの知り合いだから」

「……」

余計不安になってきた。今までツバサの知り合いでまともな人が居ただろうか？　ツバサ同様、遊ばれたらどうしよう……。

スバルのため息の意味をツバサは察したが、それを口に出す事はしない。現在進行形で楽しんでいるからだ。

こうして2人は、コダマタウンを流れる川の上流に向かう。

第１１３話　少女（後書き）

次回、安全な霊達と出逢います。作中の川の上流というのは、アニメで宇田海さんが滝に打たれていたような場所をイメージしてください。その風景は描写として書くつもりですが、念のためにここにも書いておきます。

それでは次回もお楽しみに！

なお、学校の行事があるため最低でも月曜から木曜（１５～１８）まで更新できません。遠出って奴です。

第１１４話　苦手克服（前書き）

皆さんお待たせしました！　今回は最初の数行はスバル目線。その後は通常目線です。改行を多めに取っているのですぐ分かると思います。

第１１４話　苦手克服

コダマタウンに流れる川。その上流。

神社などであるようなしめ縄を潜り、ひたすら歩いた先には、緑溢れる景観に清らかな水の音を立てる川原がありました。そして心地良い風を浴びながら、僕（スバル）は今ツバサ君と将棋を差しています。

……えっ？　僕に将棋が出来たかって？　今までやった事は無いけど、後ろでアドバイスしてくれる人がいるので大丈夫です。

『ほら、次はその【角行】と書かれているのをここまで移動して』

……アドバイスしてくれるのは幽霊の方ですが……。

「は、はい……」

スバルは後ろの幽霊の指示に従って駒を進める。進めた先はツバサ側から見て３列目。

将棋は９×９マスで成り立っており、自分から見て３列目に敵の駒が入るとその駒が反転、動ける範囲が変化するのだ。簡単に言えば、敵の陣地に入って自分の駒がレベルアップしたと考えれば良い。

移動した【角行（かくぎょう）】は当然裏返す。ほとんどの駒は裏返す事で移動範囲が広くなるからだ。【角行】は斜めのみに何マスでも移動できる。それを裏返した【竜馬（りゅうめ）】は斜めに何マスでも進める上に、縦横

にも1マスだけ進む事が出来る様になる。

彼がちょくちょくサテラポリスの仕事をサボるのは、時々彼等にあっているからだそうだ。理由が理由なので話しても仕方が無い。幽霊と逢ってました～なんて言っても、信じてもらえるはずは無いのだから。

一手打たれたツバサは「ふぅむ」と言って盤上を眺めながらスバルに話しかける。

「……そういや、どうだ？　少しは慣れたか？」

「えっ？　……あぁ、この人達の事？　……う～ん、まだ少し……」

そうそう幽霊嫌いが治ったら苦労はしない。とはいえ、応援してくれたり、野次ったり、笑いかけてくれると、少しずつだがそういった『苦手の氷』が溶けていく様だ。

今もまた、当たり前にスバルの肩に笑いながら手を置いてくれる。

『ははは！　まぁ、少しずつでも良いんじゃねぇの？　それにしても驚いたぜ、まさかツバサがオレ達の事が見える人間を連れて来るなんてな』

この男性の話によれば、戦時中に亡くなった方らしい。

両若男女、時代問わず、様々な人がいる。共通点を言えば、なくなった国がニホンという事でニホン人である事と、この世に未練がある事だ。

「そんなに驚く事ですか？」

「『『『『そりゃそうだろう」』』』』

スバルの疑問にツバサは自分の手を打ち、他の幽霊もそれに共感したようだ。
スバルとしては何でも無いポロッとした質問だったのだが、そこまで満場一致だと少し気になる。

「何でそこまで満場一致なんですか？」
『そりゃあ、見える人間なんていないとは言わねぇがはるかに少ないんだぜ？　オレ達だって、自分の事が見えるなんて驚くよ。……あ、次はその駒を真っ直ぐここまで移動な』

スバルに将棋のアドバイスをしている男性が答える。
自分の事が見られないのが普通だから、見られていると逆に驚くのだそうだ。普段と違うモノを見て、聞いた時に驚くのは幽霊も同じ様だ。

『それに、ツバサが誰かを連れてくる事自体無いし……』

ツバサの近くに座っている、濃い茶髪のおかっぱ頭で、江戸時代の庶民が着るような服を着た女の子が男性の意見を肯定する。飢饉の時に流行り病で亡くなったらしい。

男性は「でも――」と言って続ける。

『確か5年前くらいに1人見つけたって言ってたよな？』

その疑問の矛先はツバサだ。彼は苦い顔をしながら答える。先程

スバルが打った手が原因ではないだろう。

「……あぁ。……オレが会う前にアヤカシから喰われたけどな」

その言葉で周りが静まり返る。聞いてはいけない事を聞いてしまったようだ。話を切り出した男性はツバサに一言謝り、「アヤカシって何？」という顔をしていたスバルに説明してくれた。

アヤカシ。

ろくろっ首や塗り壁。座敷童など、立派に『その存在としての形』を持っている存在とは違い、特定の形を持たないモノ。姿的には、黒い煙に目があるようなモノだ。危険度はピンキリで、大きさはあんまり関係無いらしい。人を喰らうモノもいれば、ただそこにいるだけの存在もいる。

ツバサはため息をつくと補足を加えた。男性は小声でスバルに話していたのだが、どうやら彼には聞こえていたらしい。

「喰らうと言っても、バリバリむしゃむしゃと喰うわけじゃない。あいつ等が食うのは、魂だ」

「……魂……」

生き物の根幹。肉体や感情より深い所にある存在。

「霊を触れられる人間は直に喰えるだろうが、アイツ等は大抵『不運の事故』を起こして魂と肉体を分けさせる」

「不運の事故？」

「山の落石や不注意からの交通事故……。対して大きな意思や感情

の関わっていない【ふいに】、【突発的に】起きた事故。全部がそうでもないが、中にはアヤカシがそうさせたケースもある」

アヤカシも運も、移ろうモノだから。似ているから、運と同化して不運を起こせるのだそうだ。

スバルはボソッとした声で呟く。

「……そしてその人が意識を失った所で――」

「食べるってわけ」

ツバサはそう結論付けながら自分の一手を打ち込んだ。

事故を起こさせてその人の肉体から魂を引き出し、それを食べる。食べられた人間は、ツバサやスバルのように見て、触れられる人間でも、見えない人にしても、死ぬそうだ。『蟲』の様に魂を吸われて抜け殻のような状態で生きるでもなく、確実に死ぬのだ。

「食べられるから、喰われた人間は成仏も出来ないしな」

成仏する事無く、完全に消える。それがアヤカシに食べられた者の末路。

「……オレやスバルのように触れられる人間ってのは本当に珍しいが、見るだけってのはまれにいるもんだ。……5年前、興味本位でその人間に会ってみようとした矢先の事だった。……それはそうとスバル。王手な」

「へっ？」

盤上を見ると、スバルの王将はスバル側の面に追いやられており、縦横に何マスでも移動できる【飛車】で前方を塞がれ、横は【桂馬】

の攻撃範囲。後ろは盤の終わり。なお、将棋は倒した相手の駒を自分の駒として好きな時に使えるのだが、スバルが奪った駒はツバサの【竜王】と【竜馬】に奪われ返されてしまったので皆無。

「……うわぁ～～～……」

彼は話をしながらこの状況を作ったらしい。というか、話に夢中になっている間にこの状況にしたと言った方が良いだろう。現に、彼の顔は得意げだ。会話すらも作戦のうちだったのかもしれない。

しかし、ここで出る感想は2つ。「エゲツねぇ～」と、「性格悪りぃ～」といった所だろう。

ぽうっ

そんな中、スバルにアドバイスをしていた男性に光が灯る。

「これって！」

『……成仏ってヤツだな。未練が無くなったから、オレ逝くわ。……楽しかったぜ、スバル君……』

驚くスバルに対し、男性は安らかな笑みをスバルとツバサに送る。そして、人の形を作っていた蛍の集まりが散るように、細かい光となって消えていった。

男性が消えた空間を見つめながら、ツバサは呟く。

「……オレと将棋の勝負がしたかったんだと。けど、霊の体だと正真正銘の将棋盤はおろかリアルウェーブの将棋盤にも触れられない。だから、スバルが必要だったってわけ」

霊に触れられる人間は霊に触れる事は出来るが、反対に霊はその人間にそれ相応の力が無いと触れる事はできないそうだ。リアルウェーブなんて論外である。

「……そのために僕を？」

「ついでだよ。まずはスバルを霊に慣れされる事は大事だと思ったし、あの人もいい加減、この世に縛らせるのは忍びなかったんでね」

未練とは願いとも言える。その者の願いを叶える事で、その者はこの世から解放される。

ツバサは次にこう続けた。

「本音を言えば、とっとと成仏してもらった方が良いんだけどね。こっちにいるとアヤカシに食べられる恐れもあるし」

それでも、心残りの１つぐらいはあるのだろう。例えば家族の事、友人の事、国の行く末の事……悩みも願いも未練も、人それぞれだ。

「それじゃあ、あの子は？」

スバルの視線がツバサのそばに居たおかっぱ少女の元へ移る。この中で一番長くこの世にいる感じだ。

スバルの勘は当たったらしく、ツバサはため息を付きながら少女に近付き、しゃがんで彼女と目線を合わせた。

「はぁ……。お前の未練って――」
『それはもう叶ったんだけど、最後に1つだけ伝えたい事があって……』
どうやらその『伝えたい事』を伝える事が彼女の未練になっていたらしい。
「あ、あぁ。なに？」
ツバサがやや驚いている所から察するに、彼女が人の話を遮る事はあまり無いらしい。
『……何週間か前、この場所に来るなり【ここに私はいちゃいけない……】って言って飛び出した子がいるの』
言葉を重ねるにつれて、少女の体に光が灯っていく。
『……その子、寂しそうな目をしてたから……ほっとけなくて……。けど、私達はこの周辺から出られないから』
ツバサがここに来る道中話していた。この場所にはアヤカシを入れないための結界を張ってあると。ここにいる人達に対しての、ツバサなりの措置である。
『だから……その……』
少女はあがり症なのか、語尾が弱めだ。ツバサはそれでもおおよその事情を察したらしく、少女の頭に手を置く。
「分かった。それっぽいのを見かけたら何とかする」

『お願い、ね』
「あぁ」

少女の体が完全に光に包まれ、消えるのは時間の問題となった。

「けど、キミの未練って何だったの？」

このスバルの質問には、異質なモノに対しての警戒心は無い。どうやら彼の中で、アヤカシや霊などの存在は受け入れられたらしい。
少女は恥ずかしそうに目を伏せて微笑んだ。

『……友達が欲しかったから……』

それだけ言うと、彼女もまた細かい光となって消えていった。
その後周りの幽霊がツバサとスバル（主にツバサ）に対してニヤニヤ笑顔を送りながら説明してくれた。

『あの子、あの通り内気だろ？　だから生きてる時ほとんど友達がいなかったらしくてな。死んでからも友達が欲しかったんだと』

それが未練になっていたと言うわけだ。ここにいるのはほとんど成人。同じ歳頃で自分と同じ『霊』というのは、医療技術の発達した今の時代では早々無いだろう。

「……それじゃあ、オレと知り合った時点で成仏しても可笑しくないんじゃねぇの？」

そのツバサの発言で、男性はツバサの肩に手を回してきた。

『お前と遊ぶのが面白くて、【また逢いたい、また逢いたい】って感じでズルズルと長居しちまったんだと』

『つまり、お前に惚れてたって事だ』

『けどあの子は内気だから言い出せなくてな』

『【霊と生きている人だから……】って何回も自分に言ってたり、風の噂でお前に恋人が出来たって聞いてその人にツバサを譲る決心をしたり――』

『『『ほんと、健気だよな～』』』

４人から肩に手を置かれて次々にニヤニヤ笑顔を送られたツバサは面白いくらいに戸惑っている。

「えっ!?　ちょ、ちょっと待て!　何?　それじゃあアイツオレの事――」

「好きだったって事かな?」

「……んなアホな」

スバルの率直で素直な感想。ツバサは沈んだ。どうやら本当に彼はあの子の好意に気付いていなかったらしい。

スバルとツバサは山を降りていく。ツバサはローテンション。スバルはそんな彼を気遣っている。

「本当に大丈夫？」
「あぁ、大丈夫大丈夫。……そうか。あの子がね……気付かれないって、どんな気持ちだっただろうな……」

ここを出る前（ツバサが沈んでいる時）に他の霊から聞いたのだが、彼女は内気のわりに意志が強いので、好意を絶対に表に出さずにツバサと接してきたらしい。

生きている世界が違うから、一緒にはなれない。

だそうだ。

ツバサはその気持ちに気付いてやれなかった罪悪感からテンションダウンし、そのローテンションがスバルにも移ったらしく、スバルもまたため息をついた。

「……はぁ～」（……とはいえ、いつまでもこのテンションのままでいられてもね……あっ）

スバルの視線の先に入ったのは、上流の入り口にあるしめ縄だ。少しでも話を逸らしたい。

「ね、ねぇツバサ君。あのしめ縄にも意味ってあるの？」
「あぁ？　……あぁ、アレが結界。【道切り】って言ってな、昔からある……いや、昔あったまじないだ。村や家、内に災いを持ち込むモノが入ってくるのを防ぐために、内と外との境界を置かれる。それがコレ」

スバルとツバサはしめ縄を潜り、ツバサはしめ縄を軽く触れて揺らしてみせる。

「それじゃあ、コレがある以上はアヤカシはあの人達を食べられないってわけだね」
「そういう事。他には、辻の地蔵とか、縄にぶら下がった草鞋(わらじ)とかだな」
『おい、辻って何だ？』
不意に出たウォーロックの問いに、ツバサは気軽な口調で答える。何かを話している内に気持ちを逸らす事が出来たようだ。
「手早く言えば交差点の事だよ。T字路であれ十字路であれ、ね。十字路は四辻(よつつじ)とも言える。四(し)、つまり死界に通じるとされてな、四辻で4回同じモノと出遭うとどうなるか分からない。だから良くないモノが出ないように地蔵が置かれるんだけど、今じゃあほとんどそういうのは見かけないな」
廃れた風習。故に、『昔あった』という過去形なのだ。
「ふぅ～ん」
そう言いながら、スバルは視線を前に戻す。確かこの山道を降りるとそこにも交差点があったはずだ。いつも見慣れているはずの物なのに、それに関わる知識を得ると違う物に見えるのだから不思議だ。
「ん？」
木の葉に隠れて見えなかった交差点が、スバル達が降りて来る事で見えてきた。反対側の交差点には、1人の少女が立っている。スバル達に横を向けている所から見て、こちらに来るのではないようだ。

「おろ？」

隣を歩いているツバサもその少女を視界に捉えたらしい。

……その、緑髪の少女に。

第１１４話　苦手克服（後書き）

アヤカシの件についてはオリジナルの設定です。『ｘｘｘＨＯＬｉＣ』で「アヤカシは移ろうモノ」とは言ってましたが、それ以上のことは言ってません。

それと、最後に出てきたのは前話に出てきた緑髪の毒舌少女です。

次回、緑髪の少女の名前が判明する上にえらい事になる予定です。

お楽しみに！

第１１５話　エサ（前書き）

今回はほぼギャグですね。緑髪の少女の名前も公開します。

第115話　エサ

「あの子は……」

スバルとツバサの視線の先には、7，8歳位で緑髪の女の子が立っていた。

「知ってんのか？　スバル」

「うん。なんか迷子みたい。……良ければ手を貸して上げられないかな？　あのままってのもかわいそうだし」

いくら自分が毒舌を言われたからと言っても、ほっとける内容ではない。

ツバサは人差し指で頬を掻きながら了承した。

「迷子……ねぇ……。まぁ、別に良いけど？」

そう言うと、ツバサは首に下げていた物を取り出す。三日月の装飾の成された鍵だ。

「それは？」

問われたツバサはポケットから2つの物を取り出す。

1つはお守り。中の紙（お札）は真っ白なままだが、それを包んでいる藍色の生地の布は、焼けたように所々破けている。

もう1つが、以前シャーロで封真に渡していたラグビーボールのような形をした物だ。目の前にあるのはポケットに入るくらい小さな小型版である。

「ん～……エサ、かな？」

そう言ってツバサはお守りと鍵をそのカプセルの中に入れる。

その後2人は少女に近付き、ツバサが声をかける。

スバルは展望台で言われた事を少し根に持っていた。さすがにまたあのような事を言われては立ち直れるか分からない。

「よぉ。迷子なんだってな、お前。良ければ案内でも――」

「私から半径2万キロメートル以上離れてください。ロリコン黒髪のお兄さん」

この子は誰に対してもこうなのだろうか。その発言の直後、ツバサの頭から『プチッ』という音がした。

「……地球から去れってか？　スバル、1回この子に口は災いの元って教えて良いか？　実力行使で」

実力行使、言ってしまえば暴力だ。

スバルがツバサを止める間も無く、少女はさらに言葉を重ねる。

「暴力ですか！？　こんなにもか弱い少女に暴力を行使するのですか！？　幼児虐待です！　婦女暴行です！　涼気的です！」

「……涼気じゃなくて、猟奇な。それとお前は婦女っていう歳じゃない」

漢字が間違ってる。オマケに幼児という歳でもない。

なお、ＰＣやケータイの漢字変換で『りょうき』と入れると、漢字候補の中に本当に『涼気』と出てくる。……このネタ、小説という形でないと使えないな。

ツバサが少女の間違いで呆れた事で冷静さを取り戻したようだが、少女は止まる事をしない。

「おや、ご自分でロリコンだと認めましたか。ご立派です」

「……」

ガシッ！

ユラリと腕を振り上げるツバサをスバルは後ろから押さえる。

「……離せスバル。このガキ１回ゲンコツを食らわせないと気が済まない」

「と、とりあえず落ち着こう。ツバサ君」（ここで僕が止めなかったらツバサ君が暴行容疑で捕まっちゃう。僕が切れちゃいけないんだ。……切れちゃダメだ、切れちゃダメだ、切れちゃダメだ！）

などというＥ●Ａネタは置いといて。（　元は「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ！」というもの　）

怒りの力がそうさせるのか、徐々にツバサはスバルの腕を振り切ろうとしていた。

（クッ！　ここは話を逸らさないと……）

「ね、ねぇ、さっきからツバサ君の事をロリコンって言ってるけど、ロリコンの意味をちゃんと知ってるの？」

要は怒りの元である『発言』を覆せば良い。意味を分かって言っていないのであれば、ツバサの事だから怒りから呆れに変わるだろう。ちなみに正しくはロリータコンプレックス。

少女は堂々と答えて見せた。

「もちろんです。ローンコンプレックスですよね？」

「「……」」

ツバサばかりかスバルまで驚かされた。何なのだろう？　融資依存症とは？

融資とは銀行等の金融機関が利息（金利）を得る目的で会社、個人などの資金需要者に金銭を貸し出す事を言い、平たく言えば借金だ。家や車など、高額の商品に付いて回る代物である。

「……ローンコンプレックス……。あれか？　常に借金を負ってないと落ち着かないってヤツか？　どんだけリスキーな生活なんだよ……」

結果としてツバサが呆れたから良し。

しかし、案の定というべきか、少女のボケはまだ続く。

「間違えました。ロマンコンプレックスです！」

「「……」」

さっきより堂々と言っているから真正面から間違っているとは言いづらい。まぁ、夢を追っていないと満足できないというのは良いのかもしれないが……。

間違っている事を空気で察したらしく、少女は言い直した。

「むむぅ……では、ローンのご利用は計画的に」

「CMみたいなセリフが来た！」

ツバサが即行でツッコむ。しかもボケが戻っている。漫才で言う所の、『テンドン』というヤツだろう。

「……ところで、君の名前を聞いても良いかな？　やっぱりキミみたいな女の子が1人で歩いてると心配でさ」

スバルの提案。このままではいつまでも案内が出来ない気がしてきた。

「山田花子と申します」

バシッ！

ツバサの平手ツッコミが少女の脳天に炸裂。

「何するんですか！」

「ベタベタな偽名を使うからだ」

「横暴捜査です！」

「捜査じゃねぇし」

横暴だけで止めとけば良いのに。
ケンカ腰になるツバサと少女の間にスバル手で割り込むように遮る。

「ストップストップ！　2人とも落ち着いて！　……まったくもう、ツバサ君も大人気無いんだから」

2人が睨みを効かせたまま離れる様を見て、スバルはツバサをたしなめながら睨む。
ツバサは少女に目を向けたままスバルに噛み付く（あくまで言動的に噛み付くという意味で、肉体的に噛み付くわけではない）。

「だってよ――」
「だってじゃない。ツバサ君や僕は年上なんだから早々怒っちゃダメだよ」
「ぐぅ……」

正論でやり込められるツバサ。一応事態は収拾したらしく、その場は静かになる。

クイクイッ

少女がスバルの袖を引っ張ってきた。

「ん？　なに？」
「……結亀川（ゆうきセン）です」
「？」
「私の名前。……結ぶ、甲羅を背負った亀に、川と書いて結亀川で

す……。あの方を止めてくれたお礼です……」

少女は後半、俯いてブツブツ声でそう言った。あの方とは当然ツバサの事だろう。

スバルは名前を教えてもらった嬉しさと、素直にお礼を言えたその子への「偉いなぁ」という感心から笑顔を送る。

「うん。よろしくね、センちゃん。それじゃあキミの家に――」

「あの、その事ですが！」

強めの口調で遮った川（セン）を、スバルとツバサは驚いたように見る。

２人の視線に、センは打って変わって弱々しい言葉で続ける。

「その事ですが、名前を教えてあげた分というわけではないのですが、その……やっぱり私１人で行きます」

「何で？　名前まで知ったのにほっとけないよ」

スバルもまた、ツバサ同様優しい性格だ。ツバサが自身の経験から他人を失わないために優しいのだとすれば、スバルは彼という人間性としての優しさと、子供ゆえの純粋さだ。

純粋な優しさというのは歳を経れば経るほど失う事が多い。世の中の裏切りや中傷に耐えるために、いつの間にか無くなってしまうものだ。

また、スバルは正義感も強いため、悪い事をしたら謝って、厚意を受けたらお礼を言えるような素直な子が困っているのを見過ごせるはずが無い。

「困っている時は周りを頼っても良いんじゃないかな？」

そのスバルの言葉でツバサが少しだけ反応した。その言葉は、昨日の夜ソラに言われた事と似ていたからだ。しかし、彼は少し反応しただけで、スバルの言葉を肯定する事は無い。

一方、少女はその言葉で力無く俯く。まるでその発言が、その子にとってタブーであるかのように。

「……いえ。このような事態、私にとっては日常座禅機（にちじょうざぜんき）ですから」

「……なんだか健康そうだね」

毎日座禅する事で血行促進する機械。……なんかの通販みたいだ。ちなみに正しくは『日常茶飯事（にちじょうさはんじ）』。

「とにかく！」

スバルとツバサがまたもポカンとするのを、川（セン）は強引に話を戻す。

「私は1人でも大丈夫です！　お気遣いだけで十分です！　あなた方はとっととどっかに行っちゃって下さい！」

「でも――」

「もう遅そうだぞ？」

スバルの『でも』は『ほっとけない』という『でも』だったのだが、ツバサの指している内容は違う。

ツバサ、スバル、川（セン）の周りには、黒い煙のようなモノが大量に蠢いていた。

「ッ！　これって……」

スバルは驚いた様子でそれらを見る。先程幽霊達が話してくれた存在。その答え合わせは、ツバサがしてくれた。

「そう。アヤカシだ。……エサに釣られてやって来ちまったようだな」

「エサ……」

スバルはアヤカシを警戒しながらツバサのポケットに視線を送る。厳密に言えば、そのポケット中にあるラグビーボールのような形状の物と、月の装飾の成された鍵。そして藍色の生地のお守りに視線を送ったのだ。

「来るぞ！」

彼の声が響く直前、アヤカシが距離を詰めてきた。

第１１５話　エサ（後書き）

ツバサがカプセルの中に入れたお守りは学園際の時にソラが渡した物です。なんで所々焼け焦げたような破れ方をしているのかはまだ明かしません。理由はちゃんとありますよ。

それでは次回もお楽しみに！

第１１６話　アヤカシ（前書き）

お待たせしました！　今回、『ｘｘｘＨＯＬｉＣ』に出てきたアヤカシが登場します。アニメ版だと結構怖かった奴です。

第116話　アヤカシ

スバル達を取り囲む常人には見えない黒いモノ。

アヤカシ。人に憑き、人を喰らい、世を移ろうモノ。

それらのモノが一斉にスバル達に迫ってきた。

スバルはまだそういったモノ達に対して防衛手段を持っていない。故に、その手のオーソリティ（専門家）であるツバサが頼みだ。

ツバサを見ると、彼は正面のアヤカシを見据えたままスバルに指示を出した。

「スバル、その子の手を掴んでいつでも走れる用意をしておけ。……ＴＨＵＮＤＥＲ（サンダー）」

スバルが少女の手を握ってツバサに頷いたのを確認してから、彼は左手を前方に向けて呟いた。

途端、彼の左手の平から雷が迸り、昔の巻物で書かれているような雷獣の姿を成すモノが現れる。言ってしまえば狼を思わせる姿だ。

『グゴォォォォ！！』

雄叫びと共に、人間1人を覆うくらいの雷撃が正面のアヤカシを突き抜ける。アヤカシに悲鳴は無い。ちゃんとした『形』を持っているわけではなく、どちらかというと魑魅魍魎（ちみもうりょう）の類だから、そこまでの意思は無いのである。

補足を加えれば、この雷は常人やウィザードにも見える。故にウ

ォーロックはスバルを護る様に彼のそばに実体化しながら、その雷の事をツバサに尋ねた。

『オ、オイッ。アレって……』

正面のアヤカシはサンダーの雷を受けて消え去った。ツバサは人差し指をクイクイと動かし、「今のうちに正面突破」と、スバルとウォーロックに動作で伝えながら説明する。

「オレの魔法の1つ。こないだ使った　ＭＩＲＲＯＲ（ミラー）やＥＡＲＴＨ（アーシ）Ｙ（ィ）よりは負担が少ない。……人間1人通れる位に加減もしたしな」

逆説。その気になればそれ所では済まないという事。

アヤカシが先程の雷でツバサ達と距離を取り、その隙にツバサが前に駆け出す。スバルもセンを1回見てから駆け出した。「走るよ」という合図である。

「ねぇ」

「ん？　何だ？　スバル」

スバルはセンの手を引きながら走っているのでいつもより若干遅い。ツバサもそれに合わせているのだが、スバルが不意に尋ねてきた。

「僕にああいう存在を教えてくれたのはツバサ君だけど、ツバサ君に教えてくれたのは誰なの？」

あれほどの事を独学だけでどうこうする事は出来ない。小学2年生から5年生まで不登校だったスバルから見れば、独学の大変さは良く解っている。

ツバサは「やはりバレたか」という思いから軽く笑う。

「フッ。……言うなれば、別の次元のオレにかな？」

「別の――」

『次元だと？』

「色んな風習、歴史、文化。技術の違い等々、それぞれ違った世界の事。パラレルワールドみたいに違う世界に同じ人が居ることも多い」

「……つまり、別の世界にも僕やウォーロックがいるって事？」

さすがに走りながら話すのは疲れるのか、ツバサは1回息を吸ってから答えた。後ろからはアヤカシが迫ってくるが、向こうの方が遅い。このまま行けば振り切れるだろう。

「スバルはともかく、ウォーロックはこの世界と同じ様に一定の電波技術が無いと生きられないだろうな」

『はぁ～ん。って事は、別の世界に同じヤツが居るとして、オレみたいな電波体は居る世界が限られるって事か。……へへっ、そりゃ好都合。別の世界にもオレが居るなんて気色悪りぃぜ？』

「ははっ。ウォーロックらしいね。……でも、別の世界のツバサ君ってどういう人なんだろう？」

スバルは苦笑してからツバサに視線を移して問う。ツバサは笑い話でもするようにのどの奥で「クッ」と笑ってみせる。

「オレをそのまま身長伸ばしたような感じかな？　……向こうの方が穏やかだけどよ」
『……ツバサが自分の口と性格の悪さを認めた！』
アイリスがハンターの中で心底驚いたように手で口を押さえて、そこにツバサのツッコミが入る。
「だからあえて遠回しに言ったんだけどね！　オレは！　しかもそんなに驚くな！」
『演技でした』
「ああそうかい！」
どうもアイリスは先日の学園祭で猫娘を演じてから演技というものの面白さが分かったらしい。それもあってか、最近アイリスはミソラやクラスの女子と教室で仲良く話す事が多くなった。学園祭というイベントで、アイリスはクラスに完全に馴染んだわけだ。
そのやり取りを見ていたウォーロックはケタケタと笑いながらツバサに追い討ちをかけようとする。
『ははっ。こりゃ一本取られたな、ツバ――』
が、言い終わる前にツバサの背にぶつかって最後まで言えなかった。ウォーロックは不満げに食いつく。
『おいツバサ！　いきなり止まるんじゃ……ねぇ……』
前を見据えるツバサの目が真剣だ。その真剣さに飲まれ、ウォーロックは最後まで言葉を続ける事が出来ない。その先に何があるか

分からなくても、彼の様子を見て何か在ると感じてしまう。

「……ツバサ君……」

そしてスバルには見えていた。ツバサの見ている、地面から生えている白い手が。

ツバサは舌打ちをして後ろのポケットに手を入れる。

「チッ。厄介なヤツが来た」

「アレ、なんなの？」

「……見てもらうのが手っ取り早いか」

そう言うや否や、ツバサは探っていた後ろポケットから手を出して、今度は左前のポケットから板チョコの箱を出した（スーパーのお菓子売り場にあるような小さいヤツ）。

彼はよく甘い物を持ち歩く。学校にも持って来ている事が多いため、ルナに見つかる度に彼は怒られている。そして懲りもしない。スバルは普段その光景を苦笑いを浮かべて見ているのだが、こんな時にそんな物がなんの役に立つのだろう？

ツバサはおもむろに、無造作に、チョコを白い手に向けて投げた。

ガシッ

白い手がチョコの箱を掴んだと思うと、その白い手は地面の下に消えていった。……微かに音が聞こえる。

バリッ　ボリッ　バグッ　ムシャッ

食べている。白い手の下に居る何かが、チョコを食べている。

「ッ！　あの音って……」

あれがもし人間だったら……。

スバルの背中に冷たい物が走った。肝まで冷えるとはこの事だろう。

ツバサとスバルが立ち止まった事を不安に思ったのか、センはスバルの手にしがみ付く。

（そうだ。この子は何にも関係ない。……巻き込んじゃいけないんだ）

そう思ったスバルは意思を乗せた目でツバサに話しかける。

白い手は再びスバル達の前に姿を現す。地面から再び姿を現した白い手はスバル達に対して手招きをしてきた。

「……ツバサ君、どうするの？」

「撃退する」

そう言ってツバサは後ろポケットから小さい袋を取り出す。拳くらいの袋だ。

「アイツ等動くから、あの手を遠巻きにするように回り込んでも逃げられないだろうからな」

巾着のような袋から取り出したのは、直径５ｍｍほどの小さくて白い玉。ウォーロックが『何だコレ？』と言っている所からして、これは普通の『物体』らしい。

「何？　これ？」

「塩を固めた物。別に水晶でも良いんだけど、こっちの方が安いからね」

スバルの怪訝そうな疑問に対しツバサは簡潔に答え、塩の球を白い手に投げた。

それが何になるのか。

スバルのその問いは言葉になる事は無い。その前に目の前で見たのだから。

バシュッ

塩が触れた白い手は黒い靄（もや）のようなモノに姿を変えて消え去った。

葬式など、死者と関わる事から帰ってきた時、家の敷居を跨ぐ前に帰ってきた人に対して塩を振り掛ける。そうすることで悪いモノを祓うというのは実際にある風習だ。

しかし、しきたりでやるのと実際に見るのとでは雲泥の差。

「……塩でこんな事が……」

スバルが驚いている中、ツバサは再び舌打ちをして挑発的な笑み

を作る。彼がそういう笑みを作る時は十中八九良くない時だ。
ツバサ曰く、昔の荒んだ経験から強がりな性格になってしまい、良くない状況の時は無意識にそういう笑みを作るようになってしまったそうだ。

「チッ。……ここまで来るとはな」

スバルがその言葉の真意を聞くためにツバサの方を見るが、ツバサは顎を動かしてスバルに前を向くように促す。

スバルが先程まで白い手があったほうを見ると、白い手が何事も無かったかのようにそこにあった。それも、道を横に塞ぐほどに増えている。

「ッ！　何で」
「……さっきのとは別のヤツ。仲間もいるって事だな。……まぁ、塩玉もかなりの数あるし、隙を見て通り抜けられれば――」

言葉の途中でツバサの声が止まる。目は前を向いているが、意識は別の場所に向けられている感じだ。その意識が向けられているのは、スバルの背後である。
スバルがその事に気付き後ろを向くと、黒い靄の塊、巨大なアヤカシが浮かんでいた。

「……挟み撃ち……」
「スバル」

スバルがたじろいでいる時、ツバサがスバルを呼ぶ。そしてスバルが振り向くなり、彼は塩の入った袋をスバルに押し付ける。

「前の手は任せた。オレは後ろの黒いのをやる」
「で、でもっ」
いきなり危険なモノと相反する事になるとは思っていなかった。
「振りかけりゃあ良いんだからお前でも出来るだろ」
確かに白い手に塩を振り掛けるくらいならスバルでも出来る。
スバルがため息交じりで袋を受け取った時、ウォーロックが訳が分からないという風に話に割り込んできた。まぁ、自分が状況を理解できないのに勝手に話が進んだからそれは不安にもなるだろう。ましてや親友ともいえるスバルが関わっているのだから。
『お、おい。状況的にまずいみたいだが、さっきみたいに雷食らわせる事はできないのか？　その白い手も、黒い奴も』
「オレは訳あって力を加減しないといけないの。さっきみたいのをそう何回も撃てるか。別に攻撃用の魔法は他にもある。そっちの方がチカラの消費も小さい」
使った後疲れてしまうというのもあるが、そう何枚も羽根はこの世界に入れたくない。その禁はバルズランドで自らの手で破ったとしても、それで『出来る事』を放棄して良い理由にはならない。
「……つまり、力の大きいのはやりたくないから、対処の楽な方を僕に任せてキミは大きいアヤカシを。って事？」
スバルの要約にツバサは頷きながら横切り、背中合わせになる。
「早く片付いた方向に逃げるぞ」

「……分かった」

巨大なアヤカシと白い手。どちらかが全滅するか隙が出来次第突破する。

スバルとツバサは少女を背中で挟むように反対方向を向き、スバルは袋に手をいれ、ツバサは意識を集中させて片手を前に出す。

「行くぞスバル！」

「うん！」

それからのアヤカシ退治は相当な時間がかかった。いや、まだ全滅出来ていないのだから『途中経過』と言うべきだろう。そもそも、減ってもいない。

「……ツバサ君。逆に増えてる気がするんだけど……」

「……倒すのよりやって来る方が早いみたいだな。これはオレも予想外」

スバルとツバサが苦笑いを浮かべている理由は以上だ。アヤカシを倒すスピードよりも増えるスピードの方が速い。

『予想外って割にずいぶん余裕みたいだが、何か策でもあるのか？』

ツバサの態度がずいぶん余裕そうだったのが気になったウォーロックは彼に尋ねる。

問われたツバサは反対にスバルに問う。

「スバル、アヤカシの恐さは実際に体験した方が良いと思ったんだが、どうだ？」
「恐いです。恐過ぎます」
白い手は依然として増え、横一列に並んだばかりか縦にも3列ほど並んでいる。それらが一斉に『おいでおいで』と手招きしているのだから鳥肌の1つも立つ。否、鳥肌だらけだ。
ツバサはそんなスバルの様子を満足気に見て、「うん」と頷いた。
「うん。そのくらい自覚できれば良いだろう。下手にこういうのに関わるなよ。どっちかというと避けるのがセオリーだ」
「い、良いからこの状況どうにかして！」
白い手が地面を滑るようにゆっくり近付いてきた。音は無い。
「はいはい。……っと」
ツバサはあくまでマイペースに自分のポケットを探り、お守りと鍵の入ったカプセルを取り出す。ツバサの言う所の、『エサ』だ。
そのカプセルの中からお守りと鍵を取り出した途端……。
……ス――――――
正面の白い手、そして背後のアヤカシはスバル達が見えなくなったかのように去って行った。
「……ツバサ君、どゆ事？」

ポカーンとしたスバルに、ツバサはニッと意地悪な笑みを浮かべる。

「実はこの鍵、もう1人のオレから預かっている物でな。普段はこの鍵を持ち歩いているからアヤカシが近付いてこないって訳♪」

もう1人のツバサ、つまりクロウ・リードの持っているのは魔力を引き出す鍵。ツバサが持っているのは『ツバサの何か』を吸収する鍵だ。

ツバサが鍵を渡された時、クロウ・リードはその『何か』を明言していない。ため、ツバサもその『何か』は分からないらしい。

強すぎる力は良いモノばかりを呼び寄せるわけではない。むしろ悪いモノを呼び寄せる事の方がずっと多い。故に、クロウ・リードは鍵の持つ『力』の影響を抑えるために2つの鍵を作ったのだ。

一方はチカラを与えて、もう一方は吸収する。言ってしまえば正反対の性質である。

一方が強くなりすぎたらもう一方が抑え切れる様に。
常に拮抗関係になるように。

それをツバサに託したのだ。自分の持つ知識と共に。
実際、ツバサはいつからかアヤカシを引き寄せる体質になってしまったらしい。鍵が無ければ今頃ツバサの周りでアヤカシの引き起こした事故が多発していただろう。

ツバサは自分の本当の名前を伏せ、そういった事を説明した。

その後、未だ唖然としたままのウォーロックがツバサを指差しながら尋ねる。

『……じゃあ、そのカプセルは……』

「魔力の類を外に出さないための物」

つまり、ツバサはスバルにアヤカシの恐怖を肌で教えるためにわざとアヤカシ達を呼び寄せたという事だ。

そして彼の言う『エサ』とは、お守りと鍵をカプセルの中に入れる行為そのものであり、お守りと鍵はむしろ魔除けの効果があったという事である。

『てめぇはスバルになんて事を――――!!』

「そうだよホントに恐かったんだからね!!」

ウォーロックがマジ怒りでツバサの胸倉を掴んで揺すり、スバルも掴みかかるまではしないも若干涙目になりながら目を吊り上げる。

幽霊苦手を克服した直後の彼からしてみれば度の過ぎた『ドッキリ』だっただろう。

「あっはっは！　悪い悪い。普通に教えただけじゃアイツ等の恐さは分からないからな。それにホラ、今回はオレがアヤカシを引き寄せる体質なのを利用しただけだから。あんなにアヤカシが来るなんて早々無いよ。オレだってあの数は予想外だったもん」

「だからって他に方法あったよね!?　キミがもう1人のキミから教わった時はこういう感じじゃ無かったんだよね!?」

「……」

ツバサが静かになったのは、スバルの怒気に圧されたからではな

い。

「……確かにオレの時は違うが、今回は仕方ないだろう。……教えられる時間が少ないんだから」

「えっ？」

ツバサの言葉でスバルとウォーロックの動きが止まり、その隙にツバサはウォーロックの腕から脱出した。

そして、毅然とした態度で言った。

「オレはいつまでもお前等のそばにいられるわけじゃない。今回は特別に表に出てきただけだ」

『……それじゃあお前……』

「……一通りの事が終わったらサヨナラだ。だから、教えられる事は少ないし、時間が無い。……いつまでもお前等のそばにいられるわけじゃないんだぞ？」

ここに来て、ツバサは「ふっ」と優しい笑みを浮かべる。

安心して逝かせてくれと言うような。

誰かの幸せを願いながら逝くような。

お別れを受け入れたような。

そんな笑みだ。

「そんな……それじゃあミソラちゃんやジャック、委員長……皆が悲しむよ！」

「別に死に別れるわけじゃねぇだろ？　スバルはオーバーだなぁ」

ツバサはそう言って軽いノリで苦笑してみせる。

「『……」』

納得出来ないらしくツバサを睨み続けるスバルとウォーロック。ツバサはそんな2人を見て息を吐いた後、口元の笑みを直して2人と向き合う。

「……人は出会うべく時に、出会うべきモノと出会う。別れもまた同じだ。……センもそう思わないか？」

急に話を振られたセンは特に慌てる訳でもなく答える。ただ、なぜか少し緊張しているようだった。

「……はい。……あの――……いえ。何でも……無いです……」

何か言いたそうだったためにスバルは気になったが、それを尋ねる前にウォーロックが口を挟んできた。

『おい、鍵の力は分かったが……そのお守りは何なんだ？　やけに焦げているが』

「ん？　あぁ……」

その時、ツバサの表情が柔らかくなったのに気付いたのはセン位のものだろう。

「ソラがな。……持ってろってよ」

白い札を包んでいる藍色の生地が焼け焦げたのには理由がある。スカイタウンの戦闘での事だ。

「彼女ですか？」
「……まぁ、そうだね」
センがスバルに問い、彼はう～んと唸りながらウォーロックが答える。
ツバサの思考と感情は一時停止する。
「セ～ン～？　ス～バ～ル～？」
踏み込んではいけない所に踏み込んでしまったらしい。ツバサが怒りで口を引きつらせながら2人に近付く。スバルもまた、失言だったと口元を押さえるがもう遅い。
「あ～……ごめんなさいです。ツバサさん」
「……」
センは素直に謝ったので許す事にした。なので……。
「スバル～～？？」
「わぁぁ！　ゴメンゴメン！　つい！」
「ついで済むか――――！！！」
道の真ん中でグルグル回るようにツバサとスバルの追いかけっこが開始された。車1台通るのがやっとな細い道なので車の心配は無いが、見てて恥ずかしい。ひたすらに子供っぽいのだ。
センは戦闘時のツバサとスバルとのギャップに驚いて、口をポカンと開いている。その後、二人が適度に疲れたのを見計らってアイリスがそろそろ追いかけっこを止めて家に向かうように言っておいかけっこは止まる。
道中、スバルはクスッと微笑みながらセンに小さい声で話しかけ

た。先頭を歩くツバサに聞こえては、またケンカを吹っかけられるかもしれないから。

「ツバサ君ってあんな感じで子供っぽい所があるけど、僕は彼の事を信頼してるんだ。だから、きっと大丈夫。僕達が絶対にキミを自分の家に送り届けてあげるから」

「……あの……ありがとうございます」

センは何かを言いかけたが、それを堪えてお礼を言った。そして、とても小さい声で続ける。

「（……どうせ家には入れませんけど）」

第１１６話　アヤカシ（後書き）

それでは、次話もお楽しみに！　予定では次の話でセンの秘密が明らかになります。……予想が出来てる人もいるかもしれませんね。今編で出てきた色々な事柄が繋がります。

その後は今まで極秘に打ち合わせを進めてきたある人とのコラボです。

第１１７話　異端（前書き）

今回は話が濃いです。セン編、今回で終了です。
２月２８日の夜、一部内容を加えました。センのツンデレの後です。……ツンデレって難しい……。

第117話　異端

「ここ？」
「えぇ。コレに書かれた住所はそうなっています」
スバルの問いかけに川（センが応じる。
彼等の目の前にあるのは、極めて一般的な一軒家。一戸建ての、普通の家だ。
ここに来る前に、1回だけ偶然通りすがりのアヤカシに襲われた事を除けば問題なく来れた。
「それじゃあ、家族の人にただいまって言わなきゃ」
スバルが笑顔で川の背中を押し、川は控えめに応じる。
「はぁ……」
深呼吸をした彼女はドアに向かって歩き、ドアノブに触れた途端……。

バチッ

何かが弾ける音がして、川はドアノブから手を離した。ドアノブに触れた方の手をもう一方の手で痛そうに擦っている。
「ど、どうしたの！？」

動揺するスバルに川は無理矢理な笑顔を作ってみせる。

「い、いえ。大丈夫です。……やっぱり家に入るのは無理みたいですね」

痛いのを我慢して笑って見せる川に対しやるせない気持ちを抱いたのか、ツバサの方に視線を送る。

「ツバサ君、もしかしてアヤカシとかがこの子が家に入れないように邪魔してるんじゃ……」

「……そうじゃないだろうな」

「じゃあ何で――」

スバルの言葉をツバサは遮る。言葉ではなく、行動で。

ピンポーンッ

普通の呼び出しピンポンだ。

さっきまでのシリアスパートが一瞬にして崩れ去る日常音。スバルがズッコケそうになっている時、家の奥からパタパタと音が聞こえてきた。

（場合によっては勝手に呼び出したから謝る必要があるかもしれない……）

スバルが内心でそんな事を思ってため息をつく。

ガチャ

出てきた人は女性だった。緑髪で後ろ髪は肩まで。見た目は４０代前半といった所だろうか。多少年配だが、恐らくセンの母親だろう。

スバルが川の事を言う前にツバサが妙な事を口走る。

「あの――」

「いきなりすみません。オレ達って何人に見えますか？」

「「えっ？」」

これには女性だけではなくてスバルも驚いた。そんなもの、スバル、ツバサ、川の３人に決まっているではないか。

女性は当然訝り、スバルもまた（これは本当に謝る必要があるかもしれない）等と思っていた。

女性は眉を顰めて首を傾げながら言葉を発する。

「……何人って……２人でしょ？　赤服の子と、黒髪の子」

「えっ？」

自分との認識の相違。３人ではなく、２人。彼女の認識の中に、自分の娘はいなかった。

女性はなおも訝り、川は俯き、スバルは動揺する。

そんな中、ツバサは厳然たる事実をつきたてる。

「……スバル。川の事なんだがな。……こいつ、霊なんだ」

「……」

黙って俯いている川にスバルは驚きの表情を送る。考えてみれば、今までウォーロックは1回もセンを見ていないし、声にも応じていない。

7年前、コダマタウンとは違う町で生まれ育った少女は母親と酷いケンカをしました。別に大した理由は無く、『食べ物の好き嫌い』といった極めて日常的なもので、それでもカッとなって少女は家出したんです。

夕方。寂しくなってお腹も空いて来て、少女は家に帰る事にしました。所詮は感情的な家出。気持ちが落ち着けば、自分の家に帰るのに理由はいらないでしょう。ただ、謝るだけです。

よく見知った道。商店街の人と挨拶を交わしながら帰る。いつもと同じ夕暮れ。いつもと同じ商店街。

父親が転勤族で、少女と母親はそれにくっついて引越しを繰り返していました。故に、ご近所付きあいは今までそう発展していませんでしたが、少女の周りはいつも笑顔で満ちていました。少女は、人と仲良くなるのが上手いので。

少女の家は四辻、十字路のすぐそばです。少女はケンカをしたから気まずい反面、ウキウキとしていました。家とは、家庭とは、子供にとって最(もっと)も安心できる環境なのだから。

それに何より、もうすぐ夕食の時間です。

「今日の晩ご飯は何かな♪」

スキップ交じりでそんな事を口ずさむ。

母親の料理。
自慢の母親。
温かい家庭。

少女の足は自然と軽くなりました。
後は四辻の、白と黒の横断歩道を越えて数メートル歩くだけ。

……しかし、少女は自分の家に……母親の家に辿り着く事が出来ませんでした。

どうしてでしょう。
どうしてでしょう。
……本当に、どうしてなんでしょう……。

信号は、確かに青色だったのに。

「その少女というのが、私です」

川の顔は変化が無い。自分の事なのに、どこか他人事だ。時間が、

痛みをマヒさせているのだろう。その傷が当たり前と化している。
自分を追い詰め、追い込まれてしまった証だ。

川は続ける。

「気付いた時には家の前に救急車が来ていて、私の目の前で私を救急車に乗せてました。その後お母さん達は引っ越して、私はずっと追いかけていました」

引っ越す度に、何度でも、何度でも。

この辺では見かけない子。スバルは最初にそう思った。それはそのはずだ。彼女は他の町で生まれ育った上に、もう7年も前に霊となっているのだから。その少女を見かけるわけが無いのだ。

そしてスバルが彼女に始めて話しかけた時、スバル自身に自分はこの世界に突然現れた存在だと思わせるくらい驚いていたのも納得した。彼女にとって、自分自身は見えないのが当然。スバルの言葉は最初、他の誰かに宛てられているものだと思っていた事だろう。
その言葉が自分に向けられている事に気付いたのは、スバルが自分の肩に手を置こうとした時だ。

スバルが項垂れている川を驚きと気遣いの気持ちで見ている時、ツバサは自分達がここに来た理由を話した。最初は信じなかったが、川の特徴を事細かに言うにつれて表情が変わって来た。悲しみと、驚きと、罪悪感に苛まれている顔だ。
母親は静かに口を開く。

「……確かにセンが交通事故に遭った後、私達は引っ越したわ。それからも転々と引っ越して、歳が歳だからそろそろ定住しようとコダマタウンに越してきたの」

それから、センは再び口を開く。

「……5年前、スバルさんやツバサさん同様、私の事が見えるという方と出逢いました」

コダマタウンを流れる川の上流。そこにいた幽霊達が話していた。【5年前にツバサが霊が見える人を見つけた】と。

「とても良くしてくれて、周りから見えないのが普通になりつつあった私から見ればとても嬉しかったです。この住所の書かれた紙も、その人からもらいました。……家族と良くしてくれたそうで、引越し先を知っていたそうです」

ですが……。

と、センは続ける。

「……私がその町を出る前、私の近くにいたからアヤカシに食べられました」

それを言う川の顔は見るに耐えないものだ。この傷は彼女の中で当たり前と化していない。初対面のスバルとツバサに暴言を吐いたのもそれが理由だ。自分に関わるとアヤカシから食べられる危険がある。だから自分から離れるように暴言を吐いたのだ。

5年前と同じ理由で死ぬ人がいなくなるように。自分のせいで誰かを傷つけるという事が無いように。

困った時は誰かに頼る。
それは人道的で綺麗な言葉に思えるが、今回のような例外もある。
困っている自分自身が元凶であり、異端である場合だ。……言える訳が無いだろう。自分が元凶ですが助けてくださいなんて……。

ここでスバルはふと疑問に思った事がある

「でも、別にこの子が元凶って訳じゃ無いんじゃない？」

さっきから『センが元凶』である事が前提に話が進んでいる。しかしセンはそれをあっさり否定した。

「いいえ。私のせいです」
「何でそこまで……」
「名前と、この子の特殊な状態だよ」

ツバサは玄関の壁にうっかかりながらセンを見る。

「結亀（ゆうき）　川（セン）。……川を始め水に関係するモノは彼の岸（かのきし）、つまりあの世に関わる事が多い。三途（さんず）の川が良い例だ」

何より、海など水の多い場所には霊が出やすいという話もある。

「水に関わるモノって事で、亀も両生類で水と陸を行き来する動物だしな。その上、【結】ってのは文字通りだ。この世に【結】びつける――ってな。
この子は、名前の力で強くこの世と繋がっていたって事だ。そしてその強い力に惹かれてアヤカシがやってきた。……今まで苦労してただろうな」

ここに来る途中、通りすがりのアヤカシに襲われたのは偶然ではなかったようだ。ツバサの予想より多めにアヤカシが来たのもそれが理由らしい。

ツバサはセンの頭を優しく撫でる。心の底から憐れむように。

彼は存外、リアルウェーブを作ったりするよりこういったモノ達と関わる方が合っているのかもしれない。彼の技術力は帯広博士に認めてもらうためと、監視者になってから養われたモノだという。

しかしそれは、彼自身が『なりたかった』姿なのだろうか。……それだけの実力が求められたから、そうなっただけではないだろうか。……彼は、どう生きたかったのだろう。

「……でも、センちゃんの特殊な状態って……？」

無粋かもしれないが、気になった。ツバサの『なりたい姿』も気になるが、今はこっちだ。

スバルの問いにツバサは直接答えず、代わりにセンに目を向けたまま彼女の母親に問いかける。

「……センのお母さん、センの肉体はまだ生きてますね？」

「「ッ！」」

スバルと母親の驚きが重なる。

「……それってどういう――」

「……生きてはいるわ。けど……」

スバルの言葉を遮った母親の顔は疲れていた。３０分もしないのにこれだけの事が起これば無理もない。

センの母親は家の中に視線を送る。スバル達は家の中に案内された。センを弾く壁は、もう無かった。

『……眠ってるみたいだ』

「……うん」

「……ウォーロックもスバルも、直接見るのは始めてみたいだな」

『……私も初めてよ』

「……」

ウォーロックとスバル、アイリスの驚き。ツバサの状況判断。センの沈黙。

スバル達の目の前で少女は寝ている。目を覚ます事は無い。肉体は、スバルとツバサの目の前にいるセンの背丈と同じだ。体の成長が、事故に遭った時から止まっている

植物状態。

言動や行動といった『活動』が出来ない状態の事。またの名を、『脳死』。

延命装置の小型化等の医療技術の発達により、家でも生命維持が出来るようになった。

センの母親は静かに口を開く。

「……あの事故からずっと眠っているの。……センが近くにいるなら、肉体は眠っているの方が正しいかしらね」

センが事故にあった後、幾度と無く引っ越した。それでも、一人

娘を手放す事はなかった。いつか目覚めるだろうという希望があったから。

「……でも、どこか諦めていたのかもしれないわ」

植物状態となった人間が目覚める可能性は、無いとは言わないが低い。絶望的なまでに……低いのだ。

だから大抵、臓器提供のドナーとなる場合が多い。

ツバサはやるせなく息を吐きながら自らの見解を言う。

「母親の無意識の諦めが、この子がこの家に入ってくるのを阻害していたんだ。だけど、センがここに居ると知ったから、センはこの家に入る事ができた」

どうせ娘はここには居ないし助からないかもしれない。その無意識の諦めは壁となり、センが家に入るのを拒絶した。しかし、今はその壁は無くなった。だから家の中に入ってこれたのだ。

ツバサは次にセンの頭に手を置く。

「特殊な状態ってのも、その植物状態ってのに関係してな。今センは霊体だが、肉体が生きている以上、これはどちらかというと幽体離脱だ。死んでいるわけでも、生きているわけでもない状態。……特殊な状態。その特殊性にアヤカシが寄って来たって所かな。……なぁ、セン」

ツバサはしゃがんで、センと目の高さを同じにする。

「お前はどうしたい？　このまま霊体でいるか、それとも肉体に戻

るか。……本当だったら肉体から魂が離れた時点で元に戻すのはほとんど不可能だが、お前の場合は名前が魂を護ってる。お前が望めば、戻れるよ」

通常、一度肉体から魂が出たら戻すのはほぼ不可能だ。その人物が暁並みに強靭な肉体と精神力を持っていない限り、魂は肉体に戻れない。しかし、センは『名前』が彼女を護っている。だから、自らの肉体に戻れるのだ。

センは、目に溢れそうになっていた液体を腕で拭い、答えた。

「戻ります。だって、私の体は家みたいなものですから」

体は魂を入れる器であり入れ物だ。魂にとっては家と同じである。そして、今のセンは魂だ。

部屋からセンが消えていく。足元からゆっくりと。お腹まで来た時、センはスバルとツバサの方を向く。

「……ありがとうございました」

数十分前の警戒心はどこへやら。心を開いた少女のはにかむような笑顔は、スバルとツバサに笑みを零させた。

頭まで消えて少し時間が経った。そして『その時』は唐突に訪れる。

「んっ……。お母さん」

「ッ！　センっ！」

母親はわが子を抱きしめる。もう二度と離れぬように、温かく、強く、抱きしめた。

――コダマタウン・展望台――

あの後スバルとツバサは結亀家を後にする。出て行く時は母親とセンからのお礼の嵐に見舞われた。

センに至っては、スバルとツバサを手招きして、２人の頬にキスをした上に……。

「か、勘違いしないでくださいね。別に２人に好意を抱いているわけではないんですから。ただ、少しなりとも恩を感じているという訳でやったまでです」

頬を赤らめながらもツンデレってくれた。『ツンデレ』という単語が動詞になっているのはこの際ご愛嬌。あえて言えば、『ツンデレサービス』と言った所だろうか。

植物状態で筋力が衰え、立てないと言うのは昔の話。現代はアシストスーツ――

（体の不自由な人が装着する物で、人間が体を動かす時に脳が出す

微弱な電磁波を感知。それによりスーツが起動。体の外から各筋肉を動かす事で四肢を動かす事が出来る。なお、この時代の医療技術でも、どの電気信号がどの筋肉を動かすかは試してみないと分からない。

補助する力の加減も出来るため、アシストスーツによる補助を徐々に弱めていって、リハビリを行う事も可能）

――という物があるためにセンは外に出られた。体力と筋力が完全に戻るまで、それでリハビリする事になるだろう。まだ慣れないためか、直立しているのがやっとだ。

アシストスーツはセンの父親が病院と交渉してレンタルしていた物だそうだ。本来なら無論病院がそんな事を承諾するはずが無い。交渉を始めた時期はセンが意識不明になってからで、つい3ヶ月前にレンタルまでこぎ付けたそうだ。並々ならぬ苦労があっただろう。

まだその父親は帰ってきていないようだが、帰ってきたら嬉しさで気絶してしまうかもしれない。

ツバサは一瞬キョトンとしてから、「やったなおませ～～～」と言いながらセンの頭を手で押し付けるように撫でる。スバルは真っ赤になって動揺している。

「えっ！？　えっ！？」

『クックック。スバル、ミソラという者がいながらな～～。……ミソラに言っちまうぜ～～？』

「『ッ！　ウォーロック！！』」

センは既に肉体に戻っているのでウォーロックやアイリスにも見える。

スバルが真っ赤になって怒鳴り、アイリスは穏やかな目を吊り上

げる。そして、行動に移すのも早かった。

『ウッ！？　体がっ！？　オ、オイアイリス！　まさか――』

『反省しなさい』

ゴンゴンゴンゴンゴンゴンゴンゴンゴン

『ヌゴォァァァァァァァ！！！』

ウォーロックは土下座するように地面（アスファルト）に頭を打ちつけ始めた。

その音でツバサとセン、センの母親。スバルの目もウォーロックの方に向かう。

「……前々から思ってたけどさ。アイリスってウォーロックに容赦が無いような気がするんだけど」

「確かにな。……あぁ、アレかな。オレがスバルをからかいやすいのと同様、アイリスもウォーロックがからかいやすいとか」

言ってしまえば関わりやすい相手という事だ。

「……キミと一緒にしないでよ」

スバルが嘆息をつきながらツバサにツッコミを入れる。内心、彼との友情について真剣に悩んでいた。からかいやすいのが理由で一方的にからかわれるのが友情なのかと。

そんな男子2名の会話に口を挟んできたのはセンだ。どこか自慢げである。

「ふっふっふ。分かっていませんね2人とも。あれは私同様ツンデレなのですよ。つまり、アイリスさんはウォーロックさんの事が――」

「それは無いと思うよ」
「それは無いだろうな」

スバルとツバサの即座のツッコミ。
っていうか……。

「お前はツンデレって言うより殷勤無礼（いんぎんぶれい）って感じだが？」

殷勤無礼。礼儀正しいように見えて実は失礼な言葉遣い。
以下、センとツバサの問答。

「何を言うのですか！　私はクール馬なんですよ！　殷勤無礼な態度なんて取りません！」
「それじゃあ熟語間違えボケキャラ。クール馬じゃなくてクールウーマンだろ？」
「ウッキー！！」
「じゃあ猿」
「フシャー！」
「今度は蛇か」
「コーホー……コーホー……」

「こ、今度は米国の大ヒット映画に登場する所の、ダークサイドに堕ちた改造人間かな？」
「う～ん。アレも宇宙が関わるからな。流石にスバルも知ってるか」
「そりゃあ有名だもん」

「私の話を聞け――――!!」
「今度は宇宙を旅する艦隊の歌姫だね」
「今度は宇宙を旅する艦隊の歌姫だな」

一文字違いだけど。ちなみにその人ともう1人が歌う『ライオン』は作者も結構好きだったり。

等といった漫才のような時間がこの後しばらく続いた。

そして今、スバルとツバサはコダマタウン展望台のベンチに座っている。

「ふぅ～疲れた。……そう言えばツバサ君」
「ブッ？」（んっ？）

缶ジュースを飲みながらだったためにツバサの応対はやや失礼だ。スバルはため息が出かかったが、それを堪えて彼に問う。

「いつからあの子が霊だって知ってたの？」
「最初から。今日ここで待ち合わせをした時、あの子とすれ違ってな。お前が真っ白に固まってるのを見て大方の事情を察したというわけ」

さらに言えば、スバルに話しかける前にツバサはウォーロックにこう言っていたそうだ。

「今日お前にとって文脈の分からないトークが始まったらその近くに霊がいる。だからその時は【あん？　そんな奴見えねぇぞ】とい

う類の言葉を言わないでくれ。……ってな。ついでだから、名前の持つ力を教えようと思ってよ」

センの名前は彼女を護った。それだけの力が『名前』にはある。この世に無意味なモノなど無いのだ。

「……それじゃあウォーロックもグルだったって事？」

本来なら怒る所だろうが、あまりに出来過ぎで見透かした話なために、思わず笑ってしまう。失笑という奴だ。おまけを言えば、ツバサが言うには彼女の肉体年齢が変わらなかったのは魂が抜けていたからしい。肉体は入れ物だから、『歳』という概念は本来魂の方にあるそうだ。

ツバサは軽く笑いながら立ち上がり、ベンチから少し離れてからスバルと向き合う。

「それじゃあ、一通りアヤカシとかの知識が加わった所で、スバルとウォーロックにはある人に出逢ってもらいますか」

「？　ある人？」

『ってかオレも入ってるのか？』

スバルとウォーロックの【誰？】という視線を全身で受けながら、ツバサは「ふっ」と笑ってから口にした。

「あぁ。……本物の魔女に」

第１１７話　異端（後書き）

始めに話した通り、この編には元がありましてね。『化物語』の『まよいマイマイ』編が元です。センのモデルもその登場人物でしてね。『八九寺（はちくじ）　真宵（まよい）』という子です。

次回は久々にあの大虎が登場します。そして、とある方にもコラボをお願いしました。……勝手な理由ですけどね。

それでは次回もお楽しみに！

第１１８話　異次元旅行（前書き）

ふしゅ～。何とか仕上がりました～。

第１１８話　異次元旅行

「……魔女？」

スバルは不思議そうに首を傾げて、対するツバサは胸ポケットから手鏡を取り出す。

「そう。……スバル、笑うなよ？」

「？」

スバルはますます分からなくなった。手鏡を出してさらには「笑うなよ」発言。しかし、この後すぐに納得した。たしかに「笑うな」と釘を刺したくなる。

ツバサは意を決するように息を大きく吸い、それに反比例するような小さい声で唱える。

「鏡よ鏡よ鏡さん。皆に合わせて下さいな、そ～っと合わせて下さいな♪」

「……」

『……』

【唱える】というより【歌う】だった。メロディー付きだった。

コレは恥ずかしい。

スバルは呆然とし、ウォーロックも最初は唖然としていたが直後大爆笑。

『プッ……ギャハハハハハハハハハハハ！！』

「だ～か～ら～……笑うな――――！！　コレだから言いたくなか

ったんだよ！！」

ツバサは顔を真っ赤にしながらウォーロックに怒鳴りかかる。スバルもそれを見て笑いが吹き出そうになったが、ツバサの持っている手鏡に波紋が生じた事で目を奪われた。

「ッ！　鏡に波紋が……」

「っと、来たみたいだな」

スバルの呟きが聞こえたらしく、ツバサはウォーロックの首を上腕と前腕で絞めながら鏡を少し自分から離して覗き込む。

「ん？　スバル」

スバルが元の場所から動いていないとの事でツバサは彼を手招きした。

鏡にツバサ、スバル、ウォーロックの視線が集中する。

「はぁ～い。久しぶりね、ツバサ。……あら？　キミ達は？」

鏡に映ったのは着物を着た女性だった。見た目２０代で黒髪。暗い赤目。ニコヤカで気さくな挨拶だ。

スバルとウォーロックは未だに状況の理解に苦しいが、誰かと問われたから答えておく。

「えっと、星河スバルです。星の河川（かせん）で、星河です」

『オレはウォーロックだ。……しかし、何者だ？　アンタ？』

さすがにウォーロックは簡単には警戒心を解かないだろう。彼は歴戦の勇士だ。

「私の名前は壱原侑子。もちろん偽名ね♪」

スバルとウォーロックはズッコケタ。及び、納得もした。あぁ、この人はツバサの知り合いだと。

２人がズッコケている間に、侑子はツバサと対談する。

「そういえば場所がいつもと違うみたいだけど？」

「あぁ。この手鏡を最終的にスバルに渡しておこうと思ってな。部屋にある鏡じゃでかすぎる」

「へ、部屋って？」

何とか再生したスバルに対し、ツバサは一から説明する。

「オレはこの次元全体を覆うほどの結界を張っていてな。その結界があるから、侑子さんの魔力などオレが入れても良いと思ったモノ以外、例えば【羽根】とかだな。ああいったモノはこの次元に入れないようになっている。

そんで、ＷＡＸＡでオレの部屋にあるでっかい鏡。いつもはアレで侑子さんと通信してたんだ。でも、お前も目覚めた以上は通信手段を持ってた方が良いと思ってね。オレがいない時は相談すると良い。……良いよな？　次元の魔女」

対する侑子はなぜかため息をつく。

「はいはい。どうせあなたの事だから嫌って言っても粘るんでしょ。……よろしくね、星河君」

後半で優しい笑顔を浮かべた侑子にスバルも明るく返事をする。

「はい！　こちらこそよろしくお願いします」
『まぁ、よろしくな。魔女さんよ』
「えぇ。……魔女さんってのは少し礼儀が無いけど、まぁ良いでしょう」

ここで侑子は思い出したように話を変える。

「……それにしても良い名前よね～スバル君。……ツバサもそう思わない？」
「……あぁ。そうだな」

侑子がニンマリと見透かしたような笑顔をツバサに送る。
スバルがその事を不審に思う前に、侑子が話しかけてきた。

「下の名前を付けてくれたのはお父さんね」
「えっ。何で――」

ツバサが言ったのだろうか。スバルがツバサの方に視線を移すと、当のツバサはニヤッと笑って否定した。

「オレは教えて無いぞ。……だから言ったろ？　魔女だって。名前を聞けばある程度は分かるとさ」
「そういう事。良い名前なんだから大切にしなさいよ。……名字もね」
「あ、はい」（……あれ？　何で名字も？）

スバルの頭に『？』が浮かんでいるのを見た侑子は軽く笑いながらツバサに話しかける。

「それで、今回私を呼んだのは何故かしら？　まさか私とスバル君、

ウォーロックを紹介させるためじゃないわよね？」

侑子の鎌をかけるような視線に、ツバサは乾いた笑みを浮かべる。

「ははっ。さすが。……スバル、ウォーロック。お前達も聞いて欲しい。……お前ら、異次元を体験して来い」

「『はっ？」』

スバルとウォーロックの顔と声は見事に重なった。【いきなり何を言い出すのか】と。

「さっきも言ったろ？　オレ達が居る世界のほかにも世界があるって。何事も経験だ。ちょっと飛んで来い」

「……あの～何事も経験という言葉にかこつけて目がキラキラしてるんですが……」

『ま、まさかオレ達からその、異次元ってヤツか？　そこの話を色々聞かせろって言うんじゃ……』

スバルとウォーロックのジト目にさらされたツバサは悪びれる事無く白状する。別に隠すつもりも無かったらしい。

「正直に言うとそうだな。土産買って来い。向こうの話聞かせろ。あ、学校の方はサテラポリス権限で旅行してくるとか言っとくから」

そのテンションを例えるなら、酔っ払いの『酒出せ。つまみも出せ』といった感じだ。

後半の部分は職権乱用というものだが、そこを突っ込んだらいけない気がする。

「な、何て一方的な……侑子さん！」

何とか言ってくれ！
そういったスバルの切なる願い。だが、スバルは侑子さんの性格をまだ完全に把握していなかった。ストレートに言えば、期待が裏切られる。
「あらお土産？　嬉しいわね。ありがとね、スバル君」
「……確定ですか……」
スバルとウォーロックに自由は無かった。
「……それでツバサ、私には何をして欲しいの？　もちろん対価は要るけど」
やはり侑子とツバサはスバルで遊んでいたらしい。スバルは沈み、ツバサはそれに対し笑いを堪えながら答える。
「ん、あぁ。……スバルとウォーロックを異次元に送って欲しい。オレが自分の魔力でこの大きさのモノを2つも送ったら、結界にも負担が来るかもしれない」
ツバサの張っている結界はツバサから常時魔力を供給されることで維持される。その結界自体、直し直しで使っていてもいずれ寿命が来る機械の様に、結界にも寿命が来る。
その彼自身が強い魔力を使えば、その分結界を弱める事になる。弱まれば揺らぎが生まれ、飛王・リードに破られるだろう。
「……なるほどねぇ。まぁ、良いんじゃない？　あなたがそれを望むなら、叶えましょう。それ相応の対価をもって」
「それが問題なんだよなぁ……。で、オレは何をすれば？」

「そうねぇ……ツバサにはロマネコンティでもお願いしようかしら。あなたのいる次元にもあるでしょ？」

ロマネコンティ。その単語１つで、ツバサの顔は動揺で満たされる。

「ッ！！　ロ、ロマネコンティ……だと……？　あの……最低でも３０万以上もして、本当に価値のある物なら１７００万円もする……あの酒か……？」

ロマネコンティとは赤ワインで、本当に高い物なら本当に１７００万もする。

「モチコース！！」

侑子が親指を立てながら笑顔で言う。

「ふ、ふざけんな――――――！！　そんなもん買ったらオレの口座が１つ潰れるわ！」

「高々１つなんだから良いでしょ？　それに、２００万くらいのヤツで良いから気楽に気楽に♪」

２００万でも十分高いと思う。というか、１７００万で口座１つというのが理解できない。彼はどれだけ金を持っているのだろう。

アイリスがスバルの肘を軽く突いてきた。

『ツバサはいくつも偽名を使ってたくさんの口座を持ってるの。旅行してるときの部屋とか飛行機代もそこから取ったのよ』

「へぇ～。興味本位で聞くけど、何で稼いだの？」

『……株』

「……そっか」

ものすごく現実的でおっさんっぽい方法だった。

「スバル、これ」

今度はツバサから突かれた。別に声だけでも良いではないか。スバルが少しイライラしながらそれに応じる。

「なに？　……なに？」

1回目は何で呼んだのかという【なに】。2回目は目の前にあるモノに対してだ。

「何って、ライター。少しず～つ魔力を溜めた物。帰るときはコレを使え。魔法関係だからって怪しい物を持ってたら人目につくからな。……使い方は想像付くよな？」

つまり、一種のカモフラージュだ。ツバサから渡されたライターを、スバルは興味深げに見つめる。

「え～っと……これ――上にあるプラスチック部分――を押せば良いんだよね？」

「ああ。……侑子さん、準備は？」

「良いわよ～♪」

「それじゃあ……侑子さんの酒２０本と、ミソラちゃんと委員長達には……」

スバルは自分の中でお土産を買ってくるメンバーを数えて、徐々に青ざめていく。

「……多すぎない？　僕とウォーロックじゃ持ちきれないよ」
「酒は譲らないわよ」

大虎（大酒飲み）が目をギラつかせ、ツバサも便乗する気満々。
これは１０本→２０本と考えるべきだろう。
強欲者たちの視線にさらされたスバルは盛大なため息をついて了承した。

「……分かったよ分かりました。……侑子さんとツバサ君の酒２０本はウォーロックが持って、他の人の土産は僕が持ちます」

せめて親しい人の誰かには送りたい。誰が良いかと悩んでいる時、ツバサが助言を出す。

「ミソラにはアクセサリーとか買ったら喜ぶんじゃね？　他には髪留めとか」
「あ、うん。そうだね。委員長にもそれで良いかな？」
「……できれば、２人だけで喜びとか幸せを分け合った方が良いと思うぞ」
「？　なんで？　せっかくだから皆で楽しんだ方が――」
「……」
「……分かりました。ミソラちゃんにだけ買ってきます」
「よろしい」

ツバサの無言の睨み＋プレッシャーが功を奏したようだ。

「話は終わったかしら？」
「はい。いつでも良いです」
『で、どこに行くんだ？』

ウォーロックの質問に侑子は思慮深げに顎に手をやって唸る。

「う～ん……そうねぇ……。スバル君って好奇心旺盛みたいだから科学技術が今より格段に上がっている所が良いわよね……」

「あ、そうですね。できればそうしたいです」

「……あの世界にしましょうか。こないだまで物騒だったけど、今は落ち着いてるみたいだし。科学技術という点では、ウォーロックが存在できる次元で最も発達しているわ」

魔法が存在できる世界が先天的に決まっているのと同様に、ウォーロック等の電波体も存在できる世界と存在出来ない世界がある。

侑子はここで少し口調を変える。

「ただし、危険なヤツも居るみたいだから目立った行動は厳禁」

「？　危険なヤツ？」

「……ギャラクシーとベガ君がいる世界。って言ったら、分かるかしら？」

「ッ！！　あいつが……」

ギャラクシーとその部下のテロッドとはバルズランドで戦った。テロッドの方は今までロックマンが倒してきた者達の技に加えてアレンジも加える強敵。ギャラクシーに至っては底が知れない。

ベガの方は味方だ。

ツバサは真剣な眼差しでスバルを見る。

「……スバル、目立った行動はするな。危なくなったらすぐ逃げろ。危ない事が無ければ思いっきり楽しんで来い。……異次元を旅するなんて、早々出来ないからな」

後半を陽気に笑ってみせるツバサ。彼の言う通り、危なくなれば帰ることも出来るのだ。コレなら少しは安心できる。

「……分かった。それじゃあ侑子さん、お願いします」

「えぇ」

スバルの足元に不思議な陣が生まれる。恐らく侑子の魔方陣だろうが、ツバサのそれとは違うものだ。

「それじゃあ、楽しんで来い」

「……うん。行ってきます」

スバルとウォーロックが光に包まれる。

光が収まった頃には、２人の姿は無かった。

第１１８話　異次元旅行（後書き）

そんな感じがそんな訳でそんな風に、スバル君とウォーロックには少しの間クイックロッドさんの所に飛んでもらいます。
祭合旅行編の後だそうです。

それではクイックロッドさん。時が来たら2人の事、お願いしますね。

ちなみにツバサが最初に言った呪文（歌）はご両親辺りに聞いてみよう。もしかしたら知ってるかもしれないですよ♪

第１１９話　戻れない選択（前書き）

後書きに補足を加えました。

第１１９話　戻れない選択

スバルとウォーロックを見送った侑子は「ふっ」と息を吐く。

「……さてと、それじゃあ私はそろそろ――」

「あ、ロマネコンティとっとと渡したいから待っててくれねぇか？

……アイリス、一っ走り行って来てくれ」

『でも、時間を取らせるなんて侑子さんにご迷惑なんじゃ――』

「いいから買ってきてくれ」

ツバサは切羽詰まった顔でアイリスの両肩を掴み、小さい声で囁いた。

「（嫌な事はとっとと終わらせたい）」

アイリスは心底呆れた様子で、目を閉じながらため息をついて渋々了解した。

『……分かったわ。……侑子さん、すみませんが少し待っててくださいませんか？』

「……まぁ、アイリスちゃんの頼みとなれば仕方が無いわね。良いわよ。行ってらっしゃい。ゆっくりで良いから」

『はい』

侑子に頷いたアイリスは電波化してウェーブロードに飛び乗る。

アイリスを見送ったツバサは侑子と向き合った。

「……願いがある」

「……やっぱりね。スバル君とウォーロックを異次元旅行に連れて行くという名目……いえ、それも目的の1つと考えるべきね。
それで私を呼び出し、2人が異世界に行った後アイリスちゃんも自分から離す事で願いを叶えてもらう。っていう所かしら？」

ご名答、だ。
だからさっきこの魔女はアイリスに対し、【ゆっくりで良いから】と言ったのだ。

「フッ。やっぱりバレてたか。……誰かに、特にアイリスには聞かれたくなかったんでね」

知られたら自分を犠牲にするような無理をしかねない。カーネルをサーバーに入れた時の事はもう良いって何度も言ってるのに頑固なのだから。

「そぅ。……まぁ、私は願いを叶えるだけだから別に良いんだけどね。それで、願いは何？」
「その前に1つ聞いておきたい。……もし世界で起こるはずだった事件が起こらなかったら、他の世界で起こる可能性はあるか？」

理論の中には、生命体はその個体が死んでも、別の次元、別の世界、別の時間で生まれるという考えがある。つまり、一度その者として生まれた以上、個体として死ぬことはあっても存在が死ぬ事が無いという事だ。
出来事も同じ様に、その世界で起こるはずだった出来事が回避された事で、別の次元や世界で起こらないとも限らないのである。

「……その出来事にもよるけど、起こらない保証は無いわね。あなたが関わったとなれば、なおさら次元に与える影響も大きい。……

この世で最強の魔力を持つクロウ・リードならなおさらね」

「……」

クロウ・リードは、とある人が死に逝く時に「もう一度目を開けて欲しい」と一瞬だけ思った。彼がしたのはそれだけだ。……しかし、【それだけ】で十分だった。クロウ・リードの強すぎる魔力は、その強い想いのままにその人の刻(とき)を止めてしまった。

その人は今も生と死の狭間で生きている。……刻(とき)が止まっているので、【生きている】というより、【そこに在る】の方が正しいだろう。

それだけの魔力(チカラ)を持つ者が自分のいる世界全体に影響を与える様な事をすれば、周りの次元にどんな影響を与えるか分からない。

ツバサもまた、結界の事ともう一つの事が無ければとある人の『生』を留めたクロウ・リードに匹敵する魔力が在るのだから。

故に、ツバサは願う。

「……だからこそ願う。オレがこれからやる事の影響で、他の次元の誰かが苦しんだり、泣いたりする事が無いように。……オレがこれからやる事の影響が他の世界に出ないようにしてくれ」

ツバサの強い意志の宿った目。

一歩も引かない目。

「……それがあなたの願いなの？」

「コクッ」

ツバサが頷いた事で、侑子はため息をついて対価を告げる。

「……分かったわ。……対価は、あなたが自分の目的を叶えた事で消えた後、世界のどこにも存在できない事。どんな形でも、ね。残留思念でも、その世界には残留電波と言うものもあるんだったわよね？　それでも残る事は出来ない。もちろん生まれ変わる事も出来ないわ」

消えた後、どんな形でも残る事が出来ない。生まれ変わる事も出来ない。

関係性の完全な遮断。

それが対価。

他の世界に自分の影響を出さないのに、これ以上適した対価は無いだろう。

「……なんでそれが対価になるんだ？　死んだらそこまでだろ」

「自分の好きな世界と関われなくなるのよ？　対価としては十分でしょ」

「はぁ？　オレが？　この世界を？　過去から何も学ぼうとしない人間が生きる世界を？」

ツバサとしては、見てられないから仕方なく裏から手伝ってきたという自覚だ。好きかなんて考えていない。

ツバサの疑問を察したように、侑子は頬杖を付きながらクスッと笑う。

「えぇ、そんな世界を。……好きでなかったら、何でそこまで他の世界の事まで気にかけるのかしら？」

先程のツバサの願いは、自分の行動の影響が他の世界に出ない事。それはつまり、ツバサが他の世界の事も案じている事を意味してい

る。

「それは……ほっとけなくて……」
「どうしてほっとけないの？」
「……」

ツバサは自分の事が分からないらしく、俯いて黙り込む。
侑子は続ける。

「そっちの方で出遭ったギャラクシー……だったかしらね。そいつと戦った時に自分の何かを消したって言ってたけど、何を消したの？」

ギャラクシーと初めて遭った時、ツバサは自分の何かを消した。
その事はスバルと出逢う前に雑談で零したことがある。

「何って……」
「自分の大事な記憶に入られる前にその記憶を消したって言ってたわよね」
「……あぁ」
「大事な記憶……自分の好きな記憶……。好きな記憶の始まりにあるのは、何でしょうね？」
「……好きな記憶……」

帯広博士やレイとの日々。それらの事が覗かれる前に、その前の何かを消した。そのモノを好きと思う発端……感情。

「……オレが消したのは、他の何かを好きだと思う感情？」
「そうなんじゃない？　感情っていうのはね、本人が消したつもりでも案外残ってるものよ。そして、一度無くなっても育まれるモノ

でもある」

虐待やイジメ……辛い経験から感情や記憶が欠落する事は、精神科では良く聞く話だ。しかし、それは戻らないわけではない。その後の環境によっては、時間は掛かるだろうが『戻る』のだ。

例え魔法で消したモノだとしても、育まれて戻る事もある。

「……オレは……」

「自分の忘れていた感情が分かった所で聞くけど、それでも引かない？」

自分の好きな世界と二度と関われなくなる。その世界で暮らす愛する者（スバルやソラ等の人間）とも、愛するモノ（ミラーなどの人あらざる者）とも、絶対に関われなくなる。

それが、対価の本当の意味。

そして、対価の重みだ。

実のところ、侑子にはこの後の彼の言葉が分かっていた。クロウ・リードを始め、彼の血を引く者は揃いも揃って意志が強い。自分がこうと決めたら絶対に覆さないのだ。

ツバサの目に意志が宿る。自分の感情に気付いた事で、さらに意志が固まったらしい。

「それを聞いたら、余計に引き下がれなくなった。例え誰に恨まれる事になっても、オレは自分の願いを叶える。絶対に引かない」

一瞬だけソラの顔が浮かんだ。言いようの無い苦しみに襲われたが、引き下がるわけには行かない。ツバサは渾身の精神力で表情を保つ。

「……そぅ。……アイリスちゃんと同じ目ね」
「？　アイリス？」
「えぇ。そっちの世界で夏の初めの頃だったかしらね。その頃アイリスちゃんに願いがあるからって叶えてあげたけど、その時の彼女も今のツバサと同じ目をしていたわ。……絶対に引き下がらない。例えその先に何が待っていようとも。……ってね」

ツバサ達がうらかわに行った時だ。アイリスは1人遅れて着いたのだが、それは侑子に願いをかなえてもらう事だった。

「……アイツ何を……」
「言うわけないでしょ？　顧客情報をやすやすと言う店は無いわ。……興味本位で聞くけど、さっき誰を思い浮かべたの？」

あいも変わらず観察力が高い。ツバサはため息をついて手短に答える。その話は関係ない。

「ソラだよ。旅館で住み込みで働いてる」
「そぅ。そのお守りもその子が？」

次元の魔女と評されるくらいだ。他の次元越しでも強い力なら分かるだろう。

「あぁ」
「ずいぶん想われてる様だけど、その子の事は良いの？」
「……殺させはしない」

出来れば最後の時には巻き込みたくないが、彼女の性格から考えて無理にでも駆けつけるだろう。そして、一発蹴りをお見舞いしよ

うするはずだ。
ツバサ口から無意識に笑みが零れる。同時に、叶わない願いを抱いてしまった。

もしもこの時代に普通に生まれて、普通に育っていたら、気負いする事無く彼女と関われただろうと。……もしもあの時……ネビュラ・グレイを受け入れていなければと。

しかし、自分自身で分かっていた。それは幻想であり、願望であり、文字通り叶わぬ願いだと言う事を。
それに何より、ネビュラ・グレイを我が身に宿す事を選んでいなければ、サーバーの者達は1人残らず喰われていたかもしれないのだ。

悔いは無い。幼稚な願望だ。振り向いても意味が無い。

ツバサは静かに息を吸いながら目を閉じ、吐きながら目を開けて侑子と向き合う。

「……始めてくれ」
「……それじゃあ、覚悟は良いわね？」
「あぁ」

ツバサの足元に、スバルとウォーロックを異次元に送った時と同じ陣が現れる。その効果は全く違うモノだが。
光が収まり、侑子は目を伏せる。

「……終わったわよ。これでもう戻れない。……誰かが止めてくれない限りはね」
「……オレの計画は誰にも見抜けていない。止める事は出来ないさ」

「……最後に1つだけ聞くけど、そのお守りは何をあげた事でもらったの？」
「？　何って……オレが見た夢を話しただけだけど？」
「そぅ。夢を、ねぇ……」
「？」
「何でもないわ」

侑子が思慮深げな顔から気軽く手首から先を振って見せ、気になったツバサは問おうとするが、お使いに行っていた者が戻ってきた。

『ただ今帰りましたー』

アイリスがウェーブロードの上から飛び降りながらツバサと侑子に声をかける。手には大事そうに細長い袋を持っている。その中に２００万円相当のロマネコンティがあるのだろう。彼女の柔らかな声とは裏腹に、腕はガッチリと固定されている。割れたら２００万がパーだ。重要度は酒を飲まないアイリスでも分かるらしい。

シリアスパートこれにて終了。侑子のテンションも途端に明るくなる。

「あ～らありがと～♪　1回こういう高級な酒飲んでみたかったのよね～。小狼君達にお土産は期待できないし、封真と星史郎はそこまで気が回らない上に万年金欠だしね～」

酷い言い様だ。封真とその兄、星史朗は確かに次元を旅して周っているから金が無いのは分かるが、小狼達なら要求すれば返してきそうなものだが……。

その後侑子が愚痴っていたのだが、バレンタインデーのお返しをまだ貰ってないらしい。異次元では時間差もあるだろうと思って2ヶ月も待ったのに、だ。

「ほんっと信じらんない。貰ったら3倍返しが基本でしょ」

「いや、それ一部の地域だけだから。それと、そろそろ対話を切らないとオレら完全に怪しい人物になるんだけど」

手鏡の中の人と話しているように見える。はたから何も知らない人が見たら、頭の可哀想な人に思われるだろう。つまり、電波だ。変な人だ。

「あら、そう言われてみればそうね。それじゃあアイリスちゃん、ツバサのお守り大変だと思うけど、しっかりね」

『はい』

「おーい。お守りって何だー。アイリスも笑いながら頷くなー」

お守りって……ガキか。

「ツバサ、アイリスちゃんはもちろんだけど、ソラちゃんも大事にしなさいよ」

「……言われるまでも無い。……オレがそばにいる間は護り抜く」

「そぅ。それじゃあ、またね」

鏡にはツバサとアイリスの顔が映る。

鏡に映ったアイリスの顔が不思議そうにツバサを見ている事に気付いた。

「……なんだ？　アイリス？」
『うん。……ツバサ、何かあった？』
「なんで？」
『……少し、落ち着いて見えるから』

ツバサが自分の感情を気付いた事でその分迷いが無くなり、雰囲気が違った。アイリスは雰囲気の違いは察したが、その詳細は分からなかった。
ツバサは「ふっ」と穏やかに笑いかける。

「さてな。……何でも無いよ」
『……うん』《……でも、その代わりツバサが遠くに見える……》

近くに居ても遠く感じる。
ツバサの【戻れない選択】とその覚悟は、アイリスに距離感を与えた。

――――侑子の店――――

「……侑子」

侑子の膝にいたモコナが話しかける。手鏡の大きさの関係上、侑子の膝に乗っていたモコナが映らなかったのだ。

「なぁに？　モコナ」
「ツバサ、前よりマシになってたな」

「……そうね。荒んだ心を帯広博士やレイ、来斗君が癒して、博士とレイを失った事でまた荒んで……。それからネビュラ・グレイを受け入れて……。それからかしらね。あの子が誰かに弱音を吐かなくなったのは」

弱音を吐くという事は、吐けるという事だ。その人の事を信頼していないと、弱音は吐けない。

「でも、変わったな」

「まだ、変わりつつある……だけどね。……スバル君がツバサの願いを叶えるために最適な素質を持っているとすれば、ソラちゃんは全くのイレギュラー。ツバサが彼女の事を言う時の顔からして、相当押しの強い子で、ツバサでも御し切れないみたいね」

モコナは嬉しそうに侑子の肩に飛び乗る。

「変わる可能性大だな」

「ツバサの渡した夢とお守りの事もあるしね」

侑子もまた、楽しそうな笑顔を浮かべた。峠を越えたような、安心した笑顔だ。

「お守りの鞘が焦げてたみたいから、その事を知ったらソラって子、怒るな」

「修羅場ね～♪」

今度は別の意味で楽しそうだ。

第１１９話　戻れない選択（後書き）

『最強の魔力を持つ～』の件は、魔力的な意味で最強という意味です。電波関係は含みません。

ちなみにツバサの魔力の配分は、下の通りです。『実用』は戦闘などが含まれます。

平常時
結界：？：実用＝６：３：１

戦闘時（ビャッコ戦やグレイガ戦位の本気）
結界：？：実用＝１：３：６

ちなみに『？』の存在はツバサでも自覚していません。ミラーが言ってたもう１つがこれ（『？』）です。ヒントは、常に一定の魔力を配分してないといけないって所ですかね。

第１２０話　幻覚（前書き）

お待たせしました！　スバルとウォーロックが異次元（クイックロッドさんの流星の世界）に飛ばされた後、ツバササイドの話です。

今回は、序盤がツバサ視点。途中から通常視点になります。ツバサ視点の間はウィザードと電話のセリフが『　』。ツバサの言葉が「　」で表されています。

それと、ツバサの魔法の事で補足的な説明を加えました。何も無い所からポンポン無条件で出せるわけではないって事です。

第１２０話　幻覚

スバルが異次元に旅立ってから数時間後。場所は才葉シティ。

「……おっ、ここかな？」

スバルが帰ってくるまで、ツバサは世界に散らばっている羽根を消して周る事にした。手始めに才葉シティに入った羽根から消す。

スバルを無理矢理自分のプチ家出に付き合わせたという事にしているのだから、早々コダマタウンには戻れない。ＷＡＸＡも同じ様なものだ。色々聞かれるとめんどくさい。

ボゥ

ツバサが羽根に触れた途端、羽根は静かに燃える。

顔を上げたツバサの視界に動くものが映る。そちらを見ると数名の子供達がお喋りをしながら歩いていた。

「……ん？　そろそろ下校時刻か」

周りを見れば夕暮れ。

彼らには家族がいる。温かく迎えてくれる家、そして人。

「……家族か」

昔自分を捨てた家族。ソラのように捨てた理由を聞きたくとも、

もう聞けない。この世にはいないのだ。

『寂しい？』

腰に下げているハンターからアイリスが尋ねる。

ツバサはハンターを取り出し、落ち着いた顔で答える。

「少しだけな。……でも、アイリスがいるしな」

普通に言ったのだが、アイリスは怪訝そうに首を傾げる。

『……ツバサ、頭悪いの？』

「あぁ？　ケンカ売ってんのか？」

流石に今のはカチンと来る。唐突に、直訳すると【ツバサは頭が悪いの？】と聞く奴があるか。

『ゴメン。間違えた。……頭の具合が悪いの？』

「……」

【具合】をとっただけでここまで侮蔑的な言葉になる事を初めて知った。……だけど、『頭の』は抜くべきだろう。

『……ツバサ？』

「ッ。あぁ、悪い。別に調子は悪くないけど、何で？」

『ツバサがいつもより優しいから』

ズバッとハッキリ言った。これはこれでムカつく。

「……オレ何かお前に悪い事した？　その仕返し？」

隠し事はしてるけど。ダークチップの事とか、侑子に願った事とか。

アイリスはとんでもないとばかりに首を振った。

『まさか。……でも、ツバサが【アイリスもいるしな】なんて言葉を言うと思ってなかったから』

「あ、そっちか」

それは多分、侑子との会話がきっかけだろう。ギャラクシーとやりあった時に消した感情を思い出し、対価によって自分がここにいられる短さというものも実感が出た。おそらく、計画が最終段階に行くのにもう1ヶ月も掛からないだろう。最後は、永遠にお別れだ。

だからこその変化だ。せめてそこにいる間は、そばにいる者達の事を想いたい。特にアイリスには長年世話になっている上に、計画の事も知っている。だから……。

「たまには姉貴を優しくするのも良いかと思ってな」

『……変なツバサ』

「言ってろ」

こういう時間を大切にしても良いだろ。

『ところで……』とアイリスは続ける。

『……今日中にルナさんが電話してきそうだけど』

強敵だ。

ルナは面倒見が良くて他人を気にかけるから自分とスバルが旅行

に行ったとなればちゃんとして理由を言わないと納得しないだろう。
……今から適当な言い訳考えておこう。

Ｐｉｐｉ！

『電話ね。差出人は――』

ついに来た！　予想より早いが凌いでみせる！

「あ、スバルだけど、実はオレと一緒に旅行を――」
『えっ？　スバル君、ツバサに拉致られたんじゃ無いの？』
「……ソラ？」
『ですが何か？』

ソラだった。心臓に悪い。そばでアイリスが『早とちりするから……』と呆れている。ほっとけ。こっちもかなり恥かいた。精神的に寿命減ったわ。

「で、何か用か？」
『ＷＡＸＡに行ったらいないって言われて電話したんだけど、どこにいるの？』
「黙秘権を行使。……ん？　それ以前になんでお前がＷＡＸＡに？」
『黙秘権返し』

こ・の・や・ろ・う。

「あっそ。まぁこっちも対して興味もないし、切るぞ」
『あ、待って待って！　……話します……』

電話の向こうでふて腐れているのが想像できる。

「ふぅ～ん。で、なんだ？」（……勝った）

『うぅ……』《……負けた》

どこか低レベルな会話だった。

「ッ。……で、電話の内容は？」

少し移動しよう。こんな人の多い所にいたら迷惑が掛かる。

「……手料理？　ソラの？」

現在歩きながらの会話でござ～い。

『そう。実験台にと思って』

「……」

実験台……その言葉を聞いただけで食う気が失せる。オレがこんな体になったのは元々はマッドサイエンティスト共の実験のせいだって事忘れてないか？

大体、自分の手料理食べて欲しかったら、「私の手料理を食べて欲しいの」とか言うなり……言えねぇよな……。ソラはそれほど甘えんぼキャラじゃねぇし。どっちかというと男勝りな直球スポーツ系。

とりあえず返答は……。

「遠慮しとく。とりあえず実験台って言葉を改めろ」

それだけで印象はグッと良くなる。ケフェウスを見送るパーティの時の味からして悪くないんだから。

『むぅ……。ツバサ昨日旅館で料理食べて美味いって言ってたよね？』

「あぁ、言ったな」

セントラルシティの事件の後、ソラは旅館を選んだ。だからといってもとの家族と絶縁というわけでもない。ただ少し、時間が必要なだけだ。……人との歩み寄りとは、それほどまでに難しいのだから。

その日はオレも旅館に泊まったんだが、その時の料理の味は確かに好みで……あれっ？　ソラの文脈から考えて、もしかしてあの料理って……。

『あれ、私が作ったヤツなんだよね』

……やっぱりですか。となれば、ソラがＷＡＸＡに来た理由は１つ。

「それで、オレに食べてもらおうと」

『う、うん。……食べてもらうって言うのが照れくさくて実験台という言葉を使いました。……ゴメン』

悪い事をしたら正直に謝れる。……うん。そういう点でこいつは立派だ。

……確かに昨日の料理は美味かった。ソラならスバルが異次元に行った事とか諸々の事を内緒にしてくれるだろうから、教えられない理由がそれだけなら自分の今いる場所を教えただろうな。……そう。それだけなら。

「悪いソラ。ちょっと今立て込みそうでな。切るぞ」

『えっ。ちょ――』

問答無用。……ここなら、廃棄された工場跡地なら、もしもの時の被害が出ない。

――ここから作者視点――

【……ハカイ……】

「……ッ。やっぱり、スバルが異次元にまで離れるときついな……」

ツバサは工場の敷地内にいる。中庭のように、周りが建物に囲まれた場所だ。１０何年も前に閉鎖された工場らしく、所々木も生えている、ツバサはその中の一本に背中を預けて座っている状態だ。

手には三日月の鍵とソラから貰ったお守りが握られている。

そして、彼の脳にＰＧＭを通じて語りかえるのはネビュラ・グレイである。不定期に来る今回の【　発作　】はやけに酷い。

【……ハカイせよ】

「……ミソラも近くにいないし、ＰＧＭでの抑制率が半分になっち

まう」

今まではスバルもミソラもツバサと同じ次元、それも近くにいた。だからこそＰＧＭの抑制が成立していたのだ。今はその半分の力でしか抑えられない。

「だからといって、悪いモノを無意識に遠ざけるとはいっても、ソラを巻き込むわけには――」

【コワセコワセコワセコワセコワセコワセコワセ】

「くっ……！」

今回は一段と侵蝕が早い。ツバサは首から下げている三日月の鍵（普段は流石に恥ずかしいので服の中に隠している）とお守りをいっそう強く握り締める。

ジリジリジリ……

お守りの碧い生地が徐々に焼けていく。ネビュラグレイの『闇』とお守りの『聖』がぶつかり合い、お守りの布地がその衝撃に耐えられないのだ。

お守りで重要なのは中にあるお札だ。外にある赤や藍の布地は鞘である。言ってしまえばリミッターだ。力が強過ぎる場合は災いを持ち込む事もある。だからこそ、影響がほんの少しだけになるようにリミッターをかける必要があるのだ。

それがお守りの布地の役目である。

ツバサは少しずつ藍が焼けて白い札が出てくる様を見て嘆息する。

（はぁ……。やっぱり内の力と外の鞘じゃあ釣り合いが取れないか）

ソラの願いの力が鞘とバランスが取れていない。切れ過ぎる刀は鞘さえも傷付ける。

（……ッ！　これはっ）

今までのネビュラ・グレイの侵蝕というと、精々『声』と破壊衝動をもたらす『精神作用』だけだった。しかし、今日初めてそれ以上を経験した。

地面に、木に、建物に、黒い影が這い上がる。黒い影に覆われた木はタコの足のように柔軟になり、黒い触手となってツバサに襲い来る。

建物はレンガほどの大きさに分解されて小さい魚の群れの様に空中を飛び回る。

「幻覚！？　くっ！　うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

幻覚だと思って油断した。実体がある。黒い触手はツバサの四肢を封じ、全身に巻き付く。

しかし、はたから見ればツバサが一人で苦しんでいるだけ。そう。ツバサの幻覚というのは合ってはいた。しかし、触覚も聴覚も視覚も、幻覚に支配されていたのである。頭の中で幻覚だと分かっていても、本能的に『本物』だと認めてしまっている。

それほどの『恐怖』と、ネビュラ・グレイの『精神に対する影響

力』というわけだ。

頭を除いて全身を包まれ、目前には黒いレンガのような弾丸が迫る。

ツバサはこの状況で有効だと思われる手段を思考した。

「チッ！　ＳＨＯＴ（ショット）。……撃つ！」

ショットは攻撃系の魔法。発動後は術者がその魔法を解くまで「撃つ」や「狙う」という言葉に反応して対象物や周りに攻撃を繰り出す。言ってしまえば、通常のピストルと散弾銃を言葉だけで使えるという事だ。

『バトルカード』は攻撃までの手順が長い。『自分の命（体内のエネルギー）』はこれからの計画で重要な物。消去法で『魔法』以外に無かったのだ。

「撃つ撃つ撃つ撃つ」（……まぁ、これももう1人のオレが創った魔法だから偉そうな事は言えないんだけどよ……）

ツバサは苦笑しながら黒いレンガを撃ち落していく。どうやらネビュラグレイの『闇』には魔法も有効らしい。

「撃……っ！　がぁ！」

全身に巻き付いていた黒いモノ（一塊になっているから触手ではなく雪ダルマに近い。頭がツバサ）が力を込めて締め上げてくる。全身を万力にかけられている様な痛みだ。

「あっ……くぅ……ＳＷＯＲＤ（ソード）！」

黒いモノの中に細身の両刃剣を右手の平のそばに出現させ、掴んだ後に手首を刃の向きに動かす。
手首を中心に『ソード』は弧を描き、黒いモノを斬る。さなぎから成虫になるような、そんな小さな切れ目だが、それでも少しは自由が広がった。

ツバサ、つまりクロウ・リードは全く新しい魔法を生み出せる程の魔力を持っていたわけだが、まったく元が無い訳ではない。太陽と月を筆頭に火や風など、自然界にある存在から捻り出している。
太陽と月、元素、春夏秋冬といった季節。ありとあらゆる自然の摂理を取り入れてクロウの魔法は編み出された。故に、それらを理解して初めて使用可能となる。魔法側だって、自分を理解していないのに使われるのは嫌だろう。
おまけを言えば『ソード』は発動後に実体化する。つまり、普通の人やウィザードにも見える。

ツバサは手首を中心に出鱈目に『ソード』を振り、切れ目を広げて厚みを無くしていく。

「これで終いだ！　撃つ！」

十分に厚みが無くなったら『ショット』で穴を開ける。貫通した時の痛みがあるが、それも覚悟の上。最初の厚みのままだと『ショット』は通じなかったのだ。

最初に右手を自由にして『ソード』によりレンガから身を護り、その間『ショット』で体の周りに纏わりついているモノを消してい

る。

そしてとうとう……。

「はぁぁぁぁぁぁ……」

黒い牢獄から抜け出す事が出来た。

次に備えて息を思いっきり吐いて吸う。

しかし、そう休む時間は無かった。

黒い地面が波打ち、さっきと同じ様な触手となりツバサの足を封じようと迫る。

ツバサは『ソード』と『ショット』でそれを迎撃。

それをこれからひたすらに繰り返す事となる。

第１２０話　幻覚（後書き）

太陽と月、元素の事はクロウ・リードの魔方陣。季節の事は小狼の魔方陣より。２人の魔方陣を見て、自分なりに「彼らの魔法ってこういう法則があるのかな？」って考えたのが作中であった魔法のくだりです。

全ての事にはそれ相応の意味があり、理由があるってのが自分なりのモノの見方ですからね。訳が分からないままってのが嫌なので自分の見解を書きました。

第１２１話　苦痛（前書き）

ツバサがネビュラ・グレイの黒いモノと戦っている所です。……本来は前の話と１つの話にした方が良かったんですが、それだとメッサ長くなるので分けました。

第１２１話　苦痛

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

どれほどの時間が経っただろう。

日の位置から考えて実際には大して経っていないだろうが、どこからでも襲ってくる黒いモノを警戒して神経をすり減らし、ツバサの体力は限界にまで達していた。

しかし、当然相手はそんなのお構い無しで攻撃してくる。

「はぁ……はぁ……ッ！　……これまた……」

新しい攻撃パターンだ。黒い地面から人形のような物が出てきた。数は２つ。身長差がある。

なぜだか、その２つに対して異常な恐怖が湧いて来た。その２つを自分に近づけてはいけないという感覚だ。特に、大きい方は決して近づけてはいけないという感覚。

「ショット！」

先手必勝。即座に攻撃に移る。

高い方の黒人形は小さい方を置いて突っ込んでくる。両腕には剣のような物を装備し、自分と後ろの黒人形に迫り来る『ショット』を弾きながらツバサに迫る。

『ショット』を弾き損ねて我が身に受けてもほんの少し怯むだけで突き進んでくる。

「ッ！」

恐怖と疲労。

それがツバサから判断力と思考力を奪っていた。もし判断力と思考力がまだ十分に持っていたら、ツバサはこの後傷つかずに済んだだろう。

別格の強さを誇る大きい方の黒人形。ツバサは『ソード』を構えて斬りかかる。さらに、黒い人形が近付くにつれて恐怖も上がってきた。

スッ……

紙一重でかわされて懐に入られる。黒い剣の付いている腕は外側に大きく広がっている。ここから内側に振るように横一線の斬撃を繰り出すのだろう。恐怖が極限にまで引き上がる。

しかし、次の黒人形の行動は予想外のものだった。

腕の剣を自ら消し、ツバサを両腕で抱きしめたのだ。ツバサは片腕一本と胴体を封じられてそのまま後ろに倒れる。及び、後頭部を土の地面に強く打ち付けた。

彼が痛みを覚えたのは後頭部の痛みではない。そんな痛みはちんけな物だと思わせるくらいに大きな、別の苦しみだ。

「ッ！　ぁ……」

ツバサがショックと動揺が入り混じった声を漏らす。

幻覚による痛みではなく、現実の痛みが彼の見ている幻覚にブレを起こさせる。映像にノイズが混じるのと同じ様な感じだ。

黒い人形がブレ、赤い色が見えた。６枚の羽。比較的装甲の少ない空中戦を得意とする電波人間。

「……ソ……ラ……」

ソラの電波変換したスザク・フレアだった。

彼女の名前を呼んだ時、黒い景色は吹き飛ぶ。ソラの後ろにいたのはアイリスだった。

ソラはツバサに顔を向け、微笑む。

「……良かった。ツバサが元に戻って――」

「どうして……ここに――」

『ツバサの様子がおかしかったからソラさんを呼んだの。……ソラさんの【気】の事は昨日セレナードから聞いたわ』

ソラの言葉をツバサが、ツバサの言葉をアイリスが遮る。

アイリスは昨日セレナードからソラがアヤカシなどの悪いモノを引き寄せない『気』だと聞いた。そして今日、ツバサの様子のおかしさに気づいてソラの下へ助けを求めたというわけだ。

ネビュラグレイは人の怒りや憎しみ、悲しみといったマイナス感情の塊。対してソラはそれらのモノを祓う力を有している。だからネビュラ・グレイは恐れた。それはそのままツバサ自身の恐怖となり、ツバサに攻撃を促したのだ。

アイリスとソラが黒い地面から現れたように見えたのは、ツバサに『黒いモノの仲間』だと認識させるためにネビュラ・グレイが施

した細工である。

ツバサは前に「ネビュラ・グレイに飲み込まれたらそばにいる誰かを殺めてしまうかもしれない」と言った。それが現実になりかけた。

……もう少しで、ソラを殺してしまう所だったのだ。少なくとも、彼女を傷付けてしまった。

それはツバサにとって、黒いモノからの万力や、後頭部の痛みなんて大した事が無いと言える程に苦しかった。

その後ソラは電波変換を解除。ツバサは木に寄り掛かるように座る。

なお、ツバサの『ソード』を紙一重でかわせたのはアイリスがその時だけ『操作』したからしい。『ショット』はスザクから弾の位置を教えてもらって撃ち落したそうだ。

ソラはツバサを木に寄り掛からせて、不安そうな顔で尋ねる。

「……っと、それで、何があったの？」

「……」

ツバサは口で答える代わりにお守りを取り出した。この際焼け焦げた事も一緒に謝る事にしたのである。

「ッ。これって前に私が渡したお守り……。だけど何でこんなに焼

け焦げてるの？」
「……ネビュラ・グレイとお守りの力がぶつかり合って、鞘となる外側の布地が焼け焦げたんだ。……ゴメン。粗末にしないって言ったのに……」
ソラは不安そうな顔のまま首を横に振った。
「良いよ。……中のお札は無事みたいだし、布地を変えれば良いかな？」
「あぁ」
鞘は変えが利く。お札は真っ白なままで損傷が無い。
「……もう一つ、ゴメン。……痛かっただろ？」
弾き損ねて命中したのが3発程度で、それもツバサが弱っている時だから威力が落ちていたとはいえ、それ相応の衝撃はあっただろう。
ソラの表情は少し曇り、『ショット』が当たった箇所に軽く手を置く。
「……あぁ、それね。……確かに痛かったけど、ビャッコと戦った時とか、その後のギャラクシーとテロッドとの戦いに比べたら平気。今回はそれ程でもないけど、あの時の戦闘はかなりハードだったからね」
「だけど――」
「ネビュラ・グレイ」
ソラはツバサの声を強めの口調で遮り、続けた。

「……ネビュラ・グレイのせいなんでしょ？　確かに攻撃をしてきたのはツバサだけど、元を辿ればネビュラ・グレイじゃん。……それと、今は少し寝た方が良いよ」

ツバサの瞼が少しずつ閉じていく。危うい精神状態の中で魔法を連発したのだ。体と精神に掛かる負担も大きい。

体力の限界。

ソラはそれを察したのだろう。そして彼女は優しげな笑みから明るい笑みに一転。イタズラっぽい笑みを浮かべる。

「そんで、目が覚めたらスバル君とウォーロックだけ異次元旅行に行った事への苦情を聞いてもらうよ♪　羨ましいったらありゃしない」

ウェーブロードでここに向かう道中、アイリスから聞いたのだろう。アイリスも冷静そうに見えて実際は焦っていて、話さなくても良い事まで話してしまったに違いない。

「……へっ。何だそりゃ……」

目を開けていたくとも体がそうさせない。疲労のピークを迎えたツバサは木に寄り掛かったまま眠りに付く。

ソラは眠りに付いたツバサを見て「ふっ」と安らかな笑みを浮か

べる。

「……寝顔は普通の男の子なのに、何で抱えているモノが不釣合いに大きいのかな～」

だが、その笑みの中には別の感情も渦巻いていた。

自分に出来る事が小さい事への無力感と、ツバサが未だに何かを隠している事がたまらなく不安で、それでいて寂しいという感覚だ。

ツバサは旅館でソラにネビュラ・グレイの事を話した。しかし、その時全てを話していたとは思えない。まだ何か続きがある。ソラはツバサの様子から何となくそれを察したのだが、聞かなかった。

聞けなかったのだ。昨日も今も、彼は疲れ切っている状態。そんな時に「話せ」など言えるわけが無い。余計に辛さを大きくするだけだ。

ソラは自分のハンターの中にいる存在に話しかけた。

「……セレナード。ネビュラ・グレイをツバサから抜き取る方法とかって無いの？」

それがツバサを苦しめる大本だろう。ならば、それさえ何とかすれば……。

ソラはそういった思いでセレナードに問う。

セレナードは静かに目を伏せ、躊躇うように答えた。

『……方法は無いでもないです。……それも、その時も近い』

「ホントッ！？　どうやって！？」

その時自分に出来る事は無いだろうか。
ソラはそういった期待のままにセレナードに問いかける。まぁ、表現的には『問い詰める』と言った方が、その時の彼女の押しの強さには合っている。

セレナードは答える代わりにソラから目を逸らし、ハンターの液晶画面の中から見える夜空を見上げた。

『……その時はその時です』

以下、セレナード心の中での呟き。

《……一番最初はツバサだけで抑えられていましたが、次はフォルテと共に。その次はＰＧＭの力も加えて……。そしてソラさん。……少しずつネビュラ・グレイを抑えるための要素が増えている。……それはつまり、それ程までにネビュラ・グレイの力が大きくなってきているという訳ですか……》

セレナードはその後何も話さなかった。
ただ、何かを願うように夜空を見つめているだけだ。

《……『その時』は、近いのかもしれませんね》

その後、ソラが３０分の葛藤を経て赤羽夫妻に電話。ツバサとソラはスカイタウンの研究所の仮眠室で一夜を明かす。もちろんツバサとソラは（　志出野の強い意思で　）別室だ。

第１２１話　苦痛（後書き）

さて……ぶっちゃけスバルとウォーロックを異次元に飛ばしてその間に侑子に願いを叶えてもらうまでが考えの内だったから、次はどんな話を書くかな……。

「いっそスバルとウォーロックをとっとと帰したらどうだ？　お前の考えてるラスト、色々と想像を裏切る事になるんだから。迷惑かけない内にとっとと進めてしまえ。そうすれば今後コラボする時向こうも書きやすいだろ」

う～ん。出来ればそうしたいね。オレとしても、進級（まだ確定ではないけど）して新学期が始まる前に最終回まで行きたいし。

「っていうか、前の話で侑子が最強の魔力を持つ～の件だって、次回作の事を念頭に入れて書いたんだろ？　このくらい大きく書いとかないと次回作で役が薄くなるって」

あわわっ。ネタバレ禁止！

「……大丈夫だろこのぐらい」

それでは次回もお楽しみに！

（……無理矢理まとめたな。作者）

第１２２話　帰還（前書き）

異世界に行ったスバル達が帰ってきます。

後半の一部（　アイリスの言葉　）を変えました。

活動報告にも書きましたが、クイックロッドさんの小説に出るのは祭合旅行編の後だそうです。そちらもお楽しみに！

……最初はスバルを飛ばすついでにツバサの願いを叶えてもらうって理由でお願いしたんですが、これは中々使えるかもしれませんね。くっくっく……。今回の話を書いてる途中で良い事を思いつきました。

日付的には、スバルが異世界に行ったのは正午頃で、帰って来たのは翌日の夕方です。

第１２２話　帰還

――――コダマタウン・展望台――――

時刻は夕暮れ。
星が見えるにはまだ早く、コダマタウンの展望台に人気の無い時間。

フォンッ……

地上数メートルの高さから雫（しずく）の様なモノが降りてくる。さながら、空間が実を落としたような感じだ。
地面に落ちた『空間の雫』は、花が開くように上部からその中を露にする。

「……ふぅ。どうやら着いた様だね」
『あぁ』

雫の中から現れたのはスバルとウォーロックだ。スバルの手には使用済みの魔道具（ツバサ作、次元移動ライター）が握られている。

「あ～う～」
「？」
『？』

スバルとウォーロックの下から変な声が聞こえる。若干嫌な予感がして下を見ると、緑髪の少女がうつ伏せに踏まれていた。

「わっ――――!!　センちゃんごめん!　全然気付かなかった!」

（……道理で地面が柔らかいと思った……）

スバルが慌ててセンを抱き起こすと、センはグルグルと白目を剥いていた。

『……コリャダメだな。完全に気絶してる』

「冷静に分析してないで誰か呼んでよウォーロック!」

スバルはセンの頬をペチペチと叩いて起きる様に促しながらウォーロックにツッコム。

「はっはっはー。何か楽しそうだな。どうだった?　異次元旅行は――ってどうした!?」

及び、ツバサが笑いながら登場して目の前の惨状に驚いている。

センが気絶してスバルが介抱してウォーロックが慌てふためくスバルに『落ち着け』と言っている状態だ。初めてこれを見たら【何があった!?】と混乱するだろう。

スバルは慌てた口調で状況説明。

「じ、実は僕がこっちに来た時にセンちゃんを踏んじゃったみたいで――」

『気絶したというわけです』

「「!?」」

『『??』』

ウォーロックとアイリスはスバルとツバサの行動に疑問符を浮かべる。
スバルとツバサが何も無い空間を驚いたように見つめている。
スバルとツバサは、センを見ている。
「えっ？　えっ？」
スバルは、気絶しているセンと目の前でピンピンしているセンを指差しながら交互に何度も2人のセンを見る。
対してツバサはため息。この様子だとセンが2人いる理由が分かったらしい。
答えはセンが自分で言った。それも、ものすごく自慢げで誇らしげな笑顔だ。
『ふふっ。どうにも、あれから私は有袋離脱が出来るようになったようです』
「「……」」
おめでとう、セン。答えの予想が出来ていたツバサも驚かすことに成功させた。
センはまたも漢字を間違えているのだ。正しくは『幽体離脱』。
……『有袋離脱』……親離れだろうか？

閑話休題（↑本題に戻るという意味）。

「で、何でセンがここに？」

「私はリハビリがてらの散歩ですが、それはこちらのセリフです。何故いきなりスバルさんが降って来たのですか？」

センは自分の体に戻った後、体の節を鳴らしながら問いかける。

彼女から見ればスバルが突然自分の上に現れたようなものだろうから、不思議に思うのも無理はない。

スバルとツバサは顔を合わせ、ツバサがため息をついて答える。

「はぁ。……セン」

「はい」

「秘密だ」

話しても意味が無い。

対するセンは顔をしかめた後、神妙な顔をして頷いた。

「……なるほど。……つまり、何だかんだで物事の本質を曖昧にして、問題をうやむやにする政治家さんと同じやり方ですね」

「人聞きの悪い事言うな！」

センのリアルな一撃にツバサが即座にツッコミ、スバルはグサッと心に刺さったらしく視線が下を向く。

「別に良いではありませんか。減る物でもないでしょう」

「……」

それを言うセンの顔は、勝ち誇って優越感に浸っているような顔だ。秘密にされて不機嫌になったらしい。

隠し事に慣れていないスバルは早々にギブアップした。センに対して隠し事をするのに罪悪感を感じたらしい。

「実はツバサ君の力で違う世界に行ってたんだ。結構面白かったよ。……大変ではあったけどね」

色々騒動はあったが、それは何とかなった。彼が本当に大変だったのは、右も左も分からない見知らぬ場所だったという点だ。つまり、極度の不安である。

自分を異世界に飛ばしたのがツバサではなく自分に悪意を持っている人間なら、穏やかさに定評のあるスバルでもその人を殴っていたかもしれない。

「ほうほう。悪い物でも食べて頭が可哀想な人になりましたか？」

「……」

スバルの口が笑顔のまま引きつる。正直に話して病人扱いされた。

「冗談はさておき、なるほど。異世界ですか。それは珍しい体験をしましたね」

『あ？　セン、お前信じるの早いな』

ウォーロックの驚いたような声にセンは苦笑してみせる。

「あはは……。そりゃあ、つい最近まで幽霊だった私から見れば何が起きても驚きません」

「へぇ～。すごいね」

スバルの感心の言葉にセンは上機嫌で胸を張る。

「はい。第2のリーマンショックというべき事態が起きて世界大恐慌になっても驚きません」
「……それは流石に驚こうよ」

そしてそれが世界に与える影響を考えろ。どれだけの人が路頭に迷うことになる。っていうかこの小説で初めて時事ネタが来た。

「ところで、スバルさんとツバサさんは誰かに異世界の事を話しましたか？」
「えっ？　ツバサ君に禁じられて誰にも話してないけど？」

もし異世界旅行が登校日と重なっても良い様に、ツバサは前もって『言い訳』を用意していた。
【　ツバサが自分の気まぐれ旅行にスバルを強引に巻き込んだ　】というものだ。

「っていうかなんでそんな事を？」

スバルがセンの問いに答えて、ツバサが尋ね返す。
センは神妙な顔で、腕を組んで唸った。

「ふぅむ。事が事なので誰彼構わず話すわけにはいかない内容というのは分かりましたが、その中で話す人というのはよっぽど大事な人なんだろうと思いまして。お2人の大事な人を聞こうかと」

裏があった。この歳で他人の色恋沙汰を冷やかすというのを覚えたらしい。
スバルとツバサが精神的に距離を置くくらいドン引きしている事に気付いたセンは慌てて補足を加える。

「あぁ！　勘違いしないでくださいね。別に冷やかそうとか考えてるわけではありませんから」
「……じゃあ何で？」
スバルは「しょうがないなぁ」という思いを乗せながらため息をつく。
対するセンはスバルとツバサから目を逸らして恥ずかしそうに話し出した。
「いえ……その、私のために尽力してくれたお2人がどんな方を好きになられたのか気になりまして……。その人が良ければ同じ女性として学べる所があれば学ばせてもらおうかと……」
つまり、スバルとツバサが好きになる人だから素敵な人に違いない。自分もそんな人になりたいから、心の持ちようや言葉遣いなどを学ばせてもらおうというわけだ。
霊として何年も生きているといっても、肉体は小学3年が良い所。彼女が大人になるのはこれからだ。故に、立派で素敵な女性になりたいらしい。
それを聞いたスバルは（　せめて紹介だけでもするか　）と思っている時、ツバサが口を開いた。
「悪いスバル。ミソラに話した」
「えっ？」
ツバサは話して良い事と悪い事を弁えており、自分が話したくないと思った事は大抵隠すかはぐらかすの『秘密主義者』だ。その彼がミソラに話したという。
「悪い」と謝る彼は本当に申し訳無さそうだ。

「実はソラから、【　好きな人が自分の知らない所に行ったら絶対に心配するよ。せめてミソラちゃんには話してあげて　】って押し切られてな」
「へぇ～。それじゃあミソラちゃんは？」
スバルに話すなと言って置いて自分が話した事に本来なら怒るべきなのだろうが、スバルの中でそう言った気持ちは無かった。ツバサがソラの名を言った時、最初の頃に比べて親しみが多く含まれていたように感じたのだ。
よって、プラマイゼロである。
ミソラの場所を問われたツバサは親指で後ろを指差す。その方角にあるのは星河家だ。
「スバルの家で待ってる」
「そっか……」
待たれているのなら早く行った方が良いだろう。待っていてくれる人を安心させるために。
「ごめんツバサ君。僕一足先に帰るよ。ミソラちゃんを安心させてあげたいし」
「おう。道中気をつけてな。って言いたい所だけど、お土産」
ツバサが手を上に向けて要求してくる。対するスバルはギクッとした顔をして半歩彼から離れた。ウォーロックの手にはおろか、スバルの手にも酒が入っているであろう大きな袋は無かった。
「え、え～っと……未成年はお使いだろうと酒を買っちゃだめだっ

て……」

心底申し訳無さそうなスバルを見て、ツバサはため息を付く。

「……はぁ。……まぁ良いや。侑子さんのトゲトゲ愚痴聞くのはオレだし」

「ほんっとにゴメン！　……僕も一緒に愚痴を聞こうか？」

「いや、良いよ。スバルは早くミソラの所に行け。明日の準備もあるだろうしな」

「えっ？　明日って？」

「学校。何でも、社会科見学の一環でロボットを研究してる所に行くんだと。今日の午後に先生からメールが来た」

スバルが異世界に行ってから日付では1日経っている。今が夕方だから……。

Ｐｉ！

今そのメールが来たようだ。

スバルはそのメールを確認した後ツバサと向き合う。

「わかった。それじゃあツバサ君、また明日」

「あぁ」

帰路に付く途中、スバルは思い出したように振り返る。

「あ、その前に1つ聞いていいかな？」

「答えられる内容ならな」

「何でツバサ君は違う世界に行かないの？　他の世界の事が知りたかったら自分で行けば良いのに」

ついでを言えば、その方が向こうであった『大変な事』の助けにもなっただろう。

「ん～……。やる事があったからな。それに、次元全体に結界を張ってるとなると、色々制約が多くなる。例えば、その次元から出てはいけないとかな」

前者は羽根潰し。後者は術師のシガラミ、制約だ。なお、ツバサは口にしていないが別の理由もある。

（……向こうの世界にはギャラクシーが居るから、いくら目立たないように行動しても気付かれる恐れがある。それに、スバルが異世界に行く時にオレの魔法とは少し形式が違うが魔法の気配も感じた。……オレの魔力を感知されたらどんな厄介事になるか分からないからな）

チカラが強い事は良い事ばかりではない。むしろ悪い事を呼ぶ可能性がずっと大きい。

これは大抵の事に言える事だ。仕事でも上に行くほど責任が大きくなり、その国の持つ兵器が周りの国より強ければ周辺諸国の総リンチというのも考えられる。

バランスをとるには考えを巡らす事ももちろん、自重する事も必要だ。

「ほぅ。ではツバサさんは、次元の引きこもり君なんですね♪」

「……セン、意味的に合ってる上にスケールが大きくて少しカッコ

いいとは思うが、かなりイラッと来る呼び名だぞ？」
「いえいえ、存外お似合いの名称なのでは？　……確か、１００年以上表舞台に出ず、引きこもっていたりサボり旅行を満喫していたんですよね？」
「ッ！！？　な、何でそれを！！？」
　ＴＨＥ・ツバサの監視者ライフをずばりと言い当てたセン。彼女はメガネを押し上げる仕草をして、穏やかな口調で言った。
「何でもは知らないわよ。知ってる事だけ」
　それを聞いたツバサはズッコケ、起き上がりながら怒涛のツッコミを見せる。おまけを言えば、動くアホ毛が立っていた。
「どうして西尾維新先生著、『化物語』に登場するメインキャラクターである所の、全国模試は１位。成績は常にトップで、美術や体育の類も満点。落としたのは穴埋め問題１問のみという偉業を軽々と成し遂げるメガネ委員長の言葉を引用する！？　……まさか、今までのお前の件ってこのためだったの！！？」
　ツバサはこの間ノンストップでツッコミ続ける。いつ息継ぎしているのか疑問なくらいだ。
「ええ！　もちろんです！　話にオチが無かったら面白くないでしょう」
『……っていうか、何でツバサの事知ってんだ？』
　ウォーロックの質問にセンは「チッチッチ」と人差し指を振ってみせる。

「企業秘密です。っと、そろそろ晩ご飯の時間ですね。それでは私はこれにて。お2人の彼女さんの事はまたの機会に紹介してください」
「あ、うん。気をつけてね」

センはスバルの言葉にニッコリと嬉しそうな笑みを見せてから、お辞儀をして去って行った。
そんなセンを見送った後、スバルはツバサと向き合う

「……それじゃあ、僕もそろそろ行くよ」
「おう。……あ～これ、渡すの忘れてた」
「？　鏡？　……あ、そっか。侑子さんとの通信用の」
「そう。アヤカシ関係で困った事があればそこにアドバイスを求めろ。……オレがいっつもお前らの近くに居るとは限らないからな。……ほら、しょっちゅうＷＡＸＡを飛び出てぶらついてるし」

その事はスバルも聞いた事がある。なんでも、ツバサは時々ＷＡＸＡからいなくなるらしい。暁や長官の頭痛の種だそうだ。
鏡を受け取ったスバルは苦笑交じりで頷く。

「分かった。それじゃあまた明日」
「あぁ」

そうしてスバルは展望台の階段を降りていく。
スバルが視界から消えた後、ツバサのハンターが鳴った。

Ｐｉ！

『ツバサ、ゲイルさんからメール』
「ん。……ッ！　アメロッパ、アジーナ、チョイナ……他にも様々な国がアメロッパ大統領の意見に対し、妄信的に賛同し始めている」
ツバサが読み上げた内容にアイリスが疑問と共に呟く。
『それって……』
「……おおかた、飛王・リードのチカラでローグを国と国の間を瞬時に移動させ、後は飛王・リードの暗示による洗脳でローグ同様自分の手駒にって所か」
『魔法でそんな事まで出来るの？』
「人を移動させること自体は他の次元経由で飛ばせば問題は無い。……むしろ驚きなのは、オレに気づかれずに飛王・リードがそんな事をやってのけた事だな。……これは、いつまでスバル達のそばに居られるか分からないな」
苦笑交じりで肩を竦ませたツバサにアイリスは俯きながら提案する。
『……戻る事だって出来るわ。今からでも計画を止めて――』
何度目になるか分からないアイリスの言葉。ツバサもまた、考えは変わらない。
彼女の言葉を自身の言葉で遮る。
「始めたからには終わらせるさ。そこは譲らない」
『……ソラさんやスバルさん……あなたを知っていてくれる人が大事じゃないの？』
「……だからこそだよ」

『？』

ツバサの最後の言葉が分からなかったらしく、アイリスが首を傾げる。

ツバサはその場に満ちていた陰気を祓う様に「ふっ」と明るい笑みを浮かべた。

「さ～てと。オレ達も帰るか。侑子さんから愚痴を聞かないといけないし」

『……そういえば、午前中にソラさんからも愚痴られてたわね。スバルさんとウォーロックだけ異世界に飛ばしたって事で』

「……笑いながら言うなよアイリス」

確かに、ツバサは今日他人に愚痴られてばっかりだ。ソラはいつの間にやら旅館の愚痴に変わってるし、侑子は侑子で刺々しい愚痴だ。

「……ぶっちゃけ気が滅入るが――」

『嫌な事は早く終わらせたいから帰ろう』

ツバサの言葉の続きをアイリスにドンピシャで当てられ、ツバサは可笑しそうな笑みを浮かべる。

「……覚えられたか」

『ふふっ。……ツバサ』

「ん？」

アイリスも笑っていたが、途中からその笑みを遠のかせる。

『……今回ははぐらかされてあげるけど、私はあなたの願いを完全

には叶えさせない。……その事は忘れないで』
「……宣戦布告かよ」
ツバサはほんの少しだけ笑いながら率直な感想を言う。そして、彼女の言葉を受け取った。
「……何を考えてるかは分からんが、肝に銘じておく」
『……覚悟してね』
「ははっ。恐いなぁ」
『……笑いながら言っても説得力が無い』
夕暮れに包まれる展望台から最後の影が去って行く。

第１２２話　帰還（後書き）

補足として、スバルは異世界に行っていたためにメールが届きませんでした。

さて、次回からやっともとのシナリオに戻ります。最初は本当にシンプルなストーリーを考えてましたからね。

それでは次回もお楽しみに！

第１２３話　強まる力（前書き）

お待たせしました！

感想の返信で書いたスバルを異世界に送った『もう１つの意味』ですが、伏線とか言っときながらほとんどズバリで出ます。

第１２３話　強まる力

コダマ小学校６－Ａはバスに２時間揺られ、とある研究所に辿り着いた。

２２ＸＸ年。今の時代、実体化できるウィザードの存在でロボット工学自体の存続が危うくなってきた。人工知能という点では２００年前のネットナビで確立し、使い勝手で言えば現代のウィザードの方が上である。

「にも関わらず、今もまだ残っている研究所がここというわけです」

研究所の正面ゲート（　駐車所から研究所までは、ゲートを介して多少歩く必要がある　）に着いて、案内の人が来るまでの間、スバルを含むクラスの一同はキザマロの説明を聞いていた。

そして、もう１人熱くなる人が居た。

「それに、宇宙で活動するロボットの開発もしているんだよね」

スバルだ。

昨日メールにあった研究所を少し調べたのだが、その研究対象の中には『宇宙で活動するロボット』もあったのである。スバルは生粋の宇宙好きなので、ここで彼が熱くならなかったらそれはもう彼じゃない。

キザマロとスバル好奇心で満ちた目が合う。それと同時に、先程まで２人の知識に感心していたクラスメイト達は２人を遠巻きにした。【　物知り＋物知り＝専門用語の応酬　】という事で、迂闊に

立ち入れば2人の熱い弁論に巻き込まれるのだ。
普段なら次の授業で先生が来るまで続くのだが、今回はすぐに終わった。

「中々物知りだな、2人とも」

風邪を引いているようなイガイガした声がスバルとキザマロの弁論を遮る。
スバルとキザマロはもちろん、クラスメイト達もそちらを向く。

「初めまして。今日君達を案内する研究所の所長を務めている銅生（こうき）だ。そしてこっちが――」
「補佐の藍川（あいかわ）　龍（りゅう）です。……よろしくね、皆」

最初に自己紹介したのはイガイガ声の人。この研究所の所長、つまり研究所を丸々管理している現場責任者だ。
銅生に促されて挨拶したのは、見た目20代半ばの男性。

なお、共通する部分としてどちらも髪が短い。前髪は眉が少し出る程度。後ろは首の中頃だ。機械に関わるエンジニアとして、髪が長いのは良くない。

銅生は銅という名の通りの鈍い茶髪で、歳は大体40代前半だ。スーツ姿なのは、普段は主に書類の整理をしている証だろう。責任者は書類の整理などのデスクワークも仕事なのだ。

龍の方は深い海のようなマリンブルーの青髪。目は、生命溢れる豊かな海のような温かさを持つ、淡い緑だ。研究員らしく白衣を着ている。

落ち着いた雰囲気で、子供達に挨拶する時も視点の高さを合わせてくれた。

大人が子供を見る場合、必然的に目線は子供から見て見下ろされる形となる。しかし、実際には見下ろされるよりも同じ目線に立ってもらった方が、子供に安心感を与えさせる。

カウンセリングで言うと、自分の立場ではなく相手の立場になって考えるのと似ている。

「おほんっ。……龍くん、キミも大人なんだから少しは自覚を――」

鋼生の方はお堅いタイプだったらしい。子供達の事を思うのは良いが大人として距離を取るべきだと考えているのだろう。

目線を合わせた龍に対し、咳払いと注意をした。

龍も龍で嫌な顔はせず、鋼生に見えないように子供達にウインクをしながら顔を上げる。

「はい。すみません」

「……全く。……それじゃあこれから中に入るからはぐれないように」

その後、一行は研究所の方に歩き出す。

鋼生が先頭。その少し後ろを龍が歩き、その次は生徒達。殿（しんがり）は育田先生だ。

歩きながら、スバルはルナに話しかける。

「ねぇ、委員長。あの龍さんって、どこかツカサ君に似てない？穏やかな所とか」

「……確かにそうかもしれないわね。……でも、強いて言えば昔のツカサ君の方ね」

ルナは改めて龍を見てからその様な見解を言う。

「？　昔？」

「ほら、昔色々騒動を起こした事あったじゃない。……あの頃のツカサ君の方が似ているわ」

「……昔のツカサ君……」

ルナが言う『騒動』とは、かつてツカサがジェミニ・スパークとなって人間達を不仲にさせた時だ。あの頃のツカサは自分を捨てた両親を憎み、１人でも立派に生きていこうと思っている反面、両親への憎しみも忘れられずにいた。

自分のマイナス感情を隠して思いを吐き出す事無く生きている。しかし、吹っ切れてもいない。……穏やかに周りと接しつつ、憎しみを捨てられない。……そういう頃のツカサである。

そしてツカサは、憎しみと寂しさから生まれたヒカルと共にジェミニ・スパークとなって復讐を始めた。

友情……。
家族……。
信頼……。

……そういったありとあらゆる『絆』を……『絆』という欺瞞（ぎまん）を、完膚なきまでに打ち壊すために。

それをスバルに阻止された後、ツカサはヒカルを封じる旅に出た。
その途中、ナンスカという国でスバルに電波変換の特訓に付き合ってもらってヒカルをある程度自分の意思で封じられるようになり、うらかわの旅館でスバルと再会したという訳である。

スバルがそんな事を思い出しながらもう一度龍の方を見た時、囁くような声が聞こえた。

【誰か……・りの・・の僕を……・めて・れ……】
「ッ！？」

その声に慌てて周りを見るが、誰もその様な声を出したような気配は無い。それに何より、その声はさっき聞いたばかりだ。早々忘れる訳が無い。

（……今の声……龍……さん？）
「どうしたのスバル君？」
「何か聞こえたか？」

隣を歩いていたミソラとすぐ後ろを歩いていたツバサが話しかけてくる。周りの生徒達もスバルの挙動が気にはなったようだが深くまでは聞いてこなかった。
クラスメイトの意識が再び前に向いた時、スバルは2人に話す。
ミソラにはツバサが先日話したそうなので問題は無いだろう。

「うん。……良く聞こえなかったんだけど、確かに龍さんの声だった」

ツバサが自分の顎に手を当てて考え込み、ミソラは改めて尋ねる。

「ねぇねぇ。疑ってるわけじゃないんだけど、魔法が実在して、それもスバル君も目覚めちゃったってホントなの？」

やはり聞いただけでは十分な信憑性は得られないだろう。

ツバサは思考を中断してポケットに手を入れ、バスの中で食べていたお菓子の包み紙を取り出す。直径１ｃｍくらいのチョコが入っていたビニールだ。

「……百聞は一見に如かず。直接見てもらった方が良いか」

ツバサがそう言った矢先、彼の手の中のビニールは宙に浮かんで踊りだす。微弱な風で舞っているのだ。

「わぁっ」

「……ツバサ君、これは出しても大丈夫なヤツなの？」

ミソラは周りに聞こえないように気をつけながら感嘆の声をあげ、スバルは少し心配そうに話しかける。その魔法が彼の張っているという結界に影響を与えないかを案じているのだ。

ツバサは指先を動かす事で風を調整。包み紙が落ちないようにしながらその質問に答える。

「この位なら大丈夫。……ランクは高い方だけど、出力はほとんど抑えてるし」

「ふぅ～ん。……んっ？」

「ん？」

突然疑問の声を立てたスバルにツバサも思わず疑問の声を返してしまう。

「……どうした？　スバル」

再度尋ねたツバサに対し、スバルは瞬きを1回した後首を傾げながら答える。

「うん……。何でもない……と思う……」

「？　ハッキリしねぇな」

「ごめん」

口で謝っても、スバルの中では疑問が満ちていた。

（……さっき、ツバサ君の胸の辺りに黒い靄（もや）みたいのが見えたけど、瞬きをしたら消えちゃった。……一体何なんだろう……）

その靄は、もう見えなくなってしまっている。尋ねようとは思ったが、その前にツバサが思い出したように話しかけてきた。

「あ、そうそう。スバルがさっき聞いたって言う龍さんの声の事だけどな、もしかしたら、異世界に行った事でお前の力が強まったのかもしれない」

「えっ？　あの……日付的には今から５０年後の世界？」

残念ながら、以前共闘したベガ達には出会えなかった。

「そう。……どうもあの世界にも魔法ってのがあるみたいだからな。それに影響を受けて、【　感じ取る力　】が強まったんだろう。直

接関わってなくても、その世界にその存在があるってだけで力の目覚めを促す」

補足を加えれば、あの世界ではこっちの世界より魔法が多く発動しているようだ。裏社会では『武器』として横行している。

単純に、世界に満ちている魔法の密度の違いだ。それによって、スバルの力の成長が促されたのだ。

「……それじゃあ、あれは龍さんの本心の声……」

「だと思う」

何を言っていたのか。

スバルがその事を思い出そうと俯いて歩き出した時、ちょうど先生から全体に声が掛かる。

「着いたぞー。ほら、話してたりどっか向いてないで前を見なさい」

話している間に、スバル達は研究所の前に着いたようだ。

生徒達の前には何人かの研究員が立っている。ちょうど班の数と同じ事からして、班ごとに分かれて見学するようだ。

「それじゃあ、それぞれ今日担当してくれる研究員の方に挨拶をして、見学するように」

「「「はーい」」」

育田はそう言いながら生徒に班分けの紙を渡す。育田の声に生徒が応え、それぞれ紙に従って分かれていった。

委員長トリオとジャックは別の班。スバルとミソラ、ツバサは一緒の班だ。
おそらく、ジャックとツバサを一緒にするとケンカをして迷惑をかけそうだからという先生の思惑だろう。
そしてスバル達の担当は……。
「あれっ？　さっきの物知りの子か。よろしくね」
藍川　龍だった。

第１２３話　強まる力（後書き）

スバルが見たツバサの黒いもやですが、明言しなくとも察しは付きますよね？　そう、あの厄介な『闇』です。

なお、機械技術の事ですが、リアルウェーブによってほとんどの物を作れるのなら機械技術よりもそっちの方が普及しやすいのではないかという考えからです。技術面に関しては私情を挟んでいません。

リアルウェーブだったらプログラムのチェックと修正だけですからね。手間も少ないでしょう。それに、それ相応の技術力があるからその研究所が存続しているわけですしね。

それでは次回もお楽しみに！

第１２４話　温度差（前書き）

お待たせしました！

今回、委員長がゲンナリになります（笑）。

第１２４話　温度差

それぞれの班に分かれての見学。スバルがいる班を担当している藍川龍は、先程とは別人のようだ。

誤解の無い様に言っておくと、悪い変わり方ではない。例えるなら、最初に上司と共にいた時は静かな湖の水面のように落ち着いていて、今はというと……。

「それでこっちが救助に使われるロボット。足場の悪い場所を歩くために多脚型にしているんだ」

南海の生命力溢れる海だ。イメージとして、たくさんの小さな魚が群れを成して一斉に泳いでいるくらいのせわしなさだ。

好奇心の塊であるスバルでも話に加わる事ができないほどである。それでも少年の好奇心は止められない。何とか質問しようと隙を狙っている時、隣を歩いていたツバサが突いてきた。

「……スバル、龍さんの声は聞こえるか？」

「えっ？　……そういえば聞こえないね」

ツバサはスバルの答えを聞いてから龍を見る。そして、納得したように小さく頷いた。

「ふぅ～ん。……なるほどね」

「何か分かったの？」

「……少しだけな」

詳細を聞こうと思ったが、その前に龍がスバル達に話しかける。

「あ、ゴメン。つい一方的に話しちゃったね。何か質問は――って、時間も時間だし、お昼ご飯を食べながら質問に答えるよ。それで良いかな？」
「あ、はい。構いません」
スバルの言葉にミソラもツバサも頷く。

――――食堂――――

ただ今の時間は１２：３０。龍の言う通り他の班も幾らか来ていたようだ。その中にルナ達の班もあったので合流する。及び、スバルとキザマロのロボット談義が始まったため、ルナやゴンタ、他の皆さんは２人を少し遠巻きにした。
「……本当にあの２人の好奇心はすごいね」
龍の感心の声にルナがため息交じりで応じる。
「本当、何であそこまで熱くなれるのかしら」
彼女の方も色々大変だったようだ。おおかた、キザマロは技術面で熱くなり、ゴンタはその辺の物を勝手に障ろうとしたりという事態があったと思われる。
ルナとしてはポロッと零した言葉なのだが、それを龍は聞き逃さなかった。
「何であそこまで熱くなれるのかって？　ルナちゃん、それじゃあ

十分に理解したとは言えないね」

龍にスイッチが入ってしまった。後悔してももう遅い。

「良いかい？　例えば二足歩行ロボットは早く走ろうとしたら車両型に負ける。足場の悪い所を行こうとすれば多脚型の方が安定感がある。何をやってもそれをするために生まれた専門のロボットには負けてしまう。だけど、それこそが長所でもあるんだ。何をやっても負けるという事は、何でも出来るという事。家事だろうが掃除だろうが、人間に出来る事ならそのロボットにも出来る様になるって事なんだよ。すごいと思わないかい？」

「え……えぇ。そうですわね。……あの――」

「だろう！？　それに、ロボットの研究はそれだけに収まらないんだ。例えば立った状態からネジを回すみたいに足を回すと、太腿（ふともも）から脹脛（ふくらはぎ）、足全部がその動きに付いて来る。でも、イスに座った状態から同じ様に動かそうとすると、膝（ひざ）から下しかその動きに付いて来なくなるんだ。人間型ロボットを研究するという事は、それはつまり我々自身を研究する事でもあるんだよ」

「あの……ですから――」

「そしてさっきも言った通り、二足歩行ロボットの奥深さはこれからでね。人間の動きを知るという事は、それはそのまま義手の技術にも応用出来るという事なんだ」

「分かりましたからもう――」

「そうか！　僕達の関節がどういう条件の下でどういう風に動くかのデータを集めれば、それはそのまま義手の動きをより人間に近づけるための過程になるというわけですね！？」

龍だけでも止められないのに、さらにここにスバルも加わった。
それは当然キザマロも同じという事で、ルナの言葉は意味を成さなくなった。

「その通り！　人間型ロボットの研究はそれだけの分野に縛られず、多彩な可能性を持っているんだ！！」
「「おぉ～！」」

スバルとキザマロの感嘆の声。ようやく話が終わると思いきや……。

「言っとくけど、魅力的なのは二足歩行型だけじゃないぜ」

話を聞いていた他の班の担当の研究員も加わってきた。彼の専門は多脚型らしい。彼の他にも、話したい輩（やから）（　技術の事を話す時、子供のような顔をして話す科学者　）がドンドン集まってきた。

スバルとキザマロは好奇心旺盛な性格から目を輝かせて話を聞き、科学者達もまるで自分の夢を語る子供の様に無邪気な目をしている。
そしてルナは両手で頭を押さえてため息を付いた。

それから約３０分。ようやく熱く語っていた彼らも満足したようで、それぞれの班に戻っていく。
スバル達の状況。

スバル、キザマロ：自分の知的好奇心を満たされて大満足。
ツバサ、ジャック、ゴンタ：のほほん。（ツバサとジャックは話

を理解できて、ゴンタは逆に話が理解出来なかったからダメージが少ない）

他：満身創痍（まんしんそうい）。（過度に色々な方向から話を聞いたためと思われる）

龍は苦笑しながらスバル達に詫びる。

「あはは……ごめんね。熱くなるとつい見境が無くなっちゃうから……」

「い、いえ……大丈夫です……。はい……」

ルナの言葉は全く説得力が無い。グッタリしている状態で大丈夫と言われても、それを信じろという方が無理だ。

龍はルナに気遣いの言葉をかけようとした様だが、不意に言葉を止める。スバルやミソラなどの戦う者には察する事が出来るだろうが、彼の意識は食堂においてあるテレビに向かっている。

『この殺傷事件の加害者は過去に事件の被害者からイジメを受けており、その復讐だと供述しています』

番組のコメンテーターがそれについて『いくら過去にイジメを受けたからといって殺しは良くない』といったコメントを言っている時、ジャックがボソッと呟いた。

「……最近ファイブ・エレメントの起こす事件が多いけど、こういう人間が起こす事件もかなり多いみたいだな」

スバルの意識もニュースの方に向き、顔をしかめる。

「……でも、いくら何でも殺すなんて――」

「自業自得だよ」
「えっ……？」

スバルだけでなく、ミソラも、ルナも、ジャックも固まる。その、龍の突き放したような言葉に。

「……他者を傷つける事は自分のエゴ、つまり価値観の相違による攻撃精神を相手に押し付けるという事。それに対しての復讐もまた自分のエゴ、この場合やられた事への怒りや憎しみ。それらを押し付けるという事。だから、やった順番はどうあれ相手を傷つけた時点で復讐される可能性を背負わなければならない。

そして、それに対して文句は言えない。自分がやったのと近い事。自分のエゴを押し付けるという事を返されただけだから。……やった側が「遊びのつもりでやった」と言っても、復讐するかどうかを望むのはやられた側が選ぶ事。……やった側がいくら言い訳しても、大して意味はないよ。だから、殺された側の自業自得」

それを語る龍の目は、酷く冷たかった。静かで落ち着いた湖でもなく、豊かな南国の海でもなく、暗くて、寒くて、凍て付く氷のようだった。

スバル達は何も言えなかった。龍の陰気に圧倒されたのだ。

そして帰る時、龍はスバル達にこう言った。

「さっき食堂でした話だけどね、アレ、忘れてくれて良いよ。……ごめんね。暗い話をしちゃって。……僕みたいには、ならないでね」

――――バスの中での会話――――

「……ツバサ君」
「ん？」

スバルは後ろの席のツバサに話しかける。なお、ツバサの隣には偶然誰も座っていない。

「……僕が聞いた龍さんの声、さっきの龍さんの態度に関係あるのかな？」
「……多分な」
「じゃあ、今度詳しく話を聞いて――」
「今回は真っ向から言っても話してもらえないよ」

スバルはその人の本当の想いが聞ける。研究所に来た時に聞こえた龍の声がそれだ。

本当の想いとは、その人が心の奥底で望んでいる事。表に出している態度とは別のモノだ。出来る事なら龍を救いたいと思ったスバルの言葉は、ツバサの否定によって遮られた。

「何で？」
「……あの人は、自分の望みを殺して自分を偽ってる。その原因は、自分が昔イジメに遭ったからだろうな」
「何でそんな事が分かるの？」

スバルの隣に座っていたミソラがツバサに問う。一方のスバルはツバサの答えに納得していた。ニュースを見ている時の彼の顔。そしてその後に語った自論から見て、そう考えるのが妥当だろう。

ツバサの意見もそれと同じで、彼はスバルの問いに答えた後に続きを言った。

「……自分を偽っていて、それが正しい自分だと思っている人間ってのは、その考え方に固執しやすい。……正攻法で近付いても、話してはくれないだろうな」

「……それじゃあどうすれば……」

スバルはため息と共に項垂れ、ミソラはスバルを気遣ってツバサに尋ねた。

「……龍さんを助ける方法は無いの？」

「……一応ある」

ツバサの言葉にスバルは顔を上げて体ごと後ろを向く。

「えっ。どんな？」

「……秘密。……それとスバル」

「？　なに？」

「後ろ」

彼が意地悪な顔をした。それはつまり、良くない事……。

「スバルく～ん？　バスの中で立つと危ないって分からないのかしら～？？？」

穏やかなニッコリ笑顔を浮かべて怒っているルナがいた。

それからスバルはしばらくルナに怒られる事となる。なお、ツバサも笑っていたので同罪。彼もお説教のターゲットになった。

――コダマ小学校前――

「う～～～。疲れた～～～～。それじゃあツバサ君、また明日～～～」

「おぉ。じゃあな」

スバルはずっと怒られた事でゲンナリ。ツバサも疲れていた様だが表に出す事はなかった。

「……さてと――」

スバルやルナ、ゴンタやキザマロを見送ったツバサは自らの足を進める。その場所は……。

――展望台――

「……ああ、そうだ。お前に会ってもらいたい奴がいる。……えっ？　私が会っても大丈夫かって？　まぁ、オレの使いだと言えば大丈夫だろ」

ツバサは木に寄り掛かりながら誰かと話をしている。画像は無く、サウンドオンリー。いや、イヤホンをしているのだから、声すらも周りには聞こえないだろう。

「用件？　お前のパートナーを見つけたと伝えてくれ。名前は藍川龍。注意して欲しいのは、――――――という事。……分かってると思うが、アイツにはオレの名を伏せろよ。……あぁ。そろそろだ。お前にもそろそろ役をお願いする事になる。その時は頼んだぞ。……ハイド」

ツバサは電話を切り、丘の下のコダマ小学校を見る。（　展望台は高地にあり、コダマ小学校を眺める事が出来る　）

「……飛王・リードの侵攻具合から見て、この国に来るのは3日後。……そしてオレが今の場所に居られるのも、それまでだな」

ツバサの呟きにアイリスは何も言わない。

彼女が侑子に願った『願い』が効果を発揮するのは、ツバサの願いが叶った後だ。

第１２４話　温度差（後書き）

さてさて、そろそろおちゃらけてはいられませんね。

第１２５話　イザナイ（前書き）

お待たせしました！　いらん補足だと思いますが念のために。サブタイトルの『イザナイ』ですが、漢字に直すと『誘い』です。活動報告にも書きましたが、今回は暗いです。

第125話　イザナイ

――――スバル達の社会科見学の翌日。時間は夜――――

カタカタカタカタ……

研究所、藍川の部屋に響くのはコンピューターのキーを打つ音。
ただ今寝る間も惜しんで自分の研究を進めている最中だ。

コンコンコンッ

「はーい」

部屋をノックする音に藍川が答える。

「失礼するよ」
「ッ！　所長！」

所長の鋼生が来たため慌てて作業を中断して向かい合う。

「藍川、今日はキミに話があってね」
「話、ですか？」
「あぁ。……アメロッパから電波体殲滅用兵器（でんぱたいせんめつようへいき）の注文が入った」
「ッ！！　何ですって！？　何でそんな事が……」
「……最近はぐれウィザードの起こす事件が過激化している。それ

に対して、ウィザードの集団粛清がアメロッパを中心に計画されているらしい」

鋼生はここでため息を付き、不本意そうに言った。

「だが、私はこれをチャンスと捉える」

「？　何故です？」

「近年の電波技術の向上。それにより電波の物質化も可能になった。しかし、それによって現実で働くロボットの数も激減。我が研究所は様々な分野のロボットを総合的に扱うという方法で生き残りを賭け、そして打ち勝った」

「……それが現状ですよね」

そしてその現状は、少しずつ悪い方に進んでいる。徐々に受注数が少なくなってきたのだ。日進月歩とも言えるリアルウェーブ技術の向上により、【　機械である必要性　】が無くなって来たのが原因だ。

「あぁ。だが、もしも何かのきっかけでウィザードが廃棄処分になったらどうなる？　そのきっかけが、今だとしたら」

「ッ！　まさかっ、そのアメロッパの注文でっ！？」

「そう。ウィザードがいなくなれば受注も増える。藍川には引き続き私の補佐と、その兵器の開発主任をしてもらいたい」

鋼生には家庭がある。このままではこの研究所が潰れて家族を養えなくなる。故に、彼はアメロッパの注文を優先する事にしたらしい。

藍川はそれを理解した後ハッキリと言ってのけた。

「お断りします。昨日来た子供達を見て分かるでしょう。子供達に

とって、ウィザードとは無くてはならない友人になっています。……彼らからその友人を奪うなんて、僕には出来ない」

藍川の答えに鋼生はため息を付く。

「はぁ。……藍川、これはこの研究所全体の命運が掛かっているんだ。納得してくれ」

「……」

押し黙る藍川に対し、鋼生は再度ため息を付いて立ち上がる。

「……もし明日までに頷かなければ、キミをクビにする」

「ッ！　そんなっ！」

藍川の叫びを背中で聞きながら鋼生はドアを開ける。

「代わりの研究員はいくらでもいる。……キミの居場所がここしかない事も知っている。……だが、綺麗事では世の中はやっていけない」

バタンッ

非情に閉まるドアの音。藍川は崩れる様に自分のイスに座った。

「……僕の居場所……でも、それじゃあ子供達が……」

ピリリリ～ン！

藍川のパソコンにメールが届く。
藍川は自分の葛藤をため息と共に中断し、メールのチェックをする。

「差出人無し。……迷惑メールの類か」

職業柄、こういった所に差出人不明のメールが来る事は少なくない。それは大抵ウイルス込みのメールなので即刻削除する決まりだ。
削除作業に取り掛かる時、パソコンの画面が強い光を放つ。

「ッ！？　うわっ！」
『……藍川　龍だな？』

光の中から現れたのは青い電波体。龍のような細長い体をしている。

「……キミは何者だい？」
『セイリュウだ。……なるほど。確かに波長がぴったりだ。あのいけ好かないナルシスト笑いの言葉も、少しは信憑性があったという事か。……今度会った時は詫びねばならんな……』
「……」

藍川としては、セイリュウが勝手に1人で話しているので訳が分からないが、セイリュウというのはエーテルの作ったウィザードの一角だったはずだ。
藍川は警戒心を込めてセイリュウを睨む。

「……それで、そのセイリュウが僕に何の用だい？　言っとくけど、

僕は別に人間に対して敵愾心（てきがいしん）なんて――」
『本当か？』
「ッ！？」

セイリュウの静かな声。しかし、それはまるで藍川の心を抉る様に食い込んだ。
そして藍川には、その言葉に対する心当たりがある。

「……キミは僕の何を知ってるんだ」
『何も知らん。……だが、お前の血流の動きが早くなっている。……過去に何かあったな？』
「ッ！！」

心臓は全身に血液を送るポンプの役割を果たしている。そして、運動の後や興奮状態になると心臓が激しく脈打つのはそれだけ心臓が強く動き、血流が早まっているという事。

セイリュウは水を司る者。そして血液も液体。
故に、人の血流の流れ方を見て相手の心を見抜く事も可能というわけだ。

『話せ。戦闘中にそれが障害になっても困る』

有無を言わせない言葉。
藍川はイスに深く座り、静かに話し出した。

「……昔、イジメを受けたんだ」
『有り体だな』

セイリュウの容赦の無い言葉に藍川は項垂れて失笑する。

「ふふっ……。そうだね。……昔友達だった子に裏切られたり、朝学校に来たら机の上やロッカーの中にゴミが置かれていたり、陰口を言われたり、トイレで後ろから蹴られたりと、イジメ自体も有り体だ。……でも、規模が有り体じゃなかった」

『クラス全体か？』

セイリュウの問いに藍川は首を横に振った。

「学年規模。その中に、話してくれる人はいなかった」

『？　話してくれる人？　味方ではなくてか？』

「味方っていうのはその人が困っている時に手を差し伸べる人だろ？　そんなの1人も居なかった。……まして、話しかけてくれる人もいなかった。……イジメを受けている人に話しかけたら自分までイジメられるに決まっている。だから――」

『お前に話しかける人間がいなかったというわけか』

「そう。……イジメる者と、それを見てみぬ振りする者。……生徒には、学年という規模で見てもそういう人間しかいなかった」

実際の所、イジメが起きている事に気付いていても見てみぬ振りというのは良くある事だ。やられている側と仲良くしたら自分までやられる。そうならないために、見て見ぬ振りをしたり、自ら進んで相手を傷付ける。

また、『イジメ』と聞くと子供だけの事に聞こえるが、その内容を見てみると立派な犯罪である場合が多い。

相手を殴ったり蹴ったら『暴行罪』。

その結果死なせてしまったら『傷害致死』。

相手の持ち物を壊したり相手の体育着などを破いたら『器物破損』。
陰口を言って相手がそれを重度に気にして傷付いたなら『名誉毀損』。

上記のほとんどを聞いた事があるはずだ。……『イジメ』という子供っぽいフレーズのオブラートで身を包み、これだけの犯罪が横行している。

セイリュウは藍川が接してきた生徒達の話を聞いた後静かな口調で問いかける。

『……教師に相談はしなかったのか？』
「もちろんした。……けど、やたらと一学年のクラスが多かったせいで名前が分からず、【名前が分からないんじゃ動けない】としか言わなかったよ」
『ならば調べるくらい――』
「もちろん調べたさ。集合写真とその並びからその人の名前を割り出してね。そしたら、【分かった分かった。何とかするから】という言葉が返ってきた」
『それで？』
「……」

セイリュウの問いに藍川は黙るだけ。答えなんて決まりきっているだろうという顔だ。

『……まさかっ、そのまま――』
「そう。何もしなかった。口先だけで、何もしてくれなかったんだ。……これで半分」

『半分？　まだあるのか。……それよりも、私に対してやけに自然と話すようになったな』
「僕も驚いたよ。……今まで生徒の事だけを話しても、【アイツはそういう苦しい目に遭ったわけが無い】と決め付けられてウソツキ扱いされてきたからね」
『……残りの１つは何だ？　ここまで聞いたんだ最後まで聞いてやる』

セイリュウとしても、若干の興味があった。人間がどこまで『遊び』という認識で相手を傷付けられるのか。
しかし、藍川としてはセイリュウが話を聞いてくれるだけで少しだけ嬉しく思えたようだ。生徒と教師から裏切られたなど、早々言える話題ではない。今までずっと自分の中に封じてきたのだろう。
……どうせ言っても、信じて貰えないだろうから。

「……ありがとう、セイリュウ。……セイリュウ、僕の家族にイジメの事を相談した時、家族は何をしたと思う？」
『……今のお前の状態から考えて、無理矢理学校に行かされたという所か』

セイリュウにとってほとんど勘だ。当たるとは微塵も思っていない。
しかし、藍川の答えは……。

「当たりだよ。……腕を引っ張られて強引に車に乗せられて学校に行くというのが何回もあった。……それでも学校に行くのが嫌で無理矢理休んだ時は【学校に行け。行かないなら勉強をしろ】しか言われなかった」
『……しかし、少しくらい相談にも応じたはず――』
「こっちも言うだけさ。……言うだけで、何もしない。……家族に

とって、僕よりも世間体の方が大事だったみたいだ……。現に、【お前が学校を休んだら近所から何て言われるか】とかぼやいてたよ。……最後は、時間だ」

『時間？　どれだけその環境に居たかという意味か？』

「そう。……6ヶ月だ。……いつも受けているような普通のイジメで、我慢の糸が切れてしまってね。親に必死に訴えた。【もう学校に行きたくない】と。そして、ようやく堂々と学校を休む事を許されたという訳だ。……それまではさっきも言った通り、家にも居場所は無かったからね。……これで当時の話は全部」

生徒にも、教師にも、家族にも味方がいない。

藍川は6ヶ月の間それを味わった。そして、心は壊れた。その環境から抜け出せても、それは直らなかったそうだ。その状況から抜け出すのが遅過ぎた。

どう他人と接すれば良いか。

どう話しかければ自然か。

そう言った事が分からなくなってしまったらしい。自分が物を作るのが好きな事も、自分の性格も、ずいぶん後に思い出したそうだ。【新たに得た】のではない。【思い出した】のだ。

『……なるほどな』

一通り聞き終わったセイリュウは長い息を吐き、藍川を正面から見据える。

『全くもって人間らしい。いや、生命体らしいと言うべきか』

「ッ？　それはどういう意味だい？」

藍川が腑に落ちないという顔をしたのに対し、セイリュウは薄く笑って答えた。

『……互いに傷付け合いながら生きているのが生命体としての本質という事だ』

「ッ！！　何をバカな……」

藍川の憤りをセイリュウは片手を前に出す事で制し、ひたすら冷静に語りかける。

『……今から私が言う事に心当たりは無いか？　……同じ物を奪い合い、相手を排除する。自分と相容れない相手を排除する』

「それは……」

人間がやってきた事だ。

宗教、物資、人種。理由はどうあれ、相手と違えば攻撃し合い。地震や津波等の災害が襲えば徒党を組んでスーパーから同じ商品を奪い合う。

そしてそれは人間だけではない。例えば、植物だ。

ツル状植物の中には太い木に巻き付いて上に向かい、日光を得た所で太い木を絞め殺す。……日光という同じモノを奪い合い、異種なる木を絞め殺す。

見方によっては、そう受け取る事もできるのだ。

セイリュウが言っているのは、生と死の狭間を生きる人間が普通にやっている事だ。

セイリュウは無感情かつ、無関心な態度で続ける。

『人間もまたそうだろう。知らないとは言わせないぞ。例えば姿形、持っている物、思っている事……太古から続けているだろう。同じなら奪い合い、違えば攻撃しあう。侵蝕は生命体共通の使命。……故に、命の本質と言っても良い。……ッ！？』

セイリュウが藍川にその言葉を言った時、頭の中で知らない声が響く。酷く懐かしく、優しく、穏やかな声だった。補足を加えれば男性の声である。

＜……セイリュウ。それは当たっている部分もあるが、人間はそれが全てじゃない＞

『ッ！？』《今の声は一体……。私は……昔誰かにこれと同じ事を言って、何かを言われた？　……ダメだ、思い出せん》

「？」

突然言葉を止めたセイリュウを藍川が不思議そうに見つめて来る。

《……今はコイツに私を受け入れさせる事が重要か……》

セイリュウは謎の声に対しての思考を停止。藍川に自分を受け入れさせる交渉を再開した。

『……もしも他人の幸せを願うなんて甘い事を思っているなら諦めろ』

「ッ！　それでも、人間はそれ一面じゃない！」

強く言い放った藍川に対し、セイリュウは藍川に悟られないようにため息を付いて、静かに語りかける。
攻め手を変えるのだ。

『……憎くは無いのか？』
「？」
『自分を傷つけた者。イジメを黙認した教師。自分を見捨てた家族……。憎くは無いのかと聞いている』
「……今更そんな事を思ったって――」
『恨めしくは無いのか？　お前が過去に囚われて苦しんで生きているのに、相手は笑顔で真っ当に生きている。……羨ましくは無いのか』
「……それは……」

生命体の本質を言っても応じないなら、心の奥底で望む願望。叶わない願い。そういった所に揺さぶりをかける。それがセイリュウの新たな攻め手だ。

『お前さえ良ければ、私の力を貸してやる。……世の中に復讐する気にならないか？』
「……だけど――」
『いい加減諦めろ。この世界にお前の求める世界は無い。……お前もさっき自分で言っただろう。家族だろうと口先だけで何もしない――』

セイリュウはここで言葉を止め、次の言葉を強く、断言的に言った。

『――……それが人間だ』
「……」

兵器開発に応じなければクビ。そうなれば、自分の居場所を失う。
そしてセイリュウが言った『家族だろうと口先だけ』という言葉は、藍川が常に自分に言い聞かせてきた事であり、同時に封じてきた考えだった。

長きに渡り封じてきたマイナスの考えは、セイリュウの言葉で心の深淵から浮き上がる。

藍川が結論を出すのに、そう時間は掛からなかった。

「……分かった。明日にでも動き出すか？」
『いや。例のナルシスト笑いから時間の指定をされている』
「へぇ。……いつだい？」
『……ちょうど日付が変わったから、明日だな』

今時珍しいアナログ時計の針は、セイリュウの言う通り１２時を迎えた。

第１２５話　イザナイ（後書き）

次回はスバルと侑子の対話＋いよいよダークチップの出番……になる予定です。……上手く進めばね。

第１２６話　ダークチップ（前書き）

お待たせしました！　今回ついにセレナードから受け取ったダークチップの出番が来ます。その行動の意味が明かされるのはまだ先ですが、お楽しみ頂ければ幸いです。

第126話　ダークチップ

――――星河家――――

社会科見学で研究所を見てから2日目の夜。スバルは自室で手鏡に視線を集中させていた。ミソラと両親は下でテレビを見ているはずだ。

『……おいスバル。やるなら早くやっちまえ』

「う、うん……」

少年はここに一大決心をした。

息を大きく吸って、8割を落ち着かせるための深呼吸に。残り2割を言葉にする。

それはそれはとても小さい声だった。

「……（　鏡よ鏡よ鏡さん♪　皆に会わせて下さいな♪　そ～っと会わせて下さいな♪　）」

スバルが歌うように言ったのは、以前ツバサが侑子を呼ぶときに使った呪文（？）だ。

現在、スバルの顔は恥ずかしさで赤くなっている。

やがて鏡に波紋が生じ、黒い長髪の女性、次元の魔女こと侑子が現れた。

「あらスバル君。どうしたの？　ツバサにイジメられた？」

「あ、いえ。そういうわけではなく……」

侑子がニンマリと問いかけ、スバルは苦笑しながら手を横に振って否定した。スバルからしてみれば、ツバサにからかわれるのはもう慣れた。

「ふふっ。冗談よ、スバル君は本当に素直ね。これは確かにからかい応えがあるわ」

「……本当に勘弁して下さい」

ドンドンスバルをからかう人が増えている。スバルは自分が可哀想で泣きたくなった。

「それで、どうしたの？」

「あ、実は――」

スバルが聞きたかった事、それは2日前に出逢った『藍川　龍』という人物についてだ。

本来ならその日の内か翌日に聞ければ良かったのだが、研究所の見学から帰った後はあかねに研究所の事を話している内に頭から抜けてしまい、その翌日は学校の宿題として「研究所の感想文を書け」という事で、その作業に追われていたというわけだ。

スバルが侑子に話したのは藍川の言った「自分のようにならないで欲しい」という言葉と、彼が過去にイジメを受けたのではないかという推測だ。

「――って感じなんですけど、自分のようにならないで欲しいという言葉と……あの時の龍さんの冷たい目が気になって……」

『それで相談って訳だ。……分かるか？』

スバルの言葉をウォーロックが引き継ぐ。侑子はイスに頬杖を付きながらため息混じりで答えた。

「……えぇ、まぁ少しはね。……その藍川って人、自分が不幸の道筋にいる事に自分で気付いているみたいね」

「？　不幸の――」

『道筋だと？』

スバルとウォーロックの疑問の声。

侑子は指を組んで両肘をイスに置き、顎（あご）を支えるような姿勢に変えた。

「そう。こういうことわざ知らない？　人を呪わば穴2つって」

「はい。知ってます。人を呪うと自分も同等のダメージを受けるってヤツですよね」

スバルでもそのくらいは知っている。というか、そのくらいは常識の範疇だ。

侑子はスバルの答えに頷いてみせる。

「えぇ、……人の不幸を願うって言うのはね、自分自身を不幸の道筋に進ませるという事なの。……そして、その人が呪っている相手は自分自身」

侑子の言葉の後半は、どこかゾクリとさせるものだった。人の心に深く踏み込んだような、そういった恐さ。

『はぁ？　ちょっと待て。何で自分を呪うんだ？』

スバルの背筋に冷や汗が走っている時、ウォーロックは全く分からないという口調で首を傾げた。

侑子は少しだけ微笑んでイスの背もたれに寄り掛かる。

「順序だてて説明しましょうか。……さっき聞いた話から考えて、その人が過去に縛られているのは確実。そして、【自分のようにならないで】って言ってるって事は、今の自分の事を低く評価しているという事。そうなると、【　自分なんかが幸せになってはいけない……　】と思ってしまう。それが呪いよ」

秤を想像すると良く分かるだろう。一方は自分もう一方は他人。量っているのは『存在する価値』だ。その人がそこに居るという絶対的価値は同じでも、地位や持っている力、知識。または本人の認識によって、相対的価値は変わって来る。

自分を低く見るという事は自分を軽くするという事。そうなればおのずと相手の方が重くなり、相手の方に価値は傾く。そして終いには、【自分なんかが幸せになってはいけない……】や、【自分なんかが生きていちゃいけない……】と思ってしまう。

自分よりも相手を大事にしてしまう。

自分は生きていても意味が無く、むしろ他人に迷惑だと思ってしまう。

……自分を自分で否定してしまう。

それが自己肯定感の低下だ。

侑子はやるせないため息をついてから続ける。

「……自分が幸せになってはいけない。自分の心にそう制限をかけて、自分の心を縛る。……自分の幸せを厭うという事は、自分の不幸せを願うとも言わない？」

不幸せを願うという事は、不幸を望むという事。結果として呪いとなっている。

「……そんな……それじゃああの人は自分で自分の首を――」

「絞めているという事になるわね。……それと、おまけを言えば自分でその言葉を言えてるんだから、自分自身に対する『思い』のせいで自分が苦しんでいる事に、ちゃんと自分で気付いているんでしょ。そして、本当にスバル君達にそうなって欲しく無いとも思っている」

「……強いですね」

自分の事が良く見えていて、自分の思いに押し潰されずにスバル達がそうならない様に願えるだけの優しさを持っている。

スバルの要約に侑子は肯定も否定もしない。ただ、『分からない』と言いたげに肩を竦ませるだけだ。

「さぁ？　どうでしょうね。そうだとも言えるし、いつまでも過去に依存しているとも言えるから」

『モノは言いようって訳か』

「えぇ。それに結局、本人に聞くのが手っ取り早かったりするからね。私に聞くよりそっちの方が意味が大きいわ。本当に聞きたいならそうしなさい」

「……でも、あの研究所まで結構距離があるんですよね……」

何せバスで移動する距離だ。お散歩程度の気楽さで行ける訳が無い。

スバルが乾いた笑みを浮かべているのに対し、ウォーロックはあっさりと『距離』という関門をクリアして見せた。

『電波変換すればすぐだろ』

「あっ……」

気付かなかった。及び、「ウォーロックから妙案を貰うとは……」という驚きは本人に言わない方が良いだろう。迂闊に言えば……。

『てめぇ、スバルそれどういう意味だ！』……という騒ぎになりかねない。

キング率いるディーラーがまだ世にあった時代、つまり去年だが、シーサーアイランドでうっかりその手の事を言ってしまい、その時は誤魔化すのに苦労したものだ。

この言葉は心の中にしまっておく。

スバルの内心に気付かないウォーロックは『それにだな――』と続ける。

『ツバサの奴が正攻法では難しいけど助ける方法が一応あるって言ってたじゃねぇか。アイツの性格の悪さはお墨付きだが、頭のキレはお前も知ってんだろ』

「うん。……それだったら大丈夫、かな？」

後半は侑子に対しての問いかけだ。

スバルの中では何となくそう思う程度なのだが、侑子は自分よりツバサの事に詳しい気がする。彼女の方にも聞いておいた方が良いだろう。

しかし侑子の顔は安心させるような笑顔ではなく、むしろ訝るよ

うな顔だった。

「……ツバサが大丈夫って？」

「はい。一応って言ってましたけど。……あの、それが何か？」

「ふむ……」

侑子はそのまま目を閉じて、さらに顎に手を置いて考え込む。

スバルとウォーロックが少し不安げに成り行きを見ている中、侑子はついに目を開けた。

「……スバル君、ウォーロック」

「……はい」

『……おう』

3人の間に緊迫した空気が満ちる。その緊迫さを例えるなら、某クイズ番組の名物、最終問題での長い沈黙並みだといえば分かるだろうか。

侑子はその司会者風に静かに息を吸い、言った。

「頑張ってね～♪」

暢気な笑顔でヒラヒラと手を振った。

ズテッ！

スバルとウォーロックはズッコケた。緊迫のクイズ番組から突然教育テレビの幼児向け番組に変えられたくらいのギャップによりズッコケた。

「『な、何だそりゃ！？」』

スバルとウォーロックの異口同音のツッコミに侑子は狙い通りと言いたげな顔でケラケラと笑う。

「あっはっはっは！　や～いズッコケた～♪」

『か、からかいたかっただけか！』

ウォーロックがいきり立つのに対し、侑子はニヤニヤ顔で人差し指を自分の口元に持ってきた。

「シー。……もっと静かに話さないとご両親が来ちゃうわよ」

だったらからかうな。

スバルとウォーロックの内心は見事に一致した。

２人のジト目に対し、侑子は満足気な顔で穏やかに笑う。

「ふふっ。……まぁ何にせよ、その人の心を救えるように頑張りなさいな」

「……はい」

スバルの返事に先程までの不快感は無い。侑子の応援の言葉が、すごく優しかったからだ。それでほとんど、不快感は払拭されてしまった。

……が、それはお人よしのスバルだからこそで、こっちはそうもいかなかったらしい。

『って、《何だかんだで話をうやむやにするな――！！》』

ウォーロック、小声で怒りのツッコミ。その後、侑子のからかいのターゲットはウォーロックに移行。ウォーロックは侑子の言葉で一喜一憂。侑子はウォーロックで全力で楽しみ、スバルはウォーロックに悪いと思いつつ堪えるように笑っていた。

そして、スバルが眠くなってきたとの理由で通信を切る時間が来た。

「それじゃあスバル君。お休み」
「はい。お休みなさい、侑子さん。今日は相談に乗ってくれてありがとうございました」
「どういたしまして。……あ、それと、その人を助けた後も大変だと思うけど、まぁ、そっちも頑張りなさい」
「？　あの、それってどういう――」

スバルの言葉の途中で鏡に映る侑子は消え、代わりにスバルとウォーロックの顔が映る。

「……何だったんだろ？」
『さぁな。……でもまぁ、今日は寝ようぜ？　オレは眠い』

先程アレだけからかわれたウォーロックがもう立ち直っているのを目の当たりにし、スバルはつい可笑しくなって笑いながら頷く。

「うん。そうだね」
『……なんで笑うんだよ』

ウォーロックがブツブツ言いながらスバルのハンターの中に入っ

ていく。スバルもまた、微笑みながら自分のベッドに入った。

（……明日ツバサ君にどうやって藍川さんを助けるのか聞こう）

翌日の予定を秘め、スバルは眠りに着いた。

――――数十分前・ＷＡＸＡ――――

スバルが藍川の事で侑子に相談している時、ツバサは自室で黒くて小さな長方形の物を指先で回していた。

「……とうとうコイツの出番か……」

ツバサが持っているのはダークチップと呼ばれる物。２００年前の横行した物で、１回でも使えば使用者の心を闇に堕とす強い精神影響力と、麻薬のような強い依存性がある。

ダークチップの大部分は当時のオフィシャルが回収したのだが、その前に世に出たヤツを全て集める事は不可能だった。

いけないモノ、悪いモノほど、人の心を惹き付けるものだから。

裏のネットワークに出回ったダークチップをセレナードが集め、それら全ての闇を１枚に結集。それが今ツバサの目の前にある１枚だ。

セレナードが回収したダークチップは１００枚を超える。よって、

１００枚以上の闇がその１枚に込められている事になる。

２００年前、リーガルという科学者は人のマイナス感情をデータ化することに成功した。そのデータを増幅し、様々な形のプログラムに変換するシステムこそがネビュラ・グレイである。

そして、ネビュラ・グレイにより増幅された悪の心をダークチップファクトリーでチップデータに植え付けて生まれた物がダークチップというわけだ。

「……」

ツバサは躊躇う事無く、それを受け入れる。

人のマイナス感情がデータ化されているのがダークチップなら、ツバサの体を覆うデューオの膜も電波化、つまり非物質化できる。故に、体の表面からインストールする事も可能という訳だ。

「ッ！！　ぐぁぁぁぁぁぁ……！！」

ツバサは自分の悲鳴を意識的に押さえ込む。防音効果のある部屋とはいえ、絶叫クラスの声となると流石に聞こえるだろう。

アイリスはこの時のためにお使いに行かせた。彼女に知られたら意味が無い。

ダークチップの闇の力が体に浸透する痛みは普通のナビなら早々に機能が停止するほどだ。それが１００枚以上なのだから、その苦痛は想像を絶する。

ツバサはその苦しみを声にせず、代わりに床をのた打ち回り、自

身の胸を押さえる。ちょうどＰＧＭを埋め込んでいる辺りだ。

ネビュラグレイの侵蝕。体の細胞が全て一気に入れ替わるような感覚と苦痛。

体の組織が苦痛を伴いながら全て組み替えられると言った方が分かりやすいだろうか。

ツバサはこの後数十分間苦しみ続け、ようやくダークチップを受け入れた際の痛みが無くなった。俗に言う破壊衝動というものもあるが、耐えられない程では無い。自我も何とか保っていられる。

彼は息も絶え絶えに起き上がり、すぐに自分のベッドに倒れこんだ。立っている事も辛い。

「はぁ……はぁ……。……ファイアリー……」

ツバサはうつ伏せの状態で顔の半分をベットに埋もれさせ、そのままダークチップを床に投げて魔法で燃やした。アイリスに確証を得させないための証拠隠滅だ。

（……これで、前準備は終わった……）

ツバサはそのまま気絶するように眠りに着いた。

スバルは安らかに。

ツバサは苦しんで眠りに着く。

正反対の２人。

その言葉は、これから２人が立つ未来を暗示させるようだった。

第１２６話　ダークチップ（後書き）

ちなみに、作中にあったクイズ番組とは、みのさんが司会を務めるアレです。

次回はいよいよセイリュウ戦。例によって何話かに分かれる予定です（多分２，３話）。

それでは次話もお楽しみに！

第１２７話　正面突破（前書き）

うぅ……繋ぎの話、または戦闘編パート１にするつもりがずいぶん長くなってしまった……。

第１２７話　正面突破

社会科見学から3日後、スバル達は当たり前に朝食を済ませ、当たり前に学校に行くはずだった。
しかし今、スバルとミソラは電波変換してウェーブロードを走っている。

サテラポリスから緊急の出動命令が出たのだ。場所は先日行った研究所。

「……スバル君、研究所の人達、大丈夫だよね？」
「……信じよう」

ミソラの不安そうな言葉に、スバルはそれしか返せない。
その場所に着いていない以上、下手な事はい得ない。今は彼らの無事を信じるしかない。

「よぅスバル、ミソラ」

数メートル離れた横のウェーブロードから声がする。スバルとミソラがそっちを向くと、ジャックと暁、ツバサとジョーカーがウェーブロードを走っていた。
ジャックと暁がそれぞれ電波変換し、ツバサは電波反発シューズでウェーブロードを移動している。ジョーカーは【ファイナライズモード】だ。

暁はジャックとツバサに断った後スバルとミソラのいるウェーブロードに来た。

「悪いな、また手伝ってもらっちまって。こっちも今日アメロッパの大統領さんが訪問に来るからオレもそっちに行く予定だったんだが……」

最近、夏休みが終わってからだが、はぐれウィザードの事件が増えてきたためにスバルとミソラにも事件の鎮圧を手伝ってもらう事が多くなった。

暁の謝罪にスバルが応じる前に、ウォーロックが実体化して割り込んだ。

『オレからしてみれば好都合だ。何たって、暴れられるんだからな』

ポコッ！

スバルがウォーロックの脳天を加減して殴った。彼の目がウォーロックに対して語っている。

（……縁起でもない事言うな！）

及び、暁の言葉に対して首を横に振った。

「いえ。それを見逃したら大変な事になるかもしれないので、僕なんかで良ければ手伝います。ねっ？　ミソラちゃん？」

人間に反感を持つウィザードがたくさん居たという事実は悲しいが、それが全てではないと分かっているし、先程スバルが自分で言ったように事件が大きくなってからでは遅いのだ。

サテラポリスの情報網とキングから出される監視者としての情報。

2つの情報から相手の動きを察知、早い内に手を打つ。そう言った事がここ数ヶ月続いている。

スバルがミソラに同意を求めたのだが彼女からはいっこうにその反応が戻ってこない。そればかりかツバサを除く暁達までポカンとする始末だ。

「……あれっ？　何で皆黙ってるの？」
「いや、だってよ――」
「……あれっ？」

暁の言葉をミソラが引き継ぐ。

「……スバル君がロック君を打ったんだもん」

自分でも無意識にやってしまった。これはどっちかというとツバサがやっているツッコミ方法だ。……自分ではない誰かと関わる事で自分にも変化をもたらすとＡＭ星の３賢者から聞いたが、まさかツバサと関わった影響とはツッコミがやや過激になった事ではないだろうか。

「……」（それは嫌だな～）
「「……」」

スバルの内心の声と一同の沈黙。はっきり言って痛い沈黙だ。
スバルは話を逸らす事にした。……考えてみればこれもツバサのやる事だ。……スバルは自己嫌悪になりかけた。

「……そういえばアメロッパ大統領って？　ローグさん来てるんですか？」

「あ、あぁ。何でも、ウチの長官やヨイリー博士。後、お前らにも会いたかったそうだ」
『あ？　何でオレ達も入ってるんだ？』
「単なる興味本位だと。ツバサが大事に思っている奴等に会いたいとさ」
「へぇ～。あの人が……」

ジャックの言葉にスバルが感慨深げに前を向いてアーノルド・ローグの事を思い出した。彼と会ったのはＷＡＸＡの病院で１回だけだったが、温厚そうでユーモア溢れる親しみやすい人だった。その人が自分達がツバサの大事な人という認識だったというのは嬉しい限りだ。
クインティアは長官とヨイリー博士の補佐と護衛を兼ねてＷＡＸＡに残ったそうだ。

そういえばツバサがやけに大人しい。普段なら暁と共に自分達のいるウェーブロードに来てもおかしくない筈だが……。
スバルがツバサの方を見ると、彼は額と目を手で覆うように押さえていた。そして胸にはハッキリと黒い何かが見える。

「ッ！　ツバサ君どうしたの！？」
「「寝不足だとよ」」

すぐさま彼のいるウェーブロードに飛び移ろうとするが、すかさず入った暁とジャックの言葉にスバルは飛び損ねて転びそうになる。
スバルは呆れと腑に落ちないという合わせ顔で暁とジャックを見る。

「……寝不足？」
「オレ達がいくら聞いてもそれしか言わないんだ。……っていうかぶっちゃけ――」
暁はここから先、小さい声でスバルの耳元で囁く。
「（――ツバサが自分の部屋で倒れていて、心配したアイリスが医療班を呼んだりツバサから事情を聞いたりしたんだが――）」
「（――あの野郎全っ然口を割りやがらねぇ。それでいつものあいつ等の口論。……って言っても、アイリスが一方的に問い詰めてツバサは黙ってるだけだったけどな）」
暁のセリフにジャックが割り込む。そこまで聞けばその場に居なかったスバルでも理解できる。
一応スバルも小声で暁とジャックに接する。
「（つまり、ツバサ君がアイリスの問いに黙秘権を行使し続けて、結果一睡も出来なくて寝不足になったって事？）」
スバルの確認に2人はあっさり頷いた。
『アイツも相変わらずだな』
ウォーロックのため息交じりの言葉にスバルは苦笑いを浮かべつつ疑問を覚えた。
（……寝不足……。本当にそれだけなのかな？　……それだけじゃあ、あの胸の黒いモノの説明が出来ない。……やっぱり聞こう）

スバルは意を決して彼のそばに飛ぶ。別に聞くだけなら移動しなくても良いが、あの黒いモノは自分にしか見えないようだ。そうなるとアヤカシや霊など、そういった類のモノである可能性が高い。ならば、皆に聞こえない様に彼の近くで聞いた方が良いだろう。

「あの、ツバサ君――」

彼に話し掛けた直後、タイミング悪く暁から声がかかる。

「皆！　そろそろ研究所だ！　気を抜くなよ！」

「あっ……」

ツバサに話し掛けた直後という事もあり、聞こうと思えば聞ける状態。しかし、暁の指示も重要。間近に研究所がある以上、下手に集中力を他に回して攻撃を食らいましたじゃシャレにならない。

スバルの葛藤に気付いたのか、ツバサの方から話し掛けて来る。

「……オレなら大丈夫。……それより、油断するなよ。研究所から漏れている電波、ずいぶん前だがお前は遭ってる筈だ」

「えっ？　……ッ！　これっ」

元々人間であるスバルはウォーロックのような真電波体ほど感知は良くない。しかし、こう見えてある程度は識別ができるようになってきたのだ。これも去年から色々な事に巻き込まれて来た成果である。

……全く威張れる事でもない気がして来た。単に面倒事に巻き込まれるだけではないだろうか。……どんな小学生ライフだ。

閑話休題。

それはさておき、この波長は確かに覚えがある。旅館うらかわでスザクをデリートした存在……。

「……確か……セイリュウ……」

『アイツか』

夏の初めの時期、うらかわでのスザク・フレアとの闘い。そこに乱入してスザクを消し去ったのがセイリュウだ。氷のように冷徹な性格だったのを覚えている。

ツバサは「フッ」と不敵に笑った後、指と指の間からスバルを見る。

「だから、気ぃ抜くなよ？」

「……うん」（……気にはなるけど、今は戦闘に集中しないと……）

一瞬でも気を他に回したらアウト。戦いとはそういうものだ。

――研究所内――

研究所内に侵入したスバル達を待ち受けていたのは、ロボットの大群だった。オフィス内の警備に使われる車両方や多脚型（４～６本足）の大群だ。

「「「……」」」

スバル達が言葉を失っているのはもちろんその数なわけで、効果音を出すなら――。

うじゃうじゃうじゃうじゃ……

と言えばどれだけか分かるだろうか？　食事中失礼な例えで言うと、大きな部屋の中に体長１ｍ以上の虫がウジャウジャ居る状態だ。

フラッ……

「ミ、ミソラちゃん！？」

「む、虫が～」

貧血を起こしたようにミソラが倒れる。スバルは慌てて彼女を受け止め、納得した。

ミソラは足が多い生物（主に虫）が苦手なのだ。ロボットの動きというのは、実際の動物をそのまま真似た方が効率的との事でその動物そのものの動き方をする場合が多い。犬なら犬。虫なら虫、だ。

６本足の生物とくれば虫しかない。

本物さながらのリアルな虫歩きによって、ミソラは失神しかけたのだ。

ピピッ！　ダダダダッ！

　ロボットがロックマン達を敵だと判断して弾を撃って来た。２２ＸＸ年の警備ロボットという事で、生身の人間が当たったら一撃で気絶する様な電気を纏う弾も撃てる。
　おそらく首謀者が監視カメラからの映像でロックマン達の侵入を察知。攻撃コマンドをロボットに指示したといった所だろう。

『そんな物……。フンッ！　ギガントビルディング！！』

ギギギギンッ！！

　ジョーカーが前に出て黒い柱を地面から突き出す【ギガントビルディング】を繰り出す。相手は高々電気を纏う弾を撃つだけのロボットの群れ。
　電波人間の相手ではないと思われたが……。

ピシピシピシ……

「ッ！！　皆っ！　ギガントビルディングから離れてスーパーバリアを展開！」

　暁の指示でロックマンを始めとする全員がギガントビルディングから離れる。直後、今まで自分達を護っていた防壁は粉々に打ち砕かれた。

「ッ！　ジョーカーの技が簡単に破かれるなんて！！」
『……どうやら電波体にも効く様に特殊な電磁波を纏わせているようです。当たれば生身の人間同様、即座に気絶するでしょう』
アシッドの分析結果に暁は静かに舌打ちする。
そして、ジョーカーの『ギガントビルディング』も言ってしまえば『電波物質』だ。電波体に効く電磁波弾はジョーカーの防壁にも通じたのである。
スーパーバリアを『破れたら張り、破れたら張り』を繰り返す事で何とかここまでノーダメージ。ロボットを壊せば突破出来るだろうが、それまでにかかる時間を考えると、『バトルカード：スーパーバリア』の枚数が足りるか不安だ。
暁が苛立ちながら持っている銃、『アシッドブラスター』から炎や雷といった属性攻撃を繰り出してロボットを壊していくが、結果は焼け石に水。数が多過ぎるのだ。
「……暁、オレがあいつ等をハッキングして一瞬でも制御する。その隙に突破してくれ」
「ッ！？　ツバサ」
ツバサの申し出は実質的な『囮』だ。確かに彼なら自らの『死なない体質』と帯広博士譲りの『技術力』により、『囮』というアウェイな状況でも何とかなるだろう。
しかし、それはあくまで彼が万全であればの事。今の彼は――。
「ダメだ！　今のお前は不調だろ。そんな状態じゃ――」

暁の言う通り絶不調。暁の強い遮りにツバサは辛そうに笑ってみせる。

「……大丈夫。こんな状態でも、あんな奴らに負けないから♪」

明るく言ってもツバサの目は未だ彼自身の手で塞がれている。そんな状態でそんな事を言っても説得力が無い。

「しかしだな――」

『私も残ります』

暁の食い下がりをアイリスが遮る。

『私のオペレーション能力ならこのくらいの数、訳ないから』

「……このロボットの撃ってる弾はお前のコピーロイドにも毒みたいだ。当たれば修復できないまでにコピーロイドが壊れるかもしれない。……そのコピーロイドは特別製。変えは無いよ。……それに、スバル達と一緒に居た方が安全だ」

ツバサはそう言いながら『バトルカード：ダブルストーン』による防壁を作り、その岩に隠れてスバルに近づく。

「……アイリスを頼んだ。……スバル、お前だから任せられるんだ。……こいつを護ってやってくれ」

ツバサの手にあるハンターとその意味。そして信頼。

スバルは目を閉じ、意志を込めて自身の双眸を開く。

「……分かった。でも、絶対に無理しないでね。でないとアイリスやソラさん……僕たちも悲しむから」

「……あぁ」

目元を隠していたが、それでも彼が悲しげな顔をしたのを感じた。
それが何故かは分からないし、聞く暇も無い。

彼が自分のハンターからアイリスをスバルのハンターに転送するなり、『ダブルストーン』の上に飛び上がってエアディスプレイのキーボードを作り出したのだ。

「さて、来いよ。機械共」
『ツバサっ！　やっぱり――』

ツバサはスバル達に背を向けて、両手をエアディスプレイの上に置いて不敵な笑みを浮かべる。

アイリスはツバサに声をかける。彼女の声は純粋に『心配の色』だ。

ツバサは依然として背中を見せたまま靴の先で自身が乗っている『ダブルストーン』を「コンコンッ」と突いてから言った。

「……この防壁も大して持たない。……もうすぐ壊れる。……時間が無い。……行ってくれ」
『……分かったわ』

アイリスはその言葉で俯き、呟く様に了承した。

「よし。スバル！　皆！　分かったらとっとと行け！」

彼は声と共に指を動かし、最後に【Ｅｎｔｅｒボタン】を押す。

ウゥゥゥ……

低い起動音と共にロボットの動きが遅くなり、終には止まってしまった。

「……この制御は短時間が限度だろう。……行け」

彼の意思の乗った言葉に一同は動く。動きの止まった機械などただの障害物に過ぎない。ジャックは容赦なく、暁とスバルはロボット達に心の中で謝罪しながら剣を振るう。

ミソラもまた、【 動きが止まればただの機械 】という認識になったようだ。彼女はスバルの隣を走る。

出口付近まで来た時、スバルはツバサの方を振り向いた。大丈夫だとは思うが、それでも心配な事には変わりない。

「ッ！！？」

振り向いた瞬間、スバルの目は驚愕に包まれた。

ツバサの目は黒。

本人の口の悪さに反比例するように、優しい光を宿す黒色。

そのことは分かり切っている事実であり、必然だ。

しかし、違っていた。

今の彼は違うのだ。

両腕がキーボードに向かった事で彼の目が露になり、彼の双眸が表れる。

おぞましかった。
黒い眼球に赤い目。

普段は頼もしい『不敵な笑み』が、不気味な『悪魔の笑み』に見える。

ツバサに目を取られていたスバルの肩を暁が掴んで強引に歩かせる。

「おい、何してるんだ。早く行かないとロボット達がこっちに気付く」
「で、でもツバサ君が――」

暁の『ドアを開ける』という行動と『ドアが閉まる』という連動的な事象。これにより、スバルの声とツバサへの視線は遮られる。

声はドアの開閉の音で。
視線はドアが閉まる事で。

遮られたのだ。

「……何だ、半数近く足止めできれば良いと思ってたのに。……これだけ残ったか」

スバルの後ろ、つまり部屋の奥の方から声が聞こえる。聞き覚えのある声。どちらかというとテレビに対して言っていた時の声に近いだろう。

スバル以外の一同はすでに奥の方に視線を向けている。

スバルはゆっくりとそちらを向いた。先ほどのツバサの『目』に対するショックで慌てるという感覚が麻痺しているらしい。今は大概の事に驚かない自信がある。

「……藍川さん……」

「やぁ、スバル君。……3日ぶりかな？」

藍川の口調は穏やかだが、冷徹とも言える程に声は冷たい。

藍川はまだ電波変換しておらず、彼の隣にはセイリュウがいる。スバルがロックマンという事はセイリュウから聞いたのだろう。

「さて、始めようか。……電波変換だ。セイリュウ……」

『……』

藍川の言葉にセイリュウは無言で頷く。

「……電波変換。藍川　龍、ＯＮ－ＡＩＲ」

部屋に、サファイアを思わせる青色の光が満ちた。

第１２７話　正面突破（後書き）

次回は正真正銘で戦闘です。おおよそのイメージは出来てるんですけど……うまく表現できるか不安ですね……。

それでは、最後まで読んで頂きありがとうございました。

第１２８話　激流の矛（前書き）

お待たせしました。

藍川が電波変換した所から始まります。

第１２８話　激流の矛

「……アクアニードル！」
「「ッ！！」」」

青い光が収まった直後、藍川の周辺の床から細い水が突き出てスバル達に迫ってきた。先端は鋭利になっている。
細い水の軌道はスバル達の陣形においてちょうど真ん中を狙っている。これにより、スバル達は陣形が左右に分かれる事となった。

暁は左右に分かれた仲間に指示を出す。

「クッ！　気をつけろ！　オレ達を分断してきたという事は次の攻撃が本命だ！」
「その通り！　喰らえ！」

セイリュウと電波変換した藍川は手の持っている槍（　槍の下は床に着いている　）を強く握り締める。その途端、ロックマン達全員の足元から先程と同じ細い水が突き出てきた。

予想できなかった位置からの攻撃によりロックマン達は……。

「ゲッ！　ガフッ！」

ジャック・コーヴァスの黒い翼は容易に貫かれ――。

「グッ！　ガッ！」
『ぬぅぅぅぅ……』

隙間の無い攻撃は幅の広いアシッド・エースとジョーカーの両肩の装甲を貫通。

「きゃぁぁぁぁぁ！！」

「ミソラっちゃん！　ぐあぁぁぁ！！」

そしてスバルはミソラに迫る水の矛から彼女を庇って肩の装甲を抉られた。

現時点でジャックと暁、ジョーカーは受けたダメージの大きさから電波変換が解除される。戦えるのは肩を負傷したロックマンとハープ・ノートだけだ。

スバルは息も絶え絶えに藍川を睨む。

「はぁ……はぁ……。藍川さん……何でセイリュウを受け入れたんです……」

「……キミには分からないだろうね。自分が生きている事を許してくれるのが自分しか居ない人間の気持ちなんて……」

「えっ……？」

藍川の言っていることが理解できなかった。それ以前に、彼は小声で言ったので良く聞き取れない。

「キミには関係無いと言ったはずだ！　そして――」

藍川はスバルを睨み返しながら槍を構えて突っ込んでくる。ロックマンはハープノートを下がらせた後左腕をソードに変え、迎え撃つ。

ギィンッ！

硬質な物質同士がぶつかる音。槍と剣が交差する中、藍川は今の自分の名前を名乗る。電波変換時の名前である。

「――今の僕はセイリュウ・ウォータ。ファイブ・エレメントの考えている事なんて知ったこっちゃ無い！　僕がそこにいるだけで気に食わないと言うなら、誰であろうと排除する！　……周りが僕にしてきたようにっ！」

セイリュウ・ウォータの力が増してくる。

ロックマンは剣の付いている左腕に右腕を添えるように堪え、ウォーロックとハープ・ノートが動いた。

『さっきから何言ってやがる！　訳分かんねぇぞ！』

「藍川さんごめんなさい！」

正面でスバルがやりを受け止めている間にウォーロックとミソラが左右から攻撃を繰り出す。

ウォーロックは自身の爪を振るう『ビーストスイング』。ハープ・ノートは出の早い『ショックノート』だ。

「ッ！　そんな物っ！」

しかし、藍川はそれに気付くなり、槍の、ロックマンの剣と交わらせている方とは反対側の先端を地面に着けた。その直後、セイリュウ・ウォータを中心として床から水が突き出る。

突き出た水は卵状の水の膜を生成してウォーロックとミソラの攻撃を防いだ。

それも、それだけでは終わらない。

攻撃を防いだ水の膜は防壁から一転、植物のように柔軟に動き、ウォーロックとハープ・ノートの動きを封じて壁に叩き付ける。

『ガァッ！』

「うぅっ！」

ウォーロックとミソラの呻き声。ミソラの電波変換はかろうじて維持されているが、それも時間の問題だった。

セイリュウが依然として技を解除せず、２人を壁に押し付けているのだ。壁にヒビが入り、２人が呻いている所から見て相当な力で抑え付けられているのだろう。

「ミソラちゃん！　ウォーロック！」（でもどうしたら……はっ！　そういえばさっきの暁さん達を倒した攻撃も床に槍の一端を付けた事で発動してた。……もしかしたら技の基点は……）

少年の中に１つの推測が生まれる。そして即座に行動に移した。優れた観察力と決断力。そして実行力を有するスバル。これが彼のバトルセンスに定評がある理由である。

シャァァァァ

「ッ！！」

ロックマンは槍と剣の拮抗を剣を傾ける事で崩す。金属同士が擦れるような乾いた音と共にセイリュウ・ウォータの槍はロックマンの剣を滑り、地面に突き刺さる。

無論、自分に槍が来ない様に逸らす向きにも注意してだ。

一方（ロックマンの剣と交わっていた方）が地面に突き刺さるという事は、もう一方が浮き上がる事を意味する。

「……やっぱりね」

結果はドンピシャだ。今まで地面に着いていた側から、一筋の細い水の帯が地中に伸びていた。その細い水の帯が地面から突き出し、増大。卵状の形になって身を護ったり鋭利にして攻撃したり出来るのだろう。

ロックマンは静かに呟いた後、セイリュウ・ウォータが体勢を整える前に地面に伸びていた水の帯を断ち切る。

「やった！　これで――」

ドスッ！

「――あっ……」

ミソラちゃんとウォーロックを開放できる。

スバルはそう言おうとしたのだが、セイリュウ・ウォータの膝が腹にめり込む事で言葉を殺された。

骨の軋む音と共にロックマンの体は後ろに吹き飛び、壁に激突。肺の中の空気が全て出たらしく、息が荒くなる。

「ガフッ！　ゲホッ！　ゴホッ！」

苦痛に堪えながら何とか目を開けると、セイリュウ・ウォータが槍を振りかぶっていた。

そして、鋭利な先端はロックマンに迫る。

ギィンッ！

ロックマンと槍の距離は１ｃｍにも満たない。しかし、槍は進まない。

ハープ・ノートがホーリーＰＧＭによって作り出したバリアにより阻まれたのだ。

「はぁ……はぁ……。スバル君は私にとって……大事な……人だから……それ以上傷付けさせるなんて……させないよ……」

ハープ・ノートがうつ伏せの状態から顔と手をスバルの方に向けて、想いを乗せた声を絞り出す。

「……ミソラちゃん……」

ロックマンもまた、辛い状態で自分を助けてくれたミソラに対して感謝の想いを乗せ、彼女の名を呼ぶ。

しかし、ハープ・ノートの行動は、セイリュウ・ウォータに自身がまだ戦える事をアピールしているようなものだった。

「……まだ戦えたのか。……でもこれで――」

セイリュウ・ウォータの手がミソラの方に向けられる。その途端、ミソラの真上には液体が作り出される。

セイリュウは水を操る存在。空気中の水分を集めて水を作り出すなど、容易な事だろう。

ミソラの真上の液体はドンドン大きくなり、直径がミソラの身長程にまでなった。

「――終わりだ」

地面に着いていた方の槍の先から細い水の帯が伸びて、ミソラの真上に漂う液体に達する。

「ッ！　ミソラちゃん！　逃げてっ！！」

「遅い！」

その危険性を察したロックマンが叫ぶが、今のハープ・ノートにそれを実行出来る程の余力は無い。

巨大な水弾はミソラの上に圧し掛かり、強大な圧力を加える。

ビキビキビキビキッ！！

「あぁぁぁぁぁぁ！！！」
「ミソラちゃ――――――ん！！！」

ミソラの悲鳴とスバルの叫び声。床にヒビが走る音。

彼女の悲鳴が止んだ頃、セイリュウ・ウォータは手に持つ槍の先を上に動かし、ミソラに圧し掛かっていた水弾を持ち上げる。
ミソラの電波変換は解除されていた。ピクリとも動かない。

「ッ！！　ミソラ……ちゃん……」

スバルの絶望に打ちひしがれた声。
セイリュウ・ウォータはスバルの方に視線を変え、見下すように少年を見る。

「さて、次はキミだ。どうせキミも僕を否定するだけだろう？　消えなよ。キミが終わったらあのドアの先で戦っている子、ツバサ君だったかな？　あの子を倒しに行くから」
「……させない」
「ん？　何か言ったかい？」

ロックマンの拳が震える。しかしそれは恐怖からではない。自身の意志と怒りを抑えきれずに震えているのだ。
セイリュウ・ウォータの問いにロックマンは顔を上げて一際（ひときわ）強い意志を込めてセイリュウ・ウォータを睨む。

「これ以上僕の仲間を傷つけさせるなんてさせない！！」
『良く言ったぜスバル！！』
「ッ！　貴様っ！」

ウォーロックがセイリュウ・ウォータの後ろを取り、セイリュウ・ウォータの脇に腕を通す形で動きを封じる。

「ウォーロック！　大丈夫だったの！？」
『へっ！　痛い事には変わりねぇが、ミソラとハープがあんなに頑張ったんだ！　オレが負けてられるかっての！！』
「くっ！　いい加減……離せ！！」

三叉の槍の先端は生き物の様に動き、ウォーロックの腕と首に巻き付く。

『グオッ！？　……スバル、ここはオレに任せて、お前はノイズチェンジを……』
「ウォーロック……。分かった」

スバルはウォーロックの視線に込められた意味を察し、静かに頷いて立ち上がる。

「……ノイズチェンジ！！」

このノイズチェンジでスバルがアクセスするのは『アクセスレベル：Ｎｏ１』。管理者であるセレナードを除けば最強の戦士。そしてアイリスの兄でもある……『カーネル』だ。

そしてそのノイズチェンジの気配はツバサも察知していた。彼は立ち止まり、スバルが居る方角を見る。

「……ッ！　とうとう最後のレベルにアクセスしたか。ここまでは予定通り。……念のためのお呪(まじな)いも掛けたから大丈夫か。……後は――」

ここからの彼の言葉は【　風　】に飛ばされて聞こえない。

風……。

彼は今研究所内に居ない。だからこそ風が吹き、彼の黒髪がなびく。

ツバサは静かに息を吐き、強い意志を自身の双眸に込め、再びＷＡＸＡ日本支部に向かい始めた。

「――ＷＡＸＡ日本支部の地下にあるココロサーバーを手中に収めるだけか。……いや、それからだな」

それは終わりの始まり。

ツバサは風を切りながらウェーブロードを駆ける。

第１２８話　激流の矛（後書き）

念のために補足しておきますが、ツバサはまだダークチップに飲み込まれていません。何とか抑えています。

それと、藍川の文脈的におかしいセリフにはちゃんと理由があります。とある感情と記憶から来るものですかね。

次の話はもしかしたら2話に分けるかもしれません。長くなりそうですからね。

それでは次話もお楽しみに！

第１２９話　記憶の滝（前書き）

う～ん。敵単体において今回ほど長いのは無いかもしれない。１話書き上げたら思った以上に長くなってしまって２話に分けました。

２話更新しますが、セイリュウ戦はまだ続きます。

スバルの力がグレイガ戦以来で出ます。……実は結構重要な要素になるんですよね、スバルの能力って……。まぁ、これが分かるのはまだまだ先として。

第１２９話、記憶の滝。お楽しみ下さい！

第１２９話　記憶の滝

スバルはノイズチェンジのために、例の様々な光飛び交う空間に来ている。そこで出逢ったのは……。

『久しぶりだな。星河スバル』

「カーネル。今回はキミだったんだね」

カーネルは笑顔で頷くが、表情を真剣なそれに直す。

『済まないが、外の方はもちろんこの空間的にも時間が無い。早く出た方が良いだろう』

「えっ！？　待って！　今までで一番最速じゃない！？」

来て早々時間だと言われたのは初めてだ。なお、【外の方】はウォーロックの足止めの事。【空間】は今スバルとカーネルがいる空間の事だ。

カーネルはため息をついて腕を組んだ。

『……ツバサが近くに居ないからだろう。物体に光を当てると同等の影が生まれるのと同様に、お前とミソラが持つＰＧＭとツバサが持つＰＧＭによって我々サーバーの中のナビはこうしてお前と話が出来るのだ。だから、奴が離れるという事は話せる時間が少ない事を意味する』

確かにビャッコ戦の時ツバサは少し離れた位置に居た。だからこそブルースとの対話が短かったのだ。しかし、彼との距離は壁一枚隔てているだけのはず。それが何故これまでで一番ナビとの対話が短いのか？

だが、スバルにとってもう1つ疑問に思った事がある。

ミソラの持っているＰＧＭがスバルの持つＰＧＭと一括りにされた事だ。当然ミソラと一括りな事が嫌な訳ではない。素直に『気になった』というのが適当な理由だ。

「……なんでミソラちゃん？」

スバルはカーネルに尋ねておきながらも多少は納得していた。彼が自分と同じ様にミソラにＰＧＭを渡した以上、何かしらあると考えた方が良い。

『以前このサーバーの管理者に聞いたのだが、お前の持つＰＧＭとミソラの持つＰＧＭは元々1つのＰＧＭだったそうだ。もっとも、ミソラの持つＰＧＭには我々と会話できる力は無いがな』

1つのＰＧＭから2つに分けたため、サーバー内のナビとコンタクトが取れる機能はどちらかにしか付けられなかった。故に、スバルの方にしかカーネル達と接する事が出来ないという事だ。

「管理者？　ツバサ君の事？」

スバルの問いにカーネルは首を横に振る。

時間が近づいているらしく、声は所々ノイズが混じっている様に聞き取り辛い。

『いいや。セレナードというネットナビだ。……私の考えが合っていれば、じきに逢えるだろう。……それと、ノイズフォースビックバンを放つ場合は加減しておー―』

そこでスバルの眼前は光飛び交う空間ではなく研究所の大部屋になった。結局カーネルの言葉は中途半端で聞き取り辛かったが、それを払拭する事象が少年の眼下に広がる。

「ッ！！　ウォーロック！！！」

『……』

スバルの叫びにウォーロックは答えない。答える事が出来ないのだ。

肩や胸、ウォーロックの体中の装甲は抉れ、床に横たわる彼の体はピクリとも動かない。細い水での締め付けから鋭利な刃での切り裂きに攻め手を変えて、抉る様にウォーロックを削ったのだ。

セイリュウ・ウォータはそのそばで動かないウォーロックを見詰めている。そして槍を振り上げて――。

「ッ！！　止めろっ！！」

スバルは走りながら左腕のサーベルを構え、一直線にセイリュウ・ウォータへ突き刺しに掛かる。

セイリュウ・ウォータは寸での所で槍の刃が三叉に分かれている部分でサーベルを受け止め、そのままロックマンの『進む力』を利用して反対方向に放り投げた。合気道の要領だと思えば良い。

「ッ！　その姿、それがノイズチェンジか」

「……ロックマン、カーネルノイズ。……行きますよ、藍川さん」

ロックマンの全体的なカラーリングは黒。左腕には緑色のサーベル（両刃の剣）が装備されている。肩にはロックマンの肩より４回りほど大きい灰色の装甲があり、灰色の装甲の下部からは深い緑色のマントを纏っている。

スバルは自身の切っ先に意識を集中させながら藍川に言葉をかける。穏やかで静かな声の中に、仲間を倒された怒りを含めて。

「「……」」

両者の沈黙。
無風の水面の様な沈黙。

……ビュッ！　ギキンッ！！

その沈黙は容易に、唐突に終わりを告げる。その代わりに響くのは、両者と両者の武器が高速で動く事によって生じる風を切る音。そして、武器がぶつかり合う音だ。

「ッ！！！」（な、なんだ……これっ……。頭の中に……何かが……）

サーベルと槍が交わった時にスバルに異変が起きる。自分の知らない映像、記憶と感情が頭になだれ込んで来たのだ。

友人、教師、家族に傷付けられた記憶、思い出、感情……。
藍川の経験した事がスバルの中になだれ込んできた。

「ッ！！　クッ！　あっ……」

スバルは正体不明の映像と感情に動揺してセイリュウ・ウォータと一時距離を取る。離れてからも動悸（　心臓が極度の緊張などにより激しく波打つ事　）が止まらない。

「はぁ……はぁ……はぁ……」（何だ今の……藍川さんの……記憶と感情？　でも何でそんなのが見えたんだろう）

スバルは息を切らせながらも頭を冷やし、先ほど自分が見た事を分析する。そして疑問。

その疑問自体は、自分に問いかけると同時に答えが思い浮かんだ。

（……もしかしたら、僕の力で？）

ツバサの見解として、スバルには相手が心の奥底で切に願っている事を感じ取れる力があるという。表で思っている信念ではなく、奥底の想いを感じ取れるのだ。

もしもその想いがその人の過去と密接な関係があり、その思いを抱くキッカケが『過去』である場合、力の延長線上として相手の過去が見えても可笑しくは無い。

（……もしそうなら藍川さんは……）

スバルには藍川の過去だけでなくて、その当時の感情まで流れ込んできたのだ。

苦しくて、寂しくて、憎くて、辛い。そんな感情の雪崩である。

そして、それ以降（いこう）の事も……。

相手の気持ちが分かったなどといった無責任な事を言う気は無い。だがスバルは、相川の過去を『理解』するのではなく、『受け入れた』。

無論、自分に出来る限り藍川の気持ちを解ろうともした。

彼に対しての怒りが収まったわけではない。だが、スバルの怒りが削がれた事は否めない。

スバルの怒りが削がれた時、藍川の背後に白い人型の何かが生まれる。おそらくそれが藍川の心の奥底の想いを伝えてくれるのだろう。

数日前グレイガに取り込まれ、蟲（コ）に魂を蝕まれたケンジの様に。

ケンジの時との相違点を言えば、白いモノが俯いているという事だろうか。

スバルは静かで、そして優しい声で藍川に語りかける。

「……藍川さん、誰かを信じる事に臆病になる事は分かります。……僕も昔、そうだったから」

「？　何を言ってるんだ。いやそれ以前に、何を言い出すんだキミは」

セイリュウ・ウォータの口からはそういった嘲りの言葉が漏れる。

しかし、彼の背後の白いモノは違う事を言っている。

【どうせキミも口先だけで近づいてくるんだろ。……僕の事を何も知らないくせに……】

それは絶望の言葉。自身の経験を誰かに話しても誰にも理解されず、受け入れられなかった経験からくる、人間に対しての猜疑心。

しかし、スバルは彼の過去を知っている。……過去とはその人のモノだから、『知ってしまった』と言い換えた方が良いかも知れない。

「知ってます。……藍川さんが友人や先生……そして家族に傷付けられた事も。……剣を通じて伝わってきました」

「ッ！！　な、何でそんな事が！！」

自身の心の声が聞こえない藍川は動揺し、白いモノは少し顔を上げる。

【……そうだよ。僕が生きている事を認めてくれるのは僕だけ。……生きている事を許してくれるのは僕だけ。僕しか、僕の味方がいない……】

スバルはその先を見た。最悪の状況から脱した後の事だ。

【でも、それで良いんだ。その時の経験で、家族でも誰でもない、自分が頑張らないといけないって気付けたから】

「……もし自分がこれから先ずっと1人でも？」

【……それを前提で生きているから】

彼の断定的で、それでも悲しみを捨てきれない言い方を聞いたス

バルは、ふと友人の事を思い出す。

双葉ツカサは親から捨てられた。それから彼は自分1人でも生きていけるようにと思い、行動してきた。しかし、それは周りから裏切られる事を前提とした思考と行動だ。

1人でほとんどの事が出来れば、他人も、その繋がりも不要だろう。

ルナは、その頃のツカサと今の藍川が似ていると言ったのだ。だから藍川は、昔のツカサと近い。

白いモノは少しずつスバルに打ち明け始めた。その間、当然電波変換している側の藍川は待ってくれない。

ロックマンはセイリュウ・ウォータの攻撃を避けながら白いモノの言葉に耳を傾ける。

第１３０話　青龍

以下、白いモノが話した内容。

自らの過去から、周りに裏切られても良いように『自分がしっかりしないといけない』、『誰かの助けを期待しちゃいけない』と思ったのだろう。

だから彼は今まで、自分１人で自分の『存在』と『生』を肯定してきた。

彼にとって将来の希望＝目的であり、自分を肯定する理由でもあった。「自分には目的があるから」と言い聞かせる事で、万が一にも自分が死を選ぶ可能性を無くしたのだ。

自身の実力的な成功や、周りからの評価などの『プラスの肯定』はもちろん。

自分が傷付けられる事が前提の公式を作り、その公式通りに傷付ける側が攻撃、否定してきたら「予想通り」と自分に言い聞かせる事で自分の公式――価値観――を肯定。

それにより自分を肯定する『マイナスの肯定』……。

藍川は『２つの肯定』を使って生きてきた。家族や周りに頼らず、自分１人で自分の心を支えるとはそれほどまでに辛い。

なりふり構っていられない。

プライドも何も無い。

『自分が生きるために』である。

そしてその思いは、本人に「自分にはプライドが無い」という劣等感。そして「自分が生きるためしか生きられない」という思いは自分の存在自体への負い目に繋がっていた。……自分は下劣な人間だと、藍川自身に思わせた。それも、藍川が自ら望んで思っていた。

出来事に対する判断基準を『最悪』にしておけば、並みの苦しみでは心が傷つく事も無い。常人が「悪い」と評する事を「普通」と定義してしまえば、日常生活においてほとんどの事に耐えられるだろう。

だからスバル達に自分のような人間になるなと言ったのだ。自分の様な醜い人間になって欲しくなくて。

自分を自分で見下しているから。
自分の存在を自分で肯定しつつ自分で否定しているから。
自分の存在を呪っているから。

……だから藍川は、自分よりもスバル達に価値を重く置いたのだ。

以上、白いモノの語り。

ここまで乱雑に書いたが、どれが間違っているという訳でもない。様々な不快な感情や記憶が捻り合い、絡み合っているのが今の藍川なのだから。

ロックマンはセイリュウ・ウォータの自在な軌道を描く矛をサーベルで逸らしながら、白いモノの話を聞く。

「くっ！　ちょこまか逃げて！」

「ッ！　早々捕まりませんよ。ダブルストーン！　＆　カーネルアーミー！」

周波数移動でロックマンの背後に現れたセイリュウ・ウォータに対抗するため、ロックマンは『バトルカード：ダブルストーン』をセイリュウ・ウォータの両脇に出現させた。

通常このバトルカードは守備や特殊な攻撃に利用されるのだが、カーネルの力を持っているのならそれはおのずと変わって来る。カーネルアーミー。カーネルやその力を持つ者が使える力。障害物の中から兵士を呼び出し、攻撃させるのだ。

すなわち……。

「ッ！！　この兵士は！　……ッ！　クッ！」

両脇から現れた兵士による剣での不意打ち。それを紙一重で交わすのは流石だが、ここまでがロックマンの陽動。本命はこれからだ。

「スクリーンディバイド！！」

セイリュウは兵士の攻撃を避けると共にロックマンから距離を取った。ロックマンのサーベルでは絶対に届かない距離。しかし、セ

イリュウの腹部には斬撃の衝撃が響いていた。

「くっ！　……がはぁ！！」

スクリーンディバイド。この技に距離は関係無い。剣を振るえば緑の斬撃が飛び、敵を切り裂くのだ。

セイリュウはこれによりロックマンから一段と距離を取り、離れる事で戦場の全体を良く見えるようにする。そして、ロックマンの斬撃に対抗するために槍を前に突き出すように斜めに構えた。

ロックマンは距離を取った事で胸の中の空気を「ふっ」と吐き出してから白いモノに話し掛ける。

「……そんな生き方をして、辛くなかったんですか」

尋ねておいてなんだが、辛いに決まっているだろう。だからスバルは白いモノ、藍川の本心から言葉を引き出そうとしていた。自分の過去を自分で抉らせるためではない。自分の思いを、苦しみを吐き出させるために。

白いモノはポツリと弱々しい声で答えた。

【……辛いよ。でも、仕方が無いんだ。家族間であろうと自分を護るためなら家族を傷付けられるって知ってしまったから。……知ってしまった以上、知らなかった頃には戻れない……】

積極的に傷付けるつもりが無く、例え家族がその子のためと思っ

ても、それでその子が戻れない所にまで追い込まれたら元も子もない。

【それに、僕を傷付ける人間は僕の事を悪い様にしか言わない。自分を傷付ける言動や行動しかしない。……そうやって線引きしておけば、相手のやった事に対して辛さを軽減できる……。いくらでも耐えられるんだ……】

「耐えないで下さい」

はっきりと、強い声でスバルはそう言った。

「辛い事に耐える事は必要だと思います。でも、それを1人で抱え込むのはもっと辛いんじゃないですか？」

【……でも……】

「それに、線引きをして相手の事を決め付けてじゃあ、あなたを見下してきた人達と同じじゃないですか！」

【ッ！！】

白いモノに走る動揺。「アイツはこういう奴だ」と決め付けて、苛める相手の良点を認めようとも探そうともしない。「アイツに良い点なんて無い」と決め付ける。1回相手の事を認めまいと思うとその評価を改めないという動きはいつの時代も、どの年齢でもあるだろう。

相手と自分は違うと認めて本音と建前を分けるというのも出来るだろうに、それすらもやろうとしない者も多い。

しかし、藍川のやってきた事もそれと同じだった。自分が気に入らない相手は自分の悪態しかつかないと決め付けていたのだから。

相手がどんな人間であれ、自分と同じ多面性を持つ一個体なのだが、『相手を決め付ける』というのはその多面的な中から自分にとって都合の良い一面を取捨選択するということを意味する。それは、一個体に対する冒涜(ぼうとく)だ。

動揺していたのは白い方だけではなかった。電波変換している藍川にも、当然スバルの声は聞こえているのだ。

1人と1つの動揺を見ながら、スバルは言葉を重ねる。

「……それに、あなたは今1人じゃないです。……ここにいる他の科学者さんとはどうなんですか？」

「【……それは、僕が自分の事を話していないから親しくしてくれているだけで……】」

いつの間にか白と青の彼は同じ事を言っていた。

スバルの素人観測だが、今まで分かれていた『偽った自分』と『自分の本当の心』という2つの心が近づいて来たという事だろうか。

自分が裏切られた時に傷つかないためだ。

自分に対して「最初から信じていなかった」と言い聞かせるために、相手の厚意に『信頼』以外の理由を付ける。

藍川の目が、そう語っていた。

スバルは剣を下ろし、首を横に振る。

「……いいえ。あなたがあの人達から裏切られる事を恐れ、あの人

達の事を決め付けているだけだと思います。勇気を出して、打ち明けてみてください」

「【……それでもし、受け入れてもらえなかったら？　それでこの研究所から居場所が無くなったら？」】

彼にとって、自分の心身を安心して置けるのはこの研究所しかない。彼にとってこの研究所こそが彼にとっての居場所なのだ。

スバルはここで行き詰る。クビになったら他の会社に就職というのは分かるのだが、それ以上を知るには少年の年齢は幼すぎた。それをカバーしたのは、スバルのハンターの中にいる少女である。

『……1つの所に囚われなくても、フリーランスという生き方もあるわ』

「フリーランス？」

「【ッ！！　その手があったか！！」】

アイリスの言葉にスバルは首を傾げ、白と青の藍川はハッとした様な声を上げる。

『フリーランスはどの企業や研究所にも縛られず、自分の技術力を売りにして生きる技術者よ。……例えるとすると、個人傭兵みたいなものかしら』

「なるほど」

アイリスの説明にスバルが納得している時、藍川はホッとした顔で自分の両手を見つめている。白い彼の声はもう聞こえない。完全に2つの彼は合わさった。意思の統合だ。

「……そうか。それなら1人でも生きられる。……誰かに打ち明け

られる！」

彼は先程の様な怯えた目から少しずつ力強い目に変わった。

藍川は自分の居場所を失う事を恐れて今回の事件を起こした。現に、戦闘中彼は自分の中の恐怖に支配されて文脈の繋がらない言葉を言っていたではないか。

「どうせ否定するつもりだろう」などの誰かからの否定を恐れる言葉を。

しかし、生きる世界は1つだけではないと気付けた彼に、先程までの恐怖は無い。彼はこれから今回の罪を償い、『自分が信じられる者』や『自分を受け入れて欲しい者』に、『自分』を話すだろう。

藍川に、もう戦闘の意思は無い。

『……やはりこうなったか』

「ッ！！！」

本人の属性通り水を挟んだのはセイリュウだ。

藍川は実体化したセイリュウと向き合う。

「セイリュウ。ここまで付き合ってもらってありがとう。それと、済まない。……でも、もう良いんだ。復讐はもう――」

『私がそんな事を許すと思うか？』

藍川の言葉を遮り、セイリュウは姿を消す。逃げたのではない。

藍川を本格的に精神支配するために、電波変換している彼の中に入

ったのだ。
直後、藍川からは絶叫が響き渡る。
「ぐっ……がっ……！　あぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「藍川さ――――ん！！！」
セイリュウの洗脳と藍川の自我のぶつかり合い。
それの表すように青い光が迸り、ロックマンは前腕で閃光を防ぎながら藍川の名を呼ぶ。
光が収まった時、セイリュウ・ウォータの腕はブランと力無くぶら下がっている状態だ。
「……藍川さん？」
スバルの恐る恐るの言葉に答えたのは藍川の優しい声ではない。
『……残念だが、この体はもらった』
「ッ！　藍川さんは……」
『……抵抗が酷かったから奴の自我を抉って、そこに封じた』
「ッ！　なんて事を……」
自我を損傷して、セイリュウを倒した後に彼は彼のままでいられるだろうか？
スバルの危惧はセイリュウ・ウォータの攻撃により妨げられる。
『油断する暇があるのか？』

「ッ！！」

セイリュウは周波数移動でロックマンの目の前に現れ、低い体勢から槍を突き上げる。

正真正銘の第2ラウンド開始だ。

第１３０話　青龍（後書き）

……セイリュウがご立派な悪役になってる……。

次回かそのまた次回。決着と最後の章への『転』です。（↑起承転結の『転』ね）

携帯にメモってる次話の構成から考えて、また2話に分かれる可能性が高いので、次回でセイリュウ編完結とは言いません。

それでは次話もお楽しみに！

第１３１話　アヴァランチ・オブ・ディバイド

下から突き上げられる槍。狙いはロックマンの鳩尾。
ロックマンは上半身を捻る事でかわし、周波数移動で距離を取る。

「ダブルストーン！」

再びセイリュウの両脇に現れる岩。セイリュウは先程の二の舞に遭わない為にロックマンの方に前進。

カーネルアーミーの攻撃を遠くに避けたらスクリーンディバイドが来るのなら、斬撃が来る前に距離を詰めて切り捨てれば良い。それをロックマンが回避したら水の矛を伸ばして追撃すれば良いだけだ。

「バリア！」

ロックマンはサーベルを持っている方とは反対の手を突き出し、『バトルカード：バリア』で防御。
手を突き出してバリアを使った場合バリアは前方にのみ現れるのだが、その場合はその分防御力も上がるのだ。

そして、ロックマンのサーベルを持ってる方の手に電波が集まる。

力の収束。

次は大きい技が来るだろう。

それを察したセイリュウはロックマンから離れず、槍をバリアに突き付けているまま槍の反対側を伸ばした。

ここで離れれば力を溜めたサーベルの一撃が来る。スクリーンディバイドは相手を視認さえしていれば射程範囲の概念が無いため、ここで離れるのはタブーだ。

故に、バリアに圧力を加える事でバリアを維持させてロックマンの片腕を封じ、水の槍を伸ばして後ろから突き刺すのが効果的だと考えたのである。

しかし、セイリュウはこの時点で重要なミスを犯していた。

ダダダダダッ！

『ッ！！？』

セイリュウは突如後ろから攻撃を受ける。音からして銃撃だ。それもマヒ効果があったらしく、体の動きが鈍くなる。

セイリュウが痺れる体を推して首だけで後ろを振り向くと、兵士が銃を構えていた。

「……ダブルストーンの……兵士……」

「そう。カーネルアーミーの攻撃はマシンガンとソード……遠近どんな距離でも対応できる。喰らえ！　クロス・ディバイド！！！」

『ッ！！　グォァァァ！！』

力を溜めていたロックマンのサーベルが風を切り、セイリュウの

鳩尾を中心に『X』を描くような斬撃が加わる。セイリュウはその衝撃で吹き飛び、背中から地面に落下。

セイリュウのミスはダブルストーンの処理をしていなかった事。岩を破壊しておけばマヒして攻撃を受ける事も無かった。

一方ロックマンはカーネルアーミーを時間差で発動させて追撃のチャンスを作ったのである。

相手の意識が一方に向いている場合、もう一方に対して疎かになる。ロックマンはそれを利用したのだ。

セイリュウは槍を支えに立ち上がる。少々息を切らせていている状態だ。

ロックマンはセイリュウの体勢が立て直る前に追撃の構えを取る。

「スクリーンディ――」

ピキィ！

「ッ！　うっ……」

セイリュウの一撃で抉られた肩の装甲。ロックマンが剣を振り上げた時、その痛みがぶり返した。

ロックマンが痛みで動きを止めたのはほんの少しの時間だったが、

それをセイリュウは見逃さない。セイリュウは自身の槍を地面に着けている。支えとして地面に付けていたのを攻撃に転じさせたのだ。

『ッ！　アクアローズロード！』

セイリュウの足元から水が噴出し、茨（イバラ）を思わせるトゲの着いたツタに変化してロックマンに向かう。

「ッ！　ダブルストーン！　＆　バリア！」

水の茨の進行方向に岩を2つ縦に並べる。さらに自身もバリアを使い、防御体勢を整える。

今回のバリアは全方位型だ。

『そんな岩！』

セイリュウは岩を見るなり水の形状と性質を組み替えた。

『ウォーターカッター』というのをご存知だろうか。水を特殊な装置で噴出し、水の圧力でレンガだろうと切り裂く物だ。

セイリュウは水の形を太刀のように変化させ、チェーンソーの様に高速で水を行き来させて『ウォーターカッター』と同じ性質の武器を作ったのである。

柔軟に形と性質を変え、攻撃と防御の切り替えが早く、その攻防のパターンも多種多様。

それが『水』だ。

ジジジジィィ！！！

高圧の水は岩を削り、貫いていく。２つの岩を貫通してロックマンの前に水の太刀が姿を現した。
太刀は再び茨の形状に戻り、ロックマンをキツク縛り上げる。

ギリギリギリ……

肉を締め上げる生々しい音。ツタがロックマンを締め上げ、トゲがロックマンに食い込む。

『……』

セイリュウは無言で槍を構え、遠距離から力強く突いた。先端は鋭く、スピードも十分。

ドスッ！

真っ直ぐに伸びた槍はロックマンの心臓の辺りを貫通。しかし、『ポンッ！』という軽快な音と共にロックマンの姿は消え、たぬきの人形が現れた。
『バトルカード：ヘンゲノジュツ』だ。

本物のロックマンはセイリュウの目の前に現れ、腕を外側に広げるようにサーベルを横薙ぎに振る。

ギシッ……

「ッ！？」

だが、ロックマンの剣はセイリュウの寸での所で止まった。無論、ロックマンが止めたのでは無い。セイリュウが細い水をクモの糸の様に張り巡らし、ロックマンはそれに掛かったのだ。

ロックマンがそれに気付いた時には、既に先程の茨がロックマンに巻き付いていた。

「ッ！　くっ……！　い、いつからヘンゲノジュツだと……」

ロックマンは苦痛と苦しさで目を閉じ、何とかそれを尋ねる。一方のセイリュウは警戒のために少し距離を取ってから答えた。

『……まぁ、冥土の土産にはちょうど良いか。……私が水を太刀に変えた時だ。あの時お前は水の太刀の性質を見抜き、茨に捕らえられた振りをして接近。そして攻撃という作戦を考えたのだろうが、私は水の動きが見える』

「……でも、今の僕は電波だよ……うぅ！」

いっそう強い力でロックマンを締め上げるセイリュウはあくまで平坦に答える。

『お前は元は人間だろう？　人間の体内で水の割合は6割以上。……それなら、名残（なごり）という形で感知できる。……さて、そろそろサヨナラと行こう。……地球を3度救った英雄よ……』
「ッ！！　うぁ……」

叫びたくとも苦しくて声が出ない。トゲの鋭利な感覚とツタの強い締め付け。首にも締まり始め、ロックマンの意識は掠れ行く。

（……もう……意識が……）
『ビーストスイング！！！』

スバルの目が閉じかけた時、聞き覚えのある声が響く。それと共に全身の束縛が解除された。
ウォーロックがスバルに巻き付いていたツタを自身の爪で断ち切ったのだ。
セイリュウはウォーロックが加わった事で一時距離を取って様子を見ることにしたようだ。

「ゲホッ！　……ウォー……ロック？」
『まだ喋んじゃねぇ。……ったく無茶しやがって』
「ははっ。……ウォーロックがそれを言う？」
『うるせぇ！　……イッ！』
「やっぱり痛むんじゃん」
『……うるせぇ』

スバルとウォーロックは笑みをかわし、セイリュウと向き合う。

「あっ……」

スバルは一瞬驚いた顔をした後、優しく微笑んだ。

ウォーロックが加わった心強さもあるのだが、それ以外の味方がいたからだ。

【早くコイツを倒してくれ！】

セイリュウ・ウォータの隣に白い人型のモノが現れており、その口が動いている。

【頑張れ！　ロックマン！】

藍川の『意思の塊』だろう。

そして白いモノはセイリュウ・ウォータの体を後ろから押さえる。脇を通す様に、拳を上向きにして、セイリュウの動きを封じた。

『ッ！？　何だ？　体が……。ッ！　藍川め！　こんな時に邪魔を！』

『お、おいスバル。なんだか分からねぇがチャンスだ。一番でかいの決めてやれ！』

ウォーロックには無論見えていない。しかし、味方は確かに居る。スバルはウォーロックと藍川、２人の味方の心に答えるためにも、力強く頷いた。

これから変わろうとする藍川を、セイリュウから解放するために。

「うん！　行くぞセイリュウ！　ノイズフォースビックバン！！アヴァランチ・オブ・ディバイド！！！」

居あい抜きのように真横に振ったサーベルから緑の斬撃が飛ぶ。

それも、今回は単純な斬撃ではない。

『アヴァランチ』は『雪崩』という意味だ。

その言葉を体現するかの様に緑の斬撃は巨大な集合体となって、雪崩の如くセイリュウを襲う。

『ヌグァァァァァァ！！！！！』

セイリュウは水の防御壁を作るも、緑色の雪崩は難なくそれを打ち破ってセイリュウを飲み込んだ。

ヴンッ

小さく何かの音が聞こえた事を除けば、この一撃で終わるだろう。

ドドドドドドォ！！！

緑の斬撃はロックマンがサーベルを振り抜いた後も、スバルの目の前を飲み込んでいく。

一撃必殺。

その言葉に相応しい破壊力だった。

第１３１話　アヴァランチ・オブ・ディバイド（後書き）

次回は研究所にて、暁たちが目覚めてからの話です。そこから次章に続きますよ～。

第１３２話　メールの差出人（前書き）

え～っと、言い訳がましいのですが、周りが騒がしい時に書いた話なので文章的に読みにくい所があるかもしれません。その時は遠慮なく言ってくだされば直します。

出来れば、どこがどう読みにくいかを言ってもらえると直しやすいです。よろしくお願いします。

それでは最終章、始まります。

第１３２話　メールの差出人

ドドドドドドドォ！！！

「……ぐっ？　ん？」

暁はロックマンの放った『ノイズフォースビックバン：アヴァランチ・オブ・ディバイド』の轟音で目覚めた。

暁の視界に最初に入ったのは、黒を主としたボディに肩に灰色の装甲を装備しているロックマン。そして彼が出したと思われる緑色の斬撃の嵐だ。

ロックマンは剣を振りぬいて硬直している。姿が変わっているのはノイズチェンジの影響だという事は暁はすぐに推測できた。硬直している理由を察するのはそれから少ししてだ。

「……スバル。その技すごい威力だな……」

暁は自分が目覚めた事とロックマンが硬直している理由を遠回しで言う。

つまり、ノイズフォースビックバンを放ってみたら自分でもビックリな破壊力な事に驚いて、硬直したという訳である。

スバルはその声を聞き、暁の方を振り返る。表情は明るくは無い。

どっちかというと戸惑っている。

そしてスバルはそのとき気付いた。カーネルが消え際に言いかけた言葉は、『ＮＦＢは加減しておけ』という警告ではなかっただろうか。

例え最後までカーネルの言葉が聞こえなかったといっても、戦闘の事で頭が一杯でそこまで考えが回らなかったと言っても、文字通り『後の祭り』だ。

「あ、暁さん……。どうしましょう……」

「どうしようって言われてもな……」

スバルと暁が緑色の斬撃の嵐を見ている間にミソラやジョーカーを始めとした仲間達が目覚め、次第に緑の嵐も収まってきた。

緑の嵐が去った研究所。そこにあるのは沈黙だけだ。

「……アシッド。確かこの先に部屋が３つくらいあったよな？」

『……ええぇ。ここに来る前にサテラポリスからこの研究所の見取り図のデータを貰って来ましたが、それで合ってる筈です……』

暁とアシッドの会話。

普段断定的な話し方をするアシッドがこういった話し方なのは無理も無い。目の前には屋外が見える大穴がある。部屋を3つ貫通して屋外まで見えるバリアフリーだ。さらに言えば、軌道上の床は50センチほどの深さまで抉れている。

緑の嵐は部屋3つを貫通してその進行方向の物を全てなぎ払い、床まで深く抉ったのだ。

そして、暁にはもう1つ気になっている事があった。

「それにこの壊れ方は……」

部屋を3つ貫通して床を50cm程の深さまで抉る極太の斬撃の嵐。それにも関わらず、藍川が倒れている部分の床には損傷などまるで無い。例えるなら、孤立した島の様だ。

まるで、藍川の居る部分だけ見えない力で阻まれたかの様に。

『……今考えられる中で最も可能性が高いのは、セイリュウが自分の身を護るために水の防壁を作ったがそれでも星河スバルの攻撃の終わり際に力尽きたと言った所でしょうか……』

再びアシッドには珍しく自信の無さそうな言い方。アシッドは目的達成のために最も確率の高い選択肢を演算・検出できるので、彼にとってそれが最も確率が高いのだろうが、やはりどこかしっくりしない。

まぁ、それはアシッドの知らない力によるものだからしっくり来ない答えなのは『必然』なのだが。……

暁が考え込むように唸っている時、ジャックがぽっかりと風通しの良くなった研究所を見てぼんやりと呟く。

「……今回ツバサと暁、めっちゃくちゃ長官から怒られそうだな」

「ッ！　ごめんなさい暁さん！　僕も一緒に怒られますから！」

ジャックの呟きでスバルは暁に平謝り。土下座とまでは行かないが、上半身を９０度曲げる程に曲げ、そのスピードも十分速い。

暁は目の前の惨状に苦笑いを浮かべながらスバルをフォローする。

「あ、別にそれは良いや。作戦指揮はオレとツバサだからな。……それより、ツバサはまだ戻ってないのか？」

暁はツバサが居るであろうドアを見る。

なお、作戦指揮としては普段はツバサが担当。彼が不在の時や戦闘不能の時は暁が指示している。

「あ、それじゃあ僕が見てきます」

「あたしも行く」

スバルが踵を返しながらツバサが居るであろう部屋に向かって歩

き出す。
ミソラも手を上げて暁に断り、スバルの方に歩き出す。
スバルは彼女が追いつくまで待ち、2人でドアの向こうに消えていった。

ツバサの迎えを4人に任せた暁はアシッドに視線を移す。

「……さて、それじゃあオレ達は当事者から事件の詳しい経緯を聞きますか」
『藍川　龍から事情聴取ですね』
「あぁ。それじゃあジャックとジョーカーはＷＡＸＡへの報告を――」

「うっ……うぅ……」

抉れた床の海に浮かぶ無傷の床。その大地に横たわる人間が意識を取り戻したようだ。
暁はその呻き声を聞くとちょうど良いとばかりに笑みを零す。

「どうやら当事者が目覚めたみたいだな。これで話を聞ける」

暁とアシッドは藍川からセイリュウとであった経緯や動機を聞き、聴取したことをメモしたメモ帳を『パタンッ』と閉じる。

「……なるほど。つまりそのメールを削除しようとしたらセイリュウが出てきたと」
「はい」
『それで、他の研究員の方は？』
藍川は大人しく暁の言葉に答え、次のアシッドの問いには視線を他に移した。その先にあるのはスバルとミソラが行ったドアとは違うドア。
「……あの向こうに閉じ込めています。……セイリュウが自分にしか解除できないと言ってたので、そのセイリュウが倒れたからそのロックも解除されると思います」
「なるほど。……あの部屋の中に閉じ込められている人達はジャックとジョーカーに任せるとして、私達はあなたの部屋にあるというパソコンを調べましょう」
立ち上がった暁は藍川に手を差し出し、対する藍川はおずおずと遠慮がちにその手を取る。

――――藍川の部屋――――

ＷＡＸＡへの報告を終えたジョーカーとジャックに研究員達への解放を指示した暁は藍川と共に藍川の部屋のパソコンを調べている。
アシッドはパソコンの電脳内に入ってメールボックスを解析中だ。メールボックスだけでなくメール自体にもプロテクトがかけられて

いたのである。

「……どうだ？　アシッド」

『……高度なプロテクトがなされていますが、このくらいなら問題ないでしょう。……あと1分以内で解析できます』

暁の問いにアシッドはいつも通り冷静に答える。アシッドの解析能力＝ＷＡＸＡの集大成なので、彼にかかれば大抵のプロテクトは容易に解除できるだろう。

アシッドの進行具合を聞いた暁が「ふぅ」と一息ついた矢先、ドアを勢い良く開かれた。

「暁さん！」

「おわっ！？　ス、スバル、いきなり大きな声出すな！」

暁はちょうどその辺のイスに座ろうとしていた。故に、スバルの叫びで座り損ねて転んでしまったのである。

普段のスバルなら謝ってから本題に入るだろうが、今の彼にはその余裕が無かった。今の彼は明らかに動揺している。

「ツバサ君がどこにもいません！」

「何？　他の部屋には――」

藍川に手を貸されながら立ち上がった暁は自分で言いかけて気付いた。隣の部屋に居る人を見に行くのにこれだけ時間が掛かるわけが無い。それはつまり……。

「他の部屋にはいなかったのか？」

暁の問いにスバルとミソラは正直に頷いた。

「はい。隣の部屋を始め他の部屋も探してみましたが、ツバサ君はどこにもいませんでした」
『スバルとミソラ、オレとハープで手分けしてこの研究所内を探したんだ。間違いねぇ』
スバルの報告とウォーロックの補足。他の部屋、もっと言えばこの研究所内をくまなく探しても、ツバサはいなかったという事だ。つまり、バックれだ。
暁は額に手を押さえて盛大なため息を付いて、ツバサに電話をする様にスバルに指示を出そうとしたが、その直後にアシッドの解析結果が出た。
『シドウ、メールにかけられていたプロテクトを解除しました』
それを聞いた暁は方針変更。メールの差出人を聞いてからでもスバルへの指示は遅くは無いと考えたのだ。
「そうか。それで、差出人は？」
『それは今から確かめます。……ッ！　……シドウ、皆さん。覚悟して聞いてください』
差出人を見たアシッドの口調は重い。それを不思議に思った暁は首を傾げながら自分の相棒に問いかける。
「？　何だアシッド。もったいぶらずに早く言ってくれ」
『……』
アシッドが暁の言葉に押し黙る。アシッドは人工ウィザードのた

め感情を顔に出す事は出来ないが、もし出せたなら自分の見た事に戸惑い、疑っただろう。
単純に、自分の解析結果が信じられなかったのだ。

「アシッド――」

されど、暁からの再度の要求でアシッドは静かに答えた。

『……ツバサです』

「……何？」

暁が尋ね返すのは聞き取れなかったからではない。確かに小さい声ではあったが、相棒の声が聞こえないというのは有り得ないのだ。
アシッドはしっかりした声で言い直した。

『……セイリュウの入ったメールが送られたのは、ツバサのハンターからです』

第１３３話　終わりの始まり

アシッドの言葉でその場に少々の沈黙が流れる。

藍川にセイリュウを送ったのはツバサのハンターからだったのだ。

この言葉に最も早く反論したのはスバルだ。

「ちょっと待ってよ！　ツバサ君は学校にいる時は僕達が。ＷＡＸＡに居る時はアイリスが近くに居たんだからそんなメール送れるはずない！」

アシッドが信じたくないという理由が良く分かる。これではツバサが敵だと……裏切り者だと言っているようなものだ。

スバルの『信じたい』という思いから来る可能性を、暁は私情を混ぜない視点であっさり打ち破る。

「……いや、そうでもない。スバルも知ってると思うが、アイツはよくＷＡＸＡを抜け出している。それに、アイリスもよくツバサのお使いに出ている。……だから、メールを送る隙はいくらでもあるんだ」

「……」

暁の言葉にスバルは押し黙る。

ツバサはよくＷＡＸＡを抜け出す。
アイリスをお使いに出かけさせる事も多い。

これらの事は前々から暁やジャックに聞いていた。彼を信じたいという思いから、それらの事がスバルの頭から抜けてしまったのだ。

しかし、それでもアシッドの言った事実を信じたくない。ツバサは今まで戦闘でも、アヤカシ関係でも、自分達の事を思い、行動してくれた。
一緒に戦って、笑い合って……そんな友人を疑いたくない。

彼はスバルにとって、大事な友達だから。

信じたいモノを信じるのに理由なんてありはしない。
信じるための理屈も必要も無い。

スバルはその思いを胸に、改めて暁に反論する。

「……でもっ、それじゃあ今までの行動の説明が付かない。もしツバサ君が敵なら、今まで僕達を助けてくれたのはなんなの！？」

「……確かにそうかもしれないが解析結果だと――」
『大変よシドウちゃん！』

いくらツバサを信じたいといっても事実として解析結果が出たのならそれに従って行動するしかない。しかし、同時にツバサを信じたいという思いもあり、その正反対な思いに葛藤していた暁の動揺をさらに大きくする原因が来た。

ヨイリーが慌てた口調で電話を掛けて来たのだ。
シドウは自身が冷静になるために息を吐いた後、ヨイリーとの対話に応じる。

「……博士。今は少し込み入ってて――」
『それ所じゃないわ！　ツバサちゃんが……ツバサちゃんが……』
「ッ！　あの野郎そっちにいましたか！　今すぐＷＡＸＡに戻ります！」

自分の仕事を終えたら報告に来て加勢に来い。おまけを言えばメールの事を問いただす。ファイブエレメントがツバサを嵌めるために施した『罠』という事も有り得るのだ。心臓に悪いドッキリタイムは早く終わらせたい。

ツバサの疑惑がヨイリーの『ツバサはＷＡＸＡに居る』という発言で一気に日常レベルに戻る。それにより暁の緊張もほぐれ、頭の中でＷＡＸＡに帰る算段を付けていた。事後処理班が来るまで誰をここに残らせるかだ。

暁の緊張がほぐれた理由とその後の算段、そしてそこから緊張していた理由を逆算したヨイリーは暁の気持ちを汲み取って陰鬱な顔で続きを言った。
自分（ヨイリー）の言葉は暁やスバル、聞いた者の心を戸惑わせる事になるから。

『……えぇ。早く来てもらった方が良いわね。今はリアルウェーブの防壁とバトルウィザードで防げてはいるけど、じきに破られるでしょうから』

ヨイリーも直接言うのは辛かった。だから少し遠回しに言ったのだが、暁はそれに気付かなかったようだ。

「？　ＷＡＸＡが誰かに攻撃を受けているのですか？　ツバサはどうしたんです？」

『……ＷＡＸＡを攻撃しているのはツバサちゃんよ。警備のバトルウィザードを引き裂いて攻撃を開始したの。ッ！！　はぐれウィザードの大群がっ！』

ブッ！　ザーザーザー……

通話が切れ、部屋には戸惑いと混乱による沈黙が流れる。

ミソラはスバルの手を握り、不安そうな声でスバルに話しかける。

「……スバル君。……ツバサ君は……敵だったのかな？」

「……分からないよ」

スバルの弱々しい声に、ミソラは自身の不安を拭い去るように強い口調でスバルを見る。大きすぎる不安と戸惑いで泣きそうな顔だ。

「だってっ！　今まで私達に優しくて、自分の目の前の誰かを見捨てるなんて無かったのに！」

「分からないよっ！」

スバルは思わずミソラに怒鳴ってしまった。ツバサが敵だなんて信じたくない。しかし、メールで生じた疑惑はヨイリーからのＷＡＸＡ攻撃の情報で確証になりつつある。

彼は、ツバサは……自分達（スバルたち）を裏切ったのだと。

暁は不安に押し潰されそうなスバルとミソラの肩にそっと手を置く。

「……ここであれこれ悩んでもしょうがない。今はとにかくＷＡＸＡに行こう。……事実を確かめるのはそれからだ」

スバルとミソラは力無く頷く。

その後、ジャックはコーヴァスの翼が負傷したため研究所に残り、スバルとミソラ、暁が電波変換してＷＡＸＡに急行。ジョーカーもＷＡＸＡに向かう。

事実を、自分の目で確かめるために。

――数分前――

ウェーブロードを走っていたツバサは不意に立ち止まって研究所

の方向を振り返る。

「ッ！　……セイリュウが倒されたか。……急がないとな」

そう言うと、ツバサは再びウェーブロードを駆け出した。

（……正攻法じゃ藍川の心は開けなかったからな。……多少荒っぽい方法になっても、本気で自分の心を誰かにぶつける事が必要だった）

心を閉ざし、それを自分で受け入れているなら普通のやり方では自分の本心を話さない。だからツバサはハイド経由でセイリュウをけしかけたのだ。

自分の力を周囲に対して放たせると共に自分の思いも噴き出させて頭を冷やさせる。

またはその思い自体を誰かに受け入れてもらう。スバルの能力と彼の性格、そして様々な国を周って培われた『受け入れる器量』があれば、藍川の事も受け入れられるだろう。

その2つは、ツバサにとっては確証だった。自分の力を限界まで発しても、スバルがその前に受け入れても、どっちにせよ藍川は救われる。……罪を償う事は無論あるだろうが、それでも自暴自棄になって死ぬよりはずっと良い。

ツバサがハイドに出した注意は2つ。

1つ目は3日後に行動を開始しろという日時の指定。

２つ目は、ツバサのハンター経由で送る事だ。

（これで暁達の疑惑と注意はオレの方に向く。ノイズフォースビックバンで藍川が傷つく事が無い様に『シールド』も掛けたから怪我は無いだろう。……後は――）

ノイズフォースビックバンの破壊力が上がる事をツバサは分かっていた。だから、電波変換を解除した藍川の命に関わる危機が迫った時、スバルと剣を交えた者に自動で『シールド』の魔法が付加される様に『発動条件付の細工』を施しておいたのだ。

ツバサの視線の先にＷＡＸＡニホン支部が見えてきた。

ニホン支部のすぐそばに降り立ったツバサに最初に気付いたのは警備用のバトルウィザードで、不思議そうにツバサに話しかけてくる。

『？　どうしたんだツバサ。作戦はどうした？』

「うん。今終わったみたいだね」

あくまで軽薄に答えるツバサに対し、バトルウィザードは呆れた様なため息をつく。

『……一足先に帰って来たのか……。やれやれ、長官にまた怒られるぞ』

「あぁ、それは無いと思うよ」

『？　それは何故――』

ドスッ！

バトルウィザードの言葉は鈍い音と共に止まり、視線を下に移す。
バトルウィザードの視線の先には、ツバサの手が自分の体に突き刺さっていた。
ツバサの手刀（しゅとう）はバトルウィザードの体を貫通したのだ。

『ツ……バ……サ……？』

ウィザードは視線をツバサの顔に向け、彼への言葉には苦痛と戸惑いの色を混ぜる。
ツバサは縦に入れた自分の手を裏返し、もう一方の手をその切れ目に無理やり捻じ込みながら笑顔を浮かべる。

「だってオレ、もうここに戻らないから」
『な、にを……。ッ！　ぐごぁ！？』

ツバサの両手首から先は完全にウィザードの腹部に入り、平泳ぎの様に外側に力を加えて徐々にその切れ目を広げていく。

『ぐがぁぁぁぁぁ！！　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

ウィザードの断末魔を聞きながらツバサはクスッと笑ってみせる。

「オレがお前等の敵だからだよ。……遊びは終わりだ」
『あっ！　――』

ツバサの言葉とバトルウィザードの短い悲鳴。それと共にウィザードの肉体は縦に割れて消え去った。人間で言う鳩尾（みぞおち）を中心にして、縦に両断したのだ。

ビーッ　ビーッ　ビーッ！！

けたたましい警報が鳴る中、ツバサは不敵な笑みを浮かべながら言葉を紡いだ。

「さて、始めようか」

警報と共にリアルウェーブの防壁がニホン支部の前に展開。さらに、おびただしい数のウィザードや隊員がツバサの前に立ちはだかる。

「……終わりの始まりを」

第１３３話　終わりの始まり（後書き）

さて、次回は戦闘が２箇所で始まります。

それでは次回もお楽しみに！

第１３４話　裏切り（前書き）

さてさて、今回の話は「ポカーン」となるか「えぇ！？」と驚くか「あ、やっぱりか」のどれかですかね。

急転直下クラスの変化が今回投稿する話であります。お楽しみ下さい！

第１３４話　裏切り

「……何だよ……これ……」

スバルの呆然とした声。目を見開き、その言葉には生気が無い。暁など他の面々も似たようなものだ。

ＷＡＸＡに帰ってきたスバル達の目の前にはＷＡＸＡだった瓦礫と、崩壊した事による火災しか残っていなかったのだ。リアルウェーブの防壁は打ち砕かれ、バトルウィザードや隊員は全滅。大量の呻き声が響き渡っている所からして、隊員の中で死者はいないようだ。……骨を折られた痛み等で動けないのだろう。

その代わり、大量のはぐれウィザードやウイルスが宙に浮いていた。ロープの様な物を使って地中から何かを引っ張り出しているようだ。

その他に３つの人影がある。うち１つは誰かを担いでいるのか大きめの影だ。……いや、良く見るとその近くの地面に倒れている人影がもう１人居る。

人影の正体を見極めようとするスバル。そうしている内にその中の１人がスバル達の方を振り向き、話しかけてきた。

「よぉ。遅かったな」

「……ツバサ……君？」

崩壊したＷＡＸＡ、轟々と鳴る火炎。それを背にスバルと向き合うのは、いつも通り後ろで髪を一本に結ったツバサだった。

彼の表情は炎による逆光でほとんど見えないが笑顔を作っている

様に見える。

ツバサは逆光で見えなかったもう1人の人物に声を掛ける。

「オリオン、クインティアを暁に返してやれ。今の暁は電波変換しているから投げても受け止められるだろう。あ、ヨイリー博士はその辺で気絶してるんじゃないかな？」

『分かりました』

オリオンがツバサの命令で担いでいた物を投げるために振りかぶる。

「お、おいちょっと待て――」

『むんっ！』

暁がツバサに詰め寄ろうとした矢先、オリオンは担いでいたクインティアを放り投げ、暁はそっちに対応せざるを得なかった。

クインティアを受け止めた暁は心配そうに彼女を見る。彼女の瞼は閉じられ、眉の位置から考えて安らかに眠らされたのではなさそうだ。

攻撃を受けて気絶したという事である。

「ティア、大丈夫か？　何があったんだ？」

暁の呼びかけでクインティアの眉はピクッと動き、細く目を開けた。

「……シドウ？」

「あぁ、オレだ。もう大丈夫だぞ。……でも本当に何があったんだ」

本来なら安心できる場所で眠らせてあげたいが、暁達が来る前の事を知っていて、まともに口を聞けるのは彼女しかいない。長官も、ヨイリーの姿も見えないのだ。

クインティアは掠れる様な弱々しい声で答える。

「……ツバサが連絡無しで帰って来たと思ったら急にＷＡＸＡを攻撃し始めて、ウィザードや隊員で応戦していた時にオリオンとファントム・ブラック率いるファイブエレメントが攻めてきた……。そして――」

クインティアは首を回し、ツバサの方を見る。その目に味方に見せる様な親しさは無く、怒りと悔しさがにじみ出ている。

「――オリオンはツバサの事を『エーテル様』と呼んだわ」

「ッ！！　……確かなのか……」

それが本当なら由々しき自体だ。戦闘能力は不明だが、倒しようが無い。斬撃も銃撃も効かない相手をどう倒せというのだ。特殊な拘束具を用いて捕らえるしかない。

ヨイリーからのＷＡＸＡ襲撃の電話では精々スパイか、体質から見ても幹部クラスだと思っていた。敵の大将が前線に出てくるなんて誰が予想できる。

しかし、同時に合点もいった。セイリュウは何者かの指示で藍川に近づいたそうだが、あのセイリュウがエーテル以外の命令で易々と従うわけが無い。逆説、エーテルから命じられれば従うという事。セイリュウが言っていたとされる『道化師』というのはまた違う人

物なのだろうが、その『違う人物』の指示を聞いたという事は、エーテルが絡んでいたと考えるのが妥当だろう。

暁の問いにクインティアは眉を顰めて『微妙』という顔をする。

「言っていたのは本当だけど、実際に見たわけではないから確証は無いわ」

クインティアはそこまで言った後、目を伏せて申し訳無さそうに続ける。

「私はオリオンと戦っていたんだけど……この通り負けてしまった……」

「……電波体単体でそこまでの戦闘能力を……」

暁のこの感想は純粋な驚きだ。通常電波体単体より電波人間の方が強いに決まっている。クインティアとヴァルゴが電波変換したクイーン・ヴァルゴが負ける道理なんて無いはずなのだ。

クインティアは首を横に振って、暁の抱いている常識を肯定した。つまり、電波体単体ではないという事だ。

「いいえ。オリオンは電波変換しているわ」

「何？　誰と？」

「……長官よ。最初私はツバサを止めようとしたんだけど、オリオンはそれを見るや否や長官に取り憑いた。オリオンに割って入られ

て私はオリオンと戦う事になり――」
「やられたって事か……」
クインティアの言葉を暁が引継ぎ、その暁の言葉にクインティアは小さく頷いた。
安心できる人のそばに居るからだろう。クインティアの顔色は段々良くなってきた。スバルやミソラは様々な事が起こり過ぎて同様から抜け出せないで居る。
ＷＡＸＡが崩壊していて、それをやったのはツバサやオリオンで、ツバサがエーテルと呼ばれて……。
ドッキリニュースがこの短時間でどれだけあったろう。
暁はクインティアの様子を見てホッと一息つき、改めてツバサの方を向く。
「……ツバサ、改めて聞く。……お前はオレ達の敵……ファイブエレメントのリーダー、エーテルなんだな？」
この問いで、今まで焦点の合っていなかったスバルとミソラの目がツバサの方を向く。２人の顔はひたすらに信じたくないという顔だ。
ツバサは逆光の中、軽く笑顔を浮かべて答える。
「あぁ、そうだ。何なら証拠が必要かい？　……ふっ――」
暁やスバル達が答える前に、ツバサは行動に移した。

ツバサが目を閉じ意識を集中させた途端、彼の体が淡く光り、その姿を変えていく。

両肩の辺りから突起が出来上がり、それはみるみる大きくなって腕となる。そして、『パリパリ』と音を立てながら黒い装甲がツバサに纏われていく。ちょうどリアルウェーブが空気中に実体化するような感じだ。

顔にはオレンジ色のバイザーが現れ、1人の異質な者が誕生した。

オレンジのバイザー。黒い装甲に体を走るラインは金色。

エーテル・フォトンそのモノだった。

ただ、春先にエアディスプレイで見たエーテルは白い装甲だったが、今は先ほど記述したように『黒い装甲』。これは何を意味するのだろう。

彼は自身の構成物質から見ても人間でも動物でもない。故に、『モノ』だ。だからこそ『異質な者』という例えを用いた。

そもそもこれは電波変換でもない。単に自分の体を変えただけなのだから。

暁は目を見開き、絶句した。目の前で起きた事ももちろんそうだが、暗い青の光を纏うエーテルを見て、不覚にもその神々しさに息を呑んだのだ。

なお、この場所まではぐれウィザードが従っていたのはツバサではなくオリオンの命令だ。つい先日まで自分達を攻撃した人間がエーテルですと言われて、そう簡単に信じられるわけが無いだろう。

はぐれウィザードもまた、ツバサがエーテルに変わる所を始めて見たのだろう。地下から何かを引っ張り上げる作業を中断してエーテルの姿を見る。

そして、改めてエーテルに信頼を寄せる。その神々しさはもちろん、自身の電波体としての勘で、エーテルに秘められた力を察したのかもしれない。

エーテルの発する淡い光が全員の視線と意識を奪う中、その中で正気を保っていられたのはジョーカーだけだ。アイリスまでも驚き、目を見開いている。

ジョーカーは納得行かないという顔で歯軋りしながらツバサに問う。

『……ツバサよ、今までの事は全て嘘だったのか？　お前がスバル達のために案じ、行動して……。私と暁、アシッドを治して……。私をヨイリー博士のウィザードにしてくれるように取り計らってくれたのも……全て――』

ジョーカーの拳が硬く握られる。それは怒りというより、悲しみと憤りだった。彼は長くツバサのそばにいたのだ。彼の人柄はスバル達より前に知っていた。そして同時に、彼の事を慕っていたのだろう。

無愛想で厳格ながらも優しいジョーカー。しかしエーテルは、その思いをあっさりと裏切る。

「ああ、そうだ。……全部嘘だよ。中々面白かったよ、友人ごっこ。……あ、お前等と一緒に戦う正義の味方ごっこも面白かったな」

嘲るような彼の口調。
その言葉でスバルが動いた。

「ッ！！　友人ごっこだって……。ふざけるな！！！　僕達はキミの事を本当に信頼して、親友だと思っていたのに！！！」

スバルは左腕に5連続で敵を切り裂く『バトルカード：ソードファイター』を転送。ツバサに切りかかる。自分たちの友情を、想いを無下に扱われた。スバルに剣を握らせる理由はこれだけで十分だろう。それ所か一緒に戦った事すらも『ごっこ』だと言った。

スバルはツバサの事を許せなかった。

しかし、その剣がエーテルに届く事は無い。

ギィンッ！

「……ンフフフ。久しぶりだな、星河スバル。いや、ロックマン！」
「ッ！　ハイド！」

３つの内最後の影、ハイドの電波変換したファントムブラックがステッキソードでロックマンの剣を防いだのだ。

第１３４話　裏切り（後書き）

クインティアの「眉の位置」うんぬんが分からなかった人に補足です。

緊張状態で眠ると眉が強張るのではないかなっていう推測です。けど、安心して眠れて居る状態と、何かしらのストレスを感じたまま寝たのでは寝顔に変化があると思うんです。

なお、オリオンの見た目は話を進める事優先という事で省きました。戦闘時（第１３７話）にでも容姿を書きます。

第１３５話　崩れるアリバイ

ウォーロックはスバルのハンターの中から忌々しげにハイドに対して言葉を掛ける。

『てめぇ……生きてやがったのか。この寄生虫野郎が』

ハイドは強い者に靡き、自分の力ではない力を得て自分が強いと錯覚するほどの捻じ曲がり根性の持ち主。故にウォーロックからの評価が『寄生虫』なのだ。

約１年前の『ラ・ムー』の事件の時は寄生虫という言葉は彼にとってタブーだったが、今回はうっすらと笑みを浮かべるだけだ。

「ンフフフ。残念だが今回私はキャストではないのだよ。どちらかというと観客に近いな」

「何だって？」

ロックマンが怪訝がる様子を見て、ファントム・ブラックは首を回し、自分の背後に居るエーテルを見る。

「なぁに、アイツのシナリオが面白そうだから付き合っているだけだ」

『へっ！　裏切り者同士シナリオの好みが合うってのか！？』

ウォーロックにはもう、ツバサが敵だったという事は割り切れているらしい。かつてのＦＭ星は裏切りの横行する星。そこで強い精神力が養われたのだろう。

しかし、ウォーロックの挑発に対し、ハイドは可笑しそうに笑ってみせる。いつも通りの悪趣味な笑いを。

「ンフフフ……ンファーハッハッハッハ！　私と同じ？　そんなわけが無いだろう！　むしろお前達が思い浮かべるような子供っぽい甘いシナリオだ！　……ッ！　おっと、これ以上喋ると私が消されかねないから止めておこう」

ハイドは背後のエーテルの殺気を察してか、それ以上を話そうとはしない。

一方スバルは、ハイドの言う『ツバサのシナリオ』というのが気になった。

「……ツバサ君はどんなシナリオを……」

「それよりも星河スバル。知りたくは無いか？」

スバルの視線が思考によりわずかに下がり、それを見て不意に話を逸らすハイド。

ロックマンとファントムブラックは互いに剣を交差しながら互いの顔を見る。

「……何を？」

「ツバサがＷＡＸＡに現れた時、エーテルの映ったエアディスプレイが現れただろう。……その時ツバサはお前達のそばにいたのでは無いのか？」

「ッ！！」

確かにそうだ。ツバサが自分達（スバルたち）の前に姿を現して一緒にいる時にエーテルの姿を見たのだ。先程はそれを聞く前に眼前で証明されたので言えなかったが、同じ人間が２人いない限りありえない現象だ。

同じ人間が２人。

自分の思考の中で浮かんだこの単語で、スバルの中に１つの仮説が生まれる。

「……もしかして……ミラーが……？」

才葉シティの戦いで、ツバサは自分とそっくりな自分を生み出す『ミラー』という魔法を発動していた。それならあるいはと思ったのだが、ハイドはわずかに首を傾げるだけだ。

「？　ミラーというのが何なのかは分からないが、外れだ。答えはもっとシンプルだぞ？」

『ダーもうっ！　焦らすんじゃねぇ！！』

剣を交差したまま動かない戦況に嫌気が差したのか、ウォーロックは実体化してファントム・ブラックの上から自身の爪を振り下ろす。

ファントム・ブラックは横に避け、そこにハープ・ノートの音符が迫る。

その音符を地面から出現させたイービルクローで身代わりにした後、再びロックマンに剣を振るう。

「くっ！」

ファントム・ブラックの剣を受け止める事は出来たが、筋肉の緊張が解けた直後に衝撃を受けた事で再び緊張状態に陥る。

肘に無理な力が掛かり、関節が悲鳴を上げているのだ。

ファントム・ブラックは剣に力を加えたまま答えを言う。

「正解は、予め会話を録音していた、だ。お前達の思考、その言葉を話すタイミングを予想してな」

「そんな事が……」

『可能だってのか……。いやちょっと待て。あの時長官が応じたが、もしそれ以外、暁やスバルが応じたらどうしてたんだ？』

「それぞれの思考、会話パターンを考え、誰かがそれに応じたらその人間のパターンに組みかえれば良い。後はそれを映写機のように空に映し出せば良いという訳だ」

「……アイリスが協力したの？」

ＷＡＸＡに戻る最中、暁はウェーブロードでアイリスに詰問した。ツバサと最も近い者という事で何か知ってないかという物だ。アイリスはそれに対して首を横に振るだけで、『何も知らない』と否定し続けた。

そして先程ツバサがエーテルに変わった時に驚いていた所からして、彼女が何も知らなかったという事がスバルにとって明白になったのだ。

それでもアイリスを疑う様な発言をしたのは、念のためというものだ。

ファントム・ブラックはチラリとアシッド・エース達と一緒に居るアイリスに視線をやった後、ほんの少しだけ首を横に振る事で否定した。

「……いいや。彼女はツバサの計画には無関係だ。……ただ、いつ

までも自分のそばにいられては計画を実行出来ないという事で離れさせるようにしたようだがな」

その言葉に反応したのはジョーカーだ。

怒りと共にアシッド・エースから離れ、ファントム・ブラックに拳をぶつけながら怒鳴るように問う。

『ではっ！　ツバサが私をヨイリー博士の元にやったのは！！』

ファントム・ブラックの頬にジョーカーの拳がめり込み、ファントム・ブラックの体はノーバウンドで数メートル吹き飛ぶ。それをオリオンが受け止め、地面に足を下ろさせた。

これに対してはツバサ……つまりエーテルは自ら答える。

「そう。お前等にいつまでも一緒にいられると迷惑だったんでな。ジョーカーの方は上手くいったが、アイリスの方は律儀でね。まぁ、最終的にはスバルに渡せたから良かったかな」

『ッ！！　貴様ぁぁぁぁぁ！！！』

ジョーカーの激昂。ファントムブラックを吹き飛ばした直後という事でエーテルのそばにいた。ジョーカーは即座にツバサに拳を振るう。

スバルや暁たちばかりか、もっと付き合いの長い自分とアイリスの信頼を完膚なきまでに裏切ったのだ。

「……」

ジョーカー怒りの鉄拳。それに対しエーテルはジョーカーを見た。

それだけだ。

たったそれだけでジョーカーは車にはねられた様に横に吹き飛び、

岩盤に叩きつけられた。

『グッ……うぅ……』

理解不明な力により岩盤に叩きつけられたジョーカーだったが、まだ岩盤に押さえつけられる力よりジョーカーの力の方が強かったらしい。徐々に打ちつけた背中を岩盤から離していく。

それを見ていたはぐれウィザードの1体はロープ状の物を引っ張りながら声を発してきた。

『エーテル様！　やはり我々も加勢しましょうか！？』

エーテルは首を回してはぐれウィザードに視線を送り、自らも声を高くして応じる。その隙にアシッド・エースは持っている銃からレーザーを放つが、オリオンの槍でそれを防がれてしまった。

「いや！　この位なら想定の範囲だ」

そう言いながら腕の中の一本をジョーカーに向ける。

その瞬間、ジョーカーに異変が起きる。岩盤から離れて来た背中が、徐々に岩盤に戻って行くではないか。

『ッ！　ぬっ……ぐぉあぁぁぁぁぁぁぁ！！　……こ、この圧力はっ！！』

先程よりもはるかに強い圧力によりジョーカーの体は再び岩盤にめり込み始め、後頭部に背中、両腕両足。背面全てが岩盤にめり込み、その強大な圧力は依然止まらない。

メキメシメシメシ！！

『ぬぐぁぁぁぁ！！！』

悲鳴と共にジョーカーの体は腹部を中心に岩盤に埋もれていく。

この間ロックマン達は何もしなかったわけではない。攻撃はしている。しかし、エーテルが2本目の腕をロックマン達に向けているだけでロックマンのロックバスター、ハープ・ノートのショックノート等の攻撃が地面に吸い込まれていくのだ。まるで、強大なG（重力）に押し付けられているように。

「……」

岩盤の中ほどまでめり込んだジョーカーに対し、エーテルは無言で3本目の腕をジョーカーの方に向け、腕をゆっくりと持ち上げる。そしてそれを下ろした途端、崖崩れのように岩盤は砕け、中程までめり込んだジョーカーは巨石に押し潰された。

「ッ！！　ジョーカァァァァ！！！」

スバルの叫びは岩盤が崩れる轟音で遮られ、ジョーカーにも、誰にも響かない。

第１３５話　崩れるアリバイ（後書き）

ちなみにツバサが用いた思考を読んでの録音トリックは『コードギアス』よりアイデアを頂きました。考えてみればアレもＣＬＡＭＰ作品で、主人公の声優は四月一日君尋と同じ福山潤でしたっけ。

第１３６話　明かされた計画

岩盤が崩れた轟音が収まった頃、スバルは顔を俯かせてエーテルに問う。

「……何で……ジョーカーを……」

「敵だから」

あっさり答えるエーテルに対し、スバルは怒りで拳を固めながら再度問う。

「……ツバサ君の計画って何……？」

この問いはエーテルにため息を生み出させた。それほど長くは無いため息をついた後、エーテルはバカバカしげに話しかけてくる。大人が子供に１から１０まで教えるような気だるさで。

「……なぁスバル、バカバカしいと思わないか？　いつまで経っても自分の正しさを証明するためだけに相手を傷付け続ける人間。その歴史。……オレはな、それを終わりにしたいんだよ。この――」

エーテルが親指で後ろのはぐれウィザード、厳密に言えば引っ張り出されている物を指差す。

轟音と共に、地中深くに埋められていた物が姿を現した。

ガラガラガラガラッ！！

エーテルは声高らかにその存在の名前を呼ぶ。

「ココロサーバーでな！」

「「「ッ！！」」」

岩を押し退けながら現れたのはサーバーというサイズでは説明できない大きさだった。一辺は１０メートルを優に超え、人間の脳を思わせるような凹凸が外壁となっている。それを複数のはぐれウィザードがロープの様な物で吊っている状態だ。

スバルを始め、暁やミソラが驚いている中、エーテルは説明を続ける。

「ココロサーバーは２００年前に【ダークチップシンジケートネビュラ】という組織が崩壊した時に溶岩に埋もれた。それが富士山の火口、つまりこのＷＡＸＡニホン支部の地下だったと言う訳だ」

この発言でも暁達は驚いていたが、暁は１つ不審な点を見つけた。

「ちょっと待て！　溶岩に埋もれていたならほとんど崩壊してもおかしくは無いだろう！」

それでもエーテルの余裕は消えない。

エーテルは喉の奥で「くっ」と笑い、そんな事も分からないのか？　とでも言いたげに答える。

「そんなの、修復すれば良いだけだろうが。オレがお前等に近づいたのは、修復するならその場所に近い所に暮らした方が良いと思っ

たからだよ。現に、修復は完了している。これで人間の心をパターン化すれば、下らない争いなんて物はこの世から無くなるだろ？」

スバルはそれを聞いて目を見開いて愕然とする。

「……それって、僕達が僕達でいられなくなるって事じゃあ……」

人間の心をパターン化する。それなら確かに争いは無くなるだろう。人格、心までも完全に管理された世界だ。争いが起きるわけが無い。

しかし、それは同時に個々としての人格を失う事を意味する。

類似点は有っても同じではない。

そういった人間の一面を完全に否定し、管理しようというのだ。

エーテルはスバルの危惧に再びため息をつく。下らない感情だと言っている風に。

「はぁ……。それ以外に方法が無いならそれしかないだろ。……言っておくが、僕達が良い未来を作って見せるから見守っていて。とかってアニメっぽい事を言っても無駄だぞ。オレはお前達を、いや……人間自体を信じていないからな。何度も歴史が証明してるのに信じろというのが無理だろ」

エーテルはそう言いながら巨大なサーバーの上に飛び乗る。ココロサーバーははぐれウィザードの引っ張るロープにより徐々にその高度を上げ、ＷＡＸＡニホン支部を囲う岩盤より高い位置に登った。

今まで倒れていた人影は無造作に放り投げられ、ココロサーバーの上に落下する。

空高く上がった事で、逆光の影響が無くなった。顔の判別が出来るようになったその人は、アメロッパ大統領のアーノルド・ローグだった。

エーテルはスバル達を見下ろす様な状態で声を上げる。

「この場でお前等を倒しても良いがそれだと面白くない。……3日後、ココロサーバーを起動する。地図データはこちらから送ろう。アーノルド・ローグは人質だ。……止められるものなら止めてみろ！」

エーテルの挑発的で高圧的な言葉と共に、オリオンとファントム・ブラックはツバサの隣に飛び乗る。

「ッ！！　逃がすか！　スバルっ！　ミソラっ！　追うぞ！！」

「「はいっ！！」」

地上で暁の指示によりロックマンとハープ・ノートが動き出そうとしている時、ココロサーバー上ではこのような会話が成されていた。

『エーテル様、私は一度あの者達と戦ってみたい。……よろしいかな？』

エーテルはオリオンの顔を見て、見透かしたような笑みを作る。

「……ふっ。適当にあしらって帰って来いよ」

『はっ！』

オリオンはサーバーから飛び降り、向かってきたアシッドエースとロックマン、ハープ・ノートを叩き落すべく槍を振るう。

『ぬぅん！！』

払いによる2連斬撃。それはアシッド・エースとハープ・ノートを捉えた。

正確に言えば、ハープ・ノートがロックマンに降りかかる斬撃を庇ったのだ。

「ミソラちゃん！　暁さん！」

ミソラと暁はオリオンと共に地上に落ちていく。

スバルの叫びに、ミソラは痛みに耐えながら声を張り上げた。

「大丈夫！　それよりスバル君はツバサ君を追って！　止めないと私が私で……スバル君がスバル君でいられなくなる！！」

「こっちの事は心配するな！　すぐにオリオンを倒して加勢に行く！！」

ミソラと暁の言葉に、スバルは地上に戻る足を止めて歯を食いし

ばる。出来る事なら暁とミソラの元に向かいたい。しかし、その2人の意志を無駄にしたくなかった。
故にスバルは選択する。

「行くよ！　ウォーロック！」
『おうっ！　ツバサの野郎に一発かましてやろうぜ！！』

スバルとウォーロックはかつての友であるツバサ……エーテルを追った。

そしてエーテルもまた、スバルが近づいている事を察知していた。

「ん？　スバルが追って来たかな？」
「ンフフ。私は出ないぞ。あくまで私は観客だからな」

ハイドは『観客』という立場を一貫して崩さない。エーテルもまた、その事に文句を言うほど狭量でもない。

「分かっている。かといってはぐれウィザードじゃあ束でかかってもロックマンには勝てないだろうからな。……オレが行こう。久々にこの状態になったから少し体を慣れさせておきたい。……夏休みのロンシャでお前に一発かまして以来だからな」

不敵な笑みをこぼすエーテル。ファントム・ブラックはしれっと頷いた。

「では私はこのサーバーをアジトに運んでおく事にしよう」
「あぁ。頼む。……それからハイド」

「ん？　何だ？」

言い忘れた様にエーテルから呼ばれ、顔を向ける形で反応するファントム・ブラック。

エーテルは大した事でもないと言いたそうな口調で言った。

「オリオンは多分戻らないぞ。少なくとも、危なくなったらこっちに逃げてくるってのは無いだろう」

「……オリオンが裏切るという事か？」

「いいや。……武士風に言うと、死に場所を見つけたって所かな」

飛び降りて戦いたいと言ったオリオンの目は、強い者と戦って死ねるなら本望という目をしていた。ＦＭ星人で最初にコンタクトを取ったのは彼なのだ。付き合いは長いし、中々気も合う。

「知ってて送り出したのか……」

呆れた様なファントム・ブラックの視線。それを受けているエーテルはロックマンが迫ってくる方角に意味深な視線を送り、小さい声で呟いた。

「それがアイツの……オリオンの望みならな」

エーテルのその言葉に込められた意味を察する事が出来るのは、精々セレナードやアイリスといった彼の事を良く知る者ぐらいだろう。

エーテルは１人サーバーから飛び降り、『自分も残ってエーテル様に加勢する！』と言うはぐれウィザード達を説得してその場に残る。

「……ツバサ君……」

少しして、スバルがエーテルの元に追いついた。その目に先程の様な戸惑いは無い。送り出してくれた暁とミソラのためにも、自分が戦わなければいけないと奮い立たせたのだろう。

戸惑いは残っている。しかし、地上で戦っている2人の思いの方で上塗りしたのだ。

ツバサはそれを察した。察しても、態度は変えない。

「よぉスバル。地上ではオリオン達も戦っているだろうし……それじゃあオレ達もそろそろ始めようか」

「……絶対にキミを止めてみせる！」

緊迫感に満ちた風が天空を舞う。

地上ではオリオンＶｓハープ・ノート&アシッド・エース。

天空ではエーテルＶｓロックマン。

天と地。２つの戦いが始まろうとしていた。

第１３６話　明かされた計画（後書き）

次回は2箇所での戦闘という事で、場所ごとに話を分けます。

それでは次回もお楽しみに！

第１３７話　サテラポリスのエース（前書き）

お待たせしました！

実はこの話の戦闘シーンって戦術を考えるのを忘れていたんです。

故にここまで時間がかかったという（苦笑）。

第137話　サテラポリスのエース

ロックマンがエーテルに追いつく少し前、アシッド・エースとハープ・ノート、オリオンの戦いは始まっていた。
地上に降りたオリオンは地面に槍を垂直に刺し、仁王立ちの体勢で声高々に名乗る。

『戦う前に名乗っておこう！　私はエーテル様の側近、オリオン！　今の名はオリオン・プライド！！』

やけに堂々とした敵に呆気に取られたサテラポリス側だったが、暁はすぐに我に返ってやり返す。

「オレはサテラポリス日本支部のエース、暁シドウだ！　そして今の名は、アシッド・エース！！」
『うむ！　良い名乗りだ！　やはり戦は互いに堂々と名乗らないとな！！』

暁の名乗りに感心してご満悦のオリオン・プライド。
ハープ・ノートはとある行動に出る。暁が共感しようとしていたからだ。このままでは古風な話が始まって一向に話が進まない。自分の大事な人（スバル）が1人で戦っているというのにだ。

ハープ・ノートは静かに自身の青いギターに手を掛ける。

「だよなぁ――」

暁がオリオンの言葉に素直な感想を言おうとした直後、ハープ・ノートの手が弦をかき鳴らす。

「ショックノート・フォルテシモ！！」

「おわっ！？」

『ぬぅっ！？』

いきなりの攻撃にその場から飛びのくアシッド・エースとオリオン・プライド。

２人が文句を言う前に、ハープ・ノートは声を張り上げる。

「スバル君が１人で戦っているのに！　何を暢気に話してるの！！」

委員長に負けず劣らずの怒気を放つハープ・ノート。

暁はハープ・ノートに近づいて弁解するように説明した。

「それは悪かったと思うけど、いきなり攻撃は驚くだろ」

「んん！！！？」

「……すみません。冗談です。オレが１００％悪かったです」

これはもう説明ではない。ミソラの怒気に圧された暁はルナに怒られたスバル並みに平謝りだ。

一方、暁とミソラ、オリオンから少し離れた所で岩肌に背中を預けているクインティアと隊員達。

クインティアは体を休めるために岩肌まで向かったのだが、それが良い目印になったのか目覚めた隊員が続々と集まってきたのだ。

良く分からないけど、人の多い列に並んだ方が良いんじゃね？

という、人のいる所に人が集まる習性である。

なお、ヨイリーもいつの間にか目覚めて、いつの間にかその負傷者グループの中に入っていた。

男性隊員がハープ・ノートの怒気を見た時の、呟くような感想。

「……な、何だか自分の中で響ミソラの純真で可憐なイメージが崩れたのですが……」

ヨイリーはそれに対し、メガネをキラーンと光らせる。

「恋する乙女ってのはね、大事な人のためならいくらでも無茶が出来るのよ」

先程感想を言った男性隊員が「そういうものなのか……」といまいち納得できていない時、その隊員の方を女性隊員が叩く。

「アンタそれだから２９歳にもなって彼女の１人も出来ないのよ」

「……」

もうすぐ三十路。そろそろ年齢的に焦り始めていた男性隊員は沈んだ。

そのやり取りを見ていたクインティアは柄にも無くため息をつく。

（はぁ……。シドウが戦っているというのに、ヨイリー博士まで……）

その外野の空気を察してか、オリオンは一度視線をそちらに送った後で暁とミソラの方に向き直る。

その途端、空気が変わった。場は緊迫感に満ち、オリオンはすさまじい殺気を放つ。少しでも気を緩めれば首の刎（は）ねる映像が見えるほどの殺気だ。

『……さて、そろそろ本当に始めないと命の奪いなんぞ出来なくなるな。……始めるか』

言うなり、オリオン・プライドは槍の先端を地面に突き刺した。

解説が遅れたがオリオンの容姿を一言で言えば騎士だ。

装甲の基調となる色は威厳の高さを意味するような金色。頭部と肩、上腕前腕……関節を除く場所に金色の鎧を纏っている。

関節を除くといっても、膝の皿は脹脛（ふくらはぎ）からの装甲が。肘は前腕からの装甲が保護している。

大きな特徴は持っている武器だ。

槍を使っているのだが、両端に刃がある。一方は三叉に分かれて

おり、もう一方は簡素な一枚刃だ。なお、両端どちらもみねが無い。つまり両刃だ。刃の形状は薄く、先端が鋭利。
三叉の中心と、もう一方の一枚刃の幅が同じ。そして三叉の両脇の2枚の刃が同じ幅だ。
前後どちらにも対応できる武器である。

地面に深々と槍を突き刺したオリオン。その直後、ヨイリーやクインティアが居るエリアを囲うように金属質な柱が地面から現れる。ジョーカーのギガントビルディングの様に重厚で太い。色は金色だ。
暁はその柱を見て慌ててオリオンに言葉を発する。大事な人が敵の柱に囲まれたのだ。動揺しなかったらむしろおかしい。

「なっ！　おいオリオン！　何だあれは！　ティアを……ヨイリー博士をどうするつもりだ！」

対するオリオンは槍を引き抜いて柄を肩に担ぐ。

『どうもこうも、攻撃の1つや2つで喚かれたら五月蝿くて敵わん。一種の隔離だ』

オリオンは暁とミソラから距離を取り、再び槍を地面に突き刺す。途端、アシッド・エースとハープ・ノートの足元からは先程よりも少し細い柱が現れ、2人は体勢を崩した。
地面を押し退けて突き出すので、地面自体を崩す事が出来る。その周辺にいたら体勢も崩すだろう。

「わわっ！」
「くっ！」

ミソラ、暁共に倒れないように体勢を低くしたのだが、それはオリオンに隙を作るようなものだ。
オリオンは三叉の方をハープ・ノートの方に向け、自身も体勢を低くして『突き』の構えを取る。

『……ジョーカーという者は障害物や壁として用いていたようだが、地面から競り立つ置物というのは相手の足場を崩す事も出来るのだ。……グングニル・クライシス』

その瞬間、オリオン・プライドは突撃する。ミサイルのような勢いで、ライフルのような正確さで、ハープ・ノートに迫る。セイリュウを降した、高速の突きだ。

「ッ！　――――ッ！！」

ハープ・ノートの声にならない叫びと共に彼女の姿は消え、次の瞬間ＷＡＸＡを囲う岩盤に衝撃音が響く。
電波変換して身体能力が格段に上がった暁でさえ見えない高速の一撃。

岩盤に激突した衝撃音で暁は慌ててそちらを見る。そこには、槍で突かれて岩盤に激突したハープ・ノートの姿があった。岩盤には衝撃の余波としてヒビが入っている。

「ッ！！　ハープ・ノート！！」

串刺しになってもおかしくないスピードとパワー。オリオンほどの実力者なら急所を間違えるわけが無い。最悪の未来を予想し、暁は愛銃、アシッドブラスターを持つ手に力を込める。

「……これは、オレがケリをつけるしかないか」

自分の命と引き換えにしても、オリオンだけは倒さないといけない。そうしなければ次の対象は他の誰かに行くだろう。クインティアはもちろん、双葉　ツカサや尾上（おがみ）　十狼（じゅうろう）。サテラポリスに登録されている電波変換メンバーが狙われる。

彼らならスバルと共に戦ってくれるだろう。しかしそれを逆に言うと、それだけ敵から見れば狙われやすい事を意味する。

彼らを護るためにも、自分がオリオンに止めを刺さないといけない。

アシッド・エースの体がファイナライズにより黒く変化する。銃口から光が迸り、飾り気の無いソードと化す。

「……行くぞ……」

静かな覇気を出しながら、アシッド・エースは踏み込む足に力を込める。

その刹那、アシッド・エースの聴覚が幼い少女の呻き声を捉えた。

「うっ……くっ……」
「ッ！？　ミソラ……」
『……ほぅ。運が良いな』
暁の驚いたような声にオリオンの平坦な感想。
ミソラは生きていた。
暁の角度からは見えないが、オリオンの３つに別れた槍の刃の間にハープ・ノートのギターが挟まる事でギターの厚さ分だけ突きを防いだというわけだ。
しかし……。
「イッ……」
『……だが、あくまでほんの少し威力を軽減できただけみたいだな』
オリオンの言う通り、あくまでギターの厚さ分だけしか防げていない。それはつまり、そこから先は刺さっているという事だ。
１０センチの長さの刃を２センチ防いだとして、残り８センチが刺さるのと同義だ。
電波変換時は防御力も強化されるため、大抵の攻撃に対して切断されたり貫通されるという事はない。
だが、それはあくまで並みの攻撃ならの話。
『……私が先代の王の下でＦＭ星で親衛隊を束ねていた頃、私はこの技で敵軍の城壁を砕き、その先にいた兵さえも倒したのだ。この程度で済んだだけマシだろう』

城壁まで砕くような一撃が並みに入るわけが無い。

「うっ……」

ハープ・ノートの傷口からは自身を構成する電波が溢れ出る。彼女は呻き声を立て、わずかに足踏みをした後地に伏した。踵を支点にして爪先を持ち上げる足踏みの仕方だ。

オリオンは崩れ落ちた少女を見ながらアシッド・エースに話しかける。

『……この娘は元は人間だ。このまま人間に戻ればすでに電波として流れ出た構成電波、つまり肉体がその分だけゴッソリ無くなるぞ。助けたければ私を倒すしかないが、お前に出来るか？　サテラポリスのエースとやら』

流れ出た分を『バトルカード：リカバリー』で修復すれば助かる見込みはある。『バトルカード：リカバリー』は文字通り修復系のバトルカード。しかし、それが効くのはあくまで電波体のみ。デリートされてから使っても遅いし、物質である人間は治せない。

科学はまだまだ万能ではないのだ。

オリオンの挑戦に対し、暁は不敵な笑みを浮かべる。状況的には決して良くないにも関わらず、彼の笑顔には余裕すら見える。

アシッド・エースの背中のブースターから勢い良くノイズの翼が伸び、そのノイズはアシッド・エースの持っている剣に集中される。

ファイナライズにより底上げされた出力。

大技である『オメガレーザー』の出力。

２つの出力を１本の剣に集めた必殺の剣だ。

アシッド・エースは剣にノイズを集中しながらオリオンに言い放つ。

「あぁ。倒すさ。……３人でな！」

『？　３人？』

オリオンが素直な疑問を表に出す。その時、ようやくオリオンに隙が生まれた。場所も丁度良い。

『うぉぉぉぉ！！』

ジョーカーは雄叫びと共に地中から現れ、オリオンの両足を抱え込むようにがっしりと掴む。

ハープ・ノートが倒れ、オリオンが立っている場所。そこはエーテルがジョーカーを吹き飛ばした場所だったのだ。

ハープ・ノートは気を失う直前、地面の下に青色のバイザーを見た。だから彼女は力を振り絞って暁にサインを出した。それが足踏

みだ。
　暁はそのサインを見てハープ・ノートが刺された場所とジョーカーが埋もれている場所が同じである事に気付き、同時にジョーカーとハープ・ノートの思いを汲み取った。
　ジョーカーが捕らえ、ハープ・ノートがサインを送り、アシッド・エースが一撃を加える。だからこそ暁は3人で倒すといったのだ。

『今だ！　暁！！』

　ジョーカーの叫びに暁はしっかりと頷く。

「ああ。……任せろ！」

　暁はオリオンに近づいて行く。背中のブースターは使わず、自らの足で走る。ブースターのエネルギーすらも全てソードに回しているのだ。
　オリオンは逃げたくとも逃げられない。ジョーカーが渾身の力で自分の両足にしがみ付いているのだから。……もっとも、オリオンに逃げる気は無いのだが……。

「おおおおぉおぉお！！！　オメガ・ブレードォォォォ！！！」

　サテラポリスのエース。暁シドウ。彼は雄叫びと共にオリオン・プライドに突進。
　そして、決着は一瞬で付いた。

ザシュッ！！

ブルースノイズのような圧倒的なスピードは無い。カーネルノイズのようなド派手な技も無い。
しかし、そのソードは電波体にとって毒であるノイズを帯びたソードだ。その威力は二乗を超えている。

切れ味と威力を高め、オリオンの装甲を用意に貫通。その刃で深々と切り裂いた。

『グッ……オァ……』

オリオンはダメージを宿主の長官に反映する前に消えていく。傷が付いてから時間が経てば自身を構成する電波が流れ出るが、その前に電波体がデリートされれば単なる斬り傷で済む。少なくとも、体の組織が丸々無くなるという事は無いのだ。

もっとも、傷を負ってから自身の電波が流れ出るまでの時間は文字通り刹那の間なのだが、アシッド・エースの剣はそれを許さないほどの威力だったのだ。

消え行く中、オリオンは暁にしか聞こえないほど小さい声で囁いた。

『《……ＦＭ星の……若者達と……良い……関係を……築いてく……れ――》』

「ん……？」

その言葉が気になって、暁はもはや顔しか残っていないオリオンを見る。その時の彼の顔は、どこか安らかな笑みを浮かべていた。祖父母が孫に接する様な好々爺の顔だ。

「ッ！　待てっ！」

その言葉と心の真意を聞きたかった。しかし、声をかけた時にはオリオンの体は消え去っていた。腹部に傷を負った長官を残して。

「うっ……」
「ッ！　長官！」

アシッド・エースが崩れ落ちる長官を支えた直後、オリオンの作り出した金色の柱が消えていく。それと共に隔離されていたクインティアやヨイリーが合流する。

「シドウ！　ミソラちゃん！」

クインティアとヨイリーを筆頭に医療班が走ってくる。

救うべき存在が無事だった。

この事は暁に安心感を与え、彼の足を崩させる。電波変換が解除されると共に地面崩れる暁をクインティアが横から支えて、ゆっくりと地面に下ろす。

「大丈夫？　シドウ、ミソラちゃん」

「あぁ……。何とかな。オレよりもミソラを先に頼む。リカバリーで外側だけでも傷を塞がないと、臓器が1つ以上無くなりかねない」

暁はミソラの方に視線を向ける。彼女はハープの頑張りにより今も電波変換を維持しているのだ。

電波の出るペースから考えて、まだ臓器はどこも消えていないだろうが、それでも早く処置をした方が良いのは確かだ。

暁は医療半に視線を移し、指示を飛ばす。

「長官の方は傷への対処。ミソラの方は傷を塞いでから治療だ。急げ！」

暁の指示で一同は動く。医療班以外の隊員も他の支部に連絡をするなど奔走している。

暁はその様子を見ながら岩肌に背中を預けた。

「……ふぅ。……オレもミソラもジョーカーも動けない。ジャックを呼んだとしても時間が掛かり過ぎる。……スバルの応援は行けそうに無いな……」

「……」

クインティアは何も言えなかった。ここで何を言っても、無力感に打ちのめされている状態の人間に気休めは毒だという事を知っているから。

だから今は暁と共に、スバルが戦っているであろう空を見上げるしかなかった。

第１３７話　サテラポリスのエース（後書き）

次回はロックマンＶＳエーテル・フォトン。そしてエーテルの力（っていうか理屈）も明らかになります。
言って置きますが、前回ジョーカーを吹き飛ばしたのは魔法の力じゃありませんよ。

電波体が相手ならあの能力はチートですからね～。

それでは次話もお楽しみに！

第１３８話　第５元素（前書き）

お待たせしました！　今回正式にエーテルの力の正体が明らかになります。

第１３８話　第５元素

空中でのロックマンとエーテル・フォトンの戦い。先に動いたのはロックマンだ。

『先手必勝だ！　行けスバル！』

「うん！　ロックバスター！」

ロックマンの左腕から放たれるエネルギー弾。その軌道は真っ直ぐにエーテルの腕に向かう。ＷＡＸＡでの戦いでロックマンやアシッド・エースの攻撃を地面に逸らした原因を探るためだ。

（これで少しでもツバサ君の能力が分かれば――）

スバルはそう思いながら自らの放った弾丸の軌道を見送る。

しかし、エーテルが行ったのは先程とは違っていた。

「……」

手を前に突き出すまでは同じだったが、それだけだ。むしろ手の平に受けるように腕を突き出している。当然ながら、小学生が扱うような軟球と電波体の攻撃は威力に大きな違いがある。

その行動にロックマンは一瞬だけギョッとしたが、それはすぐに別の驚きに変わる。

パシュ！

弾丸がエーテルの手の平に触れた途端、ロックマンの放った攻撃が霧散したのだ。粉々というレベルではない。もはや粒子というレベルだ。

「なっ……」

「エーテルの能力はなんなんだ……か？」

エーテルはスバルの内心が予想できたらしく、見透かしたような態度でそんな事を言う。そしてスバルの方も図星だったらしく、警戒したまま頷く。

エーテルの方は「知っても対処できない」と判断したのか、それに答えた。

「事前に断っておくが魔法関係じゃない。手っ取り早く言うと電波を操る事だ」

「……だけ？」

電波を操るのは電波変換の基本中の基本だ。電波変換自体は電波体が微調整を行ってくれるにしても、そもそも電波人間の固有技（ロックマンならロックバスター。ハープ・ノートならショックノート）は自身の電波エネルギーを攻撃に転用する事から始まる。

彼が言っているのは普通の電波人間なら基本中の基本の事だ。

しかし、エーテルはその事を事も無げに否定して見せた。

「いや、お前の考えているものとはレベルが別格だぞ。……そもそもエーテルって何だか知ってるか？」

「えっ？　……昔にあった考えで、この世界を構成する元素の１つだっけ。……それ以上は知らないけど」

科学ヲタのスバルがこれだけしか知らないのも無理は無い。物理用語の『エーテル』はすでに廃れた考え方だからだ。

かつて、西洋の人間はこの世を構築する元素として『火』、『水』、『大地』、『風』の４つを考案した。これが後世に伝わる『四大元素』だ。

しかし、これだけでは『物質』しか表現する事が出来ない。それ以外の物、例えば『光』を伝える存在が考えられてなかったのだ。

科学者としては、その事象が分からなくとも『前提』は欲しいモノ。だから『光を伝える媒介』として『エーテル』という考えを提唱したというわけだ。

言わば、不確定な問題を解くための要素（ファクター）として生み出された理論というわけである。しかし、その理論の辻褄を合わせるには３重、４重の変更が必要となり、「なんだそりゃ！？」と言いたくなるような存在となってしまった。

光を伝える媒介として空間に充満している所から『流体』でなければならず、高周波の光を伝えるためには『鋼』よりも硬くなければならず、天体の動きに影響を与えないという事実から『質量』も『粘性』もゼロでなければならず、さらにエーテル自体は『透明』で『非圧縮性』かつ、極めて『連続的』でなければならない。

というデタラメな理論の元に成り立つモノとなってしまったのだ。故に、今ではほとんど単語だけの存在となってしまったと言うわけだ。

エーテルはここまで説明した後、「だが――」と続ける。

「だが、それはあくまで理論の話。光を伝える存在としてのエーテルは否定されていない」

『？　どういうこった？』

「……つまり、【　光を伝える存在は無い　】とは確定されていないって事？」

スバルが少し考えての結論にエーテル・フォトンは軽く頷く。

ようは、「理論は否定されたけど、光が伝わるのは何で？」という問いに対する答えの１つとしての『エーテル』という存在はまだ死んでいないという訳だ。

光を伝える媒介。

その存在自体はまだ無くなってはいない。

エーテルはそこまで話して、その顔に自慢げな笑みを浮かべる。

「さて、今のオレの名はエーテル・フォトンだ。……エーテルは光を伝える媒介。フォトンは光子。……この姿のオレは『光』を自在に操れる」

それを聞いた直後、ウォーロックの顔が動揺と畏怖に包まれる。

『何でそれを早く言わない。理屈よりも結論を先に言え』という考えがウォーロックの顔に出ている。

『お、おいスバル。やべぇぞ……。アイツ、光を自在に操れるという事は、オレ達のような電波体の天敵だ……』

「えっ？　それってどういう――」

スバルがハンターの中のウォーロックを見た瞬間、エーテルが動いた。及び、言葉を発する。

「実際に体験するのが早い」

ロックマンがエーテルに目を向けた時には、すでに拳を前に突き出していた。

「ッ！！？　がっはっ！？」

拳を突き出している様を目で確認した直後、スバルは後方に吹き飛ぶ。腹部には殴られたような鋭い痛みが響いている。まるで、空間自体に殴られたような感覚だ。

ドサッ

ウェーブロードに背中を打ちつけながら、スバルは痛みを堪えて思考する。

（　ウォーロックは光を自在に操る事を気にしていた。……光……ッ！　まさかっ！　）

ロックマンは起き上がりながら鋭い視線でエーテルを睨む。

「……僕達が普段『光』と呼んでいる存在は『可視光』と言われる周波数帯域の電磁波だ。……電磁波の中には電波も含まれる。……つまりツバサ君は――」

この続きはエーテル本人が言った。

「電波体固有の波長を読み取り、それを分解も出来る。それがお前達の攻撃を霧散化できる理由。

そして、さっきお前に食らわせたような攻撃は空気中に漂う電波体でも視認出来ない程小さい電波を集約、拳を打ち出すと共にそれを放った。……力は弱まるが相手を視認しただけでも一方向に吹き飛ばしたり、ある程度の圧力を加える事も出来るしな。

ＷＡＸＡでお前達の攻撃を歪めて地面に落とせたのは、空気中に漂う微小な電波に干渉、操作してお前達の攻撃電波の軌道を歪めただけだ」

攻撃を歪めた事に関して、良い例えが『電車』だろう。電車はレールに沿って地上を走る。エーテル・フォトンはそのレール自体を歪めて電車の道筋（　攻撃の軌道　）を歪めるのだ。

そして、相手と真逆の波長をぶつけて相殺することも出来る。

一口に電磁波といっても、その種類は『波長』によって様々な呼び名に変わる。有名所で波長の細かい方から順番に、Ｘ線↓紫外線↓可視光↓赤外線↓マイクロ波。そして、『電波』だ。

光は物質に当たった後その色だけが反射されて人間の目に入り、その色として認識できる。赤い物なら赤が反射されて、青い物なら青が反射されて人間はその物質の色を確認できる。

色の区別を行うのが『可視光』だ。

大きく分ければ赤、青、緑の『光の三原色』（3つの色が合わさると無色、つまり透明となる）。この3つの色の配合具合でありとあらゆる『色』が作れるのだ。

なお、もう少し細かく分ければ赤、橙（だいだい）、黄色、緑、水色、藍色、紫の7色。つまり虹の色だ。この並びを逆にして、先程の『紫外線』、『赤外線』の事を思い浮かべるとどうだろう。見事に繋がるではないか。

一方、『エーテル』とは前述の通り『光を伝える媒介』。媒介の意味は『伝える存在』。言わば道筋だ。

電波の進む道筋や電波そのものを操る能力。故に、ウォーロックはエーテルの事を電波体の天敵と称したのだ。

エーテル・フォトンは再び「だが――」と続ける。

「だが、これはあくまで形態変化の類でな。身体能力は普通の人間並みだ。……まぁ、それ以外の電波操作能力や電波体としての固有能力を持つ所はお前達電波人間と変わらないがな」

「……ただその能力が特殊で強力すぎるだけ……」

スバルの呟きに答える代わりに、エーテル・フォトンは拳を構える。

「……その通りだ」

言葉と共に拳は突き出される。

スバルは先程の教訓から横に避けて拳と直線にならないようにしようとしたが、出来なかった。

「ッ！　体がっ！」

動かない。渾身の力を込めればほんの少しだけ動く程度だ。

力は弱くなるが相手を視認しただけでもある程度の圧力を加えられる。それはつまり行動を封じる事が出来るという事。

その事を思い出した瞬間、ロックマンの腹部側面（肋骨の下）に鋭い痛みが突き刺さり、それと同時に動きを封じていた圧力が無くなる。

「ごはっ！　あああぁぁぁ！！」

そして、最初の一撃が手加減されていた事を悟る。今度の一撃の方が何倍も痛い。

何度もウェーブロードをバウンドして止まった場所は、自分が元いた場所から何メートルも離れていた。それは同時に威力も表している訳で、ロックマンは見えない拳が突き刺さった所を苦しそうに押さえながら立ち上がる。

骨による保護が与えられない場所だ。痛くて苦しいに決まっている。

ウォーロックはそんなスバルを見ていられなくなったのか、実体化してエーテル・フォトンに怒鳴り込む。

『てめぇ！　何が身体能力は人間並みだ！　バリッバリ電波人間並みじゃねぇか！！！』

対するエーテル・フォトンは「暑苦しい」と言わんばかりに手首を外側に払う。

「オレの力自体は人間並みだが、空気中に漂う微量の電波を一点に集めたなら話は違うだろ。オレの拳を打ち出すとかの動作は言ってしまえば銃の引き金。実際に攻撃しているのは空気中の電波そのものだ」

「ゴホッ。……『とか』って事は……他の事も……」

腹部の側面を押さえながら尋ねるロックマン。エーテル・フォトンは再び拳を構えながら答える。空手の正拳突きのような構えだ。

「ああ。どんな方向からでも、どんな数でも――」

瞬間、エーテル・フォトンの拳が打ち出される。彼の拳は一回しか撃ち出されなかった。しかし、次の瞬間スバルに襲い掛かるのは

全身に響く激痛。腹部や顔などの正面はもちろん、背中など全身を一斉に殴られたのだ。

「ッ！！　うあああああぁぁぁぁぁ！！」

エーテル・フォトンは打ち出した拳を引っ込めると共に、控えていた拳を打ち出す。

「――時間差でも」

激痛でウェーブロードに倒れこもうとしたスバルの顎に、見えない拳が襲い掛かった。

「がっ！」

空中に浮かび上がるロックマン。彼の体はしばらくウェーブロードに落ちてこなかった。右左前後左右。斜め方向も含めたありとあらゆる方向からの高速の打撃により、空中に滞空したまま殴られ続けているのだ。

「うっ！　くっ！　がっ！　ぐっ！　――！」

そして、ようやく来た『終わり』。ロックマンはようやくウェーブロードに足を下ろした。

ガクッ……

しかし、スバルの体力は限界に来ていた。彼の足は自身の体重を支える事が出来ずに崩れる。四つん這いの状態を維持出来ているだけでも十分な快挙と言えよう。

一撃の重い打撃を全身に何度も浴びたのだ。無理も無い。

「うっ……はぁ……はぁ……」

「何だ、気絶しておけば楽だったものを」

嘲るようなエーテル・フォトンの言葉にウォーロックが切れた。スバルがここまで追い詰められた以上、自分だけでも戦ってやるという意志の表れだ。

『てめぇツバサ！　もう我慢できねぇ！！　それが一緒に戦った仲間に対する態度かぁぁぁ！！！』

「うるさい」

エーテルはその言葉と共にウォーロックを見る。直後、ウォーロックは上からの圧力でウェーブロードに叩きつけられた。

『ぐおっ！　……本当に相手を見ただけでここまでの圧力を……』

呻くウォーロックを放って置いて、エーテルはロックマンに話しかける。

「……スバル。お前は強い。オレに力を貸すというなら止めは刺さない。……オレの願いを叶える同士になる気は無いか？」

スバルは悔しさで歯を食いしばり、それでも強い意志の下に返答

をする。

「ぜ、絶対に……嫌だ。キミがやろうとしている事は人間が人間で無くなっちゃう。……僕は……最後の最後まで諦めないっ。……キミを、止めてみせる！」

苦しさと激痛で途切れ途切れの言葉。それでも星河スバルという1人の少年は自らの思いを言い切った。

「……そうか」

エーテル・フォトンは微笑みながら簡潔にスバルの答えを受け入れ、腕の一本を掲げる。手刀の形を作り、ポツリと言った。

「……じゃあな」

『ダメッ！』

手刀が下ろされる直前、アイリスがエーテルとロックマン達の間に入るが、エーテル・フォトンはウォーロック同様アイリスを視認して押し倒した後、躊躇い無く手刀を下ろす。

多大な圧力が、スバルとウォーロック、アイリスを襲う。圧力の大きさも力も、自在にコントロール出来るのだ。攻撃範囲も威力も、手刀程度の比ではない。

ズドゴォォォォォ！！！

ウェーブロードさえも叩き割る破壊力。ロックマンとウォーロック、アイリスは数十メートルの高さから落ちていく。アイリスの方

はコピーロイドの許容ダメージ量が一定に達したためか、電波化できるコピーロイドごとスバルのハンターに戻った。

エーテル・フォトンはそれを見ながら『エーテル・フォトン』の姿の状態にやっている周辺電波の計測と、その中から必要な電波をコントロールするための演算を一時中断。右手の親指、人差し指、中指を立て、小さい声で唱える。

「……風よ――」

しかし、途中で2つの赤い影がロックマンとウォーロックの位置を横切る事でその言葉は止まる。

1つ目の赤い影はロックマンをお姫様抱っこで抱え、もう1つの赤い影はウォーロックの肩を自身の爪で鷲掴(わしづか)みにするように滞空している。

2つの赤い影が近くのウェーブロードに乗った時、エーテルは平坦にその者達の名を呼ぶ。

「……ソラとスザクか」

エーテルの言葉に、2人はかつての友人であり大切な人と目を合わせる。

スザクと電波変換したソラことスザク・フレアは悲しそうな目で、スザクの方は怒りの眼差しだ。

「……クインティアさんが自分はオリオンと言う電波対に閉じ込められているからって……」

『ツバサ……。今までのアンタは本当に全部嘘だったの!?　……ソラやスバル君……皆に対しての感情も、思い出も……全部嘘だっ

たの！？』

クインティアはオリオンの防壁に閉じ込められている時、ソラに連絡していた。ソラの言葉ならツバサは考えを改めるのではないかという望みがあったからだ。

そしてスザクもまた、聞きたい事があった。自分が生み出された理由と、記憶に細工をされた理由だ。

しかしエーテルは彼女達には用が無いと言わんばかりに背を向けた。その背中にスザクの声が刺さる。

『ちょっと待ちなさいコラッ！　少しはこっちの話に付き合いなさい！　……ソラも何か言いなさいよ！』

「……」

ソラは俯いたまま口を開こうとはしない。かといって腕の中で気絶しているスバルを見ているのでもない。彼女は目を伏せているのだ。

エーテルは振り向き、スザクとソラに視線を送る。

「……それぞれ1人抱えている状態で満足に戦えるのか？」

『ッ！　それは……』

ソラに続いてスザクも押し黙る。今彼女達はロックマンとウォーロックをそれぞれ抱えている状態だ。そんな状態でまともに戦えるわけが無い。

エーテルは再びソラ達に背中を向けるとこんな言葉を残して去っていった。

「……どうしても戦いたいならスバルたちと一緒にいろ。そいつら

ならオレの目的を阻止するために必ず動く」

スザクは遠くなっていくエーテルの姿を見ながらソラに話しかける。

『……ソラ、何で何も言わなかったの？』

「……ＷＡＸＡに戻ろう……」

ソラはそれだけ言うと踵を返してウェーブロードを駆ける。慌てて追いついたスザクは、ソラの呟きを耳にした。

「（……私、バカだ……）」

ソラが何も言わなかったのは、クインティアから彼が敵だという事……エーテルである事を聞いたからだ。それで、とある事を察してしまった。

彼女は今、その悲しみの思いで沈んでいる。だから今の彼女は、最低限の受け答えしか出来ない抜け殻のようなものだ。

――同時刻・空港――

「そこのお姉さん、今から僕と食事でも――」

スッパーン！

ナンパをしていた白髪の男性に鉄拳制裁を加える初老の男性。

「はぁ……。ニホンに来てまでそれか。……いい加減に場を弁えんかゲイル。強引にワシまで連れ出しおって」

初老の男性はチョップをかました手を擦りながら頭を押さえている白髪男性をジト目で睨む。ナンパをされていた女性は気味悪がって逃げたようだ。

その女性の後姿を名残惜しそうに見ながら、ゲイルはふてくされた様子で初老の男性、コクレンを見る。

「別に良いじゃ～ん。今回はＯＦＦで来てるんだし～。連絡無しで遊びに来てシー君やスバル君達を驚かそうと思って～」

年甲斐も無くほっぺを膨らませるゲイルに対し、コクレンはこの国に来てから何度目か分からないため息をつく。

「はぁ～……。そういえば、ライラを国に残すなんぞ珍しいな」

ゲイルは国を出る時、大抵コクレンとライラを連れて行く。ゲイル曰く、このメンバーが一番打ち解けられるらしい。２人のお守りをしているコクレンとしては、お守りの対象が減ったのは嬉しい。しかし、ライラを連れて来なかった理由はまだ聞いてはいない。

ゲイルは肩に自分の荷物を背負いながらそれに答える。

「う～ん。まぁ、たまには良いんじゃない？　彼女の所に客が来るかもしれないし。……まぁ、確率は低いけど、念のために、ね」（……それに、ツー君がそろそろ動き出す頃だろうし）

コクレンはその時のゲイルの表情にいつもと何かが違う違和感を覚えたが、それを尋ねる前にゲイルが歩き出したために聞けなかった。それに、聞いても意味は無いだろう。どうせ適当にはぐらかされるだけだろうから。

第１３８話　第５元素（後書き）

今回はＷｉｋｉを始め、『エーテル』という単語で検索したサイトを資料としました。

次回はスバル、ソラ、ツバサの３場面です。お楽しみに！　って、今から書くんですけどね（苦笑）。

第１３９話　遅すぎた気付き（前書き）

お待たせしました！　やっぱり頭の中での予定より長くなってしまうな……。まぁ良いか。

それでは、お楽しみいただければ幸いです！

第１３９話　遅すぎた気付き

スバルを抱えてＷＡＸＡに戻ったソラを待っていたのはクインティアと暁、ヨイリーとミソラだけだった。ほかの面々は新たな拠点、シーサーアイランドのシーサー城に向かったらしい。治療が必要な者は病院だ。

なお、ミソラも本来なら治療が必要なのだが、スバルが帰ってくるのを見てからと言い張ったそうだ。今はアシッドに支えられて立っている状態である。

ソラはツバサを連れ戻せなかった事を報告した。暁は「気にするな」とソラを励まして無理した笑いを浮かべ、クインティアの方は予想が出来ていたらしい。彼女がソラの応じた第一声は謝罪だった。

「……ごめんなさい。あなたにツバサの事を教えた時、こうなるんじゃないかとは思っていたわ」

「えっ？」

今まで抜け殻だったソラの目に、わずかに『関心』の光が入る。顔を上げたソラに、クインティアは申し訳無さそうにこう言った。

「……あなたに伝えた時、あなたの顔は本当に辛そうだった。伝えるにしても、もう少し後の方が良かったわ……。本当にごめんなさい」

「……」

ソラは再び俯く。クインティアからツバサが裏切った事を電話で聞いた時、無論ショックだった。しかし、ソラが落ち込んでいたのはツバサの正体ではなく、そこから推測される事実だった。

ツバサにとって、今まで接してきたのは『ごっこ』だと言う。しかし、ソラはそうは思えなかった。旅行中や学園祭……彼が『自分自身』を出していたのは多かったように思える。

暁はソラに考える時間が必要だと考えたのか、ミソラとクインティアの肩を掴んで言葉を紡ぐ。

「……それじゃあミソラは病院に行かないといけないし、オレとティアも行くよ。……ソラは、自分がどうしたいのか考えてくれ」

戦うのか、退くのか、自分でよく考えて選べと言う。

「……はい」

ソラは力無く頷き、暁達にスバルを預ける。その後暁達はスバルとミソラを病院に連れて行き、ソラは崩壊したＷＡＸＡに残った。

ソラは無言でＷＡＸＡの方に体を向け、瓦礫の中に歩いていく。ツバサと関わった思い出を振り返る様に。

――――病院――――

ＷＡＸＡやサテラポリスで治療が必要な者は全員この病院に集められている。病院に着いた時にはスバルも目覚めており、アイリスとウォーロックもまた意識を取り戻していた。なお、ヨイリーはシーサー城の方に向かったらしい。

スバルとウォーロックが帰ってきた事は皆素直に喜んだが、アイリスに対しては疑惑の目が送られた。

「ど、どうしたんだ皆。そんな怖い顔して」

暁は場を和ませるために朗らかに言ったのだが、大して効果は無かったようだ。疑惑の目を向けるうちの１人が躊躇いながら言った。

「……いや、アイリスって一番ツバサに近かったんだよな。……その、まだスパイって事は無いのかなって」

「……オレ達の動向をツバサに伝えてるって？」

暁の要約に隊員が頷き、暁は「バカバカしい」と肩を竦める。しかし、数時間前に仲間に裏切られたＷＡＸＡの面々の猜疑心はいつもよりも格段に強まっていた。

「じゃあ、何でデリートされていないんだ？　ウェーブロードも破壊するような一撃で、電波体単体がデリートされてないなんておかしいだろ」

確かにウェーブロードの強度は並みの電波対の攻撃では破壊できない。それが破壊されたとすれば電波体単体で受け止められるダメージを大きく超えている。

しかし、それを言えばウォーロックも同様だろう。

そのくらいの判断も出来ないくらいに、隊員達の不安はピークに達していた。

その後も根も葉もない憶測を暁が否定し、終いにはスバルのハンターに隊員達の手が伸びてくる。アイリスに尋問するためだ。

不安や猜疑心からくる悪意により一体化されるいくつもの『手』。それらがスバルに届く直前、手とスバルの間に颯爽と1人の人間が入り込む。

飄々として掴み所の無い、『風』のような男が。

「はい、弱い者イジメ&妹イジメはそこまで♪」

「ゲ、ゲイル!?」

「ゲイルさん!?」

突如現れたゲイル・ホワイトに対し暁とスバルは当然の事ながら驚き、『誰?』という顔をしている隊員にはクインティアが不承不承といった様子で簡単に説明する。

及び、ミソラがゲイルの姿を見て3歩離れた所からして、『女性の敵である』という事が隊員の第一印象となった。

暁はゲイルが現れた時の言葉を思い出し、ツッコミを入れる。

「いや!ちょっと待て!　お前妹イジメって言ったよな。アイリスの兄ってカーネルじゃ……」

「ちっちっち。甘いねシー君。僕は正真正銘の変態。僕にとって自分より年下の女の子は全員妹だ！！」

この瞬間、隊員たちの中でゲイルに対する新たなイメージが出来上がった。

妹萌え&ロリコン。

この時点で女性隊員は全員ゲイルから離れ、さらにゲイルは自分にとっての向かい風を吹かす。つまり、場をさらにややこしくする発言だと思ってくれれば良い。

「否！　小学生までで可愛い顔立ちをしていたら、男子だろうと妹として扱う！！」

この発言で男性隊員からも生理的に引かれたにも関わらず、ゲイルは依然止まらない。

「例えば～――」

スバルはゾクリとしたものを感じて後ずさる。その動きを敏感にキャッチしたゲイルは目を野生動物のように光らせてスバルに飛びついた。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「あっはっは♪　スバル君照れちゃって、か～わいい♪」

「照れてません！　照れてません！　ホント止めてくださいゲイルさん！！　ひぃぃぃぃぃ！！　頬擦りまでぇぇぇぇぇぇ！！！」

スバルに頬擦りまで始めたゲイル。スバルの背中には冷や汗＋鳥

肌が立ち、暁を始め他の面々はどうするかを考えている。

「さて、御ふざけはこの辺にして――」

ドドドッ！

突然キリッとした目に変えてそんな事を言うゲイルに対し、一同は全員ズッコケた。

ゲイルは目をパチクリしながら小首を傾げる。

「……何で皆ドリフみたいにズッコケてるの？」

「「お・ふ・ざ・けだったのかあああぁぁぁぁぁ！！！」」

知り合いである暁と辱めを受けたスバルによる完全ハモリツッコミ。クインティアは盛大なため息を付いている。話に付いていけないらしい。否、付いていきたくないと言った方が良いだろう。

「うん♪」

ニッコリと頷いたゲイルに怒りを削がれた暁とスバル。完全に開き直られているので怒る気が失せたのだ。ゲイルは一同のため息を聞きながらニコッと微笑む。

「で、本題に入るけど。まず僕とコクレンは観光にニホンに来た。連絡せずに来てスバル君やシー君を驚かせたかったというのもあるけどね。でも、ニュースでＷＡＸＡが壊滅したって聞いて、仕方が無いから町の端末から色んな病院に侵入。キミ達のいる病院を探し出したってわけ。あ、コクレンはホテルに待ってもらってます。何

だかんだで歳だからね」

「「「「……」」」」

一同の沈黙。治安の維持が役職のサテラポリスの隊員がいる前で、町の端末から色んな病院に進入したと言うバカがどこにいる。

もっと分かりやすく言えば、警察の前で堂々と犯罪行為（　ハッキング　）をしましたと宣言するようなものだ。

「（……暁、こいつは逮捕するべきなのか？）」

「（い、いや……どうするかな……）」

一同が動揺から抜け出せない最中、ゲイルは暁に語りかける。隙も見せられない様な、キリッとした表情だ。

「ところでシー君。な～んか物騒な事が聞こえたんだけど？　アイリスちゃんを尋問とか」

「ッ！　……まだ国際問題にする気は……」

ゲイルは一国の主。易々とニホンの事情を話すわけにはいかない。どうするべきか考えを巡らせている暁を、ゲイルはクスリと笑う。そして、こんな事を言った。あくまで飄々と。

「もし万が一ツー君が関わっているとすれば、この国の法律上アイリスちゃんを裁く所か尋問も出来ないよね～？　持ち主が問題を起こしてそのウィザードを尋問に掛けるのは出来るけど、アイリスちゃんはツー君のウィザードじゃないもん」

ウィザードに尋問できるのはそのウィザードが明確に持ち主のウィザードであると認められている場合のみ。アイリスはツバサのそ

ばにいても彼のウィザードではないのだ。
『法の穴』というものである。

暁自身も隊員達の言う尋問には渋い顔をしていたため、そのゲイルの言葉に便乗する事となる。

「……そういえばそうだったな。皆、そういう事だ。下らない事考えてないでグッスリ寝てろ。重傷者も少なくないんだから」
「……暁も結構なケガだろう」

隊員の中からそんな言葉が投げられるが、その言葉にトゲは無いし、スバルに向かっていた手も順々に下りていく。

『風』のようにスルリと姿も実体も無く入り込み、気付いた時には相手を自分の空気に巻き込んで自分のペースにしてしまう。
それがゲイル・ホワイトの本領だ。

その後、ミソラとスバル、暁にクインティア、ウォーロックもアイリスも纏めて診察される事となる。

――――某国某所――――

「ンフフ。ここにいたのか」
「……ハイドか」

ツバサは形態変化を解除しており、『エーテル・フォトン』の姿から『ツバサ』の姿へと変わっている。
今彼らがいるのはラウンジのような場所だと思えば良い。

ツバサは夜空を見上げており、ハイドは静かな足音で彼に近づく。

「元々私の仕事はココロサーバーをこのアジトまで運ぶ所まで。これから先は遠くから高みの見学なり何なり好きにしろ。……だったな？」

それは、ツバサがハイドに提案した同盟条約のようなものだ。あくまでハイドは『観客』なのである。
ツバサはハイドの方に振り向き、微笑みながら少しだけ頭を下げた。

「あぁ。世話になった。感謝している」
「……出て行く前に１つだけ聞いておきたい」

ハイドが今まで見た事が無いような真剣な顔になったのにツバサは関心が湧き、話すように促す。

「？　答えられる内容で良ければ」

「お前にとってこの組織とは何だ？」

「……何が聞きたい」

問われたツバサは怪訝な顔となり、逆にハイドに聞き返す。
ハイドは抽象的な問い方を止めて、改めて尋ねる。

「以前ロンシャで聞いた話で、この組織の役割、言い換えれば『存在理由』は分かった。……お前はこの組織の者達を何だと思っている。……仲間か、道具か」

ツバサはこの問いの答えとして、再び夜空に視線を移すと『名』を挙げ始めた。

「……リーグ、サルト、テム、――」

――――ＷＡＸＡ――――

スバル達が病院に着いた時、ソラはまだＷＡＸＡの跡にいた。周りは少しずつ夕焼けの赤に染まっていく。
今ソラがいるのは、ちょうどツバサの部屋があった辺りだ。

『……ソラ、そろそろ暗くなってきたし――』
「ツバサは敵じゃないよ」

不意にツバサは敵ではないと言うソラに、スザクは実体化して首を傾げる。

『？　ソラ？』

「クインティアさんからツバサの事を聞いた時、思い出した事があるんだ。前に遊園地に行った時の事なんだけど、アイツ私に嫌われようとしてたでしょ？　……今回の事を考えると、すごく変なんだよね」

夏休み明けで遊園地に行った時、ソラがツバサを嫌いになる様に、ツバサは2人の仲を険悪にした。それ自体は事無きを得た。

『それは……自分と関わるといつか裏切られて辛い目に遭うからって……あれっ？』

スザクは言っている途中で気付いた。今回の裏切りを前提に考えると、そこに明らかな矛盾が生まれる。

普段仲良くしていて『ごっこ』扱いで裏切りました。だったら話も通じる。しかし、嫌われようとした事と今回の事を繋げると、ソラがその時傷付かないように予め嫌われておく。とも取れてしまう。それはどちらかというと、本心を偽っての気遣いだろう。

ソラは寂しげな笑みを浮かべてため息を付く。

「ふぅ……。私もバカだよね。その事に気付くのにこんなに掛かったんだから」

その者が将来傷付かないように細工をする『敵』がどこにいる。自分が敵である事でソラが傷付かない様に手を回す。そんな事をする者が今までの自分は『ごっこ』だと言うなら、嘘も甚だしい。

ツバサは立場的には『敵』なのだろう。しかし、少なくとも『ごっこ』というのは嘘だ。彼は彼として、自分達と関わってくれた。

スザクはソラの肩を掴んでグイグイ引っ張る。

『そうと分かればすぐにでもスバル君達に話しに行こう！』

「……」

しかし、ソラは動かない。何やら考え込んでいるようだ。

『……ソラ？』

「……ねぇスザク、ツバサの願いって何なんだろう？」

スバル達に話しに行くのは良いが、それだけの理由が分からない。

「教えてあげましょうか。ツバサの願い」

不意にどこからか女性の声が聞こえてきた。キョロキョロ辺りを見渡すソラとスザクに、声の主は自らの位置を知らせる。

「ここよここ。あなた達から右に3歩行って、右を向いて、下を見て」

その声の言う通り、ソラとスザクは右に3歩歩いて右を向き、下を見る。

「ッ！　これって……」

『鏡に人が映ってる！』

ツバサの部屋にあった鏡だ。そしてその鏡には２０代の黒髪女性が鮮やかな長椅子に座っている。膝には黒いウサギの様な……ぬいぐるみ（？）がちょこんと座っている。イスの両脇には水色髪の少女とピンク色の髪をした少女が立っていた。

ソラはここでさらに異変に気付いた。鏡が倒れている場所は、ちょうどツバサの部屋の中。それも、場所もほとんど同じだ。他の物は何メートルも吹き飛ぶなり砕けているのに、その鏡だけが倒れただけになっているのである。

まるで、周りが倒れたのに自分が倒れなかったら不審に思われるとの理由で、仕方なく倒れるだけにしたように。鏡もその台座も全く破損箇所が見当たらない。

「……あなたは、何者なんですか……？」

ソラの問いかけ。女性はニッコリと友好的な笑みを浮かべながら答えた。

「壱原（いちはら）　侑子（ゆうこ）。……あなたの願い、叶えましょう」

第１４０話　意思（前書き）

今回のサブタイ、ベタでしたかね～（苦笑）。ちなみにこの候補として、『第１４０話　恩』というものがありました。……けど、このサブタイが合っていたりします。

第１４０話　意思

「……願いを――」
『叶えるですって？』

ソラとスザクの怪訝なリアクションに侑子は依然微笑んだまま頷く。

「えぇ。ツバサの願い。細かい所は私も知らないけど、ツバサが何を望んでいるかは分かるわ」
「……教えて、くれるんですか……？」

ソラの問いに侑子は頷き、ソラに話してくれた。

ツバサが望む結末を。

おまけを言えば、実を言うと侑子にはツバサの細かい計画の予想、言い換えれば『ツバサの本当の願い』も予想が付いていた。自分の知る陰険メガネと魂が同じだから、十中八九合っているであろう推測だ。

教えてくれた事の対価は、『届け物』。

『最後の時』に、『それ』をツバサに渡す事だ。それが何を意味するかは、まだ侑子と、それをツバサに渡すように頼んだ依頼主し

か知らない。

その後、ソラは侑子が鏡から消えたのを見てから、ツバサに渡すべき物を持って帰っていく。

スザクはソラのハンターの中からそっと語りかけた。

『……ソラの言う通りだったね。アイツは……』

「それでも、最後は気に食わない。……そこだけ変えるよ、スザク！」

その者を愛しむ者。

その者から作り出されたモノ。

ソラとスザクの願いは固まり、スザクの想いは自分達の元となった存在へと繋がる。

【……私の一部が決めたようです】

『火』の言葉を『水』は静かに了承する。

【……そうか。……大地はまだ良いとして、風よ。お前はどうする】

『風』はかったるそうな声でそれに答えた。

【へっ。あのままあのガキの思い通りってのが気にくわねぇ。……

大地は良いのかよ】

『大地』は初老の男性のような声でそれに答える。

【無論じゃ。我等の3分の1とはいえ、あの者達は我等なのじゃからな。良くしてくれている者が望むのなら、手を貸すまでじゃ】

みなの意見を聞いた『水』は意見をまとめる。

【……では、満場一致だな。……風と私はすぐに動くとして、記憶はどうする？　全て戻すか？】

『水』の確認。最初に答えたのは『火』だ。

【……最後の時で良いでしょう。あの人の願いは有害というものでも無い】

ここで少し、『火』は言うのを躊躇(ためら)ってから言った。

【……それに、私の一部に良くしてくれている人間はどうやらクロウを好いているようです。……今は彼らの意思を尊重するために、我等の干渉は最低限にするべきだと思います】

【……途中のはお前個人の意思だろう。……だが、彼らの意思を尊重するというのは私も賛成だ。大地と風はどうする？】

『水』の問いかけ。『風』、『大地』の順に返す。

【オレも火の意見に賛成だ。女に振り回されるアイツをこれからも見ていきたい】

【……風よ、お前という奴は……。まぁいい。……ワシも賛成じゃ。

今記憶を全て戻して余計な混乱を招くのは避けたい】

【では、決まりだな】

４者の会話はこれで終わる。彼らは頷く事も動作もしない。

彼らは『意思』でしかないのだから。

彼らは、どこにでも居て、どこにも居ない存在なのだから。

彼らは……。

――一方ツバサとハイドは――

「……なるほど。貴様の考えは分かった」

話を聞き終わった後、ハイドは長い沈黙の末に言葉を吐き出す。

一方のツバサは拍子抜けしたような顔でハイドを見た。

「何だ、それだけで良かったのか？　てっきり、【　これをはぐれウィザード達に言って欲しくなければ私に力を寄越せ　】……って来るかと思ってたのに」

「最初はそのつもりだったさ。……だが……」

ハイドは自らのプライドの関係でこの先の言葉を飲み込んだ。だが彼の意思は固まっており、それを何とか言葉にしたかった。

だからハイドは、ドアを開けて去り際に遠回しで言う事にしたらしい。

「……もっと早くお前と逢っておきたかった……。最後まで付き合おう……」

これがハイドの精一杯。そしてドアは静かに閉められた。

バタンッ

ツバサは「ふっ」と優しい笑みを浮かべ、まだ人の気配が残るドアに話しかける。

「……サンキュー、ハイド」

――――病院――――

一方、診察を終えたスバルはアイリスの『屋上に行きたい』という要望で病院の屋上に来ていた。

ゲイルの登場でみんなのテンポが崩れた事で一同は冷静になり、アイリス自身が驚いていた事、そしてツバサがアイリスが居るにも

関わらず攻撃をしたという事実から、彼女への尋問の件は正式に無効となった。

しかし、それでも彼女には少し休息は必要だ。

なお、アイリスは実体化している。局所的なダメージではなく、全体へのダメージだったが故に一時的に実体化できなかっただけだったのである。

しばらくスバルもアイリスもウォーロックも黙っていたが、やがてアイリスは口を開いた。自分の中だけで背負いきれない苦しみを他人に打ち明けるように。

『……兄さんがサーバーに入れられた時の話、まだしてなかったわよね』

「えっ？　……うん。そうだけど――」

『それがどうかしたか？』

だが、スバルとウォーロックはまだ彼女の内心に気付いていなかった。

アイリスはキョトンとするスバルとウォーロックに微笑みを返しながら続けた。だが、その微笑みはどこか寂しげで、苦しさを帯びていた。

『……話させて。……お願い』

「……うん」

『……』

スバルとウォーロックもそれに気付き、２人とも静かに聞く構え

を取る。
アイリスは夜空に目を向け、静かに話し始めた。

――約１５２年前――

ブルースを含めてほぼ全てのナビをサーバーに収めた頃、ツバサや来斗を始めとした科学者数名はうらかわに足を落ち着かせてサーバーの管理をしていた。大多数の科学者がうらかわ周辺にいるとさすがにマズイ。彼らは脱走した身なのだから。

そして、その日は丁度ツバサの当直の日だった。

『ツバサ……』
「……アイリスか。相変わらずオレにしか会おうとしないのな。たまには熱斗おじさんにも――」
『今日はいつもの話をしに来たんじゃないわ』

ツバサの声をアイリスの声が遮る。その声色はどこか焦っている様に思えた。
アイリスは時折うらかわのサーバーを訪れる。大抵はツバサが監視者になった時のために世の中の色々な情報を教える（ツバサ目線で言うと押し付けられるスパルタ教育）ためだが、今回はそれとは違う理由のようだ。

いつものスパルタ教育よりはマシか。

ツバサはそんな認識でアイリスの方を向いたのだが、彼女の方を向いてギョッとした。

彼女はカーネルと一緒で、2人ともディスプレイに映っていたのだが、カーネルは1人で立つ事が出来ず、アイリスに脇から支えてもらっている状態。

体の表面は徐々に崩壊しており、手首までが粒子化する様にサラサラと分解されていく。

「……何があった。誰かに襲われたか？」

事の重大さに気付いたツバサが真剣な面持ちでアイリスに問う。

アイリスはカーネルを気遣いながら迅速に早口で説明した。

『兄さんを構成するプログラムが自然崩壊を始めたの。お願い、兄さんもサーバーに――』

「入れるに決まってる！　早くカーネルをパソコンに移してくれ！」

ツバサはアイリスの言葉を遮って即座にカーネルをサーバーに保護するための準備を始め、騒ぎを聞いたセレナードも起きた。

『今日はもう寝ようと思っていたのですが、状況が状況なので私も手伝いましょう』

その後、ツバサはキーボードから、セレナードは内部からカーネルの崩壊を遅らせる事と平行して、サーバーにカーネルのデータを転送する作業に入った。

セレナードの方がサーバーに近い存在という事でセレナードがサーバーへのデータ転送を務めて、プログラミングのスピードの関係でツバサが自然崩壊の遅延を担当している。

サーバーへのデータ転送率が５０％まで差し掛かった頃、問題は起きた。

『ぬっ……ぐぅぅぅっ！！』
『ッ！！　兄さんっ！？』
『くっ！！　ツバサ！　カーネルの自然崩壊のスピードがっ！！』
「分かってる！　くっそおぉぉぉぉ！！！」

カーネルの自然崩壊のスピードが早まってきたのだ。セレナードも転送作業に『１』。カーネルの崩壊遅延に『９』の割合で力を使っているにも関わらず、それでも崩壊は止まらない。

２人の技術を合わせても、だ。

アイリスはディスプレイに映るカーネルと視線と意思を交わし、ツバサに話しかける。

『……ツバサ、私と兄さんは元は1人のネットナビ。私達が1つになった状態なら、兄さんをサーバーに送る事が出来るかも――』

「ダメだっ！！！」

『ッ！！　どうして！　このままじゃあ兄さんが！』

強く遮るツバサにアイリスは激しい怒りを送る。しかし、ツバサは譲らなかった。

「お前達は確かに最初は1人のネットナビだったのかもしれない。だけどな……2人はもう同じ存在じゃねぇだろ！　アイリスはアイリス。カーネルはカーネル。それぞれ1人のネットナビだ！！　……だったら、どっちかが消えて良い理由にはならない！！」

アイリスはすでにカーネルの一部ではなく、1人のネットナビだ。

仮に自分の大事な人にクローンが出来たとして、そのクローンが簡単に死んで良い理由にはならないだろう。クローンは倫理的に問題があるとしても、一度この世に生を受けた以上はその命を大事にしてもらいたいと願うものではないだろうか。

ツバサは今まで帯広博士を失い、自らのナビであるレイを失い、

保護していた時でも保護し切れなかったナビも少なからず存在する。

護れなかった悔しさと悔い。

それがツバサのトラウマとなり、今の決意をさせている。そして、その思いは彼の力となった。

「絶対に諦めない！！！　カーネルは無事サーバーで生き、アイリスはいつも通りオレに世情の事を押し付けに来て、それをサボるオレをセレナードが嗜める。……そんないつも通りの結論しか……未来しか、オレは認めない！！」

『……ツバサ……ッ！？　……ツバサの背中が……ッ』

ツバサの異変に最初に気付いたのはアイリスだ。ツバサの両肩の辺りが膨らみ、服を突き破って腕と化す。そしてその腕は空を彷徨いキーボードを見つけ出し、すさまじい勢いでキーを弾き始めた。ツバサが元々持っていた腕と同じスピードでキーを叩いているのだ。

腕が４本ある異形の存在。

次に気付いたのはカーネル。次にカーネルの視線をたどったセレナード。最後に気付いたのは修正作業で忙しいツバサ本人だった。

ツバサは手を休める事をせずに我が身の変化に驚愕する。

「んげっ！？　何でオレの腕が４本もっ！！？　……まぁ良いや。今は切羽詰ってるし、利用させてもらう！　セレナード！　この際だから一気に終わらせるぞ！！！」

『は、はいっ！！』

驚きから最低限立ち直ったセレナードは、ツバサの方をチラチラと見ながら作業を再開した。

《……あの腕は……一体……》

『……そうして私と兄さんは一緒にならなくてもこうして生きていられるの。……ツバサは修正作業の間、カーネルはカーネル。アイリスはアイリスだから価値がある。生まれた以上、早々消えて良い理由は無いって言い続けてくれた。……だから、私も兄さんもツバサにはすごく感謝しているわ。……なのに……』

ここでアイリスはいったん区切り、辛そうに俯いて続きを語る。

『あの時のツバサ、黒かった。……私……あんなの知らなくて……。兄さんをサーバーに入れる時の言葉もウソなのかもしれないと思うと……怖くなって……』

ツバサや彼の関わる『思い出』。ずっと一緒で、互いの事を大事に思っていた仲。そんな相手が自分の知らない所で自分の知らない事になっていたという『事実』。

様々な思いや記憶が彼女の心を圧迫し、誰かに話さないと辛すぎて自分が壊れてしまうような、そんな状態だったのだ。

アイリスの泣きそうな声。スバルは戸惑いながらも励まそうとする。

「だ、大丈夫だよ。ジャックとクインティア先生だって捕まってからも僕たちと出逢えたんだ。きっとツバサ君とも――」

『なぁアイリス。……確認しねぇといけない事が出来ちまった』

スバルの励ましはウォーロックの静かな声で遮られる。その声にはあからさまな警戒心が込められており、味方に出すそれとは程遠い。

スバルは呆れたようなため息を付いて、ウォーロックに咎めるような視線を送る。

「何さウォーロック。人が励ましてる時に」

『……悪いスバル。だがな、どうしても確認しとかねぇといけない事があるんだ』

ウォーロックはスバルに謝りつつ、アイリスにむける眼差しは変えない。警戒心と不信感を含めた目だ。

『……なに？　ウォーロック……』

アイリスは不安そうに自分の両手を自分の胸に重ねる。眉もまた、不安そうに下がっている。

『……お前が知らなかったのは、体の色だけだったんだな？』

アイリスはその質問の意味を察した。
それでも、頷いてＹＥＳと肯定した。

「それが何を――……ッ！」

スバルの疑問の表情はすぐに驚きに変わる。同時にそれは、絶対に信じたくない推測だった。

「ちょっと待って。……ちょっと待ってよウォーロック！！　それじゃあアイリスが――」

ウォーロックはスバルの言葉を次の質問で封じる。

『何でツバサが４本の腕を持っているって知ってるんだ！？　お前が驚いたのは色の事だけで４本腕の姿の事を知っていたとすれば、ツバサがエーテルだって事も知っていたはずだ！！』

屋上にヒンヤリとした風が吹く。

アイリスは１００年以上も前にツバサの４本の腕を見ている。それならエーテルが４本の腕を持っているという情報を得た時点で分かっていてもおかしくない。そしてアイリスもまた、体の色が『白』から『黒』になっていた事のみに反応していたのだ。

スバルは信じられないという気持ちから小さく首を横に振る。

「……ウソだ。ねえウソだよねアイリス！　それじゃあは始めからツバサ君の正体を知ってて、アイリスまで裏切り者って事に――」

『スバルさん』

アイリスは顔を俯かせたままスバルとウォーロックから数歩離れ、2人の方に振り向く。その顔はこれ以上無いくらいに悲しげで、寂しげで、苦しそうだった。

『……ごめんなさい』

その謝罪は肯定の証。アイリスはツバサの正体を知っていた。その上で自分達にも当たり前に接してきたのだ。

『今までありがとう。……今まで本当に楽しかった』

その言葉はお別れのようにスバルとウォーロックに響く。

そして、彼女の体が霞みのように薄らいでいく。

アイリスのコピーロイドは粒子化出来るコピーロイド。彼女だけに出来る移動手段だ。

ウォーロックが手を伸ばす中、アイリスは泣きそうな声で微笑んだ。

『さようなら……。最後の時に、また逢えるわ』

バシッ！

ウォーロックの手が空を掴む。

『……クソったれ。逃げちまったら裏切り者確定じゃねぇか……』

ウォーロックが拳を震わせて俯く。彼としては、例えそうでも何とかアイリスをフォローして最悪の場合、つまり処分を回避したかったのだろう。しかし、逃げてしまっては『やましい事がある』と見なされて次に出会った時は捕らえなければならなくなる。

ガクッ……

スバルの膝が崩れる。

「……ツバサ君も……アイリスも……僕達を騙していた？　最初から僕達は手の平で……踊らされて……うっ……くっ……」

少年は久しぶりに涙を流した。わずか1日の間に、信頼し、共に戦ってきた友人2人に裏切られたのだ。

全て『ごっこ』だった。

ツバサの言葉が胸をよぎる。彼の優しさも、親しみやすさも、行動も何もかも全て演技だった。スバルはその事が堪らなく悲しくて、悔しかった。

『……スバル……』

ウォーロックは彼の名を言うだけで何も言えない。迂闊に励ますにはスバルとツバサは仲良くなり過ぎた。それらが全てウソだったというツバサの言葉。それに対するスバルの心の傷を察し、声を掛けられないでいたのだ。

そしてその様子を、建物の陰から気配と音を殺して見ていた者がいた。

「……ツー君からアイリスちゃんの事を頼まれたけど、護りきれなかったか。……我ながら無力だよね」

ゲイルの言葉にいつもの軽薄さは無い。そこにあるのは純粋な己への無力感と憤りだ。

本来なら早い内にスバルのハンターから自分のハンターにアイリスを移すべきだったのだが、予想外の出来事とその出来事の把握により遅れてしまったのだ。

そして、遅らせた原因でもある存在はゲイルのハンターの中からあくまで軽薄に話しかけてくる。

『そりゃすまねぇとは思うけど、しゃあねぇだろ？　オレだってまさか戻ってこれるとは思ってなかったんだから』

ゲイルは自分のハンターを腰に下げているホルダーから取り出し、その存在に話しかける。

「……どの道、キミにはしばらく黙っててもらうよ。キミ達が出てくるとややこしくなりそうだからね」

ゲイルはここで区切り、若干の怒りを込めながらその名を呼ぶ。

「……ビャッコ」

ビャッコがゲイルのハンターの中で突然再構築されなければアイリスを自分の方で保護できた。そこから来る怒りだ。

ビャッコは『ケケッ』と、上品さの欠片も無い笑みを広げながらハンターの中で寝そべる。

『そりゃ良いや。オレはややこしいのは嫌いだ。簡単になったら教えてくれ』

「……あぁ」

ゲイルの下にビャッコが甦った事から、セイリュウの宿主になったとされる人物の元にもセイリュウが甦っている可能性がある。

その人物がサテラポリスに報告する前にライラに頼んでコンタクトを取る必要があるだろう。消えたはずの四神が甦ったなどと今のＷＡＸＡやサテラポリスに言ったら、どんな厄介事になるか分からない。

また、ゲイルの直感は強い方なのだが、その直感が『この事は密にしておく必要がある』と言っている。

ゲイルはビャッコの言葉に生返事を返しながらこれからの事を考えていた。

（……セイリュウの宿主の情報はライラに集めてもらうとして、当面はソラちゃんやコクレン、そしてセイリュウに憑かれた人……四神に関わった人同士で話でもしますか。甦った事で何か分かるかもしれない）

ゲイルはスバルの方を一瞬だけ見て、屋上を後にした。出来る事なら励ましたいが、ウォーロックに近づいたためにビャッコの反応がバレてしまっては元も子も無い。今必要なのは慎重な思考と行動だ。

ゲイルはその後、適当な口上を書いた置手紙を残して誰にも悟られる事なく病院を後にし、コクレンの待つホテルへ向かう。まずは手始めとしてコクレンに状況を説明しなければならないだろう。

第１４０話　意思（後書き）

なお、カーネルをサーバーに入れる時は、ネビュラ・グレイはまだサーバーに入っておりません。

次回は決戦前夜みたいな感じになる予定です。

それでは次回もお楽しみに！

2011

番外編　？（前書き）

お待たせしました。後半はやっぱり1話1話の構成に手こずりますね（苦笑）。

今回からはセイリュウもビャッコも加わるので、彼らの一面も出します。

それと、どうにも本編とは呼べない内容なので『番外』としました。内容はほとんど変わってないので読み返す必要はまず無いでしょう。

2012

番外編　？

――――カフェ――――

ゲイルの元に甦ったビャッコ。ゲイルは意見を交えるべく、コクレンはもちろんソラと藍川にも招集をかけた。共通点は、『四神』に関わった事だ。

「遅れましたー」

最後に着いたのはソラだった。店員に案内されて着いた席にはゲイルとコクレン、そして自分の知らない青髪の青年が座っていた。話し合いの理由は聞いていたので、その人がセイリュウに憑かれたという藍川龍という人だろう。

なお、ゲイルはあえて賑やかなカフェを選んだ。内緒話なら静かで人の少ないカフェの方が良いのでは？　と思うだろうが、それは盗み聞きの危険性がある。しかし、賑やかであれば周りの声にかき消されて自分達の会話は聞こえず、人に埋もれる事でその人達の存在が目立たなくなる。

ゲイルはその事を熟知した上でそのカフェを選んだのだ。

閑話休題。

ソラが面識が無かったのは藍川だけだったので軽く自己紹介をする。他の男3名はすでに自己紹介を済ませたらしい。

藍川は穏やかな笑みを浮かべてソラと目を合わせる。

「初めまして、ソラちゃん……だよね。ゲイルさんから聞いてたよ。僕は藍川　龍。よろしく」
「はい。こちらこそ初めまして、藍川さん」
ここでソラは気付いたのだが、藍川が眠そうに目を擦っている。
「……あの、大して寝てないんですか？」
藍川は最初誰に対しての問いだか分からなかったようだが、コクレンが肩を軽く叩く事で気付く。
藍川は欠伸を噛み締めながら答えた。
「ん？　……あぁ、うん。実は昨日――」

――昨夜・藍川の暮らしているアパート――

「さてと、ツバサ君の事は気になるけど、こっちも自分の事をしないと」
あれから藍川は所長の鋼生に辞表を出した。所長は静かにそれを懐に仕舞うだけだったが、同僚達は怒ってくれた。中には涙も流してくれる人もおり、藍川は今更ながら自分がどういう風に見られていたかを知る。
何事も、自分の価値観に合わない事柄は見えないし、気付けない

ものだ。それに気付くには自分の価値観を自分で塗り替える必要があるのだが、『キッカケ』が無ければ始まりもしない。藍川にとっての『キッカケ』が、今日の事件だったという訳だ。

食べ終わった食器を洗った後、手始めに経済情勢を調べていたのだが……。

『……何をしている』

「何って情報収集だよ、セイリュウ。……セイリュウ？」

反射的にセイリュウの名を呼んでしまったが、考えてみれば彼はもういないはず。自分の言った言葉に疑問を持った藍川はセイリュウの声がした方を見る。

そこには自分のハンターがあり、その画面にはセイリュウがいた。

「……」

藍川は驚くを通り越して口をパクパクさせて驚いている。

その様子に呆れたセイリュウは自分がここにいる理由を簡潔に語り始めた。

『ロックマンの攻撃を受けてから意識が途絶え、気がついたらお前のハンターの中にいた。以上だ』

「……」

藍川は依然として呆然としている。

セイリュウはため息をつき、容赦の躊躇いも無く実体化。水の槍を生成して頬を横薙ぎにぶっ叩いた。

『聞け』

ゴスッ！

「おぶぅ！　はっ！　そ、そうか。なるほど。甦った理由は分からないけど――」

藍川は言いながらハンターを操作する。電話モード、宛先は暁だ。サテラポリスに連絡しようとしているのである。

「とりあえずサテラポリスに連絡を――」

『するってのは止めてね』

自身のハンターから女性の声が聞こえてきた。藍川が電話を掛ける前に何者かが電話を掛けてきたのだ。

驚いている藍川に、女性は言葉を重ねる。

『もし言ったら、昔好きだった子の名前、ネット上にバラすわよ？』

「ッ！！」

なお、女性というのはゲイルの部下であるライラの事で、この時には藍川の素性と経歴、電話番号……。個人情報と呼べるものはほとんど掴んでいた。

ライラの人格をフォローするために記述しておくが、ライラは藍川が好きだった人の名前なんて知らない。素性と経歴から藍川の性格を予想しただけだ。

こう言えば十中八九引っかかってくれるだろうという、悪魔のようなハッタリである。

まぁ、クラッカー時代のライラは『ベルゼブブ』という悪魔の異名を持っていたので、ある意味正論といえるだろうが……。

「な、なななななっ……」

明らかに動揺する藍川をさらに煙に巻くように、ライラはトドメの一撃を加える。

『それじゃあ、よろしくさん。……ロ・ボ・ヲ・タさん？』

「……」

ライラは笑いを堪えながら電話を切り、藍川はショックでしばらく動きを止める。ハンターを持つ腕の角度まで一寸も動かない。

――回想終わり――

「それで気付いたら深夜の3時。……せめてセイリュウには時間を教えて欲しかったよ」

『義務が無い』

藍川の苦笑を一刀両断。セイリュウの一撃で藍川はテーブルに頭を突っ伏した。

ゲイルは部下の仕打ちに対する申し訳なさで苦笑し、ビャッコは笑いを堪える。

ソラとスザクはライラの性格に対して苦笑。

コクレンとゲンブはやれやれといったため息をついた。

「……さて、今回キミ達を呼んだのは他でもない」

ゲイルが不意に真剣口調で言った言葉に、一同は注目する。ゲイルは全員の注目が集まったのを確認してから言った。

「ソラちゃんがツー君を好きになったキッカケだけど――」

バシッ！！

『ぎゃはははは！』

『『『はぁ～～～』』』

一同のリアクションの解説をしよう。

ソラとコクレンはゲイルの脳天に平手ツッコミ。音が1つなのは同時に叩いたからだ。

藍川は肩透かしを食らってキョトン。

ビャッコは笑いを抑えきれずにハンターの中で爆笑中。

セイリュウ、スザク、ゲンブは呆れたようなため息をついた。

ゲイルは脳天を押さえながら本題に入る。

「え～っと、シー君によるとエーテルはツー君で、何でか倒されたはずのビャッコとセイリュウまで甦った事で何か知ってる事は無いかな～って思って集めました」

ツバサがエーテルだと聞いてこの場で驚いたのはビャッコとセイリュウだけだろう。

ソラとスザクは1日前に対面し、コクレンもゲンブもホテルでゲイルから聞いた。コクレンは始めゲイルの言葉を疑ったが、彼の口調の変化を敏感に察してそれを信じた。無論、コクレンは信じたくは無かっただろう。自分を亡命させてくれたのは他ならぬツバサだったのだから。

藍川が驚かなかったのは薄々予想が出来ていたからだ。セイリュウの入ったメールがツバサのハンターから送られたという時点で彼の正体を察していた。その言葉を信じるのに抵抗が無かったのは、藍川自身がツバサと長く関わって無いからだろう。

身内に大事が起きた場合より、テレビの向こうで大事が起きた場合の方が我々の感傷的な認識が薄いのと同じだ。

ゲイルの知ってる事は無いかという問いにコクレンは首を横に振り、続く藍川も同じく何も知らないと否定する。そして、藍川はおもむろにソラの方を見る。

「えっと……ソラちゃんは何か知ってる？　その、僕達の中で一番仲が良かったみたいだし」

それでも藍川が言いにくそうに言ったのは、ソラのツバサに対する好意を会話時の些細な挙動から察したからだろう。

「……いえ、何も」

ソラは静かに目を閉じて首を横に振る。

侑子から聞いたツバサの願いは口止めされている。

誰も知らないはずの事を知っている場合、極力話さない方が無難。ツバサの事だからとことん嫌われるような演出をするだろうし、そんな状態で下手に彼の事をフォローしたらソラが大変な目に遭う。

だそうだ。

そして、その届け物は侑子の送ってくれた小さい箱の中に入っている。魔法の力で大きなモノでも入れられる箱だ。侑子の膝に乗っていた黒モコナと同じ様な物だそうだ。モコナは以前、寺で怪談を開いた時に自分より大きなアヤカシを吸い込む様に飲んだ事があったと言う。

対価は、学園際の時にツバサから買ってもらったストラップサイズのテディベアだった。それはソラにとってツバサとの思い出の１つであり、大事な物だからこそ対価としての意味を持ったのだ。

（……別にゲイルさんやコクレンさん達を疑ってるわけじゃない。……でも、侑子さんの言う【最後の時】にアイツのそばに居るためにも、ここはウソでも何でもつかないと）

本来ならスバルやミソラなど『自分の話を聞いてくれそうな人』に話す事でツバサの事を信じてもらおうと思ったが、昨夜旅館に帰った後スバルとミソラからメールが来た。

スバルのメールにはＷＡＸＡの人達はツバサとアイリスに裏切られた事で荒れていて、猜疑心をツバサに対する敵意に変えている事が。

ミソラのメールではスバル自身もその事実を受けて落ち込んでいる事が書いてあった。ミソラの方はスバルを心配してソラに相談するためのメールだ。

スバルのメールから考えてＷＡＸＡの人に下手な事を言うのは控えた方が良いと悟り、ミソラの返信には心が痛んだ。

自分の知ってる事を言えず、『スバル君のそばに居てあげて』としか言えなかったもどかしさが堪らなく辛かったのだ。

なお、ゲイルからカフェに集まるようにというメールをもらったのはその後である。

ソラの言葉にコクレンと藍川は何かを言おうとしたようだが、ゲイルが止めた。そして次はウィザードの番だ。
スザク達はエーテル、つまりツバサから作られた存在だ。記憶をほとんど消されているそうだが、それでも何か知らないかと尋ねたのである。

まずはスザク。

『う～ん。夏休み頃から少しずつ思い出すようになってきたけど、今思うと私がエーテルの事を嫌ってた理由が良く分かったわ』

「というと？」

ゲイルの問いにスザクはため息をつきながら答える。

『ツバサがエーテルだって聞いて納得した。……アイツ、自分1人で抱え込んで誰かに頼ろうとしないんだもん。……そういう所が同じだったから、どうもね』

ゲイルは少し考えた後、セイリュウを差す。

「……う～ん……。それじゃあ、次セイリュウ」

セイリュウは不承不承といった感じで答えた。彼はまだ完全にこちら側（ゲイル達側）という訳でもないらしい。

『……私は最近強引に記憶を抜き取られたらしくてな。おそらくスザク達ほど昔の事は覚えていないだろう。……しかし、何やら温か

かったように思える。……何かを相談したり、共に笑ったり、な』

記憶を消したのはオリオンだが、セイリュウが目覚めた時にはすでにオリオンは姿を消していた。

オリオンはセイリュウの性格上、十中八九目覚めたら目覚めたらで詳細を聞くために攻撃を仕掛けてくるだろうと予想してセイリュウから離れたのだ。

そして、セイリュウの言った『温かい記憶』は四神の全員に覚えがあるらしく、4体は一斉に頷く。

その後彼らは自分が思い出した事を話してくれたのだが、その中に出てきた『誰か』は十中八九ツバサの事だろう。セイリュウを諭したり、四神のケンカを「ケンカ両成敗」と称してケンカした両者をボッコボコにした人物だ。

一通り四神の話を聞いた後、藍川は少し驚いたように言った。

「何だか、イメージしてたのより穏やかだね。もっとこう、水面下で策略を巡らせているイメージがあったんだけど」

藍川の言葉に頷いたのはゲンブだ。

『うむ。我々が世に放たれた時持っていた記憶と夏以降に思い出した記憶では違いが有り過ぎる。……我等の記憶を消して、そこに違う記憶に塗り替えたのかもしれんな。……そういえばツバサの奴、前にワシに対して、お前達は【デリートされて消える】ではなく【

戻る】の方が合っている。……と言った事がある』

「……戻る？」

意味が分からないとった様子で首を傾げたソラに、ゲイルは『意味は分からんがな』と続けた。しょうがなく黙ると、不意にビャッコが口を開いた。

『……そういやよ、オレ等を作ったのがあの黒髪なら、何でオレ達と戦うようなシナリオを組んだんだ？　そんなまどろっこしい事しないでとっとと一斉攻撃で潰せば良いだけだろ』

今までで一番まともな考えを言ったビャッコに、セイリュウは『……私だってあのくらい……』とボヤいていた。

もしかしたらセイリュウは、手段を選ばないだけの負けず嫌いなのかもしれない。言ってしまえば、子供だ。

『これビャッコ』

ゲンブの咎めるような声と視線でビャッコはゲンブの視線を辿る。その先にはソラが居て、そのハンターの中にはスザクが居る事だろう。

『あっ。べ、別にお前等をって訳じゃ無いぞ！　オレが潰すって言ったのは……そう！　社会のシステムとかそんなんだ！！』

ビャッコはどうやら、戦闘時は別として不器用ながらも他人を思いやれる性格らしい。しつこい様だが戦闘時は別とする。

ソラはその事に若干驚きながらも首を横に振った。

「ううん、大丈夫。ありがとう、ビャッコ。……でも、本当に変だよね。１人でもＷＡＸＡを壊滅まで追い込んだのに始めからそれをしなかったなんて……」

ソラは侑子に『結論』を聞いたが『過程』は聞いていない。だからそこまでは分からないのだ。

「ココロサーバーの完成を待っていたとかは？」

「う～ん……。そう……かな……」

藍川の推測にソラは腕を組んで考え込む。

それも理由の１つかもしれないが、どこか違う気がした。……もしかしたらソラ自身がそう思いたいだけなのかもしれないが、それでもどこかしっくりこなかった。

１００％相手の事を理解しているなんて有り得ないのだ。逆に１００％分かっていたらお互いの考えがバレバレという事になるので気持ちが悪い。

ゲイルは空気を切り替えるように自身の平手を合わせるように「パンッ」と叩く。

「それじゃあ、そろそろお開きにしますか。あんまり長くいると店員さんや他の客から目を向けられる。それじゃあ内緒話の意味が無いからね」

その後会計を済ませて４人は店を出る。ソラが１人帰路に着こう

とした時、ゲイルが呼び止めた。

「あ、ソラちゃん」

「？　何ですか？」

ゲイルに近づいたソラに、ゲイルは耳元で小さい声で言った。

「（……ツー君の事に関して、何か知ってるね？）」

「ッ！！」

侑子から聞いた事という心当たりがあるソラとしてはゲイルのこの発言は驚愕に値し、彼女の目を見開かせた。

ゲイルはその反応を見て満足気に顔を上げる。

「ははっ。やっぱりね。何も知らないと言ったキミの顔、何か知ってるみたいだったから。……おっと、シー君達には言わないから安心して」

ソラの警戒心と不安を入れ混ぜた視線を受けて、ゲイルは後半の言葉を付け足した。

しかし、ゲイルは「でも、」と続ける。

「でも、ソラちゃんは正直過ぎるからウソは付けなさそうだよね。そんな訳で、辛いとは思うけどスバル君達とも会わない方が良いよ。……自分の知ってる事、知られたくないんでしょ？」

藍川とコクレンが「ワシ等が思っていた事と同じ事を言って……」とボヤいている事から、彼等がカフェの中で言おうとしたのはその事だったらしい。

知られたくないのだろうというゲイルの問いにソラは恐る恐る頷

く。

ゲイルは「本当に正直だな」と笑うと、ソラの頭をクシャクシャと撫でた。猫の毛並みを乱すように。

「会わない方が良いって言うのはそうだけど、飛び入りで加勢するって言う手もあるからね。……キミが行きたい時にツー君の所に行くと良い。……ソラちゃんの事だから、一発蹴るのかな？」

後半を快活に笑って見せたゲイル。彼の心にやましい考えが無い事を察し、ソラはコクレンと藍川の顔を1回見た後に感謝の思いから頭を下げた。

了解したと受け取ったゲイルは、満足気な笑顔で頷く。

「うん。……その時が来たら、僕たちも行くからね」

その後、ゲイルとコクレン、藍川は去って行った。藍川の断りとコクレンの制止を無視したゲイルはこれから（　まだ昼間だというのに　）飲みに行くらしい。

その姿が人にまぎれて見えなくなった頃、ソラがおかしそうに小さな笑みを浮かべる。

「……ふふっ。やっぱりあたしにウソは似合わないか。ゲイルさんやっぱり鋭いな～」

『……ねぇソラ？』

「ん？」

突然語りかけてきたスザクの声に反応し、ホルダー内のハンターを取り出すソラ。スザクは目を逸らして言おうかどうかを迷うような仕草を取りながら言った。

『えっとさ……あんまりこういうのは言いたくないんだけど……』

「どうしたのスザク。ハッキリ言って」

スザクのいつもの快活さが無い。ソラは彼女の事を心配しながら尋ねる。

スザクは実体化し、ゲイルたちが向かった先を見据える。

『……ゲイルさん、ソラやあたし達に意見を求めてばっかりで自分の意見って言ってたっけ？』

「ん～……言ってなかったと思うけど、それがどうかしたの？」

確かにゲイルはほとんどソラ達の意見を纏める係だったため自分の意見は言っていなかった。

しかし、それがどうしたのだろうというソラの視線を受け、スザクは意を決したように言った。

『……見方によってはだけど、それって私達がどれだけツバサの事を知っているかを探ったって事にならない？』

「……つまり、ゲイルさんもスパイなんじゃないか。……って？」

ソラの怪訝そうな確認にスザクは大真面目で頷く。

『だって、あの人ってツバサと長い付き合いなんでしょ？　だったらツバサの計画だって知ってるかもしれないじゃん』

「それは――」

否定できないけど……。これ以上誰かを疑いたくない。

ソラはそう言おうとしたのだが、その言葉は最後まで言われる事は無かった。メールの着信音により遮られたのだ。

ＰｉＰｉ！

「おっ？」

会話の途中ではあったが、メールも大事な用件かもしれない。スザクに手の平を向けて『ちょっと待って』というサインを出し、メールの本文を見る。

「……えっ？」

『へぇ～』

差出人は星河スバル。内容は、ヨイリー博士がスバルの持つＰＧＭとミソラの持つＰＧＭを合成するというものだった。スバルとミソラはその実験に立ち会うそうだ。

『……どうする？　ソラ』

「……」

気にはなったが、今自分が行って何かを問われた時、隠し通せる自信が無い。暁やクインティア、ジャックレベルの洞察力を持つ相手ならばなお更だ。

よって彼女の答えは……。

「……気にはなるけど、今会う訳にはいかないもんね」

ソラはスバルにお断りのメールを出し、帰路に着く。

番外編　？（後書き）

ソラと侑子のやり取りをまとめると……。

得た物　：　対価

ツバサの願いを聞く　：　誰にも言わず、届け物を自らの手で届ける。

届け物を入れる箱　：　ストラップサイズのテディベア。

届け物の方は、『誰か』に渡して、その『誰か』からツバサに渡して貰うのもアウトです。

それと、これからの更新はスローペースになるかもしれません。出来る限り早く更新出来るようにはしますが、ご容赦をお願いします。

構成を考えるのも苦労しますし、そろそろ本格的に忙しくなるので。

第１４１話　ＰＧＭ（前書き）

お待たせしました。前の話を番外としたので、この話が第１４１話となります。

第１４１話　ＰＧＭ

――――シーサー城――――

ツバサのＷＡＸＡ襲撃から一晩経ち、シーサーアイランドのシーサー城には慌しさが蔓延していた。

オリオンに取り憑かれた長官は病院で入院したため、暁が代わりに全体の指揮をしているというわけだ。

暁の最後の攻撃（　暁のオメガブレード　）の影響は思ったより大きく、長官は意識を取り戻しつつも寝たきりの状態。故に、暁が現場の指揮をしているという訳である。ヨイリーもその補佐に回っているから問題は無いだろう。

そんな慌しい環境のせいか、スバルとミソラは入り口にて居心地が悪そうにヨイリーを待っていた。

昨夜、アイリスが自分達の元から離れた事を報告すると共にカーネルの言っていた『スバルとミソラのＰＧＭは元は１つのＰＧＭ』という言葉を伝えた所、ヨイリーは神妙な顔で頷いて……。

「……そう、分かったわ。……ねぇスバルちゃん、ミソラちゃん。試したい事があるから、明日シーサー城に来てくれないかしら」

との事だ。

そして、２つのＰＧＭの合成実験に来てくれというメールが来た

ためスバルとミソラはシーサー城に来たというわけである。
ソラとゲイルにも連絡したが、2人とも来ないと返信が来た。

『しっかし、スバルとミソラの持ってるＰＧＭが元は1つだったなんてな』
『ポロロン。……まぁ、あのツバサ君の渡した物だから何かあるとは思ってたけどね』
「ハープ！」

ウォーロックとハープの会話。そこにミソラが怒った様な声で割り込む。

ウォーロックとハープが自分の方を向いたのを確認したミソラは視線を自分の隣に向ける。そこには、やや目元を赤くしたスバルがいた。俯いていて、目は虚ろだ。

スバルは3人の視線に気付くとフッと優しく微笑んだ。

「大丈夫。……僕はもう大丈夫だから」

口にも、微笑みにも無理は無い。しかし、彼と本当に親しい者が見たら痛々しく思えるだろう。

「……スバル君――」

ミソラはスバルの内心を察して言葉をかけようとするが、タイミング悪くというべきか、ヨイリーが走って来た。
ヨイリーの後ろにはジョーカーが走っており、博士のペースに合わせている。博士が倒れてもすぐに対応できるように、両手を斜め下向きに前習え風に出している。

「スバルちゃん、ミソラちゃん、ロックちゃん、ハープちゃん。ごめんなさいね、待たせてしまって」

よほど急いでいたのか、ヨイリーはスバル達に近づいてからもしばらく息を切らせており、スバルとミソラは近くにあったイスにヨイリーを座らせて彼女が落ち着くのを待つ。

ミソラがスバルに言いたかった事は後にするらしい。

呼吸が落ち着いてきたヨイリーは、苦笑交じりで立っているスバルとミソラを見上げた。

「ふぅ。……やっぱり歳かしらね。あのくらいの走りなら若い頃は――」

『……博士、だから私がおんぶしようと』

「いいえ、ジョーカーちゃん。やっぱり自分で出来る事は自分でしないとね」

『……ご立派です』

「ふふっ。そうでしょ。あ、他には若い頃――」

「「『博士』」」

『オイばーさん』

「……はいはい。分かってるわ」

ヨイリーは時折話が脱線する。大抵はアシッドか暁が元の話題に戻すのだが、今2人は現場の指揮をしているため持ち場を離れられないらしい。そのため今は他の者が話を戻させないといけないのだ。

スバルとミソラ、ハープ。そしてウォーロックの言葉により、ヨイリーは少し名残惜しそうに『あの頃』から帰還した。

「それじゃあ、色々話したい事もあるから実験室まで歩きながら説明するわ」

そう言ってヨイリー博士は歩き出し、スバル達はそれに付いて行く。急ごしらえで作られた実験室らしい。

廊下を歩いている時、ヨイリーは不意に口を開く。

「……やっぱり変だわ」

「？　何がです？」

スバルの問いに対し、先頭を歩くヨイリーは首を後ろに回して答えた。

「スバルちゃん達がここに来るまでに考えてたんだけど、どうもツバサちゃん、エーテルと言うべきかしらね。あの子の計画には無駄が多いのよ。……いいえ、多過ぎるわ」

スバルとミソラ、ウォーロックとハープが分からないと言いたげに首を傾げヨイリーは懇切丁寧に解説した。

「まずＦＭ星親衛隊の反乱。ケフェウスやイーグルの話だと、１人だけ逃げ遅れた者がいて、そこからＦＭ星と地球。２つの文明の協

力関係が早い段階で結ばれる結果となったわ」

通常、違う国籍だけでもそうなのに、異星人となるとどんな確執が生まれるか分からない。

現に春先まで、ＦＭ星が『味方』だと認めていたのはケフェウスのブラザーたる星河スバルだけだったのだ。よって、『スバル⇔ＦＭ星』という信頼関係を『地球⇔ＦＭ星』とするには慎重に、かつじっくりと進めなければならなかった。

しかし、【　ＦＭ星の反逆者が地球に集団で侵入した　】という事実と、【　ＦＭ王が親衛隊を振り切って、自ら地球に駆けつけて頭を下げる　】という誠意により、地球とＦＭ星はかつて無いほどのスピードで同盟関係を確立した。

共通の敵を持つ事で互いに近付くための手順が省略されたのだ。

もしも『1人だけ逃げ遅れる』という事が無く、反逆者の全員が地球に向かえば親衛隊の必死の叫びでケフェウスはＦＭ星で親衛隊の帰りを待ち、『ケフェウスが自ら来る』という事も起きず、ケフェウスの誠意から確立した同盟関係も無かっただろう。

幾重（いくえ）もの偶然が、今の地球とＦＭ星の友好関係を生んだのだ。

今はサテラポリスやＷＡＸＡだけが独占している事実。しかし、いずれこの関係を足がかりに民間にもＦＭ星との友好関係が発表さ

れ、時間は掛かるだろうが少しずつ『異星人』というモノが受け入れられるだろう。

ヨイリーはもう1つ続ける。

「それに、捕らえたはぐれウィザードの取調べで出た情報だと、【情報を得たらその情報を元に行動して良し】と言われていたらしいわ。……あのツバサちゃんに限って、そんなお粗末な指示やミスを犯すかしら？」

『あのオリオンって奴が指示したんじゃねぇのか？』

ウォーロックの問い。確かにオリオンはエーテルに次ぐ地位なので指示する権利は持っているだろう。

しかし、彼に関しても同様だ。

「いいえ、ロックちゃん。実際に面と向かって本人と話したわけじゃないけど、少なくともケフェウスやイーグルの話ではオリオンは聡明な戦士だったらしいわ。現に、昨日の戦闘だってジョーカーちゃんが不意打ちで足を押さえなかったら暁ちゃんの攻撃が当たらなかったそうだし」

「……つまり、それほどまでの実力を持っている存在がお粗末な指示を出すわけが無い。……って事ですか？」

スバルの要約にヨイリーはコクリと頷き、「おまけを言えば」と続けた。

「おまけを言えば、ミソラちゃんが昨日の今日でピンピンしている

のも証拠よ」
「えっ？　あたしですか？」
「そう。さっきスバルちゃんが言ったように、オリオンはＦＭ星でも屈指の実力者。それなのにその槍を直に受けたミソラちゃんが１日で退院しているってどういう事だと思う？」
その問いかけにミソラは驚いて口に両手を当てる。
「あっ……」
『……つまりミソラは――』
『加減されてたって事か』
ハープ、ウォーロックの言葉にヨイリーは「そう考えるのが妥当」だと言わんばかりに頷いた。
ヨイリーも医者から送られてきたカルテを見たのだが、傷口が明らかに急所から外れていたのだ。歴戦の猛者たるオリオンが急所を見誤る事などあり得ない。
ならば結論として、何か特別な理由が無い限り、オリオンは手加減をしたという事になる。
ヨイリーは実験室のドアを開けながら話した。
「だから、あの組織自体が……いいえ、あの組織のトップに何か秘密があると思うの。……それが分かればツバサちゃんを――」
ヨイリーはこの後、「少しでも罪を軽く出来る」と言おうとした。

ヨイリー博士は今まで成功が多く、偉大な科学者としてその名が知られている。しかし、その何倍も失ったモノが多いのだ。故に、自分達を裏切ったツバサの事も出来るだけの事をしようと思っているのである。

そのくらいの気持ちが無ければ、作られた当時のジョーカーを処分するという論議に1人異議を申し立てる事もしないし、元ディーラー幹部の暁、クインティア、ジャックを受け入れはしないだろう。

しかし、あくまで【　言おうとした　】だ。暁の言葉で遮られたのである。

「それでも、オレ達のやる事は明快ですよ。……博士」

『シドウの言う通り、今はツバサの野望を阻止する事が重要です。……人の心を自在に操られたら彼を止める事は出来なくなる。その前にカタを付けなければいけません』

「……シドウちゃん、アシッドちゃん……」

ヨイリーは先程ミソラがスバルに向けた目と同様の眼差しを暁とアシッドに送る。

もしも今、ツバサやゲイル、ソラといった観察力の豊かな人物が暁とアシッドを見たらこう言うだろう。

余裕を失っている。

と。本人達は否定するかもしれないが、自分のコンディションなんて物は自分では良く分からない場合が多いのだ。
なお、クインティアは別の部屋の指揮を取っている。

シドウはヨイリーの眼差しの意味に気付かず、話を進めた。

「さて、それじゃあ実験の開始と行こうか。ヨイリー博士、説明を」
「……そう。……そうね。……スバルちゃん、ミソラちゃん、2人のＰＧＭを貸してもらえないかしら？」

ヨイリーの指示でスバルとミソラは自身のハンターから『エンシェントＰＧＭ』と『ホーリーＰＧＭ』を実験用の装置に転送した。
転送が完了したのを確認したヨイリーは科学者らしい真剣な表情で説明を始める。

「……転送が済んだようね。まずは、これを見てもらえるかしら？」

ヨイリーはポケットからリモコンを取り出し、ボタンを押す。

スバル達から見て正面の大きなモニターには図形が表示された。
一見して、長い辺がギザギザしている三角形が向かい合っているような図形だ。合わせると綺麗なひし形になりそうだ。

「……これは何ですか？」

スバルはモニターを見つめながらヨイリーに尋ねる。対するヨイリーもモニターを見つめながら答えた。

「2人のPGMを分かりやすく図形で表した物よ。PGMも言ってしまえばプログラムなのだから物質ではない。でも、形にした方が分かりやすいでしょ？」

プログラムに用いる言語は我々の用いる言語と大きく違う。スバルは分かるかもしれないが、ミソラは詳しくない。故にヨイリーは分かりやすいように図形で表したのだ。

「……この図形みたいに、スバルちゃんとミソラちゃんのPGMはとある所を接点にしてピッタリ合わさるの」

「2つのPGMに共通する文字列を接点としてPGM同士を合成するってのが今回の実験だ」

ヨイリーの説明に暁が補足を加える。ヨイリーは暁の言葉に頷きながら真剣な顔の中に悔いを混ぜる。

「……2つのPGMが似ている事は、実は春先にそのPGMを検査した時に分かっていたの。……でも、何か引っかかると思いつつ作った人が同じだからという事で、自分の中で考えるのを放棄してたのかもしれないわね」

ヨイリーは自分の選択を悔い、項垂れる。

ミソラはとんでもないとばかりに首を横に振った。

「ヨイリー博士は悪く無いですよ」

『そうだ。こんなめんどくせぇ騒動を起こしたツバサを懲らしめて、それで終わりじゃねぇか。気にするこたぁねぇぜ、ばぁさん』

ウォーロックもそれに賛同するのだが、言葉遣いが悪いからかスバルや暁含む周りの者から白い目を向けられた。

ここでウォーロックに絡むのはもちろん……。

『……ウォーロック、相変わらず低コストな頭をしていますね』

『あぁ？　アシッド、そりゃアレか？　オレの頭が悪いって事か？』

『いえいえ。可哀想な頭って事ですよ』

『同じじゃねぇか！？』

同じだ。

その場に居たサテラポリスの緊張は2人のやり取りで和み、スバルの顔にもいつもの彼らしい微笑みが戻った。今までの微笑みはどこか固く、無理をしているようだった。

ポーンッ！

ＰＧＭを転送した装置から音が発せられる。どうやら先程のモニター表示と平行してＰＧＭの合成作業も進められていたらしい。

モニターに映っているのは、予想したとおりギザギザの三角形が見事に繋がった、綺麗なひし形だった。

ヨイリーはモニターの下にある、『一致値』を示す計測器の値を見る。

「……一致率９９．９９９８％。……ここまでの一致率を見ると、やっぱりカーネルの言う通り元は１つのＰＧＭだったようね」

ヨイリーはそう言いながらスバルを手招きしながらハンターを出すように言う。

そして、スバルのハンターに合成したＰＧＭを転送した。

「……このＰＧＭはスバルちゃんに預けるわ。ホーリーＰＧＭにあったバリアの能力も付加されるはずよ。……いつツバサちゃんの宣戦布告が来るか分からないから警戒しておいて頂戴。ミソラちゃんは残る事」

スバルがヨイリーの言葉で頷く傍ら、ミソラは抗議の声を上げる。

「どうしてですか！？　私だってスバル君と戦いたい！　……スバル君の役に立ちたいのに！」

ミソラは今まで、ずっとスバルと一緒に戦ってきた。しかし、アンドロメダの時もラ・ムーの時も、最後はいつも彼に任せきり。戦える力が中途半端だったから足手纏いになっていた。

しかし、ホーリーＰＧＭが作り出すバリアの応用性に気付いてからは自分もスバルの役に立てると実感できた。

無論スバルとしてはミソラが無事なだけで十分なのだろうが、大事な人の役に立てない無力感というのは体験した人で無いと分からない感情なのだ。

ヨイリーが残れと言うのは、ミソラの怪我を心配しての理由と、ホーリーＰＧＭの力が使えなくなったからだ。

ヨイリーは心底申し訳無さそうにミソラと向き合う。

「……ごめんなさいね。ミソラちゃんの気持ちは分かるけど、今回

の戦いは本当に死ぬかもしれないのよ？　今ツバサちゃんの近くにいる【　はぐれウィザード　】は、人間の事を虫けらとかそんな感じにしか思っていない。その上、その数もサテラポリスの全ウィザードを合わせても足りないくらいなの。……そんな所にスバル君の大事な人を送り出す訳には行かないわ」

「だったら、ホーリーＰＧＭのバリア能力だけでも――」

「ミソラちゃん」

ミソラの声をスバルが遮る。穏やかだが、真剣さが垣間見れる声だ。

ミソラがスバルの方を向く中、スバルは手を自分の胸程まで上げ、グッと握ってみせる。ガッツポーズというものだ。

「大丈夫。僕達に任せて。……ミソラちゃんはオリオンにやられた傷を早く治して。そして、元気なキミを僕に見せて欲しい。……僕が何とかするから、ゆっくり休んでて」

スバルの目は一見して意志の固まった目で、声は穏やかだ。

しかし、見る者には明らかな違和感（　無理　）があった。その『無理』に気付いたのは、女性たるヨイリーとミソラだけだろう。普段の暁なら気付けたかもしれないが、今の彼は気持ちの余裕を失った事で普段の観察力が鈍っている。

ヨイリーは再びミソラの方を向き、視線に思いを乗せる。

「……ミソラちゃん。やっぱりケガがあるから行かせる事は出来な

いけど、その代わりに別の方をお願いしようかしら」
「……はい。ヨイリー博士」

そのやり取りが分からなかった男衆は頭の上に『？』を浮かべるが、ヨイリーもミソラも説明をしようとはしなかった。
しかし、それでも気になるスバルは声に出して尋ねようとしたが、視界の隅でモニターに異変が起きてる事に気づいてそちらに目が行ってしまった。

「なんだか気になる――？　あれっ？　モニターが……」

スバルの視線に釣られて、ミソラや暁、ヨイリーにウォーロック、ハープにアシッドが一斉にモニターの方を向く。
先程の実験の名残で残っていたひし形は崩れるように消え、モニターの上から黒い幕が下がってくる。そして、その暗いモニターに白い文字が浮かび上がった。

サテラポリスの諸君。いよいよ『ココロサーバー』の起動が始まる。

起動のためのエネルギー充填は後2日で終わる。少なくとも明日はゆったり出来るだろう。精々最後の時を有意義に過ごすが良い。
……2日後には、『個々の人間の心』なんて物は無くなるのだからな。

それは挑戦状だ。２日後、ツバサはココロサーバーを起動させる。

……サ――――――ッ

証拠隠滅のためだろう。白い文字は少しずつ、静かに消えていく。
白い文字が掠れゆく中、スバルは小さい声で自分に何かを言い聞かせていた。ミソラはそんな彼を心配そうに見ている。

ヨイリーはそんな２人をを横目で見ながら、スバルをミソラを家に帰した。

いくら戦えるだけの力を持っているといっても彼らはまだ子供だ。勝つにせよ負けるにせよ（　無論勝つつもりだが　）、親や友人には話しておいた方が良い。

自分の知らない所で我が子が危険な目に遭っているのは、親にとって耐え難い物なのだ。知っていても辛い事には変わりは無い。しかし、それでも『待つ事』は出来る。

知らないという事はそれだけで人に恐怖を与える。逆説。知っていた方が何も知らずに待つよりも恐怖は薄くなるという事だ。

2日後、この長い戦いの幕は閉じる……。結末がどうあれ、終わるのだろう……。

第１４１話　ＰＧＭ（後書き）

……なんか段々駄文になってる気がする……。

次回は同じ日に各キャラがどんな日をすごしたかという感じになると思います。

それでは次話もお楽しみに！

第１４２話　決戦前日（前書き）

お待たせしました。……肉体的疲労の関係で前書きは以上です。
（つ～か～れ～た～）

第１４２話　決戦前日

ＰＧＭの合成実験の翌日。

――――スバル視点――――

「――って訳なんだ」

スバルは自宅にて、ルナ、キザマロ、ゴンタ、そしてあかねに明日の戦いの事を説明した。

一通り聞き終わった後、ルナはフッと息を吐く。

「……そう。またあなた達に背負わせてしまうのね……」

「……自分の無力が恨めしいです……」

ルナとキザマロは戦う力を持たない。彼女達が己の無力を呪うのは何度目だろう。……いや、このような危機がある限り、何度だってあるのだろう。

己の無力を呪うのは、大事な人が大きなモノを背負っているのに自分に出来る事が無い時の『後ろめたさ』や『心苦しさ』から来る感情だ。

己の無力を呪わないという事は、誰かに助けてもらうのが当たり前となり、そこに生じる『後ろめたさ』も『心苦しさ』もなくなることを意味する。

そうなれば、自分で背負うべき事も自分で背負えなくなる。

ルナもキザマロも友人思いだ。故に、その友人が背負うたびに己の無力を恨み、それでも自分に出来る事をしようとする。
ちょうど、今のように……。

「……でも、私達にも出来る事はあるはずよね。……スバル君、ミソラちゃん――」

ルナは2人を呼びながら立ち上がり、ゴンタとキザマロを立たせる。

「明日の戦いの間、コダマタウンは私達で護るわ。……残念だけど、私達の力だとどうしてもこの町1つが限界なの」
「えっ。でも3人で大丈夫？」

スバルの戸惑ったような言葉に、ルナは自信を持って答える。……っていうか、3人で1つの町をってだけでもすごいと思うが。

「当然よ。コダマタウンは大きい町じゃないし、私達3人が協力すればどうにかなるわ。……それに、多分明日の戦いはそっちの方にはぐれウィザードが集中しそうだし。そっちの方が気をつけなさい」

それでもスバルやミソラが何か言おうとしたため、ルナはキザマロとゴンタに視線を送って指示を飛ばす。

「キザマロ、早速はぐれウィザードが攻めてきた時の進入ルートをペディアと一緒に割り出して。ゴンタはいつでも戦える様にゆっくり休んでおきなさい。……って感じで、情報収集はキザマロとペデ

ィアが。戦闘はゴンタとオックスが。指揮を私がやるといっても不安なのかしら？」

ペディアは地球上のあらゆるパーセンテージを瞬時に出せるほどの演算能力を持ち、キザマロはそのデータをまとめる作業。

ルナのリーダーシップは言わずもがな。

そしてゴンタもサテラポリス遊撃隊の一角を担っていたのだ。

3人のチームワークが上手く回れば、そんじょそこらの自警団よりも強力だろう。

スバルがその事に納得したのを空気で察してか、ルナはキザマロとゴンタの背中を押してスバルの部屋を後にした。キザマロは早速ペディアに情報の検索を頼み、ゴンタも腕を振り上げて「休むぞぉぉぉ！！」と言っているのが頼もしい。……後者は本当に頼もしいのか？

アカネは3人を玄関まで送るらしく、一緒に部屋を出るようだ。

しかし、ドアを閉める前に立ち止まり、スバルとウォーロックはもちろん、ミソラとハープも加えた『自分の家族』にハッキリした声で言った。

「……スバル、ミソラちゃん、ロック君にハープちゃん。ちゃんとウチに帰ってくるのよ。……この家に」

本来ならもっと我が子と語りたかっただろう。しかし、たくさんの『言いたい事』を一言に纏めて、アカネは部屋を後にした。

スバルにはミソラがいる。これからは2人で乗り越えなければ行けない事もあるだろう。故に、これ以上親が出しゃばる訳にはいかない。

ドアが閉まるのを確認したミソラは、スバルと向き合う。ハープは空気を敏感に察してウォーロックを拉致。星河家の屋根の上に招待した。

「な、何なの？」

ウォーロックの悲鳴を聞きながら、スバルは2人が消えた天上を見上げる。

一方のミソラは意を決してスバルに話しかけた。

「スバル君。……無理はダメだよ」

「？　別に無理なんて――」

ミソラは首を横に振ってスバルの言葉を遮る。

「それこそウソだよ。……じゃあ聞くけど、昨日何を自分に言い聞かせていたの？」

昨日、ＰＧＭの合成実験としてシーサー城にてツバサの犯行声明が送られて来た時、スバルは自分に何かを言い聞かせていた。自分の心に刻み込むように、何かを。

「それは……自分が頑張らなきゃって。僕が止めないといけないんだ。……僕はツバサ君の友達だから」
「……ツバサ君は私達にとっても友達だよ。スバル君が1人で抱え込む必要は無いと思う」
ミソラの言葉にスバルは俯く。
ツバサとアイリスに裏切られ、全てがウソだと言われ、彼の野望を阻止するための時間も少ない。スバルは暁同様余裕を失い、その苦しさや悩みを払拭する方法を見つけた。……いや、『逃げ込んだ』と言うべきだろう。
ツバサを止めないといけない。
自分には人類の心が操られるかどうかがかかっている。
皆のために、世界のために……。
そうやって自分に大きなプレッシャーを掛ける事で、それ以外の悩みを払拭したのだ。
しかし、強過ぎる思いは心を縛る鎖となり、その者の強さたる『芯』となる反面、その者を苦しめる『毒』にもなる。だからスバルは今までより早いスピードで立ち上がると同時に、苦しんでいるのだ。
自分では中々無理をしている事に気付けないし、気付けたとしても自分でどうこう出来るほど易しい問題でもないのだ。

ミソラは俯いているスバルを優しく抱きしめる。

「……私達も居るから、1人で抱え込んじゃ嫌だよ。……スバル君」

「……ミソラ……ちゃん……」

「もっと私達を信じて。一緒に戦えなくても、遠くに居ても、思いは繋がるから」

「……」

スバルは『自分が戦わなければいけない』と思っていた自分を振り返る。

自分だけで背負い込む。

それは聞こえは良いが、言い方を変えれば自分を慕う誰かを信じないという事にも取れる。それは、自分を慕ってくれる人に失礼だ。

直接共に戦えなくても、思いは……心は一緒に戦える。スバルはその事を忘れていた。当たり前な事なのに、余裕の無さが、それをスバルに気付かせなかったのだ。

少しずつ頭が冷めてきて、周りを見れるようになったスバルの視線の先には鏡があった。以前ツバサから受け取った手鏡で、開いたままにしていたのだろう。その鏡にはミソラに抱き付かれた自分の姿が映っている。

スバルは鏡に映る自分の顔を見て、ある事に気付く。

今の自分の顔（　まだ少ししか余裕を取り戻していないので、若干の緊張が残る顔　）が、ツバサが時折見せる辛そうな顔に似ていたのだ。

今の自分の顔は内面の苦しみから来る顔。それは演技できるモノではない。そして、ツバサがその顔になるのは決まって『自分はもう逝くからお前らは元気で』等といった自分が消える様な言い方をする時だ。

すなわち、そこから推測できるツバサの【　本当　】とは……。

本当なら消えたくない。だけど、そうしないといけない理由がある。

と、思い苦しんでいるという事だ。

これはスバルの自分勝手な推測に過ぎない。しかし、１つだけ確かに分かった事がある。それは、彼が人間１人に余る様な大きな事を１人で抱え込んでいるという事だ。

「……さっき」

「ん？」

ミソラは自分の耳の辺りでスバルの声を聞いた。

「さっきミソラちゃんが言った事、ツバサ君にも言ってあげないとね」

ツバサは1人で何かを抱えている。そうする必要は無いと言ってあげなければいけない気がした。そして、そうしないといけない理由も聞かなければいけないだろう。

ミソラはスバルの言葉に嬉しそうに頷く。顔を見ずとも、スバルが余裕を取り戻した事を察したのだろう。

ヨイリーがミソラに頼んだのもこれが理由だ。辛い状態のスバルを立ち直らせるには、スバルが最も心を開いている人間が効果的。だから、ヨイリーはミソラに任せたのだ。

「うん！　……あっ、でも……」

「？」

何かを考え込むようなミソラの声にスバルは不思議に思い、腕を伸ばした位の距離を空けて彼女と向き合う。

「……ツバサ君にはソラさんが言った方が良いかな」

「あ、それって――ッ！？」

スバルは何故ソラかが分かった。伊達に今までジャックや暁や、ジャックやジャックから『鈍感』と言われてきた訳ではない。

しかし、スバルは言えなかった。ミソラが突然スバルの口を自分の唇で封じたからだ。

「なななななっ！！　いきなり何を！」

ミソラと離れた後、面白いくらいに動揺するスバル。余裕が無い

状態から立ち直った直後で、心の準備が出来ているはずが無い。動揺するのも無理からぬ事だろう。
　対するミソラは、若干顔を赤らめながら楽しそうな笑みを浮かべる。

「あの2人はこういう仲って事♪」
「それはキスをされる前に分かったけど、何で実力行使!?」
「スバル君の元気が出るかな～っと思って♪」
「えっ……あっ……そう」

　ミソラの後ろめたさの欠片も無い笑顔で肩透かしを食らうスバル。怒りとキスをされた恥ずかしさはどこかに飛んで行ってしまった。

コンコンッ

　ドアをノックする音。スバルはそれに応えようとドアの方を向いて返事を返そうと思った瞬間、顔面蒼白になる。ミソラもスバルの視線の先を辿り、同じ者を見てスバルと同じ様に蒼白になる。

　ルナが居た。

　それも部屋の中に。内側に開かれたドアの近くに立って、部屋の内側からドアをノックしている。……スバルとミソラは恐い以外の感想が出てこないらしい。

「……シャーペンを忘れて戻ってきたのだけれど、ずいぶん楽しそ

うね」

ゴンタとキザマロの姿は見えない。ルナが1人で星河家に戻って2人に帰らせたか、または下で待っている（　別名：避難　）かだ。

スバルは弁解を言おうとする。

「いや、これはその――」

「不愉快だわ」

「「ッ！！」」

その一言でスバルとミソラは動けなくなった。威力十分。ハサミギロチンやツノドリルに匹敵する一撃必殺だ。……いや、視線と言葉だけでこの威力なのだから、これに手を上げるといったちょっとした動作が加われば、それすらも越えるだろう。

スバルとミソラはこの後、ルナから「公序良俗が～」といったお説教を受ける事となる。

――星河家の屋根の上――

下で繰り広げられているお説教を聞きながら、ウォーロックはボソッと呟いた。

『……ハープ』
『何かしら、ウォーロック』
『こういう時、地球人ってすげぇって思うぜ』
『どんな時かしら』

尋ねるハープにも若干の予想が立っていた。それでも、ウォーロックが話したそうとの事で促したのだ。

『さっきのスバルみたいに、自分を見失っても自分で這い上がったり、自分だけできつくても誰かが引き上げてくれたり……。【日常】って奴かね、それをやり方次第で簡単に取り戻しちまうんだから、人間って面白れぇ』

『クスッ。……FM星の誇り高き戦士がここまで地球人に惚れ込むなんてね。……まぁ、あたしもだけど』

ハープはここで口調を改め、その声に真剣味を加える。

『……ウォーロック。ミソラは任せて』
『……おう』
『それと、ちゃんと帰ってくるのよ。スバル君だけでなく、あなたも』

真剣なハープと接していたウォーロックはむず痒そうに目を逸らした。

『……そのつもりだが、そういう言い方は止めろ。むず痒い』
『クスッ。……照れくさいのかしら？　……ロックちゃん？』
『……』

この後、ウォーロックが照れ隠しとしてハープを追いかけ回してコダマタウン上空を5周した事は言うまでも無い。

――――シーサー城――――

ピッ　ピッ

一定間隔で鳴る機械音。
暁は今、今の状況をアシッドに整理してもらっている。さっきからしている音は、アシッドが暁のハンターを内部から操作している音だ。

そして整理された情報は暁のハンター画面に表示されるという訳である。

「っと、アシッド、少しストップ」
『はい、シドウ。……このデータは……』

暁が中断した時にハンターに表示されたのは、アメロッパ大統領アーノルド・ローグが拉致られた情報だった。

「……オレ達が確実に来るようにって事で人質かな？　なめられたもんだ」

戦いつつローグを見つけて保護しないといけない。

暁は「こりゃあ大変そうだ」と表情だけで笑ってからイスの背もたれに体重を預け、アシッドに作業を再開させた。

「ソラちゃんには連絡するのかしら？」

暁は背もたれに寄り掛かってうまい棒を食べ始めたのだが、ちょうどその時ヨイリーが声をかけてきた。

しかし、暁は首を横に振って即答する。

「いえ、自分の好きな人と戦う辛さはオレが良く分かっています。……ここはオレやスバル、ジャックやジョーカー……サテラポリスの方でケリを付けましょう」

スバルも暁も、どっちも自分を追い込んで自分を保っていた。

スバルを苦しめていたプレッシャーがツバサに裏切られた苦しみを払拭するためだとすれば、暁の場合は裏切られた事に加えて、臨時司令官になったプレッシャーだ。

アメロッパやアジーナ……各国のＷＡＸＡは存在するが、それでも一国のサテラポリスを束ねる事となるのだからそのプレッシャーは大きい。

ヨイリーは暁の言葉と内心のプレッシャーを悟り、気乗りしないような、陰鬱なため息を付きながら応じた。

「……そう。……そう、ね。……でも……まぁ、これは良いでしょ

うね」
「？」
ヨイリーが言いかけた事が気になり、暁は詳細を聞こうとしたが……。

『ヨイリー博士、頼まれていた件だが』
ヨイリーの机にキングの立体映像が現れた事で聞けなかった。等身大ではなく、高さは約２０センチ程だ。
キングは暁に気付くと気さくに片手を上げた。
『やぁ暁、久しぶりだな』
「あっ……えっ？」
訳の分からない事が続いたせいで、暁の頭はオーバーフローを起こしたようだ。
ヨイリーの言葉にキングの出現。自分の知っているキングと大きく違う目の前のキング。
これらの事を暁が脳内整理している間に、ヨイリーとキングは話を再開させる。
『それで、頼まれていた事だが』
「そうだったわね。それで、結果は？」
『衛星からの情報から分析するに、最高は４８といった所か』
「？　何がです？」

これ以上話に付いていけなくなって堪るか。
暁は2人の話に加わる。48という数字は一体何なのか。
ヨイリーとキングは顔を見合わせた後、ヨイリーが口を開いた。
「単刀直入に言うと、ツバサちゃんの能力対策の一環よ。2日前の戦いの後、衛星からの映像でもしかしてっていうのがあったの」
映像に何があったかはキングが答える。
『弱点を見つけたからな。……いや、むしろ限界と言うべきか……』
「……」
暁の思考と体は停止した。
突然すぎる。ツバサの能力は電波そのモノを操る事であり、電波体にとって天敵とも言える能力だ。……いや、リアルウェーブも実体化した電波なのだから、それを使えば相手が電波だろうと物質だろうと関係無いだろう。
しかし、いきなりその能力の弱点を見つけたと言っているのだ。
どうあの能力と戦うかというのも悩みの1つだったため、思考が停止してしまった。
「……シドウちゃん？」
「ハッ！　あ、あの、弱点って何なんですか？」
ヨイリーの言葉で我に帰った暁は多少戸惑いながら2人に質問する。
ヨイリーとキングは顔を見合わせた後、ニコッと微笑んだ。

「『教えない」』
「……」

黙り込む暁の内心は……。

（……やっぱりな。そんな事だろうと思った）

といった所である
拗ねた様子の暁を見たヨイリーは楽しそうに言う。

「ふふっ。今のままのペースで行けば明日にはギリギリ出来上がるでしょう。……頼もしい助っ人が2人も居るんですからね」
「？　助っ人？　……ええっと、まずキングと……あぁ、天地さんですね」

ヨイリーが今回のような差し迫った状況で助っ人に選ぶとすれば特別腕の立つ技術者。暁の知っている中で該当するのは、今手伝っている事を知ったキング。そして、大吾の後輩である天地だろう。

しかし、ヨイリーはそれをアッサリ否定した。

「ハズレよ。……そろそろ基礎となるプログラムが出来上がった頃かしら」
「はい？」

暁の疑問の声。話の流れから見て『定時連絡』というのは何とか解釈できた。

「送られてきたデータはＰＧＭに組み込めるように私が調節するわ」

「あの、だから最後の助っ人って誰――」

「ヨイリー博士、雛形（ひながた）が出来たぞ」

暁の言葉を遮る女性の声。釣られて声のした方を向くと、ディスプレイには見た事のある顔が映っていた。見た事はあるが会った事は無い。だが、その名前と科学者としての実力は良く知っている。

「ッ！　あ、あんただったのか……」

「ん？　そなた、わらわを知っているのか？」

知らない訳が無いだろう。

暁は無言でその女性にツッコミを入れる。『オリヒメ』という、ヨイリーにもキングにも引けを取らない科学者に。

第１４２話　決戦前日（後書き）

次話は『地均し』や『前座』の意味合いなので、多分今までより多少短いと思います。状況の調整ですね。

段々クライマックスまで近付いてきました。お楽しみに！

第１４３話　アビリティ（前書き）

お待たせしました！　短くなると言いつついつも通り長いという……。「短い！　それは楽に読めそうだ！」と期待していた皆さんごめんなさい。

それと、今回はｂｒａｖｅさんの提案でミソラや暁のトランスコードを追加（？）してみました。ｂｒａｖｅさん、提案ありがとうございます。

なお、ジャックとクインティアの方は自分で勝手に考えました。

第１４３話　アビリティ

ツバサから指定された日、スバルとミソラはシーサー城に来た。途中に罠がある可能性を考慮し、それぞれで目的地に向かうよりも一丸となって中央突破した方が良いと思われたためだ。

なお、指定された場所は衛生からの探知で何度も探したポイント。ディーラーの時と同様、特殊な電波により衛星からの探知を効かなくしていたのだ。

スバル達に最初に声を掛けて来たのは暁だった。

「よぅスバル、ミソラ。早かったな」

「暁さん、おはようございます。……やっぱり状況が状況なので――」

「じっとなんてしていられませんよ！」

スバルの言葉を元気に続けるミソラ。彼らの目には強い意志と決意で満ちていた。自分で吹っ切った２人の顔を見て、暁は申し訳なく苦笑する。

その感情の理由は暁自身が説明してくれた。ただしそれは、自分の弱音を言うより、むしろ事前報告と言った方が正しい。

「はは……。たのもしいな。……悪いが、オレは加勢できない。クインティアとジャックは行くけどな」

暁のその言葉に、スバルとミソラはもちろんウォーロックとハープも疑問符を浮かべる。

『あぁ？　調子でも悪いのか？』

『ポロロン。……サテラポリスのエースさんが怖気づいたって事は無いでしょうね？』

ハープの冗談に、暁は今度はおかしさから苦笑してみせる。

「あ、いや。そうじゃなくてだな。ほら、今のオレはサテラポリスニホン支部の長官代理だろ？　チェスでも将棋でもそうだけど、王が出て行っちゃダメだろ」

ま、オレが王ってのも我ながら変な感じだけどな。

そう続ける暁。だが、実際には戦いたいだろう。暁シドウという男は正義感の強い男。前線に出て戦うのが本来の彼だ。

前線に出て自分自身の手で戦うために。

前線の子供達と共に戦い、子供達を助けるために。

その無理に気付いたスバルは声をかけようとするが、暁の思い出したような声で遮られた。

「あ、大事な事を思い出した。スバル、ハンターを出してくれ」

「えっ？　あ、はい」

不意に話が変わって戸惑いつつもスバルは自身のハンターを出す。
暁はその中に何かしらのデータを転送し始めた。ウォーロックが『オイ勝手に入れるんじゃねぇ！』とか文句を言っているが、暁は軽くスルー。

「……よし。転送完了」
『いきなり何を入れやがったんだおめぇ～～』
「わわっ！　ウォーロック吐かないでね！」

ウォーロックは最後、『お前』と言おうとしたのだが、いきなり大量のデータを送られたせいで吐き気を催(もよお)してしまったのだ。

端末がハンターＶＧに変化するに従い、ウォーロックの構成電波は地球のデータと連動。急に大量のデータを送られる（　例えば、ＯＳの大規模なアップデート等　）事はすなわち、口から大量の食べ物を強引に詰め込まれる事と同義なのだ。

対するスバルは吐かないようにウォーロックに注意。一見真面目に注意しているように見えるが、ハンターを持つ手を自分から目いっぱい離している所がアレである。

暁はその様子を見て怪訝そうに首を傾げた。

「？　そんなに容量あったか？　ヨイリー博士の話だと、あくまでショートカット的な物だからできるだけ軽くしてあるって言ってたけど」

『私がアビリティを添付したからでしょうね』

『あ、あんだとアシッド……。てめぇオレになんか恨みでも……』

ようやくまともに話せる様になって来たウォーロック。そんな彼の発言第一号が文句というのもどうなのだろう。

一方、アシッドはいつものからかう口調は無く、真剣な声でそれに答える。

『……私が添付したのは【ＨＰ＋】のアビリティです。体力が多くて損は無いでしょう』

アシッドの言っているのはハンターの前機、スターキャリアーからある機能だ。

一定の容量以内で収まるように、【　アビリティ　】と呼ばれる強化プログラムを装備できるのだ。

ウィザードに特殊能力を付加する物もあれば、先程アシッドが与えたような純粋に能力の底上げを目的とした物もある。なお、エースＰＧＭやエンシェントＰＧＭもアビリティの一種だ。

アシッドは若干心配そうな声に変えて続ける。

『……私達の代わりに、皆を束ねてください。あなたとスバルなら必ず出来ます』

アシッドが珍しくストレートでウォーロックとスバルに激励し、

対するウォーロックは実体化してポリポリと気まずそうに頭を掻く。

『……ぶっちゃけそういう言い方はくすぐったいが……まぁ、お前に言われるまでもねぇ。任せときな。……なぁ？　スバル』

ウォーロックが首だけ動かして少ししたのスバルに視線を送る。

スバルはその視線を受け、アシッドと暁に向き合う。

「うん。……暁さんとアシッドの分まで戦ってきます」

「……その必要は無いよ」

不意に人山の向こうから聞こえた声。スバル達に激励の一言でも言おうと隊員達が人の山を作っているのだが、その向こうから声が聞こえてきたのだ。

覚えのある声。しかし、ここにはいないはずの声。その声の主は……。

「ＷＡＸＡニホン支部の長官は私だ。暁君には直ちに遊撃隊に戻り、スバル君達を導いてやって欲しい」

「長官！」

「大丈夫なんですか！？」

長官が現れた事に隊員達は戸惑いながらも道を開け、心配する声をかける。無論その気持ちは暁もスバルも同じだった。

長官はそれを察すると力強く笑顔を作ってみせる。

「あぁ。この程度の怪我で役職を放棄するわけにはいかんからな。……暁くん」

自身の名を呼ばれ、暁の背筋が伸びるのを見てから長官は言った。これまた一転して、賞賛するような笑顔で。

「私が留守の間、良く頑張ってくれたそうだな。感謝する。……ここからは私に任せなさい」

暁が度重なる重圧で苦しんでいる事はヨイリーから聞いた。体調も大分落ち着いてきており、無理な運動さえしなければ病院に返される事も無いそうだ。

長官は「それに――」と続ける。

「キミ達に加勢したいという勇士もいる」

長官はそう言うと再び人の壁と化した後方を見る。隊員達が慌ててその方向を広げると、緑髪の少年が立っていた。穏やかな微笑みに両性的な顔立ち。双葉ツカサである。

「やぁ、スバル君、みんな。久しぶり」

「ツカサ君。どうして？」

ツカサの挨拶にスバルは質問で返す。

何故ここに居るのか。

何故戦おうと思うのか。

ツカサはスバルの質問の意味を察し、２つ両方答えた。

「キングって人からメールがあってね、今日スバル達はエーテルであるツバサと戦うから直接加勢してくれって。……それに、以前キミを騙して裏切った罪滅ぼしもある」

「そんなの――」

もう気にしていないと言おうとしたが、スバルの言葉をツカサは手の平を前に出す事で遮る。

「良いんだ。僕が好きでやっているだけだから。……ありがとう、スバル君」

その後のツカサの話だと、キングは他の電波変換メンバーにも声を掛けたらしい。ツカサはその中でも実力が高かったとの理由で前線に。他の者、例えば尾上（おがみ）十狼（じゅうろう）などは各地の警護だという。

「……あのキングがそこまで……」

スバルは複雑な感情の元に呟く。強いて分析すれば、驚き2割。心強さ3割。改心した事への嬉しさ3割。それでも少し警戒している感情が2割だ。

心強いと感じたのは暁も同様らしく、余裕を取り戻したような顔でスバルやミソラ、ジャックにクインティア、そしてツカサにジョーカーを見る。

「よし！　それじゃあこのメンバーで突撃する！　各自電波変換した後、指定された場所に向かうぞ！！」

「「「「はいっ！」」」」

スバル達の返事にジョーカーとクインティアの頷き。
スバル達はハンターＶＧを掲げ、ハンターの画面には電波変換のためのトランスコードが表示される。

スバルには『トランスコード００３　シューティングスター　ロックマン』

暁には『トランスコード００１　ソニックスター　アシッド・エース』

ツカサには『トランスコード０２５　サンダーライト　ジェミニ・スパーク』

ジャックには『トランスコード０２８　カオスファイア　ジャック・コーヴァス』

クインティアには『トランスコード０２９　クリアウンディーネ　クイーン・ヴァルゴ』

なお、ジャックとクインティアにもサテラポリス公認の電波変換メンバーの証としてトランスコードが与えられている。

なお、トランスコードの後に付いていたのはヨイリー博士が追加したものらしい。ようは縁起担ぎだ。受験のシーズンになると『キッドカッド』や『うか～る』といった名前の製品が流行るのと同様の事だ。

当のヨイリーは寝ている。歳が歳なのにほとんど徹夜したのだ。入院しないだけで上々だろう。

その後、暁達サテラポリス遊撃隊は指定された場所に直行する。スバルとしては先程渡されたアビリティの事も聞きたかったが、それは道中でも聞けるだろうと判断して指示に従う事にした。

「……スバル君、皆……。無事に帰ってきてね」

ミソラは祈るように指を組んで、幾筋もの光が飛んでいく空を見る。その声は静かで、空間に溶けて行った。

――――ホテルの一階ラウンジ――――

「……そうか、分かった。ありがとう、ライラ」

ライラは自分が乗っ取った衛星からの映像でスバル達が動き出した事を察知した。

ゲイルとしては、襲撃の事を自分を始めソラに言わないのは容易に予想可能。故に、ライラにサテラポリスの動きを見張らせていたのである。

なお、この戦いの日と場所まで覗かれていたのだからサテラポリス（　強いて言えばシーサー城　）のセキュリティはどうなのだろうと突っ込みたい。……いや、むしろライラの本領の賜物というべきか。

報告を受け取ったゲイルはコクレンと藍川、そしてソラの方を向く。決戦の日付と場所さえ分かってしまえば、後は四神とそのパートナーを集めるだけだ。

ゲイルの目にいつものフザケタ光は無く、暁顔負けの力強い光を帯びた目だ。

「さて、いよいよだ。……誰が抜けても文句は言わない。どんな事になるか保証は無いけど、それでも行くかい？」

コクレンと藍川は無論だといった様子で不敵な笑みを浮かべ、ソラもまた確かな意志の下に言葉を紡ぐ。彼女の真紅の目はその意志に応えるように煌々と日の光を反射し、澄んだ、純粋な焔（ほのお）を思わせる。

「行きます」

短い言葉の中に言外の意味とその意志の強さを察してか、ゲイルはフッと微笑むと一同に背を向け、ホテルの出口に歩き出す。

「それじゃあ、全員で行こうか。そして――」

開かれた扉。ゲイルは外の風で髪を靡(なび)かせながら振り向き、不敵な笑みと共に振り返る。

「絶対に全員で帰還しよう！」

――――某所――――

『エーテル様』

「ん？　なんだい？　テム」

自分に問いかけるはぐれウィザードに振り向くツバサ。言うまでも無いが、『テム』というのははぐれウィザードの名前だ。人間という大きなカテゴリの中に個々の名があるのと同様に、個々の名前ははぐれウィザードにもあるのだ。

『……何故人間の心を操るだけに留めるのです。一思いに滅ぼしてしまえば――』

「そうしたければそうしろ」

テムの言葉を断言的に遮るツバサ。そして、続ける。

「ココロサーバーで我々に逆らおうとする意志を奪えば抵抗は出来なくなる。……その後どうしようが構わないだろう」

『……』

痛めつけようが命を奪おうが勝手にしろとツバサは言った。『フリ』とはいえ、つい最近まで味方だった者とは思えない言葉に、テムはツバサに畏怖の念を抱く。そして、再度忠誠を誓った。

『エーテル様！　サテラポリスの奴等がこっちに向かってきます！』

荒々しく開かれるドアと荒々しい声。部屋に入ってきたはぐれウィザードの報告にツバサは立ち上がり、自身の形態を変化させる。ジョーカーが戦闘時に姿を変えるのと同様の事だ。

「来たか。……これで終わらせるぞ！」

『『おぉ！！』』

テムともう1人のはぐれウィザード、【　サルト　】は各地の同士や基地の仲間にその事を伝えるために駆け出す。

部屋に1人残されたツバサは陰に潜む者に話しかける。

「……ハイド、こっちに来てくれるか」

陰から光の下に出てきたハイドはツバサのそばに立つ。ツバサは平手をハイドの方に向け、問う。

「……本当に最後まで付き合うのか？」

「ンフフ。……無論だ」

それは最終確認であり、彼の……ハイドの心を試したのだ。

ツバサはハイドの意志を確認した後、静かに息を吸って言葉を紡ぐ。

「お前に、オレの力の一部を預ける」

ハイドの足元に太陽と月が描かれたツバサの魔方陣が浮かび上がる。

「……この力で――」

この後ツバサの口から聞いた事に、ハイドは無言で頷いた。

第１４３話　アビリティ（後書き）

次回からは戦闘パートに本格的に入るか、その直前までですかね。

それではまた。

第１４４話　四つの関門（前書き）

お待たせしました。今回も長いです。それと、次回作の補完兼資料目的で買った本からの引用もいくらかあります。結構毛色が違うので分かりやすいですかね。（引用といっても多少文字は変えています）

第１４４話　四つの関門

――――チョイナ――――

「……ここ何ですよね？」
「……ああ、そのはずだ」

尋ねるスバルも、尋ねられた暁も目の前の光景に首を傾げていた。

電波変換したスバル達はツバサから指定された場所に来たわけだが、何も無い、湖畔のそばだった。警戒のために電波変換は維持しているが、ほのぼのとした雰囲気に思わず気が緩みそうになる。

首を傾げた理由は、あまりにこの場が『ノホホ～ン』としていたからだ。

「ッ！　あんまりのほほんともしていられねぇみたいだぜ？」

ツカサの別人格、ヒカルが電波変換したジェミニ・スパーク『ブラック』が指差す先には、自然溢れるこの情景に似つかわしくない人工物が置いてあった。

形状は円筒状の物体の上に半円が乗っかっている物で、その半円には５つのスイッチがあり、配置はちょうど五角形。色も分かれている。

白、黒、赤、青……そして無色。

無色といっても装置の中が見えるわけではなく、強いて言えばスモークガラスのようなものだろう。

罠の可能性もあるためアシッドに周辺を探らせながら近づく事にする。

ザッ　ヴンッ

一歩踏み出した直後、装置の上部からエアディスプレイが浮かび上がる。そこに映し出されていたのはエーテル・フォトンだった。すでに形態変化しているらしい。

エーテルは不敵に笑ってディスプレイ越しでスバル達を見る。

「フッ。……やはり来たようだな。そうでなくては面白くない。さて、キミ達の前にあるのは転送装置だ。スイッチを押した途端、キミ達はそれぞれの戦場に飛ばされる」

「……それぞれの戦場って？」

スバルの問い。エーテルは余裕の態度を崩さず答えた。

「言葉通りだ、星河スバル。白黒赤青、４つのスイッチの先に待つ者を倒せば残りのスイッチから私の元へと行ける。……もっとも、無色のスイッチにも門番たるものが居るがな」

「つまり、４グループで鍵を開けて残りがお前の所に突撃できるって事か」

「あぁ、その通りだよ、暁。面白そうだろう？　おまけを言えば、他の４つをクリアした者は他の者の所に加勢に行く事も出来る。キミ達にとっても不利ではないだろう。……何にしても、こうして話している間も着々とココロサーバーへのエネルギー充填は進んでいる。……私の話の乗るか、それとも人類丸々支配される道を選ぶか……。好きな方を選べ」

ブツッ

エアディスプレイは閉じ、その場に沈黙が流れる。
最初に口を開いたのはスバルだった。

「……行こう。ここで立ち止まっていられない。罠だとしても、僕が僕で、ミソラちゃんがミソラちゃんで、暁さんが暁さんでいられない世界なんて、あっていけないんだと思う」

ツバサに何かしらの理由があるとしても、そればかりは許してはいけない。それを許すという事は、『個』が『個』でなくなることを許す事だ。

人間はそんな物に頼らなくても生きていける。家族や血筋、過去や歴史。自分と何かを繋げる『キズナ』を尊重するのも良いだろう。
だが、それらはあくまで補助でしかない。

人間には、一個人でも十分な『強さ』を持っているのだから。そして、そう言い切るだけの『強さの可能性』を、人間という生命は

持っている。

己が弱さを受け入れ、それを超越しようとする『勇気』が。
『生きたいという』生物共通の『願い』が。
己が己であるという自信……『誇り』が。

その者を生かし、強くするキッカケになる。
人間はいかなる時でも、『絶望』から『希望』へ繋げていける生物なのだから。

それでも、個人ではどうにもならない事はある。そういう時に手を貸し合えば良い。
全て手助けしたのでは意味が無い。手を貸した上で、その者が頑張って手にしなければ意味が無い。
いずれにせよ、家族を含めた自分以外の『他人』に出来る事は限られるのだ。

「スバル……。よし。それじゃあ皆、それぞれ行く所を選んでくれ」

スバルの言葉に応える様に暁の指示が飛ぶ。
結果、以下のようになった。

無色：スバル。
白色：暁、クインティア。
黒色：ジョーカー。

赤色：ジャック。
青色：ツカサ、ヒカル。

この中でエーテルに対抗できる可能性の最も高いスバルは『無色』に。
ジョーカーは『1人が良い』と言って『黒』に。
ツカサとヒカルは「色から考えて電気属性である僕達が行った方が良い」との事で『青色』に。

そしてジャックは……。

「……ジャック、本当に良いのか？　1人で」

暁の心配そうな問いにジャックは不敵な笑みで口元を歪ませる。
なお、ジョーカーとジェミニ・スパークの2人はすでに行ってしまった。

「あぁ。それより暁。お前は姉ちゃんの恋人なんだからばっちり姉ちゃんを護れよ。何かあったら承知しねぇ」
「しかしだな――」
「時間がねぇ。あばよ。また後でな」

食い下がる暁を無視してジャックは赤いスイッチを押し、先に転送される。

「……シドウ……」

クイーン・ヴァルゴの物言いたげな目。弟の事を心配しているの

だ。彼女にとってジャックとは、実の兄弟なのだから。
シドウはそんな彼女にしっかりと頷いてやる。

「分かってるよ、ティア。……スバル、すまないがオレとティアはこっちを済ませた後ジャックの加勢に行く。お前への加勢は後になるが、ゴメンな」
「はい。僕の方は良いです。気をつけて」

「……互いに幸運を」

突き出されたアシッド・エースの拳をロックマンは拳でぶつけ返す。
2人が転送されたのを見てから、スバルは自身を落ち着かせるように息を吐く。

「ふぅ。……後は僕達だけだね」
『ああ。ツバサの野郎をギッタンバッタンにして改心させてやろうぜ！』
「……お手柔らかにね」

ウォーロックの行き過ぎ思想にスバルは引きつった笑みを浮かべる。2人が転送されたのは、これからすぐの事。

――――ツカサとヒカル――――

「……見た所――」
「小島みたいだね」

ヒカル、ツカサの順の言葉。
2人が飛ばされたのは小島だった。さして大きくなく、周りは海だ。

『……ツカサ、ヒカル。……どうやら番人とやらのお出ましのようだ』

ツカサのハンターの中からジェミニが言葉をかける。

ツカサの『ホワイト』とヒカルの『ブラック』は周りを警戒するが、それはすぐに見つけられた。

『……』

無言の者。それは海の上に浮かんでいる。姿は黒き龍。その龍の背後に立つはムーの衛兵エランド。

『……』

そして黒き龍は無言のままエランドを吸収していく。
約1年前、ラ・ムーとの戦いでエランドを素体に電波変換を行ったムーの電波体のように、その者はその姿を変えて行く。

水の槍を持つ、龍人の姿に。

――ジョーカー――――

『……平地……か』

ジョーカーが飛ばされたのは平地だ。周りには何も無い。

『ッ。……いや、何も無くはなかったか』

ジョーカーが気配を感じた先には、黒い亀とエランドが佇んでいる。

ブオッ！

ジョーカーが周波数移動で目前に移動して豪腕を振るったのは、亀がエランドを吸収し始めたのとほぼ同時。

ズゥゥゥゥゥン！！！

ジョーカーの攻撃による激震により、戦闘は開始される。

――ジャック――――

ジャックが飛ばされたのは高地だ。切り立った崖。ずっと下には自然の水路。グレートキャニオンという名前だっただろうか。

ジャックはため息を付きながら自身と対峙している存在を見る。

「……スイッチの色からしてもしかしてと思ったが、やっぱりお前だったか――」

ジャックは今自分と対峙している相手が予想できていた。この相手は自分でなければ出来ないだろう。サテラポリス遊撃隊の中で空中を自在に飛びまわれるのはジャックだけなのだ。

「――スザク！」

『……』

ジャックの言葉にスザクは答えない。ただし、ジャックの知っているスザクと違う事は明々白々なのでジャックの言葉に答える義務は無いだろう。

主たる色である『赤』は変わらないが、全体的に黒の要素が入っている。何より、雰囲気が暗い。まるで『闇』と対峙している様だ。

『……』

黒のスザクはエランドを吸収。その姿を変える。

黒い羽を持つ堕天使に。

――――シドウとクインティア――――

「……シドウ……」

「とりあえずジャックに一言謝っておこうか」

クインティアが目の前の敵に敵意を向ける中、シドウは快活にどこかで戦っているであろうジャックに向けて言葉を発す。

「こっちで精一杯でそっちの加勢に行けないかも」

ゴォォォォォ！！！

次の瞬間、対峙していた者が暴風を吹き荒らす。

――――スバル――――

それぞれがそれぞれの敵と対峙している時、スバルの相手は……。

『チッ。やっぱりてめぇか』

「……ハイドっ！」

ウォーロック、スバルの敵意の目を受けながらも、ハイドの電波変換したファントム・ブラックは不敵に笑う。

「ンフフフ……。今回で私達の戦いも終わるだろう」

『てめぇの敗北でな！　行け！　スバル！　こんな奴とっととケリ付けちまえ！！』

「うん！　ウォーロック、アシストお願い！」

『おうともさ！！』

売られた言葉は買うのが通り。

ウォーロックは自身の爪を構え、ロックマンは『バトルカード：ソードファイター』を左腕に転送。

「『おおおぉぉぉぉぉ！！！」』

2人は雄叫びを上げながらファントム・ブラックに突進する。

――――ツバサ――――

「……始まったか」

その場に居なくとも今のツバサ、すなわち『エーテルの状態』では戦いの様子が分かる。

電波を操れる今の状態なら、詳細は分からなくとも大まかには感知できるのだ。

「……あなたには見学していてもらいましょうか。アメロッパ大統領」

エーテルの振り返った先にはアメロッパ大統領、アーノルド・ローグの姿があった。

ツバサとローグが居るのはアメロッパの荒野。盆地のような場所の中心だ。何でも、過去に隕石が落下した後らしい。言うなればクレーターだ。

半径5キロを越えるクレーターの真ん中に2人は居る。

「……」

ツバサの言葉にローグは答えない。うつ伏せに倒れている彼は、ツバサの処置で眠らされたばっかりだ。

「ふっ」

ツバサは意味深に微笑んだ後、意識を集中させて戦闘の感知を再開した。

「……ん？　この気配……やっぱり来たか」

ツバサが感知したのはかつて自分が創り出した四神、そしてそのパートナー達の波長だ。そして、セイリュウとビャッコが甦った事に驚かないのは『感じた』からである。

アイリスにも昨晩話したのだが、彼らが再びこの世に現れる気配を、ツバサは感じていたのだ。

しかし、ふとここで疑問に思った事がある。

「……アイツ等なんで太平洋の下辺りに居るんだ？」

おおよそオーストリア大陸方面。エーテルの居るアメロッパとも転送装置のあるチョイナとも別方向だ。

――――四神とそのパートナー達――――

「ほらコクレン遅い遅ーい」

「し、仕方が無いだろう。ワシとゲンブの電波変換した姿は早く移動するのが難しいんじゃから！」

ソラやゲイルたちも無論電波変換してチョイナに向かっていたのだが、コクレンの電波変換したゲンブ・アースは一軒家ほどもある重量級。近距離なら厳密な目標点を定められる分周波数変換による高速移動も出来るが、厳密な目標地点の無い長距離となると、早く移動するのは難しい。

「……ゲイル、僕は1つ質問したいんだけど」

「うん。何かな龍」

藍川の言葉にゲイルが振り向く。2人は歳も近いという事で、この数日で仲良くなったらしい。

藍川は先頭を進む少女に視線を送り、その少女はギクッと身を固める。

「……ソラちゃんってもしかして、方向音痴？」

周りに見えるのは海のみ。ライラに探らせた情報だと、ツバサが指定してきた場所はちょうど静かな湖となっている。

ソラは皆に視線を向けるのが恐くて向けられず、スザクはため息。

……。

しばしの沈黙。

やがてゲイルは巨大な爪の付いた装甲を持ち上げ、自らの頭に置く。まるで、自分の失敗を子供っぽく反省するように。

「ごめん。忘れてた。てへっ♪」

ごっつい爪を装備した獣人のそんな仕草で癒される阿呆は当然いない。むしろこれまで必死に付いて来た者を怒らせるだけだ。

「ゲ～イ～ル～！！！」
「わわっ！　コクレン怒っちゃや～よ！」
「この後の及んでまだふざけるかあぁぁぁぁ！！！」

コクレン合流。及び怒りのボディプレス。

「コクレンさん落ち着いて！」
「そうだよコクレン、龍の言う通り。ほら、ソラちゃんも居るし。ここは紳士として手加減を――」
「問答無用じゃぁぁぁぁぁぁ！！！」

藍川とゲイルの静止を聞かず、引き続き一軒家の大きさでのボディプレス連発。

その後、藍川の電波変換したセイリュウ・ウォータ。ソラの電波変換したスザク・フレア。そしてゲイルの電波変換したビャッコ・ソニックはコクレンの電波変換したゲンブ・アースの攻撃を避けながら太平洋を引き返し、チョイナに向かう。

「おぉ、コクレン鬼軍曹モード。そんなに怒ると血圧上がるよ♪」
「「お前はもう黙ってろおおぉぉぉ！！！！」」

ゲイルに対してソラと藍川のツッコミ。

「誰のせいじゃぁぁぁぁ！！」

ズズゥゥゥゥゥン！！！

そしてコクレンの言葉と物理的ツッコミ。

「うわあぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「ひぃぃぃぃぃぃぃ！！」
「あはははははははは♪」

藍川とソラの悲鳴にゲイルの笑い声。

……彼らが参戦するのは、まだ少し先の事。

――ソロ――

「……フンッ。ムーの力を悪用するとは、奴もとことん堕ち――」
『……グ……？』

不意に思考を始めたソロに視線を送るラプラス。
なお、ソロが居るのは何故かシーサーアイランドだ。

ソロは顔を上げ、ため息を付く。

「……なるほど。オレを釣るとは良い度胸だ。何を考えているか分からんが、ムーの力を使った制裁は加えなければな」

直後迸る紫の光。黒い剣士はウェーブロードを突き進む。

第１４４話　四つの関門（後書き）

引用したのはどこに行くか決める前の文です。
あくまで補完目的なのでタイトルを言っても問題は無いと判断し、その作品のタイトルを言います。
『ニライカナイ　遥かなる根の国』。著者は岡田芽武先生です。
どっちかというと繋がりよりも生物個人としての強さや可能性を描いた作品ですね。（↑一面だけ書いているだけで、実際にはもっと奥深いです）

４箇所の戦闘が終わるまでは、場所ごとに４話ずつの更新となるのでいくらか更新が遅れます。ご容赦下さい。

それでは次話もお楽しみに！

第１４５話　ウチナ-グチ（前書き）

サブタイの意味は沖縄語です。何でそんなサブタイにしたかは内容を見れば分かります。

それと、『ワザと』誤字を含ませています。雰囲気出しです。

第１４５話　ウチナ・グチ

目の前の青き龍人を前に、ツカサとヒカルは短い言葉を交わす。
なお、現在地は浅瀬の海岸だ。

「……さて、どう行こうか、ヒカル」
「決まってる。先手必勝、一気に片をつけるぞ！」
「だね」

ツカサとヒカルが電波変換したジェミニ・スパーク『ホワイト』と『ブラック』は交差するように飛び、互いの金色の腕を重ねる。
ホワイトは左腕、ブラックは右腕だ。

「「ジェミニ・サンダー！！！」」

ズゴォォォォ！！！

金色の腕の先端から放たれる雷撃の槍。空気中の水分を爆ぜさせながらその槍は進む。
属性上は有利な上に【ジェミニ・サンダー】はジェミニ最強の技。
通常ならデリートとまでは行かなくても十分なダメージになるはずだ。

『……』

黒いセイリュウは槍の先端を水面に付けると自信を囲う様に槍を動かす。それに従い、水面も螺旋状に動いた。

まるで、蛇が見えない木に巻き付いて競り上がる様に。

バチッ！

水の螺旋は雷撃を受け止める。その強大な負担から一瞬だけ揺らいだが、電撃を上空へと受け流した。

電気とは、空気中であれ回路であれ、最短ルートで進む法則がある。

本来なら水の螺旋ではなくセイリュウに当たるはずだったが、水の螺旋は最短ルートを歪めない範囲で緩やかなカーブを描き、攻撃を受け流したのだ。

『……』

ジェミニ・スパークの最大の攻撃を難なく受け流しておいてまだ平然と黙っている黒いセイリュウに対し、ブラックは『カチンッ』と来たらしい。

「あのやろう余裕ぶっこきやがって！　エレキソード！！」

「待ってヒカル！　もう少し様子を見てからの方が――ッ！」

ブラックは金色に輝く右腕の先端から電気を迸らせると雷で出来た剣を作り出し、ホワイトの静止も聞かずに斬りかかった。

『……クルナ』

ようやく口を開いた黒いセイリュウの口から出たのは拒絶の言葉。
直後、ブラックは横薙ぎに吹き飛ばされた。水がムチの様にしなり、ブラックの腹部を強打。そのまま吹き飛ばしたのである。

「ヒカルッ！　ッ！！　足が……っ」

飛ばされたヒカルに声をかけたホワイト。直後、我が身に起きた異変に気付いた。
足に水が絡みつき、動きを封じられているのだ。

身の危険を感じた頃には、セイリュウが目の前で槍を構えていた。

『コワイ……イナクナレッ！！』

他者が怖い。故に他者を排除。
人間のような『恐怖』。そのセイリュウはまるで、恐怖という名の感情の、塊のような存在だった。

ザシュッ！

「くっ……！」

槍の斬撃を受けてホワイトの体は揺らめき、前に倒れる。
セイリュウは倒れるホワイトを避けて距離を取った。

バシャッ！

ホワイトは音を立てて浅瀬に身を沈めた。

「うぅ……」

呻きながら飛ばされたヒカルの方を見ると、自分と同じ様に呻いているのが見て取れる。そして、その彼を水の槍が狙っている。一直線の槍ではなく、蛇のように鎌首をもたげて鋭い先端をブラックに狙いをつけているような状態だ。

ヒカルにその事を伝えようとしたが、同時に気付いてしまった。自分のそばにも水の蛇が存在し、狙いを付けている事を。

（……ここまでかな。これが四神の本当の力……か）

ツカサがそんな事を思いながら目線を下に下ろす。

セイリュウは四神のリーダーを務めていた。ツカサとヒカルは実際に手合わせしたのはこれが最初だが、その本当の実力がこれだと言うのなら驚きだ。属性の優劣を完全に打ち破るほどの実力者なんてそうそう居ない。

彼らは、並みのウィザードとは何かが違う。

完全なる詰みにツカサが諦めた直後、ホワイトとブラックを狙っていた水の槍が急激な速度を持って突き刺しに掛かる。

ガギンッ！

しかし、鋭い水の矛は堅き物に防がれた。

「……まったく、ようやくたどり着いたと思ったら……。何とも忙しない事じゃ」

ツカサにそう声をかけたのは水の矛を防いだ岩だった。地面から競り上がった、何の変哲も無い岩が喋ったのである。

ヒカルの方を見ると、そちらも同じ様に岩に護られていた。当のヒカルは呆然としている。

「大丈夫か？」

次にホワイトとブラックに声をかけたのは後ろからだ。

首を捻らせてそちらを見ると、コクレンとゲンブの電波変換したゲンブ・アースが立っていた。その大きさと安定感から、小島にも見える。

なお、このときの安定感とは何もどっしりしているからという理由ではない。存在への安定感だ。

当たり前にそこに在り、そこにあるからこそ他に安心感を与えるような、そういった安定感である。まるで、『大地』そのもののような。

ツカサは大丈夫かを尋ねてきたコクレンに返事を返す。

「あ、はい。ありがとうございました」

「そうか。……ふむ。どうやらアッチの黒いのも大丈夫のようじゃな」

そのコクレンの言葉で、ツカサは思い出したように自分を護った岩を見る。

この岩は先程言葉を話した。そしてゲンブは大地を司る四神。岩を媒介にして自分の声を伝えているのかもしれない。

そのことの確認をしようとしたが、今は戦闘中。現に、『マタフエタ。……コワイ。ケス』等と言いながら黒きモノは再び水の蛇を生み出して攻撃を仕掛けてきた。

ゲンブ・アースはため息を付きながら視線を黒いセイリュウに向ける。その目に若干の苛立ちが見えるのは気のせいだろうか。

「はぁ……まったく。ここに来るまでも大変で腹が立っておるこの時期に――」

水の蛇は鋭い先端を突き刺すべくゲンブ・アースに迫る。ツカサもヒカルも先程のダメージで動けない。

ガギンッ！

「――人の話を聞かんで攻撃してきたばかりか、ワシの相手が恐い恐い言っている者とはのぅ……」

ゲンブ・アースはお返しとばかりに前足を上げ、勢いを付けて地に下ろした。

ズズンッ！！

重たい物が落ちる音と共に、黒いセイリュウの地面から巨石が競り立つ。

セイリュウは即座に水の槍をムチのように振るい切り裂こうとするが……。

キンッ！

『ッ！？　ゴフゥッ！』

岩の直撃を喰らったセイリュウは宙を舞うが、空中で体勢を立て直して足から浅い水面に降り立った。

黒いセイリュウが使ったのはチェーンソーのように槍の中の水を行き来させる事で対象を切断する。大抵の岩なんて簡単に切れるはずだった。

しかし、コクレンの放った【　ガイアラース　】はその刃を難なく打ち破り、セイリュウにダメージを与えたのだ。いや、それ以前にゲンブ・アースはセイリュウの攻撃を我が身で防いでいる。通常なら削れ、最悪貫通するような攻撃を相手にだ。

その事実に戸惑っているのはセイリュウだけではなく、ツカサとヒカルも同様だ。しかし、自分の攻撃という事もあってセイリュウが一番驚いている事だろう。

そんな3人の心情を察してか、ゲンブ・アースは「これを言わないと話が進まなくなりそう」とかそんな事を思ってか口を開く。

「……地上で最も堅いのはダイヤモンドじゃが、それは何で出来ているか知っているか？」

「あ？」

ヒカルは何でそんな事を聞くんだという顔。

なぜかイライラしているコクレンはギロリとそんなヒカルを見咎め、ツカサは慌ててフォロー目的で答えを言う。

「えっと……『C』、炭素ですよね」

ゲンブ・アースはツカサの答えに頷く。

炭素、それは自然界に当たり前に存在する物質。髪の毛を始めとして人体にもかなりの総量が含まれている元素だ。現に、人間の髪の毛からダイヤモンドが作られる技術もあるそうだ。

その堅さは原子の結合具合で変化し、それこそ鉛筆の芯からダイヤモンドまで変化する。それはつまり……。

「ワシは岩石に含まれる炭素の割合と結合具合を調整。自身の体と攻撃に使う岩をダイヤモンド並の強度にしたというわけじゃ」

ゲンブは大地を司る。金属に属する元素なら自在に割合と結合度を変えられるのだ。

「そしてさらに――」

ゲンブ・アースの背中から撃ち出される巨石。

セイリュウは先程の反省から水の盾を生成する。斬れぬなら防げば良い。

だが、今度のゲンブ・アース攻撃は貫通と強度重視のダイヤモンド弾ではなかった。

ジャボ　キィッ……

巨石が水の盾に当たり、包まれた瞬間、巨石から沸騰するような泡が出てきた。そして次に起きたのは……。

ドォォォォォン！！！

岩が爆発したのだ。

コクレンは爆炎を見ながら冷静に述べる。

「水と激しく反応するカリウムの濃度を上げてやれば、水に触れただけで爆発する爆弾の出来上がりじゃ」

『やーむーん』

「「「『『ッ！！？」」」』』

爆炎の中から聞こえてきた言葉にゲンブ・アースとホワイトにブラック。そしてその相棒の電波体達は息を飲む。

倒せていなかったという理由ではない。そこまで油断はしていない。驚いたのは、その言葉だ。

聞きなれない単語。『やーむーん』とは『痛い』という意味で、かつてシーサーアイランドが王朝であった時代に使われていた言語である。

『わんすんじー　ふぃてぃーすんいったー……みっくわさん』

……『我の存在　否定するお前……憎い』。標準語に訳するとこんな所だ。

なお、ツカサもヒカルはもちろんコクレンもその言葉の意味が分からないため頭にハテナを浮かべている。かつてシーサーアイランドが王朝だという事実は常識だとしても、その民族の言語となると民俗学の分野だ。

得る情報を取捨選択できる時代において、必要の無い情報は得ない。それが最近の流れであり、『勉強』というものだ。それが当た

り前と化している世の中で育ったツカサはもちろん分からないし、コクレンの専門は『心理学』なので違う。

『しねーわ！』

標準語に訳すと、『死ね！』だ。

その言葉と共に黒き龍は姿を現す。

もはや人の面影すらない。セイリュウは自身の体を水に溶かし、周囲の水を吸収して巨大な水龍と化した。

『グウゥオオォォォォォォ！！！！！』

言語すら失った黒き龍は恐怖から生まれる攻撃本能と共にゲンブ・アースとツカサ、ヒカルに襲い掛かる。

謎の言語と敵の体が大きな変化を遂げた事でツカサとヒカルは動揺し、行動が一拍遅れた。３体の電波体を飲み込むような大きさの水龍に対し、壁となったのはゲンブ・アースだ。

ズドォォォォ！！！

膨大な質量の水がゲンブ・アースの装甲に負荷をかける。

コクレンも無論驚いたが、傭兵の頃に培われた精神力により驚きながらも迅速な行動を可能にしたのだ。

「ぬっ……ぐうううう……」

攻撃を一手に受け止めるコクレンの呻き声により、ツカサとヒカルに意識は戻る。

「ッ！！」

「おいじーさん！」

「くっ……。な、何をしている……。今がチャンスじゃ……。こやつがワシにのみ注意を向けている間に……お前達の攻撃をっ！！」

意志を乗せたコクレンの言葉にツカサとヒカルは互いに目配せをし、天上に跳び上がった。

そして黒き龍の真上より必殺の雷を放つ。

「「ジェミニ・サンダー！！！」」

『グゥルオォォォォォ！！！！』

黒き水の龍を襲う雷。それによりセイリュウはゲンブへの攻撃に集中できなくなり、その身をゲンブから離した。

それを好機と見たコクレンは追撃を繰り出す。

「ストーンボム・ラッシュ！！」

カリウムを大幅に増量した巨石が黒き龍の真下から連続で襲い掛かる。

ドドドドドドッ！！！！！

物理的『反応』による爆発の応酬。

真上からの光撃（こうげき）と真下からの攻激（こうげき）は水を分解・蒸発させて消滅させていく。

「「「おぉぉぉぉぉぉ！！！」」」

あと一息。この攻撃で決める。

ツカサとヒカル、コクレンはその覚悟でそれぞれの攻撃を続ける。

そしてとうとう……。

『グォアアァァァァァ！！！！！』

ドオオォォォォォン！！！

黒き龍の姿は、完全に消え去った。

3人は息を切らせながらも互いに笑みを浮かべて視線を交わす。

ツバサの言う番人を倒したのだから、今頃『キー』の1つは無くなっているだろう。4つ全ての『キー』を解除すればエーテルの元へと行ける。

体力がある程度戻ったら他の人の下へ加勢に行こうと話し合っていた時、自分達を秘かに囲う物の気配に気付いた。まだ3人とも電波変換を維持しているので急な戦闘にも警戒を怠らなければ対応できるだろう。

ツカサは周囲を警戒しながら呟く。

「……この気配は……」

『……こんなに嫌な気配は初めてだな』

『同感……じゃな……』

「チッ。こちとらハードな戦闘したばっかなのによ」

続くジェミニ、ゲンブ、ヒカルの言葉にコクレンは気持ちを切り替えさせるように促した。

「今嘆いても仕方あるまい。……今はこの状況をどう切り抜けるかを考える事じゃ」

その言葉にツカサやヒカルを始めとした面々はそっと息を吐いた。意識を集中させ、襲い掛かってくるであろうモノに対抗するために。

第１４５話　ウチナ-グチ（後書き）

……沖縄うんぬんのヤツはもしかしたらそのうち使うかもしれない伏線です。

それと、補足として『光撃』は『雷の光』という意味合いで使い、『攻激』は『大地が揺れる激震』をかけました。

一回こういう表現使ってみたかったんですよね～♪

第１４６話　呪い石（前書き）

実は２話の内最初に書き上げたのがこっちの方だったりします…（苦笑）。

カタカナが多くて読み難いかと思いますが、ご了承下さい。

第１４６話　呪い石

ガギンッ！

容赦なく振り下ろされるジョーカーの拳。しかし、その重厚なる一撃は固い外壁に遮られた。

『……やはり固いな』

ジョーカーはさほど残念な様子を見せずに黒いゲンブから距離を取る。

残念そうでなかったのは、ゲンブの甲羅がこの程度の一撃で砕けない事が分かっていたからだ。ようは『挨拶代わり』である。

その装甲の高さは最初に戦った大学やバルズランドで何度か手合わせした経験で分かっている。

ジョーカーが再び拳を握り固めた時、巨大な黒い亀はその口を開いた。

『……ナゼ、ムダダトワカッテイテコウゲキスル？』

ジョーカーは始め『口を利けるのか……』と内心で驚いたが、それを内に秘めて答える。

『単なる挨拶だ。大した意味は無い』

『……ヤハリソウカ……』

『？』

ボソッと呟くような言葉にジョーカーが顔をしかめると、目の前のモノはこんな事を言う。

『タンジュンナリユウデ、タガイニキズツケアウ……。ソンナオマエタチガコワイ……ニクイ……。コノドロドロノカンカクガナクナルニハドウスレバイイ？　……アァ、ソウダ――』

問うておきながらの自己回答。瞬間、ゲンブは周波数移動でジョーカーの真上に転移した。

『ッ！！』

ジョーカーはとっさに回避したが、今の今までジョーカーが居た地面にはゲンブの足が深々とめり込んだ。

『……ソンザイヲナクセバイイノカ……』

外れたにも関わらず淡々とした言い様。それはつまりまだ余裕があるという事。ここで流れを変えなければそのパワーに押し潰されてしまう。

ジョーカーはそう判断し、無言で自らの手で作り上げたバトルカードを転送する。体よく言えばリアルウェーブの武器だ。

その武器の形状を一言で言えば鎖。両前腕の真ん中辺りに囚人が着けるような黒い鎖が付けられている。無論それはジョーカーの動きを妨げるものではない。

鎖の先には新円の鉄球が付いており、『電波物質』が故の能力もある。その能力とは……。

『ぬぅん！！』

剛力の下に振るわれる鎖と鉄球。

ズゥゥゥゥン！！

『ッ！！　イタ……イ……』

横薙ぎに振るわれ、遠心力の力で強大となった鉄球の破壊力。それは離れていたゲンブに見事に命中し、呻かせた。

離れていたのに当たった。これに関しては何という事は無い。単純に、鎖が伸びただけだ。空気中の電波を鎖の成分に転用。そうする事で生成（　伸ばす　）と分解（　収縮　）を可能としたのだ。

なお、その武器はまだまだ組みあがったばかり。調整と強化の余地がある。

『……済まないが、早めに勝負を決めさせてもらうぞ。私はエーテルを倒さねばならん』

ジョーカーはすでにツバサを敵と割り切っている。裏切られてから決戦までの時間が短いため、戦いに集中するためには早く割り切った方が良い。故にジョーカーは割り切る事を選んだ。

そして、そのような者から見ればそれでも信じようとするソラや

スバルの方が異常に見えるだろう。

『……フフッ』

頬の位置に一撃喰らったゲンブは不気味に笑う。陰影によりさらに黒くなった顔。そしてその口は三日月型の笑みに歪む。

『……イタイ……ニクイ……。デモ、ソレイジョウニオマエノイカリ、オレの良いエサにナル……』

『ッ！？』《……空気が……変わった？》

その気配は電波体のジョーカーには感じられないはずの気配。しかし、その気配は殺気や狂気という形で空気を伝い、ジョーカーを包んだのだ。

同じゲンブだからといって、このゲンブは全くと言って良いほど違う存在らしい。これほどまで禍々しい狂気を出すのは人間ぐらいのものだろう。

今まで感じた事のない気配に戸惑ったのは一瞬。しかし、それでも一瞬の隙である事に変わりは無い。

『ダークガイアラース』

『ッ！！』

ジョーカーの足元から巨石が突き出る。その先端はコクレンの電波変換したものより鋭利で禍々しい。

状況を冷静に分析する間も無く、次の攻撃が来た。

『カーススストーン』

ゲンブの背中から放たれた黒い岩。

ジョーカーは、岩の打ち出されるスピードと相手との距離から考えて完全な回避は不可能だと判断した。故に、彼の判断と行動は至極明快なものとなる。

『フルダブルスイング！』

ドバギャッ！！

ジョーカーの豪腕は黒い巨石を難なく打ち砕く。

《……やけにあっけない攻撃だったな》

ジョーカーは油断無くゲンブを見据えながらそんな事を思う。

しかし、その矢先に変調がジョーカーを襲った。

『ッ！？　視界が……』

目の前が霞んできたのだ。いや、視覚だけではない。聴覚を始めとした五感に狂いが生じてきた。

平衡感覚まで狂って片膝と手を付いたジョーカーに、ゲンブが語りかけてきた。

『カーススストーンは電波体に効く呪いの技。……アタッタ相手はゴカンヲウシナウ……。もう聞こえんか』

ゲンブの言う通り、ジョーカーの聴覚も狂っているのでゲンブの声を上手く聞き取れなくなっていた。
そしてゲンブの声は片言ではなく、所々ではあるが流暢な言葉となっている。この短時間で、自我が成長したのだ。

ズン……ズン……

ゲンブはゆっくりと歩を進め、ジョーカーの目の前に来た。自らの手で止めを刺すために。
そしてゆっくりと重厚な足を上げて……。

ズズンッ！！！

ジョーカーの居た場所はゲンブの足が覆いつくして押し潰し、その周りは衝撃で地面が割れる。

『……壊した……毀（こわ）したンダ……ククッ……』

自分の手で止めをさせた事が嬉しかったのか、そのモノは静かに笑い続ける。

「……まだ終わっていないよ」

水を差す声。

水を差した人物から考えて、『水を差す』という言葉は実に的を得ている。

ボゴッ……

地中から液体が湧き出る。ゲルの様に柔軟で固まっており、その中にはジョーカーが入っていた。

液体は少し離れた場所へと戻っていく。風船のように細い水が繋がっていたのだ。

そしてその先に居たのは、正真正銘の四神の一角。そしてジョーカーが押し潰される直前、リカバリーの効果を溶かして水の防護壁に加えて保護と回復をこなした人物。

「……それじゃあ、行くよ」

藍川の電波変換したセイリュウ・ウォータはそう言うなり槍を地面に突き刺す。その1つの動作で2つの事が起きた。

1つはジョーカーの全身を覆っていた水の防護壁が無くなった事。包まれたままでは動けず、格好の的となる。リカバリーも付与しているのでもう動けるだろう。

2つ目は攻撃。黒いゲンブの足元から鋭い水の刃が噴き出し、黒

きモノを刻む。

「……一方向に進む圧力で対象を斬るのがウォーターカッターだけど、僕のこれは水の刃1本1本をチェーンソーのように水を行き来させる事で斬っている。だから、普通の刃のように真っ直ぐを維持しないといけないという事は無いんだよ」

藍川の淡々とした説明。簡単に考えれば、触れただけで切れたり貫通してしまう蛇のような物だ。柔軟でありながらも対象を確実に切断する鋭さを持っている。

そして、『火』や『風』と違って『水』には実体がある。それはつまり、相手に直接物質的な攻撃を加えられる事に繋がるのだ。

『グッ……。我が身を構成する岩石属性をカリウムに――』

カリウムは水やハロゲン元素と激しく『反応』する。言ってしまえば爆弾になるわけだ。黒きモノはわざと体を爆発。爆炎で怯ませ、その隙に攻撃という策を考えたのだ。

そして、『大地』の特徴の1つは『恒久性』。『大地』の方は全身が砕け散るまで永続的な自動自己再生を有する。『火』の『復活性』と似ているが、『火』の方は一度負傷してから自分の意思で行う必要がある。

なお、真なる特性としてそれぞれに在るのは2つだが、『恒久性』等のその他の特性は四神それぞれにいくつかある。言うなれば、『真なる本質と単なる特徴』といった違いだろうか。

爆発させた箇所も一部なら簡単に再生できるため、『大地の属性』を持つ者だけが許される手段だろう。

しかし、それは物理の分野。その道の専門たる科学者に通じるわけが無い。

「する暇は与えない」

セイリュウ・ウォータが槍を地面に突き刺したまま柄を強く握る。その途端、黒いモノの足元が陥没した。

水を地下に忍ばせ、一気に気体とする事で体積を膨張。地下から爆発を起こしたのだ。

足場が崩れた事で姿勢制御を優先する形となり、引き続きセイリュウ・ウォータの攻撃を喰らう羽目となる。

『ギゴゴゴゴゴッ！！　ッ！？』

とても地球上の生物とは思えない黒きモノの悲鳴。攻撃を受けている途中、黒きモノは異変に気付いた。

陥没した自分の足が、凍っている。

その心情を察したセイリュウ・ウォータは簡潔に説明する。

「あぁ、動かれたら当て難いからね。悪いけど、さっき爆発に使った水を液体から固体……つまり氷に変換して足を封じさせてもらった」

『水』の最も大きな特徴は『固体』、『液体』、『気体』の状態変化だ。通常では温度で状態変化を起こすものだが、水その物を司るセイリュウなら自在に操れる。

３つの状態変化を始め、その際生じる『気化熱（　液体が気化する際に周りから熱を奪う現象。例、汗による冷え　）』などの現象も戦術に組み込むとなると、その戦術の多様さは分かってもらえると思う。

ここで藍川は思い出したようにジョーカーに話しかける。

「そうそう、アレの近くに行かないでね。キミまで刻まれちゃうから」

『……行くわけも無い』

ジョーカーの呟き。それは正真正銘の本心だ。

現在、ゲンブの自己再生能力を打ち破るだけのスピードと鋭さで水の刃が行き来している中に飛び込むのは自殺行為。頑丈なゲンブだから『斬られて削られている』のであって、ジョーカーが入ったら『数秒で指一本残るかどうか』まで刻まれるだろう。

《……何故セイリュウが甦っていて何故ここに居るのかも聞きたいが、戦闘中に聞くのは不謹慎だな……》

ジョーカーは立ち上がり、セイリュウ・ウォータの横に立つ。黒きモノが攻撃を出してきたら打ち砕く事ぐらいは出来るはずだ。

『グゴゴ……ッ！　カーススストーン！！』

再び黒きモノの背中より打ち出される黒い呪い岩。

《コノ呪いは持ち主の電波が含まれていればそれに当たった時点で持ち主に呪いが及ぶ。……水で防御してもムダダ》

セイリュウの水の防御が封じられた。しかし、セイリュウ・ウォータは行動を起こさない。

ジョーカーが即座に拳を構えたからだ。その拳には、赤いノイズが集中している。

『ッ！！　キサマッ！！』

その意味に気付いた黒きモノはジョーカーに対して怨嗟の念を込めて睨む。

対するジョーカーはノイズを拳に集中させながら同じ様に黒きモノを睨む。

『……五感が狂っている中、お前の声がかろうじて聞こえた。……その岩は電波体に効くと。ならば――ッ！』

ブオォッ！！　バギャ！！

高濃度ノイズを帯びてノイズはクリムゾン化。真っ赤になった拳は黒い岩を真正面から捉え、粉々に打ち砕いた。

『……電波にとって有害であるノイズを込めればその作用は無くなるだろう』

セイリュウ・ウォータは再度黒きモノを凍らせる。今度は動き全体を封じるために全身をだ。

槍を引き抜き、槍の先端を天に掲げる。水は先端付近に集まり、水球と成す。

「……僕の恩人の友人を傷つけた報い、受けてもらう。……八岐大蛇（ヤマタノオロチ）ッ！」

恩人はスバル。友人はジョーカーだ。自分自身の恐怖に溺れ、暴走した自分を止めてくれたのはスバルだからだ。

彼の槍は縦一線に振り下ろされ、水球から現れるは八つの頭を持つ水の龍。

【グルオォォォォォォ！！！】

龍達は雄叫びを上げながら黒きモノに襲い掛かる。

『ッ！！！　おのれえええええええ！！！！！』

その黒きモノの断末魔は怨嗟であり、憎悪であり、苦痛であり、怒りだ。

ドドドドドドドッ！！！

直後黒きモノを襲うのは八つの頭を持つ龍達の牙。激流の如きそれは黒きモノに再生不可能なほどの風穴を開けさせる。

『……』

ガラガラガラガラッ

黒きモノの完全なる沈黙。及び崩壊。

完全に崩れ去るのを見届けたセイリュウ・ウォータとジョーカーはハイタッチを決めながら言葉を交わす。

『まずは礼を言う。……だが何故セイリュウが……』

「それに関しては僕にもセイリュウ本人にも分からないんだ。……ここに来るまでが大変だったけどね」

『話すのは戦闘が終わってからにした方が良いぞ』

藍川がここに来るまでの災難を言おうとした時、セイリュウが水を差す。

ジョーカーは疑問から目を細めた。

『？　何を言っている？　あのゲンブのような者ならもう……』

言いかけてジョーカーも気付いた。その場に満ちる、異様な量と

質を持つ悪意と敵意を。

第１４６話　呪い石（後書き）

さりげにこの４話が大変かも……。ほとんど同じ流れで飽きさせないように戦術も考えて……疲れるな～。

……まぁ、始めた以上は終わらせますけどね。成功だけでなく、やりぬく事も自分の価値を肯定する理由になりますし。

次回は流れ的に予想が付いた方も多いですかね。出来る限り戦術に変化をつけるつもりです。

それではまた！

第１４７話　疾風迅雷（前書き）

今更ですが、５箇所（黒い四神とスバル）の戦闘はほぼ同時刻に始まっています。

第１４７話　疾風迅雷

ゴゥッ！

烈風一陣。

暴風を纏った黒い獣人はアシッド・エースとクイーン・ヴァルゴのそばを突き抜ける。

大地には巨大な獣の爪で裂かれたような傷が刻まれている。

ガクッ……

暁の隣で何かが崩れる音。暴風が吹き荒れてからこれまで、４秒も経っていない。

「うぅ……」

クインティアの電波変換したクイーン・ヴァルゴは自らの武器である女王が持つような長い杖を手から落とす。杖を取り落とした腕には裂傷が。

「ッ！　ティア！」

暁の心配する声にクインティアは「このぐらいならリカバリーを使えば……」と言って傷を修復。暁に取って貰った杖を受け取った。

ひとまず一息ついた2人は大地を裂いた者を見据える。
大地を裂き、クイーン・ヴァルゴにもダメージを与えた黒いビャッコは振り返りながら言葉を投げる。

『オソスギル……。【風】を前にその程度の反応速度でドウニカなるとオモッタカ』

流暢な言葉と片言が混じっている。

補足だが、ムーという文明の作り出した『エランド』はバトルカードのそれとは一線を画す存在だ。何せ、電波体と電波変換できるのだから。
ようは人間の代わりである。
ツバサはその技術を利用して闇の四神を電波変換させているのだ。

閑話休題。

確かにビャッコのスピードに対抗するのは普通の方法では難しい。
そう判断した暁は無言でクインティアのハンターに大量のスーパーバリアのデータを転送する。

「……シドウ？」

尋ねるクインティア。しかし、彼の行動の理由は分かっていた。
シドウはあくまで明るい口調でニコッと笑う。

「終わるまでバリアで身を護っててくれ。……ファイナライズした状態ならアイツのスピードに対抗できるかもしれない」
「……確証は……ッ」
「……」
彼は無言で彼女にスーパーバリアを施す。そして、ビャッコの方に向き直りながら質問に答えた。
「確証は無い。……そんなの、実際にやってのけて証明するものだろ？」
暁の笑顔はこの直後消える。高速戦闘に移ったのだ。
２つの黒き者は残像にしか見えないほどのスピードで大地を駆け、身を削りあう。
暁のバリアを張るという措置は、クインティアを護るために下した判断。それはクインティアも理解しているのだが、それでも足手まといという事実が彼女に奥歯を噛み締めさせる。
「……いいえ、まだ出来る事はある」
クインティアは自分にそう言い聞かせ、自分の足元を見る。クインティアは地面に深々と、自身の杖を突き刺した。
ギンッ！

ビャッコの爪と暁のソードが交差する。

「どうだ、結構早いだろ？」

剣を交差させながら暁が自慢げな声でビャッコに話しかける。

対するビャッコはさも当然というように答えた。

『……ソノグライ我に挑むイジョウ当然のコトダ。……こっちにワレガイルコトヲ予想したウエデこの関門を選んだのだろうに』

「……ああそうですか」

アシッド・エースの自慢の1つであるスピードを当然扱いされた。

暁がその事で若干頭にムカマークを浮かべている時、ビャッコは『さらに言えば――』と続けてくる。

『――まだ全力を出しているとは言っていない』

「ッ！！」

暁が驚いたのは口調が急に流暢になったという事ではない。目の前からビャッコが消えたのだ。直後、愛銃を持っている手に激痛が走る。

そちらに目を向ける前に足にも痛みが走る。

黒いビャッコは腕に装甲を装備している。バルズランドではそれが攻撃力と防御力を上げる代わりにスピードを殺していた。

状況的にはその時と同じであるにも関わらず、今のビャッコのスピードはそれを凌駕していたのだ。

それもそのはず。バルズランド戦ではゲイルがビャッコにばれな

い範囲でビャッコの意識に介入。力を抑えていたのだ。

「ぐっ！　がっ！」

超速の斬撃によって膝を突く暁。しかし、休む時間は与えられはしない。

「シドウっ！　上！」

少し離れた位置にいるクインティアの声が響いてくる。彼女の準備は終わっていない。上空からシドウに襲い掛かるそれを防ぐ術は無かった。

シドウが上を向いた刹那、それは襲い来る。

「ッ！！　ぐあぁぁぁぁぁぁ！！！」（で、電気……だと……！？）

ドサッ……。

「シドウ！！」

『……まず1人』

うつ伏せに倒れたアシッド・エースにクイーン・ヴァルゴは叫び声を上げ、黒いビャッコは地面に降りながらダメ押しとして落下の勢いを乗せて暁を踏みつける。

ズンッ！

そして、それはクインティアの冷静さを欠くには十分だった。準備は不完全だったが、それでも抑える事が出来ない。

「ッ！　……許されると思わない事ね」

静かな声に含まれる怒気。他を黙らせる極寒の怒気を放つクイーン・ヴァルゴは地面に突き刺していた杖を引き抜き、正面で一回転させた後再び地面に突き刺す。

「……ハイドロエリア」

その声と共にビャッコの足元は液化し、ビャッコの足を捕らえる。暁の方も包まれているが、彼の姿は一度地面に消えた後クインティアのそばに現れる。

『……これは……』

「……この周辺の大地は私が完全に操れると言った所かしら」

迂闊に情報を言えばそこからどういう風に突破口を見つけられるか分からない。だからクインティアは適度にはぐらかしたのだ。

クイーン・ヴァルゴは水の竜を呼び出して攻撃するハイドロドラゴンを地中に潜らせ、地下の土を水と同化させ、それを操っているのだ。本来ならもっと規模を広げてから使って確実にスピードを殺

したかったが、激情のままに発動させたのだ。

だが、黒いビャッコの余裕は崩れない。

『……さっき我が使った技を忘れたか？』

雷の事だろう。

そのトリックはクインティアがあっさりと見破ってみせる。

「あぁ、その事。……風を高速で巻き起こし、空気中のチリを擦り合わせる事で電気を発生。……さっきの雷の正体はそんな所かしら」

雷とはそもそも、巨大な静電気のようなものだ。

雲の中に溜まり過ぎたマイナスの電子が地上にあるプラスに引かれて『空気』という絶縁の壁を越えるまで引き合う力が上がった時落ちるのが雷である。

無論プラスの電子の雷が落ちる事もあるが、数で言うとマイナスの方が多いそうだ。

そして静電気は物同士を擦り合わせた時に物質間でプラスとマイナスの電子が一方向に移動。後は雷と同じで空気の壁を越えた際に『バチッ』とくるという訳だ。

ビャッコは風により無数に舞うチリを擦り合わせ、雷を起こしていたのだ。

ビャッコの扱う雷の原理を看破したクインティアはさらに続ける。

「それから、確かに水は電気を通すけど、水を自由に操れる私から見れば、水に電撃を受けさせてそれを地中に逃がすと言うのも出来るわ」

それは地上戦を戦う者にとっては敗北を意味する。自らが立つ大地を自在に操られたのではテンポも何もかも狂わされてしまう。

対するビャッコの反応は特異だった。

『クッ……ククク……ハ破ハ刃破ハはハ覇ハ刃ハはハ波ハッ！！！！』

単なる笑い声ではない。高笑い。それも、極限の嬉しさを得た様な、そんな高笑いだ。

クイーン・ヴァルゴは理解できないという顔をし、ビャッコはさも嬉しそうに狂気の笑みを浮かべながら答える。

『嬉しいじゃねぇか！　単純にデリートするなんてつまんねぇと思ってたんだ！　これで心置きなく――』

ぶっ潰せる。

ビャッコはそう言おうとしたのだが、先の読めたクインティアは最後まで聞かずに攻撃を開始する。

「……ハイドロ・ガイアドラゴン」

周辺の大地を我が身とした巨大な龍は鎌首を上げてビャッコに襲い掛かる。ビャッコは足を液化した大地に取られて動けないはずだ

った。
しかし、ビャッコは跳んだ。足と水の間に強引に風を割り込ませる事で自由とし、上向きの風を吹かせる事で自分を浮かせたのだ。

「ッ！！？」

驚くクインティアをよそにビャッコは連続で宙を跳ねる。足が落ちる位置に上向きの風を起こし、それが自分の体を支えている間に膝を曲げ、跳躍する。

しかし、クインティアも負けてはいない。ビャッコの動きを予想し、ハイドロ・ガイアドラゴンを動かしたのだ。

【グルオオォォォォォォ！！！】
『チッ』

雄叫びを上げながら先回りする茶色の龍に対し、ビャッコは舌打ちをして緊急回避に出た。

それでも、その回避パターンすらも頭の中でシミュレートしていたクインティアはドラゴンを操作させ、ドラゴンにビャッコの左腕を食い破らせる。

『グッガァァァァァ！！！』

肘から先をもぎ取るダメージを与えたにも関わらず、クインティアの表情は冴えない。

（……本来なら全身にダメージを与えられたはずなのに、あそこまで緊急回避の速度が速いなんて……。やはり侮れないわね……）

クインティアは四神の実力を再認識、及び警戒しながら追撃の準備にかかる。

「えっ？」

しかし、ありえない事に気付いてしまった。

食い破ったはずのビャッコの左腕が再生していたのだ。左腕の装甲が無くなっている事からして食い破ったのは間違いないだろう。しかし、左腕は存在している。

始めから千切れていないかのように、自然に。しかし、無くなっている装甲が食い破った事実を証明し、『食い破った事実』と『実在する現実』のギャップでクインティアの頭は一瞬だけ停止する。

予想できなかった現実を目の当たりにした人間の当然の反応と言えるだろう。

しかし、自らに迫る物の気配に気付いて意識を外に向ける。

迫って来ていたのはビャッコの右腕の装甲だった。

左右で重量バランスが等しくないと早く移動できない。左腕が食い破られた以上、己がスピードを殺す原因は断ち切っておいた方が良いというビャッコの機転、かつ攻撃である。

「そんなもの……」

クインティアは杖でその装甲をはじき返す。

しかし、この選択は間違いだった。腕が再生しているという事実によって動揺し、十分な深読みがなされないまま弾き返してしまったのだ。自らの攻撃の基点たる杖によって。

ガギンッ

装甲を横に弾いたクインティアの視界に入ってきたのは飛び込んでくるビャッコの姿だった。

重い装甲を外したその時のスピードは、先程より断然早い。

「ッ！！」

杖を正面に引き戻す前にビャッコは横切る。

バキッ……

水を操る杖が音を立てて折れ、杖を持っていた右腕と左胸から右下肋骨にかけての裂傷。傷口からは自身を構成する電波が流れる。

無論、自身の構成電波は長く流すのは良くない。生身で言う所の大量出血のようなものだからだ。

クインティアがリカバリーを使いつつビャッコの方を振り向こう

とした時には、すでにビャッコは目の前で鋭い爪を構え、振り下ろそうとしていた。
クインティアはとっさに目を閉じる。

ドスッ！

鋭い切っ先が突き刺さる鈍い音。しかし、クインティアには痛みが無かった。

「？」

最初は傷のショックで痛覚が一時的に麻痺してしまった事を考えたが、目を開けた彼女の目に飛び込んできたのはアシッド・エースが自分の前に立って庇った所だった。
ビャッコの爪は暁の腹部を貫通しているらしく、暁の背中からはビャッコの爪と思しき鋭い切っ先が出ている。

「シ……ドウ……」

掠れる呼び声。
その声にアシッド・エースは振り向く。その口元には赤い物が滴っていた。

「……良く頑張ったな。ありがとう、ティア。……バリアを全開で張っておけ。アシッドとオレで、こいつを道連れにする」

「ッ！！　またあなたは……ッ！」

ディーラーとの戦いで彼がジョーカーを道連れに自爆した時と同じく、彼はまた我が身を犠牲にしようとしていた。
暁は自分を貫いた腕をがっしりと掴み、クインティアに話しかける。

「……早くバリアを張るなり離れるなりしてくれ。そうでないとオレは君の事を巻き込んでしまう」

クインティアはその言葉に首を横に振った。

「嫌よ。……またあの時みたいにあなたを失うなんて……」

前回は彼女と弟であるジャックに願いがあったからこそシドウとジョーカーの自爆を見ても耐えられたが、今の彼女にとって一番重要なのは暁シドウという男だ。

大事な人を失いたくない。

それは人間なら誰もが想うであろう感情だ。

「だったら、失わないようにすれば良いだけだよ」

本人の性質を現したかのような飄々とした軽口。風のように自然に溶け込む声は、実体を持ってシドウ、クインティア、黒いビャッコの前に姿を現す。

ザシュッ！

『ッ！！？　ガアァ！！』

暁を刺していた腕を切り裂くおまけつきで現れた白銀の獣王は痛みで呻く間も与えず黒いビャッコを蹴り飛ばした。

「ゲ、ゲイル……なのか？」

「それ以外に何かあるのかな？　シー君？」

何故ここにいて何故その姿でいる。

その暁の問いは口から出てこない。あまりに予想外だったためうまく言葉が出てこなかったのだ。そしてそれはクインティアも同じらしい。

彼女は少しの間呆然としていたが、黒いビャッコが視界に入った時点で現実に戻ってきた。

「？　また……」

切られた腕が再生している。もはや直ったというより戻ったというぐらいに自然に再生している。まるで、ＤＶＤの巻き戻しのように。

黒いビャッコに視線を移した本家たるビャッコ・ソニックはこの状況でも朗らかに笑う。

「あらら、再生機能でもあるみたいだね♪」

その言葉に対して黒いビャッコの声は変わっていた。機械音のよ

うな、無機質で残酷な声に。

『……ヤミハナンドデモヨミガエル。ニンゲンガキエナイカギリナクナラナイ……』

「ふぅ～ん。どうでも良いけど、キミ、もう終わってるよ」

ゲイルのその言葉と同時に、黒いビャッコの右腕がドサッと音を立てて地面に落ちる。

『ッ！！？』

黒いビャッコは驚いて右腕を目線まで持ち上げてよく見ようとするが……。

ドサッ

今度は右腕の肩から先が落ちた。

真の名刀は切った感触も切られた感触も無いという。斬られた事すらも気付かずに生活するそうだ。

黒いビャッコを襲った斬撃はまさにそれである。斬られた後の何かしらの動作によって裂傷が露になる。

「……僕の大事な昔からの友人を傷付けたんだ。……楽に逝けると思うなよ」

普段のゲイルとは程遠いドスの効いた声色。それも、その声は黒いビャッコの背後からした。彼の移動は、黒いビャッコには全く認識できなかったのだ。

ゲイルはそれだけの高速移動ができた理由を明かした。

「……電気は外に攻撃として使うだけじゃなく、自分の筋肉に使って反応速度を上げる事も出来る。……キミもまだまだ、『風』というのを理解していないようだね。（……まぁ、それも当然なんだろうけど）」

ゲイルの周囲に風が渦巻き、雷が舞う。彼が最後に小声で言った言葉はその風と雷の轟音にかき消されて誰の耳にも入らない。

そうこうしている間に黒いビャッコの体は徐々に崩れていく。

「……すでに全身を斬ってるけど、これは八つ当たりのダメ押しだから♪　悪く思わないでね」

暴風は黒きビャッコの動きを封じ、雷はゲイルの爪に纏われ、巨大な太刀となる。

そして、縦一線にそれは振り下ろされた。

ズガガガガッ！！！

それはまるで、雷が大剣という実体を成して振り下ろされたかのようだ。

『ギガガガガガッ！！！！』

振り下ろされた大剣はとうとう地面を削る。

『ァ……』

右側首の根元から一直線に走る傷。両断された黒きビャッコは全身がボロボロと崩れていく。

すでに斬っていたと言う斬撃により、ブロックのような綺麗な断面を残して原型を無くしていく。

不意に黒いビャッコの眼球は一方向に固定され、口がわずかに動く。その直後、粉々になって空気中に溶けていった。デリートである。

「……終わったね」

ふぅ。と一息付いたゲイルに噛み付いたのは暁だ。

「それじゃあ何でお前がここにいて何でビャッコも居るかを聞こうか」

リカバリーを施したとはいえ、腹部を貫通するような傷を受けてここまで喋れるのは賞賛に値する。どれだけこの暁シドウという男はタフなのだろう。

対するゲイルのテンションは元に戻っている。

「あっはっは～♪　そんなの今はどうでも良いじゃん♪　あ、それと今から僕は他の皆の所に加勢に行って来るから」

彼には黒いビャッコが最後に口を動かした内容が読めていた。

『……火の元に、忌わしい者が居る』

と。

そちらに向かった仲間がどうなるか分からない。だからゲイルは加勢に向かう事にしたのである。

だが、それはクインティアに止められた。暁のようなサテラポリスとしての義務として聞いたり止めるのではない。

もっと直接的で、もっと間近に迫った危機だ。

「……2人とも、前を見て」

「「？　……」」

クインティアの目線を辿った2人の青年は言葉を失う。

電波変換していないとはいえ、黒いビャッコの大群だ。見てて気

分が悪くなるほどの量である。

「……突破するしか無いようね」

「まぁ、あのツバサの事だから何も無いとは思ってなかったが」

「……」

クイーン・ヴァルゴとアシッド・エースは武器を構える。ビャッコ・ソニックも無言で腕を持ち上げながら内心で呟く。

（……ほんと、何も気付いてないんだから……）

暁とクインティア、ゲイルの敵意に反応するように、黒い大群は襲い掛かる。

第１４７話　疾風迅雷（後書き）

次の話は長くなったので２話に分けました。久々にストーリーから外れない範囲で問題提起です。

第１４８話　黒の不死鳥（前書き）

２話編成のうちの１話目です。

第１４８話　黒の不死鳥

バキッ！

「チッ」

『ッ……』

ジャックのエアロダイブと黒いスザクの右腕で燃える黒い剣が交差し、その結果としてジャックは４枚あるうちの一枚の羽を損傷。スザクの方はソードを成していた右腕を損傷した。

現在、戦況はほぼ互角。ジャックは経験から。スザクの方はポテンシャルの高さで互いに互角の状態になっていたのだ。

しかし、ややジャックの方が優勢だ。ジャックの方も羽を含めて多少の傷があるが、スザクの方はその傷の量が多い。

その戦いに込められた『思い』の差だろう。

黒いスザク・フレアは右腕の損傷で呻きながらジャックに問う。

『クッ……なぜここまでの力を……。基本能力では私の方が勝っているはずなのに……』

なぜスザクが基本能力の差が分かるかというと、どうという事は無い。電波体なら、直に相手と対しただけで相手の波長からある程

度の実力を読み取れるという物だ。

対するジャックはあくまで冷静に淡々と答える。淡々としているのは、言語よりも今戦闘に集中しているためである。

「……お前なんかオレ一人で十分だってのを証明したいだけだ」

実際にはその理由は違う。ジャックの力の源になっている思いと自分1人でスザクに挑んでいる理由は同義なのだ。

理由……。ジャックは1人で勝つつもりだ。『自分はもう1人でも大丈夫だから安心して暁の所に行け』とクインティアに示すための、彼なりの姉への配慮である。

「だから、容赦はしねぇ。……全力で潰す」

そう言うなり、ジャックの両手の平に紫色の炎が湧き上がる。ジャック・コーヴァスの持つ技の中でもトップクラスの威力を持つ攻撃。

「ペイン・ヘルフレイム!!!」

両手の拳は真っ直ぐ前に突き出すように打ち出され、それに伴い巨大な紫色の炎がスザクに向かう。数は約6つ。

スザク・フレアは黒き炎の刃を左腕に纏わせ、迎撃に当たる。

ザシュッ!

紫色の炎の1つを切り落としたスザクは何故だか満足げな顔をしてこう言った。目前に5つの巨大な炎弾が迫っているにも関わらずだ。

「まっ、こんなんで良いか」

ドドドドドッ！！

直後、スザクは余裕の表情と共に紫色の炎に包まれる。
しかし、ジャックの顔に勝ったという安堵は無い。自らの羽に意識を集中させ、いつでも移動できるようにしているのだ。

ズズズズ……

紫色の炎は静かに色を変える。混沌を司り全てを飲み込むような、真っ黒な色に。

『キルォォォォォ！！！』

炎の繭（まゆ）から産声を上げたのは真っ黒に燃える巨大な火の鳥。

「チッ」

ジャックは案の定という舌打ちをした後、ジグザグに後退してスザクから離れる。

その技はスカイタウンでソラが使ったものに酷似しており、そのデータは報告書という形でジャックも目にしている。
その威力の高さが頭に入っていたため、ジャックは先手を打って回避の用意をしていたのだ。

『キルォォォォォ！！！』

甲高い声を上げながら黒い火の鳥はジャックに迫る。スピードはスザクの方が速く、ジャックはすぐに追いつかれた。

「はぁっ！」

ジャックはそのスピードも予想し、寸前まで引き付けた後は急旋回する事で直撃を避ける。

しかし……。

ジュッ！

「ぐっ……あああああっ！！」

黒い羽の先端がジャックの翼に当たり、2対の翼が1対となってしまった。掠めただけで電波物質である羽が焼け落ちたのだ。
黒い不死鳥の中より出てきたスザクは優越感に満ちたような顔でジャックと向き合う。

『どうだい？　私の炎は。さすがに今の技を6つも受けたらまずかったから、ぎりぎり耐えられる5つを受けてやったんだ。感謝しな』

ジャックの技の攻撃力を見極め、自分が耐えられるだけの攻撃をわざと受ける。
それは余裕の現れだった。

黒いスザクはまじまじとジャックを見てクスッと笑う

『……見た所、技の要になっている羽が焼け落ちたみたいだね。そろそろ諦めて苦しむ顔を私に見せながら消えちゃってよ』

黒いスザクの言う通り、ジャック・コーヴァスの技、『フェザーシックル』に用いる羽は先程の攻撃で消えてしまった。エアロダイブの攻撃力と命中精度も下がるだろうし、まともな攻撃手段が限定されてしまったのだ。

そして、残酷な言葉だというのに彼女の顔には自らの言葉に対する嫌悪感がまるで感じられない。他者……ジャックを傷付ける事を明らかに楽しんでいるようだ。
ジャックは目の前のスザク・フレアと、『元』悪友の彼女である少女を頭の中で比べ、ため息交じりで言葉を返す。

「はぁ……。油断してると足元すくわれるぜ？」

ジャックの挑発的な言葉はスザクの起源を急降下させるに十分だったらしい。

『……羽は1対だけになって、今までチマチマ攻撃して私に与えた損傷も回復した。……あなたに勝ち目はないわ』

「……」

ジャックは無言で左腕に【　バトルカード：ソード　】を転送する。当然といえば当然だが、バトルカードはロックマンだけの専売特許ではない。

最期まで戦うというジャックの意思表示を見たスザクはため息をつき、手首にある炎のブレスレットを回転させた。それと同時に、ブレスレットからは黒い炎が湧き上がり、スザク・フレアの周りを囲う。

アポロン・フレイムが用いたような炎のオーラだ。

『……そのつもりなら、その戦意が無くなるまで焼き尽くしてあげるわ。戦意を徹底的に叩き潰されて絶望した相手を消すのって最高そうだし♪』

言葉から考えてまだ誰も殺めていない様だが、放って置けば必ず災いの元となる。

ジャックはその事からよりいっそう集中し、目の前の禍々しい黒鳥を見据える。彼はすでに反撃の布石を打っている。後はそれまで耐えるだけだ。

『そぉら行くよ！』

炎のオーラは円形から鞭の様な柔軟な性質へと変わり、ジャックに襲い来る。

まともに浴びればジャックもバトルカードも焼け消えてしまう。

ゆえにジャックの行動は回避に絞られた。

「よっ」

縦に振るわれる鞭を半歩横に移動することで回避するジャック。

しかし、その先にはスザクが待ち構えていた。

鞭を縦に振った直後、その方向に逃げる事を予想していたスザクは即座にジャックの回避した先に移動。黒い炎の剣を構え、真横に振った。

「チッ！　バトルカード、パニッククラウド！」

バトルカード：パニッククラウド。相手を混乱状態にするバトルカードだ。分かりやすく言えば強力な眩暈が襲い掛かっている物だと考えれば良い。

『ッ！？』

それによりスザクの剣は大きく外れ、戸惑っている間にジャックは追撃をかける。

ザシュッ！

『クッ！』

先程転送していたソードはジャックから見て右下から左上にかけて振るわれる。

そのソードは黒いスザク・フレアの腕を駆け上がるように切り裂き、先程の火の鳥となる技を使わない限りその腕は使えないだろう。

ジャックも負傷しているとはいえバトルカードのリカバリーを使えば修復できる範囲。そしてスザクはパニッククラウドの効果で技はまともに使えない状態。状況はジャックに優勢だ。

そのはずだった。相手がまともな相手なら……。

『フフッ。……よりによって近接攻撃で来るなんて、バカだね』

スザクは確かに損傷している。しかし、それでも余裕の表情。

ジャックがその言葉の意味に気付くより早く、スザクはジャックの胴体に手を回し、彼を捕らえた。

『大方、勝負を焦りすぎて攻撃力の高いソードを選んだんだろうけど、傷の痛みと攻撃された方向から考えればあんたの位置なんて予想できるんだよ。そして、これだけ近かったら眩暈がしていようと捕まえるくらいは簡単。……この状況でさっきの黒鳥の舞をやったらどうなるのかな？』

ジャックの耳元で囁く声。黒鳥の舞とは先程の火の鳥の技だろう。

この密着した状況でそれを出されるという事は、掠めただけで羽を燃やし消した炎を直に浴びる事を意味する。

「ッ！！　てめっ！」

その意味に気付いたジャックは若干の恐怖を織り交ぜながらスザクを睨み付ける。

スザクはその若干の恐怖を察したように、満足げな顔を浮かべた。

『ふふっ。ようやくそういう顔になった。あぁ、苦痛に歪む顔を見るのは楽しみだわ』

彼女がこの言葉を言っている間も周囲の温度は上がり続け、最初は堪えていたジャックも悲鳴をあげる。

「ぐあぁぁぁぁぁ！！　あああああぁぁぁぁぁ！！」

『ふふふ。真っ黒い地獄の炎に焼かれなさい』

スザクの背中から吹き出る黒い翼は膨張し、３枚の羽は１枚の羽となり、なおも膨張。巨大な双翼となる。

自分が施した細工を実行できぬまま、ジャックは焼き消えようとしていた。勝負を焦り、自らの戦略を自分で潰してしまったのだ。

禍々しい黒い羽はジャックとスザクを包み込もうとする。

第１４９話　現れし闇

「合曲２章、焔月！」

卵を温めるように２人を包み込もうとしていた黒い双翼は上空から繰り出される２つの斬撃によって切り落とされた。

直後、上空より強襲する赤い影により黒いスザクはジャックから離れざるを得なくなった。

支えを失い膝を付こうとするジャックを支えたのは先程の赤い影。

「ジャック君、大丈夫？」

「……ソラ……か……。何でここが――」

「話は後。……今は大人しくしてて」

ジャックの「何故ここが分かったか」と、「何故来たか」という問いを遮ったソラはスザクにジャックを預け、黒いスザク・フレアと向き合う。

「……あなたもスザクみたいにツバサに作られたの？」

ソラがこっちに転送されたのはついさっき。しかし、来た時の状況から黒いスザクの性格は大体理解できた。理解できても、納得したくなかった。あのような性格の者をツバサが作るとは思いたくなかったからだ。

問われた黒いスザクは自慢げに答える。

『えぇそうよ。人間の事なんて何とも思わない、破壊の象徴。……それがあたし。いいえ、あたし達黒の四神よ。……あんな人間なんかになびいちゃうオリジナルと一緒にされるなんて心外だわ』

最後に赤いスザクに軽蔑の眼差しを送る黒いスザクに対し、ソラは静かに息を吐きながら呟いた。

「……やっぱり違う。あなたはスザクと根本的に違う。……まるで、ネビュ――」

『消えてくれない』

言うが早いか、黒いスザク・フレアは羽根を羽ばたかせてソラの接近。負傷していない方の腕から炎を噴き出させ、黒い炎の刃を上から下に振り下ろす。

ギュボウッ!!

炎の刃は固形ではない。故にそのぶつかり合いは鈍い音となる。

ぶつかり合い、拮抗する黒と赤の炎の刃。おのずと互いの顔は近づき、ソラにとって黒いスザクの顔はよく見えるようになった。その黒い眼球の中に煌々と輝く赤目を。

ソラはその瞳を見て確信を抱く。そしてその確信は、その黒き四神の正体の一部を的中させていた。

「……あなた、ネビュラ・グレイに関係あるでしょ」
『ッ！！　……』
ツバサがネビュラ・グレイに飲まれそうになっている時、彼の眼球は光を射さない混沌とした黒になり、その瞳は毒々しい赤になっていた。その事から、目の前の黒いスザクはネビュラ・グレイに関係があるのではないかと考えたのだ。
ギギンッ
そして、的中を受けた闇のスザクは自ら後退し、ソラから距離をとる。
次に黒いスザクの口から出たのは先程とは明らかに違う声。
『……ヤハリキサマハキケンダ。ワレノイチブヲケズリトッテ　４タイヲツクラレタトキハ　コノサイニキサマヲホウムロウトカンガエタガ、ソノカンガエハ　マチガイデハナカッタヨウダ……』
ソラのそばでジャックが「なんかあいつのキャラ違ってねぇか」という言葉が聞こえるが、ソラは軽くスルーした。
ソラは炎の剣を構えなおしながら闇のスザクに尋ねる。
「……それじゃあどうするの？」
『キマッテイル』
ネビュラ・グレイの声は再び変化し、黒いスザクの声へと変わった。

『あなたを焼き消してあげる』
「あらそれは楽しみ」

ソラは皮肉を放ちながら両腕を前に突き出してブレスレットを回転。小さな炎の弾丸を連射する。
彼女の技の1つ、主に牽制用に使われる『一の舞、星降り』だ。
彼女の技は基本となる6つの技とその応用で構成されている。

対する黒いスザクは自らの片翼3枚の炎を膨張させて一枚の翼を作り出した。そしてそれを前方に動かし、盾とする事で炎弾を防いだ。

ソラはその事に一瞬驚いたが即座に攻撃に移る。

「五の舞、炎翼！」

ザシュッ！

高熱の炎の刃は鋭い一撃にて黒いスザクの翼を断ち切り、黒いスザクは再び距離を取り、離れながらソラに攻撃を繰り出す。
6枚の羽を前方に集中。それは大砲のように真ん中に空洞があり、黒いスザクはその穴に合わせて手を突き出す。

『……炎筒（えんとう）！』

6枚の羽は炎の供給と起動の補正。そして突き出された手はトリ

ガー。
集められたエネルギーは黒いスザクの声と共に放たれる。

ドゥッ！！

放たれたのは砲弾のような円形ではない。ビームのような直線軌道だ。

「ッ！！」

とっさにソラが取った行動は先程黒いスザクが取った2つの技を混ぜたものだった。

ゴウッ！！

ソラの背中にある6枚の炎の羽が唸りを上げながら増幅。巨大な6枚の羽はソラの前方を覆い包むように動き、炎のビームを受け止める。

ドドドドドドッ！！！

炎と炎のぶつかり合いで1枚、2枚と破られる炎の羽。そして6枚目を焼き切った所で炎のビームは力尽き、その姿を消す。

「……ふぅ」

とっさにやれた事とはいえ自分でも防げた事にホッとしているらしいソラに対し、黒いスザクはなぜか落胆したようだ。

『……これじゃあ完全な実力差で絶望させた上で叩き潰すってのが出来なさそうだね』

その思考は黒いスザクのもの。そしてその言葉により、安堵していたソラの顔に若干の変化が表れた。

「……ねぇ、そんなに自分が強いって事を誇示した上で勝ちたいの？」

尋ねられた黒いスザクは当然だと言わんばかりに嘲りを含ませて答える。

『当然でしょ。他人より自分が優れている。人間だって相手の粗を探して責めたりするでしょ』

人間という物はやたらと自分と違うモノを否定したがる生き物だ。動物と違って何かと自らを正当化しようとする分、性質が悪い。

今までの自分を表す価値観を否定されるのを防ぐためというのもあるが、別のケースもある。

誰かの欠点を見つけ出して見下し、自分の中での相手の価値を下げることで相対的に自分の価値を上げるというケースだ。

相手が自分に無いモノを持っていてそれを認めたくない時や、他人を見下して自分が上だという認識が無いと未来に踏み出せない者が選ぶ選択肢だ。

無論誰だって不安な時はある。だからどうしても辛い時は態度にも口にもしない範囲で、心の中だけで相手を見下せば良い。ただし、それによって罪悪感を感じるなら始めから相手を傷付けようと思うな。

『見下し』を他者と共有するのは、自分だけでその罪悪感や様々な感情に耐えられないだけだ。

人間はそこまで完全ではないし、強くも無い。だから人間の持つ弱さも罪ではない。

だが、その弱さを自分で乗り越えようとする事は出来る。例え乗り越える事ができなくても、挑戦したという事実はその人にとって力となる。

「成功するとは限らない」等と言って互いに寄り添い、くすぶるか。それとも自分に降りかかる困難を乗り越えようとし、その勇気を己が力へと変換するか。

何を選ぶかはその人次第。その言動や行動に付いて回る因果（いんが）、又の名を業（ごう）を背負えるのなら、何を選んでも構わないと思っている。

閑話休題。

スザクの『他人を落とす事で自分を上げる』という答えに対し、ソラは一言だけ呟いた。

「……そう」

彼女の性格なら素直に「そんなの自分自身を乗り越えようとしないだけでしょ！」等と言ったかもしれない。しかし、夏休みでいろんな国や人に触れたのは彼女にとっても無駄ではなかった。

バルズランドが良い例だ。あの国の子供達はほとんどが戦争孤児。親が居ない。いくら望んでも得られないモノが在る。

出来る事、持っている物が当たり前だと思うようになれば、それは認識という名の暴力に変わる。それを持っていない者はどうなるのだ。

実質的な力であれ精神的な力であれ、家族などの関係性であれ、持っている者が持っている事を当たり前だと誇示すれば、持っていない者はひたすらに惨めになるだけだ。

己の弱さを乗り越えられないのはそれ相応の理由がある。故に、下手に断言する事は出来ない。

だからソラは断言を避けたのだが、なにぶん彼女は正直なので考えている事が表に出ていたらしい。黒いスザクは屈辱からか身を震わせ、俯く。自分が見下している『人間』から憐れむ様な目線を送

られたからだ。

『あんたみたいに格別強い奴には分からないだろうね、誰かを見下さないと前に進めない奴の気持ちなんて……。もう良いや。勝ち方どうこうを気にするのは止めにしよう』

顔を上げた黒いスザクは自棄的な笑みを浮かべていた。

『……全部焼き尽くしてやる』

ゴォォォォォ！！！

黒い炎は勢い良く燃え上がり、黒い3枚の翼は巨大な1枚の羽と化し、黒いスザク・フレアの体も真っ黒な炎に包まれる。

まるで、地獄の業火を身に纏った死刑執行人のようだ。

巨大な黒い羽。それは高温を振り撒きながら真横に振るわれる。

ジャック・コーヴァスもスザク・フレアもまとめて焼き尽くす算段だ。

ジャックはそれを見てあわててソラに声を張り上げる。

「ッ！！　おいっ！　早く上に逃げろ！　……っておい！！」

ジャックが2回目に驚いたのは彼女の行動だ。真横に振るわれるのなら縄跳びを飛ぶように上に逃げれば良い。自分が倒れても事前に施しておいた細工がソラの手助けになり、勝つ事が出来る。

そう思ってジャックは彼女に声を張り上げたのだが、ソラは上ではなく横に移動した。自ら漆黒の羽に向かっていったのだ。

なぜ。

そのジャックの疑問はすぐに解決した。先程の位置関係上、彼女より先にジャックが炎に飲まれる。ソラはジャックを護るために黒い羽に向かったのだ。

しかし、それは決して自滅行為ではない。６枚の羽の炎を全て右腕に集中。彼女の細い腕に紅い炎が纏う。その炎は薄く、一見儚く見えるが、その炎は極限にまで圧縮され、高密度であるが故に薄いのだ。

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

ソラはその真っ赤に燃える手で黒い羽を掴んで止めた。

ゴォォォォォォ！！！

地面からはあまりの熱で水蒸気が上がる。そんな熱気の中耐えられるのは彼らが全員『炎属性』という事。

そして、その中でも局地にいるソラと、黒いスザクが平気なのは、彼女たち自体が『炎』その物だからだろう。

そしてジャックもまた、護られるだけというのは性に合わない。
それも、よりによって女性に護られたと姉に知られたら余計にあの姉はジャックの事を心配してしまう。

「……これ以上、姉ちゃんの枷になるわけにはいかねぇな……」
『ちょ、ちょっとジャック、その傷で――』

ゆっくり立ち上がるジャックを制するスザク。しかし、ジャックは彼女の言葉に耳を貸すことなく新たなバトルカードを転送する。

「……バトルカード、スイゲツザン」

彼は水のソードを転送し、真っ向から黒いスザクに立ち向かう。

「おおおおぉぉぉぉぉ！！！」

突撃する彼に気付いた黒いスザクはもう一方の翼をジャックに向かわせる。軌道は再び真横だ。ジャックは一瞬、できる限りの力で跳ぶ事で回避を試みようと考えたが、その必要は無かった。

ボゥ！！

赤いスザクが1つの炎の玉となって黒い羽とぶつかり、ジャックに当たるのを防いでいる。

『……全く、本当に男の子って無茶が好きね。……止めてやってんだからとっとと行きなさい！』

「ッ！　お、おう！」

とっさの事でわずかにジャックが驚いていたためスザクは叱責する。

ジャックが走り出すのを見てから、誰にも聞こえない範囲でため息をついた。

《っていっても、この熱量をあたし単体で抑えるのは……》

正直厳しかった。相手はエランドと電波変換しているため力が上がっているが、スザクの方は電波体単体。力で言えば黒いスザクの方が圧倒的に上なのだ。

【……】

『ッ！？　力が……』

スザクは不意に自分の力が上がるのを感じた。自分の中から出た力のような気もするし、外から付加された力のような気もする。

『……まっ、抑えられるんだったらどっちでも良いか』

スザクは軽く開き直って黒き羽を我が身で受け止める。

その黒い炎の力が不意に弱まったと感じた刹那、炎でくぐもった断末魔が聞こえてきた。

時はわずかに遡り、スザクがため息をついた時。

「おぉぉぉぉらぁ！！」

ジャックの水の剣は勢い良く黒い炎人に振り下ろされる。

ジュッ！

剣からは蒸発するような音が響く。

相性の良い水属性とはいえ、その高温に対抗するためにジャックはバトルカードに自分の電波を流し込んでパワーアップを図る。

本来なら自分と同じ属性の方が力が増すのだが、炎に炎を加えてもどうにもならない。

徐々に蒸発して消えていく水の剣を見ながら、ジャックは内心で舌打ちをする。

（　チッ。何とかこの剣が維持されている内にケリを付けねぇとな　）

ジャックがよりいっそう強い電波を水の電波に注ぎ始めた時、不意に黒い炎の装甲の抵抗が弱くなる。

「ッ！　やっときたか」

ジャックが施しておいた細工が効果を現したのだ。

ジャックが今まで黒いスザクに与えていたメインの攻撃はＨＰバグを与えるフェザーシックル。いくら相手が回復したからといって、一度発生したＨＰバグは消えない。その毒はジワジワと黒いスザクを蝕み、とうとうその効果が表面に現れたのである。

「これでっ……終わりだ！！」

ザシュッ！！

いっそう強い力と電波を注ぎ込んだジャックの剣は黒い炎に包まれた炎人を縦に切り裂いた。

『オオォォォォォ……』

炎でくぐもっているため断末魔と言うには声が低いが、それでもれっきとした断末魔だ。

やがて黒いスザクは膝を突き、燃え尽きる。後には何も残らない。

ジャックは気持ちを切り替えるための息を吐きながらソラの元に歩いていく。スザクはすでに彼女のそばに近づいていた。

「で、何でお前がこんな所にいるんだ」

ソラはさっきの今で疲れているようで、ジャックよりも深呼吸を長めに取ってから答えた。

「あ、それはゲイルさんの情報網の賜物だって」

裏の情報網にかかればサテラポリスの情報を盗む事などどうということは無いらしい。世も末だ。

ジャックはサテラポリスのセキュリティに対してため息をつき、別の質問をする。

「……さっき言ってたネビュラ・グレイって何の事だ？　何か知ってるんじゃ――」

ネビュラ・グレイという単語は先程の戦闘中にソラが黒いスザクに言った言葉だ。ジャックも常識の範疇としてネビュラ・グレイの事は知っている。教科書に当たり前に載っている歴史だ。今の子が知らない訳が無い。

「それは……」

ソラは目を背ける。話せない理由があるのだろう。しかし、サテラポリスの一員たるジャックは聞かなければいけない。

ジャックがソラを問い詰めようとした時、スザクが救い舟を出した。

『……今は話してる余裕が無いみたいよ』

しかし、ここであえて言っておこう。救い舟というのはあくまでソラがジャックに問い詰められないようにという意味では『救い』だったが、この状況の『救い』とは言っていない。

周囲には、黒い無数のスザクが蠢いていた。

「……多くね？」

「……問い詰めてる時間、無いよね？」

その多さにはソラも苦笑しか出ないようだ。

ジャックは舌打ちをした後、自分とソラ、スザクにリカバリーを使用。

「さて――」

『それじゃあ第2ラウンドと――』

「行きますか」

ジャック、スザク、ソラの順で声を繋げ、数秒後その場は乱戦状態となる。

第１４９話　現れし闇（後書き）

本当にオレとしてはどっちでも良いんですけどね。あくまで問題提起しかしませんし、他人に対してはフリーですから。

次回はハイドＶＳロックマンです。ハイドがツバサから受け取った力も出ますよ～。

それでは次話もお楽しみに！

第１５０話　影の道化師

「バトルカード、ソードファイター！」

ソードファイターは連続切りで正面の敵を切り裂くバトルカード。

スバルのソードはまず横薙ぎに振るわれ、ハイドはステッキを縦に構えてそれを受け止める。

その後もハイドはスバルの剣をステッキで受け止めていくが、剣の圧力とスピードに押されてハイドでも気付かない内に後ずさっていた。

そこに待ち構えていたのはウォーロックだ。

ウォーロックは途中から周波数移動で姿を消し、スバルがハイドを追い詰める位置、それもベストのタイミングで現れたのだ。無論スバルもウォーロックの考えは分かっていた。視線を交わす意思の疎通。アイコンタクトである。

本当にすごいのは、２人が打ち合わせも何も無いで瞬間的にこれだけの連携をやってのけたという事だ。２人の信頼度の高さが伺える。

『オラァァァ！！　ビーストスイング！！』

そしてウォーロックの爪は振り下ろされた。

斜めに引き裂くような一撃はファントム・ブラックの背後を完璧に捉えたはずだった。

しかし……。

「ッ！　イービルクロー！」

ファントム・ブラックとウォーロックとのわずかな隙間にイービルクローが割り込む。

『チッ！』

攻撃のテンポをずらされたウォーロックは一旦ファントムブラックから離れ、体勢を立て直す。

そしてそれを見たスバルもまた、周波数移動を用いて後ろに下がる。

ロックマンとウォーロックに挟まれるファントムブラック。しかし、その彼の顔には笑みがある。

「ンフフフフ。ずいぶん慎重ではないか、そんなに私が怖いのかな？」

カチンと来る台詞だが、ここで乗ってはハイドの思う壺だ。

地面から自由なタイミングで出せるイービルクローで相手を翻弄。相手のテンポが崩れた所で自身が攻撃を加えるのがファントムブラックの基本戦法。

攻撃より前に言葉でテンポを失っては余計に状況は悪くなる。だからスバルは早く進まなければという焦りと正直な『カチンッ』という気持ちを抑えたのだが、相棒の方は自分に正直になったらしい。

『あんだとコラーッ！！！』
「ちょっ！　ウォーロック！　あぁもぅ！」

顔から蒸気が出そうなくらいブチ切れたウォーロック。
確かに寄生虫と認識している相手からそんな事を言われればそのくらい怒るかもしれないが、彼の喧嘩っ早い性格も原因として多分にある事は言うまでも無い。

スバルはそんなウォーロックの行動に慌てながらも自らも攻撃に移る。一方向からの攻撃より双撃の方が相手も対処が難しいだろう。

スバルの剣とウォーロックの爪はファントム・ブラックの胴体を挟むような軌道をもって横薙ぎに振るわれる。
胴体を自分で割って緊急脱出する某海賊漫画のピエロ船長ならまだしも、ファントム・ブラックにそんなスキルは無い。

「はぁぁぁぁぁ！！」
『おおおぉぉぉ！！』

ロックマンとウォーロックは強い勢いのままファントムブラックに斬りかかり、そして横一文字に断ち切った。

シャッ！

しかし、その音は空を切ったように空虚で、手応えが無い。

通常、そこまでのダメージを受ければ電波体がデリートされて生身のハイドが現れるはずだったが、今回は違った。まるで、霞や影を切ったような感触だったのだ。

「『ッ！！？」』

ロックマンとウォーロックはその事に驚き、動きを一瞬だけ止めてしまった。そしてその隙を縫うように、地面から出てきた黒い手が2人を捕らえる。

「うわっ！？」
『ぐおっ！』

「……ンフフフ。油断大敵だ」

現在ロックマンとウォーロックは人1人分のスペースを空けた状態で黒い腕に掴まれているのだが、その1人分のスペースからファントム・ブラックが湧き出たのだ。
地面……正確に言えばファントム・ブラックの立っていた位置に出来た『影』から。

「ぐっ……。か、影から……何で……」

痛みで顔を歪めながらも尋ねるスバル。
対するファントム・ブラックは得意げで自慢げに答えた。

「お前の友人から特殊な力を受け取ってな。何でも、ＳＨＡＤＯＷ（シャドウ）という力らしい」
「ッ！　ツバサ君の……魔法……」

ツバサの魔法は『ＦＩＲＥＹ（ファイアリー）』や『ＥＡＲＴＨＹ（アースィー）』、『ＳＨＡＤＯＷ』を始めとした英語で表記・発音される。

今考えてみれば、ロックマンとウォーロックを捕らえたイービルクローもまた、フェントム・ブラックの影から現れていた。

ここから推察されるファントム・ブラックの能力とは……。

「ンフフフ、その通り。ツバサの魔法により、私は自分の影と同化できるようになったのだ」

だから先程、ファントム・ブラックは自分のいた場所、すなわち『影』から現れたのだ。

さらにハイドは続ける。

「そして、本来ＳＨＡＤＯＷという者は影であるが故に、霧などの固定形を持たない物を包み込めても、物質や電波体を掴む事は不可能だ。しかし、私とこのＳＨＡＤＯＷはどうやら気が合うようでな、こいつが私の攻防の幅を広くしてくれるし、電波人間である私がこいつの力に介入する事でＳＨＡＤＯＷは物体や電波を掴む事が出来る」

つまり、持ちつ持たれつという関係だ。ハイドとＳＨＡＤＯＷは互いの相互作用で互いの利を生み出しているのである。

一方のウォーロックはハイドが魔法に対して『こいつ』呼ばわりした事に反応した。

『っていうかこいつって、お前魔法をいっぱしの意思の有る奴とでも思ってんのか？』

その言葉にスバルはがっしり掴まれているにも関わらずウォーロックに呆れた半眼を送る。

「なに言ってるのウォーロック。ＭＩＲＲＯＲの事を忘れたの？」

『あっ……』

どうやら忘れていたようだ。

才葉シティでグレイガとの戦闘に協力してくれたＭＩＲＲＯＲのように、『魔法』とは単なる力の塊ではなく、それぞれに意思を持っている。

『け、けどハイドと同じ性格って事は相当性格が悪いんだろうな！』

「……はぁ～」（……ウォーロック……逃げたな……）

ウォーロックは話の立場が悪くなってきた事で話題を変える。スバルの呆れは頂点に達し、彼の口からため息を出させた。

ハイドの方は全く余裕なのか、堂々と答える。

「ンフフフ。ツバサの話ではＳＨＡＤＯＷの性格は捻くれ者らしい」

（≪まんまだ――――！！）≫

以上、スバルとウォーロック心のツッコミ。

おまけを言えば、話の内容から考えて【　堂々と　】と言うより【　開き直って　】と言った方が正しい。

ＳＨＡＤＯＷの性格も【　捻くれ者　】という事で、ハイドと相性が良い事も納得である。

ハイドは自分の手の平に杖を打ちつけ、思い出したような口調で

こんな事を言う。

「そういえば、良いのか？　このまま暢気に話していてはココロサーバーのエネルギーが溜まってしまうぞ？」

「『ッ！！　忘れてた！！」』

何とまぁ、あの真面目なスバルでさえ忘れてしまっていた。

そんな2人と向き合うファントム・ブラックは流石に言葉を失い、そんな2人を思いっきりバカにする声と攻撃が上から降り注ぐ。

「……揃いも揃ってバカか貴様らは。……フンッ」

ドドドドドドドッ！！！

「うわわわわっ！！？」

『おぉぉぉ！？』

「くぅっ！！」

突如上から遅い来る紫の衝撃波。それによりハイドは吹き飛ばされ、スバルとウォーロックの拘束は解除されたが2人もいくらかダメージを食らって吹き飛ぶ。

そして、その攻撃を行った黒き孤高の戦士、ブライは再びロックマンに一瞥くれる。

「……バカか貴様らは」

「うっ……」

その鋭い眼光と情け容赦ない言葉にスバルはたじろぐ。自分も忘れていたのだから言い逃れしようが無い。

『だーもぅ、うるせぇなぁ！！　バカバカバカバカ言うんじゃねぇ！！　他人をバカって言う奴が一番バカなんだ！！！』

「ふんっ。……お前ら――」

いつの間にかスバルの隣に来ていたウォーロックがブライに抗議し、ブライはそれを鼻で笑う。

しかし、次にブライが続けた言葉は意外な言葉だった。

「――相手に敵意が無いからって話し込み、自分の目的を忘れるとはバカ以外の何と言う」

「えっ……？　敵意が無い……？」

スバルの脳はブライの言葉で一時停止ししたが、すぐに復旧してブライの言葉を反芻する。

（……相手って言うのはファントム・ブラックだよね。……それに敵意が無かった……）

スバルはここまで考えて気付いた。

自分はココロサーバーの起動を阻止するという目的を忘れていた。その時相対しているのが宿敵とも言えるファントム・ブラックだというのにだ。目的を忘れるほどリラックスして話していたというのは、相手に敵意が無かった事を無意識に察したからだろう。

本当に無意識というのは人間の癖のようなものなので、自分では中々『無意識のエリア』と言うのは気付けない物なのだ。

その大半が、そう思いたくないという現実だったり、絶対にありえないと自分で思う（願うとも言う）事柄だからだ。

「ハイド、どういう――」

スバルは敵意が無い理由が気になってハイドの方を向く。しかし……。

「……あれっ？」

ハイドは居なかった。どこにもいない。彼らしい影１つ無い。

『不意打ちでも狙ってんのか？』

「……いや、気配も消えている。どんな手品を使ったか分からんが、オレにも気付かれずにこの場を去るとはな」

ウォーロックの考えを事も無げに否定したブライは舌打ちをして自らの剣を肩に担ぐ。

「チッ。ツバサのついでに奴とも決着を付けようと思ったが、そうも行かなかったか」

「えっ。ブライもツバサ君を？」

「あぁ、奴はムーの技術を悪用している。ムーの誇りにかけて、オレは奴を許す訳にはいかない」

「……ムーの……技術……」

ズズズッ……

スバルがブライの言葉を反芻すると共に、地中から低音を伴いながら装置が現れる。
下が小さく上が広く、大まかに見ればダイヤモンドの様な形状だ。

「……転送装置……か」

ブライはそう呟くと、スバルにこう続ける。

「……お前の仲間達が戦っている相手はエランドと電波体が電波変換した存在。……それが悪用している技術だ。……この装置が現れたという事は、そいつらも倒されたようだがな」

ブライはそう言うと装置に触れ、光と共にその姿を消した。
スバルとウォーロックもまた、装置に足を進めながら口を開く。

「……もしかしてソロって、僕がどういう技術か気になっているのを察して答えてくれたのかな？」
『はぁ～？　アイツがそんな事するわけねぇだろ。気まぐれだよ気まぐれ。そうで無かったらアイツはツンデレって奴だな』

ツンデレ。本心と間逆の事を言い、行動する性格の事。

スバル、本心よりの偽りの無い感想。

「……なんか、ソロに言ったら殺されそうな言葉だね……」

ソロがツンデレなんて絶対に有り得ないが、絶対に間違ってもそんな事を言わない様にしよう。

スバルはこれから果たす目的の他にもう1つ心に決めながら装置に触れる。ウォーロックはスバルのハンターに戻った。

「うっ……わ……」

触れた瞬間、腕を引っ張られる感触がしたと思ったら周りが真っ白になる。違う場所に転送されているのだ。

その様子を岩陰から見ていたのはファントム・ブラックだ。影に溶け込んで気付かれないようにしていたのである。今は影から上半身だけ出している状態だ。

「ンフフ……行ったか」

『……ハイド』

彼に語りかけるのはＳＨＡＤＯＷだ。電波体ではないため、幽霊のようにハイドの中に取り付く形を取っている。

ＳＨＡＤＯＷの言葉の意味を察したハイドは下半身も影から出し、マントを翻しながら答える。

「分かっている。お前の主と交わした約束は護るさ」

『……ならば良い』

その後、２人は消えた。

自分達が現れるべき時までの間、その身を消すのである。

――――アメロッパ――――

ツバサの元に辿りついたスバルの目に入ってきたのは3つの者。

1つは奥にぐったりとうつ伏せに倒れているアーノルド・ローグ。周りにバリアが展開しているのは人質としての価値を出すために死なれては困るからだろうか。

……ココロサーバーと思しき物は見当たらない。繊細かつ計画に必須な物という事で、別の場所にあるのかもしれない。

2つめはエーテル・フォトン。悠然と立ち、スバルと向かい合う。

そして3つ目は……。

「ぐっ！！」

「ッ！！　ブライ！！」

目の前で膝を付くブライの体にはすでに多くの傷が付いていた。エーテルの攻撃は数も攻撃を繰り出す角度も自由自在。短時間で多くのダメージを与える事なんて訳無いだろう。

息を切らせながら立とうとするブライを心配して彼に近づくスバル。

しかし、ブライのプライドがそれを許さなかった。鋭い眼光でスバルの動きを止めたブライは自力で立ち上がる。

スバルがそれを心配そうに見ている時、相対する者が話しかけて

きた。

「よぉスバル。……遅かったな」

いつもの軽口。いつもの不敵な顔。しかし、その彼の立ち位置は向こう岸だ。

「……ツバサ君――」

スバルはエーテルと正面から向き合い、自らの言葉を言う。

「――僕はキミを――」

自分の判断に迷いは有る。しかし、それでもスバルは自分の推測でしかない可能性を肯定した。

「――助ける」

スバルは、『倒す』ではなく『助ける』という言葉を選んだ。

彼の抱えている【 重み 】から、彼を解放するために。

第１５０話　影の道化師（後書き）

これで決着は付きましたね。『ハイドが敵として戦う事』への決着が。敵として倒した決着なんて一言も言ってませんよ～♪

次話の大まかな流れはすでにケータイのメモ帳に書いてますが、更新には時間がかかると思います。

近くなれば活動報告に書きますね。

番外編　？（前書き）

そろそろストーリーも終盤なので状況の整理目的で書きました。
短いです。気分転換の意味合いも含んでますからね。

番外編　？

さてさてやってきました番外編の？。今回はそれぞれのキャラの現状を見て行きたいと思います。

「な、何でこの時期に？　もうすぐクライマックスですよね？」
「確かにテンションがガクッって落ちそうだよな」

あ、暁さんが酷いな……。
まぁ、そうなんですが、そろそろ人物の状況を整理しないと読者の方が混乱するんじゃないかっていうオレのお節介。
っと、紹介が遅れましたが、今回のアシストはスバル君と暁さんです。本当はオリキャラの中でも人気が大きい（？）ゲイルとソラちゃん、または会話が進み易いって事でセンちゃんを呼ぼうと思ったんだけど、彼らは聡過ぎるからね。（……この番外編の最後にスバル君達の記憶を消すっていっても、悟られるのは何か嫌なんだよね）

「……え～っと、おおよそ7行にも及ぶ独り言の最中で悪いんですが、そろそろ始めないと読者さんが怒りますよ」

そうだね、オレなんかの小説を読んでくれてんだから、出来る限り待たせてもいけないね。
そんな訳でまずはスバル君。

「えっ！　いきなり僕！？」

主人公だもん♪　……さて、――

星河　スバル

裏切りに対するショックや自分がやらなければいけないというプレッシャーにより周りも自分の心も見えない状態にあった時、ミソラの言葉と気持ちで余裕が生まれる。

その際、時折ツバサの見せる表情が先程の余裕の無かった自分の顔に似ている事から『ツバサにも何かしらの理由があるのではないか』という可能性を見出し、その可能性を信じている。

故に、彼は「助ける」という言葉を選んだ。

――ふぅ。語りモード終了。

「お疲れ様です」

「……スバル、オレにも詳しく教えてくれないか？　……もしアイツに何か理由があるのなら――」

ツバサに理由があって、スバル君がここであなたに話したとしても、この番外編？の最後には記憶を消しますのでそのつもりで。

「……どういうつもりだ、作者」

元気が良いねぇ、暁。なんかええ事でもあったんけ？（↑やや京都っぽく）　……おふざけはさておき、オレは作者でキミ等はキャラクター。オレの言葉でキミ達がするはずだった行動が変わったら

本末転倒でしょ。
　これからは、それぞれがどんな思いでツバサと戦うかってのも書きたいポイントだからね。影響が出ちゃうと困るんだよ。……ごめんね。

で、次はミソラちゃん。……――

響　ミソラ

　スバルのもっとも大きな理解者。彼女のホーリーＰＧＭはスバルのエンシェントＰＧＭと融合してしまったため、前線には出られないが……。

――ここからは秘密ね。スバル君と暁さんにも、読者さんにも言えない。

「……なんだか短――」

短いというツッコミは受け付けません。

「……」

さて次は――

赤羽　ソラ

ツバサがネビュラ・グレイの事を打ち明けた人物で、３人を除いてもっとも真相に近い所まで察しているキャラ。

「……ネビュラ・グレイってのが気になるが、どうせ記憶を消されるんだろうから聞かないで置く。……だが――」
「３人って誰なんですか？」

……ネタバレになるから明かせないけど、ヒントだけ言えばすでにスバル君は３人と逢ってるよ。……暁は、２人と逢ってるね。
……おっと、ハイドとオリオン、そしてあの２人もだから、真相を知ってるのは計７人か。いやはや、秘密も何も無いね、これは（笑）。

「ッ！！　ハイドも真相を知ってるの！？」

だからこそハイドがツバサについた訳だしね。

「っていうかプラスされた２人って何者！？」

暁さんまで熱くなるなよ……。……スバル君とミソラちゃん、ツバサとソラちゃんはその２人の１人ずつに遭ってるかな？　２つのペアが関わる話を読み返してみると「あれっ？」と思う所があるかもね。

さて、各キャラといってもネタバレしない範囲でこれからの展開に関わる人って言うとこの位が限度なんだよね。そんなわけで、今回はお開きって事で。……本来ならアイリスの事も書くべきなんでしょうけどね。

「「……」」

曖昧に終わって不機嫌そうだけど、現状の整理は終わったよ。
後は――

パンッ！（↑両の平手を打ち合わせる音。及び記憶消去）

――忘れてもらうだけだね。
……一回やってみたかったんだよね～♪　八皇（やつみ）先生のマネ。（↑知ってる人いないだろうな）

番外編　？（後書き）

ちなみに八皇先生とは『ニライカナイ』のキャラクターで、本名は『柊　八皇』といいます。

次の更新は正真正銘の次話です。……日曜日までには更新したいですし、頑張りますか……。

第１５１話　３人の科学者（前書き）

お待たせしました！

今回は流星２をやった方には分かり切っている内容が出ます。ドクター・オリヒメの過去です。

第151話　3人の科学者

助けるというスバルの言葉。その言葉にブライは「相変わらず甘いな」などと言いたそうな舌打ちをし、エーテルは嘲りを含めた笑みを浮かべながら自分の手で額を押さえて表情を隠す。

「クックック……助ける？　オレを？　スバル――」

エーテル・フォトンは額から手を下ろし、冷たい目をスバルに向ける。

「いつまで平和ボケしてるんだ？」

「ッ！？　ぐっ……！！」

彼の冷たい視線がスバルに突き刺さるのと同時に彼の体に襲うのは全身に刃物で突き刺されるような激痛。

「……周囲の電波を圧縮。それをお前の体にぶち込んだ。もう一度言う。……オレはお前の敵だ」

再び浴びせられる裏切りの言葉。

反論しようとするスバルの前に、ブライが割り込む。

「でも――。ッ！　ブライ……」

「……悪いが今回は譲らない。奴はムーの力を悪用したのだからな。……半端な覚悟では足手まといだ。とっとと下がっていろ」

自分の後ろに立つロックマンにそう言いながら、ブライは黒い曲刀、ラプラスブレードを構える。

敵意むき出しで踏み込みのタイミングを見計らっているブライに対し、エーテル・フォトンは不敵に笑う。

「ふっ。……お前の方は分かってるみたいだな。ブライ！」

直後、ブライは勢い良く踏み込み、距離を詰めて上から下に斜めに振り下ろす。

エーテル・フォトンはサイドステップでかわし、曲刀のみねの部分を上から押さえてブライの剣を封じながら反対側の腕で横に殴る構えを取りながら声を高らかに言い放つ。

「そう！　1回敵になったからには一方が滅びるまでやり合うのが今までの人間だ！　不安定で、いつまでも歴史から何も学ばないのなら――」

キィンッ！

エーテル・フォトンの拳に反応して展開する電波障壁。その反発力は拳と拮抗していたが……。

ミシッ……

「……がっ……」

「……完全に未来永劫オレが支配してやろうって言ってんだ」

エーテル・フォトンの拳はブライの腹部に鈍い音を立てながらめ

り込む。

「ッ！！　ブライッ！！」

ブライを心配するスバルの耳に、エーテル・フォトンの鼻で笑う声が聞こえる。

「ふんっ。一回しか防げないのなら、拳と電波障壁のわずかな間にもう一発分の攻撃を混ぜれば良いだけだ。……お前じゃあ勝てないんだよ、ブライ」

エーテル・フォトンはそう言いながらブライの白髪を掴んで持ち上げ、ブライの腹部に何度も拳を直に突き立てる。

無論ブライも抵抗しようと四肢に力を込めるが、ツバサがブライの周りに電波の壁を作っているのか動かせないでいる。

「ぐっ……がっ……」

抵抗できないブライを見ていたスバルは葉を噛み締める。

「……ギリッ、いい加減、止めろおぉぉぉぉぉ！！！」

スバルの叫びと共に、彼の体を白い光が包む。

ノイズチェンジだ。

ザザッ……

「？」

一瞬だけ金色の装甲に黒い肌、桃色の三日月型のベールを纏った人が見えたが、雑音と共にその人影は消える。

まるで、トラブルが起こったために緊急で回線を変えたかのように、不意に消えた。

そして聞こえてきたのは、カーネルの声だ。それも、一瞬だけ。

『……・・・・・を、忘れるな』

光が収まった時、そこに立っていたのはロックマン、カーネルノイズだ。

一瞬だけ先程のノイズチェンジ時の異変が気になってしまったが、目の前の方が優先だと判断したロックマンは緑色のサーベルを振りかぶる。

「ッ。スクリーン・ディバイド！！」

そばにいるブライを傷付けないように細くした飛ぶ斬撃は一直線にエーテル・フォトンに向かう。

「ッ！」

それに気付いたエーテル・フォトンは3本目の腕、その手の平を緑の斬撃の前に突き出す。

バシュッ！

彼の手に触れた緑色の斬撃は例によって消滅する。

斬撃を防いだエーテル・フォトンは余裕を見せるような笑顔を浮かべる。

「やっとやる気になったか」

「……」

スバルとしては、ブライを助けるために剣を振るったに過ぎない。ツバサに何か理由と秘密があるのではないかという推測……いや、それはどちらかと言うと願いや願望のように感情的な理由なのかもしれないが、それでもスバルはその可能性を信じたかったのだ。

だから、敵として剣を振るったわけではない。

そのスバルの考えを察したのか、エーテル・フォトンはため息をついてブライに視線を送る。

バキッ……

その場に響く鈍い音。その音の直後、ブライが悲鳴を上げる。

「ッ！！　ぐあああぁぁぁぁ！！！」

彼の足は人間の間接では自然ではない向きに曲がっている。
スバルは信じられないという思いから目を見開き、ポツリと言葉をこぼす。

「……ツバサ君……もしかしてブライの足を――」
『――折りやがったのか……』

スバルの疑問をウォーロックが引き継ぐ。
対するエーテル・フォトンはあっさりと言ってのける。

「あぁ、そうだけど？」

その口調は静かで、冷淡で、人が「プンプン飛んでうざったい」との理由で小さい虫を潰すように平然とした声だった。
その言葉を聞いたスバルは静かな声でウォーロックに語りかける。

「……ウォーロック、ヨイリー博士が作ったプログラムを組み込んで」
『……スバル……じゃあツバサと――』

戦うのか。
そう言おうとしたウォーロックをスバルが自身の声で遮る。

「止めは射さない。……けどこのままじゃあ、ツバサ君はもっとブライを傷付ける。……今までより、もっと酷い方法でやるかもしれないんだ。……だったら、僕が止めないと」
『……分かった』

ピッ！

「……ありがとう、ウォーロック」

新たなプログラムが自身に組み込まれたのを感じたロックマンはウォーロックにお礼を言い、システムを起動する。

ピッ！　……ヴゥンッ……

静かな起動音。ロックマンを中心に異変は起き、その異変に最初に気付いたのは電波の扱いに長けたエーテル・フォトンだった。

「ん？　……これは面白いものを作ったな」

『……ほぉ、なるほどな』

電波体であるウォーロックもまた、その異変に気付いたらしい。なんだか置いてけぼりを食らった感覚のスバルは2人の反応に戸惑いつつ異変を探ろうとする。

「えっ？　何？　……ッ。これって……」

最後にスバルが察知した異変。それは前に気付いた2人の異変と同じモノだ。その異変とは……。

「プログラムを発動させた者から一定範囲内の電波の波長を絶えず変化させるシステムよ」

答えを言ったのはこのプログラムを作った者の1人、ヨイリー博士だ。

彼女が話しているのは上空に映し出されたエアディスプレイだ。

「ヨイリー博士！」

見送りの時見かけなかったのでスバルとしては少し心配していたのだ。エアディスプレイに映し出されたよいリーはまだ少し眠そうだったが、その小さな目にはしっかりとした意思が宿っていた。

安心したようなスバルの顔を見て、自分が心配されていた事を察したヨイリーは申し訳無さそうにスバルに謝る。

「……心配をかけちゃったみたいね。ごめんなさいね。けど、もう大丈夫よ。若い頃とまでは行かないけど、ほら、この通り」

肘を曲げて上腕にもう片方の手の平を乗せるヨイリー。

年甲斐の無いその子供っぽい態度にスバルが思わず笑みを零した時、ヨイリーのエアディスプレイの隣にもう一枚エアディスプレイが浮かび上がる。そこに映し出されたのは、Ｍｒ．キングその人だった。

「ヨイリー博士、いい加減本題に入らないといかんだろ。……星河スバル、師弟揃って迷惑をかけるな。すまない。……師匠――」

スバルに謝罪したキングは自分の師匠たるツバサの方を見る。

「――あなたの能力は強大ですが、限界という弱点がある。……屈折。……反射。……消滅。あなたが電波に干渉して身を護る際の方法です。星河スバル達がＷＡＸＡに駆けつけた後、あなたとの攻防でこの３つの防御策を見極めました。そして――」

キングの言葉をヨイリーが引き継ぐ。

「あなたがこれまでの戦闘で見せた機転や処理速度からあなたの演算能力を検出。キングが言った３つの防御策に演算能力の限界値を当てはめた結果、一番手間が少ないと思える屈折の限界値は４８だという事が分かったわ」

消滅は相手と間逆の電波をぶつける事で相殺する。
反射は相手の攻撃電波の攻撃力、攻撃の向き、速度。そういったものを演算した上で反射。
屈折は最低限起動を曲げるだけ。

３つそれぞれに演算が必要なのだが、一番楽な屈折でも最大値は４８。つまり、エーテル・フォトンが処理できる攻撃の最大数が４８で、他の防御策はそれ以下だという事が分かったのだ。

「元々そなたは電波体と電波変換したタイプではなく、形態変化の類だという話だな。ならば、本来電波体がサポートを行うような箇所も、自分の手で制御しなければいけないという事。戦いながら演算をやるとなると、人間の脳ではそのくらいが限度であろう」

上空に現れた3つめのエアディスプレイ。そこに映し出されていたのは、かつて世界の支配を目論んだ科学者、ドクター・オリヒメだ。

彼女はかつて、最愛の人を戦争で喪った。彼女はどうにかして最愛の人を取り戻そうとし、目を付けたのは電波の物質化である。

リアルウェーブの原点となったマテリアルウェーブは彼女の発明だ。それによって創られた最愛の人と同じ見た目で自我も持つ者は、最愛の人としての記憶は無く、ただの便利なマテリアルウェーブだった。

その者は、空っぽを意味するエンプティと名付けられた。

最愛の人はもう2度と戻らない。

そう悟ったオリヒメは愛する人を奪った世界を憎み、かつて栄えた超科学文明、『ムー』の力を用いて地球の全人類を支配しようとしたのだ。

しかし、ロックマンの手によってそれは阻止される。

エンプティが消え去る瞬間、記憶を取り戻し、自分を生み出してくれた人に恩返しをしたかったという想いは時空を越え、オリヒメ

の最愛の人の声を届ける。

エンプティにとってのオリヒメ。
オリヒメにとってのエンプティ。

互いに、かけがえの無い存在になっていたのだ。

『生きて欲しい』。

それが最愛の人の言葉だ。

その言葉は敵であるはずのスバルにも言われ、オリヒメは自分を想ってくれるエンプティと最愛の人の想いを受け取り、罪を背負いながらも『生きる事』を決めたのだ。

そしてオリヒメの言った事だが、電波体のサポートとは、ウォーロックで言うとターゲットをロックオンして一気に距離を詰める『ウォーロックアタック』のようなものだ。

電波体はウォーロックアタックのような電波体固有の能力を制御する他に、必要に応じて情報の解析などのサポートを行っている。

しかし、エーテル・フォトンは単独でそれら全てをしないといけないのだ。形態変化ではジョーカーも同じだが、ジョーカーは元か

らウィザードであるのに対し、ツバサは元々人間の脳で演算を行っている。

人間がパソコンの演算速度に間に合わないのに、それを強化したようなウィザードに演算に対する速度と、脳に与える負担では勝てる訳が無い。

膨大な情報量に溺れて脳がいかれるのがオチだ。人間である以上、限界は必ず在るのだ。

「オリヒメさん！」

スバルの驚く声にオリヒメはスバルに優しい視線を送る。

「……久しいな、星河スバル。話したい事はたくさんあるが、それは後にしよう。……ただ、一言だけ言わせて欲しい」

オリヒメは一旦ここで言葉を切り、静かにその言葉を紡ぐ。

「……ありがとう。……そなたのおかげで今のわらわが在(あ)る。……勝ってくれ、我ら3人の科学者が作った、このアビリティで！」

3人の天才科学者の想いの結晶。そのアビリティに込められているであろう想いを想像するだけで、スバルは自分の心が温かくなるのを感じた。

スバルは感謝の想いを『言葉』という方法で『形』を作る。

「……はい！　必ず勝ってみせます！！」

ロックマンカーネルノイズは再度エーテル・フォトンと向き合う。

そして、ウォーロックはスバルの隣からエーテル・フォトンに勝気な声を飛ばす。彼もスバル同様、心強さで胸が高鳴っているのだ。

『へっ！　これでお前の十八番の電波を操るってのも出来ねぇだろ！　観念しやがれ！！』

誤解のないよう言っておくが、スバルとウォーロックの『倒さない』という思いは消えたわけではない。ツバサに勝って、話して、どれだけの罰を受ける事になっても、自分の大事な友人として生きていて欲しい。

それがスバルとウォーロックの想いだ。

しかし、それでもエーテル・フォトンは不敵な笑みを浮かべ続ける。

「フッ。……仲間の支えってヤツか。それならオレにもいるぞ。……来い！　同胞達よ！！」

ヴンッ　ヴンッ　ヴンッ　ヴンッ

エーテル・フォトンは自身の右腕を高く掲げ、手の平を上に向ける。

それと共に幾千ものはぐれウィザードとウイルスがその場に現れた。地上はもちろんウェーブロード、空中に浮遊している者もいる……。眩暈を通り越して吐き気を催すような数だ。

「ッ！！　これはっ！！」

驚くロックマンに、エーテル・フォトンはこの事象の説明をする。

「地球上にいる、人間に敵意を持っている全てのはぐれウィザードを結集させた！　この数を相手に、どこまでやれるかな！？」

「くっ！」

ロックマンとウォーロックはエーテル・フォトン1人から周囲全体に警戒を変更（シフト）し、背中合わせになってサーベルと爪を構える。

第１５１話　３人の科学者（後書き）

カーネルが言った言葉はもっと長いんですが、『・・・・・・』を必要数打つのが大変なので適当な量にしました。ご容赦ください。

ふむ、やはり描写も書くとなるとケータイに書いたネームを１話の間に全て書けませんね。

後は前々から考えていた展開なので書きやすい＝詰まる事が無いと思います。

それでは次話もお楽しみに！

それと、お気に入り小説に登録していただいた人の数が３４人に！　このような作品にお付き合い頂き、本当にありがとうございます！

……でも、全部把握は出来ないんですよね。検索で『流星のロックマン』で出る方はある程度把握しましたが、他の（別のジャンルのファンフィクションを書いてる人や、自分の作品を投稿していない人）もありえますからね……。

気にならない訳じゃありませんからね。

第１５２話　全滅（前書き）

お待たせしました。

物騒なタイトルですが、始まり始まり～（↑何だそのテンション！）。

第１５２話　全滅

「ＮＦＢ！！　アヴァランチ・オブ・ディバイド！！」

カーネルノイズの最大の技、アヴァランチ・オブ・ディバイドは雪崩の様な勢いで迫る来るはぐれウィザードの壁に風穴を空ける。

その攻撃はセイリュウ戦ほどの破壊力は無かったが、下から上に駆け上がる緑色の雪崩は壮観たるものだった。

相手と距離があって、その距離に対応できる攻撃があるなら攻撃するべきだ。対多数戦の時、一瞬でも早く、多くの敵を倒さないと数で圧倒されてしまう。よって、相手が自分を攻撃できる距離まで近づく前に、敵の数を出来る限り減らしておくのが重要と言えるだろう。

一方、はぐれウィザードの方は回避行動を取ったようだが、なにぶん数が多いために逃げようとしても仲間にぶつかってスムーズに逃げられず、目測で１００ほどのウイルスやはぐれウィザードを消し去った。

しかし、それでも全体から見れば１００分の１……。いや、１００分の１しか減っていない。地球上で人間に反感を持っているはぐれウィザードが結集しているのだからそれにも納得ではある。

余裕が一切無い状況で、エーテル・フォトンはさらに嫌なニュー

スを届ける。

「……やはり今のままだとはぐれウィザードがお前らを攻撃出来る距離まで近づくまでに、半分近くやられそうだな。……そろそろだろうから、お前たちにはハンデを背負ってもらう」

エーテル・フォトンはヨイリー、キング、オリヒメの開発したアビリティの効果で力が存分に出せない。周辺の電波の波長がランダムに絶えず変化しているため、普段は相手の攻撃を見てからで間に合った攻撃対処用の演算が間に合わなくなったのだ。

例えるなら、計算問題をしている最中に突然目の前の問題が変わっているようなものだ。しかも計算は最初からやり直し。こんな鬼ゲー、頼まれたってしたい奴はいないだろう。

よってエーテル・フォトンは前線に出てこれない状況だったためスバルとウォーロックには都合が良かったのだが、このエーテルの発言によりスバルとウォーロックは動揺する。

「ッ！？　ハンデ？」

『はぁ！？　冗談じゃねぇ！　ただでさえこっちは忙しいってのに――』

パチンッ

エーテル・フォトンが指を鳴らした瞬間、上空に新たに４つのエ

アディスプレイが出現する。そこに映し出されていたのは、暁やツカサを初めとしたシーサー城を後にした面々と、ソラやゲイルを始めとした四神を連れているメンバーだった。

スバルは一瞬ビャッコとセイリュウが甦っている事に疑問を抱いたが、それは先程言ったように一瞬だ。それ以上の驚きによりその疑問はかき消されてしまったのだ。

「ッ！！　なんだ……アレ……」

『……でたらめな数だぜ』

自分達が知っている面々を囲い、襲っているのは黒い四神。電波変換していないとはいえ、その黒い四神の数は異常だ。

アシッド・エースやクイーン・ヴァルゴ、スザク・フレアやビャッコ・ソニックも懸命に応戦しているがその異常な数を前に徐々に押され、その包囲網は狭まっていく。

そしてとうとう極至近距離まで迫られ、接触を許してしまう。

「ゲッ！　こら離れなさい！」

スザク・フレアのそんな声が聞こえる。そう、黒い四神は接触するなりスザク・フレアやジャック・コーヴァス……スバルの仲間達にしがみ付いているのだ。

そして動きが鈍った所をさらに黒いモノが接触。風とスピードを活かして最後まで捕まらずにいたビャッコ・ソニックも、四神の壁に埋もれるように飲み込まれた。

「……皆が……飲み込まれた……」

『お、おいっ！　あいつ等無事なんだろうな！！？』

スバルの呆然に絶望を加えたような声。そしてウォーロックの怒りと焦りを込めた声に対し、エーテル・フォトンは指を1回パチンッと鳴らす。

ズドドドドドッ！！！！！

「ッ！！　暁さん！　ジャック！　……みんなぁぁぁぁ！！！」

エアディスプレイの向こうで起こる大爆発。映像のブレが、その衝撃の凄まじさを髣髴（ほうふつ）とさせる。

そしてスバルの絶叫。

黒い四神はエーテル・フォトンの合図によって自爆したのだ。仲間達の叫びは爆発による轟音に飲まれて聞こえない。

スバルがエアディスプレイに向かって仲間の名前を呼んでいる時、ウォーロックは爪を構えながらエーテルに突撃する。彼はスバルほど落ち着きがある訳でもない。仲間の身を案じる心は彼にもある。しかし、泣き叫ぶなんて彼には似合わないだろう。

現状を悲しむ暇があったら前に進む。それがウォーロックだ。

『てめぇ……。どこまで堕ちやがったぁぁぁぁ！！！』

無論はぐれウィザードの壁があるが、ウォーロックは鬼を思わせる気迫で爪を振るい、ウイルスやはぐれウィザードを突破していく。
そしてウォーロックの腕はエーテルの細い腕を掴む。黒い四神を自爆させたキッカケを作った腕を。

『……自分が何したか分かってんのか……』

静かな声に含まれる怒気。
エーテルはウォーロックの腕を掴みながらあっさりと答える。

「あぁ、お前達の仲間、すなわちオレの敵を自分の作ったモノ達ごと吹き飛ばした事だろ？」

あっさりと悪びれもしない言葉にウォーロックが怒りのあまり絶句したのを待っていたかのように、エーテルは必死になって仲間に声を送り続けるスバルに視線を移す。

「スバル、そんなに気になるならあいつらをここに転送しようか。……オレの力で」
「……でも、アビリティで……」
「確かにアビリティの力でオレの力は封じられている。……だが、お前が解除すれば良いだろ？」

エーテルは自分の思い通りになっているような笑みを浮かべており、対するスバルは俯いた。

『ダメだスバル！！』
「ダメよスバルちゃん！」

ウォーロックとヨイリーの声が重なる。今ここでアビリティを解除すれば、エーテルは電波を操る力を最大限発揮できる。そうなればアビリティの再発動さえ出来るかどうか分からない。その隙を与えてはくれないだろうから。

スバルもその事は良く分かってる。……しかし、爆発のど真ん中にいた仲間達の安否を確かめたいという思いと、ツバサを信じたいという思いがぶつかり合ってなかなか決断を下せずにいたのだ。

しかし、その迷いもエーテルにとっては無駄だった。

彼にとって、どっちでも良かったのだ。

「……時間切れだ。恨むなら甘々の自分を恨め」

『ッ！！　スバルになんて事を――ッ！！？　ぐぉぉぉぁぁぁぁ！！！？』

ウォーロックはスバルの優しさを踏みにじったツバサに怒り、その感情を込めた言葉をエーテルにぶつけようとしたが、急に彼は苦しみだし、悲鳴を上げる。

「ウォーロック！！　ッ！！　ぅあ……ぐぅぅぅぅ……っ」

ウォーロックを心配する叫び声を上げるが、スバルもまた苦しみだす。左腕を中心とした痛みだ。

スバルは強烈な激痛の中、エーテル・フォトンの能力。そしてウォーロックが苦しみだしてから走った左腕の痛みから考えて、ある仮説を考えた。

「くっ……。も、もしかしてキミは……ウォーロックから僕に介入を……」

スバルの仮説をツバサは自慢げに肯定する。

「その通り、よく気付いたと言った所か。……電波変換は電波体と人間の融合。ならば、一方……特に電波体の影響は人間の方に出て当然だろう」

今ツバサはウォーロックの腕に触れている。いくら周囲の波長が乱されているといっても、極至近距離ならその変化を読みやすいだろう。

電波変換の大元たる電波体を媒介とし、『電波変換』という現象により電波体と繋がっている人間に介入するのだ。

「電波体単体ならそのまま分解というのも出来るんだが、人間や電波人間は分解の演算に時間が掛かり過ぎるからな。今回はアビリティの破壊だけにしてやるよ」

つまり、本来ならウォーロックはエーテルに捕まれた時点で消滅しても可笑しくは無く、それが無いのはスバルのハンターへの介入のための利用に必要だからというわけだ。

人間は約６０兆個の細胞から成り立っているため、人間単体でも、電波人間という形でも、分解するのにそれ相応の時間が掛かるのも納得だ。

「くっ！　オリヒメ！　そっちは！？」
「ダメじゃ。プロテクトを張られておる。……介入を阻止できん！」
「……スバルちゃん……」

科学者3名はアビリティを遠隔操作してエーテルの介入を防ごうとしているが、先手を打たれて先にプロテクトを張られたらしい。
キングとオリヒメは苦虫を噛み潰したような顔をし、ヨイリーは苦しむスバルに何もしてやれない事に無力感から彼の名を呟いた。

その後も2人の悲鳴は続き、その時は訪れる。

Ｐｉ！　アビリティ強制終了。無効化されます。

アビリティの効力は力を失い、苦しみから解放されたウォーロックとスバルは倒れこむ。
エーテルは自身の力でウォーロックを空中に浮かばせ、スバルの元に飛ばす。そして、【　これでチェックメイトだ　】とでも言いたそうな声で言葉を投げる。

「さて、それじゃあスバルの仲間達をこの場に招待するとしよう。どうせこの後各所に行って倒すのも面倒だしな。この場所で纏めて倒すとしよう」

その言葉と声色には『情』など一切無い。ロックマンとウォーロックに送られる彼の視線と声は、完全に敵に向けるそれだった。

エーテルは４本の手を上に掲げ、目を閉じる。大人数を転送するための準備だろう。

「……はぁっ！」

ヴンッ　ヴンッ　ヴンッ　ヴンッ

アシッド・エースを始めとしてスバルの仲間達は次々に転送されてくる。誰も彼もボロボロで、電波変換を維持されている事自体が奇跡のような状態だ。

うつ伏せでスバルが倒れている時、彼の耳にはぐれウィザードの会話が聞こえてくる。スバルの顔は左を向いている状態だ。

『ヘッヘッヘ。オレ達がここに来る時は前もって渡されていた小型の転送装置で来たんだよな』

『あぁ、この事を完全に予想していたんだろう、エーテル様は』

自慢げに言っているが、それは彼らが達成した事ではない。

自分の責任を自分で背負えず、自分が傷付く事を恐れて行動せず、他人がどうにかしてくれるのを待っている。

全国のサテラポリスが捕らえたはぐれウィザードの傾向だ。

自分たちより劣っている『人間』が気に食わない。しかし、堂々と面と向かって反抗も出来ないから陰で人間の事を悪く言い、『エーテル』という『大きな力』にすがりつく事で初めて大きな顔が出来る。

本来見下しているはずのモノと向き合おうともしない臆病者は、人間だけでなくウィザードにもいるらしい。

ドサッ

「うぅ……」

落下音と呻き声がスバルの右隣で鳴る。その音と声が近かったため、スバルは気になって首を動かす。

そちらを見ると、スザク・フレアが落下の衝撃と苦痛で顔をしかめていた。顔はスバルと向かい合うような状態である。

「……ソラ……さん？」

スバルの声にソラは目を開く。どうやらスバルの存在を今気付いたらしい。

彼女は「あはは……」と苦笑して笑顔を見せる。

「あはは……お互いボロボロだね。……そっちは大丈夫？　ミソラちゃんは？」

彼女の言う通り、スバルもソラもダメージが大き過ぎて体を動かす事は出来ない。
スバルは自分が一応生きてる事（スバルなりのジョーク）と、ミソラがシーサー城に残った事を伝えた。

だが、大人しく話すらもさせてもらえないらしい。

ソラはスバルの話を聞いていたのだが、その途中で不意に叫ぶ。満身創痍のため『叫ぶ』というほど大きな声は出せていないが、それでも今の彼女にとって最大限の声だ。

「ッ！　スバル君！　……後ろ！」

スバルとソラは互いにうつ伏せで向かい合っている状態。スバルがソラの方を向いているという事は、ソラにとってスバルの後ろは良く見えるという事。
スバルの後ろにいた、電磁ムチを持っているはぐれウィザードが……。

『これでロックマンも終わりだ！！』

はぐれウィザードの電磁ムチは、高圧の電撃により空気中のチリを爆ぜさせながらロックマンに迫る。
スバルは思わず目を閉じるが、いつまで経っても電撃による痛みがやってこない。代わりに聞こえてきたのは、自分に電磁ムチを振り下ろそうとしていたはぐれウィザードの悲鳴だ。

『ギャアアァァァァァ！！！　熱い！！　熱いいいいい！！』

「……友達を傷付けるのは許さないよ……。燃え尽きろ……！」

ソラが自身の炎の羽を増幅させ、はぐれウィザードを炎の羽で包んでいるのだ。

はぐれウィザードは対して時間も経たずに燃え尽き、チリと化した。

「……ソラ」

ソラはツバサの声に反応し、起き上がる。だが、先程言ったようにスバル達は全員満身創痍の状態。動ける人間やウィザードなんて、1体もいない。しかし、彼女は立ち上がった。スザクの司る、『火』の力で。

スザクは『火』そのもの。『火』が弱まっているなら、『火』を注ぎ足せば良いだけだ。……赤羽ソラの寿命という名の灯火（ともしび）を。

ソラは、自分の寿命を代償にして体を動かしているのである。無論、彼女は意識してそんな事をやれているわけではない。彼女の意志の前に、無意識にその能力が出てしまったのだ。

ソラはフラフラしながらも自身の足で立ち、赤い双眸をツバサに向ける。

「……ツバサ……迎えに来たよ……。……どんな形でも良いから、生きて――」

「眠ってろ」

ツバサは彼女の言葉を短い言葉で遮り、固形の見えない電波を構成する。

ズンッ……

そして、その固形の電波は鈍い音を立ててソラの腹部にめり込んだ。

「……くぅ……」

彼女は最初に膝を付き、『どさっ』と音を立てながら再びうつ伏せに倒れる。

ソラが再び起き上がろうとする前に、ツバサが口を開いた。

「全員そいつらから離れろ。……止めはオレが刺す」

その言葉と共に、ツバサは４本の腕をそれぞれ別の方向に伸ばす。

ゴゴゴゴゴゴゴ……

鈍い音と共に地中から姿を現したのは、巨大な岩だ。４本の腕の向けられたそれぞれの大地から岩が持ち上がっている状態である。

そして、その岩はロックマン達の真上で止まる。押し潰す気だろう。

「ツバ……サ……」

ソラの掠れる様な弱々しい声に、ツバサは静かに言い放つ。

「……ソラ。自分が好きになる奴は次からちゃんとどういう奴か見ろ。……オレみたいに裏切るかもしれないからな」

それを言い終わると共に、４つの大岩はスバルやソラ……暁達を押し潰すべく、落下を始める。

第１５２話　全滅（後書き）

なお、何だかツバサの心理描写が特に薄いなぁ。と、思った方へ。明かしたら意味が無いからです。以上、理由終わり。……Ｚｚｚｚ。

「……どうも、センです。作者さんは最近強烈に眠いそうです。なお、次回はあの人達が帰って来ます。作中だと……３ヶ月くらい前ですかね。私はその頃メイド・イン・ザ・迷子でしたけど」

う～ん……迷子の最中なら素直にそう言え……。お前のギャグは何でそうややこしいんだ（↑煩くて目が覚めた）。

それとメイドはいらん。私は迷子産ですって何だそりゃ。どこの会社だ。

「冥土の方がよろしかったですか？」

地獄から生還したの！？

第１５３話　結集（前書き）

今回はオリジナルギャラクシーアドバンスが登場します。

第１５３話　結集

ダメージの大きさで全く動けないロックマン達に迫る巨石。
しかし、それらは１つもロックマン達に当たる事は無かった。

強大な電磁波がエーテルの支配域に無理やり干渉してコントロールを狂わせ、２つの巨石を何も無い地面に落とし、もう２つの岩は空気中に溶け込んだエーテルの波長を逆算。エーテルの波長そのものを操って地面に落とす。

それだけの強大な電磁波を持つ者。そして制御能力を持つ者など、そうそう居る訳が無い。

『……何をしているのだ。……ツバサ！』

その声は歳ゆえのあどけなさが残るが、それでも十分に他を抑えるだけの威厳に満ちていた。まさに王としての風格である。

「……ケ、ケフェウス……」

スバルは呻きながらも上空のケフェウスを見上げる。彼の隣には大吾が、背後には大勢の軍勢がおり、仲間を集めるのに奔走してくれた事が伺える。そして仲間を集めるように言った者を倒そうというのだから、皮肉としか言い様が無い。

そして、もう２つの巨石を止めた者は静かにスバル達に近づく。

『……スバルさん……みんな……』

「ア、アイ……リス……」

スバルはケフェウスがいる方とは逆の方向からした声に反応しながら彼女の名を呼ぶ。

かろうじて見える彼女の目は、決意と悲しみの色がある。まるで、これからの事に決意しながら、それでも悲しみが抑えきれないように。

彼女は自分のハンターを取り出し、3枚のバトルカードを構える。

何をするのだろう？

スバルがその疑問を口にするより早く、アイリスはバトルカードのデータを転送し始めた。

なお、ケフェウス達は襲い掛かって来るはぐれウィザードやウイルスの軍勢と相手をしていて、まだ地上に来るのに時間が掛かる。

『……バトルカード。サンクチェアリ、リカバリー３００……ロール――』

彼女が3枚目のバトルカードを転送した時、アイリスのそばに女性が現れた。全体的な色はピンク。目の色は緑。頭部のヘルメットに当たる部分からは黄色い帯が後ろに流れ、黄色い髪が後ろに流れている。

その女性は宙に浮かんでおり、アイリスの肩に優しく手を置く。

『あなたは1人じゃない』そう言いたそうな顔で、アイリスの肩に

手を置いている。

アイリスはその女性に感謝を込めた笑みを送ると、最後の言葉を放つ。

『――ギャラクシーアドバンス。……パーフェクトリカバリー！』

ギャラクシーアドバンスとは、特定のバトルカードを転送する事で転送したバトルカードが1枚のカードとなり、効力を発揮するものだ。

そしてその効力は、すぐにスバル達に現れた。

「ッ！　これはっ！」

スバルの体から痛みが引いていく。周りの状況を見るために手を地面に突き、上体を起こすと、アシッド・エースやスザク・フレア、クイーン・ヴァルゴなど、仲間達が倒れている地面から六角形の光が出ている。無論ソロもその中に入っている。

自分の足元に六角形の光が現れ、その上にいる者を聖なる力で護るバトルカードは、『ホーリーパネル』と先程アイリスが使った『サンクチェアリ』ぐらいだ。

もっとも、サンクチェアリの方は２００年前に存在したレアチップで、今回アイリスが使ったのはその現代版という訳だ。

六角形の柱はいくつも天に聳(そび)え立ち、その光の柱の中にいる者には癒しを与える。

ボロボロだった面々が次々立ち上がる中、アイリスは静かな声で言う。

『……このギャラクシーアドバンスは、私が味方だと認識した者の体力を全回復させるわ……』

それだけ言い、アイリスはツバサと向かい合い、はっきりと言い放つ。

『……ツバサ、私はあなたの敵よ……』

彼女の言葉通り、エーテルの足元に六角形の光は見えない。それが何よりの証拠だ。

対するツバサはいまだ余裕を崩さず、悠然と腕を組む。顎を上に上げて、見下しているスタイルだ。

「ふんっ。ケフェウス達は電波体である以上、オレに触れたらアウト。そしてお前1人加わった程度で何が――」

「アイリスちゃんは1人じゃないよ！」

ツバサの声を遮る少女の声。その声はソラとは違う。ここにはいないはずの少女の声。

「この声……ミソラちゃ……」

スバルはミソラの声に驚いて彼女を探そうと四方を眺めたのだが、スバルの目に映ったのは、大群だった。少なくとも、今スバル達がいるクレーターの中心を囲うくらいの数である。

「すごい……」

『……ほとんどが民間のウィザードだが、ウルフ・フォレストやクラウン・サンダー……今まで出会ってきた奴らの波長も感じるな』

ソラの呆然とした感想にウォーロックの分析。

なお、アシッド・エースやジャック・コーヴァスは自力で立っているがソラだけは立つのに苦労している。スバルは心配して手を貸そうと思った矢先、ハープ・ノートがウェーブロードから舞い降りた。

「スバル君！」

「ミソラちゃ――うわっ！？」

……前記の舞い降りるというのに多少の訂正が必要だろう。正しくは、スバルの元にダイビングしたというのが正しい。

それをスバルが抱き締める様に受け止めたのだ。……ミソラがそういう風に受け止めざるを得ないような飛び方をしたのだが、まぁ、触れずに置こう。

のけぞりながらも何とか彼女を受け止めきったスバルは腕の中のミソラを睨む。

「ミソラちゃん、来てくれたのは嬉しいけど危ないじゃないか。もし僕が受け止めてなかったら――」
「えっへっへ～♪　1回こういう事やってみたかったんだ～。今じゃあこういう危ない事、新人のピン芸人さんでないとやらせてもらえないもん！」
「……はぁ～～」

しかし、当のミソラは屈託の無い笑顔。スバルはその笑顔により怒る意識を奪われて代わりにため息を付いた。

「ミソラ、一緒に来たウィザードや電波人間たちは……」

いつの間にか近づいて来ていた暁はミソラに尋ねる。
暁の手とソラの手が握られている所から考えて、ソラを立たせたのは暁らしい。手を握り、上に引っ張って立たせたのだろう。

なお、件（くだん）のウィザードやウルフ・フォレストを始めとした電波人間たちは、すでに戦線に入っている。

「えっと……。実はじっと待っているのが嫌だからこっそり飛び出しちゃって……その途中でウィザードさんや尾上さん達が加わったの。……なんか、戦っている時の映像が流れてたみたい」

暁を始めとしてサテラポリスと四神メンバーはそ～っと目線を逸らし、誰とも視線を交わす事は無かった。
気まずいのだ。

その気まずい理由は暁がミソラに対する確認という形で表に出る。

「……つまり、ＷＡＸＡニホン支部の極秘クラスに扱われるような戦闘映像が民間に横流しされていたというわけか……」

あまりにミソラが申し訳無さそうに言っている所から考えて、流れていた情報は暁達が容赦無くボロボロになっている映像らしい。

ミソラとしては暁達の尊厳を護るために言い辛そうなのだろうが、その態度が逆に事実を浮き彫りにする。

そしてその犯人に指示を出した者はあっさりと名乗り出た。

「いや～ライラに仲間を集めるようにお願いしといてよかった♪……ボロボロなのを重点的に映したのは彼女なりのイタズラ心だろうね♪」

ゲイル・ホワイトだった。全世界に流したのはライラである。

過去に地球上の人間がレゾンを１つにし、広い宇宙から『スバル』という１人の少年を地球に帰したというのはサテラポリス・民間問わず周知の事実だ。

そしてその時の体験……『何も特別な力が無くても、自分に出来る事を諦めずにやれば自分達だって奇跡を起こせる』という確信が、尾上　十郎達のような電波変換メンバーだけでなく、民間のウィザードや地球人の『一歩』を生み出したのだ。

とはいえ、一応怒りたい暁とウォーロック。

２人はゲイルの肩に手を回し、思いっきり睨みつける。何もボロ

ボロの場面を重点的に映す事は無いだろう。……確かにそれにより危機感が出てより一歩を踏み出しやすくしたのだろうが……。

「やっぱりお前か」
『っていうか何でビャッコが復活してんだ』
「そうだそれはオレも聞きたい」

ウォーロックの問いに思い出したように反応する暁。
対するビャッコは実体化してゲイルと顔を合わせ……。

「『さぁ？」』

声をハモらせて首を傾げたゲイルとビャッコに対し、暁とウォーロックは脳天平手ツッコミを決めながら同時に怒鳴りつける。

「さぁ？　じゃ――」
『さぁ？　じゃ――』

ギィンッ！！！

しかし2人の怒鳴り声はケフェウス率いる宇宙有志同盟とツバサ率いるファイブ・エレメントの戦闘の音で遮られた。
怒鳴り声を遮った弾く音。それはケフェウスの剣とイーグルの雷撃の槍、そしてアクエリアスの水弾を同時に防いだ音だった。

『……バリアか』

舌打ちを堪えるケフェウスの声。
ツバサは今、はぐれウィザード全体を覆うほどの巨大な半円状のバリアを展開して攻撃を防いだのだ。

現在バリアの中に入っているはぐれウィザードを除いたウイルスやウィザードは全員ケフェウス率いる大群と、ハープ・ノートが連れてきた大群に殲滅されてしまったので、バリアの中にいる者が現存するファイブ・エレメントのメンバーという事だ。

ファイブ・エレメントの誇っていた数的な優位は、宇宙と地上の増援によって逆転されてしまったのである。

その光景を少し離れた場所から見ていたスバル達。
ゲイルはニヤニヤしながら暁の方に手を回す。

「これじゃああんまり余裕こいていられないね。どうする？」

暁はその手を振り解き、しぶしぶ指示を飛ばす。

「……仕方が無い。皆、あのバリアをブチ破るぞ！！」

「「「「「『はいっ！』」」」」」
「「『『『おぉ！！』』』」」
「『『えぇ』』」

『『……あぁ』』

『『承知した！』』
『『ＯＫ！』』

「きっまりっだね～♪」
「……ふんっ」

ボクッ！

「……痛いなもぅ……」

暁の声に応えるのはビャッコもセイリュウも同じ。ゲイルは１人離れた所に行こうとするブライを捕まえてブライの拳を喰らう。

ブライとしては群れているのが性に合わないので離れてツバサと戦おうとしたのだろうが、結局ゲイルのペースに飲まれて離れるタイミングを逸してしまった。

目的と根底にある想いは違えど、共に道を歩む事は出来る。

それを証明するかのような光景だ。
暁はその光景にフッと笑みを零し改めて前方のエーテルが張ったバリアを見る。後は攻撃の指示を出すだけだったのだが……。

バリンッ！！

今度は破れる音。バリアは内側からの圧力に耐えられずに破れたのだ。

『オオオオォォォォォォォォ！！！』

半球状のバリアから生まれたのは、黒い人型のモノ。
それ以外に形容しようが無い。

指は鋭く鋭利で、黒い体が体毛を持つように波打つ。強いて言えば真っ黒な獣だが、獣にしては禍々しく、黒い体は内側から黒い電波が吹き出る事で膨れ上がり、その身を構成している。

驚くべき事は他にもある。
バリアの中に大量にいたはぐれウィザードが、一体もいないのだ。チリも残留電波も残らず、消え去ったのである。

『オオオオォォォォォォォォ！！！』

獣は聞くものに恐怖を抱かせる雄叫びを上げる。そして横薙ぎに振られた腕はＦＭ星人やウィザード、電波人間を幾千の悲鳴と共に薙ぎ払う。

スバルはそれが誰なのかがわかっていた。前もって知っていたわ

けではない。直感だ。そして、その直感を抱いたのは全員同じだろう。

その黒い獣は、飛王ツバサなのだと。

ヒュウゥゥ……

戦場に冷たく、ひっそりと忍び寄るような不気味な風が吹き荒れる。まるで地球がその存在を恐れているように。

対応が遅れた者、逃げ遅れた者は次々に黒い獣に薙ぎ払われ、倒れていく。

そんな中、暁は意識を張り詰めながら愛銃、アシッドブラスターを構えながら先頭に立つ。

「……どうやら、ラスボスって奴みたいだな」

暁はここで一旦言葉を切り、後ろの仲間に向かって声を張り上げた。

「行くぞっ！！」

ズドドドドドドドッ！！！

暁の指示によるサテラポリスメンバーと四神メンバー、ケフェウス率いる電波星人メンバー、地球の有志達が攻撃したのは、ほぼ同時だった。

第１５３話　結集（後書き）

次回はほんの少し時間が戻った所から始まります。本当に少しなので、『――～～～――』で済みそうです。

なお、あのロールは正真正銘のロールです。

次話の流れはすでにケータイにメモってますから、時間を見つけ次第書きたいと思います。

戦闘的にはそろそろ大一番です。つまり、エーテル編最後の戦闘の始まりですね。そんなわけで、次話もお楽しみに！

第１５４話　犠牲（前書き）

『……あの、死ぬ人って出ないんじゃ……』（↑アイリス）

お待たせしました～。何故だかインターネットが繋がらなくなって、午前中に更新できませんでした。すみません。

なお、作中に出てくる『黒いモノ』はＮＡＲＵＴＯの九尾モードのナルトを思い浮かべてください。アレの真っ黒バージョンね。

『……話、聞いてくれない』

第１５４話　犠牲

ケフェウスとイーグル、アクエリアスの攻撃が防がれた時、バリア内の会話。

『エ、エーテル様……』

ツバサの近くにいたはぐれウィザードが不安そうに話しかけてくる。彼らが不安を覚えるのも無理は無いだろう。

何せいまや数的優位は完全に逆転し、追い込まれているのだから。

現在、ロックマン達に加勢に来た者はケフェウス率いる電波星人とハープ・ノートが連れてきた地球の有志達。

それぞれの数はファイブ・エレメントの半分程度だが、一体一体の戦闘力ははぐれウィザードの方が明らかに劣る。そのため、最初は徐々に減らされる程度だったのが、ファイブエレメント側の数が減るにしたがって雪ダルマ式に損害は増大したのだ。

その結果、今やファイブ・エレメントの勢力はエーテルの張った防御壁の中にいる者だけとなったのである。

「……不安か？　サルト」

サルト、リーグ、テムは仲が良い。しかし、その3人の中で生き残っているのはサルトだけである。

ツバサは片手を上に上げて半円のバリアを維持しながらサルトを横目で見る。

『……』

押し黙るサルトを見て、ツバサは周囲のはぐれウィザードを見る。彼らに表情らしいものが無いから判断できないが、目線の向きや仕草から不安を抱いている事が分かる。

エーテルは再び視線をケフェウス達の下に戻しながら静か言葉を発する。それは水のように、自然に耳に入ってくる声だった。

「……そうか。……なら――」

――以下、ツバサとネビュラ・グレイの会話――

視界に黒しか映らないようなひたすらに黒い空間。そこに色のある物は2人しかいない。厳密にはもう1体いるのだが、それは闇そのものだ。

そこはネビュラサーバーとツバサのPGMの境目というべき場所。サーバーとツバサが立つ場所の境にはフォルテがおり、ネビュラグレイがサーバーから出るのを防いでいる。

「そろそろ働いてもらうぞ。……ネビュラグレイ」

不敵なツバサの声。ツバサは一瞬だけネビュラ・グレイを抑えていたフォルテに視線を送る。

フォルテはツバサに一瞥くれると静かにその場から離れ、ネビュラ・グレイは地の底を蠢く様な低く、オドロオドロしい声でそれに応えた。

『……ナニヲ　カンガエテイルノカ　ワカラナイガ、ワレヲソトニダシテ　コウカイスルノハ　オマエダ。オマエノタイセツナモノヲ……コワシテヤルッ！』

その言葉でツバサは一瞬スバル達の顔を思い浮かべたが、無理やり自分で笑みを作る事でそれを隠した。

「スバルにぶっ飛ばされちまえ。……クソ野郎」

『……イイダロウ。ノゾミドオリ――』

ネビュラ・グレイを抑えていたフォルテはもういない。ネビュラ・グレイは境を越えて腕を伸ばし、ツバサを両手で掴む。

そして徐々にその顔をツバサに近づけていく。

『ソノカラダ、モラウゾ……』

ネビュラ・グレイはその言葉を言った直後、口を開いてツバサを飲み込んだ。

飲み込まれるツバサは目を瞑り、その口には優しい笑みが残っていた。

――そして現実世界――

エーテルの体が徐々に黒さを増していく。彼の瞳は赤くなり、眼球は黒に染まる。

『喰らうとしよう』

『ッ！！？　グガッ……！？』

はぐれウィザードがそれに気付いた時にはもう遅かった。逃げる間もなく、エーテルははぐれウィザードの首を４本の内の１本で絞め始めたのだ。

『……エ……エーテル……様……』

はぐれウィザードは自らを絞めているエーテルの腕を振りほどこうと抵抗を試みるも、絞める力は一向に弱まらない。

ズプッ……

沼に何かが沈む音がする。沼はエーテルの腕だ。真っ黒になった腕は質量保存の法則等の物理法則を一切無視し、底なし沼のようにはぐれウィザードを飲み込んでいく。

『エーテ――』

これ以上サルトの言葉が続く事は無かった。サルトの頭がエーテ

ルの腕に飲み込まれたのだ。通常ならその時点でデリートされるはずだが、今回に限ってはそうはならず、サルトの腕がブランと垂れ下がりっている。

この時点で十分生々しいが、さらに黒い腕はサルトを飲み込んでいく。胴体に腕、腹……。そしてとうとう、サルトというはぐれウィザードは完全に黒きモノに飲み込まれた。

ぺろっ

黒きモノは先程サルトを飲み込んだ腕、それも指先を舐める。ディナーの後、手に付いた料理のタレに対してするように。

その一部始終に動揺する者、逃げる者が多々いたが、何もかも無駄だった。

黒きモノがはぐれウィザードの方に嫌らしい笑みを向けた途端、黒きモノの全身から細くて黒い管のようなモノが現れ、はぐれウィザードに近づくとその管の先が広がってはぐれウィザード達を飲み込んでいく。

その管の動きははぐれウィザードを飲み込むにつれて活性化し、内側からの圧力はツバサが張ったバリアを音を立てて打ち破るに至った。

バリンッ！！

『オオオオォォォォォォォォ！！！』

バリアを打ち破った時、黒きモノはスバル達の前に姿を現す。スバル達が動揺している中、黒きモノは獲物の気配が多い事に気付く。この戦場だけではない。バリアの外に、地球上のウィザードをはじめ宇宙にも電波体がいる事を察知したのだ。

ネビュラ・グレイは今までサーバーという限られた空間にいて外にこれほどの数の電波体がいる事を知らなかった。しかし、知ってしまった事実は変えられないし、時間も戻らない。

『オオオオォォォォォォォォ！！！』

襲い来る電波体を腕の一振りで薙ぎ払い、その際腕に触れた電波体は悲鳴を上げながら奈落の沼に堕ちて行き、戻ってくる事は無い。黒き魔獣の一部となったのだ。

続いてくる一斉攻撃に対しては、伸ばしていた管を自分に纏わせて自身の防御力を上昇させる鎧を作る。

ズズズズズゥ……。

その鎧は攻撃を弾かない。しかし、確実にロックマン達の攻撃を無効化した。

吸収したのだ。それこそ真っ暗な沼に沈むように、幾千もの攻撃

はその鎧に沈んでいく。幾千もの攻撃が少年1人の体に飲み込まれていく様は、まるでブラックホールに吸い込まれる星々の様だ。

「ッ！！　あ、暁さん……」

自分達の攻撃を吸収しつくして数段大きくなった黒きモノを見て、スバルは驚きから声を漏らす。そして隣の暁が息を呑むのが雰囲気で察せられた。

「……あぁ、アレはもう人間でも電波人間でもないな……」

スバル達が勝てるか分からない黒き魔獣の力に畏怖して動きが止まっている中、黒き魔獣は再び咆哮する。

『ルオォォォォォォ！！！！』

その雄叫びと共に魔獣の背中は膨れ上がり、それと反比例するように魔獣自体は縮んでいく。魔獣が人並みの大きさ、強いて言えばツバサと同じ位の大きさに縮んだ時には、背中の膨らみは直径3メートルほどになり、背中に巨大な球を背負っているような状態となった。

「な、なんだかカタツムリみたいな……」

「嫌な予感しかしねぇけどな」

ピシピシピシッ……

ソラとジャックが短い言葉を交わした直後、背中の膨らみにヒビが入り、中にいたモノ達が産声を上げる。

『クルォァァァァ！！！』

それは鴉（カラス）だった。

カラスは人が死ぬ時に現れるという話があるが、それは死んだ人の魂をあの世に連れて行くからだという。『死』と『絶望』を司る者として、これほど相応しい者は無いだろう。

さらに、先程書いたようにその鴉は『達』だ。先程繰り出したロックマンたちの攻撃がその鴉の身を構成しているのだとすれば、その数は想像の域を超える。

ババババババッ！！！

暗がりから無数のコウモリが群がる如く、または黒い潮が吹き出る如く、鴉達は黒き魔獣の背中から噴き出した。広い世界にいる、獲物を喰らうために。

ＦＭ星親衛隊隊長、イーグルはいち早く動き、雷を迸らせる。

『ッ！！　好きにはさせん！　ライトニングフェザー！！』

両翼の羽ばたきは雷を起こし、雷撃の槍は黒き群れに向かう。このままでは地球上……仕舞いには宇宙中の電波体が喰われるかもしれないのだ。

ドドドドドドッ！！

轟音と共に雷は黒き群れを襲い、命中した周辺の鴉はチリと化した。どうやら通常の電波体同様倒す事は可能らしい。

しかし、スバルは疑問により眉をひそめる。

「……なんで攻撃が効いたんだろう……。さっきの皆で一斉にやった攻撃じゃあ効果が無かったのに……」

そう。スバルの言う通り、最初に一斉攻撃した時は全ての攻撃が吸収されたのだ。しかし、なぜだか今回は効いたのである。その理由はヨイリーがエアディスプレイから声を張り上げて教えてくれた。

「みんなっ！　シーサー城のサーバーとキングのサーバー、そしてオリヒメちゃんのサーバーであのカラス達の正体を突き止めたわ！」

どうやら鴉達が現れてから3人で解析を行っていたらしい。

解析が早すぎると思う方もいるかもしれないが、ＷＡＸＡニホン支部のデータを全て引き継げるくらい容量を持つのシーサー城のサーバー。世界中から送られてくるデータを一手に解析する監視者の

サーバー。そして『ドクター』とまで呼ばれるほどの技術を持つオリヒメの下にあるサーバーが共同で作業したのだ。時間的には妥当だろう。

「それでっ！　何なんです！　こいつらの正体って！」

アシッド・エースの声が荒いのは鴉を一匹でも多く倒すべく銃を放ちながら言っているからだ。

ロックマンもハープ・ノートも、スザク・フレアもセイリュウ・ウォータも、鴉に攻撃をしながらヨイリーの次の言葉を待つ。何故だかゲイルだけは戦う事に集中しているようだ。

ヨイリーは手元にあるデータを見ながら答える。

「アレを構成している大部分は、あなた達が放った攻撃電波よ！攻撃電波はただの力の塊に過ぎない。それに芯ともいえるモノが力の塊を人形のように動かしているのよ！」

一言で言えば風船のようなものだ。

膨らんだ風船の中の空気が攻撃電波の『力』でこれらが大部分。

そして、その大部分を動かしている骨組みや脳とも言える存在とは――。

「そしてその単なる力を制御しているのが、闇よ。いいえ、こう言うべきかしら。……人の心の怒りや憎しみといった心の闇をデータ化した存在。そしてそれが意思を持ったモノがその鴉の核（コア）よ！」

イーグルは再び雷撃の槍を飛ばしながら驚いたようにヨイリーに

尋ね返す。

『人の心の……闇だと！？』

『ッ！！　イーグル！！　左だっ！！！』

イーグルがケフェウスの声で慌てて左を向くと、そこには黒い鴉の群れが迫っていた。

『ッ！！』

ドンッ

すでに避けられない距離にまで迫っていたのだが、イーグルは黒い群れを回避する事が出来た。ある者が自分を跳ね飛ばして身代わりとなったのだ。

『ア……』

イーグルは持てる限りの声でその戦友の名を呼ぶ。

『アクエリアスゥゥゥゥゥゥ！！！！！！』

アクエリアスがイーグルに向けて微笑みかけた瞬間、黒い鴉達はアクエリアスを飲み込んだ。その群れが過ぎ去った後には、アクエリアスの姿は無い。

第１５４話　犠牲（後書き）

実はまだ、ケータイにメモしてる部分に入ってないんですよね。
我ながら進むの遅いな～（苦笑）。

『……』

……アイリスさ～ん。涙目止めてください。話せないのはネタバレをしたくないからでキミが嫌いな訳では……。それにこんな所スバル君やミソラちゃんに見られたら――

「ッ！　作者さんがアイリスを泣かせてる！」（↑スバル）
「作者さんってそういう人だったんだ！」（↑ミソラ）
『てめぇ作者！　前から思ってたけど、やっぱりお前はそういう奴だったのか！』（↑ウォーロック）
『ポロロン……。これはお仕置きが必要かしらね……』（↑ハープ）

うわぁぁぁぁ！　よりによってウォーロックにも見られたぁぁぁ！！　っていうかこの展開、ＷＯＲＫＩＮＧ！！７話目に似ている気がする！

『『何の事だか分からないけど、問答無用』』

ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！！

『あ、あの、別に作者さんは――』

この後、アイリスのフォローによりスバル以下４名は状況を把握。
４人が謝った頃には、作者はボロボロだったという……。

『そこまで酷くやってねぇし』
『でも、あなたの爪は効いたんじゃない？』

何にせよ誤解が晴れて良かったよ。……おかげで痛いけど。
雑談が長くなりましたが、今週一杯は大きく動く事が無いと思うので出来るだけ更新します。お楽しみに！

第１５５話　心の光（前書き）

お待たせしました！　今回のラストではとうとうあの人物が登場です。

第１５５話　心の光

アクエリアスという部下を失ったイーグルの悲しみの叫びは当然スバル達にも聞こえており、動きが止まりかけたがそんな時間も与えてもらえない。

少しでも動きを止めればすぐに飲み込まれてしまう。

しかし、付き合いの長いＭＦ星人側は動揺からか回避しきれずに黒い鴉に飲み込まれる者が続出していた。

ヨイリーは自分の言葉でイーグルを止めてしまい、それによりアクエリアスが犠牲になった事で自分を責めているらしい。彼女は顔を俯かせ、手を震わせている。

ここからはキングがカラス達の詳細を伝える。低いながらも不思議とよく通る声だ。

「……そのカラス達を構成しているのはあくまでキミ達の電波だ。よって攻撃すれば当たり前に倒せる。……しかし、あの黒いツバサだけはそうはいかない。アレは憎しみの心そのものなのだ。滅ぼそうという考えで攻撃すれば、またこの厄介な鴉共を生み出すだけだぞ――」

バリンッ！！

キングがそこまで言い切った時、黒い鴉はエアディスプレイを襲い、そして破った。

エアディスプレイはリアルウェーブで出来ている。すなわち電波だ。黒きモノ達から見れば、エサ以外の何でも無い。

『敵意を持たずに攻撃を!?』

『そんなの無理だ!!』

FM星人や他の星の電波体がそんな事を言っている。そして次の瞬間、彼らは闇に飲まれた。

キングは黒きモノ達の情報を言わなければならなかった。言わなければ、正体が分からないままやられる事になる。正体を知れば混乱する者もいるだろうが、与えられた情報から何か方法を見つける者がいるかもしれない。

しかし、実際には情報による混乱でその戦場は恐怖と絶望が満ちるようになる。もはや陣形も何もあったものではない。逃げ惑う者、戦う者……。恐怖で心がバラバラとなり、犠牲者が増えているのだ。

大吾やケフェウスが落ち着くように声を張り上げるが、聞く耳を持つ者などいない。

ドンッ!

その音は銃声ではない。突如響いた音はオリヒメのエアディスプレイからだ。

机を叩いた彼女は拳をわなわなと震わせながら声を張り上げる。

「いい加減にせぬか貴様ら！！」

……それも相当怒っているらしい。その全力で怒った顔は、ルナ・鬼神モードにも匹敵する怖さだ。……オリヒメの顔が下からアングルから映っているというのも相まって、ルナをも越えるかもしれない。

……余談だが、なんとなく彼女の年齢が三十路に突入していると思うのは作者だけだろうか？

そんな事はさておき、オリヒメが怒っている理由は明々白々だった。

「アクエリアスという者がどういう気持ちでイーグルを助けたと思っている！　自らの仲間を助けるためであろう！　なぜ助けられた貴様らは女々しく逃げ回り、戦おうとしない！　……少しは戦えない者の悔しさも考えてみろ……」

最後の言葉は弱々しく、薄弱としたものだった。それは自分の心と言葉に自信が無くなったからではない。

自分には戦う力が無く、言葉を届けるしか出来ない。何も言わなかったらキングのエアディスプレイの二の舞となる。何も言わずに言葉すら送れなくなる前に、彼女は自身の言葉を放ったのだ。

現にその直後、想いのある言葉に引き寄せられたのか、黒きカラス達がオリヒメのエアディスプレイを食い破った。

そしてその言葉は無駄ではなく、もう1人の科学者の口を開かせ

た。

「シドウちゃん！　ケフェウスちゃん！　大吾ちゃん！　とにかく今はこの鴉達が世界に散らばって、ウィザードや人間に危害を加えないようにする事が先決よ！　早急に部隊を纏め、鎮圧に当たって頂戴！！」

バリンッ！！

そしてとうとうヨイリーのエアディスプレイも破られた。
しかし、『意志』の元は蒔かれた。その芽はすぐに息吹く。

たった1人でこれだけの数の電波体を治めるなど到底不可能だが、ヨイリーの……そしてオリヒメの言葉を聴いていたのはシドウだけではない。その場にいた電波体全員が聞いていたのだ。

電波体も電波人間も区別無く、誰に何を言われるわけでもなく自然と部隊は成り立っていく。それも、戦闘を行いながらだ。
共通の危機のために、地球と宇宙という枠組みも越えて、一丸となったのである。

一方の暁は戦いながら少し考え込んでいた。

（……って言っても、オレはここに残って指揮をしないと――）

「暁さん」

スバルが緑色のサーベルで鴉を切りながら暁と背中を合わせて並び立つ。

「ん？　何だ？　スバル？」

「暁さんはここに集まってくれた人やウィザード達の指示をお願いします。……ツバサ君とは、僕だけで戦います」

「ッ！！　何をバカなっ！　１人で敵う相手じゃないぞ！」

「そうだよスバル君！　キミ１人危ない目になんて遭わせられない！！」

暁の言葉にミソラの声が続く。

どうやらＰＧＭ間の無線で聞いていたらしい。使っているＰＧＭは市販のものだろう。

心配そうなミソラにスバルは安心させるようにフッと笑いかけ、彼女の肩に手を置く。

「……危険なのは分かってる。……だけど、僕がやらないといけない気がする。……上手く言えないけど、ツバサ君がそれを望んでいるみたいに思えるんだ」

「？　ツバサ君が？」

「どういうことだ」

ミソラと暁の疑問。

スバルはその疑問に対し、困ったように目を逸らす。

「えっと……本当に何となくなんだ。……でも、――」

ここでスバルは顔を上げた。ここだけは自分の心がハッキリしていて、言葉に出来るらしい。

「――そうしないといけない気がするんだ」

その目に込められた意志の強さを感じたのか、暁は背を向けながらスバルに言葉を送る。

「……分かった。……ただし、絶対に生きて戻って来い」

暁は背中のバーニアから電波を噴出。各部隊に警護の配置を指示するために飛び去った。

他の者もすぐに各地に飛び去ったので、残されたのはスバルとミソラだけだ。

ソラは最後まで残ると言い張ったが、スザクが何かを彼女の耳元で囁いた事で承諾した。その時のソラの顔が少し驚いていて、飛び去るまでスザクの方に視線を向けていたのが気になる。

そして、黒い鴉達は天を舞って各地に飛び、それを追いかけるように暁達もウェーブロードを走る。アメロッパ大統領、アーノルド・ローグを包んでいたバリアも解除して彼を保護したため、今クレーターの内側にいるのはスバルとツバサだけだ。

クレーターの端には大吾とケフェウスが立っている。スバルにクレーター丸々覆うほどの電波のドームを作ってくれと頼まれたからだ。

『……スバル、ケフェウスから暗号電波が送られてきた』

今黒い魔獣はたった1人残ったスバルを警戒して少し離れた場所にいる。

また、FM星人等の使う暗号電波は、彼らの体から発せられる電波を意図的に歪める事で相手に伝える方式だ。

「……ケフェウスはなんて？」

『……いつもキミに任せてしまって済まない。電波のバリアの方は心配するな。私と大吾で絶対に破れない様な物を作る。……だとよ。へっ！　こりゃあますます負けられねぇな』

読み上げた後の強気なウォーロックの声に、スバルはクスリと笑みを零す。

「負ける気は無いよ。……そして、絶対に僕とウォーロックと父さんにケフェウス……そしてツバサ君……。全員で帰ろう」

『おう！　……っ。スバル、大吾からも通信が入ってるぜ。……識別からして、アイリスのPGMを借りたみたいだな。話すか？』

「……うん」

また父親と逢えるという確信はある。……否、逢うという願いがある。絶対に勝って、自分の帰りを待ってくれている者達に逢うという願いが。

しかし、後悔しないためにも話す事にした。

自分のそばにいる人が、いつまでも当たり前にそこに在る訳ではないのだ。関わる時間が長いか短いかというだけで、いずれ別れは

訪れる。
だからこそ、逢える内は……関われる内は、関わっていた方が良い。後で後悔しないためにも……。

Ｐｉ！

電子音と共に、大吾の声がロックマンの右耳の装甲から聞こえてくる。

『……不安はあるか？　スバル』

その声は穏やかで、父親としてスバルの不安を取り除こうとしているのが感じられた。
その気持ちにスバルの心は温かくなり、自然と少年の口元は綻ぶ。

「少しね。……でも、絶対に父さん達の所に戻るよ。……ツバサ君と一緒に」

大吾も久々に戻ってきて状況の把握に手こずったが、ツバサがエーテルでスバルの敵というのは理解した。その上で彼と共に帰ると言って見せたスバルに、大吾は父親としての笑みを浮かべる。誇らしげで、頼もしげで、息子の成長を喜ぶ父親の顔だ。

大吾はその気持ちを短い言葉で息子に伝えた。

「……強くなったな、スバル」
「……へへっ」

父親のいなかった暮らしが多かったスバルにとって、父親にそう言って貰えるのは慣れていないらしい。スバルは照れたような笑みを浮かべ、大吾はその息子の照れている笑みを想像して今、父親として伝えられる最後の言葉を言う。

「……スバル、お前ならもう分かっているだろう」

大吾の口調が真面目なそれになった事でスバルの顔も真剣になる。スバルもまた、大吾が父親としての言葉を送る事を察したのだろう。

「今世界で戦ってくれている人達は、お前の力になりたくて、あなたの支えになりたくてここにいる。それは強制でもなく、誰かに命じられたからでもなく、自分の意志で……自分の意志で未来を歩く事を決めた者達だ」

ココロサーバーに自分達を管理してもらわなくても、自分達の意志で生きていく。

自らの選択の良し悪し関係なく、自分達の意志で歩いていく事を決めた者達。

未来に何が待っていようと、自らの意志で未来を歩み、自分たちで未来を背負う。

ここに集まったのは、そういった人達だ。

そしてその選択をしたのは、１千や１億では下らない数だ。

大吾は続ける。その言葉は偶然にも、エーテル・フォトンとの戦いの序盤でスバルがノイズチェンジを起こした時、カーネルが言った言葉だった。

「忘れるな。望む者の意志を受け取り、それを自分の力として……。そして自分の力を分け与え、また力を受け取り……。そうやって暖かい意志を与え合うのが、ヒトの心の光だという事を」

大吾はここで一旦言葉を区切り、力強い声で続きを言う。

「自分のやりたい事がしっかり見えているのなら、後から自分が後悔しないやり方で……やり遂げろ！　スバル！」

「……父さん……。……分かった。僕もウォーロックも、ツバサ君も……絶対に皆の所に帰るから！」

スバルの力強い言葉に大吾は再び微笑む。そして、自身の手に高密度の電波を収束し始めた。クレーターの反対側ではケフェウスも同様に自身の電波を手の平に集中している。

「良く言った。それでこそオレの息子だ！　……それじゃあ、お前たちが帰ってくるのを待ってるからな」

「……うん」

『おう』

スバルとウォーロックが言葉を返した後、ケフェウスと大吾の手によってドーム上のバリアは展開される。

ＦＭ星人の王として宇宙ステーションの一室を丸々電波化するほどの力を持つケフェウス。そしてメテオＧをたった１人で抑えなが

ら、改心する前のジャック・コーヴァスとクイーン・ヴァルゴをメテオGの核に近寄らせる事を完全に防いだ大吾。

2人の生成したバリアは通信用の電波をも拒絶するほどの力だ。
だから、事前に大吾は通信を切ったのである。
スバルはツバサに意識を向けながら先程の大吾の言葉を思い出す。

（……僕と戦いたいと言ってくれる人達……。僕はその人達の為にも、帰らないとな）

今の心境はメテオGから帰還した時と似ている。

大吾の声によって『スバル』という少年を探すために一丸となった地球人。
そして、今の状況。

スバルは世界中で戦っている仲間達の声が聞こえた気がした。

（ッ！　違う。はっきりと聞こえる。……皆の、自分では無い他の誰かを護りたいという声が！　……けど、どこから……）

まるで自分の中に戦っている人達の心があるような感覚。自分の中にたくさんの人の暖かい思いがなだれ込んで来る様な感覚。

「……ウォーロック……この感覚……」

何となくで呟いた相棒の名前。その相棒はスバルの声色から彼の

心中を察し、それが自分も同じである事を語る。

『……スバル。その様子だとお前もみてぇだな。オレの中にも、地球人だけじゃなくて宇宙人……お前と一緒に戦いたいと想う奴らの声が聞こえる。……いや、ＰＧＭから伝わってくるといった方が良いか』

「ッ！　ＰＧＭから？」

――――シーサー城――――

「早くスバルちゃんの様子を見ないと。……大丈夫よね」

ヨイリーはシーサー城からエアディスプレイを再度遠隔表示できるように調整を行っている。

「ヨイリー博士！」

キングが慌てた様子で通信を入れてきた。しかし、そちらに構うほどヨイリーに余裕があるわけではなかった。

「キング！？　今はエアディスプレイの方で――」

「それ所ではない！　スバルのＰＧＭに変化が起きた」

「ッ！？　どういう事！？」

思わず手をとめたヨイリーはキングの次の言葉を待つ。

キングはいつもと違い、速いペースで話す。

「ノイズを制御できる上限が増大している。それと共に星川スバル自身の電波人間としての能力も上がっているんだ」

キングが担当していたのはスバルの状態のチェック。しかし、ノイズ制御の上限とロックマンの能力の増大は接点が見当たらない。

「……何か、科学的ではない何らかの力が働いているのかしら……」

不安そうに呟きながら、ヨイリーにはほんの少しの安堵もあった。少なくともその『力』は、スバルに危害を加えるものではない気がしたのだ。

――再び戦場――

自分に集まってくる温かい気持ちと力。

「……これが、父さんの言ってた事か……」

スバルは自分と戦ってくれる者達へ感謝の気持ちを込めてそっと独り言のように呟く。

「……ありがとう」

その想いと共に、自分の感謝の気持ちが気持ちを送ってくれた者

達に返って行くのを感じた。

意志を受け取り、自分の力と変えてその力を自分を想ってくれる人に送り返す。

想いの循環は繰り返せば繰り返すほどその力を上げ、強い『光』となる。

キィンッ！！！

そしてＰＧＭから高音が鳴り、エンシェントＰＧＭとホーリーＰＧＭが１つとなったシャインＰＧＭだけに許された、本来のアクセスを開く。

――――白の空間――――

「……ここは……」

今までのノイズチェンジのように様々な色が飛び交っていた世界とは違う。今回は白一色だ。

その人物はそっと現れ、スバルに声をかける。

『初めまして。星川スバルさん』

「ッ！　……あなたは……」

スバルの目の前に現れたのは桃色の羽衣に金色の装甲を身に纏った黒い肌の青年。

彼は穏やかな笑みを浮かべながら自身の名を名乗る。

『私の名はセレナード。ノアズサーバーとシャインサーバーの管理者です』

第１５５話　心の光（後書き）

次回から戦いもクライマックスに……入れるかな（苦笑）？

第１５６話　セレナード（前書き）

前に同じサブタイトルがあるので、そちらのサブタイトルを『苦痛』に変更しました。内容はイジッておりません。

第156話　セレナード

――――アジーナ・某村――――

「合曲一の章、炎孔（えんこう）！」

ゴォォォォォ！！！

『孔』という字は『突き抜けたあな』という意味合いで使われる常用外漢字だ。その意味を体現するかのように、スザク・フレアの炎の槍、炎孔は黒い鴉の壁に風穴を空ける。

「お願い！」

しかし、それでも攻撃を避けた者や倒せ切れなかった鴉は存在する。追撃を頼もうとソラが声をかけたのは、いつも自分のそばにいるスザクだ。

【分かってる。……はぁっ！】

ドドドドドドドッ！！！

直径5センチほどの炎弾は土砂降りのように降り注ぎ、残った鴉を焼き尽くした。

黒いモノが放った鴉の数が多すぎるため、暁は2，3人一組になって戦う事を指示したのだ。また、クレーターで闇に飲み込まれた者が予想以上に多かったとの理由で、その地区の鴉を一掃してお仕舞いではなく、そのまま各地を飛び回りながら倒す事となったのである。

戦闘の轟音が止んだ中、スザクはフッと息を吐いてソラを見る。

【フッ。……この地区は片付いたから次の場所に向かおう】

スッ

「うん。……その前に、あなたに聞きたい事があるんだ」

【……首筋に炎の刃を構えられたまま聞かれても困るな……】

ソラの方を向いたスザクの喉元にはスザク・フレアの炎の刃があった。

苦笑して見せるスザクに対し、ソラは若干の苛立ちを込めた眼差しでスザクを見る。

「いい加減スザクのマネは止めたら？　いつものスザクなら私が倒し損ねた奴を倒すなんて事せずに、自分から積極的に技を出すから。……あなたは誰？」

【……】

スザクとその者の違いに気付いたソラの問い。姿は同じだが、文字通り『人が違う』。

本来なら、ソラは大吾とケフェウスの作り出したバリアの中とまではいかなくても、せめてバリアのそばにいるつもりだった。それに何より、ツバサに自分の持っている物を届けるためにも近くに居ようと思っていたのだ。

しかし、今彼女のそばにいるスザクの姿をしたモノが『ある事』を囁いたため、ソラは暁達同様各地を飛び回る事にしたのである。

そしてその『囁いた事』とは……。

「……それに、どこに居ようと私があなたのそばに居ればツバサの下に行ける。……そう言ったのはあなたよ。それってどういう事？」

黙っているスザクに続けて質問するソラ。

隠し通せないと思ったか、ソラが自分とスザクの違いを見抜けるかどうかを試したのかは分からないが、スザクはクスッと笑って口を開く。

そしてその声は、スザクとは別物だった。クレーターでソラに囁いた頃には、スザクの中身は彼女になっていたのである。

【クスッ。……何者かはまだ言えませんが、この地球上のどこに行こうと私が貴方を『あの人』の下に連れて行けるのは本当です。……あの人と私の分身はある一点において繋がっていますから】

その答えは全く回答になっていない。ソラは強めのため息を付く

と踵を返し、先程のクレーターに戻ろうとする。
なお、ソラが気付けたのはソラとスザクも互いの事をよく信頼しているからである。いつも一緒に居る者であれば、他人が気付きづらい事も気付きやすい。
それでも、いつ入れ替わったのか分からなかったようだ。

【戻らない方が良いと思いますよ】
「……何で？」

振り向く事無く、ソラは声だけで尋ねる。

近くに居なくても渡せるという事で各地の被害を抑えるのが先決だと判断。よって各地を飛び回る事にしたが、それでもそばで戦いを見守りたいという思いは消えない。

その足を止めたスザクはきっぱりと言い放つ。

【見ない方が良いからです。……あの2人の戦いは、人間のそれではなくなりますから】
「？　それってどういう――」

『はい？　なにが？　……っていうかここどこぉぉぉぉ！！？』
「……」

いつの間にか『その者』から『スザク』になっていた。
スザクが思いっきり戸惑っている理由は単純明快。自分が居たのはクレーターのはずだったのに、いつの間にか違う所に居たのだ。
戸惑わなかったら逆にすごい。

一方、スザクになった事が理解できたソラは先程まで話していた『その者』を思い浮かべて怪しい笑みを浮かべる。

「ふっ。ふふふふふふ……」

『……ソ、ソラ？　……どしたの？』

相方の異変に気付いたスザクがソラに訪ねると、彼女は勢い良く拳を天に掲げて叫ぶ。

「逃げたなあぁぁぁぁぁぁ！！！！」

無論それは逃げられた事に対する怒りの叫びである。彼女の怒りに呼応するかのように、スザク・フレアの身に纏う炎は大きさをそのままに熱を上げ、周りの温度を上昇させる。

『？？？？？？？』

スザクには、意味不明状態のままソラを見守る事しか出来なかったという。

【……これからも、私の分身であるスザクと仲良くしてくださいね。……ソラさん】

その優しい声色はソラの叫びと彼女の発する熱に溶けていく。

【スザクが好きになった人間は、クロウと貴方だけなのですから。……そういう意味では、クロウがこの子達に望んだ願いは叶いまし

たね】

その嬉しそうな声色は、スザクがソラを宥めた事で徐々に収まる熱と共に消えていった。

――白い空間――

セレナードが『エンシェント』ではなく『シャイン』を選んだのは、もう『エンシェント』の名では相応しくないからだ。

ＰＧＭが『覚醒』した今、それにふさわしい名前で呼ぶべきだろう。

「……シャイン……サーバー……」

スバルの呟くような声に対し、セレナードは静かに頷く。

『えぇ。……そして、あなたの持っているＰＧＭも、本来ならシャインＰＧＭという名なのです。２つのＰＧＭを合わせる事で初めて私の元へとアクセスできます』

「えっ？　でもさっきは……」

エーテルとの戦いの最中、ロックマンが起こしたノイズチェンジはカーネルノイズとなった。

しかし、それは偶然ではない。

『確かにあなたはあの時私ではなくカーネルの力を得ましたが、あなたはその時何を思いましたか？』

「何を……思ったか……」

セレナードの静かな問いにスバルが反芻する。セレナードは次に自らの問いを具体的にする。

『あなたは怒りや憎しみで『力』を……ノイズチェンジを求めたのではありませんか？』

「ッ！」（……確かにそうだ。僕はブライが傷付くのを見ていられなくて、傷つけるツバサ君に――）

怒りを覚えてしまった。

スバルの内心を読んだ様に、セレナードはゆっくりと目を閉じて語る。

『……怒りや憎しみ……そういったマイナス感情の元にノイズチェンジを起こそうとすると、私ではなくカーネルの元にノイズチェンジが起こるようになっていたのです』

つまり、先程カーネルの元にアクセスしたのは『必然のエラー』という事になる。

「……じゃあ、僕が今こうしてキミに逢えているのは……」

セレナードは心からの賞賛を込めてロックマンに優しい笑みを送って頷く。

『えぇ。誰かの想いを受け取り、それを自分の【　力　】とする。……そしてその【　力　】を、自分を想ってくれた人達に返す。……その強く、優しい心が私へのアクセスを許したのです』

そこでセレナードは不意に自分の後ろを振り返り、呆れと可笑しさを含んだ笑みを浮かべて呟く。

『《……もうあなたは自由だというのに、案外気になっているんじゃないですか》』

「？」

セレナードが唇を動かしたのは見えたが、スバルには何を言っているのか聞こえなかった。

首を傾げるスバルに、セレナードはどこか楽しそうな笑みを浮かべて笑いかける。

『何でもありません。……ただ少し素直になれない人がいたようでしてね』

「？？？」

依然として分からないという様子のスバルに対し、セレナードは改めてスバルに問う。

『……今聞くのは何ですが、あなたの願う未来はどんな未来ですか？』

その質問は完全にセレナードの興味本位だ。しかし、予想は出来

ている。そして、セレナードが思い浮かべていた答えを、スバルはそのままに答える。

その茶色の双眸に強い意志を込め、ハッキリと。

「ツバサ君を取り戻します」

『……彼は完全に自我を失ったのではありませんか？』

今度の質問はスバルを試すためだ。自分の友人が完全に闇に飲み込まれて戻れないかもしれない可能性を前に、スバルがツバサを信じられるかどうかを試している。

この質問はスバルに若干の迷いを生み出させたが、それでも彼は自信が無さ気ながらも言い切った。

「……大丈夫だと思います。ツバサ君はまだ、完全に飲み込まれていないから」

『何故そこまで断言できるんです？』

スバルの瞳には信じたいという望み以外に確かな確証が映っている。その理由は、セレナードでも分からなかった。

それもそのはずだろう。スバルが言い切る根拠と『力』は、セレナードは聞いていなかったのだから。

「あの黒いモノの中から、ツバサ君の気配がしました。……彼はまだあの中にいます。……ソラさんとゲイルさん、アイリスは何か隠してるみたいでしたが、３人とも悪い感じじゃなかったし」

スバルの『視る力』は成長過程。それでも、大きな闇の中に存在している友人の気配を感じ取ったのだ。　そして、この日戦場で再会したソラとゲイル、そしてアイリスが何かを隠している事も感じ取ったのである。

セレナードはスバルの力を理解し、優しく、穏やかな笑みを浮かべる。

『……なるほど。クロウのそばに居て、あなたの中の力が目覚めたのですね』

「？　クロウ？　……もしかしてそれがツバサ君の――」

セレナードが零した『クロウ』という名。スバルはツバサのそばに居た事で彼の『力』に感化され、『視る力』に目覚めた。そして彼の『ツバサ』という名は偽名だという。

ならば、彼の本当の名前は……。

セレナードはスバルの質問に答える事無く、スバルに自身の手を差し出す。

『彼の名は彼の口から聞いてください。……本人の口から聞かなければ意味が無い事もありますから。……それでは、そろそろ行きましょうか』

「……」

スバルはセレナードの手を取り、その瞬間、周りの『白』は眩しい『光』に変わる。

――――現実――――

スバルとセレナードが話していた時間は決して軽い会話とはいえない長さだった。しかし、現実では一瞬とも言える時間だった。

故に、周りから見ればスバルはこう見えるだろう。

ロックマンが目を閉じたと思ったら光り輝き、その中から桃色のベールと金色の装甲を纏ったモノが現れたと。

そう。今のロックマンはウラの王と呼ばれたセレナードと近い姿をしていた。

金色の装甲は頭部と前腕、膝から下に纏ってあり、前頭部と膝から下を保護する装甲の膝の部分、そして前腕の装甲が保護している肘の辺りには緑色の水晶が埋め込まれている。

装甲の配置的には、平常時のロックマンと酷似している。

側頭部から下に伸びる布のような装飾は風に舞い、桃色のベールはロックマンの背中で淡い光を放ちながら浮かんでいる。

そしてその姿の名は……。

「ロックマン、セレナードノイズ」

『グルオォォォォォ！！！！』

自らを滅そうとする『光』。その脅威に対して『闇』は手の平をロックマンに向け、そこからどす黒い光線を放つ。

ズゴゴゴゴゴゴ！！

轟音と共に空気中のチリは焼け、禍々しい光線がスバルに迫る。

第１５６話　セレナード（後書き）

……ソラがクレーターから離れた理由は書いたし、あの場面で使う伏線も引いたから……まぁ良いかな。

「何の事ですか？」（↑セン）

ん？　ろんもちで秘密。

さて、『その者』も言ってましたが、２人の戦いは人間離れする予定なので、描写を想像する力の強い方は控えめに想像した方が良いです。

西尾維新先生の『偽物語』で言うと、吸血鬼の兄ちゃんと武闘派陰陽師の戦い並みです。……Ｒ－１５、付けますかね……。

第１５７話　化け物同士の戦い

ロックマンに迫るどす黒い閃光。もしも今までのノイズチェンジなら、そのような大きな技に対抗できる技が無いためロックマンの体は消し飛んでいただろう。

そう。その黒い閃光はカーネルノイズのＮＦＢ、『アヴァランチ・オブ・ディバイド』をはるかにしのぐ破壊力なのだ。

ロックマンもその事は攻撃を見た瞬間に悟った。

しかし、彼には対抗策がある。『剛』を『剛』で返すのではなく、『剛』を『柔』でいなす技が。

ロックマンは右手を閃光の方に向け、その軌道と速さに合わせてその場で回転する。右手は閃光の側面に添った状態だ。

ゴォォォォ！！　ギュゥゥゥゥ……

するとどうだろう。勢い良く真っ直ぐに進んでいた閃光はロックマンの手の動きにあわせて曲がったではないか。

ロックマンの背後に浮かんでいた桃色のベールと右手は黒い閃光の軌道を補正。ベールの端を通る頃には黒い閃光は放った者の下へと飛んでいく。

相手の放つ攻撃をそのまま相手に返す。

それがセレナードの『力』だ。
しかし、その攻撃すらも黒きモノには効果は無い。同等の威力の攻撃を出して相殺するのでも、ロックマンのように反射するのでもない。
ならばどうしたか？　答えは単純だ。
『オオオォォォォ……バクンッ！！！』
飲み込んだ。口を黒い閃光が入るくらい大きく広げて、膨大なダメージを与えるであろう必殺の一撃を我が身に取り込んだのだ。
その事はスバルにも驚愕をもたらした。対抗されたとしても攻撃技で相殺するか防御技で防ぐと思っていたのだ。
「……の、飲み込んだ……」
『オレとしてはあの攻撃を反射したお前もすごいと思うが……アレを飲み込んだアイツもすげぇな……』
セレナードと話したのはスバルだけなのでウォーロックにはまだセレナードノイズの力が理解されていなかった。否、正確には『信じられなかった』と言うのが正しい。反射する特有能力を含めて、セレナードの力が強すぎたためだ。
自分の想像の範囲を超える現実に対し、それが事実であっても疑うのは理性を持つ生物ながら当然の事だろう。
そして、そこに3人目の声が加わる。疑われたご本人の登場だ。
『……確かに凄まじい光景ですが、あのモノから放たれた攻撃は闇

を凝縮したような攻撃で、あのモノ自身も同じ様なものです。吸収する分にはどうという事は無いでしょう』

つまり、水の入った容器に全く同じ成分の水を与えても水量が増えるだけで成分バランスに全く変化が無いのと同じだ。

今回の場合は自身のエネルギーから搾り出した攻撃を吸収したので１００パーセントの状態に戻っただけと言える。

「そうなんだ。……ってセレナード！？」

『うおっ！？　いつの間にオレの隣に！？』

ウォーロックは今、スバルのハンターの中に入っている。その彼の隣にセレナードが現れたのだ。今までのノイズチェンジでは、２００年前のナビとは光飛び交う空間以外で話す事が出来なかったのだ。

驚く2人を他所に、セレナードは落ち着いた様子で自分が居る理由を話す。

『それぞれのサーバーの管理者はサーバーの外に出て話をする事が出来ます。……力を制限されるという制約があるので、私が直に加勢すると足手まといになるでしょう……』

最後に申し訳無さそうに加勢できない事を語るセレナードに、スバルは首を横に動かしてその申告を否定する。

「ううん。こうしてそばに居てくれるだけで心強いよ。セレナ――」

『ッ！　来ます』

スバルの言葉を遮るセレナードの注意。スバルが黒いモノに視線を移した頃には、眼前に黒いモノの爪が迫っていた。

「うわぁぁぁぁ！！」

スバルは驚きの声を上げながらも左足を軸にして回転。攻撃をかわそうとしたが……。

ザシュッ！！！

鋭い斬撃の音。スバルはその音を聞いて自分のダメージを確認する意味合いを含めて黒いモノから距離をとる。そんな彼の頭には疑問が渦巻いていた。

（……おかしい。今の音、確かに大きなダメージがあるはずなのに、痛みがまるで無い）

ロックマンはそんな事を思いながらも『何もしなかったらまた攻撃される』という思いから牽制としてロックバスターの強化版であり、セレナードがメインで使う技の『ホーリーショット』を使おうと右腕を突き出し、軌道の補正として左手を添えようとした時、先程気になっていた『ダメージ』に気付いた。

「ッ！！　う、腕が……無い……」

左足を軸にして回転する時、右腕は広がる。先程の斬撃はロックマンの肘から先を切断したのだ。

ダメージが来なかった理由は、ダメージが大きすぎたからだ。普段は絶対に受けないようなダメージに、体の痛覚を司る部分が対応

できないのである。

そしてスバルの愕然とした呟き。

それほど大きなダメージを受けた者の反応は以下の2つの分かれるだろう。1．パニックになる。2．愕然とする。『愕然』の方が次の相手の動作に対応できるように思えるが、実際の所精神的ショックは似たようなものだ。愕然とし過ぎてほかの事を考えられなくなるのだ。

『ルオォォォ！！！』

黒きモノの追撃。遠距離からの攻撃が効かないと分かったのか、先程の斬撃のような近距離主体にしたらしい。

『チィッ！』

『……』

ウォーロックはその身を挺してスバルを護ろうとする。冗談抜きで腕を切断されたスバルに、黒いモノの攻撃が対処できないと考えたのだろう。

セレナードもまた、何も言わずにウォーロックと黒きモノの間にバリアを張る。防げない事は分かっているが、それでもウォーロックとスバルへのダメージを最小限に抑えるためだ。

「ッ！！　ウォーロック！！」

しかし、スバルはウォーロックが自分の前に出るのを視界に納めた瞬間に我に還る。

その攻撃力を自身の身で味わったのだ。他の誰かがそれを受ける

光景なんて、心優しい彼は見たくないだろう。
いつも最後まで自分と一緒に戦ってきたウォーロックならなおさらだ。

ロックマンは左手の5本指全てを使ってウォーロックを横にどかし、右手を硬く握り締めて真っ直ぐにカウンターパンチを決める。

ドスッ……

ここであえてカウンターパンチと言うものに対して簡単な説明をしよう。

カウンターパンチと言うのは相手が攻撃してくる勢いを利用して自分の攻撃の威力を上げる技法だ。威力５０でぶつければ威力５０のダメージにしかならないが、相手が７０の勢いを持って迫ってきた場合、５０＋７０で１２０のダメージとなる。
相殺されて２０のダメージ、とはいかないのだ。

自動車事故でも、同じ方向に向かっている物に衝突　＜　止まっている物に突撃　＜　正面衝突といったように被害は大きいだろう。

スバルは中々に博識なのでその事は知っている。しかし、それだけでは目の前の現実と拳の感触が説明できない。
スバルの右手の感触は、殴ったのではない。貫いたのだ。

黒きモノの胸の辺りを、真っ直ぐに突き出された拳は貫いた。

『グルゴオォォァァァ！！』

黒きモノは苦痛による悲鳴を上げながらロックマンから離れる。

自身の拳の攻撃力に驚いているスバルに、セレナードは静かに話しかけた。

『……今は身体能力も向上しています。大抵の電波体を貫けるくらいに。……それに、自分の左腕も見てください』

「？　あっ……」

今度のスバルの呟きは驚きと疑問だ。驚きの方は、嬉しい驚きである。

切断された腕が戻っていたのだ。リカバリーでもそこまでの回復は出来ないし、リカバリーを使ってもいない。

そもそも考えてみればスバルはウォーロックを左手で横にどかした。指も柔軟に使ってウォーロックを傷付けない様に優しく、そして強い力でどかしたのだ。

『どうなっていやがる』

ウォーロックの問い。スバルももちろん同じ気持ちだ。

セレナードはやや早口でその問いに答える。

『今のスバルさんは、電波体というより人の心に在る【　光　】その物の様な存在。斬られようと貫かれようと、あなたの戦いたい、

誰かを護りたいという意志があれば、何度でも再生します。……もちろん、自身の電波はいつも通り攻防に転用できますよ』

光や闇、そういった『明確な物質』より『抽象的な存在』に近い物に物質的ダメージは意味が無い。そういった事のようだ。

『って事は――』

「ツバサ君の方も……」

セレナードの説明を聞いた後、ウォーロックとスバルに走る嫌な予感。人の持つ光に近い存在がセレナードノイズなら、自分の目の前にいる黒きモノは……。

『グルルルルゥゥゥ……』

黒い獣は低い唸り声を上げており、胸に開いた穴がジワジワと塞がって行く。

『……マジで化け物だな……』

「ッ。……」

ウォーロックの呟きは無論黒きモノに対してだが、それはスバルにも言える事。

スバルは今更ながらツバサが「自分は化物だから」と言う時の苦しげで寂しげな顔の理由が分かった。世間には『同じ立場にならなければ相手を真に理解する事は不可能』という話があるが、実に良く言ったものだ。

死なないのは死ねないのと同義。『死ねない』というのがどれほど辛い事か、スバルは解(わか)った気がした。

しかし、当然ながら考える時間なんてものは存在しない。

『グルオォォォ！！！』

再生した途端雄叫びを上げながら迫る黒きモノ。

相手は、自らと相反する存在であるスバルを消すためにその力を振るう化物なのだから。

「ッ！　……あれっ？」

向かってきた事に気付いたスバルは黒いモノに視線と意識を集中させる。しかし、その背中から薄っすらと白い何かが出ている事に気付いた。

何故今まで気付かなかったか？　と思うかもしれないが、腕の一振りでロックマンの腕を切断したり、カーネルノイズのアヴァランチ・オブ・ディバイドを超える破壊力を放つようなモノを相手に、そこまで注意して細部を見ろというのが無茶である。

スバルはその正体を見極めようとしているが、真っ黒な拳が迫っていたため応戦する。再生するといっても不死ではないだろうから、応戦は必要だろう。

「はぁぁぁぁ！」

『グルォォォ！』

ロックマンと黒きモノは、互いに互いの電波を拳に纏わせる。

グシャッ

金色と黒の光を帯びた拳は真っ向からぶつかり合い、互いの拳を潰した。

「くっ！」

『グゥ……ガァァァァ！！』

ロックマンと黒きモノは一瞬呻いたが、黒きモノはすぐさま攻撃に移る。

真っ直ぐに蹴り上げられた右足はロックマンの左肩から先を切断し、追撃となる横薙ぎに振るわれる爪は腹部を抉る。

「ぐぅっ！！　……あぁぁぁぁぁ！」

バギッ！　バギバギバギッ！！

左腕と削れた腹部の痛みに耐えながらのロックマンの右足での蹴り。それはちょうどミドルキックの軌道で黒きモノの腹部を捉え、骨が折れる生々しい音と共に吹き飛んでいく。

『グルゥァァァァ！！』

黒きモノは悲鳴を上げながら宙を舞い、強かに地面に肢体を打ち

つけ、さらにバウンド。おおよそ４回のバウンドの後、ようやく黒きモノは地面に体を落ち着ける。

『グルルルル……』

黒きモノの呻き声を聞きながら、スバルは先程失った左腕と腹部を見る。

「……ははっ。やっぱり戻ってる」

スバルは自身の内心を口に出しながら苦笑する。彼の左腕と腹部は、最初から斬れたり抉られていなかったかのようにそこに在るのだ。

（……何だか気が滅入りそう。……けど、この死ねない苦しさをツバサ君はずっと抱えてたんだ。僕だって負けてられない！）

スバルは静に息を吐き、解けていた精神の糸を再び結びなおす。

『ルォオアァァァァ！！』

あちらも傷が再生したらしく、一直線に突っ込んでくる。

ロックマンは先程同様金色の電波を拳に纏わせて迎撃の構えを取り、今度は下から上にアッパーカットを繰り出す。

ゴシャッ！

その拳は黒きモノの顎を捉え、下顎を吹き飛ばす。黒きモノは一

瞬仰け反る様に怯んだが、それは文字通り一瞬だった。

ガシッ！

最初に上に向いていた顔を前方のロックマンに向け、両手でロックマンの上腕を鷲掴みにして動きを封じる。そうこうしている間に下顎も再生。

その口には、最初に放った黒い閃光の元たる、黒い光球があった。

「しまっ――！」

スバルがその光球に気付いた時にはいつでも発射できる態勢で、スバルの今までの経験上、発射までそう時間が無い。

黒きモノの口は真っ直ぐにロックマンの顔に向けられている。まともに先程の閃光を浴びれば間違いなく頭が吹き飛ぶだろう。

キィィィィ！！！

発射する寸前なのか、高音が耳に入り込む。それと共に、黒きモノは顔を上に向けた。発射の際の予備動作だろう。頭が再びロックマンのほうに向いた時、災厄の黒き閃光は放たれる。

「くっ！」

ロックマンは思わず目を背け、瞼を閉じる。

しかし、次の瞬間彼の五感に訴えたのは痛覚でも死の感覚というものでも無い。

ザシュッ！

何かを貫く音と――。

『グッ……ギガアアアアアアアア！！！』

黒きモノの悲鳴。
そして最後に――。

『ふんっ。この程度で目を閉じるとはな』
『……やっぱり来ましたか。――』

初めて聞く不敵な声。その声の主はセレナードが知っていた。そして彼の安堵した声から、味方である事と相当な力を持っている事が伺える。

そしてその名は……。
約１５２年もの間、サーバーに潜む化物を押さえて来たその者の名は……。

『――フォルテ』

ここでスバルは目を開ける。
そこに居たのは、こげ茶色のマントを羽織った1体の電波体。……いや、セレナードの知り合いのようだから『ネットナビ』の方が合っているだろう。

スバルが目を閉じている間、フォルテは黒きモノの喉を貫き、黒き閃光のエネルギーを内部で爆発させたのだ。言ってしまえば腹の中でダイナマイトを起動させるようなものだ。

黒きモノはそのダメージと突然の来襲に警戒して距離を取ったのである。

フォルテは黒きモノに鋭い視線を向けながらスバルに問う。左手には先程黒きモノの喉を貫いた闇のソード……ダークアームブレードがある状態だ。

『……人間。お前がセレナードに言った【ツバサを取り戻す】という言葉に、偽りは無いか』

第１５７話　化け物同士の戦い（後書き）

さて、次話の情報をちょこっと書きたい所ですが、それじゃあ面白くないので書かないでおきますか。

それでは次話もお楽しみに！

第１５８話　エンペラーノイズ（前書き）

はいど～も～（↑吉本風に）。

お待たせしました。今回のサブタイ、別の言葉で言えばこうです。『ラストノイズ』。

お楽しみ頂ければ幸いです。

第１５８話　エンペラーノイズ

『……人間。お前がセレナードに言った【ツバサを取り戻す】という言葉に、偽りは無いか』

それがフォルテがスバルに発した第一声だった。

「えっ……？」

対するスバルは戸惑う。

答えを心に決めていたとしても、目の前に突然現れた者に尋ねられたら驚きや戸惑いの方が先に来てしまうだろう。重大な事柄ならなおさらだ。

しかし、フォルテはその戸惑った事が気に食わなかったらしく、右手にもダークアームブレードを作り出してスバルの喉元に添える。無論、左手のダークアームブレードをは牽制として黒きモノに向けている状態だ。

『……早く答えろ。ＹＥＳかＮＯ。……簡単な事だろう』

口では簡単な事というが、『答えを間違えたら即座に首を刎(は)ねる』とフォルテの目が語っているので軽い質問ではないという事が伺える。

そしてスバルの答えは……。

「……もちろんＹＥＳだよ。ツバサ君は友達だから、見捨てる事な

んて出来ない」

意志を込めた言葉と澄んだ瞳。その返答は自己保身のために無難な答えをなんて醜い曇りは一切無い答えだ。

しかし、ここでスバルは「でも……」と弱気な声を漏らす。

「……でも、僕もそうだけど顎を吹き飛ばしても再生するような存在になって……本当に人間に戻れるのか不安になってきたんだ……」

その不安もまた、スバルの偽りの無い本心だ。

顎を吹き飛ばしても腹に風穴が空いてもすぐに再生するような存在になってしまったのだから、【 自分もツバサも本当に最後は『人間という存在』に戻れるのだろうか？ 】という不安に襲われても無理は無い。

考え方や態度が大人びていても、彼はまだ小学5年生の少年なのだ。不安の1つも抱かなければ逆に不気味である。

そして、その答えを聞いたフォルテはため息を付きながらセレナードを睨む。

『……貴様、この人間にツバサを倒す方法しか教えてないな？』

「えっ？」

『どういうこった』

フォルテの無関心ながらも気に食わないという視線。スバルとウォーロックのわけの分からないという視線。

3者の視線を受け、セレナードはクスリと笑う。

『クスッ。私だけでは必ずそうなりますから。……スバルさんが望

んでいる救うではなく、倒すだけにね』

相手に自我が無くなった以上、『倒した後で救う』という手順を踏まないといけないわけだが、セレナードだけでは『倒す』事は出来ても『救う』事は出来ないという。

無論スバルはセレナードの言葉の意味を察して「そんなっ！」と失望の声を上げそうになるが、その前にセレナードが口を開く。

『ですが、貴方なら来てくれると信じてましたよ。……フォルテ。そして、私も貴方もツバサを闇から引き上げる方法を知ってるはずです』

そう言いながらフォルテに微笑みかけるセレナード。

フォルテは気に食わないという気持ちをフルに混ぜて鼻を鳴らす。

『ふんっ。……人間。オレもお前の力の一部になってやる。奴が弱った後は、オレが奴を構成する闇のデータをゲットアビリティプログラムで吸い出す』

「えっ……と。つまり……」

刃を突きつけた相手がいきなり協力すると言っても反応が追い付かないし、そもそもゲットアビリティプログラムという知らない単語が出てきたのだから思考はさらに遅くなる。

セレナードはそんなスバルを見て優しい笑みを浮かべながら簡潔に説明する。

『フォルテもノイズチェンジに加わるという事です。そして、相手の能力を奪い、自身の力とするゲットアビリティプログラムで彼の

闇を吸い出して残るのは――？』

「ッ！　……もしかして、ツバサ君？」

膨大な、凶悪な化け物の残りカスとしてツバサという少年が残る。

スバルの微かな望みを込めた言葉。その言葉をセレナードは、首を縦に振る事で肯定して見せた。

『はい。……ただし、データ上の闇だけなので心の闇は残るでしょうが、スバルさんやソラさん……あの子と【　共に生きてくれる者】がいれば、きっと乗り越えられるでしょう。

……すでにデューオに繋ぎとめられた命の量は少なくなっているはずなので、いつまで生きられるか分かりませんが……』

最後の言葉は事前報告のようなものだ。上手く行っても、彼は元の死ねない体に戻るだけで、さらにその寿命も遥かに少なくなっている。

それが、これだけの事を起こした者の背負う『業（カルマ）』である。

しかし。

それでも。

その言葉の真意を理解していても。

スバルの口は自然と言葉を紡ぐ。

「……それでも、生きていて欲しいです。今まで過ごした彼の全てが嘘だなんて僕には思えないから。……けど、仮に吸収できたとし

てフォルテ……さんは――」

『呼び方はどうでも良い。……オレの事は気にするな。強大な力を得られるのだから、都合が良いくらいだ』

フォルテが闇のデータを吸収すると聞いてスバルは心配したが、本人には無用の心配だったらしい。

彼の表情にツバサへの優しさやスバルへの気遣いはまるで見られない。本当に強い力を得たいだけのようだ。

『決まりですね』

セレナードは、スバルが納得したのを察するや否や、現実に現れてフォルテと並び立つ。そして、セレナードの視線はフォルテの横顔を捉えた。

『フォルテ？』

『……ふんっ』

それは長年共にサーバーを治めてきた者同志の交わす最低限の会話だろう。他人には分からぬそれだが、２人は互いに言いたい事が分かっていた。……フォルテからしてみれば『嫌でも分かってしまう』という認識なのだろうが……。

ポゥ……。

セレナードとフォルテが金色と黒色の光球になってロックマンの周りを回る。

『グゴォァァァァ！！！』

その刹那、先程までフォルテの気迫で近づけずにいた黒きモノが迫って来た。

「ッ！！」

スバルが黒きモノが迫ってきた事により驚いたのと同時に、光球は高速でロックマンの周りを回転し始める。そして、その光球はロックマンの胸の辺りにある流星マークに吸い込まれていった。

キィィィィ……ドゴオォォォォ！！！

2人を取り込んだスバルから放たれるのは、予期されていないノイズチェンジに対するエネルギーの暴発。

それは黒きモノを衝撃波だけで吹き飛ばしていく。

『グゴッ！？　……グッ……グガァァァァ！！！』

しかし、その暴発は言ってしまえば余分なエネルギーを外に出すためにセレナードとフォルテが行った『調整』だ。強大な力を持つ2人が全ての力を1人の電波人間に授けるなど、その電波人間を殺すようなものだ。故に、余分なエネルギーを外に出す必要があるのである。

例えるなら、無駄なぜい肉を削ぎ落として真に肉体を鍛え上げるようなものだろうか。

衝撃波が収まると共に、ロックマンの姿もセレナードとフォルテを合わせた姿に変わっていく。

セレナードの持つ前腕の丸みを帯びた装甲はフォルテの持つ鋭角的な装甲へと変わり、頭も後ろに４つの突起があるフォルテのそれとなる。

下２つの突起の先端からは、ベージュ色の帯が僅かな風になびいている。その帯はセレナードが前頭部に付けていた物である。

もちろん、セレナードの桃色のベールも健在だ。

そう。

ウラの王と電脳の破壊神。最強クラスの力を持つ２人の合わさった最強のノイズチェンジが……。

ツバサが望まぬ結果をもたらす存在が……。

この地上に現れたのだ。

そしてその者は、衝撃波という暴風の真ん中で静かに瞳を開く。

その戦闘の様子は衛星を用いてＷＡＸＡ関係者だけでなく全人類が見守る戦いとなっている。そして、後にこのノイズチェンジに名付けられた名は……『ロックマン・エンペラーノイズ』。

皇帝の名を持つ存在である。

第１５８話　エンペラーノイズ（後書き）

予定として次回で決着……かな？　戦闘描写の細かさによってはもっと伸びるかもしれないので今の所は分かりません。

セレナードとフォルテの案ですが、データ的な闇は消えるけど、ネビュラ・グレイによって強大となった精神的な闇は残り、その上いつまで生きられるか分からない。それが２人の『最良』です。……これでも生きられるという点では良い方ですからね。

それと、自分で名乗らせるのはなんだかな～って感じがしたので、今回はあえて『後日こういう呼び名になった～』という形にしました。

第１５９話　光と闇の――（前書き）

お待たせしました！　サブタイですが、今回は少し仕掛けをしています。どんな仕掛けかはまた今度～。オレの文の構成をよく読んでる人は気付くかもしれませんね。

第159話　光と闇の――

静かに目を開いたロックマンの目に映るのは、先程同様黒きモノ。
しかし、その背中から白い人型のモノが出ていた。

『生(は)えていた』と言ってもいいかもしれない。

下半身は黒きモノに飲み込まれ、上半身だけ出ている状態の何かだ。

スバルはそれが何かを一目見て察する。

「……この感じ……ツバサ……君？」

その白いモノは人型ではあるものの細部まで分かる物でもなく、普通の人には個人を特定するのは不可能だろう。
その上でスバルが分かったのは何の事は無い。

スバル自身の『視る能力(チカラ)』がここ数日で異常なまでに成長していたからだ。ツバサに裏切られた事で悩み、苦しみ、それを乗り越えた事が刺激となって、スバルの能力の成長を促したのである。

エンペラーノイズがノイズチェンジを起こした際にセレナードとフォルテの手によって巻き起こされたエネルギーの嵐。それにより

黒きモノは翻弄されて満足に立てもしない状態だ。

「……」

スバルは静かにその様子を見ている。

そんな中、セレナードがスバルに話しかけてきた。

『……セレナードノイズは言うなれば【光】。フォルテは【闇】を司ります。だから、この姿は【光】と【闇】を同時に体現する存在とも言える訳です』

「……光と闇を同時に……」

スバルは黒きモノに向けられている自分の意識をセレナードの言葉を反芻する事によって呼び戻し、彼の言葉に耳を傾け始める。

対するセレナードはスバルの反芻に対し、穏やかな態度で頷いた。

『えぇ。だから、この姿は人間の心に近い存在と言えるでしょう』

心の中に善意と悪意……光と闇を併せ持つのが人間。エンペラーノイズは、存在自体でそれを証明している。

自分のエゴに身を任せて必要以上に他者を傷つけるのが『人間』という生物なら、家族以外の同属（人間）に無償で優しさを送れるのもまた『人間』なのだ。

余談だが、人間に匹敵する知能を持つと言われる象も、群れの１頭が人間に殺されると、報復として人間の村に襲いに来るらしい。

『誰かのための無償の行動』とは、高度な知能を持つ者に許され

た特権なのかもしれない。

閑話休題。

セレナードは静かな口調のまま続ける。

『先程までは存在よりも現象に近い体という事で腕や足が千切れても再生しましたが、その能力も使えません。【人】として戦わなければならないのです』

光や闇などの『現象』と『存在』である人間は言うまでも無く違う存在。『存在』は無尽蔵に再生できる訳ではない。

それは一見、先程のセレナードノイズと比べてデメリットに思えるが、一時的に『再生による不死』を体験したスバルにとってそうは思えなかった。

限りが有り、失ったら戻らなくて、膳も悪も混濁する存在が人間。

しかし、そうでなければ生きる事に執着しようなどとは思うまい。

命に限りがあるから過去を悔やむ事も出来るし、そこから乗り越えて前に進む事も出来る。そして何より、『生きようとする事』が出来るのだ。

自分の命を軽んじて安易に投げ出してしまっては、何もかも終わりではないか。生きている限り終わりでは無いし、生きた年月と体

験が、そのままその人の力となり、価値となる。

そして、失う辛さが分かるからこそ、人はその『失う運命』に抗(あらが)える。そして、失ってもそこに自分なりの意味を見出して前進する事が出来るのが『人間』だ。

そしてそれこそが、人間の持つ強み。

故に、人として戦わなければならないと言われたスバルの返答は以下の通りである。

「……僕はそれで構わないと思ってる。上手く言えないけど、人は人のままでも十分に強いと思うんだ」

しかし、人には人であるが故の弱さや自己保身の欲がある。自分のみを護るために隣の者を蹴落とし、自分が上に上がる。その『弱さ』もまた、人間の一面。

だが、ここであえてもう一度『しかし』と言わせてもらおう。

しかし人間は、それらの事に対して憤り、どうにかできないかを感じる事が出来る。……考える事が出来る。

弱さを払拭できるかではなく、己が弱さに立ち向かえるかどうかが大事なのだ。

スバルはその強い想いの元、言葉を放つ。

「だから、僕は絶対に負けない。絶対にツバサ君と一緒に皆の所に帰るんだ！」

ゴゥッ！！

そのスバルの言葉に呼応するように、エンペラーノイズの電波の混じった風が吹き荒れる。エンペラーノイズの内側に納まりきらないエネルギーがロックマンの体を維持するために外側に放出されているのである。

その風は当然スバルが巻き起こしている物だが、セレナードとフォルテは余分なエネルギーのカットを終了してる。では、どこからそれだけのエネルギーが来たのか？

答えは簡単だ。

シャインＰＧＭである。

スバルの心の強さは全世界で戦う者達にも伝染。その強まったチカラが再び送り主であるスバルに返って来たのだ。

おそらく、各地で奔走している者（　ミソラやゴンタなどスバルを見知っている者以外　）には、自分の中にある心強さが誰から来て、その正体も分からないだろう。しかし、それでもそのチカラと心強さの『温かさ』が『誰かの物』というのは分かるはずだ。

強まったチカラというのは何もＳＦじみた不可解パワーではない。人が誰かから自分の存在や実力を認められる際に感じる『誰かの温情に対する温かさ』と、そこから生まれる『頑張ろうという気持ち』が【　強まったチカラ　】その物なのだ。

スバルの持つＰＧＭが媒体となって、そういった『人の心の温かさ』を集めているのである。

だが、それは黒きモノにとっても同じ事だったらしい。

『グルォォォォォ！！！』

黒きモノの雄叫び。それと共に禍々しい波長が空気を伝う。人としての大きさを保つスバルと反比例するように。

……人の心の奥底に潜む不安や恐怖、怒りなどのマイナス感情を糧としているのだ。

人の心の光が増えているのに何故？　と思うかもしれないが、自然界において、光が増えたから闇が減ったという事は有り得ない。光に照らされた物体の裏側に陰が出来るように、一方だけが強まり過ぎるという事は無いのだ。

ならば、今回の場合は人々は何にマイナス感情を抱いているのか？　これの答えはやや難しい。１つ１つ挙げていくと……。

本当に勝てるだろうかというほんの少しの『不安』。
実際にはぐれウィザードから被害に遭った人なら『憎しみ』を拭い切れる保証は無い。
その被害によって大事な人を失ったなら、『怒り』もあるだろう。

これだけ聞くと簡単に思えるが、これは奥底に潜む『マイナス』を具体的に推察したものだ。
実際には、ここまで自分の感情を観察して理解している奴なんてまずいない。一瞬の隙が命取りになる戦闘時ならなおさらだ。

その場合、自分の感情は自分で観察できないほど乱雑となり、その『分からない感情』がさらにその人の不安を駆り立てる。
不確定で先が読めない、正体が分からない……。『不安』や『恐怖』と呼ばれる感情は、『分からない』からこそ恐いと感じるのだ。

具体的なマイナスと抽象的なマイナス……。それらの組み合わせは個々で違うから一概に言えるものではない。故に答えが難しいのだ。

そして、黒きモノはその感情を糧として自身の力を上げる。目の前の光を叩き潰すために。

『グルゥオォオォオォ！！！』
「ッ！！」

黒きモノの手が伸びて行き、鋭く、薄くなる。その形状はソードだ。峰の無い、倒すべき者と護るべき者を選べぬ直剣だ。
そしてロックマンもまた、左腕から黒と金、２色の電波を伸ばして刀を形作る。『刃（は）』は倒すために。『峰（みね）』は護る（　殺さぬ　）ために。

ロックマンは光と闇……不安と希望……善と悪を併せ持つ人間の心を――。
黒きモノは対照的に不明瞭なモノ……。人の心の奥底に潜む不安や恐怖……。別な表現を付けるなら『這い寄る混沌』を――。

自らの存在を持って体現する。

「はあぁぁぁぁぁ！！」
『グォガァァァ！！！』

ロックマンから横薙ぎに――。
黒きモノから縦に――。

ガギィンッ！！

振るわれる剣という名の『チカラ』。互いの存在を賭けた『チカラ』。
それは鋭い音を伴いながらぶつかり合う。

黒きモノは全てを己が混沌に飲み込み、毀(こわ)すために。
スバルは人々の想いを背負い、人々の未来を繋げるために。

「ッ！！？　これって……っ！」

しかし、スバルは戦いの事と人々の心を受け止め、背負う事で自分の『チカラ』を忘れていた。……いや、【考慮に入れなかった】と言った方が正しい。

自分自身の、『ヒト』の抱えるモノが視えるというチカラを。

黒きモノのベースは『ヒト』である『ツバサ』なのだ。

ズギュゴゴゴゴゴッ！！

その音は記憶の雪崩がスバルに入っているのか、それともスバルの意識を記憶の世界に吸い込む音か。

……現実では一瞬にも満たない夢の中に……。

記憶という夢の中に……。

スバルは誘(いざな)われた。

第１５９話　光と闇の――（後書き）

今回は戦闘……とは言わないかもしれない戦いですね。次話で様々な秘密が明らかになります。

なお、象の他に鯨も人間に匹敵する頭脳を持っているとされています。何でも、人間で言う『思考』を司る大脳皮質という部分の大きさと複雑さが、人間と同じくらいなのだそうです。

……それと、次話は結構長くなるかもしれません。様々な記憶（秘密）の他に出来ればあの場面も書きたいですからね。何の場面かは秘密です。

それでは次回もお楽しみに！

第１６０話　記憶　１（前書き）

お待たせしました。酒の影響で頭が痛い最中本文を書いたのを覚えています（笑）。

今回の記憶はハリポタっぽいですかね。憂いの壺とか、リドルの日記とか。あんな感じで記憶を渡ります。

第１６０話　記憶　１

「……ここは……」

記憶や感情を読む事自体はセイリュウ戦の際に体験したが、場所ごと移る事は初めてだった。スバルはセイリュウ戦での経験上、その光景が刹那に見る夢のような……強いて言えばノイズチェンジの際に２００年前のナビと会話するようなものだとは察したが、目の前の光景に呆然としてしまった。

スバルの目の前にあるのは、３つの縦長長方形のサーバーだ。２つは向かい合うように。もう１つは正面に堂々と在る。

ウォーロックならこういう時、『なんだこりゃ』などと言いそうなものだが、彼が居ないようなので無理も無い。

ゴスッ

装置の物陰からした物音。スバルがそちらを向くと、見知った顔が頭を押さえながら装置の隙間から這い出てきた。どうやら頭を打ったらしい。

「……ツバサ君」

スバルの呟きは目の前の彼には届かず、宙を彷徨う。

「いってて……。あれ？　アイリスは？」

ツバサが問いかけたのは正面のサーバーだ。その声に呼応するように、ディスプレイにセレナードの姿が映る。

『貴方の容態が心配だと言って女将さんを呼びに行きました。……先程の４本の腕は、私から見ても異質でしたからね。それもその後倒れて、４時間近く目が覚めなかったんですよ？　貴方が目を覚ますまでそばに居て、目覚めたのを見てから女将を呼びに行ったんです。少しは心配する彼女の気持ちも考えたらどうです？』

「はは……。でもまぁ、４本腕のおかげでどうにかなったんだから良いじゃん。単純に考えてタイピングスピード2倍だからな。……おかげでデータを送る回線に大きな負担がかかって修理する羽目になったけど」

話の内容から考えて、カーネルをサーバーに入れたすぐ後の事だろう。そしてツバサは今まで修理をしていたというわけだ。

「っと――」

とはいえ彼の体は万全では無いらしく、立ち上がった瞬間にふらつく。

スバルはとっさに彼の体を支えようとツバサの胴体の辺りに腕を出すが、ツバサの体はスバルの腕を通り抜けた。

「ッ！」（もしかして、記憶の中だから干渉できないのか？）

スバルがそんな事を思い、セレナードが『大丈夫ですか？』とツバサに尋ねている時、スバルの背に怖気が走る。

そしてその怖気はツバサとセレナードも感じたらしく、周りを警戒し始めた。

「……なんだこの感じ……」

『……考えたく無いですが、私の識別が正しければ――』

ザザザ……バチッ！

セレナードの言葉の途中で部屋の隅の回線が爆ぜる。強大な容量を持つ存在が通ったためだ。

『――ネビュラ・グレイ』

ビーッ　ビーッ　ビーッ！

セレナードがその名を紡いだ瞬間、けたたましいアラームが鳴り響く。そのアラームはサーバーへの不法侵入を知らせるアラームだ。

『ツバサ、サーバーに入らないようにプロテクトを張ります。念のためにダミールートの作成も平行して進めましょう』

セレナードは迅速な判断の元にツバサに指示を出すが、ツバサは若干の戸惑いがあった。とはいえ手を休める事もせず、手を動かしながらセレナードに問う。

「それは良いけど、たしかネビュラグレイって熱斗おじさんのロックマンやブルース達に倒されたはずじゃあ……」

それはスバルも今までそう思っていたし、この頃のツバサもそう

いう認識だったらしい。しかし、セレナードはそれが間違いである事と、ネビュラ・グレイがこの場所に来た理由の推測も述べた

『ネビュラ・グレイは人の心の生み出した怪物。人が誰かの不幸を望み、憎み、怒る限り、ネビュラ・グレイは滅しません。……そしておそらく、他の者が保護されているのに自分だけ保護されないという事に嫉妬してサーバーに入ろうとしているのでしょう』

マイナス感情は憎しみや怒りなど他人に直接影響を及ぼす物だけではない。嫉妬もまた、立派なマイナス感情なのである。

「「んな理不尽な!!」」

当時のツバサとスバルのツッコミが重なる。

ツバサとセレナードは順調にキーボードを打っているかに思われたが、その状態はすぐに崩れる事となる。

「……くっ……眩暈が……」

ツバサが手を止めて目元を押さえた。おそらく、先程自身の体を変えた反動が来たのだろう。

『ツバサ!』

セレナードがツバサを気遣い声をかける。しかし、セレナード1人でネビュラ・グレイを相手取るには厳しかった。ダミールートは気付かれて潰され、ブロック用のウイルスも壊滅。

そして……。

ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！　警告します。サーバー内に進入しようとしている者にファイアーウォールＬｖ7まで解除されました。進入予想時間……残り２０秒です。

最後通告となるアラームと音声が流れる。残り２０秒でネビュラ・グレイはカーネル達のいるサーバーに進入。サーバー内のナビ達を吸収し尽くして自分の体の一部とするだろう。

『くっ……ここまで来て……』

セレナードが珍しく悔しさを表に出している。たった数秒だけで炎山や熱斗、たくさんの科学者の気持ちが無駄となるのだ。

一方ツバサは、朦朧とする状態の中そのアラームを聞いた。

「ッ！　……ッ！」

１回目の驚きはアラームに対して。２回目の驚きは視界に入ってきた『物』だ。試作として製作したサーバーと、サーバーにデータを送信する接続ケーブルである。

（このサーバーにネビュラ・グレイを転送して閉じ込めてしまえばっ！）

それはツバサの内心の思考だったはずだが、不思議とスバルの心にも響いてきた。どうやら当時その人が強く思った事は内心であろうと伝わってくるらしい。

ツバサは一心不乱にケーブルに手を伸ばし、ネビュラグレイが進入しようとしているサーバーと試作のサーバーのケーブルを繋げよ

うとしたが、長さが足りない。

（くっ！　……けど、さっき自分の体を変えたチカラを応用すれば……オレの体自体をケーブルにすれば……）

彼の機転と実行。そしてその結果は、次に彼がセレナードに命じた事で明らかとなる。

「ッ！　しゃぁ！　接続完了！　セレナード！　ネビュラグレイにどでかい直接攻撃を頼む！　試作サーバーにぶちこめ！」

彼は自身の体をケーブルの代わりとする事に成功。試作サーバーへのルートを作り出し、ネビュラ・グレイをそこに叩き入れるようにセレナードに言ったのだ。

『ッ！！』

セレナードはとっさに巨大な光球を作り、電脳内のネビュラ・グレイの目前に移動、全力で叩き込む。

『グゥォォォォォォ！！！』

直接的な抵抗があるとは思っていなかったらしく、ネビュラ・グレイは新しく出来たルート……試作サーバー行きのルートに飛ばされた。

しかし、その代償はツバサに現れる。

「ッ！！　あぁぁぁぁぁぁ！！」

突如絶叫するツバサ。ネビュラ・グレイは当然ケーブルの役目を果たしたツバサを通る訳だが、その際に彼と自分を繋げたのだ。激痛はその時の作用である。それは、ネビュラ・グレイからサーバーを護った代償だった。

ツバサはサーバーの者達を護るために、自らに『闇』を住まわせたのだ。

ザザッ

一瞬の内に風景は再び荒野に戻る。ロックマンと黒きモノの状態は先程と大差無い。

「ッ！」（やっぱりノイズチェンジの時同様、大して時間が経っていないんだ）

スバルが時間的状況を整理した時、黒きモノは第2撃を繰り出すべく剣を振り上げる。状況の整理で反応が一拍遅れたロックマンは護りに入り、刀を上に掲げて横に構える。

ギィンッ！

縦一線に振るわれた黒きモノの剣は横向きに構えられたロックマンの刀に阻まれる。

そしてその激突は再びスバルに記憶の夢を見せた。本気のチカラ

とチカラのぶつかり合いが、その夢を見るための条件らしい。

「……ここは……」

そこは今まで見た事が無い場所。建物の印象から見て、ギリドニア（作者の世界で言う所のギリシャ）の辺りだろう。いわゆる西洋建築というものだ。

部屋にあるのはイスや机、ベッドなどのシンプルな物しかない。

「？　誰かいる？」

スバルの視線に引っかかったのは窓のそばに置いてある大きなイスだった。赤い布地で高級感溢れるイスである。貴族が座りそうな豪華なイスだと考えれば良い。

スバルは座っている人物を確かめるためにイスのそばに向かおうとしたのだが……。

『ちょっと答えてよツバサ！！』

勝気な声と共にドアが焼き壊された事でスバルの視線はドアに向かった。

「あっ……」

思わず呆然としてしまった。そこにいたのはスザクだけではない。ゲンブやビャッコ、セイリュウ。四神揃い踏みだ。

そうなると必然的にイスに座っている人物は……。

「何を答えろと？」

スバルの斜め下の角度からツバサの声が響く。穏やかで静かな声だ。

『決まってんでしょ！』

『オレらの記憶を――』

『消す事に関してじゃ』

『……そして何より、何故その後貴方と戦わないといけないのです』

スザク、ビャッコ、ゲンブ、セイリュウの順でツバサに文句を言いながら彼の前に移動する。ゲンブがスバルを通り抜けたのだが、やはり向こうにスバルの存在は認識されないらしい。

記憶を消す真意、そしてその後ツバサと戦わなければならない事にスザク達は怒っている。対するツバサはフッと微かな笑みを作って４人をしっかりと見据える。

「お前らで無いと頼めない事があるから。……それはこの間話しただろう？」

『しかしっ！』

なおも食い下がろうとするセイリュウをツバサは手の平をセイリュウに向ける事で制し、話を続ける。

「それに、記憶を消しとかないとお前らはオレと本気で戦わない。……お前ら、正直すぎるからな」

『笑い事じゃない！！　……あんたはあたし等がどれだけあんたを慕っているかを知ってて……その上で……』

最後にイタズラっぽい笑みを作ったツバサにスザクは怒鳴りつけ、強気な声は徐々に弱くなり、泣きそうで、消え入りそうな声となっ

て、最後にはスバルにも聞こえなくなってしまった。

「……もちろんお前達の気持ちは分かってるよ。……スザク、ゲンブ、ビャッコ、セイリュウ」

だが、ツバサにはしっかり聞こえていたらしい。彼はあえて４人の名前を言い、今の彼が決して見せないような、穏やかで優しげな笑みを浮かべる。

「けど、分かっているだろう？　お前達は死ぬ訳じゃない。単に戻るだけだ。……新しいパートナーとオレより強い信頼感で結ばれれば、互いを想い合っていれば、その人との記憶もそのままに甦る事が出来るだろう。……そうすれば、またこうして話せるさ」

スバルには『戻る』という意味がよく分からなかったが、スザクが甦った理由の一端に触れた気がした。

人間と親しくなり、役目を放棄しても文句は言わず、今この時のように話し合える。ツバサはそうして四神達を宥めようとしたのだろうが、スザクには大して効果がなかったらしい。

『あんたより良いパートナーなんて居る訳無いじゃない！！　私は……うーん。私もビャッコもゲンブじーちゃんもセイリュウも、あんたの事を――』

「スザク」

スザクの叫びを遮るツバサの声は、先程と変わらず穏やかで優しげだ。そのままの口調で、彼は続ける。

「……オレもお前等の事を愛してる。創った者としてな。……でも、未来を変えるにはこれしかないんだ。……ゴメンな」

ツバサは平手を四神の方に向ける。直後、四神の足元に中心に太陽。脇には月の描かれた魔方陣が現れ、光を発する。スザク達はその陣から逃げようとしたが動き出そうとした時にはすでに4体が倒れている状態だった。

意識が掠れ行く中、スザクはツバサの言葉を聞いた。
彼は四神を順番に撫でながら言っている。

「……許してくれなんて言う気は無い。……せめて、良い人と出逢ってくれ。……その時その人と親しくなりやすいように、感情は残しておく。……それじゃあ、おやすみ」

ツバサが記憶を消したのは自分の目的のため。そして感情を残したのは人間と親しくなる余地を残すためだった。

ザッ

風景は、再び荒々とした大地に変わり、スバルは現世（うつしよ）に戻された。

第１６０話　記憶　１（後書き）

ギリドニアは前にクイックロッドさんに頼まれて考えた地名です。……なんだかあの記憶はカードキャプターさくらのあのシーンに似ているような……（従者と主人の会話）。

ちなみに現世（うつしよ）というのは文字通り現世（げんせ）の事です。対義語が常世（とこよ）。エルドラドや竜宮城、シャンバラ、桃源郷（↑メジャーな物を挙げてみました）。そういった、いわばこの世と違う異世界です。

第１６１話　記憶　２（前書き）

修正点

・次の話の話を一部組み込む。

今後を読む分には大きな修正点は無いので読み返す必要は薄いですが、スバルが感じたズキッという痛みを無くしました。

第１６１話　記憶　２

ロックマンは上から下に加えられる力に対し、刀を斜めにして剣を滑らせる。そして刀が剣と離れた瞬間に黒きモノの横に移動。ロックマンの刀は真横に振るわれ、黒きモノの肋骨の下辺り目掛けて切っ先が襲い掛かる。

ギシッ

しかし刀は黒きモノの体に届く事は無かった。腹部を膨らませて防壁を作り、それで刀を防いだのだ。

「ッ！」

ロックマンは防がれた事でわずかに怯み、怯んだ隙を消すべくとっさに数メートル後ろに跳ぶ。いったん距離を取る事で狂ったテンポを立て直すためだ。

しかもそれだけでは終わらない。着地した時の反動を利用し、ロックマンはネビュラ・グレイに向かって地面と平行に跳躍する。刀は真っ直ぐに、切っ先を黒きモノの腹部に向けて。

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

『ッ！！』

ギィンッ！

黒きモノはとっさに縦に構え、剣の側面の広い所（　剣の腹　）で受け止める。

ザザッ……

「……今度は……どこだろう？」

スバルは記憶の世界に来るのに慣れてきたらしく、反応が冷静になってきた。

「……出て行く前に１つだけ聞いておきたい」

その声はハイドの物だ。声のした方を見ると、ハイドとツバサが窓のそばに立って話している。彼らの表情は月の逆行のせいで見えない。

ツバサとハイドはいくつかの言葉を交わした後、夜空に視線を移して『名』を挙げ始めた。

「……リーグ、サルト、テム、オズ、チャーリー、――」

ツバサはこの後も『名』を挙げ続け、スバルもハイドは最初その名前がどういう意味を持つのか見当も付かなかった。しかし、次の名が出された時、ある推測が浮かび上がる。

「炎牙、氷牙、オリオン、クラウド、ティグレス、――」

「ッ！？　ちょ、ちょっと待ってくれ」

「なんだ？　ハイド」

ツバサは名を挙げるのを中断してハイドを見る。その表情はスバルたちが接していた頃より少しだけ険しくなっていた気がする。

ハイドは若干の躊躇いを見せながら自身の推測の確認を取る。ありえない推測だからだ。

「……お前はまさか……オリオンやクラウドのような主力となる者だけでなく、はぐれウィザードの名前を――」

「あぁ。……１４万１千５４１体……オレの下に集まった奴らの事は全部頭に入ってる。あいつらが未来で災いを起こす者達だとしても、オレの計画に巻き込むようなものだからな。あいつらの存在を全て背負うのは指導者の務めだ。……あいつらだけに押し付けるなんて事はしねぇよ」

つっかえつっかえで尋ねるハイドにじれったさを感じたのか、彼の内心を察したツバサは答えを言う。

はぐれウィザードもオリオン達の事も、ファイブ・エレメントという組織に集った者は誰であろうと記憶し、背負うと。

「「……」」

スバルとハイドの沈黙が重なる。１４万１千５４１体もの同士を全て記憶し、背負っている事実に圧倒されて言葉が出ないのだ。

しかしツバサはハイドの沈黙を別の者だと考えたのか、ふっと微笑みながら拳のウラでハイドの胸をトンッと軽く叩く。親友に「しっかりしろ」とでも言うような親しさが、そこにはあった。

「まさかとは思うが、自分はその中に入ってないんじゃないかって思ってんのか？　残念だったな。しっかり入ってるぜ、ハイド。お

前に頼んだ事が終わったから組織を抜けても良いが、背負うのは変わらない」

「ッ！　……」

ハイドは少し考え込み、静かにドアの方に歩いていく。やがて意を決したようにツバサと目を合わせる。

「……なるほど。貴様の考えは分かった」

おそらくハイドは、本当の意味で背負ってくれる人間に出逢えたからこそ今この時、ツバサに付いていく事にしたのだろう。

ザザッ

再び視界は黒きモノとの一騎打ちに戻る。突然すぎたためスバルは怯んでしまったが、急いで状況を整理して態勢を立て直す。

（今僕はこいつを突こうとして剣の腹で防がれた。だったらっ！）

黒きモノに正面を向けた状態から空中で９０度右にターン。着地して踏ん張りと体重移動による攻撃力の増加が出来る状態になってから刀を振るう。軌道は横薙ぎ。内側から外側に振るわれた。

ズバッ！

鋭い斬撃音。黒きモノも回避行動には出たが避けきれず、胸に一

筋の裂傷が出来た。黒きモノはそれにより一瞬だけ動きが止まったが、それは傷が再生するまでだった。つまり、瞬時のうちに傷は再生。剣を振りかぶり、上から下へ真っ直ぐにロックマンに振り下ろした。

「ッ！　うわっ！？」

ガギンッ！

スバル自身手応えのある攻撃だったため黒きモノが大した時間無しに追撃してきた事に驚いたが、そこは経験とバトルセンスの賜物か、とっさに体が動いて横向きに刃の部分で受け止める。

そしてこの後はお約束……。

「……今度は……あ、ツバサ君の部屋か」

おまけを言えば本人も居る。その手には黒い長方形の物があった。ここからはツバサの内心の声。

（……ダークチップ。使用者の闇を増大させる禁断のチップ。……それも現存するダークチップを全てこれ1枚にぶち込んだ特別製。……これを使えば元には戻れないだろうな……）

「……何でそんな物を……」

思わず言葉に出して尋ねたスバル。無論その声はツバサには聞こえず、彼の心の中での声は続く。

（……マユはこれから自分の目標のために精一杯頑張るだろうから邪魔しないようにしないとな。……ベガの世界では十中八九ギャラクシーが厄介事を起こし、そのせいで人生を捻じ曲げられた人も多いだろう。そんな所にさらに厄介事を背負わせる訳にはいかない）

スバルにとってマユという子は分からなかったが、ベガとはバルズランドにてギャラクシーと戦った際、共闘した者の名だ。

（……その他の世界でも、それぞれの世界で頑張ってる奴らがいるんだろうな。……他の世界にこっちの世界の面倒事を背負わせないために侑子に対価を支払ったから、他の世界の事に関して思い残す事は無い。……後は……オレの方だけだ）

ツバサは静かに息を吐くと、意を決した目でダークチップを強く握り締める。

「ぐっ……ぁ……」

堪えるような悲鳴。万が一にも外に声が聞こえないようにしている。ツバサは他の世界のためにも自分を犠牲にしていた。

ザザッ

現世（うつしよ）に戻ると再び黒きモノが剣を振り上げている状態。このままでは第2撃を受け止める事となると判断したロックマンはサイドステップで横に退避。さらに刀を自分の脇に構える。切っ先は前方の黒きモノに向けられているため、この後の攻撃はおのずと決まって

くる。

ビュッ！

鋭く風を切る音。一直線に突かれた刀の切っ先は黒きモノの心臓の位置を捉える。急所に一撃加えた事でさすがにスバルもツバサの身を案じたが、それは無用の心配だったらしい。

『グッ！　ガアアァァァァ！！』

黒きモノは一瞬怯んだがすぐに剣を振ってくる。軌道はめちゃくちゃ。がむしゃらに剣を振って早くロックマンを離れさせたいようだ。刀が抜けなければ怪我の修復も出来ないだろう。

「ッ！　くっ！」

突き刺した状態では動きが制限されるため攻撃を避けづらくなる。ロックマンは次第に追い込まれ、後ろに大きく跳ぶ事で回避せざるをえなかった。

黒きモノの傷は目に見えて回復していく。戦況は再びリセットされたというわけだ。

「ふぅ」

息を吐く事でスバルは気持ちを切り替える。とはいえ、肉体的疲労が溜まりつつあるのは明々白々な訳だが……。そんなスバルに心配そうに話しかけてきたのはウォーロックだ。

『……おい、疲れてるみたいだが大丈夫か？』
「うん。……なんとか。ウォーロック、ハンターから出ないでね。僕でもあいつの動きに互角なのがやっとなんだから」
『……分かった』《悔しいが、オレが出て行ってもスバルの足手纏いになるだけだな……》

ウォーロックが了承したのを確認した（　おまけを言えばその時のウォーロックの心情も察して一言謝った　）スバルは、この際だからといった理由でセレナードに問う。今までは相手の攻撃の対処に追われて聞けなかったが、これだけは聞きたかった。

「……ねぇセレナード。セレナードはツバサ君がエーテルだって知ってて、もしかしたら彼の目的も――」
『来ます』
「ッ！！」

黒きモノは真っ直ぐにロックマンに突っ込んでくる。距離は意識を向けた頃には約7メートル。黒きモノの剣は突きの構え。

ギィンッ！！

コンマ4秒後、剣の一撃をロックマンは刀の腹で受け止める。こんな高速バトル、電波体単体はもちろん、並の電波人間に付いて来られる訳が無い。ウォーロックが加勢を断念したのはそのためである。

《……くそ、オレが居ながらスバルに何にも出来ないなんて……》

それはウォーロックが地球に来て初めて味わう感覚だった。アンドロメダやラ・ムーとの戦いの際、ミソラやルナ、ゴンタやキザマロが味わう感覚。大事な人が危険な場所に行くのに自分に何も出来ない悔しさや無力感。

彼がスバルの事でその感情を覚えたのはこれが初めてだっただろう。

第１６１話　記憶　２（後書き）

次の話は途中から思いっきり違います。読み直した方が良いです。
っていうか、決着です。

第１６２話　――双翼（前書き）

いやはや、投稿直前に付け足す所が出来て書いてました。

追加点はローグの暗示を解いた所からです。

第１６２話　――双翼

ザザッ

「……ここはさっきの……」

スバルの呟き。

ドアは静かに閉められ、ツバサはそのドアの向こうに居るハイドに礼を言い、首と視線をスバルに……いや、正確に言えば部屋の暗がりに向ける。

どうやら先程見た記憶のすぐ後らしい。

「で、いい加減出てきたらどうだ？　……アイリス」

『……やっぱり気付いていたのね』

アイリスはポツリとそう言うと、月光の元に現れる。

（ツバサ君が僕達の元から離れてからだから……ッ。アイリスがカーネルの事を話した後か）

スバルはいつの頃かを特定したが、同時に申し訳なく思った。アイリスがツバサの正体を知っている事を気付いたのがウォーロックだとしても、彼女が自分達の下にいられなくしてしまったのは自分達だ。

アイリスが口を開いた時、スバルは彼女の言葉に耳を傾ける。

（そうだ。ここで悩んでても仕方が無い。……今は知らなきゃ。……全てを）

悩み、後悔する間にも時間は過ぎる。その中で出来る事が限られるのなら、開き直ってでも進むしか無いだろう。

『……聞かせて欲しい事があるの。……昼間の戦いであなたの姿が黒かったのは、ダークチップの影響？』

「何でそう思う？」

『……あなた自身の心が闇に侵食されたなら、エーテルの状態になった時に体が黒くなってもおかしく無いと思ったから。……あの姿は、貴方の心の色を映すから』

「……」

黙るツバサにアイリスはさらに続ける。

『もしそうなら、あなたは私を護るために……』

ツバサはアイリスの推測を肯定も否定もせず、別の話題を出す。

「……なんでここにいる？　スバル達は」

その言葉でスバルだけでなく、アイリスの表情は曇る。アイリスは静かで、それでもどこか寂しそうな声で答えた。

『……貴方がエーテルだと私が知っている事がウォーロックに知られて……』

「はぁ。……あの単細胞バカ。……ゲイルは何やってんだ」

ツバサはイラ付いたようすのため息を付き、そのイライラはゲイ

ルに飛び火する。

（？　何でゲイルさんなんだろう？）

スバルはその事で首を傾げたが、その疑問はアイリスの推測によって解決する。

『……もしかして、ゲイルさんにも私の事を？　ダークチップの件で私を護れなかった時のために……』

「……はぁ～。はいはい、その通りですよ。悪いか？」

とうとうツバサが根負けした。彼は諦めたといった風に手の平を外側に払うように振り、若干イライラしたため息を付きながらアイリスの推測を肯定する。

つまり、アイリスの知らない要素を見せる事で彼女をスバル達の前で動揺させ、「あそこで驚いたという事は彼女はツバサの正体を知らなかった。それはつまり味方」という認識を持たせて彼女の身の上を確保。それに万が一失敗してもゲイルが場を濁す事で彼女を護りきるという二段構えだったわけだ。

ダークチップはアイリスのための措置だったのである。

一方のアイリスは『悪いに決まってる』と言いたげな表情でツバサを見つめ続け、ツバサは精神的に追い込まれているのがスバルにも伝わってくる。

（……アイリス、ちょっと恐い……）

スバルが恐怖で口元を引きつらせている時、部屋の隅から物音が聞こえてきた。

「むっ！？　むー！　むー！」

前言撤回。人だ。

『……誰？』

アイリスの警戒する声。ツバサはアイリスの気が逸れた事で安心したらしく、気持ちは一転、気軽な調子でアイリスのおでこを指でつつく。

「アーノルド・ローグ。……目的のためにもお偉いさんを攫っとくのは無利益じゃねぇんでな。今まで気絶してもらってたんだが、目が覚めたみたいだ」

『……』

突然おでこを突かれた事で若干不機嫌に戻ったアイリスの視線から逃げるように、ツバサはアーノルド・ローグに近づく。

スバルはアイリスに同情の眼差しを送りながらもツバサに付いて行く。

「……うわぁ……」

今度はアーノルド・ローグに同情してしまった。今の彼は両足を縛られてさらにイスの足に括り付けられ、腕はイスの背もたれの裏で縛られている。さらに口はガムテープのような物で塞がれていると言った様に、映画などでよく見るような拘束状態だ。

ツバサはそんな状態の初老の大統領に容赦無く上から眺める。

「お目覚めの気分はどうですか？　大統領」

ローグがツバサを睨んでいる所から考えて、「良いわけあるか」と思っている事は明々白々だ。

ツバサはその表情を見て満足げな表情を浮かべながら静かにローグの額に手を置く。

「……やっぱり、飛王・リードから暗示がかけられているな。……あんたが何であんな奴に協力しているかは大体察しが付く。……大事な人を生き返らせるためだろ？」

「ッ！！　……」

ローグの目は大きく見開いた後、その目をツバサから逸らす。それは図星の証。

「……たくさんの存在を犠牲にした上での蘇生……。そんな命を、本人が許せると思うのか？　……あんたが好きになった人は、傷付いた人を踏みにじっても平気な顔をしていられるような小さい人間なのか？」

「ッ！！　～～～～ッ！！」

口が塞がれていても彼の言いたい事は伝わってくる。「彼女はそんな人間ではない！　侮蔑する事は許さない！」と。彼の怒りを、ツバサは言葉を吐いた者として肌で感じているはずだ。

しかし、ツバサはローグの反応を見て口に笑みを浮かべる。

「ふっ。……だったら嫌でもその事実を背負って生きろ。あんたの好きな人があんたを見て悲しまないように。……飛王にかけられた暗示の他にアイツに関する記憶も消しておく。……もう二度とアイツに関わらないようにな。ついでに、全部が終わるまで寝てろ」

ローグの目は静かに閉じられていく。ロックマンが戦場でエーテルと対面した時、ローグが動かなかったのは記憶の消去と暗示の解除のついでに眠らされていたからだったらしい。

『……どんな暗示だったの？　そもそも、彼は偶然ニホンに居ただけじゃあ――』

「偶然じゃない。飛王ならオレを確実に追い詰めるために外側から埋めるだろうからいずれニホンＷＡＸＡ支部に来る事は予測してたし。……暗示は人を自分のする操り人形にするタイプのものみたいだな」

『けど、さっきの目はあの人の本心に思えた』

アイリスが言っているのはローグが大事な人の事を傷付けられたと感じた時だろう。その時の眼差しの力強さは暗示をかけられているそれでは無い。

対するツバサは当然だという顔で頷いた。その顔はどこか機嫌が良さ気である。

「あぁ、アレはご立派な本心だな。感情の昂ぶりで暗示を跳ね除けやがった。さっすが一国を背負うだけはある」

ここでツバサは思い出したように話題を変える。

「あぁそうだ。そろそろ巡回が通るだろうからそろそろここから離れろ。……ちゃんと雨風を凌げる所で休むんだろうな？」

『えぇ。……夏休みにライラさんが、いつでも自分の所に来て、居

たいだけ居て良いって言ってくれたから。……ゲイルさんに内緒で』

ツバサはアイリスの嬉しそうな表情から2人の信頼度を読み取ったのか、口元に小さな笑みを浮かべる。

「そっか。……良かったな。良い友人が出来て」

『……うん』

アイリスも微笑み返し、部屋から去るために窓のそばに歩いて行く。そこから電波化してライラの元に向かうのだろう。しかし、不意に足を止めてツバサの方を振り返る。

『……最後に1つ聞いて良い？』

「ん？」

『今まで聞けなかったし……これからは聞けないと思うから……』

「だから早く聞けって」

ツバサの顔が物語っている。「前置きが長い。見張りが来たらどうするんだ」と。……まぁ、ネビュラ・グレイの影響で多少攻撃的（短気）になっている事も考えられるが……。

アイリスはその睨みに多少たじろぎながら頷く。

『う、うん。……じゃあ聞くけど、何でスバルさん達のそばにいたの？　ＰＧＭを暁さんに持たせて堂々と敵として現れるという選択肢もあったはずなのに』

たしかにそれはその通りだ。わざわざ近づいて裏切ってなんて回りくどいマネをしなくても最初から敵であった方が構図的には分かりやすい。

ツバサは「たしかに今更だな」と苦笑しながらもそれに答える。

「ネビュラＰＧＭとシャインＰＧＭ。２つのＰＧＭが互いのチカラを抑えているからこそ大きな力を制御できる。もしネビュラＰＧＭを持つオレがそばに居なかったら、ノイズチェンジはすさまじく強くなる。だがその分、大きすぎる力が周囲に無駄な被害を出し、結果出る必要の無い犠牲を出すかもしれない。……そうなったら、スバルが悲しむだろ？　自分がこの人達を傷つけてしまった～って」

研究所で放ったカーネルノイズのＮＦＢ、アヴァランチ・オブ・ディバイドは凄まじい破壊力だった。もし今までの戦闘の度にあの破壊力が放たれたなら、ツバサの言う通り巻き込まれた者も出てくるだろう。もしも巻き込まれた人が大怪我や致命傷を受けたなら、スバルは自分の力の強さを呪い、塞ぎこむ事が考えられたのだ。

（……ベガ君やアストロ君のような他の世界の人やスザク達……そして僕達のために……）

スバルがその事を理解した時、ツバサは不意に楽しそうな笑みを浮かべる。

「それに、そばで見守りたかったというのもあるしな。だってアイツは……星河家は――」

ザザッ

ツバサの言葉の途中だったが、再びロックマンは現世（うつしよ）に戻される。

『ガァァァァ！！』

及び自分に襲い来る黒き獣。

「ッ！」

黒き獣の剣は突きの軌道。ロックマンは左腕の刀を解除。剣の根元（手首の辺り）と肘の辺りを掴む。

「でぇっや！」

そして直進する相手の力を利用してその方向そのままに放り投げた。

ガァンッ！

黒きモノは宙を舞い、大吾とケフェウスの張ったバリアに激突。黒き獣は呻き声を上げて前に倒れこんだ。

『ガ……グゥ……』

ドサッ……

『倒した……のか？』

その気配をハンターの中から感じたウォーロックは現実味を帯びない声で事実を確認する。斬っても貫いても死なないような存在相

手に戦っていて突然倒したとしても、すぐにはその現実を信じる事は出来ないだろう。
だが、スバルはその現実を打ち砕く。勝ったという現実を。

「……まだだよ。今は倒れているけど、いずれまた復活する。その前にツバサ君とネビュラ・グレイを分離しなきゃ」

彼の中にある者がネビュラ・グレイである事は先程の夢で確信した。ならば、やる事は1つではないか。

『オレがゲットアビリティプログラムを発動している間、お前に大きな力を送る事は出来ない。力を借りるならセレナードを当てにするんだな』
『そういう事です。……さぁ、行きましょうか。スバルさん』
「はいっ！」
『……オレ、もしかして出番無し？　役立たず？』
『そんな事は無いですよ、ウォーロック。ロックマンという基本状態を維持しなければエンペラーノイズも成り立ちませんから』

スバルはウォーロックとセレナードの問答を聞きながら苦笑いを浮かべる。

（……ウォーロック、うまく乗せられてるよ？）

『グルルルル……』

黒き獣は恨みを込めたうめき声を上げながら立ち上がる。その唸り声にセレナードとウォーロックは緩んだ空気を引き締め、フォルテもまたスバルに話しかけてくる。

『……これが最後の攻撃だ。生き残りたかったら精々気を引き締めろ』

「うん」

スバルの短い返事。その短い言葉に宿る意志の強さは、フォルテに「強者と戦いたい」という昔の渇きを与えるほどだった。そのフォルテの放つ獰猛な気を察してか、セレナードはフォルテに釘を刺す。

『……フォルテ』

『……ふん。分かっている』

一方、スバルは左手にセレナードの力を極限まで圧縮していた。

「はぁぁぁぁ……」

ロックマンの拳は金色に輝き、なおもそのチカラを上げ続ける。

「ッ！　……向こうも次の攻撃で決める気みたいだね」

スバルが視線を黒きモノの方に向けると、そちらは右手にチカラを貯めている。拳は真っ黒な球状だ。

……　ダッ！

互いに踏み出すタイミングを見極め、駆け出す。

ズゴゴゴゴゴゴッ！！！

２人の距離が数十メートル離れていたにも関わらず、激突したのは駆け出した直後。そのスピードだけでも驚きだが、それ以上の驚きはその威力と神々しさだ。

威力は大吾とケフェウスの張った強靭なバリアを揺るがすだけの破壊力。そして神々しさはそのぶつかり合いで生じた現象に対してだ。

金色の光と暗黒のチカラのぶつかり合い。その真正面からのぶつかり合いにより、金色と黒のチカラは後方に弾かれる。２色のチカラは上部に行けば行くほど長く伸ばし、下に行けば短くなる。

それはまるで、光と闇の双翼のようだ。

オオオオオ……

攻撃の余波もその影響を鎮めつつあり、戦闘の終焉を思わせる。

『ウォーロックは……スバルは……』

ケフェウスは目を閉じ、油断無くバリアを維持しながら煙幕の中から２人の波長を感知しようとする。

『ッ！！　……そんな……バカな……』

ケフェウスの信じられないという呟き。それは絶望の響き。
煙幕の中心でウォーロックがその名を呼んでいる。ケフェウスは自分の識別に間違いが無い事を悟り、膝を突いた。

『……スバルが……消えた……』

爆発の中心に立っていたのは、実体化したウォーロックと、小さい映像という形でウォーロックの肩に乗っているセレナードとフォルテだけだった。
スバルもツバサも、消えてしまった。

――――シャーロ――――

『……シドウ、星河スバルの件ですが……』
「ん？　……まさか負けたわけじゃないよな……？」

シャーロ地区の黒い鴉は一掃した。各地でも一掃したという知らせが相次ぎ、残る大きな問題はスバルとツバサの戦いだけとなっていた状態だった。

そしてアシッドの口調は勝った時のそれではない。暗くて、現実を信じられないような絶望の声だ。
しかし、負けたという結果すらアシッドは否定する。

『いいえ。……衛星から電波識別を行ってどっちが生き残っているかを常時見ていたのですが、２人とも反応が消滅しました』
「……２人とも、この世から消えたって事か……？」

『……結果から見るに、そうなります……』

アシッドは正直すぎる性格だ。だから嘘は付けない。彼の言う事が本当だとすれば、本当にスバルとツバサは……。

「くそっ！　アシッド、スバルが戦った所に行こう！　何か分かるかもしれない！」

消え去ったという現実を拭い去るため、暁はウェーブロードに飛び乗ってアメロッパに向かう。

『……シドウ。もう1つ良いですか？』

「何だこんな時に」

そんな中、アシッドがもう1つ悪いニュースを伝える。暁はそれにより、絶対に止まるまいと決めていた足を止める事になった。

『……スバルとツバサだけでなく、亀山　黒蓮、赤羽　ソラ、ゲイル・ホワイト、藍川　龍、そしてアイリス……。以下5名の消失も確認しました』

「ッ！！　彼らもか……」

暁は止めていた足を再び動かす。早く現地に行き、事の詳細を知るために。

第１６２話　――双翼（後書き）

なおサブタイですが、１５９話の『光と闇の――』に繋げると『光と闇の双翼』になります。オレが文の最後に『――』を付けるのは、後に何か言葉が続く時ですからね。

金色と黒の巨大な双翼……初期の頃から書いてみたかったんですよね～あの描写♪

次の１話で最後のピースが埋まります。ツバサが周りのためにというのは書きましたが、その発端は書いてませんからね。

さてさて、消えてしまった６人はどこに行き、何を選ぶんでしょうね～。

なお、ＣＬＡＭＰ作品から最低でも１作品と絡ませます。もしかしたら２作品と絡ませるかもしれません。

第１６３話　真相（前書き）

お待たせしました。計画の全貌を書いてたら改行等を含んで８千字以上に……。携帯で読んでいる方には大変でしょうが、何とか頑張って読んでください。

……ズラッと文章が並んでいる点はご容赦願いたい。

第１６３話　真相

「……うっ……ここは……」

激突の際、スバルの視界は真っ白に包まれた。気が付いたら今居る場所にいる。気を失ったのかどうかは分からないが、その際の記憶は綺麗に抜け落ちていた。そして、いまスバルが居るのは一面真っ白な空間で現実味が全く無い。なお、電波変換が解除されている上にウォーロックもいない。

スバルが目の前の光景と自分の記憶の整理をしている時、彼に声をかける者がいた。

「あっちとこっちの境って所かな。記憶の方は激突のショックでぶっ飛んだんだろ」

「その声、ツバサ君！　そっちは大丈……夫……」

スバルは声のした方を振り向きながらツバサの身を案じるが、今の彼は大丈夫とは言い難い状況だった。

「あぁ、激突のショックで右腕が無くなった事を除いて大丈夫」

いつもの皮肉で飄々とした言い様。だがそれは冗談では決してなく、彼の右腕は肩から先が無くなっていた。

「……」

スバルが失った右腕をじっと見ている事に気付いたツバサはスバルに近づきながら口を開く。

「あぁ、これ？　あの激突にデューオの膜が耐えられず、腕ごと持っていかれたみたいだな。まぁ、すぐに塞がるようにしてたみたいだけど」
「へぇ～。デューオなりのツバサ君への気持ちなのかな？」
「あの堅物が？　……まぁ、それは良いとして」

ガシッ

友人（ツバサ）との親しい会話。それはずいぶん久しぶりに感じる。だが、その友人はスバルの希望に添う事は無かった。ツバサはスバルの襟首を掴み、静かな目でスバルを見ている。

「……ツバサ君？」
「お前は帰れ」
「何を、だったらキミも一緒に……ッ！　これって……」

ツバサに掴まれている部分から何かがなだれ込んでくる感覚。今まで味わった事の無い感覚を前にスバルが戸惑っている中、ツバサはいま自分達がいる世界の事を話す。

「……たぶんだがな、この世界はあの世とこの世の境みたいなもんだと思う。……次元と次元の狭間と似てはいるがな。だからこそ、ウォーロックみたいな純粋な電波体は入ってこれない。」

彼の言葉が「たぶん」や「思う」という不確定な言葉なのは彼自身も初めての体験だからだろう。そして彼は平坦な口調で続けた。

「そんで、今の俺らは攻撃の衝撃で不確かな存在となってしまった。……生命力というか肉体というか……そいつを構成する要素がほとんど対消滅に近い反応で消え去ったみたいだな。元々の完全な人間の状態を1だとすると、今の俺らは0．4が良い所。……6割くらい行けば元の世界に戻れるだろう」

吹き飛んだ割合や今の自分達の状態をツバサが分かるのは、自分の命を使うたびにそれをひしひしと感じていたからだろう。

スバルはツバサから聞いた少々回りくどい話を自分なりに咀嚼して要約する。

「それじゃあ今僕になだれ込んでいるのはキミの命というかそういうもので……」

スバルはここで気付いてしまった。0．4が2つ。それはどう考えても2人分の半分以上にはならない。

「ちょっと待って！　それじゃあキミはっ！」

「……はい、これは夢です。お前の敵であるオレがお前を助けるために行動するわけ無い。イコール夢だ。そんなわけで現実世界に帰れ」

この期に及んでまだ言うか。

スバルはツバサの手を強制的に離そうと彼の手に自分の手を伸ばすが、スバルがツバサの手に触れる前に、別の者の手がスバルの襟首からツバサの手を引き剥がした。

その人物とは……。

「ッ！　アイリス！」

『……間に合った』

スバルの驚きとアイリスのホッとした声。一方のツバサは完全に予想外といった様子で目を見開いている。

「……どうして……ネットナビを始めとした電波体はここには入って来れないはずなのに……」

『……侑子さんにお願いしたの。ツバサが消える直前、ツバサがいる所に行って、あなたを元の世界に戻すって』

ツバサが知らないのは無理も無い。彼女がこの空間に入ってこれたのは次元の魔女に願った事だからだ。その事を、ツバサは知らなかった。

スバルはツバサを元の世界に戻すための説得役としての心強さを感じていたようだが、ツバサのリアクションは意外だった。反抗するわけでも、強引にスバルを元の世界に戻すためでもない。ただ、蒼白になってアイリスを見ている。

なお、アイリスはツバサがスバルに触れない事を察して彼の手から自分の手を離した。

「……何を対価にした」

『……』

ガシッ！

「ちょ！　ツバサ君！」

ツバサがアイリスの胸倉を乱暴に掴み、それをスバルが止めに入る。スバルがツバサの手を離させようと力を込めている時、ツバサ

は再度アイリスに問う。

「……答えろ。何を対価にした」

『……あなたを助けた後、あなたのそばで生き、死んだら私も消えるように……』

彼女はここでやっと口を開いた。ツバサとの目を逸らす事無く。

だが、これを聞いたスバルとツバサの反応は再び分かれる事となった。

「えっと……ツバサ君が死んだらアイリスも消えるって言うのはどうかと思うけど、それ以外だったら良いんじゃ――」

「良い訳ない！」

ツバサはスバルの言葉を強い口調で遮る。

スバルはアイリスが侑子に願った事に対する驚きが少なからずあったが、それがツバサのためというのが伝わったため素直に納得した。

しかし、それに対しツバサの目には怒りさえあった。

「……アイリス、それが何を意味するか分かっているのか？」

『……』

アイリスはここで初めてツバサと目を逸らした。彼女には意味が分かっているようだが、スバルにとっては見当も付かない。誰かを助ける事の何が悪いのだ。

「僕には分からないよ。……アイリスはキミのために行動したんで

しょ？　だったらそれに怒るのはアイリスが可哀想だよ」

ツバサはその言葉で苛立ちを露にした目をスバルに送る。

「……スバル。助けるってのは助けられる側が助けられる事を望んでいる時には良いが、助けられる事を望んでいなかったらどうする。……相手が望んでいない結果を勝手に押し付けるんだから、助けた相手から憎まれ、恨まれる事もある。……相手を傷付けるだけじゃなく、助ける事にも対価が発生しうるんだよ」

相手の不幸を望んだり傷つけた後の因果は作中で何度も書いたと思うが、それは助ける事にも言える事だ。どちらも、相手の望まぬ結果を自分のエゴを押し付けるという形で解決するのだから。

『……その事は分かってる。……けど、ツバサは私と兄さんを――』

「だからその事は良いって何度も言ってるだろ！　大体、現実世界に帰すならスバルの方だろ！　こいつは自分の行動で自然と人々の心を纏める事が出来る奴だ。……メテオGの時も、今回も」

『……そう。それが貴方の計画の1つだったものね』

「……ツバサ君の計画って？」

会話（　というか半分口喧嘩　）に口を出して若干の後ろめたさはあるが、それでもツバサの計画というのが気になる。先程剣を交えた時の夢で彼のやってきた事は見たが、それらを一括して1つの言葉にするのは難しい。

話すとしたらアイリスでツバサは話さないと思っていたスバルだが、予想に反して口を開いたのはツバサだった。彼としては早く話してしまってアイリスとスバルを現実世界に送る事を考えていたのだろう。

「ウィザードを創り出す技術が上がれば上がるほど人間を見下し、自分達こそが地球を支配する存在に相応しいって考えを持つ奴らが出るのは予想の範疇。そいつらの鬱憤（うっぷん）が爆発する前に指導者が現れる事で余計な暴走を防ぐ。そして世界を敵に回し、人間に反感を持ち過ぎるはぐれウィザードの数を減らしていく。はぐれウィザードはウォーロックみたいな通常の電波体に比べたら個々の戦闘力に劣るからな。スバル達の戦闘力から考えて数を減らす事自体はどうという事は無い」

彼の計画の1つは人間に反感を持つはぐれウィザードを倒すためだった。そしてその実、はぐれウィザードの事も指導者として……仲間として背負っていた。

「そして、人間に対して敵意を持つ存在……オレやファイブ・エレメントという組織だな。共通の敵を持たせる事で人間の意思を纏める。スバルはメテオGの時に世界中の人々の心を動かしたから、お前のために世界中の人が立ち上がるのは分かりきった事だ。

……そして、スバルの持つシャインPGMは人の心の光を集める性質が、オレの持つネビュラPGMには人の心の闇を吸収する性質がある。人々の闇を一身に纏ったオレが倒れる時、ココロサーバーが起動するようにしておいた。起動の際のエネルギーなら、お前と共に闘いたいというレゾンウェーブを使えば良い事だ」

人の意思を敵意と共に1つに纏め、ココロサーバーを起動。そしてココロサーバーを使う目的とは……。

「ココロサーバーはあくまで最低限自分の中の闇と戦う手助けをするだけだ。人間の心に棲まう闇を吸収したオレが倒れた瞬間に起動すれば、その効果はそう簡単に消えない物となる。……強制的に外側から人の心を操るんじゃなくて、ちょっとだけ手助けするだけっ

て奴だな」

「……だったら、何も始めから僕達に言ってくれれば……。はぐれウィザードの事なら僕達と一緒に戦えば良いし、ココロサーバーの事だって他に良い方法があったかも――」

ツバサが口出しをさせる暇など与えず話すものだからスバルは今更これを尋ねる事となってしまった。確かに今までの話を聞く限り、ツバサがわざわざ敵になる必要なんて無い。わざわざファイブ・エレメントなんて組織を作ってそのリーダーにならなくても、時間と手間はかかるがスバル達と共に虱潰しで倒せば良いだけだ。

だが、ツバサはスバルの言葉を笑い飛ばす。声だけ明るく、実際には乾いた笑いだった。

「はっはっはー。……そうできない理由があったんだよ。……魔力を持つ者の中には予知夢を見る奴もいてな、オレもその1人だ。そして、ネビュラグレイをサーバーに閉じ込めた後に夢を視た。……飛王・リードという魔術師がココロサーバーを使って人々の心を操り、大量の人間を蟲のエサにしている夢をな」

「蟲って……ッ！　あの魂を吸い取る奴!?　……そしてそれをこの世界に送ってきたのが飛王・リードって言うんだ……。……でも、その事とツバサ君の計画の何が関係あるの？」

ツバサは一瞬、飛王・リードの事を話した事を後悔したが、それでもスバルの質問には答えた。アイリスがツバサとスバルの袖を掴んでいる事に、スバルもツバサも気付かぬまま。

「大有りだ。蟲に取り憑かれた人は抑制心を失い、怒りなどの感情を抑え切れなくて簡単に犯罪を犯してしまう。……人の世が荒れ、秩序も何も無い世界で人間に反感を持つウィザードが行動を起こしたらどうなるか、想像できない訳じゃないだろ？」

というか想像したくも無いだろう。どれだけ混沌とし、どれだけの人やウィザードが犠牲になると言うのだ。

「だから飛王・リードがココロサーバーを手中に収める前にオレがココロサーバーを確保し、はぐれウィザードを纏める必要があった。……オレが監視者としての立場を貫いた場合の未来だ」

「……もしかして、夢の中にネビュラグレイの事もあったの？　……ゴメン。そうじゃないかと思っただけで……」

彼に予知夢を見る事が出来るなら、ネビュラグレイの事も何か計画に関係していると考えたのだが、ツバサが驚いたような眼差しをしたためスバルは単なる勘だと言う意思を伝える。

しかし、ツバサが気にした事は別だったらしい。

「……お前が何でネビュラ・グレイの事を知っている……」

それはスバルが剣を通して彼の記憶を見た事だ。スバルがその事を話すと、ツバサは額に手を押さえてため息を付いた。

「はぁ……。そこまでスバルのチカラが強まってたか。……お前の勘通りだよ。オレが見たもう1つの夢はさっき話した未来と違い、お前達と関わり、何とかしようとした先に待つ未来だった」

「……どんな未来だったの？」

スバルのこの質問はツバサだけでなく、アイリスの目と顔を俯かせる。そしてそれだけの理由がある事を、スバルはツバサの答えで知る事となる。

「……オレの心と体がネビュラ・グレイに飲み込まれて、お前達だ

けでなく、世界中の人やウィザードの命を奪う夢……。オレが人の世に出る事で人が日常で抱く欲望や怒りなどを吸収しやすくなり、ネビュラ・グレイが成長した結果だろうな」

スバルは先程聞いた飛王・リードの介入した未来と今聞いた未来を比べて愕然とした。ツバサが表舞台に出ず、監視者の立場を貫いた場合は異世界の者にこの世を混沌とさせられ、ツバサがスバル達と共に戦えばネビュラ・グレイが悲劇をもたらすのであれば……。

「……そんな……。それじゃあどっちを選んでも……」

「あぁ。……どっちの未来も悲劇しか待っていない」

ツバサはここで一旦息を吸い、懺悔（ざんげ）する様に、弱々しく打ち明けた。

「……この2つの未来を2つとも解決する選択はこれしかなかったんだ。……オレがココロサーバーを押さえ、はぐれウィザードを纏める事で飛王・リードとはぐれウィザードがもたらす悲劇を回避させる。

そして最後はわざとネビュラ・グレイに飲み込まれ、人々の心に自分の闇と戦う手助けをするおまけ付きでネビュラ・グレイをぶっ潰す」

「……じゃあ、キミは始めから死ぬつもりで……。……何だよそれ」

スバルはここで、憤りという感情と共にツバサを睨む。

「僕なんかよりキミの方がよっぽどこの世界の事を――ッ！」

「大事なのは誰がやるかじゃなくて何がなされるかだ。……誰がなんてものは、やり遂げた結果に付いて来る付属物に過ぎない」

「ッ！！」

スバルの憤りを遮ったツバサの言葉は悲観ではなく、現実だ。同時に、割り切った正論だった

ツバサはスバルに安心させるような笑みを送る。だがその笑みは、スザクたちに向けたそれより硬い物に思えた。

「だが、オレよりお前の方が適材適所だからな。……さっさと帰って皆を安心させてやれ、ヒーローさん。……オレが消える事で結界も補強され、飛王・リードは今度こそ絶対に介入は出来なくなる。後はお前達の頑張り次第だ。オレがここまでしてやったんだ。無駄にするなよ？」

その言葉と共に、彼の手がスバルの首にぶら下げているペンダントに触れる。それはツバサがスバルを元の世界に戻すために自分を消そうとしている事だった。

「……」

スバルはツバサの手を離そうとはしなかった。ツバサがどれだけスバル達やスバル達の居る世界の事を想っているのか分かってしまったから。スバルはその思いに応えようと思ってしまったのだ。

だが、今まで黙っていたアイリスがそれを認めようとしなかった。

『……ダメ。２人とも現実世界に戻って』

「だけどアイリス……ッ！　アイリスっ！」

「ッ！　お前いつの間に！」

スバルの驚きとツバサの怒りが重なる。アイリスは半透明の状態となり、今にも消えかけている。そしてスバルとツバサの袖はアイリスに掴まれていた。

『……静かに、ゆっくりと私の存在を2人に送っていた。……人間とネットナビは違うから、2人に送ると私の方が消えるけど、これが貴方達2人に出来る事……』

言うなれば構成の違いだ。元々この場に入ってこれるのは人間のみ。アイリスは侑子のチカラでこの場にいる訳だが、アイリスはネットナビ。人間とは違い、0．7ほどまでしかこの場に送れなかったのだ。

スバルとツバサ2人を現実世界に帰すとなると、アイリスが戻れなくなる。

「アイリス……。僕とツバサ君のために……」

アイリスの存在自体が消えていく。始めからその存在自体がいなかったかのように、静かに、ゆっくりと……。

それでも、アイリスはスバルとツバサに微笑みかける。スバルとツバサが現実世界に戻った時に後ろめたさを感じながら生きる事が無いように。

『ふふっ。……最初はスバルさんが現実世界で賞賛を浴びている間に私が消えかけのツバサを助けて、2人でどこかに隠れ住むつもりだったんだけど、これも良いのかもしれないわね。……スバルさん、世界とツバサをお願い。……ツバサ、罪は少なく無いと思うけど、ちゃんと背負って、ソラさんと幸せになって……』

「ッ！　アイリスっ！！」

スバルは袖を掴まれている方とは逆の腕をアイリスに伸ばすが、その手は空を掴んだだけだった。

アイリスは、この世から完全に消えてしまった。

「……馬鹿やろう。消えるな消えるな言ってた奴が消えてどうすんだよ……」

ツバサの震える声。そのうちに込められている思いは哀しみだろう。

そして目の前の白い景色は徐々に土の茶色や空の青など、現実の色に変わっていく。2人は現実世界に戻ろうとしていた。

ガシッ

ツバサが再びスバルのペンダントを握る。

「……ツバサ君？　何を……」

2人が戻れると分かっていて、今更何が変わるというのだ。

「……このゆっくりペースで戻って、待ってた奴らにもみくちゃにされたら途中で腕ポロリとなるかもしれない。……やっぱりサヨナラだ、スバル。……アイリス1人だけなんて逝かせやしない」

「ッ！　そんなっ！　もみくちゃにされないように皆に事情を説明して――」

「説明する前にオレがボッコボコになって死ぬのがオチだな」

「でもっ――！」

スバルが食い下がろうとした瞬間、目の前のツバサが自分の視界から消えた。存在が消えたのではない。蹴りによって吹き飛ばされたのだ。

そしてそのような凶行に及んだ者は蹴った後で口を出す。文字通り、口より手を先に出したわけだ。

「まだ言うかお前はあぁぁぁぁぁ！！！」

「ソ、ソラさんっ！！？」

スバルは、倒れてるツバサに対し指を差して怒っているソラに「なんでここにいるのか？」という点とツバサを蹴り飛ばした行為に対して驚き、その直後、来たのが彼女だけでない事を知る。

「僕達もいるよ～ん」

「ッ！　ゲイルさんにコクレンさん！　それに藍川さんも！　スザク達まで……」

四神のメンバーとそのパートナーの結集だ。

藍川は頬を膨らませているソラを宥めながらスバルに話しかける。

「ごめんね、来るのが遅れて。……セイリュウ達の話だと、さすがにこれだけの人数をこの空間に運ぶのは大変なんだって。……でも、会話は全部伝わってきたよ。彼の計画の事も、キミの見た記憶の事も」

「ッ！　ちょっと待って……。この空間は電波体は入ってこれないのに、何でスザク達が？」

おまけを言えば『運べる』とまで来たもんだ。

ゲイル達は早くスバルとツバサに合流するために、あえてそれは尋ねずにいたらしい。スバルと共に問いかける眼差しを四神に送る。

一方、ソラの方は気が落ち着いてきたらしく倒れているツバサの上体を起こすために近づく。彼の手を握って立たせようとした瞬間、

ツバサはため息交じりで口を開いた。

「……久しぶりだな」

「はい？　別に何日も会って無い訳じゃ……」

ソラは首を傾げながら片方の眉を下げ、疑問符を浮かべる。だが、ツバサの言葉はソラ宛てでは無かった。

【　……えぇ。本当にそうですね、ツバサ　】

ツバサの言葉はスザク達四神宛て。そしてそれに応えたのはスザクだが、声はそのままに口調と雰囲気は全く違っていた。

「ッ！　……スザク？　……じゃないね。誰？」

ソラはソラの方で、スザクの中にいる者と何かあったらしい。ツバサの手を握ったままスザクを睨む。厳密に言えば、スザクの中の者にだが。

そしてその者は、静かに口を開いた。普段のスザクからは考えられないような穏やかな口調で。

【　……私達の事も、話す時が来たようですね　】

第１６３話　真相（後書き）

次回はスザク達四神の正体ですね。そして『ｘｘｘＨＯＬｉＣ』の６巻とも絡ませます。持っている方は単行本片手に読むと面白いかもしれません。そしてもしかしたら、ケルベロスや月（ユエ）の出てくる作品の登場人物も……。

第１６４話　四神（前書き）

今回は四神の正体が出ます。……はぁ。やっぱりｘｘｘＨＯＬｉＣ本編と絡ませる所までいけなかった……。思ったより長くなってしまいましてね。

第１６４話　四神

今スバル達の目の前にいるスザク達は見た目と中身が違う。その事はソラのスザクに対する態度とスザクの口調から察したが、スバルが察する事が出来たのはここまでだ。

「……話すって、何を？　……キミ達はツバサ君が作ったウィザードで……他に意味があるの？」

ウィザードはウィザード。人から創られし者。確かにスザク達四神は、ウォーロックなどの天然の電波体に見られる特徴として体の表面の電波の割合が多いし、何よりスザクは一度デリートされた状態から戻った事もある。

それら特殊な事象があったとしても、スバルの認識では『ウィザード』という枠から出る事は無かった。

しかし、スザクの姿をした者はスバルの考えを察した上でその考えを否定する。

【いいえ。私達はウォーロックのような天然の電波体でも、アシッドのような人口電波生命体でもありません。……私達は、この星そのものです】

【って言っても、あくまでこいつら……お前らが接してきたスザク達な。そいつらはおれらの3分の1だ】

スザクの言葉にビャッコが補足を加える。

スザク達がこの星そのものなどとてつもない話が出てきたが、スバルは何とかその話を咀嚼した。

「……この星の……3分の1って事？」

それはそれで凄い話だ。しかし、ビャッコは言葉を選ぶようにそれすらも否定する。……横で他の四神がビャッコに送っているジト目の意味を解釈するに、【何でわざわざややこしい言い方をする？】と言った所だろうか。

【あ～……いや、そういう訳でも無くてだな……あぁぁぁめんどくせぇ！！　おいツバサ！　説明任せた！】

おまけに逆切れ＆丸投げした。説明を押し付けられたツバサは仕方が無いという思いを込めてため息を付きながら上体を起こし、口を開く。

「……はぁ。……あいつらを構成してるのは3つのモノだ。1つはオレのチカラ……風のＷＩＮＤＹ（ウィンディ）。水のＷＡＴＥＲＹ（ウォーティ）。火のＦＩＲＥＹ（ファイアリィ）。そして、大地のＥＡＲＴＨＹ（アースィ）……。それらは単なるチカラの塊のような物で、それをウィザードのような電波体にするには人工のプログラムが必要だ。それも、自然界そのものを司るようなプログラムをな」

ツバサの言う『チカラ』とは魔法の事だろう。スザク達を構成する3分の1が自身の魔法なら、才葉シティでツバサの魔方陣が見えたのも納得である。

そして、もう3分の1となっているプログラムについて、スバルには心当たりがあった。それは、学校の行事で才葉シティに行った時の事。

「自然界……。ッ！！　それってもしかしてフォースプログラムの事じゃあ！」

スバルが気づいた通り、スカイタウンを浮かべているフォースプログラムは自然界のチカラを増幅するチカラを有している。そしてそれはかつて2度に渡り盗まれた。1度目は200年前にWWWが。そして2回目の犯人は謎とされていた。

そしてその犯人は、スバルの目の前にいる。ツバサはスバルが気づいた様子を察してため息を付いた。

「……スバルは分かったようだな。……そう。フォースプログラムを盗んだのはオレだ。オレのチカラとプログラム、そしてもう1つでスザク達は創った」

「……もう1つって？」

ソラは問いかけながらしゃがんでツバサと視線を合わせる。立っている事に疲れたのだろう。そしてそれについてはスザクの中に入っている者が答える。

【 私達です。私達は地球に存在する火や風や水や大地……自然界に存在するチカラそのもの。私達のチカラから、ほんの少しだけこの子達に使わせているのです 】

多少メルヘンチックに言うなら、地球に宿る妖精のようなものだろう。彼らの正体は自然界のチカラそのものであり、意思という事だ。

「オレの魔力だけでは、スザク達が自分の身を護るのに不足かもしれないからな。こいつらにお願いしてスザク達がピンチの時はチカラを多めに引き出せるようにしたってわけ」

チカラの根幹を成す【 ツバサの魔力 】を【 フォースプログ

ラム　】で『ウィザード』という電波体の状態を維持させ、いざという時にチカラを上げる目的で【　地球の意思　】を加える。
スザク達四神とは、これら3つから成る者達だった。

また、地球そのモノである以上、彼らの場合はデリートされても自然に解けて戻るだけ。後は互いに本当に信頼しあっていれば、互いを求める想いで再び元の現実世界に戻ってこれる。それがデリートされても再生できた理由である。
セイリュウとビャッコが再生できたのは地球の意思による一存だ。

【　そろそろ時間だ　】

セイリュウ……『水』が静かな声で紡いだその言葉に、他の意思達も静まる。

「……何？」

雰囲気の変化を敏感に察したスバルの問い。『水』は静かな口調のままに詳細を述べる。

【　私達は地球の意思。私達の分身とも言えるこの子達（　セイリュウ達　）を媒介にしているとはいえ、お前達に関われる時間は限られている。……その制限時間が来たというだけだ　】
【　けれど、この子達の記憶は戻しておきます。……それでは、サヨナラ　】

水の言葉に火が続き、４６億年この地球と共に生きてきた意思達は静かに音も無く帰っていく。そして、四神の中で最初に口を開い

たのはスザクだった。

『……ソラ、全部思い出したよ。私達の役割も、ソラ達と出逢う前……ツバサといた頃の記憶も全部……』

「役割？」

「……人間に反感を持つはぐれウィザードの中には不満を押し留めて限界に達した時に爆発させる奴がいる。そういう奴を乗せるには大きな力を持つ存在が必要だ。……そのための存在が、オレやスザク達、そしてオリオンだ」

自分達には強大な存在が付いているから大丈夫。

人間に反感を持っていて、それでも思い切った事が出来ない者達にはそうやって立ち上がらせていた。

「ッ！！　オリオンも関わってたの！？」

スバルは驚きながらも納得していた。人間に反感を持つ電波体は何も地球だけでは無い。ＦＭ星人の中には、多種族を支配する事でＦＭ星人の威厳を保てるなど強行的な考えを持つ者もいただろう。そのような者達にとって、地球と信頼関係を築いている今のＦＭ王はどう映っただろうか？

オリオンも関わっていたのかという問いに、ツバサは淡々と答える。

「あぁ、ＦＭ星でも似たような奴らがいるのは予想してたからな。ちょっとＦＭ星まで行って、オリオンと交渉。下の奴らには『地球側のウィザードは地球人に反乱を起こし、それが終わり次第ＦＭ星のクーデターを手伝う』と伝えていたという訳だ。……まぁ、クラウドとティグレスにはその時の交渉が聞こえていたみたいで、クラ

ウドの奴、最期にオレの事を気遣いやがったけどな。……あいつらは別にイーグルやアクエリアス達に付いてても良かったのに……」

組織の上と下で教えられている情報も、人柄も違うのも、全て意図的なものだった。将来、地球とＦＭ星で災いをもたらす者を誘い込み、沈める。それがファイブ・エレメントという組織の存在意義だったのだ。滅ぶための組織である。

その場にいた面々もそれを理解した中、ソラは俯いた状態でツバサに問いかける。

「……話したい事はそれで全部？」

「……まぁ、そうだな」

「あんたを連れ帰る前に１回やっとかないといけない事が出来たみたい」

「？　なんだよ」

訝しげに眉をひそめるツバサに対し、ソラはポツリと呟くように口を開く。

「……歯食いしばって」

パンッ！！！

ツバサの左頬から肌を強く弾いた音が響く。ソラが全力でツバサの頬を平手で打ったのだ。そしてツバサが文句を言う隙やスバル達が止めに入る前に彼を怒鳴りつける。

なお、忠告を出すのと叩いたのがほぼ同時なため、歯を食いしば

れといわれても無理な相談だ。

「あんたの計画が未来のためって言うのは存分に分かりました！　けどね！　自分がいなくなれば全部解決っていう考えは止めて！！　計画が成功してあんたの事を大して知らない人があんたの死を喜んでも、少なくともあたしは悲しいし喜んでいる人を怒る！」

「だけどそれはオレの計画の事を知った奴の言えるセリフだ！　詳しい事情を知らない奴にとってオレは絶対的な悪で、滅んだら喜ばれる存在だぞ！」

しかしツバサも負けじと言い返す。この2人は売り言葉に買い言葉の喧嘩パターンが多いため、ツバサとしても反射的に言ってしまったのだろう。

「それでも！　私達は知った！　知った以上は戻れない！　ううん、戻りたくない！　もし戻ったらその先に待っている出逢いも幸福も無くなっちゃうかもしれないから！！」

今とは、過去の決断の積み重ねで成り立っている。大抵の人間はどの高校大学に入ったか、学歴は何だと気にするが、それ以外にも大事な要素がある。【　人との出逢い　】だ。自分が何を選ぶかによって、その後関わる人が違ってくる。分かりやすいのが進学だろう。2つの学校に合格をもらったとして、どちらに行くかで必然的に未来は変わってくる。もしかしたら一生のパートナーに出逢えるかもしれないし、悪友や親友に出逢えるかもしれない。

「……けど、良い事ばかりの生き筋なんてありはしない。……それでもお前はそれを望むのか？」

そのツバサの言葉は喧嘩と言うより問いかけだ。挑発的ではないが、ソラを試すような印象を受ける。

そしてツバサの言っている事も事実である。多忙さなどの身体的苦痛や裏切りなどの精神的苦痛を味わう事もあるだろう。

だが、ソラはハッキリと頷いて見せた。彼女の真紅の瞳に、迷いの濁りは一切無い。

「望むよ。苦しい事があっても、自分と同じ目線に立って考えてくれる人がいたら嬉しくて、いるだけで安心もする。それに、物であれ人であれ、好きだと思える存在と出逢えたら手放したくない。だって、ツバサやスバル君、ミソラちゃん達に出逢えて、計画の真意を知れたのはこの【 今 】だけかもしれないんだよ？」

今ある【 今 】が過去の選択の上に成り立つのであれば、逆説。この【 今 】で当たり前にいる友人はもちろん、知識すらも他の【 今 】には無いかもしれない。過去と未来（ 縦 ）的な意味でも、パラレル（ 横 ）的な意味でも、【 今 】は自分達がいるこの【 今 】しか無いかもしれないのだ。

「だから私は、知った事を無かった事になんて勿体無い事はしたくないの。計画の真意を知って、ツバサを信じてて良かったって私は自信を持って言える。……それが【 この今 】が良いっていう理由」

「ッ。……」

先程までの喧嘩口調とは一転。穏やかな声色から発せられた言葉にツバサの心にトクンッと何かが揺れ動く。それは決意の揺れであり、思考の束縛の解放である。

「私は……その……」

彼女が言葉に苦しんでいるのは考えが纏まっていないからではない。そばでスバル達がいるからだ。

ツバサはそんなソラの様子を見てクスッと微笑み、彼女が言おうとした言葉を代わりに言う。

「キミに逢えたこの今を……未来を大事にしたい。……出逢えて良かった。……って所か？」

「ッ！！　そうそれっ！！」

思わずツバサに対し勢いよく指を差してしまうソラ。だが、この直後気づいた。ツバサの言葉は標準の高さでの声。それに若干とはいえ大きな声で肯定した以上、スバル達にも聞こえている事確実。

ソラはそんな状況を作ったツバサを八つ当たり気味に睨みながら問う。

「……で、ツバサは？」

対するツバサは笑いを堪えている様子でそれに答えた。赤面してワタワタするソラの様子が面白かったらしい。

「ん？　さっき言ったろ？」

「えっ？」

ソラはツバサが答えた後何かにつけてお返しに一発お見舞いしようと考えていたが、彼の言葉で動きが止まる。フックの構えの拳がツバサの脇腹から数センチの所で止まっており、この直後の悲劇を予想させる。

ツバサ、内心冷や汗中である。反面、ソラは彼の言葉を思い出し

ていた。それはソラ自身の言葉を代わりに言ったものであって……。

「ッ！！」

「ははっ。耳まで赤いぞ」

「からかうな！　そして笑うなバカツバサ！！　……でも、嬉しいよ。それじゃあ帰ろう。私達の世界へ」

ソラは立ち上がり、座っているツバサに手を差し出す。ツバサはふっと微笑み、その手をしっかりと掴んだ。

「ダメよ。……まだ、終わっていないわ」

ツバサがソラの手を取った直後響く女性の声。それはスバルの方から放たれたものだった。

「ぼ、僕じゃないよ！　僕男だし！」

一同の視線に動揺しながら弁明するスバル。ゲイルはクスッと笑うと両手の平を前に出して誤解だとアピール。声と表情は普段のおちゃらけたものだ。

「やだな、キミが可愛い男の子なんて事はよぉ～く分かってるよ♪　……たぶん、そのポケットの中じゃないかなぁ？」

スバルのポケットを見る時のゲイルの目は、探るような鋭い目だ。……スバルのために言っておくと、可愛いは余計だと思う。

「？　ポケット？」

スバルはゲイルの言葉で自らのポケットに手を突っ込む。そして彼の指先に触れたのは……。

「……あっ……。手鏡……」

ツバサがスバルに侑子との通信用にと預けた手鏡だった。そして先程の女性の声……。スバルはおもむろに手鏡を開く。

上の鏡から空間へ、プロジェクター風に映し出されたその人物は、次元の魔女との異名を持つ魔女だった。

「侑子さん……」

「おい、次元の魔女。終わってないってどういう事だ」

スバルの驚きの呟きにツバサの腑に落ちないという声。藍川、コクレンは誰？　という顔をし、ゲイルだけが冷静だ。

侑子は冷静に、事象のみを伝えるように淡々と口を開く。

「……あなた達の世界に戻る前に、ツバサはやらなければいけない事があるから」

第１６４話　四神（後書き）

前話と今話を含めた補足を言うと、スザク達に滅びる役目を負わせながらも、それから抜けても良い様に人間と親しくなれる可能性（感情）を残したって所です。

なお、途中にあった『思考の束縛の解放』ですが、ようはこうしないといけないっていう考えがほぐれた事です。

次回はツバサでも気づいていなかった（気づかせてもらえなかったって言った方が良いかな？）秘密が明かされます。

第１６５話　エリオル（前書き）

サブタイから分かるように、知ってる人は知っているあの人が登場です。

第１６５話　エリオル

「……ツバサ君が元の世界に戻る前にやる事ですか？」

スバルの訝る声。侑子はそれに対し、頷きながら両の手を合わせる。

「えぇ。けどその前に自己紹介ね。スバル君とソラちゃん、ツバサとあの子達は良いとして、後は貴方達ね」

侑子の言う『あの子達』は四神の事だ。おそらく、四神がツバサの元にいた頃に逢っていたのだろう。そして、『貴方達』というのはその時の侑子の視線から考えて藍川とコクレンの事だ。

それに気付いた藍川がゲイルの事は良いのかを問おうとした時、ゲイルが笑顔で侑子に小さく手を振った。

「お久しぶりです、侑子さん。お元気でしたか？」

「えぇ。そっちは相変わらずみたいね」

２人は既に見知った仲だったらしい。その事はツバサも知らなかったようで、目元をわずかに動かした。一方、ゲイルは一同のリアクションを見て快活に笑いながら侑子と出会った時の事を話す。

「あっはっは～。実は僕、前に侑子さんから願いを叶えて貰ってたんだよね～♪　まぁ、どんな願いかを言うつもりは無いけどね～♪　ささっ。早く自己紹介を済ませちゃってよ。でないと話が進まない」

スバルにとってゲイルが何を願ったかも気になったが、ツバサが何故自分達の世界に戻ってはいけないかを知る方が優先だと判断し、詳しくを尋ねない事にした。他の面々もその考えは同じらしく、尋ねずに置いた。……コクレンは従者として気になるらしく、後で問うつもりらしい。

自己紹介が終わったあと（　侑子が偽名という事でツッコム者がいたがそこはカット　）、侑子は何故ツバサが元の世界に戻ってはいけないかを語る。

「ツバサ、ネビュラ・グレイという存在が何なのかは分かっているでしょう？」
「あぁ、人の持つ闇をデータ化した存在だろ？　けどそいつは――」
「いなくなってなんかいないわ。……元となる精神的な闇はまだあなたの中にある」
「ッ！！」

データ的な闇はフォルテがゲットアビリティプログラムにより吸収した。だが、ネビュラ・グレイの大元たる人間の心の闇はまだツバサの中に在るのだ。常人が持つ物にしては、大き過ぎるほどの闇が。そして、侑子を始めとして術者のチカラはそういった見えない物を見る事から始まる。つまり、侑子にとってはそっちの方が専門だったりする。故にツバサの中に在るモノに気付けたのである。

さらに侑子は続ける。

「それに、空気中の電波を吸収すれば、時間は掛かるでしょうが元のチカラを取り戻せるでしょう。……さぁ、そこまで言ってあげたんだから出てきたらどうなの？」

侑子の視線は真っ直ぐにツバサへと向けられている。だが、その目と声には警戒の色が滲み出ていた。

最初はツバサもその意味に気付いていなかったが、侑子の言葉と視線が別のモノに向けられていた事に苦しみを伴いながら気付く。

「……くっ！？」

「ッ！　ツバサっ！？」

突然失った右腕の付け根を押さえるツバサ。ソラはそんな彼を気遣うが、ツバサは押さえていた手をソラに向けて静止させる。

「来るな！　……右側には……来るな……」

「？　……右側？」

「ぐうっ！」

ソラが怪訝そうに首をかしげた直後、ツバサにひときわ大きな苦痛が襲い掛かり、彼は歯を噛み締めてそれに耐える。

ドパッ

その瞬間、彼の右腕から黒いモノが吹き出てきた。ホラー映画であるような腕が生えてくるシーンだと思えば良い。だがそれは人型で、厳密に言えばツバサと瓜二つな存在だ。輪郭まで鮮明に、体の表面と服、眼球が黒で瞳が赤なのを除けば本人そのものだ。

人間の形となったそれはツバサから分離し、さらには口も利いた。

『……ふぅ。やっぱり他人にはバレちまうもんだなぁ。小僧の感覚

は欺けても、相応の力を持つ者には誤魔化せんか』
「はぁ……はぁ……お、お前は……」

ツバサの息も絶え絶えの問いに対し、黒いツバサは暢気に手を振って見せた。

『よぉ、宿主。オレが抜けたんだからお前の魔術師としての勘も戻ってるだろう。オレの正体を当ててみな』
「ネビュラ・グレイ」

ツバサが即答できたのは魔術師の勘どうこうではない。その勘が働く前に、彼にはその名と存在に気付いていた。長年押さえ込んでいた相手なのだ。分からない訳が無い。

正体を言い当てられた黒いツバサ……いや、ネビュラ・グレイは慌てるわけでもなく、むしろ愉快気に笑いながら拍手を送る。

『はっはっは！　ご名答ご名答♪　体がぶっ飛んだが、本体であるオレと人がいる以上、オレは不滅だ！　ずっと小僧に関わっていたからお前の姿と口調が写ってしまったようだが、中々勝手が良くて満足しているぞ！』

ネビュラ・グレイは得意げに語る。その高笑いのおぞましさは人間のそれとは思えず、その笑みは黒く、冷たい悪魔のよう。

藍川やコクレンを始めとした『魔法』というものに接していない者はもちろん、スバルやソラ、四神など、『魔法』の存在を知る者もそのおぞましさに息を呑んでいた。

だが、最初にツバサに潜んでいたのを見破った侑子と、ネビュラの言う『魔術師としての勘』を取り戻したツバサの瞳に宿るのは探

る色だ。対面しているだけで何もかも見抜かれそうな、そんな眼差し。

ネビュラ・グレイはその眼差しに気づいたのか、不機嫌さをかもし出しながら2人の魔術師に視線と声を送る。

『でぇ？　なぁに余裕そうな目してんだてめぇら、オレはなぁ――』

「ツバサの精神に介入して暗示を掛けていたんでしょう？　自分…つまりネビュラを封じる手段を思い出させないように」

クスリと笑った侑子の得意げな声。及びチラリとツバサの方を見る。その侑子の視線から察するに、「お間抜けさん♪」といった所だろうか。一方のツバサは居心地の悪さをため息で誤魔化した。

スバル達にとっては得体のしれない相手を目の前にして気が気でないわけだが、侑子とツバサは穏やかな雰囲気を纏っている。狂気と混沌を好むネビュラ・グレイにとってはさぞ気に食わない事だろう。

『あぁそうだ！　確かにオレはオレを封じる手段を小僧が思い出さないように暗示を掛けてきた！　だが、その要（カナメ）たる四神は人間達をここに送るのにチカラを消費してオレを封じるまでに及ばない！』

四神はネビュラ・グレイを封じる要だという話に、当の本人達は静かに口を開いた。最初はセイリュウだ。

『……確かに私達四神の力を結集すればお前を封じる事はできる』

『じゃが、その頃にはもうはぐれウィザードと人間の確執から始る混沌とした世を夢で見ており、ワシ等をその計画に加えざるを得なかった。故に元主は先程夢で見たような道を選んだわけじゃが――』

『……それすらもネビュラの暗示の賜物だった。……あんたは、ツバサに自分がより不幸になる道を選ばせたんだっ！』

ゲンブの言葉を継いだスザクは途中から怒りを露にして黒いツバサを睨み付ける。対するネビュラ・グレイは堪えるように身を震わせた後、抑え切れなくなった笑いを爆発させる。それは自分のやってきた事が看破されて動揺から心が壊れたのではない。むしろ逆だ。

ネビュラ・グレイは、優越感から笑っている。知っていても何も出来ないというツバサ達を嘲って。

『くっ……くくくくっ……ぎゃはははははぁ！！！　だからどうした！？　お前らはオレを封じる事は出来ないし、次元の魔女もこっちの次元に大きな干渉は出来ない！　そして小僧でも、他の者達を庇いながらどこまで戦えるか見物だなぁ！？　えぇ！？　おい！！』

ツバサはその言葉に対して怯えるでもなく警戒するでもなく、さも退屈そうにネビュラに尋ねる。

「それで、オレ達の前に姿を現したお前は何をする気だ？」

スバル達に絶望を与えるために言葉を吐いたネビュラ・グレイから見ればそのツバサの言葉と態度は気に食わなかっただろう。屈辱の極みとでも言いたげにツバサを指差しながらツバサに怒鳴る。

『そんなに知りたきゃ教えてやるよ！！　オレはスバルに取り憑き、ここにいる全員の存在を吸収する！！　赤髪の小娘はこの場で惨殺！！　そして現実世界に戻ったら世界に混乱と混沌を……皆殺しだぁ！！！』

叫びながらスバルに迫るネビュラ・グレイ。そして、ソラを吸収できないのは彼女が良くないモノを近づけさせないような『気』を

持っているからだろう。あえてスバルの理由は、彼に取り憑けばツバサは抵抗できないと知っているから。

「……させると思ってるのか？　スバルも……ソラも……」

『ッ！！　貴様っ！！』

スバルとネビュラ・グレイの間に割って入ったのはツバサだ。黒いローブを身に纏い、ローブの裾を掴んで前方に突き出し、幕を張る。

そのローブの膜がネビュラ・グレイの拳をローブに触れた時点で止めているわけだ。織物程度の厚さのローブが質量を持つ拳を止めている光景は異様そのものである。

ローブの全体的な色は黒。袖を通さず方から羽織るタイプで、背中には太陽と三日月を縦に割って、その半分ずつをくっつけた様な模様があしらわれている。

ツバサは間一髪間に合った事に対する安堵と、自分に対する情けなさから「ふっ」と苦笑する。

「昔もう1人のオレに作っておけって言われてしょうがなく作っていたけど、まさかこれほどの魔力を持っていたとはねぇ」

ツバサは気付けなかった自分に苦笑しているが、彼がそのローブに込められた魔力の事を知らないのは無理も無い。なぜなら――。

『ッ！！　せっかくその記憶を消していたというのにっ！！』

クロウ・リードとツバサが関わったのはネビュラがツバサと関わる前。ツバサの記憶から自分にとって良くない情報を消していたのだ。本人が疑問に思わない程度にほんのちょっとだけ。そのほんの

ちょっとが、そのローブ自体に強大な魔力が備わっているという事。故にツバサにとっては『クロウに作れって言われたローブ』という認識しかなかっただろう。

一方、ソラはそのローブを見て「あっ」と声を漏らす。

「それ……私がツバサの部屋で見つけた奴……」

それと同時に、侑子からツバサに届けるように頼まれた物だった。侑子お手製の、中に入れた物を圧縮するカプセルの中に入れていたのだが、ツバサはソラの近くを離れながら彼女のポケットから掠め取ったのである。

侑子は「自分が渡すはずだったのに……」と少しショックを受けているソラにクスリと微笑みかける。

「思うほどの事でも無いわよ。ツバサのチカラがある程度戻ったら、私がカプセルに張った【　強いチカラを持つ者以外に、そのカプセルの存在を気付かない　】という結界は意味を無くす。……ツバサの事だから、何かあれば掠め取ってでも使うでしょうね」

護りたい者達を護るために。

侑子はネビュラ・グレイに気付かれないためにカプセル自体に結界を張り、ソラはその運搬役という事だ。それを知ったネビュラは全霊の憎しみを込めて魔女とソラを睨みつける。

『ッ！！　貴様らのせいかぁぁぁぁぁ！！！　だがおかしい！　魔女よ！　何故オレに気付かれないように結界を張った！！　まるでオレがこの場に現れるのを知っているみたいでは――』

「知っていたわよ。……まぁ、もう1人のツバサから聞いたんだけどね。アイツは、未来に起こる事を全て夢で知るほどの魔力を持っ

ていたから。……そしてそいつはこの時のために、ツバサにも手を施していた」

侑子はネビュラの言葉をあっさりと肯定し、強大な魔力を持つ知人と、その知人がツバサに細工を施していた事実を零す。

『ッ！！！』

ネビュラがツバサの方を見た頃には、彼は首から下げている物を取り出していた。三日月の装飾の成された鍵を。

ネビュラは生命体としての本能からか、その鍵から離れる。それほどに強大な存在という事だ。

「……それは？」

スバルの問いに対し、ツバサは額に若干のムカマークを浮かべながら答える。

「……どうも別の世界のオレは、この鍵の持っている力をオレに気付かせないために、オレに暗示を掛けていたみたいだな。……この鍵はあくまでアヤカシを寄せ付けないようにっていう道具かと思ったんだがな」

だが、そのおかげでネビュラ・グレイにもその鍵の真価が分からなかったと言えよう。前にも述べたとおり、クロウとツバサが出逢ったのはネビュラ・グレイと関わる前。未来が、この時が見えていたクロウはツバサに対し、鍵を渡した時点でその鍵のチカラにツバサが気付かないように暗示を掛けていた。ネビュラ・グレイが記憶を覗ける範囲より、さらに奥深い所にその記憶を封じていたのだ。

ツバサが知らないものを、ネビュラ・グレイは記憶から探れるわ

けが無い。例えそれが、封じられた記憶でも。

ツバサは鍵を持つ手をうえに向けて開き、鍵に対して囁く。

「（……待たせたな。お前の力、見せてみろ）」

クロウや彼の遺したカードを継ぐ少女、そしてツバサが持っているような鍵は、その存在自体に強大な魔力を秘めている。

キィッ！

その魔力はツバサの囁きに応え、手の平から１５センチほど浮き上がり、縦・横・斜めとでたらめに回転し始めた。

そして、そのチカラは他の次元のとある人物にそれを知らせる。

――――イギリス――――

スッ

『ん？　どこかに行くのですか？　エリオル』

イスから立ち上がった少年に問いかける一見ぬいぐるみのような存在。黒い体に青い目。少年の創り出した者の１人だ。

一方、エリオルと呼ばれた少年はそのぬいぐるみに振り向き、部

屋のドアを開けながら答える。

「あぁ。……前世で心残りだった子がいてね。……少し手伝ってくる。すぐ戻るよ」

バタンッ

そしてドアは閉められた。エリオルが消えたドアの先は、彼自身の部屋。黒いぬいぐるみは『ふぅ』とため息を付いた。

『……やれやれ、またずいぶんと隠している事が多そうですね。……まぁ、その内話してくれるでしょ――』

「たっだいま～♪」

ぬいぐるみの独り言を遮る快活な声。ぬいぐるみは本日2度目のため息を付いてその声の主に挨拶を返す。

『お帰りなさい。ルビー・ムーン。大学はどうでした?』

ぬいぐるみに問われたのは大学生くらいの女性だ。茶色に赤を足したような長髪に制服を着ている。今の姿はお互い仮の姿。

ルビー・ムーンと呼ばれた女性は頬を膨らませてぬいぐるみのほっぺをグリグリと引き伸ばす。

「だ・か・ら! 今のあたしは秋月ナクルだって! あ、大学は楽しかったよ～♪ 同級生にゲイルっていう変な奴はいたけど……ってあれ? エリオルは?」

パンッという音と共にほっぺの引き伸ばしから開放されたぬいぐるみは頬を摩りながらエリオルの消えた部屋を見る。

『あぁ、それなら隣の部屋に。……邪魔はしない方が良いでしょうね』

「ふぅ～ん……。あ、スッピー、甘いお菓子あるけど食べる？」

女性は思い出したように自分のカバンをあさり始める。だが、スッピー……は即答で否定した。

『……いりません。私は甘い物が苦手で、そもそも私はスピネル・サンと言う名前が――』

「え～い！」

『もごっ！？　……もっと食～べ～る～♪』

スピネルは甘い物を食べると酔っ払って相当面白い性格になってしまう。

そういう性格にした張本人は自分の部屋でクスリと笑いながら手の平を上に向ける。その手には太陽を模した鍵があった。

ツバサが持つのは月の装飾の成された鍵。その形状も、持っているチカラも真逆の物だ。

「……これが終わったら、スピネルを止めないとな」

その笑顔に厭世感は全くない。その笑みは、全てを受け入れているかのような穏やかさと、楽しげな表情だった。

刹那、その少年の目は鋭くなり、視線が鍵に集中される。

「……闇のチカラを秘めし鍵よ――」

彼の名は柊沢・エリオル。それは現世の名。前世の名は、クロウ・リード。

第１６５話　エリオル（後書き）

なお、ナクルが大学で会ったゲイルは別の世界の同じ人だと思って下さい。……性格面はどうなんだろう？　やっぱりアレなのかな？（↑自分で書いたくせに！）

スピネルが酔っ払った話は動画を見つけたので、後で活動報告にでも張りますかね。……なにぶんネットの繋がりが悪くてね。それで今回はケータイからの投稿です。

第１６６話　封印解除《レリーズ》（前書き）

はっはっはっ！　案の定寝坊してしまいましたぜこんちくしょう。
おかげで起きたの１１時過ぎでした。

キリの良い所で終わらせるため多少短くなりましたが、お楽しみ頂ければ幸いです。

第１６６話　封印解除《レリーズ》

――反物質世界――

一方ツバサ達のいる世界。なお、世界の名前は「とりあえずこう名付けておこう」というものだ。次元の狭間ともあの世とこの世の境とも取れる世界で、どんな世界かを断ずる事は難しい。

高速で回転を始める鍵に、ツバサは言葉を掛ける。

「……光のチカラを秘めし鍵よ――」

２人の同じ人の言葉は、次元を超えて同調（シンクロ）する。

「「真の姿を我の前に示せ」」

ここであえて言っておこう。ツバサは鍵に語りかける前、全員に魔法を掛けていた。スバル達には自身の真名を『ツバサ』と聞こえるように。そしてソラには、思っている事を口に出さずとも伝える魔法を。つまり、ソラには本当の名前が聞こえるようにしたのだ。

（……今からオレは本当の名前を名乗る。スバルにも直に言うつもりだが、誰よりも最初にお前に聞いてもらいたいんだ……）

「ッ」

言葉と共に伝わる感情。優しさの中に照れが含まれた感情と声。その感情の元に気付いたソラは口元に笑みを浮かべながら思いを返す。確信は無いが、今なら思っている事を口に出さなくても伝わる

気がした。

（……感謝する気があるなら、後で何かおごってよね。……約束だよ）

それは2人の約束。その時どちらかが欠けているという事が無いようにという約束だ。そしてその返事は、わずかな時間を置いて返って来る。

（……あぁ。そのうちな）

返事が遅れたわずかな時間。その意味にソラが気付いて先程とは違う意味の笑みが零れた時、その名は言葉となって届く。

「「契約の元、クロウ・リードが命じる。……封印解除（レリーズ）」」

封印解除の言葉が放たれた瞬間、2人の持つ鍵は長くなっていき、やがてそれは杖となる。長さは互いに2メートル近く。

エリオルの杖は、先端に太陽の円と、太陽の光を表すような四方八方に伸びる先端の鋭い装飾が成されている。そしてツバサの杖は、円形の金枠の内側に三日月を模した装飾が成されている。

黒いローブに長い杖を携える少年はネビュラ・グレイと向き合い、視線を杖に移した。

「……最初はオレの魔力を抑えるための物で、何でオレに持たせたのか分からなかった。……けど、今なら分かる。アイツは杖が自分の周りや次元に影響が出るのを防ぐためにこの杖を創り、オレに持たせた。……そしてもう1つ……この時のために！」

ツバサは視線を杖からネビュラ・グレイに戻し、金枠の内側の空洞を真っ直ぐにネビュラ・グレイに向けた。
杖をネビュラ・グレイに向ける。ただそれだけで状況に変化が訪れた。

『ッ！！？　な、なんだこれはっ！！　オレの体が……指先が……杖に吸い込まれていく！！』

そう。ネビュラ・グレイの指先は細かい粒子状に分解され、杖先の金枠の内側に吸い込まれていくのだ。……いや、そうこうしている間に手首まで分解されていく。どうやら杖はネビュラ・グレイの存在その物を吸い込んでいるようだ。
動揺するネビュラ・グレイに対し、ツバサは不敵な笑みを浮かべる。

「……ふっ。どうして自分が吸い込まれるか教えてやろうか。お前はオレの中に巣食い、オレの中の後悔の念や葛藤……様々なマイナス感情を吸収してきた。言ってしまえば、お前はオレの【心の闇】そのもの」

『ッ！！　確かにオレは自分の力を強めるためにお前の中にあるマイナス感情をも利用してきた！　だがっ！！　それとこれの何が関係している！！！　その鍵はあくまで、お前の余分な魔力を吸収してアヤカシを引き寄せない物では無かったのか！！？』

そう、それがネビュラ・グレイがツバサの記憶から読み取った事。しかし、その記憶を作ったのは誰だろう？　本当の記憶とは別に、そういう記憶にしたのは……。

「だから、その効果に関する記憶自体がお前を騙すためにもう1人のオレが施した暗示なんだって」

『ッ！！　なっ……なな……』

先程までの余裕ぶりはどこへやら、ネビュラ・グレイが口をパクパクさせて呆然としている様子を見て、ツバサはここで先程とは違った笑みを浮かべる。誰かをイタズラに嵌めた時にする、底意地の悪い笑顔だ。

「あぁ、ついでだから教えとくよ。この鍵の本当の力は、この鍵と対を成す鍵の力を吸収する事にある」

クロウとツバサの鍵はそれぞれ『太陽と月』の形。司るチカラは『闇と光』。光であれ闇であれ、強すぎるチカラは災いを呼ぶ。故にクロウはカードと別に、杖にも同じように自分の持つ杖と正反対の杖を創っていた。それが、今ツバサの手にある杖だ。

「そして、その対を成す鍵が秘めるチカラは闇。……もう1人のオレはそこからチカラを引き出して自身の魔力を強めてるからな。それなら、オレの闇そのものであるお前を取り込めない訳無いだろう？」

クロウとツバサは別々の意思を持つが同じ『クロウ・リード』だ。故に、ツバサの心の闇と同化したネビュラ・グレイを吸収するのは、別の次元にある闇の力を秘める鍵のチカラを吸収するのとほとんど同じ要領という事だ。

また、エリオルが自身の鍵を発動させた理由もそれに関係している。エリオルの鍵の力をツバサの鍵が吸収するのなら、エリオルの鍵が力を増せばどうなるだろう。答えは、【　その強まったチカラを吸収するために吸収する力を増す　】だ。

闇を吸収し、消滅させる光の杖が真の姿に戻ったなら、ツバサ…

…つまりクロウ・リードの闇ならどれだけ大きな闇だろうと吸収できる訳だ。

「……それじゃあ、別の世界のツバサ君は最初から全部……」

過程から結末まで全て分かっていたのか。

スバルの呟きは侑子が気付き、それに答える。

「おおよそね。……まぁ、アイツでも予想できなかった事はあるだろうし、アイツが私に全部を話した確証も無いけど」

侑子自身がクロウから聞いたのは、「結果は良い」という事だけ。その後の事も、その過程の事も聞いていない（というか教えてくれなかった）ので、特に『終わった後』を危惧していた。

ツバサやスバルが変わらずに元気に過ごせるかどうか、不安に思っていたのである。その心配が無くなった理由はあるが、それはまたいずれ。

『くっそぉぉぉぉ！！！』

腕を失った状態で突進してくるネビュラ・グレイ。最期の足掻きだ。

「ッ！　よっ」

ツバサは杖での吸収を解除。杖の先でネビュラ・グレイを打ち据えた。突進を避けるわけにはいかない。後ろには、スバルやソラ、ゲイル……傷付けてはいけない人達がいるのだから。

バシュッ！！

空を裂く音と杖による斜め一線。その一撃によりネビュラ・グレイは粉々になって四散した。粉々といっても人間の頭くらいあり、真っ黒なバレーボールを思わせる。……個体で無いことは確かだが、液体でも気体でもない。

ネビュラ・グレイはそんな他愛も無い存在となって四散した。ツバサを不幸の道に誘ったツバサとの共犯者は、散り散りとなったのだ。

――――イギリス――――

一方、終わりを感知したエリオルは静かに鍵のチカラを弱める。その顔にあるのは安心したような笑顔だ。

「……私が出来る事はこれが最後。後は、自分で頑張ってくださいね」

ガシャーン！！

「エリオルー！　早く来てー！　スッピーが手の付けられない状態にいいい！！」

『甘い物もっと食べる～～～～～♪』

ガシャーン！！

別の部屋（台所の辺り）から響く愉快な破壊音と応援要請。エリオルは楽しむような笑みを浮かべるとその声に答えた。

「あぁ、今行くよ」

エリオルはドアを開けながら別の次元にいるもう1人の自分を思い浮かべる。

（……実の所、彼がこれからどういう道筋を歩むのかは夢で見ていない。だけど、その先に何が待っていようと、どうか自分と自分の周りを幸せにして欲しいものだな）

ドアは静かに閉められ、部屋に残るのは穏やかな陽光だけ。

第１６６話　封印解除《レリーズ》（後書き）

補足として、エリオルはこの時中学生って設定です。……見た目はね。つまり、日本でイタズラをした後って事です。

……そういえば、アニメでもエリオル（クロウ）が予想できなかった点は同じようなものだったかな。

第１６７話　デューオ（前書き）

お待たせしました。今回は2話更新。２つ合わせると、文字数は１万文字を越えます。

サブタイ通りデューオが登場します。アニメ版の話題も一部出てきますよ。

第167話　デューオ

「……勝った……の？」

ネビュラ・グレイが四散してからわずかな沈黙が流れ、スバルは現実を疑うように呟く。侑子はその呟きを拾い、意味深に目を伏せて中途半端な肯定をする。

「そうね。……とりあえずは」

「？　とりあえず？」

スバルは眉を顰めて尋ね返すが、侑子は先程とは一点、明るい声で平手を『パンッ』とあわせる。

「さて！　ネビュラ・グレイがいなくなったから、今まで陰から手助けしてきた子達も出てこれるでしょ！　スバル君もツバサもお礼言いなさいよ～」

「「はっ？」」

スバルとツバサの疑問の声は見事にハモリ、互いに顔を見合わせた後同時に侑子を見る。なお、ツバサは杖を鍵の状態に戻し、自分の胸元に戻している。

侑子の言う手助けした子達はスバルとツバサが侑子に問う前に姿を現した。

「？　２人とも、ハンターから何か出てるよ？」

「？　ッ！　うわっ！？」

「ッ。……これは……」

藍川の言葉でスバルとツバサは自分のハンターを見る。2人のハンターから出ていたのは煙とも液体とも取れぬ何か。スバルのハンターからは白。ツバサのハンターからは黒だ。

スバルは純粋に目の前の光景に驚き、ツバサは目を細めてそれを分析する。スバルは一瞬ツバサのハンターから出ている物をネビュラ・グレイが残した何かかと思ったが、悪い感じはしない。

やがてその2色の何かは特定の形に固まっていき、それまでの間に侑子は補足を加える。

「……貴方達のいる空間は、言ってしまえば魂だけが入れる場所。霊感とかは、その場所では関係ないわ」

それが藍川にも見えた理由だろう。それはつまり、ゲイルやコクレンにもその白と黒の何かが見えているという事。

そして、そうこうしている間に白と黒の何かは整った形となった。

「……わぁ～……」

ソラが感嘆の声を零すのも無理は無い。白と黒の何かは女性の姿となり、それが非常に綺麗だったのだ。2人の姿は瓜2つ。互いにドレスのような服に妃(きさき)が付ける様なティアラを付けている。髪は長髪だ。

だが、人の姿になってもティアラ含めて全身の色が色が白と黒一色な所から、『ヒト』ではない事が伺える。

スバル達はそれが何なのかという疑問がメインだったが、ツバサの場合は何で今までハンターの中にいたのかが疑問だった。

疑問に寄る沈黙を解消するように、侑子はその2人を紹介する。

「一応この子達も喋れるけど、私が紹介しましょうか。白い方がＬｉｇｈｔ（ライト）。黒い方がＤａｒｋ（ダーク）。スザク達同様ツバサの魔法で、格で言えばスザク達より上よ。もっとも、こっちの方は１００％魔法製だけど」

魔法製という言葉がものすごく軽く思えるが、そこは突っ込まずに置こう。話が前に進まない。

クロウ・リードが生み出したカード（魔法）は５２体。それらを管理するため、クロウは２人の番人を創った。ケルベロスとユエ。それぞれ太陽と月を司る存在を。ライトとダークはその２人の第一配下のカードだ。スザク達は第二といった所である。

とりあえずスザク達の上司のような者かとスバルが納得した所で侑子は続ける。

「スバル君の持っていたＰＧＭは人の光を……。ツバサが持っていたＰＧＭは人の闇を集める性質を持っている。そっちの世界で２００年前、人の心の闇をデータ化する人がいたそうだからツバサはそれを応用したのでしょうが、ライトとダークの２人はそれを手助けしていたって事。特に、ダークの方はネビュラ・グレイを封じる手助けもしていたみたいね」

この空間に来てから何でもかんでも侑子の予想通りになっている事から、スバルは腑に落ちないという思いから質問をする。

「……何でそこまで知ってるんですか……」

「仮にも私は次元の魔女と呼ばれている存在よ？　次元を越してて

も、相手を見ればおおよそは分かるわ。もっとも、ライトとダーク……スザク達レベルの強さで無いと気付けないでしょうけどね」

「じゃあ、オレが気付けなかったのは――」

侑子同様チカラの強いツバサが気付けなかったのは何故だろう？

さらに言えば、ツバサの身近にダークは居たのだ。それなのに気付けなかった理由は……。

その問いの答えはダーク本人が答える。唇を一切動かさず、誰かに何かを説明するように平手を上に持ち上げる仕草だ。

『貴方の魔力を私とネビュラ・グレイが吸収して、あなた自身の力が弱まっていたからです。ネビュラ・グレイは貴方から魔術師としての勘を奪うために魔力を封じ、私は内側からネビュラ・グレイのチカラを奪っていたのですが、それをネビュラに知られずに行うには主の魔力が必要だったので』

『ネビュラとダークでおおよそ3割ずつ吸収したから、主の魔力はどれだけ全力を出しても4割ほどにしかなりませんでした』

『……申し訳ありません……』

ライトが補足を加えるが、それが逆にダークの心に突き刺さったらしい。

『し、しかしダークのお陰でネビュラのチカラを弱める事が出来たんですし』

「そ、そうそう。オレがいくら呼び出そうとしてもお前達が出なかったのは、応えるとネビュラに気付かれるからだろ？　気の利く事してくれるじゃないか」

『……はあ』

顔を俯かせているダークをライトとツバサがフォローして、どう

にか元気を取り戻そうとしていた時、この場に現れる訳が無い声が響き渡る。

『……己が中に潜む闇を倒したようだな。……ツバサ』

「ッ！　この声！　デューオ!?」

その声にはツバサも驚いたらしい。せわしなく首を回して周囲を見渡す。

『……今まではネビュラ・グレイを刺激しないために現れるのを躊躇していたが、もうその必要も無い』

デューオはスバル達の正面に現れた。言うまでも無いが、初めて逢った者は全員その大きさに驚いている。神経が太いのか、侑子だけは「あら」だけで済んだが……。

「いや、どうやってここにってのも聞きたいんだけど」

独り言のような返答を返されても困る。ツバサのツッコミを含めた問いにデューオは他愛も無いことと言わんばかりに答えた。

『そんなもの、私の科学力（チカラ）があればどうという事は無い』

「……あっそ」

70年代のロボットアニメのようなセリフだが、デューオがそれだけのチカラを持っている事は事実である。他の世界……マユのいる世界では、かつてデューオは地球を破壊し、その後たった数名の人間とネットナビの声に動かされ、完全なまでに地球を元通りにしたのである。

「お、大きい……」

スバルの率直な感想と呟きはデューオの耳に入ったようで、スバルの方に顔を向ける。

『……お前が星河スバル……。なるほど、真っ直ぐで素直な目だ。（……本当にそこは変わらないな）』

「？」

デューオが小声で何かを言った事が気になり、スバルは首を傾げる。だが、デューオはツバサの方に話しかける事でそれをかわした。

『……ツバサよ。本来、地球を監視する者は表の人間に関わってはいけない。……それを破れば――』

この先の事は知っている。知っていなくてもパターンで分かるだろう。

「粛清……だろ？　……デューオ、頼む。オレは……オレは生きたい」

そう思えるようになるなんて、春先でスバル達と出逢った頃には想像していなかっただろう。スバルは素直で、誰かの思いを自分のチカラにでき、さらには人の引いた線を自分の感情だけで突破しないという弁え（わきま）も持っていた。

だからツバサの計画には好都合だったのだ。周囲の思いと自分の周りを危険にさらす存在がいれば必ずその者に立ち向かう。そして、その思いに応えようと自らを奮い立たせて必ず勝つ。その確証があったからこそ、ツバサはスバルを使って自分を……自分の中のネビュラ・グレイを消そうとした。

ここまでは絶対的にツバサの予想通りだったのだ。幸いというべきか、スバルの身の回りには弁えがなっている子が多いため、ツバサの心に自分の意思だけで深く踏み込み、変え得る存在が現れなかったのである。

ツバサにとっての決定的な計算外は2つ。

1つはスバルのチカラ。それでツバサの過去を見なければ、彼は『世界中の人達のために』とツバサを倒していただろう。だが、知ってしまった事実と今までの彼との思い出が、絶対に彼を救いたいと思わせてしまったのだ。

2つ目はソラとの出逢い。彼女はツバサが引いた線も、周りが「その辺で踏み込むのを止めろ」と言うであろう線も通り越し、ツバサに関わってきた。そうして、少しずつ「もしもネビュラがいなければあいつ等と一緒に生きたい……」と思えるようになってきたのである。

「……オレが消えて悲しむ奴がいるなら、いなくなる事はできない。……そう思えるようになったんだ」

だから、そこに居て良いと言ってくれたり、自分の存在を認めてくれる者がいる以上、生きようと思えたのだろう。

ギュッ

ツバサの手を誰かが掴む。ソラはツバサの手を握って並び立つと、

手を繋いできたのが誰かを確認するためにソラの方を向いたツバサと視線を交わし、デューオに向かって言った。

「私からもお願いします。……そりゃツバサは悪い事をしたけど、それでも死ぬのは嫌なんです。……償いで辛い経験をしても、何処に行っても、生きていて欲しいんです！」

「それは僕も同じだよ。ツバサ君は僕の……僕達の大事な友達だから。今までの事に理由があるのなら、暁さんや長官ならきっと話を聞いてくれる」

ソラの言葉にスバルも応え、ゲイルやコクレン、藍川もその考えに異論は無いようだ。

ゲイルはツバサの計画を知っていて、本当は止めたかったのに目的が悪い事ではないから口出しを出来なかった。彼を呪縛から救いたいという思いは、スバルより前から抱いていたのだ。

そしてコクレン。彼に対してツバサは特にどうという思い入れはなかったかもしれない。ただ偶然、ゲンブに選ばれたから関わっただけのように思える。しかし、だからこそ彼は様々な人間や価値観が集まるバルズランドに行き、良い主に出逢えた。……その主が変態というのは置いといて。

藍川もまた、真正面からスバルとぶつかり合い、己を吹っ切るキッカケだと思えば、セイリュウの存在もあながち悪い物でもないのかもしれない。

全ては認識。我々が世界と呼んでいるのは2つあり、1つは事実として存在する世界。そしてもう1つは、認識という名の世界だ。人間は現実で起こった様々な出来事を自分の価値観で解釈して判断・

行動している。そういう意味では、人は自分の中に自分の世界を持っているとも言えよう。

だから、今は悪くて辛い事としか映らない事でも、いずれは酒の席での笑い話の1つになるかもしれない。認識の重さは、徐々に変わっていくのだから。

一同の視線がデューオに集まり、しばしの沈黙の後、デューオは腑に落ちないといった様子で言葉を発した。

『……何か勘違いしていないか？　私は、それを破れば粛清されるが、お前はまだ監視者として認めていない。色々やってくれたようだが、お前はまだ当事者側の人間だ。……そう言おうとしたのだが？』

「……あぁ、そう簡単に――。はっ？　何だって？」

許してもらえるわけが無い。そう続けようとしたのだが、現実でデューオが話した言葉で素っ頓狂な声を上げる。

『お前は自分を捨てた両親を始め、人間に憎しみを抱いていた。例えどれだけ僅かだろうと、そういった感情を抱いている時点で監視者として間違った記録を行う可能性がある。だから監視者として認めていなかったのだ』

口も目もポカーンと開いている一同。念のために言っておくと、侑子は依然としてポーカーフェイス。

だが、デューオの言っている事は納得できる事が多い。ツバサが今まで散々抜け出して世界中を回っても不問。さらには明らかに表の人間であるスバル達に関わっても今までお咎めなしだったのだ。それもそうだろう。彼は、デューオにとって表の人間なのだから。

デューオは彼らの心情を知ってか知らずか（十中八九知らないだろう）、ツバサに対して話しかける。ようやく本題に入れるといった口調だ。

『強大な悪を滅した事の褒美だ。……受け取れ』

デューオの目が輝き、スバル達の目の前に光の球が浮かび上がる。白に少しだけ紫を加えたような、そんな色。それは少しずつ姿と大きさを変え、やがて1人の少女の姿となる。

彼女の『名』は花の中にもあり、細かく分けると２００にも及ぶアヤメ科の花。日本名にすると杜若（カキツバタ）という。それを英語にすると……。

「ア、アイ……リス……？」

その花言葉の1つが、『優しい心』。まさに彼女らしい花言葉ではないか。

スバルの声にアイリスの目元がわずかに動き、ゆっくりとその瞳を開いていく。それと同時に彼女はゆっくりと下りていく。スバルとツバサは手を差し出し、アイリスはその手を受け取ってスバル達と同じ高さに降り立った。

『……ツバサ……スバルさん……ソラさんに……どうして？』

彼女が動揺しながら周りを見るのも無理は無い。ソラ達が居る事ももちろんだが、自分は確かに消えたはずなのだ。

スバルやソラ、その場にいた全員が彼女が戻った事を喜んで声をかけるが、当の本人は自分の『消えた』という記憶と『存在してい

る』という現実にアイリスが戸惑っている。
……ゲイルはおちゃらけモード突入でアイリスに飛びつこうとするが、ツバサとコクレンの拳がゲイルの頬を捉え、スザクがくちばしでゲイルの脳天を突付く。

アイリスとスバルは苦笑いを浮かべてそれを眺め、ツバサはアイリスが落ち着いたのを確認すると斜め上を指差した。
アイリスは不思議そうな顔をしながらも言われるままにその方向を向き、目を見開く事となる。

『ッ。デューオ……。あなたが私を？』

デューオは言うまでも無いとばかりに質問の肯定ではなく理由から話した。

『……キングという男の送ってくるデータは的確だが、本人の趣向と思われるような無駄が多い。お前には引き続き、人間の歴史を私に送ってくれ』
『……それじゃあ、私はスバルさん達とお別れ……？』

監視者は表の人間と関わってはいけない。表の人間に情報を開示してはいけない。だから、その立場に戻るという事はスバル達と自由に逢えない事を意味する。……いや、もしかしたら生きる事を望んだツバサとも逢えなくなるかもしれない。
アイリスの不安と悲しみ、寂しさを混ぜた声に、デューオは考え込むように黙り込み、やがて答えを出したようだ。

『……データの報告だけ中立であれば良い。……今までのように人の外からではなく、お前の望む場所からこの世界を見守ると良い……』

『ッ！　……はい』

アイリスはスバル達と関わる事を許された。彼女はその事を理解すると嬉しさとデューオへの感謝からはにかむような笑みを浮かべるが、その顔を周りに見られるのが恥ずかしかったのか、顔を俯かせてから笑う。まぁ、それでも声色から彼女の心境と表情はバレバレなのだが、それを突っ込むような無粋な輩はこの場にはいない。

そして、デューオはスバルとツバサに声をかける。

『……ツバサ、スバル……。そろそろ私は行くが、１つだけ伝えておく。……まだ、終わってはいない。その事だけは忘れるな』

「え？　……はい」

「……まだなんかあんのかよ……」

スバルの怪訝そうな声とツバサの飽き飽きな声。今回の戦いの元がツバサという点で彼が飽き飽きという態度は問題があるのだが、デューオの言うまだ終わっていないというのが気になる。

スバルやツバサはもちろん、ゲイルやソラ……一同の視線に、デューオは侑子の方をチラッと見る。まるで、話して良いかを問うように。だが、それに気付いたのは侑子以外いない。理由は洞察力どうこうではなく、単純にデューオの視線の向きが分からないのだ。

「唇動かしてないのになんで話せるの？」と問いたいくらいに無表情なため、視線の向きなんて物は分からない。

デューオの視線での問いかけに侑子は頷かない。それの意味はお分かりだろう。

『……いずれ分かる。……お前達が考えているより、早く、な』

そう言うと、デューオは霞のように消えていった。

第１６７話　デューオ（後書き）

なお、ＥＸＥシリーズで最も苦戦したラスボスはデューオだったりします。あのレーザーがね……。軽くトラウマです。

第１６８話　僕達の世界へ（前書き）

今回は『ｘｘｘＨＯＬｉＣ』の６巻と関わらせています。原作を持っている人は笑ってください（↑何に！？）。

第１６８話　僕達の世界へ

「……さぁ、そろそろ貴方達も貴方達の世界に戻らないとね。待ってる人達も多いでしょうし」

侑子は明るくそう言うと、（　無論映像の向こうだが、　）座っていたソファーに肘を付き、明るい声を一転、試すような、毒々しい声でツバサに話しかける。

「それで、ツバサはスバル君やソラちゃん達と生きたいのね？」

「……あぁ。決めたから」

だが、ツバサはその毒々しい視線に臆する事無く強い意志を込めて侑子に返す。だが、彼が見据えているのは元の世界に戻った後罪を償うといったような、近いモノを見るような眼差しではなかった。

その事とその意味に気付いた侑子は息を吐きながら応じる。ツバサが自分がこれから背負う事を予想出来てしまって、それでもその強い目を維持した事に対する感情だ。「あぁ、やっぱりコイツ（クロウ）はクロウだ」と。

「……良いでしょう。それじゃあまず、ツバサを人間の体にしないとね。共に生きるという以上、そのぐらいはしないと。……分かってるわね？　ゲンブ、セイリュウ、スザク、ビャッコ」

侑子の意味ありげな視線に対し、四神達は戸惑う事無く、むしろ待ってましたといわんばかりに答える。

『あぁ』

『よっしゃ』
『うむ』
『うん。……ソラ、スバル君、アイリス、ちょ～っちツバサから離れてくれないかな？』

上からセイリュウ、ビャッコ、ゲンブ、スザクの順。そしてスザクはツバサのそばに居た3人に離れるように促す。
スザク達四神はツバサを囲うように位置に付く。ツバサから見て、ゲンブが前。スザクは後ろ。セイリュウは右。ビャッコは左だ。

セイリュウは真剣な口調で元主であるツバサに話しかける。

『……ツバサ、分かっているとは思うが、私達が出来るのは――』
「一割程度の骨組み程度だろ？　分かってるよ』
『……行くよ』

ツバサはセイリュウに問題ないと微笑みかけ、スザクの言葉と共にその作業は始まる。四神達が創りだしたのはツバサを中心とした光の柱。形状は四角柱だ。四神達もその中に入っている。
そして、彼らが行っている内容は侑子が話してくれた。

「……あの子達は地球を構成する4大元素を司る者。人間の肉体が全て地球上の物質から成り立っているのなら、スザク達に創れないわけが無い。幸いツバサの意思……自我とも言うわね。それがハッキリしているから、形が変わるという事も無いでしょう」
「……つまり、ツバサ君の自我を設計図にして肉体を組み上げているって事ですか？」

藍川の要約に侑子はピンポーンと人差し指を差してみせる。

「あたりよ。まぁ、さっきツバサが言ったように取り戻せるのは1割が限度。……命っていうのはね、それだけ大変な重さなのよ」

スバルはゆっくりと今まで話を聞いていた侑子からツバサの方に視線を移す。彼の見た目は変化無いが、実際には細かく分解と再生が行われている。言ってしまえば代入作業だ。

そんな時、コクレンはポツリと呟く。

「……なるほどのぉ。ソラ嬢だけでなく、ワシ等も呼ばれた理由が分かった気がするわい」

「えっ？　……あっ」

スバルはコクレンの言葉の意味が一瞬分からなかったが、彼の方を向いている内にソレに気づいた。確かにツバサの説得ならソラとスバル（　スバル自身としては、何故ツバサが自分の事を気に掛けるのか分かっていない　）だけで十分で、ゲイルやコクレン、藍川のいる意味、連れてきた意味が見えない。

だが、今の状況（　ツバサが1割だけ『人間』としての命を取り戻す事　）と、ツバサやアイリスがスバルが元の世界に戻るためにしようとした事を照らし合わせると答えが見えてくる。

藍川もソレに気付いたようで、納得したように頷いた。

「あぁ、なるほど。ソラちゃん1人だけだとスバル君とツバサ君の存在は補いきれないけど、僕達がいれば――」

「全員で元の世界に戻れるって訳だね～♪」

「……ゲイル、人が結論を言おうとしている時に先に言わないでくれるかい？　結構腹立つから」

「それがイッツ・ア・ゲイルクオリティ！」

結論を奪われた藍川はゲイルを睨み、対するゲイルは中指と薬指だけ折り曲げた妙な指差し方で、『ビシッ』と藍川を指差す。

「……」

……同年代2人の間で妙な火花が散っている。コクレンは慣れきったため息を付き、ソラ、スバル、アイリスは苦笑。ツバサや四神達も忍び笑いを浮かべていた。

『……終わった』

それから少しして、セイリュウの声と共に光の柱は消え去る。4体の真ん中に立っているツバサは触れただけで消えそうなくらい儚げだ。それが『存在が1割』ということなのだろう。また、右腕も無いままだ。

その後、ツバサが「体良(ていよ)く言えば協力だが、利用だと取られても文句は無い。そう思ったならスバルだけを～」などと言っているのでソラの蹴りが炸裂。ツバサが人間の肉体に戻って始めての涙は、痛みの涙となった。

ツバサが頬と目元をさすり、ソラがムッとした顔で腕を組んでいる所をスバルは苦笑しながら侑子に尋ねる。

「えっと……それで戻り方の方は……？　……侑子さん！！」

当の侑子は「ツバサなっさけな～い♪」などと笑っていたが、スバルによる2度目の激しい呼びかけでようやく応じた。

「あら、ごめんごめん。そうね、全員で手を繋いで自分達は全員同じ存在だと思いなさい。……けど、あくまで違う存在だという事を忘れないように。でないと誰かの中で生きる事になるわ」

後半の重い口調から考えてそれは事実だろう。自分は自分だという自我が無ければ、自分を失えば他人に飲み込まれ、他人の中で自我だけの存在となる。つまりはそういう事だ。

それぞれ手を繋ぐ直前、侑子はシリアス口調でツバサに話しかける。

「ツバサ。……分かってるわね？」

「……あぁ」

「？」

「……」

スバルは2人のやり取りに疑問を抱いたが、ソラはツバサと手を繋ぎながら目を逸らした。それはこれからの事を知っているから。

……いや、厳密に言えばこうだろう。

なんとなく、察したから。

ツバサが自身の名を名乗った際、彼はソラの約束にすぐには返事を返さなかったから。

ヴゥ……。

作業の方は順調そのものだ。濃い者から薄い者へ存在は分けられ、それと共に少しずつ周囲が現実に戻っていく。

「……そろそろ輪を解いても大丈夫だろう」

ツバサはそう言うと、輪から手を離した。それは、ずっと手を繋いでいると照れくさいという感情的なものではない。

「？　ツバサ君？　ッ！　ツバサ君！　足！」

スバルの叫びだけではツバサの足がどうなっているか分からないだろう。答えは、『黒くてドロドロした何かがツバサの足元から湧き上がり、徐々にツバサを飲み込んでいる』だ。

「……全員オレから離れろよ」

ツバサがスバル達から手を離したのは巻き込まないためだった。

「侑子さん！　これはいったい！」

スバルは侑子に黒い何かの詳細を尋ね、それに対し侑子は冷静に、感情を含めない声でその正体を明かす。

「ツバサの罪」

「……罪？」

反復するスバルに侑子はコクリと頷く。

「そう。……確かにオリオンやティグレス、クラウドなんかはこの子の計画に納得していたけど、他のウィザードはどうでしょうね。

……自分達が死んだのに何でお前だけ生きる事を選ぶ。最期まで背負ってくれるんじゃないのか。……そう思うんじゃ無いかしら」

「ッ！　それじゃあ、もしかしてツバサ君の足に纏わり付いてるのは……」

スバルが言い渋る所を、ゲイルは普段のおふざけモードの声を一切排除したシリアス口調で言い放つ。

「恨みの塊……か」

「ツバサを恨んでいる者達の恨みが無くなるまでツバサはこの暗闇に閉じ込められるわ。それが、この子がこの時代に生きることを選んだ対価」

組織の指導者としての対価であり、昔に死んだはずの者が今の時代に生きる事への対価。……生きるという事の、重みだ。

ソラが察したのはしばらく逢えない事。その理由を今知って、一瞬彼の身を案じたが、すぐにその不安は無用だと思い至る。ツバサは約束に対し「そのうちな」と答えた。時間は掛かるが、いずれ逢えるという事の根拠だ。だから、彼女がとる行動は1つ。

スッ

ソラはツバサに近づいて平手を横向きに差し出す。

「……起きてみる夢も、寝てみる夢も強く願えば現実になる。……前にツバサが夢の中で言ってくれた言葉だよ。だから、私は貴方が戻ってくるまで、早く帰ってくる事を願い続ける。……この握手はいってらっしゃいの挨拶って事で」

ソラは最後に「にひひ」と子供のような無邪気な笑みを浮かべ、ツバサはそんな彼女に自然と笑みを零す。そして、自身の腕に纏わり付こうとした恨みを振り払い、差し出されたソラの手を掴んだ。

「「……またいつの日か、キミに出逢えるように」」

2人の声は重なる。

その握手は行ってらっしゃいの挨拶であり、再会の約束。

そして、ツバサの目の前からソラを始めとした皆が。ソラやスバル達の目の前のツバサが消える。目の前が真っ白となり、何も見えない。やがて、少しずつ大地の茶色や、大空の青が視界に入り始める。現実世界に戻ったのだ。

『おぉぉぉ！！　スバルゥゥゥ！！！』

「ッ！！？」

視覚よりも先にスバルに届いた感覚は聴覚だった。及び、外側からの圧力。その声と少しずつ回復していく視界で目の前に在るのは緑の電波に青い装甲。いつもそばで共に戦ってくれたウォーロックだ。

「ウォ、ウォーロック……苦しい……」

帰ってきたことを祝ってくれるのは嬉しいが、このままでは腕力

で昇天しかねない。ウォーロックはよほどスバルの事を心配したのか、思いのほかあっさりと手を離す。これでスバルはようやく周りを見る事が出来た。

（……ソラさんやゲイルさん……スザク達が居ない。……もしかして別の場所に戻ったのかな）

『おいスバル。受け止めてやれ』

「はっ？」

スバルはウォーロックの言葉で思考を中断する事になったのだが、彼の声がやたらとニヤニヤしていた事が気になった。だが、それを問う前に実感した。いや、むしろ、味わったと言うべきだろう。

「スバルくぅぅぅぅん！！！！」

「その声、ミソラちゃ――」

ズドォォォォン！！！

ウェーブロードからミソラの電波変換したハープ・ノートのタックル……もとい抱き付きが炸裂。激突音は盛大だが、ハープ・ノートの体重が０キロのため、実際の衝撃は大して大きく無い。

「ミ、ミソラちゃん！　危ないじゃないか！」

スバルは、半分本気でビビッた事と彼女の身を案じて声を張り上げる。普段のミソラなら自分を心配するスバルの心情を理解しているため凹まず、正直に謝るのだが、今のミソラから返ってきたリアクションは違っていた。彼女の顔はスバルの肩の辺りに埋もれてい

るため表情は分からないが、彼女は泣いていた。聞こえてきたのは、泣き声だ。

「……地球上から完全に消えたって聞いてホントに心配したんだから……スバル君のバカ……」

「……ゴメン」

スバルは片方の手でミソラを抱き締め、もう片方の手はミソラの頭を優しく撫でる。

『ぬおっ!?　ハープ何しやがる！　目が見えねぇ！！』

『うるさいわね。あんたが関わるのを水を差すって言うの。大人しくしてなさい！』

……ウォーロックはハープに目を塞がれているらしい。

「……冷静に声をかけるべきか、おちょくりながら声をかけるべきか。どっちが良い？」

「「ッ！！？」」

不意にかけられる声にビクッと反応して離れるスバルとミソラ。真っ赤な2人が視界に捉えたのは、暁の電波変換したアシッド・エースだった。その肩にはホログラムのセレナードが乗っている。

「あ、あかつあかつ暁さん。い、いつから？」

「ん～？　……スバルがミソラを優しく抱き締めた辺りかな？」

『妥当なラインです。シドウ』

そこを妥当に答えられても困る。
噛み噛みのスバルに対してミソラは可笑しそうに笑い、スバルが消えた後の事を説明してくれた。何でも、世界中の電波体や電波人間がスバルの捜索に当たっているらしい。

『そんな訳で、早くウォーロックと電波変換した方が良いですよ。目立ちたくは無いでしょう』
「あ、うん。分かったよセレナード。……あれっ？　フォルテは？」

協力的ではないが一緒に戦ってくれたのだから御礼が言いたかったのだが、肝心の本人が見当たらない。セレナードはどこか呆れたようにため息をついた。

『はぁ。……もう用は無いと言ってどこかに行きました』
「あはは……フォルテらしいね」

スバルは苦笑しながらウォーロックと電波変換。その後、暁がサテラポリスにスバルの生存を報告。時間が経つに連れて電波体や電波人間の数が増えてきた。

見知った電波体も知らない電波体も、自分（スバル）の生存を祝ってくれる。そこでスバルは改めて実感した。

（……帰って来たんだな。……僕は……）

その後スバルはシーサー城に戻り、暁と長官、ヨイリー博士やウォーロックを始め、ミソラとハープ、ケフェウスと大吾に自分が見

聞きした事を全て話した。まずは、特に信頼の置ける人に話そうと思ったためだ。
最初は全員驚いていたが、少しずつ冷静な色を取り戻していくのは流石だ。

結論として、その事は他言無用となった。ケフェウスやミソラ、スバルは異を唱えたが、現状から考えてそれが賢明の策だった。
エーテルは民衆の中で絶対的な悪となっており、その中にそのような情報を出せば下手な混乱を生む。それに何より、共通の敵となる事で人類を纏めるというのがツバサの計画の１つである以上、それを無駄には出来ないという考えからだ。

帰りのウェーブライナーの中、ミソラはスバルに話しかける。互いに顔は見合わせず、淡々とした口調だ。これだけの大きな戦いで疲れていない訳が無い。

「……スバル君。ツバサ君に纏わり付いている恨みって、いつ解けるのかな？」
「……分からない」

これぱかりは本当に分からない。１年後か、１０年後か。はたまた人の一生を越える長さか。それこそ、神のみぞ知るといった所だろう。

「……また、みんなで一緒に遊べるよね」

淡々としていた口調に願いとも言うべき人間らしさが入る。どれだけ歳を取っても、またいずれ笑って話せる日を願って。
その感情も思いも、無論スバルの中にもある。だからこそスバルは頷き、続けた。

「うん。……だからそれまで、この星を護るよ。……いつ彼が帰ってきても良いように」

それはソラとツバサが互いに交わした約束とは違い、自分自身との約束だ。……どちらも、誠実な約束だ。

「……うん、スバル君」

ミソラはそんなスバルに寄り添い、唐突にスバルの頬にキスをした。

「ッ！？　ミ、ミソラちゃん！？」

驚きながらも顔を赤らめるスバルに対し、ミソラは顔を赤らめながら満面の笑みを返す。

「えへへ。今のスバル君、何だかカッコ良かったから♪　それと、改めてお帰り。スバル君！」

「……うん！　ただいま。ミソラちゃん」

スバルが返事に遅れたのは、夕焼けと照れくささで赤く染まったミソラの笑顔に見惚れてしまったからである。

数日後、この戦いを経て『自分でも戦える。自分でも誰かを護れる』と知った者達が署名を行い各国の政府とＷＡＸＡ支部に陳情。その結果、治安維持という限定付で暴徒がいたら自分達の意志で戦える権利が生まれた。（今まで、サテラポリスやトランスコー

ドをもらった者以外が犯人を逮捕する事は認められていなかった　）

――――バルズランド――――

ゲイル達が戻ったのはバルズランドだった。四神にそれぞれのパートナー。そしてアイリスも一緒だ。ツバサを包む黒い恨みもゲイル達と同じ場所に移されたらしい。

壁に黒い先端を貼り付け、まるで繭（まゆ）の様にぶら下がっている。立ち上がったゲイルは暗い室内をグルリと見渡し、「ふぅむ」と納得したような声を出す。

「……ここは僕の城の地下みたいだね」

ドサッ

「ッ！　ソラちゃん！？」

ゲイルの認識の直後、膝が崩れるようにソラが倒れた。傭兵を経験しているコクレンはすぐに脈を計ろうとするが、スザクによってソレは遮られる。

『気絶しているだけだろうからそっと運んであげて。……私のチカラを無意識に使って自分の生命力を使ったんだ。今まで倒れなかっ

たのが不思議なくらいだよ』
「たぶん、ツバサ君に心配を掛けないためにって頑張ってたんだね」
ゲイルはそう言うと膝を曲げて中立ちになり、ソラの頭にそっと手を置く。
「……お疲れ様。ゆっくりお休み」

――――　一方侑子の店　――――

チーンッ！

その音はガラス同士がぶつかる音。侑子と黒モコナはシャンパンをグラスに注いで飲んでいるのだ。
割烹着(かっぽうぎ)姿の四月一日はそんな1人と1匹（？）に呆れながら睨む。
現在食事時。四月一日は菜ばしを使って皿に料理を盛っている。
「ったく、毎日毎日浴びる程飲んで！！」
対する侑子は悪びれず（　というかこの人が悪びれた事自体見た事が無い　）、マルとモロも従えてノリノリで答える。
「やっぱりお祝い事にはシャンパンよねぇ」

その言葉で四月一日は呆れから一転。気を利かせてこんな事を言う。

「今日、何か祝い事だったんすか？　先言っといてくれればケーキとか焼いたのに」

実際には『ツバサが自分の闇を振り払い、生きる事を選んだ』という事があったのだが、四月一日には言わなくて良い事だ。よって、侑子ははぐらかすべくニッコリ笑って答える。

「今日もお酒が飲める喜びを祝う日♪」

四月一日はそれを聞いて「気を利かせるんじゃ無かった」という顔をして言い捨てた。

「今日はデザートなしっす！！！」

「『いやーん」』

以上、モコナと侑子の苦情。

長い長い戦いは、こうして静かに幕を閉じる。

だが、永久（とわ）の平穏なんて有り得るのだろうか？

ズズッ……

……這い寄る暗黒。それは、平穏を崩すために在るのだろうか？

第１６８話　僕達の世界へ（後書き）

最後の蠢く者は次回作の奴ですね。……勘の良い人は気付いたかな？　それと、次話でいよいよ最終回です。……あ、後語りを除いてね。

……ふっふっふ。さて、この話に隠したある事に気付いた人ってどれだけいるんですかね。ヒントは、『バルズランド』、『歌の歌詞』。

心当たりのある話を見てからもう1回この話を見ると、「あぁ！」となるかもしれませんね♪

第１６９話　２年後（前書き）

お待たせしました。まだ登校には時間が有るので更新します。

元々１編完結の作品だったために多少無理やりですが、その設定をそのまま使ってます。エーテルやネビュラの戦いから２年後です。……スバル達にとってはね。

時系列は、『明日へ→続編１→この話と最終話』って感じです。

最初はスバル視点で、後から第３者視点になります。

第169話　2年後

……っというのが、あの時の戦い。あれから2年、あの後も（ツバサ君が元で）色々遭ったけど、どうにか乗り切ってきたんだ。

……その色々には僕やミソラちゃんを始め色んな人が関わったけど、アイリスはこっちから行かない限り逢えなかったんだよね。彼女はツバサ君を待つって言って、ずっとバルズランドに居るから。

……でも――。

「スバルー。そろそろ時間よー」

「ッ。はーい」

……下の階で母さんが呼んでる。もう行かなきゃ。今日は皆でお花見に行くんだ。もちろん母さんや父さん、ウォーロックだけでなく、ミソラちゃんやハープ、暁さん達……呼べる限りの人を呼んだから賑やかで楽しくなりそうだ。

……空が青い。今日行くのは2年前とは違う場所。近くに神社があって、静かで穏やかな場所だ。

そうそう。アイリスの事だけど、自分もお花見に参加するってメールが届いたんだ。それはつまり、ツバサ君が戻って来たっていう事。つい最近まで僕のそばにいた白猫がいないから、確かだと思う。

……あはは。ツバサ君の事だから……アイリス、別に待ってなくて良かったんだが。……とか言いそうだ。……喧嘩になって無ければ良いけど……。

「あっ、スバルくーん！」
「遅いですよ、スバル君」
「寝坊でもしたのか？」
「たしかにスバル君の寝坊は多い方だけど、ゴンタは人の事言えないわよね？」
「ぐぅ……」

上から順にミソラ、キザマロ、ゴンタ、委員長、再びゴンタの順だ。彼らの会話にスバルは苦笑しつつ、近づきながら手を振る。
暁が「どうせサテラポリスの花見もあるから～」という事で一緒に場所を確保してくれたのだ。そして、その場所をルナ達に任せたのだろう。

「あはは……。みんなお待たせ」

さて、先ほどの子供達の会話でなぜか大吾の顔が強張る。その理由はいたってシンプル。

「あ～……すまん。寝坊したのはスバルではなくオレだ……」
「「「ッ！　……」」」

その発言で委員長トリオは気まずい沈黙に陥る。同年代の寝坊だと思っていたら格段に年上の寝坊だというのだから気まずい。それも、知り合いの父親だから気まずさ倍増だ。

「「「「「「……」」」」」」

そういった気まずい沈黙は伝播し、やがて全員が黙り込む。その気まずい状況を解消したのはサテラポリスのエース、暁シドウだ。手にジュースを持っている所からして、今まで飲み物を買っていたらしい。そばにはアシッドとジャック、クインティアがいる。

「おーい、どうしたんだー？」

「……ずいぶん静かね」

『場を盛り上げるために花笠音頭（はながさおんど）でもしたらどうですか？　……ウォーロックと暁、それとジャックで』

『だからなんでオレ!?』

「「っていうかオレらも巻き添えかい!!」」

……アシッドのボケ（？）というか、からかいのキレが上がっている。それも、相手がウォーロックだけでなくて暁やジャックにも広がっている。

だが、２人のツッコミではアシッドは満足できなかったらしい。

『ダメですよ、２人とも。ここは……どうしてわざわざ、菅で編んだ笠に赤く染めた紙で花飾りをつけたものを景気づけに振ったり回したりしたのが発祥といわれている、東北の祭りの話題を出すんだ！　ぐらいのツッコミはしないと』

花笠踊りというのは東北の祭りで、１９６３年に振り付けが一元化された踊りである。一方、マニアックなツッコミ例を見せられた暁とジャックはジュースを地面に置くなりスバル達に渡すなりしながら猛烈な勢いでツッコム。

上から順に暁、ジャック、ウォーロックの順。

「分かるかそんなもん！！」
「っていうか何だその回りくどいツッコミ！　お前は西尾維新が描く作品に登場する所の、人間モドキのアホ毛高校生か！！！」
『お前も十分わかりずれぇよ！！　素直に阿良々木（あららぎ）　暦（こよみ）って言えや！！』

通称：らぎ子ちゃん。あら『らぎ　こ』よみ。真ん中の文字を中心にした名前である。小説版化物語下巻、撫子スネイクより。

閑話休題。

「おーい！」
「ふぅ。階段が堪えるなぁ」
「若いモンが軟弱な」
「あはは……デスクワークが中心だからね。コクレンさんはタフすぎ」

次に来たのはゲイルにコクレン、藍川だ。補足として、上からゲイル、藍川、コクレン、再び藍川だ。
なお、藍川は現在、バルズランドとニホン（　厳密に言えばＷＡＸＡニホン支部　）を行き来して、互いの技術を提供しあう橋渡しの役目を持っている。特定の価値観に治まる事を良しとするニホンより、数々の価値観や人間を寛大に受け入れるバルズランドの方が彼に合っていたのだろう。

「あれ？　アイリスは一緒じゃないの？」

スバルはゲイルに小声で問いつつ、この近くにはいない事を予想していた。彼女の事だからツバサのそばにいるだろう。

なお、スバルがわざわざ小声で尋ねたのには訳がある。その理由は次のルナの発言が関係している。

「……アイリスちゃん……ね……。……遺されて辛いでしょうね」

ルナは耳が良い。大抵の小声は（というか、小声の方が）聞き取れるだろう。

そう、2年前の事はスバルを始めとした一部の者しか知らない。知らされていないのだ。友人に隠し事をしているスバルも辛かったが、どこから情報が広がるか分からない。

『……私なら大丈夫。……昔のように逢う事を制限されるわけではないから、逢おうと思えば逢えるわ』

アイリスは静かで優しい声と共に実体化する。その顔に憂いは無く、ルナ達を励まそうという考えが表れていた。

ルナもその気持ちを察したのか、静かに息を吐いて気持ちを切り替える。

「ふぅ……。そうね。いつまでも落ち込んでるなんて私らしくもなかったわ。さぁ、本日は晴天！　絶好のお花見日和！　楽しむわよ！」

ルナは空いていた紙コップに飲み物を入れると乾杯と言わんばかりに上に掲げた。スバルとしても場を明るくするために乗りたかったのだが、そうもいかない理由がある。

「ダメだよ委員長。まだツカサ君とソラさん、女将さんが来てない

よ」

そう。彼らも呼んでいるのだ。ルナの方はうっかり忘れていたらしく、目を見開いて口に平手を当てる。

「あ……いけない。私ったら……」

「ふふっ。委員長も案外抜けてる所があるよね」

楽しげに会話に加わる双葉ツカサ。だが、彼の気配に気付けた人間は誰一人としていなかったため、一同はビクッと彼から離れ、ルナも持っていた紙コップを落としそうになってワタワタしている。

「「「「!!??」」」」

……もうこれで何度目だろうか。双葉ツカサという人間が誰にも知られない内に輪の中に入ってくるのは。……あれだろうか。彼はカメレオン型キメラアントの能力でも持っているのだろうか。

一方、ツカサの方はクスクス笑いながら腕を持ち上げてやれやれといった態度を示した。

「そこまで驚かなくても良いのに」

「いや、せめて遠くから声をかけながら近づく位はしてくれ。いきなりはびっくりする」

正気に戻った成人男性その1、暁シドウ。そしてその2はこの危険人物。

「キミ可愛い顔立ちだねぇぇぇぇ!!!」

変態と書いてルビはアブノーマル。ゲイル・ホワイトである。今思えばゲイルとツカサはほとんどまともに遭っていないから、ゲイルのこのリアクションにも納得である。

また、目付けのコクレンはビャッコに酒を飲まされて動きを封じられ、一線を越えようとしたら止める役目のライラは国にお留守番だ。なお、アイリスのメールによるとゲイルとライラの2人はもうすぐ結婚するらしい。

（……大変だったからなぁ……あの時は……）

スバルは苦笑交じりで何かを思い出すような遠い目をする。ツバサに逢ったら苦情の1つでも言おう。スバルがそう思った直後、彼の顔のそばを凄まじい速さで通過する物があった。

ヒュウウウウウ！　バズンッ！！

「おぶほぁ！！」

スバルのそばを通過した物体は赤いカラーリングが施されたハンターで、ツカサに頬擦りをしようとしたゲイルの頬に激突。そしてさらに、彼がのけぞった間に非情なる一撃がゲイルを襲う。

なお、ゲイルの頬の当たったハンターは地面に落ちる前にミソラがキャッチした。

「いきなりなにしやがるこの変態野郎が！！！」

『ジェミニサンダー！！』

ツカサは身の危険を感じたのか、もう1つの人格であるヒカルと

入れ替わり、容赦なく腹部に蹴りを入れ、ジェミニは自らの最強技、ジェミニサンダーをお見舞いする。

「あべばばばばっばばば！！！？」

レア（一番程度の軽い焼き方）なゲイルの出来上がり～♪

あかねや大吾、彼と面識の薄い面々は驚いているが、彼とある程度関わった人間なら慣れている。よって、スバルは一応ゲイルの身を案じつつ飛んできたハンターに目をやった。

「……そのハンター……」

「ソラさんのだね。……って事は……」

ミソラは手元にあるハンターから、ハンターが飛んできた方向に視線を向ける。そこにはソラと女将、そしてスザクが立っていた。女将とソラは着物を着ている。……おそらく、女将から着ろと言われてそのまま押し切られたのだろう。

普通なら優雅に見える着物姿も、両手を腰に当てている勇ましいスタイルがまとめてそれを打ち消している。直後、ソラは女将から怒られた。

「あなたも着物を着ている以上はそんな事はしない！」

「ご、ごめんなさい……」

『いや、でもあのままだったらあの緑髪の子ゲイルに襲われてたわけだし』

上から順に女将、ソラ、スザクの順。スバル達の下に向かいながらそんな会話をしている。その後、合流。何でも、ソラが寝坊したらしい。

「へぇ～。ソラさんが寝坊なんて珍しいですね」

スバルの率直な感想を女将は手首を振って否定した。

「そうでも無いわよ。最近多くなってきたから。……でも、本当にどうしたのかしら」

「いや～何でだろうね～」

女将のさりげない心配を、ソラは明るく笑って誤魔化した。なお、今の彼女の髪型は着物に合うようにストレートだ。

アイリスがお花見に参加するという事はツバサが戻ってきたという事。それはソラも察しが付いているだろうが、彼女は機嫌が良い等のいつもと変わったそぶりは全く見せない。いつか必ず逢うという約束を、彼を想い続ける柱にしているのだろう。

（……けど、それだけじゃないような……）

スバルの探るような眼差しを感じたのか、ソラはスバルの方を振り向き、からかうようなにんまり笑顔を浮かべる。

「あれあれ？　何でスバル君はこっちを見ているのかな？　ミソラちゃんという可愛い子がいながら」

「ッ！　いやっ！　別にそういう意味で見ていたんじゃなくて！！」

「……私も着物着た方が良いのかな……」

ミソラはどこか凹んだ様子で自分の服を摘んでジッと眺める。それに対し、ウォーロックや大吾、委員長トリオなど、その場にいたほとんどの面々がスバルに咎める様な声を送る。

「「「「『『『ス～バ～ル～？」」」」』』』

逆にスバルを咎めない人はほとんどいない。咎めない者といえば精々、関わりが薄いながらもスバルの初心さを理解している女将と、似たような経験があるのか、同情するような目をしている大吾くらいだろう。

四面楚歌状態になったスバルはヤケ気味に叫ぶ。

「～～～～ッ！　もうっ！　分かったよ！　……ミソラちゃん、ごめんね。……それと、えっとさ……せっかくだから2人で桜を見て回らない？」

「……私で良いの？」

ミソラは自信無さ気にスバルの顔を窺い、対するスバルはハッキリと迷い無く頷く。

「もちろんだよ。……さぁ、行こう」

スバルは立ち上がり、座っているミソラに手を差し出した。誤解をさせてしまったお詫びに、2人きりで桜を見ようというスバルなりの気持ちだ。

「……うん」

そうして2人は歩いて行く。他の者は微笑ましくその光景を見ていたから気付かなかっただろう。ソラとミソラが互いにウインクを交わしていた事を。

実は、ミソラとスバルが2人で桜並木を巡れるようにというソラのとっさのアドリブだったのだ。ミソラはそれに気付いて合わせたという訳である。

だが、アイリスはミソラの視線を辿ってソラを見て、おおよその察しが付いたらしく小さくため息を付いた。及び、袖を引っ張る。

クイクイ……

「ん？　何？　アイリスちゃん？」

『……耳貸して』

「？」

アイリスの身長ではいくら背伸びしてもソラの身長には届かない。よって、ソラがアイリスの顔の位置まで体を下げると、アイリスはソラの耳元で囁いた。

『《……この神社の御神木（ごしんぼく）にいると思う。……そういう場所、好きみたいだから》』

誰が、という補足は不要だろう。アイリスがソラに話したという時点で、答えはおのずと決まってくる。

「ッ！　（ありがとう、アイリスちゃん！）」

ソラが駆け出そうとした時、それに気付いたルナが呼びかける。

「あら？　何処に行くの？　ソラさん」

「ちょっとお散歩！　行ってきます！」

元気に駆けて行く後姿を見て、女将はクスッと微笑んで呟く。

「（……行ってらっしゃい）」

何故嬉しそうなのか。どの位まで行くのか。保護者として気になる所ではあるが、アレだけ嬉しそうなのだから悪いモノには関わらないはず。それは親としての、娘への信頼だ。

第１６９話　２年後（後書き）

クックック……ゲイルとライラの話は驚いたかな？　次話がいよいよ本編最終話です。

それに伴い重大発表もあります。

最終話　明日へ……（前書き）

この話はしょっちゅう場面が切り替わりますのでご注意を。……
キャラクターの言葉使いは結構違うので大丈夫かな？

今回はお守りの意味も明らかになります。

重大なお知らせは後書きと活動報告に書きます。

最終話　明日へ……

ザッ　ザッ

「あぁもう！　走りづらい！！」

ソラは出来る限りの全速力で走っているわけだが、草履（ぞうり）というのは実に走りづらい物。元々着物と草履はゆったりした動きの中の優雅さを示すのに向いている訳だから、走るのに向いているとは言いがたい。それに何より、ソラは昔から着物と慣れ親しんできたため、着物と草履に負担を掛けるのを防ぐために、無意識に自分の速度を緩めてしまう。

だが、流石に目の前の関門は走るのを諦めた。

「……５０段くらいあるかな～？」

彼女が乾いた笑みを浮かべながら見上げるのは石段だった。中央に銀色の手すりがあるが、それも確たる手助けにはならないだろう。ソラは呼吸を整えてから登り始める。

一方、スバルとミソラは道筋がてら買った缶ジュースを手に、青いベンチに座って歓談している。

「でも、ホントに戻ってきたのかな。やっぱり自分で見ないと実感

が無くて」
「うん。間違い無いと思うよ。こないだまでいたＬｉｇｈｔ（ライト）もいないし。多分ツバサ君の所に戻ったんだと思う」
本当にツバサが戻ってきたのかと尋ねるミソラにハッキリと答えるスバル。つい最近までスバルの元にはＬｉｇｈｔがいた。もっとも、女性の姿ではなく白猫の姿になっていたが。
「……」
「ん？　どうしたの？　ミソラちゃん」
不意にミソラがスバルをジッと見つめて来たためキョトンとするスバル。ミソラは元が元（つまりは可愛い）なので、スバルとしては見詰められると照れがあるだろう。
ミソラは「大した事じゃないんだけど」と前置きをしてから言った。
「……スバル君、何だか鋭くなったよね」
「えっ？　そうかな？」
自分ではそんな自覚は無いのだが。
スバルは片方の眉を下げながら首をかしげ、ミソラは真剣な目でコクリと頷いた。
「うん。機転が利いて頭が良いな～っていうのはずっと思ってたけど、私みたいな女の子の心を良く気付くようになったり。２年前とは大違いだよ」（　……自分で言う言葉は相変わらず無自覚だけど）
「……それは、２年前の僕が鈍感の極みって事……？」

真剣な目で言われたからショックも倍だ。まぁ、真剣な目で言ったのはミソラの天然として、実際事実な訳だから言い訳も反論も出来ない。

「あ……ご、ゴメン。スバル君。そこまでの意味で言ったんじゃなくて……」

凹んだスバルをフォローするためにオロオロワタワタするミソラ。スバルは若干痛々しい笑顔（まだショックから完全に立ち直っていないからだと思われる）を浮かべながら「大丈夫」とミソラに言い、視線を上に向けて風に舞う桜を眺める。

（……けど、どうしても分からないんだよな。……どうしてツバサ君は――）

「アイリス、ツバサがスバルをあそこまで気に掛けた理由、知ってるか？」

周囲が賑やかになって、ルナ達の耳に届かなくなったのを待ってから暁は尋ねる。2年前からずっと気になっていた事だ。

なお、ベンチでスバルが疑問に思った事と同じ内容だったりする。

ツバサの計画の鍵はスバルで、彼自身の素質は暁も十二分に認めている。だが、アイリスにさえ自分の計画を全て明かしていなかったあのツバサが、スバルの事をそこまで評価するだろうか。アンド

ロメダなど地球を救った事実を差し引いても、ツバサのスバルに対する評価は大きいと言わざるを得ない。

その理由をアイリスが知っている保障は無いが、確率で言えば高いだろう。そしてその予想はドンピシャだった。アイリスは周りを気にしながら暁に口を開く。

『……これも他言無用でお願いします』

いきなり前置きで口止めが来た。暁はとりあえず頷き、それを見たアイリスは静かな口調で話し始めた。

『……スバルさんは、光君の子孫だから』

「はぁ……はぁ……やっと……登り切った……」

『大丈夫？　ソラ？』

「な、何とか……」

一方、ソラの方は階段を登り切った所で、息は絶え絶えだ。スザクの気遣いに答えながら、ソラは辺りを見渡す。

ここで周辺の説明を行うと、ソラの正面には大きな桜の木があり、しめ縄が巻かれている。その奥には神社の境内がある。

「あっ」

いきなり見つけてしまった。真っ直ぐ正面の位置にある、大きな桜の木の根元に立っている。2年前に別れた時同様黒いローブを着

ており、背はいくらか伸びただろうか。
彼はソラの気配に気付いたのか、首を動かしてソラの方を向く。

「久しぶり。元気そうだな」
「ッ！　クロウこそ！」

ツバサ……クロウ・リードと逢ったのは、彼女の場合2年ぶりではない。その間起こった戦いの中、1回だけ姿を現した。また、彼はソラ以外にまだ自分の名前を明かしていない。だから、周囲に彼と自分しかいなければツバサではなくクロウと呼ぶ事にしていたのだ。

ソラは再び駆け出し、スザクも実体化してクロウの元に向かう。

「ッ！　わっ！」

が、もう手が届くという距離でバランスを崩して転びそうになる。

「っと。……着物姿でそんな慌てて走るバカがいるか」
「あはは……嬉しくてつい。……あれっ？」

ツバサに受け止められて事無きを得たのだが、違和感があった。
彼の右腕は2年前の激突で失ったはず。それなのに、今自分を受け止めたのは他ならぬ右腕だったのだ。

「……すまない。どういう事か理解できないんだが……。スバルが

あの光　熱斗の子孫？」

アイリスの唐突なカミングアウトに対し、自分の中で情報の整理に追われる暁。アイリスは暁の困惑を解消するためにも順を追って説明する。

『まず、ツバサは光君達に違う苗字を付けた。それで、光君の家に付けたのが星河。……強すぎる【　光　】は周りから見つけられやすいけど、【　星河　】……つまり天の川のたくさんの光の中に隠してしまえば――』

「……見つけられないって訳か」

暁の呟くような結論にアイリスはコクリと首だけで頷く。『星河』から連想されるのは夏の夜に煌く天の川。たくさんの光（恒星）が魅せる芸術。木を隠すなら森の中。光を隠すなら光の中という訳だ。

『だから、星河というのは良くないモノが星河家を見つけられないようにする護り名。……来斗さんに、子孫に受け継がないようにって言ってたから、大吾さんも知らないと思うわ』

事件の巻き込まれやすさまで受け継いだみたいだけど。

そう苦笑するアイリスを見ながら、暁は思考を廻らせる。

（……けど確かに、似ている部分は多いな。鈍感だし。寝坊が多いし。紙と目の色も似てるし）

そして様々な人と関わり、味方にしてしまう真っ直ぐさも。おまけを言えば、熱斗は幽霊と関わった事もある。そっち方面の素質も、その代からあったと言えるだろう。

最後に、アイリスはこう締めくくる。

『……ツバサと来斗さんは言い争う事が多かったけど、本当は互いに信頼していた。だからツバサは、スバルさんの事を気に掛けていたんだと思います』

「……なるほどな」

大事な親友の遺した遺産……血筋とでも言おうか。その血筋という名の遺産を気に掛け、スバルを……というか星河家を見守ってきたのかもしれない。そして、スバルが親友の血を継ぐ者だからこそ、あそこまで信頼したのかもしれない。

一方、ソラが自分の右腕を見詰めている事に気付いたツバサは納得がいった様に説明した。その表情は酷く優しげで、2年前に関わっていた頃と大きく違う。彼を自分で追い込むように仕向けていたネビュラいないから、その柔らかい表情も納得だ。

「あぁ、これか。……恨んでた奴らな、許してくれるって……。自分達がお前の腕になるってさ」

本来、電波体であるウィザードは人間の肉体になれるはずが無い。だが、現実としてそうなっている以上、それ相応の理由がある。

ソラはその理由を尋ねようとしたのだが、その前に上空から舞い降りるモノがいた。

『……その娘がお前が逢いたいと言っていた者か』

「ッ！　カラス！？」

『にしてはでかいね……』

ツバサが差し出した腕に舞い降りたのは真っ黒な鴉。だが、人の言葉を話し、体長が５０センチを越えているカラスは今まで見た事が無い。羽を広げれば、幅が１．５メートル近くにまでなるだろう。

驚いているソラとスザクに、クロウは安心させるような微笑を浮かべながらそのカラスを紹介する。

「紹介するよ。こいつはジーク。オレが強引に連れまわしている奴だ」

『……この小僧にチカラと名を奪われている。そう警戒せずとも危害は加えん。他の世界というのに興味があったから付いて来ているだけだ』

他の世界。その言葉でソラには大方の予想が付いたらしいが、同時にクロウにとって都合の悪い事も思い出したらしい。

「……ねぇクロウ」

「ん？　なに？」

「キサヤとずいぶん仲良かったね～。キスまでは行かなかったから許すけど」

「……寛大なご処置ありがとう」

クロウ、ソラのジト目に絶賛冷や汗中だ。そして、ソラの方は目を閉じて手を横向きに振る。

「いえいえ。……けど、キス以上いったら２つの意味でやくからね」

及び、睨みつける。２つの意味とは、『嫉妬を妬く』と『物質的に焼く』という事だろう。だが、ソラの事を慕っているスザクの方

はそうも穏やかに行かなかったらしい。……脅しを掛けておいて穏やかという言葉も合わない気がするが……。

『……けど、心配掛けた分は支払ってもらうよ』

スザクの周囲の熱が上がって陽炎が沸き立つ。まだ4月だというのに。ツバサはソラに説得お願いという視線を送り、ソラはしょうがないという態度を装いながらスザクを止める。

「スザク、落ち着きなって。今のツバサは生身なんだからさ。デューオの膜が護っているわけじゃないんだよ？」

『大丈夫、後遺症が残らない程度に殺るから』

「……やるの字が殺るになっているのは気のせいか？」

その後、ソラの静止を無視してスザクは攻撃を開始した。

スザクがツバサを炎で襲い、ソラと黒い鳥がそれを見ている。それは、かつてツバサが学園祭の時に見た視た夢と同じだった。

そしてその様子を物陰から見ている人物が1人。……鏡の中から見ている人も含めれば2人だろう。

「……こうなるの知ってたんですか？　侑子さん」

ゲイルの問いに侑子はニッコリと微笑みながら答える。賑やかになるさなか、ゲイルはスバル達がいるシートから抜け出していたのだ。彼の手にある鏡も、スバルのポケットからこっそり拝借した物である。

「えぇ。……ツバサが自分の視た夢をソラちゃんに話して、その後ソラちゃんがお守りを渡したって事を聞いてからね」
「？　お守りですか？」
そのお守りには未来を変える力があるのかとメルヘンチックな考えに一瞬陥るゲイルだが、侑子はやんわりと否定した。
「夢買いって言ってね。自分の見た夢を話した後、誰かから何かをもらう事で相手の夢を買う事よ。それでソラちゃんはツバサの見た夢を買って、それが正夢になったって事」
「なるほど」
お守りその物ではなく、お守りを渡すという行為に意味があった。夢買いも、れっきとした取引なのだ。あながち、未来を変えたといっても過言ではないのかもしれない。
そしておそらく、クロウがこの未来を知っていても侑子には言わなかっただろう。それは、ツバサとソラに対して『野暮』という事になるのだから。
そして侑子は「それに」と続ける。
「それに、面白い事が起きるかもね♪」
「？」
『ジーク！　離しなさい！　私の方が先輩よ！！』

『……なんのだ』

一方、クロウ達の方は、見かねたジークが自身の羽から黒い鎖を出し、スザクの羽を縛って事無きを得た。クロウは少し息を切らせながらジークに礼を言う。

「ふぅ、サンキュ、ジーク」

『不本意だが、主は護らなければならないのが従者の役目だ』

そのジークの言葉は誤魔化しや照れ隠しなどではなく、れっきとした本音だ。彼は自分の意思でクロウの味方ではないのだから。

『ちょっとしたおちゃめのつもりなのに……』

「まぁまぁ、そう拗ねない」

ブツブツ言っているスザクをソラは宥めている時、ツバサは思い出したようにソラを呼ぶ。

「あぁそうだ、ソラ、ちょっと手を出して」

「？」

「……ヴィ・ラ・プリンシア」

彼はソラの手を取り、そう言った後、彼女の手の甲にキスをした。

「ッ！！？　ヴィ……ヴィ！？」

突然の事と彼の言った知らない言葉が一緒くたになってソラは混乱。対するツバサはソラのリアクションを心底楽しむように、笑いを堪えながら彼女の手を離した。

「ヴィ・ラ・プリンシア。我が唯一の姫君って意味。……この次元に来る前、侑子さんに頼まれてセレス国って所に行って来たんだけど、そこの王様から教えてもらった。未来で必要になるとかで、フローライトって石を過去に戻って届ける仕事。……って、聞いてる？」

ソラが若干顔を赤らめてポーっとしているのでクロウは彼女の目の前で手をヒラヒラと振る。

「はっ！　ご、ごめん。いきなりだったからつい……。唯一の姫君……。そう言って貰えると嬉しいな」

「どういたしまして」

ソラは照れくさそうに、嬉しそうにはにかみ、ツバサも笑みを返す。だが、次の瞬間、ソラは電光石火のようなスピードでクロウの両頬を押さえる。

「隙あり！」

「ッ！？　……」

それは口付けだった。手の甲ではなく、唇同士の。まぁ、身長はソラよりツバサの方が高くなっているため、ソラは背伸びをする必要があった訳だが。

唇を離した後、ソラはイタズラをするような笑顔を浮かべて舌を出す。

「へっへー。お返しだよ♪」

「あいっかわらず負けず嫌いだよな、お前って」

ツバサはそう言って苦笑すると、優しくソラを抱き締めて耳元で

囁く。

「……改めて、ただいま。……ソラ」

ソラもまたフッと穏やかな笑みを浮かべると目を閉じて抱き締め返した。

「……お帰り、クロウ」

「……これ以上は野暮かな」

ゲイルはそう言って暁達の居るシートに戻り、ソラの方は視界の端で捕らえた風に舞う桜の花びらを見て、ある事を決める。

「……クロウ。……あたしさ、将来女の子が生まれたらさくらって名前にする」

大好きな人が帰ってきた時に咲いていた思い出の花だから。

「……それは良いかもしれないな」

そして、桜はクロウにとっても好きな花。

2人にとって、好きな花。

ここであえて、侑子が言っていた『面白い事』を明かそう。クロ

ウの何世代も後に生まれた子孫、小狼（シャオラン）とさくらが同じ歳なので、さくらは通常なら何世代も後に生まれる事となる。しかし、それはあくまで通常なら。

こう仮定すればどうだろう？

もしも、ツバサのいる次元の流れる時間が、他の次元に比べて遅かったら。

もしも、それがツバサの過去に囚われる思いによる物だったら。

それはあくまで仮定だが、別の次元のクロウはたった一瞬「もう一度目を開けて欲しい」と願い、彼の魔力はそれに応え、死に逝く人を生と死の狭間に留めさせた。それだけの魔力をツバサが持っているのなら、過去に囚われる彼の思いで時間の流れが遅くなっても可笑しくは無い。

そして今、彼は過去に囚われず、今を生きている。今まで留められていた時間が一気に流れるのなら、遥か未来に生まれるはずだった者が生まれる事も有り得る訳だ。

「さて！　そろそろ歩こうか。スバル君」

一方スバルとミソラ。ミソラが空になった缶ジュースを持って元気良く立ち上がり、スバルに手を差し出す。スバルもまた飲み終わっていたため、快く頷いた。

「うん。もうちょっと桜並木を歩きたいからね」

スバルとミソラは手を繋いで歩き出し、ポロリとスバルはミソラに話しかける。

「……ミソラちゃん」
「ん？　何？　スバル君」
「……これからも、僕がキミを護るから」
「……無自覚言動？」

ジト目のミソラに、スバルはニコッと微笑む。

「自覚有り」
「ありがとう、スバル君♪」

ミソラは若干照れたような笑みを浮かべてスバルの腕に抱きついた。

変わらないモノなど何も無い。ツバサが変わったように、スバルもまた、成長という変化がある。戻るか進むか。変わるというのは2つあるが、どちらが良いとは断言できない。必要なモノは、人によって違うのだから。

……僕達はこれからも、様々な人、様々な物、様々な出来事を識(し)

りながら進み続けるだろう。そして、未来を生きる者たちのために、しなければならない事もたくさんある。
だけど諦めてしまっては、惰性に従って坂を転がる小石のように、変えられる事も変えられなくなってしまう。

自分で考え、選び、行動する……。

それにより未来が変わるのなら……。僕達は歩き続ける。たとえどれほどの過去と罪を背負おうとも、未来を生きる人達が当たり前に笑って生きられる世界のために……。

未来に向かって……。明日へ向かって……。

最終話　明日へ……（後書き）

なお、熱斗が幽霊と関わったのはＥＸＥ４です。……実況動画で亜蘭さんが戦った子だね。

さて、これで『明日へ』はお仕舞いです。長々とお付き合い頂き、まことにありがとうございました。

重要なお知らせですが、キャラクター人気投票を行いたいと思います。そして、『後書き』ならぬ『後語り』に出てアシスタントを行ってくれるキャラクターはその投票でトップ２のキャラとなります。

後書きにルールまで書くと長くなるので、活動報告を参照してください。

後語り（前書き）

今回は次回作のＣＭ含め好き勝手喋ります。

後語り

【さて、なんだかんだで『明日へ』という小説も最終話を迎え、後はこの後書きならぬ後語りのみとなりました。色々ウラトークをしたいと思います】

「まどろっこしい挨拶無しでとっとと本題に入ったらどうだ？」

【あはは……ごもっとも。自己紹介も無しでいきなり作者にタメ口を叩いてくるのは早々いません。代わりにご紹介しましょう。キャラクター人気投票第１位――】

「ツバサです。よろしく」

【……名前だけ自分で言いやがった。それに読者さんには敬語……。ごめんツバサ。久々の本編以外での登場悪いけど、扱いの差にむかつく】

「やるのか？」

「まぁまぁ、ツバサ君も作者さんも落ち着いてください」

「だからといってもな、スバル。売られた喧嘩は――。あれっ？　スバル？　って事は……」

【そう。人気投票第２位は星河スバルです】

「えっと、みなさん。僕なんかを選んでくれてありがとうございます。……やっぱりこういうのは……」

【恥ずかしく思う事は無いけどねぇ。誇っても良い事だよ】

「そうだな。……っていうか作者、何でスバルには苗字付け？　お前こそ何この扱いの差」

【スバルの方は礼儀正しいし素直だからね。その点ツバサはどうかな？】

「……作者、他の投票はどうなってんだ？」

【……無理やり話を逸らしたな。……まぁいいや。１１人からの投票で、人気投票の結果は以下の通りです。投票数が同じ場合は順位を同じにしています】

第１位　ツバサ　９票

第２位　スバル　４票

第３位　ミソラ　２票

同位　ソラ　２票

同位　ソロ　２票

第４位　ネビュラ・グレイ　１票

同位　暁　１票

同位　スザク　１票

【って所かな。投票、本当にありがとうございました】

「ツバサ君すごいね、圧倒的じゃん」

「あぁ、オレも驚いた。……大抵がスバルとオレ、オレか他の奴の組み合わせだったみたいだな」

「僕の方はミソラちゃんとキミの組み合わせだったね。……ところで作者さん、何で1人の投票を2票に？　この場に出すのが2人だとしても、別に投票自体は3票とかでも良いと思うんだけど」

【おっ。良い所に気がついたね。実はそれにも理由があってね。実は……】

「「実は？」」

【1回で投票できる数が多いと読者さんの中でスパパンと決まる可能性があったため2票にしました。……あ～どれにしようって悩ませるためにね」

「ッ！！　ドSな理由が来た！！」

「諦めろスバル。これが作者だ。……作者、オレからも質問があるんだけど」

【ん？　キミが質問とは珍しい。どうぞ？】

「……オレっていうキャラに自分を重ねてねぇ？　価値観とか色々と」

【……そうだね、そう思われるのも無理からぬ事だし、実際そういう面もある。親ってのはこうであって欲しいとか、自分で考える事

を放棄して欲しくないとか、色々伝えたい事があったからね。伝えたい事を伝える時、地の文だけで足りるか不安だったから。……さて、話は変わるけど、キミ等含めて小説を書けた事に感謝しないとね】

「？　なんでですか？」

「……あ～そういや作者、小説書き始めてから少しずつ変わってきたよな。なんつぅか、人間っぽくなった」

【……言葉に容赦を持てこら。……けどまぁ、その通りなんだよね。中学の時の経験で自分の好きな分野や好きな事、言葉使いやマナーなど、色々なものを忘れたから、それをいくらか思い出すキッカケになったよ。……全部取り戻したのかどうかは分からないけどね。だから、小説を書けた事や関わってくれた人達（　読者さんや作者仲間　）には感謝しています。もちろんツバサやスバル達の様なキャラクターにもね】

「……精神的なショックで記憶の一部を失う事は確かにあるけど、作者の同年代には嘘とか偽善者とか言われそうだな。トンデモ経験過ぎる」（っていうかそういう経験が多いだろお前。高校の時の心霊体験とか）

【その辺はしょうがないね。人は自分にとって都合の良いモノしか信じないから。その辺はオレも理解してるし予想も出来てる。……さて、そろそろ次回作のコマーシャル（？）と行きますか】

――――星河家――――

ツバサが恨みの闇に囚われてから数日後。

「それじゃあ皆さん、今までお世話になりました！」

ミソラが荷物を両手に持って、元気な挨拶でペコリとお辞儀をする。彼女は星河家を去るのだ。タクシーの運転手には待ってもらっている。

元々ファイブエレメントへの対策としてツバサがスバルの家に住めるようにした訳だが、ファイブエレメントという組織も無くなり、その措置を行ったツバサもいないため、ミソラが星河家にいる理由がなくなったのだ。彼女は歌手活動に戻るらしい。

「またいつでもいらっしゃい」
「これからもスバルの事を頼むぞ」

あかねはひらひらと笑顔で手を振り、大吾はグッと親指を立ててみせる。大吾は大抵仕事なため、ミソラが来るであろう日中にはほとんどいないだろう。だから、息子の事を頼むと言ったのだ。
だが、スバルにとってその言葉は大袈裟だったらしく、恥ずかしそうに顔を赤らめて大吾を見る。

「父さん！」
「ははっ。すまんすまん」

大吾は右手を縦に顔の前に出してスバルに謝り、スバルは憮然としたため息を付く。

「もうっ。……ミソラちゃん、元気でね」
「うん。……スバル君も」

スバルとミソラが見詰め合っている中、あかねは微笑ましく、大吾と予め呼んでいたタクシーの運転手は居心地悪げに苦笑いを浮かべている。

『ハープ、ここは見詰め合った後チューじゃねぇのか？　グオッ！？　何しやがるハープ！！』

『ミソラ、行く時になったら言ってね。それまでコイツに制裁を加えてくるから』

『やめろぉぉぉぉぉ！！！』

ウォーロックはハープに首根っこを掴まれて拉致られてしまった。

その後、星河家の裏から殴る音が聞こえてくる。

ミソラは苦笑いを浮かべながらスバルに話しかけた。

「それじゃあそろそろ行くね。……早く行かないとロック君が大変だから」

「うん。そうだね」

対するスバルも苦笑いを浮かべ、アカネと大吾、タクシーの運転手は思った。結局、２人の時間を短くしたのはハープなのではないかと。

そうしてミソラは星河家を後にした。

だが、それはあくまで平和な場所での出来事。世界の片隅で、異変は静かに起きていた。

――――ロンシャ――――

「うぅ……飲みすぎた……」

酔った男性がフラフラした足取りで木に寄りかかる。男性といっても２０代前半……いや、もしかしたらそれより下かもしれない。

ピチョン……

そばで聞こえる水の音。そして肩に何かが触れる感触。

「ん？　……なんだ水滴か」

どうせなら酔いを醒ますほどの量が来ないかな。

若者はそう思ったが、すぐにその考えを消した。ヤケ酒をして怒りを納めたのに、再度ヤケ酒をする理由を作ってどうする。

それは他愛も無い日常的な怒り。酒を飲んで一晩すれば治りそうな怒りと悩み。

しかし、若者は運が悪かった。そのモノがいる前で、怒りを示すべきでは無かったのだ。

ピチョン……

再度肩に落ちる水滴。若者はイライラした口調で木に怒鳴る。

「あぁもう人が嫌な気分の時にボタボタ落としやがって！　……えっ？　あれっ？」

肩の水滴を落とすために、若者は手で肩を払う動作をしたのだが、その際視界の片隅に入った色に戸惑った。

自分の手にある黒い色。質感から考えてそれが肩に落ちた物なのだろうが、真っ黒で全く光を反射しない水なんて見た事が無い。

「なんだってんだ……」

恐る恐る上を見た瞬間、若者の顔目掛けて真っ黒な水が落ちてくる。バスケットボールほどの大きさで、上から降り注いでいるであろう街灯の光を通さず、ただひたすらな闇が若者の顔に降りかかる。そして、それだけでは終わらなかった。

「ッ！！　何だこの水！　オレの……ガボッ！　口に……ッ！！」

黒い水はまるで生きているかのように若者の口や鼻、体内に通じる穴から入っていく。

「ゴボッ……」

ドサッ……

やがて若者は白目を剥いて倒れてしまった。そして次に目覚めた時、若者は人間とは違う存在となっていた。

『……中々使えそうだな。この体』

いや、厳密に言えばこうだろう。若者の姿をした何か。その後、若者は行方不明となり、警察の捜索空しく、近辺で見つかる事は無かった。

――バルズランド――

ゲイルがライラの部屋の前で深呼吸をしている。彼の手には小さい箱がある。

「すぅ～。……よし。……ライラ～いるかい？」

そう言いながらドアをノックするが、部屋から帰ってくるのは沈黙。

「？　ライラ～？　ッ！！　これは……」

気になって開けてみると、部屋は荒らされていてライラの姿は無かった。一瞬誘拐かと思ったが、ゲイルの城のセキュリティは厳重。ツバサを待つついでという事でアイリスも城のネットワーク管理に協力してくれているから、運動面でもハック面でも、よほどの技量が無ければこの城から出る事はかなわない。

有り得るとすれば……。

「……自分で……出て行った？」

ライラはかつてスパイをしていたから体力面でもハック面でも申し分無い。だが、その理由は分からなかった。分かる訳が無いのだ。……ライラ本人でさえ予想も出来なかったし、望んで出て行った訳では無いのだから。

異変は静かに、歩みを進める。

【ってのが、1つめの次回作、『流星のロックマン　SECRET（シークレッ）STORY（トストーリー）』。エーテル……つまりツバサとの戦いが終わってから最終話までの、2年間の間に起こった話です。今書いたのはプロローグみたいなものね】

「あの戦いも大変だったよ」（↑記憶を『明日へ』の最終話に合わせているので記憶有り）

「待て待てスバル。こっちも大変だったぞ？」

【そんな訳で、それと平行して起こっていた物語のプロローグのプロローグをどうぞ】

暗い闇の中。恨みの声。その場所に、少年はどれだけ長くいただろう。……いや、実際には大して居ないのだろうが、酷く時間がゆっくりに感じる。

（……それだけたくさんの奴がオレを恨んでいたって訳か）

ツバサは嘆息を付きながらもその恨みを受け入れる。それが彼の咎なのだから。

「はじめまして」

そんな中、彼の頭に澄んだ声が響いてくる。いつも聞いている恨みの声とは違う。優しげで、儚い、女性の声だ。言ってしまえばテレパシーのような物だろう。よって、声の主は見えない。

（……誰だ？　っていうかこんな所にどうやって……）

ツバサの頭の中での問い。頭の中に直接声が響いたのなら、逆に相手に送る事も出来るだろう。現に、その声の主は答えてきた。

「……私はリュート。聖王国アシュリアーナを治める王女です。次元の魔女から貴方の事を聞きました。私の城にある強大なチカラを秘めた石を対価に、貴方と話させてもらっているのです」

つまり、侑子の毒牙にかかった訳か。

ツバサは侑子に知られたら怒られそうな納得をし、用件を尋ねる。それに対する返答は以下の通りだ。それを答えるリュートの口調は重く、苦しげで、寂しそうだった。

「……私は近い未来、業を背負いし魔王に殺されるでしょう。そして……人々を救う勇者も……。そうならないように努力はしますが、あの方は私を傷付けない為に……自分だけが犠牲になろうとして……」

（……結局誰も助からない、か）

「……おそらく、勇者の仲間は牢獄に閉じ込められるでしょう」

生きていられるだけマシとは、口が裂けても言えない空気だ。少なくとも、リュートにとってはそれだけでも辛いのだろう。

「だから、貴方はその仲間達を解放してください。……せめて、自由にさせてあげてください」

（……その後戦うか退くかはそいつらに任せるって訳か。……他人想いな事で。……引き受けたいのは山々だが、オレはこの闇に囚われている。しばらく外には出れない）

「……侑子さんから聞きました。それはあなたの罪だから逃れられる物でも無いと。……ですが、貴方の失われた腕の代わりとして宿らせれば、罪を背負いながらも私のいる世界に来れます」

『それだけだと、貴方の入っている闇の繭が無くなって大騒ぎになりますよ。……私が主の姿となって囚われます』

リュートの提案に意義を立てたのはツバサの魔法の1つ、ＭＩＲ（ミラー）ＲＯＲである。宿主たるツバサの中から全て聞いていたらしい。なお、スザク達四神は完全にツバサとは独立しているからこの会話は聞こえないだろう。

（……大丈夫なのか？）

ツバサの心配する声に、ミラーはクスッと微笑む。

『私が主の姿を真似た時、恨みを持つ者達を欺けたとしても1割が限度でしょう。……そのくらいなら大丈夫です。……早く帰ってきてくださいね。ソラさんとの約束を護る為にも』

またいつの日か、キミと出会えるように。それがソラと約束した事だ。ツバサは意を決し、リュートに話しかける。

（……頼む）

「分かりました。……巻き込んでごめんなさい」

その申し訳無さそうな謝罪の言葉と共にリュートの気配は消え、代わりに真っ暗だった世界に点ほどの大きさの光が現れる。その光は段々ツバサに近づいてきて、次第に大きくなっていく。

ズズッ……

光に照らされた闇は生き物のように蠢き、失われたツバサの右腕に纏わりつき、最後に出来たのは真っ黒な腕。試しに自分の意思に従うか試すために握ったり離したりしてみたら、ちゃんとその動きに付いて来た。確かに腕として使えそうだ。

（……これは確かに良いな。……ＬＩＧＨＴ、ＤＡＲＫ。出て来い）

ツバサは光の扉の中に入る前、ライトとダークを呼び出した。２人は長年の付き合いからか彼の考えている事が分かったらしく、何も言わずに指示を待っている。

そしてツバサの指示とは……。

（ライトはスバルの元へ。ダークはオレと一緒に来てくれ）

『『はい』』

ライトはスバルを見守るために。ダークは万が一の時にツバサの腕に纏わり付いている闇を抑えるために。

『……主、ソラさんの方は――』

（スザクがいる。問題ないだろう）

『ですね』

ミラーの問いにツバサが即答したのはソラとスザクへの信頼から。尋ねたミラーも、その事が分かっていたからこそ簡単に引き下がった訳だ。

ツバサは光の扉に手を掛け、白猫の姿となったライトと自分と同じ姿となったミラーに向かって振り返る。なお、ダークは黒猫の姿となってツバサの肩に乗っている。

「それじゃあ、行って来る」

『気をつけて』

『浮気はダメですよ～♪』

ミラーの洒落にならないボケにライト、ツバサとダークは苦笑し、別れた。

一方、何処でもない場所での会話。

「……乱空、気付いていますか？」
「うん。……秩序を乱す者が来た。このまま放っておいたら禍神が……」
「えぇ。……もう一度世界を変えましょう。私達が存在する世界に。……無論禍神も甦るでしょうが、世界を変えた直後に封じれば良い」

その世界は一度、この2人によって変えられた。禍神を封じるために。そんな存在が元から居なかった世界を創ったのだ。

「……また、言霊（ホツマ）と生きられるんだね」
「えぇ。……その事は嬉しい限りですね」

世界は再び創りかえられる。2人の奏でる『音』によって。

【って所かな。こっちの舞台は『幻想世界英雄列伝フェアプレイズ』です。元はボンボンで連載していた奴なんだけど、中途半端な所で終わっちゃってね。それなら自分で続きを考えて書いちゃえって感じで考えました。タイトルは『幻想世界英雄列伝フェアプレイズIf』って予定です】

「つまり、オレがその世界に行って色々な事に巻き込まれちゃうって訳だな。立場的にサブキャラだけど」
「最後に出てきた2人は？」

【彼らは『ニライカナイ　遥かなる根の国』のキャラだね。直に出るよ。感想か何かにも書いたと思うけど、流星とフェアプレイズの物語はほとんど平行しています。……まぁ、各次元に流れる時間の流れまで同じとは言ってないけどね】

【さて、そろそろ文章量が長くなってきたのでそろそろ仕舞いにします。この小説を読んでくださった皆さん、今まで応援ありがとうございました】

「これからもオレ達を――」
「――よろしくお願いします」

後語り（後書き）

さて、これでひとまず終わりかな。それでは、最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4562h/

流星のロックマン　＜明日へ＞

2011年9月17日09時33分発行